世界と神と人間と

櫻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界と神と人間と

【Ｎコード】
Ｎ６６１８Ｕ

【作者名】
櫻

【あらすじ】
神と契約を結ぶ聖女として育てられたティファニエンドは、呪いによって神となり永い眠りに就いていた元人間の神アレイズに出会う。しかしさぁ契約しようと思ったのも束の間――「契約方法がキスだなんて聞いてない！」意思ある世界を巡る彼らの、いつしか広く長く語り継がれることになる恋物語。

第一話

――青い髪の少女に出会った男は、今日も穏やかな空の下苦労を抱え込んでいた。

◇　◇　◇

「ちょっと、待ちなさいよ！」

世界の片隅にある小さな村の酒場の一角で、その声は放たれた。

そこには、ウェイトレスを脅すようにして如何わしいことをしようとしていた大男に食って掛かる少女が一人と、それを呆れて眺める男、そして慌てた様子で少女を止めようとする双子の姉妹の姿が見えた。酒場のマスターを除けば現在酒場にいる人間はただそれだけであり、酒場の外の道にも人の気配は感じられない。時刻が昼間ということもあり、村人はすべて自分達の農作物の世話に躍起になっており、村の中心部に存在する酒場には誰も寄り付かないのが常なのだ。そんな酒場に突如として現れた少女の連れである双子の姉妹は、一体どうしたらこの状況を止められるものかと少女を凝視し、解決策を思案している様子だった。

その様子を眺め、男も少女を一瞥する。

高い声を張り上げた少女は、普通の人間だったら決して持ち得るはずのない色を持っていた。

腰まで伸ばされた真っ直ぐなスカイブルーの髪も、勝気そうに吊り上げられたダークブルーの瞳も、今まで生きてきた中で彼女以外に見たことがないと双子の姉妹は結論づけていた。

綺麗に整えられた髪の毛は酒場の照明を受けて光を放ち、快晴の空を思わせる輝きを見せる。

加えてレースの入った白のブラウスにこれもまた白のロングスカートには染み一つなく、恐らくはこうして甲高い声を上げさえしな

ければ誰もが良家のお嬢様と信じて疑わなかったに違いない。
しかし良家のお嬢様ならここで声を上げず震えているはずだし、仁王立ちなどせずに淑やかに座っているはずだと考え嘆息すると、双子の姉妹も同じことを考えたのか同じように嘆息していた。一卵性双生児である彼女達はその仕草までもが揃っており、重なった溜息がどちらから発されたのか、どちらもが発したのかそれは当人達以外誰にも分からなかった。
「大の男が女の子に手を出すなんて最低よ！　身の程を知りなさい！」
そうして彼らが嘆息している間にも少女が再び声を放つ。
仁王立ちする少女の左薬指にはまる翡翠色の宝石があしらわれた指輪がきらりと光を放ち、少女をより一層お嬢様然とした姿に見せていたがこのような状態ではそんな見た目など何の役にも立たない。
「放っておけ」
「で、でも……」
「どうせ俺達が止めようとした所で火に油を注ぐだけだ」
険悪な空気が漂う中、双子の姉妹の挙動不審な動作を止めたのは男の低い声だった。
彼は長い黒髪を束ねた全身黒づくめという少女とは対照的な出で立ちで椅子に腰掛け、あまり照明の光が当たらない暗がりで椅子を揺らしながら呑気に座っている。呆れた様子で少女を一瞥する姿にはこの場を止めようという気概は感じられない。双子の姉妹はそんな男の薄情とも言える姿に一言文句を言おうと口を開くものの、結局は彼の言うことが正論なのだと理解し口を閉じた。
彼女達にも分かっていたのだ。いや、恐らく彼女達は男以上に分かっていたに違いない。
怒る少女を止めることがどれだけ困難なことなのかということを。
「しかし、このままでは」
「まぁ死にはしないだろう。よほど危なければ俺達が介入すればいいさ」

「……十中八九危ないことになりそうだけどね」
深い憂慮を込めて言葉を発したのは、双子の姉妹の姉だった。彼女は肩に少しかかる程度の亜麻色のセミロングヘアに同じく亜麻色の生真面目そうな瞳をしており、着込んでいるのは少女と瞳と同じダークブルーの簡素なロングメイド服。前部分を覆う純白のエプロンも簡素で、これも丈が長い。
そして男の言葉に溜息混じりの軽口を叩いたのは、双子の姉妹の妹だ。彼女は顔や持つ色こそ姉と遜色ないものの、髪は下ろせば腰まであるのだと思わせるような長い髪をツインテールにしており、着込むのは真紅のメイド服だ。だが、色のみが違うのかと思いきやこちらはスカートもエプロンも丈が短い。そうすることで区別がつくようにとあえて対照的な姿を幼い頃からしてきたのだが、若干本人達の嗜好の問題もあるらしい。元々彼女達は好みが正反対なのだ。
もちろん正反対なのは好みのみ留まらず性格も含まれるのだが、元々少女付きのメイドとして幼い頃より傍に控えていた幼馴染でもあることから少女が絡む事態になると一致団結をすることが多く、今回も例外ではなかった。
男は深々と嘆息する姉妹を横目に、ついと視線を大男へと向けた。怒り狂う少女の背の低さとは対照的に、大男は身長二メートルを超えていてもおかしくない程の巨漢であった。下卑た笑いを張り付かせてウェイトレスの体を触っていたその大男は、少女の声に反応して目を向けたもののその表情には虫けらを見るような感が漂っていた。
しかしそれも仕方がないことだろう。何せ少女は何の武器も持たずに、己より遥かに巨体の男に食って掛かっているのだから。
大男が己の勝利を確信し、戦う前から興醒めしても何ら不思議なことではなかった。
しかし、とそれを眺めていた男が呟く。
「力だけであいつをどうこうできたら、俺達のうちの誰も苦労などしてない」

拳を固めて振り回せば必ずしも少女に勝てるわけではないし、口論で勝とうなどより無謀なことだと男は断定する。
大男は知らないのだ。この世界には力任せで勝てない戦いもあるのだということを。
そして少女が力任せの相手に打ち勝つための力を持っていることも。
「お気の毒に……」
双子の姉妹のうちのどちらかがぽつりと漏らす。どちらの声だったのだろうかと男が一瞬思案するものの、声も同じ彼女達のことだ、判別などできないと諦めて胸中で同じ言葉を呟いた。
彼らが感じていたその言葉は、決して少女に向けられたものではない。
むしろ大男に向けてしみじみと感じた言葉だったのだ。
決して少女のことを薄情な目で見ているというわけではないのだが、彼らはこの場にいるウェイトレスや酒場のマスター、そして大男が予想し得ない勝敗を知っているがゆえに、相手の身を案じたのだ。
「あ、あの私なら大丈夫ですから！」
「あなたは黙ってて！」
少女の身を案じてのことだろう。ウェイトレスが声を上げるも、それは少女の一喝によってかき消されてしまった。
びくりと身を竦ませたウェイトレスに双子が頭を下げる。
「我が主が申し訳ありません。ですが、あの方なら大丈夫ですので」
「で、でも」
「それよりもこの建物の方が心配、かな」
真紅のメイド服を着た双子の妹が酒場全体をぐるりと見渡し、ふと不安げに漏らすのが聞こえる。
男はその声を聞き、少女の周囲に目を向けた。
五感を澄ませてみれば、少女が周囲に力を集めつつあることが手に取るように分かる。

そして彼女が激していることと、周囲に集まる力の量から察するに、これからこの酒場が無残な廃墟になることも知りたくはないことだったが手に取るように分かった。

常ならばある程度力を制御することができるはずなのだが、感情が昂ぶるとたちまち力を制御できなくなるのが少女の欠点だった。

（さて、逃げるか）

胸中でそんな呑気なことを呟いた男は立ち上がり、酒場から逃げるべく足を出口へと向けた。長く伸びた黒髪が動きに合わせて静かに揺れる。照明の光が当たる場所に出ると、その横顔がはっきりと見えた。

暗がりでこそ分からなかったものの、男は精悍な顔立ちをしていた。

苦労が絶えないのか少し表情に陰りが見えてはいるものの、少し口元を緩めれば爽やかな好印象を生みそうな顔立ちをしている。

男はそんな横顔を傾け、漆黒の双眸を焦ったまま固まる双子の姉妹に向ける。

しかしそんな二人も男の視線の意味に気付いたらしく、慌てて荷物を手に取って男の元に駆け寄る。それを確認してから共に酒場を後にする。もちろん、酒場のマスターとウェイトレスを避難させることも忘れずに。

◇　◇　◇

外に出てからどれほどの時間が経っただろうか。

ダークブルーのメイド服を着込んだ少女が目を閉じたまま“その時”が来るのを待っていると、酒場から大音量の口論が交わされるのが聞こえてきた。

甲高い声と野太い声は確認するまでもなく少女と大男の物であり、彼女は時が近いのだと感じ嘆息する。先程よりも遥かに昂った少女の感情が痛いほどに伝わってくるからだ。

そろそろ来る。

胸中で呟き待ち構えていると、やがて少女を知る者なら誰もが予想していた展開が訪れた。

「もう我慢できない！　その根性叩き直してあげるわ！」

一際高い少女の怒鳴り声が酒場の外の空気をもびりびりと響かせる。

その瞬間空気の温度が上がり、彼女達の眼前にある酒場が膨れ上がったように見えた。

いや、“ように”ではない。本当に膨れ上がったのだ。

内側で空気が急速に温度を上げたことにより、酒場を形成する木材が大きくたわみ破裂する。爆発とも言える衝撃は激しい熱風となり彼らの頬を叩きつける。体を伏せじりじりと肌が焼ける風を腕で庇うとそれほどの時間の経過を待たずに熱風がかき消え、風が凪いだ。

ウェイトレスと酒場のマスターが体を起こし、小さく息を飲む音が聞こえる。

「これは」

「……私の酒場が」

へたり込む壮年の男に同情的な視線を向けた後に、双子が力なく酒場を見つめる。

木片が飛び散ったにも関わらず誰にも怪我がなかったことは幸いだが、酒場として機能を続けるのはほぼ不可能に近い状態にまで建物が破壊されていることは間違いないような状態だった。これでは酒場の主がへたり込むのも無理はない。

「あらら……」

「またやっちゃったのね」

二人して呟くと、黒髪の男が脱力したように肩を落とす。彼に出会ってから何度同じことがあっただろうかと二人が思案するも、すでに数えるのも馬鹿らしい数に上っていることは明らかなので思考を中断する。

「俺も焼きが回ったか……？　こんな女と一緒に行動する羽目になるなんて」
「本当に申し訳ありません。見た目だけなら分かりづらいので騙されても仕方がないと思います」
「そんなこと本人に聞かれると怒られるぞ？」
「いいんです、どの道先に私達がお説教をする羽目になりそうですから。それより」
　酒場に人が集まらないほどの田舎町に相応しくないメイド服を着込んだ双子の少女と黒装束の男、そして理解不能な力を持った少女と言う一見するだけで変わっている一行に虚ろな視線を向ける酒場のマスターに向ける。恐らく彼の頭の中ではどうしてこんな変わった一行を招き入れてしまったのだろうかと後悔の念が渦巻いていることだろうが、その後悔に謝罪するより他に彼らにできることはなかった。
　だが他にもできることがあると言わんばかりに、ダークブルーのメイド服を着た双子の姉が足を酒場のマスターへと向ける。
　ブーツが大地を静かに踏みしめる度、ひっと彼が悲鳴を上げる。
　すっかり怯えきったその様子に目尻を下げ、敵意がないことを示すように両腕を広げてみせた双子の姉は腰に掛けていた鞄から袋を取り出しその中身を彼の手の中に握りこませる。
「大事なお店を壊してしまい、申し訳ありません。せめてこれで再建の足しにしてください」
　酒場のマスターが手の中に視線を落とし、今度は驚きに悲鳴を上げる。
　そこには彼が一度に目にしたことがない程の大量の金貨が握りこまれていたからだ。光を反射するそれは建物を再建してもなお釣りが来る量だった。
　それだけの金貨をあっさりと酒場のマスターに手渡した少女が凛とした横顔で破裂した建物へ視線を向けると、その先から少女が慌てた様子で飛び出てくるのが見える。

スカイブルーの髪には焼け焦げた跡など見えず、純白の服にもす一つ付いていない。

しかしその場にいる誰もが少女の身を案じてなどいなかった。問題は大男の身の安全だったのだ。

双子の妹がツインテールを揺らし、ぱらぱらと木片やすすが降り注ぐ元酒場を覗き込む。するとそこに黒焦げになった大男の姿が見えるが、どうやら息はあるようで胸が上下していることを確認した彼女がほっと息をつく。内部は先程の爆破より遥かに衝撃が柔らかかったようで、男も気絶こそしているものの火傷を負ったということはないようだった。黒いのはすすのせいだろう。

大した怪我をしていないだけ少女の力の制御が上手くなったということではあるが、だからといって建物を一つ爆破させたことに変わりはない。その場にいる全員が半眼で少女を睨みつけると、彼女はたじろぐように一歩後退り乾いた笑いを漏らした。

「あははは……」

「……」

「――ごめんなさいっ！！」

笑っても無駄だと理解したのだろうか。

少女が大きく頭を下げると、爆破時に木材が見せた紅とは正反対のスカイブルーがばさりと前方へと揺れる。

元々小柄な彼女は更に萎縮し、まるで親に叱られる子供のように上目遣いで周囲を見渡す。

その姿を一瞥し、双子の妹が溜息を漏らした。

どうあっても起きてしまったことは変えられないのだと諦めるように。

同じように双子の姉も溜息を漏らす。

普段はとても優しい方なのに、どうしてこうも感情が昂ぶると手が付けられなくなるのだろうかと憂いながら。

「頼むから、もう何もしないでくれ……」

胸中で呟いていると、隣で黒装束の男が搾り出すような声を漏ら

す。
　それは彼女や妹の切なる願いであり、そうなってもらわなければ財布の中身が危ないという危機感でもあった。
「本当に申し訳ございません」
　呟くと男が脱力しながら首を横に振る。お前が悪いんじゃないと言うその姿に人の良さを感じ、彼女は口元に苦笑を浮かべながら主と同じスカイブルーの空を見上げた。
　髪をかき上げると先程までの熱風が嘘のように心地よい風が首筋を撫でる。
　その感触に目を閉じると少女の軽やかな足音が前方に向けられ、彼女はすぐに目を開く。己の主が目を離すとふらふらどこかへ行ってしまうことは知っていたのだ。放っておくことはできないと、その場にへたり込むウェイトレスと酒場のマスターに軽く会釈をすると、彼女はすぐに走り出した。それに続いて双子の妹と男が歩き出すと、まるで嵐が過ぎ去った後のような静寂が辺りを満たした。

◇　◇　◇

「大体お前はどうしてたった数日間でこれだけの損害が出せるんだ」
「だ、だってあの男が悪いんでしょ」
「確かにろくでもない奴かもしれないが、だからといってそれが力を行使する理由になどならないだろう」
　出会った時から饒舌な男だと思っていたが、まさか説教になると更にその饒舌さを増すとは思わなかったと、少女は男の言葉を聞きながら胸中で呟く。
　黙っていればそれなりに美男子の部類に入るはずの男はしかし喋ることで小姑のような性質を見せ、それが少し面倒だと感じたものの彼女は自分のせいで怒っているのだからと諦めの境地で説教を聞き続ける。
　彼女にとって説教というものは世界で最も身近にあるものであり、

苦になるものではなかったからだ。
それがいいことなのかどうかは別として。
宿を探すべく道なりに歩きながら受ける説教は長く、未だに終わる気配を見せない。
双子のメイドに助けを求めようにも、こういった事態で助けが入った試しがないことは実証済みなので、少女は何とか顔だけは伏せないようにしながら歩き続ける。
歩き続ける道は見ず知らずの土地の物であり、土地勘のない彼女はふとどうして自分がこの場にいるのだろうかと思案する。
……いや、違うか。
どうしてこの場にいるのか、ではない。
「――おい、聞いてるのか？」
「え？　あぁ、聞いてる聞いてる。大丈夫よ」
「胡散臭いな。いいか？　大体お前は」
あぁ、また始まった。
思案することすら許さず説教を垂れる男に若干うんざりしながら少女は続く道に視線を向ける。そうして一体いつになったら宿屋が見えるのだろうかと道の先を遠く見渡し、胸中で呟いた。
一体どうしてこのような状況に陥ってしまったのだろうかと。
胸中の呟きに対し、すぐに脳が返事を返す。
そうだ、そもそもあれは――。
ゆっくりと、時間が巻き戻るように記憶が再生される。
その記憶を冷静に噛みしめ、少女は耳と脳を通り抜けて行く説教が終わるまでの暇つぶしとして回想にふけることにした。
一体記憶のどこに今に繋がる問題があったのだろうかと探るように、慎重に。

第二話

この世界には“レイニウム”という名がある。
その名は五千年ほど前、世界には意思がありその姿は人の如しという説が流れた際、人々がそれを“レイナ”と名付けたことに由来しているという。
世界の名を知らぬ者など存在せず、誰もがその名を父に母に、教師に教わり必ず知ることとなる。
そして広く知れ渡ったその名と同時に知らされるのは、神の存在だ。
一般的に神は偶像崇拝の対象として君臨するものだが、千年程の昔に別の意味合いを持った説が流れ出す。
曰く、神は世界を守護するために存在するものであり、世界のために戦い貢献したものが神に至る道を得ること。
偶像ではなく、実際に神が存在するのだということ。
例えばそれは人でも動物でも物でも何でもよかった。世界の意思が認めたものが神たりえるのだと。
そしてこの説には、隠された続きが存在していた。
説が記された書にはこう綴られている。
神に至る道を世界が用意するがゆえに、稀に世界の気まぐれで神にさせられてしまうものが存在することを忘れてはならない、と。
だが、続く説は人々の目に触れることはなく、何も知らぬ人々は世界の気まぐれで神が存在するなど考えもせずに世界の守護者である神を称えた。そして永い時の中で、神は絶対的な存在として崇められるようになる。あくまで偶像ではなく、実在する身近な存在として。
それから、千年の時が過ぎた。

◇　◇　◇

レイニウム大聖堂。

中央大陸、その更に中心にそびえる巨大な建造物は、世界の名を取ってそう呼ばれていた。

そこは絶対的な存在として君臨する神を崇める中心的組織にして、人間という種の威信の結集作。何より国家というものが民にとって善い方向に機能することのないこの時代の、国や大陸を動かす唯一にして絶対の権力行使機関でもあった。

人が存在する上でなくてはならない物を巡る戦い。例えば食物、水などの不作解消のために起きる紛争などを“神の名の下に”仲裁する役目を担うことがレイニウム大聖堂に課せられた役割となる。無論、それを大聖堂の司教や司祭が直接その場に赴き説得する必要はない。それほどの労力を費やさずとも、背信者でもない限りは神官の言うことは絶対であり受け入れられるのがこの世界の摂理だからだ。

大聖堂の表向きの活動は、慈悲の心で与えられる恩恵や平和を与えることである。

そして神の存在を感じ、神を信じ、かといって神に依存するだけというわけではなく己の力を持って生きていくこと。

その考え基本方針として、教皇ノルマンを中心に神官達は世界中の教会や聖堂で人々に救いを与え、教えを広めながら各々の役割を果たすのだ。

――しかし、多くの民や神官は教皇らが行っている裏の活動を知らない。

それは背信者ですら予想のつかぬ、最も罪深く最も愚かな行為――世界を手中に治めるための活動だった。無論、世界征服などという陳腐な言葉で世界の領土を征服するという意味ではない。大聖堂は今や唯一にして絶対の権力執行機関であり、そういった意味では彼らはすでに世界を統べているのだから。

彼ら――首謀者である教皇ノルマンと聖母アリアが欲するものは、

世界の意思そのもの。
そして領土でも名声でも権力でもなくただ世界の意思を欲する彼らが行う活動の最たるものの中に、神との契約行為が含まれていることも、この世界の多くの者が知らないことだろう。
教皇と聖母は、己が権力を得ると同時に、各地から子供を集めるよう神官達に命じた。表向きは、親を失くした子供達への慈悲だと告げて。しかしすべての孤児が集められたわけではなく、中には両親が健在しているにも関わらず大聖堂に連れて来られた者がいることを知るのは極少数の神官のみだ。大聖堂へと招かれる子供に共通することは幼さと魔力の強さの二つのみ。それさえ揃えば、本来ならば孤児を連れてくる必要などどこにもなかったのだから。
彼らが魔力の強い子供を集めたことには、二つの理由がある。
一つは神との契約を行うにはそれ相応の魔力が必要であることから、そしてもう一つは自分達の考えを刷り込ませるには幼い方が好都合だと考えたからだった。
そうして集められた子供達は暖かい食事と布団を与えられ、大聖堂で聖人聖女となるべく育てられる。そして彼らは自らが受けた教育にも立場にも何ら疑問を抱かずに成長し、やがて多くの聖人聖女は各地の聖堂へと赴任することになる。他の神官達と同じく、人々に慈悲を与えるために。
それゆえに聖人聖女という言葉は人々にとって身近であり、特にその存在を疑われることはなく、誰もが彼らを敬愛しながら彼らと一緒に行きていく。その背後で教皇と聖母が微かな失望の目を向けていることを一生涯知らないままに。
彼らは穏やかで幸福な道を与えられ田舎町での暮らしを勧められると同時に、教皇と聖母の願いを叶えることができなかった者という烙印を押されていく。
神との契約を果たせなかった力なき者として、神との契約行為に関する話すら知らされないままに。
そしてある年の初秋。

そんな穏やかな道からは、本人の預かり知らぬ所で切り離されてしまった聖女が一人、神との契約を果たすために教皇の元に召喚される予定となっていた。

聖女の名はティファニエンド。字はレイニウムであり、この世界と同じ名を冠していた。

世界の名を冠するというのは些か不思議なものではあるのだが、大聖堂では別段珍しいことではない。この大聖堂に住まうものは皆レイニウムの姓を授かっており、それは教皇も聖母も等しいからだ。彼らは皆世界の名を持つ家族として共に暮らすことになる。

そしてティファニエンドは、聖女となるべく七年前に大聖堂に迎えられた古くも新しくもない大聖堂の家族の一人だった。

聖母自ら連れ帰った少女は両親を殺害され孤児となった直後であり、彼女はそれ以後教皇と聖母を育ての親として敬愛し、絶対の信頼を置いて七年の時を過ごすことになる。

そしてその聖女は今――日が南天に近づいている頃合いになっているにも関わらず、惰眠を貪っていた。

◇　◇　◇

「いつか、貴女は世界の礎になるのよ」

それはいつか聖母が告げた言葉だった。

――あれはどういう意味だったんだろう？

ふわふわと浮遊感を伴った感覚の中でぼんやりと考えるも、結局は首を横に振って思考を中断する。

親代わりである教皇達が言うことなのだから間違いなどないし、何も不思議なことなんてないはずなのだと信じて、そして自分は細かいことを考える必要などないのだと考え直し、彼女は辺りを見渡した。

夢の中で漂う彼女はこの世界でも珍しい毛色を有していた。

腰まで伸ばしたスカイブルーの髪に、勝ち気そうに吊り上げられ

たダークブルーの瞳。
それらはどれもレイニウムに住まう人間が有していない色であったが、彼女はそれをおかしいことだと教わったことがないためか特に珍しいとも目立つとも自覚を持ってはいなかった。
ここはどこだろうかと周囲を見渡すも、辺りに人の気配はない。
「メイ？　マイ？」
一人ぼっちの不安から、生前の両親に仕えていた執事の娘達の名を呼ぶが、無論返事はない。
――おかしいわ、いつもならもっと騒がしく傍にいるはずなのに。
彼女は内心でそう呟き、再度一度辺りを見渡す。すると、一際強く光が放たれた。
「……え？」
光が凝縮され、人の形を取る。
それはまるで彼女が今日この時まで追い求めてきた神の姿のようで、彼女は慌てて手を伸ばした。
「ま、待って！　あなた、もしかして神様！？」
返答はない。
「お願い待って！　私、あなたと契約しなくちゃいけないのよ！」
――そうだ、自分はそのために育てられたきたのだと教えられたばかりじゃないか。そのために今日まで魔力を高める訓練を積み、それを制御する練習を重ねてきたのだと。
彼女は必死に手を伸ばし光を掴もうとするが、形無きものを捉えられるはずもなく、力を込めた手の平は空を掴むばかりだ。
光の中に、微かにエメラルドの色が混じる。眩しさのせいで彼女の瞳にはうまく光の形が捉えられなかったが、その光はまるで眠っているように見えた。眠りながら逃げるとはいい度胸だと彼女は胸中で呟くものの、そうこうしている間にも光は薄くなっていく。
「あ、駄目！」
そうして彼女が一際大きく叫んだ時には光は霧散し、後には反転するような暗闇と喧騒が――。

『ティファ様、起きてください』
――暗闇が訪れると同時に聞き慣れた声が聞こえるが、眠気に勝てないので無視して少女が呟く。
生真面目そうな声を発した人物は、アーモンド形の亜麻色の瞳に憂いを含めて溜息を漏らす。
「……うーん？」
代わりにぼふっと柔らかい音を立てて寝返りを打ち、再び眠りに就くことにした。先程までのしっかりとした意識などなく、ただ泥のように眠りたいという欲求のみが先行する。その間にも喧騒は向こうからやって来た。
「ティファ様！　起きてー！」
今度は先程よりかは高く明るい、これもやはり彼女が聞き慣れた声だ。
生真面目そうな少女の隣に立つその声の持ち主は天真爛漫な笑みを浮かべ、少女の寝顔を覗きこむ。二人並んで立つ姿は髪型や服装を覗けばほぼ同じであり、彼らが一卵性双生児であることを示していた。
「ふにゅう、かみさまー……」
明るい声に対し、少女は自分でもよく分からない言葉を吐きごろごろと転がる。
どうして神様が出てくるんだろうと眠気の中で考えるものの、すぐにその考えを取り払って夢の世界に意識を浸した。
「駄目だわ、起きない。しかも何か寝言言ってるし」
「どうせドキドキして眠れなかったんでしょ。姉さん、こうなったらあれしかないわよ」
眠りこける少女の姿を見下ろし、二人の少女が溜息を漏らす気配を感じる。それでも惰眠を貪っていると、やがてほぼ同じ顔立ちをしている二人がしかしそれぞれの性格を表すような言葉を呟き、同じタイミングで首元にかけられたホイッスルを取り出した。
嫌な予感がする、と目を開けようとするとぼやけた視界の端で二

人の亜麻色の髪がふわりと揺れ、すぅと息を吸う音が部屋に満ちる。
そしてその音が止むと同時に外にも響き渡るほどの高音が放たれた。
ピーーーー!!
激しくホイッスルが吹き上げられると、眠っていたはずの意識が急激に引き戻され、布団の中の少女ががばりと起き上がった。すでに夢の中に現れた存在など忘れ去った彼女は寝ぼけ眼を数度擦ってから辺りを見回した。
「ひゃっ！　何々!?　緊急事態!?」
大声を上げ、隠す乱れたスカイブルーの髪をかき上げて臨戦態勢を取ろうと試みると、体勢を崩してベッドから落ちてしまう。どすんと音がして腰をしたたかに打ち付けると、彼女の正面から大きな溜息が二つ降った。
「朝から何?」
むっとした表情で彼女が睨み付ける先には、幼い頃から彼女に仕える双子の姉妹が二人、まったく同じ顔立ちに同じ表情を浮かべて立っていた。緊急事態ではなくただホイッスルを鳴らされただけなのだと感じ安堵するも、騙されるようにして起こされたことが癪だったらしく彼女の声は硬い。
しかし双子の姉妹はそんな主の声など意に介さず、丁寧に一礼した。
「「おはようございます、ティファ様」」
「……おはよう。で、何か用でもあったっけ?」
重なり合う声にがくりと肩を落とし、大きな溜息を漏らしながら彼女――ティファはもう一度双子の姉妹に目を向けた。
同じ仕草と声で一礼する彼女達の顔の造りには寸分の違いもなく、本来ならば主であるティファにも見分けがつかないのだが、彼女達姉妹は誰にでも己を区別できるようにそれぞれ正反対の姿をしていたので容易にどちらが姉で妹かを特定することができた。
右に立つ少女は姉であり、名はマイティーナ。肩に少し付く程度

の亜麻色のセミロングに、ダークブルーの簡素なロングメイド服を纏っている。声同様生真面目なのか、凛とした表情を浮かべている。
そして左に立つ少女は妹で、名はメイティーナ。腰まで伸ばしたロングヘアーを頭の上辺りで二つ結びにしており、真紅のミニメイド服を纏っていた。こちらは生来明るい性格なのか、ツインテールを揺らして大仰に溜息を付いていた。
「メイ、何で溜息なんてついてるのよ？」
溜息をつく様子を見てメイが冗談でやっているのだとティファは気付いていたが、それでも無理矢理起こされて溜息をつかれる理由などないとばかりに彼女を睨み付ける。
するとメイはアーモンド型の大きな目を軽く見開いて首を振った。
「さぁ、メイティーナには分からないよ。姉さんに訊いてみたら？」
「……マイ？」
問いかけに対し姉であるマイに声を掛けると、彼女は若干焦ったように妹を睨みつけ、すぐにこほんと咳払いをする。
「マイティーナにも解りかねます。ご自分でお考えになってくださいな……それと、もうお昼です」
そうして冷たく言い放つものの、当のティファには心当たりなどなく。
「？」
首を傾げながらも、とりあえず今日の予定を頭の中で繰り返すことにしてみた。
――起きたらとりあえず洗顔に、朝食に、それからメイやマイと魔力制御の稽古をして、それから昼食。そうしたらその後は。
「あぁ！？」
マイの放ったもうお昼ですという言葉が、がつんとティファの脳を叩き付ける。
「今日はノルマン様に召喚される日じゃないの！」
立ち上がり、慌てて手を伸ばすとマイがそっとタオルを渡した。
これで洗顔して来いということだろう。

「ようやく思い出していただけましたか？　ティファニエンド様」
溜息混じりの問いを発するマイに、ティファが何度もこくこくと頷いた。
時刻は正午。今からなら急いで準備をすれば予定されていた召喚の時刻に間に合わせることができる。
遅刻など彼女にはあり得ないのだ。少なくとも今日だけは。
ティファは先程までの不機嫌など吹き飛んだ声で感謝の言葉を上げる。
「分かった分かった！　起こしてくれて本っ当にありがと！」
そして言うが早いか、彼女は急いで洗面台へと向かい、そこでふと足を止める。
くるりと降り返ると布団を干そうとしているのか、メイとマイが二人でシーツを畳みながらティファをじっと凝視した。何を止まっているのかと問うような二人分の亜麻色の視線に、満面の笑みを浮かべて手を振った。
「もし時間が合ったら稽古に付き合ってね」
まだあどけなさの残る笑顔が振りまかれ、そしてすぐに洗面台へと消えて行く。
それを眺めながらメイがふぅと浅い息をついた。白いシーツは毎日洗われているからか、人が一日寝たぐらいでは取れないほどに柔らかい花の匂いがする。
「やっぱり今日も稽古するんだね」
「それがあの方の良い所でしょう？　メイは嫌なの？」
「まさか。姉さんだって知ってるでしょ？」
「えぇ」
憂いを含んでばかりだったマイの瞳が柔らかく細められ、しっかり者の姉の姿から淑女のそれに変わる。ただそれだけの動作で急激に纏う雰囲気を変えたマイに、どうして同じ顔なのにこうも違うのかと嫉妬心が渦巻くのを感じながらもメイが苦笑を漏らした。
水が流れる音、櫛が洗面台に置かれる音を聞きながら双子の姉妹

が同時に呟く。
その声は南天に上った日差しの中に、静かに溶けていった。
「「今日も忙しい日になりそうね」」

第三話

慌てて洗面と着替えを済ませ、とりあえずは身なりの整った姿で部屋へ踊り出たティファの目に映ったものは、真っ白なテーブルクロスの上に並べられた食事だった。食事といっても簡素な物で、野菜や果物を絞って作られたジュースに甘い湯気を漂わせるフレンチトーストだ。

聖職者として食事の戒律がないレイニウム大聖堂では何を食べるのも自由であり、それゆえに彼女は肉も食べれば野菜も食べる。

ただ今日は急ぎということもあり、簡素ながら糖分の取れる物を用意されたのだが。

ことんと皿を置くマイの姿にはそつがなく、彼女が毎日同じ動作を繰り返していることを示していた。

メイにしても同じようで、てきぱきと部屋を片付ける姿には迷いや手際の悪さは見えなかった。

長年ティファに仕えてきただけあり、すっかりメイドとしての振る舞いが板についた二人の料理は大聖堂に勤める料理人をも唸らせるほどで、ティファはそんな二人を独占できることへの優越感を感じながら両手を合わせ、温かなフレンチトーストを頬張った。甘やかな匂いと味が口に広がり、体に染み込むその味をしっかりと噛み締める。

今日はこれから稽古をしてすぐに教皇に会うのだ。

よもや夕食の時間が遅くなるということはないだろうが、万が一ということもあるので今のうちにしっかりと腹ごしらえをしておかねば。

「ティファ様」

「どうしたの？」

黙々と手早く食べるティファの傍に、静かな声が落ちる。

見上げればそこには生真面目な顔をしたマイが立っていた。食事

中に彼女が声を掛けてくるなんて珍しいとティファが感じ、もしかしたらまたお小言でも言われるのかもしれないと身構えると、予想通りの静謐な声が放たれる。マイはいつもそうだ、お小言の前に必ずこんな声を出す。

「ティファ様も、今日で十七歳のお誕生日を迎えられます。しかも今回のノルマン様からの召喚には、神との契約に関する大任を命じられる可能性があることも、ご存知ですよね？」

……誕生日？

慌てて今日の日付を思い出す。教皇に召喚されることは決して忘れていなかったというのに、今日が何の日であるのか、ティファはすっかり忘れてしまっていた。

「当たり前でしょ？　……今日が誕生日なのは忘れてたけど」

「おめでとー！」

素直に口にすると、抱きつかんばかりの笑顔でメイが声を上げ、ティファの顔が綻ぶ。しかしそれはマイの咳払いによって封じられ、彼女は真剣な顔を無理矢理にでも作らなくてはいけなくなってしまった。まだフレンチトーストが口の中に残っているというのに。

メイも姉の空気に気付いたのか、大きく揺れるツインテールを押さえつけ黙り込む。

こういう時は黙っていた方がいいと、長い経験から理解しているのだろう。

こほん、と再度咳払いがされる。

「とにかく、もうティファ様は成人されるわけです。ですからもう少しお行儀良くなさいますよう心がけて頂きたいのです」

「……」

お行儀よく、ね。

凛とした声が部屋を満たし、ティファの脳に言葉が染み渡る。しかしティファにはそう言われる心当たりなどなく、一体どうしたらマイの言うお行儀の良い人間になれるのだろうかと首を捻るが、答えなんて出るわけがないと諦める。自分がよほど悪いことをしでか

したというわけでもない限り、マイのお小言に心当たりが浮かばないのはいつものことなのだから。

おかしいわね、ドレスの着方だって覚えたしダンスだって踊れるようになったし、言葉遣いだってそれなりに出来るようになったつもりなのに、どこがおかしいのかしら？

「マイ」

声を掛け、首を傾げてみせる。

するとメイがん？　と眉根を寄せたがマイは気に留めなかったようだ。

「何でしょう？」

ようやくやる気を出してくれたんだろうか、という心の声が聞こえてきそうなほどの喜色が含まれた声に、若干の罪悪感を感じながらティファが更に首を傾げる。恐らくそれはマイを怒らせるか呆れさせるかするような言葉なのだろうが、ティファにはそれ以外言うことが見当たらなかった。

フレンチトーストを一口頬張り、嚥下する。そうして午後の風がふわりとレースのカーテンを揺らすのを眺めて、ぽつりと零す。

出来得る限り、明るい声で。

「私もそこそこ努力してるつもりだけど、どこか悪い所でもあるの？」

「……？　お気付きになってらっしゃらないのですか？」

笑顔で尋ねると、亜麻色の瞳が目一杯に開かれる。それは喜色でも怒りでもなく、ただただ驚愕を湛えたそれ。

常に冷静で少々の事では動じないマイが心底驚いている様子に思わず口元が引きつりそうになるが、ティファはそれを我慢しながら更に深く首を傾げる。だって分からないんだもの、と胸中で呟いて。

「あはは……」

助けを請うようにメイへと視線を向ける。すると彼女はティファのような引きつった笑顔ではなく、堂々と苦笑を漏らしていた。真紅のメイド服と白のエプロンが揺れ、視線を逸らされる。

――逃げたわね。

胸中で舌打ちしながら半眼でメイを睨みつける。しかしそれぐらいでマイの妹である彼女が動じるわけもなく、メイはあっさりと戦線離脱して食器を洗いに出て行こうとしていた。

マイも自分の妹がどうして動き出したのかを察したのだろう。はぁ、と大仰に溜息をつきながらそれを見送り、ティファを見下ろした。

「ティファ様、今の御自分の姿をよーく見てくださいな」

「今の姿？　何それ」

そうして指摘され、ティファは始めて自分の体を見下ろした。

衣服には何の問題もない。いつも通りのローブに、いつも通りの体だ。

ただ、今は昼食を摂っているからフレンチトーストが手の中に――手の中？

「あ」

そういえば急いでたから手で掴んで食べたんだった。

心中で呟いたが、時既に遅し。マイはにっこりと実に爽やかな笑みを浮かべる。それはメイドという身分でありながら大抵の貴族ですら振り向かせることができそうなほどの極上の笑みだったが、彼女を知る者が見ればそれはただ恐怖の代名詞でしかない。マイの笑顔は怒りを背負っていると彼女を知る者は誰もが知っていたから。

「お分かり頂けました？」

こくりと頷き、どうにかして怒りを緩和させることができないかと思案するも慌てているティファにそのような策などあるわけがない。

大体マイの言うことはもっともなのだから。どこの世界の聖女がフレンチトーストを素手で掴み、大口を開けて食べるというのだろう。これで行儀が悪くないなどと言ったらそれこそ大嘘つきのレッテルを貼られてしまう。

マイもティファが答えられないことを承知しているのか、彼女に

言葉を発させることなく続けた。
「どこのお嬢様がフレンチトーストを素手で掴んで食べるんです？」
「だ、だって急いでたんだもん」
「だってじゃありません」
やんわりとフレンチトーストを奪い、皿へと戻しながらぴしゃりと言い放つマイにティファの体が硬くなる。
自分よりも二つ年上のマイはティファにとってメイドであり友人であり目の上のたんこぶであり、誰よりも怖いお姉さんなのだ。これから教皇の所に行くまでずっと説教をされなくちゃいけないのかしら、と半ば覚悟を決めて背筋を正す。
しかし、降ると考えていた説教は溜息へと変化してティファの耳朶を打った。
「まぁ、それは今日じゃなくてもいいんです。これから私がみっちり教えて差し上げますから」
それはティファにとっては救いの言葉だったが、メイにとってはそうではなかったらしい。ひょっこりと台所から顔を覗かせたメイが訝しむような声を上げた。
「姉さん。もしかして本気でティファ様に行儀作法を教えるつもりなの？」
「当たり前よ。そうでなければ宣言する意味がないわ」
「そ、そうだけど……」
どうしてそんなに意気込んでいるのかという突っ込みをすることはメイにはできなかった。
ただ身を引きながら頷くことが、彼女にできる精一杯。そしてこの場の空気を変えるべく、目一杯の明るい声を出すことで彼女は自分の限界を超えてみせた。
「そうだ！　それよりティファ様！　早く食べないと冷めちゃうよ！　稽古だって今日はパスしなきゃ間に合わないし」
聖女の居室に備え付けられた簡易の台所から身を乗り出しメイが声を上げると、ティファは慌てたように時計に視線を走らせて立ち

上がる。流れるスカイブルーの髪が陽の光を浴び、窓の外に広がる空と同じ色を発した。

「そうだったわ！　急がないと――それじゃご馳走様！　メイ、マイ。後片付けよろしくね！」

「はい」

「行ってらっしゃーい」

ばたばたと駆け出す音を発しながらドアへと進むティファの前に、控えめなノックの音がする。彼女はそれが誰であるのかを察し、すぐに髪を手で梳かしてからすぅっと息を吸い込んだ。

「どなたですか？」

よそ行きの声が出る。

高らかなその声に満足したようにマイが頷いたが、そのことにティファは気付いていない。

頑丈な木で作られた扉を数度叩いた音が止み、教皇からの遣いであることを告げる。ティファはそれを聞くなり双子に目配せし、二人にドアを開けさせた。たとえ三人でいる時に同等の立場でいるとはいえ、他人が見ている前だと話は別だ。ティファは自分が主なのだからと、極々自然な動作でメイドを使う。生来そのように人を使うことは苦手だったが、そうしなくてはならない局面があることを彼女は良く知っていた。

きぃ、とささやかな音がする。その先に見える使者の影に向けて、ティファは口の端を緩やかに吊り上げて笑んでみせた。

◇　◇　◇

教皇の部屋へと通じる道を歩きながら、ティファは使者の背中を見つめ胸中で一人ごちる。

（神との契約、か）

「教皇様は神様と契約をして、一体何がなさりたいのかしら」

「さぁ。それは私達では推し量ることはできませんよ」

「……そうですね」

質素とも豪奢とも言えない、緋色の絨毯の上を歩いていく。長く続くその道の先は陽の光で淡く照らされ、暗さなど微塵も感じられない。大聖堂が建てられた時代が遥かな昔であったこともあり、石造りのそれはひんやりと冷たい印象を見る者に与えたが、昼間はこうして陽の光が当たることによって暖かさを演出することができた。

いくつもの石が積み上げられたような、巨大な大聖堂。

神を祀るために、讃えるために、人々へ慈悲を与えるために作られた大聖堂。

だけど、と胸中で呟くティファの頭にかつて教皇に言われた言葉が過ぎる。それは聖母に言われた言葉と大差ない言葉だった。

『貴女は、世界の礎となるために存在しているのです』

（世界の礎って何だろう？　一体どういう意味なんだろう？）

教皇と聖母が考えていることなのだから自分が考える必要などないと思っていたが、いざ大任を命じられる時が近づいていると感じると何かを考えていないとこの緊張感から逃げ出してしまいそうになる。

だからティファは今歩く場所から逃げ出したりせぬよう、神との契約について自分が学んだことを復習することにした。

神との契約。それはすなわち神を使役することに繋がる。

幼い頃、聖女としての心得を学ぶ上で真っ先に教えられた神と契約をするということの意味だ。

契約には世界と神がお互いの連絡手段に使ったとされる神聖文字を用い、お互いの合意の上に行う。

それは決して簡単なことではない。神の合意を得ることも難しければ、契約の際に必要となる魔力も膨大なものが必要となるからだ。魔力を使い果たして死んだ聖人聖女の話などティファは聞いたことがなかったが、それでも魔力をほとんど持たぬ者がおいそれとできる行為ではないことを彼女は何度も教え込まれてきた。

でも、その術を何度教えられてもティファには理解できないこと

があった。
「神様は、世界を護れるほどに強く強大なんですよね？」
「えぇ、もちろん」
そもそもどうしてこの世界は、レイニウムは自分を守護する存在と契約する術を人々に与えたのか。
神が使役されるということは、己の守護を失うことを意味するというのに。
そしてもしも自分が神との契約に成功したら教皇と聖母は神をどうするつもりなのか。
世界を守護するほどの強大な存在を、どう扱うつもりなのか。
考えれば考えるほど思考が交錯し、ティファは頭を抱えたい衝動に駆られながらも必死で聖女らしく静々と歩く。本当ならば駆け出してすぐにでも教皇の部屋のドアを叩きたい所だったのだが、それが許されないことぐらいはさすがの彼女も理解していた。
粛々と歩く細い道の左手には幾つもの扉が見え、幼子の声から成人した大人の声まで実に様々な声が響いてきた。そこには聖人聖女やその候補となる子どもが今頃勉学に励んでいるのだろうと、少し前までの自分を思い出しながらティファは同じ形の扉を一つ一つ凝視していく。
ティファと同じレイニウムの名を戴く家族達の居住区を超えれば、次は礼拝堂や懺悔室がある一般市民にとって最も近しい区域へと入る。その更に奥に、教皇や聖母といったレイニウム大聖堂を取り仕切る幹部達の居住区があった。聖人聖女と同じ居住区でないことはティファの昔からの疑問だったが、もし背信者に大聖堂が襲われるなどという事態に陥った時に全滅することがないようにとの配慮なのではないかと最近では考えるようになっていた。
聖人聖女はもとより教皇や聖母に至るまで皆強い魔力を持ちそれを制御できるのだから、襲われても全滅することはない。それを知っていてもやはり念には念を入れているのだろうと。
居住区を超え、司祭の説教の声がする。

日常的に触れることが多いその声を脳の片隅に置きながら無言のまま進むと、礼拝客がにこやかに頭を下げていく。

ティファの纏う純白のローブが聖女の証であることを礼拝客は知っていたのだろう。彼女もまたにこやかに頭を下げると、少ししてから陽の光の当たらない暗い道へと身を踊らせた。

「ここから先は」

「はい」

ここから先の区域を歩くことを許されるのは、召喚された聖人聖女のみ。それ以外は遣わされた者であろうと進むことが叶わない。

淡々とした声に頷くと、使者が来た道を戻っていく。ティファはそれをしばらく見送ってから、やはり静かな動きで通路に一歩足を踏み入れた。きぃん、と金属同士が打ち合されたような高音が細い通路に満ちる。

「解けなさい」

しかしティファがそう口にすると、一瞬のうちに音がかき消える。彼女には未だに原理が分からなかったのだが、今の音は一種の結界なのだと聖母から聞かされたことを思い出す。言葉ではなく声を受け入れ結界を解く仕組みのそれは、予め聖母や教皇が認めた声の持ち主以外先に進ませることはない。結界を破れないからといって、進めないという事実以外に弊害はなく特に人体に影響がないことが礼拝客が多く訪れる区域にも結界を張れる所以なのだろう。

それ以前に礼拝客にはこの道を見つけることすら叶わぬのだが。

結界を解き、一人きりの道を歩いていく。しかしそれは決して長い道程ではなく、教皇や聖母の私室を兼ねた区域にティファはすんなりと辿り着くことができた。緋色の絨毯は今や紫紺のそれに変わっており、この区域がいかに他の区域と違うものであるのかをまざまざと見せつけられる。

幼い頃から何度も来たことのあるティファもやはりこの区域に来ると落ち着かないようで、何度か深呼吸をした後に足を踏み出した。

視界の先には一際大きな扉が鎮座しており、重厚な存在感を見る

者に与える。
それこそがティファの目指す場所であり、教皇ノルマンの私室だった。
目の前に立ち、躊躇うように視線を彷徨わせながら腕を上げ、ノックをしようと軽く手首を動かす。
しかしそれはドアにぶつけられる前にぴたりと止まった。
「――誰です？」
月光のような静謐さを思わせる声が女の声が響く。
まだノックもしていないというのに一体どうしてばれてしまったのだろうかとティファは一瞬考えるも、結界が告げたのかもしれないと結論付けて口を開く。この部屋に来る時はいつもノックをしたことがなかったことを思い出しながら。
「ティファニエンドです。教皇ノルマン様の命により、参りました」
「貴女でしたか。入りなさい」
「はい」
今度は大樹のようにどっしりとした男の声。
ティファはその声の持ち主を知っていたので、ダークブルーの瞳で扉の奥を射抜くように真っ直ぐな目を向け、言葉少なに頷きドアノブに手を掛けた。緊張感を解くような二人の男女の声は暖かく、自分よりも遥かに永い時を生きてきた人達なのだと改めて実感させられる。気を遣っているのか、大聖堂に引き取られた時からそれほど老いたようには見えなかったが彼らの声と言葉は老成しており深い力を感じさせられた。
安堵の息をつきながら扉を開けると、ぱちんと暖炉の火が爆ぜる音がした。
彼女はその音にどこか懐かしさを感じながら後ろ手に扉を閉め、ゆったりとした動きで一礼した。
ふわりと舞ったローブがドレスのように広がる。
「ティファニエンド＝レイニウム。只今参りました」
一礼し、頭を上げた彼女は金で地位を買い、必死に礼儀作法を叩

きこんだ貴族達の子女もかくやというほどの上品な笑みを浮かべる。
そう、彼女はこの時まだ優雅に笑っていることができたのだ。
これがすべての始まりであり、終わりであることを知らなかったが故に。

◇　◇　◇

――その頃、ティファの自室では彼女のメイド達がうろうろと部屋を歩き回っていた。
「ねぇメイ」
「なぁに、姉さん」
「どうして今回は私達がお供できなかったのかしら？」
「さぁ。やっぱり重要なお話だからじゃないの？」
「もちろん神との契約に関する話なんだから私達に聞かせられないこともあるんだろうけど……でも心配だわ」
「大丈夫だって。あそこには結界だってあるんだし」
「メイは私が本気でそんな心配をしてると思ってるのかしら」
「……だ、大丈夫だよ。ティファ様だってノルマン様とアリア様の前ならお行儀よくしてるはず、だし」
交わされるのは不安げな声とわざとらしい明るい声、そして溜息だった。
真紅とダークブルーのメイド服を着込んだ少女達が部屋の中心点で交差し、再び別れていく。
不安を全身で表現する彼女達には自分達の行動に自覚などなく、止めるべき主も今この場にはいなかった。この場に主がいないことこそが、彼女達の不安の表れなのだから仕方がないのだが。
日差しを目一杯取りこもうと開け放されたカーテンが小さく風に揺れていく。
穏やかな昼下がり。しかし彼女達にとってはそんなことはどうでもよかった。

彼女達にとって重要なのは、自分達の主が教皇や聖母相手に何かとんでもない粗相をしてしまわないかという一点に尽きるのだから。メイドの失態は主の失態であり、その逆の事態で責められるなど二人は聞いたことがなかったが彼女達は主と主従関係を結ぶ前に友人関係を結んでいるのだ。心配でないわけがない。

だがそれをいつまでも続けているわけにはいかないと思ったのだろう。

先に足を止めたのはメイだった。

亜麻色のツインテールがそれに合わせて動きを止める。

「姉さん。……もう一回訊くけど、本気でティファ様に礼儀作法を教え込むつもり？」

「しつこいわよ、メイ」

「だってあれはもう直らないと思うんだよねー」

「いいえ」

そうして今度は別の心配事を口にした。

明るいように見せて実は多くの心配事を抱え込んでいるメイにとって、主であるティファに礼儀作法を教え込もうとしている姉の姿は心配の種の一つだったのだ。何せ、無自覚とはいえ触ったらべたべたになると容易に想像がつくようなフレンチトーストを素手で掴んでみせるような主だ。あれであっさりと礼儀作法が直ろうものなら、彼女の姉は今頃こんな風に苦労していない。

そう考え溜息混じりに否定的な言葉を発したメイだったが、彼女の姉であるマイは違ったようだ。きっぱりとした声で否定的な言葉を更に否定する。

ほとんど肌を露出することのないロングメイド服の中で、数少ない露出部分である手の平をぐっと握り締めたマイはまるでこの場にはいない誰かに聞かせるかの如く高らかな声を上げた。それは普段冷静な彼女からは想像が付かないほど、熱の籠もったものだった。

「必ず直してみせるわ。そう、私のメイド人生を懸けてでも！」

「懸けなくていいよ。そんなもの……」

その熱とは対照的に、メイはがくりと肩を落とす。
（どうして諦めないかなぁ、姉さんは。私なんてさっさと諦めちゃったのに）
胸中で呟くと、それが伝わったのかマイがふぅと溜息を漏らした。困ったような悲しそうな複雑な横顔が自分と同じ造りの顔に浮かぶのを、メイは凝視する。
「メイ……私はね、不安なのよ」
「不安？」
ぽつりと呟かれる言葉は弱々しく、普段決して聞くことのない弱音に聞こえてメイは思わず声を上擦らせる。
双子とはいえ、考え方や嗜好はまるで違う。
だからこそメイは姉が考えていることが分からなかったし、こんな風に弱音を吐かれるなどとは想像もしていなかった。
「ティファ様はもう成人になられたというのに、殿方と接する機会がほとんどなかったわ。いたとしてもノルマン様や他の司祭達ぐらいで、皆年上だったし。何より、あの行儀の悪さと世間知らずでしょう？」
「まぁ、ね」
「でもあの方はこれから多くの人に出会うわ、望む望まぬに関わらずね。その中でさすがにあれではまずいと思うのよ。そのために急いで特訓をして、あの方を聖女らしく仕上げなくてはならないの」
かつん、とブーツと床が触れ合う音がする。
「いつかティファ様もご結婚なさる日が来るわ。そうしたら今度は旦那様がティファ様を支える」
更にブーツの音がする。そうすると容易に間合いが詰められた。伸ばされたマイの両手の平がそっとメイの頬を包み込む。
「だけど下手をしたらその日が遠のいてしまうから、だから私はあの方にしっかりとした御相手が現れるまで頑張るって決めたの」
「姉さん……」
（ティファ様のこと、こんなに考えてたんだ）

姉の言葉に感動に近い想いを抱きながら、伏せられたマイの瞼を見つめる。

主のことを思い、だからこそ主が奪われる日が訪れるのを待つ。

それはメイドとしても友人としても勇気のいることであり、隠し通しておいた方の良い大それたことだった。

ティファは恐らく笑って礼でも言うのだろうが、世の中の主従関係はそんなに甘くないとメイもマイも知っていたのだから。それこそ、ティファと共にこの大聖堂に身を置くことが決まった時、聖人聖女の好奇の視線に晒された時からずっと。

他の聖人聖女にメイドなど付いてはおらず、それゆえに物珍しく見られた二人は多くの誹謗や言いがかりにも耐えてきたのだ。ティファがいない場所で発される、メイド風情が、という言葉に。

(そう。だから私と姉さんはティファ様を慕うし、ティファ様を護るために武器だって手に取ることにしたんだから)

主従など関係なく、自分達と友人として生きてくれた主のために。

手を握り締める。するとそこに持ち慣れた武器が現れた気がした。

人を傷つけたことない武器。護るためにすら未だに振るわれたことのない、人を傷つける道具。

ティファは二人が武器を持つ所を見ると複雑そうな顔をするが、この件に関しては譲ることなどできなかった。

そう、メイですらティファのためなら意思を固くできるのだ。

ましてやこの姉なら――どうなることやら。

「でも、このままだとティファ様の身が持たないわよね」

「何か言った?」

「ううん、何もー?」

鋭い声に慌てて乾いた笑いを漏らす。

そうして今は遠い区域にいるティファに頑張ってとエールを送り、メイは眼前の双子の姉と同じように瞳を閉じて主が帰るのをどうやって待とうかと思案した。

第四話

「ようこそ、よく来ましたね。そこに座りなさい」
顔を上げた先では、簡素な椅子に腰掛けた壮年の男と年齢を推し量ることのできない若い女が座っていた。それぞれが金の髪に紫紺の瞳をしている。紫紺の瞳というものもレイニウムでは珍しいものなのだが、ティファは幼い頃から二人を見て育っているせいかあまり珍しいと思うことがなかった。
ゆったりとした動きで男が指差す先には、彼らが座るものより幾らか座り心地の良さそうな一人掛けのソファが置かれている。
身分が上の教皇や聖母よりも良い椅子に座ることにティファは毎回躊躇いを覚えるのだが、断る方が失礼だと結局は頭を下げた。
「ありがとうございます」
緊張の面持ちで進みソファに腰掛けると、やんわりと押し戻すようにソファが膨らんだ。
「ティファニエンド」
「は、はいっ！」
その感触の心地良さに驚いていると、女の声が掛けられる。
慌てて返事をするティファの声は上擦っており傍目に見ても大きすぎるのだが、女は特に気にした様子もなく柔らかく笑んだ。紫紺の瞳が細められ、少女のような淑女のような判別の付かない笑みを向けられ、知らずティファの背筋が伸びた。
「今日は貴女の十七の誕生日だそうですね。おめでとうございます」
優しい声は熱くも冷たくもない、丁度いい温度で耳朶を打つ。
ティファはその声が脳を浸すのをじっくり待ってから、深く頭を下げた。
育ての親とはいえ、彼らは自分よりも遥かに高位の人間なのだ。
何より多くの聖人聖女の親でもある。
だというのに自分の誕生日を覚えているとは思えなかったのだ。

「わ、私なんかの誕生日を覚えていてくださって光栄です。……ありがとうございます」

まるで両親に祝われているような感覚に、涙が溢れそうになる。誕生日など例年訪れるというのに、こうして二人に祝われると随分と特別な日であるような気がした。今日から自分が成人として扱われるようになるせいだろうかとティファは考えるも、いまいちその実感の湧かない彼女は結局その考えをしまい込み続く言葉を待つことにした。

祝辞の後に放たれるものがそれよりも更に特別なものであることは重々承知していた。

「それで、今日貴女を召喚したのは他でもありません。神との契約の儀式についてです」

「はい。承知しております」

だから教皇が聖母の言葉が終わると同時に掛けた言葉に、彼女は動じることなく答えることができた。

緩んでいた頬が引き締まり、ダークブルーの瞳に一筋の光が灯る。殊勝さを湛えながらもやはりどこか勝気なその瞳を紫紺のそれで柔らかく見つめ、教皇が口を開く。それはどこか娘を見る親のようなものであり温かさが満ちていたが、続く言葉は鋭い。

「この大聖堂に、地下室があることをご存じですか？」

あくまでも他の聖人聖女達に接するように言い放つ教皇の言葉を胸中で反復し、ティファは首を振った。

（地下室……そんなものあったっけ？）

知っているか、と問うてはいるが自分にも分からないということは恐らく多くの神官達は知らない事実のはずだ。そもそも大聖堂の中を勝手に散策するような暇など今までにはなかったし、大聖堂の内部をすべて知りたいという知識欲もなかったのだから。

（メイもマイも私が一人で外に出ることを極端に嫌がったし）

大聖堂は確かに平和な環境である。だが、極稀に背信者を名乗るものが暴れだしたり、聖人聖女に劣等感を抱く者が襲い掛かってく

ることがあると聞いたことがある。本当に極稀に起こることだというだけあって、ティファが大聖堂に引き取られてからは一度も聞いたことがない話なのだが。

しかし、一体どうしてそんな事実を今になって話すのだろうか。

「初耳です」

火が爆ぜる音が部屋を満たす。深緑の絨毯やカーテンで彩られたその場を燃やすような炎が一際強く燃えた。

燃えるそれによって調度品が明るく照らされる。質素に見えてその実見る者が見れば一級品であることが分かる、古いそれらが照らされるとまるで今が夜であるかのような錯覚を覚える。

「この大聖堂は元々神を祀るためではなく、守護するために建てられたものです」

静かながらも力強い炎の音と同時に響いたのは、聖母の声だった。鈴を鳴らすような、高い声。

一体聖母は幾つの時を生きてきたのだろうかと疑問に思うほどに若い声が響くと、それを今度は教皇が引き継ぐ。

どっしりとした声は壮年の男のものと言うには、老獪すぎた。

「我らが守るべき神は今も眠り続け、今も一つの指輪の中に留まり永き時を過ごしているのです」

「指輪の中に、ですか？」

「はい。そして今回私達が貴女に命ずるのは、地下に眠るその神を眠りと指輪から開放し、連れ出してもらうためです」

小さな疑問に頷きで返され、今回の召喚の意図を丁寧に話される。

しかしそこで一つ引っ掛かりを感じ、ティファは思わず慌てるような声を上げた。

神は眠っている。しかし眠っている神との契約など行えるわけがない。それはつまり――。

「か、神様を叩き起せってことですか？」

「言い方は悪いですが、そうなります」

「ただ、指輪から力を開放し動き回るには契約行為が必須ですから、

そのための聖女です」
「ちょ、ちょっとお待ちください！」
起きている神を叩き起して寝起きのせいで不機嫌なのであろう神と契約をして地上へ連れ出せと、そういうことなのだろうか。放っておくと終わってしまいそうな話を無理矢理区切るべく、立ち上がりながら声を上げる。身分が上の人間の話を遮るなど、マイが見ていたら卒倒しそうな状態だったがティファにはそれに構っている余裕などなかった。
「それは重大すぎることではありませんか！　他の神ならいざ知れず、大聖堂の地下に眠る神様との契約だなんて……。そんな大役をなぜ私に？　他の聖人聖女や、それにノルマン様やアリア様の方がずっと御力がおありのはずです」
純白のローブを揺らし声を張り上げると、静謐な紫紺の瞳が向けられる。その視線にたじろぎそうになるものの、放った言葉は取り消せないのだからと前を見据えた。本来であれば神を叩き起こして契約をするなど言語道断だと言うべきだったのだろうが、彼女は神と契約を行うべく育てられた聖女だったが故に口にすることはできなかった。各地で眠っている神の情報は存外多いのだ。そんなことを言っていたら契約をできる神自体がいなくなってしまう。
ただ、眠る神自体はともかくとしても眠る場所が問題であった。大聖堂に地下に眠る神。それはすなわち大聖堂が守護する神でもあるのだから。
「駄目なのですよ」
ティファが纏うものとは違う翡翠の色が織り込められたローブが微かに揺れ、教皇が立ち上がる。頭に戴く教皇冠が銀の光を放ちティファのダークブルーの瞳に映ると、その時にはやんわりと肩に手を置かれていた。落ち着きなさいということだろう。
「確かに同じような考えを持ったこともあります。事実私もアリア様も何度か神との接触を図ってはみましたが……」
「神は我々に対し、何の反応も見せなかったのです」

ふぅ、と困ったように頬に指先を当て俯く聖母の姿は清らかというにはあまりに色香が漂いすぎていた。よくこれで誰も聖母に手を出さないものだと思いながらも、ティファはそのどこか影のある色香を背負う聖母に向けて困惑を深める。

自分よりも遥かに強い魔力を持つ者に反応しないという事実が絶望的なほどに重くのし掛かってくる。

自分ではその神を起こすことなど到底できないのだという、確信めいた思いと共に。

「で、ですが御二人に反応しないのなら、私が行っても……」

「力による契約行為に反応を示さないのなら」

言葉を遮られ、ティファが口を噤む。

黙りこむと肩から手を離した教皇が背を向けた。その背を照らすように炎が強くなる。

「それ以外の要因が必要なのではないかと、私達は考えたのです。そして貴女なら契約を行うことができると。あくまで予感ですが」

それに、と言葉が紡がれる。

「本音を言いますと、これはあくまで建前です。実際は、この考えに至ってから幾度も聖人聖女を神の元に遣わしていきましたし、今回もその一例に過ぎません。そして今回もまた、聖人聖女に可能性を託すことしかできない」

幾度も。今回も一例に過ぎない。

舌の上で転がすように教皇の言葉を繰り返す。

それは今まで他の聖人聖女に聞いたことのない話ではあったが、仕方のないことなのだろう。

何せ地下室が存在することですら自分は知らなかったのだから。

立ち尽くしたまま教皇と聖母を見やると、二人はようやく納得した様子を見せたティファに笑みを浮かべてみせる。まるで駄々をこねる子供に手を焼く親のようだとその顔を見て感じ、ティファは恥じるように顔を伏せそうになった。陽の光に余り当てられることのない白い頬が朱に染まり、慌てたようなダークブルーの瞳が右往左

往するとそれを落ち着かせるように聖母の声が耳朶を打つ。
「貴女の部屋に遣いの者をやりました。今頃は貴女のメイド達に地図と武器を渡していることでしょう」
「地図と武器……？」
それは両方とも神との契約には必要だとは思えないような代物で、ティファは怪訝そうな声を上げて聖母を凝視する。レイニウム大聖堂は諍いを神の名の下に仲裁し、平和を重んじる組織だ。その上に立つ者が武器を聖女に手渡すなどと言うのは、些か不穏すぎやしないかと。
何より武器など目にしてしまったら、メイとマイが目の色を変えてしまうことがティファには嫌になるほど分かっていたのだ。彼女達はティファが戦わなくてもいいように、自分達が武器を取る道を選んだのだから。ティファがそれを望んでなどいなくとも。
「地下室は最後に聖人を遣わしてからずっと人が入ることがありませんでした。元より大多数の聖職者には隠してきた部屋ですし、何があるかは今の私達では分からないのです。くれぐれも、油断などせぬように」
「……お気遣いありがとうございます」
そんなティファの心情を推し量ってのことなのだろうか。
教皇が隙のない声で彼女の疑念に対する答えを与える。なるほど、だから聖人聖女が地下に入ったなどという話を聞いたことがなかったのかとティファは納得すると同時に、未知の場所への期待感と不安が高まった。彼女は決して無茶をするのが好きだとか冒険をするのが何よりも好きというわけではなかったが、聖女としての務めをようやく果たせるのだという喜びが強かった。
一礼し、髪を後ろへと払いのける。それを合図として話は終わった。
「では、行って参ります」
――命は下された。
後は神との契約を果たし、聖女としての務めを全うすることだけ

がティファに求められた全てだった。

◇　◇　◇

「おかえりー」

「お帰りなさいませ」

自室に戻るとすぐにメイとマイがティファを出迎えた。

青と白を貴重としたその部屋に足を踏み入れると、途端に疲労感が襲ってきたが何とかそれを悟らせないようにただいまと笑ってみせる。教皇と聖母の部屋に行く時はいつも同じような疲労感に襲われるが、その度に二人を心配させたくはなかった。

「ノルマン様からの遣いの方が来たよ」

「うん。地図と武器を持ってきてくれたんでしょ？」

メイの声に頷くと、彼女はうきうきとした様子で何度も頷いた。天真爛漫な笑みが喜色を含んでいることに疑問を感じていると、マイも珍しくメイと同じような笑みを浮かべていた。それについて言及すべきか否かティファが思案していると、小さな鞄に地図を詰め込んだマイがそれを背負い込む。

「それでは、参りましょうか？」

それは実に自然な動作で、実に自然な言葉だった。疑念など感じさせる暇を与えないほどに。

「そうね――って、何で二人が準備してるのよ？」

だからティファは思わず頷きかけ、慌てて首を振る。

彼女達は聖女でも何でもないただの自分付きのメイドだ。そのメイドが大聖堂の神官ですら知らないような地下に足を踏み入れるなど、見咎められたら何を言われるか分かったものではない。自分は笑って誤魔化せるが、二人を護れる自信などないのだから。

目を吊り上げて文句を言うと、メイとマイはきょとんと顔を見合わせてからすぐににっこりと笑みを深める。

「ティファ様、ノルマン様から聞いてないの？　遣いの人は私達の

武器もくれたんだよ？」
「そんなこと一言も」
「これは、私達がティファ様に御供できるようにとのノルマン様の配慮だと思いますわ」
笑みが怖いほどに深められる。
そしてその笑みを見てしまったが故に主であり幼馴染でもあるティファは気付いてしまった。メイとマイの言葉に嘘が含まれていることに。
（きっと遣いの方を脅しでもしたんでしょう……でなきゃ武器なんてノルマン様がおいそれと与えるわけがないわ）
頭を抱えたい衝動に駆られるが、恐らくこの件はすでに教皇の耳に入っているだろう。
それでもここに戻ってくるまでの間に再召喚されなかったということは、容認するということなのだろうか。ティファは眼前で楽しそうに準備を進める双子に向けて武器を返すよう命じるべきか悩んだが、結局はそれが二人の好意によるものなのだからと諦めた。護ってくれるという意志はありがたく、頼もしいものなのだから。
溜息を漏らすとメイがくすりと笑って姉を見る。
「まったく姉さんも過保護なんだから」
「メイ」
「は、はい！」
しかしそれはぴしゃりと叩きつけるようなマイの声によって遮られすぐに終わってしまう。その様子を見る限り、遣いを脅したのがマイ一人の独断によるものなのだとティファは理解したが彼女は苦笑を深めるだけでそれ以上言及はしなかった。
一人きりの契約行為に対する不安が薄れ、まるでピクニックにでも行くかのような明るい気持ちにすり替わる。それは油断するなと言っていた教皇の言葉に反してしまうものだったが、この二人が護ってくれるのなら大丈夫だろうと楽天的な気持ちにもなれた。
ティファに与えられた、魔力を高めるための首飾りをつける。

深い蒼のそれが純白のローブの上を彩ると、それだけで彼女は準備をすべて終えてしまった。元々同じ大聖堂の中に行くだけなのだ。餓死することもなければ寒さの対策をする必要も感じられない。

うんっと伸びを一つしたティファは準備を終えたらしい双子を見やり、どこまでも明るい声を放った。

「よーし、じゃあ行きましょうか」

「「はい！」」

自分に与えられた使命と、それに付随する感情を押し殺すように放たれた明るい声に双子が元気よく答える。

それを聞きながらティファは部屋を後にし、胸中で呟いた。

（まぁ、ノルマン様の仰る通りなら今回も神様の反応はないんだろうけど……。神様も案外強情なのね）

それは自分に求められることを全うできないことを表していたが、ティファは卑屈になることも悲しむこともせずにただ歩いた。永きに渡り、何人もの聖人聖女が挑んだのであろう、神を起こすという難題に向かって。

第五話

レイニウム大聖堂、聖人聖女の居住区の最奥にその場所は在った。
「こんな所に階段があったなんて……」
扉を開けると、地下へと通ずる階段があり、細く長い螺旋状のそこから地下を覗き込むことは叶わない。結界なども張られておらず、入りたければ勝手に入れといった風情のその場所を見て、こんなに身近に地下に行く道があったなんてと微かな驚きを感じながらティファが一歩前に進もうとすると、すぐにマイの手に制された。
「私が先に参ります。メイはティファ様の後ろに」
「はーい」
教皇から武器を渡されたことで緊張感が高まっているのだろう。何よりこのようなぞんざいな扱いを受けている地下だ。まともな手入れがされているとは思えない。慎重な態度を取るマイに無言で従い、ティファはマイの後を付いて階段を下りることにした。神を起こすことも至難の業だが、契約を行うこともまた膨大な魔力を必要とするのだ。ここで何かあってもできるだけ体力を温存しておいた方がいい。
かつん、とブーツの音を響かせ地下へと下りていく。湿気に満ちた暗がりをランプで照らしながら進むが、長い間誰も入っていないという話は本当のようで石段にこびりついた苔に足を滑らせそうになる。狭いとはいえ、女性なら二人は並んで歩くことができそうな広さのそれは壁面も石造りのせいか、苔がこびりついていた。大聖堂を守護する神が眠る場所に続く道としては、些か扱いがぞんざいすぎる。
「本当にこの先に神様がいるのかしらね」
低い天井が小さな疑問を含んだ高い声を跳ね返す。
「地図でもここだと記載されてますし。まぁ、大丈夫でしょう……あら」

呟いた声にマイの声が返ってくるが、その声はすぐに途切れてしまう。

足音も止まり、何やら困惑したような声が漏れた。

「どうしたの？」

「いえ。もうすぐ階段を降り終えるようなのですが、先に何か……石碑みたいなものがあるようです」

「石碑ー？　ここ、地下だよ？」

後ろを歩くメイが怪訝そうな声を上げる。

それはそうだろう。レイニウムでは石碑と言われるものは往々にして地上にあるものであり、後世に生きる者達への教訓なり想いが詰め込まれるものなのだから、このような人目に付かない大聖堂の地下に石碑があるとは到底思えない。しかし、教皇から預かった地図に間違いがあるとも思えないのでティファはあっけらかんとした声を上げる。

「ま、行ってみれば分かるでしょ」

「はい」

どの道進めば石碑とご対面することになるのだ。

それならば悩んでいるよりも手早く確認をした方がよかった。

マイを促し先に進む。困惑と逡巡を含んでいた亜麻色の瞳が凛とした光を放ち、炎に照らされた。

螺旋階段の終わりは近く、ランプの明かりで照らされた最奥に平坦な石畳が見えた気がした。

◇　◇　◇

「本当だ。石碑がある……」

階段を下り石畳を踏みしめると、マイの言う通りの石碑が目の前に鎮座していた。

小さく墓碑とも言えるようなそれは例に漏れず苔に覆われていたが、手でそれを払ってみれば若干年季の入った石が姿を表す。

「こんな所に石碑ってあるんだね」
ティファとマイが苔を払う後ろでメイの呆けたような声がする。
どうやら彼女は地図に書かれていた石碑の存在を疑っていたようだ。
マイの肩に手を置いて前を覗き込んだメイはアーモンド型の瞳でじっと石碑を眺める。
そうして苔が払われたその場所に何かを見つけ眉間に皺を寄せて何やら考え込むような仕草を見せるが、すぐに諦めたようで渋い声を放ちながら首を振った。
「よ、読めないよこれ」
「読めない？　……あら」
妹の声にマイも首を傾げてまじまじと石碑に書かれている文字を見つめる。そうして数瞬の間を置いてからティファに声を掛けた。
「ティファ様、これは神聖文字で書かれているようですわ」
「？　ちょっと見せて」
――神聖文字で書かれた石碑？
マイの訝しむような声に身を乗り出し、苔をすべて払い落とす。
そうして手についたそれに気持ち悪さを感じるより先に石碑に視線を落とした。マイがランプで更に明るく石碑を照らす。
するとそこに、人間ならば扱うことのない文字が薄く掘られているのが見えた。それは古代の文字でありながら、古代に生きた人間達では決して読むことが叶わなかったであろう特別な文字で、ティファはどうしてそんな文字がここに書かれているのかと思案しながら視線を横へ下へとずらしていく。文字を読まずに、あくまで現代語が使われていないかと確認だけしてそこに神聖文字以外使われていないことを確認したティファが感心したように声を漏らす。
「確かにこれは神聖文字ね。でもどうしてこんな所に……やっぱり神様がここにいるってことなのかしら？」
「読めそうですか？」
「何とかね」
首を傾げるマイに頷いてみせる。

古代の人間には読むことができなかったであろうが、ティファにはそれが読める自信があった。

神聖文字の解読作業は大聖堂が永きに渡って行ってきた事柄の一つなのだ。そして神との契約を前提として育てられる聖人聖女にはその解読方法が教皇や聖母より伝えられていた。ただし、使用することは大聖堂の数少ない戒律により禁じられていたのだが。

「ねぇティファ様」

「うん？」

神聖文字を解読しようと全体の文字を見渡していると、唐突に甘えるような声が聞こえてきて顔を上げる。するとそこにはメイが無邪気ながらもどこか恥ずかしそうにしているのが見えた。

「どうしたの？」

「さっきから話してた神聖文字って何？」

少しの間が空く。

神聖文字を習得するのは聖人聖女のみだ。従ってメイが不思議そうに訊いて来ることはない、のだが。

（確か私が勉強した時に二人も同じ部屋で勉強してたような……。マイは知ってるみたいだし。あれ？）

「……メイは知らなかったっけ？」

確認の意味を込めて尋ねると、マイが申し訳ありませんと呟きながら嘆息する。

「メイ」

「な、何？」

「帰ったらちゃんと勉強なさい……」

「えー！？　勉強って疲れるのよ！？」

「そんな言い訳は却下よ」

ぴしゃりと言いつけられ、メイが口を尖らせる。

それを見てようやく自分の考えが間違いではなかったことに気付いたティファは、苦笑を漏らしながらメイの問いに答える。

「神聖文字っていうのは、神々が世界と対話するために用いたとさ

れる言葉よ。神々のうちのほとんどが世界の意志が普段どこに存在するのかを知らなかったから、こうして文字として世界に想いを伝えたとされているの」

「知らないのに、守れたの？」

「大事な時には招集がかかるみたい。聖書にはそう書いてあったから」

「ふぅん……」

事実はどうか知らないが、そういうことになっている。

そう話すとメイは納得できたようなできていないような微妙な声を漏らした。

隣に立つマイは相変わらず生真面目な様子で頷いている。その姿一つとっても、双子だというのに二人の性格がいかに違うかが見てとれる。姉であるマイは理知的で読書が好き、メイは天真爛漫で読書よりも体を動かすことが好き、という風に。ただ、まさか勉強したはずのことまで忘れているとはティファも想像がつかなかったのだが。

二人を横目にしつつ、解読作業へと戻る。

大聖堂ですら知らないような単語だと彼女にもお手上げだったのだが、幸いにして掘られていたのはすべて彼女の知識にもある単語ばかりのようだった。ふむふむ、と呟きながら目を走らせていると、好奇心が疼くのかメイが声を掛けた。

「何て書いてあるの？」

「ん？　えーっと」

その問い掛けに顔を上げると、メイがマイに頭を小突かれているのが見えたが、ティファはそれには構わず自分が解読できた部分を読み進めた。

◇　◇　◇

――レイ、世界よ。

貴方を護れなかったことを申し訳なく思う。
我はもう動くことさえままならず、ここから出ることもできないだろう。
我はこの地に眠り、再び貴方の盾となるべく力を蓄えよう。
いつか貴方の苦しみをすべて取り除くために。

◇　◇　◇

我は――。
（一体、この神様は世界に何を言おうとしてるんだろう？）
胸中で呟き、更に解読を進めていく。
何故かは分からなかったが、どうしてもその先を知る必要があると思えてならなかったせいだ。
大聖堂が守護する神、世界を守護する神。
世界を守護するという意味自体すら頭の中でよく理解出来ていないティファにとって、その言葉は意味を実感するための鍵と成り得るものだった。
世界の意志へ伝わる言葉、神が伝えたい言葉、その意思――世界の、苦しみ。
契約行為のことばかりで世界や神についてなどほぼ考えたことなどないティファだったが、不意に襲ってきた世界と神への好奇心に勝てず高なる鼓動をそのままに視線を走らせた――しかし。
「……ってこの後何も書いてないじゃない！」
「ふぇっ！？」
「ティファ様？　どうかなさったのですか？」
唐突に声を荒げた主にメイが素っ頓狂な声を上げ、マイが静かに問う。しかしティファはそのようなことはお構いなしで、石碑に掘られた神聖文字を指でなぞりながら何度も何度もその文字を読んでいた。しかし何度読んでも先程と同じ答えしか出てこない。
「どうもこうもないわ」

先に読み進めようと視線を動かした瞬間、その先がないことに気付いてしまったのだ。全体の文字を見回して続く言葉の意味を汲み取れる文章がないかを探すものの、そのような暗号は見当たらない。本当にこれで終わっているようだった。

生来本でも何でも最後まで読み進めないと気が済まない、物事が中途半端に終わることが嫌いな性分なのだ。

それなのにこれはあまりの仕打ちではないか。

ティファは好奇心を打ち砕かれた怒りに拳を震わせ、双子に吊り上がった目を向ける。

瞬間、二人がびくりと肩を竦める。

「せっかく読んでたのに、この神様途中で書くの止めちゃってるのよ！」

「……あら」

「そうなの？」

眠気に勝てなかったのか、それとも別の理由があるのか、そんなことは分からない。

だが一度世界に伝えようとした気持ちを途中で区切るなんて、世界に対しての不敬行為にも当たるのではないか。

怒りのせいでそんな大事まで考え出したティファは、もはや石碑に用などないというように立ち上がった。

「メイ！　マイ！」

「「はいっ！？」」

手を取り合ってびくびくとする双子を睨みつけ、遠くに伸びる暗がりを指差す。

「さっさと神様を見つけて続きを教えてもらうわよ。ノルマン様やアリア様が行っても起きなかったみたいだけど、こうなったら蹴飛ばしてでも起きてもらうわ」

「てぃ、ティファ様……神様に対してそれはあんまりでは」

「いいの。さぁ、行くわよ」

「あ、待ってティファ様！」

石碑のある通路を歩き、一本の筋でできたその場所をすたすた歩いていくと二人が慌ててついてくる。ティファはそれには目も暮れずに自分の怒りの元凶である神を探そうとし、すぐに立ち止まった。一本道を抜けた先にある空洞が広大すぎたのだ。

マイに予め見せてもらっていた地図を見る限りそれほど広い場所ではないと予想していたのだが、大きな間違いだったようだ。

（そりゃそうよね、大聖堂全体の地下なんだもの……広くないとおかしいわ）

どのような縮図の地図を渡されたのかは定かではないが、空洞の先に続く通路だけでもかけっこができそうなほどに長く、その上。

「何よこの分かれ道の数は」

「地図がなかったら確実に迷っている所でしたね」

ぽっかりと開いた空間の先に伸びる道は、一つではなかった。ざっと見る限り十近くはあるのではないかと言うような道はそれぞれが長く、先が見えない。

マイが呟くのを聞きながら、ティファは額に指先を押し当てて深く溜息を漏らした。

「ノルマン様……私が方向音痴だってことを御存知ではなかったのですか？」

そうなのだ。

ティファは聖女として双子に怒られることはあるとはいえ本気になれば人前に出ても恥ずかしくはないほどの礼儀作法を身につけてはいるし、神聖文字を読めることから勉学にも手を抜かない。ましてや契約行為に必須である魔力の制御も得意中の得意である。

だが、地図を読むことだけは駄目だったのだ。

水滴が落ちる音がする。溜りに溜まった湿気が水に変化したのかと考えながら天井を見上げていると、マイがランプの明かりを頼りに地図とにらめっこをしている所が見えた。メイも一緒だ。双子は地図を読むことに特に抵抗はないため、主の代わりにこうして道を探しているのだろう。本当に自分一人でここに来なくてよかったと

切実に考えながら、ティファはルートが導き出されるまでの間、石碑に書かれていた文字を脳裏で反復する。
神はなぜ動くこともままならない状況に置かれたのだろうか。そして世界の苦しみとは何なのだろうか。
（ノルマン様やアリア様は、このことを御存知なのよね）
石碑は神が眠る前の物だ。それであればあの石碑に書かれた文字を二人が読んでいないはずはない。
ならば、石碑に書かれていることが神を起こす理由に繋がっているのだろうか。
ただ神と契約をするだけではないという事態に頭を抱えていると、マイが地図を鞄へと仕舞い込む。
「道が分かりました。ここからそう遠くはないみたいです」
「本当？」
「うん。分岐も二回通り越したらあとは一本道だったよー」
マイの言葉にメイも賛同したので、ティファは俄然やる気を出してマイが歩き出すのに付いて行く。距離がどれほどの物かは分からないが、あまり細かい道じゃないのは救いだった。それでも二人がいなくては迷ってしまうことは必至なのだが。
一つ目の分かれ道の中から道を選び、歩いていく。その間にティファは神をどうやって起こすべきかについて思案していた。
（やっぱり大声で叫べばいいのかしら）
しかし神は指輪の中に眠っているのだ。聞こえるとは到底思えない。
（いっそのこと、指輪を壊そうとしたら起きてくれるのかしら）
無意識のうちに思考が物騒なものになっていることに気付かないまま、暗がりと溶け込みそうになるダークブルーのメイド服を頼りに歩く。
それが間違いだった。
「わっ！」
不意に、ダークブルーのメイド服が消える。

何事かと思い歩きながら目を開けると、前髪が触れるほどの至近距離に巨大な扉が鎮座しておりティファは慌てて身を引いた。少し離れた場所から危機感のない声が響く。

「ティファ様、前気をつけてねー！」

「メイ！　言うのが遅いってば！」

「あはは、ごめんなさーい」

振り向いて抗議すると笑って返されてしまう。

それにしても前を歩いていたのならマイが気付いていそうなものなのだが、彼女はティファが考え事をしているなどとは露ほどにも思わず地図を見ていたようだ。

「あら、すみませんティファ様」

慌てた様子で顔を上げるマイを制し、首を振る。

メイの注意が遅かったからつい文句を言ってしまったが、元々誰に文句を言うようなことではないのだ。

「……いいわよ、私の不注意だから。それで、ここがそうなの？」

問うと、マイは地図をしまい込みながら頷く。

「はい。確かにここが指輪のある部屋のようですね」

鎮座する扉は石造りのものであり、おいそれと壊れそうになければ開けられそうなものでもない。一体前に来た聖人聖女達はこれをどうやって開けたのだろうかと疑問に思いながらぼうと扉を見上げると、扉がより一層の存在感を増した気がした。

「とりあえず、押してみましょうか」

ドアノブがあるわけでもないので押して開けるタイプなのだろう。

そう考えてティファが手を伸ばし扉に手を付いた瞬間、扉は見た目の重厚感とは裏腹な軽さであっさりと開いてしまった。

「う、うわわっ！」

力を入れすぎていたせいだろう。

あまりにもあっけなく開いた扉のせいで、ティファはたたらを踏みながら前につんのめってしまった。

転んで床に激突しないように何とか足を一歩前に踏み出し、部屋

の中へと入る。瞬間、背後で何かが光を放った。
「「ティファ様！」」
切羽詰ったような二人の声がティファの名を呼ぶ。メイが声を荒げるなんて、と不審に思いながら振り向き、そこに見えた光景にティファは目を丸くしてしまった。
扉が開いた時も部屋に入るまでも何もなかったはずの空間に、薄い光の膜が張られている。
「結界……？」
膜は次第に光を増し、先程まで聞こえていたはずの二人の声を遮断してしまう。ティファは慌てて戻ろうとしたが、やんわりとした力で跳ね返されてしまった。どん、と膜を叩くも、衝撃を吸い込むのか壊れる気配はない。
「何なの、これ……っ！」
朧げながらに見える二人の姿が徐々に見えなくなる。彼女達はティファに向けて何かを叫んでいるようだったが、それに対して大丈夫と答えてやる余裕はなかったし恐らく声も届かないのだろう。そう考え、ティファは魔力を開放しようと手を伸ばしたが上手く集中できない。そもそも、結界を壊すような魔法など使ったことがないのだ。
「！？　メイ！　マイ！」
がこん、と留め金が外れたような音が耳朶を打つ。
目を見開いて音の発生源を辿ると、それは目の前にある石造りの扉だった。
（閉まろうとしてる！？）
慌てて扉を破壊するためのスペルを唱えるが、あっけなく結界に吸収されてしまう。その間にも扉は思いがけぬ速度で閉じ、二人の姿を完全に遮断してしまった。
「一体、これは」
自分一人でどうにかしろということだろうか。
呟き辺りを見渡すと、ランプの明かりもないのにその部屋の中身

がよく見えることに今更ながらに気が付いた。
部屋の中に一歩踏み出す。そうして扉を背にすると、部屋の中央部にこれもまた石造りの台座が一つ置かれているのが見えた。不思議なことに苔は生えていない。壁面にも扉にもびっしりと深緑の苔が覆われているというのに、なぜかそこだけは滑らかな白の光を放っていた。
更に一歩踏み出し台座の奥にちらつくものに視線を走らせる。すると玉座が置かれているのが見えた。
「台座に玉座……？　どうしてそんなものが一緒にあるのかしら」
普通ならありえない取り合わせに首を傾げるものの、答えなど得られるはずがない。
考えていても埒が明かないと考え仕方なく近づいてみると、台座の上で何かが光を放つのが見えて立ち止まる。
「？」
目を凝らしてみるものの、きらりとした物は光を失わない。
近付き、罠などないか警戒しつつ台座を覗き込む。
「これは、指輪？」
そこには翡翠色の宝石がはめ込まれた指輪が一つ、ぽつんと置かれていた。
広い台座には似つかわしくないほど小さなそれに手を伸ばし、指先でつまむ。不思議と明るさを失わない室内でそれは鮮やかな光を放つ。
「もしかしてここに神様がいるの……？」
呟いた声に答えはない。
その指輪に神がいるなどという確証もなく、メイド達とも離れてしまったティファは一体どうしたらいいものかと途方に暮れながら指輪を頭上にかざした。

第六話

「あ……っ」

指輪を天井に向けかざすと、そこに微かな光が宿る。指輪にはまる宝石と同じ翡翠色は淡くティファの全身を照らし、純白のローブは教皇達と同じ色の高位のローブへと姿を変える。目を細めて指輪を凝視すると、淡い光が温度を持ったように降り注いだような錯覚を覚えた。

「何だか、暖かい」

無論直接的な熱が与えられているわけではないが、なぜかティファにはそれが暖かいものに感じられた。

鼓動を打つように光が強弱をつける。とくん、と血液が全身を巡るように穏やかに。まるで生きているみたいだ――と感じていると熱が更に強くなる。ティファはそれを全身で感じながら腕を下ろし、両手の平で指輪を包むようにして持った。振動など感じるはずがないのだが、やはりそこから鼓動を感じた気がした。

「……え？」

その瞬間、強烈な光が指輪から溢れ出し部屋を白光に包んだ。

（何！？）

思わず指輪を落としそうになりながらも奪われた視界の中で必死に状況を掴もうとする。だが元々大した情報を与えられていないせいか、彼女はこの状況への打開策など持ち合わせておらず、片手で目元を覆い隠しながら光が収まるのを待つことしかできなかった。

扉が閉じられているとはいえ、もしかしたら双子にも光が見えたのかもしれない。それほどの強い光はしかし長らくの時間をかけずに収まった。

「一体何が」

光に視界を焼かれ、ちかちかと明滅する感覚に首を振りつつティファが声を上げる。そこでふと指輪が手の中にないことに気がつい

た。

「あ、あれ。あの指輪は――」

さっきまで持っていたはずなのに、と慌てて床を見るがそこに指輪は落ちてなどいなかった。台座にももちろん置かれていない。沈黙を貫く室内は冷たく、指輪が落ちた音など響かせていないと言うように無機質な顔をしている。

じゃあ一体どこに、と思案しながら視線を元に戻す。そこでようやくティファは指輪の在処に気がついた。

「！」

息を呑むティファの眼前。そこに指輪は存在していた――誰の手によるでもなく、自らの力で浮遊して。

先程まで強い白光を放っていた指輪は再び元の翡翠色の淡い光を放っている。それに安堵すべきか否か迷うのは、恐らく指輪が意思を持っているように感じられたからだろう。温かな光は体温、伝わる振動は鼓動。まるで生きているみたいだと思わされる指輪は、それ自体が一つの生物であるかのようにティファの目には映った。無論、このようなことは教皇からも聖母から聞いてはいない。そもそも何の反応も返らなかったと言われたのだ。

目の前に立つティファを翡翠色の光で包む指輪を凝視しながら、ティファは一体これはどういうことかと首を傾げる。

彼女とてこのような反応が返ってくることは予想外だったのだ。たとえ指輪を足蹴にして神を起こそうなどと考えていたのだとしても。

思案するティファを他所に、指輪は光を放ち続ける。

あくまで穏やかに、ティファの視界を奪うことなく。

ただ先程までと違うことが一つだけあった――光が徐々に照らす面積を増しているということである。

「こ、今度は何？」

後ずさり、再び訪れる光に備えて片腕で顔を庇う。しかし指輪の光は強くなることはなくただ面積を広めるのみだった。

ティファの全身を覆う程度の光が台座を、玉座をも覆う。
だが、常ならば冷静さを欠いてしまいそうな現象が眼前で起こっているというのにティファは冷静だった。それは聖女としての立場がそうさせたわけではない。光があまりに温かすぎて感情を乱すことができなかったせいだ。翡翠色の光が面積を増す中、ティファは緩慢な動きで腕を下ろしじっと光を見つめる。ぼうとした意識の中でそれは、やがて面積を増す以外の行動を起こした。
光がうごめき、何かの形を成そうとするのが見える。
静かな動きで形成されるそれは腕であり、足であり、胴体であり、頭だった。
「何、これ」
――人になろうとしている？
光がすらりと伸びた体躯を形成するのを理解すると同時にティファはようやく光が何になろうとしているのかを理解し、目を見開く。双子や周囲の聖女達と比べて小柄なティファよりも頭一つ大きな光。その中心に影が落ち、どくんと振動した。恐らくそこが心臓部分なのだろう。
「かみ、さま？」
光が細くなり、温かな熱が消えていく。
それを呆けた声を発しながら見守ると、光は次第に自らが形成した姿に影を生み出し、最後に強い光を放った。人間の体であるはずのそれに、翼が形成される。両翼を広げるようにばさりと音を立てた。しかしそれも束の間、全てを形成し終えた光は己の役目を失ったとばかりに消滅し、残されたのは人間なのか何なのか分からない存在のみ。
形から見ても分かるように、それは人間の男のようだった。
すらりと伸びた体躯、長い漆黒の髪、そして神と同じ漆黒の双眸には穏やかな光が宿り、精悍な顔つきは茫洋とこちらを見ている。着込んでいるのは教皇や聖母と同じ翡翠色が織り込まれた高位のローブ。もしかして聖人なのだろうかと思案するも、ありえないこと

だと首を振る。指輪に宿る聖人なんて聞いたことがない。
大聖堂の中でただすれ違っているだけなら、ただの好青年としてしか映らないはずの男。
（だけど――この人は人間じゃない）
翼のある人間など存在するはずがないし、そもそも普通の人間は光から形成されない。
無論魔術を使えば何とかならないこともないとは思うが、あえてそうやって現れる理由などないはずだ。
そうなると残された可能性は一つ。彼が神であるということだ。
小さな問いに、茫洋としていた顔に表情が宿る。無表情の一歩手前の、微かな感情が含まれた顔。
「何だ？」
それは首を傾げながら実にあっさりとそう答えた。
（こ、肯定なのかしらこれって）
「あ、えっと」
あまりにさらりと答えられたせいでティファは戸惑うように視線をさ迷わせながら、今度はしっかりとした口調で問う。
「神様、なの？」
とりあえずこれだけは確認しておかねばならなかった。
……これで神ではないと答えられたらティファはもう答えに窮してしまうのだが。
「そうだ」
返ってくるのはこれもまた簡潔な答え。
ただ肯定の意がはっきりとした形で返ってきたことだけは確かで、ティファは自分の口調を改めるように一度深呼吸する。神様相手に対等な口を叩くなど、聖女としてあるまじき行為だ。すぅ、と息を吸い込むと心臓が早鐘を打つように激しく血液を全身に押し流すのを感じた。
元々起こして文句を言うつもりだったのだ。予定が少しばかり狂ったからといって結果良ければ全て良し、のはずなのだが……それ

でもまさか本当に眠っていた神が起きるなどと本心では思っていなかったせいで、急に緊張が高まってしまう。男はそんなティファを見下ろし、ふむと呟いてから逆に問いを返した。

「お前が起こしたのか？」

「お、起こしたというよりは、ただ指輪に触っただけなのですが……」

「ふむ……。しかしそのぐらいで俺が起きるとは思えんのだがな。何せ今まで熟睡してた訳だし」

不思議そうな声は決してティファを責めているわけではない。しかしそれを理解していても彼女は不安に駆られ、胸中で呟いた。

（どうしよう。もしかして起こしたら駄目だったのかしら？　でも、私本当に何にもしてないわよね）

強いて言うなら指輪に触ってしまったぐらいだ。もしそれで神が起きてしまうというのなら、とっくに誰かが起こしているはず。

不安を胸に抱いたまま素直に話すと、神である男は顎に手を当てて何やら考え込む様子を見せた。そこにもやはりティファを責める様子はなく、文句を言う素振りもなかった。そのせいだろうか、ティファはこのような状況であるというのにやけに冷静に神を観察することができた。

（神様って人間とあんまり変わらないのね）

違うのは翼があるという点だが、それ以外は特に人間と変わりがない。

口調も、もっと仰々しいものだと思っていたのに大聖堂を訪れる礼拝客達と大差ない。それ以前に言葉が通じることに驚きを禁じ得なかった。ティファとて全ての神々との会話に神聖文字を使うとは思ってはおらず、聖書でも人の言葉が通じるのだと教えられたことがある。それでも驚きを感じるのは、自分が神を手の届かない高みへと置いてしまったせいか。

胸中で呟きながら、もしも神に読心術があったら今のこの気持ちも伝わってしまうかもしれないという考えが一瞬頭を過ぎる。

しかし結局はそれでもいいという考えに至り、彼女は思う様神を観察することができた。

不敬が過ぎたら契約をしてもらえないどころか攻撃をされる可能性もあるのだが、不思議とそうなる可能性は低いと思えたからだ。

「まぁ、考えていても仕方がない」

やがて神が思考することを諦めたように顔を上げる。

その動作に釣られるように背筋を正すと、低すぎるとは言いがたいが決して高くもない声が耳朶を打つ。

「お前の名は？」

「？　あ、ええと。ティファニエンド＝レイニウムです。昔は違う苗字だったんですけど、今は――」

「ティファニエンド……？」

唐突な問いに若干の戸惑いを感じたものの、出会い頭に名前を訊かれることは決しておかしなことじゃないと考え素直に答える。神相手に人間と同じような身の振り方をするのはどうかとも考えたが、相手が人間に極めて近い姿と態度をしているのだから仕方がない。

生まれた時に与えられた姓を名乗るべきか思案し言葉を続けると、神はその言葉を遮り怪訝そうな声を上げる。そうしてティファの姿を頭の天辺から足の先まで凝視した。スカイブルーの髪、それよりも深い色を放つダークブルーの瞳。それを見て彼は何を思ったのだろうか。やがて納得したように頷いた彼は、静かにその身を地面へと下ろした。ふわりと長い髪が舞う。

眼前に立った神の表情に何が宿っているのかはティファには読み取れない。

しかしそれがある程度の納得と驚愕と決意によって構成されていることは見て取れた。理由は不明だが。

神は自分が名乗っていないことに気付いたのだろうか。気まずそうに眉根を寄せてから告げた。

「俺はアレイズだ」

「アレイズ、様？」

そういえば教皇も聖母も、大聖堂が守護する神の名を教えてくれていなかったと今更ながらに気付く。

自らが眠っていた指輪を手の中で弄びながらティファを見るアレイズは、自分の名を反芻する彼女の姿に困ったように頭を掻いた。その動作一つとっても人間臭いもので、威厳というものを若干損なっているのではないかとティファは胸中で呟いた。だからと言って対等に扱うことなどできないのだから余計に扱いに困る。

「いや、様はいらない」

「？」

「様なんて付けられるのには慣れてないから気恥ずかしいんだ。あと敬語を使う必要もない、契約の邪魔だ」

「あ、はい。じゃあアレイズ、私もティファでいいです……じゃなくて、ティファでいいよ」

言葉通り、本当に気恥ずかしそうなアレイズを見てティファは思わず口元を緩めそうになりながら小さく頷く。

つい先程まで対応に困ると考えていた所なのだ、こうして神から気さくにしてもらえるとありがたい。

それがいいことなのか悪いことなのかは別として。

このままで戻ろうものならさすがの教皇や聖母も怒るかもしれないが、とりあえず今はこのままでいることにする。

ただ、一つだけアレイズの言葉に引っかかりを感じてティファは早口に尋ねる。

「契約の邪魔って何？」

気恥ずかしいとか敬語を使う必要がないとか、そんなことが邪魔になっただろうか。

「まさか契約の仕方を知らないのか？」

「いや、一応私聖女だし、契約の仕方は知ってるつもりだけど。でも私が知ってる方法だったら邪魔にはならないよ？」

ティファは契約の仕方を幼い頃から散々叩き込まれて育ってきたのだ、知らぬわけがない。

しかしアレイズに問われると何やら不穏な空気を感じ、本当にその方法でよかったのかと思案する。

教皇達に教わった契約の方法は神聖文字と契約の呪文があれば事足りる。強いていうならお互いの同意が必要だということぐらいか。

しかしそれも親しげに話す理由にはならない。今まで神と契約をしてきた聖人聖女の話を聞いたことがあるが、どれもこれも聖人聖女が神に従属するような形だったのだから。逆もないことはないが、それとて滅多に起こることではないのだし。

（どういうことかしら？）

従属するのならばそれらしい言葉遣いや態度が必要になるだろう。人間が神より優位に立ってはいけないのだから。

無論、対等の位置にも。そう考えると、受け入れておいて可笑しな話だがこれはあまりに異常な事態だと言えた。

首を傾げて思案し続けるティファの眼前で、そっと溜息が漏れる。

「それは他の神との契約だろう？　俺は他の神とは契約の仕方が違う……というよりも、あれは契約とは言わないと思うがな」

「……どういうこと？」

ますます訳が分からないといった様子のティファに、アレイズはどこから話そうかと思案するように天井を仰いでから頷く。

「まぁ、いい。起こしてもらった礼だ、順を追って説明してやる」

そうしてようやく話す箇所がまとまったのか、アレイズの朗々とした声が室内を満たした。

第七話

「この世界に、意思があるのは知ってるか？」
世界の誰もが知っているであろうその問いに、ティファは余裕を持って答える。
「もちろん。レイナって名前で、存在が世界そのものの意思なんでしょ？」
「そうだ。だが、レイナだって初めから世界だったわけじゃない。元は俺達と同じ人間だったんだ」
胸を張って答えたティファの言葉に補足するようなアレイズの声が響く。それはゆっくりと部屋に浸透するように流れ、ティファの脳裏へと届き、彼女はしばし間を空けてから目を見開いた。ダークブルーの瞳に驚愕が湛えられる。
世界に意志があることは誰もが知っているし、姿は人の如しと伝えられていることも彼女は知っている。しかし世界の意志が元々人間であったなどということは聞いたことがなかった。恐らくまだ誰もが仮説として定義していないことだろう。それほどにアレイズが口にしたことは突拍子のないことだった。
「アレイズ、貴方元々人間だったのね」
驚愕とは別のことを口にすると、アレイズが憮然とした顔を浮かべた。笑えば爽やか好青年になるというのに。
「当たり前だ。神というのは皆初めから神だったわけではない。この世界に存在するものが世界に貢献した時、初めて神になるんだ。貢献したのが人間でも何らおかしなことじゃない」
（確かにその話は大聖堂で何度か聞かされたけど……でもそれなら）
大聖堂での教えを彼女は信じきっていたし、疑う余地などなかった。
しかしその前提があってなお彼女は目の前の神が自分と同じ人間であったという事実に驚きを禁じ得なかったし、ましてや世界がそ

うあったことにも疑問を抱いていた。この世界に生きるもの。それは例えば意志なき草でも意思ある人間でも変わらず、神となる素質を持っているということになる。

（でも、それならどうしてレイナは世界になれたのかしら？）

それが不可解だった。

世界の意思たるレイナが元々人間であったというのなら、世界そのものではなく神になっていて然るべきなのだ。少なくとも、大聖堂の教えが正しければ。

しかしレイナは神ではなく世界になった――それは一体何故なのか。

「意外だったわ。貴方が元人間だったって言うことも、世界が人間だったことも。……というより、世界の話は誰も信じそうにないわね」

今世界中で流れている説には、世界のために戦い貢献したものが神になれるとされている。そして誰もが讃える神になる方法を知っていて実行しないほど人間は謙虚ではない。だというのにもし世界になる方法の一端を知ってしまったら、それこそ世界を包む火種となるだろう。それは長らく大聖堂から出ることなく育ち、世間をあまり知らないティファでさえ容易に想像できる事実だった。

話しても信じてはもらえないだろうが、そもそも話すことを止めた方がいい。

神妙な面持ちで呟くティファにアレイズは困ったように溜息をつき賛同の意を示す。元人間である彼も、人間という存在の本質的な愚かさを分かっていたのだろう。

指輪の光が失われた室内はしかし決して暗さなどなく、あくまで静謐さだけを湛えるその場所で黙り込んでいると浅く息を吸う音の後でアレイズの声が耳朶を打った。

「話を続けるぞ」

「えぇ」

頷くと、再びアレイズの朗々とした声が室内を満たす。

ティファはそれを聞きながら言葉を噛みしめ、一つ一つを要約していく。

アレイズ曰く、世界となった人間はレイナ一人ではなく他にも数人いるということだった。

彼らに共通するのは世界の真理に触れたことと、人間という種族であるということだと。

そしてそれこそが神になるか世界になるかの分かれ道になるのだと彼は話していた。

真理に触れたものは自ら世界になることを選び、その身も魂も世界に捧げ世界の意志となる。

しかし彼らは元々人間だ。今はほぼいないとされている魔物や悪しき心を持った人間達に対抗する術を彼らは持っていなかった。

否、知識はあったのだ。真理に触れ、この世界のすべてを手に入れたのだから。しかし打ち倒すことはできなかったし、人々の前に滅多に姿を現すこともできなかった。そこでいつかの世界が決めたのだ。己を守護する者を神と定め、別の生を与えることを。選ばれた、世界にとって一番初めとなる神はその世界がまだ人間だった頃に護衛をしていた人物だと補足のように話してくれた。

――なるほど、とティファはアレイズから与えられる情報を持ち前の明るさを控えた顔で頷いて聞きながら、最後に尋ねる。世界についての貴重な情報は得ることができた。だけど、まだ肝心なことが聞けていない。

「それで？　肝心の契約の方法だけど、どうしてアレイズは契約の仕方が違うの？」

世界の形も成り立ちも確かに重要な話だ。

それこそ、教皇や聖母にとっては喉から手が出そうなほどのものだろう。

しかしティファは教皇でも聖母でもなく、神と契約をするために遣わされた聖女だった。無論、今までの話の中に何かヒントが隠されているのかと思案することは欠かさなかったが、彼女にそれを見

つけることはできなかったのだ。
アレイズほどではないものの、彼女にしては低い声で尋ねると彼は眉根を寄せて若干困った表情を浮かべる。話すことが躊躇われる、といった様子だ。
「？」
結界に邪魔されてこの部屋に入ることのできない双子の存在すら遠く感じられるほど、強い疑念と好奇心の熱が心に灯る。ティファはそれを自覚しながら首を傾げ、催促するようにアレイズを凝視した。ダークブルーの真っ直ぐな瞳に射貫かれ、アレイズは双眸を細めて逡巡しながらもやがて溜息と共に言葉を紡ぐ。
「俺の契約方法が違うのは、単に世界との誓約行為自体に違いがあるからだ」
「？　世界と誓約？」
契約ではなく、誓約。しかも世界と？
（てっきり、気付いたら勝手に神様にされてたとかそういう話だと思ってたのに）
心中で呟きながらも問いを重ねると、アレイズは何を馬鹿なことをとでも言いたげに半眼でティファを見た。
「護衛役とはすなわち騎士だ。騎士は主に忠誠を誓うものだろう？　そのための誓約だ」
「そりゃあ、そうだろうけど」
「いやまぁ、俺は騎士というわけではないんだが……ほとんどの神は騎士と言っても差し支えないだろうな」
騎士を実際に目にしたことはない。
しかし騎士という存在がどういうものであるかはティファにも理解ができたし、確かにそれならば主となる世界と誓約を交わすことも間違いではないのだろうと考えることもできる。ただ、自分は騎士ではないと言ったアレイズの言い淀む姿が気にかかる。今まさに護衛役とは騎士だと告げたばかりだというのに。
（騎士じゃないってことは護衛役じゃないってこと？　だとしたら

アレイズって一体……）

はっきりとしない態度に苛立ちを感じないわけではない。しかし伏し目がちな漆黒の瞳が映すものは優柔不断から来る逡巡ではないと感じられたせいか、ティファは怒りを声に出すことなくただ彼が口を開くのを待つことができた。何度見ても人間らしい――元人間だから当然といえば当然だが――そう感じられるような見た目をじっと見ていると、見つめすぎたのかアレイズが身動ぎした。

「俺は」

身動ぎと共に出された声がすぐに区切られ、また放たれる。

「俺は世界と誓約せず、他の神々の呪いで神にさせられたんだ」

まぁ、神に刃向かったのが悪かったんだろうがと続けられるアレイズの声に目を丸くする。

「呪いで、神になるものなの？」

刃向かったから神にされる？　そんな話聞いたことがない。

そもそも野心のある人間達はどうやって世界を見つけて守れば神になれるのかとそればかりを考えているというのに、世界に貢献することなく強制的に神になる存在がいたなんて大聖堂が知ったら卒倒するのではないだろうか。崇める対象がそんな理由で神になったなど。

そして大聖堂が守護する神が呪いで神になったなど、誰に想像できようか。

アレイズに対する同情心が芽生えないでもなかったが、それ以上にティファの心を占めるものは神々への呆れだった。小さく吐息すると、アレイズは苦笑を浮かべる。

「ただ、世界は俺に人間として生きることを願っていた」

頷き、苦々しい表情で続けられた言葉に更に問いを重ねる。

「……アレイズは、世界を知っているの？」

世界の願いを知っているということは、世界の言葉を聞いたことがあるからなのだろう。

そう考えて発されたティファの言葉にアレイズは至極あっさりと

答える。誰もが探して探して、それでも見つからない世界を知っているのだと。

「あぁ、人の姿を取っていた時に会ったことがある。だからかは知らないが、俺が神にされたと知ってレイナは嘆いていたよ。その後で、神々の意見を無視して俺に呪いの解き方を教えてくれた――それが契約だ」

けい、やく。

小さく舌の上で転がすような声を上げると、それを聞き逃さなかったアレイズが頷いた。黒髪が流れ、翡翠色のローブを細い闇に包む。

「そう、契約だ。もっとも、契約しただけで解けるような呪いじゃないが」

契約行為が神である呪いを解くために必須の条件。

（でも、それだけじゃ駄目ってことは根本的解決にはならないわ）

必須ではあるがそれだけでは足りないのだと告げられ、ティファは何が彼を人に戻すのだろうかと自分の知識を総動員して考えを巡らせるが結局は何も浮かばなかった。神になるための方法は色々と説が流れているが、元に戻るための方法など聞いたことがないのだ。いや、そもそも戻ろうとする神がいなかったのかもしれない。

真っ直ぐに見据えた先にいる神に想いを巡らせる。

（アレイズはどう思っているんだろう？）

永い間眠り続け、神聖文字で世界に何かを伝えようとした元人間の神。

石碑を読む限り彼はティファが知っている神と変わらず世界を守護したいと願っているようだったが、彼は本当に人間に戻りたいんだろうか？

「アレイズは、人間に戻りたい？」

（人に戻ってももう貴方の知っている人はどこにもいない。故郷だってあるか分からない。それでも、人として生きたいのかな……）

知らず、声が漏れていた。

心中をそのまま言葉にしたそれを聞いたアレイズは双眸を見開き、噛み締めるようにじっくりと間を空ける。そうして熟考する様子を見せてから、微かな肯定が返ってきた。

「あぁ」

そこにどんな想いがあったのかは分からない。

「……分かったわ」

ただ、決して楽天的な想いで発された答えではないことだけは分かったからティファは大きく頷いた。

自分は神と契約する聖女であり、相手は契約することで人間へ戻る足がかりを掴める神だ。お互いの利害は一致しており、邪魔するものなど何もなかった。

「それで、契約って具体的に何をすればいいの？」

契約した神が人間に戻ってしまったら教皇や聖母から叱られるどころの話じゃ済まされないかもしれないが、ティファはこの短い間にアレイズに対して同情に近い想いを抱いてしまっていたのだ。できることなら助けてあげたいと考え、契約行為を申し出る。しかしその瞬間、アレイズの顔が分かりやすいほどに固まった。

「アレイズ？」

明らかに動揺した態度に首を傾げる。

するとアレイズは不思議そうなティファと手の中の指輪を何度か見比べてから、最後には俯いて掠れた声を出した。

「口づけだ」

「あぁ、そう。じゃあさっさとやっちゃいましょ――って、えぇ！？」

あまりにも小さい声だったからティファは一瞬さらりと流しそうになってしまったが、慌てて大声を上げる。きんと室内に甲高い声が響き渡った。

「……そうだ。契約の形はそういう風になっている。呪いが解けるには他の要素も必要になるが、まずは契約しないと始まらない。ちなみにレイナから聞いた契約方法はそれ一つだ」

「じゃ、じゃあもしかしてノルマン様やアリア様が試されても目覚めなかったのは――」

ついでに聖人が試しても駄目だったのは、つまりはそういうことなのだろうか？

（いえ、でも聖女だって来たことはあるだろうしまさかそんな）

「いや、俺はお前が来て初めて起きたんだ。だから別に人を選んだわけじゃないが、どの道男や歳食った女と契約する気はないぞ」

選ばれたわけじゃないと知り肩を落とすべきか安堵すべきか悩みながらティファはアレイズに向けて呆れの混ざった溜息を漏らす。世界も世界なら神も神だ。どうして揃いも揃ってこんなに大雑把なのだろう。契約方法の衝撃が吹き飛ぶほどの呆れに心を支配されていると、やはりアレイズも思う所があるのかやれやれといった様子で首を振る。

「レイナにも困ったものだ。契約中に同じ事をされたらその者に契約権が移るんだからな」

「それはまた、なんていい加減な」

「まったくだ」

要するに、契約中にアレイズが他の誰かと口づけを交わした瞬間自分との契約が消えてしまうということなのだろう。それは神にとっては選択肢が増えていいことなのかもしれないが、契約をする聖女としては不安なことこの上ない。神が望んで他の誰かと契約をするのならまだ許せるとしても、不可抗力だったらどうしてくれる。

――その前にまだ契約をするって決めたわけじゃないとティファは自分で自分を律しながら目尻を吊り上げてアレイズを見据える。どことなく気まずい沈黙に支配される中、先に口を開いたのはアレイズだった。力ない声には緊張など含まれていない。

「で、どうするんだ？　俺はどちらでも構わないからお前の意思一つで決まるぞ？」

「……貴方の意思は関係ないの？」

「どの道、ここにいても始まらないしな。契約をしないとここから

出ることも叶わない」
　一体それがどういう原理なのか、ティファには分からなかった。しかし当事者である神が言うのだからまず間違いはないのだろう。
　それでもティファは心の中で突っ込みを入れることを忘れはしなかった。
（そりゃあ確かにそうかもしれないけどっ！　だからって相手も選ばずキスしていいわけ！？）
　選んだわけじゃない、選ばれたわけじゃない。ただ願われるまま地下へ下り、ただ意識の覚醒に合わせて目覚めた。それだけの関係だというのに、なぜこうも楽観的なのか。いやそもそも自分との口づけなど何てことはないのだろうかこの神は。心の中でぐるぐると渦巻く苛立ちと怒りが混ざった感情を持て余しつつ目を閉じる。
　黙ってティファの選択を待つアレイズの目にはやはり緊張などなく、ただ微かな申し訳なさを覗かせているのみだ。それをティファは知る由がなかったが、彼女は静寂に満ちた室内で心を落ち着かせながらやがてゆっくりと目を開いた。芯の通った声が凛と鳴る。
「分かったわ。私も貴方を目覚めさせておいて契約できなかったら大聖堂を追い出されそうだし、口づけぐらいしてみせるわ」
「……そうか」
　聖女の役目は神と契約をすること。
　それが存在意義であり、育ててもらった恩を返す唯一つの方法なのだ。ティファはそれを幼い頃から叩き込まれていたし、聖人聖女でそのことを知らぬ者などいない。だからこその決断だった。よもや追い出されるとは思っていなかったが、左遷されればそれに近い状態になることも彼女には分かっていたのだから。
　足を踏み出し、アレイズのすぐ傍で立ち止まる。頭一つ分高い場所ではアレイズが彼女を見下ろしており、ティファの答えに静かに答えながらも小さく笑んでいるのが見えた。どことなく柔らかい笑みに目を見張っていると、彼の唇がそっと動く。
「すまない」

アレイズの背中を包む光の翼が霧散する。
煌めきの残像を残して消えていくそれを茫洋とした面持ちで眺めながら、なぜ謝るのだろうかと思案する。相手は神なのだ。たとえ契約方法が違うと言えど、人は神に従属するものであり協力をするものではない。親しげに話しているからついそのことを忘れがちになってしまうが、ティファはその認識を崩すことはなかった。
少し骨張った温度の低い手が肩に置かれる。ティファはその感触に一度身を強ばらせてから、覚悟を決めたように瞼を閉じた。
熱が近付く気配を感じ、唇に吐息が触れる。
一瞬だけ逡巡するような様子を見せたそれはしかしすぐにティファの唇に熱を与えた。柔らかな感触に、そういえばこれが初めてなんだとティファは胸中で呟いた。大事にしていたわけではないが、かといってこんな形で失うとは思いもよらなかった。
手とは違う柔らかな熱が離れていく気配に震える睫毛を押し上げて目を開ける。すると見事にアレイズと目が合ってしまい、彼女は熱くなる頬を押さえもせずに慌てて目を逸らした。瞬間、自身の体を光が包む。
「な……何、これ」
見れば、アレイズの体も同じように発光している。温かな光は先程指輪から発されたものと同じ性質に感じられ恐怖感こそ感じなかったものの、自分が発光することに驚愕しない人間などいない。震える声で呟くと、アレイズは特に動揺した様子もなく小さく頷いた。
「話によるとこれが契約の証らしいな。この光が俺たちを結びつけてくれるんだが、この結びつきは――っ！？」
キィィィィィィンッ。
アレイズの低い声をぶつりと遮断する金切り音。
音の強さはそれほどではないものの、あまりに甲高い音に耳を塞ぐ。
しかしその音の出所がどこなのかを理解した瞬間、ティファはさあっと冷えた思考で駆け出した。

「っ！　メイ！　マイ！？」

音の発生源は扉の向こう側。閉じられたその先で何が起きているかなど予想することもできず、それが彼女の恐怖に拍車を掛けた。契約した神のことすら忘れ無我夢中で扉を叩きつける。しかし音も漏れないように細工がされているらしく、双子の声は届かない。恐らくティファの声も届いていないだろう。

「急がなきゃ！　二人に何かが起きる前に何とかしないと！」

集中して魔力をぶつけようにも上手くいかない。

（どうしてこんな時に――！）

扉の向こうで何が起きているか分からない。罠でも発動したのかもしれないし、何か敵でも現れたのかもしれない。長らく手入れされていないから気をつけろとあれほど言われていたのに。二人が怪我をしていたら、怪我以上の傷を追っていたらと悪いことばかりが頭を過ぎる。

半ば半狂乱となったティファは中途半端でもいいからと魔力を集めようとして、静かな声に制される。

「少し下がっていろ」

落ち着いた声に顔を上げると、いつの間に傍に来たのか隣に漆黒と翡翠の神が立っていた。

彼はこんな時でも落ち着いた様子で扉の向こう側を見るように双眸を細め、ティファの方を見ることなく告げる。

「俺の真名を呼べ」

「アレイズの、真名？」

焦燥感と苛立ちに目頭が熱くなる中、その声はひどく強く彼女の心に響き渡る。

「俺は――俺の真名はジュードだ。それが俺の人としての名前であり、俺が存在するための名前。アレイズとは神として与えられた仮初の名に過ぎない」

それならどうしてアレイズは最初にその名を教えてくれなかったのだろうか。

そこまで考えてティファはつい先程自分が彼と契約をしたことを思い出した。恐らくそれがトリガーになっているのだ。契約者以外に真名を教えることなどできないのだろう。

「助けたいのだろう？　なら俺の名を呼び、命じろ。それが今のお前が為すべきことであり、今のお前にしかできないことだ」

「……」

どこまでも真っ直ぐで強い声。

それは神としての声だったのだろうか、それとも人間としての声だったのだろうか。

混乱する頭の中響く声を冷静に受け止めることができないティファにそれを探る術などなかったが、彼女はただ揺さぶるような声にすがるようにして震える体を叱咤した。

「ジュード」

きっと扉を睨みつけ放った声は、神と同じ強い力を持つ声だった。

「この扉を開けて、私のメイド達を助けて」

口にしたのは、神に対して放つには恐れ多い言葉だった。

彼女は貴族ではない。

メイドを従えているとはいえただの聖女だ。

しかしこの時彼女は確かに大貴族ですら叶わぬほどの威厳を持ってアレイズに命じることができた。

従属する姿勢でも希う姿勢でもなく、ただ彼が願うままに。

永き時をかけて築かれた神と聖女の在り方にひびを入れた態度に、しかし彼は小さく笑みを見せただけだった。

「承知した」

楽しげな声を含んだその声に、どうして彼はこの展開を願ったのだろうかとふと冷静になって考えながらティファが扉から背を向ける。瞬間、強い光が室内を満たし慌てた彼女が再び扉に目を向けた時、彼女と双子を遮っていたそれは跡形もなく消えていた。

第八話

どれだけ拳をぶつけてもびくともしなかった扉が、半円状に切り取られたように消滅している。それこそ初めから存在していなかったのではないかと思えるほどに切り口は滑らかで、ティファは消えた扉の断面を指先でつ、となぞりながら感嘆の息を漏らした。魔力の奔流を感じはしたが、まさかここまで綺麗に存在を消滅させることができるとは。

彼女はアレイズに対し礼を言おうとし、ぴくりと視線をある場所に固定する。

そこに、本来ならばいるはずのないものを見つけたせいだ。

「あれは、何？」

「兎だな」

消滅した扉の向こう側。その先に見えるのは、真っ白な体毛に身を包んだ兎だった。

血をぽたりと落としたような鮮やかな赤の瞳に、小さな体躯。そしてぴんと立った長い耳。どこをどう見ても兎以外の何者でもないそれを抱きかかえ愛おしそうに撫でているのは、ティファが身を案じてやまなかった双子だ。怪我をしているわけでもない姿を両目に収め、ほっと息をつく。しかしやはり解せぬのは、兎の存在だ。

「もしかしてさっきの金切り音って……」

「分からん。だが無関係とは言い難いな」

いかにも人畜無害そうな顔をしているが、レイニウム大聖堂の地下に兎がいるはずなどないのだ。それにティファ達が扉の前に立った時にもそれまでにも兎の姿などどこにもなかった。ティファはメイの腕の中でくつろいだ様子を見せる兎を注視しアレイズに問いかける。しかしそれに対し返ってきたのは困惑したような声のみだ。

恐らく彼にも分からないのだろう。長い間眠っている間に世界に何が起きているのか、彼には知る由もないのだから。

問うべきことは他にも山のようにある。
石碑に書かれた言葉の続きに今の魔力の奔流の正体、しかしそのどれをも押しのけて気になるのはあの兎の存在だった。
（でも、兎一匹出てきたぐらいであんな音がするっていうのかしら……）
胸中で一人ごちる中、アレイズも怪訝そうに眉根を寄せる。見知らぬ双子の少女の腕でくつろぐ兎の姿に何かを追い求めるような真っ直ぐな瞳はしかしすぐに逸らされた。双子が兎から視線を離し、慌ててこちらを向いたからだ。
扉が一つ消滅しておいてそれでもこちらに真っ先に視線を向けなかったことからして、やはり兎が関係しているのだろうか。主の存在を忘れてしまっていたことを恥じるようにはっと息を飲んだ彼女達は、二つの人影に向けて声を上げた。
「ティファ様！」
「ご無事だったんですね！？」
アーモンド型の亜麻色の瞳が見開かれ、喜色に溢れた二人分の声がティファ達の耳朶を打つ。彼女達は腕の中の兎を大事に抱き抱えたままこちらに駆け寄ってくるが、ティファが遠目に見た時と変わらずメイド服に汚れが目立ようなことはなかった。どうやら本当に何事もなかったようだ。
よかった、と力なく呟いたティファの肩にぽんと大きな手が置かれる。視線を正面からずらしてみれば、そこではアレイズが小さく笑んでいるのが見えた。
「ありがとう」
霧散した焦燥感と苛立ちを笑顔に変えて口にすると、彼は眉をぴくりと上げて若干驚いた顔を見せたもののすぐに頷いた。常ならば神である彼に助けてもらったのだから、膝でもついて長い口上を聞かせなければならないはずなのに、不思議とそうすることを望まれていない気がしてティファはそのままくすりと笑う。理由など分からないが、こうして笑いあうだけでいいのなら気が楽だった。

かつん、と音を立てて近付いた双子はやがて眼前に現れるときょろきょろと忙しなく主とその隣に立つ男を見比べる。興味津々、というよりも多分の警戒心を滲ませた瞳には敵意すら宿っている。

「ティファ様、この方は」

アレイズほどではないにせよ、それでも十分に低い声がマイの口から発せられる。兎を腕に抱いているわけではない彼女は、返答次第ではすぐにでも攻撃を仕掛けるというような剣呑な光をぎらりと瞳に宿した。ダークブルーのロングメイド服に滑らかな動作で指を滑らせる。そこに武器があるのだと言うかのような牽制に近い動きを見て、ティファは慌てて口を挟んだ。マイの口元が吊り上がるのを見て、本能的にそうせざるを得なかったのだ。

「待って！　この人は神様よ！？」

薄く紅を引かれた唇が弧を描きかけ、ぴたりと止まる。指先が力を失い、ぽかんと瞳が見開かれる。地下という暗闇の中でもはっきりと分かるその表情の変化をアレイズは一瞥し楽しげに笑ってみせた。余裕を感じさせるその表情にティファは何か文句を言いたい気持ちに駆られるが、未だに神と聖女という立場から抜け出せない彼女にそれはできない。

「「……はい？」」

小さく開かれたそこから発された声が双子の妹のものと被る。怪訝そうなものは姉の、素っ頓狂なものは妹のものと若干響きは違っていたが。

真紅のメイド服が揺れ、一歩大きく踏み出されたメイの足が勢いよく床を踏みしめる。かつん、と音を立てて軽やかに着地した彼女は片腕に兎を抱いたままアレイズの顔をまじまじと覗き込んだ。彼の真意を探るわけではなく、そこに神らしい威厳を求めて。

「神様？」

「そうだが？」

「「……」」

そうは見えない、と言うような胡乱気な瞳がティファへ注がれる。

しかし彼女は一部始終を知っているだけに、たとえ隣に立つ男がどれだけ人間らしくて神様らしくなくとも二人の視線に首を振るしかなかった。アレイズの威信のためではなく、ただ嘘をつくのが嫌いな性分なだけなのだがそんな彼女の心情などお構いなしにアレイズは首を傾げる。

「アレイズだ。つい先程お前達の主と契約を交わした」

翡翠を織り込んだローブがまるで自ら発光するように柔らかな色を放つ。

それを値踏みするように見つめる二人に対して本当よ、とティファが呟いた。

(信じられないのは、無理ないけど)

だが今この場にいるのが神でないなら一体何だというのだろうか。

指輪から現れ翼を持ち、それで人間以外の存在なのだと言われてもティファはそちらの方こそ信用することができない。第一、もう自分はこの神と契約を交わしたのだ。従属を願われている様子はないとはいえ、ある程度従ってみせるのが道理と言えよう。メイやマイに対し胸中で呟きながら、値踏みするような視線な長時間続くことにさすがに気まずさを感じるのか、アレイズが身動ぎをするのが見えもう一度首を振る。今度ははっきりとした動きで。

「聖女としての役目は果たしたわ。二人とも、くれぐれもアレイズ神に失礼のないようにして頂戴」

隣に感じる熱は人間のそれに限りなく近い。それを実感しながらも珍しく主らしい口調で話すティファに、メイとマイはようやく視線を和らげた。

若干の驚愕を含ませた瞳が一瞬揺れ、すぐに真っ直ぐな光を灯す。彼女達はそれぞれ空いた手でメイド服の裾をちょこんとつまんでから軽く膝を折り曲げ一礼した。主への恭順を示す態度にティファがそっと吐息する。

「「承知致しました」」

きんと耳鳴りがするほどの静寂に響く、二人の声。普段は無邪気

なメイの声も真剣な色を帯び、マイと遜色のない音として発せられた。

ほお、とアレイズが囁くような声を漏らす。彼としては自分に攻撃を仕掛けようとしていた女や値踏みするような視線を向けた女が、たった一人の少女の言葉に従順に従うとはとても思えなかったのだ。たとえ少女が二人の主なのだと知っていても。

流れるような動作で一礼した二人は警戒心をひとまずは遠くに追いやった笑みを象った唇で言葉を紡ぐ。

「初めまして、ティファ様のメイドのマイティーナです。先程は無礼な振る舞い、大変失礼致しました」

「同じくメイティーナです。今後は私達のことをメイやマイとお呼びくださいませ、アレイズ様」

「あ、あぁ。……よろしく頼む」

丁寧な口調に思わず後ろに足を引きそうになりながら思わず人間だった頃と同じように答えると、神らしくないその態度にメイが小さく首を傾げた。彼女達とて神を目の当たりにした経験などないのだが神とは崇高な存在であり、不遜な態度を取られてもおかしくはない存在だ。それが人間の、それもメイドに対してよろしく頼むというのだからおかしく思わないわけがない。

そんなメイの態度を窘めるようにマイが鋭い視線を走らせる。そこでようやく彼女達の思惑に気付いたアレイズは一体これからどういう態度で人間と接すればいいのかと思案した。元々が人間であり、神となってからは眠ってばかりだったのだ。神がどういう振る舞いで人間に接するかなど、彼は知らない。

ティファは比較的問題なくアレイズを受け入れたようだったが、そんな彼女でも時折ぎこちない態度を取ることがある。どれだけアレイズが気さくに接しても、やはり立場のずれがそうさせてしまうのだ。それを難儀だと思うのは容易いがしかし解決策がない。ふぅ、と息をつきどうしたものかと考えるアレイズの隣でティファもまた思案顔を浮かべていた。

ただし彼女の場合は立場の問題ではなく、メイの腕の中にいるふわふわとした白い体躯に関することだったのだが。

「ところで二人とも、その兎どうしたの？」

剣呑な空気が霧散し、幾分か柔らかな空気が流れる中でティファがそっとメイの腕の中を指差す。

いきなり話を振られた兎はしかし己のことだとは気付かない様子で鮮血の色をした瞳を細め、耳をぴくりと動かした。陽の光が当たらぬ地下でも特に不満はないようで、ストレスを感じている様子はない。兎は元々地面に穴を掘って生活をしていたというから、その名残だろうか。

「それが私達にも分からないんです」

「？」

ティファに話を振られたメイはうーん、と唸ってからすぐに首を振る。

状況を上手く説明しようとしても浮かばなかったのだろう。お手上げだと言いたげに顰められた眉は、マイの顔にも浮かんでいる。答えられなかった妹の代わりにマイが答えると、それを補足するようにメイが自分達に起きた現象のありのままを伝える。

「いきなり辺りがぴかって光って、気付いた時には目の前にこの兎がいたんだよね。敵襲かと思って構えはしたんだけど、まさか兎が出てくるなんて予想外だったから姉さんと二人で首を傾げてた所」

ほっそりとした指先に眉間を撫でられる兎は心地良さそうに耳のみを動かしてティファをじっと見つめていた。無垢な瞳に見つめられ愛玩したくなる衝動に駆られるものの、やはり先程の音の発生源に兎が存在していたという確信がそれを許してはくれない。ティファは多少目つきが悪くなっても構わないというように目を細め兎を凝視する。

「ん？」

すると豊かな体毛の中に、何か筋のようなものが見え彼女が小さく声を上げる。

「何だ？」
「これ、首輪じゃないかしら」
体毛に埋もれすぎていて分かりづらいが、確かに兎には首輪が付けられていた。飼い主でもいるのだろうか、と考え馬鹿馬鹿しいと首を振る。聖人聖女が兎など飼うはずがないし、第一ただの愛玩動物が大聖堂の地下に入り込むはずがない。
首輪を覗き込むティファの傍に近づいたアレイズが同じように上体を軽く折り曲げる。
スカイブルーと漆黒の髪が摺り合わされるように触れる。急に近づいたアレイズの横顔にティファがぎょっとしていると、メイが声を上げた。
「？　どうしたの？」
「な、何でもないわ。それよりこの首輪、何か紋章が書いてあるみたいだけど」
兎の首元を指でなぞり、はっきりと首輪が見えるようにする。するとそこに小さな紋章が描かれているのが見えた。金細工のそれは誰が見ても高級なものだと分かる。しかし金持ちの道楽にしてはいささか細工が凝りすぎていると感じていると、アレイズがティファの声に導かれるように紋章を目にしてはっと息を呑んだ。それは間近にいたティファにしか聞こえないほどの小さなものだったが、ばっと兎から体を離したアレイズが放った声が震えていたことは気付くことができなかった。
「これは神々を表す紋章だ――しかも、かなり高位の神の」
神を現す紋章があるという話なら教皇達から教わったことは確かにある。しかし神に位があること、位ごとに紋章が違うという話までは把握していなかった。
（神々については、やっぱり私達では分からないことが多すぎるのね）
胸中で呟きながらアレイズを見上げると、そこに翡翠色が織り込まれたローブが見える。一般の聖人聖女が纏う純白のものではない、

教皇や聖母の纏う翡翠色。それを目にした瞬間、ティファはすとんと胸に何かが落ちるのを感じた。

ローブの色一つでも位があるのだ。神々の紋章に位があったとて可笑しな話ではない。

「じゃあ、この兎が？」

だからティファはアレイズの講釈に疑問をぶつけることなく受け入れる。代わりに兎へと胡乱気な視線を落とした。

世界を護り貢献したものが神となることは知っている。例えばそれが草でも花でも、動物でも。

しかしいくら何でも兎の神様というものはそうそういないのではないだろうか。大体どうやって世界を護ったんだ。

アレイズの話を疑うわけではないが、その場にいた三人の少女達はそれぞれが首を傾げアレイズの返答を待つ。すると彼は肩を竦めながら首を振った。柔らかな色を放つローブがふわりと揺れる。

「分からん。しかし、放って置くこともできまい」

「神様に呪いを掛けられたのに？」

「これ以上祟られるのは御免だ――だが、その前に」

「アレイズ様、どちらへ？」

なるほど、とティファは胸中で呟きながら腕を伸ばし兎を受け取る。高い体温は小さな鼓動を響かせ、愛くるしいつぶらな瞳はどこまでも無垢だった。本当にこの兎が神なのか、分からなくなる。

困惑するティファに視線を向けたアレイズは、ふと何かに気付いたように背を向ける。台座のある部屋に向かおうとするその背にマイが声を掛けると、彼は首のみで振り返ってから室内を指差した。

「指輪を取りに行く。台座に置きっ放しなのを忘れていた」

先程まで彼の手の中にあったはずの指輪は目を凝らして台座を覗き込むと確かにその上にあるのが見える。

一体いつ置いたのだろうかとぼんやり考えていると、アレイズはそれを指先でそっとつまんでこちらへと戻ってくる。そのままティファの眼前に立ち、ふと何か考え込むように顎に手を当ててから腕

を伸ばした。ティファの腕の中から熱が消え、マイへと手渡される。順繰りに手渡されて行く兎はしかし特に不満を見せる様子はなく、今度はマイの腕の中で心地良さそうに目を閉じた。呑気なものである。

「な、何？」

急に消え去った体温を惜しむように一度ぎゅっと体を抱きしめたティファは上目遣いにアレイズを見上げる。普段勝気な彼女が文句を口にせずに問いだけを発したのは、彼がどこか不機嫌そうだったせいだ。

「別に。あいつがいたら邪魔だからどけただけだ」

（あいつって仮にも神様に対して……まぁアレイズも神様なんだけど）

やはり神に対して色々と思う所があるのだろうか、と思案しているとふと気になることがあり首を傾げる。

腕の中に兎がいたら邪魔だという理由は一体何だ。

「邪魔？」

「あぁ」

「それってどういう――！？　あ、アレイズっ？」

契約はもう終えているし、後は兎とアレイズを連れて教皇達の前に出れば万事問題ないはずなのだが、他に一体何かあっただろうか。

眉間に皺を寄せまだ何かあるのかと問いかけようとティファが口を開くと、それを制するようにアレイズが動いた。途中で切られた言葉は、素っ頓狂な声に変わる。それもそのはず、アレイズが何てことはないという様子でティファの前で片膝を付いたからだ。漆黒の瞳が楽しげに細められ、ゆったりとした動作でティファの左手を取る。笑んだ口元は、まるでこれから先の行動でティファがどれだけ驚くかを想像して楽しんでいる風ですらあった。

何、と口を開こうとしてまた閉じられる。指先に感じる体温と、硬質な冷たさがそうさせたせいで。

人肌とは逆の冷たさは薬指をじわじわと侵食し、最後には指の付

け根に到達する。そこを定位置と定めた指輪は翡翠色の光を一瞬放った後でふわりと輝きを霧散させた。それを見計らったようにアレイズの顔が近づけられ、指輪にそっと口付ける。恭しいその動作はどこかぎこちなく、彼がそのようなことをしたことがないとすぐに見抜くことができた。

指輪に口付けたばかりの唇が開かれ、メイやマイには聞こえないほどの囁き声がティファの耳朶を打つ。

「先程言いそびれたが、これが俺たちの契約の証だ。この指輪があれば、お前も人並み以上の魔力を使うことができるようになる。指輪を媒介として、俺の力を引き出せるからな」

「そ、そうなの？」

あぁ、と続ける声が響く。

「それと、俺の真名はお前しか使うことができない。だから他の者には、アレイズと言う名しか伝えないでくれ。もっとも、お前が普段呼ぶのに真名を使うのは構わないが」

真名を与えることはすなわち己を捧げること。そう言いたいのだろう。

だが彼は神だ、その彼が一体どうして聖女に真名などを――。

「どうして、そんな風に接してくれるの？」

ふとそんな問い掛けが口を突いて出た。

それは何年もかけて頭に叩き込んできた知識が崩れていることへの困惑を含んだものであり、ティファにしてみればもっともな問いだった。どこか弱々しくアレイズの反応を窺うような声に、彼は片眉を上げて何てことはないという風に答えた。

「神である前に、人間だからだ」

何を当たり前のことを、と付け加えられてもおかしくはなさそうな態度にティファははっと息を呑む。

そうだった、彼は世界に人間であることを願われているのだったと。神など願われてはいないのだと。

左手の薬指に指を走らせる。光のない場所でも自分が翡翠で在る

のだと誇示するような色を撫ぜると、これだけの器の中にどうやって入り込んでいるのかと思うほどの魔力が感じられた。暖かく、柔らかな光。それは持ち主であるアレイズの人格をも現しているようだった。

「……そう」

分かったわ、と告げると彼は膝を付いたままにやりと笑う。契約行為の終了を告げたのだろう。

長い間誰も訪れることのなかった地下の地面に触れさせたローブはしかし一切の汚れをつけることなく神々しくはためく。自分よりも低いはずの視点で笑んだアレイズが再び高い場所からこちらを見下ろす姿を黙って見つめながら、ティファはこの不本意ながらに神になってしまった男に対し今後はあまり遠慮をしないようにしようと決めたのだった。いつか彼の願いが変わってしまう日が来るまでは、という期限付きではあるのだが。それが契約をした聖女としてティファができる唯一のことだと思えたから。

口元を緩め弧を描くそれに向けて、ティファもどこか勝気な笑みを見せる。

そうしてお互いの契約行為を終えた時、ぽんと両肩に背後から細い指先が触れた。似て非なる感触は二人分のそれ。

「メイ？　マイ？」

振り向いて答えると、兎を抱いたままのマイとメイがにっこりと周囲が見たら卒倒しそうなほどの極上の笑みを浮かべているのが見える。背中に冷水を浴びせられたような感覚になりティファは前方に逃げそうになりながら引きつるような笑みを返した。

「ど、どうしたの？」

アレイズも気付いたのだろう。彼は黒瞳をさりげなく逸らし三人のやり取りから離れて行く。

（に、逃げたわね！？）

薄情な態度に胸中で毒づき、それを口にしようとすると制するように二人分の声が降る。

しんと静まり返った場所に響き渡るその声は高らかで、それでいて楽しげだった。

「「ねぇ、ティファ様？」」

「……何かしら？」

怖い、怖すぎる。

一体なぜそのような声を上げられないといけないのかが分からないが、恐怖感を覚えることに変わりなどない。それゆえに問う声が小さくやけに明るいものになっていることを自覚していると、メイがぎゅっとティファの手を掴み高々と顔の高さまで上げた。きらりと翡翠が光る。

「「これは一体どういうことですか？」」

「え？　どういうことって……」

契約をしただけなんだけど、と答えようとすると鼓膜をつんざくような怒声が響き渡る。アレイズがその声に両耳を塞いだのは見なかったことにした。

「ど、う、し、て！！　アレイズ様がティファ様の左手薬指に指輪を嵌めてるんですか！」

「ティファ様！　もしかして結婚しちゃうの！？」

脳天をがつんと揺さぶる声に目を見開く、そこではやはり煌々と翡翠が光っているのみであり、硬質な光を放つそれは結婚という言葉には程遠い神聖なものだった。しかし言われてみればそうだ、とティファはふと気付く。どうして左薬指なのだろう。

アレイズが知っているかは定かではないが、レイニウム大聖堂のある都市――ろくに法治も機能していないので都市と呼ぶのはおこがましい気がするが――ヒンメルでは婚儀の際左薬指に指輪を嵌めることが習慣化している。それはヒンメルのみならず周辺都市、大陸のほとんどに浸透しているいわば常識に近いものだった。

かっと顔が熱くなる。それを誤魔化すようにわざとらしく軽口を叩いた。

「ちょっと待って、ね？　これは契約の証だってアレイズが今言っ

たばかりーー」

「「誰が結婚の契約してこいって言ったんですかー！」」

頬が熱くなるのを自覚しつつも、ティファはこれは契約のためだと無理矢理言い聞かせる。しかしそれを双子が許すはずもなく、再び怒声が響き渡る中アレイズを見れば彼は我関せずという顔をしたままそっぽを向いた。……やっぱり逃げたわね、とその姿を見てティファが毒づいたのは言うまでもない。

第九話

「ちょっと！　アレイズも何とか言ってよ！」
ティファがそう声を上げたのは、双子を説得しようとして小一時間が経過した頃だった。
するとその声を聞き、未だに納得行かないという顔をしている双子は眉根を顰めてアレイズへと視線を向ける。大きく明るい亜麻色の瞳が微かな敵意を含んで神であるアレイズを一瞥すると、彼は面倒くさそうに目を細めてから首を振った。神さえ恐れない態度は主譲りか。
「結婚とまではいかないが近いものはあるんだ。大して変わらないだろう」
「は？」
説得は諦めろと言わんばかりの声に呆けた声が返される。
（っていうか、そこは否定しなさいよ）
色めき立ち、再び高い声を上げようとする双子の姿を無視して胸中で呟くとアレイズがどこかはっきりしない口調で続ける。
「契約をするということは、俺の場合契りを結ぶということになるからな。間違いではないんだろう……多分」
多分って何だ多分って。
「すると何？　私は貴方と結婚したことになると？」
「そこまでは言っていいのか分からないが、まぁ限りなく近いのは確かだ」
「……」
ぽかんと口を開けると、ひんやりとした風が口腔内に入り込む。若干の埃っぽさを含んだそれが舌に触れると苦味に近いものを感じたが、それどころではない。ティファはふるふると頭を振り状況を整理しようと試みて、これ以上整理できる情報はないと即座に諦めた。がつんと頭を殴られたような衝撃の後で、ぐわんぐわんと脳裏

に契りという言葉が反響する。
彼女が驚くのは無理もなかった。
通常神との契約行為は聖人聖女が神に従属するための儀式であり、対等な関係になるためのものではない。だから力を借りることはあっても神がそれを拒むことはできたし、従属する聖人聖女との相性が悪ければ契約を切られ、下手をしたら祟られることもあるほどの危険なものでもあった。無論契約が双方の合意を得て初めて得られる行為ということに変わりはないが――まさかこんな。
（結婚もどきだなんて聞いてないわよ……）
鮮やかなスカイブルーの髪を掻きむしりたくなる衝動を必死に押さえ込んでがくりと肩を落とす。衝撃が強すぎて声を発することすらできないティファは唇を噛みしめ、このどこまでも説明の足りない神に対しどうやって文句を言おうか思案した。だがその前に追い打ちを掛けられる、双子の声によって。
「じゃ、じゃあ」
「結局ティファ様は……」
小さく、震える声双子の声にアレイズはにべもなく頷いた。
「神の花嫁になった、とでも言えば響きがいいんだろうな。まぁこれも運命だと思って諦めろ、ティファ」
「無茶言わないでよ！」
何が神の花嫁だ。従属する決心は何年も前からあったが、花嫁になる覚悟なんてした覚えがないというのに。
ティファは苛立ちをそのまま口にし、しかしすぐに押し黙る。相手を恐れず対等な口を利いていることに気付いたからだ。それは契りを交わし対等な関係に限りなく近づいたことを受け入れていることにもなる。彼女とて、自分が事態をいつの間にかあっさり受け入れていることに気付けないほど馬鹿ではなかった。
夜目に慣れ、周囲がくっきりと見渡せるようになった視界が微かににじむ。
何だかもう泣きたい気分だと考えていると、その視界の中心で双

子がみるみるうちに顔を青くしたのが見えた。主が泣きそうだからだろうか。

片や泣きそうな契約相手、片や顔の青い双子ととんでもない三人に囲まれたアレイズはぎょっとしながらとりあえずティファに視線を向ける。気遣うような諦めを含んだような黒瞳が何の慰めにもならない声を発そうとする。しかしそれは悲鳴に近い声にかき消された。

「どうしましょう！」

「やばいよ姉さん！」

腕の中の兎がびくりと跳ね、慌ててマイの腕の中から飛び出していく。あまりの騒がしさに耐えきれなくなったのか、紅の目を丸く見開いた兎は誰の傍に寄ったらいいものか思案するようにきょろきょろと四人を見つめる。どうやら彼――彼女？――の中にここから離れるという選択肢はないらしい。もしかしたらアレイズにでも用事があるのだろうかとすっかり涙の引っ込んだ目を拭って首を傾げると、両手を取り合って顔を突き合わせた双子がお互いの世界に没入したように代わる代わる言葉を紡いだ。

「ティファ様は料理もろくに出来ない御方よ！？　神様が食べられるようなものを作れるはずないわ！」

「そうよ！　昔っからティファ様に料理作らせるのはかなり危険なんだから！　ノルマン様が聖女に料理なんてさせるな、なんて言うから！　甘やかしすぎなのよあの方達は！」

自分の料理下手を教皇のせいにされたら敵わないのだが。

訳が分からずきょとんとした顔を浮かべるアレイズに首を振ってみせ、ティファは二人に突っ込みを入れることもせず長く深く溜息を漏らす。こうなってしまったら彼女達が止まらないのは、長年の経験で嫌というほど理解していた。ダークブルーと真紅、ロングスカートにミニスカート、色も長さも対照的な二人はしかしまったく同じ横顔で同じような声を上げる。それはティファにとっては見慣れた光景だったが、双子というものをあまり目にすることがなかっ

たアレイズにはとても新鮮で、彼は物珍しそうに彼女達を注視しながら成り行きを見守った。どの道自分に被害が及ぶことだけはなさそうだと理解していたからだ。

「急がないといけないわ。――アレイズ様！」

「あ、あぁ？　何だ？」

だから彼に向けてマイが声を上げた時、アレイズは思わずびくりと身を震わせて答える。まさか自分に話が振られるとは。

必死の形相でアレイズを見るマイはどこか使命感に燃えた亜麻色の瞳に強い光を灯して彼の手をぎゅっと握りこみ、それに合わせてもう片方の手をメイが握りこむ。二人とも勢いに任せてのものだったのだろう、その手はすぐに離されてしまったが。

「私達が急いでティファ様を家事の出来る女にしてみせますから！」

「だから、もう少しだけ待っててね、アレイズさん！」

「は？　いや別にそんな焦ることでもないし、第一家事が出来る必要もないんだが――」

生真面目なマイと違い、すっかり気を許した様子のメイが砕けた様子でアレイズの名を呼ぶ。その態度にマイが少し眉を顰めたが、それはアレイズの返答のせいで霧散したようだ。

「「駄目です！」」

重なり合う声が反響する。全力で叫んでいるのではないかと思うほどの声量に思わず耳を塞ぎかけると、その間に二人はティファの腕を取った。うわ、と声を上げてティファが前に倒れこむように歩を進める。

「急ぎますよ！」

「そうよ！　ティファ様にお料理教えなくちゃ！　というわけでアレイズさーん、帰るから早く付いてきてくださーい」

空いた手をぶんと横に大きく振りながら道を示す真紅のメイドは一番肝心の神を放置したままティファを連れて地上への階段を目指して行く。

アレイズはそれを見て苦笑を漏らしながら進んで行く。すると階

段付近に石碑を見つけて、ぴたりと立ち止まった。

◇　◇　◇

――世界よ。

ずるずると地上へと引きずられて行く自分の契約者の背中を見ながら苦笑を漏らしたアレイズは、いつかの自分が残した言葉を指でなぞり、冷たい感触を堪能する。石碑から苔が払われたように見えるのは、ティファ達が先んじてこれを見たからか。

「……ん？」

つい先程書いたような気さえする文字を感慨深げに眺め、ふと眉を顰める――全文書いたはずの神聖文字が途中で途切れているのだ。

「一体誰が」

小さな音がしてぴょこんと白い体躯が傍に寄る。無垢な瞳でアレイズを見つめるそれは石碑に視線を移すと、すぐにまた彼へと視線を向ける。何かを訴えかけるような仕草に、思わず問い掛けが漏れる。

「お前がやったのか」

返事はない。だがそれでもよかった。

――どうせ考えても詮無いことだ。自分の考えが他の神々に伝わっていることは恐らくないのだろうから。

それに今はもう強烈な眠気も襲ってこない、眠り続けることもなければ魔力の供給のため休む必要もないのだ。伝えたいことがあれば自分が伝えに行けばいい。世界は広いが、果てがないわけではないのだから。

ふぅ、と吐息したアレイズは物言わぬ兎を抱きかかえ石碑に背を向ける。あまり長い間この場所にいたら三人が戻ってきかねない。

そう考えアレイズは階段を一段上がり、最後に一度だけ背後を振り返った。物言わぬ石碑は大部分を苔に覆われ、流れた月日の長さを彼に感じさせた。

「レイナ――約束は、果たすからな」
この場にいない意志に向けて、そっと呟く。兎の耳が小さく動いた。しかしこの言葉だけなら聞かれても別に問題はなかった。
（例え誰を犠牲にしても。神さえ敵に回しても、必ず）
そう、たとえたった今契約を交わしたばかりの少女を謀ることになったとしても、腕の中の兎を殺しても。
囁くような声と聞かれたくない胸中の声をしっかりと抱きしめ、今度こそ階段を上がっていく。踏みしめた大地は昔と変わらず硬質で冷たい。
そうして階段を上りおえようやく陽の光の下に出てくると、彼を待っていたのか三人が大声で騒ぎながら――聖女としてどうかと思ったが――背中を向けているのが見えた。無防備な姿に苦笑を漏らしながら彼女達に近付きつつ、ふと脳裏に扉を開けろと命じた時のティファの姿を思い描く。
人を扱うことに慣れた姿、堂々たる態度。
本来の聖女には相応しくないあの姿は、たとえ自分達が本来の神と聖女の在り方で契約を結んだとしても力を貸さざるを得ない力を秘めていた。それは神に従属する聖女として在るまじき姿だが、アレイズにとっては何の障害にもならない。むしろ都合がいいとも言えた。彼が知る“ティファニエンド”は、そういう人物なのだから。それに、彼が願いを叶えるために必要な人間は聖人君子のように優しく大人しい人間などでは決してない。
（そう、従順なだけの女などいらない）
罪悪感なのか緊張感なのか、どちらにせよあまり良い感情とは言えないもののせいで乾いた唇に舌を走らせ、どこまでも小さな笑みを浮かべる。それが苦い感情から来るものなのかそれとも歓喜から来るものなのか、見ている者が一人でもいたら判別できたかもしれないが結局は誰にも判別することはできなかった。
数瞬後には消えた笑みを見ることなくティファが振り返る、ダークブルーの瞳が困ったように向けられたのを見てアレイズは慌てて

本物の苦笑を浮かべた。

◇　◇　◇

それから五時間ほどの時間が経った頃だろうか。

メイとマイから“花嫁の心得”をとくとくと話され身も心も疲弊していたティファの元に教皇ノルマンから使者が遣わされた。

「至急契約神とお越しくださいとのことです」

端的にそう告げた使者にティファはすぐに頷いてみせる。

「分かりました」

扉が閉じられ、再び四人と一匹のみが部屋に残される。その場所で小さく吐息したティファはレースのカーテン越しに見える夕日に目を細めた。

神と契約をしたのだからすぐにでも教皇の所に報告に行くのが聖女としての務めでもある。だが教皇も聖母も多忙であり、時間が取れなかったせいでここまで時間が伸びてしまった。双子にとってはそちらの方がよかったのだろうが。

（一度座ってしまったせいか、ノルマン様からの御命令だっていうのに面倒になってきたわ）

今日一日で大して歩いたわけでもなく、体力を使ったわけでもないのに自室の椅子に座った途端どっと疲労が押し寄せ、立ち上がれるようになるまでに相当な時間を要したのだ。教皇達の前に出るのはそれなりの緊張を伴う。それを考えるとティファはそう思わずにはいられなかったのだが、召喚命令が出た以上無視するわけにはいかない。

「行くのか？」

「えぇ」

覚悟を決めたように息を吸い込むと背中にそう声を掛けられる。アレイズだ。ふわりとコーヒーの匂いを漂わせてカップを持つ彼は自分も行くべきかと視線で問いかける。それに対しティファは小さ

く頷いてみせた。出会ったばかりだというのに目で会話ができることへの疑問は、ゴミ箱に捨てることにする。

「ノルマン様は私に貴方との契約を命じた御方よ。大聖堂は元々貴方の守護のために建てられたみたいだし、挨拶しておいてもいいと思うけど？」

恩着せがましい言い方になったかと一瞬案じたが、アレイズはふむと言いながらコーヒーに口を付けるのみで特に怒った様子は見せない。もしかしたら意外と寛容な性格なのかもしれないと感じていると彼はすぐに立ち上がり、ささやかな音を立てながらカップをテーブルへと置いた。夕日に翡翠のローブが照らされる。まったく色合いの違うそれらはお互いの妥協点を探すように溶け合い、翡翠とも赤とも言えない色に染まる。

それを眺めながらこちらは完璧に赤色と言える色に染まったローブを軽く整え、ふと薬指に視線を落とす。

――この指輪は付けていくべきだろうか。

ちらりとアレイズを見やると、彼はティファが指輪と自分を交互に見ていることに気付き同じように左手薬指に視線を落とした。そこにはティファが嵌めているものよりかは大きめの、同じ細工の指輪が嵌っている。ティファはその視線を追い、彼もまた同じ指輪をしていることに気が付いて目を見開いた。これではますます結婚しているみたいじゃないかと。

ダークブルーの双眸が見開かれ、日に焼けていない白い肌が紅潮する。

そうしてみるみるうちに色を変えるティファの姿にアレイズは失笑した。

「契約によって縛られるのは神も同じだ」

扉が開かれ、アレイズが外へと出て行く。長い髪が軽く揺れ夕日ではなく照明の光に照らされるのが見えた。

「そんなことが言いたいんじゃないわよ……はぁ」

ティファはその背に向けてがっくりと肩を落としながら、笑いを

堪えるメイとマイにひらりと手を振る。
「ティファ様、私達も――」
「駄目よ。使者には言われてないけど多分二人で来いってことだもの」
セミロングの髪が視界の端に移り、心配げなマイの声が耳朶を打つ。続いてひょこっと現れたツインテールが視界の逆端で不満そうに揺れていた。
しかしこればっかりは連れて行くことはできなかった。指定はされていないまでも、教皇や聖母に会うためにメイドを連れて行く事は元々ありえないことなのだから。首を振り認めないという姿勢を取ると、二人は通路で待機しているアレイズを一瞥した後で眉を顰める。数秒の沈黙は、契約神がどれだけ主に安全性をもたらすか思案するために使われたようだ。
「……分かりました。私達はここでティファ様が戻られるのをお待ちします。ですが、どうかこれだけはお持ちください」
「これ、ナイフ？　でもマイ、私は」
「大聖堂内なら危険はないかもしれないけど、持ってても悪くはないでしょ？　ノルマン様に貰った物だから返しに来たってことにすればいいんじゃない」
少しでも刃を肌に触れさせたらぱっくりと肉が切れてしまいそうなほどの鋭い刃。
鈍色の光るその鋭利な刃をまじまじと眺めているとメイが努めて明るい声でそう提案した。どうやら、これだけは譲れないらしい。
「分かったわ。どの道お借りした物なら返さなくてはね」
「はい。二人分ありますので、片方はアレイズ様がお持ちください」
「俺が？」
「世界よりも神よりも、怖いのは人間ですから」
す、とアレイズに近付きマイが恭しくナイフを手渡す。神相手に渡すような物ではないと誰もが自覚してはいたが、ないよりはましだった。それだけの危険な目に遭う可能性が皆無と言ってもいいほ

どだとはいえ、幼い頃からティファを守ると決めていた双子には待つだけの身は辛すぎたのだ。

ナイフの柄を握り締め、アレイズがぽんと軽くそれを浮かせる。一秒と満たない間に手の中に返ってきた鈍色の刃はずっしりと重かったが、彼は少し眉を顰めただけですぐに懐にそれをしまい、歩いていく。

「あ、待って」

それに付いて歩きながらティファも懐にナイフをしまう。重さを感じると憂鬱な気分になったが、嫌な予感は無視することにした。

小走りにアレイズの前に出たティファは先導するように一歩前を歩きながら教皇の自室へと向かう。

すると宵闇に侵食されて鮮やかさを失う純白のローブの背に呆れを含んだ声が掛けられた。

「あの二人は随分と心配性なんだな」

「そうなのよ。ノルマン様の部屋に行くのだって、一人で行こうとすると使者を脅してまで一緒に来ようとするんだから」

ぽうと照明の明かりに照らされる通路はそこを歩く者に硬質な印象と圧迫感を与えながら代わり映えのしない光景を届ける。聖人聖女の居住区からは密やかな声が漏れるのみで、昼間のような喧騒はなかった。恐らくこれから食前の祈りを捧げる所なんだろう。

それにしても、と胸中で一人ごちる。今回は使者を脅されなくてよかった。

毎回毎回使者をあの手この手で脅そうとする双子の気概には拍手を送りたいが、教皇直属の使者に対してやるべきことではない。はっきり言って度が過ぎたら追い出されてもおかしくはないほどなのだ。聖女のティファはともかくとして、彼女達は一介のメイドなのだから。脅される度に報告は受けているだろうに、にこやかに笑って済ませてくれる教皇の温情に感謝しなければならない。

（その教皇の所に行くのにナイフを仕込んでるのが悲しいところだけど）

表向きは教皇に預かった武器を返すために持ち歩いているが、実際の所は護身用だ。マイとてそのために持たせたのだろう。教皇は一度渡した物を返せと言うような人間ではない。武器を持つことは聖人聖女として問題のあることかもしれないが、要は自ら血を求めなければいいだけの話なのだからと刃物を持つことに関して戒律があるわけでもなかった。

懐に指を這わせ、そこに触れたことのある形を感じた。

魔力の制御以外にも護身用に武器の扱いも教わっているティファは、無論ナイフの扱いも心得ている。拳で殴るよりはナイフで切りつける方が彼女は得意なぐらいだ。しかしそれでも彼女は武器を持つことに抵抗を感じていた。いざとなれば相手を傷つけてでも生き延びる気ではいるが、そんな状況に陥らないようにすることが先決だ。

「……着いたみたいだぞ？」

思考に耽っている間に前に出たのだろうか。隣からアレイズの声が聞こえ、結界のある位置に辿り着いたことに気付いたティファはいつも通り声を発しその奥へと進んで行く。思考を中断して昼間に来たばかりの扉の前に立つと、暗いせいか重厚さが増して見えた。ノックをしようと拳を軽く握る。本当はそんなことをしなくても向こうが気付くと知っていたのだが、それでも癖となってしまったその動作の最中に予想通りの声が響いた。

「お入りなさい」

もし月が見えていたなら、その光に溶け込んだであろう静謐な女の声。

その声にアレイズが首を傾げたのを見て、小さく彼女は聖母アリアだと告げると彼は納得したように頷き、扉を開けた。その様子を見て慌てたティファは彼の手の上に自分のそれを重ねて一緒になって扉を開けた。神に扉を開けさせたなどと死られたら後が怖かったせいだ。

室内が見えると同時に、ぱちんと火の爆ぜる音が耳朶を打つ。

ティファは暖かなその音を聞きながらアレイズと並んで部屋に入り、ローブの裾をちょこんとつまんで一礼する。
「ティファニエンド＝レイニウム。只今参りました」
優雅な動作をするには気が急いており簡易な礼しか取れなかったティファはちらりと相手の出方を窺うようにソファに腰掛けた教皇と聖母を見つめる。若々しくも老成した雰囲気を纏った二人は月の銀光と炎の紅に身を浸しながら彼女達を見、小さく笑んだ。その視線は自分達と同じ翡翠色のローブを着込んだアレイズに注がれている。
「どうやら契約に成功したみたいですね」
座りなさいと招かれるままにソファに腰掛け、柔らかすぎるその場所で同じように居心地の悪さを感じていると香気が鼻腔をつく。どうやら二人のために紅茶を容易していたらしく、まだ熱いそれがカップに注がれると指先にじわりと血が通うのが感じられた。
「……契約に成功したことまで分かるものなのですか？」
「えぇ。貴女があの場所にあった指輪を嵌めていますし、何より先程よりも貴女の纏う気……というか魔力が違います」
「そう、ですか？」
カップに指先を触れさせ冷えた肌が温まっていく時特有の痛痒い感覚を味わっていると、教皇が小さく頷いた。髪も瞳も昼の方が似合いそうな色なのに、声と雰囲気だけは夜が似合う。そんな印象を持つようなどっしりとした声が部屋を満たした。褒めるような感嘆するような言葉にティファは小さく息を吐く。魔力が強くなったなどということは、全くの無自覚だったのだ。
「大役を見事果たしましたね、ティファニエンド。私達は鼻が高いですよ」
「そんな……もったいないお言葉です」
黙ったまま隣に座るアレイズを見上げるが、彼は何を考えているのか分からない顔をしたまま教皇と聖母を見つめているのみだった。
そういえば不思議だ、とティファは胸中で呟く。どうして神がこ

の場にいるのに二人は彼に何も言わないのだろうか。今まで彼が対等に接してくれていたから気付くのに遅れたが、本来なら同じ目線で会話をすることなど言語道断なのだ。神の前で跪き、崇め奉ることが大聖堂に生きる者の姿であるはずなのに――不可解すぎる。

ティファは眼前で湯気を漂わせる紅茶に視線を落とす。指先を温めるそれが次第に熱を失っていく中、彼女はしばし逡巡してから中身に口をつけるのはやめた。不可解な出来事に脳が危険信号を発するまま、安全な道を選ぶことにする。位の高い人間が出した飲み物に口を付けないのはマナー違反だとマイなら怒る所だろうが、今ならきっと許されるはずだと結論付ける。それほどに異常だった。

それにもう一つ気になることがあった。

（神との契約を果たした聖女って、その後どうしてたんだろう？）

文献でも神に従属したという話以外聞いたことがないのだ。大聖堂でどのような立ち位置に属していたかなどティファには知る由もなかった。

神と契約する聖女として知識を得るために大聖堂に引き取られ、契約に関する教育を受けながら魔力を制御する術を身につける代わりに生活の保障を得る聖人聖女。その中で力のない者は左遷などをされていると噂では聞いたことがあったが、神と契約した者はどうなるのだろうか。

「ティファニエンド」

「えっ？　は、はい！　何でしょうか、ノルマン様？」

じわりと恐怖感が心を支配する。知らず知らずのうちに指輪に触れていたティファはその硬質な契約の証を見つめたまま眉を顰め、自分の今後について思案する。そのせいで初め、掛けられた声に咄嗟に反応することができなかった。

裏返りそうになる声を必死に押さえ込みながら返事をすると、微笑を浮かべた教皇や聖母、呆れた様子のアレイズがじっとこちらを注視する。その視線に居心地の悪いものを感じていると、教皇はカップを持ち一口紅茶を飲んでから静かに言い放った。ぱち、と火が

爆ぜる。その照り返しを受け聖母が柔和な笑みを浮かべた。
「これより、貴女は聖女ではなくなります」
「へ？」
今、何て。
呆けた声を上げるティファが疑問を続ける前に、今度は聖母が続けた。
「アレイズ様」
「……何だ？」
まさか声を掛けられるとは思っていなかったのだろう。
アレイズが片眉を上げて応じると、聖母は月光のせいか怪しく光る紫紺の瞳に光を湛え紅の引かれた唇を開いた。
「貴方には行くべき場所があると伝え聞いております。どうかその旅路に、契約者であるこの者をお連れください」
聖母と言うには艶やかすぎる笑みを浮かべるアリアの言葉にアレイズが眉間に深く皺を刻み、ティファは小首を傾げる。永きに渡り目を覚まさなかった神の話を、一体誰に伝え聞いたというのだろうか。疑問は膨らむばかりだったが、周囲は神と自分より上位の人間ばかりだったので口を挟むこともできない。従ってティファは悶々とした気持ちを抱えたままアレイズの答えを待つことしかできなかった。
ソファに深く座り込み足を組んだアレイズは考えこむように宵闇よりも濃い漆黒の睫毛を伏せる。逆光でシルエットしか見えないその横顔は髪が長いこともあってかまるで女性のようでティファは瞠目しながらその瞳が開かれるのを待った。
沈黙を彩る暖炉の炎が何度爆ぜた頃だっただろうか。
「では、遠慮なく。聖女は貰い受けることにしよう」
「はい」
「お、お待ちください！」
一瞬睫毛が震え、瞳が開けられると同時に発せられた声に教皇が深々と頷く。そうして床に膝をつけて礼を述べようとする教皇を制

するような形でティファが口を挟んだ。
「アレイズ神に行くべき場所があることは理解できました。ですが何故私なのですか！？」
契約をした先のことなど、まともに考えたことがなかった。
緊張し居心地の悪さを感じるソファ、重厚な扉、爆ぜる暖炉の炎、そうしたものは何だかんだと言いながらも心地良いものだったのだ。それを失うなど考えもしなかったティファは掠れた声で反論する。
しかしそれに対し教皇は申し訳なさそうな顔をしながら首を振るのみだった。
「元々、神との契約を果たした者には旅路に同行してもらおうと決めていました。話していなかったのは申し訳ありませんが、どうか聞き分けてください」
「そんな――」
脱力し、立ち上がりかけた体がすとんとソファに戻される。
大聖堂の外に出ることに不満があるわけではなく、ある程度のことは自分でできるティファには障害らしい障害はない。しかしティファは聖女であると同時にメイやマイの主なのだ。自分が大聖堂から去らなければならないのなら、彼女達が居場所を失ってしまう。もう何年も暮らしてきた場所から自分のせいで引き剥がされてしまうのだ。
ひやりとした気持ちが心を侵食していく。目元が熱を持ち、若干痛くなった。
そんなティファに対しアレイズは気まずそうに目を逸らしながらぎゅっと彼女の手を握る。大きな手が包むようにしてティファの手を掴むと、顔を伏せていたティファがゆっくりとアレイズに視線を向けた。ダークブルーの瞳に映されるのは、本当ならばこの場にいる誰よりも偉くて自分に命令することもできる神の沈痛な顔だった。細長い一重の双眸は更に細められ視線が絡み合うことこそないものの、真一文字に引き結ばれた唇も眉間の皺も決してティファが落ち込んでいることに対し何も感じていない様子には見えない。

ただ、それでも契約者であるティファを離すことができないのか視線は逸らされ強く手が握られているのだが。

（神様でも、こんな顔をするのね）

世界を守護するため常に盾となり人々の上に君臨していると言われている神々。人間のほとんどが崇め、敬愛する存在。

そんな存在がたかが一人の聖女のために心を痛めている。その事実がティファの心を強く揺さぶった。

（呪いで神になったんなら仕方ないかもしれないけど、でもだからこそこの人が神様で良かったのかもしれない）

神であるなら、たとえ元が何であっても心身共に屈強な存在ばかりだと思っていたのに、予想外だった。

ティファは口元に弧を描き、熱を持った目元を指先で冷やしてからアレイズの手に自分のそれを重ねる。人と同じ体温をそっと撫ぜると、心が軽くなった。

「――承知いたしました」

「ティファ？」

「聖女ティファニエンド＝レイニウムはこれよりその肩書を捨て、アレイズ神と行動を共に致します」

人心に聡く、自ら胸を痛めることのできる神。この神ならば大聖堂が守護する価値は十分にあると感じ、指輪に向けて笑みを零す。それはティファがようやく契約行為を心から認めた瞬間であり、指輪の感覚を受け入れた瞬間でもあった。

月光には程遠い高らかな声を凛と響かせるとアレイズがようやく視線を合わせる。黒瞳にあるのはたっぷりの驚愕だ。

彼としてはティファがこうも清々しい声で承諾するとは思っていなかったのだろう。その視線と顔が語っているのがティファには手に取るように理解できた。くすりと笑いかけ名残惜しい気持ちを抱えながらアレイズの手をやんわりと引き剥がす。そうして立ち上がったティファは今度こそゆったりとした仕草で一礼した。儚い光に純白のローブが際立つ。

「大聖堂に引き取られてから今日までの長い間、ノルマン様とアリア様には本当にお世話になりました。育てて頂いた御恩は、決して忘れません」

「……恩義など感じる必要はありませんよ。貴女に大役の重圧を押し付けたのは私達なのですから――いつ出るのですか？」

「アレイズ神もお急ぎでしょうし、明朝には発ちたく」

「分かりました。それでは出来得る限りの手配をしましょう。必要な物があれば使者に伝えなさい」

悲しみも怒りもない、さっぱりとした表情は聖母のように艶のある笑みではないものの鮮やかな彩りを顔に載せて笑顔を形作る。するとアレイズが立ち上がり視界の端に黒く艶やかな髪が見えた。髪を束ねるものが必要かもしれない、と感じていると感慨深げに深く息をつく教皇がそう提案してくれたのでティファは一礼して答え、踵を返す。この場に一秒たりともいたくないというわけではなかったが、去るのならその時は早い方がいいと思ったからだ。後ろ髪を引かれるような想いは後々辛くなる。

「お気遣いありがとうございます。――それでは、失礼致します」

扉を開け、最後に振り返って一礼する。もうこの場所に来ることはないのだと感じると胸が痛くなったが、ティファは自身の出した決断を後悔しないように痛みを振り払った。その時ふと懐に重さを感じ、慌ててそこに手を伸ばす。鈍色の刃をそっと扉付近の棚に置き、恭しく頭を下げた。

「お返し致します」

「持っていってもいいですよ」

「いえ。私には過ぎたものですから」

鋭すぎる刃は毒だ。

そう思いティファがナイフを置いたその隣に、アレイズも同じように刃を置く。彼もすっかりナイフのことを失念していたようだったが、ティファの行動に合わせるというスタンスを取ることで忘れていたということは悟られずに済ませるらしい。小さな自尊心ぐら

いはあるのだと感じながらティファは失笑し、扉を閉じた。
もうやり残したことなどなかった。
ただ――。
（メイとマイに、どう説明しようかしら）
それだけが問題だ。
ティファは烈火の如く怒り出すであろう双子の姉妹の姿を脳裏に描き、大きな溜息をついてから元来た道を戻った。

◇　◇　◇

すたすたと少し早足で歩くティファの姿を横目に見ながらアレイズは先程の彼女の姿を反芻する。深い色の調度品や炎の色がひどく不似合いに感じられるほど、眩しい純白と蒼。宵闇で漆黒にも見えた双眸には涙一つ湛えず発せられた言葉は清々しく、夢を見ているような気持ちにさせられるほど幻想的な光景だった。出会ったばかりの神のために聖女が共に行くと宣言する。物語にすれば売れそうな内容だが、これは紛れもない現実であり人間一人分の人生の転機でもあった。
「いいのか？」
問いかけると、ぴたりとティファの足が止まる。長いローブが急な静止に付いていけずふわりと揺れた。
「いいのよ」
返ってきたのは短い問いだった。さっぱりとした声が発せられると同時に、彼女がくすりと笑い声を漏らす。
「大体、そんな風に訊いて来るんならあんな辛そうな顔してまで連れて行こうとしなければいいのよ」
息を呑むとティファは口の端を吊り上げてにやりと笑う。少女が浮かべるには些か子供っぽいそれは、アレイズに対してしてやったりとでも言いたかったのだろうか。
「それに、どの道私を連れて行くつもりで言ったんでしょう？　な

らもっと喜んだらいいじゃない」
――確かに、連れて行く気ではあったとアレイズは内心で呟く。
契約を行っただけでも動けるようになるのだし、聖女と離れていたからどうということはないが制約が掛かることに変わりはないし呪いを解くには契約者と共にいる必要があった。世界の意志たるレイナがアレイズに教えた呪いを解く方法は、契約者と共に“あの場所”を訪ねろというものだったのだから。
それに、と続ける。
（あいつらは俺がここに留まらないことを知っていた）
それはすなわち、アレイズが目指す場所も知っているということではないのか。
（何者かは知らんが、あんな奴らの近くに俺の契約者を置いておくわけにはいかない）
誰から話を伝え聞いていたとしても、自分の情報を入手している地点で危険人物だと判断する方が正しい。第一教皇達は神であるアレイズを見てもそのままの体勢で座っていたままなのだ、いくら契約者とはいえ聖女の前であのような不遜な態度を取る理由が分からなかった。アレイズが呪いによって神になったことは、世界を除けば呪いを掛けた神ぐらいしか知らないことなのだから。
「ありがとう」
「？」
思案しているとふいに声が掛けられる。視線を落とせば頭一つ分ほど低い場所でティファがはにかむように笑っていた。
視線で問いかけると彼女は前を向いたまま続ける。鈴が鳴るような軽やかな声は聖母の物に若干似通っていた。
「私の気遣ってくれたんでしょ？　でも大丈夫よ、貴方が行きたい所なら私も行ってみたいもの――そういえば、アレイズはどこに行きたいの？」
さりげない言葉にアレイズが答えに詰まる。頬が熱くなるのは隠した方が不自然だからと手を添えることはしない。

（貴方の行きたい所ならって、随分あっさりと恥ずかしいことを）

アレイズの内心の声に気付いているのかいないのか、ティファはふと通路の真ん中で足を止めた。窓枠の形に影が差し、彼女の頬を黒く染める。空色の髪は影で海に近い色に変わっていた。夜も更けたせいで照明も半分以上が落とされたせいだろう。

アレイズを信用していると分かりやすく伝えるような素直な笑みと問いに、彼は逡巡するように視線をさ迷わせる。行きたい場所はあったが、それを安易に口にすることはできなかったし、名前は知っていてもどこにあるのかまでは彼にも分からなかったせいだ。

「世界に、会いに」

「世界――レイナに？　随分と探すのが難しそうね」

特に何の疑念も抱かず答えるティファを真正面に見て、アレイズは良心が痛むのを感じる。ティファとしては自分の為に心を痛めてくれた神に対して心を開いただけに過ぎないのだが、それを知らないアレイズは強引に近い流れで契約をして指輪という枷を嵌めて、それでも数刻前より強い信頼を向けてくれる少女の心が理解できなかった。何より、そんな少女に対して小さな嘘をついてしまっていることが良心の呵責に繋がる。

聖人君子のような優しさと大人しさを持つ従順な女などいりはしない。だから意志が強く威勢のいい人間ならばいいと思っていたのだが、誤算だった。こんなにあっさり心を開かれるとは。

それもこれもすべてアレイズの言動によるものだったが、やはりそれを知る由もない彼は良心の呵責を誤魔化すためにティファへのせめてもの報いとして何かできることはないかと探す。その考えこそが矛盾と葛藤を生み出すのだとは知らずに。

「ねぇ、ジュード」

自分に出来ることを頭の中で数えて行くと、小さい声が耳朶を打つ。

いつの間にか歩き出していたティファがくるりと振り向き、どこか勇気を振り絞るような声で告げた。

「私にも、真名があるの。姓が違うだけだし、聖女じゃなくなったから明日にでもその名前に戻るんだけど、先に教えておくわ」

それは大聖堂に来る前の彼女を知る者を除いた誰よりも先に自分に教えてくれるということだろうか。

「私の名前はね――」

アレイズは久しぶりに口にするのかどこか緊張した様子彼女の唇から名前が紡がれるのを聞いて静かに笑んだ。

「いい名だ」

世界の名よりずっと、そう付け加えるとティファは呆気に取られたような顔をしてすぐに頬を赤くする。名を教えることがないから、褒められたこともなかったのだろう。アレイズはこのどこまでも聖女らしからぬ気の強さを持った、そのくせ誰よりも聖女らしい素直さと優しさを備えた少女の手を握りこむ。“ティファニエンド”の名を持つ者の役割を彼は大まかにだが聞かされており、それゆえに彼はこの契約が予め仕組まれていたことなのではないかと勘ぐったが、動き出した事態は誰にも止められないと知っていたから胸中で呟くに留めた。

――神としての力が弱い自分に出来ることは数少ない、だが。

(せめてこの手ぐらいは離さないように)

彼女の行く道の全てをアレイズは知っているわけではない。ただ、彼の願いを叶えるために必要だというだけで、それ以上のことは何も聞かされていない。

それ故に彼には彼女に起きる出来事を予見して助けることはできなかったし、最終的に何が待っているのかも分からなかった。

だからこそ彼は願うことができた。少しずつ心を開き信頼してくれている契約者の手をどうか離さぬようにと。

そうして一神と一人の人間は手を繋いだまま、同じ場所へと戻るため一つの道を歩く。

お互いの指に嵌る指輪の翡翠が、月光を受けて煌いた。

第十話

宣言した通り、ティファ達は夜が明けると同時にレイニウム大聖堂を後にした。

大聖堂を出ると口にした時の双子の驚き様は半端じゃなかったが、それでも最後には納得したように頷いてくれた。そしてティファの予想通り旅に付いて行くと言い出したから一応は説得を試みたものの、すぐに諦めて許可をした。どの道メイドである彼女達にも行く場所などないのだから、居場所を奪った主に出来ることといえば彼女達の願い通り旅路に同行させることぐらいだった。例え目的地が世界の意志という、抽象的すぎるものであったとしても。

教皇達の好意に甘える形で手に入れたのは路銀や武器、衣類や食料など、旅に必要最低限な物ばかりだった。

……兎を連れて行こうとしたのだが、気付いたらいなくなっていたので人参などの荷物はない。軽いのでいいことも言えたが、高位の神である兎が消えたことは不安要素でもあった。用事があるのなら、そのまま付いてくるはずだというのに。

それから数日。

アレイズと旅に出たティファがその間に気付いたことは、契約神である彼の予想外なほどの小言の多さだった。思わず事態に何度か衝突しかけたが、ティファもアレイズもお互いを自制しつつ――ほとんどは双子が仲裁してくれるおかげだが――上手くやっている。最初は若干遠慮がちだったティファも今ではすっかりアレイズと喧嘩が出来るほどになっていた。

――だけど。一体どうしてこういう事態に陥ってしまったのだろうか。

記憶を手繰り寄せれば寄せるほどそもそも契約したこと事態が間違いだったんじゃないかと思わされるが、しかしそれを望んだのは自分自身なのだからとティファ吐息して回想することを放棄する。

結局自分のせいなのだ。諦めるしかない。
「ティファ？」
「――へ？」
ぱちりと目を見開いたティファの双眸にアレイズの憮然とした顔が映り込む。
涼やかな目元が微かな怒りを孕んでいることを感じ、どうやら随分と長い間回想に耽っていたようだと理解するも時既に遅し。誤魔化すようににへらと笑うが彼がその程度で小言を止めるとは思えない。そしてそれは間違いではなかった。低い声を届けるように風が吹き、大聖堂とは随分と違う塩気の強いそれがスカイブルーの髪を撫でる。
「返事ぐらいしろ」
「あはは、ごめんごめん」
同じように若干長い漆黒の前髪が同じ色の双眸をちらちらと隠すように揺れるが、糸よりも遥かに細いそれが怒りの持ち主を覆い隠せるわけがない。レイニウム大聖堂の地下で出会った時とは違い翡翠のローブをすぐに脱ぎ捨ててしまったアレイズは自分が持つ色に重ねるような漆黒の外套を翻し、ふと何かに気が付いたように背後に目を向ける。眉根が寄せられ、気まずそうに目が細められたのを見てティファも後ろを振り返るとこちらに掛けてくる細い影が見えた。げ、と声が漏れる。
「あ、あの！」
南天から少し落ちかけている太陽を追うように駆け、ぜいと荒い息を吐いたのは先程の酒場のウエイトレスだった。
全速力で駆けたのに追いつかれるなんて、どんな足をしているんだろう。ティファは感嘆と驚愕を織り交ぜるように口をぽかんと開けてから、彼女の肩にそっと指先を置く。すでに場所は村はずれに差しかかっており、人が立てる生活音の代わりに微かな雑音が左耳を叩いていた。それが波の音だと知ったのは二日ほど前のことだ。
大丈夫？　と尋ねるような指先にウエイトレスの少女が顔を上げる。

鳶色の瞳がティファをじっと見上げて、もう一度荒い息が吐き出される。そうして彼女がティファの、日に焼けたようにはとても見えない白い指先に視線を落とすのを見てアレイズが口を開いた。その声に問題の発生源に対する嫌味が籠められていると感じたのは、ティファの被害妄想が成せる技だろうか。

「修繕費が足りなかったか？」

「あら、もしかしてお金数え間違えたんでしょうか」

「しっかりしてよ姉さん」

前を歩く双子がぱたぱたと駆け、緑と海にはひどく不釣合いな深青と真紅が舞う。黒に白に空に深青に真紅に亜麻色に……見れば見るほど統一感のない色の取り合わせに目がちかちかするのか、ウエイトレスの少女は何度か目を瞬かせてから首を振った。

「そうではありません。マスターから貴女のお名前を伺って来いと言われたので。その、助けて頂いた恩もありますし」

そのためにこの距離を走ってきたのか。

四人が四人とも同じ考えを胸に抱きながら、しかし何も答えないわけにはいかないだろうとティファに視線を向ける。

四人分の問い掛ける視線を肌にひしひしと感じて、彼女はうっと後ずさりたい気持ちになりながら少女を見返すこともできずに自分が来た道に視線を置いた。ティファが着るブラウスやスカートより幾らか濁った色の細い煙が時折立つ、小さな村。まだ村を出てはいないとはいえ随分と中心部から外れてしまったが、もしかして今日もまた宿を見つけられずに野宿になるのだろうか。彼女は情けなさに溜息を漏らしそうになりながら、それでもやはり無言のままでは悪いと思い息を吸う。舌に潮の味が触れ、紡ぐ言葉が絡まりそうになるが何とか堂々とした声を上げる。

「私はティファニエンド＝グランハートよ。ここにいる三人と旅をしているの」

「旅……」

「えぇ。少し捜しものをしているものだから」

未だ言い慣れない名前を心の中で反芻しながら胸を張ってみせると、鳶色の瞳が丸く見開かれる。

それはそうだろう。村の人間でないことは確かだが、どこかの令嬢に見えると言われるような少女とメイドに護衛役のような男。この取り合わせを見ている限り、旅というよりは貴族の道楽に見えるかもしれない。ティファは一体どうやって彼女に説明をしようかと考えるものの、まさか元聖女と神とメイドですだなんて言えるはずもなく、胡乱気な呟きを聞いても何も言えずにいた。ちらりとマイを見ると、彼女は亜麻色の瞳を細めて微かな苦味と呆れが見えるような笑みを浮かべた。それが何に対する呆れなのかはティファには分からなかったが。

しかしこの状況をどうこうすることよりも、双子はティファが両親がまだ健在だった頃の名を名乗ったことの方が嬉しかったらしい。苦笑をすぐに消して苦笑を消して心からの笑みを浮かべる。同じ顔立ちの少女達がやはり同じような表情を浮かべることは珍しいのだが、致し方ないことでもあった。レイニウムという名前はそれでそれで良かったのだが、彼女達としてはやはりグランハートを名乗るティファの方が馴染みがあるはずだし、何より元々の姓を名乗るということはティファが聖女の肩書きを捨てて一人の人間になれた証明でもあったからだ。大きな輪の中の一人ではなく、唯一人の人間。それはとても心許なくて不安を伴なうものだったがティファは不安よりも開放感を感じていた。

（ノルマン様に知られたら悲しまれるかもしれないけど）

胸中で零すティファの隣では、アレイズがどこか呆けたような顔をして彼女を凝視していた。傍から見ていると暑苦しいことこの上ない外套を纏った彼はしかし一切の暑さを感じさせない涼やかな視線が一身に彼女を見ているが、ティファがそれに気付く様子はない。それをいいことにじっと見つめる視線は真っ直ぐで、どこか見惚れているようにも見えた。

腰に手を当て堂々とした様子のティファとアレイズを交互に見て、

メイとマイが意味ありげに笑みを漏らす。その様子にウエイトレスの少女が一人きょろきょろと辺りを見渡していたが、すぐに何か思い立ったように声を上げる。
「そうだ。そろそろ戻らないと」
「そうですね、大工も呼ぶ必要がありますし」
「はい。ではティファニエンドさん、どうもありがとうございました」
「え？　あぁ、うん」
ウエイトレスの言葉にマイが頷くと、彼女はティファに礼を述べて踵を返す。どうやら本当にティファの名を知りたかっただけらしい彼女はその動作で薄布を翻し、今度は太陽に背を向けて元来た道を戻っていった。
「お幸せに！」
一度だけ振り返ったその横顔が発した言葉は一体何を意味していたんだろうか。
怪訝そうな顔をして隣のアレイズを見ると、彼は慌てたように顔を逸らしてしまった。――何事だ。
「あ」
小さくなる背に手を振ろうとして、ふと何かに気付いたようにメイが声を上げる。
「宿屋、どこにあるのか訊きそびれちゃった」
「あぁっ！？　そうだった！」
「あら、追いかけましょうか？」
そういえばそうだったという風に発せられた声に姉であるマイがあらあらと首を傾げる。
元々大聖堂で長い間過ごしてきた彼女達はどこか抜けた所があるようで、こうした大事なことをすっかりと忘れてしまう傾向にあった。
ただ、常ならばアレイズが軌道修正してくれていたのだがと再度ティファが彼を見ると、呆けた漆黒の瞳と視線が絡まる。

「アレイズ？　どうしたの？」
太陽が雲に隠れ、影が村を満たして行く。
決して暗く恐怖感を伴なうものではなく、どこか柔らかなその影の中に身を置くアレイズはその黒よりも鮮やかな漆黒の瞳でじっとティファを見ていたが、掛けられた声に即座に首を振った。その目元が微かに赤いのは、影のせいで誰にも見えない。まさか見惚れたように凝視していたのだとは彼にはとても言えなかった。
「いや、少し昔のことを思い出していただけだ」
「昔？」
「あぁ、とはいってもお前と契約した時のことだがな」
「……昔のことを思い出すようになったら、もう年よ」
遠くから伸びる煙が香ばしいパンの匂いを運んでくる。その匂いにティファが食欲を感じているとそんな声が聞こえてきて、彼女は思わず目を丸く見開いてしまった。まさかアレイズまでもが同じことを考えていたとは思わなかったのだ。驚きのせいか、憎まれ口を叩いてしまう。
じゃり、と海が近いせいかきめの細かい砂を鳴らし空を見上げると雲と雲の間から徐々に太陽が顔を出す。その光に目が焼けないように手の平で庇いながら天を見つめ、黙ったまま足を進める。そうして海が見える道を歩いていくとすぐに村を出る。宿を探すことをどこかで諦めたティファが更に歩を進めると、きらりと光を反射する蒼が見えた。海だ。
「海なんて、本当に久しぶりですね」
「ここからは森ばっかりみたいだから、せっかくだし海辺で休憩しよっか。姉さんと私で釣りでもしてくるから、ティファ様とアレイズさんはここで待っててね」
知識や遠い記憶にあった海という存在を目の当たりにすると、二人が袖をまくって手近な木の枝を拾った。それで釣りをしようというのだろう。勢いよく駆けていってしまったのはティファとアレイズを二人きりにすべく気を遣ったせいなのだろうか。砂をきゅっと

鳴かせながら急いだ様子で海へと向かう二人を見てティファは不思議そうに首を傾げ、アレイズは照れているのか憮然とした顔を浮かべる。彼は束ねていた髪を解き、頭皮に風が触れるのを感じながらその場に腰を下ろした。砂がくっつくことなど気にならないらしい。

「ねぇ、アレイズ」

「今は真名でいい」

真っ白な砂が付着するぐらい問題はないかと考えティファが隣に座りながら声を掛けると、即座にそう返される。誰もいないから真名を呼べということだろうかと考えて、彼女はすぐに言い直した。それは彼女の本名のように口にまだ慣れず、少しくすぐったい感情を与える。

「ジュード」

「何だ？」

静かな雑音が耳朶を叩く。

それを心地良く受け止めながら、ティファはしみじみとした声で続けた。彼女にしては珍しいその声は波の音のように優しい。

「大聖堂の外って、こんなに広かったのね」

「当たり前だ。どれだけ巨大な建造物だろうと、世界には敵わない」

「そうね。でもそんな簡単なことすら忘れちゃってたわ」

くすくすと笑うティファは先程大男に見せたような苛烈な表情など影も形もないというように穏やかに笑う。

伏せられた睫毛が揺れると、ふぅと溜息が漏れた。

「聖女の生活に不満なんて全然なかったけど、やっぱり外に出られるっていいわ。これもジュードのおかげね」

「別のものに拘束されただけだろう」

「それでも」

弾かれたように開かれた瞳がアレイズの双眸を射抜くように向けられる。

その鋭さは穏やかな顔にはひどく不釣り合いで、少しでも突付いたら壊れてしまいそうだった。

「今の方がずっと自由だわ」
目を見張るような姿にアレイズは息を呑む音が波の音に混じって聞こえる。
（そう。大聖堂の暮らしはそれなりに幸せだったし不満なんてなかった。でもこうして外を歩ける方が楽なのは何でなのかしら）
自分は恩知らずなのかもしれない、と感じるものの結局は首を振る。
どの道恩を与えてくれた人からの指令でもあるのだから、これはこれで一つの恩返しなのだろうと結論づけた。だからそれについて悩むことはやめ、代わりに少しだけいつもの調子を失ったアレイズに対し気遣うような言葉を掛ける。
「会えるといいね」
世界に、と続けられた声にアレイズが返す。
「ああ……というより、会うんだ。会って、訊きたいことも願いたいことも山ほどある」
強い決意の籠められた声に、ティファは背筋を伸ばして答えた。
（大丈夫、きっと――）

◇　◇　◇

「会えるよ」
きっぱりとした声だった。
未来を知っているとでも言いそうなほどはっきりとした物言いに瞠目すると、ティファはダークブルーの瞳を悪戯っぽく輝かせて口の端を吊り上げた。初対面の人間にはどこかの令嬢に見える姿が、その笑顔で一気にあどけなさを得る。成人したのだから大人らしく振舞いたいと考えていても、やはりあどけなさが抜けないらしい。
「私も付いてるんだし、貴方一人じゃ出来ないことも二人なら出来るでしょ？　それでも足りなかったら、メイやマイだっているわ」
「……」

「四人もいるのよ？　これだけたくさんの人間が集まれば、世界に会うのだって簡単よ」
　軽やかな声や真昼の空は大聖堂で教皇達と向き合った時よりもずっとティファに似合っているなとアレイズは茫洋とした気持ちで考え、しかしすぐに首を振る。今必要なのはそこではない。
「随分、簡単に言うんだな」
「悪い？」
「……いや」
　たった三人の人間と一神だけで世界の意志を探すことが困難であることはティファも重々承知しているはずだったし、アレイズだってそうだ。苦笑を含んだ声で返すとティファは反論するように唇を尖らせたが、アレイズは考えを改めるつもりはなかった。そんなに簡単に見つかれば神聖文字なんて生まれていない。
　それでも意地になって世界が見つかるなどと言うのは、自分の態度がいつもと違うせいだろうか。確かに先程からぼうっとしていた気はするが、それはただアレイズがティファに見惚れていたせいであって世界を探すことに悩んでいたからではないのだが、それがティファに分かるわけがないしアレイズとて伝えるつもりはなかった。
「ちょっと、せっかく人が励ましてるんだから、少しぐらい反応しなさいよね」
　黙ったままでいるとむくれたような声を掛けられ、アレイズはしばし間を空けてからくっと笑う。
（多分、いや絶対気遣われたんだろうなこれは）
　人間に気遣われる神というのはどうなんだと考えるものの、元々対等な関係を望んでいるんだからそれもありかと考える。
　そうして事実を伝えることなく気遣いを受け取ることにする。
「あぁ」
　すまないな、と口にすると彼女は途端に口を噤んでそっぽを向いた。
「まったく、これだから年寄りは嫌よね」

励ますことも感謝されることも慣れていないのか、素直じゃない態度にアレイズは思わず頬を緩めた。
大人しくなど決してない少女だが、優しい所はさすが聖女らしいと言うべきか。
ただその方法が不器用すぎて他の者には伝わりづらいという難点もあるのだが、彼女なら特に気にはしないだろう。
「まぁ、とりあえずは信じるとしようか」
（お前がそう言うのなら）
笑ったまま答えると、彼女が横目にこちらを見てまたむくれたような顔をする。どこまでもあどけない表情はとてもじゃないが魔法をぶっ放すような人間には見えなくて、時折覗かせる優しさと過激さの差の激しさを見つめたまま、アレイズは黒瞳を細めた。
――これは俺が呪いを解くために予め定められた道なのかもしれない。　だが例え仕組まれた出会いだったのだとしてもそうじゃないのだとしても、変わらないのはティファが契約者でよかったという事実だけだ。気が強く短く、実は正義感に溢れた人間。罪悪感と相まって関われば関わるほど手を伸ばしたくなる少女に向けて、アレイズは胸中で呟いた。自分のためにわざとらしい明るさで振舞うような聖女など、彼は他に知らない。――聖女という存在自体、彼女以外に知らないがそれはそれでいい気がした。他を知る機会など、なくてもいい。
「ありがたみがないわねぇ。もうちょっと感謝してもいいと思うんだけど」
憎まれ口を叩くティファの左手薬指に視線を落とす。
神と契約者を繋ぐ鎖役でもあるその重さを自分の指にも感じていると、遠くで砂が鳴く音がした。
「ティファ様ー！」
「調理法をお教えしますから早く来てください」
鮮やかな深青と真紅が揺れ、似通った声が一直線にティファやアレイズの耳朶を打つ。もう釣り上げたの？　と驚いたような声を上

げながらティファが立ち上がり、ふと自分の左手を見てそれをアレイズに差し出した。
「ほら。行きましょう、ジュード」
「あぁ」
アレイズが取った手はほのかに温かく、血の通うそれをぎゅっと握りしめて彼は海の蒼ではなくティファが持つ空の青に目を止めた。

◇　◇　◇

そうして役目を終え居場所を失った聖女は人となり、神と共に歩いていく。
――意志の見えない世界は今日も暖かく、続く道はどこまでも自由で果てがなかった。

第十一話

――星降る空に掛けた願いが、どうかどうか叶いますように。

◇　◇　◇

ここはレイニウムの中心近くに存在する、とある森の中。
その片隅で一つの焚き火を囲んだ四人の男女が、座り込んで何やら深刻な様子で話していた。
時刻はとうに夜になっており、本来ならば月明かりを頼りに先に進むこともできるのだが、長く生きる木々は伸びに伸びて豊かな葉を持ち、彼女達から光を奪う。
そのせいで先に進むことが危険だと判断した彼女達は、そこで夜を明かそうと輪となっていたのだった。
「旅立ったまでは良かったわよね」
「えぇ。姉さん」
四人の男女のうち、二人の少女達は同じ顔立ちを持っていた。
無表情に塗り固めたそれを崩すことなくひそひそと話す彼女達は亜麻色の双眸を細め、お互いが持つ深青と真紅のメイド服にはぁ、と溜息を落とす。
「問題はそこから先よ」
「そうね、姉さん」
呆れと諦めが五分五分に混ざり合った言葉は傍にいる二人の男女に聞かせるためのものらしく、ささやかながらもどこか芯のある声が森に響いた。ぱちぱちと爆ぜる木の音にかき消されない程度の声を聞き、傍にいた黒髪の男が視線をどこか遠くへと追いやる。
それも仕方がないことなのかもしれない。何せこの会話はもう何度も繰り返されてきたのだから。
（そして私も）

少女が心の中で呟く。しかしそれを無視して亜麻色のセミロングを持つ深青のメイドが呟く。
「色々あったわね」
「えぇ、姉さん」
続く姉の言葉に対して同じ答えを返すのは、姉と同じ亜麻色を持つツインテール姿の真紅のメイド。
彼女はちらりと黒髪の男を見て、それから自分に視線を向ける。
色素の薄い彼女の瞳に映るのは、真っ青な長い髪と同じく蒼の瞳を持つ、二人よりも少し幼い少女の姿。
双子の少女の主である彼女を見る目には色々と言いたいことが詰まっていることが理解できて、彼女は視線を受けながら頭の中でふつりと何かが切れる音を感じて声を上げた。
「あぁ、もう！　どうせ私が悪かったわよ！　行く先々で問題起こすのがいけないって言うんでしょ！？」
勢いよく立ち上がりそう言った彼女は怒鳴ると同時に隣に座る黒髪黒瞳の男を見やり、八つ当たりをするように声を荒げた。
彼女とて本当ならば男に八つ当たりなどしたくはなかったが、こうも何度も責めの言葉を聞かされたら八つ当たりでもしなければ気が済まなかったのだ。
「ちょっと、アレイズも何とか言いなさいよ！」
「俺に振るな……」
高らかな怒声に呼応するように木々がざわりと音を立てる。
僅かな風でも葉を揺らす木々は宵闇を照らす月と星の光さえも遮り、今や四人を照らすのは焚き火の炎のみ。
陽の光ばかりを見て育ってきた少女達にはその暗さが不安を駆り立て、このようなやりとりになったのだ。
ゆらりと揺れる紅に頬を照らす男は少女の言葉に心底面倒くさそうな声を上げつつ、どことなく弱々しい苦笑を浮かべて彼女と目を合わせないように努めているようだった。そうやって目を逸らすから余計に腹が立つんでしょうが、と彼女は内心で呟くものの相手は

自分とは違って特別な存在なのだ、安易に喧嘩を売るなんてことはしたくなくて彼女はぐっと唇を噛みしめて耐えた。

代わりに言い訳じみた言葉を放つ。実際それは言い訳でも何でもなく、彼女とにとっての真実だったのだが。

「大体ね、困っている人がいたんだから仕方ないじゃない。そりゃあ、昨日も酒場を一軒壊しちゃったけど、でも！　酒場のウェイトレスさんも助かったし！」

そう、困っている人が目の前にいるのに見て見ぬ振りをして進むなんて自分には無理だったのだ。

ウエイトレスからもお礼を言われたし、悪いことをしたとは思わない。

――ただ、やりすぎたとは思うけど。

腰に手を当てて彼女がそう言うと、亜麻色のセミロングを揺らして溜息を漏らした深青のメイドが窘めるように囁く。

「だからと言って、お店を一軒壊していいという理由にはなりませんわ」

「そうだよ。第一、ティファ様は力の加減が出来てないんだから。この前だって危うく宿屋を潰しかけたじゃない！」

「う……っ」

双子の姉妹の言葉に、ティファと呼ばれた少女が言葉を失う。

本来ならば主であるティファに口答えするなどメイドとしてあるまじきことなのだが、当の本人がそういった礼儀をあまり気にしない性質だからか双子もまったく気後れした様子を見せずはっきりとした物言いで返答する。それはもう、主にも分かりやすい責めの言葉を。

群青と葉が作り出す暗闇の中で立ち尽くすティファはそんな二人の言葉に良心の呵責を感じたようで、白く柔らかそうな頬を軽く膨らませた。

「いい加減諦めろ、ティファ」

そんな彼女の様子を横目に見ながら、アレイズが呟く。

こうした光景には既に慣れてしまった彼は毎度同じような言葉を使って彼女を諫めているのだった。

もちろん、返り討ちに遭うこともしばしばだが。

「うー……」

喉の奥から絞り出されるような唸り声が三人の耳朶を打つ。

しかし彼らは何も言わないまま、銀色のカップに入った白湯にほうと息を掛けてちびちびと飲むだけだった。ほわりと漂う湯気は疲れきった体に一時の癒しを与えてくれる。薄い敷物の上に座る彼らはその姿勢だけでも体を痛めるとよく理解していたので、どこかに癒しを求めないとすぐにばててしまうのだった。それは人間でも神でも変わらない。

散々水仕事をしてきたはずの双子はしかし痛みなど感じさせない滑らかな指先をカップに滑らせ、ゆったりとした動作で白湯を飲み干していく。じわりと落ちていく熱に二人が目を閉じるところでティファは唸り声を止めた。彼女達がぱちりと目を開くのを見計らって肩を竦める。

「……ごめんなさい」

彼女にはそれしか言うことができなかった。

どう前向きに考えても、建物を倒壊させたのは自分なのだから。

駄々っ子のように唸ってみせた所で、事態は変わらない。

「「分かっていただけて何よりですわ」」

ティファの謝罪に双子が声を揃えて言う。

それを聞いて更に萎縮したティファは、双子の妹に声を掛けた。

「マイはともかく、メイまで」

「あれだけやれば当然だよ」

半眼でじっとりと睨みつけられたメイはしかしそんな視線など痛くないという風にさらりと返した。

鈴が鳴るような軽やかな声が響くと、更に心を抉られる。ただでさえ良心の呵責を感じてるのに、ここまで責めるのか。

胸元を抑えてうぅ、と唸ると双子の姉が妹に同調するように頷い

た。

「この数日間で、一体どれだけの被害が出ていると思ってるんですか？　いくらアレイズ様がお止めにならないからといって……」

ぴしゃりと鋭いマイの声に、止めるのが怖いとは言えないだろう、と蚊の鳴くような低い声が聞こえたがティファはそれを無視した。今口を開いたら口論になりかねない。

それにしても、怖くて止められないって神様としてどうなのだろうか。

ティファは胸中でそう呟いたが、マイにはアレイズの声が聞こえなかったようでもう一度うんうんと頷いた。

揺れる亜麻色が炎の照り返しを受けて煌めく。旅に出てからはあまり宿を取ることもできず、水浴び程度の手入れしかできなかったはずだがそれでもマイの髪は艶やかだった。

「いくらなんでも、酷すぎです」

カップから指先を離し、小さくなるティファを無視してマイは夕飯の魚の丸焼きに手をつけた。

メイも同じく魚に手を伸ばしそれを頬張る。

「ほら」

「……ありがと」

話が終わったと思ったのだろう。アレイズは魚が刺さった串を一本取り、それをティファへと差し出す。

カップよりも更に高い熱を現すようなぱりぱりと言う音が食欲を駆り立て、ティファは短く礼を述べてから小さくそれに頬張った。

塩味が効いたそれを口に含み歯を立てると、即座に白くほくほくとした身が現れる。舌が火傷しそうなほどの熱にティファがはぁ、と息を吐き出すと真っ白な息が空へと舞った。特別寒いというわけでもないのに、全身を覆う氷が溶けていくような気がした。

「美味しい」

呟くと、今まで荒んできた気持ちが嘘のように頬が綻ぶ。

自覚が出来るほど幸せそうな顔を浮かべてもう一口頬張ると、ア

レイズがふっと微笑した。
そのまま彼も魚を口に含む。同じように吐き出した息が舞った。
その様子を見ていると、とても神には見えない。
「ところで、アレイズ様」
吐き出した息が空に溶けていった頃、マイがアレイズに問いかける。
彼女は魚を半分近く食べ終えてしまったらしく、空腹が満たされつつある満足感に幾分か普段通りの穏やかな表情を浮かべていた。
理知的な瞳に光が宿る。
「何だ？」
それに答えるアレイズは自分の魚が冷めてしまわぬうちに話を終わらせてしまいたいのか、どこか早口に問う。焦っているというのは語弊があるが、そう言っても一割程度は当たっているであろう急かすような顔に向けてマイが小首を傾げた。
にこりと唇が吊り上げられる。彼女にしては珍しい明るい笑みに、ティファは背筋が凍りつくのを止められなかった。
「私達、どこに向かっているんでしょうか」
「……」
そして今度はティファのみならず、その場にいた全員が凍りついた。
メイが魚にぱくつくのをぴたりと止め、おずおずとアレイズを見つめる。
「そういえば、世界を探すといっても何も考えずに歩いてたよね」
「えぇ。アレイズ様が何かご存知だとは思っていたんですけど」
小声で囁くような会話を交わすと、アレイズが凍りついた笑みを浮かべる。
その表情を見て、ティファは直感的に理解してしまった。
（もしかして、何も考えてなかったんじゃ）
そもそもアレイズは呪いによって神にされてから永い間、ずっと眠り続けてきた元人間なのだ。

かつては人だったのだからある程度世界について理解があるだろうが、年月は地理の常識を変えてしまう。だからティファは自分の予想が恐らく間違ってはいないのだろうと結論づけて、今度はどうこの契約神を助けようかと思案した。下手な言葉ではマイに返り討ちにされかねない。

「アレイズ様？」

「ま、マイ？　その話はちょっと――」

続けざまに問いかけるマイに対し、取りなすように手をひらひらと振るがその程度のことが効果を発揮するわけもない。

ティファは内心で舌打ちしながら続く言葉を考え、恐らく何も考えていないであろうアレイズを横目にし、凍りついた笑みのまま唇を開く彼の姿を見た。その額にじわりと汗が浮かんでいるのはティファの気のせいではないだろう。

「聖都市、グラドへ」

硬質な低音がティファの耳朶を打つ。瞬間、彼女はダークブルーの双眸を丸く見開いていた。

聖都市グラド。それはこのレイニウムで唯一と言ってもいい国の首都だった。

否、国という名を関する場所ならレイニウムに多数存在する。しかし、国としての機能を保っている国はグラドのある聖王国のみだったのだ。レイニウム大聖堂の力をほとんど受けていない稀有な国。それは単に国が統治されているからだった。

ティファ自身は行ったことがない場所だったが、珍しい物品が多く存在し交易で栄えているという。

だがまさかアレイズがその都市の名を知っているとは思わなかった。

「グラドに行く予定だったの？」

呟くと、やや硬い表情をそのままに頷かれる。

「ちゃんと考えてたのね」

どうやら心配損だったみたいだ。

「ティファ様、それは幾ら何でもアレイズさんに失礼だよ」
安堵と共に吐き出した言葉をメイが窘める。
ティファは彼女の言葉を聞きながらマイへと視線を向ける。
マイは炎の傍で葉の形と己の形をした影を従えて唇に指先を軽く当てて、何やら考え込んでいるようだった。
じっと亜麻色の瞳がアレイズを見つめ、数瞬のうちに和らげられる。綺麗過ぎる笑みは消えていた。
「グラドに行きたかったのですね。不躾な質問をして申し訳ありませんでした」
深々と頭を下げたマイは、それでもどこか油断ならない視線のままゆったりとした動作で魚に口を付けた。するとアレイズも同じように魚を食べながら、硬かった表情を崩して問いかける。
「あぁ、だが方向が分からなくてな」
――目的地は分かってるのに方向が分からない、とはどういうことだ。
もしかしてアレイズも方向音痴なのだろうかとティファは笑いそうになる気持ちを押さえながら魚を食べる。幾らか冷えた魚は食べやすく、しかし味は落ちていなかった。ぱち、と火花が舞う。その鮮やかな小さな光から少し遠ざかり、マイが鞄から地図を取り出した。離れたのは地図を燃やさないようにするためか。
「えーっと、ここからは大分南の方角にあるようです。距離もありますし、それにグラドまでは村が一つ在るのみです」
つ、とマイの指先が今ティファ達がいる場所とグラドを繋いでいく。それを遠目に見ているティファは道を繋ぐためにマイが動かす指先が存外長い距離を繋いでいることを理解した。どれだけの縮図なのかは分からないが、その間に村が一つしかないというのは不可思議だ。
方向音痴のティファにはよく分からない話だったが、聖王国は都市が多いと聞いているのに。
無論偶然という可能性も否定できないが、それにしては迷惑な偶

然だ。
「よし、ではとりあえずその村を目指すか」
最後の一口を食べ終えると、アレイズが開かれた地図に視線を落とす。黒い双眸はティファの予想に反してしっかりと道を理解しているようだった。衣擦れの音がして漆黒の外套が揺れると、地図を取ったアレイズが仰向いてそれを見上げる。村までの距離を計算しているのだろうとティファは考えた。
しかしティファは計算はできても道を覚えることは到底できなかったので、自らも仰向いて満腹が引き連れてきた睡魔と戦っていた。
「これで目的地がはっきりしたわね」
広大な世界、レイニウム。
その世界の意志を探すための道がようやく見えたのだと胸中で呟き、ティファは手近な鞄から寝袋を取り出した。この森には人を襲う獣はいないという話だから、全員が眠っても問題はないだろう。
火の番は必要だったが、それは三人のうちの誰かに任せることにする。眠気にもう勝てそうになかったのだ。
「そういうことで、おやすみー」
寝袋に入り目を閉じると、がつんと襲い来る眠気がすぐにティファを眠りの世界へと誘った。
とろりと液体を頭から掛けられるような緩慢さで全身を眠りに縛られていく。
すぅ、と息を吐き出したティファの姿を見てメイとマイが呆れたように息をつく。
しかし彼女達は苦笑を浮かべながらもすぐに後片付けに取り掛かり、交代で火の番をしながら眠りに就いた。

◇　◇　◇

双子が寝静まった頃、焚き火を消したアレイズは寝袋の中から空を見上げていた。

無論、空は見えない。豊かな葉に邪魔されて、月明かりさえも奪ってしまうほどのものが群青の夜空を見せてくれるなどとは期待していなかった。

うとうとと、睡魔が襲い来る中ですでに眠りに就いている三人の少女達を一瞥する。

「……上手く誤魔化せたな」

誰にも聞こえない囁きは、燃え尽きた焚き火の残滓が生み出す煙にかき消える。

――これから行くべき道など、知っているわけがない。

アレイズは胸中で呟きながら、彼女のメイドであるマイには下手な誤魔化しなど効きはしないし、彼女の主を謀っていたなどとばれたらそれこそ強引にでも契約を切られてしまう可能性が高い。そう考えたアレイズが取った苦肉の策は何とか成功したらしく、それだけがアレイズの救いとなっていた。

永い時を眠り続けてきた彼には都市の名前など分かるはずもなく、当時一番大きかった都市の名を挙げたに過ぎない。

「まだ存在していて助かった……」

心底安堵したような声を放ち、どっと襲ってきた疲れを溜息に載せて放つ。

そうして闇に溶けてしまいそうな見目を持つアレイズはしかしその闇に溶けきることもせずに、ざわりと揺れる葉を見据えて呟いた。

低く、小さく放たれたそれが紡ぐのはこの世界の名前。

「レイナ、どこにいるんだ?」

アレイズの囁きに答える声はない。

今寝そべっている大地も豊かな葉も空も、すべてが世界――レイニウムの物だというのに、その中で呟く声に答えないのはなぜだろ

うか。アレイズは切なさのような苛立ちのような、そんな感情を持て余しながら空から視線を逸らした。体を横向きにし、傍に眠る元聖女に目を止める。暗闇の中でも映えるスカイブルーの髪が一房外に出ているのが見えた。

契約してからまだ数日だというのに、神であることを忘れさせてくれる存在。

どこまでも騒がしくて真っ直ぐで明るくて、そのくせどこか繊細な稀有な色を持つ、ただそれだけの人間の少女。

左手薬指に嵌る指輪をじっと見つめる。闇のせいでそれは翡翠色ではなく、深緑に見えた。

「おやすみ」

己が縛り付けてしまった少女に向けて、アレイズがそっと呟く。しかしそれは夢の世界にいるティファに届くわけもなく答えも返ってこない。

しかしそれに対して苛立ちや切なさを感じることなく、アレイズは軽く目を閉じて長い夜を眠りで埋めるために意識を手放した。

◇　◇　◇

そうして一週間が経った頃、ティファ達はようやく森とグラドの間にある村を発見した。

遠目に見える村に歓喜の声を上げた四人は、若干軽やかな足取りで荒い土を踏みしめる。

「あそこを抜けたら、グラドまでは何もないのよね？」

「えぇ。ですから、この村でできるだけ多くの食料や薬草を調達しておく必要があります」

ティファの問いにマイが答える。

メイはというと、ようやく見る村に感動し一目散に駆けてしまった。真紅のミニメイド服がひらりと揺れ、白い太ももが顕になる。それに対してマイが声を荒らげて文句を言おうとしたが、ティファ

がそれを取りなすように首を振った。嬉しいのはティファとて同じなのだ。

しかしそれに対し、苦味を含んだ声が水を差すように割り込んだ。

「頼むからこの村では揉め事を起こしてくれるなよ」

「す、するわけないでしょ」

「どうだか。神に祈れるものなら祈ってでも何とかしたいぐらいなんだがな、俺は」

「……あなたもう神様じゃない」

「だから祈れないんだ。残念なことにな」

「でしたら、アレイズ様が私の願いを叶えてくだされればいいのではありませんか？　私もティファ様が面倒事に首を突っ込むのは本意ではありませんし」

「生憎俺にそんな力はない」

「あらあら、残念ですわ」

しれっとしたアレイズの声に、ちっとも残念そうじゃないマイの声が続く。

それにしても、どうしてこの軽いやり取りの中でちくちくと棘を刺されているような気がするのだろうかとティファは眉間に皺を刻ながらがくりと肩を落とす。同時に視線を落とすと、大聖堂を出る時には純白だったブラウスとスカートに所々が見える。村に入ったらまず丁寧に洗濯をしようと心に決め、ティファはそれきり二人の会話を無視して足早に村へと向かった。

そうして村に入ったティファ達は、メイが焦った様子で走ってくるのを見て立ち止まった。

かなり慌てている様子のメイは、村が持つ地味な土色や木の色とは違う鮮やかな真紅と白を揺らし全速力で駆けると、そのまま他の誰を見ることもなくとにかくティファだけを見るや否やその腕をぐっと掴んで前方に引きずる。ブーツの爪先部分がじゃりっと音を立て、つんのめるように上体が傾いた。いつこけてもおかしくない状態にティファが切羽詰った声を上げる。

それでなくともメイの様子は尋常じゃない。慌てるなというのが無理な話だった。

「ちょ、ちょっとどうしたの！？」

入り口部分だからか、人気のないその場所で甲高い声を上げるとメイがそれに負けじと大声を出した。

きんと空気を震わせた声にアレイズとマイが耳を塞ごうと腕を上げる。

「何もない所でした！　だからさっさと宿屋に行ってシャワー浴びて寝ましょう！　食料調達とか私と姉さんがするから！」

「え？　でも量があるなら私も――」

「それも大丈夫！　いざとなったらアレイズさんに頼むから！」

……神様に荷物持ちをさせようと考えるのは、一体誰に似てしまったんだろうか。

ティファは額に手の平を当ててはぁ、と息を吐き出しながら腕を引っ張りどこかへと――恐らく宿屋だろう――連れて行こうとするメイの背中を見て、次にアレイズを一瞥した。

◇　◇　◇

ティファのダークブルーの瞳が細められる。

それに対して首を振りながら、アレイズはマイから掛けられた声にほとんど唇を動かさずに答えた。

「アレイズ様」

「分かっている」

何を話しているか知られるわけにはいかなかったのだ。少なくともティファには。

肩を竦め、外套を羽織り直す。陽の光にそぐわぬ漆黒をきっちりと纏いながら呟くと、アレイズ同様メイとティファの姿を見送っていたマイが亜麻色の髪を縦に揺らした。肯定だ。

「どうせ、揉め事でも起きていたのだろう？」

「メイの様子を見る限り、恐らくは」
ずるずると引きずられていく空色の髪が遠ざかる。それを見やりながら溜息を漏らすと、彼女達の進む方向とは逆方向が騒然とする。
喧騒に耳を澄ませると、どうやら口喧嘩をしていたらしい男達が実力行使に出たことが分かった。
喧嘩、それはアレイズの契約者でありマイの主であるティファが嫌うものの一つだ。
知られたら恐らく――いや確実に村の建物の一部が壊される。
「仕方がない」
自分が出した声が存外しっかりとしたものであることに驚きながら、アレイズはマイを一瞥して喧騒に足を向ける。
「あいつはメイに任せて、俺達はあれを何とかするぞ。ティファに勘付かれる前にな」
「承知致しました」
深青のロングメイド服をぱんと叩き、砂埃を落とすような仕草を見せたマイは思わずアレイズが動きを止めてしまいそうなほどにこやかな顔をしていた。しかしそれがただ純粋な喜びから来るものでないことをアレイズはこの数日間で嫌というほど理解していたので、あえて見なかったことにして足早に喧騒の中心へと向かった。
村はあまり広くはないらしく。すぐにその場所に辿り着くことができた。
恐らくは村の最奥なのであろう一際大きな家の前でその喧騒の元凶が見えると、マイが片眉を上げる。
元凶は、大の大人が二人口論と共に殴り合いを繰り広げていた。
その周りを村人が取り囲んでいたが、喧嘩は止められることなくむしろ応援する者あり野次を飛ば者ありと場の混乱に拍車をかけることしかしていない始末だ。喧嘩などそうそう起きることではないから興奮しているのだろう。娯楽に餓えた僻地ではよくあることだとアレイズが考えていると、マイが溜息混じりに冷えた声で呟いた。
「これだから、男の人は」

そうして懐から何かの玉を取り出す。
黒々としたそれはマイの手の平ほどの大きさで、彼女はアレイズがそれが何であるのかを問う前に玉を男達の前に投げつけた。
「はい、どうぞ」
男達にぶつけるわけではない。その眼前の地面を狙ったのだ。
おっとりとした声でぽいと投げられたそれは観衆の間をするりとすり抜けて見事に狙った場所へと落ちる。誰もが頭に疑問符を浮かべる中、黒々とした玉は地面に触れるや否や破裂し、大量の煙を吐き出した。
「うわぁ！」
「何だ！　何だぁ!?」
喧嘩の時など比べ物にならないほどに場が騒然とする。
その隙を突いて、アレイズが喧嘩をしていた男達に肉迫する。そうして髪を掴む勢いで男達の頭を掴んだアレイズは煙の中だということを感じさせない動作で輪の中から抜け出した。アーモンド型の亜麻色の瞳がそれを見届け、マイもアレイズに付いて行く。その頃になってようやく煙が消え去った。
「……ごほっ！　くそっ！　まだ前が見えねぇ！」
「おい！　あいつらはどこ行っちまったんだ!?」
辺りは煙に咳き込む村人達が残されるのみだが、喧嘩の中心にいた男達がいない。それを知った村人達が慌てて辺りを見渡したが、薄く靄がかかったような視界の中に彼らの姿を見つけることはできなかった。そして、騒動の原因を作ったアレイズとマイの姿も。

第十二話

「さて」
「この方達、どう致しましょうか」
場所は再び村の入口に戻る。
気絶している男達をどさりと落とし、恰幅のいい中年男とひょろりと縦に長い青年を見下ろすとマイが隣に並んで尋ねてきたのでアレイズは首を横に傾いだ。
「咄嗟に連れてきてしまったのはいいものの。これでは誘拐犯みたいで後味が悪いものだな」
第一特に連れてくる必要などなかったのではないだろうか。要は喧嘩が収まればよかったのだし。
そう考えるものの連れてきてしまったものはどうしようもなく、アレイズは溜息混じりに男達に視線を落とす。随分と年が違う二人だったが、姿が似ていないことから親子だという可能性は低い。どちらかと言えば白髪の多い男の髪の色は灰だったし、青年の髪は栗色だったことからもそれが窺える。恐らく面識のある村人同士が何やら口論でもしたのだろう。
しかし、一見平和そうな村でなぜそんなことが？
見た所かなり熱が入っていたようだったし、ひょろりと長い青年はとてもじゃないが拳を振るうようには見えない。目を閉じ唸っている様子の二人の口の端には血が付着しており、頬は膨れ上がっている。それを見るだけで、喧嘩が本気の物だったのだと理解できた。
それならばティファが入る前に止めて正解だったとは思うのだが、いかんせん人間だった頃にこのような事態に巻き込まれることがほぼなかったアレイズはどうにも良心が疼いて仕方がなかった。
しかしマイはあら、と言いながらにこやかに笑う。明るい笑みはどこか彼女の妹を連想させる物だったが、少しだけ違うように見えるのは声が理知的なものだからか。

「大丈夫ですわ。この程度で犯罪になるのでしたら、今頃私達はティファ様のせいで牢獄行きです」
それにしても存外酷いことを言うメイドだ。
化粧っ気のないあどけなささえ感じさせる唇から発せられる言葉にアレイズが戦慄していると、足元の呻き声が大きくなった。どうやら目を覚ましたようだ。脂の乗った瞼とそれとは対照的な瞼が震え、開けられる。
「大丈夫か？」
その様子をじっと見つめながらアレイズが声をかけると、目を覚ました男達は驚いた様子でアレイズとマイを見やる。
丸い瞳が湛える驚愕が先程の喧騒に繋がり、やがて恐怖へと色づいていくのを眺めアレイズはやはり良心が痛むのを止められなかった。
「君達は……？」
「私達は、つい先ほど村に来た者です。別に危害を加えるつもりはありませんので、警戒なさらないでください」
あれほどのことをしておきながら危害を加えないも何もないだろう。
という内心の突っ込みはどう頑張ってもこのメイドに届くことはないだろう。そう考えアレイズはさりげなく肩を落としながら、相手の警戒心を解くべく笑みを浮かべたマイの横顔を見つめ黙り込む。すると彼らは隣に喧嘩相手がいることに気付いたのか、先程喧嘩していたことから思い出したのか唐突に剣呑な空気で睨み合う。そうして再び一触即発の状態になったのを見て、アレイズが慌てて口を挟む。
「ところで先ほど何やら口論していたようだが、何を話していたんだ？」
すると、男達は互いの意見に同意してもらおうと必死に話し始める。
「実は今晩、星夜祭が行われるんです」

「星夜祭？」

恰幅のいい男が早口に告げ、それに対してマイが小首を傾げる。

星夜祭、というのはマイも聞いたことがないらしい。無論、アレイズとて知らない情報だった。

祭りの一種だということは理解できるのだが……。

「そうです。この村の者達は、時間も作物を作るための気候も全て星から読み取ってきたんです。だから年に一度、星々に感謝するための祭りを催しています」

マイの言葉に答えるのは、線の細い青年だった。ややゆったりとした口調は恰幅のいい男とは正反対だった。

お互いあまり裕福とは言えない薄布に土が付くことを厭わず、その場に座り込んだままマイとアレイズを見上げる。そこにはどちらが正しいか旅人に選んでもらおうという、ある種の負けん気が顔を覗かせていた。

「その聖夜祭に、何か問題でも？」

交代するようにアレイズが問うと、男達は顔を見合わせることなく二人して鎮痛そうな表情を浮かべた。

相反する二人が浮かべる同じ表情に、アレイズとマイが顔を見合わせる。

「それが……祭りに使われる神器が奪われてしまったんです」

「奪われてしまっては祭りはできない。だから祭りを行うか否かで口論してたんです」

「――なるほど」

恐らく、男達は祭りを行うのを楽しみにしていたのだろう。

娯楽に飢えた村に起こる明るい行事と言えば、祭りぐらいのものなのだから。それは男達だけじゃない。この村の全ての人が同じ気持ちだったに違いない。子供のようにその日を待ちわびて、そして大事なものを奪われた。だから彼らの喧嘩を止めずに観衆となったのだ。それを娯楽として少しでも心を慰めるために。

無論それはアレイズの推測であり、事実はどうかは分からない。

だが最も真実に近い推測であることは確かだった、しかし。
「どうしてこんな小さな村に神器が」
ぽつりと呟いた声は、マイにしか聞こえなかったことだろう。彼らは低く響いた音に首を傾げるのみだったが、アレイズはそれに首を振ったのみだった。そうして、事実を伝えるべきかどうか思案する。
実を言うと、神器なんてなくても祭りが行えることをアレイズは知っていた。
むしろ神器なんて数少ないのだから、ある方が珍しいのだ。神であるアレイズでさえ見たことがないのだから。
とはいえ、祭りを行う村人達の中にその知識のない者がいるとは思えないのだが。
「神器がなかったら、祭りは行えないの？」
凛とした声が響く。心底不可思議そうな声に恰幅のいい男が肉を揺らして自信満々に答えた。
「はい。あれは祭りには欠かせないもので――え？」
しかし、その言葉はすぐに途切れ目が丸く開かれる。視線は線の細い青年同様アレイズ達の背後に向けられ、ぽかんと物珍しそうな色を湛えた目が一身に注がれていた。
「？」
アレイズはマイを見るが、先程の声はマイのものではない。
それよりもずっと聞き慣れたものであるような気がして、アレイズはどことなく嫌な予感を感じつつも後ろを振り返る。その動作に合わせて、ぴくりと頬を引き攣らせたマイも同じように後ろを向いて、そして固まった。
「ティファ……」
「しくじったわね、メイ」
アレイズ達の眼前に立っていたのは、スカイブルーの髪にダークブルーの勝気そうな瞳を持った空のような少女――ティファだった。
彼女は元聖女らしく慈愛を湛えた微笑を浮かべ、視線の先にいる男

二人に問いかける。そこにささやかな殺気が宿っているのが感じられて、アレイズは顔に手の平を押し当てて深く長く息をついた。
マイの言葉を借りるわけじゃないが、しくじったなあいつ。
「そんな大変な事態が起きていたのね。それで、奪われたのはいつ頃なのかしら？」
アレイズやマイの驚きは無視してティファが男達に問いかける。
男達も唖然としているものの、アレイズ達の仲間だということが分かったのか怪訝そうな表情をすぐに解いて答えた。
「昨日の晩です。見張り番の話だと、見知らぬ男達が強奪していったみたいで」
「強奪、ね」
「えぇ。村に強盗が入ったと言う情報だけで女達は怯えて外に出てこないし、もうどうしたらいいのか」
ティファの呟きに、線の細い男が身を震わせる。
それはそうだ。その男達がもし村人に害を為す心づもりだったのなら、彼らのうちの誰かが犠牲になっていた可能性が高い。喧嘩のせいで安易に村に入ることができたが、本来は排他的な村なのだろう。そんな場所で強盗があったなどと聞いて怯えぬ者はいない。
アレイズは男達の不安は即座に推したが、奪われた神器を今すぐどうこうできるわけもなく顎に手を当ててふむ、と呟いた。
「――分かったわ」
しかしティファにはそういう我慢強さはなかったようだ。
凛とした声を挙げたティファの横顔は怒りを通り越して殺気さえ宿った不敵な笑みを浮かべていた。
そして呟くと同時にふわりとスカートを舞わせて踵を返す。
「え？　ちょっとあんた」
話を聞くなりいきなり歩き出したティファに何らかの不安を感じたのか、線が細い青年が慌てて立ち上がって彼女に声を掛ける。
しかしそれに対して振り返ったティファは、不敵な笑みをそのままに翡翠の指輪を陽の光に照らしながら左手を振った。

「その神器、私が取り返してきてあげる。どうせまだこの近くにいるんだろうし、それに」
あぁ、やはりこういう展開になるのか、とアレイズが胸中で呟くと同じことを考えていたらしいマイがアレイズの肩を叩いた。
「星を讃える祭り、私も見てみたいもの」
そんな二人の心中など知らず、ティファが楽しげに笑う。
軽やかなその声に男達がはっと息を呑むのを脳裏の端に追いやりながら、何度目かになる溜息を漏らした。
それと重なるようにマイが深々と頭を下げた。こうなったティファを説得することなど不可能だと、その顔が告げていた。
「私も御供致します」
「えぇ、お願い。……アレイズは？」
「行けばいいんだろう」
そしてアレイズもまた、諦めを湛えた横顔を男達に向けて踵を返した。陽の光には随分と似合わない、夜を宿したような外套がはためき揺れる。
男達がそれをぽかんと凝視する中、背を向けた三人は村を後にした。

◇　◇　◇

「ところで、メイはどうした」
村を出て近くの山道を歩きながら、アレイズがティファに問う。
ちなみに当てずっぽうに山道を歩いているのは、強奪をするような奴は大抵山に篭ってるのよというティファの偏見が原因だ。
ティファはあぁ、と軽く声を発しながらじゃりっと土を踏みしめる。
そうしてその笑みを見て戦慄する二人をよそに続けた。
「ちょっと駄々こねるから縛ってきたわ」
「！？」

その言葉に、双子の姉であるマイの顔が青ざめる。
アレイズもそれを聞いて顔をしかめ、今頃宿屋のベッドの上辺りに縛られているであろうメイの姿を思い描く。緊縛だなんて破廉恥な、と考えたもののそれを口にしたらこちらが変態扱いされそうだから止めておく。代わりにマイの肩を叩いた。
「お互い大変だな」
その動作は先程マイがアレイズにしたもので、彼女は青ざめた顔をそのままに頷いてから亜麻色の瞳をきっと前方に向けた。歩幅が大きくなり、土煙など無視した強い歩みでマイはティファを追い越した。
ぐっと手を握り締める姿には悲壮感が漂っていた。
「急ぎましょう！　メイが心配です」
「確かに。……ん？」
辛辣な言葉を笑顔で言えるメイドでも双子の妹は心配らしい。
そう胸中で呟きながら言葉を返し同じく足早に山道を進むアレイズの黒瞳に、ふと不自然な岩肌が映った。
「何だこれは」
明らかに色が違うそこに手を当てると、やはりそこだけ質が違うことが分かった。大体茶や黒で統一された山の中で一つだけ白い岩を置く地点で間違いなのだ。
――これでは見つけてくださいと言っているようなものじゃないか。
ぱん、と手に付着した土を払っているとティファがアレイズの後ろからひょっこりと顔を覗かせて口元に笑みを象った。
「ビンゴね。ちょっと退いてて」
したり顔は自分の勘が当たったことに対する満足感か。
いずれにせよこの岩の運命はもう見えてしまったのでアレイズは言われるままに身を引き、マイの腕を引いて下がらせる。彼女は大丈夫かしらと言わんばかりの心配顔でティファを凝視していたが、彼女が自信満々な様子で左手を岩に向けたのを見て口を挟むことが

できなくなった。
　下手に声を掛けて集中力を欠いてしまうようなことになったら、それこそ事だとマイは知っていたのだ。
「契約神アレイズの名の下に、ティファニエンドが命ずる」
　凛と空へと伸びていく声に呼応して指輪が翡翠の光を放つ。
　きぃん、と細く伸びる甲高い音が辺りを見たし、指輪へと魔力が集まっていく。
　ティファが本来持つ魔力とアレイズの魔力が合わさり、濃い空気が辺りを満たした。神とは違うこの世界を満たす存在――精霊が集っているのだと胸中で呟き、アレイズは空を見上げながら彼女が少しでも集中できるように自分を落ち着かせた。彼女だけの魔力ならそんなことをしても意味はないが、アレイズの魔力も含まれているのだ。落ち着かせるぐらいでティファの暴発を防げるのならと、彼は喜んで瞼を閉じる。一つに結ばれた黒髪がざわりと揺れ、彼女が最後の言葉を発するのを待つ。
　ティファの感情が昂ぶっている時はどうにもならないが、こうして落ち着いている時に魔法を使うのは初めてのことだった。
　静かに静かに、体の末端から鼓動が伝わってくる。
　それはアレイズ自身のものだけではなくティファのものと混ざり、まるで体を共有しているような錯覚に陥った。アレイズ同様ティファのスカイブルーの髪がたゆたうように揺れる。それは岩だらけで荒涼としたこの山を流れる川のように見えた。
「来たれ――風よ！」
　力のあるダークブルーの双眸が岩肌を睨みつけ、強い声が鋭く響く――その刹那。
　バァァンッ！
　派手な音を立てて岩が木っ端微塵に砕け散る。精霊達が巻き起こした鋭利な風がそうしたのだとマイが理解したのはそれから数瞬後だった。
　目を開いて跡形もなくなった岩をじっと凝視し、アレイズがやり

すぎじゃないかと溜息を漏らしていると、ティファはスキップでもしそうなほどに軽やかな足取りで歩いていく。しかしその背に何らかの憤怒が見え隠れするのは気のせいではないだろう。

消えた岩の中にはぽっかりと空いた洞穴が存在しており、陽の光に晒されても尚暗がりを宿したそれはティファ達を手招きするように深淵を広げる。

本来なら女子供はこうした闇は怖がるはずなのだが――ティファは普通とは少し違っていた。

「行くわよ」

一切の逡巡も見せず、すたすたと洞穴の中に足を踏み入れるティファを見て心底そう思ったアレイズはしかしすぐにティファを追う。マイもそれに続き、三人の足音が洞穴内に響き渡ると彼女はアレイズにぴったりと体をくっつけて上目遣いに彼を睨みつけた。

「……アレイズ様」

「何だ」

妹とは違い暗い深青のロングメイド服が闇に溶けて、真っ白なエプロンと肌だけをくっきりと表すマイを見返すと、彼女は更に体を近づける。

恐らくティファに聞かれないようにするためだろうが――それにしては色々と問題がある体勢だ。

せめて腕に当たっている胸ぐらいはどうにかどけてくれないか、と口にしたくとも殴り飛ばされそうで怖くて言えない自分は神としてどうなんだとアレイズはがっくりと内心で肩を落とした。

近すぎる距離についぶっきらぼうな声を返すと、マイはアーモンド型の大きな瞳を半分に細めてティファに視線を向けた。アレイズの腕にマイのそれが絡む。

「あんな物をティファ様に御渡しにならないでください」

「仕方ないだろう。一応あれは契約の証なんだ」

そんなことより離れてくれ。

心底そう思いながらげんなりとした顔をするアレイズだったが、

マイの言うことは最もだという自覚はあった。ティファ自身の魔力だけでも神と契約できるほどに強いというのに、その上神の魔力まで与えるのは問題だったのだ。いや、本来ならば何ら問題はないのだがティファはあまりに正義漢に過ぎた。まさかこれほどとは。

十歩以上先を進むティファの背中を見ると、彼女は誰の手も借りずに暗がりをどんどんと進んでいた。

野生動物かと思うほどに夜目が利いているのだろう。その足取りに迷いはない。

少し汚れた白のブラウスとスカートが遠ざかるのを見て歩く速度を早める。するとマイもそれに付いて歩きながらそっと瞼を伏せた。吐息と共に睫毛が揺れる。反響しないようにそっと呟いた言葉はアレイズにしか聞こえないものだったことだろう。

「ですが、契約をしてまだあまり時間が経っていません。それなのにあんなに強い魔法を使うなんて」

「魔力を増幅させる指輪だからな。それに、元々才能があるんだろう。今回も俺達の出番がなさそうだって思えるぐらいにはな」

「確かに、ティファ様は聖女として魔力制御の稽古は欠かさずやっていらっしゃいました。……ですが、制御法だけです」

「どういう意味だ？」

石が多いせいか決して歩きやすいとは言えない道をブーツで踏みしめながら歩くマイは、秘め事のようにアレイズに囁きかける。

「ティファ様は御優しい方です。私達が武器を持つことすら嫌がる方が、どうして攻撃魔法を使ったりなさるのでしょうか。ですから私達だってティファ様が攻撃魔法を使っている所なんて見たことがありませんでした」

沈黙が落ち、同時に足が更に早くなる。

強盗がどこに潜んでいるか分からないこともあり、足音はいつもより控えてあるが今の所人の気配を感じることはなかった。

恐らく洞穴の最奥にいるのだろう。どれだけの深さがあるかは知らないが、岩を木っ端微塵にされても人っ子一人出てこない所から

察するにもう少し距離があることは理解できた。
「アレイズ様」
腕にぎゅっと力が込められる。
囁き声はどこか希うような色を持ってアレイズの耳朶を打った。
「大丈夫だ」
マイが懸念していることを何となく理解したアレイズはその言葉に、なるべく神らしく聞こえるように返した。
低く、天ではなくどちらかと言えば地に近い場所に響く声がマイに届くと彼女は何も言っていないのに、という風に目を丸くした。
「暴発はしない。俺の魔力が使われているうちは大丈夫だ」
恐らくはそこを気にしているのだろうとアレイズが考えていると、マイはますます目を丸くして驚愕を湛えた瞳でアレイズを凝視した。
どうやら当たっていたらしい。
驚きでぱっと離された腕に開放感を感じる。
するとマイは自分がしていたことにようやっと気付いたのか、洞穴内でも分かるほどに頬を赤く染めた。
煙玉を投げつけたり殺気を漂わせて神を見るようなメイドだが、恥じ入るような顔をしていると年相応の少女に見える。――だからと言って不謹慎な考えを持とうものなら彼女の武器が唸りを上げそうだが。
「申し訳ありません……」
「いや、いい」
恥じ入り、口元を押さえながら消え入りそうな声で謝罪するマイにアレイズは苦笑を浮かべて首を振る。マイが我を忘れるほど主が心配だったのだということを理解した以上、責めるのはあまりに狭量だ。
闇に溶け込み、露出する肌しか見えていない彼の瞳はやはり暗くマイは彼の表情を推し量ることに苦心しているようだったが、やがて少し距離を置いて歩き始めた彼女は幾分落ち着いた表情でティファを追い始めた。

エプロンの紐が揺れる。それを頼りに前へと進みながらアレイズはふと遠くを歩くティファを見た。

契約神の存在さえ忘れて歩く彼女の魔力は確かに強い。

だが、それは自分の存在を安易に人や神に知らせることになることをアレイズは知っていた。自分がかつて神に追われた時に魔力を探知されたことがあるからだ。世界の意志たるレイナは全ての人々の存在を感知しているせいか個々の魔力を掴めないらしいが、神や人は違う。

暴発の心配はない、自分が制御すればいいのだから。

しかしもしティファが誰かに目を付けられた場合、彼女は逃げることが困難になる。それがアレイズの懸念だったが、マイに伝えることはできなかった。

下手に伝えようものなら、マイはまだ起きてもいない事態を想定して胃を痛めかねない。

――だが、あいつが本当にティファニエンドならばいつかは起こり得ることだ。

ふぅ、と息をつき一歩大きく踏み出す。小石がない場所を選んで踏みしめたそこはほとんど音を立てずにアレイズの足跡を残した。

第十三話

それから少しした後に、ようやくティファ達は洞穴の最深部へと辿り着いた。

後ろでは何やらアレイズとマイが仲良さそうに話しているのが見えたが、ティファは先程何か話しているようだったからそれに関係があるのかもしれないと結論付け、すぐに思考を切り替えてそこにたむろしていた男達を睨めつけた。

屈強な大男に狡賢そうな男達。

まるで悪人面の店でも開いているんじゃないだろうかと思わずティファが胸中で呟くほどに彼らの人相は悪かった。

こんな顔なら神器を奪ったとしても驚くことじゃない気がする。

それに派手に魔法を叩きつけても許されそうだとティファは剣呑なことを考えた。暴力的な思想は元々好まないが、悪漢となると話は別だ。大聖堂には細かい戒律などはなかったが、盗みが罪であることぐらい彼女にもよく分かっていたのだから。

「貴方達が、神器を盗った輩？」

後ろに控えていたマイがすっと目を細めティファより少し前に出る。いつでも身を盾にできるようにとのことだろう。そこまでしてくれなくても大丈夫なのに、とティファは胸中で申し訳なく思いながらも静かに尋ねた。いきなり感情を荒らげてしまったらまたアレイズに文句を言われてしまうからだ。

ティファの言葉に、男達は最初呆気に取られているようだった。

人相の悪い顔についた二つの目を見開き、まじまじと洞穴へとやって来た三人の男女を凝視している彼らのあまり大きくない瞳に映るのは一人の青年と二人の少女。しかも三人が三人とも冒険者の物とは思えない身なりをしていた。黒の外套はともかく、全身白のお嬢様然とした風貌に深青のメイド服だ。帯剣はしているものの、恐らく彼らの目には止まっていないだろう。

余裕を取り戻し嘲笑を浮かべる男達の姿に、服をそれらしいものに新調した方がいいのだろうかとティファは思案する。これはこれで気に入っているのだが、向かう敵向かう敵皆に舐められていたら少し腹立たしい。マイは決して服装を変えようとはしないだろうから、自分だけでもどうにかしたいものだった。

嘲笑が哄笑へと変わっていく。男達の声に気付き他の面子も出てきたのだろう。

――もう誰が誰だか分からないわ。

全員が全員悪人顔だから区別がつかないとティファが辟易した顔を浮かべていると、それが伝わったのかアレイズが失笑する。ふるふると震えた手の平がティファの肩を数度ぽんぽんと叩くと、連鎖するようにマイが溜息を漏らした。

そんな彼らの様子には気付かず、一番奥に座る男が胡座をかいたままにやりと下卑た笑みを浮かべた。

リーダー格だろうか、その態度の端々にどことなく偉そうな色が見える。

「そうだぜ。もしかして、嬢ちゃん達が取り返しに来たってのかい？」

「そうよ」

「御覚悟を」

揶揄するような声にティファは平然と答えるが、その声はひんやりと冷たい。空色の髪が一気に冬の冷たさを帯びたような声にマイが鋭い声を発すると、二人の少女の声に怯んだように男達が一瞬押し黙る。

意外と肝の小さな男ばかりね、と評価を下していると男達はすぐに哄笑を返した。今までの経験から言って予想通りという流れに、今度こそティファは辟易とした溜息を漏らした。やっぱり服買おうかしら。

「うわっはっは！　おい、てめぇら！　こんな嬢ちゃんが神器を取り返しに来ただとよ！」

「可笑しくて腹がよじれちまいそうだぜ！」
「御頭、せいぜい可愛がってやりましょうや！」
下卑た声と言葉にマイが珍しく怒りを表すように片眉を上げたが、彼女はその怒りを口に出して表すことはしなかった。恐らく増長するだけだと理解しているのだろう。アレイズに至っては我関せずという風に見守っているだけだ。これも予想通りとはいえ、契約者が馬鹿にされているのだからもう少し何か反応があってもいい気がする。
ティファは口々に嘲りの言葉を口にする男達を尻目に鋭く視線を走らせ神器の在処を探す。
幸い洞穴の最深部はそれほど広くはなく、更に男達が灯す松明のおかげで神器一つなら探すのにあまり苦労はしそうにない。人を馬鹿にしている暇があったらお宝を隠すことね、三下。そう胸中で毒づくティファのダークブルーの瞳に、きらりと光る物が見えた。
――あった。
リーダー格の男の斜め後ろ。少し影になるその場所に銀の聖杯が置かれているのが見えた。
遠目からでも分かるほどの繊細な装飾に紫水晶、何より紋章らしき物がついていることからして間違いないだろう。
ただ、どうやってあれを手に入れればいいのか。
攻撃を外さない自信ならあったものの、魔法はいかんせん威力が強すぎる。制御をすれば弱い攻撃もできるだろうが、それだと相手が倒れない可能性もある。対人用の魔法の練習などしたことがないティファには、物を壊さずに人を倒すという力加減が分からなかったのだ。
ちらりと黒の双眸がティファへと向けられる。それに対し視線のみで神器の在処を伝えると彼は納得したように頷いた。
視線のみの応酬に男達が気付くわけもなく、彼らはティファが何も言わないことを怖気づいたからだと考えたらしい。
次第にティファへの距離を縮めてくる男達の足は緩慢で、まるで

恐怖心を煽るようなものだった。最深部は土が細かいのか、石が土に擦れる音があまり聞こえない。静寂の中で満ちるその小さな音が更に恐怖心を煽ると計算したのだろう。ただ、それは大きな間違いなのだが。

「なぁ、嬢ちゃん。怖いかもしれねぇが、ちぃと遊んでけや」

舌舐めずりの音が聞こえてきそうな、いやらしい声がティファ達の耳朶を打つ。頬に傷を持つ男の地を這うような声に、部下達が嘲笑と歓声を上げた。息を呑む音と共に硬質な音が隣で聞こえるが、それに対しティファが横目で合図するとすぐに収まった。マイが武器を取り出そうとしたのを止めたのだ。

マイから視線を外したティファの目に映るのはリーダー格の男ではなく、神器唯一つだった。

自分が見られていると感じたのかにやにやとした笑みを深める男を無視しながらどうするべきか思案していると、すぐ傍で先程の男の声がする。

「ほら、こっちに来いよ」

ごつごつとした、かといってまともな仕事に就いているとは思えない汚れた手がティファに伸ばされる。

「ティファ――」

気配に気付いていないと思ったのだろう。アレイズが慌てたように声を上げるが、その刹那にティファはひらりと身を翻し銀光を横に滑らせた。松明の明かりに照らしだされるそれは細剣だ。

鞘から抜き放つ音と共に軌跡を描いた刃に視線を注ぎつつ、歌うような高い声が辺りを満たした。

「近寄らないで」

男の喉元にぴたりと突きつけた細剣は、少女が持つ剣とはいえ殺傷能力に長けたものだ。皮をやんわりと裂くか裂かないか、その絶妙な距離感で突きつけられたそれに男が屈辱に顔を赤くさせながら仰け反る。微かに漏れた息が低い呻き声を発した。

「おい！　その女を捕まえろ！」

部下の危機を察したリーダー格の男の怒声が響き渡る。びぃんと洞穴内の暗がりに余韻を残したそれに周囲の男達が色めき立ち、ナイフを手にティファへと近付く。ようやく本気で取り合う気になったのかとティファは口の端を緩やかに吊り上げて笑った。焦りのないその表情に、男が安堵の息を寸前で止めるのが見える。

「こんな状況で何笑ってやがる。少しは怖がったらどうなんだよ」

「だって怖くないんだもの、仕方ないじゃない」

きらりと光るいくつもの短い銀光が視界の端に見える。次第に近付き大きくなるそれを視界に入れつつも、ティファは恐怖心などまったく感じなかった。絶対に勝つというのは驕りでしかないが、それを差し引いても彼女には負けなど有り得なかった。なぜなら彼女は一人ではないのだから。

仲間に刃を向けられたことへの怒りだろうか、ぎらついた目をした男が無言のままナイフを振りかぶる。ティファはそれに対しどう避けようかと考え、すぐに体の動きを止めた。

――来る。

「炎よ」

ティファの声ではない、低い男の声が紡いだ言葉が真っ直ぐに耳朶を打つ。同時に松明の明かりよりも遥かに鮮やかな炎が空中に顕現し、男が手に持つナイフを溶かしていく。どうやって制御しているのかは分からないが、その熱がティファを襲うことはなかった。

あくまで手に持つナイフのみを溶かしたその炎を愕然と見つめる男に肉薄し、呪文を唱えた男――アレイズが囁くように告げる。やる気がなかった割に面倒くさそうに見えないのは、少しぐらいは体を動かしておきたかったからなのか諦めからなのか。

「悪く思わないでくれ。こいつを傷つけさせるわけにはいかないんだ」

「っ！？」

鈍い、皮と肉が突き破られる音がする。濃い血臭に軽い吐き気を覚えながらティファがそちらを見ると、先程までティファを攻撃し

ようとしていた男の右肩に長剣が突き刺さっているのが見えた。剣の持ち主はもちろんアレイズだ。だけど、剣なんて一体どこに。アレイズは剣など持っていなかったはずなのに。

「ぐぁぁぁっ！」

どこからあんな長剣を取り出したのかティファやマイですら理解できずにいると、熱と激痛に襲われたのか男の絶叫が響き渡る。

痛みと怨嗟を詰め込んだそれにぎゅっと唇を噛みしめていると、アレイズは申し訳なさそうに眉尻を下げた。哀れむような瞳で見下ろしながら呟いたのは、肉を突いた刃よりも遥かに柔らかい。

「手当ては必ずする。少しだけ待っていろ」

そうして隣に並んだアレイズを見て、ティファの細剣の先にいた男がひぃ、と声を上げる。仲間の惨事を目の当たりにして平然としていられるような性質ではないのだろう。無論ティファもそうだったのだが。

勝気な瞳が吊り上がり、責めるような視線が黒瞳へと向けられる。引き結ばれた唇からは今にも罵詈雑言が飛び出しそうだった。

――何も傷つける必要なんてなかったのだ。少し脅してそれで済めば万事問題ない。

ティファとて建物を倒壊させることや相手を気絶させたりすることはあるが、焼け焦げたりと見た目は酷いが怪我としては軽症に当てはまるぐらいのことしかしてこなかったのだ。剣で人を刺したりなど、したことがない。無論必要であればするだけの覚悟はあるが、今がその時だっただろうか。

確かにアレイズの魔法を頼りはしたが、こうなるぐらいなら自分が避けておくべきだったとティファは内心で舌打ちをした。

鋭いダークブルーの視線を受け、アレイズは困ったような顔をするだけだ。

それはそうだろう、彼としては契約者を守るだけの行為に過ぎないのだから、ティファに感謝されこそすれ怒られるなどとは考えていなかったに違いない。そして守られた以上ティファは彼に文句を

言うことなどできなかったのだ。だからこそ目で訴えたのだが……問題はアレイズだけではなかったようだ。

はっと息を呑む。耳朶を打つ阿鼻叫喚に意識が耐えられなかったせいだ。

「な、何？」

慌てて声の出所を探ると、野太い男の声が高く染まり幾重にも折り重なる。

「……あれを見ろ。とりあえず怒るなよ」

「？　あ」

そういえば、どうしてティファを襲おうとした男が一人ではなかったことを今まで思い出さなかったんだろうか。

そして残りの行く末を彼女は気にしなくてはならなかったのだ――相手のために。

悲鳴と絶叫を上げていたのは、いずれもティファを襲うはずの男達だった。

涙を流さんばかりの勢いで叫ぶ彼らの肩は、いずれも片側が潰されている。一体誰がそんなことを？　と一瞬思案したティファだったが、彼女はすぐに溜息と共に瞼を伏せた。愚問過ぎたのだ。

「つくづく恐ろしいメイドだな」

「主としては不名誉だけど、とりあえずありがとう」

ぽつりと呟くアレイズの声に答えると、男達が倒れ伏す中で一人笑んでいるマイがこちらへと駆け寄った。ふわりと舞う深青のメイド服にも白地のエプロンにも返り血一つ付いていない。代わりに、手に持つモーニングスターには幾らか赤みが見えたが。

妹の服に合わせたのだろう。真紅の柄を握りながら駆け寄るマイを追うようにじゃら、と鎖が鳴った。その先には棘付の黒々とした鉄球がくっついていた。名の通り星のような形状のそれは決してロマンティックな用途で使われることはなく、こうして敵を倒すことのみに使われることがティファとしては悲しい所なのだが。

「御怪我はありませんか？」

相手を殴るだけ殴ってすっきりしたのか、マイの表情は幾分すっきりしているように見えた。
理知的な表情がふんわりと笑みを形作るのを見て、ティファは大仰に溜息をついて首を振る。
どうやら主が貶されたことに相当御立腹だったようだ。
「……大丈夫よ」
「アレイズ様は」
「そういうことは男が訊くものだ」
「ふふ、それもそうですね。とりあえずは御安心ください。彼らの利き腕は潰しましたので」
にこやかに言うべきことではない気がするんだが、と思ったのはティファだけではないだろう、きっと。
「モーニングスターを振り回すメイドなんて俺は聞いたことがないんだが」
「私だって知らないわよ」
「それも御安心ください。モーニングスターではありませんけれど、もう一人武器を持つメイドなら居りますので」
「アレイズが言いたいのはそういう事じゃないと思うんだけど……」
思った通りどこか遠い目をして揶揄するような事を言うアレイズに、マイがどこか見当違いの返答をする。くすくすと笑うその表情は淑女のそれだったが、手にモーニングスターがあるせいでどこか違和感を感じざるを得ない。
ティファは今にも悲鳴を上げそうな男に向けた剣を溜息と共に引き、顎をしゃくって下がるように告げる。このまま傍にいたら彼も肩を潰されかねない。
身体的に色々と申し訳ないことをしてしまった罪悪感があるだけに剣を突きつけておく気にはなれなかったのだ。
細い悲鳴を上げた男がリーダー格の男の方へと逃げていく。
すると血生臭い洞穴内で和やかに話していたティファ達に痺れを切らしたらしいリーダー格の男が声を張り上げるのが聞こえた。

「てめぇら！　俺を無視するな！」
そういえばいたような気がする、とその場にいた三人が三人とも思ったことだろう。
一種の心の叫びにも聞こえるその言葉にティファは一瞬ぽかんとした表情を浮かべてから、すぐに不敵な笑みを形作った。
「あら、悪党なんて無視されても文句言えないわよ」
「何だと！」
「そんなことより、さっさと神器を返しなさい」
白く細い手がすっと伸びる。
二人の男は目を見開いてそれを見ながら獰猛な笑みを浮かべながら、そのままじりじりと後退り銀の聖杯を手に取った。汚い手で神器に触れるなど、と考えたのかは知らないがアレイズが眉間に皺を寄せるのが見える。
「そうそう、嬢ちゃんはこの聖杯をご所望だったんだよなぁ……」
そこに一片の勝機を見出したのか、くつくつと笑うリーダー格の男にティファが怪訝そうな顔をするとマイがじゃら、とモーニングスターを構えた。恐らく彼女は男の意図が理解できたのだろう。しかし臨戦態勢を取る彼女を制するように男が再度声を張り上げた。
がなり声が発するのは、やはり典型的な悪者のそれだ。
「おっと、俺に攻撃したら神器にも当たるぜぇ？　良いのかい？」
「……っ！」
しかしいくら典型的な言葉であれど、手が出しづらくなることは事実だ。マイが悔しげに唇を噛み締めるのを見ながら、ティファは怒りを孕んだ視線を男へと向けた。
確かに、剣ではなく鈍器なのだからもし神器に当たろうものならいくら銀製でも耐えられるか分からない。というか耐えられないだろう。
ティファが伸ばしていた手をゆっくりと横に薙ぎマイを制すると、彼女は無言で武器を下ろした。硬質な鎖の音が耳朶を打つ。その横顔はどこまでも悔しそうだった。

男はにやついた笑いを崩すことなく後退り、ティファ達の眼前を通り過ぎて行く。

恐らくこのまま入り口へと向かうつもりなのだろう。

「そうだ、そのまま動くな。俺が逃げるまでな」

「くっ……」

マイが呻き声を漏らすのが聞こえる。だが静観しているアレイズだけはどこか面倒そうな表情を浮かべているのみだ。

何か策でもあるのだろうか。

そう考えたものの、彼に任せるとまた血が流れそうだと考えてティファはできるだけ彼に頼らない方法を模索した。すると優越感にでも浸っているのか、二人の男が獰猛な笑みを浮かべたまま続ける。

「お前達を寄越したのはどうせ村の連中だろう。見せしめに何人か殺っとかねえとなぁ」

「!?」

血が、沸騰するのではないかと思った。

暗がりと濃い血臭と、死。

砂嵐と共に脳裏に浮かぶ強い死のイメージが、ティファの思考を緩慢にだが確実に支配していく。

――駄目だ。

「……さない」

知らず、ティファの口から呟きが漏れていた。

「ティファ？」

「ティファ様？」

小さなそれはアレイズとマイにしか聞こえなかったらしく、二人が心配そうに顔を寄せるのが見えた。だがそれさえも気にならない様子でティファが繰り返した。うわ言のような言葉は今度ははっきりとした響きを持って発せられた。その間にも男達は入り口へと向かっている。

「逃がさないわ」

鋭く端的な、酷く冷たい声が響いた刹那。

「何だこれは！？」
「っ！　ティファ？」
呪文の詠唱も何もなく、唐突に入り口への道が塞がれた。光のベールが結界となり作用したのだ。
どん、と男達が光を叩きつけるも、それが破られることはない。
風でふわりと舞うことがあっても、力によって揺れることなどないそれに男達が半狂乱になる。恐らく魔法というものを目にすると自体が今までの人生でなかったのだろう。だが、今更のことだ。
ティファは凍りついた思考の中で驚愕に目を見開くアレイズとマイと無視して心の中で呪文を唱える。
それはかつて教皇から一度だけ教わった、決して使うことはできないだろうと言われていたものだった。
体が浮遊感に包まれ、刹那の暗転に襲われる。
すると先程まで隣にいたはずのアレイズとマイが離れた位置に立っているのが見えた。代わりに男達が二人、眼前にいる。
細剣を横に薙ぐ。ひゅんと風を斬ったそれは重量にぶれることなく真っ直ぐと男の喉元へと進んだ。
白刃がぴたりと動きを止める。少しでも力を入れようものならすぐにでも頸動脈をかき斬れる、ぎりぎりの位置で。
「生殺与奪権は貴方にあるわけじゃないわ」
私にあるの、そう告げたティファは男をいつでも殺せるという体勢を取り、凍えるような笑みを浮かべた。
事の展開に付いていけなかった男は、数瞬何が起こったのかを理解しようとするように瞼を閉じたり開いたりしていたが、やがて喉元に当てられた冷たさに気付いたらしく慌てたようにティファを見た。小さく笑んでやると、男の顔が歪む。傍に立つ部下はリーダーが襲われているせいか、一切の手が出せずにいるようだった――形勢逆転だ。
「神器を、返しなさい」
怒りも冷たさもない声が、ゆっくりと噛み砕くように言葉を区切

って発せられる。
　微笑さえ浮かんでいるその姿はマイやアレイズに比べたら随分と穏やかな取引方法だったと思うのだが、男は信じられない物を見るような目でティファを見ていた。そのことに若干傷ついていると、幾分思考が動き始めてきたことを実感できた。砂嵐も今は遠い。
　男は何度か口を開閉しながら答えを探しているようだった。恐らくそこからは怨嗟の言葉や呻きが漏れるはずだったのだろうが、その前にアレイズがティファの言葉を引き継いだ。
「素直に返した方が懸命というものだぞ？　このままではそいつに殺されるのがオチだからな」
「ぐ……っ」
　濃い血臭が現実味を与えたのだろう。
　呻き声を上げた男はとうとう観念したようで、足音もなく近付いてきたアレイズへと神器を手渡す。ティファが受け取ってもよかったのだが、そうするとまた逃げられてしまう可能性が出てくるからだ。
　神器がアレイズに手へと渡る。それを見届けてからティファは柔らかく笑んだ。
「ありがとう」
　かつて聖女だった頃のように。
　しかし阿鼻叫喚の中で笑みを浮かべるということは更に相手に恐怖心を与えてしまうらしく、男は顔を青くして彼女を見るのみだった。別に本当に殺しはしないのに大袈裟ね、と胸中で呟くもそれを口にすることはしない。
「さぁ、急ぎましょう。早く戻らないと、夜になってしまうわ」
「あぁ」
　男から剣を離し、鞘へと収めてから踵を返す。腕を一振りするだけで解けた結界を超えて男達に背を向けるティファには彼らを捕まえようという考えはなかった。放っておいても、彼らはしばらく寝こむしかないのだから。

しかし、一つだけ懸念が残っていたので彼女は振り返りにこやかに笑んで、指先を頬に当てながら実に可愛らしく言い放った。願わくばこれが男達の脳裏に焼き付いて離れなくなるようにと、精一杯明るい声を出す。

「忘れてたわ」

「ひ……っ！」

「もし村の人達に手を出すことがあったら、それは貴方が死ぬ日だってことを忘れないでね」

高い悲鳴を上げる男が何度も頷く。ティファはそれを満足げに見てから今度こそ踵を返し、アレイズに呼び止められた。

「ティファ」

「？　どうしたの？」

振り返ると、アレイズは先程自身が刺した男を指差した。

「手当てがある。先に戻っていてくれ」

「そのぐらい待つけど」

「いや、少し時間がかかるからな。先に神器を持って帰っていてくれ。夜になったら困る」

少し早口のそれにティファは頭の上に疑問符を浮かべて首を傾げたが、すぐに手を伸ばす。神器を受け取るためだ。

「……分かったわ。それじゃ、また後で」

常人ならともかく、神ならばこの場に置き去りにしても一人でどうにかできるだろう。

何か裏がありそうなことは気になったが隠されている以上追求することもできない。そう考え、ティファは空いた方の手を振ってあっさりと踵を返した。マイがそれに続く。その頃には、自分が先程感じた冷えた思考のことはすっかり忘れてしまっていた。

◇　◇　◇

ティファ達の背が見えなくなるのを見送ってから、アレイズが男

へと声を掛ける。
「おい」
「……あん？」
先程までの悲鳴は何処へ行ったのか、柄の悪い返事をした男の態度にそう考えながらアレイズは問いを続けた。
どんな態度であろうと、答えが得られれば問題などない。
「お前達は誰に頼まれて神器を盗んだんだ」
「誰にも頼まれてねぇよ」
問いに対し男が何食わぬ顔で答え、そっぽを向く。その胸元をぐっと掴んで手繰り寄せながら、アレイズは常よりも遥かに低い声を上げた。
「嘘をつくな」
そうして松明の明かりの中で光るメダルを付きつけ、男によく見えるように眼前まで持っていく。
男はアレイズよりも背が低かったこともあり、そうすることは容易かった。
「先程俺が刺した男が落としたものだ。これが何だか分かるか」
「知らねえよ」
「なら教えてやる。これは、とある場所住む者にしか与えられない特別なメダルだ」
昔と制度が変わっていなければの話だが、そう胸中で付け足すと男が息を呑む音が聞こえる。どうやら鎌掛けは成功したらしい。容易いものだな。
顔をひきつらせた男が、肩口を押さえて倒れている男のうちの一人を見やる。その男は他の男達に比べると、幾らか育ちの良さそうな顔をしていた。あくまで、彼らと比べるとなのだが。
――それにしても、これは予想外だったな。
アレイズはメダルを見て今回の事件の黒幕を大体予想することができたが、それは予想通りとも予想外とも言えるものだった。だからこそ、彼は問うた。

「言え。大方の予想はついているが確信が欲しい」
仮定だけでは何も語れない。
そう考えたアレイズが鋭い問いを発すると、先程と同様に観念した様子の男が溜息と共に自棄糞気味の声を上げた。
「俺達を雇ったのはグラドだよ！　さぁ、言ったんだからその手を離しやがれ！」
「あぁ、すまなかったな」
やはり、グラドだったか。
男の答えに、予想していたこととはいえ瞠目したアレイズはすぐに男の胸元から手を離した。答えを聞いた以上、彼に用はなかった。
「手間をかけさせて悪かったな」
「まったくだよ」
一応の謝罪に対し男がぼやくのを聞きながら、アレイズは先ほど自分が傷つけた男へと手を向けた。じわりと手の平を翡翠の光が覆い男の肩を包む。すると男の呻き声が止み、傷口がみるみるうちに塞がっていった。
呆気に取られる男達を余所に手当てを終えたアレイズは首筋についた髪を払いのけ、村へと戻るため空間転移の詠唱を始めた。
「なぁ」
その背に、リーダー格の男が問い掛ける。
「あの娘は人間なのか？」
「あの娘、とはどっちだ」
「空色の髪の方だよ。メイドも尋常じゃねえが、あの娘が一番おかしいだろ」
吐き捨てるような声には負け惜しみも含まれていただろうが、本心でもあったのだろう。その証拠に、アレイズもティファに対し驚きを禁じ得なかったのだから。
ティファは呪文の詠唱なし結界を張り、なおかつ空間転移までやってのけた。人間でも極一部しか使うことができない、高位の魔法を。しかもその直後に男に剣を向けた所からして、彼女は冷静かつ

自然にそれを行ったのだ。それは神であるアレイズには当たり前のことだったが、人間となると話は別だった。人間は呪文の詠唱なしに魔法を使うことができないのだから。

例えばそれはとても短なものでもいい。風よ、炎よと言うだけでも成立する。しかしそれすら彼女はしなかった。アレイズですら人間だった頃の名残から呪文の詠唱は欠かさないというのに。

だが、と彼は胸中で呟く。

その間にも空間転移の呪文は終わり、あとは念じるだけという所でアレイズは黒の双眸を男へと向けて苦笑を漏らした。

「あいつは紛う方無き人間だ。少なくとも俺よりはな」

神が人間らしく扱われ、人間が神らしく扱われるとは何とも皮肉な話だ。

そう思いながら答えると同時に浮遊感が彼を襲う。

空間転移する時独特の感覚に目を閉じていると、数瞬後には村の入口へと辿り着いていた。

唐突に変わった視界の中でアレイズは先程までの思考を捨て去り、思案するように顎に手を当てる。

――このことを、あいつに言うべきなんだろうか？

無論、あいつというのはティファに他ならない。

そして話すべきか憂慮しているのは、グラドの人間が神器を襲ったというその事実。

これから自分達はグラドに向かうのだから話しておいて警戒してもらうことに越したことはないとアレイズは考えるのだが、同時にそれは面倒事を背負うことになるという確信にも繋がるのだ。下手なことは言えない、だからこそ彼は悩んでいた。

警戒はしてもらいたいが、犯人探しは御免だ。

「……マイとメイにでも相談するか」

とはいえ自分一人で決断を下すと後々ティファの護衛役でもある――護衛できているかは別として――双子のメイドに罵詈雑言を浴びせられそうなのでとりあえずは彼女達に先に話しておこうと結論

づけて歩き出そうとし、そこで目を白黒させている男二人と視線がかち合った。見れば、先程まで喧嘩をしていた恰幅のいい中年男と細長い青年がお互い顔を青白くしてアレイズを指差している。

それはそうだろう。いきなり目の前に人が現れたら、驚くのも無理はない。

空間転移ももう少し場所を考えるべきだったのに、間が抜けたことをしてしまった。

そんな風に考えたアレイズは、ふと自嘲めいた笑いを漏らす。自分は既に人間ではないのに、と。

「あ、あの」

「あの二人の女の子達は？」

すると驚きから立ち直った様子の男達がひとまずは問題を横に置き、アレイズへそう問い掛ける。

気の強そうな空色の髪をした娘と深青のメイドの姿が見えないことが気になったのだろう。

そんな彼らの心中に気付いたアレイズは二人を安心させるように口の端を吊り上げ、背後へと視線を向ける。

これから帰ってくるであろう二人の少女を見るように。

空を見上げる。まだ夜には遠いその空の色はティファの髪よりも淡い色をしていた。

「大丈夫だ、今神器を持って帰ってきている。……これで祭りが出来るな」

そうして仰向いたアレイズが柔らかい声で返した瞬間、二人の口から歓声が湧いた。

第十四話

アレイズが村に戻って一刻経った頃に現れたティファとマイを、村人は総出で歓迎した。

皆事前にアレイズから事情を聞かされていたこともあり、彼女達の無事を願っていたのだ。だから大丈夫だと話したというのに、とアレイズは喜ぶ村人を見て胸中で溜息を漏らしたが、契約者が無事であったことへの喜びを彼自身感じてもいた。

恐らく何があっても大丈夫だとは彼は思っていたのだが、万が一ということもある。

事情が事情とはいえ契約者と離れたことに関して少し反省の念を感じていると、視界に村人達がティファとマイの周りを取り囲んでいるのが見えた。

「ありがとうございます、ありがとうございます！」

「あなた達はこの村の恩人です！」

手を取り何度も礼を言う者、英雄のように凝視する子供達、中には涙を流している者までいることにアレイズは驚きを禁じ得なかった。

――どうやら、本当に星夜祭はこの村にとって大事な儀式らしいな。

農作業をしていた者もいたのだろう。しかし彼らは各々がその手を止めてティファとマイに礼を述べていた。アレイズはその輪から幾分離れた所で彼女達を見ていたが、やがてその視界に黄昏が見えることに気が付いた。夜が近いのだ。

黒瞳を空へと向ける。すると一番星が煌めいた。

ティファも時刻に気付いたのか、茜色に染まった頬を緩めて聖杯を掲げる。

黄昏の光を浴びた銀は常よりも遥かに熱を帯びた色を発し、村人達の視線を奪う。

「これで、祭りが出来るわ。さぁ、皆で準備に取り掛かりましょう。もう夜まで時間がないわ！」

神を示す紋章が角度によって輪郭を表す。祭りの時以外見ることがないであろう神器にほぅと溜息のような息を漏らした村人達はしかし、ティファの声を聞いてはっと我に返ったように目を見開いた。夜まであと一刻もない。その間に星夜祭の準備を整えねばならないのだから。

聖杯を村長らしき老人に託し、ティファも活気付く村人に混ざろうとくるりと背を向ける。

しかしそこでふと何かに気付いたのか、彼女はアレイズの方を見て首を傾げた。

「どうした？」

「マイは？」

声を掛けると彼女は怪訝そうな声を上げてゆっくりと村を見渡す。木製の家々は燃えるように紅に染まり、その身を闇で沈下されることを待っている。しかしその紅に染まっているはずのマイの姿は見当たらない。一体いつの間に姿を消したんだろうかとアレイズもティファと共に彼女を探したが、結局は見当たらなかった。

「ま、いっか」

自分のメイドが遠くへ行くとは考えていないせいだろう。

ティファはうんっと伸びを一つして村の奥へと進んで行く。

スカイブルーと黄昏が混ざり合い、どこか紫に似た色合いを帯びる彼女はそのまま雑踏の中へと消えて行った。

「やれやれ……」

ティファのあまりと言えばあまりの適当さ加減に呆れて首を振ったアレイズは彼女を追うために歩を進める。彼女に振り回されて多少の疲労感を感じてはいたが、それも微々たるものだ。少し歩けば回復するだろう、星夜祭は執り行われ今の所問題などないのだから。そう考えてややゆったりとした動きで歩き、ゆらりと影を揺らす。

しかしアレイズの間違いには、一つだけ間違いがあった。

いくつかの木造家屋の前を通り過ぎた頃聞こえた、奇妙な音がそれを示していた。

「？」

耳朶を打つ硬質な音の発信源を見やると、そこには宿屋らしき建物が鎮座していた。

マイと共に行動していたせいで宿屋の位置など知らなかったが、民家にしては大きいことからまず間違いはないだろう。

「そういえばメイがここにいたな」

ぽつりと呟き、そこでようやく双子の妹がティファによって拘束されていたことを思い出す。

幾ら何でもいい加減助けなければならないだろう、とブーツの踵を鳴らして数段階段を上がり宿屋のドアを開く。

鈍いドアベルが来客を告げるが、そこに人の気配はない。どうやら宿屋の主も星夜祭の準備に参加しているようだったが、アレイズはそれに気を悪くすることはなかった。メイド姿の少女がベッドに拘束されている姿など、見られないに越したことはない。

硬質な音が、再度耳朶を打つ。

「何だ？」

先程よりも強くなった音は宿屋の二階部分から聞こえるらしく、アレイズは怪訝そうな顔をしながらも階段を静かに上がっていく。争うような声が聞こえないことから剣呑な展開にはなっていないのだろうが、用心するに越したことはない。

足元までを覆う外套の裾をひっつかみ、木に擦れ合うことのないよう慎重に動く。

もう一度、冷たい音。

しかし今度は近づいたせいか音の正体をはっきりと聞き取ることができ、アレイズは途端に渋面になって足を止める。

聞こえたのはじゃらりという、つい先程洞穴内で聞いたばかりの音だった。

――逃げたら駄目だろうか。

一瞬そんな考えが脳裏を過ぎる。しかしこのまま引き下がって見つかりでもしたらそれこそ恐ろしいことになりそうだと思い、結局アレイズは溜息を一つつきながら今度は足音を鳴らして進む。外套が木に擦れ、衣擦れの音を発した。

民家に比べれば大きいとは言えど都会のそれとは比べる由もない宿屋には二つしか部屋がなかった。その中の一つに二人分の人の気配を察したアレイズは鍵のかかっていないドアノブに手を掛け、ゆっくりと回す。

歩く時よりも更に慎重さを増して開け放った先に見えたのは、簡素なベッドが二つ在るのみの殺風景な作りの部屋で揺れる、予想通りの二つの影。

「うーん……」

一人は常ならば結んでいるはずの髪を解き、亜麻色のロングヘアーをベッドから垂らしつつ穏やかな寝息を立てていた。

あまつさえ呑気な声で寝返りまで打っている。誰だ、拘束されていると言ったのは。

嘆息し主によって拘束されていたはずのメイドを遠目に見下ろす。真紅のメイド服が穏やかに上下し安眠を伝える様を見つめながら窓の外を見る。そこから空色の髪を見ることはできなかったが、もしいたら一言文句を言ってやりたい所だった。

陽の光が似合う亜麻色は今や窓から差し込む西日に染まり、金に近い色を放っている。

それをアレイズの闇色の双眸が捉えていると、もう一つの影がすっと隣に並んだ。深青のメイドだ。

「マイ？」

彼女はベッドで眠りこける少女と瓜二つの顔をしながらも、幸福そうな顔などしてはいなかった。

いや、笑んではいるのだ。ただその笑みの種類が格別に違う。

硬すぎる空気を纏うアレイズが声を掛けると、マイはそっと口の端を緩めながら彼に微笑みかける。

「少々みっともない所をお見せするかも知れませんが、余り気にならないでくださいね」
「あ？　あぁ」
完璧とも言える形に吊り上がったその唇に戦慄しながらもアレイズが頷くと、彼女はそっと腕を伸ばしベッドの上の少女の腕を掴んで揺らす。
「メイ」
「んー……」
「起きなさい、メイ」
しかしいくら声を掛けても揺らしても、少女が目覚めることはない。命知らずなことに。
優しく、慈母のような声で揺らされているメイはそれでは覚醒には足りないとばかりに唸りながらごろんと寝返りを打った。
ミニスカートを履いているせいか、ほっそりとした太股が顕になる。
だがそれにアレイズが視線を取られることはなかった。
そんなことよりも恐ろしいものが隣に存在していたせいだ。
――殺気が。
アレイズが心中で呟き、恐る恐る横目にマイを見やる。すると彼女はにこにこと笑んだまま腰元からじゃらりと先刻使ったモーニングスターの柄を握りしめた。微かな血臭がそこから漂うのはアレイズの気のせいではないだろう。
そうしてすうっと息を吸い込んだマイはベッドで眠る同じ顔の少女に向けて、穏やかに最終宣告をした。
「早く起きないと殺すわよ」
姉は強し、という言葉が思わず脳裏を過ぎる。なぜならその一言でメイが弾かれたように起き上がったからだ。それこそバネ仕掛けの玩具の様に。
「はい！　おはようございます！」
乱れた髪の毛をそのままにしゃきっとした声を上げる。

高らかなその声の持ち主はただ一身にマイのみを見ており、太股が顕になっていることもアレイズが目の前にいることも気付いていない。まぁ、こんな状況で周りを見ろだなんて自分は言えないが。

ベッドから下りぴしりと背筋を伸ばしたメイを見てマイが穏やかに笑みを浮かべる。それはとても満足気なものだったが、亜麻色の瞳の奥だけが笑っていないことをこの場の誰もが理解していた。

「メイ」

「は、はいっ！」

静かな声に、怯えた声が混ざる。

あまりにもアンバランスな二つの声は傍から見ていると滑稽だが、同時にはらはらする。

その感情の半分はとばっちりが来ないかどうかという不安から来るものなのだが。

よほど緊張しているんだなと感じさせられる声が室内を見たし、びぃんと木材を反響して余韻を残す。

それがノイズとなり空気に同化してからマイが口を開いた。

「あなたは、ティファ様を見張っていたんじゃないのかしら？」

「あ……う、うん」

表面的には問い掛けるような声。それにどもるようにメイが答えると、更にマイの問いが続いた。

慈母のように優しい笑顔で、人を惨殺できるようなモーニングスターを突きつけながら彼女は凛とした声を上げる。それは先程山中で妹の身を案じていた姉の姿とはとても思えなかった。

「じゃあ、どうしてティファ様は私達のところにいらっしゃったのかしら？　ついでに、あんたはどうして寝てたの？」

びくりと体を震わせる。メイと、そしてアレイズが。

普段の丁寧な口調ではなく、これが地なんじゃないかと思わされる言葉に驚いたせいだ。……いや、口調だけではない。凛とした清涼な声に見合わない凄みに圧倒されたせいでもある。

既に神の身となったアレイズとて、元々は人間であり神となって

からの日は浅い。
　貫禄も落ち着きもあったものではない彼にはマイの声はあまりに怖すぎたのだ。第一このような人間達と接する機会などアレイズにはなかったのだから。
　やっぱりここに来たのは間違いだったのか？　そんなことすら考えてしまうほどの声に戦慄し、ひやりと背中を冷や汗が伝うのを感じていると沈黙を何だと受け取ったのかマイがモーニングスターを構え直す。鉄の棘が付いた鉄球が揺れ、まざまざと血を見せつける。どうでもいい話だが、マイ自身は血臭がこんなに漂っていても気にならないのだろうか。
　愚問だとは思いつつも疑問を抱いていると、ようやくアレイズの姿を捉えたらしいメイが腕を突き出し両手をぶんぶんと横に振った。
「ね、姉さんっ！　アレイズさんがいる前で流血は駄目よ、ね！？　アレイズさん！」
　同時に首まで振りながらメイはアーモンド型の瞳で必死にアレイズに向けて問い掛ける。誰だって命は惜しいのだ。
　懇願するようなメイの声にマイを見やると、彼女は先程の自分の口調にようやっと気付いたらしくこほんと咳払いを一つしてアレイズに小さく頭を下げる。洞穴内での事もあり、気恥しさを感じているのだろう。
　殺気を感じさせない、というよりも霧散させた理知的な瞳が黒瞳へと向けられる。
　ずっとこの表情ならば問題などないんだが、とアレイズが感じていると彼女が窓の外へと視線を向けた。
「アレイズ様、申し訳ありませんがティファ様の所に向かって頂いてもよろしいでしょうか？」
「？」
　モーニングスターの柄を下ろし、一旦腰に戻してからマイが深々と一礼する。
　その姿に何を言われるかと思って身構えていたアレイズが疑問符

を浮かべたような顔を浮かべた。
　ティファの元へ行けと言われても、一体何を……今は祭りの準備ぐらいしかすることはないはずだが。
「今、ティファ様は御一人です。いくら指輪があるといっても何があるか分からない現状では少し危険です。……私はこの通りこの子にまだ話がありますし、申し訳ありませんが御願いできませんか？」
　恐らくマイが言うほどに危険なことなどないだろうし、これは口実の一つだろう。
　その証拠に視線をずらしてメイを見れば、彼女はマイとは打って変わって泣き出しそうな顔をしながら行かないでと目で訴えているのだから。
　視線を戻せば怖いほどの笑みを浮かべた少女、ずらせば泣き出しそうな少女。
　さて、一体どうしたものか。
　アレイズはゆっくりと瞼を閉じ、人間男性にしては若干長い睫毛を微かに揺らす。
「御願いします」
　再度マイの声が耳朶を打つ。逆らうことなど許さないとでも言いたげな声にアレイズは良心の呵責を感じながらも覚悟を決める。
　閉じた時同様緩慢に瞼を開き、きゅっと床を鳴らす。
「……分かった。ティファのことは俺が見ておく」
「ありがとうございます」
「ちょ、アレイズさん！？」
「あらあら、あなたはこっちよ、メイ」
　そうして踵を返すとマイが優雅に一礼する。
　ふわりと広がる深青のロングドレスと白のエプロンは、メイド服とはいえ淑女の雰囲気を漂わせていた。
　……無論、本物の淑女は腰にモーニングスターなど装備してはいないのだが。
　責めるようなメイの声に心の中で謝罪をしつつ後ろ手にドアを閉

める。すると困ったようなマイの声と同時にメイの悲鳴が上がった気がした。

それが何となく断末魔の悲鳴に聞こえなかったわけでもないし、加えて何となくガラスが砕け散る音が聞こえたような気がしないでもないが、アレイズはその全てを気のせいだと結論づけて宿屋を出ることにした。

悪いことは忘れるに限る。

◇　◇　◇

そうして宿屋を後にしたアレイズが目にしたのは、村の最奥近くにある森の入口で腕組みをしているティファの姿だった。

アレイズの足音が聞こえないわけではないだろうに、彼女はそんなものは聞こえないと言わんばかりに木を見上げて何やら真剣に考え込んでいる。

「何をしている？」

「アレイ……じゃなくて、ジュード。どうしたの？　どこかに行ってたんじゃないの？」

遠くからでも悩んでいますと伝えられそうな雰囲気を纏ったティファに声を掛けると、彼女は周囲に誰もいないことを確認してからアレイズの名を言い返えて振り返る。

真っ青な髪が大きく揺れるのを見ながら、アレイズは気を遣われているなと苦笑を漏らした。

確かに真名を呼んでくれと頼んだのは自分だが、彼女がそこまで気にしてくれているとは思わなかったのだ。

そして一番苦味を感じるのは、その事実を自分が迷惑に思っていないことだった。元来人に気を遣われるのは嫌いな性分なんだが、ティファ相手だとどうにも勢いに負けてしまう。

そう考え苦笑を隠すようにぎこちなく笑みを浮かべて答えた。

さすがに苦笑をそのまま顔に表すと彼女にまた心配されそうだっ

たからだ。
「宿屋に行っていたんだが、マイにお前を探すよう頼まれたからな。それにあの場にいたら殺されかねない」
「マイが？」
「あぁ、それが――」
「いえ、いいわ。大体予想が付いたから。それにしてもメイには悪いことしちゃったわね」
申し訳なさの籠った声にぴくりと眉が動く。
悪いことをした？　それは拘束をしたことか？
いや、しかしそれにしてはメイに拘束をされた形跡などなかったしあんなに呑気に寝ていたではないか。
疑問に思っていたことにちくりと棘を刺される。それは痒みという痛みになってアレイズの疑念を刺激した。
「メイに悪いことをしたとはどういうことだ？　さっきから不思議に思っていたんだが、お前まさか嘘をついたんじゃないだろうな」
びくりとティファの肩が震える。本人としては揺らしていないつもりなのだろうが、長い髪がしっかりと体の動きを捉えていた。
ぱっと顔を上げた彼女が引きつったような声を上げる。
恐らくこれも本人は気付いていないのだろうが、その顔が怪しさ満点だということにいい加減気付いてもらいたい。
「え？　あはは、本当に決まってるじゃないの。ジュードってば疑り深いのね」
「誤魔化すな」
呆れ混じりの声で言い返すと、ティファはあははと掠れた声を漏らしながら首を振る。
一応自分が分かりやすい態度を取っているという自覚はあるようだ。
アレイズがじっとりと半眼で睨んでいるとティファはこの暑くもない中汗でも流しそうな勢いで顔をしかめ、ふいっと顔を傍にある樹へと向けた。最近あまり雨が降らなかったせいか、その樹は大分

弱っているように見える。
　ティファはその樹をじっと見つめ腕組みし直してからアレイズをちらりと見る。
「まぁ、それは後で話すわ。でもその前にちょっと考えてもらいたいことがあるんだけど」
「？　何だ」
「これ、この樹よ」
　黄昏が次第に群青に変わっていく。
　その光に身を浸す樹を指差すティファがうーんと唸った。
「この樹ね、神器を使った儀式で一番大事な物らしいんだけど、普通に切ったら傷つけてしまうかなって思って悩んでたの」
「魔法を使えばいいだろう」
「調整が上手く行かなかったら困るじゃない。破壊したら今度こそ星夜祭は中止よ」
　契約者の顔を立てるために否定しようにもできないなこれは。
　ティファならばその気になればどうとでもできそうだったが、一度の失敗も許されないことは確かだ。
　樹には命が宿り、それを削ることは樹を殺すことになるのだから。
「今まではどうしていたんだ」
　しかしそれなら今まではどうやってこの樹を切っていたんだ。
　そう思いアレイズが尋ねるとティファは肩を竦めて首を振った。
　群青を切り裂く蒼が揺れる。
「樹がこんなに弱ってることがなかったみたい。人間にも分かるぐらいだもの、相当なのね」
「まぁ、確かにな」
　眼前まで進み樹に触れる。かさかさと乾燥した樹皮はやはり痛んでおり、葉にも艶がない。
　寿命もあるのかもしれないが、それ以上に天候によるものもあるのだろう。あとは――。
「精霊が、少ないからか」

「精霊？」
「あぁ、自然がある場所なら大体気配を感じ取れるはずなんだが」
森が大地が傍にある緑豊かな村。しかしそこから感じ取れる精霊の気配は酷く希薄だった。外套から手を出し、ゆっくりと胸元まで上げつつ手の平に意識を集中させる。すると空気が少し熱を増したようだったがそれでも予想よりは遥かに低い熱だった。
神の命によってもこれだけしかいないのか。
これでは樹が弱っているせいで精霊が少ないのか、精霊が少ないせいで樹が弱っているのか判断が付けられないじゃないか。
アレイズはふうと溜息を漏らし樹を見上げる。
そうしている間にも夜が近付き、遠く耳朶を打つ喧騒に焦燥が混ざりつつあった。これではまた喧嘩が起きかねない。
「仕方ないな」
「え？」
「少し下がっていろ」
「う、うん」
そうなるとまたこのじゃじゃ馬は首を突っ込むんだろう。双子のメイドや神の意見さえ聞かず。
こんなことならもう少し上下関係のある付き合い方を望めばよかったんだろうかと後悔混じりに考えながらも、しかしアレイズはすぐに諦めたように首を振って腕を突き出す。指輪にはまる翡翠が柔らかな光を放ち、じわりじわりと辺りを満たしていく。
精霊は確かに樹を育てるには満たない。雨も降らない。
ならば対処療法として魔力を糧にするしかなかった。幸いなことにアレイズは魔力だけは豊富に持っていたのだから。
「これ……」
「黙ってろ」
微かな驚きの声が耳朶を打つ。
しかしアレイズはそれを黙らせて意識を集中させることに専念した。

指輪から漏れ出すように辺りを満たす光に樹がざわりと声を上げる。命の糧が与えられることに歓喜を示すように。

魔力が順調に与えられているのだ。

樹の命に直接糧を注ぎ込んでいく。それは少し間違えば樹を殺して仕舞いかねない危険な作業だったが、アレイズはぴんと張り詰めた意識を保ったまま寸分の狂いもなく命を与え続けた。

アレイズがそうして意識を集中させる間、ティファの目は見開きダークブルーの双眸に樹が息を吹き返す様を目一杯に映す。

「樹が……」

呆気に取られたその表情は酷くあどけなく、アレイズは思わず吹き出しそうになったが慌てて意識を集中し直す。

そうして掛けた時間は数分にも満たなかった。

「とりあえずはこれで問題ないだろう」

呟いたアレイズの声に茫洋とした視線を向けたティファはしかしすぐにゆっくりと意識を取り戻すように瞳に光を宿し、一点のみを見つめる。

樹がその身を星夜祭に与えても問題がないほどに回復していることを見て取ったのだ。

驚愕と興奮でティファの頬が染まる。

「これなら大丈夫！　私、村の人達を呼んでくる！」

「あぁ」

放っておいたら飛び跳ねそうなティファの様子に苦笑を漏らすと、彼女は即座に踵を返し喧騒の中へと駆けて行く。

アレイズはその背を見送っていたが、数歩駆けた所でぴたりと止まった姿に片眉を上げる。

他に何か問題でもあっただろうか。

「ジュード！」

「どうした」

大きく響く高い声に対照的な低さで答えると、ティファがくるりと振り向く。

舞った髪に顔の半分を隠すようにして浮かべた表情は満面の笑みだった。

「ありがとう！　貴方のおかげで聖夜祭が決行出来るわ！」

心底嬉しそうなその顔はやはり紅潮しており、アレイズは苦笑を深めながら頷く。

そうして再び駆けたティファの背を追うように足を踏み出しながら、自分の命でもある魔力を与えた疲労感に抜けた体を叱咤する。

やはり少し疲れたな。

アレイズは胸中でそう呟き、だがと続けて口の端を吊り上げた。

それはどこかはにかむような、契約者のティファでさえ見ることのない笑みだった。照れているのだと自覚出来る笑みを抑えるべきか否かと考えつつ、彼は呟く。

「悪くない」

心身共に疲れ果て今すぐに眠りたい気分だったが、こうして誰かに心から感謝されるとその疲れも和らいでしまう。

結局の所自分もお人好しなのだ。自分が神だという自覚もいまいち希薄だし。

そう結論付けたアレイズは苦笑しながら喧騒の中へと歩いていく。

闇に溶けるその姿は村に戻って来た時よりも足取り軽く、疲労感も消えているように見えた。

◇　◇　◇

それからとっぷりと夜が暮れた頃、村長の声が村中に響き渡った。

「では、これより星夜祭を始めたいと思います！」

わぁっと歓声が上がる。そこから先は無礼講のようで、彼らは酒を酌み交わし談話したりと思い思いに過ごしていた。

神器を使う儀式は祭りの終盤にあるらしく、それまではこうして自由に過ごしてもいいらしい。

これも村人が楽しみにしていた一時なのだろうなと考えていると、

広場の中央で燃え上がる炎が高く伸びた。炎を取り囲むように輪になって座る彼らの中に真紅と深青は見えない。恐らくまだ宿屋にいるのだろうが……メイは無事なんだろうか。

アレイズは村人に勧められるまま酒をちびちびと呑みながら置いてきたメイドの片割れを思い出す。怪我などしていなければいいんだが、そう思いながらも無理そうだなと結論付ける辺り薄情とも言えるが。

ゆっくりと輪を見渡す。するとそこに空色の髪の少女を見つけたが、彼女はこの祭りの主賓にもなっているらしく村人からあれもこれもと食べ物を勧められているようだった。元々農業しか栄えていない村だから肉や魚と言ったものはないが、その分女性が好みそうな果物などが豊富なのだろう。その証拠にアレイズが呑んでいる酒も甘酸っぱい。

喧嘩による剣呑なものではなく、穏やかな喧騒が村を満たす。ここでは大人も子供も等しく祭りを楽しむ一員となるのだ。

それが聖夜祭の準備段階で起きていた喧騒よりも遥かに声量が強くなっている理由だった。

アレイズはあまり人と接するのが得意ではない性分だったので大分距離を置いてはいるが、それでも村人が寄ってきては酒を注いで回る。さすがに強すぎる酒を勧められることはなかったが、何杯も呑んでいるとさすがに顔が赤くなっていくのを感じていた。神の身も酒に酔うんだなとアレイズは今になって初めて知った。

仰向くように空を見上げる。

すると炎に照らされてよく見えないものの、満天の星空であることは間違いないのだろうなと理解出来た。儀式の時には炎を消すと聞いているから、星明りを拝む時はそう遠くない。

いい夜だ。

アレイズは杯を傾けて酒を嚥下する。

木の実の甘酸っぱさが舌で踊り、緩やかに胃袋へと収まっていくのを感じているとくらりと意識が傾いた。

飲みすぎたか？
ふわふわと意識が揺れる感覚に酔っているなと苦笑するも、これもやはり悪くなかった。酒など久しぶりだし、祭り自体随分と久しい気がする。喧騒は苦手だが、祭りの喧騒まで嫌いになるほどアレイズも人間嫌いではなかった。
心地良い酔いに目を閉じる。夜風が解いた黒髪を揺らしひんやりと火照った頬を冷やした。
「ジュード」
小さく声を掛けられる。聞き慣れた声に目を開けると、眼前でティファがすっと手を伸ばすのが見えた。
「神様もお酒に酔うものなのね。知らなかったわ」
「俺だって今知ったんだ」
そうなの？　ときょとんとした顔を浮かべるティファはそのまま伸ばした手でアレイズの頬に触れる。冷たく感じる手は酔い同様心地良く、思わず目を閉じそうになる。
すべすべとした手の甲が頬を撫でていく。
しかしそこでティファは自分が男性に無遠慮に触れているということに気付いたのか、はっとしたように目を見開いて慌てて手を引っ込めた。心地良さが遠のき手を伸ばしそうになり、アレイズも慌ててそれを押し止める。酔っているからと言って何をしようとしていたんだ自分は。
「村人はどうした」
「皆すっかり出来上がっちゃってるわよ。勧めまくった甲斐あったわ、やっと抜け出せたんだもの」
尋ねるとそう返され、アレイズはティファが指差す方向に視線を向ける。そこには赤ら顔の村人達が豪快に笑いながら更に酒を酌み交わす姿が見えた。きっともうティファのことなど見えてはいないのだろう……そうなるまで酒を勧めるというのは難儀なことだとは思うが。
命を吹き返した森が吐き出す清涼な空気を吸込んで酔いを醒まし

ながら彼らを見ていると、ティファが隣に座って両膝を抱え込んでアレイズをちらりと見た。炎に照らされ所々紫に染まった瞳が向けられる。

「ありがとう」

「？　何がだ」

唐突な言葉にアレイズがそう返すと、ティファはぎゅっと膝を抱え込む手に力を込めて微かに震える声を出す。

先程は気が昂ぶっていて障害なく発することができた言葉はしかし、冷静になると言うのが辛いようだ。

「神器を取り戻さなかったら、今頃このお祭りはなかったと思うから。だからとにかく、その……ありがとう」

礼など何度も聞いているが、それでもあえてティファは言いたかったのだろう。

この降って落ちてきそうな星空の下で祭りが決行できたことへの感謝を。

だが、いつもなら勝気な瞳でどこまでもきっぱりと言葉を発するティファがもじもじと恥ずかしがりながら礼を言うなどとは考えにくかった。

喧騒が強くなる。アレイズはその中でかき消されそうな息を吐き出した。

ふっと吐き出した息は次第に衝動のまま大きくなり、アレイズの肩を揺らす。衝動は笑いのそれだ。

「ははは！　お前でもそんな風に恥ずかしがったりするんだな！」

「何よそれ！　私はいつもこんなのよ！」

大口を開けて笑うとティファがぱっと顔を上げ、勢いよく立ち上がった。跳ねたのではないかと思うような俊敏な動作はやはり照れから来るものなんじゃないかと思うと更に笑いがこみ上げてきて、アレイズは涼やかな目元に涙さえ浮かべて笑い続ける。

岩を砕き強盗相手に剣を突きつけるような少女が、礼の言葉一つでこんなに動揺するなどとは一体誰に想像ができるというのだろう

か。

　きっとメイやマイですら見たことがないに違いない、と断ずることができる姿にアレイズは腹筋が痛くなる中で取り繕うように手をひらひらと振った。吊り上がったダークブルーの瞳が怒りを灯し始めたせいだ。

　このまま怒らせてもきっと面白いだろうが、あまりに酷い喧嘩になるとマイに怒られることが分かりきっている。それは避けたかったのだ。……さすがにモーニングスターは食らいたくない。

「まぁ礼は受け取っておこう。それで、さっきの話なんだがな」

「？　何よ」

　今度こそしっかりと礼を受け取る言葉を言ってから、話をすり替える。

　するとティファは不満のありそうな棘のある声を発したが、アレイズが次に発した問いに口を噤んだ。

「メイを縛ったのが嘘だったって話はもういいんだが、何故お前はあんなに星夜祭を決行させたかったんだ？　そもそもお前はこの村で聖夜祭が行われることを事前に知っていたわけじゃないんだろう？」

　あぁ、と低い声が漏れる。

　それと同時に彼女は再びアレイズの隣に座り、膝を抱えて顔の半分をそこに埋もれさせながらも遠くを見つめる。

「……頼まれたのよ」

「頼まれた？　誰にだ」

「村の子供達よ。あの後、宿屋に子供達が来て私に聖夜祭のことを教えてくれたの。旅人さんも見た方がいいよって」

　――なるほど、と呟きながらアレイズがティファの見つめる先を辿ると、そこには村の子供達がわいわいと騒ぎながら駆けている姿が見えた。じゃれ合っているのだろう、夜も暮れたというのに彼らは楽しげな声を上げて笑っている。

　あんな薄着で駆け回って風邪でもひかねばいいのだが、ぼんやり

とそう考えているとティファが更に続ける。
　独白のような呟きは闇に埋もれて行くように沈む。
「私もね、父様や母様が生きていた頃に一度だけお祭りに行った事があるの。二人が生きてた頃の記憶ってもうほとんどないんだけど、でも楽しかったってことだけは覚えてるの。だからあの子達が楽しみにしてる気持ちがよく分かって、それで」
「メイはどうした」
「事情を話してお願いしたら、じゃあ私を拘束した事にすればいいよって言ってくれたから。その代わり絶対に一人で行動しないでって」
　確かにそれが一番確実だ。
　ティファの答えにアレイズはメイが正しい選択をしたことに安堵しながら溜息を漏らす。もしこれで反対などしようものなら、それこそ実力行使で一人突っ走っていただろう。それぐらいならマイや自分と行動させた方がいい。
　溜息を漏らす姿に呆れを感じ取ったのだろう。ティファは誤魔化すように笑ってからゆっくりと背筋を伸ばす。
「それにね、きっと私はもう二度とあんな風に純粋に楽しめないと思うから、せめて子供達には純粋に楽しんでほしかったの。いつかそれが叶わない時があの子達にも来るかもしれないから」
　成長することが純粋に祭を楽しめなくなることに繋がるとはティファは思っていないのだろう。
　両腕を伸ばして仰向くティファを見てそう感じたアレイズは、一体何が彼女に純粋さを奪ったのだろうかと思案する。アレイズから見てティファは十分過ぎるほど純粋な気がするのだが、それでも本人は何かが違うと思っている。だからこそのあの発言だ。
　しかし彼にはティファが歩んできた道など知る由もなく、また知った所で何をしてやれるわけでもなかった。
　神格の高い神ならば時ぐらい変えられるかもしれないがこちらはまだ新参者とも言える身分だ。そのようなことが出来よう訳がない。

「なら、今楽しめばいい」
「え？」
「昔みたいに純粋に楽しめないかもしれないが、それでも祭りを楽しめることに変わりはないだろう？」
だからアレイズにはそう言ってやることしかできなかった。
例え昔とは違っていたとしても、二度目の祭りはしっかりと記憶を抱けるように楽しめばそれでいいのではないかと。
立ち上がり手を差し出す。それをぽかんと見ている丸いダークブルーの双眸に向けてアレイズは笑んだ。
炎を背にして立つその姿に何を感じたのか、ティファの頬が赤く染る。そこで胸を襲うむず痒さに気付き、アレイズは気恥しさに言葉を探した。励ますことは悪くない、だがこうやって女性をエスコートするということがなかったせいかどうも胸や背中がむず痒くなってしまうせいだ。相手は契約者であるティファを利用しようとさえ思っているはずなのに、どうしてこんなことで動揺しなければならないのか。
「ま、まぁとりあえず儀式とやらを見に行くか。もうすぐ始まるだろう」
ぐるぐると回る思考の波の中で必死に言葉を探してようやく出てきた言葉を発すると、彼女は何を思ったのかくすりと笑って手を伸ばす。
「えぇ！」
冷たい手がアレイズの手を握る。ほっそりとしたその手を引っ張り上げるとティファが満面の笑みを浮かべた。

◇　◇　◇

「そんなことがあったの……」
その頃、明かりも灯さずに星明りと広場の炎の明るさのみに支配された暗い宿屋の一室にメイとマイはいた。

メイを散々いびった後で彼女の口から事の経緯を話してもらったのだ。

無理矢理吐かせたとも言えるが、それはメイがティファをきちんと見張っていなかったのが悪いとマイはあっさりと決め付ける。

「うん、そういうこと」

しかし窓枠に手を掛け夜空を見上げるメイの後ろ姿を見て、唇に指先を当てたマイは彼女が下した選択が正しいことを実感していた。

ツインテールに結ばれた亜麻色の髪が歓声と共に揺れる。綺麗な星よ姉さん、という声に小さく頷いてから呟いた。

「ティファ様はあまり祭りなどの行事を体験なさったことがなかったから、仕方ないのかもしれないわね」

もっとも、行事そのものよりも御館様や奥様との想い出の方があの方にとっては大事なのだろうけれど。

その頃のことを思い出そうとしても、マイにはほとんど思い出すことができない。その理由を探ることなど今まですることはなかったが、彼女達よりも幼かったティファは祭りのことを覚えているのだろうかとふと疑問に思った。

覚えているからこその行動なのだろうから、幾らかでも記憶はあるはずだがただのお節介で行動した可能性もないわけではない。

――それにしても、どうして自分はあの頃の記憶を手繰り寄せることができないんだろうか。

今まで気にすることもなかったが、気にしてこなかったことがおかしいのではないか。

「姉さん?」

思考の波にはまりそうになっていたマイの姿にメイが怪訝そうに振り返る。

姉と違って純真無垢な亜麻色の瞳を向けるメイに、マイは伏せそうになっていた瞳をぱちりと開けて首を振る。

考えても、どうにもならないか。

「何でもないわ。それより、そんな事情があったのならティファ様

にはお祭りを楽しんでもらわないとね」
「そうだね、アレイズさんも一緒にいるし。……二人で楽しんで来てくれるといいんだけど。一応二人は家族なんだから、ティファ様にとっていい想い出ができるかもしれないしね」
「一応じゃないわ。本当の家族になるのよ」
「契約したから？」
「違うわ」
きっぱりと言いきりマイが頬にかかる髪を払いのけた。
「ティファ様のあのじゃじゃ馬を上手く操れるのなんてアレイズ様ぐらいよ。これは私達に与えられた最初で最後のチャンスなの」
「まさか姉さん、私と二人で残ったのって――」
「お祭りの夜に二人きりで行動だなんて、ロマンティックじゃない。ね？」
「あんな短時間によくそんなこと考えたね……」
きしりと音を立てながらメイの隣に並ぶ、そうして呆れ返る彼女が見上げていた空をマイも見ることにした。
炎にほとんど邪魔されない場所にいるおかげで、二人の目は満天の星空に彩られた夜空が映る。
きらきらと宝石のように煌く星は、それこそ手を伸ばせば届きそうな感覚に陥るほどの量だった。
「星夜祭に相応しい、いい夜ね」
星の煌きに心からの笑顔を浮かべて、マイが呟く。
その声にメイが肯定を返すとつうっと夜空を滑るように光が一筋流れていった。

第十五話

星が幾筋も流れる中、ティファ達は村の中心部にいた。ここで儀式が行われるのだ。

辺りを見回せば酔いを多少は醒ましたらしい村人達の姿が多く見受けられる。皆泥酔状態で儀式に臨むべきじゃないと理解はしているのだとティファは考えながら、炎の消えた場所で銀光が煌めくのを見ていた。村長が神器である銀の聖杯を高く掲げる。星明りに照らされた聖杯の前で、先程一部分だけ切った木が真っ直ぐに立てられた。改めて火が灯され、ぱちりと爆ぜる音を響かせながら村長が何やら呪文めいた言葉を紡いでいる。

儀式らしい、と言えば儀式らしいが。

「何が起こるのかしら？」

「さぁ」

この後に何が起こるかなどまるで予想ができない。

そう思いティファがアレイズに声を掛けると、彼もよく分かっていないらしく首を傾げていた。おおよそを闇に預けてしまった髪が衣擦れの音を響かせて揺れる。そんな音が聞こえてくるほど、辺りは静まり返っていた。

炎が勢いを増し、聖杯の輝きが増す。

――でもこれ、炎の照り返しなんかじゃない。

ぱっちりと二人の双眸が見開かれ、銀の聖杯へと注がれる。

彼らの契約を示す指輪に似たような反応に目が離せなくなっていた。

朗々と流れていた村長の声が、唐突に大きく響く。それは強い音となって炎にも力を与えた。

「星々の女神、レイシズ様の奇跡を此処に！」

天に伸びる炎が一瞬陽炎のように揺らめき、不安定な大きさになるその刹那。

ひゅん、と音を立てて空から眩しいほどの光を放った星が降ってきた。
「なっ！」
「このままじゃぶつかるぞ！？」
どれだけの遠くからやって来たのか、勢いよく降る星は大きさこそ大したことはないもののそれでも子供程度の大きさはある。こんなものが速度を上げてこちらに向かっているなんて、あり得ない。
いや、でもあり得ないと言いたくとも既に向こうはこちらに向かっている。
それならばせめて回避して衝撃から逃げなければ。
アレイズの切羽詰まったような声に足に力を入れる。しかしそれは星の速度を考えれば到底回避が間に合うようなものではなかった。瞬きすら敵わぬ、ほんの刹那のことなのだ。
しかしそれだけの速度を誇っている星がティファやアレイズを襲うことはなかった。
「――！？」
二人して息を呑む。冷や汗がじっとりと額に浮かぶのを拭うこともできずに、ただ呆然と彼らは村長の持つ聖杯を凝視していた。
――星が、聖杯に吸い込まれてる。
眩い光が小さな聖杯の中に収まろうと、緩やかに形を変えていく。それは一見奇妙であり神秘的でもあった。ティファは自らの髪が夜であるというのに鮮やかな空色を映すのを見て、アレイズへと視線を向ける。彼は元々闇色の立ち姿をしているからあまり変わらないのだが、その彼も闇に溶けることなく光の下に姿を曝け出していた。目を見開いて聖杯を見つめる姿は、ティファのそれと大差ない。
神と言えど、他の神を崇拝するものが行う儀式のことなど知らなかったのだろう。
特にまた起きたての神に分かろうはずもない。
星が、聖杯にその身を捧げる。
眉間に皺を寄せてでも目を開いてそれを見ていると、やがて全て

を飲み込まれた光が緩慢に消えて行き、炎が消える。すると闇が再び手を伸ばし、暗転するように光度が変わる。その差にティファはちかちかする視界を一度閉じた。

体力を消耗したのか、胆力を削ったのか。村長が溜息を漏らし、しかしすぐに声を張り上げた。

高らかな声は毅然とした態度で儀式の終了を告げる。

「これにて儀式を終了する！　次の年もこの聖杯に宿りし星によって我らに平穏が訪れますことを、そしてレイシズ様の加護あらんことを。我らが世界の名の下に契約せし！」

耳が割れんばかりの大音量で、歓喜の声が上がる。

夜もとっぷり暮れているというのに、村中に響き渡る声が空高くまで突き抜けるように伸びた。

しかし、ティファもアレイズもその事態に付いていくことができない。むしろ何も知らずに二人でわたわたと慌てていたのだ。村人達はその間大人しくしていたというのに。

何だか恥ずかしい、そう感じてアレイズを見ると彼も微かに耳を赤くしているのが見えた。

二人して、馬鹿みたいだわ。

胸中で呟くと自然と笑みが零れ落ちる。

ふっと最初に吹き出したのはどちらだっただろうか。

どちらからともなく笑い出すと、ようやく祭りが終わったのだと実感できた。

祭りが再会され、再び喧騒に包まれる。ティファとアレイズはその中で思う様身を揺らして笑いきってから、やがてどちらからともなく夜空を見上げた。他の明かりに邪魔されることのない、満天の星空。

「綺麗ね……。星に手が届きそうってこんな感じなのかしら」

「あぁ、下手したら本当に届きそうだな」

手を伸ばしながらティファが呟くとアレイズが笑みを含んだ声で答える。そう言われると本当に星に手が届きそうだと思えて、ティ

ファは目を細めて笑んでから星を掴むようにゆっくりと手の平を閉じていく。

煌めきは無論ティファの手からこぼれ落ち、形を確かめることはできない。しかし不思議と胸に満ちる満足感にティファはくすくすと笑っていた。

まるで子供みたい。そんな言葉が脳裏に響くが、その全てを無視する。

しかし天に伸ばした手が、唐突に他の手に包まれてティファははっと息を呑む。自分の手より大きいそれが誰のものであるか理解していたからすぐに持ち主を見やると、当人である神が不敵な笑みを浮かべた。精悍な顔に浮かべるにはあまりに若い、楽しげな顔だ。

「まだ夜は長い。祭りの間ぐらい遊びに付き合ってやるから、覚悟しておけ」

悪戯っぽい声が耳朶を打つのに合わせてティファが唖然とした表情を浮かべる。

「まずは何をするか。……自分が人間だった頃にしていたことでいいのならいくつかあるんだがな。とりあえず呑むか」

「へ？　いやでも私お酒は――」

「大丈夫だ。この村の酒は女子供でも呑めるぐらいだからな」

酒を呑むなという戒律はないが、かといって好き好んで呑む気にもなれない。

そう思ってアレイズに反論すると彼は横顔で笑って見せながらティファの手を引く。村人達が集う広場まで連れて行こうというのだろう。聖夜祭の夜をティファと共に過ごす為に。

しかしその顔は義務感や同情で付き合うにはあまりに楽しそうで。

「やっぱり、ジュードって全然神様らしくないのね」

ティファは思わず目尻が熱くなるのを感じながらも、軽口を叩くように笑って素直にアレイズの手に引かれることにした。

おかげでその夜、ティファとアレイズには多くの話相手ができた。老若男女問わず親しく接するティファの性格もあったのだろうが、

皆旅人が珍しいのだと二人に村の外の話をせがんできたのだ。
ティファは大聖堂で生きてきたのでそれらにあまり答えることはできなかったが、アレイズは古いながらもそう変わってはいない知識を彼らに与え、子供達が目を輝かせる度に困ったようにティファを見ていた。
好奇心に満ちた輝きが苦手なんだ、そうティファがからかうと憮然とした顔をされたが彼女はそれを笑い飛ばす。実はそんなやり取りが村人に受けていたことを彼らは知らないが。
そうやって過ごす長い夜の間にティファは祭りでは大体何をして遊ぶのかを多く教わり、アレイズが人間だった時祭りで何をしていたのかも知ることができた。それは子供の時に行った祭りと同じぐらい、もしくはそれ以上に心が踊る出来事で、ティファは満足気な吐息を漏らしながら空をそっと見上げる。話しかけるように唇が動いていた。
「星が願いを叶えてくれるって本当なのね。――ありがとう」
「何か言ったか？」
囁きに、低い声が問いを発する。
見ればそこには酒に強いらしいアレイズが他の村人を酔わせながらこちらに首を傾げている姿がある。強いと言っても顔が赤かったり多少ふらついているようには見えるが、本人としてはまだ問題がない程度なのだろう。
それは豪快に酒を食らう村人達とは違い随分と落ち着いていたが、間違っても神には見えない。
ティファはそんなアレイズの人間臭い様子に微笑を深め、小さく首を振った。
「何でもないわ。ただ、星が綺麗だと思っただけよ」
星が傾き、夜が明けていく。
でもその時がもう少し遅れて来ればいいと願いながら、ティファはアレイズに酒を止めるべく立ち上がった。

◇　◇　◇

「もう少しここにいようよー！」
「そうだよ！　お姉ちゃんがいないと寂しいよ」
そうして星夜祭より二日が過ぎた日の朝、ティファ達はようやく当初の目的を果たすべく再びグラドへと進路を取ることにした。
……本当は翌日にでも発とうと思っていたのだが、村の子供達に引き止められて村を出るに出られないでいたのだ。
現に今も子供達はティファを取り囲んで泣きながら抗議している。
しっかりと掴まれた服は少々動いたぐらいではびくともせず、そしてティファは子供達を無下にすることができないから動くことすらままならない。
「だから、ね？　お姉ちゃん達はグラドに行かなくちゃいけないの」
「やだー！」
涙混じりの大声がきんと耳に響く。誰か助けてくれないのかしらと背後を振り返っても、三人は何やら話し込んでいるらしくこちらを助ける気配はない。……薄情者。
村の大人達はどうにか子供を引き剥がそうとしていたが、子供もなかなかどうして力が強く動く気配がない。というより、下手に引っ張られたらこちらの服が破れるせいで強硬手段に出られないだけなのだが。
ティファはふぅと息を吐き、そっと涙目の男の子の頭を撫でる。
優しい動作にきょとんと目を丸くする彼に向けて苦笑交じりの笑みを浮かべた。
「大事なことだから、急がなきゃいけないの。……終わったらちゃんと戻ってくるから」
「……ほんと？」
「えぇ」
アレイズが世界に逢えたら、もう自分は用済みなのかもしれない。
でももしそうであったとしても自分が物語の登場人物みたいに殺さ

れるなんてことは考えにくかったし、だとしたらその時自分は晴れて――と言うべきかは迷うが――自由の身なのだ。そうすればこの村に立ち寄ることだって容易にできる。

その時がいつになるかは分からないとしても。

ティファの言葉に疑り深い視線が向けられる。

しかしティファはその視線ににっこりと笑いかけ、大丈夫という風に頷いた。

すると、服に掛かっていた重みがふっと消え去る。子供達が一斉に力を抜いたのだ。

「……行ってらっしゃい」

ぽつりとした声が眼下で漏れる。

「絶対戻ってきてよ!?」

「うん」

真剣な表情にもう一度頷くと、今度こそ服から手が離れた。

ティファは一歩下がって軽くなった体を動かしてから踵を返す間際に手を振った。

「行ってきます」

子供達のあどけない顔に満面の笑みが浮かび、ぶんぶんと大きく手が振り返される。

元気という言葉を詰め込んだその仕草にティファは口元が緩むのを感じて、笑顔のまま三人に早く出立しようと告げようと歩を進めた。

「先日の神器の件について、一つ質問をしてもよろしいでしょうか？」

しかし、その足がぴたりと止まる。するりと入ってきたマイの声によって。

「何だ？」

「あの日からずっと考えていたのですが、もしかしてティファ様は少し特殊な体質なのではないかと」

どうやらアレイズへの問いらしく、彼が促すとマイが続ける。し

かしその内容はティファには納得の行かないものだった。
——自分が特殊？
胸中で呟き、その途端に脳裏をぐるりと巡る思考を止めることができない。
何故マイはそんな疑問を抱いているのか。自分が別に何をしたわけでもないのに。
そして何故アレイズに訊いたのか。もしかしたら何か意味があるのかもしれないが、どの道最近目覚めたアレイズには分かろうはずもないというのに。
でもそれよりも、一体何故自分はこんなにも特殊という言葉を気にしているんだろうか。
きっとティファが特段気にするようなことではなかったのかもしれない。しかし彼女はどうしても感情を抑えることができなかった。ぐるりと一周してはまた巡る思考に果てはなく、せき止めてくれるものもない。
こめかみがちりちりと痛む。ティファはそれを指先で押さえながら目を閉じ、何かを手繰り寄せることができそうな期待に鼓動を一つ高鳴らせた。
何か、大事なことを忘れている気がする。
「ティファ様？」
「え？」
はっと息を呑む。開かれた視界で唐突に世界が開かれ、色を帯びる。
思考の波が引いて、澄んだ意識が戻ってきたのだ。
怪訝そうなメイの声に呆然とした顔を向けると、彼女の声に同じく驚いた様子のマイとアレイズが慌ててティファを見た。今の会話が聞こえていたのか案じている、口にしたわけでもないのにそれが伝わるほど分かりやすい態度だった。
しかしメイはあまり話の内容を理解していなかったのか、ツインテールを揺らして大きな声で笑った。

亜麻色の髪が光を反射し先日見た星のようにきらりと光る。
「あははっ！　どうしたんですか？　そんなに驚いた？」
「え、えぇ」
そんな風に笑われるのは主としてどうかのかと思わないわけではなかったが、間抜け面で驚いていたことに変わりはないので素直に頷く。すると真紅のメイド服が大きく揺れ、楽しげな声が凍りついた空気を動かした。
先程の問いを引っ込めてマイが穏やかに笑む。しかしティファにはそれが取り繕うようなものにしか見えなかった。
疑心暗鬼になっている。……こんなことではいけないのに。
「子供達は納得してくれましたか？」
「えぇ、まぁ。一刻も早くグラドに行かなきゃいけないからね。星夜祭のことで結構時間食っちゃったし」
「そうだな。事は一刻を争う」
頷きながら近づくと深青のメイドの隣でアレイズが深々と頷いて同意する。しかしその態度にティファはん？　と眉を顰めた。
確か昨日まではそんなに急ぐことはないと言っていたはずなのに、どうして急に。
違和感を感じる声にしかしティファは胸中で首を振るのみでそれ以上の詮索はしない。気になることは山ほどあるし、問い詰めたいところだったがそうしていると日が沈んでしまいかねない。もう二日が経過しているのだ。これ以上ここで足止めを食らうわけにはいかない。ただでさえもう大分日が昇っているのだから。
じゃり、と砂を踏みしめて村の入口へと向かう。ブーツの踵から浮かんだ砂埃を蹴るように歩くと三人が後ろから付いてきた。
歩く道の脇で村人達が親しげに声を掛けてくる。ティファはその一つ一つに親しみを籠めた笑みを返しながらも、胸の隙間にそっと入り込んできた冷たさを拭えないままに村を後にした。

◇　◇　◇

「ですから、ティファ様にはもう少しお料理が出来るようになって頂かないと困るんです」
再び、場所は森の中。
鬱蒼としたその場所をさくりと音を立てて歩きながらティファの耳に聞こえてくるのは“妻として最低限出来るようにならなくてはならないもの”講座だった。ぴんと人差し指を立ててくどくどと続けるマイの態度はどう客観的に見てもいつも通りで、ティファは胸に湧いた疑念をひとまず遠くへ追いやって普段通りの声を上げた。
聞こえないという風に耳を塞ぎつつ、ティファがマイの横顔を睨みつける。
日差しは大分傾き暗がりを増していたが、それでもまだマイの持つ色なら闇から見つけ出すことができた。
「だから、その必要はないんだってば！　大体本来の神と聖女の契約は結婚なんて関係ないじゃない！」
「駄目です！　アレイズ様との契約には御結婚が関係あるじゃないですか」
辟易としながら怒鳴るようにして返すと、自分の武器を持ち出し攻撃しかねない勢いでマイが断じた。
確かにティファは料理が下手だ。
更に言えば下手という言葉を使うことですらおこがましいと言われそうな程度ではある。下手さ加減で競うことができたら、今頃世界一にでもなっているのではないかと言われるほどに。だから実際の所は、少し上手になったぐらいで人が食べられる料理が作れるわけではない。だというのにマイはどうにかせずにはいられないらしい。
アレイズとてティファに料理の腕前が上達することを望んではいないというのに。
ダークブルーの双眸をちらりとアレイズへと向ける。すると彼は彼女達の会話などどこ吹風と何やら考え込んでいるようだった。顎

に手を当てる、考え込む時特有の仕草がそれを物語っている。
「おい」
しかしそれもすぐに終わり、アレイズはティファ達へと声を掛ける。
「どうしたの？」
助かったとばかりにティファが尋ねると、アレイズは天を仰ぎながら呟いた。
その彼の視界には舌打ちしそうなマイの顔など見えてはいない。
……見えていたらきっと言葉を続けることなんてできなかっただろうから。
葉に隠れてあまり空を見ることはできなかったが、そこから星明りが覗いているのが見える。
言い合いをしているうちに、夜が来てしまったのだ。
「もう夜だ。これ以上進むのは危険だから、今日はこの辺で休むぞ」
ざわりと風に葉が揺れ、その動きで月が浮かんでいるのを見ることができる。
確かにこれだけ遅い時間に下手に森を歩いたら道に迷いかねない。獣道という程の道ではなく、人が通れる道は確保されているとはいえ油断は禁物だった。アレイズはどうか知らないが、ティファ達は旅に関しては素人同然なのだから。
それはさすがに数々のトラブルの発端となったティファにも理解できたので、彼女はそうねと言いながら適当な木の幹に荷物を預けた。丁度開けた場所だったので寝床や薪をする場所を探す必要もない。アレイズもそれを考えてこの場所で立ち止まったのだろう。一緒に旅をする上で頼りになるなと感じながら、同時に神様に頼ってどうするんだと自戒する。自分がもっとしっかり神の旅を補助すべきなのに。
内心で苦笑していると、アレイズがふっと森の中へと姿を消す。薪に使う枝を集めに行ったのだと経験から推測できた。メイとマイもいつも通り食事の支度に取り掛かる。ティファは料理はできなか

ったので、食べ物を切り分けたりせせらぎを見つけて水を確保した。黙っていてもいつの間にか決まっていた役割分担はお互いに適したもので、彼らはそれぞれの出来ることをしながら眠るまでの時間を過ごした。

穏やかに暖を取り、水浴びを終えたティファは寝袋に体を潜り込ませる。

そうしてくらりと訪れた睡魔に目を閉じると、すぐに夢の世界へと旅立つことができた。

◇　◇　◇

その夢は、常ならば決して見ないものだった。

――誰？

目の前に広がる、先程までいた森ではない場所に誰かが立っている。

少しだけ顔立ちが似ていて、でも色だけが似ていない大人達。確か、この人達は。

「父様、それに母様まで……？」

歳は三十を少し越えた頃だろうか？　まだ年若の男女の隣に、幼いマイが両親と共に立っている。何故かメイはいない。

ティファはそこにいるはずのメイの姿を探そうときょろきょろと辺りを見渡して、しかしすぐに諦める。そういえばこの子はいなかった気がする、そんな答えが出たせいだ。――あの時？

自分自身の思考から疑念が生まれ、答えが出せないまま頭を抱えるとその手が酷く小さいことに気が付いた。まじまじと手の平を凝視すれば、子供のそれだ。よくよく考えてみれば目線も低いような。

眼前を見ると、自分よりもずっと視点の高い金髪碧眼の男女がこちらを見ている。

貴族然とした堂とした姿の男にたおやかな笑顔の女。

父様、母様。そう口にしようとするとティファの男が腕を伸ばし

彼女の頭を撫でる。暗い声が耳朶を打った。
「お前は誰なんだろうな……？」
「え？」
――何を、言ってるの？
ぱちりと目を見開き、広がった視界一杯に男の姿を捉えるが誰もその言葉に反論はしない。穏やかだが明るい性格でもあった母親も、執事やメイドだったマイの両親も、そしてマイさえも。
悲しげな瞳が一身に向けられる。哀れむような同情心を湛えたような瞳にティファはぎゅっと唇を噛み締めた。
心の奥底でその言葉を受け止めてもいいのだと誰かが告げている。しかしティファにはその言葉を受け入れるだけの情報などなく、何とか反論しようと口を開く。そうして何か言わなければと強迫観念にも似た想いに囚われながら、どうにか声を出した。
「私は私だよ？　父様と母様の娘のティファニエンドでしょう？」
震えた声が紡ぐのは、当たり前と言えば当たり前のことだった。でも同時にそれは、口にしなければ忘れられてしまいそうな不透明なことに思えてならなかった。
ティファニエンド＝グランハート。
そう、自分はグランハート家の一人娘で目の前に立つ男女の娘だ。記憶を手繰り寄せようとしてもそれ以上の情報は出てこない。しかしそれだけは断言することができた。
ティファが紡いだ当たり前の言葉に男女が息を呑む。
ひゅう、と喉元を締め付けるような音が聞こえると、女が蒼い目を見開いてうっすらと涙を浮かべた。胸に刺さった痛みが取れなくて、苦しんでいるような涙にティファは手を伸ばそうとするがその前にもう一度男の声が響いた。
「お前は誰なんだろうな」
それは先程と同じ言葉だった。違うのはその声が感慨深げに、切なげに放たれたということのみ。
しかしそんな情報はティファにとってどうでもいいことだった。

――私は私だよ？　どうしてそんなことを言うの？
先程放った答えを無視するような問いに、心が悲しみに支配されそうになる。
どうしてあの答えじゃ駄目だったんだろう、自分は何て答えればよかったんだろう。
どう答えたら、父は自分を娘だと認めてくれるんだろう。
髪を一房掴み、引っ張る。痛みを感じるそれに眉を顰めるが視界に映るスカイブルーが憎らしくて、引っこ抜いてやりたいと思った。
ぽつりと、頬を水滴が流れていく。泣いているのだと自覚すると止まらなくなり、ティファは嗚咽を必死に堪えて目を閉じた。
それが見えたのだろうか。女がティファの肩にそっと手を置いて、わざとらしいぐらいの明るい声で言い放つ。
いつも家を明るく照らしてくれた母の声は、まるで何かに縋るようなものに聞こえた。
「そうだわ！　今度、聖都市に行きましょう？　グラドって言ってね、とっても綺麗な街なのよ」
「グラ、ド？」
聖都市グラド。どこかで聞いたことがあるような。
ティファはその名をいつどこで聞いたのだろうかと思案し、これからティファがアレイズと共に向かう場所だと理解した。でもそれなら自分はどうしてこんな所にいるのだろうか。アレイズは、メイはどこに。
「そこでならきっと。どれだけ……が特殊でも」
上から溢れるようにぽつりと振った声に顔を上げる。
断片的な言葉の内容がティファには上手く聞き取ることができなかったが、聞き逃してはならないものだった気がして慌てて口を開く。
「母様ごめんなさい、もう一度――」
しかしそれは全てを言い終える前に霧散し、暗転するように光景が変わった。

ざざ、と砂嵐の後に見えたのは真っ赤に染め上げられた彼等の屋敷の廊下だった。

「ここ、は」

ぞくりと背筋が冷える。鼓動が嫌な音を立てて跳ねる中でティファは見てはならないとは知りつつも、傍にある扉に視線を向ける。閉じられた扉の奥から、夥しい量の真紅が流れ出ている。それは鉄に似た匂いを発し、ティファの嗅覚を刺激した。

まさかここは、と胸中で呟く。頭ががつんと殴りつけられたように目眩がし、倒れこみそうになった。

しかしティファは倒れるわけにはいかないと必死に壁に手を付いて前を見据える。その手には翡翠の指輪がはまっており、大きさも十七歳のそれに戻っていた。これなら、間に合うかもしれない。

錆びた匂いに嘔吐感が込み上げるのを無視して一歩一歩大股に進んでいく。大雑把な動作に廊下を飾る花瓶や花が音を立てて倒れたが、それも気にしてはいられなかった。長い年月を経て育ったのであろう木材でできた壁面の暗さが嫌な予感を駆り立てる。急がなければ、ティファは何度も胸中でそう呟いて扉に手を掛ける。足元に感じるぬるりとした感触を踏みしめて勢いよく部屋の中へと身を踊らせた。

お願い、どうか。

「父様！　母様！」

派手な音を立てて開け放たれた扉の先、そこには金髪碧眼の男女が折り重なるように倒れていた。扉にまで溢れる量の血を流して。

燭台が陽炎のような炎を灯す。その照り返しを受けて光る金髪は常よりも儚い美しさで輝いていた。微かに身動ぎするそれにティファが飛びつく。二人とも、虫の息とはいえまだ息がある。これなら助けられるかもしれない。

「待ってて、今助け――」

「……ティファニエンド」

翡翠の指輪に意識を集中させ呪文を唱えるべく口を開く。すると

男が呻くように声を上げ、視線を遠くへと向ける。
無論そこにティファはいない。虚空を見つめるような仕草に思わず口を閉じると、背後からきんと高い声が響いた。
「父様！　母様！？」
開かれた扉から現れるのはスカイブルーの髪にダークブルーの瞳をした少女だった。
彼女は先程ティファがしたように二人に飛びつき、何度も両親を呼んでいる。
恐慌状態に陥っている少女や男達の助けになろうと一歩踏み出す。しかし結界のようなものに阻まれてそこから先に進むことができなかった。
慌てて治癒の呪文を唱えてみるが、光さえ生まれない。翡翠の指輪は沈黙し、自身の魔力も発揮されなかった。
その間にも少女が――幼き日のティファが必死に両親の手を握っている。何度も何度も声を掛け、しかしどうすることもできずに。
「また、助けることができないの……？」
呆然と呟いた声に、そうだと誰かが答えた気がした。
七年前、両親が死ぬ所を目の前で見ていることしかできなかった自分。
そしてあの頃より魔法も使えるようになって、二人を救う手立てを得たくせに触れることさえ叶わない自分。
……変わっていないのだ、何もかも。
絶望が心をじわじわと侵食していく、叫びだしたい衝動に涙が次から次へと流れた。どんと結界を叩きつけ少しでも彼等に近づけるように足掻くが、それも叶わない。
一体何をしに来たのだろうか、自分は。
「ティファニエンド……」
再び男の呻き声が耳朶を打つ。
「父様……っ！　お願いだから、死なないで！」
何度も名を呼ぶ男に、恐慌状態で叫び続ける幼いティファ。

彼等の姿は涙で滲み、痛みだけに支配されながら目を逸らしたい衝動に駆られて首を振る。

この後の展開を自分はよく知っている、そして何もできないことも。それでもこの場にいる以上、救えない以上はティファにはその痛みを全て受け入れる義務があった。それが何も出来なかった自分への罰なのだから。

しかし、一つだけティファが思い出せずにいた言葉が耳に入り込み、彼女はその言葉で涙の収まった視界で遠目に男の姿を見た。

「ティファニエンド、よく聞け……。お……前は、一刻も早く逃げ……て、グラドへ……」

息も絶え絶えの、途切れた言葉。

その言葉はやがて最後の一言へと繋がり、完全に途絶えた。

「そこでなら、き……っと見つかる。おま、えの」

生を示す鼓動が途切れた音が、こちらにまで聞こえてきた気がした。事切れたのだ。

そして女は既に死に絶えている。大事なことは何も告げないまま、救えないままに。

血色に染められた部屋が、血臭に満ちた部屋が酷く薄く見える。もやがかかったような気配にティファは必死に手を伸ばした。

――逝かないで。

誰かに向けて発したその慟哭は幼き日のティファにも、誰にも届かなかった。

◇　◇　◇

「ん……」

のろのろと身を起こし、うんっと伸びをすると日が高いことが見て取れる。朝を少し過ぎた頃なのだとティファが感じながら辺りを見渡すと他の面々が支度をしているのが見えた。

急いで支度をしないとまたアレイズに文句を言われてしまう。

そう思ったものの、ずっしりと頭にのし掛かる気分の重さが軽快に動くことを許してはくれない。まさかここまで寝覚めの悪い夢を見るとは。

手の平をまじまじと見つめる。そこには血の色などなく、血臭もしない。しかしティファにはそこに父母の血がべったりと付着しているような気がして嫌悪感に眉を顰めた。実際に起きた出来事だったせいか、現実味がありすぎる夢を振り払うべく首を振る。。

「起きたか」

そうしていると背後からアレイズが静かに声を掛けてきたので、ティファは寝袋の中から振り返り小さく頷く。

既に旅支度を整えている彼はいつもと同じ黒の外套に身を包み、荷物をティファに向けて放り投げた。

「急ぐぞ。今日のうちにこの森を抜けてしまいたい」

「何かあったの？」

少し急いでいるような早口を不審に思い尋ねると、アレイズは困ったように頬をかいて呟いた。

「少し、嫌な予感がするんでな」

予感って、何て曖昧な。

神が言うからには予言めいた何かがあるのかもしれないが、しかしそれにしては大雑把すぎるとティファは思わず突っ込みかけたが、その言葉を呑み込んで彼女は頷いた。今はそれよりも言うべきことがある。

「そうね。急いでグラドに行かないと」

噛み締めるように決意を籠めた声で呟く。

するとアレイズがん？　と眉を顰めた。涼やかな目元が細められ、問うような色が添えられる。

「どうした？　お前自身にはそんなに急ぐ用事はないだろう」

「……夢を、見たのよ」

「夢？」

ちくちくと刺さるなんて程度ではない、思いきり刃物を突き立て

られたような痛みにティファは苦笑を浮かべる。
　するとその姿に不安を覚えたのかアレイズが膝をつきティファの顔を覗き込んだ。
　……この神はもう少し異性との距離感について学ぶべきじゃないだろうか。
　言葉を紡げばすぐにでも吐息が触れ合いそうな距離に後ろに下がろうとするものの、心配するようなアレイズの顔にうっと言葉を詰まらせる。ここで退いたらまた話がこじれてしまいそうだ。
　そう思いティファは言いたいことが山ほどあるにも関わらず頷くのみに留めた。
「えぇ。父様と母様が亡くなる時の夢よ。そこで、父様からグラドに行けって言われたの」
　あの言葉が実際に発されたものなのかティファには判別がつけられない。
　しかしグラドに向かうこの時期に見るのなら、あながち自分が生み出した妄言ではないような気がした。母が発した言葉は紛れもなくティファの記憶にあるものだったから、それだけでも行く価値がある。
「なるほど」
　ティファの言葉にアレイズは何を思ったのか、それきり何も訊きはしなかった。
　だからティファは自身も身支度を整え、無言のまま傍に控えていたメイやマイと共に出発しようと――したのだが。
「な、何？」
　突如としてがさがさと草が揺れる音に、メイが怯えた声を上げる。
　マイがそれに対し注意深く気配を探りつつティファの前に立った。何があっても護れるように片手を広げてティファに後ろに下がるよう促す。
　それに続いてメイも怯えながらマイの隣へと並び、手近な木の枝を草へ向けて投げつけた。

するとそれは酷く驚いたように慌ててティファ達の前に飛び出す。
「!?」
しかし、驚いたのはティファ達も同じだった。
「あら?」
「あの時の兎!」
草むらから現れた真っ白な物体。
それは大聖堂の地下で現れた、神たる兎だったのだから。

第十六話

突如として現れた真っ白い物体は相変わらず場の空気を読んでいないらしく、つぶらな瞳をティファ達に向けながら愛らしい動作で近づいてくる。体躯が伸び、跳ねながら近付くそれはやがてティファの足元で止まり身をすり寄せる。ふかふかとした体毛がブーツを撫でるのを見て、思わずティファは口元を手で押さえながら呟いた。

世界の大半の女は可愛いものに目がない。ティファとて例外ではなかった。

「か、可愛い……」

ダークブルーの双眸がうっとりと細められ、ティファが手を伸ばす。

そうして白の体毛に覆われた小動物――兎を抱きかかえてその背を撫でた。

心地良さそうに頬ずりする兎の首元できらりと首輪が光る。

慎重に指先で体毛をかき分けて首輪を凝視する。するとそこに神を示す紋章が現れた。メイが言う通り、寸分の狂いもなくこの兎は大聖堂に現れた兎と見て間違いはない。あの時は暗くてあまり細かく見ることができなかったが、こんな紋章が描かれていたとは。

ティファはつぶらな瞳で自分を凝視する兎に笑いかけながら首輪を撫でる。そうして紋章をじっくり見ていると、何かが心に引っかかった。

何か大切な事を忘れているような――自分もこの紋章をどこかで見たことがあるような。でも、何かが違う。

思考に体温を奪われたのか、さあっと体が冷えたような錯覚に陥りながら記憶を手繰り寄せる。

そんなティファの顔を覗き込むように兎が赤い瞳を寄せた。

綺麗な目ね、と胸中でティファが呟いてその瞳を見返す。ティファの感じた通り、兎の目は確かに綺麗な色をしていた。

そう、その赤は炎や夕暮れというよりはまるで血を一滴垂らしたような赤で。

「っ！？」

どくんと鼓動が跳ねるのに合わせてティファの肩が跳ねる。

喉元をひゅうっと細い息が通り過ぎ、肺へと潜りこんで行った。

浅すぎる呼吸に咳き込みそうになる。

下がったように感じられた体温が更に下がる。そっと氷を体内に入れられたような、そんな冷たさに思わず腕の中の兎を落としそうになったティファは慌てて兎をぎゅっと抱きしめる。唐突に込められた力に兎の耳がぴんと立つ。前肢が藻掻くようにティファの胸元をかきむしった。

刹那、ティファの指輪と兎の首輪が発光した。

「「ティファ様！」」

切羽詰まったメイとマイの声が木々を揺らしかねないほどの音量で放たれる。

しかしティファはそれに応えることもできずがつんと頭を殴られたような衝撃に目尻に涙を浮かべていた。

脳に記憶が雪崩込んでくる。不可思議な状態に首を振ろうとするも、それも敵わない。

そうしている間にもティファの記憶は逆行し、光に包まれながらも緩やかに夢で見た記憶に近づいていった。

鮮血で染め上げられた室内。金髪碧眼の男女。瀕死の彼等に取りすがる蒼い髪の少女。

それはもう知っている。しかしそれだけではないはずだ。

夢同様、まるでその場にいるかのような視点でぐるりと辺りを見渡す。絶望に縁取られたダークブルーの双眸がその色に酷く不似合いな鮮血を瞳に収めていた。

――もう、見たくない。

心が悲鳴を上げながらティファの動きを止めようとする。しかしここで止まることはできないと、何かがティファを急かしていた。

もしかしたら先程の光に何か関係があるのかもしれないと考えるも、答えが出る由もない。

粉々という言葉が最も相応しいと思われる砕け散った陶器の花瓶、その傍でくったりと倒れているアリシアの花。母と同じ名のそれはからからに干からびており、むせ返るような血臭の中で更なる死をティファに見せつけていた。その背後に窓はやはり粉々に砕け散っており、嵐を伝える曇天を視界一杯に広げている。このままだと二人が濡れてしまう、そう考えたティファは慌てて室内から父母を運びだそうとして、そこでようやく気がついた。

窓から視線を少しずらした壁面。

そこに、二人の物と思われる血で描かれた紋章があることを。

首輪に描かれていた金細工ではない。しかし全く同じ形の紋章がそこにはあった。

「ティファ、おいティファ！」

「……っ！」

がくがくと肩を揺さぶられる衝動にティファがはっと目を見開く。すると眼前には黒髪黒瞳の精悍な顔をしてた男が立っており、そこでようやくアレイズがずっと声を掛けていたことに気付く。

呆けた顔で腕の中を見ると、既に兎はメイとマイに引き剥がされたらしくその中にはいない。どうやら光も消え去っていたようだ。

そんな中、ティファは一人意識を遠くに飛ばしていたというわけだ。

「気が付いたか」

「うん、ごめん」

「気にするな。それより、やはりあれは神の証なんだろうな」

安堵を含んだ柔らかな声にティファが次第に冷静さを取り戻して行く。

今にも身震いしそうなほどの恐怖心をかなぐり捨て、ティファは無理矢理気味に笑みを浮かべた。そうしなければ正気など保てない。

口の端を緩めて笑うとアレイズが怪訝そうな顔をするが、彼はテ

ィファが無理をしていることを悟ると溜息を一つついて頷く。この件に関して問い詰めることを諦めたのだろう、少なくともメイとマイがいる前では。

「原理は知らないが、契約の証である指輪に反応することからしてまず間違いはないだろう」

「じゃあ、やっぱりその兎も神様なのかしら」

「その可能性が極めて高いな。契約の証だとしても、兎とは契約などできん。神聖文字が分からないんだからな」

アレイズがちらりと背後を見て腕を伸ばす。するとマイがティファから引き剥がした兎を睨みつけながら、それでもそっとアレイズの手の上に載せる。手から少し体躯がはみ出しているが、上手くバランスを取っている兎はそのままアレイズの腕の中へと場所を移動した。

ひげがぴくぴくと動き、忙しなくティファとアレイズを見る瞳は変わらず赤色で、ティファは思わず目を背けたくなる衝動に駆られながらぎゅっと手の平を握り締める。もしこの兎が神だというのなら、もしかしたら父母の。

硬い表情のティファに何を思ったのか、マイがそっと声を掛ける。気遣わしげなその声は、どこか憂いを帯びていた。

彼女が何を憂いているのかはティファには分からなかったが。

「ティファ様、やはり体調が」

「ううん、大丈夫よ。……アレイズ、一つ訊いてもいいかしら」

「何だ？」

そういえばマイは夢の中に存在していた。

ならば、あの時の母の言葉について何か答えてくれるかもしれない。

ティファはそう考えつつもまずは目の前の疑問を解決しようと口を開いた。微かに湿った唇を舌で湿らせる。

「大聖堂で、その子の紋章はアレイズより高位の神を表すって言ってたでしょ？　もしかして同じ位の神様だったら皆紋章が同じなの

？」

問うと、兎の首輪に描かれた紋章をしげしげと観察する黒い瞳がひたとこちらに向けられた。

「一般的にはそう言われているな。俺もレイナから聞いた程度だからあまり詳しくはないが、世界が特別に紋章でも授けない限りは基本的に同列の神の紋章は同じ物だ」

「……そう」

だとすれば、アレイズの腕の中にいる兎が犯人ではないという可能性の方が大きくなる。

神にどれほどの力があるか推し量ることなどティファには出来ぬし、神であるアレイズにも不可能だろうが少なくとも兎に害があるとは思えなかった。元々神は世界を守護する者、決して人間を殺す者ではないはずなのだから基本的に人畜無害に見えても致し方ないのだが。

とはいえ、先程の光の影響で手がかりを得ることはできた。そしてこの兎の存在が貴重だと理解することも。

「ティファ様、本当に大丈夫？」

マイの亜麻色の瞳が兎へと一身に注がれる。暗い色を帯びたそれにティファが声を掛けようとすると、能天気とも無邪気とも取れる高い声が耳朶を打ち彼女はすぐにマイから視線を逸らした。ずらした視界の先に立つのは、マイと同じ顔立ちのメイ。

彼女に向けて頷いていると日が南天に近付くのが見え、アレイズがふぅと溜息を漏らした。

「とりあえず歩くか。兎については歩きながらでもいいだろう」

「えぇ、そうしましょう」

スカイブルーの髪が揺れ、森を抜ける道を再び歩く。するとすぐにマイが腕を上げてアレイズに声を掛けた。

「アレイズ様、その兎は私が」

「？　あぁ、済まない」

ぴくりと兎の耳が動き、一瞬じっとマイの亜麻色の瞳を見つめる。

しかしマイはただ無感情にそれを見つめ返すのみだった。可愛いものに目がないのはマイとて同じはずなのに、何故この兎に厳しいのだろうかとティファは思案しやはり浮かび上がった一つの可能性へと至る。

先程光を放ったことで警戒しているのかもしれないが、彼女の瞳はそれだけではない何かを秘めている。

そしてそれこそがティファが今一番思い悩んでいることへの答えなのではないかと考えた。

首輪に施された、神の紋章。マイはそれに何か思うところがあるのかもしれない。

さく、と次第に柔らかさを持ち始めた土を踏みしめて深青の背を見つめる。しかし振り返らないその背はティファに一片の思考をも覗かせてはくれなかった。幼馴染であり親友だというのに、あまりに距離が遠く感じられる。ティファが思わずそう感じてしまうほどに。

隣にいるメイを盗み見る。そこには兎を持つ姉を羨ましそうに見る楽天的な横顔が見えるだけで、マイのような深刻さは見えない。恐らく彼女は何も知らないのだろう。そうでなければ隠し事が苦手なメイが笑っていられるはずがない。

葉の間から零れ落ちる日差しが増す。

そうして柔らかな土に優しく降り注ぐ光に視線を落としていると低い声が耳朶を打った。

「それで、この兎だが」

「置いて行くべきです」

マイの腕の中にいる兎に話を持っていったアレイズの声に即答したのは無論ティファではない。

斬りつけるような鋭い高らかな声。凛とした瑞々しい響きを持ったその声を発したのはマイだった。

きっぱりとしたマイの声に、妹であるメイがきょとんと目を丸くする。

「どうしたの？　姉さん」
「どうしたもこうしたもないわ。大聖堂の地下から現れた兎が危険でないなどと、誰に言えるのです」
ぎゅっとマイの腕に力が籠められ、兎が藻掻く。それを見て慌ててメイが兎を取り上げるが、マイに悪びれた様子はない。
どうやら余程ご立腹のようらしく、アレイズなんかは頬を引き攣らせていた。
この場で一番偉いはずの神はあてにできそうにない。ティファはそう考え内心で溜息を漏らしながら首を振った。
この森に兎を置いていく？　とんでもない。
「こんな所に置いて行くなんて、幾ら何でもひどいわ」
「元々兎は森でも生きていける種族です。ティファ様が気に病む必要などないでしょう」
「……やけに頑固ね」
「ティファ様の身を案じてこそです。どうか御理解くださいませ」
――だったら、どうしてそんなに泣きそうな顔をするの。
そんな言葉が喉から飛び出てしまいそうになり、ティファは慌てて指先で唇を押さえて留める。
何故だかそれは決して口にしてはいけないような気がしたからだ。
……これしきのことも訊けないで、過去の話などできるわけがないというのに本当に馬鹿みたいだ。
胸元を覆う白いエプロンに体躯を同化させながら兎がぱっちりと赤い瞳をティファへと向ける。何を考えているか分からないその瞳はまるで助けを希うように見えるが、同時にぞくりと背筋が強く震えるほどの強い力が籠められていた。
――何なの？　この魔力。
肌を愛撫するように撫でていく魔力の奔流がまとわりつくようにティファの肌に絡む。
それは決して心地良いものではなく、悪意と嫌悪の混ざり合ったそれで。ティファは腕を何度もさすってその感触をやり過ごしながが

ら兎を凝視した。見開かれた瞳の先にある赤は先程から変化のない色でティファを見返す。

どうやら、マイがティファの身を案じていたのは取り越し苦労でも何でもないらしい。そう実感しているとマイが更に言葉を募らせる。

「ティファ様は、先程の光が唯の光だったと御思いですか？」

「別に何てことない光だったじゃない」

「いや」

何かに急かされているようなマイの声に、頭ではいけないと理解しつつもつい反論してしまう。

しかし続くはずの口論はアレイズの言葉によって遮られた。

黒い睫毛が震えるように伏せられる。もしかしたら先程の光を思い出しているのかもしれないと考えていると、メイまでもが唇を尖らせてティファを見ていた。しかしティファには先程の共鳴反応に近い現象で生じた光に何かしらの害があったとは考えにくい。ないことはないが、少なくともマイはティファの懸念については知らないはずだから。

「お前は気付かなかったのか？　あれは熱を孕んだかまいたちだった」

「え？　で、でも私熱いなんて全然思わなかったわよ」

案じるような声に首を振るが、三人が三人とも同意見のようでティファの勝気そうな瞳をじっと見つめる。

確かに神が言うのなら間違いはないんだろう。ただ、ティファは記憶を手繰り寄せただけで熱など感じはしなかった。無論ティファの肌が焼けぬようにメイとマイが動いたからだという可能性もないわけではないが……。

それよりも今しがた兎の目を見て感じた魔力の方が余程悪質だったというのに、誰も気付かなかったのだろうか。

そうだとしたら、確かに危険だ。誰にも気付かれずに魔力を放てるのなら、それは気付かれずに相手を打ち倒す力となるのだから。

しかし……果たして置いていくことが得策なのかどうかも分からない。

どちらかと言えばこのまま連れて行って監視している方がいいのではないか。そうすれば相手の出方を探ることができるのだし、そう考えつつ無言の圧力に耐えきれないティファが眉尻を下げると、マイがふぅと息をつく。苛立ちに近い何かを吐き出したその溜息を補うように、軽く息を吸い込んだマイはメイの腕の中にいる兎を中止しながら呟いた。

もしかしたら、そう呟く声が耳朶を打つ。

「もしかしたらその兎自身には非がないのかもしれません。反応したのは首輪であって、兎が反応したわけではありませんし。ですが、悪い予感がしてならないのです」

そういえばアレイズも悪い予感がすると言っていた気がする。

もしかしてあれは今この事態についての予感だったのだろうか。

アレイズを見上げると、彼はマイの言葉に何やら考え込んでいるようだった。恐らく兎の危険性について思案していたのだろう。彼は元々呪いによって神にされた人間だ。どちらかといえば神を憎んでいる立場の彼が神たる紋章を見つけて何も思わないはずがなかった。それにそもそもこの兎が危険であることに間違いなどない。

「アレイズ……」

囁きのような声で呟く。

するとアレイズがぱっと顔を上げて微苦笑を浮かべた。

「俺もマイに賛成だ」

ティファの身を案じているのだろう。それが視覚からも聴覚からも痛いほどによく伝わる。

アレイズだけではない。メイもマイも、それぞれがティファと兎を傍に置きたくないと考えている。

しかしティファは――。

「……駄目よ」

「ティファ様」

「駄目、置いていけないわ」
今ここで兎を手放したら手がかりが途絶えてしまう。
だからティファは何があっても兎を手放すことなどできなかったのだ。
それにやはり、このまま置いていって兎に別行動をさせることの方が危険であると本能が告げていた。
さくりと数歩土を踏みしめた先にいるメイの腕から兎を抱き上げる。
ふかふかの体毛をブラウスにくっつけてティファは力なく笑った。
危険性について説いた所で、置いていけと言われるのが関の山だ。だったらとティファは考え浅く息を吸い込んだ。清涼な空気を肺に取り入れて、澄んだ心で言葉を紡ぐ。
「もしこの兎が神様だったら、私達神様を森に放置したことになるのよ？　レイニウム大聖堂の元聖女として、それはできない」
「でもティファ様、ティファ様の契約神はアレイズさんなんだよ？　そのアレイズさんが言うんだから」
「そうです、もう一度御考え直しください」
静謐なティファの声にメイとマイが顔を青くする。しかしティファの決意は変わらない。
もう一度首を振ったティファの心にちくりと痛みが走るが、彼女はそれを気にせず目を閉じた。
契約神、という言葉が脳内で反響する。
そうだ、自分は今アレイズと契約をしていて彼が世界にもう一度会いたいと願ったからここまで付いてきたのだ。教皇にも聖母にもそう願われたからこそ、自分は聖女ではなく人間になったのだから。
しかし、今まで思い出すことのなかった記憶が頭にしっかりと焼き付けられるせいでそちらにばかり気を取られることができなくなってしまった。
聖都市グラド。
たまたまアレイズと目的地が同じだったからよかったものの、恐

らく目的地が違っていたらティファはどんな手を使ってでもその場所に行こうとしただろう。それとは逆に、聖女だった頃の自分は何があっても契約神の身を護ろうとしただろう。それも、どんな手を使ってでもやるべきことの一つだ。

そして幸いなことに、今回は常ならば葛藤しそうな二つの願いを両方共叶えることができた。ならば迷っている時間などない。

どんな手を使ってでも自分の願いを叶え、かつ契約神やメイド達を守る。

それが叶うのなら――。

左手薬指の指輪に目を留める。

日差しを反射する翡翠は大樹が身に纏う万緑よりも深い色で持ってティファのダークブルーの双眸に映り込んだ。

「アレイズ神」

芯の通った声がその場中に響き渡る。

魔法を使う時よりも、怒声を放つ時よりもそれは広く広く、浸透するように空気に波を与えた。

「ティファ……？」

「この指輪を外した後、すぐに行動できなくなるほど呪いは酷いのですか？」

「いや、さすがにそれはないが。おい、ちょっとま――」

マイを模写したような丁寧な口調にアレイズがはっと息を呑む。

そうして黒い外套から伸びた腕がティファの手を掴む前に、彼女は契約の証である指輪を外した。ごめんなさい、そう心で呟きながら。

驚愕に見開かれた黒瞳を静かに見返す。そうして両膝をついたティファはあっさりと取れた指輪をそっと差し出した。

「グラドに着くまでの間、しばしのお別れです」

そうして従順な姿勢でありながらも神を冒涜するような行為に及んだティファはそのまま踵を返して脇道へと入っていく。

「申し訳ありません」

湿度を持っているわけでもないだろうに、兎から流れ出る魔力が

じっとりとティファを包み込む。明るさなど皆無の昏い魔力にティファは吐き気を催しながらも前に進むことを止めなかった。そこがどこへ繋がっているにせよ、この兎を少しでも遠ざけることができるのなら問題などなかったのだから。

◇　◇　◇

「……姉さん」

「直に御戻りになるでしょう。あの御方も子供ではないのだし」

背を向けて去っていくティファのブラウスに腕を伸ばそうとするメイの手を、マイが止める。その動作にメイがひやりと怒りを含めた声を上げるとマイが同じだけの冷たさで返した。居心地の悪い、いたたまれない空気だ。アレイズはそう感じて辟易としながら手の中に収まっている指輪に目を落とした。

自分がしているものよりも小さな翡翠の指輪は本来の目的を果たせないせいか鈍い輝きを放っている。ティファが身につけていた時はあんなに煌めきを増していたというのに、ただ外されたということだけで指輪が拗ねているようにも見えた。

それより、という声が耳朶を打つ。気付いた時にはマイが深々と頭を下げていた。

さらさらとした亜麻色のセミロングが揺れる。

「申し訳ありません。我が主の行為は、私が償います」

「いや……その必要はない」

恐らくマイはティファに天誅が下るとでも考えたのだろう。だからこそ代わりにそれを受けようとしている。

しかしアレイズにはティファを罰する気などなかったし、ましてや無関係のマイを巻き込むつもりもなかった。大体神を冒涜したからと言って罰が下るとすれば、それは世界でも天でもなく神自身の狭量さ故に起こされることだ。

呆れ混じりの溜息で返すとマイがゆっくりと顔を上げる。そうし

てティファが消えた先を鋭く睨んで、正規の道を歩き出した。
「グラドへ参りましょう。そのうちあの御方とも合流出来るはずです」
果たしてそれが叶うのか。
マイの言葉にアレイズが頭に疑問符を浮かべていると、メイが早足で進む姉を追いかけようと一歩踏み出し振り返る。
「アレイズさん、御免なさい。きっとティファ様にも何か考えがあったんだと思うんです」
「だろうな」
その考えとやらが気になるわけだが、少なくとも一つ予想出来ることはあった。
そしてその予想が正しいということを指輪が教えてくれている。
「あのお節介」
渋い声が放たれ、メイがきょとんと目を丸くする。
亜麻色の、どちらかと言えば色素の薄い瞳に疑問符が浮かんだ。
「何でもない。それよりお前はマイと一緒に先に森を抜けていろ。俺はティファに話がある」
「……ティファ様を追いかけるんですか？」
「あいつは極度の方向音痴なんだろう？　それに、契約者をおいそれと変える趣味は俺にはない」
アーモンド型の大きな瞳がますます見開かれ、若干潤む。
ぎゅっと両手を合わせたメイは真紅のメイド服をふわりと左右に揺らし身を捩るように震えた声を上げた。
「忘れてた！　ティファ様下手したらグラド行けないどころか森から出られないじゃん！」
「主のことだろう。そこは忘れてやるな」
もしかしたらマイも忘れている可能性が高いなこれは。
ある意味命がかかっている事態だというのにどこまでもマイペースな双子だ。
「あぁ、どうしようどうしよう。ティファ様食料ほとんど持ってな

いのに」
「……安心しろ。そう遠くへは行ってないだろうから、すぐ見つかる」
泣きそうな声でアレイズに訴えかけるメイの肩を宥めるようにぽんぽんと叩く。
するとメイはうっすらと涙を浮かべて姉が進んだ方向を見据えた。
「じゃあ私も姉さんを説得して、なるべく二人に合流出来るようにします」
あぁ、と頷くとメイが不安げながらも何とか笑みを浮かべてアレイズの傍を離れる。
そうしてブーツの紐を結び直して全速力で走る準備に入った。早々と姉を捕まえようという魂胆か。
しかしティファが方向音痴であったことを忘れていたこと以外は別段動じた様子のないメイは、どことなく慣れているように見える。もしやこんなことが日常茶飯事なのか。
「意外と苦労性なんだな。マイの方が苦労しているとばかり思ってたんだが」
「姉さんが頭が固いから。ティファ様には内緒ですけどね」
それじゃあ、とメイが手をぶんと一度大きく振って駆けていく。
それはメイドとは思えぬ早さでアレイズは思わず鼻白んだのだが、いつまでもその背を追っているわけにもいかないと真紅の背中から視線を外しティファの進んだ先をじっと見つめた。
糸のような光がつうっと森の奥へと伸びているのが見える。ティファ自身の魔力の残滓だ。
「やはりそんなに遠くもないな」
一人ごち、もう一度指輪に視線を落とす。
剣を握るよりも楽器を持っていた方が似合うような繊細さを湛える手がぎゅっと翡翠の部分を握り締める。するとそこからゆっくりとティファの声が流れ込んできた。
――この魔力は危険すぎる。かといって野放しになんてできない。

「何を考えているんだ、あいつは」
指輪をしていた時のティファの思考を断片的に手繰り寄せる。そうしてティファの意図を遅ればせながら理解したアレイズは吐き捨てるような声で言いながら深々と溜息をついた。契約神を守るなど、そんなことを考えてどうする。自分よりもティファの身の方がよほど危険に晒されやすいというのに。
しかし、ティファの思考には二つの意図があることもアレイズは読み取っていた。
一つは兎から感じた魔力の危険性故に、アレイズ達から兎を遠ざけること。
そしてもう一つはアレイズにも与り知れぬ所で兎を必要としていることだ。だがその理由が理解できない。
大体、常ならばマイが強く出ればティファも反論することなどなかったというのに、このような事態に発展するまで意地を通したのはなぜか。
契約の証たる指輪を外し、契約神を捨ててまで兎を取らなければならなかった理由は。片方は理解出来る。しかしどちらかと言えば、それはもう一つの理由のために後付けされたもののように思えた。
護りたいだけならばメイやマイが理解してくれずとも自分に話してもらえれば、まだ事態を良い方向へと導くことができたかもしれない。しかしその可能性をも捨て去ったのだ、ティファは。……これだけ冒涜したのだ、相手が自分でなかったらとうに罰が下っているのではないだろうか。
そう考えてしまうほどの事を彼女はあっさりとやってのけたのだ。しかし、その理由が分からない。
残された指輪をじっと見つめる。陽の光に照らされてきらきらと光る翡翠に映るのは空色の髪の少女ではなく、アレイズの考え込むような渋い顔のみだ。
自分はまだ、ティファニエンドを手放すことはできない。
ならば何としてでも連れ戻さなければならないのだが――。

「まぁ、どの道確かめるしかないか」
正義漢が強く優しくもあり、そして何より情に厚い性格のティファが追い求めるものが何であるのか。
何故自分を置いてまで兎と行くことを選んだのか。
アレイズはそれを確かめるべく目を閉じ、先程まで契約者であったティファの魔力を探ることにした。
とりあえず見つけたら説教から始めよう、そう考えながら。

◇　◇　◇

「はぁ……」
何度溜息をついただろう。
我ながらつくづく嫌になるが、かといって溜息は決して回数が増えるのを止めてはくれない。
「いつもはメイやマイがいるから迷うことなんてなかったのに」
溜息をつく理由の全ては腕の中の兎にあったのだが、自分一人でグラドに辿りつけるのかという不安もこのとめどない吐息の一因になっていた。
大体自分は方向音痴なのだ。この森から出られるかということさえ自信が持てない。
はぁ、と再度息を漏らす。こんなことじゃいけない、もっとしっかりしなくてはと考えるほど思考は上手く回らなくなる。
仕方なく立ち止まったティファは木の幹に体を預けて膝の上に兎を置いた。ただ何も考えずに歩いていたら酷い目に遭う事をティファは今までの人生で散々理解していたからだ。こういう時は慌てず騒がず、とりあえず周囲を観察することから始めなければ。差し当たって以前見た地図を頭に思い描いて、それから太陽の方角と照らし合わせて――。
そう考え眉間に皺を寄せたティファの耳朶を、吐き出すような低い息が打つ。

ぱちりと目を開けるとそこには兎しかいない。もしかして鳴いたのだろうか。

「兎って鳴くんだ」

ぶっという鳴き声なのか息なのか分からない音を発する兎は体躯を長く伸ばして腹をティファの体へとくっつける。後肢だけを膝につけ、あとはティファの腹や胸に身を預けた兎は甘えるようにティファを見上げた。瞬間、絡みつくような魔力が霧散する。

「？」

吐き気がするような憎悪が消え去り、森の清涼な空気が流れ込む。

一体何が怒ったの？　と周囲を見渡そうとも、魔力が消え去った理由が見つかるとは思えなかった。あるのはただ長生きをしている木々や草のみなのだから。

だとすると、霧散させたのは兎自身の意志？

「ちょっとごめんね」

指先を兎の首へと潜り込ませ首輪をなぞる。金細工に触れると微かに耳鳴りがしたものの、我慢できないほどではなかった。

「やっぱり、あの部屋にあったものと同じ……」

絶望と暴力衝動が込み上げてくる紋章にぽつりと声を落とすと、血色の部屋が見えた気がして慌てて首を振る。

そういえばあの光景をメイやマイも見たのだろうか。首を振ったついでかは知らないが、ふとそんな疑問が湧いてくる。

少なくともマイの様子を見る限り、彼女は見ている可能性が高い。そしてそれは別におかしな話ではなかった。

彼女はグランハート家の執事やメイドの娘であり、両親の死後七年間ずっとティファと行動を共にしてきたのだから。

ただ、それならばメイが何の危機感も持っていないことが不可解だった。

あの双子はほとんどの場合において常にお互いを隣に置いているというのに。……この認識が正しいのかさえ、もう分からないが。

ティファは脳裏に父母の姿を思い浮かべ、そこにいる執事家族の

中にメイの姿が見えないことに思い至る。
そうだった、彼等がいる時にメイがいることなどほとんどなかったのだ。でも一体どうして。
ぐるぐると頭を巡る問いへの答えをティファが出すことはできない。そう思いティファは葉に隠れた空を仰いで深々と息を吐いた。南天より傾いた日に腹がきゅる、と音を立てる……お腹空いた。
「選択したのは私なんだから」
軽くなった左手薬指を眼前まで持っていく。
そこにはまっていた翡翠の指輪は今はなく、恐らく元契約神の手にあるのだろうと考えたティファは目を閉じる。伏せられた睫毛が微かに揺れた。
ごめんね、と胸中で呟く。涙混じりのその声はしかしすぐに毅然としたものへと変化した。
泣いている暇などない。今は一刻も早くグラドへ行かなくては。恐らく人が多くいる場所ならば兎が不穏な事をしでかすことはないだろう。人を傷つけた神など、ティファは一件しか知らない。そしてその一件ですら曖昧なのだから。
「あなたがいれば」
この兎がいれば、グラドに行った時に手がかりになるかもしれない。
一人ぼっちは少し寂しいが、自分の我侭やこの兎の魔力に誰かを巻き込まなくて済むのならその方がずっと気が楽だった。
空元気を本物にするべく、明るい調子で兎に話しかける。
すると鳴き続けていた兎がぴたりと音を立てるのを止め小首を傾げた。魔力とは正反対の可愛らしさに思わず口元が綻ぶ。
そこではたとティファは自分が兎の名前を知らないことに気が付いた。もう一度体毛をかき分けて首輪を見てみるがそこにも名は刻まれていない。
「かといっていつまでも兎って呼ぶのも何だか変だし」
兎は兎なのだから別段困ることなどないのだが、せっかく行動を

共にするのなら名前があった方がいい。
それは人間のエゴだとティファは自覚していたが、兎が嬉しそうに息を吐き出したので名前を考えることに専念することにした。さわさわと葉が揺れる音が耳に心地良く響く中、思わず眠りそうになりながらも幾らかの時をかけてようやくティファが答えを導き出す。
「そうだわ」
せっかくだからうんと可愛い名前にしよう。
そう思って考えた名前を兎が気に入ってくれればいいのだがと考えながらティファが続ける。
「あなたの名前は――」
「そこにいるのか、ティファ」
低く、確認するような声にティファがびくりと肩を震わせる。スカイブルーの髪が過剰なまでに揺れ、かちこちと固まった体で声がした方向へ首を向けるとおよそ人間らしくない音がした。
「……ジュード？」
同じく確認するような声を発する。
すると少し安堵したような息が漏れた後で、草をかき分ける細い指が見えた。
背の高い草をかき分けて現れたのは、すらりと長い黒の体躯。
外套の所々に葉を付けた彼は、黒い双眸をすっと細めて眉間に皺を寄せながらティファを見た。
……明らかに怒っている。
しかも小言を言われるぐらいでは済みそうにない雰囲気にティファが立ち上がり、じりと後退しようとすると壁に阻まれるようにとんと背中に結界が触れた。
「これ以上逃がすとでも？」
「い、いや逃げる気なんて――」
「契約の証である指輪を外して脇道に逸れて、これで逃げていないって言うんなら逃走の定義は何になる。まったく、いい度胸をしている」

当たり前の話だが、笑って誤魔化そうにも無理がある。
ティファは逃げ場がないことに観念したように立ち止まった。
兎を抱きしめ、これから何を言われるのかを覚悟しつつアレイズの視線を受け止めた。……どうか、天罰だけは下りませんように。
見返すアレイズの彼の手には未だ翡翠の指輪がはまっており、その手の中にも同じものが包まれているのが見えた。
しかしそれはすぐにアレイズの手を離れ、緩やかな軌跡を描いて宙を舞う。
――え、こっちに来る？
「へ？　うわっ」
ティファへと投げつけられたそれを慌てて片手で受け止めると今度は兎の紋章に反応せずティファの手の中に指輪が収まる。鈍い光を放っていた翡翠がみるみる光を増し、持ち主の元へと返ってきたことを喜ぶように煌めいた。
そんな指輪の反応を遠目に見ながらアレイズが息をつく。
「俺が指輪を外されたぐらいで契約を破棄するような神だと思ったのか」
呆れ混じりの声と共に腕が伸ばされる。繊細そうな手とは違い、鍛えているのだろうと服の上からも分かる腕がティファに向けられると彼女はぽかんと口を開いてアレイズを凝視した。
「迎えに来たの？」
「当たり前だろう。他に何の用がある」
契約を一時的にとはいえ勝手に破棄した形になるというのに、あまつさえ進むべき道だって変えたというのに。
誰かが迎えにくるかもしれないという考えが胸の中に全くなかったと言ったら嘘になる。しかしそれはメイかマイ、もしくは両方が来るものだと思っていたのであって決してアレイズが来るとは考えていなかった。
だというのにこの状況は一体何事だ。
天罰が下るわけでも契約を破棄する言葉をきっぱりと言われるわ

けでも、冷たい言葉を浴びせられるわけでもない。ただ文句を言われ呆れられ、手を伸ばされているだけだ。

こんな馬鹿げた話、大聖堂中の本を探してもきっと見つからないだろう。

しかしアレイズはそんなティファの心情には気付いていないのか、腕を伸ばしたままにやりと笑う。それもマイが笑った時のように恐怖心を感じるものではなく、ただ悪戯っぽいだけの笑みだった。もしかしたらこちらが怖がらないように、意地を張らないようにわざとそうしているんじゃないかと思ってしまうぐらいに。

「その代わり多少の説教には付き合ってもらうがな。――帰るぞ」

離れていた時間はほんの一刻にも満たない。

それなのにどうしてこんなに離れていたことが苦しいんだろうか。指輪がないからじゃない、それはきっとアレイズがいなかったからなのだとティファは感じながらも伸ばされた手をじっと見つめる。

魅力的な提案に、寛大な対応。

それは全て有難くて嬉しいことだったが……。

「ティファ？」

「ごめんね」

ティファはゆっくりと首を振ってその手を取ることを拒絶した。

脳裏に浮かぶのは血溜まりに沈む父母の死体。壁面に大きく描かれた神の紋章。

あぁそうか、とティファはどこか納得したように胸中で呟く。森の清涼な空気と同じだけ頭がすっきりと冴え渡るのを感じながら、朧気ながらに理解する。

自分は皆を兎の魔力から守りたかったわけではない。

ただ、あの光景の再来を見たくないが故にこんなに意固地になっているのだと。

「ごめんなさい」

もう一度首を振り、芯の通った声で言い放つ。

――もう二度と、誰かをあんな目に遭わせることはできない。

第十七話

グラドへと向かう道を、ただ一人歩いていく深青の影がふと立ち止まる。

力なく空を見上げると、葉擦れの音と共に点のように小さな光が降り注ぐのが見えた。

もうしばらく歩けば森を抜けるだろう。そうすれば真っ青な空が見えるに違いない。

主が持つ色と同じ、スカイブルーが。

「そのうち合流できるわ。メイやアレイズ様も付いていらっしゃることだし」

マイは首を振り、誰に聞かせるでもない言葉を吐く。冷たさも棘もない、どこか自分に言い聞かせるような言葉にもう一度首を振った。

そう、きっとそのうち合流できる。

森では駄目かもしれないが最悪グラドで落ち合えばいいし、ティファもそれを願っていたじゃないか。

方向音痴のティファだけでは難しいかもしれないが彼女にはメイもいるし、神であるアレイズもいる。彼等がいたら何があってもティファをグラドまで連れて行ってくれるはずだ。だというのに、何故か落ち着かない。

さくりと土を踏みしめて歩き出す。日が暮れるまでに今日こそ森を抜けてしまいたいと考えるものの、頭の中では別のものがちらついてなかなか集中させてくれなかった。

兎が付ける首輪に施された金細工の紋章。

それをただ綺麗だと片付けられる程、マイは何も知らないわけではなかった。

――あれが、神の紋章。それも、アレイズ様が仰るにはかなり高位の神の。

大聖堂の地下で話を聞いた時には紋章の詳しい形までは見ることができなかったが、今回じっくりと見て確信することができた。あの紋章が七年前の事件の時、壁面に描かれていたものなのだと。

立ち止まり、今度は地面を見据える。亜麻色の瞳がゆらりと揺れて、静かに閉じられた。

「あの日の、魔法陣」

ぽつりと呟きが漏れる。同時に鮮明とは言い難い、酷く大雑把な記憶が脳裏を過ぎる。

七年前の事件の日。

マイはティファの父母が死んだ現場には居合わせていなかったが、別の現場には居合わせていた。

執事長とメイド長である、自分の父母が死した場所に。

――あの時屋敷中に描かれていた魔法陣はまだ稼働していたのに、自分のことだけは殺さなかった……いえ、殺せなかった。両親が自分を命賭けで護ってくれたから。

紋章というよりは、魔法陣の中央に描かれたものを紋章だと認識したというのが正しいが、形はしっかりと覚えているから見間違いなどではないだろう。どちらにせよ、神かそれに関連する者が父母やティファの両親を殺害したことに変わりはない。

炎を風を巻き起こし、多くの物を焼き尽くしながら天へと伸びた紅蓮の炎。

その光景をマイは決して忘れることなどできなかった。

しかしもしかしたらティファは忘れてしまったのかもしれない。

お互いあの事件の事に触れずに今まで生活してきたが、確かめておけばよかったと今更ながらに後悔する。覚えていないと知っていればもう少し別の対応ができた気がするのに、あれでは自分が何か隠していることが丸わかりではないか。

できればもう少しスマートに隠したかったものだと考え、ふぅと溜息をつく。

神と接したせいでとんでもなく面倒な事態になっている。そう考

え、少しだけアレイズを恨んだマイは、胸中ででもと呟いた。
それなら、どうして自分はティファが大聖堂に行くと話した時に止めることができなかったのだろうか。神と契約する聖女になることを阻止できなかったのは何故か。
無論あの状況では聖母であるアリアの手を取ることが得策だったし、形だけでも聖女でいることがティファの為だったことは明白だ。令嬢として育てられた彼女を生かす術を自分は他に持ってはいなかったのだから。
しかし、形だけの聖女であってほしいと願っていたはずの彼女は神と契約をしてしまった。
血溜まりでずっと神に救いを求めて続けていたティファを無視した役立たずの存在と。
そして何より、自分やティファの父母を殺した憎き敵と。
「……アレイズ様は違うわ」
強くなる疑念に自分自身で答えを出す。そう、アレイズは違う。あの時の神ではない。
最初は警戒してしまったが、彼がティファを害するような神ではないことは短い間でも十二分に理解できた。
――きっとあの御方なら、ティファ様を護ってくれる。これから先誰がティファ様を付け狙っても。
高位の神にアレイズが太刀打ちできるかは甚だ疑問だったが、見捨てるようなことをしないだけましだと思いたかった。人間がこのような考えを抱くなど冒涜以外の何者でもないのだが、護衛としてこのまま契約をしていてほしいだとかもういっそこのままアレイズとティファが結ばれた方がそこいらの男に捕まるより遥かにましだと考えている辺り懲りる気はないらしい。
そこまで考えてはっと息を呑む。
これではまるでティファが神に狙われているようではないか。
あの事件の真相は未だ謎に包まれており、何が目的だったかさえ分からないというのにどうしてそんなことを考えてしまうのだろう

か。今までの大聖堂での生活に、危険なことなど何一つなかったはずなのに。

「でも」

呟き、心の臓がある位置をぎゅっと指先でかきむしるように掴んだ。

理由の分からない確信にむず痒さが止まらなかった。

――あの事件の犯人は、きっとティファを狙っている。

しかしその理由は靄がかかったような記憶に邪魔をされて突き止めることができなかった。

「姉さん！」

ざくりと柔らかな土を強く踏みしめる音に目を見開く。そうして慌てて背後を振り返ると真紅のメイド服を着た、自分と瓜二つの顔立ちをした少女が駆けるのが見えた。

「メイ？」

「姉さん歩くの早すぎ！　追いかけるのにどれだけ体力消耗したと思ってるのよ！」

呆けた呟きを返すと、荒い息を吐いたメイが上体を折り曲げて膝に手をつく。

そうして自分よりも少しだけ大きめに見える亜麻色の瞳でマイを睨みつけた。

苛立ちというよりも、恨めしさの籠った瞳にマイがすぐに無表情を取り戻す。するとそこでようやくメイは苛立ちめいた感情を表情に載せた。

「どうしてティファ様を追い掛けなかったの？」

「そういうメイこそ、どうしてティファ様の方に行かなかったのかしら？」

「アレイズさんがティファ様を見つけてくれるって信じてるからだよ。きっと私達より早くにね」

責めるような問いに冷たく返すと、メイは早口に後ろを指差す。

そこにアレイズやティファがいるわけではないだろうが、後から合

流すると言いたかったのだろう。少々言葉が足りなくとも、メイの言葉なら大体理解することができる――双子だからこそ出来る芸当なのだが。

すっと目を細め無言で返すと、深呼吸を数度して息を整えたメイが上体を伸ばす。

そうして同じ目線の高さで真っ直ぐにマイを見据えた。力強い眼差しが射抜くように向けられる。

「もう一度聞くけど、どうしてティファ様を追いかけないの？　アレイズさんが探してくれてるからいいものの、下手したらティファ様じゃ戻って来られないかもしれないんだよ？」

純粋さを湛えた、真っ直ぐな瞳。

マイはそんな目をすることができる妹に羨望を抱いたが、すぐに胸中で無理だわと呟く。

自分はこんな風に真っ直ぐではいられない。

「言ったでしょう？　そのうち合流できるって」

だからマイはあくまで自分らしく冷静な声と冷たい瞳でそう返した。

するとメイが目を丸く見開いた後で、すぐに細める。毅然とした光がその瞳に宿るのを見つめていると、メイは指差す様にびしりと腕をマイへと突きつけた。

「そんなの嘘よ」

「どうして？」

確証も何もない言葉に嘲笑混じりの答えを返すと、メイはふっと口の端を緩める。

「双子だからって言いたいところだけど、今回はちゃんと理由があるんだからね。……姉さん、泣いてるじゃない」

「――え？」

泣いている？

指先で頬に触れる。なぜたそこは湿っていて、未だに留まることを知らない。

「何で……？」
どうして泣いてるのだろうか。
悲しいことなんて何一つないのに、辛いことだって今はまだ我慢できるのに。
――きっと突然思い出すことが増えて混乱しているのよ。
そう結論付けた所で、ちくりと胸を刺していく痛みが消えるわけではない。
視界が涙で滲む中、掠れた声で呟くとメイが大仰に溜息をついた。
肩が上げられ、大袈裟な動きで落とされる。
そうして常ならば自分が言うべき冷静な科白をメイに取られてしまった。
「まったく。……泣くぐらいならさっさと追いかけたらいいじゃない。というか、姉さんでもそんな顔することがあるんだね」
「……私は」
腰に両手を当てて仁王立ちするメイに向けて呟くと、彼女は首をふるふると振って手を差し出した。
同じ形の、だけど手相だけが少し違う手の平に視線を落とすと実にあっけらかんとした声が耳朶を打つ。
「ほら、行くよ」
仕方がないなとでも言いたげな笑みに気持ちがゆっくりと溶けていくのを自覚した。
生まれる前から隣にいて、生まれてからもずっとずっと隣にいた唯一人の同胞。
護るべき主でも仕えるべき神でもない少女に、マイが静かに手を伸ばす。震えながら伸ばした手は、すぐにメイに掴まれた。
熱くも冷たくもない同じ体温に張っていたはずの気がふつりと緩んだ。
しかしもうすっかり慣れているはずの感触は何故だか初めてのものに感じられて、マイはむず痒さに目を閉じた。
――やはり、何か大切なことを忘れてしまっている気がする。

それが何であるのかは分からないとしても、この胸のどこかに。
だがそれを今気にしているわけにはいかない。思い出すには時間が足りなかった。
「行きましょう」
元来た道へとブーツの爪先を向ける。
自分は一人じゃない。だけどティファは今も一人森をさ迷っているかもしれない。
そう考えると自分が起こしたことのはずなのに居ても立ってもいられなくなって、マイはやや早足に歩を進める。
すると手を繋いだままメイがひらりと真紅を翻して付いてきた。
「姉さんが兎を連れて行くことに反対したのは、あの光のせいだけじゃないんでしょ？」
若干低い、真剣味を帯びた声が耳朶を打つ。
「……ええ」
その声にどう答え様か逡巡しながらも、マイはしっかりと返す。
一人で抱え込むよりも、メイに話しておいた方がいい気がしたからだ。
自分一人でティファに反抗するよりも、メイのフォローがあった方がやりやすい。
「何があったの？」
だからマイはメイの立て続けの問いに思い悩んで足を止めることなく応えることができた。
「ティファ様には決して話さないと」
「約束する」
真剣だけどどこか能天気さの残る声。
しかしマイはその声に対して不信感を抱くことはなかった。
どれだけ呑気な声で発言していても、メイは自分が口にしたことをおいそれと破ったりはしない。
破ることがあるとしたら、それはティファの身を案じてのことだ。
そして毎回その判断は正しい。

そう、神器を取り返した時と同じように。
「七年前の事件、覚えてる？」
昏い声が乾いた唇から発せられる。
我ながら酷い声だと思いながら呟いた声に、メイがしっかりと頷いた。
その反応を見てマイが一度大きく息を吸う。
長い、長い話になるだろう。その覚悟をその一息に詰め込んで。

◇　◇　◇

「御免なさい」
きっぱりと告げたティファに、アレイズが眉を顰める。そこで初めて苛立ちを見せたアレイズは伸ばしていた手を更に奥へと伸ばす。
体ごと近づけて伸ばされた腕が、そっとティファの頬へと触れる。
え？　と呟いた時にはもう捉えられていた。
「お前は……」
「へ？　ひゃっ！　い、いひゃいー！」
皮の硬さが伝わると同時にティファの頬に血が集まるが、それを無視してアレイズがぎゅっと頬をつねる。
鋭い痛みに思わず涙が出そうになり、思わず間が抜けた声で文句を言うと怒声を返された。
「うるさい！　大体お前は元聖女の癖して神にも人間にも心配ばかり掛けて！　方向音痴を自覚してるのなら一人で出歩くな馬鹿者！」
方向音痴だとそうもはっきり言われると立つ瀬がないのだが、事実なだけに言い返せない。
ティファはそれに関してはどう頑張っても言い返す言葉がないと、素直につねられたまま頬をびよんと伸ばすアレイズの手に自分のそれを添えようとして失敗した。兎と指輪に両手を塞がれているのだ。
「ふみゅー……ごめんなひゃい」
腕に力を込める。そうしてその中に温かさを感じながら、ティフ

ァは涙目でアレイズを見上げた。
何があっても兎を手放す気などなかったが、道に迷ったら困ることは確かだ。
そう考えて謝罪したティファに、ようやく溜飲が下がったのかアレイズが手を離す。ぱっと離れた痛みを指輪を持った方の手でさすると、ひりひりとした熱が残された。もしかしたら赤く腫れてしまっているのではないか。
「いたた、ジュードの馬鹿」
腹立たしさに恨めしい声を上げると、アレイズはつんと澄ました顔でそっぽを向いた。
「真の馬鹿者に言われても痛くも痒くもない。それで？　何が原因だ」
「何がって」
「たかだか兎一匹のためにこんな事態を起こしたんだ。契約神たる俺に説明ぐらいはあってもいいと思うが」
それから、とアレイズが続ける。葉擦れの音に合わせて衣擦れの音が耳朶を打ち、先程ティファの頬をつねった指先が今度はティファの手の中にある指輪を摘んだ。そして彼女の左腕を掴む。
翡翠が煌めき、元あるべき位置にはめられた。
「っ？　どうして」
息を呑みながら身を引こうとするが、アレイズが腕を掴んでいるせいで敵わない。普段はメイドにも勝てない神だというのに、こうやって力を見せつけられると相手も一応男なのだと思えて、ティファはかあっと熱くなる頬を空いた方の腕で隠しながらアレイズを睨みつけた。
勝気な瞳が怒りを籠めて向けられても特に狼狽した様子を見せない。それどころかふんと鼻で笑う始末だ。
「言っておくが契約は解除されていないし、解除することを認めた覚えもない」
「でも」

確かに、契約とは口付けであり他の誰かと口付けをしない限り契約権が移行しないことは聞いている。
何より聖女とは神より立場が弱く、契約も神が望まねばすることができないのだ。ならば解除だってそうだろう。
ティファとてそれが理解できぬほど子供ではなかったが、ここまでしたのだからいい加減契約を解除されてもおかしくはないと思っていたのが本音だった。第一何と言われようとティファはアレイズと共に行くことはできない。それが伝わったのか、アレイズはぎゅっと掴んだ手首に力を入れて言い放った。
「お前が兎を連れて行きたいなら、百歩譲ってこの寛大な神が許してやる」
「へ？」
普段聞かないような、厳かな声にティファが瞠目する。
しかしそれをも無視してアレイズが早口に続けた。言葉を選んでゆったりと喋るわけではない。
既に決めていたことを淡々と喋っているような、そんな雰囲気がひしひしと伝わる。
「そのせいでメイとマイが怒り心頭になってお前を置いて行くことがあっても、俺がお前をグラドまで連れて行く。一度俺の我侭に付き合ったお前が悪いんだからな。最後まで付き合え」
付き合えって。
「我侭なんて思ってないわ。それにこれは私の我侭よ」
首を振って答えると、切り込むように鋭い声が耳朶を打つ。
どこまでも食い下がるアレイズの声は、そのくせとても静謐なものだった。焦りなんて、微塵も感じられない。
兎を見下ろし、どこか睨みつけるように黒瞳が向けられる。すると兎が威嚇するようにぶっと鳴いた。
「グラドを目指すのはお前も同じだろう」
「それはそうだけど」
「俺の行く所に自分も行ってみたいと言ったのはお前だ」

「言ったけど」
何が言いたいのだろうか、アレイズは。
ティファは彼の早口に対抗するような早さで返しながらも頭が混乱するのを止めることができなかった。左手薬指にはめられた指輪は安堵するように光るのみで、同じ指輪の持ち主である神の心などまるで教えてはくれない。
心の中身があけすけになることは断固として拒否するが、こういう時ぐらい相手の気持ちが伝われば便利なのに。
胸中でそう文句を言いつつ、ティファは首を振る。
「それでも、行けない」
「だからその理由を訊いている」
そういえばそうだった。
ティファはアレイズの的確な言葉にぱちりと目を見開きながら、しかしすぐに目尻を吊り上げる。
自分が語る言葉が少しでも真剣味を帯びてアレイズに伝わるようにと。
「この兎が危険なことは分かってるんでしょう？　三人が行ってた事以上に、この兎から発される魔力は危険過ぎるわ」
「分かるのか？」
「さっきから、ずっとまとわりついてきてたから」
今は何も感じないけれど。
軽くなった体をアレイズの瞳がしげしげと見つめる。
そんな風に見られると困るんだけどと考えていると、清々しいまでにきっぱりとした声を返された。
「ならば尚更お前を一人にすることはできないだろう」
もっともだ。でも、ティファはそれを願わない。
「……七年前の父様と母様みたいになっちゃうかもしれないんだよ？」
「七年前？」
憂いを帯びた高い声にアレイズが眉を顰める。

だが事情こそ分からないものの彼にはティファが言いたいことが分かったのだろう。

はぁ、と大仰な溜息の後でティファの手首をぐいと引き寄せる。

「ちょ、ジュード！？」

兎を庇いながら狼狽した声を上げるが、その間にもティファの体はアレイズの腕の中へとすっぽり収められてしまった。微かな土の匂いと汗の匂いに、自分を探したせいなのだろうかと思案する。

常ならば出来得る限り体力を使おうとはしないのに。

耳元にアレイズの唇が寄せられる。ティファはその感触にくすぐったさを感じて身動ぎするが、ほとんど動くことはできなかった。顔の近さに頬が先程よりもずっと熱くなる。

頬をすり寄せるように耳元に寄せられた唇が吐息から言葉を紡ぐ。低い声が至近距離で発せられ、ぞくりとティファの背が震えた。

「過去のことを、俺は知らない」

真摯な声が、だがと続ける。

「常日頃から感謝が足りない所から察するにお前は忘れているのかもしれないが、俺は神だ。いくら高位神相手とはいえおいそれと敗北するわけがないだろう」

「……絶対なんて言いきれないじゃない」

「そうだ。しかしそんな危険な力とお前を一緒にしておいた方が、血が流れる可能性が高い」

このまま兎と一緒に居ればいつか血が流れてしまうかもしれない。しかしそれを知っていてなおアレイズはそう言い放った。まるでティファの身の方が大事だと言わんばかりの言葉に、喉の奥がしゃくりあげるような音を立てる。

そうしていると厳しい声が耳朶を打つ。脳裏に叩きつけるような声にティファがはっと息を呑んだ。

「自惚れるな」

「っ」

「お前は強い魔力を持とうとも人間であり、神が持ち得る魔力に太

刀打ちできるわけじゃない」
そう、自分は唯の人間だ。そして相手は元が人間であろうと今は神。
「だが、神と契約しその魔力を供給されれば話は別だ。俺の魔力ならお前を護れる」
確かにそれはそうだろう。しかしその魔力は、決して自分の為に使われるべきものではない。
その為に与えられたものではないはずなのだから。
「神様は、世界を守護する存在なんでしょう？」
「それがどうした」
「護る相手を間違えてるわよ」
「契約者を護ることも神の務めだ」
さらりとした言葉に、詭弁だと胸中で呟いた。アレイズの腕に素直に抱かれながら小さく嘆息する。
どんな理由をつけようと、神が世界の為に在らねばならないことに変わりなどない。
だから同じ神が自分を傷つけようとするのなら、それは世界の意志――世界の、意志？
自分の思考に瞠目し、ティファは七年前の事をもう一度よく思い返してみる。
血溜まりに沈む父母に、焼ける屋敷、からからに乾いたアリシアの花。
あれらは全て、世界の意志だったのだろうか。だとすれば余計に、アレイズと共にいることは危険だ。
一度狙われた家の人間と契約し、あまつさえ世界に会いに行こうとしているのだから。
「駄目、駄目よ！」
手を伸ばして必死にアレイズから離れようともがくが、力で敵うはずがない。
だからティファは必死に声を張り上げてアレイズに叩きつけた。

「七年前の事件には、この子の首輪に付いてるのと同じ紋章が関わってる。もしかしたら世界が関わってるかもしれないのに！」
ぴくりとアレイズの片眉が上がる。
「――何だと？　だが、レイナがそんなことをするはずが」
「神が世界の意志によって動くのなら、有り得ない話じゃないわ」
信じ難いと言葉を濁らせるアレイズに、更に言葉を叩きつける。
有り得ない話かどうかはティファには分からない。しかし全くの無関係だとも思えなかった。
断片的な記憶の先にはまだ足りない記憶が山ほどあるように思われる。
ただ、その全てに兎の首輪と同じ紋章が関わっていることは自明の理だ。少なくとも、七年前の事件に関しては。
「急ぐ必要があるな」
「えぇ、だからアレイズは先に行って――」
「お前は世界に会わなくてもいいのか？」
水面に小石をそっと落としたように、緩やかな動きで心が波打つ。
「私は……」
「逃げるつもりか」
ざわめく心を押さえ込み、逡巡した苦い声を返す。
世界に会うことが真実を掴むための最短ルートだろう。しかしそうすればアレイズは危険を回避できない。
アレイズだけではない。メイやマイも同じだ。
七年前の事件で彼女達も父母を失っているのに、これ以上の物を失わせたくはなかった。
「違うわ」
「真実を確かめず、父母の死から目を背けるのか」
「違う！」
「何が違う。世界が関わっているかもしれないと言いながら、世界に会うことは拒むのか」
悲鳴のような声で答える。

だがその理由は口に出来ないままでいると、アレイズが嘲笑混じりの声で続けた。

細められた黒瞳と吊り上がった唇を見て、自分はそんなにも逃げているように見えるのかと思案する。

確かにそう見えるかもしれない。事情を告げていない以上、自分がただ世界に会いたくないように見られても仕方がないのかもしれない。

そう考え溜息を漏らした彼女の考えは若干外れていた。

「本当に世界の意志で神が動いたのなら、お前はきっと殺される。一度殺しそこねた一族の末裔を生かしておくことはしないだろう。世界が許しても、他の神々が許さん」

「そうよ。だから私は一人で行くの」

「死に急ぐつもりか」

「誰も巻き込まないためにはこれしかないわ」

「ならば生きたいと？」

「当たり前じゃない」

死にたいなどと誰が願うというのだろうか。

第一願うぐらいなら七年前のあの日に願っている。

双眸に怒りを秘めてお互いに見つめ合う。するとアレイズがふっと表情を和らげた。

抱きしめる腕の力が優しくなり、ぽんと背中を叩かれる。

「世界は決して俺だけは殺さない。神々がどれだけ願っても、世界がそれを許さない」

「……どういうこと？」

「友の死を願う馬鹿は居るまい？　だからお前は俺と共に行けばいい。その方が生きていられる」

確か、アレイズは神に呪いを掛けられて神になったのだったか。

彼の言葉にそう胸中で呟いていると、そっと優しい声が耳朶を打つ。ささくれだった心を包み込むような低い声に唇を噛み締める。

――生きていられる。

その言葉が酷く胸に突き刺さった。生への執着心など今まで感じたことがなかったが、それでも生死を選べるのなら自分は生を願うだろう。

「世界は絶対貴方を護ってくれるの？」

「本来の在り方とは逆だが、ほぼ確実だ。そして俺が起きて世界を歩くためには契約者が必要になる。お前が害されることもない」

できれば絶対という言葉が欲しかったが、元よりこの世界に絶対などない。

ティファはそう結論づけて小さく頷いた。

「……分かったわ」

アレイズ神、とゆったりとした高い声で言い放つ。

「この兎と共に、私を貴方の望む場所へ連れて行ってください。神と聖女の契約の元に、私は貴方に御供します。例えその場所が世界の意志たるレイナの御前であっても」

それは父母やメイ達の両親の死の真相を暴くために利用すると言っているようなものだった。

そしてそのために、神と会話するために叩き込まれた丁寧な言葉を使っている。

でもまさかこんな時に使うことになろうとはと胸中で苦笑を漏らしていると、アレイズが僅かに身を離して今度は嬉しそうに笑んだ。利用されることなどまるで意に介さないとその顔が告げていた。

「良い返事だ。ならば俺はお前の罪を全て赦し、その生命を護ろう。この契約が続く限り、俺達は共にある」

左手が持ち上げられ、アレイズの唇に翡翠が触れる。

「お前は俺の契約者、俺はお前の契約神」

心が震えるほどの艶やかな笑みは、お互いが放つわざとらしい厳かな言葉は全て再契約を交わすためのもの。

解除などされていない契約を、しかし心からもう一度望むためのものだった。

「努々忘れることのないよう」

だからティファはアレイズの静謐な声に小さく頷く。
ほんの僅かの別れに終止符を打ち、今度こそ本当の契約を交わすために。
そうして神ジュードと人間ティファニエンド＝グランハートが契約を終えると、彼等は大きく息をついた。このような真面目な態度は二人とも慣れていないのだ。
「二度と外すな」
指輪の事を言っているのだろう。
ティファは今しがた口付けられた翡翠に目を落とし、唇を尖らせながら拗ねた声で言い放つ。
「う、分かってるわよ。それより、お願いがあるんだけど」
「何だ？」
霧散した空気に脱力したのか、アレイズが木の幹に腰掛ける。
隣に腰掛けると兎がじたばたと藻掻いて膝の上へと体躯を滑らせた。
余程お気に入りらしく、長く身を伸ばしてくつろいでいる。人畜無害な動物の典型例を見せられたような気がしてティファは苦笑を漏らしながら続けた。
「今の話はあの二人にしないでほしいんだけど」
「紋章の話か？　二人は知らないのか」
「どうかしら、少なくともメイは知らないように思えたけど。どちらにせよ、あの二人の両親も同じ事件で亡くなってるから、出来る限り思い出させたくないの。二人の両親は、ただ巻き込まれただけのはずだから……」
故人のことは決して忘れたくはないものだが、それ以上に死した日のことは出来るだけ思い出さない方がいい。
それが凄惨なものであればあるほど、知らないで済んだ方がいいのだ。
見てしまったティファは真相を確かめることを選んだが、誰もがそれを選ぶとは限らない。

ふわふわとした毛を撫でていると、アレイズが兎を一瞥してから頷いた。束ねられた髪がさらりと流れる。
「分かった。約束しよう」
「うん、ありがとう」
逡巡を見せない声に礼を述べると、アレイズがうんっと伸びを一つしながら軽やかな声で告げた。
「まぁ、例え何らかの事情があの二人がお前を恨むことはないだろう」
「……そうね」
きっとアレイズの言っていることは正しいのだろう。
今更両親を失った時の話を蒸し返した所で、その元凶になった家族を責めるようなことをあの双子は決してしない。もしそんなことをするようなら、記憶が薄れる前に離別していたはずだしそうなっていないのならそれが答えなのだとティファは思った。
「とりあえずはあの二人に何て言うかが問題ね」
「見つける所から難儀だがな」
それもそうだ。
辟易としたアレイズの声に苦笑を漏らす。しかしその刹那土を踏みしめる音が鳴り響き、ティファはアレイズと目を見合わせてから慌てて立ち上がった。
聖夜祭の行われた村からグラドへは他に村もない、人の行き来も少ない場所だ。
そんな場所で人の足音が聞こえるということは、要するに。
かさりと草が揺れる。その間に血のような紅が見えてティファは思わず声を上げていた。
「メイ？」
すると真紅がぴたりと動きを止め、注意深く草の間からティファ達を凝視する。
そこにスカイブルーを見つけたのだろう、メイは至極明るい声で両腕を振った。

「あ、ティファ様！　よかった、ちゃんとアレイズさんと合流できたんだね。ほら、姉さん！　ティファ様見つけたよ」
「え、えぇ」
明るい声に続く声は、酷く緊張したものだった。
メイと声質が似ているのにそれだけで別人のものに聞こえてしまう……実際別人ではあるのだが。
「マイ」
「ティファ、様」
気まずいのか、上目遣いにティファを見つめる亜麻色の瞳が半分ほど閉じられる。地面に視線を縫いつけられたように、そこから動かない。
声を掛けると更に固い声で返されてしまい、ティファは困ったようにメイを見るが彼女は大丈夫だというように笑うのみだった。姉を信頼していることがそこから見て取れるが、しかしこれで何が大丈夫なのかが疑問だ。
道なき道を歩いてきたのか、アレイズ同様草をかき分けてやってきた二人は対照的な色と形のメイド服を揺らしてティファの眼前へと近付く。真紅のメイドは堂々と、深青のメイドはおずおずと。
両手をぎゅっと握り合わせたマイが唇を噛みしめ、何かの決心をしたように顔を上げる。
「ティファ様」
それを見守っていると、彼女は数度深呼吸した後で深々と頭を下げた。
「申し訳ありませんでした」
「え？　ちょっと、どうしたの？」
「主であるティファ様に刃向かったのは勿論、それ以上に貴女を一人にしてしまいました。メイド失格です」
先程兎を連れて行くのを反対したことだろうか。
しかし一人になることを選んだのは自分なのだから謝るのは間違いというものだ。

ティファはそう考え謝罪そのものを取り消してもらおうと考えたが、そうすると事態が更にややこしくなることが理解できていたから渋々受け止めることにする。

「いいのよ、そんなこと」

そうして受け止めた上で赦すことにした。本当はそんなことをする必要などないのだが。

「心配して探しに来てくれたんでしょ？　御礼を言うことはあっても、怒りはしないわ」

かといって兎を置いて行くことはできない。

それだけは伝えたくて、頭を下げたままのマイの肩にそっと触れる。

地面を見ると、紅の瞳が心配そうにマイを見つめているのが見えた。兎は兎なりに心配していたのかもしれない。

「それに、この兎が危険だからマイは反対したんでしょ？　だから謝るのは私の方よ。この兎を置いて行くのは反対だけど、それも謝るのは私でなくちゃいけないの」

そう、だからこの件に関して一番怒られるべきは自分だ。

そう考えたティファはマイの背筋を正させてからにっこりと笑い、今度は自分が頭を下げた。

今まで一度も真剣に下げたことのない頭を、メイドである二人に向けて。

「「！？　ティファ様！？」」

狼狽した声が折り重なり、ティファの耳朶を打つ。

それでもティファは頭を上げずに自分の青い髪が視界の端で揺れるのを見ながら続けた。

「二人とも御免なさい。それと、心配してくれてありがとう」

それが今のティファに言える精一杯の言葉と謝罪だった。

恐らくこれから先の状態によってはまだまだ謝罪を言う必要があったが、今の所はそれだけに留めておいた。

下げられたままの頭に静かな呟きが落ちる。

「いいえ……」
どこか呆けたようなマイの声。
その声に余程驚いているのだろうなと感じていると、彼女はすぐにしっかりとした声を発した。驚きから立ち直った声は凛と響き、ティファの頭を上げさせる。
「いいえ、勿体無い御言葉です」
「そうだよ。謝ることなんてないよ」
続けざまに放たれたメイの言葉にティファは顔を上げ、心からの笑みを浮かべる。
これでようやく四人揃ったと安堵するように。
「そっか」
「えぇ」
二人して呟き合うと、メイがマイの背中をどんと押す。するとたたらを踏むように数歩前に出てきたマイの慌てたような顔が見えて、ティファは思わず吹き出してしまった。
いつだって理性な彼女が慌てたような顔をするなど、緊急時以外ではそう見られるものではない。
ティファは貴重なものを見たとばかりに笑い声を大きくする。しかし常ならば訪れる窘めは今はなく、代わりにマイの笑い声が返ってきたのでティファはおろかアレイズまで瞠目する。
ただ、メイだけは別段意外ではないという風に笑い合うティファとマイに向けてぶーぶーと文句を放った。
「いーなー！　姉さんばっかりティファ様と仲良くしちゃって」
「お前もあんな風になりたいのか？」
「うーん。喧嘩したいとは思わないけど、やっぱりああいうのっていいですよね。何か親友らしくてさ」
「お前も親友だろう」
「勿論。でも、姉さんとティファ様には敵わないから」
アレイズとメイの言葉に何か返そうと思うものの、笑いの衝動が止まらずそれは敵わない。

だからティファは胸中でそっと二人とも親友だと呟いて笑い続けた。
そのせいで気付かなかったのだ。
メイの浮かべる純真な笑みが偽りだということに。

◇　◇　◇

「……」
くすくすと笑い続けるマイとティファを見つめ、メイは笑んだまま思考する。
七年前の話をマイから聞かされた時、メイは心がざわつくのを止めることができなかった。
事件が起きた当日、メイは近くに住む友人宅に呼ばれていて屋敷の中にはいなかったのだ。
そのおかげで事件に巻き込まれることも、凄惨な現場を見ることもせずに済んでいた。……果たしてそれで良かったのか、今のメイには判断ができなかったが。
そうして何も知らずに遊んできたわけだから、帰った時に屋敷が炎に包まれていたのを見た時は子供ながらに驚かされたものだった。爆ぜる火の紅が赤焼けより鮮やかに周囲を照らし出し、恐怖よりも先に呆けてしまったことを覚えている。
しかしその事件を起こしたのが、まさか神絡みだとは想像もしていなかった。
それどころか、犯人が誰なのかさえ考えたことがなかった。
あの後屋敷に入れてもらえなかったメイには、事件はあまりに遠い出来事に過ぎたのだ。
――それにしても、神に全てを奪われた自分達が大神殿にいたとは何と皮肉なことか。
そして過去を引きずりながらもそれを隠し続けてきた姉の、何と哀れなことか。

きっと彼女は自分よりもずっとずっと凄惨なものを見てしまったに違いない。

それでも誰かに縋らずにいたマイに対し、メイは感嘆めいたものを感じていた。そんな強さを、自分は持ってはいない。

「う……っ」

「メイ、どうしたの？　メイ？」

その時、ずきりと強い痛みを感じて呻きながら頭を押さえる。そんなメイの姿にマイが声を掛けるが、その声が酷く遠く感じられた。

ずきずきと頭が痛む度に視界がぼやける。一体何なのよと胸中で毒づいていると、脳裏に低い声が響く。

やけに鮮明に聞き取れる声は、視界と引換に得たものだったのか。

低い声は、遠い日に聞いた父の声だった。

『お前だったら、誰も気付かない』

――気付かない？

『そうよ。お前なら、マイのように目を付けられることもないわ』

――それってどういう。それに気付かれないって、誰に何を……。

次に響いた母の声に問いを発そうとするものの、声はもう響かない。記憶の奥底へと沈んでしまったのだ。

そう、これは記憶だ。だけど思い出すことができない。

「メイ？　メイ！？」

「あ……」

ゆるゆると記憶を手繰り寄せようと思考の奥へと手を伸ばす。しかしそれは肩を強く揺さぶられる衝動で現実へと引き戻されてしまった。

ツインテールが大きく揺れ、メイがぱちりと目を開く。すると青ざめた顔のマイが、ティファがこちらを見ていた。

「だ、大丈夫。ちょっと頭が痛くなっちゃって」

「そう……ティファ様に続いてメイまで。何があったのかしら」

分からない。

「分からないよ。でも大丈夫、もう痛くないから」

メイは痛みの遠のいた頭から手の平をどけて無邪気に笑ってみせる。それでもマイの憂い顔が晴れることはなかったが、幾分和らぐのが見えた。

目尻の赤い姉の目を見て、胸中で呟く。

言うべきだろうか、今の声のことを。

しかしあれが自分の過去だったなどという確証はどこにもない。思い出せない記憶なんて、ないも同然なのだから。

ただ自分の予感としてはあれが過去だったのだと言い切ることができる。そこが悩みの種だった。

兎が現れ、マイが感情を昂らせ、そして七年前の話を聞いた直後のことだ。何か関係があるのかもしれないと考えて然るべきだろう。だがその関連性がどうにも見えない。

「それよりもう行かなくちゃ、今日中に森を抜けないとまた野宿になっちゃうよ？」

「……そうね。でもメイ、無理しちゃ駄目よ」

「ティファ様こそ」

わざとらしく明るい声で言うと、ティファが数瞬黙り込んだ後で前方を見据える。

それに対して口の端を吊り上げながら今度はアレイズを横目に見た。

鋭い視線を少しだけ和らげてティファを見る黒瞳に瞼を伏せる。

――このまま一緒に行ってもいいのかな。

そんな疑問が頭を過ぎる。

炎で崩れた屋敷、死んだ両親達、多くの死があの日一度に訪れた。

そしてその全ての鍵は、神たる紋章が握っている。

それなのに同じ神であるアレイズと共に行くことが果たして得策なのかどうかメイには分からなかった。

世界は神を守護するためにあるという。

そしてそれ以外のことに力を行使することがないのなら、あの事件は世界の意志で起きたことじゃないのか。

そう思えてしまったせいで、進み出した三人の背中を見つめながらメイはぎゅっと手の平を握り締める。

きっとティファもマイも、そしてアレイズもそれぞれ思う所があって、でもそれを隠しながら歩いている。自分だって隠し事があることに違いなんてなかったが、それでも自分が唯一彼等を客観的に見ていられる立ち位置であることは理解していた。神という存在からも七年前の出来事からも、メイは少し外れた位置に立っていたのだから。

だからこそ彼女は唯一実感することができた。

もしも彼等の思惑が相反するものになったなら、その時は一時ではなく永遠の別れになることを。

意志の強い彼等は、そうなることをきっと厭わないと知っていたから。

第十八話

どちらからともなく笑うのを止めた後で、マイが口を開いた。
「ところで、その兎の名前は決めてあるんですか？」
へ？　とティファがその言葉に目を丸くすると、マイが小首を傾げて更に問う。
それはまるでティファが絶対に兎の名前を考えていると信じて疑っていないようだった。
だが、まさか名前を尋ねられるとは……。
ティファはアーモンド型の瞳をじっと見据え、ぽかんとしたままマイの問いに答えることができない。
――だってこれじゃまるで、この兎を。
「何を驚いているんですか？　その兎ですよ。……放って置くつもりはないのでしょう？」
まじまじと己を見るティファの姿に、マイが微苦笑を浮かべて兎を指差した。
ぴくりと動いた耳が揺れ、ついでティファへと向けられる。答えを待つような態度に重ねてマイの言葉が続いた。
「例えその兎がどれだけ危険でも、アレイズ様がいれば大丈夫でしょう。そうですよね、アレイズ様？」
「当たり前だ、契約者であるティファに危害を加えることを俺が許すわけがないだろう？」
唐突な問いにしかしアレイズは驚いた様子を見せず、堂々と言い放つ。だが片眉を上げている所からして、ティファ同様意外だと感じていることは確かなようだ。
ティファはマイとアレイズの言葉に胸中で小さく安堵の息を漏らす。
無意識で吐いたその息にようやくティファの理性が追いつく。
「連れて行っていいの？」

「いいのも何も、選択なさるのは私ではなくティファ様です」
メイもマイも、元々兎を連れて行くことに反対していたはずだ。
だからこそティファは彼女達から離れたのだし、こうして眼前に立つ彼女達が意志を曲げなかったら同じく意志を曲げない自信があった。しかし、正反対の意見を持っていたはずのマイが今こうしてあっさりと兎の同行を許している。それがティファには意外すぎたのだ。
お互い、意志の硬さは折り紙付きなのだから。
胸を張って答えたマイは兎をそっと腕に抱きかかえ、その体躯を撫でていく。白い毛並みがつやつやと輝き抱きかかえる際に幾らか暴れていた肢体がぴたりと動きを止めた。
「可愛い」
紅の瞳がくるくると目まぐるしく周囲に向けられるのを見下ろし、マイが呟きながら口元を緩める。
そういえばマイも可愛いものが大好きだったはずだとティファが考えていると、すぐにいつもの理知的な表情を取り戻したマイが自分も自分もと手を伸ばすメイに兎を手渡した。
「そういうわけです。それで？　この兎の名前は決めてあるんですか？」
そこにはやはり絶対決めていないわけがないという気持ちが見え隠れしていたのだが、あえて問う形を取ったのは断言してみせることが失礼だと考えたからか。
今更そんな気を遣う必要など全くないのだが、ある程度上下関係に厳しいマイにそのようなことは話しても無駄だと考え、ティファはこくりと頷いてみせる。マイが見え隠れさせる感情は確かに間違いなどではないのだから。
スカイブルーの髪が幾重にも折り重なった糸のように流れ、純白のブラウスの上を滑っていく。
「えぇ。ピコって名前にしたいなって考えてたんだけど」
「ピコ？」

「昔大聖堂で読んだ絵本に書いてあったでしょ？　兎が旅する絵本なんだけど。あれの主人公の名前を取ったの。兎だし、丁度良いかなって」

首を傾げるメイに補足として理由を説明すると、そういえばあったねと脳天気な答えが返ってくる。

しかしマイはどこか微妙そうな顔を浮かべていた。恐らくティファの口にした話が物語の本筋ではないと知っているからだろう。ティファとてつい先日知ったばかりなので、メイが知らなくとも無理はないが。

ティファが口にした物語に出てくるピコは確かに兎だ。

だが、ピコはただ旅をするだけの兎ではなく神であり、兎が罪に溺れた人間達を裁くか否かを決める“最後の審判”を下す裁判官だったというのが本来の物語だった。恐らく幼い子供が読んでも受け入れられるようにと話を変えられていたのだろうとは思うが、成長してから本を探してみて驚かされたことを覚えている。

神の兎。

物語に出てくるその神の名を与えられた兎にマイが視線を落とす。少し暗い影の差し込む亜麻色にティファが黙ったまま反応を待つ。

「そうですか……」

小さな呟きが漏れる。それを固唾を飲んで見守っていると、ふぅと溜息をついたマイが苦笑交じりの笑みを浮かべた。

「良い名前ですね」

否定的な答えが返ってこなかったことに、ほっと安堵の息を漏らす。

「……安直な名前かとも思ったんだけど」

「そんなことないですよ？　とても可愛い名前です」

「そうだよティファ様！　冒険兎なんて、この子にぴったりじゃない」

笑みを浮かべるべきか否か悩み、苦味と喜色を半々に詰め込んだ微妙な笑みを浮かべるとピコの耳に似たツインテールがぴょこんと

揺れる。
しかしその言葉に、だから微妙なんだけどとは言えなかった。気付いていないのなら、そのままの方がいい。
「うん」
だからティファは頷いて指先で兎の眉間を撫でた。小さなそこはふわふわとした柔らかな感触で、何故だか胸が暖かくなるのを感じながら空を見上げる。
日がゆっくりと傾いていく。
それを見て、少しだけ辟易とした顔を浮かべることを忘れずに。

◇　◇　◇

「結局、今日もこの森に野宿ってわけね」
辟易としたティファの予想は大当たりし、その日もやはり森の中での野宿になった。
恐らくあと二時間も歩けば森を抜けるのだろうが、その先の街道で野宿をするつもりにもなれず、結局彼女達は昨日同様開けた場所で暖を取っていた。
火の粉がささやかに吹き上げる。それをじっとりと睨んでいるとアレイズが渋い声を上げた。
「まぁ、一日遅れるぐらいなら問題ないだろう」
「それでもう何日も遅れてるんだけどね」
遅れた理由は兎とティファにあることは否めないが、それでもグラドを急ぐ彼等には一日という時間ですら惜しいことは確かだ。
だが、そのおかげで得られたこともある。
「一時はどうなることかと思ったけど、ピコがここにいることが出来て良かったわ」
そう、あの場をティファが去らなければ今頃この兎は森のどこかに置いて行かれる所だったのだ。危険とはいえ、やはり見た目は愛らしい兎にそんな無体な仕打ちはできない。……野生の兎ならば人

間といる方が苦痛になるのかもしれないが、目の前の白兎が野生なのかどうなのかはティファ達には分からなかった。
寝袋の準備をしながら言い放ったティファにアレイズがにやりと口の端を吊り上げる。
何かからかいの言葉でも口にする気だと直感的に察すると、予想通り楽しげな声が降ってきた。
「お前もここに戻ってくることが出来たしな」
「むー……」
確かにそれはそうだろう。
不満の声を漏らしながらちらりとメイド二人を見やり、一人ではないという実感が胸に込み上げる。
だからティファはそれ以上頬を膨らませるのを止めて肩の力を抜いた。
「アレイズのおかげよ。アレイズが追いかけて来なかったら、きっとそのまま森を出ようとしてただろうし」
「それはないな。どうせお前は俺が見つけなかったら道に迷ってそのままあの世に逝ってたさ」
だがそこでぴくりと眉が動く。
道に迷ってあの世に？　幾ら何でもそれは失礼だ。
「何よそれ！　私はそこまで方向音痴なわけじゃないわよ！」
「はいはい、そういうことにしておいてやるから。でも森の中で獣道を歩いて迷ったのは事実だよな？」
「もー！　だからあれは不可抗力！」
「はいはい」
あまりといえばあまりの言葉にティファが激するが、アレイズは視線を遠くへとずらして適当に流すだけだ。
それが更にティファの怒りに火を注ぐのだが、森から出られないかもしれないという自覚はあっただけに強く言い返すこともできない。強がってみせても嘘はつけない、それが行き場のない怒りを更に増長させ、ティファは頬を膨らませてアレイズとは逆の方向に顔

を向けた。すると隣からくつくつと低い笑い声が放たれるのが聞こえたが、ティファは何とか無視してやり過ごした。

「珈琲はいかがですか？」

一方的な苛立ちが混ざる空気に耐えられなかったのか、それとも何も考えていなかったのか、マイがのんびりとした声でティファにカップを差し出す。珈琲の匂いが漂うそれは淡い白で、アレイズに渡されたカップに入っている黒とは随分な色の違いだった。砂糖とミルクがたっぷり入ったカップを手に取るとふわりと湯気が頬にかかり、苛立ちがゆるゆると消え去っていく。

心の落ち着きに合わせてほっと息を漏らす。

そうするとカップと自分の体感温度に大きな差があることに気付き、ティファはぶるりと身震いした。心なしか鳥肌も立っている気がする。

両腕で体を抱きしめ、こんなに寒かっただろうかと思案していると肩に柔らかな感触が触れた。ティファの肩や背中を覆うそれは漆黒で、人肌と同じだけの温度が感じられる。

「アレイズ？」

背後から差し込む影をそのまま見上げると、ティファの目にアレイズの微笑が映った。

「寒くなったからこれでも着ておけ」

「う、うん」

炎の照り返しに赤く染まったアレイズの頬に、何故だか落ち着かない気持ちになったティファは小さく頷いてからすぐに視線を元に戻す。

――ジュードの頬が赤いのは、ただ焚き火がそう見せてるだけなのに。

胸中で呟き自分を落ち着かせようとしてもどうにも気持ちが落ち着かず、ティファは先程より幾らか騒がしくなった心臓の音を押さえるようにアレイズが掛けた外套の裾をぎゅっと胸元まで引き寄せた。

かといって何も言わずにいることもできず、ティファは逡巡した後で蚊の鳴くような声で呟いた。
「……ありがとう」
「あぁ」
それに答えるアレイズの声はあくまで平坦で、いつもと何ら変わりなどない。当たり前と言えば当たり前のことなのだが、ティファにはそれがどうにも解せなかった。
先程アレイズが追いかけて来てから、どうにも調子が狂うと考えたからかもしれない。
自分ばかりが挙動不審になるなど可笑しな話だというのに、それでも自分を追いかけて手を伸ばしてくれたアレイズの真っ直ぐな目が頭から離れなかった。
『自惚れるな』
きっぱりとそう言い、ティファを諭したアレイズの姿は彼女にとって鮮烈だったのだ。
そして自分が護り仕えるべき存在が自分を護ると言ってくれたこともその一因だった。それは時間が経てば経つほど鮮烈さを増していき、実際にアレイズを前にしていた時よりも更に心に突き刺さって抜けなくなる。
見た目だけじゃなくて、心根が真っ直ぐで格好良い神。
その神と契約している自分をティファは誇ると同時に、どうして自分だったのかと考えてしまう。
――他にも聖女はあの場所を訪れたはずなのに。
「ティファ様、いつものカードゲームしませんか？」
ぐるぐると思考の渦にはまっていたティファを掬い上げたのはマイの言葉だった。
はっと息を呑みそうになり、慌てて平静を装って顔を上げるとメイが鞄からカードを取り出してくすりと笑う。
娯楽らしい娯楽のない旅に何か一つでも楽しみをと双子によって提案されたカードゲームは、野宿にはなくてはならないものだった。

今日もそれをやろうと言っているのだろうが、マイから誘ってくるとは珍しいとティファは軽く小首を傾げた。いつもマイはカードゲームには不参加だというのに。

「アレイズさんも一緒にやりましょうよ！　あ、でもアレイズさん強いから手加減してくださいね？」

「まぁ、気が向いたら手加減するさ」

ツインテールを解いたメイが長い亜麻色の髪を大きく揺らしアレイズを誘う。

幼さを残す髪型から一片して大人の雰囲気を纏わせるメイの言葉に彼は不敵に笑って立ち上がり、ふと何かに気付いたようにティファへと手を伸ばした。

「ほら」

一緒に来いということだろう。

だが、伸ばされた手が昼間のそれに重なって見えたティファは更に鼓動を早くさせながら顔を伏せてその手を取った。

大きな手が包むように優しくティファの手を掴む。左手薬指にはまるお互いの翡翠がその力と同じだけの優しさでもって光を放った。

「今日はどのゲームにするんだ？」

「んー、今日は姉さんが勝てるように七並べでもしますか？」

「いいわね。じゃあ早速やりましょうか」

手を引かれるまま焚き火を囲むように座ると、わいわいと三人の声が聞こえてくる。

その輪に加わろうとピコがとことことティファへと近付き、膝の上へと陣取る。

ティファはその温もりを感じながら、くすりと笑みを零した。

落ち着かない気持ちは平静へと変わり、じわりと心を浸す温もりが鼓動を落ち着かせる。

――いつもと同じことをして、いつもと同じ夜を過ごす。ただそれだけのことがこんなに暖かいなんて。

どこまでも変わらない日常。少しだけ違うのは、マイが傍にいる

ことだろうか。
常ならばカードゲームに参加しないマイが輪に入って談笑する姿はそうそう見られるものではない。
ティファはそんなマイの姿に密やかに笑みを浮かべて空を仰いだ。月明かりの隠れた夜はどこまでも暗く、そのくせどこか暖かい。だがそれもいつものことだ。暗がりはいつか朝日に照らされ、闇の色を薄めてしまう。変わりなどない夜と朝が繰り返されるだけ。
――でも、それだけで十分だわ。
呟きにさえならない声でティファが唇を動かすと、メイが早くカードを出せと催促する声が耳朶を打つ。
それに笑って答えながら彼女は心の中でそっと抱きしめるように言葉を紡いだ。
変化はいつだって新鮮で驚きに満ちている。
だけどそれで日常が変わってしまうようでは困るのだと。
明日を作るのは日常であって、非日常ではないのだから。
「姉さん弱すぎ！」
「く……もう一戦よ」
「ハンデ付けた方がいいんじゃないかしら」
記憶が脳を侵食し、心にじわりと影を落とす。
それは染みのように静かに広がりティファの心を侵していく中で、今はまだ日常を噛みしめていたいと願い、笑う。
聖都市グラドに着けば嫌でも非日常がやってくる。
ならばせめてそれまではこうして笑っていられるようにと。

◇　◇　◇

明朝、カードゲームで遊びすぎた面々は若干眠たげな目を擦りながら朝食の準備をしていた。
干し肉を湯に入れ、簡単に味付けしただけの簡素なものだがそれでも旅の最中では十分すぎる食事だと、ティファやメイは喜びなが

ら鼻歌交じりに準備に勤しむ。
「もうここに結構留まってるわよね。朝食を摂ったらすぐにここを出るんでしょう？」
「あぁ、聖夜祭や兎のことで足止めを食らったが、そろそろグラドに行かないとな」
楽しげな様子に苦笑を漏らしながら水を鍋へと入れているとそんな問いが耳朶を打ち、アレイズは溜息混じりに答えた。
確かに世界に会うのは今すぐである必要はないし、ある程度自由な旅ではある。
だがあまりにアレイズ達は長く森に留まりすぎた。いい加減グラドへ着かねば、この先が心配だ。
グラドへ行けば必ず世界に会えるなどという楽観的な思考は持ち合わせていないのだから。
「そうよね。あ、そういえばこの前行った村があるじゃない？　あそこの神器、もう狙われないのかしら」
そう考えて答えたアレイズを見てティファがふと首を傾げる。恐らく聖夜祭から神器の話に繋がったのだろうと予想はできたが、今それを訊かれても上手い言い訳ができなかった。
「……大丈夫だろう」
少しの逡巡の後でアレイズは小さくそう答えた。だが、その理由を答えることはできない。
賊はグラドからの依頼を受けたと話していた。それならば二度も同じ手を使うような馬鹿な真似はしないだろうというのがアレイズの見解なのだが、それをティファに正直に離すことはできない。
もしそれを話してしまえば、これから行く聖都市が一部分だけでも廃墟と化してしまう可能性が出てくるからだ。
グラドに対しあまり思い入れのないアレイズだったが、さすがにそれは容認できない。ティファが破壊活動を行うその魔力の供給源はアレイズにあるのだから。
「？　まぁ、そうよね。あれだけ脅したんだもの、皆怖がって近づ

かないわよね」
　だが突っ込まれてもおかしくはない言葉に、ティファはさして文句も言わずに頷く。
　一応自分がやりすぎたという自覚はあるらしくその声には若干罰の悪そうな響きが含まれていたが、この程度で誤魔化せるのなら賊の一人や二人犠牲になっても構わないと決めつけてアレイズはうんうんと大袈裟に頷いてみせた。
「あぁ、お前とマイが派手に動いた甲斐があったな」
「私は派手に動いてなどいません」
「どうせモーニングスター振り回してたんでしょ……姉さん自体が派手じゃなくても武器の動きが派手なんだよね」
　干し肉を小さく千切りながら溜息をつくメイの声にマイがきっと目尻を吊り上げる。
　そのせいで十分程度説教を食らう羽目になるメイを尻目に、アレイズは胸中でそっと溜息をついた。
　――それにしても、一体いつこの二人に賊の話をすればいいんだ。どれだけ機会を伺ってもティファから双子が離れることがなければ、その逆もない。こんなことなら兎を連れて消えた時にでも話しておけばよかったと後悔するも時既に遅し。
　そうこうしているうちにスープが出来上がり、朝食を摂り終えてしまったせいでアレイズは更に機会を失ってしまった。
「やっとこの森を出られるんだねー」
「別に悪い所ではなかったじゃない」
　うんっと伸びを一つしてメイが清々しいまでの笑顔を浮かべて前へと進んで行く。それに対し小さく笑いながら答えるティファはメイにもマイにもつかず離れずの距離を保っていた。恐らくティファではなく、双子が気を遣っているせいだろう。
　大きめの鞄をゆさゆさと左右に揺らす細身の体を背後から眺め、アレイズは胸中でもう一度溜息をついた。一体いつになったらティファと双子が離れるんだと。

「アレイズ様？」
「？　何だ」
しかしそれが功を奏したのか、深青のメイドがちらりとアレイズの表情を窺うように下から顔を覗き込ませた。
思い悩んでいたのが伝わったのだろう。その声は誰かに聞かれないよう密やかな大きさに配慮されていた。
「いえ、もしかしてティファ様に何か御用でしょうか？」
ただ、彼女が心配する内容はアレイズの悩みとは随分とかけ離れたものだったが。
顎に手を当て、しばし考え込んだアレイズはこそこそと真紅の背中を指差す。
「メイとマイ、二人に少し話がある」
「御話、でしょうか」
「あぁ。話というよりは、相談に近いんだが」
マイ一人に話しても問題などないし、話しておいてくれと頼めば彼女はすぐにでも妹に伝えるだろう。
だが昨日の一件で、どちらか片方だけに話すと意見が偏る可能性が出てくると判断したアレイズは自分の口から賊の話をしておきたかった。
木漏れ日が薄くなり、光が差し込む範囲が広くなる。
森の終わりを告げるように薄くなる葉に目を細めると、マイがそんなことは御安い御用だと小さく笑った。
「承知致しました。ではメイを呼んで参ります」
「すまないな」
「アレイズ様から相談だなんてそうあることではありませんもの」
小さな謝罪を笑って受け止めたマイはそのまま早足にメイへと近付き、そっと彼女の肩を叩く。
その感触にメイが姉へと視線を向けて顔を引きつらせるが、それは見ない振りをする。
マイがどんな笑顔を浮かべているかは知らないが、このまま知ら

ずにいた方が幸せだとさすがのアレイズも理解していたからだ。
視線を逸らすと、見ない振りをされたことに気付いたのかメイが頬を膨らませながら近づいてくる。さり気なく後退しティファの後ろを歩く形になる三人はぴったりと並列に並んで密やかな声を上げた。
「相談って、どうしたんですか？」
だが両手に花という状態でも、何故だかこの双子相手だと恐怖にしかならないから不思議だ。
そんなことを考えていたアレイズはメイの声に無理矢理顔を引き締めて鼻歌交じりに進む青い髪の少女に視線を向け、そのままの体勢で言い放つ。
「この前、星夜祭の村で神器が盗まれただろう？」
「えぇ、私達が取り返した物ですね」
貴女はいなかったけれど、とメイにちらりと視線を向けるマイの声を聞いてアレイズが静かに頷く。
静謐な空気に口論を起こしそうになった双子が揃って口を噤んだ。
「そうだ。あれを奪った盗賊の中にグラドの人間がいた。……この意味が分かるか？」
「グラドの？　それはまさか」
「神器を奪おうとしたのは、ただの賊じゃなくてグラド？」
頭の回転が速い双子だ。
アレイズは胸中で舌を巻きながらそれでも表面上では平然と頷いてみせる。
「正確にはグラドという都市そのものが命じていた可能性が高い」
都市そのものなのか、他の誰かなのか。実際その辺りは確かめてみない限りは分からないだろう。
だがアレイズは昔の経験で大まかにグラドという都市の実態は掴んでいたせいか、どうにも都市全体が黒に見えて仕方がない。
あっさりと言い放ったアレイズにマイがそれで、と呟く。
「ティファ様にはこの事をお話に？」

「それを相談したかったんだ」
一番の問題に渋く答えを返すと、メイがぷっと吹き出した。
続いてマイがくすくすと肩を震わせて笑う。
「何故笑う」
……一体何がそんなに可笑しいのか。
不満を顔に載せて抗議すると、マイは余程面白かったらしく目尻に涙を浮かべさせて首を振った。
そうして慈しむような視線をティファへと向ける。
「よほどティファ様を怖がっているんですね？」
何も言わなくとも行動が似かよるのが双子の特徴なのか、すぐにメイもティファを見据える。楽しげに揺れる亜麻色は同調するように頷いた。
「確かに困りますよね」
「えぇ、そんなことを話したらきっと唯一統治権が機能している都市が一夜にして全てを失ってしまうわ」
――やはり、俺と同じ考えか。
頷く双子にアレイズはふぅと息をついてから眉根を寄せる。
「だが、いつまでも黙っているわけにはいかないしな」
兎に話しかけているのか、一人で歩いているにも関わらずティファの声が聞こえてくる。
穏やかなその口調にアレイズは呆れを通り越して笑みを浮かべ、日差しが増す道を歩いていく。
このままだと一刻もしないうちに森を抜けるだろう。
「これはあくまで私個人の意見ですが」
万緑が薄くなる中でぼんやり考えるアレイズの耳朶をマイの声が打つ。
ん？　とメイが姉に首を傾げると、マイは思い悩むようにこめかみに指を当ててから息を吐き出すように続けた。
「この話はグラドに着いて少し時間を置いてから話した方がいいのではないかと」

「少し時間を空ける意味があるのか？」
「えぇ」
グラドに着いてからというのならまだ分かるが、時間を空ける意味がアレイズには分からない。
意味ありげなマイの言葉に問うような視線を向けると、メイが何やら思い出したようにぽんと手を打ち鳴らした。
「あ、そっか。グラドには神様の話が一杯ありそうだもんね」
「行ったことはないけど、多分そうでしょうね――ティファ様がもう少し聖女らしかったらすぐに御話しても差し支えないのですが」
「何か問題があるのか？」
グラドは世界の中でも古い部類に入る都市だ。そして世界との繋がりも大きいと言われている。
それゆえに神の伝承が色濃く残る地でもあるのだが、それが一体どうしたというのだろうか。
――ティファが聖女らしくないのは今に始まったことじゃないだろう。
アレイズは本人に聞かれたら魔法を放たれそうな暴言を胸中で呟きマイの返答を待つ。すると彼女はしばし黙考してからメイの服の裾を引っ張る。
「メイ、貴女は少しティファ様の御相手をして差し上げて」
「え、何で今なのよ」
まったく関係のない話にメイが顔を顰めると、マイはくいと顎をしゃくってティファに目を向けるよう指示する。釣られてアレイズがスカイブルーの髪を見つめると、未だに話し声が聞こえてきた。
「見なさい。ティファ様ったらピコに話しかけて……このまま独り言が多い人間になったらどうするの」
見れば見るほど怪しい光景だとマイも感じたのだろう。
兎に話しかけているのであって独り言ではないとティファなら言い張りそうだが、背を向けていたら兎は見えないし答えがない以上一人で話しているようにしか見えない。これではマイが心配するの

も頷ける。
　眼光を鋭くする姉にメイがたじろぐ。
「う、分かったよ。行けばいいんでしょ行けば」
「そう、分かればいいのよ」
　にっこりと穏やかに笑んだマイに唇を尖らせたメイが駆けて行くのを見送ってから、ぽつりとマイが言葉を零す。
「申し訳ありません。メイにはあまり聞かせたくない話でしたので」
「構わないが、何の話だ？」
　唐突に遠ざけたということは恐らくそういう理由なのだろうとアレイズも察していたし、当のメイも気付いているのだろうがマイはその全てに何の突っ込みもさせずに分かりやすく遠ざけた上でようやく重い口を開く。
　真紅を覆う純白のエプロンが揺れ、ティファへと近づいていく。
　そうしてその背をどんと押して悲鳴を上げさせるのを見ながら、耳朶を打つ高い声を受け止めた。
「ティファ様はアレイズ様と契約をなさったり、大聖堂の聖女に任じられておりました。ですが、元々神自体は御好きではないのです」
　勿論、アレイズ様は別でしょうけれど。
「は？」
　そう続いたマイの言葉に、一瞬何を言われたのか分からないとアレイズが目を丸くする。墨で塗りつぶしたような漆黒の瞳孔がきゅうっと開いた。
　――神が好きじゃない？　だったら何故ティファは自分と契約など。
「ティファ様は七年前にご両親を亡くされています。私も部屋から出てきたティファ様を見て慌てて声を掛けましたが、ティファ様は私の声なんて聞いてはいませんでした。――ずっと神に救いを求めていたのです。助けてほしい、と。……ですが」
「神は来なかった、か」
　だというのに、契約どころか一緒に旅までしているのか、ティフ

ァは。
「ですが御安心ください。ティファ様はアレイズ様のことを御嫌いではありませんから」
「……そうか」
自分がしようとしていることが何であるのかを理解しているアレイズにとって、それは手痛い真実だった。
瞼を伏せる。それが落ち込んでいることへのサインだと即座に見抜いたマイは、胸を張ってそう答えた。
「えぇ、それだけはこのマイティーナが保証致します」
とんと胸を叩く仕草は普段の彼女からは想像もできないほど自信に満ちていて、それならば本当なのかもしれないとアレイズは微かな安堵が胸に宿るのを感じた。
だが、と胸中で呟く。
神を嫌いな元聖女が元人間の神と共に行動している。そしてメイドが言うには自分は嫌われていないはずであり、自分も彼女を嫌ってなどいない。
むしろどちらかといえば好意を持っているほどだ。少々やりすぎ感が否めないが、彼女の真っ直ぐな意志は見ていて眩しいほどなのだから。
何より、自分が考え込んでいる時に隣に居てくれることがどれだけ救いになったかしれない。
しかしアレイズは胸中での考えに首を振り、甘さと穏やかさの宿る熱を振り払った。
――自分はレイナに会うために旅をしているんだ。
それは決して忘れてはならないこの旅の前提条件であり、ティファニエンドを利用する大義名分でもある。
そう、だから人間に――特にティファニエンドに肩入れすべきではない。
手放した熱と良心の呵責が残滓のようにアレイズの心に纏わり付く。

だがマイの手前悩んでいることもできず、無理矢理気持ちを遠ざけたアレイズはきっと前方を見据えた。
「とにかく、全てはグラドについてからだ」
「はい」
声を放つと、マイの従順な言葉が返ってくる。
すると話が終わったことを見て取ったのか、メイがぶんと手を振った。
「姉さーん、近くに川があるから水だけ調達したいんだけどー」
「そうね、街道に出たら川もないし今のうちに済ませておきましょうか。アレイズ様とティファ様は休憩していてください」
「あぁ、すまない」
ぱたぱたと深青の影が流れて行く。そうして同じ顔立ちの少女が揃って川へと向かうのを見て、大きな木の幹に体を預けて目を閉じた。
暗闇が視界を覆う。だが安寧をもたらすはずのその闇は彼に混乱のみをもたらした。
――本当にこのままでいいのだろうか。ティファニエンドを利用し、傷つけることになってもいいのだろうか。
心に鋭い棘が突き刺さっていく。それは心の中心を通り、抜けないように深く深くへと潜り込んで行く。
『ティファ様はアレイズ様のことを御嫌いではありませんから』
いっそ、嫌ってくれれば。
アレイズは心の痛みに眉を顰め、八つ当たりだとは知りつつも胸中でティファを責めながら長く感じられる時を思考に費やした。

◇　◇　◇

悩むアレイズの姿に、メイが小さく声を上げる。
「ねぇ、ティファ様？」
「どうしたの？」

川に行くと言っておいてマイだけ先に行かせるのはどうかと思うと、声を掛けられたティファが怪訝に思い振り返る。
だがメイはそれには動じることなく小さくティファの服の裾を引っ張った。
くいくいと引っ張り身を寄せ、秘め事を告げるように囁く。
「今日のアレイズさん、様子が変じゃない？」
「そう？　いつもあんな感じだと思うけど」
「違うよ」
こそこそ言われるままにティファはアレイズを見るが、説教以外だと寡黙な彼はやはり静かな空気を纏って何やら思案している様子で、別段普段と変わりなどない。
なのに一体何が変だと言うのか。彼が考え事をしているのはいつものことだというのに。
呆れながらティファが答えるも、返ってきたのはきっぱりとした断定形の答えだった。
「どう見てもおかしいよ！　ティファ様、何か言ってきてあげてよ！」
「わ、私が！？」
「そうだよ。だってティファ様の契約神でしょ？」
それはそうだけど。
白いエプロンがふわりと揺れる。後ろに回り込まれると同時にメイの手がティファの背中をとんと押した。柔らかな指先がそのくせしっかりと力を込めたせいで、ティファは数歩足を踏み出してから首だけでメイを睨みつける。
「ほら、早く早く」
しかしそれすらどこ吹く風と、メイはひらひら手を振って無邪気に笑った。
楽しげに吊り上げられた唇を見て、心配してるのかただ近づけたいだけなのかよく分からなくなったティファは溜息を一つ漏らしアレイズへと視線を向ける。

彼はメイやティファのやり取りが聞こえていないのか、気にする余裕がないのかこちらを向く気配はない。普段なら騒がしいと小言の一言ぐらい言いそうなものだが、とティファは首を傾げアレイズを注視する。ダークブルーの双眸を細めると、多くの光を押し出して黒い塊のみが見えてきた。

黒尽くめの風貌から漂うのは、いつもと変わらぬ寡黙な空気だ。

しかしメイが言う様に、悩んでいる空気に見えないこともない気がする。

彼が何に悩み何を熟考しているのかは分からないが……。

「分かったわよ」

何かしら思う所があるのだろうということだけはティファにも理解できたので、彼女は腹をくくったように一声上げてアレイズへと足を踏み出す。

「じゃ、行ってらっしゃーい」

その背にメイの気楽な声が掛かるが、メイより奥にいるマイが口元を手で押さえてくすりと笑ったのが見えた所からしてこれから先のやり取りが傍観されることは目に見えている。

どういう思惑かは知らないが、あの双子はティファとアレイズがくっつくことを何よりも楽しみにしているのだから。

「まったく……」

主としてこのままでいいのかなどと考えつつ歩を進めると、すぐにアレイズの横に並ぶことができた。

しかしそのまま座り込んで何があったのよ、と声を掛けるには躊躇われる空気にティファは軽く目を見開く。そうして一度瞬きした後でじっくりとアレイズの横顔を見下ろした。

精悍な横顔はティファが隣に並んでもその双眸を怪訝な色に染めることはない。

しかし本格的に熟考しているのだと笑う気にはなれなかった。

「……」

黙り込んだままティファは呆然とアレイズの横顔を凝視する。

どうして、と胸中で呟く。

――どうしてそんなに思い詰めた顔をしてるのよ？

座り込もうにもそれすら叶わない状態でティファは吊り上がった目を見開いたままアレイズの横顔を見ることしかできない。酷く思い詰めた、焦燥感が張り付いた横顔を眺めつつ声を掛けることができなかった。

一体何を考えているのだろうか、という疑問を持つものの、答えなど出る由もない。

「ア――」

だからティファは意を決して声を掛けようとして、またすぐに唇を閉じる。

見間違いだと思っていた動きが本物だと知ってしまったからだ。

――震えている。

脳裏に浮かんだ鋭い声に、かたかたと黒い塊が小刻みに震えているのを知ったティファはその肩に手を置くべきか逡巡する。

悪寒に耐えるように、熱を生み出そうとするように震えるアレイズはしかしその寒さに気付かぬ様子でひたと前方を見据えていた。

何もないその場所に虚ろな視線をさ迷わせるその横顔に無意識に恐怖を感じてしまい、手を置くことを躊躇ってしまう。

しかしこのまま何も見て見ぬ振りをすることだけは耐えられなくて、ティファはついと視線をずらして背後を見やる。するとメイとマイが不思議そうに首を傾げ、さっさと声を掛けろとジェスチャーするのが見えた。

どうやら、弱々しく到底神には見えぬ姿はメイやマイにも見えていないらしい。

それが彼にとって救いになるはずだ。だが、このままだと訝しんだ二人が傍に寄って来てしまう。

それまでに何とかしなくては。

そう考えたティファは自分の存在に未だ気付かぬ神の震えをどうやって取り除くべきか考え、そして。

「……ふぅ」

緊張したように溜息を漏らしてから、そっと腕を伸ばした。

第十九話

世界に、レイナに会うためにはティファニエンドという人間が必要になる。

それは世界自らがアレイズに託した言葉から明らかなことだった。

無論、切迫した状況で聞くにはあまりに大雑把な内容に過ぎてアレイズにはティファニエンドが居ることでどうして世界に会えるかは細かく聞かされてはいない。

だが、ティファニエンドが世界の願いを叶えるために必要であることだけは確かだった。

それがどのような形でどのような被害を彼女にもたらすのかは定かではないが、確実に被害がもたらされることは確かだ。レイナが悪いわけではないが、世界という存在と神がどれだけ非情かアレイズは知っているのだから。

――このままでいいのだろうか。

事情は決して話すなとレイナに釘を刺されているものの、何も知らないティファニエンドを連れ回してもいいものか、アレイズはここに来て悩む羽目になってしまう。

頭をかきむしり、悪態でもつきたい気分になりながら目を閉じる。

『会えるよ』

世界に会いたいと願った自分にそう励ましてくれたティファの笑顔が脳裏に浮かぶ。

あどけなさの残るその表情は、アレイズを契約神として認め、信頼してくれているのが見て取れた。

そんな少女を自分は。

「くそっ……」

無邪気に神の俺を信じてくれるティファに被害が及ぶことだけは決してしたくない。

だが仮に世界が存在すると言われる場所に辿り着けたとしても、

レイナに会うことは出来ない。
無論それは絶対のことではないのだろう。
だが、レイナは言っていたではないか。望む望まないとに関わらず、必ずティファニエンドは巻き込まれる。だから事情を知らなくとも彼女を連れて来るだけでいいのだと。
その話をした時のレイナは、確実に何かを隠していたとアレイズは確信していた。
煙に巻くような口ぶりでただ笑んでいた姿は、とてもじゃないが全てを信ずるに値するものではない。
神として、レイナの知人としては不適格だと言えるが。
伏せられた瞼が与える闇色に意識を集中し、アレイズは何度も自問自答する。
このままでいいのか、他に何か方法はないのか。せめてグラドに着く前に答えを見いださねばならないのではないか。
しかし、方法などどこに――。
「ジュード」
鋭い声が耳朶を打つ。至近距離で放たれたその声にびくりと身を竦ませるとティファがぱちりと目を見開いた。しかしその距離も異常な程に近い。アレイズは自分の髪に触れる頬に視線を向け、ついで襲ってきた感覚に上ずった声を上げる。
「何だティファか――っておい!?」
「何？」
「何？　じゃない！　何してるんだ！」
肩に乗しかかる重みを慌てて振り払おうとするものの、ティファは不満そうに頬を膨らませて更に重みを掛けてしまい逆効果になってしまった。アレイズは横から自分を抱きしめる華奢な体に突き放すことも抱きかえすこともできず、驚きを怒声に変えて放つ。
昼間から人――自分は神だが――を抱きしめるなんて一体どういう了見だ。
「震えてるみたいだったから抱きしめたんじゃない」

「昼間からはしたないことをするな！」
「はしたないって何よ！　こっちは心配してやったんだからね！」
メイやマイに聞こえないようにとの配慮だろうか、ぽつりと呟いたティファにやはり怒号を返すと怒りに頬を紅潮させたティファに勢いよく言い返された。意地になったのか更に力を込められた腕がアレイズを離さないというように巻き付く。柔らかな温もりが半身に伝わり、アレイズは無防備過ぎるティファに一体何て説教をすればいいのやらとしばし思案する。
だがティファが返した言葉の中に心配という言葉が含まれていることに気付いて、小さく溜息を漏らした。
震えている自覚はなかったが、悩んでいたことは事実だ。恐らくティファはそれを見抜いたのだろう。
だとしたら問題はアレイズにある。
「何か悩んでるみたいだったけど」
怒りの矛先を収めたティファの静謐な声が耳朶を打つ。
吐息でアレイズの髪を揺らすその言葉に緩慢な動きで首を振った。
「大丈夫だ。……少し、考え事をしていた」
考え事の内容にティファが関わっていたとは口が裂けても言えないが、考え事をしていたこと自体を否定すると嘘になる。
そう考えたアレイズが告げると、ティファはふぅんと言ってぎゅっとアレイズに抱きついた。ブラウス越しに胸の膨らみが押し付けられ、アレイズはマイに腕を抱かれた時同様どこか落ち着かない気持ちで視線を逸らす。
すると多分に怒りを含んだ声が周囲の空気を震わせた。
「全然大丈夫そうじゃないわ」
きっぱりと、決めつけるような声に逸らしていた視線を元に戻す。
そうしてティファをまじまじと凝視すると、怒りに吊り上がったダークブルーの双眸と視線がかち合う。
心の奥深くまで見透かそうとするかのような鋭い瞳は、アレイズの悩みの一片までも掬い上げようとしているようだった。だが、一

体どうしてそこまでしようとするのだろうかとアレイズは困惑に眉を顰める。ここまでしてもらえるほど、自分は良い存在ではないというのに。

「お前は、もしも自分の願いを叶えるために誰かを犠牲にしないといけないと分かったら、どうする？」

「え？」

知らず、言葉が漏れていた。

呆けた声を上げるティファに向けて、更に言葉を紡ぐ。

「その願いはどうしても叶えなくてはならないもので、誰かと言うのは自分にとって大事な人間だ……その時、お前ならどうする？」

「どうするって、そんなこと急に言われても」

そうだ、急に言われたらきっと誰もが困惑するだろう。

だがその状況が急に起きたわけではなく元々理解していた事象だとしたら、人は一体どのような行動に出るのだろうか。

アレイズは胸中で渦を巻くその問いに対する答えを見出せないままふるふると首を振った。ティファに聞いても、詮無いことだ。

「すまない、忘れてくれ」

自分は一体何を言っているのだと自己嫌悪しながらアレイズが告げると、ティファはしばしアレイズを見据えた後で考え込むように目を閉じる。

「でもさ」

先程とは違い、静けさに満ちた声にアレイズが片眉を上げる。

「どんな状況であろうと、私はそんなこと絶対に認めないと思う」

「だが、それでは」

「叶えるしかないんなら、絶対に別の方法を見つけてみせるわ。だって一つしか方法がないなんて誰も言ってないし、言われたとしても自分で試してないじゃない」

凛とした高い声に、甘い考えだと笑ってやることもできた。

だがアレイズは何故かティファの言葉に笑うことが出来ず、絽るように笑みを浮かべる。

そういう考え方もあるのだと、今は信じたかった。

「そうか」

レイナが告げたただ一つの方法。

それは世界の意志が告げた唯一の方法なのかもしれない。だが、別の方法がないとは言われていないし模索すらしていない。

ならば世界に会うまでにその方法を探すことをしても、さしたる遠回りにはならないのではないか。

幸いこれから目指すのは世界に最も縁が深いと言われる聖都市だ。あの場所に行くことでティファに害が及ぶ可能性が高くなるのではないかという懸念も残るが、虎穴に入らずんばという言葉もある。

世界に会ったことのある神は数多くいる。だが彼等はティファニエンドという媒体を得ずして世界に会えているのだから、自分に出来ないとは思えないし思いたくない。そしてその神にも縁が深いのがグラドだ。

だから今はただ、グラドで有益な情報を得られることを願うしかないだろう。

「心配を掛けてすまなかったな――どうやら、俺の頭が固すぎたようだ」

口の端を緩やかに吊り上げたアレイズにティファがようやく安堵の笑みを浮かべる。自覚のない震えが収まったせいかもしれないなと感じていると、ティファが呆れたように身を離した。温もりの残滓にそっと指先を触れさせると、消えた感触が少し惜しくなる。

「一体何なのよ、もう」

照れ隠しか、ティファが文句を言いながら立ち上がる。だがその横顔が清々しい笑みを象っていたので、アレイズは謝罪の言葉を口にはせずに隣に並んだ。

――そうだ、答えは探していけばいい。

無駄骨に終わるかもしれない、再び同じ悩みを抱くことがあるかもしれない。

だがそれで膝を屈するには今はまだ早すぎた。

「よし」
一声上げて前方を見据える。
世界の意志たるレイナの残り香が強く残っているであろう聖都市。その方向を真っ直ぐに見たアレイズは若干乱れた外套を整え、ティファを見下ろした。
「メイとマイを手伝うか。早く森を出たいしな」
「そうね。……あれ、でも帰ってきたみたい」
水汲み自体は本当に必要なことだと思うが、それ以上に深刻に話をするアレイズを気遣ってのものだったのだろう。だからこそ力仕事であるにも関わらずアレイズは休憩をすることができた。
それを知っていたからティファとアレイズは双子を追いかけようとして、はたと木陰から見える真紅に目を止める。
「メイ？」
ゆらりと揺れる亜麻色のツインテールにティファが声を掛ける。だが声を掛けられた当人はいつものように無邪気な笑みを浮かべることなく、無表情ですっとティファを見つめた。茫洋とした表情にティファが眉を顰める。
同時に、周囲に集まった魔力にアレイズが息を呑んだ。
「――危ないっ！」
「きゃっ！」
腕を伸ばしティファを突き飛ばす。腕を突き出して、結界となる簡素な膜を張る。刹那、がらんどうになった場所に氷の礫が叩き込まれた。
びりびりと震える冷気が、アレイズの頬を撫でる。
「ぐっ……！」
凍傷を起こしかねない風に小さく呻き声を上げる。そうして真紅の立ち姿を睨めつけると、彼女の足元に深青のメイドが倒れているのが見えた。
「アレイズ！　マイ！」
「――来ないでください！」

恐らく先に倒されてしまったのであろうマイと、衝撃に呻くアレイズの姿を見てティファが悲鳴を上げる。

金切音に近い声に、必死で顔を上げたマイが怒鳴り返した。

血の匂いがしない所からして外傷はないはずだとアレイズは安堵する。だが自分やティファに対して攻撃を仕掛ける気であることは明らかで、戦慄を押し込めてアレイズは震えるティファを横目に体に力を入れた。

「メイ、どうしてこんなことを!?」

日差しがやんわりと真紅のメイド服を照らす。

しかし依然として彼女は無表情でマイやアレイズを見下ろし、感情の片鱗も感じさせない。

尋常とは言えないメイの姿にティファが駆け寄ろうとするのをアレイズが止めると、陽の光の下でメイが口の端を柔らかく吊り上げた。満面の笑みではなく、姉に似た理知的な笑みにマイが目を丸くする。

「メイ？　――っ!?」

「な、何!?」

「ティファ、お前は下がっていろ!」

その瞬間浮かび上がった魔力の奔流にアレイズ達が目を細める。そうしながらティファだけは護ろうと一歩進むと、光が糸のように細くなりゆらりと流れていく。面を上げてそれを凝視していると、糸となる光が一点に集中していることに気が付いた。

「ピコ……？」

ティファがぽかんと目を見開いて光が辿る道筋の先に居る白の塊に向けて呟く。

メイの体から放たれる光。

その光と繋がっていたのは、双子の腕に抱かれていたはずの兎、ピコだった。

「どうしてピコの体から光が?」

白い肢体は草むらでくつろぐように前肢を投げ出し、うっすらと

目を開けている。だがそこに光はなく、魂ごと奪われているのではないかとアレイズは推測し、再びメイを見やる。

――まさか、この兎の魂は。

メイの表情に微かな喜色が浮かぶ。ようやく気付いたのかとアレイズに問い掛けるようにきらりと煌めいた亜麻色の瞳がゆっくりと細められ、腕が振り上げられた。

「くっ」

「メイ、駄目！」

「遅いよ」

振り上げた腕から光が生み出され、ひゅんと振り下ろされる。

先程と同じ氷の礫が生み出されたのだと気付くものの、結界を作り出すだけの時間はない。

アレイズは逃げることも出来ない場所でにやりと笑んだメイを睨みつけたままティファを庇おうと背を向け――。

「……っ？」

いつまで経っても訪れぬ衝撃に頭の上で疑問符を浮かべた。

おずおずと振り返ってみれば、黒い外套より微かに離れた場所で乳白色の膜が見える。それは先程アレイズが作った膜と同じものだが、強度は遥かにこちらの方が強い。メイの姿に異変を感じて逸早く準備をしていたのだろう。

意外ではあったが、それだけの魔力を練り上げられる人間が今この場にいないわけではない。

「ティファ……」

アレイズは目の前で仁王立ちになる青い髪の少女に向けてぽつりと零す。

すると彼女は不満そうに、そのくせ幾分かの満足感があるように笑みを浮かべた。ほっそりとした腕が元に戻されると乳白色の膜が消える。

「まったく、一人で格好つけないでよね？　私だってちゃんと結界ぐらい張れるんだから」

ぱきんと音を立てて消えた結界の先に立つメイを見据えるダークブルーの双眸に灯るのは怒りという感情一点のみだった。
大事なメイドにして友人が起こしたことであっても、やはり今回のことは許せないと見える。
だが幸いなのは、ティファがメイそのものに対して怒りを抱かなくても良いということだった。
「ふふ」
小さな笑い声が漏れる。それは真紅の立ち姿からもたらされたもので、苦しげに身を起こした彼女の姉は斬りつけるような凍える声を返した。
「何が可笑しいの？」
髪型と服装さえ同じならばきっと今は誰も見分けがつかない。
そう思わされる程に落ち着いた雰囲気で笑うメイを責めるようにマイが声を上げると、メイは可笑しくて堪らないという風に目を細める。アーモンド型の大きな瞳がすうっと糸のようになる。
「この可笑しさが伝わらないから可笑しいんだよ。ねぇ、アレイズ神？」
「俺を知っているのか」
「勿論。だからこそ僕はここに来た」
凛とした高い声ではなく、ハスキーな声が周囲に響く。
その声にマイが目を丸くするが、ここでようやくメイではない何者かがそこにいることに気付いたティファが怒号を放った。
「貴方、メイに何したのよ！」
「ん？　ちょっと体を借りてるだけだよ。少ししたら返すから、大人しくしててくれると助かるんだけど。……それより僕のことを忘れたのかい？　ずっと一緒にいたのにさ」
両腕を広げて小首を傾げる体は明らかにメイの物だ。
だが中に居る存在は明らかに別物、だとしたらそこにいるのは恐らく。
「――ピコだろう」

「正解、でももっと早く気付いてくれないと困るんだけどなあ」
光は、恐らく魂同士を繋ぐものなのだろう。あまり見たことがない魔法ではあるが、存在しないとは言いきれないし第一相手は神かそれに近しいものだ。魔力を使うことに関しては人間より遥かに優れているのだから、人間にとっての禁忌を扱うことぐらい容易いことだろう。
楽しげに笑うメイの首筋を凝視する。真紅のメイド服が鮮やかすぎて見えづらいが、白い首筋にはピコの首輪に描かれている紋章と同じものが見えた。
――ということはあいつが。
「どうしてあれがピコだって分かったの？」
マイが身を起こし、上目遣いにメイを睨みつけるのを視界の端に入れていると囁くような問いが発せられる。
だからアレイズは極力唇を動かさないようにして告げた。
「紋章だ」
「紋章？」
「ピコの首輪に描かれていた紋章だ。よく見ないと分からないが、今メイの首にも同じものがある」
あ、と声が漏れる。その頃やはり紋章に気付いた様子のマイが目を大きく見開いているのが見えた。
恐らく彼女は誰かの知識に頼らずとも、答えを見出したに違いない。
目一杯渋い顔をしたマイが凛とした声を上げる。辛辣で、悪意に満ちた声にメイの体を持つピコが楽しげに笑って答える。
「何故、妹の体を乗っ取ったのです」
「人間達と話をするにはこの方がいいと思って。人の体で顕現することもできるけど、魔力を温存したかったから」
「迷惑です」
「ふふん、生憎僕は人の迷惑は考えない主義なんだ。そしてこの子は人だ」

「そういう貴方は兎でしょう」
とんとん拍子に進む言葉の応酬の終わりで、ピコがもう一度笑う。
どうやら異質な存在に対して大きな口を叩くマイを見ているのが楽しいらしく、ピコはマイに手を伸ばしその体を起き上がるのを手伝おうとする。無論、その手はぱしんと叩かれてしまうのだが。
「それより、久しぶりだねアレイズ神。調子はどうだい？　って訊くまでもないか」
若干残念そうな顔をした後でピコの目がアレイズへと向けられる。
その言葉に、アレイズは幾分抑えた声で返した。
「貴様はあの時の奴らの一人か？」
「やっと思い出したんだ！　結構鈍いね君」
警戒心と殺気を抑え込んだ声に嘲笑が向けられる。メイの声で放たれるそれにティファが唇を噛み締めるが、ピコは特に気にした様子もなく腕を振り上げる。
「このままずっと目覚めなければ僕ものんびりできたんだけどね」
「抜かせ。監視などして俺の何をそんなに恐れている」
「恐れてなんかないよ。ただ、面倒の種は要らないだけさ」
ピコの指先がついと空気を撫で、冷気を作り上げる。練り上げられた魔力が穏やかに収束すると、暖かい日差しにも溶けることのない半透明の氷の矢が出来上がった。いつでも攻撃出来る、そう匂わせる嘲笑はしかしすぐに硬くなる。
「もう誰にも攻撃させたりしないわ」
横合いからぬっと手が伸びる。それはピコの腕を取って力強く握りしめた。
「いい目をしているね、君」
「御褒めに与り誠に恐縮ですが、褒められるぐらいならあの子が悲しまないよう早々に退散してくださいませ」
愉悦に浸る声に冷たく返すのはマイだ。顕現する氷の矢ですら敵わぬほどの冷たさにティファが戦慄したように表情を硬くし、一体この場をどう納めるべきか思案する。

いくら中身が兎ののもであっても、体はメイのものなのだ。そんな状況で戦いなどさせるべきではない。

空いた方の手がモーニングスターへと掛けられる。本気でやる気だとアレイズが一歩踏み込むと、細められた亜麻色の瞳がその動きを牽制した。

ちらりと背後を見やる。するとティファも同様に足を踏み込んでいたようで、アレイズは渋々ティファが前に進まないように腕を横に伸ばした。自分だけが近付くのならともかく、ティファが傍に寄ればろくなことがないと理解していたからだ。

「君に挨拶するのも良いんだけどね」

んーと、ピコが指先を唇に押し当ててにこりと笑う。それから視線をティファへと向けた。

アレイズの背から顔を覗き込ませていたティファはその視線に眉根を寄せる。さすがにアレイズの腕をどかせることはしないが、そうしたい気持ちぐらいはあるのだろう。邪魔そうにアレイズの腕を一瞥したティファは怒りを隠そうともせずに腕を突き出していた。これも、いつでも攻撃できるという牽制に他ならない。

だが一触即発の空気の中でもピコは泰然とした態度を崩さなかった。

「今回は君に話があったんだよね、ティファ。……怪我はなかったかい？　アレイズ神に当てるつもりがとんだ誤算だったよ」

「私？　でも最初は私に当てようとしてたじゃない」

「手が滑ったんだよ。あれは反省してる」

何が反省してるだ。

アレイズは思わずそう胸中で吐き捨てたものの、目を丸くしてまじまじとピコを見るティファの前でそれを口にするとややこしくなるだろうと考え口を閉じる。代わりに警戒心丸出しでピコを見やると、ピコは小首を傾げてにやりとアレイズに分かるように笑んだ後で頷いた。

メイが浮かべるものと同じ無邪気な笑みが、彼女とは違うハスキ

ーな声を生み出す。
「これからグラドに行くんだよね？　だったら気をつけたほうがいいよ」
「な、何でよ？」
「色々あるのさ、グラドには」
「それって全然答えになってないじゃない」
もっともと言えばもっともなティファの言葉にピコは苦笑交じりに頷いた。
「うん。だけど警戒した方がいいのはアレイズ神だって知ってるはずだから、ねぇアレイズ神」
「……」
グラドの危険性については、アレイズはもとよりメイやマイも知っている。ただ、ピコが告げるのはそれ以上の意味を含んでいるようにアレイズには聞こえた。
手の平を握り締めしかめっ面を見せると、ピコは意味ありげにほくそ笑んだ。やはり、何か別の意味があるのだろう。神器を盗もうとした事以外の何かが。
だが、何故ティファに忠告をするのかが分からなかった。
アレイズという神が不要な存在ならば、その神と契約する人間も邪魔になるはずだ。それが何故だかティファにだけはやたら親切な態度を崩さない。怪我をしていないか案じることもその一つだろう。
「そういえばさ、この子って可哀想だよね？」
「？」
「どういうこと？」
ピコの言葉に沈黙で返しながら思考していると、不意に何やら思いついた様子のピコが胸元に手を当てて深々と息をつく。眉尻の下がった悲しげな、そのくせどこか慈しむような顔にティファとマイが怪訝そうな顔を浮かべた。
「記憶がないのさ。もちろん、全部じゃない。ほんの少しだけだけどね」

「!?」

ツインテールが兎のように大きく揺れる。大仰に肩を竦めたのだと理解する前に驚きが心を満たし、マイが息を呑む音がアレイズ達の所にまで伝わってきた。

殺気を滲ませて握り締めていたモーニングスターの柄を手放したマイが、ぽつりと尋ねる。

「……それは、いつの記憶だか分かるんですか?」

震える声には、何か当てでもあるのだろうか。

そう考えものの、記憶というただ一言でアレイズはそれがいつの記憶なのか予想することができていた。

ティファと双子を結ぶ記憶で最も忌むべきものは恐らく。

「七年前だよ」

「っ!? どう、して」

心を探るように胸に指先を滑らせるピコの答えに、しゃくりあげるような声が重なる。上げられたそれはティファのもので、彼女にはメイがどうして当時の記憶を失っているのかが理解できないようだった。ティファ自身が失っている記憶なのだからメイが失っていなくてもおかしくはないのだが、それだけの心因的外傷を受けたのだろうかとアレイズが案じながらピコの指先が這う胸元をじっと見ていると、ピコが愛おしむように心臓部分を撫でて歌うように告げる。

「君はこの子の姉みたいだけど、失われた記憶は君でも知らないあの時の真相さ。でもどれだけ引き出そうとしてもこの子は自分から思い出すことができない。記憶を閉じ込められてるんだからね。……気の毒なことだよ」

悲しげな声は本当にメイを案じているようだった。

神らしい慈愛精神がここに来て発揮されているのかもしれないが、ピコのせいで神になったといっても過言ではないアレイズからしてみればそれは反吐が出そうほどに嫌悪感が込み上げる声だった。

腰に手を滑らせる。そうして剣の柄を握り締めると、攻撃しよう

とする気配に気付いたマイが慌てて腕を突き出した。来るなという合図だろう。

「それで、貴方は何かいい方法でもご存知なのですか？」

引き出せる限りの情報を得ようという魂胆だろう。マイが静かに問い掛けると、ピコがうんと頷いた。

「いい方法かは知らないけど、グラドに記憶を元に戻せる人間がいるという話は聞いたことがある。絶対元に戻るなんて言い切ったりしないけどね」

「……そうですか」

肩を竦めるピコの姿から一歩も進まず引きもしないマイは理知的に輝く瞳でピコを見据えたまま何やら思案しているようだった。アレイズはそんなマイの姿に、今剣を振り上げてやろうかと考えるもののぎゅっと外套を掴まれたせいで動くことができなくなった。

細い指先が触れる感触に首だけで背後を振り返る。すると七年前の記憶という言葉に体が反応したのか、ティファが青白い顔をしているのが見えた。

衣擦れの音を響かせ、ぽんとティファの頭を撫でる。

「大丈夫だ」

「うん……」

囁きのような声で呟くと、ティファが無理矢理に笑みを浮かべて頷いた。

常ならば先陣を切って相手に魔法をぶつけるはずのティファが黙っているのは、彼女の脳裏に血の色をした光景が浮かんでいるせいかもしれない。未だ恐怖を抱いたままの顔からピコを隠すようにしてやると、深呼吸の音が聞こえた。

「ティファ」

だがそうして隠してやっても、ピコは言葉を隠してはくれない。

「グラドに着いたら、くれぐれも用心しておいた方が良いよ」

案ずるような言葉に眦を吊り上げてピコを睨めつける。するとピコはやれやれという風に肩を竦めてからすうっと息を吸い込んだ。

刹那、光の奔流が四方八方へと分散される。
「っ！　眩し――」
土も草も木も人間も、等しく奔流に巻き込む光にぎゅっと目を閉じると冷気が頬を撫でていく。しかし攻撃する気配のないそれはすぐに霧散し、辺りには再び柔らかな日差しが残された。
「「メイ！」」
マイとティファが叫び、メイへと駆け寄る。その声にアレイズが目を開けるとぐらりと傾いだ真紅の立ち姿をマイがゆっくりと地に横たえているのが見えた。ティファもその横に並びメイの額に手を当てている。熱はないか、外傷はないか、そして何より魂は傷つけられていないか、それを魔力でもって確認したかったのだろう。アレイズのはめる指輪から緩やかに魔力が奪われていく、それが証拠だった。この様子なら少々怪我をしていてもメイは大丈夫だ。
アレイズはそう考え、彼女達とは少し違う方向へと足を向ける。先程まで焦点を失っていた兎の眼前に立つと、ぱちぱちと瞬きをした赤い目がアレイズを見上げる。それはメイの姿をしたピコとは思えぬほど害のない視線だった。
嘲笑もせず小馬鹿にするでもない白兎。その兎を抱き上げて首輪を見下ろすと、金細工がきんと光を放った気がした。
紋章に神が隠れているのか、兎に神が宿っているのかは分からない。
だがアレイズはようやく見つけた手がかりに向けて、誰にも見えない角度で冷え冷えとした表情を浮かべた。
神へと至る呪いを掛けた一神――ようやく見つけた。
剣の柄へと手が伸びる。今この場で兎ごと紋章を破壊すれば、恐らくは自分の気もさっぱりすることだろう。
しかしそれはティファの手前することが叶わなかった。ティファにとってあの紋章は自らに関わる重要な証拠なのだから。
先程の様子からして、ティファの両親を襲ったのはピコではないだろう。ただの人間を襲うほど神は馬鹿ではないし、ティファニエ

ンドを殺すのなら今この場でやっているはずだ。だがピコはそれをしなかった……とはいえ、何かを握っていることに違いなどないのだが。

「神とはいえ、俺もまだまだ弱いな」

深々と溜息を漏らし、剣の柄から手を離す。メイのツインテールを思わせるピコの長い耳が折れるように傾いだ。

その様子を可愛いとも憎らしいとも考えられなかったアレイズは、胸中で挑むように告げる。

――次に遭った時は必ず仕留める。

願わくばそれがピコ自身が人として顕現した時であってほしいのだが。流石にメイやマイの体を斬りつけることはアレイズにはできない。

振り返り、メイの首筋に目を止める。そこからは紋章は跡形もなく消えており、アレイズは安堵の息を漏らしながら兎が逃げないようにがっちりと抱きしめて言い放つ。

「とりあえずは、メイの目が覚めるまでここに留まるか」

下手をしたら今日は街道で野宿になるが、メイを担いで行くことは出来ない。

そう考え提案したアレイズの言葉に、ティファとマイは一も二もなく頷いた。

第二十話

メイの体を抱きながら、マイは思案に耽っていた。
――七年前の真相をこの子は知っているの？　それに父さんや母さんを殺した犯人のことも。
だが、あの日メイは屋敷の外にいたのだ。だというのに一体どうやって真実を知ることができる？
「メイは」
ティファの声に、そっと声のトーンを落として答える。
「大丈夫です。気を失っているだけでしょう……申し訳ありません。御二人の足止めさせてしまいました」
「構わん。どの道メイを担いで歩くよりましだ」
穏やかに呼吸を繰り返す妹をじっと見下ろし、困惑を心配気な顔でひた隠しにする。
そうしてティファにもアレイズにも悟らせないように胸中で呟いた。
――グラドに着いたら、ティファ様に御暇を貰いましょう。
そうすればメイの記憶を取り戻すために行動を起こすことができる。世界を探すことよりもまずは七年前の真相とやらを確かめたかったマイはそう決意し、気を失ったままのメイに向けて吐息のような声を放つ。
亜麻色のツインテールが微かに揺れる。
「メイ、早く起きて……？」
この件は自分一人でどうこうできることではない。
だからメイが起きたら先程の話をしよう。
恐らくメイは自分の体がティファやアレイズを害そうとしたことにショックを受けるかもしれないが、それについて責任を問うつもりはなかった。どうせ人間は神に抗えない。
メイの額に手を当てる。体を奪われた影響か、微熱を感じさせる

額に手の平を押し当ててやるとようやくメイの瞼が動いた。
「……ん」
熱を孕んだ呻きにマイが目を丸くする。
やはりピコの行動が体に影響しているのだろうか。
「大丈夫？」
目尻を擦るメイに声を落とす。その様子が伝わったのかティファとアレイズが駆け寄ってきた。
「目を覚ましたか」
「えぇ」
「よかった。メイ、どこか具合の悪い所はない？」
亜麻色の瞳がぱちりと見開かれ、何度か瞬きが繰り返される。その様子をじっと見ているとメイが不思議そうにマイを見上げた。
「何？　何かあったの？　って、何で私寝て――」
「……なるほど」
怪訝そうな声にティファが小首を傾げる。だがアレイズは何事か納得したらしく顎に手を当てて頷いた。
「気にするな。大した事じゃない」
「大した事じゃないって、アレイズさんも皆も何か知ってるの？」
身を起こす真紅から手を離す。そうして立ち上がってティファに介抱を譲ったマイはアレイズに近づいた。
「アレイズ様」
「どうやら、操られている側はその時のことを覚えていないという話は本当だったようだな」
「そうですか……」
名を呼ぶだけの問い掛けに返ってきた答えに暗い声を返す。
話も何もそもそもマイにはそのような知識がないのだが、ピコに操られていた間の事をメイが忘れていることだけは理解できた。
だからマイはそれ以上何も言わず、ティファもアレイズもメイに対して何を言うことはしなかった。
だが――。

『気の毒なことだよ』
ハスキーな声がメイの口から発せられる、その光景を脳裏で思い描く。
過去の記憶を失ったメイは、今も自分自身の体に起きた記憶にぽっかりと穴が開いている状態なのではないだろうか。その穴を、これ以上広げてもいいのだろうか。
――メイにも話さなくては。
黒衣の隣でぎゅっと手の平を握り締める。
ピコのした事はメイが知らなくてもいいことだろう。知れば彼女は悲しむし、それこそ罪悪感であの笑顔を一時的にでも失ってしまうかもしれない。だが、黙っていることはできなかった。
これ以上メイの知らない記憶が存在することが良い事とは思えなかったのだ。
ぱんと土埃を払うメイは微熱があるにも関わらず、不思議そうな顔をしながらも体調に問題はない様子だった。
「メイ、水汲みできるかしら」
「え？　大丈夫だけど？」
今一番自然に二人になれる場所と言えば川ぐらいだろう。
だからマイは妹に無理をさせることを承知で力仕事を頼む。すると彼女はツインテールをひょこんと揺らしながら小首を傾げた。
その様子からして、体に負担が掛かることはないだろうとマイは内心で安堵する。ピコがメイの体力を削っていなくて本当によかった。
「マイ、水汲みなら私が――」
「いいえ、ティファ様はもう少し休憩なさってください」
そうして安堵するマイにティファが抗議の声を上げる。だがそれを一蹴してマイは川へと向かった。深青が森の奥へと向かうのを、真紅の影が追いかける。背後から伝わる足音が妹のものであることを聴覚で確認し、マイは先程向かおうとしていた川辺へと近づいた。
「ねぇ、メイ？」

「何？」
せせらぎが耳に心地よく響くその場所でマイがようやく口を開いた。
唇を開き、声を出すだけの行為だというのにそれが随分難しいことのように思われる。それでも無理矢理出した声にメイはあっさりと言葉を返した。
水音を響かせて水を汲むメイを尻目に続ける。
「さっきのことなんだけどね」
「あぁ、結局ティファ様もアレイズさんも教えてくれなかったけど……何があったの？」
本当に、このまま話してもいいのだろうか。
不意にそんな言葉が頭を過ぎる。その問いに動きを止めるとメイが小首を傾げてマイの顔を覗き込んだ。
川面が陽光の照り返しを受けて輝く。その輝きの恩恵を受けてメイの瞳に宿る光も一層強くなっていた。
「姉さん？」
「いえ、何でもないわ。ごめんなさい」
――もう決めたことじゃない。
何も知らないからこそ浮かべる無邪気な顔にマイは決意を新たに笑みを浮かべる。自分は何て残酷なのだろうかと自己陶酔しそうになるのを抑え、一度浅く息を吸ってからメイの目を真っ直ぐに見据えた。
「実はあの時――」
罪悪感でちくりと心が痛くなる。しかし聞かせてしまった言葉を今更取り消すこともできなくて、マイはピコがメイの体を乗っ取ってからの顛末を話して聞かせてやることにした。
メイの体が震え、顔が青くなる。そうして話が終わると清流にかき消されそうなほどの呟きが耳朶を打った。
「そんなことが……だって、私何も覚えて――」
「アレイズ様に聞いたんだけど、操られている方はその間のことを

忘れているらしいの」
「そんな」
誰だって、親友や姉を傷つけようとしたなどという話は信じたくないだろう。
だがそれを信じてもらうために話したのだから、マイは同情心を捨てて首を振った。
「信じられないかもしれないけど、本当の事なの」
震える肩に手を置いて、落ち着かせるように小さな声で言い放つ。するとメイは微かに赤くなった目を拭った。依然として顔色は悪いが、そんなことは有り得ないと駄々をこねるような性格でないことを理解していたマイは最も訊きたかったことを口にした。
「七年前の記憶、メイは知ってたの？　記憶がないってこと」
核心に触れる言葉を平坦な声で放つ。
そうしなければ心の中で渦を巻く激情に支配されてしまいそうだった。
淀みを押し流そうと流れ続ける水を見つめながら、メイがぽつりと答える。それはマイの激情に小さく火を灯す。
「知ってたよ」
「……」
知らないということを知っている。
それは一体どういう状況なのだろうか。
「思い出そうとしても思い出せない記憶がたくさんある。……けど、それは全部七年前のものだって分かってた」
「じゃあ、どうしてそれを教えてくれなかったの！？」
高くなる熱を吐き出すように怒声を放つ。
激情には遠く、かといって平静でもない感情を叩きつけるとメイもそれに負けじと大声を発した。
「だって知らなくても良いことだと思ったんだもん！　思い出さなくても、問題なかったんだもん……っ」
言葉尻が掠れるのをマイが感じた途端、メイの瞳からぽろぽろと

涙が零れ出た。
真っ赤になった瞳はピコのような紅で、しかしピコのような冷たさなど微塵も感じられない。
双子とは激情も共有するものなのだろうかとマイが感じていると、しゃくり上げるような声でメイが続ける。天真爛漫な彼女には似つかわしくない痛みを吐き出す声に、マイは罪悪感が込み上げるのを止められなかった。
「私だって出来る事ならさっさと思い出して、真実を知りたがってる姉さんに早く教えてあげたいよ。でも……でもそれって、思い出しちゃいけない事のような気がするんだもん」
「泣かないで、メイ」
腕を伸ばし頭を撫でる。
触り心地の良い亜麻色を何度も撫でていると、メイがしがみつくようにマイに抱きついた。
震える手が痛みを堪えるように力強くエプロンを握り締める。
「怖くて、悲しいの。記憶はないけど、私がその記憶で感じていることは分かるのよ」
その言葉に、感じているものは痛みだけではないのだと感じたマイはメイを抱きしめて耳元でそっと囁いた。
知らないものを知らずにいることにいる恐怖ではない。むしろ知らないままでいたいという想いが強いことを知っていて告げる言葉の残酷さをマイは胸に刻みつけたまま腕に力を込める。
恐怖と悲しみと痛みがもたらす真実は、きっと自分が知るそれよりも重い。だからこそマイは知りたかった。
「グラドに着いたら、ティファ様に御暇を頂きましょう」
提案にメイが目を丸くする。
まさかマイがそのようなことを言うなど夢にも思っていなかったに違いないしマイ自身そんなことを考えたことは今までに一度足りともなかった。喧嘩をしても、例えティファが離れていこうとしていようとマイは一生ティファに仕えると決めていたのだから。

同じ顔立ちに浮かぶ驚愕を安堵に変えるべく、極力柔らかい声で理由を話してやる。

だがメイの顔に安堵の色が浮かぶことはなかった。

「グラドになら記憶を戻せる人がいるかもしれないと、メイを操っていたピコが言っていたから」

「グラドに？　でもティファ様を置いて行くなんて出来ないよ！　それに私は」

その先は言わないで。

マイは一番言われたくない言葉を牽制するように早口に言い放った。

これ以上メイに言葉を放つことを許してしまったら、自分は何も言えなくなるだろうから。

「ティファ様にはアレイズ様がいらっしゃるわ。あの御方ならティファ様を護ってくださるでしょう？」

「それはそうだけど、でもそれでも落ち着かないって姉さんが言ってたんじゃない」

そう、確かに契約神がいるだけでも満足できないのは事実だ。しかし旅を続けるうちにアレイズに対する信頼感が芽生えたマイは、少しの間なら大丈夫なのではないかと考え始めていたのだ。アレイズなら、あの神ならきっと主を護ってくれるとマイは信じることができたのだから。

抗議の声にふるふると首を振る。メイが言うことは最もだが、極めて個人的な理由に主を巻き込むことはできない。

ティファはアレイズと共に世界に会うための手がかりを探さなくてはならないのだから。

その手伝いが出来ないことが心苦しいが。

「ティファ様には私から言っておくわ。だからメイは何も気にせずにいて頂戴」

柔らかな声色で言い放ち、笑ってみせる。

それは安心させるものではなく、有無を言わせぬものであること

をマイ自身一番理解していたが今はこんな顔をすることしかできなかった。

さあっと川音が強くなる。水飛沫にメイド服の裾を濡らしたメイは、しばし逡巡した様子を見せてから溜息混じりに頷いた。

「……分かった」

――ごめんね。

頷いたメイに、胸中でマイが呟く。こんな顔をされてはメイが断れないということを理解した上で浮かべた表情を、卑怯だと一言罵ってそれでも満足したようににっこりと笑いかける。

水が一杯まで溜まった革袋の蓋を閉める。たぷんと音を立てたそれを揺らしてマイは清々しいまでの笑みを浮かべてメイに背を向けた。

本当はその笑顔が一番胡散臭いことも、彼女は理解していた。

「さぁ、早く帰りましょう？　ティファ様とアレイズ様が首を長くして待っていらっしゃるでしょうから」

「うん」

その声に追従するようにメイが一歩足を踏み出す。ブーツの踵が石に当たり高い音を生み出した。

一歩下がって付いてくる妹の足音にマイは笑顔をかき消し胸中で呟く。

頷いてはくれたものの、メイは記憶なんて戻らなくてもいいと考えているのだろう。

それでも今まで問題がなかったことに変わりなどないし、何を今更という気持ちだってあるはずだ。それはマイだって自覚している。

だが知らないままでいることが必ずしも正しいことなのかが分からなかったし、自己中心と罵られてもいいからマイはあの日の真実を知りたかった。多くの人が死んだあの屋敷で、一体誰が血の紋章を描いたのかを。

例えそれが妹に辛い記憶を見せつける結果になったとしても。

妹に真実を突きつけようとしている罪悪感で心を痛めながら、そ

れでもマイは毅然と前を見据える。
双子でありながら、抱く想いは正反対の位置を向いている。だがそれを互いが指摘することなく、彼女達は主の元を目指した。

◇　◇　◇

二つの影が森の奥へと消えていく。
それを溜息で見送っていると、ティファがぽつりとアレイズを呼ぶ声が耳朶を打った。
「ジュード」
「何だ？」
しゃがみこんだままのティファを見下ろすと、彼女はピコを抱いたまま窺うような声色でアレイズを見上げる。恐らくそこから先の問い掛けは言い辛いことなのだろうとアレイズが察すると、やはり恐々とした高い声が響く。
「あの時メイを操ってたピコってさ、もしかしてジュードを――」
「そうだ」
その声にティファが何を訊こうとしているのかを察したアレイズは、言葉を最後まで聞くことなく早口で肯定した。
しゃがみこんだままのティファの隣に座り込み、目線の高さを合わせる。だがティファはそんなアレイズの視線から逃げるように瞼を閉じた。
「そう」
吐息のような呟きが漏れる。
それは自分が必要とする兎が契約神の敵であると認識してしまったことから来る憂いか、はたまたただ争いが起きそうなことに対する憂慮か。どちらにせよ憂いていることに代わりはないのだろうとアレイズは結論付け、きっぱりとした声を放つ。
「今はそいつがピコなのかそうでないのか分からないからどうしようもないが、次に会ったら必ず仕留める」

ティファが憂慮を抱いたとしても、それだけは譲ることができない。

世界が望まない展開を神が望んだことからして彼等は裁かれなければならない。そして被害に遭ったのが自分なら尚更だ。契約者がいなければ動くこともままならない不自由な身にされてしまったことへの怒りは、アレイズの中で未だ鎮火されることはなかった。そのおかげで世界の願いを叶えられるかもしれないという唯一点に関しては悪くないと考えているし、契約者がティファであることにも異論はないのだが。

「そう」

純然たる決意を前にしても、ティファはただ呟くのみだった。

ダークブルーの瞳は焦点が合っておらず呟く言葉はうわ言のようで、アレイズは首を傾げてティファの横顔を覗き込む。今まで聞いたことのないような弱い声に、心がざわついた。

「真実……あの時の……知ってしまった時、私は」

ぶつぶつと、強迫観念に取り付かれているような声。

――いや、強迫観念じゃない。これではまるで先程のメイみたいだ。

仄暗いその声に嫌な予感を感じたアレイズは腕を伸ばし、ティファの肩を揺さぶった。がくがくと力なくティファの体が揺れる。

「おい！」

光が見えない所からして操られているということはないのだろう。だが彼女が彼女ではない何かに支配されてしまうのではないかという不安に、思わず大きな声を掛けてしまった。指輪から与えられる魔力は安定しており特段問題などないというのに。

「ティファ」

今度は平静を装った声で呼びかける。

するとみるみるうちにダークブルーの双眸に光が宿り、焦点を合わせた目がぱちりと一度瞬きをした。

「え？」

驚いた様子で見開かれた目は、肩を掴むアレイズの手と顔を交互に見比べて首を傾げる。
「ど、どうしたの？」
その様子には自分が今何を呟いていたのかなどまるで気付いていない様子で、アレイズは深々と溜息を漏らして肩を竦めた。
「どうしたのじゃないだろ。生気のない顔してたぞ？　幽霊みたいにな」
「なっ！　失礼ね、幽霊なんかじゃないわよ！」
怒りを孕んだ声に適当に返事を返しながら、ふと思案する。
――気のせい、か？
一瞬で掻き消えた雰囲気はアレイズの気のせいで見えたものかもしれないと思わされるが、しかしあのまま放っておいたらティファがどこかに行っていたのではないかという危険性をも孕んでいた。言うなれば、別の人格に取って変わろうとしているような。
ティファニエンドについてそのような情報を与えられた覚えなどない。
だが調べてみる価値はあるのかもしれないと、アレイズは文句を言うティファを宥めるように笑いかけながら胸中でそっと息をついた。

◇　◇　◇

水汲みを終えたメイとマイを迎え、四人は鞄を持ち直して一路街道を目指した。
それぞれが不自然にならない距離で歩きながら、どこか浮かない顔で前を見る。
「あとどのくらい？」
ティファは手を握り締めながら、グラドで自分が何者なのか探したいと願い。
「はい。あと三十分も掛からないかと」

マイは空を見上げながら、グラドで妹の記憶を取り戻してあげたいと願い。
「やったー！　もうすぐグラドだね、アレイズさん！」
メイはピコに触れながら、グラドに行っても自分の記憶が戻らないでいてほしいと願い。
「あぁ……何だかんだ言って長かったな」
アレイズは睨むように前方を見据えながら、グラドで世界に会うための別の方法を見つけたいと願った。
しかし、誰もがお互いの思惑を指摘することなく進んでいく。
相反する想いも全く互いに関係ない想いも含めて絡み合おうとしている糸は決意という名を持って前へと伸ばされた。
そうしてしばらく歩いた頃、色とりどりの四つの瞳が前方にそびえ立つ壁面を捉えた。
「壁に、紋章？」
石造りの壁面はその奥にある街を護る要塞の如く外周を覆い、そこかしこに描かれた紋章を誇らしげに旅人へと見せつけていた。
立ち止まったメイの声に、ティファが声を重ねる。
「じゃあ、あそこが」
「聖都市グラドです。……壁面だけでも圧観ですね」
「大きすぎでしょ、これ……」
三人の少女が茫洋と壁面を見上げ、感嘆の声を上げる。
それも致し方ないことだろう。彼女達が今まで訪れた村や大聖堂のあったヒンメルにもこのような堅固な壁は存在しなかったのだから。
街道を他の旅人が歩いていく。彼等も一様に壁面に圧倒されたようにぽかんと口を開けていた。
ただ一人、アレイズを除いて。
「ぼうっとするな。行くぞ」
彼は肩に荷物を持ち直し、大股で壁に小さく開いた検問へと歩いていく。都市に入るのにどのような審査が必要なのかは知らないが、

早めに済ませておくに越したことはないと考えたのだ。
壁面にも驚いた様子を見せないアレイズはひたと神たる証である紋章を象った壁面を睨みつける。
ピコの首輪と違い、ただ模写されただけの紋章には何ら力を感じない。だが、見ているだけでアレイズは気分が悪くなる思いだった。
「あ、待ちなさいよ！」
壁面を見上げる三人を急かし、アレイズが先にグラドへと入る。
それは一刻も早くこの壁面を抜けたいという想いからだったのだが、三人にもそれぞれ急く理由があったので特段文句を言うでもなく小走りでアレイズを追いかけた。
だから誰も気付かなかったのだ。
メイの腕に抱く兎の目が紅から蒼に変わっていた事を。

第二十一話

――竜神の眠る聖なる都市で、彼等は彼等の道を得る。

◇　◇　◇

その都市はとにかく巨大だった。

国として唯一統治権が機能しているだけあり治安の良さを節々で感じることが出来るし、何より土地自体が広大で建築物は都会的だ。

小さな村では二階建ての宿屋があることですら珍しいことだというのに、グラドには二階以下の建物を探す方が困難に思えてくる。

地震が起きると考えていないのか、はたまた対策を練っているのか立ち並ぶ建造物は空高く伸びており一体この中に何が入っているのだろうかとティファの好奇心を疼かせた。

そんな建築物に左右を取り囲まれた大通りをティファ達は感嘆しながら歩いていた。

「グラドってこんなに都会だったのね」

「あぁ、すごいな……」

口を開けて呆けるティファにしかしアレイズは小言を漏らさずに同調する。

どうやら以前来た時よりもずっと栄えているらしく、彼はまるで見知らぬ土地を見るような目で左右を見渡していた。漆黒の瞳が驚嘆に軽く見開かれ、行き交う人達の笑顔を映している。

ティファ達もそれに習って徐々に視野を広げていった。

「紋章は都市内にはないんだね」

「あれはあくまで外壁を守るための物なのでしょうね」

煉瓦造りの赤茶けた道にブーツの音を響かせて、好奇の視線に晒されながらも堂々と歩くメイド服の双子は口々にそんなことを言いながら一応は周囲に睨みを効かせている。だがそれはティファの身

を守るためではなく、姉や妹が好奇の視線に晒されることを危惧してのことだった。

「グラドは聖大陸一治安がいいからな。外壁さえ守ることができれば何ら問題はないんだろう」

双子の言葉に答えるアレイズに対しティファは内心で同調する。

そう、ここでは盗賊などを気にする必要などない。

それはグラドに入ったばかりのティファにも理解できることだった。

もう一度道行く人々を見つめる。寒くない程度の服を着込んだ彼等は、誰かに盗られる事など考えず鞄を揺らして歩いていた。それは大聖堂のあるヒンメルの街でも言える事ではあったが、あの場所は大聖堂があったせいかもう少し静かだった気がする。敬虔な信者が多く集う都市だったのだから仕方のないことだが、これだけ活気があってなおかつ治安がいい場所などティファは見たことがなかった。

時折テントが設営され、その下で野菜や魚が売られている。海が近いのだろうか。

ティファは出店で楽しそうに買い物をする親子連れに小さく口元を綻ばせてからうんっと一つ伸びをする。澄み渡った空が見え、開放感が増した。神の紋章が見えないせいか、大分気分が軽いのをティファは感じながら胸中で嘆息する。

神の紋章を四六時中目にしなくていいことは喜ばしいことだ。ただ――。

「それにしても、これだけ大きいと何を見ていいのか分からないわね」

「全くだな」

街の中心部へと歩いていくと次第に出店の量が増え、それに比例するように人の数も増えている。

元々静かな場所を旅していたティファ達にとってそれは新鮮な光景だったが、逆を言えば何を見ていいのか分からなくなってしまう

のだ。田舎者だと思われないように、せめてきょろきょろと挙動不審になることだけは避けようと決めているとアレイズがげんなりとした様子で頷く。

……もしかして人ごみが嫌いなんだろうか？

「「そうだ！」」

野菜一つ取っても種類が豊富な出店を見ていると、メイとマイが同時に声を発する。そうしてまさかお互いが同じ事を考えていたとは思っていなかったらしく、一瞬きょとんと目を瞬かせてから一つ頷いた彼女達はすっと腕を伸ばした。

訳が分からず眉を顰めるアレイズの腕をメイが、その様子に目を丸くしたティファの腕をマイが掴む。

「なっ、一体どうしたんだ！？」

「せっかくですからお買い物しましょうよ！」

人ごみの中にずるずると引き摺られる漆黒にどうしたらいいものかとティファが思案していると、マイがにっこりと笑って付いて行く。

勿論ティファの腕を掴んだまま。

純白のブラウスに皺を付けないようにささやかな力でティファを引くマイは亜麻色の瞳を楽しげに揺らめかせている。本気であの人ごみの中に行く気なのだと考えたティファは覚悟を決めつつマイの横顔をじっとりと半眼で睨んだ。

「お金はまだ少し余裕があります。ティファ様の御陰ですね」

するとその視線に気付いたマイが口の端を緩やかに吊り上げて笑う。

そんなことを気にしているわけではなかったのだが、確かに金銭的に余裕があるのかは重要なことだとも考え直す。

無論、大神殿を出るときに多額の金貨を頂戴したので余裕がないとおかしいのだが、何分破壊した家屋の修繕費などの関係もある。それを考えると余裕があることよりも金銭状況を圧迫していると言えそうなのだが。

「何もしてないわよ、私」
「あら、だってティファ様が助けた方々から小金を頂いておりましたもの。ですからティファ様の御陰です」
引き摺られるアレイズとは違いただ腕を引かれて歩きながらティファが尋ねるとマイは小首を傾げてふわりとした声で答えた。柔らかな印象を与えるそれはティファが知らない事実で、彼女はあんぐりと口を開けてからすぐに閉口する。助けたのは自分の意志だというのに謝礼を受け取っていたとは、本当に敵わない。
本来なら叱りつけるべき所だが、旅の間金銭管理をするのはマイだ。
そしてティファはその大事な資金を大量に消耗しているという前科があるし、これからもやりかねない。それを考えるととてもじゃないが文句など言えなかった。
それにしても、と胸中で呟きすぐに声に出して尋ねる。
「それにしても、何を買うの？　必要な物なら揃えてるでしょう？」
薬草に衣類に必要な分だけの食料は既に揃えている。
グラドにいる間は宿屋に泊まるだろうからそれらを気にすることなどないし、大体買い物ならグラドを発つ日にするのが一番効率的だ。
それはティファ以上にしっかり者のマイの方が理解しているはずなのだが……。
ダークブルーの双眸が怪訝そうに細められる。マイはそれをちらりと見てから笑みを深めた。
「色々あるんですよ」
さらりとした曖昧な答えと同時に腕を引く力が強くなる。
――あからさまにおかしい。
ティファはその様子に胸中で早口に呟いてからメイとアレイズを見やる。
「ほらアレイズさん、しっかり歩かないとはぐれちゃいますよー？」
「お前が引っ張ってるんだろうが！　とりあえず襟を引っ張るのは

やめろ！」

真紅の立ち姿は朗らかに笑いながら兎を抱えて漆黒の外套の襟元――あれでは首が絞まるんじゃないだろうか――を引きずり、朗らかな口調で進んで行く。スキップでもしそうな軽やかな足取りは普段と変わりないが、こちらもどこかおかしい。

直感的に感じたティファは瞼を半分ほど伏せて足元を見つめて思案する。

主相手にも引かないマイはこんな風に曖昧な答えなど口にしないし、いつも無邪気で明るいメイはしかし姉に比べて強引な性格ではない。何より、朗らかに笑う横顔はメイのものではなくむしろマイのそれで、ティファはもしかして二人が入れ替わったんじゃないかと疑うものの即座に否定した。入れ替わった程度ならすぐに見抜けるはずなのだから。

だとすればやはりおかしい。

双子の様子に違和感を拭えないティファはちらりと前方を進むアレイズを見やる。

だが双子と付き合いの浅いアレイズはまだその違和感に気付いていない様子だった。その証拠に文句を言いつつも素直に引き摺られているし、訝しむ気配もない。

そんなアレイズを見つめていると彼の漆黒の双眸がティファへと向けられた。ついでとばかりに違和感を伝えようと念じてみるもののアレイズは頭の上に疑問符を浮かべたようにティファを見返すのみだ。……当たり前の話ではあるのだが。

契約をし、夫婦という形で繋がっている自分達でも以心伝心という言葉は使えないらしい。

ティファはそう考え溜息を漏らしながら肩を竦めて首を振る。それぐらいなら伝わるだろう。本当に伝えたい事は一片も伝えられないが。

――言葉も無く意志を伝えられたら苦労なんてしないわ。

そう結論付けて視線を和らげると、アレイズが困惑に染まった顔

でティファを見返す。だがその困惑の真意もティファには伝わるわけもなく。

「だから止めろと言っているだろうが！」

「アレイズさんがちゃんと歩かないからですよ！」

ついと視線を逸らすとそんな声が聞こえてきて、ティファは喧騒に負けない騒がしさにもう一度溜息をついて彼等について行く。

違和感は拭えないが、それを今口にしてもいいのかが憚られる。

そう考えたティファがメイとアレイズを追いながら機会を伺ったものの、それはすぐに別の心配に取って変わってしまった。

「だ、大丈夫？」

「大丈夫に見えるか？　……気持ちが悪い」

「……せめて宿屋に着いてから吐いてね」

人ごみに入り込んだ彼等がようやく近くに見える。

だがメイはともかくアレイズにはそう声を掛けずにはいられず、ティファは手を伸ばしてアレイズの額に手の平を触れさせた。すると少しだけ体温が高いように感じられて、ティファは先程までの違和感をひとまず頭の隅っこに追いやってアレイズを助けることに専念する。

神様も人酔いをするのかと考えたことが伝わらなかったのは幸いだが。

がやがやと人が行き交う中で立ち止まることもできず、ひとまずは歩きながらアレイズの顔を覗きこむ。すると微かに青い顔が不調を訴えており、ティファは眉尻を下げてメイの手をアレイズから引き剥がした。

「メイ、離してあげて」

「え？　アレイズさんそんなに具合悪かったの？」

やんわりと手を掛けるとメイがぱっと手を離す。そうしてアレイズの顔をまじまじと見てうわあと声を上げた。

「ごめんなさい、まさかそんなに人ごみが駄目だって知らなくて」

「いい……いいから喋るな、頭に響く」

頭痛までしているのか、アレイズは辟易としたように頭を抱えてゆらりと立つ。それだけを見ていてもやはり具合が悪そうで、ティファはアレイズの額から手を離して彼の背を撫でた。吐いてもいないのに背中を撫でて大丈夫かは分からないが、自分のメイドのせいでこうなったのだから何かしなくてはと思ったせいだ。

細かい砂の粒子が入り込んだ外套を撫でる。すると深く息を吸ったアレイズが首を振った。

「人ごみには慣れていないんだ」

「そうね。買い物も早めに終わらせないと」

元々アレイズは大聖堂の地下で眠っていた神だ。その彼が久々の人ごみで具合を悪くしても別段おかしいこととは思えなかった。

人間からしてみたら神が人ごみに酔うなど考えられない話だが、彼は神というより元人間という意味合いの方が強い存在だから。

窘めるようにメイとマイを一瞥する。すると萎縮したような双子はしかしすぐに気を取り直した様子で声を上げた。

「では少し入り用の物を買ってきますので、出店を楽しんでいてください」

「行ってきまーす！」

そうして今度は二人で人ごみへと突入して行く。

体力の有り余っているその様子に思わずティファの口から苦笑が漏れた。

「元気だな」

「えぇ。さすがに私も人ごみの中であれだけ元気ではいられないわ」

苦笑交じりに言葉を交わしていると、ぴょこんとメイの腕の中から白くて長い耳が伸ばされ紅い瞳が向けられる。

だが逃げる素振りを見せない兎は結局双子と一緒に人ごみの中に消えて行き、そして。

「へ？」

少しして双子が戻ってきた時には檻の中に入っていた。

◇　◇　◇

双子が買い物で買って来た物は食料品でも衣類でもなかった。
あれだけの短時間でどうやってと思わされるほどに手早く戻ってきた二人が手に持つ袋の中身を見てみれば、そこには薬草などで作られた薬品に隠しナイフに兎用のケージ、そして小さな御守りが二つ入っていた。
薬品や隠しナイフはともかくとして、何故ケージと御守りが。
ティファは意味が分からないと言わんばかりにこめかみに指先を押し当てて首を傾げる。
アレイズを見れば、彼もあれほど強く腕を引っ張ってまで彼女達が欲した物に些か疑問を抱いているようだった。
人ごみから少し離れ人気のない建物の軒先で怪訝そうな二人分の視線に晒され、双子が困ったように目を見合わせる。
「この御守り、何に使うの？」
だがこのまま沈黙を貫かれても困ると思いティファがとりあえず気になったことを尋ねると、二人はそれぞれティファとアレイズに御守りを手渡しながら答えた。
地面に置かれたゲージではピコが窮屈そうに暴れていたが、今ばかりは我慢してもらおう。
「これは持ち主が危機に晒された時に、一度だけ持ち主を助けてくれる御守りだそうです」
「本にも載ってたみたいだから偽物じゃないよー」
「誰もそんなことは気にしていないわよ……」
琥珀色の石が付いたそれは銀糸で織り込まれており、ささやかながらもセンスのあるものだった。
呆れながら石をつまむとほんのりと温かさを感じる。
「だが、確かに魔力は籠められているようだな」
不思議に思い小首を傾げるとアレイズが何やら気付いたらしく、同じように琥珀色の石をつまんでいた。温かいのはこのせいか。

ティファは手持ちの鞄に、アレイズは外套の内側にある金具にそれぞれ御守りを付け、そこでふと違和感を感じて目を合わせる。漆黒の双眸は何かおかしいんじゃないかという言葉を伝えてきているようだったが定かじゃない。だからティファは自分の意志で持って二人に尋ねた。

「そういえばこの御守り、メイとマイのがないけど」

自分やアレイズにはあって二人の分がないというのが気になって尋ねると、双子はびくりと肩を竦ませた後ですうっと息を吸い込み、そして。

「「ごめんなさい！」」

同時に声を上げて頭を下げた。

「へ？」

「どうしたんだ？」

マイなんかは既にメイド口調ですらない事から尋常ではない気配を察してティファとアレイズが目を丸くしていると、二人はやはり同時に頭を上げて少し涙目で口を開く。

亜麻色の瞳が陽光を受けて普段よりも強く煌めく。

「ティファ様」

「アレイズさん」

「マイ？　メイまで、やっぱり二人ともさっきから変よ？」

大きめの瞳から溢れそうになる涙を見て目を細めると、先程から感じていた違和感の正体がここにあるのではないかという考えが脳裏に浮かぶ。だが理由が分からない。

「……」

ただ、アレイズにはおおよその理由が理解出来ているのだろう。彼は黙ったまま双子が何か言い出すのを待っているようだった。

自分ではなくアレイズが先に気付くのは何だか癪だったが、神相手に張りあっても仕方がない。そう考えたティファは吐息混じりに浅い息を吐いた。

「あのね、言い辛いんだけど」

「うん」
先に口を開いたのはメイだった。
本当に言い辛いことなのだろう。揺れるツインテールの動きは小さく、それだけで彼女の体を小さく見せていた。
だがここで萎縮させることも緊張させることも得策ではない。
そう考えて頷くと彼女は意を決したように声を上げた。
「姉さんと私、少しの間御暇を貰ってもいい？」
「暇……？」
御暇、という言葉をティファが耳にしたのは初めてだった。
「お願いします！」
だがマイがもう一度頭を下げるのを見て、ようやくその言葉の意味が実感出来た。
要するに少しティファから離れてもいいかと聞いているのだろう。
さすがにこれから先の旅路の全てから遠ざかるという意味ではないことは、彼女達の姿から理解できたからだ。
しかし、それさえもティファには意外すぎることだった。
今まで何があっても暇を貰うなどという言葉を聞いたことがなかったのだから。
「なるほどな」
アレイズの声が耳朶を打つ。納得した様子の彼を横目に見ると決断を委ねる視線と自分のそれが絡み合う。
穏やかとも突き放すとも言える視線に何て返そうか考えあぐねていると今度はマイの声が響いた。
「本当はグラドに着く前に私がティファ様にお話しする予定だったのですが、結局出来なくて」
「埒が明かないから二人で御願いしたの。ねぇ、お願いティファ様！」
「……二人とも」
静謐な黒の瞳と決意を込めた双子の瞳に、どうしてという言葉に対する答えがゆっくりと浮上してくる。

――メイの記憶を探しに行くのね。
ピコが言っていた言葉が脳裏で何度も反芻される。
そう、メイは七年前の記憶を失っている。そして二人も両親をあの日殺された。
……真実を知りたいのは、私だけじゃない。
反芻させた言葉と思考を心の中で転がす。そうして彼女達の言葉からさほど時間を空けずにティファが顔を上げた。
「分かったわ」
客を呼ぶ商売人の声に負けない程の凛とした声が周囲に響く。
だが、それを聞き咎めたのはアレイズだけだった。
「ティファ」
決断を委ねるような目をしたのに、彼はどこか不満そうにティファを呼ぶ。
ついでくいとブラウスの袖を引かれたが、ティファの決意は揺らがなかった。
幼い頃からずっと傍にいた彼女達と離れることは確かに心細い。
いくら自分から離れたことがあるとはいえ、その後で皆と一緒がいいと実感した後なら尚更に。
「今までずっと仕えてくれてたんだから休暇ぐらいあって当然だったんだわ。気付かなくて御免なさい」
「ティファ様……」
「でも、くれぐれも気をつけて。こちらのことなら心配しなくてもいいから、少し羽を伸ばして来てね」
だが、自分の我侭で繋ぎ止めることが出来ないことも事実だった。
だからティファは行くななどと無理を言うことも出来なければ、丁度いいとばかりに手放しで喜ぶこともできないし、更に言えばメイの記憶について言及することもできなかった。
ピコの言葉をマイがメイに伝えておらず、ただ強引にメイを説得した可能性だってないわけではないのだし、もしそうだとしたらティファが今ここで全てを話すことは問題がこじれる理由になりかね

ない。
　そんな風に考えられる可能性を全て考慮してティファが出した精一杯の言葉にメイが飛びついた。
　柔らかな髪から甘い匂いがふわりと舞う。
「ありがとうティファ様！」
「ティファ様も、くれぐれも御気をつけて」
　視界の片側を埋めるツインテールに、もう片側を埋める深青の温もり。
　それがしばらく失くなることに寂しさを感じなかったわけではないが、ティファは精一杯笑ってみせた。
　どの道自分にもやるべき事があるのだし、アレイズと共に世界に会う手がかりを探さなくてはならない。丁度いい機会じゃないか、そう心の中で言い聞かせながら。
「こちらは少し時間が掛かりそうだから、ひとまず一週間後に待ち合わせることにしない？　その後もう少し時間が必要なら伸ばせばいいんだし」
「承知致しました」
「場所はどうする？」
　そういえば自分達はあまりグラドの地理に詳しくない。
　そう考えてアレイズに助けを求めると、彼は空に伸びる一筋の光を指差した。
「あれは中央部に昔からある噴水が放つ光だ。あの場所で待ち合わせればいいだろう」
　きらきら光るあれは水だったのかとティファが感嘆の息をつくと、メイとマイが力強く頷き鞄を持ち直す。
　グラドなら宿屋も多くあるだろうし、きっと宿泊先も分かれるはずだ。そう考え最低限の荷物が入った鞄を貰い受けると双子がちらりとケージに目を落とした。
「ピコは連れて行くから心配しないで」
　そのために連れてきたと言っても過言じゃない。

ティファが双子に笑いかけると二人は幾らか逡巡した様子を見せたがしかしすぐに取り繕ったような笑みを浮かべた。
「……分かりました。ではティファ様、くれぐれも無茶なことはしないでください」
「アレイズさん、ティファ様をよろしくねー」
低めの声がひっそりと、高い声がきんと響く。
それを受け止めたアレイズがひらひらと手を振って応じると安心したらしい二人がようやく背を向けた。雑踏に紛れ、その姿はすぐに見えなくなる。
目に鮮やかな色を纏っているのに、こういう時はあまりにあっさり見えなくなることが不思議だった。
「良かったのか？」
軒先で立ち尽くしたままでいるとそんな声が降ってくる。
「えぇ、いくら私が主だからって縛り付ける権利なんてないわ」
「……それもそうだな」
不思議そうな声に素直に返すと少しの間を開けて静謐な声が返ってきた。アレイズにもティファの心情は伝わっているのだろう。無理矢理さっぱりした顔で笑うティファを案じるようなアレイズの目がそれを物語っていた。
だがいつまでもメイとマイがいなくなったことについて話をすることはできなかった。
それはこれから忙しくなるからという理由では勿論ない。
「何？」
「お前も聞こえたか？」
もう少しぐらい双子の話をしていてもいいだろうと考えティファが口を開こうとした先で、不審な音が聞こえてきたせいだ。
少し高い人間の声は、ティファを呼んでいた気がする。
だが耳を澄ませても聞こえるのは雑踏から漏れる人の声だけで、高い声はもう聞こえてこなかった。
まるで始めからそんな音など響かなかったと言わんばかりに。

軒先が作り上げる影の中できょろきょろと左右を見渡す。
だがティファの目にもアレイズの目にもティファを見ている存在などいなかった。
その時。
『ティファ』
「まただわ」
今度ははっきりと放たれた声に声を上げる。
やはりティファを呼んでいる声に目を細め周囲を睨みつけるが、その声の主はやはり見えない。
「あぁ、一体誰が――っ」
ティファの声にアレイズも訝しむような声を上げる。しかしその先に続く言葉は飲み込まれ、ぶつりと断ち切られた。
何かに勘付いた様子のアレイズが息を呑むと、くすりと楽しげな笑い声が漏れた。
「相変わらず鈍いね。僕だよ、僕」
「ティファ、下がれ！」
しっかりとした声に言葉、それらは少年のようなトーンで持ってティファではなくアレイズに向けられた。
刹那、アレイズがティファの腕を引いて軒先から飛び出る。幸い人は近くを遠っていないらしく、周囲をよく見ていないアレイズにぶつかる者はいなかった。
きぃんと高い音が響く。
同時にティファでも感じられる程の強い魔力が放出された。
「！？」
驚愕を無理矢理捨て置いて周囲を見渡す。だがやはり幸いなことに誰も放出される魔力など感知できないらしく、彼等は昼下がりの穏やかな時間を買い物に費やしていた。
それが幸いな偶然なのか狙われたものなのかは分からなかったが。
「やあ」
アレイズの外套の裾を掴みながら軒先の影に隠れるようにして浮

かび上がる半透明の少年を凝視する。
彼は片手を上げてにこやかに笑んでこちらに挨拶をしたようだったが、それに対して返してやる気はなかった。
暗がりでもはっきりと分かる金の髪が柔らかそうに揺れる。
「この声は」
至近距離でアレイズが呟くのを耳に留め、続く言葉をティファが発する。
一度聞いたことがあるこの声の持ち主を彼女はよく知っていた。
「ピコね」
「大当たり。ティファはともかくアレイズ神はもっと早く気付くべきなんだけどな」
嬉しそうに笑う少年はティファとそう変わらない年に見えた。
少し前髪が長いものの育ちの良さそうな短めの金髪に、ティファのそれより少し明るめの碧眼を持つ少年はどこからどう見ても一般人に見える。
あどけなさの残る甘い顔立ちは年頃の娘なら黄色い歓声を上げそうだったし、着ている衣服もやはり貴族が好んで着るような型だ。
これで出会った場所が良ければティファとて貴族の息子だと信じて疑わないに違いない。
ただ、彼の後ろにある扉は彼の体を通して見えている。
それで自分は普通の人間ですと言われても誰も信じはしないだろう。
信じて欲しいと思っているかどうかはさておき。
「貴様っ！」
自らを神にした元凶の一因。
それを目の当たりにしてアレイズが怒りを露わに剣の柄に手を掛ける。
だがピコはアレイズのことなど見ていないと言わんばかりにティファに話しかける。
「あの二人は別行動なんだよね？」

「？　……そうだけど」
そっか、と答え口の端を吊り上げるピコはやはりアレイズの事など見えていないらしい。
それが更にアレイズの怒りを増長させることなどまるで意に介さず、彼はにこやかに口の端を吊り上げる。あと数年もしたら視線を合わせることですら緊張しそうな美青年に育ちそうな顔立ちをしかしティファは睨みつけ、警戒を解かない。
ピコには一度メイが乗っとられているのだ。
これでにこやかに話せるほどティファは世間知らずではなかった。
ダークブルーの双眸が吊り上げられピコを真っ直ぐに見据える。
すると彼はティファの視線には耐えられないとばかりに若干悲しげな顔を浮かべて続けた。
「ティファ、君は自分を探しに来たんだろう？」
囁くような声が耳朶を打つ。
一直線にティファに向かった声は雑踏よりもずっと強い力を持って脳に叩きつけられ、ぐっと押し黙る羽目になる。
――何故それを。
胸中で呟く。この話をピコにした覚えなどないというのに。
やはり、首輪の紋章ではなく兎自身が神ということなんだろうか。
いや、それどころか七年前に関わっているのだろうか。
ぐるぐると思考が渦巻く。だがそんな考えを断ち切ったのはやはりピコの声だった。
「君が望む通り、僕は君と一緒に行くよ。一人にするのは危なっかしいからね」
嬉しそうに笑うピコの顔には邪気など感じられない。
なるべく人目につかないように影から出ないようにしているその姿を一瞥すると、ピコはティファの視界に入るのが嬉しいと言わんばかりに笑みを深めた。
……そんな風に嬉しそうにされても。
「いらないわよ。大体私にはアレイズがいるもの」

ピコを連れて行くことに異存などない。だがそれは兎のピコと首輪の話であって彼ではない。

大体これだけ人畜有害な存在に呑気に歩かれても困る。

「ふうん？　てっきりアレイズは君と離れるつもりだと思ってたんだけどな」

「どういう意味よ」

「それはアレイズから聞くのが一番早いよ。ねえアレイズ神？」

だがピコも引く気はないらしく、意味深な笑みをアレイズへと向ける。そこでようやくアレイズを見た彼の碧い瞳に射貫かれてアレイズも胡乱気に視線を返すが、そこには嫌悪と敵意しか込められていなかった。

同調するでもなく、かといって否定的な何かを口にするでもないアレイズの態度が気になって声を掛ける。

――自分と離れるつもりって、一体どういう。

「アレイズ？」

「……」

呼び掛けに沈黙が返ってくる。

それだけでピコの言葉に信憑性が増して、ティファは不安に胸が痛むのを感じていた。

メイの体を乗っ取った存在の言葉に耳を傾けることはしたくないが、アレイズが否定しないことが何よりの証拠でもある。

「どうする？　アレイズ神」

アレイズは思い悩むように手を閉じたり開いたりしながら瞼を伏せた。

恐らくピコに向けて魔法を放ちたかったのだろうが、半透明の存在に魔法が通じるかどうかは甚だ疑問だ。アレイズもそれを理解しているのか悔しげに眉間に皺を寄せつつ、ピコの言葉に吐き捨てるような言葉を返した。

「貴様みたいな奴の傍にティファを置いておけるわけがない」

はっきりとした物言いにティファがほっと安堵の息をつく。

しかしその安堵は一瞬で掻き消えた。
「そのために使命を捨て置いてでも？」
「っ！？」
揶揄するような言葉にアレイズが息を呑む。
図星を突かれたのだとティファが気付いたのはピコが言葉を続けてからだった。
「人であろうと神であろうと、命ある全ての者には自分が為すべきことがある。それを放棄してまで警戒されるなんて心外だな」
ぴっとピコがアレイズを指差す。
水仕事などしたことがなさそうな繊細そうな手が指し示す先に立つアレイズは、苦虫を噛み潰すような渋い表情を浮かべて黙り込んだ。
使命、為すべきこと。
恐らくそれが世界の意志たるレイナに会うことだというのはティファとて理解している。
だがそれをアレイズに呪いを掛けたピコが口にするのは酷く矛盾しているような気がした。元々殺す為に呪いを掛けたはずの存在が、何故世界に会うための道を容認するのだろうかと。
もしかしたら罠なのだろうか、そう考えたのはティファだけではないようだった。
アレイズが探るような目でピコを見据える。
ぴたりと一点に向けられた漆黒の双眸にしかしピコはにこやかに笑って答えた。
「大丈夫だよ。君がいない間ティファは僕が守るから」
きっとアレイズが言いたいことはそんなことではないだろう。
だがそれを知っていてなおピコはそう答えたのだとティファは何となくだが感じることができた。
そしてそこに敵意や害意を感じられないことも。
「……何故そこまでティファと一緒にいたがるんだ」
苦々しく発したのはアレイズだ。

「気に入ってるからだよ。それ以外に何か理由が必要？」
そして爽やかなまでにきっぱりと答えたのはピコだった。
ティファの何を気に入ったのか理解はできないものの、メイの体を乗っ取った時もティファを害そうとはしなかったことから七年前の事件に関与していない可能性が高いことは見て取れる。
ただアレイズに対して魔法をぶつけたというだけでティファにとっては警戒すべき相手なのだが……。
「分かったわ」
低く、静かに言い放つ。
するとピコがきょとんと目を丸くし、アレイズが慌てたようにティファの腕を掴んだ。
続く言葉を紡ぐのに幾らかの時間を要し、ティファは顔を上げる。
凛とした声が影をつんざくように真っ直ぐに響いた。
「でも道中あなたが誰かを害したのを知ったら、私はあなたを殺すわ」
「ティファ、お前」
「アレイズは黙ってて。……やらなくちゃいけないことがあるんでしょう？　全く、皆揃いも揃って勝手に決めちゃうんだから」
無論それは本心ではない。だからこそティファはでも、と続けた。
「主であり契約者である私が気付けなかったせいでもあるわ。言いづらくさせて御免なさい」
それは常に彼等と共にいたティファの役目なのだと彼女は思っていた。
七年前の真実を欲することは決して不思議なことではないし、アレイズが世界に会うための手段を探すことも何らおかしなことではない。強いて言うならそこに自分も連れて行ってもらえると期待していたことが痛手になっていたが、ピコとアレイズの態度からして一人で探したいことなのだろう。
腕を掴むアレイズの手を優しく引き剥がす。自分のそれより堅い手の平を離す寸前、もう少しだけ触れていたいと考えるも何を考え

ているのと自分を叱咤した。いくら契約神相手でもべたべたするなんて、元とはいえ聖女らしからぬ行動だ。

――本当に何を馬鹿な事を考えてるの。

「じゃあ決まりだね。僕はティファが危険に晒されない限り誰も害する気はないし、それならティファに殺される事もない」

悶々と自己嫌悪に陥りかけたティファの思考をピコが引き上げる。のほほんとした明るい声にあなたが事態をややこしくしなければと八つ当たりじみた考えを抱きつつ一歩進み出た。

「私が襲われたとしても」

「あぁ、別に殺しはしないよ。だけど少しは痛い目を見てもらわなくちゃね。傷つけずに護れるほど僕達は万能じゃない」

そうだろう？　アレイズ神。

そう問うたピコの言葉にアレイズは何も答えなかった。ただ思案するように顎に手を当て足元を睨みつけているだけだ。

その胸中で何が渦巻いているのかティファには理解できなかったが、恐らく自分と世界を天秤に掛けているのだろうという予想はできた。

アレイズは契約神としてティファを守ると話していた。その彼は今世界に会う為の情報を得るために、胡散臭い神と契約者を行動させようとしている。それを責める気はティファにはなかったが、責めなかったとしてもアレイズ自身が納得しなければ意味がないことだろうと結論付け黙って見守ることにした。神だというのによく悩んでは難しい顔をしている彼のことだ、今回の事も随分と思い悩んでいるに違いない。

「すまない」

アレイズの唇からするりと零れ出た言葉にティファが小さく頷く。彼は世界を取ったのだ。

それが少しだけ寂しい事に思えたが、元々契約を結んだ理由が世界に会うためだったのだからここで文句を言うことなどできようはずもない。むしろここでティファを取ろうものなら彼は旅の理由を

失ってしまう。
仲間が次々消えていくことに一抹の寂しさを覚えていると影から出ない範囲で近付いてきたピコがすっと手を伸ばす。
「これからよろしく、ティファ」
差し出された手を警戒心を解かないまま握り締める。
すると半透明のはずであるそれはティファの手に奇妙なまでに現実的な温もりを与えた。
人肌に近いそれから手を離す。そうして振り向くと漆黒の立ち姿が申し訳なさそうに眉尻を下げた。
「それじゃあアレイズ、一週間後に会いましょう」
「……あぁ」
言い放ち、寂しさを悟らせないためにケージを持って笑いかける。
こちらはピコが姿を消さない限り動けないからと動きのみで伝えると、しばしの沈黙の後でアレイズが背を向けた。
思わず手を伸ばしそうになり、慌てて心の中で止める。
兎を連れて森の中で一人さ迷うことだってできたのに、どうして今になってこんなに寂しくなるのだろうか。
瞼を伏せる。するとピコが大丈夫だと言うようにティファの指に自分のそれを絡めた。
「ティファ！」
その時強い声が耳朶を打ち、出店の人間が驚いたように一瞬だけ声を止める。
「アレイズ……？」
目を伏せていたティファが顔を上げると、アレイズは左薬指を軽く叩きながら言い放った。
「お前に何かあったらすぐに助けに行く！　その指輪がある限り、契約者の危機は察知できるからな！」
それは指輪を介していつでも繋がっているのだと伝えてくれているようで。
「……うんっ！」

「やれやれ、よっぽど信用されてないんだねー僕って」
自らの指輪を指でなぞりティファが満面の笑みで頷く。
するとピコが面白くなさそうにぼやいたが気にしないことにした。
一時の別れに対する寂しさが一瞬にして消え去る。
軽くなった心で息を吸い込めば、出店から果物の甘い匂いがした。

◇　◇　◇

「さて、それじゃあ僕も人間の姿になろうかな」
「できるの？」
「勿論。要は透明じゃなくなればいいんだけど、人間の方が動きやすいだろうしね」
そうしてアレイズが雑踏に姿を消してから不満そうに溜息をついたピコがうんっと伸びをする。糊の効いたシャツが少し堅い音を立てて伸ばされる。
その刹那、ピコの体が現実味を増したように色を得た。
絵の具で色を塗っていくように、半透明ではない鮮やかさが目に映る。
人ではないものから人に変わっているのだとティファが感じている間に、彼は本物の人間の姿になっていた。
「随分便利なのね……神様って」
ティファが口を開けて驚いていると、ピコが得意げに笑いながらまぁねと答える。
それからティファが手に持つケージを優しく抱きかかえた。中に入る兎は眠ったようにぴくりとも動かない。
その姿に、兎自身がピコなのではないかという疑念が更に強くなった。
「それじゃ行こうか、ティファ」
「えぇ」
しかしそれは本人に訊かない限り分かりはしないだろうと考え、

ティファは道中訊いてみようと決意する。
「あ、そうそう」
そうして一歩踏み出すとピコが何やら思いついたように声を上げた。
ティファ、ともう一度名前を呼ばれる。それがやけに嬉しそうな声だったことは気にしないことにした。
ティファには何故ピコに好かれているのか理由が分からないのだから。
ケージを揺らさないように繊細な動きで歩くピコが立ち止まり、清々しいまでの快晴を見上げてから視線を元に戻す。
「ピコって名前もいいけど、僕にはイオンって真名があるんだ。だからそれにちなんでイオって呼んでくれると嬉しいな」
さすがに人前で真名を呼ばれることは危惧しているのだろう。
「そんなに簡単に真名を教えてもいいの？」
「ティファならね」
しかし、それなら教えなければいいだけの話だ。
そう考えティファが眉を顰めるとピコならぬイオははにかむように笑った。
甘やかな顔に糖度が増し、道を行き交う娘達が一度通り過ぎた後で立ち止まって振り返る。下手をしたら二度ほど振り向かれているのではないかと思えるほどの態度を取られても彼が気にする様子はないが。
ティファは娘達から向けられる敵意に近い睨みを苦笑交じりに受け止め、渋々頷いた。
「分かったわ。これからよろしく、イオ」
メイの体を乗っ取った時も先程も、彼は自分がピコだと呼ばれても否定する素振りは見せなかった。
どうやら偽名としてその名を受け入れたのだろうが、そうなるとますますケージの中の兎がイオの本体なのではないかと思えてきて気分が暗くなった。

いくらアレイズの天敵だからといって兎を殺すのは忍びないからだ。

否、例え殺さなかったとしても傷つけなくてはならない局面だってあるかもしれない。

見た目だけは人畜無害なだけにティファにはそうすることが憚られたのだ。

そんなことを考えるティファの意志とは無関係に、イオがティファの手を握り締める。瞬間周囲の温度が沸騰した気がしたが、それ以上にティファは年頃の娘らしく恥ずかしさで顔が熱くなるのを止められずにいた。

いくら相手にメイの体を乗っ取った経緯やアレイズに害を為した経緯があれど、見た目だけは普通の少年なのだ。それは繋いだ手から繋がる温もりがしかと伝えている。

しかしティファはそれに対して恥ずかしがる素振りを見せることが悔しくて、恥ずかしいから止めてとも言えないまま手を引かれて歩いていく。

◇　◇　◇

こうして彼等にとって最も大事なものを探すための一週間は幕を上げ、道を違えた三人の少女と二人の神はそれぞれの道に向かって歩き出す。

メイとマイは出店が立ち並ぶ南地区へ。

アレイズは昔グラドを訪れた際、情報屋が集まっていたとされる北地区へ。

そしてティファはイオに連れられ、どこに向かうのかはさておきとりあえずは西地区へと。

主や従者、契約者や契約神。対となる存在がいないという心許ない道を歩きながら彼等はただ願う。

どうかこの道の先に自分が願うものがありますようにと。

第二十二話

イオに手を引かれ、ティファは西地区へと足を踏み入れながらぼやくように声を上げた。
「それにしても、これだけ広かったら私に関する手がかりを得るなんて難しい話よね」
王城のある東地区とは違い民家が多く立ち並ぶ西地区は、先程までいた場所に比べたら若干静かな印象を受ける。だがその分人々が丹精込めて育てているのであろう草花の姿を多く見かけることができた。
見ればアリシアの花もある。風にそよぎお辞儀をするように花を横に傾げるアリシアの花にティファは口元が綻ぶのを感じながら、それでもぼやくことを止められずにいた。
ほっそりとした、そのくせティファよりも大きな手の平は未だ離されることはない。
恐らくこのまま付いて来いということなのだろうが、ティファは当初の予定とは違う場所に向かっていることに不安を感じずにはいられなかった。
「王城の近くに行こうと思ってたのに……」
「あの辺りじゃ大した情報は得られないよ。貴族や騎士ばっかりだしね」
ぼやくと今度こそ答えが返ってくる。振り向くイオの顔はにこにこと楽しそうに笑っていて、相も変わらず道行く娘達の足を止めさせていた。
その度に睨まれる方の身にもなってほしいものだ。
「ところでイオ」
「うん？　どうしたの？」
拉致があかなくなり声を掛けてみるとイオが立ち止まる。
それをいい機会とばかりに手を離してもらおうかと一瞬考えたテ

ィファだったが、とりあえずは疑問を口にすることにした。
「私達って何で西地区に向かってるの？」
「秘密」
辺りをどれだけ見渡しても、見えるのは民家ばかりだ。だというのにこのような場所に何をしに来たのかが分からず尋ねると、にたりと笑ったイオに即答されてしまった。
爛と輝く碧眼はティファの出方を確かめるために瞬きひとつせず開かれている。そんなイオの姿に不安を覚えたティファは額に手を押し当てて大仰に溜息をついてみせた。
守るとは言われているが、こんな調子で目的が果たせるのか甚だ疑問だ。
「秘密って、いい加減教えてくれてもいいじゃない」
「着いてからのお楽しみだよ。大丈夫、危ない場所に連れて行く気はないから」
「それって気休めにもならないわよ」
あまりといえばあまりの気楽さにもう一度溜息を漏らす。そうして無理矢理にでも手を離そうとすると逆にがっちりと手を掴まれてしまった。
離さないと案に伝える手の平の熱が増す。
同時にイオが背中を向け再び歩き出したせいで自分の足まで前に進める羽目になった。
陽光を浴びてきらきらと光る金髪がティファの視界の一部分を眩しく染め上げる。その眩しさに瞼を半分ほど閉じながらティファは胸中で再度溜息をついた。
双子やアレイズにはもう誤魔化しようがないが、ティファは破滅的な方向音痴だ。だから彼女は誰かについて歩いた方が得策と言えるし、間違って見知らぬ地区に足を踏み入れるよりもイオと行動した方が安全だということを理解していた。
だが、目的地も分からずに歩いているのでは一人で歩いているのと対して変わりがない。

「もう少しで着くから……多分、そこなら少しは手がかりを得られるだろうしね」

本当に大丈夫だろうかと思案しているとイオが振り向かないままに言い放つ。

その言葉に一応自分の事を考えてくれているのだと理解したティファは、それを信じるべきか否かを思案する前にイオの手を握り返した。

どの道グラドという都市の名前しか手がかりはないし、何か危険な目に遭おうともアレイズが必ず来てくれる。

ならば毒を食らわば皿までという言葉を実行するしかないとティファは胸中で呟き、ふとイオが手に持つケージを見つめる。そこには未だ眠り続けたままの兎が一匹、ティファとイオの声など聞こえていないという様に眼を閉じていた。

それから再びイオへと視線を戻す。揺れる金髪を眺めながら、ティファは困惑を口に出すことなく呆れるように肩を竦めた。

危険なはずの神が危険に見えない、警戒心を抱けない。呆れの元凶である感情を拭えないままに。

そうして十分ほど歩いた後。

「何、これ？」

「見ての通り、教会だね」

高くそびえる民家の群れを抜けた先にそれはあった。

一言で言えば巨大な黒い塊。

だがイオが言う通りそれは建造物にも見えるし、神の紋章を刻んでいることからして教会と言っても差し支えないのだろう。

とはいえそれでもどこか納得いかない。

黒の壁面を覆うのは煉瓦でも石でもなく神聖文字にも見える象形文字だった。ティファはその一つ一つに目を走らせて何が書かれているのか読み取ろうとするものの、さっぱり理解ができない。そもそも一体誰が何のために刻んだのか。

胡乱気に教会と呼ばれる建物を凝視するティファにイオが付け加

えるような説明を続ける。
「レイニウム大聖堂の影響は受けないとはいえ、聖都市の名に相応しく教会はちゃんと存在してるんだよ。実際グラドには北地区と僕達が今いる西地区の二箇所に教会がある。世界を奉るというよりはそれぞれの教会で別々の神々を奉っていて、更に言えば偶像じゃなくて本物がいるって有名なんだ。せっかくだからちょっと行ってみようと思って」
その言葉に、元とはいえ一応聖女だったのだから教会を訪れておくことも必要だと感じ頷きを返し胸中で呟く。
――それに、アレイズやイオ以外の神に会うのも悪くないかもしれない。
ただ、できれば神らしい神でありますようにと祈ることは忘れない。これ以上人間らしい神に会ってしまったら敬虔な信者に申し訳が立たなくなるからだ。ティファは既に聖女ではないのだから気にする必要はないとはいえ、気になることに変わりなどない。
「でも教会にしては黒々しい建物ね？」
嘆息混じりに教会を見上げると、屋根までもが真っ黒であることが見て取れる。それは草花や煉瓦造りの民家がある地区に鎮座するにはあまりに無機質で、邪神でもいるのではないかと疑ってしまうほどだ。
よもや邪神が現れるということはないだろうがと胸中で付け加えながらイオに視線を向けると、困ったように苦笑したイオと目が合った。
「ここの神は黒が好きだから。でも大丈夫、君を傷つけるような危ない神じゃないって僕が保証するから」
「もしかして知り合いなの？」
本当にしょうがないんだからと言わんばかりの態度に問いを続けると、イオは自信満々に頷いた。
誇らしげなその態度はやはり神らしくなく、ティファは相手が危険だとされる神であることを忘れて笑いそうになってしまった。

「もちろん。大きな声じゃ言えないけど僕だって神なんだし、大抵の神とは知り合い……そして」

綻びそうになった口元を引き締め、一度区切られた言葉の続きを待つ。

すると甘やかさをかなぐり捨てた、真っ直ぐな視線が黒の教会へと向けられた。

「彼はそんな神々の中でも数少ない友人の一人だからよく会いに来てるよ。勿論、こんな風に人間の姿で会いに行くことはないんだけどね」

それは碧眼に映るにはあまりに暗い色だったが、彼はそれを気にする様子もなくどこか懐かしそうに笑んでいるのみだった。そう、それはまるでこれから会いに行く神に親愛を感じていると言わんばかりの笑みだ。

ティファは見せつけられた人間らしい感情に目をぱちくりを見開き、今度は隠すことなく微笑を浮かべる。

「そう……なら、会うのが楽しみだわ」

溶解していく警戒心に対し、脳内で警鐘が鳴らされる。

それでも人が好いティファにはこれ以上警戒心丸出しでいることはできなかった。

「うん、じゃあ行こうか」

素直な言葉に大きく頷いたイオがぎゅっとティファの手を握り締める。温い熱を孕んだ指先が絡み合い、ティファは一瞬硬直したがすぐにその手を握り返し教会へと足を踏み入れた。

開かれた扉の先に身を入り込ませ、その場で立ち止まる。すると予想外にも黒以外の色を見つけることが出来て、ティファはその色に視線を釘付けにされてしまった。

だがそこから無理矢理視線を引き剥がして当たりを観察することに成功する。

壁は相も変わらず黒一色だった。天蓋も黒塗りにされており、横並びの椅子も黒塗りの樹で作られているのが分かる。

だが全てが黒というわけではなく、ティファ達が踏みしめる絨毯の色は焔を思わせるような紅であり前方高くに見えるステンドグラスは黄色や赤や青と色とりどりのものが使われており、陽光の色をねじ曲げて教会内に捧げていた。

「……あれ？」

そうして光を見つめていると、奥から旋律が流れ出ていることに気付きティファが声を上げる。

「これは歌と――」

「オルガンだね」

ティファは音楽の才があるわけではないので分からなかったが、恐らくほとんどの教会に支給されているであろうオルガンの音に合わせて人の歌声が聞こえているのだろうと推測することができた。オルガンはイオが言った所からして間違いはないだろう。

止めていた足を前に進め、どれだけの年月を刻んだのかさえ定かではない古びた教壇の前まで歩いていく。するとその奥にステンドグラスにあと一歩で届きそうだという高さのパイプオルガンと、女性の立ち姿が見えた。先程見えなかったのは逆光のせいか。

「……」

再び足を止め、流れ出る旋律に耳を澄ませる。

流れ出る歌は、心が洗われるほど澄んだ歌声だった。

これは何という歌だろうか、もしかしたらレイニウム大聖堂の人間なら皆が知っているような曲なのだろうか。そんなことを考えながら歌に魅了されたティファは手近な椅子に座り込み歌が終わるまで目を閉じる。

そうして歌が最後の盛り上がりに向けて大きく放たれ、余韻が柔らかな陽光に完全に溶けきってからその余韻を壊さない程度に拍手を贈った。

イオも拍手を贈り、ケージを教壇に置いてから立ち姿へと近付く。

「素敵な歌でした」

逆光に隠れてよく見えないが、その立ち姿は修道女のものに見え

た。

教会にいるのだからそれはあながち間違いではなく、むしろそれ以外の選択肢などないように思われる。

興奮を言葉に載せて彼女に言い放つと彼女はこちらに近付き次第に姿をはっきりとさせた。

「まぁ、ありがとうございます。そう言っていただけると嬉しいですわ。ところで、今日は何の御用でしょうか？」

嬉しそうな声はどこか掠れており、女性が老齢であることをティファの聴覚に訴えかけてくる。それから輪郭をはっきりとさせる女性の顔に深く刻まれた皺もその考えを肯定した。

ティファの予想通り修道女の出で立ちをした女性はおっとりとした笑みを浮かべ一礼する。

たおやかさを感じる上品な仕草が発する問いにしかしティファはうっと言葉に詰まってしまった。

まさか神に会いに来たと率直に言うわけにもいくまい。

「あの、祈りを」

ここは祈りを捧げに来たとでも伝えよう。

そう考えて口を開いたティファを制するように、先にイオが答えてしまった。

「僕達はこの教会の神に会いに来たんだよ。……彼は起きてるかな？」

――そのまんまじゃない！

あまりにも率直すぎる言葉にティファは自分がしようとした言い訳さえ忘れてぽかんとイオを見つめる。そうしてこのシスターに話が通じるのだろうかとどきどきしていると、彼女は驚いて眉を顰めた後でまじまじとイオを見つめた。

もしかして不審者に見られているのでは、そんな不安が頭を過ぎる。

だがそれは問題ないようだった。

「もしかして貴方は、イオ様ですか？」

ぴたりと言い当てたのは、確かにイオの名前だった。
彼はまだ自分の名を名乗ってすらいない。だというのに言い当てたということはシスターには人の姿をしていてもイオという神の存在が理解できたのだろう。ただ、真名にちなんだ名前を彼女が知っていることが不可解だったが。
「そうだよ」
シスターの言葉に全く動じることなく軽い口調で答えるイオに、彼女が慌てて一礼する。
ティファとは違い彼女は本物の聖職者なのだと、否応なしに思い知らされた。
例えどれだけ人間らしい神でも、普通は敬うものだ。
「少々お待ちください」
だが慌てた様子で奥の部屋へと下がっていくシスターの背中を見送りつつ発したティファの言葉はやはりぞんざいで、イオを敬う気配など微塵も感じられなかった。
「……あのシスター、何でイオが神様だって分かったのかしら？」
「何度か話した事があるからね、声で思い出したんじゃないかな」
問いに対しあっけらかんと答えるイオに、ではもし気付いてもらえなかったらどうなっていたのやらと不安を隠すことができない。
一応色々と考えて行動していることは分かるが、イオには多少向こう見ずな行動があることは否めないせいだ。
「そういえば、イオの真名を彼女も知ってるの？」
「？　いや、真名はレイナとティファ以外知らないはずだけど。親しい人には略称しか教えてないしね」
「なるほどね……」
それならば合点がいく。イオの答えに小首を傾げたティファはそう結論づけ、ますます彼が真名を教えてくれた意図が理解できなくなった。
世界の意志たるレイナはともかく、何故自分が。
訳が分からずイオを横目に見やると、にっこりと笑う甘やかな少

年の顔が視界に映る。そこには自分の体を乗っとろうとする意志や殺そうとする意志など微塵も感じられず、むしろ好意しか見ることができなかった。そもそもそれが理解不能だというのに。

「お待たせ致しました」

元々考え事が得意ではないティファは、あまりの困惑に頭を抱えそうになる。

だがそうして彼女の頭から煙が出てしまう前にシスターが戻ってきて再び一礼した。

毎日陽の光に当てているのであろう柔らかな修道服がふわりと舞う。

「今はまだ眠っていらっしゃいますので、明朝お越しください。それまでには起きて頂きますので」

「そうですか……」

どうやらすぐに起きるような存在ではないらしい。

シスターの言葉に若干残念な気持ちを抱いたティファはしかしそれを顔には出さないように無理矢理笑ってみせてイオの出方を窺う。

すると彼は微苦笑を浮かべてピコの入るケージを持ち上げた。

「じゃあ、また明日来るよ」

このまま帰るつもりだろう。

これでは結局何の手がかりも得られないが、確かにこの場にいても何もできない。

「はい、お待ちしております」

だからティファはシスターに見送られるままイオについて教会を出て、扉が閉まるまで何も言わずに歩くことにした。口を開けば焦燥感で何かとんでもないことを言い兼ねないからだ。

「ふぅ」

今日はもう誰も受け入れないと告げるように閉じた扉を背に、うんっと一つ伸びをする。

澄み切った青空には雲ひとつなく、何事もなければこのままグラドを観光したいという気持ちさえ生まれてしまう。

「とりあえず明日にならないと何も出来ないってことね」
だがそれどころではないことは彼女自身よく知っている。
だからこそティファは肩を落としつつぼやくことしかできなかった。
どれだけ青空が綺麗でものんびり待つのは性に合わない。
「他にすることもないわね。多分父様達も教会に行くつもりだったんだろうし」
はぁ、と知れず溜息が漏れる。
実際に父母がどこを目指していたかは定かではないが、神たる紋章を刻まれて殺されたのだから何の関わりもないとは思えない。こうなったら北地区の教会に行ってみようかと考えたものの、ぽんと肩を叩いたイオに諭されてその考えは取下げることにした。
「まぁいいじゃない。今日は宿でもとって休もうよ、まだ先は長いんだし」
――それもそうか。まだ急ぐ必要はない。
イオの励ましにぎこちなく笑って頷いたティファは、その日は西地区にある宿に泊まることにした……のだが。
「同室、なのね」
どうやらこの時期はグラドを訪れる巡礼者が多いらしく、開いている部屋が一室しかないのだと知らされティファがぽつりと呟く。
ちらりとイオを見れば彼は特段気にした様子もなく宿屋の台帳に名前を書いていた。
――気にするだけ無駄か。
大体相手は神であり自分は人間だ。いくらイオの見た目が異性のそれであっても、別に気にする必要はない。そう、今までだって野宿をしてアレイズ達と一緒に寝ることもあったぐらいだし。
ティファは困惑に対しそんな言葉で終止符を打ちつつ部屋へと入り、とっぷりと夜が更けるまでカードゲームに付き合わされる羽目になった。
理性では、どうしてメイの体を乗っ取った神と呑気にカードゲー

ムなんてしているのだろうかと疑念を抱きつつ、感情では以前まで抱いていた警戒心が薄れていくのを感じながら。

七年前の事件に関連する紋章を抱く神。それだけで警戒して然るべきだというのに、どうにもティファはイオがそれほど危険な存在に見えなくなっていた。

多分それは彼が。

「イオって神様らしくないわよね？」

恐らくそれが原因なのだとティファは理解していた。

神らしく威厳があり、人を見下すほどの存在であったならこれほど警戒心を解くことはなかったはずなのにと。

群青に染め上げられた空を照らす光を消そうと照明に手を伸ばしながらティファが言い放つ。

そうして、そろそろカードゲームは終わりだとカードを箱にしまうとイオがきょとんと目を見開いた。

丸くなった碧眼がティファをじっと見据え、ぽつりと呟く。

「そんなことを言われたのは初めてだよ」

衣擦れの音を響かせ、暗がりの中でもくっきりと見えるほどの驚きを浮かべたイオはそれを微かな喜びに変えて口元を緩めた。ベッドに入り込んだ体はもう一つのベッドへと向いており、眠るまで話そうと行っているようだった。

さらさらと流れる短い金糸が闇の中でもなお輝きを失わない光のように煌めく。

そんなイオの姿を頼りに自分のベッドを探したティファは同じように寝転がり、全身から力が抜けていく開放感にふぅと息をついてからきっぱりと返した。

「だって、神様はもっと威厳があるものよ？」

実際そんな神など見たことがないが。

「それじゃあ、僕に威厳がないみたいじゃないか」

「だってそうじゃない」

ティファの言葉に拗ねた顔を浮かべるイオはどこからどう見ても

年相応の少年にしか見えない。これでどうやって神だと思えというのだろうか……どれだけ敬虔な信者とて、話した瞬間顔を引きつらせてしまうのではないだろうか。

「アレイズも全然神様らしくないから、神様らしい神様って見たことがないぐらいよ」

「……」

続けざまに言葉を放つとイオが黙り込む。何かを考え込むような声に怪訝に思ったティファは脳裏に浮かんだ答えにぽんと手を打ちそうになった。そういえばアレイズとイオは犬猿の仲なのだ。

イオがどのような思惑なのかはさておき、アレイズからしてみれば一度は自分を殺そうとした神に他ならないのだから。

しかし、それを知っていてもなおティファにはイオを警戒することができない。

少なくとも彼がこのように人間らしい間は。

「まぁ、多分そこが良い所なんだろうけどね」

沈黙を払拭するように笑ってみせる。するとイオがゆるゆると嬉しそうな表情を浮かべた。

「やっぱりそんな風に言ったのは君が初めてだよ、ティファ」

貴族の子息と言っても通じるような甘い顔立ち。それが更に甘さを増すのを見つめていると、気恥しさでも感じたのかイオは布団で顔を隠してしまった。

布団を掴む手の甲が微かに赤く見えるのは気のせいということにしておく。

「おやすみ」

「うん、おやすみ」

やはりアレイズによく似ている。

早口に言い放つイオに対しティファは口には出さないまでもそう思案してから眠りに就くために目を閉じる。

その時、囁きのような言葉が聞こえた気がしたがティファはそれを夢だと思うことにした。

「神様らしくないのは、多分君がいるからだよ」
苦笑交じりの、そのくせ嬉しそうな声。
それはイオの声のように聞こえたが、直後に耳朶を打つ衣擦れの音と睡魔にかき消されてすぐに消えていった。

◇　◇　◇

そうして一日目を終えたティファ達は翌日宿屋を出て再びあの教会へと向かった。
「おはようシスター。……今日は起きてるかな？」
扉を開けた先に鎮座する教壇の前に立つシスターにイオが声を掛けると、彼女は静々と頭を下げた。
それは修道女というよりも淑女のような振る舞いで、ティファは丁寧なその動作に教会そのものの気品を感じずにはいられない。
無論、荒々しい挙動の人間が神に仕える事などできはしないのだが。
「おはようございます、イオ様。あの御方なら既に目覚められております」
「分かった、ご苦労様。それじゃあ、行こうか？」
穏やかな声が差し込む朝の光に溶けていく、その直前に言葉を受け取ったイオが即座に奥へと進む。それを追うようにティファも一礼して一歩踏み出しつつ、これでようやく手がかりを得られるかもしれないと鼓動が一つ跳ねるのを感じながら前を向いた。
その背中に一つ小さな声が掛かる。
「すみません」
振り向き、教壇とその奥にそびえるパイプオルガンを背負うように立つシスターに目を留める。
だが彼女は話を続けようにも何か困った顔をしており、ティファはふと自分が名前を教えていないことに気付き苦笑した。
挨拶と自己紹介をすることを忘れるほど焦っていた覚えなんてな

いのに、と。

「ティファニエンド＝グランハートです。少し前までレイニウム大聖堂で聖女をしておりました」

体ごとシスターに向き直り、ステンドグラスを通すことで色を変えて降り注ぐ光の中でティファが一礼する。スカートの裾を掴んでふわりと吊り上げるとそれなりに見えるはずだと計算しながら、胸中で苦笑交じりに呟いた。

そう、ほんの少し前まで自分はレイニウム大聖堂にいた。それはその頃までメイやマイ以外の大多数の人間の前で猫を被っていたことにも繋がるのだから。

騙すわけではないが、壁を作るように猫を被ることに微かに罪悪感を感じる。けれどそれは警戒から来るものではなく癖なのだから仕方がないと結論づけて笑みを浮かべると、シスターも釣られて笑い返してくれた。上品な笑みは自分のそれよりもずっと聖職者らしい。

「あの……」

元聖女よりも聖女らしい立ち姿に見惚れるように感嘆していると彼女が声を発したのでそのまま姿勢を元に戻した。

真っ直ぐに立つ姿に何を思ったのか、シスターは軽く息を吸い込む。そうして一息に疑問を口にした。

「失礼ですが貴方は何故イオ様と一緒に行動されているのですか？」

何とも答えに窮する問いだ。

「それは、ですね」

言葉を詰まらせながら、ティファはレイニウム大聖堂が聖人聖女にまつわる話をどこまで民間人にしているのかを思い出すことにした。

聖人聖女という言葉とその存在は多くの者達に認知されている、それは確かだ。だが神との契約の話など誰も聞かされていないのではなかったか……だとすれば契約をしているからとは到底言えないし、第一大嘘だ。

かといって唯の聖女、ましてや元がつく聖女が神と一緒にいる理由など有り様はずがない。
「成り行き、と答えるのが一番妥当かもしれません」
こめかみに指先を押当てぐるぐると巡る思考をどうにかまとめようと目を閉じ、結局出た答えはそれだった。
それがほとんど間違っていないのが問題といえば問題だが、少なくともシスターを騙す罪悪感に駆られる心配はない。堂とした態度で背筋を伸ばしてティファが答えると、シスターが呆気に取られた様に目を見開いて彼女を凝視していたが、やがてくすりと笑みを零した。
「珍しい事もあるものですね」
果たして今ので納得していいものなのか、と疑問に思わなかったわけではないがシスターが納得したのなら安心だ。そう感じ胸を撫で下ろしたティファはしかし次の瞬間放たれたシスターの言葉にぴたりと動きを止めた。
「本当に珍しいですわ。イオ様も随分と御優しくなられたようですし」
「？　優しい印象、ですか？　確かにきつい性格ではありませんけど、性格が変わったわけでは――」
「確かにそうですが、少しだけ違います」
動きを止めて首を傾げると、シスターは何を言っているのかという風に興奮した面持ちでイオが進んで行った部屋を見つめる。それは神を見る聖職者のものではなく、どちらかと言えば子供を見るような目にも見えた。
「私は長年この教会でシスターを務めてまいりましたので、何度もイオ様に御会いしました事が御座います。ですがあのように楽しそうに話されるイオ様は初めて見ました」
「……え？」
楽しそうに話す姿？　確かに神らしからぬ姿ではあるが、初めてというのはどういうことか。

大体イオは元からあのような性格だと思っていたのだが。
訳が分からず困惑しているとシスターがにっこりと笑みを刻んで奥の部屋を指し示す。そこからはイオがティファを呼ぶ声が聞こえてきたが、ティファはそれを無視してシスターを凝視していた。今はイオの事よりも彼女の言葉の方が気になったからだ。
「引き止めてしまって申し訳御座いません。イオ様が御呼びですわ」
「は、はい」
ただそれはこの話は打ち切りと言わんばかりのシスターの言葉にかき消されてしまった。
イオの声が大きくなる。ティファはそれに対し溜息混じりに足を踏み出し、シスターに促されるまま教会の奥へと入り込んだ。
一歩踏み出すごとに感じられる、強い魔力。肌をびりびりと震わせるそれに自然と視線が鋭くなるのを感じながら前を見据えると、すぐにぽっかりと開かれた部屋が現れた。
「うわあ……」
そこは、一言で言えばとても黒い場所だった。
無論暗いのではない。ステンドグラスを通して漏れ出る陽光は強く、辺りを柔らかな明るさで包んでいるのだから。
だがその部屋のステンドグラスは教壇のある場所とは異なり白と黒のコントラストで構成されており、色鮮やかな印象は与えない。加えて敷物も墨を零してしまったような漆黒だった。
感嘆の声を漏らしぐるりと周囲を見渡す。長い年月を感じさせる古びた壁面は黒曜石を思わせる黒で塗りつぶされており、神が眠るとされる祭壇は本物の黒曜石で作られていた。もはや、黒が好きという話では済まされないほどの黒尽くめだ。
ティファの周りにも一人黒尽くめの男がいたが、彼が眠る場所は暗闇と翡翠があるのみだった。だからこれだけの黒さを目にしたのは初めてだと吐息を吐き出して前に進むと、黒の部屋には本来在るべきではない金と蒼がティファの視界に鮮やかに映り込んだ。
「相変わらず黒しかない部屋だね」

ティファを待っていたのだろう。
扉から割合近い場所に立っていたイオがティファの胸中の声を読むように苦笑し、ティファの横に並んでから先へと進む。
そうして祭壇の前まで辿り着いた彼等の目に、これもやはり黒曜石で出来た腕輪が置かれているのが見えた。ただ置いてあるだけというにはあまりに強い魔力に満ちているそれに視線を落とし、ふとティファはアレイズが以前話していた言葉を思い出す。
『神は様々なものに宿り、眠りに就く。……俺がお前に与えた指輪に宿っていたようにな』
それは以前ティファがアレイズに対し、何故指輪の中で数百年も寝ていたのかと問うた時に返ってきた答えだった。その答えを思い出し、イオが会おうとしている神はこの腕輪に宿っているのだと理解したティファはイオが腕輪に手をかざすのを黙って見つめることにする。契約者でもない者が触れても、神が起きている以上は目覚めてくれる。それは大聖堂で教皇や聖母から教わっていた一つの事実だ。
「じゃあ、呼ぶよ？」
「うん」
緊張感のないイオの声に、こちらは逆に緊張感を孕んだ声を返す。
するとイオは大丈夫だというように口元を緩めた後、腕輪にかざした手に向けて何やら呪文を唱え始めた……が、それには聞き覚えがあった。
神が世界と対話するために生み出し、聖人聖女が神と契約をするために使用する神聖文字。それを言葉に変えて紡いでいるのだと感じたティファはしかし、神同士の対話にまで神聖文字が使われるとはと微かな驚愕を顔に載せる。
ダークブルーの双眸が祭壇を注視する中、黒曜石の腕輪は急束に光を帯びて辺りを眩しいほどの光で包み込む。
どこか懐かしさを感じるその光が全身を照らすのを感じ、彼女は自らの指輪に視線を落とした。

――アレイズは今どうしているんだろう？

彼女自身と契約している、唯一人の神の身を案じながら。

第二十三話

その頃、アレイズも教会の中を目指し一路北地区を訪れていた。
情報を得るために最も適していると過去の経験が告げていたからだったが、彼の予想に反して情報屋は何の情報も持ってはいなかった。
否、情報だけならあるのだ。ただ世界に関する情報が欠落しているというだけで。
「仕方のない話、か」
アレイズの考えでは、世界に関する情報はグラドの情報屋から仕入れようと考えていたのだが時代が移り変わり世界に対する関心を失ったこの都市ではそのような情報を持っていた所で金にはならないらしい。こちらとしては不満が残るが、人間が下手に世界や神の知識に手を出すぐらいならばその方がずっと良い気もした。
しかし、そうなると残るは神に尋ねるという選択しかなくなる。
ただ不幸なことに教会の位置に関してはさっぱり憶えていないので、結局は人間に頼ることになるのだが。
「ちょっとすまない。この辺りに教会はあるか？」
「教会なら、この先をまっすぐ行って突き当たりを右に曲がればありますよ」
「そうか、ありがとう」
道行く人間に声を掛けると、存外すぐに教会の在処を聞き出すことができた。
やはり聖都市というだけあり信仰心もそれなりに厚いのだろう。
ただ、レイニウム大聖堂の干渉を受けないというのが気になる所だが、それは国として統治がされているからだと考えれば納得もできる。
所々に細い路地が点在する北地区ではあるが、その路地とて治安が悪い場所というわけではなくただ単に情報屋が闊歩している場所

というだけのものだ。入り込んだ途端に追い剥ぎに遭うこともない。それも単にグラドの警備が行き届いているおかげだ。

このような都市にレイニウム大聖堂の干渉など必要がない。世界と神の名の下に制裁すべき者が存在しないのだから。

懐かしくもやはり変わった面の多さを持つグラドの道を歩き、アレイズはレイニウム大聖堂の事を思考の隅に追いやりつつティファの事を考える。ただ、それは今までのようにティファが何か馬鹿な事をしでかしていないかというものではなく。

――あの神に何かされていないだろうか？

そんな不安ばかりに思考を支配されていた。

左手薬指に視線を落とす。今の所何の反応も示さない翡翠の指輪は穏やかに空の青を写し込み、海のような深い色を放っていた。そう、それならば何ら問題など起きてはいないのだが……。

『僕がティファを守るから』

苛立ちにぎゅっと唇を噛み締める。

だが次の瞬間アレイズは自分の挙動に驚いたように目を見開いた。苛立ちなど感じるつもりなどなかったというのにと胸中で呟くものの、一度感じてしまったものがあっさりと消しされるほど彼は人間が出来てもいなかったせいで再び苛立ちに心を埋め尽くす羽目になってしまった。

イオが高らかに言い放った言葉は、確かにティファとアレイズが別行動を取る上でお互いにとって有利に働くことだったはずだ。例え相手がどのような存在であろうとも、あの言葉に嘘がないことは放たれる澄んだ魔力からも見て取れる。

だからこそ信じて託したのではあったが、鮮烈な苛立ちを感じたことに変わりはない。

それは契約者と離れなければならない状態に陥った自分への苛立ちであり、契約者を他の神に――しかも男に一時的にだが奪われたことへの苛立ちだった。

馬鹿な事を、と考えないわけではない。ティファは自分にとって

契約者であり、利用しなくてはならないかもしれない存在なのだ。
だというのにこんな独占欲じみた考えを持つなど間違っていると自制心が働かないわけでもない。
だが駄目だった。他の神ならばいざ知らず、イオだけは。
何せ彼は。
「俺をこんな体にした神々の一人……」
拳を握り締め、憤怒に瞼をぎゅっと閉じる。
そんなアレイズの様子を周囲を取り巻く人間達が怪訝そうに見ていたが、アレイズはそれには構わず手近な壁に拳を強く叩きつけた。
衝撃にびくとも揺れない壁とは違い、漆黒の外套が大きく揺れる。
それは陽の光を吸収してもなお輝きを放たない鈍い色を道行く人間達に与えたが、すぐに動き出したアレイズの様子に彼等は結局視線をそのまま縫い止めておくことができなかった。
早足に進むアレイズに合わせて長い髪が揺れていく。
そうして彼が持つ色の中で陽光を受けて煌めく数少ない存在が次第に揺れる速度を早める中、瞳が決意を籠めて爛とした光を放った。
ティファが指定した合流時間はあと六日後、だが。
「そんな悠長なことは言ってられん。三日以内には終わらせてやる！」
既に一日を無駄にしてしまったが、残りの二日で取り戻すしかあるまい。
――そうだ、制限時間なんてものはあくまで長引きそうだからと与えられたもの。
ならば早々に用事を済ませティファの元に向かえばいいだけの話だ。
教えられた通りの道を歩くと、やがて白亜の教会の前に辿り着く。
アレイズは自らとは正反対の色を持つその建造物を睨みつけながら、決意を新たに歩を進めた。
この中にどんな神がいるのかをアレイズは知らない。
だがもしも情報を少しでも持っているのならば無理矢理にでも話

してもらう。
――そのために自分はここに来たのだから。
目的を遂行するためならば力を使うことさえ厭わない。
そんな剣呑な決意を胸に、アレイズはひんやりと冷えた教会の扉に手を掛けた。

◇　◇　◇

教会の中はどこまでも眩しい白で埋め尽くされていた。
聖職者は席を外しているらしく、教壇にもどこにも見受けられない。アレイズは天蓋に近い場所にあるステンドグラスと、その下に見えるパイプオルガンを見やり、それから奥につながる部屋を一瞥した。
そこから魔力が鼓動を生み出すように流れ出てくるのが伝わる。
「どうやら、起きているようだな」
足を踏み出し部屋の扉へと近づくと、その傍には石碑が置いてある。
そこに書かれた神聖文字を指でなぞって確かめると、そこにいるのが女神でありまだ神となって日が浅いという情報を得ることができた。だとすれば起きていても不思議ではないだろう。アレイズのように特殊な事情で神になったわけではないのなら、大体は人間と接触するのは若い神ばかりなのだから。
彼等は長い時を生きた神とは違い体力があるだけに、眠りに就く時間が短いのだ。
「ここか」
奥の部屋へと視線を送り、そこに誰もいないことを確認してから身を滑り込ませる。
その場所もやはり白に包まれており、壁面もステンドグラスも全てが白で覆われる世界に立ち止まるとその中央に一つだけぽつんと祭壇が置かれているのが見えて近づいていく。

「……これは」
祭壇の上には、これもまたやはりぽつんと一つだけ白銀の腕輪が置かれていた。
どのような鉱物で作ったのか、まだ真新しくも見えるそれは陽光に鮮やかな光を放っており、眩しさに思わずアレイズが目を閉じる。
だがこのまま眼を閉じているわけにも行かないとアレイズは腕輪に手をかざし、その中にいるであろう存在に語りかけるように神聖文字を紡いだ。
「――っ」
刹那、辺りが急激に眩しい光に包まれる。
その光はアレイズとは違いどこまでも白く、この世界中に白くない場所などないように思えるほどのそれにアレイズは思わず内心での疑問を吐露した。
「ここの神は白が好きなのか？」
教会という建造物は眠っている神がいる場所に無理矢理建造物を建てるか、神と交渉をして建てることを決めるかのどちらかの道を経て建てられるものである。
そして聖都市という世界に縁が深い場所に建てられるということは後者の可能性が高いのではないかとアレイズは推測していた。故に、この教会の外観や内装が神の嗜好であるとも推測出来る。ただ、それにしては些かくどい気もするのだが。
嘆息混じりに思考するアレイズの眼前で光の収束が終わり、辺りを元の明るさを取り戻して行く。
そうして灼かれ、明滅する視界を無理矢理元に戻そうとしているアレイズの眼前にふわりと細い影が浮かび上がった。
「貴方がここの神か？」
上手く見ることはできないが、それは乳白色の長い髪を持つ女性のように見える。
だが姿がどうであろうと神であることは感知出来る限りの魔力で察していたので、アレイズは視界を取り戻しつつ声だけを投げかけ

た。
「えぇ。わたくしがこの教会を住まう女神、ミラですわ。ところで貴方はどなた？」
アレイズの不遜な物言いにも動じない、ゆったりとした物言いでミラが答える。
柔らかなその声は特段警戒心を抱いた様子ではなかったが、それでもアレイズは自分が真摯な態度であることを伝えようと真っ直ぐな声で告げた。
大分元に戻った視界で辺りを見渡しつつ外套を脱ぎ、折りたたんで背筋を伸ばす。
いくら神同士とはいえ、情報を得ようとしているのに外套を着込んだまま話すのはあまりに不遜に過ぎる気がしたからだ。
「俺はレイニウム大聖堂から来たアレイズだ。……貴方に訊きたい事があって来た」
堂とした態度に、ミラがまぁと口に手を当てて呆気に取られた様子を見せる。
その様子に一体どうしたのかと考えていると、まだ年若に見える神は慌てた様子で頭を下げた。
「どうした？」
だがアレイズにはその一連の動作の理由が理解できない。
そのせいで堂とした声を崩して軽い口調で尋ねると、彼女はぎゅっとアレイズの手の平を握りしめて声高に叫んだ。
「わたくしったら、六百年振りのお客様なのにお茶一つお出し出来ないなんて！　嗚呼、アレイズ！　はしたないわたくしを許してください！」
「いや、別にそのぐらい問題ないんだが」
あぁ神よ！　と嘆いている所から察するに昔は修道女だったのだろうか。
アレイズは今や嘆き赦しを請う対象そのものになってしまったミラの姿に突っ込むこともできず、かといって勢いに流されることも

できず答えてやる。
するとようやく自分の存在を思い出したのかはっと銀の双眸を見開いたミラが、アレイズの言葉に大袈裟に落ち着いた様子を見せた。
「ありがとうございます。少し安心致しました」
ほっと、安堵するように笑みを浮かべる。
その笑顔は顔立ちこそ違うものの自分の契約者のそれに酷似しており、アレイズはついミラに見惚れる形となってしまった。
笑顔だけではなく、騒がしい所までそっくりだ。
――駄目だ。
そう胸中で警鐘を鳴らす。彼とて先程からティファの事が頭から離れない事を自覚していたが、まだ何も終わってなどいないのだ。寂しがっている場合ではない。
大体こんな所で調子を狂わされていてどうする。
いざとなったら、この女神相手に力を行使しなければならないというのに。
「？」
「何でもない。それより、話があるんだが」
そう考え、アレイズは小首を傾げて何か言いたげなミラから慌てて視線を逸らして即座に話を元に戻す。
その時には彼女も彼女らしいと言えそうな笑みを浮かべており、教会を訪れた礼拝客をもてなすような落ち着き振りを発揮していた。
「そうでしたわ。確か、わたくしに訊きたい事が御有りとか」
ステンドグラスから差し込む光が眩しくミラの姿を照らす。
アレイズは逆光で隠れつつあるおっとりとした顔立ちの女神から目を逸らさず、彼女は契約者ではないのだと何度も言い聞かせながらどうにか口を開くことに成功した。
「あぁ、実は――」
そうして自分に必要な情報を、出来得る限り簡潔に口にする。
もし彼女が自分を呪った存在だったなら、という考えは頭にはなかった。

朧気ながら、それだけは有り得ないだろうと予想はしていたから。
「レイナさんに会う方法、ですか」
アレイズの問いにミラが口元に人差し指を当てて考え込むような素振りを見せる。白という色で構成される彼女の乳白色の髪がふわりと揺れ、小首が傾げられたのだと気が付いた。
「分かるか？」
銀に近い双眸が天蓋近くへと向けられる。
そうして考え込む姿はまるで子供だと胸中で嘆息していると、アレイズの声に気付いたミラが慌てて視線を下ろした。見かけだけは成人女性、仕草は少女、そして年齢だけで言えば老齢という言葉では足りない女神はそうして慌てたままぺこりと頭を下げる。
「えっ！？　あら、わたくしったらぼうっとしていたようで……ごめんなさい」
「いや、問題ない」
少しぐらいの考え事なら問題はない、そんな意志を込めてアレイズが簡潔に答えると彼女は嬉しそうにふわりと笑った。
焦った時のおっちょこちょいに見える態度もどこか安心出来る笑顔も、やはり先程と同じように別の少女の姿と被る。
乳白色でも銀でもない、ただどこまでも突き抜ける空の色を持つ少女が浮かべる笑顔が頭を過ぎると、不意に消失感に近い感情を抱いてしまう。
――ティファは今頃どうしているだろうか。
大聖堂の地下で目覚めてから此方、ずっと一緒にいたのだ。
そのせいか彼女が隣に立っていないことにどうしても違和感を感じてしまう。
ただ、感じるのが違和感だけではないことも消失感の正体が何であるのかもアレイズは朧気ながらに理解していた。
その時、凛とした声が耳朶を打つ。紡がれた言葉にアレイズは思考をかなぐり捨てて前を見据えた。
「アレイズ。これはわたくしの答えなので全ての神に当てはまるこ

とではありませんが、よろしいですか？」
「……あぁ、話してくれ」
今はそれどころではなかった。
ミラの言葉に我に返ったアレイズが双眸を細めてミラを見据えると、彼女は銀の瞳を同じように細めて悲しげに笑う。
恐らくはそれが答えなのだとアレイズは感じていたが、視線は決して逸らさなかった。逸らしてしまったら、恐らくミラは悲しむだろうから。
「率直に申し上げて、わたくしにはレイナさんに会うための方法は分かりません」
沈む声が放つのは予想通りの答えだった。
純白のドレスが持ち主の心情を表すように静々と舞う。だがどれだけ悲しそうにしていようとも陽の光を絡めとって舞うその衣はどこかアレイズを励ましているようにも見えた。
そう、ミラの言葉を聞いたからと言って落ち込む必要などないのだ。
彼女が持つ紋章はアレイズの神格とほぼ変わりがないもの。つまりは神格がまだ低いということなのだから。
そんな彼女に分かるほど、この世界に会うのは容易いことではない。
もしかしたらミラが情報を隠している可能性があると考えないでもなかったが、このどこかティファに似た女神がそれと悟らせずに隠し事をするなどということをするとは思えなかったし、例えしたくとも無理難題ではないのかと思えたから。
「……そうか」
だがそれでも落胆することを止められないのは、元の存在が人間だったせいだろうか。
搾り出すように掠れた声を上げながらアレイズはそんなことを考え、自嘲じみた笑みで口の端を吊り上げた。
希望と絶望が拮抗し、胸の中でせめぎ合う。

そんなアレイズの心を後押しするようにミラが彼の肩に手を置いた。

「気を落とさないでください。先程申し上げた通り、これはわたくしが持つ知識での話です。わたくし以外の神ならばきっと誰かが答えを持っているはず。わたくしはまだ神格も低く若い神ですから、それよりも高位の神ならば分かるやもしれません」

「あぁ、そうだな」

真っ直ぐな声が耳朶を打つ。刹那、拮抗していた感情が希望へと微かに傾いた。

――そう、犠牲など出させはしない。

ミラの言う通り、気を落としている場合ではないのだ。

アレイズは落ち込む気持ちを無理矢理に叱咤し、ミラに向かって力強く頷く。

その様子に何を感じ取ったのかミラが微笑を浮かべた。

柔らかなそれはどこか芯の強さも感じられてどこかで見たことがある気がすると考えたアレイズは、ふと目の前に立つ女神とは違う女性の事を思い出す。

「貴方はどこか俺の契約者に似ている」

ただ、その契約者はミラよりも若干素直さが足りない気もするが。

「あら、アレイズには契約者がいるのですね。姿は見えないようですけれど」

「今は別の神と行動しているからな」

アレイズの言葉に興味津々にミラが尋ねる。それに対して苦笑を漏らすと彼女は不可解だと言わんばかりに眉を顰めたが結局それ以上何も尋ねることはなかった。

否、訊けなかったのだろう。

神には決して契約者が必要というわけではない。だが、だからこそ自分の意志で契約すると決めた者とは縁が深まる。そして神はその契約者と別の神が共に行動することを許すほど心が広くはないのだから。

アレイズとて、事情がなければ決して許しはしなかった。
ただ、それが契約者だからなのかと訊かれれば答えに窮する所ではあるのだが。
「それではわたくしはもう少し眠ることにします。またいつでも会いに来てくださいな。今度は貴方の契約者も御一緒に」
「あぁ、必ず来るさ。あまり寝過ぎるなよ」
黙り込んだままのアレイズに苦笑を浮かべたミラが腕輪を掲げ、少し眠たそうに瞼を閉じる。
無理矢理起こしてしまったせいか、まだ覚醒には程遠いのだろう。にもかかわらず問いに答えてくれたミラに感謝の意を表しつつ、アレイズは腕輪に光が収束するのを眺めていた。
そうしてミラが腕輪に吸収される刹那、彼女は不意にらしくない不敵な笑みを浮かべた。
吊り上がった口の端は挑戦的で、そのくせやはり聖女然とした慈愛とたおやかさを持っている。
「楽しみですわ。……貴方の契約者は、貴方にとても好かれている様子ですしね？」
――前言撤回だ。やっぱり一番適した言葉は小生意気だった。
小娘のように小生意気な声で悪戯っぽい言葉を紡いだミラに、アレイズはぴしりと体が硬直するのを止めることができない。そうして視界共々真っ白になる思考を狼狽と取ったミラがくすりと笑うと、今度こそ彼女は光の中に飲み込まれてしまった。
「まったく」
その様子をしばらくぽかんと眺め、やがて呆れたように溜息を漏らす。
止められた思考が動き出すと微かに頬が熱くなったが、それを認める気にもなれずアレイズは別の事を考える。
「やはり答えは見つからなかったか……」
ある程度予想をしていたとはいえ、実際に答えが見つからなかったとなると気落ちをしてしまう。

だが先程自分を叱咤したように、そしてミラが言ったように希望はまだあるのだ。

目を閉じ、励ますように笑みを浮かべた女神に敬意を表する。

敵と認識した神以外で初めて会った女神は、アレイズがそうするだけの優しさを持っていたのだから。

「おやすみ、ミラ」

――今度はティファと共に会いに行こう。

だが、まだ答えは得られていないし別の神々にも会ってはいない。

だから会うのはもうしばらく後だと付け足して、アレイズは空間転移の呪文を唱えていく。

そうして次の瞬間目を開けると、そこは既に教会の外だった。

◇　◇　◇

場所は変わって、こちらは西地区の教会の奥深く。

漆黒に包まれた部屋で腕輪から発せられた光がゆっくりと形を成していくのをティファは呆然と眺めていた。

「これ……」

「そっか、ティファは今まで人間の姿をした神しか見たことがないんだよね」

呆けた声で呟くとイオがくすりと笑みを零す。その碧眼が見つめる先にあるのは人の姿ではなく、幾多もの鱗に包まれた異形の存在だった。

教会の壁面よりもなお深い黒の鱗はつやつやとした輝きを放っており、なおかつ思わずこの世界から白と黒以外の色が失われてしまったのではないかと錯覚してしまうほどの面積を持っている。

お伽話でしか見たことがない、それは竜神という存在に相応しい姿がそこにはあった。

「イオの友達に竜神様がいたなんて」

「驚いた？　でも僕も元々人間じゃないからこういう神の方が話が

合うんだよね」
　呟いたティファの声にイオの楽しげな声が重なる。だがそれもすぐに溜息へと変わってしまう。
　それを遠くの世界のことのように感じながらティファは再び竜神を見上げた。
　身を起こせば恐らく天蓋を突き破るだろう。そう感じさせられるほどの巨躯を小さく折りたたんだ竜神は、閉じた瞼を一向に開こうとはしない。シスターの話ではとうに起きているはずなのだがと思案していると、イオが腰に手を当てて呆れ混じりの声を上げた。
「ゼル、起きてるんだろう？」
「……」
　しかしティファの予想通り竜神は起きる気配を見せず、イオが再び嘆息した。
「ねぇ、もしかして起こしたら駄目なんじゃないの？」
　仕方がないなという態度にそう指摘する。
　シスターは確かに起きたと言っていたが、もしかしたらまだ寝足りないのかもしれない。
　だとしたらここで無理矢理起こすのは失礼に値するのではないかと不安になったせいだ。
　だがそんなティファの懸念などどこ吹く風とイオは鼻で笑って返す。無論、その嘲笑はティファへのものではなくゼルへのものだ。
「大丈夫大丈夫、これどうせ狸寝入りだから」
「……神様って狸寝入りするんだ」
　ゼルにも聞こえるように大きな声でそう言い放ったイオの視線を追うと、白と黒のステンドグラスが織り成す光に包まれてゼルが身動ぎする。だがその瞼はやはりしっかりと閉じたままで目を覚ます気配など微塵も見せない。
　これで本当に狸寝入りなのだとしたら、一体何故そんなことをしているのかが気になるところだ。
「おーい、ゼル」

イオが何度か声を掛けているがそれらが全て無駄に終わる。
友人がやって来てこの態度。ますます気になるとティファが思案していると、不意にくいとブラウスの袖を引かれた。
「？　どうしたの？」
「僕じゃ駄目っぽいからティファも何か言ってみて」
「へ？」
「うん、それ名案。ってわけで頑張って」
「えっ？　ちょっと、イオ！？」
「いいからいいから」
何事かと振り向いたティファにイオがにっこりと、どちらかといえばマイに近い笑みを浮かべて言い放つ。とはいえゼルに向けて一体何を言えばいいのだと困惑していると、イオが急かすように小さく手を引いた。こうなったら前に出てでも言ってもらうという態度にますます焦燥感が募る。
えっと、とティファが漏らす。そうして次に口を開いた時には室内を大きく響かせるほどの高い声が放たれていた。
「あの、ゼル様！　出来れば早く起きてほしいんですけど！　狸寝入りらしいですし！」
「はっきり言うなぁ……」
自分から言い出したくせにティファの声を聞いてイオが苦笑を漏らす。
確かに神であるイオと人間であるティファでは立ち位置が違うのだから不遜なことを言ってもいいかどうかの尺度も変わってくるわけだが、ティファは言ってしまったものはもうどうしようもないと考えゼルをじっと見据える。
「あ」
するとその瞼がぴくりと動いたのが見えて、思わず歓声混じりの声が漏れた。
「成功かな」
だとしたらやはり狸寝入りだったのか。

ゆるゆると開かれる硬質な瞼を見ながら胸中で呟くと、それに反論するように地鳴りが響いた。
「狸寝入りとは失礼な」
「うわわっ」
地鳴りのように低く、地を這っていく声と同時に折りたたまれた体が開かれていく。
左右に開くそれはやはり漆黒の鱗に覆われた翼だったが、いかんせん勢いが強すぎる。
ゼルの挙動は人間には強すぎ、強風に叩きつけられたような衝撃を感じたティファはふわりと身が舞うのを止められなかった。
「ティファ！」
イオがティファの腕を掴み、慌てて引き寄せる。イオとピコの入ったケージは強風にもびくともしないらしく、彼はティファを抱き寄せ強風から守るようにゼルに背を向けた。
衝撃が収まったことに恐る恐るティファが目を開ける。
そうして強風の影響を未だに受ける髪が暴れるのを手の平で押さえつけながら背後を見やり、ひやりと肝を冷やす。
――危なかった。
ティファの視線が向く先には漆黒の壁面があり、恐らくイオが腕を引いてくれなければそこに全身を叩きつけていただろうと予想することができたせいだ。
「ゼル！」
ティファの体を強く抱きしめたまま、イオが首だけをゼルに向けて怒号を放つ。
その声に驚いて身を竦めたティファはまじまじとイオを見つめて、呆気に取られたように目を丸くした。
「イオか？　騒々しい、というか来てたのか」
「狸寝入りしてたくせに白々しい！　ティファに何かあったらどうするんだよ！」
唖然としたままのティファが見上げる先には先程まで甘い顔立ち

を持っていた、どちらかといえば青年と言えるのであろう神の姿はなかった。あるのはただ、怒りに顔を紅潮させ透き通った碧眼を吊り上げる鋭い顔立ちの男がいるのみだ。

背中に回された腕の力が強くなる。貴族の子息と言っても通じそうな彼にこれだけの力があるなんて、と胸中で感嘆の息を吐いた所でティファは不意に伝わる体温が気になって慌てて腕を伸ばした。よく考えてみれば異性に守られるなどということは今までなかったのだ。強いて言えばアレイズがいたが、彼は契約の名の元にティファを守っている。だがイオは契約も何もしていない、ただティファに付いてきただけの存在なのだから。

「わ、私なら大丈夫。助けてくれてありがとうね、イオ」

とんとイオの胸を押して身を離すと、怒りに染まる顔を即座に心配気なそれに変えたイオが若干残念そうに腕を離す。

「本当に大丈夫？」

「えぇ」

だが依然として眼前に立っていることは変わらなくて、ティファは気恥しさに染まる頬を決して見られぬようにと前に進み出た。

するとようやくイオの影から現れたティファの姿を見てゼルが呵呵と笑う。

「おぉ、誰かと思えば人間か！　すまんかったの、シスター以外はここに来んもんでの」

「はぁ……」

そのような適当な理由で壁に叩きつけられたら堪ったものではないが、ここは頷いておくしかない。

それにしてもやけに明るい神だが、本当にゼルも神なのだろうか。

ティファは不意にそんな疑問を抱いたものの即座に胸中で否定をする。目の前にいる竜が神ではないというなら、この世界に竜の存在はもっと多く見受けられるだろう。恐らくは過去に存在した生物なのだろうが、今やその存在を見ることなどできないのだから彼が神でなければおかしい。

鱗に覆われた巨躯は教会を壊さないように緩慢な動きで伸びていく。

普通の街に比べれば大分大きな教会とはいえ、竜神が眠るには些か小さいこの場所は彼にとって不便じゃないのだろうかと考えていると未だ不満そうな態度を崩さないイオが鋭い声で言い放つのが耳朶を打った。

「今日は話があって来たんだけど、いいかい？」

不機嫌そうな声にゼルの笑い声がぴたりと止む。

そのまま黙ってイオの答えを待っていると、イオはケージをその場に置いてからティファの肩をぽんと叩いた。触れた指先から伝わる熱に先程の事を思い出しぎょっとする。

しかし続いた言葉はそんな感情を吹き飛ばすほどの力を持っており、ティファはイオの指先の感触を忘れてゼルを見上げた。

「この娘、ティファニエンドの話だよ」

「ティファニエンド？　そう言えば、お主は変わった毛色をしておるのお」

久しぶりに体を動かしたのか、首を動かすのにもぎちりと堅い音がする。

その様子を見上げたままでいたティファは自分がまだ何も話していない事に気付いて前に一歩進み出た。そのままスカートの裾をつまんで一礼する。

「初めましてゼル様。私はティファニエンド＝グランハートと申します。ちなみにこの髪は地毛です」

「青い髪に青い瞳。それにティファニエンドとな……もしやお主が」

ふわりとスカートの裾を広げて一礼するティファの声に、それまで比較的明るい態度だったゼルの態度が一変した。

ぎちり、そんな音が再び耳朶を打つ。

何事かと視線を上げれば、黒い鱗に覆われていてもはっきりと分かる程にその表情は険しかった。

爛と煌めく黒の双眸から目を逸らすと、イオが深く頷くのが見え

る。

「何か、私のことをご存知なのですか？」

それはゼルのみならず、イオに向けて放たれた問いでもあった。

恐らくこの二つの神は何かを知っている。そんな予感が胸に渦巻いたせいだ。

だがいくら前のめりになってティファが尋ねてもゼルが答えることはない。熟考するように瞼を閉じ、険しい顔のまま降り注ぐ静寂をやり過ごすのみだった。

「イオ……」

意味ありげな態度にイオを呼ぶ。しかしイオもティファの問いには答えなかった。

「ゼル」

代わりに彼はゼルの名を呼び、その意識を覚醒へと導いていく。

するとはっと息を呑む音がしてゼルが再び目を開けた。本当に熟考していたようだ。

翼がもう一度開かれる。今度は強風を呼ぶことなく開かれたそれは力なく閉じていき、静かな風をティファの身に与えた。

「ゼル様？」

緩慢な動作に急いた声を上げる。

「……そうじゃの、説明せねば何も分かるまいて」

するとゼルは憂うように瞼を軽く伏せて、地鳴りのような低音を更に低く小さなものにした。

怪談話を聞かされる時のような声色にごくりと唾を嚥下する。そうして姿勢を正すとゼルが静謐な表情で続けた。

「昔、お主が生まれるよりも遥か昔……数千年は前の話になる」

紡がれる声は低くも静かであり、吟遊詩人が語らう唄のようでもあった。

第二十四話

「昔、もう数千年前も前の話になろうか。新たな神は知らん事じゃろうが、儂等は全員一度だけレイナに呼びされたことがあっての。あの時は流石に妙に思ったもんじゃよ。何せ今まで一度たりとも全員招集などなかったからのお。誰も彼も不穏な憶測を交わしてはレイナが来るのを待ち構えておった。儂もその一人じゃったが、まさかその時は自分達の予感が当たろうとは思わなんだ……。レイナの奴、集まった神々を一瞥するや否やとんでもない事を言い出しおった」

饒舌に語る口調が一度区切られる。疲れたのか浅く息を吐いたゼルにティファは静かに問うた。

神が全員招集を掛けられたなどという話はアレイズから聞いていない。

だとするとそれは本当に過去一度だけ起きた出来事なのだろう。

さすがのアレイズも数千年の時は生きていないだろうから。

「一体、世界は何を？」

ティファの問いにゼルが続ける。

漆黒の鱗に覆われて表情は見えづらいはずだというのに、ゼルはやけに人間臭い沈痛な顔で首を振る。

「あと数千年の後に自分は確実に消え去るでしょう、と」

死ぬ、ではなく消え去る。

それは何かが違うのだろうかとティファはゼルの言葉に首を傾げる。だがどちらにせよ世界の意志が消えてしまうことに変わりなどなく、世界の終わりを示していることに間違いなどない。それは世界や神々だけではなく、この世界に生きる全ての生命に等しく与えられるべき危機感だった。

ただ、一つだけ気になる事がある。

「ちょっと待ってください。それっておかしな話ではありませんか

？　もし世界の言う事が事実なら、どうしてこの世界は数千年経った今もレイニウムで在り続けているのです？　この世界がレイニウムで在る限り、世界の名はレイナでしょう？」

　数千年という大雑把な言い方だから分かりづらいが、それだけの永い年月を経てもレイニウムが存在し続けていることが不思議に思えてティファは声を荒げつつ問う。

　もしかしたらそれはここよりも更に千年後二千年後の話なのかもしれないが、ゼルが特段焦った様子を見せないのも疑問だった。神の殆どは世界が代替わりすると同時にその力を放棄すると聞いたことがある。それが事実かはどうかは知らないが、世界の意志が変われば彼等にとっても動揺すべきことではあるはずだ。

　体を伸ばし天蓋を貫きそうなほどの高さにあるゼルの頭を見上げる。

　だが首が痛くなるようなその姿勢も疑問と驚愕のせいか苦にならず、ティファは幾分か見えづらいゼルの瞳を真っ直ぐに見据えた。

「そう、レイナは今も存在している。それは確かなんだ」

　答えは視線の先ではなく、横合いから放たれた。

　イオ、と呟いてゼルから視線を逸らしたティファがイオの方を見やると、彼はあれから会ってないけどねと言いながら悲しげに笑った。それは護るべき対象を数千年の永きに渡り見かけていない事への悲しみだったのか、それとも他の何かだったのか。それをティファが慮ることは出来なかった。ゼルの言葉が続いたからだ。

「だがティファニエンドの言葉も一理あるの。まぁ、もう少し聞いておれ」

　空気が緩やかに動き、ゼルへと送られていく。

　その流れに息を吸ったのだと理解する間もなく地鳴りが響いた。

「無論、レイナの言葉を聞いて動揺せぬほど儂らは出来た存在ではない。だから尋ねたのじゃ、何故そのような事を言い出したのかと。するとな、あやつ夢を見たからだと言うんじゃ。信じられるか？　真理を得て世界の意志そのものになった存在が、自分の運命を世界

の終わりを悟るのだぞ？　とはいえ、馬鹿に出来ぬほどの的中率がある事に間違いはないことは、彼女が人間だった頃からの経験で誰もがよく知っておったから、一笑に付す事もできんかった。何せ百の夢を見たら九十八は当たると言われておったんじゃからの」

長い、長い言葉の後でゼルが一度言葉を区切る。

疲れた様子を見せることもなく、ただ気遣うような漆黒の双眸でティファを見据える。

その視線に、その夢の内容こそが本題なのだと気が付いた。

覚悟を決めて頷く。白と黒の世界に流れる細い蒼が視界の端にちらちらと映った。

「夢の内容についてもレイナは話してくれたよ。いずれ自分を殺しに来る者が、代わりに世界の意志となるのだと」

「そんな……っ」

しかし、それさえ気にすることはできなかった。

ゼルの言葉に何の考えもなしに震えた声が漏れる。

消え去ると死が同義であるのだということは理解できたが、まさかその方法が――。

「そんなのって、悲しいじゃないですか！」

自分が死ぬ夢を、遥か数千年も昔に見せられてしまったレイナはその時一体何を想ったのだろうか。

しかもその死が老衰でも自然なものでもなく、殺されるという形だったと知ってしまった彼女は一体。

人間は、死を目前に控えたら残された時間をどう過ごすか真剣に考え始めると言う。世界の意志たるレイナも、そういう考えに及んだのだろうか。

例え数千年という時間が人間にとって何十何百もの世代を築いていけるだけの長さだとしても、世界としてはそう長くはない年月だろう。だとすればやはり、一分一秒足りとも無駄には出来ないと考えたのだろうか。そして残された神のために、その発言をしたのだろうか。

胸中を渦巻く想いを慟哭という形に変えて放つティファの声に、イオとゼルが何も言わずに目を伏せる。

彼等とて、その時の世界の心情を思うと胸が痛むのだろう。

だがゼルはそれで話を止める事はしない。全てをきちんと話すつもりなのだ。

「……儂等は勿論、それを阻止するためには何をすべきなのかとレイナに問うたよ。だが、答えなど夢の内容に既に潜んでおったんじゃ。要はレイナを殺そうとする者を先に殺せばいいだけの話なんじゃしの――とはいえ、それはできなかった」

出来なかった？　世界を殺すとされている存在なのに？

無論ティファとて誰かの死を願っているわけではない。

だが世界を護るべき神々が何故何もせずにいたのかが理解できず、問うような視線を注いだ。

その真っ直ぐな視線に痛みを感じたのか、ゼルが身動ぎして顔を逸らす。

「この先の事、ティファは知りたい？」

すると横合いから放たれた声が耳朶を打ち、ティファは再度イオを見やる。

彼はゼルを見上げ、そこに同情するような色を含んだ視線を送っていた。

ティファの身を案じるような声色はしかしティファにはどういう意味を持つのかが分からない。

何を想ってそう尋ねたのか、どんな答えを期待しているのかも。

だが、それでもティファは頷いた。

「ゼル様が教えて下さる真実が私とどんな関係があるのかは知らないけど、このまま聞かずにいるなんて方が無理よ」

そう、どんな話であろうとアレイズが求めるレイナや自分に関わる話であるのなら聞いておきたかった。

そのためにティファは大聖堂を離れ、遠くグラドまで足を運んだのだから。

「レイナの夢とお主の存在には、関係が大いにあるよ。彼女を殺すとされる人間は、この世界に二人といない姿をしとるんじゃからの」

頷きと同時に放たれたゼルの言葉に、腰まで流れる髪を指先で弄ぶようにくるりと巻く。

そこにあるのは黒にも白にも染まらない突き抜けるような空色だった。そして鏡がない限り見ることは叶わないが、瞳はダークブルーのそれ。それらは全て、この世界では珍しいとされる色だった。

ごくりと唾を嚥下する。緊張感に悪寒が止まらなくなった。

ゼルが話しているのはあくまで世界を殺す存在についてだ。

だが、話の流れが向いている方向に立つ人間が誰なのかをティファは知ってしまったから。

「蒼い髪に瞳を持つ、ティファニエンドの名を持つ娘」

憂いを持って発せられるゼルの声が、ティファにはどこか遠くから放たれているように聞こえた。

はい、と小さく答える。するとゼルは地の底を這う声を無理矢理柔らかくして続く言葉を紡いだ。

恐らくティファに恐怖心を与えないようにとのゼルの精一杯の配慮だったのだろう。

だが、どれだけ声色が柔らかくとも言葉が持つ鋭さは抑えられない。

「お主こそがレイナを殺すとされた存在だよ」

驚愕に見開かれたダークブルーの双眸をステンドグラスから差し込む光が照らす。

ある程度予想はしていたとはいえ、やはり聞かされた内容は衝撃が強すぎてティファは開いた口が塞がらないという言葉は本当だったのかと胸中で呟きながら、イオが溜息をつくのをどこか遠くの世界の出来事のように感じ取っていた。

限界まで見開かれた視界の端で、イオが碧眼を床へと向けて黙り込んでいるのが見えた気がした。気がする程度の認識でしかないのは、焦点が上手く合わないせいだ。苦しげに唇を噛み締めているよ

うに見える姿に、ティファはどうしてそんな暗い顔をしているのと尋ねようとする。しかしティファは自分が一番心を乱していることを実感していたせいか結局何も言えず、一人と二つの神はしばしの沈黙に身を浸す。

そうしてどれだけの時間が経っただろうか。

ようやく驚愕と衝撃から立ち直ったように口を閉じたティファはゆっくりと焦点を合わせながらゼルを見上げた。

「今のお話は、事実なのですね」

「あぁ。……イオにも聞いてみるといい。此奴もあの場に居った」

静謐な問いに返ってきた言葉に今度こそきちんと焦点の合った視界にイオを入れる。すると彼は床に視線を向けたまま頷いた。

痛みを感じている顔はしかしイオ自身の痛みではなく、ティファが感じている痛みを自身が受けているようにも見える。

「本当なら、ティファにはずっと知らないままでいてほしかったよ」

「イオ……」

呟きに、イオはきっと碧眼を吊り上げて激情を吐露する。

「でも無理なんだ。アレイズと契約している限り、そしてアレイズがレイナの元を目指す限りは黙っておくことはできない。ティファが聖女にならないようにずっと祈ってたのに」

それはアレイズを憎んでいるような声色で、ティファは二人の確執が根深いことを知って目を閉じる。

アレイズはイオを自分を殺そうとした敵として認識していた。それはティファにも分かっている。

だがまさかイオまでもがアレイズを敵視しているとは思わなかった。

無論メイの体を乗っ取った時の状況から察するに十分すぎる程に敵意はあったのだが、その理由までは理解できずにいたのだ。それがよもやこのような形で知る事になろうとは。

閉じた瞼を細く開ける。柔らかな光に視界を灼きながら、ティファは今の言葉で感じた疑問を口にした。

「私が聖女にならないようにって事は、もしかしてイオは私の事を知っていたの？」

ティファがイオに会ったのはレイニウム大聖堂の地下だ。

しかし彼の口振りでは、まるでそれ以前にティファの事を知っていたように聞こえる。

そしてその疑問はイオの頷きによって確たるものへと変わった。

「勿論。レイニウム大聖堂に現れてからずっと見てたよ。元々はアレイズの監視役だったんだけど、彼は起きる気配がなかったし退屈だったから」

「そうだったの……」

大聖堂はアレイズを護るために建てられた建造物だと聞いている。

ということは、イオは大聖堂が建てられるよりも前からあの場所に居たということになる。その間大聖堂近辺を離れられなかったのなら、確かに退屈もするだろう。そして暇を持て余している所にティファニエンドが現れたのなら、興味を持っても別段おかしなことではない。無論、興味だけでは済まされない感情がそこにはあって然るべきなのだが。

「契約の日だって止めに入ろうとしたのに邪魔が入って駄目だった。……今でも悔やまれる事だよ。そんなに契約したいのなら、僕とすればよかったんだ」

レイナの友人であるアレイズは目覚めたら彼女に会いに行こうとするだろう。それを知っていてなおティファニエンドと契約をさせたくはないという想いもあったのだろう。だがイオはどちらかと言えばそうすることでティファが傷つくのではないかという事を気にしているようだった。

自嘲じみた笑みを浮かべ、力なく首を振る。流れる金糸が持ち主から抜けた力を体現するように悲しげに揺れた。

しかしティファにはそんなイオの悲しげな笑みに対して慰めの言葉を向けることはできなかった。

「アレイズはこの事を」

「絶対とは言えないけど、多分知らないと思う」
「……そう」
アレイズはこの事を知っていたのだろうか、そう考えて問いを発すると即座に否定を返される。
その言葉に唯一の救いを見出せた気がして安堵の息を吐きながら、ティファはまだ解決出来ていない疑問に顔を上げた。
七年前の事件でティファは生命の危険に晒された。そして大聖堂を訪れたらその場所にも神がいた。
更に言えば、今この場には世界が見た夢を知る二神がいる。
だというのにどうして自分はまだこの場に居られるのだろうか。
死者ではなく、生者として。
目尻を吊り上げ、覚悟を決めたように言葉を紡ぐ。
それは自分で自分の首を絞めるようなものだったが、言わずにはいられなかった。
「私が世界の見る夢に出てきた事は理解できました。ですが、ゼル様もイオも何故私を殺さないのかしら」
「「な……っ」」
ティファの言葉は二人にとって予想外だったのだろう。
唐突に放たれた言葉にゼルもイオも固まり、驚愕に行動を停止させる。
それも仕方のない話だろう。ティファは自分がいつ殺されてもおかしくない存在であるにも関わらず、あえて自分を殺した方が良いのではないのかと示唆しているのだから。
しかしティファとて死にたいわけではなかった。
「二人は、世界を殺す存在が私かもしれないと分かっていたのでしょう？　可能性としては九割八分。ほぼ確実な話なのにどうして私は生きているのですか？　いえ――何故、私は生かされているのです」
細められた双眸が二人に挑むような色を持って向けられる。
その視線に二人が目を丸くしてティファを矯めつ眇めつして見つ

めると、彼女の心の奥底にある問いが存外あっさりと顔を出した。
そう、ティファは知りたかったのだ。
九割八分の可能性のために自分を殺すのか、二分の可能性のために自分を生かすのかということを。
黙り込んだまま、イオもゼルも何も言えなかった。
恐らく彼等とて何も考えていなかったわけではなく、むしろ考えすぎていて口には出せなかったのだろうとその姿を見てティファは理解した。
もし彼等がティファの事を何も知らず、他の神との繋がりも知らずにいたら彼女は殺されていたかもしれない。
だがイオは大聖堂でティファの行動を追い続け今も行動を共にしており、ゼルはイオとの繋がりからティファを知ってこうして過去の話を暴露している。本来ならば世界を護る為、ティファを殺すべきだというのにだ。
ぎゅっと手の平を握り締める。するとそこに指輪の硬さを感じて、ティファは下手をしたらアレイズの助けを呼ばなければならないかもしれないと考えるもすぐにその考えを捨て去る。
――アレイズはこの事を知ったらどうするのだろうか。
そんな考えが頭を過ぎったせいだ。アレイズはレイナを友人だと言っていた。その友人が殺されるかもしれないと知って平然としていられるほど彼は冷血漢ではないと知っているから。
困惑に熱する心に氷が放たれる。それは急激にティファの心を冷やし、鋭い痛みを感じさせた。
しかし、その痛みは長くは続かなかった。
「あははははっ！」
「かっかっか！」
二人分の哄笑が響き渡る。
一つは地鳴りのような大きさでもって、一つは高らかに歌うような声でもって。
「な、何なの！　ゼル様！　イオまで！」

ティファは自らが抱えていた冷たさを無視して思わず声を荒げる。
まるで頭が壊れてしまったかのように笑い続けるイオとゼルの姿はあまりに異常すぎて、思考を止めるには十分すぎる程の衝撃だったのだ。眉尻を下げて心配そうな声色で尋ねるが、そんな姿が面白いのか二人は更に笑い続ける。
黒く塗りたくられた教会内にしばらく哄笑が響き渡る。
そうしてようやく笑い声が収まった後で、二人はどちらからともなくティファの問いへの答えを発した。
「少なくとも、僕はティファを殺す気なんてないよ」
「他の神々はどうか知らんが、儂もお主を殺す気はない。第一、今ここで手を上げてもイオに反撃されるのが関の山じゃ」
再度ゼルが呵呵と笑う。
だが二人が放つその底抜けの明るい声に、止まっていた思考をがつんと殴られる形となったティファは唖然としてしまった。
もしかしたら殺されるかもしれないと覚悟までしていたのだ、無理もない。
ティファは動き出す思考を無理矢理に落ち着かせながら、震える唇でどうしてと呟いた。
「だって、私は……」
蒼の髪に瞳。それだけならば探せばどこかにいるかもしれないしこれから先産まれるかもしれない。
だが名前まで同じだとすれば、それは自分以外に他ならないのではないかという予感を当人であるティファでさえ感じてしまうほどだというのに。
それなのに、どうして彼等は自分を殺さないと言ってくれるのだろう。
少なくとも、七年前の事件で壁面に描かれていた紋章を思い出す限りは自分の死を願われていたことは確実なのに。
「そっか……」
七年前、と今度ははっきりと震えた声が体内に響いた。

どうして今の話で結びつけられなかったのだろう。
世界が殺される夢、それを回避するには殺そうとする人間を殺さなければならない。
だとすれば、あの事件は自分のせいで――。
「駄目」
――今その答えを出してしまったら、自分は壊れてしまうかもしれない。
自分の両親のみならず、あの日メイとマイの両親まで殺されたのだ。
だというのにもし真実を掴んでしまったら、自分はどうやってあの二人に詫びればいいのだろう。
一生分の御免なさいでも足りない程の血があの日流れてしまったのに。
これ以上知ってはいけない、もし知ってしまったら自分は自分という存在を見失ってしまうかもしれないから。
だがそれ以上に知らなくてはならないという強迫観念じみた想いに囚われていることも事実だった。
「ティファ？」
怪訝そうにティファを呼ぶイオが彼女の顔を覗き込む。透き通った碧眼が心配げに細められるのに気付き、ティファは慌てて思考を取り払って取り繕ったような笑みを浮かべた。
「大丈夫よ。アレイズ達と合流したらもう少し色々考えなくちゃって思っただけ」
同時に今まで考えていた事を一旦忘れることにした。
そうしなければティファは自分がどこまでも深みにはまってしまう事を自覚していたし、今この場でそうすることが得策だとも思えなかったからだ。……傍から見れば現実逃避だが、それを気にしている場合ではない。
そう、考えるのは一人の時にすればいいのだ。
でなければメイやマイと合流出来る自信がない上に、会ったら会

ったですぐに泣いてしまう気がした。
イオはティファの笑みが偽物であることを即座に悟ったのか、なおも何か言い募ろうと口を開く。
しかしそれは確たる形にならずに消えていき、結局は沈黙が辺りを支配する。
どこか硬質な沈黙に身動ぎする。だがティファが動いた所で彼女自身が気落ちしている以上空気が変わるわけもなく、ティファは無理矢理に空気を変えようとあくまで軽い口調で言い放った。
「そういえば、どうしてイオはこの前私を守ってくれるって言ったの？　本当は私を殺さないといけないはずなのに」
それは元々気になっておりいつかは尋ねようとしていた事だったが、幸いなことに空気を軽くするのに一役買ってくれたようだった。
話を変えようとして振った問いにイオが顔を赤くしたことにより凝り固まっていた空気が霧散する。それはティファにしては予想外の反応だったが、甘やかな顔を彩る朱に彼が羞恥を感じているのは確かなのだろうと結論づけた。ただその羞恥の理由が理解出来ず、どうしたのと尋ねようと口を開くがそれはゼルが放つ哄笑によって中断される。
「ゼル！　笑いすぎだ！」
「ゼル様？」
どこまでも楽しそうな声はしかし大音量過ぎてびりびりと周囲の空気を震わせていく。ティファはその振動を肌身に感じながら頭に疑問符を浮かべつつ、どさくさに紛れてイオが力強く手を握ってくるのを甘んじて受けた。イオとゼルの間では何かが通じ合っているのかもしれないが、ティファにはちっとも分からず、彼女はイオの手の平から伝わる熱がやけに熱いことを感じてながら首を傾げた。
微熱よりも高い熱を感じさせる手の平は、顔を彩る朱と同じ分だけの熱があることを伝えてくる。それもやはり羞恥から来るものだろうが、それにしても一体何がそれほどまでに恥ずかしいんだろうか。

「恥ずかしがるな！　そうか、お前がのう」
しみじみとしたゼルの声が響く。それはやはり多分の笑いを含んでおり、イオは何度も櫛で梳かれたのではと思わせる金糸を逆立ててゼルをきっと睨み上げた。
「だから少しは静かにしててくれよ！」
しかしその怒声を聞いてもゼルは笑うのみであり、ティファはその笑い声に先程までの暗い気持ちが少しだけ薄れた気がした。
神々がじゃれ合う姿などそうそう見られるものではないし、この二神ならなおのこと面白い。
「ゼル様とイオって本当に仲が良いのねえ」
「違う！　あぁ、もう知らないよこんな奴！」
あまりに楽しげなゼルの姿を真似てティファもしみじみと呟く。
するとイオがティファまでそんなことを言うのかと言いたげに怒声を放って顔を逸らす。その姿はやはり神ではなくどちらかと言えば人間のそれで、ティファは拗ねなくてもいいじゃないと笑いながらその声に重なるようにして再び強烈な振動が発せられるのを感じ、眦に浮かぶ涙を指でそっと拭い取った。
今ならば、笑いすぎて泣いているのだと思ってもらえるだろうから。
そうして涙を拭いながら空気を震わせる笑い声が収まるのを待った後、ティファはステンドグラスから差し込む光が弱くなったのを感じて小さく頭を下げた。
「それでは、この街を出る時にはまた寄らせて頂きます」
もう夕暮れが近い。いくら友人であるイオがいるとはいえ、起きたばかりの神を付き合わせるのは申し訳ないと、若干の苦笑を浮かべて告げるとゼルは別段気にした風もなく呵呵と笑って頷いた。
神には人の気遣いなどあってないようなものということなのだろう。
ただそれが分かっていたとしても気遣うことは止めれないのが人の性なのだが。

「おぉ、それが良い！　では、それまでは起きているとしようかの」
「起こすから別に寝ててもいいよ」
ただ、まだ怒っているらしいイオの憎まれ口にも笑っている所からして単に鈍いだけなのではないかと考えてしまったが。金糸に光を反射させながらイオが踵を返す。丁寧に皺を伸ばされたのであろうシャツが鮮烈な白で持って黒に包まれた室内を切り裂いていく。それはイオが持つケージに眠る兎にも言えることで、ピコの白い体躯もこの場では異質に見えた。
ティファは闇のような黒の中にあってなお色を失わないイオとピコに一瞬瞠目した後、すぐに追いかけるように歩を踏み出す。
「お主」
「？　どうかなさいましたか？」
しかしそれは地を這う声によって遮られ、ティファは何事かと振り返ってゼルを見上げることになった。
ダークブルーの双眸が天蓋近い場所へと向けられる。すると空色の髪を覆うように翼が頭上へと広げられた。
頭を撫でているのだろうかと一瞬遅れて理解するも、それは驚きや戸惑いの言葉になる前に掻き消える。
「他の神々がどう考えているかは知らんが、儂はレイナの夢が外れとると信じておるよ」
闇を体現する低く暗い声。
しかしそれは確かにティファの心の琴線に触れて、小さな希望を与えるものだった。
自分が世界を殺す夢。それが外れていたら、自分はただの人間でいられる。
それは何て甘美な希望なのだろうか。
「……ありがとうございます」
力強い声に微笑み、もう一度頭を下げる。
そうしてスカートを舞わせるティファが眩しく見えたのか、ゼルが目を細めて口元を緩めた。老獪な仕草にティファは未だ会ったこ

とのない祖父という存在を頭に思い描いたが、目の前に在るのは祖父よりも遥か永い年月を生きた竜神なのだという認識は崩さずにおいた。

そうしなければいくら何でも神を軽く見すぎる事になってしまうと自覚はしていたせいだ。

黒曜石の腕輪から光が放たれ、ゼルの姿が末端から淡く消えていく。

「お主の行く先に幸せを、ティファニエンド」

眠りを誘う闇を体現する暗い光は数瞬の間にゼルの顔までをも奪い去り、後にはゼルが残した言葉とティファ一人が残された。

「……はい」

一人、漆黒に包まれた部屋に佇むティファは決意を籠めた声で頷き踵を返す。

今はただ、そうすることしかできなかった。まだまだ分からない事が多くありすぎるのだから。

◇　◇　◇

教会の中からでは朧気ながらにしか分からなかったが、外に出るとすっかり日が暮れていた事にティファは今更ながらに気が付いた。

遠く鳥の鳴き声を聞き子供達が黄昏の中を走って帰る姿に郷愁感を感じながら、ティファは煉瓦道を足早に歩いていく。その隣に、先に出ていたイオが並んだ。ケージをあまり揺らさないように歩くイオは夜が近い刻限のおかげか人目につかないことにどこかほっとしている様子に見えた。

娘達に見られようものなら黄色い歓声を上げられかねないので、無理もない話だが。

「まだ怒ってるの？」

「怒ってないよ」

「怒ってるじゃない。意外と素直じゃないのね」

一体何が恥ずかしかったのか、今度こそ聞いてみようか。
そう考えながら拗ねたように唇を尖らせるイオと他愛ない話をしていると、不意にイオが呟いた。
「大丈夫だった？」
「何が？」
とぼけるように尋ねるものの、ティファにはイオが何を指して問うたのかが分かっていた。
「ゼルの話さ」
「あぁ」
だがイオはそれに気付かないようで律儀に答えてくれるので、ティファはとぼけた振りを続けたまま少し歩く速度を緩めた。
子供達はもう家に着いたのか、辺りに人の姿は見えない。
整備された大きな道も、誰も歩かなければ閑散として寂しいものだった。
速度を緩めたティファに合わせるようにイオが並ぶ。彼に対して黄色い歓声を上げる娘達がいない事が今一番の幸いのように思えて、ティファは苦笑を漏らしながら答えた。
「平気とは言えないわね。いきなり世界を殺すかもしれない人間だって言われたんだもの」
「まぁ、それはそうだろうね」
溜息混じりの声にイオも頷く。それは努めて冷静にしようと頑張っているようではあったが、眉尻が下がり瞼を伏せている様子を見れば彼が冷静になれていないことは一目瞭然だった。
世界が殺されるからか、それともティファが世界を殺すかもしれないからか。
それは分からないがイオは確実に悲しんでいる。
だがそれを知っていてなお、ティファはイオを悲しませる言葉しか続ける事ができなかった。
「七年前に、私の両親とマイ達の両親が殺されたの。壁に神の紋章を残してね」

「……」
「あれ、本当は私を狙ってたんでしょう？」
本当は死ぬべきなのは自分だったんでしょう？
叫び出したい衝動に駆られながら告げると、イオがふいと顔を逸らした。
それこそが肯定なのだと知っているティファは両の手の平へと視線を落とした。
いつか世界の意志を殺すかもしれない手、世界を殺すために進むかもしれない足、策をめぐらせるかもしれない頭。そう、夢が当たっていればティファの体と想いの全てはレイナを殺すための道具にしかならない。だがそれを認める気にはなれなかった。
「平気なわけなんてないわ」
吐き捨てるように言い放つ。
「でもだからって私は、私が私であることを放棄なんてできない。私はティファニエンド＝グランハートであり、一人の人間であり、それ以外では有り得ないんだから」
「……うん」
小さな頷きに顔を上げる。
そうして我ながら虚勢を張っていると理解出来るほどの声でイオに告げた。
「さっきは何で殺さないのか？　って訊いたものの、もし二人が本当に私を殺す気だったんなら、こちらも殺す気で抵抗して逃げてたんだと思う。誰も真実なんて知らなかったんだろうけど、少なくとも私が唯の人間じゃないって知った上で育ててくれた父様と母様のためにも私はそうしなくちゃいけなかったんだと思うから」
あの時ティファはアレイズを頼る事に迷いを感じていた。
だから彼は呼ばなかったかもしれないが、少なくとも自力で生き残ろうとはしただろう。
……そうだ、死んだりなんて絶対しない。
なぜならあの日、自分は生き残ってしまったのだから。

「イオ、一つだけ覚えておいて」
立ち止まり、イオを射抜くように見据える。
虚勢はいつしか本物の決意に変わり、震えた声から芯の通った声へとその質を変えていた。
「うん」
するとイオの碧眼が細められ、彼もまた立ち止まった。
それと同時に言葉を紡ぐ。吟味する事はせず、あくまで思考に留まる想いをそのままに。
「私は生きるわ」
「どうして？」
軽快だと言えるほどにぽんと問いが与えられる。
だがティファはその軽さに負けない真摯な声で答えた。
真っ直ぐな声は黄昏と迫る宵闇を貫き、煉瓦道を高らかに響かせる。
「世界が、レイナが見た夢を変えなくちゃいけないからよ。私がレイナを殺してもレイナが私に殺されても、そんなの悲しいだけだわ。それに、レイナを探してるアレイズにそんな結末を見せたくない」
そう、アレイズは契約神として自分の罪を全て赦し傍にいてくれようとしている。
そんな彼に悲しい結末など見せたくはなかった。
饒舌に話した事が悪かったのか、喉が乾いたティファは鞄に入れていた水筒を取り出そうとする。だが黙ったままのイオが腕を伸ばし、彼女の体を引き寄せたせいでそれは叶わなくなった。
「ありがとう」
「……え？」
往来で取る体勢としてはあまりに不適切すぎる抱擁に身を強ばらせると、泣き出しそうな震えた声が耳元で囁かれた。
黄昏が入り込む余地さえ与えない強い腕の力に顔を上げる。そうして暖かな腕の中で身動ぎ一つせずにイオを見上げると、逆光で見えない彼の顔が泣いているように見えた。

だが、どうしてそんな顔をされているのかも分からなければ礼を言われなければならないのかも分からないティファは困惑一色の顔をで黙っていることしかできない。そうして沈黙に耐えかねて口を開きかけたその刹那に、ようやくイオが言葉を紡いだ。

「生きるって言ってくれてありがとうって言ったんだよ」

君が生きる意志を持っていないと、僕が守る意味がないからね。

囁く声はティファが求めていた答えであり、ティファにとって欲しい言葉でもあった。

生きていることに感謝してくれる存在がいる。それはゼルからの話を聞かされたティファにとって、何にも代え難い宝のように思われた。

「えぇ」

先程とは打って変わって嬉しそうで晴れやかなイオの顔が深く笑みを刻む。

それは放った言葉に一分の偽りもないと告げていて、ティファは幸福感に包まれながら頷いた。

どうして生を望んでもらえるのか。今は考えないことにした。

それを尋ねた瞬間、イオがまた泣き出しそうな顔をすると思ったから。

鼓動が安堵を刻み、心に緩やかな熱が入り込む。それはアレイズが傍にいる時とは違う感情だったが、決して悪いものではないと知っていたティファはそれを甘んじて受けることにした。

その刹那、人の姿が消えていたはずの道の中央でぴたりと人影が立ち止まった。

無論それぐらいは別段おかしな事ではないとティファはイオから身を離しそのまま前へ進もうとしたが、影はティファがそのまま通り過ぎる事を許しはしなかった。

「失礼ですが、貴方はティファニエンド様でいらっしゃいますか？」

黄昏に染まる銀光が眩しくティファの視界を彩り、問い掛ける。

ティファとさほど年の変わらない年若のその姿に、イオが目を光

らせるが彼女はそれを一瞥して制して頷いた。
「確かにティファニエンドという名を持っておりますが、何か私に御用でしょうか？」
見れば彼はグラドの兵士だろう。
その彼に敵意を見せることは総じてグラドへの敵意と取られてしまう。
いざこざは避けろとマイ達に言われている以上、下手な事はできなかった。
素直に立ち止まり、丁寧な口調で答えるティファに兵士が姿勢を正す。そんな状態で体が痛くないのかと考えてしまうほどに真っ直ぐな立ち姿は、若さ故の威勢の良さを持って大きな声を上げた。
「はっ！　国王陛下からの伝令役としてティファニエンド様をお探ししておりました！」
――国王陛下？　一体何の話だ。
「へ？　国王陛下？　伝令って一体」
「ティファニエンド様におかれましては、明朝東地区の王城に登城されたしとのことです。したがって――」
しかし兵士の言葉はいまいち要領を得ず、ティファは大声で兵士の声を断った。
「ちょっと待って！　それって別のティファニエンドかもしれないわ？　だって私国王陛下と面識なんてないもの。だからきっと勘違いよ」
「問題ありません。青い髪のティファニエンド様は聖大陸の何処を探しても一人しか存在しないと陛下からの御言葉を賜っておりますので」
そう、きっと別のティファニエンドだ。そんなに似た名前が何人もいるとは思えないが、いないと断言することもできない。
第一国王と面識を持った覚えがない。
そう考えて何度も頷きながら兵士を納得させようとしたのだが、彼がはつらつとした声でそう答えたせいで何も言えなくなってしま

った。
確かにこの目立ちすぎるまでの派手な空色の髪をしたティファニエンドなど何処を探しても存在しないだろうと理解したせいだ。少なくとも、グラドにはいそうにない。
「……それで、私はどうすれば？」
ならば諦めるしかあるまい。
そう考えて渋々ティファは頷いた。
「明朝御出迎えに上がりますので、宿の場所を教えて頂きたく」
「……分かりました。ではこの宿へ」
そうして兵士に言われるまま西地区の宿を教えながら胸中で溜息を漏らす。
ゼルの話といいこの兵士の話といい、どうして立て続けに驚かされる事が起きてしまうのだろうかと。
どうせなら一つ一つ順序良く来てほしいものだ。
「承知致しました！　それでは失礼致します！」
そう考えているとようやく兵士は役目を終えたらしく、きびきびとした動作で王城へと戻っていく。
そんな彼の背中を見てからもう一度溜息を漏らし宿を目指す。
そうして部屋に入るなり、それまで黙っていたイオが鋭い声で問うた。
「本当に行くのかい？」
その声に小さく頷く。
「えぇ、わざわざ出迎えに来るらしいし、何より国王陛下直々の御申出なんだもの。ティファニエンドって名前が知られている以上、大聖堂との繋がりも伝わっているでしょうしね」
ここで断れば教皇と聖母が頭を痛める羽目になるだろう。
それを理解していたからこそティファはこの件を受けたのだ。本当は心底面倒くさいというのに。
感情をそのまま顔に出すティファの姿にイオが口の端を吊り上げる。

だがすぐにふいと顔を背けてつっけんどんな声を放った。
「悪いけど僕は行かないよ」
どこか拗ねたような声は教会での姿を連想させて、ティファはもう一度笑いそうになる。
とはいえそこにある感情が真剣なものである事を悟り、彼女は事情を尋ねずに頷いた。
「……そう。まぁそうよね、権力者と神様が結びついてもいいことなんてなさそうだわ」
守ると言った以上付いてきてくれるものだとは思っていたが、嫌なものを無理矢理連れて行く気にもなれない。
ティファは若干残念だと思う気持ちを殺して平気そうな声を出す。するとそれが不安を呼んだのか、イオはティファの眼前に座り込んで手の平を包みこむように自分のそれを重ねた。
「でもくれぐれも気をつけて。何か嫌な予感がするんだよね」
神が嫌な予感というぐらいだから、こちらまで嫌な予感を感じてしまう。
「分かってるわ。でも大丈夫よ、グラドは治安だって良いんだし」
だが他の場所ならいざ知らず、グラドならば少しは安全だろうと考えティファは既に触れられることに慣れてしまったイオの手の平を握り返した。するとイオがきょとんと目を丸くした後で甘やかな笑みを浮かべる。上品そうな笑みに笑い返しながら、ティファは自然な動作でイオの手から離れた。
そうして窓辺に寄って空を見上げながら、胸中にわだかまる疑問について思案した。
グラドはこの聖大陸で、唯一国としての機能を維持している国家であり都市だ。だが、その恩恵は国王から与えられるものではなく臣下達が与えているものだということをティファは聞いたことがあった。
とはいえ統治が行き届いている事から言って国王が愚王というわけでは決してなく、ティファにとっては雲上の人であることも変わ

りはない。その国王が一体何の用なのか。
考えれば考えるほど意味が分からなくなるが、世界が見た夢について聞かされた後なだけに不安は大きい。
ただ、その不安を告げてイオに無理矢理付いてきてもらうという事は避けたかった。
神と権力者の結びつきが出来ない方がいいというのは本音であり、教皇達の教えでもあるのだから。
――結局は明日直接聞くしかないのね。
「ちょっと出かけてくるよ」
息をついているとそんな声が聞こえ、扉が開けられる。
ティファはその言葉に少し意外そうに片眉を顰め、それからすぐに手を振った。
「分かったわ。行ってらっしゃい」
もしかしたらゼルの所に行くのかもしれない。拗ねた態度を取っていたとは言え二人は友人なのだから。
そう考えたティファは一人きりになる事に寂しさを感じつつも笑顔でイオを送り出し、シャワーを浴びてからすぐにベッドに潜り込むことにした。
そうして照明の消えた暗がりで一人考える。今日はあまりに色々な事がありすぎたと。
お伽話に出てくるような竜神に出会い、世界が見た夢と自分について話を聞いた。それは今まで過ごしてきた日々に比べればあまりに情報量が多すぎて、ティファは未だ処理しきれない情報を持て余し気味に胸に抱く。
まだ自分に関する全ての事を知ったわけではない。
だが世界が見た夢で出てきた自分の存在は、人間とは呼び難いものであることは確かだった。ならば何かと問われれば彼女は答えに窮するのだが。
――今は忘れよう。過去の事も、自分の事も。
そう、いつか故郷の屋敷に帰ったらその時に泣いて泣いて、それ

から前に進むようにすればいいだけの話だ。だからそれまでは忘れたままでいたかった。そうしなければ真実の重みに潰されてしまうとティファは考えていたからだ。

うとうとと近付く睡魔に手を伸ばしながら胸中で呟く。

ゼルから話を聞かされた時は咄嗟にあのようなことを言ったが本当は狂ってしまいたかった、泣いて叫んで違うと声を上げたかったと。

そうしなければ、人間という種であることを否定されてしまうような気がして恐ろしかったから。

胸中での呟きはしかし睡魔を遠ざけることができず、ティファは静かに目を閉じながら今頃同じ街のどこかで眠りに就いているであろうメイドや神に思いを馳せ、自らも眠りに就いた。

第二十五話

ミラと別れたアレイズは一路西地区へと足を向けることにした。
通行人から聞いた話では、グラドの西地区にも教会が存在するからだ。
「これはまた、随分と正反対だな」
白亜の教会とは違い、西地区の教会は実に黒々としていた。
自身が持つ色を考えるとこちらの方が気が楽ではあるのだが、ミラのいた教会とはあまりに色が違いすぎて若干戸惑ってしまう。
とはいえここで立ち止まっているわけにもいかないと扉をくぐり、色とりどりのステンドグラスを通じて差し込む光を受け止める。するとその光の下にシスターの姿を見つけ、アレイズは観光客を装って尋ねてみた。
「すまない。不躾な事を訊くようだが、ここに神は眠っているのか？」
このぐらいならば警戒はされないだろう。
そう考えて尋ねると、老齢のシスターは驚いたように口元に手を当てた。
「まぁ……。最近はよく尋ね人がいらっしゃいますのね。えぇ、確かにこの奥には神が眠っておられますが、それが何か？」
礼拝客が増えるのが嬉しいのか顔を綻ばせるシスターに頷くことも首を振ることもできず、アレイズは思案する。
――正直に答えずに空間転移した方が早いかもしれないな。
穏やかに笑っている顔も、神に会いたいと告げれば強ばってしまうだろう。
そう判断して一度出直そうかと考えるアレイズだったが、その考えはシスターの一言によって覆された。
「貴方もあの御方に会いに来られたのですね。どうぞ、奥へお入りください」

そのままアレイズを伴なうように、シスターはゆったりとした動きで奥へと進んで行く。

そうして長い修道服を床に軽く擦らせて歩く背を見て、アレイズが慌てて尋ねた。

あの御方とは恐らく神だろう、だが――。

「そんなに簡単に神に会わせていいのか？」

ただの人間だと思われている今だからこその疑問ではあるのだが、アレイズはそう尋ねずにはいられない。

元々神とは教会にそういるものではないし、いたとしても人間の前に姿をあっさりと現すのはご法度だ。

聖職者であれば別だろうが、神がそんなに気安いものだと神自身が思われたくないだろうから。

そう考え首を傾げると、シスターはやはりゆったりと振り返り小首を傾げる。そして何かに気が付いたようでくすりと笑みを零した。

「貴方も神ではありませんか。不都合があるとは思えませんわ」

「な……っ！　どうして」

からかうような声にアレイズが言葉を詰まらせる。

驚きのせいで上手く紡げない言葉をしかしシスターは理解したらしく、さらりと答えた。

何事にも動じないだけの堂とした態度に、思わずたじろぎそうになる。

「貴方とあの御方は同じ気を纏っておられますもの。私は元々そういった気を感じやすい体質ですので」

体質でどうこうできる問題だっただろうか。

驚きに口をあんぐり開けているアレイズを見て穏やかに笑うシスターは、その驚きが冷めるのを待ってから促した。

さすが正規の聖職者、神の扱いもしっかりと心得ている。

……ティファに見せてやりたいぐらいだ。

「さぁ、それでは行きましょうか。あの御方はあと数日は起きているはずですが、いつ眠られるのか分からないのですから」

今もどこかを奔走しているであろうティファの事を考え、ただ機械のようにぎこちない動きでアレイズはシスターに着いていく。
あぁ、またティファの事を考えてしまっているなどとはもう思わないことにした。
「ゼル様」
黒より深い漆黒で統一された部屋に通され、祭壇の前にシスターと並んで立つ。
そうして眼前にある黒曜石の腕輪にシスターが声を掛けるとそこから光が迸った。どうやら起きているのだな、と感じたのは契約者以外の人間が声を掛けただけで目を覚ますなどということが通常ありえないからだ。実際は一日程度時間をかければシスターにもゼルを起こすことが可能なのだが、それを知らないアレイズはそう結論付ける。
迸る光の奔流は巨大な影を生み出し、その体躯を顕現していく。それをただじっと見据えながら待っていると、再び白と黒のコントラストが部屋を満たした。先程までと違うのは、その光を遮るように黒の竜神が鎮座していることか。
世にも珍しい竜神は、顕現するな否やふぅと溜息を漏らす。
だがそれは疲労や眠気から来るものではなく、ただ残念だと言っているようでアレイズは思わず首を傾げる。
何故そんなに残念そうにされなければならない。初対面だというのに。
「何だ、あやつらではないのか」
そう感じているとゼルと呼ばれた竜神が開口一番に言い、再び口を閉じる。そうして面倒だと言わんばかりに尾を振り、強風を生み出した。ばさりと手に持った外套が揺れ、頬に風が叩きつける。しかしその程度で驚いてはいられないとアレイズはシスターに視線を向けた。
「あいつら、とは？」
「昨日ゼル様を尋ねて来られた方達です」

彼女は慣れているのか、もう老齢と言ってもいいほどの歳だというのに強風に対しびくともせずに穏やかな笑みを浮かべる。本当に人間なのか、と思わず感じてしまうもののその疑問はゼルの独り言によってかき消された。

「イオもティファも、あとどのぐらいで来るのやら……起きておると暇で堪らん」

「――ティファだって!?」

ぼやくような声にアレイズがいきり立ってゼルに詰め寄る。

とはいえ、明らかな体格差があるので近寄っただけにも見えるが本人としては詰め寄ったつもりなのだ。

そしてシスターもそれに気付いたのだろう。慌ててアレイズを押さえようとするが、再びゼルが言葉を発したことによりその必要はなくなった。

「何じゃ？　お主、ティファの知り合いか？」

じろり、と頭の天辺から足先までを入念に睨みつけてからゼルがふむと頷く。

それにより動きを止めたアレイズがゼルを睨みつけると、彼はからりと笑った。

「そういえば、ティファの持っていた指輪と同じ魔力を感じるが、お主はもしやティファの契約神か？」

「……そうだ。それよりティファもここに来たのか？」

どうやら指輪は真面目に仕事をしていたらしい。にもかかわらず危険を伝えなかったということは特に問題はなかったのだろう。

ゼルというこの竜神も、見た目こそ禍々しいものの魔力の質に暗いものは感じない。

となればこちらも警戒する必要はないのかと考え体から力を抜くと、ゼルはもう一度意味ありげに笑ってから頷いた。

「あぁ、昨日の話じゃ。自分の事が知りたいと言って来おったよ」

それは聞いた瞬間アレイズがどのような反応をするかと期待するような仕草だったが、それを知っていてなおアレイズはがくりと肩

を落とす。瞬間ゼルが呵呵と笑うが気にしてはいられない。
——あの馬鹿、と胸中で呟く。まさか神の所まで訊きに行くとは思わなかった。
恐らくはイオの仕業だろうが、神が人間の事を知っているわけがないというのに何をやっているんだ。
別段危険なことがなかったから良いものの、イオが胡散臭いだけに不安は拭えない。本当に無事だといいんだが。
いくらアレイズの魔力を自由に使えるとはいえ、神々に囲まれたらティファとて対処しきれない。その辺の事を今度ティファにきつく言い含めておく必要があるなと考えつつ、アレイズはゼルを見上げる。その瞳には特に敵意らしいものはなく、むしろティファへの好意が見て取れることに多少の安堵を感じた。この様子なら害されてはいないのだととりあえずは実感できたから。
「それで？　あいつについて何か分かったのか？」
たかだか少女一人の正体など他の神々の知ったことではないだろう。
そう高をくくり、溜息をつきつつ形だけ訊いてみる。
だが予想外にもゼルは頷いたものだから、アレイズはぱちりと目を見開く羽目になってしまった。
「あやつの正体についての細かい話は知らんが、色々と話せることはあった。少し気の毒なことだったがの」
色々と話せること？　少し気の毒なこと？
ゼルの言葉に唖然としながらアレイズは胸中で呟き、困惑を隠せないままに思案する。
世界を守護する神がただ一人の人間についての情報を得ているはずがない。そう、たとえレイナがアレイズにティファの事を話していると言っても、それを知っているのはアレイズだけなのだから。
『ティファニエンド＝グランハート、彼女がこの地を訪れ貴方と契約を果たしたら私の元へ辿り着くのは容易になるわ』
指輪に封印される刹那、確かにレイナはそう言っていた。

だがそれは他の神々には聞かれていないはず。ならばなぜ。
少し変わっているとはいえ、あいつはただの人間だというのに。
――いや、もしかしたらあいつは。
暗い顔で首を振り、嫌な考えを払拭しようとする。するとその姿が気になったのか、ゼルが頭上から声を掛けた。
「どうかしたのか？」
「何でもない。……いや、少し訊きたいことがあるんだが」
言葉を転換させて顔を上げたアレイズの視線の先では、ゼルが闇に隠れてしまいそうな眉を顰めている姿が見えた。
だがアレイズが言葉を続けるのだと理解しているのか、彼は何も言わない。それを幸いに核心を突く問いを発した。
「世界に、レイナに会うための方法を知らないか？　何でもいい、どんな小さな事でもいいんだ」
神になって日が浅い女神ではない。目の前にいるのは太古を生きる竜神だ。
ならばお前には分かるのではないか？　と真っ直ぐ挑むようにゼルの目を見据えると、彼は黙り込みしばし熟考する。
話すべきか話さぬべきか悩んでいるのだろうか。
否、そうした所でアレイズが引き下がらないことをゼルは知っているはずだ。
ならば下手に隠そうとする素振りを見せる愚は冒さないだろう。
「儂には分からんよ」
だからこそアレイズは期待に胸が高鳴っていたのだが、結局ゼルが答えたのは否定的な言葉だった。
目を伏せ、首を振る姿に期待が萎んでいく。
竜神ですら知らないのなら、一体誰に聞けばいいんだ。
絶望に心が侵されていく。そうしてするりと入り込む冷たさに目を閉じると、ゼルはとりなすように続けた。
何の慰めにもならない、アレイズにとっては一番の痛手になる言葉を。

「だが、お主がティファニエンドと行動を共にしているのなら会える可能性はある」
そう、そんな事は嫌になるほど知っている。
だからここに来たのだ。救いを求めて。
「……それは知っている。だが、それではティファが死ぬことになると知っていて言っているのか！」
苛立ちと怒りに心を支配されアレイズが怒号を放つ。
もしやゼルはティファの旅路に待つ結末を知っていてこんな事を言うのだろうか、そんな気持ちが胸を過ぎったせいだ。
「どういう事じゃ？」
訝しげなゼルの声に、アレイズは苛立ちを隠そうともせずに答えた。
「昔、レイナが自分に会うための方法を俺に教えてくれたんだ。それによると、ある場所でレイナが作り上げた結界を解けば苦もなくレイナが現れるという話だった」
「？　それならば解けばよかろう」
「結界を解くには契約者の魂を捧げなくてはならないと知っていても、そんな軽口が叩けるのか」
以前レイナに告げられた、彼女に直接会うための条件。
それはゼルに伝えた通り、契約者の魂を捧げる行為となる。ただでさえレイナが眠る場所を探すのは困難を伴なうし、例え見つけられたとしても今のままでは最後の最後で躓く羽目になってしまうのだ。
レイナに話を聞かされた時は、まさかレイナと離れることになるとは考えてもいなかった。いつでも会えると思っていた。
そして会えなくなってからは誰を犠牲にしてもいいと考えていた。
だが今はそうではない。
誰かの犠牲と共に世界に会うことなど、ティファを犠牲にすることなどアレイズにはできないのだから。
「なんじゃと？　それが二分の可能性か？　だとしたら――」

「可能性？」
アレイズの言葉に気分を害することなく、それどころか驚いた様子でゼルはアレイズにとって意味の分からない事を呟く。それに対して斬りつけるような問いを発すると、ゼルが深く頷く。
「そうじゃ」
太く、動かすのも億劫になりそうな足を一歩分後ろに下げてゼルは身を縮めた。
そうして自らと同じアレイズの漆黒の双眸を見つめるが、その目はアレイズではなくどこか遠くを見ているようにも思える。恐らく、頭の中で別の思惑に駆られているのだろう。そう考えさせられるほど、次の瞬間発せられた言葉は深い意味を持っていた。
「九割八分、あやつはレイナの元に辿り着ける。だが残された二分に別の可能性もあるということじゃ」
九割八分。それはあまりに高すぎる可能性だ。
だが、ちょっと待てとアレイズは声を上げてゼルを制した。
ゼルはアレイズがレイナの元に辿り着くとは言わなかった。
代わりに、本来なら死するべきティファが辿り着くと言っている。
それでは全然話が違うではないか。
「九割八分レイナに会えるってことは、レイナが言った方法以外に別の手段があるということか？」
「それは分からん。……まぁ、その可能性についてはティファに訊いてみてくれ。儂は少し話疲れた」
背後の壁面に巨躯を預けて溜息を漏らすゼルはもう何も話す気がないらしい。
老体が、と毒づきたくなるのを我慢しながらアレイズはそれを見つめ胸中で一人ごちる。
――ティファに訊けと言われてもな。
最短で予定を済ませるつもりではいたが、このままでは恐らく一週間の期日でも間に合わないぐらいだろう。グラドにいる二神はレイナに会うための方法を知らなかったのだから。

そうなるとあと数日は待たなければならないが……。
「ティファが今どこにいるか知っているか？」
しかし、このままただ待っているだけというのはどうにも我慢がし難い。
そう考えたアレイズがゼルに尋ねると、彼は実にあっさりと答えてくれた。
「西地区に宿を取っておると聞いておる。西地区は他の地区と違って少ないからすぐに見つかるじゃろう」
「そうか……」
確かにゼルを訪ねるつもりなら西地区にいるという可能性が一番高いだろう。ティファが始めから西地区に来る予定だったかどうかはさておき、いるのならいまのうちに見つけておかなければ。
ただでさえティファはあちらこちらへと移動して見つけ辛そうな印象があるのだから。
「世話になった」
「あぁ、機があればまた来い」
疲れたまま瞼を伏せるゼルは長い尾を振り、それを持って別れを告げる。
だからアレイズもそれ以上何も言うことはせず、黙ったまま頷いて空間転移の呪文を唱えた。
残り二分の可能性。それを一刻も早く聞き出すために。
そう考え、すぐにティファ達が泊まっていると思われる宿屋を見つけたアレイズだったのだが。
「二人ともいない？」
「えぇ、御一人は昨日から帰ってませんしもう一人のお嬢さんは待ち合わせがあるとかで……兵士さんがうちの前に来てたみたいですから、王城に行ったのかもしれませんねぇ」
青い髪の少女を探すのは非常に簡単だった。
だが、問題は当人がいないということだ。宿屋の店主が直接見たわけではないらしいが、兵士らしき姿がティファを連れて行く姿が

目撃されていると聞きアレイズは顎に手を当て宿屋を出ながら唸り声を上げた。
兵士ということはまず間違いなく王城だろう。
器物破損をした雰囲気ではないし、事件が起きたなどという話も聞かないのが救いではあるが……。
――あの馬鹿、一体今度は何をしたんだ！
しかし、まず間違いなく何か問題を起こしたに違いないと考えたアレイズは目尻を鋭く吊り上げて王城を睨みつける。あれほど何もするなと言っておいたのに。
宿屋の店主の話から、イオが昨日からいないという話が若干引っかかったがどの道イオがいない方がアレイズにとっては都合がいい。
ティファを守ると言った以上、イオはどんなことがあってもティファを守るだろう。それこそ、例えティファが器物を破損しようと罰しようとする人間たちを殺してでも。そうなったらグラドは終わりだ。神の紋章で守られるこの場所が神の怒りに触れてしまったら、存在意義を失ってしまう。この街を守るべき神は他にいるが、それを人間達に理解出来るかは分からないのだから。
「こうなったら、王城に乗り込んででも真相を聞き出してやる」
次第に冷静になる頭でもう一度王城を睨みつける。噴水に隠れて見えづらいその場所を見ると再び静かな怒りと呆れが胸を過ぎったが、彼はそれらの全てを無視して東地区へと足を向けた。

◇　◇　◇

時は少し遡り、早朝。
目を覚ましたティファが室内を見渡すとイオの姿はどこにもなかった。
宿の人間にも知らないと言われたのだから、もしかしたら昨日から帰っていないのかもしれない。
傍にいると言っていたのに、一体どうしたのだろうか。

ティファはがらんとした室内に一人ぽつんと立ち不安感と心配を綯交ぜにした気持ちで溜息を漏らすが、イオを探したくともそれだけの時間的余裕がないことは分かっていた。あと半刻もすれば兵士がここまで迎えに来るはずなのだから。

「……そのうち帰ってくるわよね」

手持ちの服の中で一番汚れの少ないものを選んで腕を通しながら、自身を納得させようとするような口調で呟く。

それは言い放った当人でさえ空々しいと思えたものだったが、それを気にするのはやめた。

気にしたが最後、きっと自分は王の言葉を無視してイオを探しに出てしまうのだから。

そういえば、ともう一度室内を見回す。そこにはイオの姿だけではなくピコの入ったケージまでもが姿を消していた。

……これでは手がかりを探すこともできない。紋章はピコの腕輪にあるのだから。

「はぁ」

溜息を漏らし、髪を櫛で梳かして整える。そうしてようやく人前に出られるだけの姿になってからティファは宿の外に出ることにした。

本来ならば前で待っていてもいいのだが、兵士が訪れたとあっては宿の人間も警戒するだろうと思ったからだ。この治安のいい国では兵士が訪ねたぐらいで悪い意味に捉えられはしないだろうが、念のために。

外に出るといきなり北風が吹付け、ティファは小さく寒いと呟きながらついで見えた太陽を見上げた。

もう日もそれなりに高く上っており、大通りには人がごった返している。

皆市に向かうのかと考えながら朝の空気を吸い込むと、ふと空いた手が寂しく感じられた。

「イオったら、一体どこに行っちゃったのよ……」

昨日まで繋がれていた手の平が空気に触れていることに違和感を感じてしまう。

繋がれていた時はそれはそれで違和感を感じていたのに、慣れてしまったせいだろうか。

手の平を軽く握ったり開いたりして、手持ち無沙汰になるそれを何とか紛らわせようとする。だがそれでどうにかなるわけでもなくて、ティファは空をぼんやりと眺めてから宿屋の壁面にぺたりと背をくっつけた。煉瓦造りのそれはひんやりと冷たく、ざらりとした感触を服の上から伝えてくる。その冷たさにぶるりと身震いするも、本当に寒いのは気温以上に寂しさから来ているのだということをあえて考えないようにしながら目を閉じた。

別にティファは一人が怖いわけではない。

苦手ではあるし、元々一人で行動することがなかったのだから不安を覚えないわけでもない。だがそれだけだ、多少世間知らずで方向音痴だと言えど道行く人間に道も尋ねられないような人見知りでもなければ買い物一つできないお嬢様でもないのだから。

ただ、それでも身が震えてしまうのが止められない。

それは七年前の事を考えると気が塞いでしまうということや、イオが告げた不穏な言葉のせいだった。

『何か嫌な予感がするんだよね』

他の国ならいざ知らず、ここは聖都市グラドだ。登城したぐらいで危険なことがあるとは思えない。

しかし神が言うぐらいなのだからそれを一笑に付すこともできず、ティファは寒さに体を抱きしめながら近づいてくる足音に硬質な音が混ざっていることに気付いて瞼を開いた。

陽光に照らされ、銀が煌めく。

「おはようございます！　ティファニエンド様」

「おはようございます。今日は案内よろしくお願いします」

この寒い中待たせておいてその笑顔は何事かと思わないでもなかったが、ここで相手を睨みつけて文句を言うことはできない。あく

まで自分はレイニウム大聖堂の元聖女であり、兵士にとっては淑女でなければならないのだから。……そうでなければ後々教皇と聖母が嫌味の一つでも言われてしまうかもしれないのだし。

威勢よく声を張り上げる兵士に向けて頭を下げると、彼も小さく頭を下げて踵を返す。

その後に続いて向かう先は王城のある東地区だ。西地区からは少し遠い場所にあるが、元々グラドは四方に伸びる十字形の大通りがあるから直線的な距離で東地区に向かうことができる。

そういう面では西地区から向かうには便利な場所だと考えながら歩いていると、中央地区に足を踏み入れた時から巨大な建造物が見える事に気が付いた。

「あれが……」

「はい。あれが王城です」

あまりにも堂々と建っているせいかアレイズ達と噴水を見た時には気付きもしなかったが、それはレイニウム大聖堂よりも更に高さのある建造物のようにティファには思われた。いや、聖大陸一の大きさを誇る大聖堂には敵わないのかもしれないが匹敵することに変わりはない。

呆然と呟くティファに誇らしげに答えた兵士は俄然やる気が出たようで意気揚々と進んで行く。この街では兵士と一般市民が一緒に歩くことはそう大したことではないらしく、皆兵士に向けて親しげに声を掛けながらもティファを好奇の目で見ることはしなかった。ただ、スカイブルーの髪の毛は珍しいのかやや目を丸くしている老人達は見受けられたが。

そんな視線の中ティファも王城を見上げながら歩き、西地区から歩いて半刻経った頃にようやく王城の前に立つことができた。

城門からして大きすぎるその場所には数人の兵士達が帯剣してティファを待ち構えており、彼等はそれぞれ深く頭を下げてからティファの通行を許す。だがここで平身低頭しながら進もうものなら、レイニウム大聖堂が威厳を失ってしまう。そう考えたティファは慣

れない門扉を無表情のままくぐることにした。
そうして城内に入るとすぐに広間に辿り着く。そこは豪華絢爛という言葉がしっくり来るような、そんな場所だった。
悪い言い方をすると成金が好みそうな部屋とも言える。
真紅よりもなお明るい絨毯には金の縁取りでグラドの紋章が描かれており、恐らくはこれが王家の紋章なのだろうと理解出来る。よくよく思い出してみれば、街の外周を覆う壁面にも似たものが描かれていた気がする。神の紋章以外に王家の紋章まで描くのは、神への不敬行為だとも思えたがそれをティファが死適するのは憚られた。
柔らかくふわふわとした感触の絨毯を踏みしめると、心地良さがブーツ越しに伝わってくる。
「こちらです」
もう一度強く踏みしめたい。そんな衝動をぐっと堪えていると唐突に兵士の声が耳朶を打ち、ティファは慌てて兵士の後を追う。小走りになったせいで絨毯の感触は薄れたが、それを気にしてはいられなかった。
広間を抜け通路を進む。そこでふと気付いたのは、進めば進むほど豪華さが増しているということだった。
辺境の地域では貧困に喘ぎ、水一滴で戦が起きているというのに随分な怠惰ぶりだと内心で呆れ混じりの溜息を漏らす。無論ここは王城であり、国の中で最も飾りつけられるべき場所なのだからおかしくはないのだし第一グラドは国としてしっかりと統治がされているのだから文句を言うべきではないのかもしれない。それでも大聖堂が紛争に介入しなくてはならないような地域があるというのに、こうして物資を溜め込んでいる場所があるというのはティファにとって納得できかねることだった。
多くの兵士を通行させるためか、通路の横幅もやたら広い。
だがそれ以上に通路脇に並ぶ壺や剣に目が行ってしまい、ティファは今しがた考えた事を即座に否定した。
――どれもこれも、家が何軒も買えるような高級品ばかりだわ。

そしてそれをわざわざ飾っているということは、ここを通る全ての者に王としての威信を知らしめるためなんだと気付く。要するにこの広い通路も、見栄のために作られたようなものなのだ。

そのどれもが悪い事ではない。だが、聖大陸で唯一と言える国を支える王に抱いていた印象はもはや遠くに感じられた。昔はどんな賢王がいるものかと考えていたものだったが……。

「この先が謁見の前です」

そんな失礼極まりない事を考えていると、ふと兵士が眼前で立ち止まる。

銀光にぶつかりそうになりティファも慌てて立ち止まると密やかな声が耳朶を打ち、そこでようやく目の前に見える扉に気付いた。

「王との謁見です。くれぐれも粗相の無きよう」

「分かっております。では、これで」

声が小さいのは、扉の向こうに響かないようにとの配慮か。

どちらにせよこの分厚い扉の先に声が届くことはありえないだろうが、ティファも念のため小さな声で会釈をすると彼がさっと脇に避ける。それを見計らって前に進むと、扉の両脇に立つ兵士たちがきっちりとした動きで敬礼して扉を開ける。

――さて、この先にいるのは愚王か凡人か。

少なくとも賢王という可能性は極めて薄いなと感じながら、ティファはやはり無表情のまま謁見の間へと足を踏み入れた。

◇　◇　◇

そうしてティファが謁見の前と足を踏み出した後。

「……ん？」

扉の脇に控えていた兵士の一人が、ふと何かに気付いたように声を上げた。

「どうした？」

「いや」

すると隣に立つ兵士が何事かと声を上げたので、彼はふるふると首を振る。

そうして何度か目を瞬かせ、更には目を擦りながら呟いた。

「今、何か白い物体がいなかったか？　ふさふさの毛もくじゃらで、兎みたいな」

「んなわけがないだろう？　ここは王城だぞ？　っていうか、そんなのがうろついてたら普通誰かが気付くだろう」

「それもそうだよな……」

そう、ここは王城だ。許可がなければ鼠一匹通ることを許されない場所だというのに、鼠より遥かに大きな兎が入り込むなど有り得ない。だというのに目を擦っても頭を振っても消えなかったあの白の残像は何だったのだろうか。

任務がない限り動くことが許されない彼等は足を一歩も踏み出すことをせずに結局は何もいなかったと結論付ける事にする。

「どうした？　最近寝不足なんじゃないか？　お前」

そうして一人の兵士が揶揄するように笑い、釣られて彼が笑うのを尻目に一匹の兎が王城の通路にひょっこりと姿を表し、再び消えていった。

第二十六話

「失礼致します」

謁見の間に入るなり剣を奪われたティファは体の軽さに若干の不安を覚えながらも物静かに一礼し、しずしずと奥へ進む。

そうして贅沢の限りを尽くす通路を進んでいくと、ちらちらと金銀の光が目に映った。眩しいそれに眉を顰めそうになるが、見咎られたら事だと堪える。しかし壺などの置物はともかくとして、王が座す玉座も近衛騎士の鎧も金と銀で構成されているのはいかがなものか。

いくら威信を示すためとは言え、やりすぎではないだろうか。

銀の鎧は見目は良い、それは認めるが戦になれば何の役にも立たないだろう。まだ同じ銀の鎧でも兵士達の方が身軽に見える所からして、その見立てはあながち間違いじゃないだろう。

グラドは物資が豊かだ。だからこそこのような格好をしていても誰も咎めないだろうが、近隣の地域の人間が見たら目を剥くのではないだろうか。ティファは自身が纏っている白のブラウスやスカートさえもが貧しい服装に見える室内を歩きながらそんな事を考え、やがて騎士が並ぶ最前列へと辿り着いた。

玉座から少し離れたその場所で立ち止まり、片膝をつく。深々と頭を下げると鎧が揺れる音がした。

この程度の礼儀ならば大聖堂で教わってきた事とそう大差ないので聖女らしく振舞うことは苦にならないので、ティファは何の支障もなく頭を下げ続けることができた。ただ、胸中で疑問を浮かべる。こうして頭を下げることにより恭順を示していると思われてもいいのかと。仲が悪いというほどではないが、レイニウム大聖堂とグラドは余り関わり合いがないだけに距離感を保つのが難しいのだ。

頭を下げたまま絨毯に目を落とす。眩しい赤は多くの人に踏みしめられたはずなのに、やはりふわふわとした柔らかさを膝に伝えて

きた。
「顔を上げよ」
「――はい」
そうして絨毯の感触を楽しんでいると王の声が耳朶を打つ。堂としたというよりも、線の細い声を受け止めてティファは絨毯から目を離した。お決まりとも言える科白に素直に頭を上げる。そうして流れる髪の毛を視界の端に捉えながら前を見据えると王と目が合った。
神経質そうな顔に浮かぶ、威信に凝り固まった表情。それは威風堂々としているというよりは、狡猾という言葉が適切にも見える。王としての顔立ちとしては、些か性質が悪い。
本当に彼が王なのだろうか、そんな疑問が胸に去来する。
無論人間見た目ではない。少々見た目が悪くとも中身が良い人間も多い事をティファは知っているし、外見で人を判断する事はそれはそれでどうかと思う。事実周囲の村はともかくとしてもグラドの街中は治安が保たれているし、貧しい想いをしている民もいない。それは王として平和な治世を築いていると言えるのだから。
だがそれでも何故だろうか。ティファにはどうしても眼前にいる王が民の事を愛し大切にしているとは思えなかったのだ。
大切にするというよりも、面倒を起こしたくない。暴動を起こされ大聖堂の介入を受けたくはない。
そんな考えから来る保身が国を護っているのではないかと思えてしまったのだ。
勿論それで守られるのなら上等ではあるのだが。
聖大陸ではどのように高い志を持っていても暴動を抑えられない地域だってある。それを知っているからこそティファは王に微かな期待を寄せた。すなわち、自分が抱いた印象を覆して王が賢王であると証明してくれることを。
「よくぞ参った」
「はい。陛下に置かれましては、ご機嫌いかがあらせられますでし

ょうか」
　ティファの思惑を知らぬ王の言葉に、とりあえずの決まり口上を並べ立てる。上手な言葉が使えているかはさておき、形だけでもまともに聞こえれば御の字だ。ティファは元々綺麗な言葉を話す機会もなく、習得する気概もそれほどなかったのだから。
　深々と頭を下げ膝をつく。そうして前髪が揺れる間から王の姿を盗み見た。
　王は、ティファが登城した時から感じていた印象を体現したような人物だった。
　外見的特徴としては、まずひょろりと長い体をしている。顔の色は青白く、節々も細い。恐らく武芸などは一切してないのだろうと思わされる神経質な顔立ちをしていた。
　無論それは偏見と言えるかもしれないが、少なくとも装飾品の趣味が良くないことは確かだった。
　細長い指先を飾るのは金と銀、そして色鮮やかな宝石だ。それ自体は問題などない。
　だが何分一つ一つの大きさが問題だった。何故こうもごてごてとした大きさの物ばかりを好むのか。飾りたいのならばもう少しささやかなものでも良いだろうに、とティファは考えるもののそれを口にする勇気はない。装飾品の趣味など人それぞれだし、何せ相手は王なのだから。
　そう、例え王がどれだけ成金趣味に見えた所でそれを指摘するだけの顕現をティファは持たないのだ。
　黙ったまま細面の男を眺めていると、やがて玉座から立ち上がった王が眼前へと近づいてくる。つつ、と音もなく寄る姿に思わず後ずさりたくなるものの身動ぎをする前に王が先に上体を折り曲げた。そうしてティファと目線を合わせ、じっとダークブルーの双眸を見据える。赤茶けた瞳が同じ高さに並べられるのは国民としては栄誉なことだろうが、ティファとしては居心地が悪いことこの上ない。
「ほぉ。話には聞いておったが、やはりまだ若いな」

それはそうだろう。呟きながら舐めるような視線を送られて居心地が良いと言える人間がまずいないし、ティファは今まさにそのような状況下にあった。目を逸らすことは最大の無礼に当たると考え、嫌気が差し込む心を抑えつけて視線を受け止める。無意識に拳が力んで震えそうになったが、ティファはそれぐらいなら許されるだろうと我慢することはやめた。

そうして手の平大の自由を震わせて胸中で呟く。

初めから来たいわけではなかったが、本当に登城しなければよかった。

もしかしたらイオが話していた嫌な予感とはこの事だったのだろうか。

だとすればイオは王が賢王ではなく凡庸な――どころかどちらかと言えば愚王に近い印象だ――人間であった事を知っていたということになるが、それももう後の祭りだ。どの道ティファは登城する道を選んでいたのだし、聞かない方が幸せだったのだとは思うが。

それにしても、よくこれでグラドが持っているものだ。噂通り臣下の影響が強いのかもしれないが、その辺りの事情はグラドを訪れたばかりのティファには知る由もない。

だからティファは考える事を止め、差し当たって聞いておかなければならないことを口にした。

口を開かなければ、王の視線に耐えかねて身動ぎしそうだったのだ。

「陛下。不躾な質問で申し訳ありませんが、本日わたくしをここに召喚した理由をお聞かせ願えませんか？」

そして出来る事なら早々と帰してほしい。

堅苦しい場所が苦手ということもあったが、それ以上にティファはこの場の空気が肌に合わず心底そう考える。

「あぁ、そうであったな」

相手が何を考えているのか分からないような状況に置かれるのは御免だ。

今までは教皇の前でも聖母の前でも安心出来たというのに、何故こうも王は彼等とは違うのか。教皇位も聖母位も大聖堂では王と同じぐらいの権力があるというのに、彼等はあまりに権力から遠かった。例え神と世界を手中に収めたいというういう思惑があったとしても、それが態度に出ることはなかったというのに。

玉座に戻る背を見てそっと安堵の息をつく。

そうしてようやく離れた王を見据えていると、ティファの思惑など露程も知らない王が口を開いた。

「お前は、神と誓約しているのであろう？」

それはあまりにも唐突で、あまりにも大胆な言葉だった。

「！？」

予想外の言葉に息を呑みそうになり、慌ててそれを押さえ込む。そうしなければ王の言葉を肯定することになると理解していたからだ。手の平に爪を食い込ませるようにぎゅっと手の平を握り締め、痛みで驚きを緩和させる。

そうしてティファは無表情を保ったまま、あくまで冷静さを装った声で答えた。微かに震えそうになる喉を叱咤し、真っ直ぐに王の耳に届くように。

「何を仰っているのですか？」

神との契約について、王が知っているはずがない。

そう理解していたからこその答えに、王は肘を付きながら実ににこやかな笑みを浮かべた。さらりと口にした言葉が耳朶を打ち、ティファが目を見開く。

「そう構えることもなかろう。余はお前が神と契約したことを既に知っておるのだから」

「……」

――何故、大聖堂の中でも一部の人間しか知らないはずの事をグラドの王が。

いくら相手が聖大陸で唯一その機能を果たしている国家の王であっても、いやそんな国の王だからこそレイニウム大聖堂の内情など

知らないはずなのだ。グラドは大聖堂の干渉を極度に嫌っているし、干渉されないために自治権を保っていると言っても過言ではないのだと他の聖人聖女が話しているのを聞いたことがあるぐらいなのだから。そして自治権を保っているからこそ、大聖堂も干渉はしない。本来なら大聖堂に住まう聖職者は争いに関与すべきではないのだから、それが本来在るべき姿なのだとティファは思うのだが。

しかし、それほどに関わり合いのないグラドの王が何故。

意味が分からず困惑に頭を抱えそうになっていると、王がそれでと続けた。

「契約神はどこに居るのだ？　この近くにいるのだろう？」

契約神とはアレイズの事だろう。だが傍にいたとして、一体王は何を願うつもりだろうか。

第一傍に居たとして、誰が教えてやるというのか。

会うなりいきなり神の事を聞いてくるような男に話すような内容では決してないというのに。

そう考えたティファは警戒を露にしながら、敢然とした態度で高らかに返してやった。

――白を切ることが許されないのならば。

「今は居りません。しばらく、というよりも長い間会う事はないでしょう」

無論それは嘘だ。事実あと数日もすればアレイズと合流する約束をしているし、二人が離れているのはこの都市に限られた事だ。契約が解かれない限り会わないなどということは有り得ないし、アレイズの様子からして契約を解くことは許されないだろう。

そう、許されない。だから自分はまだ穏やかで騒がしく、傍から見ると窮屈でもある関係に身を浸していられる。その関係を王に渡す気にはなれなかったから、嘘をついたのだ。

もしも王がもっと聡い人間であったなら、そんなティファの心を見透かすことができたのかもしれない。

もしくは王がもっと誠実な人間であったなら、ティファは自らア

レイズのことを話したかもしれない。
しかし王は王だった。ティファが予想した通り、賢王の欠片もない狡猾で自尊心に凝り固まった凡人だった。
微かな期待は打ち砕かれ、神を求める姿に愚を見てしまった。それは予想していたこととはいえやはり空々しい気持ちになることに変わりはなくて、だからこそティファは選択したのだ。決してこの男に契約神の事を話はしないと。
話した所で王がアレイズと契約することは決してない。神は契約者を自ら選び、望んで初めて契約行為を許すのだから。それはゼルや他の神も同じことだ。
――ゼルや、他の神？
顔を上げ、訝しむような視線を送りつける。そうしながらティファは何故自分なのだろうかと思案した。
そうだ、ここは聖都市。神など他にも多くいるではないか。だというのに何故自分という契約者とアレイズを求めているのかが分からない。誰とも契約をしていない神ならばアレイズよりは楽に契約ができるかもしれないのに。……無論、王の性格や思考に欠陥があるのだから茨の道だとは思うが、零の可能性が一ぐらいには増えるかもしれない。
ならば何故自分が呼ばれたのだろうか。
「まぁよい。それはこれからゆっくり教えてもらうとしよう」
降って湧いたような疑問に思考を奪われていると、沈黙を拒否と捉えた王が口の端を吊り上げて周囲に目配せした。
「っ！？」
瞬間、槍を構えた近衛騎士達が王とティファの前に立ちはだかり、切っ先を伸ばす。
鋭い切っ先が向けられる。それはあと一歩進めばティファの皮を切り裂くことが出来るのだと脅しを掛けており、一切の反抗を認めない。
だがティファとてその程度の脅しに屈するわけにはいかなかった。

ティファはレイニウム大聖堂の元聖女であり、神に従属する存在にして花嫁でもあるのだから。

「どういうこと……？」

どうして魔力が消えているの？

あまりにも当たり前に存在していた指輪からの魔力を感じることができないばかりか、生まれたその時から持っていたであろう自分の魔力も感じられない。まるで唐突に遮断されてしまったような不安定感に、ティファは思わず相手の思う壺だと知りつつも呟いていた。

――指輪が、発動しない。

胸中で吐息のような声を漏らす。ちらりと左手薬指の翡翠を見るものの、そこからは鈍い光が放たれるばかりで本来持つ魔力は感じられなかった。眠っているにしては、あまりに奇妙なタイミングだ。

指輪の事を知っているかはさておき、ティファが驚愕していることには気付いたのだろう。王は微かな狂気を覗かせる笑い声を漏らし、緩慢な動きでティファへと近づいた。

「残念であったな、お前が使う力の事は聞き及んでいるのだ。登城した瞬間からお前に勝ち目などない」

理屈は分からないが、余裕のある声は事実を告げているのだろう。そしてそれはティファの心に絶望の風を送り込んだ。

だが、例え絶望が心を侵食しても諦めるわけにはいかない。

「……くっ」

魔力が使えないのなら、体術でも剣術でも何でも使ってやる。

そう考え拳に力を入れようとしたものの、どういう理屈かそれさえ封じられているようだった。貴族の子女もこれほどか弱くはないだろうというほどの力しか出せない事に気付き愕然として身動ぎすると、王は自らの持っている羽扇でティファの輪郭をなぞるように顎に触れた。

「っ！　触らないで」

全身に悪寒が走る。

それは王が嫌いだとかそういう問題ではなく、生理的嫌悪なのだと気付いたティファはその嫌悪をそのまま王へとぶつけてやる。だがそれも所詮小娘の戯言だとしか思っていないのだろう。王は泰然とした笑みを崩さないまま低く獰猛な息を漏らした。

「お前にはたっぷりと働いてもらうぞ。そして、余が神を手に入れるのだ！」

「そんな事させるわけがないでしょう」

哄笑が辺りを響かせる。

権力と願望に思考の全てを奪われているのだと感じさせる狂気を孕んだ笑い声にティファは舌打ち混じりに呟くが、それはすぐに小さな呻き声に変わってしまう。指輪がなければ取るに足らない小娘だと判断されたせいだろう。周囲を取り囲む兵士に腕を捕まれ、関節をあらぬ方向に曲げられて無理矢理に立たされた。

「くっ……」

じわりと伝わる痛みに顔を顰めてしまいそうになるが、そうする事は自尊心が許さないとばかりにティファは目尻を吊り上げて王を睨みつける。魔力を奪われた事が体力の低下にも繋がったのか、常ならば並の男にも対抗しうる力を持つティファはそうする以外為す術も無かった。せめて武器があれば、と思うものの愛用している剣は今や兵士の手の中にある。取り返すにはこの拘束から逃れなければならないが、逃れるために剣が必要なのだからどうにもならない。

「あまり乱暴に扱うでない」

悔しさに目頭が熱くなる。しかしそれを必死に堪えていると狂気から一瞬だけ正気を垣間見せた王が兵士を諭した。刹那、腕を締め上げていた力が緩む。こうした荒事は慣れているのか無表情で佇む兵士を睨みつけると、更に力が軽くなる。無論、それでも逃げられない程度の力はあるのだが。

逃げ出すための算段を立てつつ王を見据える。

すると疑心をそのままダークブルーの双眸に詰め込んだ視線を受けた王はにこやかに背筋を正し、あくまで横柄な態度でティファを

見下ろした。
「神を手に入れさせすれば聖女に価値などない。ただ、それは聖女がお前でなければの話だ」
聖女じゃなくて元聖女だ、という言葉の訂正は面倒だから省いた。
「どういう事よ」
代わりに鋭い声で問い掛けると再度腕に負荷が掛けられたが、それを意地だけで乗り越えて前を見据える。
聖人聖女は神と契約をするために必要な人材。魔力を制御し、神に従属する存在として欠かせない存在だ。
しかし自分にはそれ以外の何かがあるということだろうか？
もしかしたらそれはゼルが話していた事に繋がるのかもしれない。
そう考えティファは答えを待っていたのだが、王が口にしたのはその思惑とは随分かけ離れたものだった。
「お前には王子の妻になってもらわねばならぬ。どうだ？　ゆくゆくは王妃になれるのだぞ。自らの幸運に感謝する事だな」
「――はあ？」
扇子が傍に向けられ、顔をなぞられる。吐き気さえ催すような感触に身を引こうとするもそれは阻害され、ティファは渋々吐き気と戦いながら精一杯王を睨みつけた。
将来の王妃？　冗談じゃないわ。
大体王子ということはこの王の息子ということだ。それだけで御免被るというのに、何が悲しくて見知らぬ男の妻になど。……いや、それ以前に自分は神と結婚をしてしまっているというのに。
予想外の答えに困惑を止めることができず、思考の波に溺れそうになる。
しかしその間にも王は鼻歌交じりの言葉を紡いでおり、聞きたくもないのに聞かされる羽目になった。
「ノルマンから送られてきた写真を見て王子が一目惚れしてしまってな。……全く純情な奴だ」
子供への愛情を上機嫌で呟く王はもしかしたらその言葉をティフ

ァに聞かせようとしたわけではないのかもしれない。そしてティファは元々聞く気などなかった。だが王の言葉が一人の人間の名を呼んだ瞬間、弾かれたように顔を上げた。ばっと広がるスカイブルーが重力の枷にはめられて緩やかに落ちていく。

――ノルマンですって？

脳裏にちらちらと大聖堂にいるはずの教皇の姿が浮かぶ。その姿は柔らかな笑みを刻んでおり、ティファを売り渡すような真似をしそうな顔などしていなかった。

そう、教皇がそんな事をするはずがない。

だが仮にノルマンが裏で糸を引いていたのなら今までの出来事の全てに納得がいく事を、ティファは理解していた。両の手の平を重ね合わせ、震えそうになるのを押さえるように強く握り締める。

神との契約、指輪の力、そしてそれを封じる術。

それらは全て大聖堂の後ろ盾を持たないグラドの王が知るはずのないものだ。

そう、例え神が眠る地であってもそれは同じこと。他の神ならいざ知らず、アレイズは自分で言っていたではないか……自分は神となった経緯も契約方法も他の神とは違うのだと。ならば彼が持つ力も他とは若干異なって然るべきなのだ。

確証はない。答えなど誰からも得られてはいない。

しかし指輪の力を封ずる術などそう知っている人間がいるとも思えない。

「……違うわ」

誰にも聞こえないように呟き、もう一度手を握り締める。

客観的に考えて、ノルマンが裏で糸を引いていることは間違いないだろう。

しかしそれでもティファはそうあってほしくないという思いを内心で吐露した。そうだ、大体グラド王に指輪の力を封ずる術を与えた所で教皇に得なことなど何一つない。だからこれは同名の誰かの仕業なのだ……そうに違いないし、違ってくれなければ困る。彼等

は神との繋がりを求めてはいるものの、権力を持つ人間との繋がりなど求めてはいない。ましてや相手は賢王ではなく、単なる権力の権化なのだから。

そうして理性が出す答えを感情で塗りつぶそうと思考を巡らせていた時、唐突に視界が暗転した。

「――え？」

ついで、何やら重い物が地面に叩きつけられたような音が耳朶を打つ。その音に何があったのかと声を上げようとするも、ティファは自身の唇が一切動かないことに気が付いた。否、唇だけではない。全身が痺れて動けないのだ。

「その者を――に」

「はっ！」

遠くで王が兵士に命じている声を虚ろな面持ちで聞きながら、何なのよと内心で独りごちる。

半身に感じる痛みと痺れ、そして熱に倒れたのは自分なのかと考えられる辺り冷静さは損なわれていないらしいが、状況が極めて悪い事は確かだった。

痛みのせいで触覚も鈍く、自分が体のどこに力を入れているのかも分からない。

そうして自分の体を取り戻そうとする間に、今度は思考が闇に侵されていった。どんな手を使われたのかは分からないが、これは本当にまずい。

――あぁ、このままでは。

吐息を吐き出すように心の中で呟く。しかしその言葉の続きはティファ自身にも聞こえなくなり、ティファはふつりと途切れた意識の中否応なしに目を閉じる羽目になった。

◇　◇　◇

空色が、暗闇を侵食するように細く長く伸びている。

それが自分の髪の毛なのだと気が付いた時、ようやく目を覚ましたティファが見たのはどこまでも広がる暗闇だった。所々に松明が焚かれてはあるものの、その明かりはあまりに頼りなく闇に打ち勝つほどの力を持ってはいない。

「痛……」

身を起こそうとして失敗したティファは、体の節々が訴える痛みに顔を顰めつつどうにか首を回す。

そうしてどうにか辺りを見渡すことに成功したのだが、結局暗闇のせいで何も見えない。だがその不便さも目が闇に慣れると大分紛れてきて、自分が置かれた状況を嫌でも理解することになった。

「ここは――ってさむっ！」

全身を強打したせいか、動かそうとしても体は全く動いてくれない。本当に自分の体なのかさえ分からない恐怖感と寒さに身が震えるが、体を掻き抱くための腕も動いてはくれなかった。

一体何なのよと内心で毒づきながら、それでもティファは冷静に状況を判断しようと試みる。

眼前には黒曜石もかくやというような光を放つ黒い石が作り上げた壁が広がっていた。四方の全ての壁面に窓はなく、三方を壁面が覆っていた。一方には鉄の棒が伸びており、安易に外に出る事ができない構造になっている。

どこからどう見ても牢獄だ。

そうティファが判断し辟易としていると、一箇所だけ外界に出る事ができそうな鉄の棒の間から一人の男の姿が見えた。彼はティファが動けない事を知っているのか、兵士が止めるのも聞かずに鍵を開け中へと入って来る。そうして兵士を遠ざけてから再びティファへと近づいた。

暗がりだから定かではないが、鳶色の髪を少し長めに伸ばした男は同じ色の切れ長の瞳をティファへと向ける。目が悪いのか、そこには余り大きいとは言えない眼鏡が掛けられている。もしかしたら文官かもしれない。

いかにも頭でっかちな風貌をした男を茫洋と見つめ、そんな評価を下すもののティファはすぐに内心で首を傾げる羽目になった。

――誰かしら、この人。

ただの文官にしては、彼はあまりに一般人とは一線を画す雰囲気を持っていた。

魔力を持っているわけではないし、威圧感があるわけでもない。だが何かが人と違うのだ。かといって神などのように人間以外の生物だと疑うわけではなく、纏う気が違うだけなのだということは理解していた。

そう、例えば御伽話に出てくるような王が持っているような。

とはいえこの国の王は今も玉座に座っているはずであることも知っていたから、ティファはますます訳が分からないという風に彼の一挙一投足に注目することしか出来なかった。

その間に男は起き上がることのできないティファの前に膝をついた。

そのままの体勢で腕を伸ばし、身体を優しく抱き起こす。

「？」

王に命じられ牢に放り込まれた人間に、どうしてこのような事をと思うほどその手つきは優しかった。

男は、主観的にも客観的にもいい待遇とは言えない状況下に置かれているティファを案じるように眉根を寄せる。酷い事をする、そんな言葉が聞こえてきたような気がした。

だが理由が分からない。

もしかしてこちらの警戒心を解くためにこんな事をしているのだろうか。思わずそんな事を考え更に警戒心を募らせるティファだったが、相手は特に気にした様子もなく問いかけた。ささやかな問いは先程ティファを捉えた王とは違い、黙秘することを許しているような響きさえ感じられる。

「貴女が、ティファニエンドか？」

「……そうよ」

だが答えない訳にもいかないと考え、ティファは頷くことすらできない状態で何とか答えてみせた。

どの道嘘を言っても通じはしないのだ、ならば真実を言って相手を信用させなければ。

――それにしても、この人は一体誰だろうか。

このような場所に来るにしては位が高そうに見えるし、そもそも謁見の間にはいなかったはずだ。ならばティファを訪ねる理由が理解出来ない。

囚われた事による混乱に疑問が拍車を掛ける。だがきつい言葉を浴びせたが最後、何をされるか予想すらできないので苛立ちを無理矢理抑え込んで無表情で黙り込み、せめて体が動けばと胸中で苛立ち混じりに呟いた。

未だに魔力は使えないままだが、体術もそれなりに練習しているから何とかなるだろう。運良く剣が手に入れられればもっといい。登城するからと剣を預けたことが一番悔やまれた。だが、それでいつまでもくよくよしているわけにはいかない。この最悪の状況下で、最善の方法を探さなければ。

そう、そのためにはまず生き延びなければ。

例え少々プライドを傷つけられようとその程度はどうということはない。

体力を温存しつつここから逃げ出せるのなら、それに越したことはないのだから。

そんなティファの覚悟を他所に、眼前の男がふっと微笑を浮かべる。暗がりに見えるその顔に一瞬戦慄したものの、微かな明かりで見えた顔は意外にも穏やかで、ティファは背筋を駆け抜ける戦慄が途中で止まったのを感じた。明らかに人を害しに来た人間の顔をしていなかったせいだろうか。

では、一体何をしに。

訝しみ、かといって首を傾げる事も出来ずにいるとティファを抱き起こしたまま男が声を落とす。

その声もやはり穏やかで、どこか優しい。
……ただ、言葉の内容を聞いて心穏やかではいられなくなったことも事実なのだが。
「父上から写真を見せていただいた時も思ったが、貴女はとても美しいな。――ずっと会いたかった」
「……はい？」
父王に写真。何だかどこかで聞いたことがあるような言葉にティファはふと考え込み、まさかという想いで視線を上げた。ダークブルーの双眸に射貫かれ、男が若干嬉しそうに顔を綻ばせる。ティファの視界に入ることが嬉しいのだろう。
だがそんなことはティファにとってどうでもいいことだった。
ティファの頭の中では今、最悪の展開が予想されているのだから。
「あの」
「どうした？」
微笑する男に、おずおずと訊いてみることにする。
お願い外れていて、本当にお願いだから。
そんな風に自分の考えが外れていることを切に願いながら。
「あなたの御父上は……もしかして国王陛下なのでしょうか」
だが、ティファの願いは今はここにいない神々に届くことはなかった。
「そうだが？　父は国王陛下であり、私はその一の息子に当たる。それと私の名はフランベルジェだ。王城に勤める者の多くにはフランと呼ばれている」
「はぁ……」
やっぱり、という気持ちが心を支配して相手の名前がどうでもよく思えてくるが頷かないわけにもいかず、渋々首を動かす。
そうして一気に沈む気持ちをどうにか悟らせないように無理矢理顔の筋肉に力を入れた。
まさか自分を妃にしようとしている男がこんなに早くに、そして牢にまで足を運ぶとは思っていなかったティファにはまだ覚悟など

出来てはいない。だというのに何でこのようなタイミングで来るのかと内心で舌打ちするものの、このように薄暗い牢にまで足を運ぶ執念には脱帽した。

それにしても何故一目見ただけで王子だと気付けなかったのか。

ティファはそうそう考え再び王子、フランの顔を失礼にならない程度に見つめてようやく納得する。

――あぁ、なるほど。母親似なのね。

ならば気付くわけがない。フランは幸か不幸か父親には似ていないのだから。

そして恐らくは幸いだろう。少なくともティファにとっては。

あのように横柄な態度を取るでもなく、威信や自尊心に凝り固まっているようにも見えないフランは父王には似ても似つかない。教育係や母親の躾が良かったのか、悪い思考を巡らせるようにも見えなかった。

だがそれでも、ティファはフランや王に言われるまま結婚をすることなどできなかった。

大体自分は既に神と結婚という名の契約をしてしまったのだから。

一夫多妻という言葉は王族などの高貴な人間に限り有効だが、一妻多夫など聞いたことがない。

――早く逃げなきゃ。

体は上手く動かせない。しかし思考だけでも巡らせなければ、焦燥感に胸が灼かれてしまいそうだった。

早く早く。

一刻も早く、ここから逃げて結婚なんて馬鹿げた事態を回避しなければ。

第二十七話

ティファが囚えられているグラド城の上に、人影が一つ忽然と姿を表した。

宵闇に金の髪を靡かせるその影は城の屋根部分ではなく、真なる意味で上――上空から魔法を使って地下を見下ろす。

「……」

城壁を透過して映し出されるのは青い髪の少女と、神経質そうな男の姿。それを見て少年とは言い難い、どちらかと言えば青年に近い男が眉根を寄せた。眉間に深く皺が刻まれるが、それを指摘する者は誰もいなかった。

青い髪の少女は体力を奪われているのか、ぐったりと力を抜いている。それを支えるように神経質そうな男が腕を差し出し、その上に少女を横たわらせていた。体が触れている影響か吐息が触れ合いそうなほどの至近距離まで顔を寄せて話す男に、少女が困ったように目を細めた。男の唇が動き続けている事からして、男が延々と喋り続けている事に疲れたのだろう。

今の彼女に必要なのは話を聞くことではなく、体力を回復させる事だというのに。

「あの王子がいなくなるまで助けには入れないと思ってたけど……」

ふつりと頭の血管辺りで何かが切れていく。

それを自覚しながら青年は腕を突き出し、すうっと限界まで肺に息を取り込んでから大声を吐き出した。

「もう我慢がならない！」

奇しくもそれは少女が疲労に溜息をついた直後で、青年は更に怒りが込みあげたのか突き上げた腕を頭上高くまで上げ、すぐさま振り下ろす。

手の平に光が収束する。それは攻撃的な魔力の束となり青年の指示を待った……そして彼は後先を考えない強行軍に及んだ。

収束した光が勢い良く眼下に落ち、透視を使ったからといって実際に消えたわけではない城壁へとぶち当たる。閃光は槍となり城壁に突き刺さり、その刹那確かにそこにあったはずの石造りの強固な城壁は最初から無かった物のように消滅した。

「待ってて、ティファ！」

しかしいくら人間業ではない魔法を使った所で彼の怒りは収まらない。

それを彼自身自覚していたから、怒鳴り声を上げると同時に青年は混乱に怒号を上げる城内で最も人気の少ない場所を選んで城へと侵入した。

◇　◇　◇

あれからもう何時間か過ぎたんじゃないかしら。

そんな事を、ティファは牢の中でぼんやりと考えていた。

拘束をされているわけではないので、体自体はいつでも自由に動かせる。

しかし体力の全てを奪われている今は腕一本動かすことでさえ難儀なことだった。ただ、それ以上に難儀な事が現在進行形で進んでいるのでその程度は大した事ではないように思えてならなかった。

「どうかしたのか？」

「……いいえ」

王子フランベルジェ――愛称はフランらしい――に抱き起こされた状態のまま、ティファは小さく首を振る。すると頭がちくりと痛んだ気がしたが、その程度では気絶する事もできないからと突っぱねた。逃げるのは遅れるがせめて気絶でも出来ればこの場を回避できるというのにそれは期待できないらしい。嫌でもそう理解する羽目になり、彼女は内心で溜息を漏らしながら自身を支える腕に視線を落とした。

王の命により牢に閉じ込められたティファは、フランが現れて此

方延々と彼の話を聞かされ続けていた。
話の内容は別段大したことではない。何故ティファの存在を知り得たのか、何処を好きになったのか、そうしたティファに関する話ばかりなのだから。ただ、その長く続く話の最後に必ず結婚して欲しいという言葉が出てくる事が話の共通点だった。……迷惑極まりない事だが本人に悪意はないのだとティファは何度も自分に言い聞かせて今に至っている。
無論余り気が長い訳ではないティファがそれに我慢が出来るわけもなく、いい加減辟易としてはいる。しかしここで声を荒らげようものなら逃げる機会を一生失ってしまうかもしれないのだ。そう考えると下手に動くことはできなかった。そして王子の機嫌を損ねる事も出来はしない。
だからティファは真面目に聞いてはいないが、全く聞いていないわけではないという微妙な距離感をずっと保ちつつ過ごしていたのだ。
――それにしても、と胸中で呟く。まさかノルマンに謀られていたとは。
延々と続くフランの話の中にも、得られる物は幾らかあった。ティファはその中の一つを脳内で転がすように吟味しながら適当に相槌を打つ。
フランの話では、王の言う通り真実レイニウム大聖堂の教皇はグラドの王と繋がっていたらしい。無論初めはティファをどうこうしようと思って連絡を取ったわけではないだろうが、今回の件に関しては間違いなく彼女が関わっていることは事実だ。そうでなければ王が他の教会に眠る神ではなくアレイズを望んだ理由が理解できない。
恐らく王は聞かされたのだろう。アレイズがレイニウム大聖堂が建てられた理由そのものであることを。
まだ若く神格の低い神ではあるものの、聖大陸で最も権力を持つレイニウム大聖堂に眠る神は人間からすれば特別な意味を持つに違

いない。そう考えれば王がアレイズを望んだのは不思議な話ではなかった……ただ、アレイズの眠る場所として建てられた大聖堂の教皇がこのような手に出たことがティファには衝撃的だった。

仕方、ないのかなと胸中で呟く。どこか諦めじみた声はしかし、誰にも叱咤される事なく心に沈殿してしまった。

何が仕方ないのかとか、どうして否定できないのかとか考えることや突っ込むべき事は勿論多くある。

今まで信じてきた人間達なのだ、裏切られたと言われてどうして信じる事ができようか。だからこそティファは物事が確定するまで信じない方向で自身を納得させていたのに、フランの話から状況証拠を押さえた今まだ確定していないと思うことが出来ずにいた事は事実だ。そのせいか妙に冷ややかな感情に支配され、ティファは自分が次第に冷静さを得るのに気付きながら耳に流れる声に相槌を打つ。そうして何故こんな事になったのだろうかと考え、一つだけ思い至った理由にそっと溜息を漏らした。

――色々なことを聞きすぎたせいかもしれない。

他の聖人聖女に比べれば世界に関する事も神に関する事もきっと多く教えられたのだろう。

それがどのような意味を持つかはさておき、教皇の敵として映ってしまったのなら今回の件にも納得が出来た。ただ、アレイズについて旅に出る事が自分や彼を間接的に捕らえる事に繋がるのだとしたらそれはとても悲しいことだと思わないではなかったが。

しかしそのどれもが、王城を出ない限り仙内考えだと気付きティファは内心でもう一度溜息を漏らし、そうですかとフランに相槌を打つ。こんな時を後どれだけ過ごせばいいのだろう、そんな風に考えながら。

早く力を取り戻さなくては。

そして一刻も早くここから出て、アレイズにこの事を知らせなければ。

フランの話を聞き流しながら胸中で呟くと、ふと遠くで小さな爆

発音が聞こえてきた。
「……あれは？」
「何事だ」
　呟くとフランにも音は聞こえたらしく、牢の外で控えていた兵士に問い質しているのが聞こえる。神経質に若干青白く染まった頬が光の照り返しを受け、やや凛々しく見える。しかしそのような事はどうでもいいことだった。今重要なのは、これが好機であるということだけ。
　ティファは兵士が状況確認の為に一人欠けたのを見つめながら、小さな水音をかき消すように再度響いた爆発音に耳を澄ませた。火薬なのか魔法なのか判断はつけられないが、恐らくは火薬だろう。今自分を助けに来る仲間はいないのだし、第一彼等はティファが囚えられていることさえ知らない。
　とすれば、一体理由は何だろうか。
　領民の蜂起にしては唐突に過ぎるし、かといって他に理由らしい理由もない。戦が始まるとしたらそれは城ではなくもっと遠くの国境付近から足音が聞こえてくるはずだろう。
　それにしても、せめてやるならやるで体が動く時に来てほしかった。
　そんな我侭な事を考えながらこの場からどうやって逃げるか算段を立てていると、慌てた様子の鎧が硬質な音を立てて現れた。情報の伝達は意外と早いらしく、彼等の動きは次第に緊張感を持ったきびきびとしたものに変わっていった。やはり、名ばかりの兵士ではないらしい。
「殿下！」
「どうした！」
　鋭い声にフランが身を離し、そっとティファの身を横たわらせてから兵士に近付く。そして囁くような声で一言二言交わした後で大股に帰ってきた。鳶色の瞳が爛と輝き、微かな焦りを宿している。
　そんなに焦るぐらいならば上に上がればいいものを。そんな風に

考えているとフランはティファを見下ろしてから一度舌打ちを漏らした。温厚そうな王子でもこんな態度を取るのかと胸中で呟くと、苦々しい声が耳朶を打つ。

「どうやら城内に侵入した馬鹿がいるらしい」

恐らくそんな所だとは思っていたが、本当にそんな人間がいたのか。

「……領民の蜂起、でしょうか」

「まさか」

唯一思い浮かぶ可能性を口にすると、フランは即座に否定して肩を竦めた。その態度に思わず眉を顰めるが、確かにグラド内で蜂起が起こる事は考えにくいので口を噤んだ。飢えるでもなく襲われる心配も殆どないこの都市で蜂起が起こるなどということがあったら、それはもう聖大陸全土の終わりに等しいと思えたから。

口を噤んだまま首以外は指一本まともに動かせないティファの瞳を、切れ長の双眸がじっと見据える。そこに不安が湛えられているのを見て取り首を傾げると、ぽつりと力ない声が牢を満たした。牢に続く階段からは兵士が流れ込み、王子の無事を確認している。だが彼はその全てを無視してただティファのみを見据えていた。

「恐らく貴女を助けに来たのだろうな」

「……そんなはずはありません。私が捕まっている事は誰も知らないのですから」

ダークブルーの双眸がすっと細くなり、私が捕まっているという言葉にありったけの嫌味が籠められる。

これは怒りと嫌味そのものだと告げるような態度に、フランは幾分か傷ついたような顔を浮かべた。しかしそれもすぐに緊張した面持ちへと変わっていく。

怠惰な王とは打って変わって、彼にはこの事態を自ら収拾する気なのだろう。そう考えるとティファはフランの評価を改めざるを得ないと感じさせられたが、続いた言葉にやっぱりそれは止めておこうかとも考える。

「貴女を返すつもりはない」
その宣言は余計だ。
しかし、もしフランが言う通りならその発言は最も的を得ているから余計に癪に障る。
この襲撃がティファの仲間によるものならば、彼等の最終目標はティファ。ならばこの場に留まりティファの身を守り続ければ――ティファからすれば囚われ続ければ――彼等の勝利となるのだ。
それを知ってか知らずか、フランはティファの隣に座り込む。その間にも兵士に指示を飛ばし、恐らく使ったことなどないであろう刀身を自身の傍に置いた。もし襲撃者がこの場に来れば戦う気なのだろう。戦う力があるかどうかはさておき、そうするだけの強い意志が横顔からは感じられた。
寝転がり、黙ってそれを見つめてからティファは目を閉じる。
――きっと、彼が王になれば長らく国は安定するのかもしれないけど。
延々と話す所が玉に瑕だが、彼は決して不誠実な人ではない。むしろ父親とは似てもにつかぬほどにまともな人間の部類に入るし、ティファもそれは認めていた。
だから王が退き彼が王になれば、この悪趣味極まりない城内も少しは落ち着く事は間違いないし国は今まで以上に繁栄に導かれるだろう。臣下の力ではなく、王自身の采配によって。
しかしそれでもティファは妃にだけはなりたくないと胸中で大声を上げた。
不誠実ではないとかまともだとかそのような事は些事なのだ。ただ結婚したいか否かというただそれだけの問題でティファは彼と共に生きる道は捨てていた。
だがそれだとあまりに彼が不憫すぎるので、出来れば早く自分の事を忘れて別の女性を見初めて欲しいと思うことは忘れなかったが。
「侵入者は真っ直ぐにこちらに目指しているそうだ」
「……そうですか」

ぐるぐると回る思考の中でフランが珍しく言葉少なに報告する。それは彼の目論見が当たり、襲撃者の狙いがティファである事を示していたのだが彼女は何故か不安が拭えなかった。体が動かない事がこれだけの不安に繋がる事を、彼女は初めて知ったのだ。

ぎちぎちと関節が軋む音を立てながら動く。そうして無理矢理に左手の薬指に触れると、今は力を失った指輪の冷たさが感じられてティファは安堵の息をついた。

指輪の効力がない今、触れた所で何が起こるわけではない。けれど。

――アレイズ、と胸中で呟く。

もしもこの心が少しでも伝わるのなら、すぐにでも助けに来て欲しいと。

次第に痺れや痛みが取れた体を緩慢に動かしていく。そうしてずるずると身を引きずりながら壁に上体を寄りかからせた彼女は、目を閉じて左手薬指に嵌った指輪に祈りを捧げた。

◇　◇　◇

王城の門前でアレイズは一人ティファが出て来るのを待っていた。しかしすぐに出てくると思われた影はいつまで立っても現れず、アレイズは門を行き来する人間達を観察しながらぽつりと声を漏らした。

「おかしい……」

いくら器物破損とはいえ、街の人間が騒いでいない事からして大事には至っていないのだろう。

そう考えて待ち続けたアレイズではあるが、空を見上げればそれが次第に黄昏に染まっていくのが見える。夜が近いのだ。

風が冷たさを増し、外套を強く揺らす。しかしここで寒いからと言って帰ることは出来なかった。もう昼前から長い間待ち続けているのだ、ここで帰ったら馬鹿すぎる。そんな意固地な想いに捕らわ

れたせいだ。
　それにしてもまさかここまで時間が掛かるとは、一体この国は器物破損を極刑にでも据えているのだろうか。
　そんな事を考えながら顎に手を当てて考えるものの、かつてグラドを訪れた時にはそんな話は聞かされていないと胸中で首を振った。家を一件壊し人を傷つけたら大罪にもなるだろうが、ティファにはそれなりの資金も持たせているのだから弁償ぐらいは出来るはずだ。第一ティファは悪人を吹っ飛ばす事はあっても一般人まで巻き込むようなことはしない。
　……まさか悪人を斬りつけでもしたのだろうか。ふとそんな疑問が頭をもたげ、アレイズは嫌な予感に目を閉じる。
　溜息を漏らすとこめかみがちくりと痛んだ。
「アレイズ様？」
　そうしてアレイズがこめかみに指先を這わせた刹那、背後から声を掛けられ彼は体ごとそちらを振り向く。するとそこには見慣れた二人の少女が立っており、アレイズは驚愕に口を軽く開いてからそちらに足を一歩踏み出した。
「メイ、それにマイまで。一体どうしたんだ？」
　立っていたのは、真紅と深青のメイド服を来た双子の少女だった。しかし今この二人はティファから離れ別行動をしているはずなのだが、一体何故王城に来ているのだろうか。
「お久しぶりでーす！」
　不審に思い問い掛けると、メイが底抜けに明るい声で両手を振り上げる。
「どうなさったんですか？　私達がアレイズ様に御会いするのはそんなに不思議な事でしょうか？」
「いや、まさかここで会うとは思っていなかったんでな」
　メイの言葉に何も答えられずにいるアレイズに、マイがくすりと微笑を漏らす。そこでようやく数日振りに会った二人への実感が湧いてアレイズは頭に手を当てて苦笑を漏らした。とことん怖い双子

ではあるが、こうして一人でいるよりはずっと気が楽になることを彼は気付いてしまったのだろう。

しかしその安堵に近い想いもメイの言葉で掻き消される。

「あれ？　アレイズさんもピコに言われて来たんじゃないんですか？」

「……アレイズさん、も？　いや、違うが」

首を傾げて問うメイにアレイズが怪訝そうな顔を浮かべて否定の言葉を返す。

ピコに言われて王城に？　それは一体どういう……。

アレイズが首を振り否定の言葉を告げるのを聞き、マイが不審げな視線を向けてくる。亜麻色の瞳が困惑と警戒に染まり、若干の沈黙がその場に落ちた。

「それでは、アレイズ様はここで何をなさっていらっしゃったのですか？　ティファ様は何処に？」

先に口を開いたのはマイだった。

畳み掛けるような問いに、アレイズは若干たじろぎながらも城を指差す。

「俺はティファを待っていた。あの馬鹿、朝っぱらから城に呼ばれたらしくてな……まぁ器物破損辺りじゃないかと思う――」

意味の分からない問いに対し、アレイズは幾分か仏頂面で答えるもそれ以上にマイが顔を真っ青にした事が気になり首を傾げた。

「嘘……」

「？　どうしたんだ」

一体何があったのかは分からないが、マイの様子は尋常ではない。

そう考え、真っ青な顔に対し大丈夫かと言うように手を伸ばす。

そうしてマイに触れようとするとメイの震えた声が耳朶を打ち、次の瞬間には高らかな声がマイに向けられていた。

「姉さん！　駄目だよ！」

「っ！？　マイ！？」

そうしてメイの声が放たれた刹那、マイに向けて伸ばされていた

手は空を切り、彼女は素早く城門前に立ちながら後ろ手にモーニングスターを構えた。

止めるメイの声とアレイズが息を呑む音が静寂を満たす。しかしそんな静寂の中においてもマイは表情一つ変えず兵士に向かって攻撃を仕掛けようとしていた。その背をメイに抱きしめられ、止められる。

「……離して頂戴」

底冷えするような声が響き渡りメイを見下ろすが、メイとて長年双子をやって来たのだからここで引いたらいけないということが分かっているのだろう。ふるふると首を振り、大きな瞳に不安を浮かべてアレイズを見据える。助けを求めるような瞳はやはり意味など分からなかったが、マイが暴走をしていい事が起きた事など一度もないので彼も助け舟を出すつもりで声を発した。

自分の声でどうこうなるとは思えないが、何も言わずに暴走されるよりはまだいい。

「城の中に入ろうというのか？　なら止めておけ」

言いながらマイの腕を出来る限り優しく掴む。しかし理知的な人間程切れると恐ろしく頭に上った血が冷めないものだ。

彼女はアレイズの腕をすぐさま振り解き、次に体にしがみつくメイをどかせようと腕に力を込めていた。ツインテールが強く引っ張られ、いい加減腹に据えかねたメイが姉のセミロングを伸ばすように引っ張る。もうこうなったらただの姉妹喧嘩だとしか言いようがないが、ただの姉妹喧嘩にしか見えないおかげで兵士達に不審者扱いもされずに済んだ。

それにしてもまずい。

いくら不審者ではないとはいえ、明らかに異常である事に変わりはないのだ。これがもっと小さな子供ならともかく、相手は十代後半のそれなりに大きな少女なのだから。

いや、例え幼かったとしても門の前でモーニングスターを構えたメイドが恐ろしい形相で門に近づこうとしていたら普通は不審者扱

いしたくなる。だというのに兵士がこちらに足を踏み出さないのは、単にこの都市が平和ボケしている御陰だった。

「……とにかく、ちょっと来い」

このままではまずい。

そう考えたアレイズは渋々今度は力を入れてマイの腕を引いた。

「離してください！」

こうなるとさすがにマイでも敵わないらしく、彼女は鋭い声で怒声を放ちながらも否応なしにアレイズに連れて行かれる事になった。その横でメイが頭を痛そうにさすっていたのが気になったが、後で姉妹喧嘩が発展しないことを祈るばかりだった。

「早く離してください！」

「駄目だ。まだ事情すら聞いていないんだからな」

そんな事を考えながら門からさほど離れていない道へと入り、治安が悪いとは言えないが歩きたい気分にもなれないような裏路地にマイの体を押し込める。

明るい大通りとは違い、区画整備もまだ行き届いていない湿度の高い場所に押し込めるとマイはそこでようやく力を抜き、壁に背中を押し当てた。黄昏はすぐに世界から消え、残された群青が辺りを支配する。そのせいか更に人気が少なくなり今や三人しかいない場所に立ち尽くしてから、アレイズはメイを一瞥した。恐らく今状況を説明するならメイが必須になるだろうとの考えからだ。

旅を初めてそれほどの日は経過していないが、その程度の事なら理解が出来るようになっていた。

……いいことか悪いことかはさておき。

アレイズの読み通り、頭に血が上っている姉の代わりにメイが口を開いた。

「えっと、まず私達が城門を目指した理由ですけど、さっき、兎のピコが私達の所に来たからなんです」

「ピコが？」

ピコという事は、要するにあの神のことだろうか。そう考えアレ

イズが問い掛けるとすぐにメイは頷いた。
　兎のようなツインテールが大きく揺れるが、まだ痛むのかメイは若干目尻に涙を浮かべながらも話を続ける。
「はい。それで、これから一人の少女が脱走するからその少女と合流して逃げてくれって」
　兎、ピコ、一人の少女。
　――まずいな、嫌な予感しかしない。
「ちょっと待て、それは兎の姿で言ったのか？」
　アレイズは冷や汗をかきながら、とりあえず気になる事を尋ねる。
　彼女達はピコが人の姿になれる事は知らないはずだ。自分とて宿屋の人間から金髪碧眼の男と一緒だったと聞いて可能性の一つとして捉えている程度だというのに。だとすれば兎などという言い方はしないだろうし、第一あんな神が現れたからといってその言葉を信じはしないだろう。一人の少女などという意味の分からない言葉を信じて城門を目指したのは、相手が兎のピコだったからだ。
　しかし話すとすれば依代が必要になるはずだ。そう考えているとメイはアレイズが予想だにしなかったことを口にした。
「うんうん、ちょっと吃驚したよ。だって兎がいきなり喋りだすんだもん」
「な……っ！」
　あっけらかんとした声に絶句し、早くなる鼓動を抑えられないままに思考を巡らせる。
　確かにこの世界には突然変異で言葉を話せたり高度な知能を持ち得た動物が存在する。ゼクスと呼ばれるそれらの動物は非常に重宝され、場合によっては神の愛玩動物にさえなるほどなのだが……。
　しかしこの場合はゼクス云々ではなく、神に関わることなのだとアレイズは確信していた。
　最初にピコを見た時にはそれらしい動きをしていなかったのだ。
　ということは、答えは一つ。
　――盲点だった、と胸中で呟く。可能性の一つだったとは言え、

まさか本当に兎自体が本体だったとは。
こうなれば兎の状態の時に復讐を果たしていればよかった。
今にしてみればどうにもならない後悔を抱え溜息を漏らす。しかし今はそれどころではないと、アレイズは確認するようにもう一つの問いを発した。低く、嫌な予感しか感じさせない声が双子の耳朶を打つ。
「少女が一人脱走するのか？」
疑問にメイが神妙に頷く。そしてマイはその言葉に反応し、無意識に足を進めようとした。
慌ててそれを押さえつけると、震える声でメイが呟く。ぽつりとした力ない声は彼女に酷く不似合いだったが、この場合は仕方がない事とも言えた。
「さっきのアレイズさんの話を聞いて思ったんですけど、もしかして少女ってティファ様のことじゃないのかな。……姉さんもそう思うから城に行こうとしたんでしょ？」
「……」
アーモンド型の大きな瞳がマイに向けられる。問い掛けるような視線にしかしマイはふいと視線を逸らしてしまった。恐らくそれが答えなのだろう。アレイズの妨害に諦めを感じたようにマイの体から力が抜ける。その感覚に彼女を見下ろせば、冷静さを取り戻された瞳は微かに潤んでいるのが見えた。
恐らく彼女の頭の中では、ティファに何かあったら自分のせいだという考えが渦巻いているのだろう。生真面目な彼女は些細な事でも自責の念に駆られてしまいがちな事をアレイズもメイも重々承知していたのだから。
ただ、この場合自責の念に駆られるべきは自分の方だ。
――あの時、離れなければよかった。
そこら中にあるものをなぎ倒したく鳴るような破壊衝動と苛立を感じながらアレイズは舌打ちを漏らし、王城を睨みつける。漆黒の双眸は宵闇に解け誰の目にも見えなくなるが、それが確かに王城に

向けられている事を双子は理解していたに違いない。
　王城で何が起きているのかも、何故ティファが脱走するような目に遭っているのかも分かりはしない。しかし脱走をすると言う以上自分達はそれを待つしかないのかと考えていると、閃光が空から降るのが見えて三者三様に目を見開いた。
「――何が起こっている！？」
「い、今お城が壊れたよね？」
「まさかティファ様が？」
　闇をつんざく光は一直線に城へと向かい、突き刺さっていく。そうして音もなく霧散するのを見てからアレイズ達は慌てて城へと向かい、そしてその城壁が跡形もなく消えているのを見てそれが魔力によるものだと理解した。アレイズやティファが以前同じようなことをしていた影響だ。
　しかし城壁が壊される理由が分からない。第一これはティファの魔力でもないのだから。
　指輪に視線を落とし、翡翠にそっと触れる。しかし翡翠はティファの危機など一切伝えはせず、平常時のままだった。
　否、もしかしたらそれこそが危機的状況を伝えているということなのではないだろうか。
　ティファの危機は指輪の危機、必ず指輪はティファの危険を知らせるだろう。だがもしも指輪自体が機能を停止していたら？
「――くそっ」
　何故その可能性に至れなかったのかとアレイズは自身を罵りながら、別の部分で冷静に魔力の持ち主が誰であるのかを判断する。
　感じた事のある力は、恐らくピコのものだろう。
　そして可能性としてはティファの脱走を手助けするためなのだろうが――。
　考えても埒が明かないな。
　そう考えアレイズは意識を無理矢理現実へと戻して城へと駆け出そうとして――。

『助けて……』
不意に聞こえてきた声にぴたりと足を止めた。
「ティ、ファ？」
「え？」
「ティファ様がどうかしたんですか！？」
アレイズの声にマイが息せき切って尋ねるが、アレイズは答える事ができなかった。というよりも答えられないのだ。頭に響く声を聞いて、そこから得られる事を情報として整理する事で思考を埋め尽くされてしまったせいで。
自身がはめる指輪に指先を這わせ、それを媒体として一瞬だけ伝わった声から魔力を察知する。しかしそこに何も考えれず、アレイズは一つの可能性に思い至った。
指輪の力がひどく弱いということ。それは要するに、自分とティファの契約自体が弱まりつつあるということだった。
魔力を辿る限り、今この時にティファの声がアレイズに伝わったのは奇跡に等しいのだと言えるほどに指輪の力は弱くなっていた。そんな状態になるまで一体何があったのかはアレイズには分からなかったが、マイが頭に血を上らせてもおかしくはない状態だということは理解できた。
城の最上部を見上げ、ピコの魔力が放出されたとされる場所を見据える。
「メイ、マイ。少し待っていてくれ」
そうして続いて穴が開いた場所を注視しながらそう言い放ち、アレイズは胸の中でのみ空間転移の呪文を唱えた。
「なっ！」
「アレイズさん！？」
メイとマイの声が強く脳を揺さぶる。しかしアレイズはティファを助ける事のみを考え暗転する世界で目を閉じた。
――どうか俺が行くまで無事でいてくれ。
囚われている場所がどこであるか分からない以上、ピコと同じよ

うな道を辿るのが一番早い道だ。
そう考えた城壁の失われた部分に移動したアレイズは、持っていた紐で長い黒髪をきゅっと結び直した。
そうして剣を鞘から取り出し無造作に眼下に向けた彼はそのまま城内に飛び込んだ。

第二十八話

城壁を攻撃したイオは、アレイズに先んじて城の中を歩きティファを捜索していた。

とはいえ全く関係のない所を歩く必要などない。彼は透視で牢の位置を掴んでおり、そこに至るまでの最短距離を弾き出していたのだから。

本来ならば空間転移で移動をしてすぐにでもティファを助け出したい所だったが、空間転移を使える人間は稀だ。下手をすれば神だと知られてしまう可能性がある。それは避けたかった。

――ノルマンが裏で手を引いているんだったら、ろくな事にはならないからね。

何より自分が神であると知れたらグラドで眠るゼルや他の神々にも迷惑が掛かるかもしれない。神とは良くも悪くも人間にとって信仰の対象であり、手を伸ばしたくなる存在なのだ。それが多く一所にいると知られるのは余りよろしくない。

そう考え内心で毒づきながら、イオは出会す兵士に氷の礫をぶつけて行く。

アレイズやティファのように剣を主に使うことはせず、あくまで相手を昏倒させる程度の事しかしなかった。……イオは剣を使うのが苦手だったのだ。使うと確実に命を奪ってしまうと知っていたから。

だけど、と胸中で呟きながら、イオは一人また一人と倒れ行く兵士を見下ろしてぽつりと呟く。

碧眼には憐憫ではなく嘲るような色が籠められており、もし今この場にイオの顔を見ることが出来るものがいたら昏倒した振りでも続けるのではないかと思える程にそれは冷ややかだった。指先で金糸を梳くように撫で、乱れたそれを押さえつける。

「君達、ティファがいなかったら今頃死んでたよ？」

無論昏倒しているので誰も聞いてはいないし、そもそもティファが囚えられていなければ王城に乗り込む事など有り得ない話だったのだが、そう言わずにはいられなかった。

言いながら全速力で掛けて行く。

牢まではまだ距離がある。急がなければ。

そんな焦燥感に駆られながら、慣れぬ人の足でイオはティファの元を目指した。

◇　◇　◇

城内に入ったアレイズの目に映ったのは、折り重なるように倒れた兵士の姿だった。

硬質な銀の鎧は所々へこんでおり、魔力による衝撃か棍棒などの武器で殴打されたように見える。恐らく侵入者からの攻撃だったのだろう。見た所大した怪我でない事が幸いだと感じながらもアレイズは緊張感を解くこと無く城内を進んで行った。

外套を脱ぎ捨て、最も動きやすいと思われる姿で走っていくとすぐに立っている人間の姿を見つける事ができた。

少年と青年の中間地点。しかし言うなれば青年と呼べる部類に入る金髪の男は一瞬立ち止まり、何かを呟いた後ですぐに駆けていく。何を話したのだろうかと視線を追うとそこには例の如く銀光が見えた。兵士を倒したのはあの男のようだと気付いたアレイズはしかしすぐに首を傾げる。

「あれが、ピコか？」

呪いを受けた時は逆光でよく見えなかったが、あの時も確か人間の姿をしていた気がする。しかし記憶を手繰り寄せた所で確たる形は得られないので、アレイズはピコだと思われる男に近付くために更に速度を上げて駆けた。

決して趣味がいいとは言えない通路を走ると、存外すぐに追いつく事ができた。……途中足音で気付かれたのか相手が更に速度を上

げたが、そこは空間転移することで距離を縮めることが出来た。近距離での空間転移などする必要性を感じられないが、追いつけなければ意味がないので気にしないことにする。

巨大な絵画が並べて飾られる通路で金髪の男の隣に並ぶと、金髪をなびかせて走る見た目だけは貴族の子息のような青年はちらりと大きめの碧眼でアレイズを見上げた後、実につまらなさそうに君かと呟いた。

ソプラノトーンの声はどこか苛立ちを含んでおり、アレイズはその言葉に多少の苛立ちを感じたものの結局は何も言わずに同じ速度で走ることにした。迷いが無いピコの態度に、ティファの居場所を知っているのだという予感があったからだ。透視の術や、せめて指輪が使えれば何とかなるのだろうがアレイズは透視の術は不得手な上に指輪は機能停止。為す術がなかったのだ。

暗い権威に満ちた通路を走り隣に並んでいると、長距離を駆けながらも汗一つ流さないイオがアレイズに問うた。

「何で来たのさ？　ティファには指輪が使えないはずだよ」

それは実に最もな意見だったから、アレイズは少し唸ってしまった。

事実を告げた所で通じるのだろうか。そんな言葉が脳裏を過ぎったせいで、正直に答える事が憚られたせいだ。

するとピコが早く答えろという風にアレイズを上目遣いで見るので、渋々ながら溜息と共に答える。

信じなければそれまでだ。

「ティファの声が聞こえたんだ」

「ティファの？」

丁寧に洗っているのだろうと一目で分かる金糸が一際大きく揺れ、空を模した碧眼が好奇心に光を放つ。

同時に立ち止まりそうになったその影は慌てて速度を上げて走り出しながら腕を伸ばした。同時に腕を伸ばし、冷えた魔力を放出する。その気配と対になるようにアレイズは剣を抜き、反対方向に潜

む兵士に峰打ちを食らわせた。
甲高い音と共に、柔らかな絨毯に兵士が倒れて行く。
それを見ることもしないまま足を踏み出すと、何故かピコがじっとりとした暗い声を上げるのが耳朶を打った。
「何で君がティファの声を聞いたのさ？」
だが、腹を立てられる筋合いなどなかった。
それどころか腹をた立てたいのはこちらの方だ。
「指輪から伝わってきたからな。……それより、貴様は何故ティファの傍にいなかったんだ？」
我ながら静かに思える怒気を孕んだ声を放つ。
喧騒と怒号と、それから昏倒による静寂に包まれた城内でアレイズの声が響くとイオは軽く肩を竦めた。
「ティファが王と謁見する時に傍にいたら、多分僕も捕まってたよ」
「……どういう事だ」
ティファが囚われるのならばともかくとして、神たるピコが人間如きに捕まるとは思えなかった。
出来得る限り体力を奪われないように足を前に出すピコに向けて眉根を寄せると、彼はげんなりと視線を上に向けながら答える。そうしていれば神ではなくただの青年に見えてしまうのではないか、思わずアレイズがそう感じるほどそれはどこか力のない笑みだった。
「裏で手を引いている奴は、僕達神々や契約者の力を奪うのが好きなのさ」
「？」
意味が分からない。第一どうやって神々や契約者の力を奪うというのだろうか。
そのような方法を聞いたことは一度足りともないというのに。
「着いたよ」
そうこうしている間に、ピコが静かに立ち止まる。釣られて立ち止まると眼前に強固な扉が立っている事にようやく気が付いた。耳を澄ませれば、中から男の声が響いてくる。

「ティファニエンド。貴女は絶対に渡さない」
この奥は牢でもあるのか、扉の厚さにそぐわぬほどしっかりとした声が聞こえてくるのに動きを止めるが、イオは相手が誰なのかを理解しているらしくただ嘆息するのみだった。しかし――。
扉に手を伸ばす。だがそれでは心の中の色々なものが収まらないと感じたアレイズは、扉でも破壊してやろうかと衝動的な考えに捉われる。そうすれば中の男も吹き飛ばされるだろうし、のうのうと人の契約者を口説く事できないだろう。
そうだ、それがいい。
契約者を囚え、あまつさえ口説きに掛かるような男だ。殺されても文句は言えまい。
「何をしてるんだい？」
そんな考えを読まれたわけではないだろうがピコが不審げに声を掛ける。
恐らくどうして扉を開けないのか不審に思っているのだろう。
確かにそれは正しい、ただ。
「な、何？」
振り向きざまに剣を鞘から抜き放ち、切っ先をピコの首筋へと押し当てる。ぴたりと当てられたそれは少しでも動こうものなら皮が裂けてしまうだけの、ほぼ零距離に等しいものだった。
さすがに人間の姿では力もほとんど出せないのか、ピコが冷や汗をかきながら問う。彼としては何故アレイズにこのような態度を取られるのかが理解できないのかもしれない。そう、それもほぼ間違いではない。別段ピコが悪いことをしたわけではないのだから。
ただ、アレイズにはどうしても訊いておかなければならないことがあったからそのままの体勢で彼は言い放った。どこまでも静かな漆黒の双眸が細められ、無という一言がよく似合う表情がぴくりとも動かされずに言葉を紡ぐ。
「あの男は誰だ？」
呪文を唱える時ですらこのように早口では話さないだろう。

頭の片隅でそう自嘲してしまうほどの声を無視していると、ピコが緊張に頬を強ばらせて答えた。扉を睨むように見据え、急げと急かすように碧眼が吊り上げられた。

「グラドの王子だよ。名はフランベルジェ――加えて言うなら、ティファを妃にと望んでる」

――妃？

冷静すぎる思考がぴたりと一瞬停止し、すぐに緩やかな活動を再開する。

妃、とは妻の事だろう。ということは何か？　まさかその王子とやらはティファとの結婚を望んでいると？

あんなそこいらの男では手がつけられないような熱血漢で気が強くて乱暴で料理が下手で方向音痴の女をか。

アレイズはそんなティファに聞かれたら間違いなく激怒されそうな事をつらつらと胸中で呟きながら剣先を引く。だがようやく自由の身になれたはずのピコはやはりその場で凍りついたままアレイズを見上げていた。うわぁ、と放たれたソプラノトーンは無論アレイズのものではない。とはいえそれが中にいる王子に向けられたものではなくアレイズに向けられたものである事を彼は自覚していた。今自分がどんな顔をしているか、大体予想がついていたから。

「ほお」

――いい度胸だ。

熱情が心に火を灯し、静かに温度を高めていく。

自分でも不思議なほどに冷静でありながら、笑えるほどに腹が立っていた。

何故そのような感情を抱くのかはあえて気にしない。が、感じてしまった怒りは発散しなければ気が済まなかった。

扉へと体を向け、そっと腕を伸ばす。そして呪文の詠唱を胸の中ですら唱えず魔力を練り上げた。

――契約者を、神の花嫁に手を出した罪は贖えよ。

胸中でそう呟くのが精一杯だったから、呪文など唱える余地など

なかった。
ただ、扉の向こう側にいるティファに扉の破片をぶつけるわけにはいかないので消滅させる魔法を使った辺りはやはり冷静で、アレイズは口の端を吊り上げて笑みを刻みながら鋼鉄の扉が消滅する刹那に体を奥へと滑り込ませていた。
今はただ、見も知らぬ王子を殴り飛ばしたくて仕方が無かった。

◇　◇　◇

「！？」
息を呑む音と共に、フランが青白い顔を更に青くする。
その横顔を不審に思い視線を追うと、どうやら彼は扉の方を見ていたのだと気がついた。兵士達は周辺を固めると言って出て行ってしまったから、兵士が定期報告でも入れに来たのだろうか。
そう考えてぼんやりと扉を見据え、きょとんと目を丸くする。
「あれ、ない？」
扉は、そこになかった。
確か鋼鉄製の分厚いものがあったはずなのに、それは跡形もなく消滅し消え去っていた。そう、まるで初めからなかったのだと言うように。
目を丸くするティファの隣でフランが剣の柄を握り締める。その動きに人が来たのだと理解したティファは微かに身動ぎし、その双眸を丸く見開いた。
ティファの眼前、消滅した扉からはここ数日別行動を取っていた漆黒の神と昨晩から姿を消していた金髪の神がいたのだから。しかし、驚くのはそこだけには留まらなかった。彼等が単体で現れたのなら一つの驚きで済んだのに、彼等は二人一組でやって来たのだ。
それこそ殺しあってもおかしくはないような程に険悪な、あの二人が。
とはいえ、二人の姿を見た瞬間助かったと胸中で呟く。彼等が来

たのならもう大丈夫だ。
……が、王子よりも漆黒の神の方が怖く見えるのは気のせいだろうか。否、王子は元々怖さの欠片もないのだが。
「何をする！」
石畳をブーツの踵で踏みしめ大股に歩く長身に、フランが怒声を上げる。しかし漆黒の神はそんな声など聞こえないとばかりに抜き身の刀身を彼に突きつけた。鋭い白刃が鳶色の髪の毛をはらりと切り裂き、フランが剣を振る隙さえ与えない。
当然だ、相手は素人ではなく――それどころか人間ですらないのだが――玄人なのだから。
「アレイズ……」
しかし彼が、アレイズが人間相手にそのような事を進んですることが今までに無かっただけにティファはまたもや驚愕を浮かべる。今までだってティファやマイが盗賊を倒すのを嫌そうに見ていたというのに、今のアレイズは――。
漆黒の双眸は無を湛えフランを見下ろしていた。
それはもう、ティファが今までに見たことがないほどに冷ややかな温度を持って。
「貴様か、俺の契約者をかどわかさんとしたのは」
声にならない悲鳴がフランの喉元から漏れる。恐らく彼は今心の中で神へ救いを祈ったことだろうが、残念な事に神は眼前で剣を突きつけている。こんなに滑稽な事はないだろう。ティファとて相手が王だったら笑いの一つでも漏らしたかもしれないが、フラン相手にそのような事をしてほしくはなかった。
第一、何故アレイズはこんなに怒り狂っているのだろうか。
何もするなと言われたのに囚われてしまったことは申し訳ないが、それは不可抗力だ。他には特に悪いことはしていないし、そもそも何かしたならティファに怒りの矛先が向かうだろう。
そこまで考えてティファはようやくアレイズが放った言葉の意味を理解する。

契約者をかどわかさんとした人間、アレイズはその存在に怒りを抱いているのだと。

……かどわかされた覚えはないが、多分彼の中ではそうなっているのだろうとティファは結論付け、イオに支えてもらいながら立ち上がる。ひんやりとした壁面に手をつけ、ぐらりと傾いだ体を自分一人で真っ直ぐに保つと幾分か高くなった視点で久しぶりに世界を見ることが出来た。

その中でフランは、額に汗を流し眼鏡を落とした事にさえ気付けない様子で口を開閉させていた。元より戦いに慣れていないのだ、剣を突きつけられる事など一切無かった彼が混乱するのは無理もない話だった。延々と長話をされたのだからこの程度は良い薬だと思わないでもなかったが、ティファは状況がそれだけで終わるとは到底思えなかった。

下手をすれば、このままアレイズが人殺しになってしまいそうな、そんな予感がしてならない。

「アレイズ……」

明かりが、怯えた様に小さくなっていく。そのせいかアレイズの顔をよく見ることができないまま小さく名を呼んだが、高く耳に響くはずのその声はアレイズの耳には届かなかった。

否、届いてはいたのだ……一応。

「……ティファ」

その証拠にアレイズは柔らかな顔をしてこちらを見て名を呼んだのだし、ティファの身が無事である事に安堵するだけの余裕を持っているように見えた。ただ、剣先をフランに突きつける事は決して止めない。それどころかその距離が徐々に零距離に近づいている事も確かだった。

このままでは血が流れてしまう。とはいえ止めに入るだけの体力はまだ取り戻せておらず、ティファは何とかフランとアレイズの間に割って入ろうとしてイオに止められた。ぽんと肩が叩かれ、大丈夫という風に笑みを向けられる。眉根を寄せると、黒の教会で見た

ような黒に染まらない明るい表情が笑みを刻んだままアレイズへと近づいた。
「君は人を殺すつもりか？」
細い指先がアレイズの剣を持つ手を押さえて言い放つ。
「ピコ……っ！」
鋭いソプラノに、アレイズが離せと言わんばかりの殺気を孕んだ睨みを利かせる。
が、イオはフランを同じように冷ややかに見下ろしながら彼の言葉を無視して呟いた。
「僕だって殺したいぐらい腹が立つよ。でも、ティファが嫌がると思ったから誰も殺さなかったんだ」
「……」
もしも誰かが害される事があれば、イオはティファに殺意を抱かれてしまう。それを覚えていたのだとティファが安堵の息をつくと、アレイズは一度ティファの顔を見た後で剣先を下ろした。
苦々しい顔はまだ納得が行かないようだったが、イオの言葉が功を奏したらしい。形はどうあれ、流血沙汰が防げたのならそれに越したことはない。
そう感じほっと胸を撫で下ろした刹那、ティファは再び顔を固めてしまう羽目になった。
「だからこの程度で済ませてあげようよ」
「ひぃっ！」
氷の礫、それもかなり大きめの部類に入るであろうものがフランの額にぶつけられる。ごつんとやけに嫌な音を響かせたそれにフランが顔を歪めて床へと倒れ込んでしまった。それを見下ろし、イオは何事もなかったように朗らかに笑う。
「大丈夫？」
「う、うん」
常ならば叱りつけたい所だが、恐らく彼としてはあれが一番の温情だったのだろう。

そう考えるとイオにしては頑張った部類ではないかと考え、ティファは何も言えずにこくこくと頷いた。その動きにずるりと壁面に当てていた手が滑り、ティファはたたらを踏みながら二、三歩前に進み出る。

泥に汚れたスカートがふわりと舞い、暗がりに白を映し出す。それは重力に抗えずまた泥へと倒れこみそうになったが、寸前でアレイズの腕に支えられて事なきを得た……のだが。

「へ？　――うわっ」

「付いて来い」

膝の裏に手が差し込まれ、それに気付いた時にはティファの体は重力に逆らい浮かんでいた。否、抱き上げられていた。

浮遊感に声を上げると低い声が耳元で囁き、くすぐったさに身を捩りたくなる。その間にもアレイズは泥を飛び散らせないように静かに歩きながら消滅した扉を越え、相変わらず趣味が悪いと言わざるを得ない通路へと進んだ。まだ牢には辿り着いていない兵士達の混乱と怒号の声が飛び交い、騒然とした城内にぽつんと立つ自分達は酷く不似合いなものに思えて仕方がない。

「アレイズ……？」

だがアレイズはそのような事は意に介さずとばかりに少し考え込む様子を見せてから、静かに壁面へと向かう。

そこにはいかにも高いんですと言わんばかりの壺が並べられており、ティファは顔を顰めながらそれらを見下ろす。これだから金持ちは、と考えているとイオが追いつき横へと立つ。

「ちょっとアレイズ！」

いきり立つ姿は、突然二人でさっさと帰ろうとした事に対する怒りが籠められているのだろう。

確かに一緒に助けに来てくれたのにこれではあんまりだと感じていると、アレイズは黙ったまま頭を下げ小さく何かを呟いた。神聖文字に似た響きを持つ言葉が魔法だと理解した瞬間、前面にある壁面が木っ端微塵に砕け散る。そうしてイオが止めるのも無視して無

言のまま歩を進める。ただ一度だけ立ち止まりイオを見据えた瞳が付いてくるなと言っているようで、ティファはアレイズの変貌ぶりにただ目を見張る事しかできないまま彼が行く先について行くことしかできなかった。

文句を言いたくとも、それだけの力ももうないのだから。

そうして幾らか歩いた頃、ようやくティファはアレイズに問い掛けることが出来た。

「ねぇ」

「どうした？」

問うと、アレイズは抱き上げるティファの顔をのぞき込みながら首を傾げる。話を聞く気はあるのだと言う気持ちが少しの余裕を生み、ティファは少し息のし辛い胸を押さえながらゆっくりと問いかけた。

「何処に行くの？」

今いるのは察するに城の庭園といった所の場所だろう。暗いからよく分からないが、草の匂いが濃い所から恐らくはそうだと思う。

しかしティファはアレイズがどこに向かうのかを知らずに問うたのだ。

見た所、外に出ようという意志が感じられないのが主な原因かもしれない。

「さぁ？」

首を傾げるティファに向けて、アレイズは一瞬言葉に詰まってから曖昧な笑みを浮かべる。精悍な笑みはどこか疲労感を湛えており、とてもではないが余裕が感じられない。……要するに何も考えていなかったと言うことだ。

普段はティファの行く道にあれこれと文句を言うアレイズが、珍しい事だ。

胸中で呟き溜息をつくと、ふと漆黒の双眸がこちらを向いている事に気付く。気遣わしげな視線に自分のそれを絡めるように顔を上げると、アレイズは僅かな逡巡の後で言い放った。

「まだ、力は戻らないか？」
「？　……うん。もうそろそろ戻ってもいいと思うんだけど」
視線同様、本当に気遣ってくれていたのだろう。そうと分かる声に頷くと、アレイズは目を伏せた。
答えたのは別に心配を掛けたくて言った言葉ではなく事実だった。首は僅かに動かせるし頑張れば立つ事だって出来る。ただ歩いて城から出られるかと言われれば甚だ疑問だったから。
何より兵士が多くいる城内で剣を奮って魔法を使って脱出するだけの力は今のティファにはなかった。元来好戦的な性格なわけではないが、それでも自分で戦うことの出来ないことへの悔しさに歯噛みすることになろうとはティファとて予想だにしていなかった。あの場から出られたのは、純粋にイオとアレイズの助けがあったからこそだ。
そこでふと疑問が浮かび、ティファは長い睫毛がぴくりとも動かされる事なく閉じたままのアレイズの瞼を見つめたまま尋ねる。
「ところで、何で私がここにいること分かったの？」
問いにアレイズが目を開ける。漆黒の双眸がティファの瞳を見据え、ティファを抱き抱える腕に力が込められた。
「お前が兵士と一緒に歩いているのを見たという話を宿の人間から聞いたんだ」
あぁ、なるほど。
確かにあの場所は人通りが多かったのだし、少しの間待ち続けていたのだから誰かに見られていたとしても不思議な話ではない。宿屋の人間じゃなかったとしても、あの場を歩いていた人間なら気付いたかもしれないのだから。
他の人間ならいざ知れず、兵士と共に歩いていたのは空色という稀有な毛色を持つ人間だ。これ以上に目立つ人間などそう居はしない。
納得し、小さく頷くとアレイズが深々と息を吐く。熱い息が柔らかく前髪を撫で、ティファはなぜだかとてもくすぐったい気持ちに

なっていた。
「俺はてっきりお前が器物破損で捕まっていたと思ったんだがな。……とんだ思い違いだった」
「器物破損なんてするわけないでしょう？　失礼ね」
無論建物を何度か壊したことはあるけど、世間一般ではそういうのを器物破損って言う事も知ってるけど、それでも自分は基本的に人畜無害だ。
そんな考えが伝わったわけではないだろうが、アレイズはティファの言葉に初めて笑い声を上げた。
「はは！　確かに今回は何も壊してないみたいだな」
そして、とにかくと続けられる。
「それでお前に事情を聞こうと王城の前にいたらお前の声が聞こえたんだ。指輪が知らせてくれたんだろうな」
――指輪？
もしかして、あの祈りが通じたの？
びくりと体が震え、驚きに頬が紅潮する。祈りが届いた、通じた。ただそれだけの事なのに、ティファは冷静ではいられなくなってしまった。
震える手を握りしめ悟られないようにしていると、アレイズがティファの顔を覗き込みながら不意に真面目な顔をする。
「まだ力は戻らないか？」
強ばっているものとは違う硬さに、一体どうしたのか尋ねようとするとアレイズは先程と同じ事を問う。
だからティファは意味が分からないながらももう一度頷き口を開こうとして、アレイズの顔が眼前にある事に気が付いた。
否、顔が近いだけなら抱き抱えられているのだから当然だ、しかしそれだけじゃない。
「！？　んん……」
柔らかな感触が唇に当たる。微かに乾いたその感触は何故だか酷く懐かしくて、そのくせティファの思考を全てまっさらにするだけ

の攻撃力を持っており、彼女は拒否することも文句を言うこともできないままただその熱が離れるまでそっと瞼を閉じることにした。

そうして唇から温かさが消えた時、瞼を開いたティファの眼前にはやはりアレイズの顔があった。

離れているわけではなく、先程とほぼ変わらない距離で傍に在る顔にティファは頬が紅潮していくのを止めることができない。否、まともに顔を見ることさえできないのだ。

頭が真っ白になって、それどころではない。

「こ、これで力は戻ったか？」

もしかしたらアレイズも同じ気持ちだったのかもしれない。

偉そうな物言いではあるもののその声は上ずっていて、加えてわざとらしい咳払いまで付いている。

だが、とティファは考える。確かに問われるままに確認してみれば、体の節々の痛みも全て綺麗に取れている。腕を動かすことも指輪から与えられる魔力も元通りだ。

「な、何で？」

唐突に回復したそれに目を見張ると、アレイズは安堵の息をついてから答えた。

「契約のし直しだ」

「契約のし直し？　でも私――」

アレイズとの契約に必要なのは指輪と口づけ。しかしそのどれもが奪われてなどいないし、もし奪われたとしたらそれはアレイズの方ではないのだろうか。

……もしかしてアレイズが誰かとキスしたということ？

内心で在らぬ疑いを持ちそうになり、ティファは慌てて否定をした。いくら何でもそれは都合が良すぎる。あの場、謁見の間で唐突にそんな事が起きるわけがない。第一それが原因でティファが囚えられたのならばアレイズは真っ先に謝罪の言葉を口にするだろう。

それがないということは別の理由があるのか。

そう考え、自分でも意味の分からぬ安堵を感じているとアレイズ

が続ける。
「もちろん契約が切れたわけじゃない。ただ、弱められていたんだ。だから指輪が使えなかったし、突然契約が弱まった衝撃で体に力が入らなくなったんだろう。どれだけ気を遣った所で契約は契約者の体に知らず知らずのうちに負荷を与えてしまうからな」
原理は分からないがな、そう言ってアレイズは黙り込んでしまった。同じようにティファも口を閉ざしながら、だからあんな事をと胸中で呟いた。いきなりキスされたから何事かと思ってしまった。
ちらりとアレイズを盗み見ると、彼は何か思う所でもあるのか真剣な表情でここではないどこかを見据えている。
その態度には自分を意識している様子など全く見受けられず、ティファは知らず溜息を漏らしてしまった。
アレイズは何とも思っていないのかもしれないが、ティファは彼の顔さえろくに見られぬ程意識しているというのに。
……しかしそれもこれも、あっさり捕まってしまった自分のせいだ。
だからアレイズに謝ることをしても怒ることはしてはいけない。そう考えたティファがまだアレイズに礼を言っていなかった事を思い出し口を開くと、それに先んじてアレイズが低い声を発した。精悍な顔立ちが辛そうに歪み、放たれた声が微かに震えているように聞こえる。
「すまない」
「……え？」
だがそのような顔をされる理由が分からず、ティファは困惑混じりにアレイズの顔を見上げる。その細腕でどうやってと思うほど軽々とティファを抱き抱えたままのアレイズは、かと言ってそれに対して疲労を感じたわけではなく何か別の何かに疲れたように眉間に皺を寄せた。
漆黒の双眸と視線が絡み合う。真っ直ぐな視線は掠れたような熱をも孕んでいて、ティファは知らず鼓動が高鳴るのを否応なしに自

覚する羽目になった。
こんな時に一体何を、と思わないでもない。しかしどう頑張っても鼓動は穏やかにならなかった。
その間にもアレイズが言葉を紡ぐ。低く静謐なそれは闇に溶けるようにそっとティファの脳に染み込んだ。
「お前と別行動をとったせいで、危険な目に遭わせてしまった。――本当にすまない」
「……ジュード」
あぁ、それでこんなに疲れた顔を。
アレイズの言葉に高なる鼓動が一気に吹き飛んでいく。当たり前だ、自分の契約神がこんな顔をしているのに一人ときめいていられるほどティファは図太くはなかった。
彼は疲労感と共に、痛みを感じているような顔をしていた。それこそ、少しでもつつけば泣いてしまうのではないかと思うほどに。
先程唇に触れた熱が今度は額に触れる。くすぐるような、触れているのか触れていないのかよく分からない感触に目を閉じそうになるとアレイズの囁き声が耳朶を打った。
「これから先、俺は決してお前を一人にしたりしない。……例え、ピコがお前を守るとしても」
決意を込めた言葉の後に、沈黙が降って落ちる。
愛おしむような唇の感触に鼓動が再び高まるのを感じながら、ティファは無理矢理に笑みを浮かべた。そうしなければ鼓動が伝わってしまいそうで怖かったせいだ。
それに、今回の件でアレイズに非などないのだ。
「今回はどう考えても私のせいよ。だからアレイズが気にすることなんてないわ」
もう動かすのに何の不便もない腕を伸ばし、暗がりの中で何とか彼の黒い髪を探して撫でる。闇に溶け込みそうなそれは触れるととても柔らかくて、温度のないはずのそれに心が温かくなった。
くすりと笑みを零すと、宵闇の中でも分かるほどに彼の頬が赤く

染まるのが分かる。この分なら、先程自分が顔を真赤にしていたこともばれているのだろう。そう思うと恥ずかしくて再びアレイズの顔を見られなくなりそうだったが、今は彼も同じ顔をしているのだと思うと顔を逸らすのが惜しい気がした。

あぁ、なんだ。アレイズも同じように恥ずかしがっていたのか。それが分かったから、もう顔を逸らす気にはなれなかった。

一体何をしているのだろうか、自分達は。そう考えると可笑しさがこみ上げてきて、ティファは口元に手を当てて笑いの衝動を必死に堪えた。無論その程度で誤魔化しが効くわけもなく、結局は忍び笑いが漏れてしまうのだが。

「行くぞ！」

それさえも恥ずかしかったのか、アレイズは顔を背けながら歩くのを再開してしまう。結局このまま何処に向かうのかを考えていないのに、いいのだろうか？

それに自分はもう力を取り戻しているのだから、下ろしてくれてもいいのだが。

ティファは進むアレイズを見上げながらそう胸中で呟いたが、口にはせずにおいた。

胸に手の平を押し当てると、そこから言いようの無い温もりが溢れてくる。それが愛おしいから今はこのままでいたかった。

――七年前のあの日、どれだけ願ってもそれを叶えてくれる神様はいなかったけど。

それでも今の自分には祈りを聞いて、ちゃんと傍に来てくれる神がいる。それが嬉しくて、ティファはイオにも早く礼を言わなくてはと考えながらアレイズの胸に頬を寄せた。

微かに汗の匂いがする。急いで駆けてきてくれたのだと、口にされずとも理解できた。

「……助けてくれてありがとう」

呟くとアレイズが少しだけ固まった気がしたが、それに対して笑ったりはしなかった。

そして礼以外の気持ちを告げたりもしなかった。
他の誰でもなくイオとジュードという神が来てくれた事が嬉しかったこともこの胸にある暖かい気持ちも、言うべき事はあった。
だが、今はただ何も言わずにアレイズが歩く度に揺れる体に心地良さを感じながら気持ちを噛みしめていたかったから、ティファは何も言わずに目を閉じて夜の空気を吸い込んでいた。

◇　◇　◇

ティファを契約をし直してから、アレイズは妙な気恥ずかしさが胸に居座っているのを感じていた。
とはいえそれを表に出すことなどできず、無理矢理に大股で歩いているとその体をティファの声が響かせる。
「……助けてくれてありがとう」
静かな声にアレイズは視線を落としティファを見据える。そうしてそこに見える表情に一瞬だけ動きを止めてしまった。
空から溢れる月光に照らされたティファの顔は、今までに見たどの顔よりも穏やかで綺麗だった。
昼日中の空の色が一番似合うはずの色を持つ癖に、月明かりの静謐さも似合うのだと思わされるほどに。
が、アレイズはそれさえも口には出せないまま再び熱くなる頬を背けて前へと進んだ。行くべき場所など分からないが、今はただ二人でこうしていたかった。
ティファも同じ事を考えているのか、彼女は何も言わずに静かに胸元に体を預ける。人一人分の重みが酷く温かく感じられて、アレイズは腕に力を入れながら更に体が触れ合うようにとティファを抱き寄せた。
体に触れる温もりが増すのを感じながら、ようやく理解する。
あぁ、何だ。これが答えだったのか、と。
理性とか常識とかそれしかないという固定観念とか、こうしなけ

ればならないという使命感とか。
そんなものよりも大切なものはいつだって目の前にあったのだ。
信頼を寄せてくれているから、自分を信じてくれているから。そんな理由はどうでも良い事だった。
ただ自分にとって、今この腕の中にいる少女こそが大切な存在でそれは世界と同等かそれ以上の存在だったから犠牲にしたくはないのだと、そんな単純な答えにアレイズはようやく気が付いた。
理屈で何故なのかと考えれば恐らく首を傾げてそれこそ何日でも悩むだろう。自分にとって世界はかけがえのない友人であり、必ず会わなくてはならない存在。だというのにそれ以上の存在がいることに疑問を抱いてしまうのは致し方ない事だった。
が、感情論で言えば今胸にある結論こそが全てなのだ。
そう結論づけてしまえば後は簡単で、アレイズはすとんと胸に何かが落ちた気がして酷くさっぱりとした気分になりながら幾分か軽くなった足取りで歩を進めた。
出来得る限り静かに歩く中でティファの身が揺れる。その度に触れる熱と穏やかに目を閉じるティファの横顔に笑いかけ、胸中で呟いた。
――あぁ、きっとこれが幸せなのだと。

第二十九話

二人とも自分の世界に入りながら歩いていたせいだろう。
間が抜けているとしか言いようがないが、あまりにのんびりと歩きすぎていたせいですぐに兵士達に追いつかれてしまった。
「ジュード」
「あぁ」
ティファに名を呼ばれ彼女を下ろすと、腕から重みが消えていく。しかしそれを惜しいと感じる間もなく、アレイズは兵士に向かって歩いていくティファを慌てて止める羽目になった。
「ティファ！？」
しかし声を掛けても彼女は止まらず、自分が望んだであろう場所で立ち止まる。そうして泥のついたスカートを払うこともせずに前を向き、兵ではない別の人影を見据えていた。ダークブルーの双眸に、眼鏡を掛けた切れ長の双眸を持つ男が映り込むのが見える。
王子フランベルジェだ。
「ティファニエンド……」
ティファの視線に気付いた王子は片眉を上げて怪訝そうな顔をしながらも、すぐに微笑を浮かべて呟く。
流石、彼女のようなじゃじゃ馬を妃にと望んだだけあってこれしきの事では怒声を上げる気にはなれないらしい。裏を返せばそれだけ情が深いということでもあり、アレイズはやはり一発ぐらい殴っておけばよかったかと考えるものの、ティファに危害を加える気がないのが分かっているため何も言えない。
下手に文句を言って敵意を持たれようものなら、それこそ面倒の始まりだ。
「……フラン」
黙ったままティファを見ていると、彼女は少し悲しげに呟きながら更に歩を進める。草を踏みしめ、踊るように軽やかに前に進む姿

は体調が完全に良くなったことを示していたが今はそれに安堵している場合ではなかった。
王子の前まで歩いていったティファは、そこより数歩離れた場所で立ち止まる。
左右に避けた兵士達と間に立つ形になったティファは、少しでも彼等が剣を抜こうものならすぐに身を斬られる事になるだろう。しかしそんな危険な場所に立っていてなおティファは臆することなく前を見据える。伸ばされた背筋は王子よりも真っ直ぐで、誰もりも堂々としていた。
ダークブルーの双眸に見据えられ、微かに王子が顔を赤くする。血色の悪い顔が微かにまともな色を放つのを見ていると、彼は鳶色の瞳でアレイズをちらと一瞥した。
「その男が、父が望む神か？」
王からアレイズの風貌は聞かされていたのか、王子はほぼ迷いのない口調で問う。その声からは王子が聡明な性格である事が伝わってくる。……だからといって頷いてやる義理はないので黙っているが。
ティファは王子の問いに対し、返答すべきか否か迷っているようだったがそれも一瞬の事だった。
「はい」
即座の首肯に、フランが目を見張る。
「私は契約神と共に行かねばなりません。ですから、貴方の妻になることはできませんし契約神を王に渡すつもりもありません」
きっぱりとした声だった。
――いや、それ以前に契約神を王に渡さないというのは一体どういうことだ。
契約者と契約神の力を削ぐ事が得意な人間がいるとイオは話していたが、それに関係しているのだろうか。この件が終わったらティファにその話も聞かなくてはならないと感じたアレイズは顎に手を当てながら彼女の横顔を見ていた。

若干申し訳なさそうな横顔は、何かを王子に気付いてほしそうな顔にも見えた。

そしてそれこそがティファの最大の温情であり、友愛に近い何かなのではないかとも。

彼女が何を気付いてほしくて、何を願っているのかはアレイズには分からない。ただ、怯えた王子の瞳から目を逸らさないティファの真っ直ぐな顔にアレイズは胸を撫で下ろす。彼女に先に出会ったのが自分で良かったと。

沈黙が辺りを支配する。はっきりとした言葉に兵士が剣の柄に手を伸ばすが、それは王子自身が片手を上げて制した。

「……そうか」

唇が開かれ、震える声が耳朶を打つ。しかしやはり怒りを感じさせない声に、ティファはもう一度深く首肯した。

そのまま踵を返し、アレイズの隣に並ぶ。

「では、失礼致します」

清々しい態度というにはあまりに後味の悪い結末だと感じながら、悲しげに顔に手を当てる王子を見つめる。だがすぐに見ていられなくなり、空を見上げながら歩を進める。走りだすでもなく緩慢な動きはしかし剣を抜こうものならすぐに反撃するという意志も籠めている。

見上げた空に空が瞬く。もうそんなに夜が更けたのかと感じた時、ふと気に掛かることがあり足を止めた。

柔らかな土を踏みしめたまま王子に向き直る。

するとティファは訝しがるようにこちらを見上げたが、今は黙っていてもらおうと口元に人差し指を押し当てて静かにと伝える。そうして付かず離れずの距離でアレイズは王子に問うた。

「王子。お前は王が神器を盗もうとしていたという話を耳にした事はあるか？」

「いきなり何だ……？」

聖夜祭の神器はグラドが奪おうとしていたという話だった。

加えて、契約神を狙う王。本当ならば別の人間が狙っているのかもしれないと考えはしたものの、ティファの話を聞く限り王が神器を盗もうとしていたという話でまず間違いないだろう。いくら人間が愚かでも、そんなに多くの人間が一度に神に関わる物を集めたがるわけがない。

低音が発する問いに王子が戸惑うように声を漏らす。しかし先程剣先を向けられたのが聞いているのか、彼は腰に手を当て威厳らしきものを保とうとしながら目尻を吊り上げた。

「盗もうとしていたわけではないだろうが、最近父上が神器を集めたいと話していたのは覚えている」

「……そうか」

ならばやはり犯人は王か。

「ねぇ、何の話なの？」

胸中で独りごちると事情を知らないティファが口を挟むが、今それを口にしたら何が起こるか分からない。

「何でもない」

そう考えたアレイズは小さく首を振ってそのまま踵を返す事にした。

その背に、何なのよと言う小さな声がぶつかるが、これ以上王城に被害を出さない為にはこれしかないから諦めてくれとしか思えなかった。

兵士が身動ぎし、硬質な音がささやかに響く。

しかしそれはアレイズ達に剣を向けることなく動きを止め、すぐに彼等はすぐに王の元へと戻っていった。反対方向に動いていく気配に安堵の息を吐くと、再びティファの声が耳朶を打つ。

「だから、さっき何話してたの？　って聞いてるのよ」

「何でもないと言っているだろう」

微かに低いその声は本気ではない怒りを籠めてアレイズにぶつけられるが、勝気そうな瞳が照れ隠しに細められている事をアレイズは知っていたので同じように軽口で答える。

そうしてしばし誰もいない通路を歩いていると先程の甘やかさは欠片も無くなってしまったが、お互いこの方が良かったのだろうと結論付ける。

結局、いつも通りにしているのが一番楽なのだ、お互い。

ティファとて、今の話の流れから銀の聖杯を奪ったのが誰なのかは見当がついてしまったのだろう。だからこそアレイズに問い質しているのだろうが、ここで喧嘩になりたくないという気持ちが無理矢理聞き出すことを避けているようでもあった。

幸いなことだと思う。

もしアレイズが事実を伝えてしまおうものなら、ただでさえ消滅した城壁が更に失われてしまう事は確実だから。

そうして方向音痴のティファを伴って門へと向かいながらじゃれ合うような応酬を続けるも、その間で倒れた兵士や剣を向ける兵士が一人もいない事に気が付いた。それどころか、まるでティファ達が出ていくことを容認するような閑散振りなのだ。

――まさか、王子がこれを？

確かに彼はティファを傷つけたくない一心だったのだろうからそれぐらいしてもおかしくはないが、それにしても行動が早すぎないだろうか。

そう感じていると門が見えてくる。そこでティファがアレイズの服の裾を掴んだので何事かと彼女が指差す方向を見て、そして固まってしまった。

あぁ、なるほどと胸中で呟く。道理で兵士がいないわけだ。

◇　◇　◇

王城門付近は、来た時とは打って変わって清潔感を欠いていた。

「何だ、これは」

「分からないわ。……まさか本当に領民の蜂起とか、じゃないわよね？」

煉瓦と煉瓦の間の溝まで綺麗に掃除されていたと思われる赤茶けた道は今や紅に染まり、暗がりでも分かるほどの血色がティファの目に映った。むせ返るような鉄臭さに手の平で顔を覆う。だがその程度で誤魔化せるわけもなく、ティファは今が空腹状態で良かったと思いながらも嘔吐感に耐えていた。

目を凝らして血の発生源を探すと、城内同様折り重なるように兵士達が倒れているのが見える。彼等は銀の鎧をへこませ、中には鎧の身についていない部分から血を流しながら昏倒しているようだった。幸い死者はいないようだが、軽症とも言い難い。

助けてくれ、とささやかな声と痛みに呻く声が宵闇に響きあう。それは明らかに城内よりも凄惨な状況で、ティファはアレイズの問いに首を振りながら思考を巡らせた。

自分で口にしたものの、恐らくこれは領民の蜂起などではないだろう。誰も死んでいないのだから、まず間違いはない。

怒りは狂気に染まり、狂気は伝染していく。そして伝染した狂気で武器を持った領民達がもし本当にいるのならば、兵士達は生きているはずがないのだから。しかし、それなら一体誰が……城内に特攻をかけたイオとアレイズは既にこちらにいるのだし、第一彼等とて驚いているような状況なのだからまず間違いなく彼等の仕業ではない。

次から次へと襲い来る困惑にティファが眉を顰めると、血の色が更に濃くなる。

また犠牲者が出たのだと確信した瞬間、ティファは一も二もなくその方角へと駆け出した。点々と、煉瓦を血が滴り落ちた跡が残されている。それは次第に新しいものになり、まだ染み込んだばかりの血を見つけた所で止まっていた。

「ここは？」

「……何となく誰か分かった気がするんだが」

門をくぐり、少し走った先に見える深い闇。裏路地を示す細い道をじっと見据えると、確かにそこから血臭が漂っている事が分かっ

た。

しかし一体どうしてこんな所にいるのだろうか？　不審に思い呟くと、アレイズはこの場所に覚えがあるらしく眉を顰めながら盛大に溜息を漏らす。

……誰だか分かった？

「アレイズ、それって一体――」

「「ティファ様！」」

もしかして彼には犯人に心当たりがあるのだろうか？

だとしたら今すぐにでも止めてもらわないと、そう考え渋い顔で問うティファの声は遮られた。高く、伸びやかな声にはっと息を呑むと二つの足音が水音を踏みつけながらこちらに向かって来る。同時に迫る血臭に目を見開き路地に目を凝らすと、月光に照らされたほっそりとした影が眼前に現れた。

二つの影は、鮮血を身に纏っていた。

一人は亜麻色のセミロングの先とエプロンを真っ赤に染め、スカートの裾を破ったのか今や膝上になってしまった深青のメイド服を着た少女。

もう一人は、同じ色の髪を頭の上辺りで二つに束ね、真紅のメイド服を更に鮮やかに染め上げた少女。

常ならば同じ顔をしながらもどこか風貌の違う少女達はしかし、自分達の個性を鮮血に染め上げて今や見分けのつかない状態となっていた。

髪の先に彼女達のものではない血を滴らせながら、ティファとアレイズを見た二人は理知的であり天真爛漫でもある表情を同じ笑みに変える。口の端が柔らかく吊り上がり、安堵を刻む。しかしその表情はこの場にはとても似つかわしくなく、それ故に凄惨に見えた。

ティファに血が付かないよう今度はそっと近づく二人に、震える声を漏らす。

「メイ……マイ」

鼓動さえもが震える中、ティファはようやく理解した。この血が

何故流れてしまったのかを。
　周囲を見渡し、視界の悪い中何とか被害を確認する。路地の中で倒れ伏す銀光は呻き声を発し、まだ誰も死んでいない事を示している。ただ、このまま放っておいたら出血多量でいつかは死に絶えてしまうだろうという確信はあった。
　マイならばこの惨状に納得が出来るが、メイまでもがこんな事を。
　ティファは瞠目し、兵士達の手当をしなければと考えながら溜息混じりにメイ達に視線を向けた。すると彼女達は戦いの興奮が冷めないのかやはりにこやかな顔のまま小さく笑う。
「良かった……。兵士を引きつけておいた甲斐がありました」
「アレイズさんったら考えなしにいきなり城に行っちゃうから、二人が逃げられるか心配だったんですから！」
「その科白はお前の姉に言ってやれ……」
　げんなりとした横顔を見せるアレイズの前には、モーニングスターの先をだらりと下ろしたマイとリングリングという武器を持ったメイが立っていた。血が流れたのはリングリングの影響か。リングリングとは鋭利な刃を外側に向けて作られた円形の武器で、メイが最も好む武器の一つ。上手く投げれば相手を斬りつけつつ自分の手元に戻す事が可能なその武器は、見た目からして殺傷能力は抜群だ。
　それだけ、メイ達が必死だったのだと感じながらもやはりティファは納得が行かなかった。
　大聖堂で過ごし始めてからすぐに武器を持って戦う術を求めたメイ達に、最終的に許可を出したのはティファ自身だ。しかしそれは保身の為であり誰かを傷つけるためであって欲しくはなかったというのに。
　これが盗賊だったら納得は出来る……やりすぎではあるが。
　ただ、彼等は王の命に従っていただけの存在だ。王を止められない彼等に非が全くないかと言われれば答えは否だが、神を得ようなどという狂気に染まった王を止める事など並大抵の事ではできないだろう。それこそ、革命のような流れでもない限り。そしてこの国

に革命は起こらない。豊かで安寧をもたらされている国で革命など起きようはずがないのだから。

「二人とも」

アレイズの盛大な溜息を尻目に、真っ直ぐな声を放つ。

手の平をぎゅっと握り締めると、メイとマイはすぐにティファの様子が尋常ではないことに気付き背筋を伸ばした。

「「はい」」

血が滴る武器を下ろさず、亜麻色の瞳が向けられる。

何の後悔も痛みも感じていない視線に、自分の方が痛みを感じてしまった。

「今回の件は、私の判断ミスよ。だから皆に迷惑を掛けて本当に悪かったと思ってる」

「……」

「だけど、こんな事はもう二度としないで」

メイとマイはティファに仕えるメイドであり、それ以上でもそれ以下でもない。だからこそ他の人間を助けるぐらいならば主が救われる道を選ぶだろうし、自分達の手が他人の血で濡れた所で主が救えるのなら気にも止めないだろう。だが、そうあってほしくはなかった。

護ってもらえる事に感謝はするし、心配を掛けて申し訳ないとも思う。

そう思い言う勇気がなかなか出なかったのだが、今ここで言わなければきっとずっと言えないだろうからとティファは顔を上げて息を吸い込む。そうして黙り込んだままの双子に向けて強い口調で言い放った。

主として、幼馴染として、親友として。

これ以上彼女達が血を流す事を許す訳にはいかなかった。元とはいえティファはレイニウム大聖堂の聖女。そしてレイニウム大聖堂は神の名の下に争いを仲裁する役割を持っている。その大聖堂の傘下にいた人間が自ら血を流す事があってはならない……悪事を働い

た人間は除いて。
「今後、私の許可無く悪事を働いた当人以外を傷つける事、または保身以外で武器を振るう事を禁じます。これは命令よ」
例えば目の前で子供が襲われそうになっていたら、それを助ける事は罪にはならないだろう。その子供自体が罪を犯していない限りは。
例えば自分が襲われそうになっていたら、武器を振るうことは罪にはならないだろう。殺したりしない限りは。
だが、今回の件のように大多数の兵士を傷つけるような真似をする事を許すわけにはいかなかった。メイやマイにとっては彼等も悪人なのだろうが、客観的に見たら彼等はただ命じられただけの忠実な兵士に過ぎないのだから。
「こんな風に無闇に人の血を流させるために戦って欲しかったわけじゃないわ」
命令などというこうやって堂々と使ったのは、これが初めてかもしれない。
罪悪感に近い思いに胸が痛み、顔を顰めると彼女達は血で濡れた煉瓦に膝をつけた。そのまま深く頭を下げる。
「「承知致しました」」
揃った声が真っ直ぐに耳を打つ。そう、こんな風に壁を作ることが嫌で命令なんてしなかったというのに。
――そう考えていた矢先だった。
「……なんて言うと思いましたか」
常ならば穏やかに放たれるはずの声が、低く響く。
え？　と呆けた声で呟くとセミロングの影が顔を上げる。
理知的な光を宿した亜麻色の瞳が月光に照らされ、血色さえもが霞んで見えた。
「血が流れる事をティファ様が厭うのなら、決して血は流させません」
「マイ――」

ですが、血が流れないだけです。そんな声が続く。
「相手が血を吐きそうになるのなら、血を吐いたら殺すと脅してでも避けましょう。刃物は使わず、鈍器で優しく殴りつけて血が吹き出すことを避けましょう。でも私は相手を傷つける事は止めません」
怖いぐらいに真剣な表情がティファを射抜く。その声に口を噤むと、隣に並ぶツインテールの影がゆっくりと顔を上げた。
明るく笑んでいた表情が姉と同じ色に染まる。
あぁ、こんな顔もできるんだと感じているとメイが言葉を引き継いだ。
「私達はティファ様のメイドだから、命令って言われたら絶対に守りたいって思ってるんだよ。でも、同じような状況になったら私と姉さんはまた同じ事をするんだと思う」
そうして手に持っていたリングリングを前に突き出す。かん、と高い音がして刃物同士が重なり合った。
「武器が駄目なら必要に応じて変えるけど、でもこの手が誰かを倒す事は止めない。私と姉さんが欲しかったのは悪人を倒す力じゃなくて自分達やティファ様を守る力なんだから」
それは、相手が善良かどうかなんて関係ないのだと告げているのだろう。
……一体、それだけの覚悟を二人はいつ決めていたのだろうか。そんな考えが頭を過ぎる。そして自分はその覚悟に気付かぬまま安穏と時を過ごしてしまったのかとも。だとすればやはり、全ての責任は主で在る自分にある。
そっと手を伸ばし、リングリングに指先を触れさせる。当たり所が悪ければすぐにでも血が流れるそれを慣れた手つきで撫でると、外に向いていた刃先が内側へとくるりと回った。
「ティファ様？」
「これなら血は流れないわ」
武器の性質を熟知していないと分からない、そんな特殊な場所を撫でて刃先を逆方向へと向けるとリングリングはただの鈍器へと変

わった。扱う人間には少し危なくなるが、それを気にする程度の覚悟ではないのだろう。第一扱い慣れた武器なのだから誤って持ち手部分以外の場所に触れることもないだろうし。

ふぅ、と溜息を漏らしながら今度はマイのモーニングスターを指差す。よく手入れされているそれは鋭い棘がついており、刺さったら被害が大きいことは確実だった。

「それはもう少し棘を丸くするか、別の武器を使えばいいわ」

どんな武器を使った所で相手に被害が大きいことに変わりはないが、出血多量にならないだけまだましだろう。ティファは無理矢理自分を納得させ、それから胸中で呟く。

そう、もうこんな事はこれきりにするの。

だから――。

「アレイズ」

「どうした？」

闇に溶ける瞳を見据えると、アレイズが不思議そうに片眉を上げる。まさか自分に話が振られるとは思っていなかったのだろう。何を言われるのか分からないとその顔が告げている。

黙って続きを待つ瞳をじっと見つめると、アレイズは些か居心地悪そうにするが気にせず続けた。

紡ぐ言葉は出来れば口にしたくなかった、自分にとって屈辱的でもある言葉だ。

それでも言わずにはいられなかった。

涼やかな声が解き放たれ、真剣味のある言葉が空気を満たす。

「私を守って。私のメイドがこれ以上無茶な事をしないように」

それは、神に願うにはあまりに不遜すぎるなのだと思う。だがアレイズは先程言っていたではないか、決して離れはしないと。例えイオが傍で自分を守るとしても、だ。ならば願ってもいいのではないかと、自意識過剰な気持ちが顔を覗かせる。しかしそれは落胆にも苦笑にも変わることはなかった。

「元よりそのつもりだ」

ゆっくりと言い含めるようにアレイズの声が耳朶を打つ。
低いそれは堂とした響きを持ち、何を今更と言っているようでもあった。自分の考えは自意識過剰ではないのだと暗に言われたような気がして、口元を緩める。するとアレイズは苦笑じみた笑みを浮かべながら手を伸ばし――。
「こ、今度は何!?」
突如として眼前が明るくなったせいでその手は届かないまま下ろされた。
閃光に目が眩んだ四人は手の平で顔を覆うが、それでも視界は灼かれ続ける。困惑混じりの怒声を放つと、閃光が収束し眼前に金髪碧眼の青年が現れた。
柔らかそうな金糸は夜にも染まらず、碧眼だけが暗く四人を見据えている。貴族の子息もかくやといったような良質のシャツから花の香りがした。
イオ、と唇を動かすと彼はティファを見つけてあからさまに安堵の息を漏らす。
が、それも束の間。彼は何事もないといった顔をしながらも片手を上げ、それを勢い良く振り下ろした。
その刹那、氷の礫が顕現し真っ直ぐに飛んでいく。ティファではなく、アレイズの元へ。
「がっ!」
「アレイズ!?」
命中率の精度は完璧らしく、狙い澄ましたようにアレイズの額に命中した氷の礫は彼の体温で緩やかに溶けていく。しかし問題は氷よりもアレイズだ、かなり大きめの氷の礫だったせいかのけぞる体躯を見てティファが声を上げて手を伸ばすとその手をイオに掴まれた。
氷の魔法は体温をも下げるのか、若干ひんやりとした指先が触れる。
「あんな奴の事は気にしなくていいよ」

そのままやんわりと握られた手にアレイズを一瞥すると、幸い大した怪我ではないらしくアレイズは痛みに呻きながらも血は流していない。

「イオ……よかった、無事だったのね？」

アレイズが無事だったからイオが無事だったからか、自分ですら判断が出来ないがとにかく胸を撫で下ろす。

「うん。心配してくれたんだ」

そして触れる手を握り返すと、イオは嬉しそうに口元を緩めた。甘やかな顔立ちに相応しい糖度の高い笑みを浮かべる。まだ幼さの残る無邪気な笑みはそのままティファに近づこうとするが、寸前でのけぞる。

「おっと」

小さく呟きながら身を引くイオとティファの間を炎が通り抜けて行く。

何事かと炎の発生源を見やると、アレイズが手を突き出して舌打ちをしているのが見える。どうやら腹いせに放ったらしい。

……何て仲の悪い。

ティファはこめかみに手を当てて呆れ混じりの溜息を漏らす。そうして文句を言うついでにアレイズの手当をしようと考えたのだが、それもイオに阻止される。だからティファは早々に諦め、手当をメイとマイに任せる事にした。

亜麻色の瞳に視線を走らせると、二人はすぐにアレイズの傍に寄る。

「大丈夫？」

そうしてメイがハンカチを差し出すと、アレイズはそれを受け取ながら額を押さえた。つうっと頬を水滴が落ちて行く。氷が完全に水になってしまったのだと感じていると、氷がぶつかったせいか凍傷なのか額が真っ赤になっているのが見えた。

「あらあら、大変だわ」

それをマイも見て取ったのだろう。彼女は慌てて救急セットを取

り出し、赤くなった額を手当していた。
　無論それも魔法で治せばすぐなのだが、激しているせいかアレイズにそういった考えはないらしい。こういう所も人間らしいというか何と言うか。
　はぁ、と大仰に溜息を漏らしイオに向き直る。すると彼がざまあみろと言わんばかりにアレイズを見ているので、ティファは自身の手を掴む指先を振り払って彼を叱りつけた。
「仲間に攻撃したら駄目じゃない！」
　路地一杯に反響するような声はしかしイオには届いていなかったようだ。
　彼は甘やかな顔に侮蔑を浮かべながらも、飄々とした態度でアレイズを見下ろす。
　冷ややかなソプラノが甘さを欠いた声で言葉を紡いだ。
「僕が初めにティファを助けに行ったのに、最後の最後で美味しいとこ取りしたのが悪いんだよ」
　そうして、天罰さと言ったイオにアレイズは色々と思い当たる節があるらしく文句を言う事ができなかったようだ。
　にやりと笑う口元に、唇を噛み締めながらアレイズがイオを睨みつける。しかしそこには殺気がなく、以前よりも随分穏やかな視線に見えた。そう、言うなれば悪友のような親しさがある。
　――これなら大丈夫かしら。
　今はまだこんな状態だけど、もしかしたらこの二人は仲良くなることが出来るかもしれない。
　そうなれば憎しみあうことも殺しあうこともなくなるのだ。イオを初めとした神々がアレイズにした事を許す気にはなれないが、それでも彼等が殺しあわずに済むのならそれに越したことは無かった。無論それは全てティファのエゴでしかないのだが、そう思わずにはいられなかった。
「ほら、喧嘩してないで早く逃げるわよ」
　とはいえこのままだといつか口論が起きてしまう事は火を見るよ

り明らかだ。
そう感じたティファは血臭がやや薄れた路地に背を向けた。
「「はい」」
「ちっ」
「命拾いしたね、アレイズ神」
すると事態を一応理解しているのであろう双子達が頷き、二神が舌打ちと揶揄を交えながら付いてくる。
ティファはそれを確認しながら前を向き、そして気付いてしまった。
湧き上がる噴水の下に明かりが見える。その明かりは街全体を覆うように広がり、まるで火事になっているようにも見えた。
「……困ったわね」
苦々しく顔を顰めながら呟く。火事に見える光が炎ではない事は嫌になるほど分かっていたからだ。
続いてティファを見つけるまで寝ずに探し続けるつもりであろう兵士の姿を想像し、眉間に皺を寄せる。
「そうだ」
するとティファの苦悩を見て取ったイオがぽんと手を打つ。そうしてティファの手を引くと、目的地を心得ていると言わんばかりにしっかりとした足取りで歩き出した。
「ちょっと、どこ行くの？」
「ゼルの所さ」
空いた手で兎のケージ――どこから出てきたのだろうか――を持ちながらイオはあっさりとそう答える。
それからぐるりとメイやマイを見て首を傾げた。
「これだけの人数を空間転移するには僕達は魔力を使いすぎてるし、大きな魔力反応に気付かれるかもしれないから歩くしかないんだけどね」
空間転移の魔法は、人数に応じて消費する魔力も変わってくる。
そして契約を弱める事ができるだけの知識を持ったグラドの人間な

らば、もしかしたらその魔力に気付くかもしれない。更に言えば、その行き先も。だからこそイオはそう提案したのだろうが、どの道このまま西地区に向かっても見つかることに変わりはないのではないだろうか。

否、アレイズやイオぐらいならば普通に歩いていてもさほど問題はないのだ。ただ、問題はティファ達だった。

只でさえティファの毛色は目立し、メイやマイは服装が分かりやすい。こちらは着替えればいいとしても、双子というだけでそれなりに目立つだろう。第一彼女達は体を洗わない限り血の匂いを取る事ができないのだから。

「なるべく見つからないようにしながら強行突破するしかないのね……」

「そういうこと」

空間転移による脱出が無理ならば、ゼルの教会に辿り着くまで目が覚めない程度に気絶をさせ即座にグラドを出る手助けをしてもらうしかない。

そう提案したイオに賛同し、ティファ達は隠密行動を諦めさっさと強行突破に及ぶ事にした。

こそこそするよりも、その方が遥かに楽だった。少なくともティファにとっては。

「まぁ元々訪ねる約束もしてたし、ゼルも気にしないはずだよ」

五人で兵士を昏倒させながら一路ゼルのいる西地区の教会へと向かう。その道中でイオがあっけらかんと言い放った。

本当ならばゼルやシスターに迷惑を掛けないためにもそこを訪れたくはなかったのだが、ゼルの友人であるイオが言うのなら本当に気にはされないのだろう。そう考え、結局は申し訳ないと思いつつも西地区を目指すと言う事で結論を固めてしまったティファは剣の柄を兵士の峰に当てながら思案する。

ゼルはきっと気にしないのだろうし、誰も神には手が出せないだろう。それは間違いない。

ただ、出来れば自分達が西地区を訪れた事が知られずに済めばいいとも思った。もし追いつかれてしまったら兵士は西地区に足を踏み入れるだろうが、あの場所には抜剣した兵士は相応しくないのだから。

ティファはイオから兎を入れたケージを預り、それを大事に抱えながら揺らさないよう慎重に運ぶ。いざとなればイオが兎の中に入ればいいのだから少々揺れた所でどうこうなりはしないだろうが、小動物に強い衝撃を与えるのは個人的に嫌だった。

――そういえば。

「ねぇ、イオ」

「ん？」

「人の姿になれるんなら、兎の体ってもう要らないんじゃない？」

何かを媒体にしなくても活動出来るのなら、それに越したことはないのではないか。

そうすれば兎だって晴れて自由の身なのだし。いや、兎が本体なのだからどの道体は必要か。

そう考えながらティファが尋ねると、イオは小首を傾げてから笑みを刻む。

「疲れるからもう少ししたらそこに戻るつもりなんだ」

「もう疲れただろう。だから早く兎に戻れ」

そういえば人の姿を取るのは疲れると言う話をしていた気がする。だというのに長々と疲れさせて申し訳ないと感じていると、一瞬だけアレイズがイオを労うように優しい声色で話しかけた後で即座に斬りつける。

……やっぱり仲が悪い。

不機嫌そうなアレイズに抗議の視線を送るが、それに彼が気付くより先にイオが含み笑いを漏らした。

「まだ戻れないよ。僕にはティファがアレイズに何かされそうになった時に守るっていう大事な役目があるんだからね」

何かって、何のことだろうか。

胸中で思わずそう白ばっくれてみせてから、ティファはかっと熱くなる頬を風に当て冷やそうとする。

するとアレイズも同じ行動を取ったらしく、お互いの方向に向けられた視線が絡み合って慌てて離された。

そうしてティファはアレイズとは違う方向を見つめながら、ふと思案する。

フランは気付いてくれただろうか。

彼は狂気など持っていないし、むしろ人を思いやれる人間だ。だからこそああもはっきり拒絶の意を伝えた事に気付いてくれただろうかと。

フランは将来、きっと良い王になるだろう。

しかし人の話を聞かない性格もあるから、今のうちにどうしても知っておいてもらいたかった。

自分が望む望まないとに関わらず、自分が人から望まれない事もあるのだと。世界中の誰もが自分を受け入れてくれるわけではないのだと。

でも、だからこそ自分を受け入れてくれる人を大切に出来るし受け入れてもらうための努力を怠らないのだと言う事を。

月を見上げる。ぽっかりと闇を丸く切り取る光を見据えて、ティファは小さく吐息した。

――グラドを照らす光は、まだ消えない。

第三十話

そうこうしながら何とかゼルが眠る西地区の教会へと辿り着くと、幸いにしてその場所には兵士がいないようだった。恐らくは神が眠る場所だからと配慮されたのだろうが、彼等にとってはそれが仇となってしまったようだ。

漆黒の扉を開き、月明かりにステンドグラスが照らし出される。荘厳なその光景を静かに扉を閉めながら見つめ、奥の扉へと向かうとその先には以前会った時よりも少しだけ小さな体躯の竜神が待っていた。

「おぉ、そろそろ来る頃だと思っておったぞ」

騒ぎがティファ達によるものだと気付いていたのか、呵呵と笑うゼルの姿にメイとマイが目を丸くする。そういえば二人は初めてだったかと感じていると、ゼルは待ちくたびれたのか一度大きく羽を伸ばした。黒に混じり合うように羽が辺り、境目が分からなくなる。白と黒のコントラストを為すステンドグラスの光があろうとも、彼の黒さは変わらないのだと感じながらティファは足を一歩前に踏み出した。そのままスカートの裾を掴んで頭を下げる。

服はすっかり泥まみれになってしまったが、作法に変わりはない。

「お久しぶりです、ゼル様」

「仕方ないから来たよ」

実際はほんの一日程度の事なのだが、随分久しぶりに会った気がすると思いそう口にするとイオが本当は嬉しいくせに可愛げのない事を言う。その証拠に口元が緩んでいたが、それを指摘する者がいないまま先にアレイズが軽く頭を下げた。

いつの間に知り合っていたのかは知らないが、ゼルも何てことなさそうに頷く所を見るとそれなりの仲なのだろう。

そう感じて一人納得していると、ゼルが口を開いた。

「それで？　何か用があるんじゃないのか？」

――もしかして全てお見通しなのかしら。

片眉を上げて問うゼルの姿に、ティファは思わずそんな事を考えながら頷きを返す。そうしてどこから話したものかと思案しながら、とりあえずゼルと別れた後の事から事細かに話してみることにした。

王城に呼ばれ、そこで力を奪われた事、イオ達が助けに来てくれたこと。

それらを話すと、ゼルは目を閉じて深く唸り声を上げた。

「そういうことじゃったか」

それから体躯には似合わない程のささやかな声でシスターと何やら話し込む。するとゼルの告げた事が気に食わなかったのかシスターは実に嫌そうな顔をして、眉根を寄せる。温厚そうな女性が一体何故怒っているのだろうかと感じていると、若干棘のある声がゼルに向けられた。しかし、何を言っているかまでは聞こえない。ゼルの声が聞こえないぐらいなのだから無理もないが、気になる事に変わりはない。

「何の話かしら」

「さぁ……」

イオに問い掛けると、彼にも分からないらしく首を傾げる。

ただあまり良い予感はしないらしく、イオは甘やかな顔立ちに渋みを一杯載せていた。

シスターはゼルを睨み上げ、何かを否定するように首を振っている。だがやがてゼルの決意が揺らがないと知るや否や、渋々ながらに頷いた。

「何の話だ?」

それに対し、もうそろそろいいだろうと考えたのかアレイズが尋ねる。

すると白と黒が織りなす空間に座すゼルが巨躯を折り曲げ、鱗に隠れそうな顔ににやりとした不敵な笑みを浮かべて告げた。

「儂も暇をしておっての、たまには運動をしようという訳じゃ。というわけで、ちょっと儂を外に連れて行ってくれんか?」

「ゼル様……」
それが何を告げているのか分からないわけではなかったが、あまりにも突拍子もない言葉に最初は何を言われているのか分からなかった。首を傾げる間もなく閃光が迸り、漆黒の巨躯が腕輪へと吸い込まれて行く。メイやマイがそれをぽかんと眺めていると、腕輪はまるで意志を持っているように震えて低い声を発した。
「それでは、儂を外に連れて行ってくれ」
「……はい」
その声はシスターに向けられたものらしく、彼女は渋面を崩すことなく恭しく腕を上げ腕輪を手の上に載せる。
そうして静かに教会の扉を開けると、もうこの辺りにも兵士達が配備されたらしく銀光が扉と扉の間にちらりと見える。だがシスターが一人夜中に出てきたぐらいで気にとめることはないらしく、ティファは自分の髪の色が見られないように注意しながら慌ててシスターを呼び戻そうとした。いくら安全とはいえ、こんな兵士の多い中一人で出て行く事が良策とは思えなかったからだ。
腕を伸ばし、修道服を掴もうとする。しかしそれは空を掴み、彼女はさっさと外に出て煉瓦を踏みしめると手の平の腕輪をそっと空に向けて掲げた。
宵闇に漆黒が掲げられる。本来ならばそれで全てが同化してしまうはずなのだが流石は神の宿る腕輪、夜に溶けるどころか夜を喰い荒らさん勢いで煌々とした光を放っていた。
「うわ……」
メイが呆けたような声を漏らす。釣られて腕輪を注視すると、閃光が迸った。
……まさかここで。
「ゼル様、まさかあんな所で！？」
「……みたいだね」
素っ頓狂な声を上げるティファに対し、イオが深々と溜息を漏らす。だが、いくら神とは言え街中にいきなり権限したら多人数の目

に付くだろう。ただ静かに眠る事を願っている神がいくら暇だからといってそんな事をしていいのだろうか。

閃光とは正反対の漆黒が顕現し、鱗を一つ一つ形成しながら竜の形を成す。

それは神というよりも、どちらかと言えば悪魔が生み出されているような光景にさえ見えた。兵士が一人、また一人と悲鳴を上げて散り散りになっていく。哀れなものだと感じていると、同じ事を思ったのかシスターが溜息を漏らすのが見えた。

恐らく彼女はこれを憂いていたのだろう。

はぁ、とこちらにまで聞こえてきそうな溜息が漏れ、しかし次の瞬間には凛とした表情がティファへと向けられる。ティファの何倍か長い時を生きたのであろう穏やかな双眸が彼女を呼んでいるように見えた。

兵士がいないことを確認し近づくと、一滴の血も流さずに兵士を撃退したシスターが小さく頭を下げた。

「ゼル様の事を、どうかよろしく御願いします」

「え？　あ、はい。もちろんです」

「ちょっと待て」

静謐な声にかくかくとぎこちない動きで頷くと、ゼルの声に遮られる。

「相手が逆ではないのか？」

「いえ、合っております」

それは憤慨を含んだどすの利いた声だったにも関わらずシスターは冷静だ。つんと澄ました顔で即答する姿には貫禄さえ感じられる。流石長年ゼルと共にいただけあって相当肝が座っている。

こんな状況でもなければ笑っている所だと感じていると散っていた兵士達が今度は仲間を引き連れて戻ってくる。銀光が月明かりに照らされ、それが四方八方を取り囲んだのを確認してからティファはすぐにシスターを教会の中へと戻した。

下手をすれば血が流れてしまう。いくら肝が座っているとはいえ

そんな光景を彼女に見せたくはなかったから。
「で？　お前は一体この状況で何をする気だ？」
幾つもの剣先が向けられる。その中でアレイズが精一杯の皮肉を込めた声で言い放つと、ゼルは落ち着いた様子で盛大に笑った。
吐き出された息が兵士達の鎧を揺らし、彼等の喉元からひゅうっと高い音が漏れる。
悲鳴を上げたくても出来ないのだと、何となくティファは理解することが出来た。彼等は竜神を見たこともなければ、対処したこともないのだろうから。
「かかかっ！　簡単なことじゃよ！　ほれ！」
地鳴りのような哄笑と共に、翼が最大限にまで広げられる。教会をゆうに超える長さを持つそれは兵士達を臆させるには十分だったらしく、ゼルはそうやって兵士達を威嚇しながら五人の姿を翼でさらった。
「きゃっ！」
だがいきなりそんな事をされても、心の準備など出来ていない。アレイズ達ならば少々落ちても宙を浮くぐらいは出来るだろうが、ティファ達にその術はないのだから。
悲鳴を上げ、何とか鱗に捕まりながら軽い動作で背中へと載せられる。たたらを踏んで数歩進むと、堅い鱗がブーツの踵に当たって甲高い音を立てた。一体どれだけ堅いのか、これは。
「な、何をするつもりですか？」
抗議の声に答えはない。
代わりにゼルは一度翼を震わせると、勢い良くそれを振り下ろした。
「まさか」
五人分の呟きに呼応するように浮遊感が訪れる。期待を裏切らないという点ではいいことかもしれないが、とてもじゃないが当たってほしくない予感が当たってしまいティファは冷や汗を流しながら近づいた空を見上げた。
浮遊感は、神々や彼等の契約者でなければ行くことの叶わぬ空に

自分達がいることを示していた。
恐々と眼下を見下ろす。すると漆黒の教会がちっぽけに思えるほどの大きさに見え、そこでティファはようやく認めざるを得なくなってしまった。
自分達が、空を飛んでいる事実を。
「暇だからって、これは無いんじゃないかな？」
「全くだな」
金髪碧眼の甘やかな顔立ちが歪むのを見ながらアレイズが頷く。その声にティファが眼下を見下ろせば、グラドに灯された光が点々と小さなものとして見えた。噴水の水飛沫がこちばにまで飛んできそうなそんな高さに、ティファは喉の奥で小さく悲鳴を上げる。
すると、足元の黒い地面が震え声を放つ。
「何を言っておる！　これが一番確実じゃて」
……分かってはいたけど、どうやらこれは地面ではなくゼルだったらしい。
ということは、今自分達は竜神の背に乗って空を飛んでいるのか。そう考えるとこの光景にも納得出来て、ティファは初めて見る上空からの世界に目を細めながらぐんぐんと遠ざかるグラドの王城を見つめた。
「それにしても、まさかゼル様が助けてくれるとは思ってませんでした。本当に有難うございます」
「僕もだよ、年寄りなんだから早く寝なよ」
こうして高みから見下ろすと、グラドが異様な形をしていることがよく分かる。
ティファはそんな事を考えながら、神の紋章を刻む外壁を見渡した。幸い高度が高いおかげで視線をそれほど動かさずとも全てを一望することが出来るそれは、円形の都市を守るようにぐるりと周囲を取り囲み遠目から見ても堅固な要塞に見える。細く長く伸びるのは煉瓦作りの道だろう。兵士達が灯す明かりによってそれはくっきりと大通り全体を照らし出され、これでは誰も眠れないだろうなと

苦笑を漏らす。
随分と大事になってしまった。
だが、そんな中で助けてくれた竜神への礼を忘れずに告げるとイオが付け足すように皮肉った。
しかしそんなものは慣れたものとゼルはイオの皮肉を無視し、ティファの礼に対し片目を閉じて答えた。闇に溶ける漆黒が輝きを失った、ただそれだけの視覚的情報から認識しただけで実際どのような表情をしたのかは分からなかったが。
長く伸びる首はティファ達が立つ場所よりもずっと遠くに位置し、視界の悪いこの時間帯ではゼルの表情を上手く読み取る事が出来なかった。
「何、気にすることはない。どの道暇であったしの」
「暇神が」
しかし、ぼそりと呟いたアレイズの言葉に対して額に青筋を立てた事だけは何故かよく分かった。
ばさりと翼が大きく羽ばたく。それはアレイズが立つ場所を中心に大きく揺らされ、彼はその衝撃にぐらりと体を傾ける。
「何するんだ！」
たたらを踏み何とか体勢を保っているものの、やがてそれさえも辛くなったのだろう。アレイズは鱗にしがみつき膝を折りながら怒鳴るが、それに対してゼルは鼻で笑っただけだった。
少し危険ではあるものの、どこかのんびりとした光景。
その時間に甘えるように膝を着くと、やがて風を切って通り抜ける光景の一部が視界に入りティファは息を呑んだ。
緊張に胸が圧迫される。それは気のせいでしかないはずなのに、酷く胸が苦しかった。
「ここ……」
「どうなされました？」
知っている気がする。いや、知っているわけじゃなく知識で聞いた事があるというべきか。

ただ、上空から見下ろす地面の全てに記憶があるわけではないとしてもその一部ならば通ったことがあった。

唖然とした呟きに尋常ではないと感じたのか、マイがいち早く声を掛ける。そうして眼下に広がる光景を見て同じように息を呑んだ。釣られて、メイもが目を丸くする。亜麻色の瞳が目一杯見開かれ、ツインテールの髪が後ろへと強く流れることを気にせず見を乗り出した。

三人が三人息を呑んで固まった事が悪かったのか、アレイズとイオが不思議そうにこちらを見ている気配が伝わる。これではいけない、普通通りにしていなければとその視線に感じるものの、上手く笑みを刻む事も言葉を紡ぐ事もできない。ただまだ微かに白む世界を見下ろす事しかできなかった。

「どうしたの？」

我慢が出来なくなった様子でイオが声を放つ。しかし自分でさえ反応が出来ないのだから、メイとマイにも答えられようはずがない。

それぞれの持分である雰囲気をかなぐり捨て、二人は同じ驚愕を刻んで身を乗り出しながら遠くを見据える。その先に、まだ見えないあの場所を見ているのだとティファは気付いていた。

そう、このまま行けばあの場所がある——血と炎に彩られ、僅かな時で崩れ去っていった幼い日の光景が。

頬の筋肉が硬直し、表情を刻むことができない。このままではいけない、と再度警鐘を鳴らしてみるもののやはり体は上手く動いてはくれなかった。ひらり、と手の平が眼前を横切る。少しごつごつとしたそれはアレイズのもので、彼はティファに大丈夫か？　と言うように手を伸ばしていた。数度手の平が振られる。その間に何とか反応を返さなければ、と感じているとようやく圧迫されていた胸から呼吸が吐き出され、慌てて息を吸い込む。早朝の新鮮な空気が肺に入り込むと、少しだけ気分が落ち着いた。

「な、何？」

「何？　じゃないだろう。何があったんだ？」

楽になった呼吸から声を押し出す。するとあまりにも白々しかったのか、アレイズが呆れ混じりに眼下の光景を指差した。底なし沼にも見える暗い森がそこには広がり、人間では出し得ぬほどの速度で通り過ぎて行く。人差し指が指す方向を見つめて曖昧な笑みを浮かべると、メイとマイがようやく意識を現実へ引き戻す。

彼女達はお互いの顔を見合わせながら首を傾げ、少し不思議そうに声を上げていた。

「私ったら、今何してたのかしら？」

「さぁ？」

別に白を切っているわけではない。恐らく本当に気付いていないのだろう。

一種の催眠状態に陥っていた彼女たちは、しかし自分達に異変があった事は理解しているらしく、怪訝そうにティファを見やる。そこに答えがあるのだと思っての事だろうが、生憎答えなどどこにもない。ただ強いて言うなら、ティファは理由を知っていてそして彼女達は理由を知らないというぐらいか。

そういえば二人はメイの記憶を取り戻しに行っていたはずだが、首尾良く記憶は取り戻せたのだろうか。

そんな考えが頭を過ぎるが、先に知っておきたいことがありティファは長く伸びる首の先に向けて声を放つ。漆黒の鱗が肌に刺さり、冷たさと痛みを訴える。

「こちらは西ですか？」

朝日が昇ろうとする、その白さが反対方向に見えるということは恐らくこちらは西なのだろう。

思案しながら確認を籠めて尋ねると、ゼルが首肯した。

「やっぱりね……」

呟き、明けの明星が煌めく星を見据える。

月や星の光では照らしきれぬ世界は未だ暗く、人間達はまだ眠っているのだと感じさせられた。

「ゼル様！　申し訳ありませんが、このまま真っ直ぐ進んでもらえ

ますか！？」
しかし呑気に星を見続ける訳にもいかない。その考えにティファは声を張り上げ、前方のゼルに行き先を支持した。
グラドから、もうずっと同じ方向に飛び続けている。
ならばこの先には――。
「このままっすぐ行けば、きっと……」
「おい、だからどうしたんだ？　この先に何かあるのか？」
口から勝手に流れ出る言葉に、アレイズが苛立混じりの声を放つ。
竜の鱗に指先を這わせ眼下を眺める姿は、一体彼の目にどう映っているのだろうかと思うもののそちらに視線を向けるほどの余裕もなかった。流れて行く景色には何の懐かしさも感じないが、この先にあるものにはきっと郷愁感を感じてしまうだろうから。
心臓に冷水を浴びせられたような、冷えていく心が再び胸を圧迫していく。空いた手で胸に手を押し当てると、鼓動がいつもより緩やかになっているような気がした。穏やかになっているというよりは、止まりそうなそんな緩慢さで。
苛立混じりの声が更にティファの名を呼ぶ。焦りを含んだその声にティファはようやく別の言葉を口にした。
「この先には、私とメイとマイの生まれ故郷。プラクトの街があるの」
冬風のせいか、微かに枯れた緑が眼下に広がる。だが口にした通り、このまま真っ直ぐ行けば彼等は人が生きる街を一望することができるだろう。過去の凄惨な事件を抱いているであろう、故郷の街を。
小さな呟きにアレイズが息を呑む。姿を見なくとも彼が今目を見開いている事が手に取るように分かった。
「そうなの？」
風が生み出す音にかき消されそうな問いを発したのは、アレイズではなくイオだった。
しかしそれに対し首肯で返したのはティファではなく、メイとマ

イだ。
「はい」
「あれから帰ってないけど、多分もうすぐ行けばあると思う。でもティファ様、よく分かったね」
頷きつつ、メイが首を傾げる。彼女達はティファが地図を読めない事を熟知しているから、この先にプラクトがある事を知っていた事を不思議に思ったはずだ。
「……えぇ」
しかしそれには曖昧に頷き、ティファは再び眼下を見下ろした。
あと一月もすれば花が咲き乱れ万緑が色付くであろう、広大な森を。
グラドから西にずっと行った場所にプラクトの街がある。それは直接歩いて行けるような距離ではなく、ティファも教皇や聖母に話だけ聞かされて知ったことではあるのだがその事だけは忘れなかった。
いつか、遠いいつかに父母に会いに行きたいと考えていたことがあるから。
東西南北のどれがどちらにあるのかはティファにはよく分からないが、昇る太陽とは逆方向に西があるという知識ぐらいはある。だからこそ西を見ることができたのだ。
寒さに色褪せた大地を見下ろしながら、乱れる髪を押さえつけて胸中で呟く。
――もし本当に大聖堂が裏で手を引いているのなら、王城脱出の知らせを聞いてプラクトにも手を伸ばすはず。
無論プラクト以外にもティファが逃げ延びる場所の候補は多く上げられるだろう。しかしその全てに手を伸ばしていたとしても何ら不思議なことではないから、プラクトにも必ず大聖堂関連の人間がいるとティファは確信していた。
脳裏に、焼け落ちた廃墟の外に立つ影が浮かぶ。
それは見事な金の髪をなびかせて両手を広げ、ティファを待ち構

えていた聖母の姿だった。未だ残る炎の熱が身を舐めても、微動だにせずただティファだけを見ていたあの影は大聖堂で教皇に次ぐ位を持つ女性だ。

これは賭けだわ、と脳内に声が響く。

自分を受け入れ、育ててくれた大聖堂や教皇達が自分とアレイズを狙っているわけではないと思い込むための、最後の望み。だが、もし大聖堂の人間がプラクトにも現れたらその時は――。

きっと目尻を吊り上げ、眼下を睨みつける。未だ見えぬ故郷に向けて遠く視線を向けてから、冷たい風に乾いた唇を軽く開いた。

「帰りましょう。多分、何か掴めるはずよ」

耳を轟と響かせる風の中で言い放った言葉に、アレイズ達が目を向ける。色とりどりの視線がただティファ一人に向けられ問うような色を見せるが、口を閉ざして黙ったままでいるとやがて揺らいでいった。何を言っても無駄なのだと悟ったのかもしれない。

そしてそれは当たっていた。ティファは例え契約神であるアレイズに反対されてもプラクトに帰るつもりだったのだから。

じわりと視界が歪み、ダークブルーが揺らめく。しかしそれは目が乾いたせいだと思わせる事にして、ティファは溢れるには至らない涙をそのままに胸中で皆に謝罪した。そうするしかなかったのだ、ノルマンや大聖堂の事を話さずにプラクトに行くことをティファは決めたのだから。

「あそこには神の紋章だって残ってるでしょうし、アレイズとイオがいる今なら七年前の事が何か分かるかもしれないわ」

付け足すような言葉はどこか言い訳じみているものの、少しでも手がかりが掴めればいいという気持ちまでもが嘘だというわけじゃない。

頷く気配を半身に感じながら森を見下ろす。東から昇る太陽に照らされて色づきを見せる世界を眺めながら、嘘がばれないようにとティファは誰とも目を合わせないようにしながら一路プラクトを目指した。

◇　◇　◇

こうして、彼女達は一路故郷へと向かっていく。
そんな中、飛翔する竜神を追いかけるように朝日がその手を世界中に広げて行った。

第三十一話

ひたり、ひたり。銀が血を引き連れてやって来る。
――獣の咆哮を聞くために。空を殺すために。

◇　◇　◇

「本当に懐かしいわね」
「はい……」
「七年振りだよね。本当に久しぶりだねー」
口々に感想を言い合うティファ達は、眼下に広がる景色に好奇心と興奮と、それから少しの悲哀を滲ませているようにアレイズには思えた。
彼女達の様子から察するに、プラクトにはもうじき着くのだろう。
森が薄くなり、人が住む気配が見え始めてきたのが何よりの証拠だ。
ティファ達の生まれ故郷であり、恐らくは一番手痛い思い出が残る街。
そんな場所に近づきつつ、彼女達は何を思っているのだろうかとアレイズは考えるもののすぐに首を振った。
少なくとも、はしゃいでいる姿を見ているうちは胸の内など明かしてはもらえそうにない。
「……はぁ」
知れず、溜息が漏れる。きゃいきゃいと黄色い歓声を上げる三者の姿に、怒りを通り越して呆れてきた。
――何で俺の前でもあんな風に無理をする必要があるんだ。
メイやマイはともかく、ティファまで。アレイズは口を真一文字に引き結んで彼女達の背を見つめながら胸中で呟いた。
今この場で三人が本当にはしゃいでいるなどと思うような神はい

ないだろう。
神が聡いからという傲慢から来る考えではない。それほどまでに三人の態度が分かりやすいせいだ。
一目見ただけで分かるような空元気など、振り回さない方がいいものを。
背に刺さる鱗を無視して視線を逸らす。早朝の空を見て、否応なしに契約者の事を思い出し渋々視線を元に戻した。そしてやはりはしゃいだ様子の三人を見てもう一度溜息を漏らす。
プラクトの街に対して、ティファ達が色々と思うことがあるのは当然の事だろう。
そう、辛くないはずなどないし悲しまないはずがないのだ。
それは記憶がないメイにしても同じ事で、いくら記憶がなくても失ってしまった者がいることに変わりはないのだから。
だというのに、彼女達はそれを隠して嘘をついていた。
今まで旅をしていた自分に対し、思いを悟らせないようにと。
「何考えてるのさ？」
何度も溜息をつく姿にイオが声を掛ける。
「さぁな」
だが嘘をつかれている事が悔しいなどと口にするのは腹立たしく、アレイズは手をひらひらと振ってそう答えるに留めた。
ティファを助けた一件から、イオとアレイズは命を狙ったり狙われたりという過激な関係からは脱している。
しかし敵である事に変わりはないのだ。いくらティファが何と言おうとそれは譲れないし、イオとて同じ気持ちだろう。
まぁ、自分から話しかけてくる辺りは歩み寄りの精神が見えてきたと評価すべき所なのかもしれないが。
「彼女達の事だろう」
「……どうだろうな」
分かっているなら聞くなと言いたいのをぐっと堪え背を向けると、素直じゃないねとイオが笑うのが聞こえた。

じゃあお前は素直なのかと聞いてやりたくなったが、ティファに対する態度を見ている限り確かにイオは素直と言えるのかもしれないと感じて止める。それだけではない、素直過ぎて迷惑極まりないがイオはいつだって自分の欲望に忠実だ。元が兎なのだから仕方が無いのかもしれないが。

黙ったまま振り向いて思考を巡らせるアレイズにイオは特に気分を害した様子もなく、視線をティファ達へと向ける。

困ったような碧眼に釣られてアレイズが三人の背を見ると、急に高度が下がりがくりとゼルの体が傾いだ。

勢い良く頬に叩きつける風に目を細める。

「どうしたのですか？」

「あぁ、すまんのお。そろそろプラクトに着くと思って高度を下げたら角度をつけすぎてしもうた」

ティファの問いに、人を乗せることなど無いからのとゼルが豪快に笑う。

アレイズはそんなゼルの姿に苦笑を漏らそうとして、表情を固まらせた。

視界の端に見える空色の髪。その間から見える横顔が強ばっているのが見えたせいだ。

「どうした？」

「ううん……」

アレイズの問いにも生返事しか返っては来ない。

不審に思いティファが見ている方向を見やると、そこに巨大な屋敷が見えた。

否、屋敷というには些か語弊があるかもしれない。その場所は火事にでも巻き込まれたのか、廃墟と化していたのだから。

街よりも幾らか離れた場所に立つその屋敷から視線を逸らさぬまま、ティファ達が瞠目する。

「ん？　どうした？」

今度はゼルが問う。だがそれに誰も答えなかった。

いや、答えられなかったのだろう。見開かれた瞳が映す驚愕が、何事も聞こえていないと如実に伝えていた。
「あのお屋敷」
ぽつりとマイの声が耳朶を打つ。
「何故誰も手を加えていないの？　もう、七年も経ったのに」
悲鳴に近い声だった。
常ならば最後の一線で冷静さを損なわない横顔が驚愕と恐怖に満ち、深青のメイド服を震わせる。風ではない、体が震えているのだとアレイズが感じるとティファが肯定するように静かに頷いた。
「本当ね。まるで、誰も近づかないよう結界でも張られてるみたいに……変わってないわ」
生気のない、茫洋とした声にアレイズまでもが恐怖する。
「おい！」
慌ててティファの肩の揺さぶると、はっと目が見開かれる。ダークブルーの光が戻り、周囲を見渡したティファは慌てた様子でゼルに向けて言葉を発した。
ぐるりとプラクトを旋回する翼がひらりと大きく羽ばたく。
「ゼル様、もし宜しければあの廃墟まで連れて行って頂けませんか？」
「？　おぉ、構わんぞ」
唐突の申し出にゼルが快諾する。その声にほっと胸を撫で下ろすティファを見ていると、何故かは分からないが沸々と怒りが再燃するのを感じた。
別に誰も意見も聞かずに勝手に決めたからではない。ただ――。
勢いに飛ばされぬように、しっかりと漆黒の鱗にしがみついてティファが頭を下げる。
「ごめんね、勝手に決めて。本当ならプラクトの街を回った後が良かったのかもしれないけど」
「いえ……」
「別に良いよー。どの道目的地だったんだし」

屋敷に行く前に故郷の街を回ろうという道筋を既に立てていたのかもしれない。頭を下げるティファにメイとマイが口々に言うと、彼女はもう一度胸を撫で下ろすような仕草を見せた。

白いブラウスが呼吸と共に上下する。

同時に青白くなっていた顔が上気していくのが見てとれて、アレイズは湧いた怒りを止める事ができなくなった。

人間と違い、神はいざとなったら空を飛ぶ力がある。

ならば、と考え鱗から手を離したアレイズはそのままティファへと腕を伸ばした。そのままティファの頬をつねる。

そうして腹を立てている時にはいつもしていたように、ティファの頬を左右に伸ばしてやった。

「――にゃっ!?」

驚いたのか意味の分からない叫び声が漏れる。

だが許してやるものか。

「さっきから理由も告げずに俺を無視して勝手に事を進めて、かと思ったら謝るとは、なかなかいい度胸だな」

伸ばせる限り頬を伸ばし、上気したそこを風に晒してやる。

そうしてある程度楽しめた頃になってからアレイズはふんと鼻で笑って手を離した。

目を白黒させ、上目遣いに自分を見上げるティファに指を突きつける。

「俺の契約者はお前だ。少しぐらいなら付き合ってやるんだから気を遣うな。あと空元気はよせ、見ていて腹が立つ」

――護ると誓ったのに。そんな声が胸中でわだかまる。

契約をし、旅をして、多くの事を共に体験した。

過去についての話を聞かせてくれたし、共に進む事を決断した。

だというのにティファは未だにアレイズに対し胸の内を明かそうとはしない。

それが腹立たしくて悔しくて、我知らず責めるような口調で言い放つとティファが瞠目した。深海の蒼が揺れ、一度閉じられる。

「うん」
そうだったね、とティファが目を開いて頷いた。
「ありがとう」
花が綻ぶような笑みだった。
痛むのか、片手で赤くなった頬をさすりながら笑う姿にアレイズは思わず手を伸ばしそうになる。
あぁ、結局これでまた簡単に許してしまうんだ。
冷静な自分がそうぼやくのが聞こえた気がしたが、それ以上ティファを責める気にもなれずアレイズは目を細めて嘆息した。
晴れやかで、思わず綺麗だと呟きそうになる笑みを見てアレイズは徐々に熱くなる頬を見られぬようそっぽを向きながらどうしてだろうかと考える。
どうしてこんなに冷静ではいられないのか。
契約者が少々空元気を振り回した所で気にするようなことではない。見て分かるようなものなら、尚更。
だというのにティファが自分に胸の内を明かさないのだと考えると腹立たしくて仕方が無かった。誰しも自分の心を全て見せることなど出来ぬと分かっていても、尚。
傲慢だ、そう思うと同時にやはりどうして、という気持ちが浮かび上がる。
自分は――。
「いーい度胸だね、アレイズ神」
思考を打ち砕いたのは、ボーイソプラノだった。
アレイズの視線の先にいるイオはにこにこと楽しげに笑いながら、殺気だけを漂わせて人差し指を軽く振る。
今すぐにでも殺してやろうかとその態度だけで分かる。
「はぁ……」
だがそれに対し文句を言う気力もなく、アレイズは疲れたようにこめかみに手を当てて嘆息した。

◇　◇　◇

「ほら、もうすぐ着くぞ」

プラクトを眼下に眺めながら、ゼルが大きく翼をはためかせて言う。

やはり竜神だけあって飛んでいる時の方が活力が漲るのか、教会で見せたような疲労感は見えなかった。

硬質な鱗の上に立ち、小さく頭を下げる。その視線の先には懐かしい街並みが見えた。

煉瓦作りの大通りと路地、グラドに似た道筋だがかの都市とは違い高い建物は見当たらない。石と煉瓦と、幾らかの木で作られた質素な佇まいの中往来する人々は寒さに震えているように見えた。

しかしそんな彼等も帰ったら暖炉の前に座り、果実酒を片手に体を温める事だろう。

プラクトは他の地域と比べて温暖なおかげで果物が多く取れ、各都市へ売り込む果実酒造りが盛んだ。その恩恵で人々は冬になると果実酒に酔いしれ、暖を取る。

「何から何まで、本当に有難うございました！」

「いいんだよ、ティファ。ゼルは暇神なんだから」

大きく下げた頭と恐縮しきった声に、ゼルが呵呵と笑う。だがそれもイオが呟きを放つまでの話で、憎々しげな呟きが聞こえると同時にゼルは巨大な翼を反らせてイオの後頭部を殴りつけた。

強かに頭を打ち付け、イオが無言でしゃがみ込む。

「……っ！　こんの暇神！」

相当痛かったのだろう、碧眼の端に涙を浮かべてイオが手を空へと振り上げる。生まれる氷の礫が、雪玉ほどの大きさとなりゼルの頭へと放たれた。だが、それもあっけなく避けられる。

少し首を傾げるだけで氷の礫を避ける様を見て、慣れているのだろうなと感じているとイオがむくれたように頭をさすっているのが見えた。どうやら諦めたようだ。

「ティファ」
「？　はい」
横目に見るその光景に笑みを零していると、不意に真剣な声が耳朶を打つ。
震える鱗に声の主がゼルである事を察知すると、彼は憂いを帯びた声で続けた。
「あの時の話を、どうか嘘にしてくれぬか」
「ゼル様……」
空を切る音にかき消されそうな程に静かな、小さな声にティファが呟きを返す。
それは神として聖女に命ずる類のものではなく、懇願のように聞こえた。否、正しくゼルは希っていたのだろう。
この世界の誰にも出来ぬ、唯一つの事。それはティファにしか出来ぬ事なのだから。
あの時、とは恐らくグラドで初めてゼルに会った時の話だろう。
自分が世界を殺すかもしれないという、当たる確率の極めて高い予知夢。
そんな九割八分確定の未来の、たった二分の残り。ゼルはそれを願っているのだ。そして自分も。
はい、と頷き顔を上げる。迷いなどないダークブルーの双眸がひたと黒の竜神を見据えた。
「必ず」
力は他者を傷つけるためではなく、自分と大切な誰かを護るために。
聖女になるべく身につけた魔法は世話になった教皇と聖母、そして今は契約神であるアレイズのためにある。
それを決して世界を傷つける刃になど変えぬと誓い、ティファは満足げに笑うゼルに好戦的な笑みを見せつけた。
――私は誰も殺さないわ。
胸中で呟き、息を吸い込む。雪の匂いを多分に含んだそれに身を

浸して、静謐な心のまま瞼を閉じた。
絶望も不安も血の色も、もう見えない。

◇　◇　◇

「それでは、儂は帰るでの」
「はい。本当に有難うございました」
「気にするな。なかなか楽しい一時じゃったよ」
そんな言葉を交わし飛び去ったゼルを見送った後、ティファ達はざくざくと雪を踏みしめながらかつて自分達が住んでいた屋敷へと向かった。
とはいえ、ゼルが屋敷のすぐ傍で下ろしてくれた為にさしたる苦労もせず辿り着くことができた。これで距離が離れていたら雪の中を何時間も歩かなければならなかったかもしれない。
プラクト出身とは言え、たまたま領地に認定されているだけのこと。屋敷はプラクト中心部からは遥かに離れていたのだから。
中心部で降ろされなくてよかったと胸を撫で下ろしながら歩いていると、やがて一軒の屋敷が見えたので足を止める。
一歩踏み出し、焼け落ち廃墟と化した屋敷の壁面らしき板を踏みつける。するとマイも同じように足を踏み出して今度は扉らしき板を跨いだ。
雪の白にも負けない炭の黒はちらちらと地面を侵食し、灰で世界を満たしていく。その様子を黙って見つめるティファとマイの視線に釣られて館を見ると、今にも館が炎に包まれるのではないかという錯覚に陥った。
――見た記憶なんて、ないくせに。
不意に浮かび上がる自嘲の念に口の端を歪めて笑う。
七年前の出来事はティファとマイの胸の中にはあれど、メイの中にはない。グラドで何らかの手がかりを得るつもりではいたが、結局無駄骨に終わったのだ。

そう、だから自分には二人のように悲しむことを胸を痛めることもない。幼い日を過ごした屋敷が燃えているという事実に悲しみを覚えることはあっても、惨事に怯えることだけは。

――だが、何だか嫌な予感がする。

「メイ？」

「どうしたんだい？」

雪を踏みしめて屋敷へと向かうメイの背に、アレイズとイオが声を掛ける。ツインテールが大きく揺れた。

「ん？　別に何でもないよ」

自嘲ではなく、いつも通りの笑みを浮かべるメイに対し彼等は怪訝そうに眉を顰めただけだったが何も言わなかった。もしかしたら彼等は気付いていないのかもしれない。

触れればすぐにでも崩れ落ちそうな壁面をじっと見据え、メイはざわつく胸に手を押さえた。

言葉には出来ない。だが明らかに何かが違う。そんな感覚が終始メイの心を脅かすのだ。

記憶などとうに手放したはずなのに、この先に何かがあると警鐘を鳴らしていた。危険信号と、それから歓喜に震えるほどの何かが。

真紅が雪の白の中で鮮やかに揺れる。しかしその紅白が炭色に消える前にアレイズが足を踏み出した。

「俺も行く」

メイの様子がおかしいと察したのかはたまた別の理由があるのか、そう言ったアレイズはメイの答えなど聞いてはいないというように歩を進める。契約者であるティファの意見も聞かずに付いてくるとは何事かと一瞬考えるも、しかしメイは安堵したように頷くに留めた。自分とて怖いのだ。危険信号ならばともかく、歓喜まで感じるこの状況が。

ざわり、ざわり。音にするのが難しい音が心を侵食していく。

意志に反して次第に強くなる音は、体をも侵しているように感じられた。

隣に並ぶアレイズに小さく笑いかける。するとすっと細められた瞳が見透かすようにメイを凝視したが、結局は逸らされてしまった。その事にも安堵し、苦笑を漏らす。

明らかに自分がおかしい事には気付いている。だが、それを気付いて欲しいのか欲しくないのかは分からなかった。

心に合わせて荒くなる息を一つ吐く。そうして屋敷に足を踏み入れると、マイが慌てたように付いてきた。

――姉さんには、伝わるのかな。

緊張した面持ちの姉を一瞥し、ふとそんな事を考える。双子はあらゆる感情を共有すると、書物で読んだことがあったから。

無論それは双子でも何でもない人間の言い分であって、実際にどうなのかはメイにも分からない。

「すぐに戻る。お前達はそこで待っていろ」

「えぇ。マイ、あなたは――」

ここ数日不安定だったティファを屋敷の中に入れるのは忍びないと感じたのだろう。アレイズが振り返り契約者に対し端的な言葉を告げる。

指先をぴたりと合わせ、それをひらりと振る。一時の別れに対する合図をしたのだと感じていると、ティファはメイやマイの表情の意味を探るでもなく頷いた。ただ、マイの事が気になるのか言い淀むように言葉を探す。

「私もアレイズ様と屋敷の中に行きます。私なら案内も出来ますし」

主の様子に気付いたマイが丁寧に一礼する。メイでは決して浮かべる事の出来ないであろう凛とした――腹の底にあるものを探らせてはくれないような――笑みを見て口元を歪めると、案の定マイに睨まれてしまった。

「じゃあ、行ってきまーす」

慌てて視線を逸らし、自分に出せる限りの脳天気な声で屋敷へと入る。そうすることで少しでもこの場の緊張感を解そうとしている姿に我ながらおかしくなったが、笑うことはしなかった。

傷を負った主と姉の為に出来る事。それはきっと真実を探ることではなく、こうして僅かながらの明るさで進む事だとメイは感じていたから。

「ここで少しでも手がかりを得られるといいんだがな」

ぽつりとアレイズが呟く。

ぼやくようなものではなく努めて真面目な声が耳朶を打つと同時に、アレイズは自分とは違うものをティファに与えたいのだと知り目を閉じた。

七年前の真実。

それを見つけたいのか、見つけたくないのか。メイにはもう判断することが出来なかった。

第三十二話

傷跡を癒すのは、いつだって生身の存在だ。自身が負った傷も深く抉られた大地も戦火に焼かれた街並みも、心の傷でさえ。逆を言えば、命のない存在は己の傷を自己修復することができない。他者の手が入らなければ、いつまでだって傷付いたままだ。ここは、そういう場所だった。いつまでも誰の手の入らない傷跡を背負ったまま、いつか訪れるであろう無への回帰を静かに待つ廃墟。アレイズと双子はそんな廃墟の中に足を踏み入れていた。

細く束ねられたアレイズの黒髪が揺れ、双子を守るように先行する。マイはその後姿を視界に収めつつ、壁面を一瞥した。焼け焦げ、黒ずんでいる壁面はあちこちが崩れかけ彼らが歩くたびにぽろぽろと炭を落としていく。しかし、経過した年月を思えばとうに崩れていてもおかしくない場所だ。それがここまで状態を維持しているというのは些か不思議な話でもあった。

（この有様で現状維持してるって言い方はおかしいのかもしれないけれど）

胸中で独りごちる。だが、その声に他ならぬ自分が冷や汗を流しそうになった。七年前、多くの死がこの屋敷を覆い尽くした。その時から現在までほぼ変わらない惨状。これは一体なんという悪夢だろうか。

早鐘を打つ鼓動に吐き気がする。胃の腑の奥底で未だ消化しきらない食物がうねっているような感覚に、マイは震える手を口元へと持っていった。常ならば凛と前を向いている眼差しは落ち、柳眉は顰められていた。彼女をよく知る者が見れば薄く浮き出た血管のせいで、顔が青くなっていることが分かることだろう。だが幸いにして、マイの不調は誰にも知られることはなかった。アレイズは背を向けており、メイは先程までの明るさを引っ込めて無表情で前を見据えていたからだ。誰の視線もないことにほっと安堵の息をつき、

マイはぎゅっと手に力を籠めた。
――しっかりしなくては。
これからティファの両親が殺された部屋へと行くのだ。あの場所は屋敷のどこよりも凄惨だというのに、入り口で躓いていてどうする。
何度も胸中で呟くと、ようやく吐き気が治まってくる。鼓動はまだ少し早いが、それはどうにかなるだろう。その程度なら誰からも隠し通すことができる。例え主であるティファ相手であろうともだ。
（そう、動揺をティファ様に悟られてはいけない）
誰よりも不安定なティファに自分の動揺を悟られてしまえば、負の連鎖が加速するだけだ。それだけは避けなければならない。そのためならば自分の痛みを押し隠す覚悟はできていた。自己犠牲の精神を美しいとはこれっぽっちも思わないマイだったが、ティファ相手となれば話は別だ。細かい理由などとうに忘れてしまったが、そうしなければならない気がするし、そうしたいからこそマイはティファを守ると決めたのだから。
扉が焼け落ちてしまったせいで風を防ぐものがない屋敷内を雪風が遠慮無く吹き抜けていく。冷ややかに風に弄ばれる髪を押さえると、横で真紅がひらりと流れていった。
「メイ、危ないからもう少しゆっくり――」
「大丈夫よ。それより、ちゃっちゃか行って早くティファ様の所に戻ろう」
流れるような動作で音も立てずに廊下を進むメイに注意すると、メイはいつも通りの明るい表情でちらりと振り返ってから足を早めた。今やアレイズよりも前に出ている。感傷も不快感も知らない背中にマイは微かに苛立ち、しかしすぐに嘆息としてその感情を吐き出した。良くも悪くもメイは何も知らないのだ。少なくとも、今あの頭の中に七年前の記憶は存在しない。ならば怒るだけ損だ。
マイは自分の妹のあまりの脳天気さに呆れ返りながらも、一歩でも足を踏み外そうものならすぐにでも床下に体を飲み込まれるであ

ろう廊下を慎重に歩いていく。本当ならば走って行きたいところだが、まだ体調は万全ではなかった。吐けるものなら今すぐにでも吐きたいぐらいだ。

限りなく似た立ち姿でありながら、緩急を逆に選んだ双子をアレイズが一瞥する。結果、マイの横に並ぶことに決めたようだった。

「マイ」

声が掛けられる。

「何ですか？」

無感情な声に視線を上げると、アレイズは黒瞳を苦々しいもので満たしながら「傷を抉るようで悪いが」と前置きする。その言葉だけで何を訊かれるのかを察してしまった。だからマイは殊更無感動に告げようと決め、ぐっと腹に力を籠めた。

「ここの屋敷は――」

「変わっていませんよ。あの時から、ずっと」

先回りして答える。淡々とした声色にか、それとも先回りされたことにかアレイズが鼻白む気配が伝わった。それから溜息をつく密やかな空気の流れも。何の感情を吐露しての溜息か分からず、マイは誤魔化すような微笑を持って続けた。

「傷を癒せるのはいつだって生身の人間です。ここには誰もいませんでしたから」

放った言葉は他ならぬ、自分への戒めだ。ティファを追い、付き従うことでこの屋敷を放棄した薄情な自分への。

冷え切った頬を吊り上げるのが苦しい。それでも笑顔を保っていると、アレイズは悔やむように一度目を閉じながらも決して謝罪の言葉を告げることなく一言「静かだな」と呟いた。謝らなかったのは、そうすることが何の役にも立たないと知っているからか。賢明な判断だ。

「えぇ、本当に」

ふいと顔を逸らすアレイズに向け、ふわりと息を吐き出すように返す。

（本当に、静か）

自分達以外誰も生きている人のいない屋敷。かつては暖かくも賑やかだった二つの家族は、もう二度と帰ってはこない。だが――。

（それでも私は、あの日ティファ様に付いて行ったことを後悔しない）

歩いた道を振り返った時、そこに血しか流れていないとしても構わない。屋敷を放置したことで怨嗟の声がぶつけられたとしても、泣いて許しを請うことだけはないだろう。それが分かっているからこそマイは臓腑に染み渡る冷たさに足取りを遅くしているのだ。

屋敷の奥へと近づいていく。何も変わらないであろうその場所は、マイが唯一抱く後悔の権化だった。

かつて屋敷が己の本分を発揮していたであろう頃に存在した主の部屋に、マイは最後に足を踏み入れた。しんと静まり返った空気の冷たさに、全身が凍りついてしまったかのようだ。表情さえ浮かべられない。

メイもそうだったのだろう。隣に並ぶと、茫洋とした瞳が無を宿して室内へと向けられていた。まるでそこに横たわる者達を否定するように力ない瞳は、メイには衝撃が強すぎたのかもしれない。もっとも、一度目にしたことがあるマイでさえも衝撃は強いのだが。

心を抉った傷跡がじくじくと音を立てて開いていく。その傍らでアレイズだけが激昂していた。

「いくらなんでも、これは酷過ぎる……！」

ぎり、と歯を噛み砕かんばかりの音がする。次いで香った鉄錆の匂いが、酷く濃厚に鼻孔をついた。

アレイズの視線を追う。そこには、一組の男女が折り重なって倒れていた。否、それは本来であれば倒れていたという言葉では形容できない状態であるはずなのだ。だというのに、彼らはあの日と変わらぬ凄惨さで横たわっていた。

あれだけの業火に襲われたというのに、服には焼け焦げ一つない。だが眠っているというわけではないのは、夥しいまでの血が絨毯に

染み込んでいるのが見えることからも分かる。恐らく、七年前からずっと朽ち果てることなくここに在ったのだろう。誰もいない、この寂しく寒い屋敷の中で二人きりで。

（こんなことって）

焼けていると思っていた。もしくは朽ち果てているとばかり。自分は骨だけになった主達に膝をついて静かに謝るのだと。だが、これは何だ。

守れなかった者の形。それをこんな風に残すなんて、悪趣味極まりない。

慌ててメイに目を向ける。顔面を蒼白にしながらも、なお虚ろな視線を二人にぴたりと当てたままのメイは今にも倒れそうに見えた。

「メイ、あなたはもう外に出てなさい」

「……」

一刻も早く外に出した方がいい。この光景を見せ続けるのは酷だ。そう判断して声を掛けるも、メイは聞こえていないのか返事をしなかった。風に揺れるツインテールを気にもせず、露出した脚が青白く冷えるのにも頓着しない。怯えも感傷もない虚ろさに、マイは背筋をひやりとしたものが伝うのを感じた。

「ティファが来なくて正解だった。――これをもう一度見せられたら、あいつは狂いかねん」

アレイズが呟く。見た目こそ違うものの、横たわる二人がティファの両親であることを理解したのだろう。沈痛な響きはただティファの精神を案じており、そのことにマイは深く安堵した。やはり、アレイズにティファを任せてよかった。

「ティファ様がそれほどに弱い御方とは思いませんけど、ここにお連れしなかったのは正しかったと思います」

「あぁ。……親の死など、二度も見るものじゃない」

頷くマイの耳朶を、低く唸るようなアレイズの声が打つ。二人の死体から目を逸らしたアレイズは、鋭い眼光を部屋の奥にある壁に向けられていた。

そこには、かつてティファが言っていた通りのものがあった。
「……神の紋章」
瞠目と共に放たれた声に、マイも内心で同意する。
あの時は意味を追求などしなかった文様は、今ようやく意味あるものとしてマイの目に映った。イオこと兎のピコがつけている首輪に描かれている文様と一致するそれは、紛う方無き神の紋章だ。マイは紋章を睨み据えるアレイズに、そっと問い掛けた。
「やはり、神がこの屋敷を襲ったのでしょうか」
「分からん。だが、高確率でそうなるんだろうな」
やりきれないとばかりにアレイズの肩が落ちる。どこまでも人間臭い仕草に目を見張りながら、マイも一緒になって壁面を見据えた。あの事件の唯一の手がかり。これは、自分が倒されることなど露程にも思わぬという自信から来ているのだろうか。それとも、神がここを訪れたことを証明したかったのだろうか。これは神罰だと。だから悉く殺されていく人間達への同情など不要だと、まるで嘲笑うように。
知らず唇を噛み切っていた。血の味がじわりと口内に広がる。だが、血を拭き取ろうとポケットに伸ばされた手はぴたりと止まった。
「メイ、どうしたの？」
「ん？　おい、メイ？」
ガタンと大きな音がする方に視線を向けた時、そこにはメイの姿があった。相も変わらず虚ろな瞳は神の紋章へと向けられている。だが、何か変だ。見ているだけじゃなく、メイは壁へ触れようと腕を伸ばして足を踏み出していた。
「止まれ！　何が起こるか分からん！」
慌ててアレイズが手を伸ばし、メイの腕を掴む。大きな手の平に食い込むように細い腕が捕らえられるが、メイはどこにそんな力があるのか容易くアレイズの手を振り払ってしまった。
「メイ！？　ちょっと、止まりなさい！」
今度はマイが手を伸ばす。もう壁まで五歩もない。しかし腕を捕

らえることはできても、やはりメイはマイの腕をも振り払ってしまった。否、振り払うなどという生易しいものではない。その証拠に次の瞬間にはマイは勢いをつけて尻餅をついていた。顔が近づいたせいか、絨毯に染み込んだ夥しいまでの紅がむせ返るような血臭を発する。だが今は吐き気を堪えている場合ではない。

「アレイズ様！　ティファ様でもイオ様でもどちらでも構いません、今すぐ呼んで来て下さい！」

本当ならばここに呼ぶべきではない面々。それでも、マイとアレイズの手には余ると判断しマイは咄嗟にそう叫んでいた。

「……分かった」

僅かな躊躇がアレイズの返答に間を空ける。だがここで手荒な真似をする気にはなれなかったのか、アレイズは素直に頷いて空間転移のスペルを唱えた。残像がパリンと音を立てて消えていく。その背中を見送り、マイは痛む腰をさすって立ち上がった。

「ティファ様かイオ様がいらっしゃる前に止められたらいいんだけど……」

助けを呼んでもらったからといって、ここでのほほんとなどしていられない。出来る限りのことをしなくては。大股に一歩踏み出し、大きく腕を突き出す。神の紋章とメイの間に横たわる距離には、もう幾許の猶予もなかった。

◇　◇　◇

雪の勢いが増す中、ティファとイオは廃墟の前で立ち尽くしていた。否、正確には立ち尽くしていたのはティファだけでイオはそれを見ていただけなのだが。ダークブルーの瞳はひたと廃墟へと見据えられている。寒いと文句を言うことも、隣に立つイオの身を案じることも忘れて、ティファはただ黙って三人の帰りを待っていた。そしてイオもまた、そんなティファに向けて何かを言うつもりはないようだった。腕を組んで澄んだ碧眼でティファを見る姿は、甘や

かすような優しさを見る者に感じさせる。好きなだけそうしていていいよというその視線をティファはしっかりと感じていたからこそ、何の遠慮もなく前を向いていられたのだ。

長い沈黙が廃墟前を満たしていく。降り積もる雪に負けぬ何もかもを塗りつぶす白い沈黙は、焼け焦げた廃墟の壁とコントラストをなしていた。触れ合うようで触れ合わない黒と白に、ティファはようやく詰めていた息を吐き出した。空に細く白い息が伸びる。

「全然変わらないのね、ここは。あの時と同じで、崩れそうで崩れない」

呟く。その声にイオは困ったように笑った。当然だ、イオは七年前のことを知らないのだから。ティファは少しだけ後悔するように苦笑いを浮かべてから、もう一度廃墟へと目を向けた。

まるで静寂が時を凍りつかせたように何も変わらないこの場所は、奇跡なのか悪夢なのか。ティファには判別がつけられなかった。ただ一つだけ分かっているのは、自分が足を踏み出す勇気を持たないことだけだ。

（誰よりも私がこの先に行かなくちゃいけないのに）

だというのに、今この死した屋敷の中にいるのは自分以外の面々だ。心に負った傷ならばマイにもメイにも等しくあるというのに、ティファは案じられるがままここに留まっている。それが溜まらなく悔しいのに、足が言うことを聞かない。僅かでも前進を促すとがくがくと震えてしまうのだ。それは寒さのせいなんかじゃ決してない。

ちっぽけな自尊心を満たすため、目だけは屋敷へ釘付けにする。その中に今も断片的に浮かぶ記憶の紅に、ティファは知らず呟いていた。

「ねぇ」

「うん？」

問いかけに、イオは閉じかけていた目を片方だけぱちりと開けてティファを見やる。催促する空気にティファは続けた。

「私は誰なのかしら」
世界を殺すと、他ならぬ世界に予言された存在。
それは一般的に言う人間と呼べるものなんだろうか。神にさえ命を奪われかけた非常識な人生はきっと自分が招き寄せたものだというのに、今もこうして足を踏み出せない薄情な自分は人間と呼べる代物なんだろうか。
「……それは僕にも分からないよ」
イオがふるふると首を横に振る。力ない声を聞き流し、ティファはなおも呟いた。ただ前に放つだけの意味のない言葉を。
「世界を殺すって言われても、一体どうやって？　そもそも私にはそんな力なんて無いのに」
胸の前で手をぎゅっと握り合わせる。教会で神に祈る時のような姿勢に、ティファは妙に醒めた気持ちになってふぅと息を吐き出した。――元聖女とは言え、ティファはもう神に祈れるような心境ではなくなっていた。奪われたものがあまりに大きすぎる。
放言に困惑するイオの目を見て、ようやく我に返ったティファは慌てたように笑みを浮かべて舌を出す。風に舞うスカイブルーの髪が雪の白と相まって青空を作り出しているようだった。
「なーんてね。考えても仕方ないよね？　神様に聞いても分からなかったんだし」
わざとらしくおどけて笑う。本心を全てさらけ出すにはあまりに重苦しい事態ばかりが続いている自覚があったから、ティファはすべてを冗談で済ませることにした。
（それに、簡単に答えが出ないからこそ神は実力行使に出たんでしょうね）
もっとも、そうする方がシンプルで分かりやすいからという理由かもしれないが、そもそもティファが産まれることを阻止できれば良かったのだからやはり相手は後手に回っていると言わざるを得ない。ちらりと頭の片隅で考えていると「うん、そうだよ」とイオがほっとしたように笑った。いたずらっぽく碧眼が煌く。

「それに、ティファは頭を使うのに向いてないしね」
「何よそれ！」
言いながらティファは声を上げて笑う。予想以上にからりとした声が出せたことに満足していると、イオはうんうんと頷きながら「そういうのはメイかマイがやってくれるよ」と言う。ティファが道化だと知っていてそれに乗っかる形で笑うイオの姿に、ティファはふとアレイズのことを思い出した。
（アレイズなら、何て答えるんだろう）
誰かと誰かを比較するのはあまりよくないことだと分かってはいたが、考えずにはいられなかった。あの、どこまでも人間臭く真っ直ぐな神は何て答えるのだろうかと。同時につい先刻まで胸を満たしていた不安に侵されて、ティファは呟いていた。
「三人とも、大丈夫かしら……」
ゼルの背に乗っていた時に見たようなふわふわとした雲からは想像もつかないほどの曇天が空を支配する。暗くなる世界に不安感が強くなり、やはり自分も屋敷に入るべきじゃないかと考えていると、イオがさらりとした声で答えた。
「まぁ、大丈夫なんじゃないかな。アレイズ神も付いているんだし」
鈍色の世界に満たされてやや輝きを失っている金髪に手を当てて答えるイオに、ティファはおや？　と片眉を上げた。徐々に訪れる驚きに口元に手まで当ててしまう。「何？」怪訝そうな顔をしたイオにやけに不機嫌そうに訊かれたので、ティファはつい口を滑らせてしまった。
「意外だわ。イオってば、何だかんだ言いながらちゃんとアレイズの事信頼してたのね」
だが、それに対する返答はにべもない。
「信頼した覚えはないよ。――僕と彼は敵同士なんだから」
即答だった。二人に喧嘩をしてほしくないと常々考えていたティファの浮ついた気持ちは、その一言で撃沈してしまった。やはり一朝一夕でどうにかなるものじゃない。肩を落として溜息をつくと「

ま」とイオが続けた。
「それなりに役立つとは思ってるけどね。末席とは言え、あれでも一応神なんだし？」
もしかしてこれはフォローなのだろうか。内心で呟き、ティファはふっと口元を緩ませた。
「素直じゃないわね」
「ん？」
「何でもないわよ。でも、役に立つって分かってるんなら少しは歩み寄ればいいのに」
どうやら自分があれこれ考えなくても、事態は好転しているのかもしれない。……勘違いかもしれないが。
そう思いながらもついつい口出ししてしまうと、イオはきょとんと目を瞬かせた後で首を傾げて「あぁ」ぽんと手を打った。ティファへと近づき、言ってなかったっけとばかりに付け足す。
「言っとくけど、敵ってのは僕とアレイズ神の因縁がどうとかって話じゃないよ。だから歩み寄りなんて無理」
「？　どういうこと？　アレイズの復讐の話とは違うの？」
ひらひらと手を振る姿に、ティファはますます混乱した。アレイズが殺されかけた話じゃなかったら、一体何だというのか。眉根を寄せてイオを見やる。緊張感も不安感も一気に消え失せた世界で、イオは「まったく二人して……」と何やらぶつぶつ呟いていた。しかし、ティファにはその独り言の意味さえ掴めない。
「何の話よ？」
痺れを切らして問うた瞬間、イオの独り言がぴたりと止んだ。ぴゅう、と風が吹き抜ける。何一つ変わらない屋敷の前に立っているせいか、まるで世界に自分達二人しか存在していないような錯覚に陥って、ティファはくらりと目眩を覚えた。否、目眩は錯覚のせいではなく――。
「イオ？」
ティファをじっと捉えて離さない、イオの碧眼のせいだ。

穴が開くほど見られる感覚に何故だか羞恥心を覚え、ティファは一歩後退る。その間を埋めるようにイオが前進した。潤んだような蒼い瞳は一瞬足りとも逸らされない。もしや風邪でもひいたんじゃ、とティファは次第に不安になってきた。

（神様が風邪ひくっていうのがいまいち想像つかないんだけど）

苦笑する。だがイオの視線に宿る熱に対する心配も本物だったので、ティファは自ら近づいてそっとイオの額に手を当てようとして――その手をがしっと掴まれた。

「え？」

腕が引かれる。強く、痛みを覚えるほどの力に狼狽えている間に、ティファの身はイオの腕の中にすっぽりと収まってしまっていた。

「な、イオ！？」

動揺のせいで声が上擦ってしまう。だがイオはそんなティファの動揺などまるで意に介さず、無言のままぎゅっとティファを抱きしめた。寒さに凍えた体がじわりと暖まる。凝り固まった筋肉が解される感覚にティファは目を閉じかける。が、そこでピンと張り詰めた魔力を感じて慌てて腕を突き出した。

（これは、空間転移！？）

一体誰が。数瞬悩んだものの、それが自分に流れる魔力と同色だと知り、安堵と共に焦燥感に襲われた。

敵ではない。敵ではないのだが――だとしたらこの体勢は、まずい。

「ちょっとイオ、離して……！」

慌てて声を上げ、ありったけの力でイオの胸を押す。しかし空間転移とは瞬時に空間を渡る魔術だ。元より、間に合うはずがなかった。

「ティファ……？　お前」

横手から聞こえてくる驚愕の声に、力が抜けそうになる。至近距離で、イオがほくそ笑んでいるのが見えた。最初からこれを狙っていたのか、イオは。でも一体どうしてこんなことを。

「……アレイズ」

ようやく緩められた腕から顔を出す。視線を横に向けると、そこにはティファの契約神アレイズが信じられないものを見たとでも言うように、愕然とした表情でイオの腕に収まっているティファを見ていた。

第三十三話

雪片舞う中、アレイズは一瞬自分がなぜこの場に立っているのか失念してしまった。

前方には、きつくティファを抱きしめているイオと愕然と目を見開くティファの姿がある。柔らかな金髪がスカイブルーの髪と交わり、曇天の空にはいたく不似合いな真夏の空の様相を醸し出していた。だが、そのようなことはどうでもいい。

「ティファ、お前……」

空間転移をしたとはいえ、魔力量にはまだ大分余裕がある。体調とて万全だ。だというのに、放った声は自分でも驚くほどに掠れていた。雪が降り積もる音にさえ負けるほどのか弱い声はティファの耳に届いたのか、彼女は「アレイズ」と震える声で返した。ティファとて驚いているのだろう。屋敷に入ったはずのアレイズが、わざわざ空間転移を使ってまで戻ってきたのだから。しかしアレイズは自分の方こそ驚いていると胸中で毒づいた。転移してきた先でこんな光景とぶつかってしまったら、誰だって驚く。

（この緊急事態に、一体何をしている）

七年前から何一つ変わっていないという屋敷の中で、今もマイは様子のおかしいメイを止めようとしている。そんな時に、一体何をと言われても事情を知らないティファ達は困惑するのみだろう。分かっている、その程度アレイズにとて分かってはいるのだが苛立ちが止められなかった。

「アレイズ、これはちが――ひゃっ！」

誤解だとても言いたいのだろうか。ティファはアレイズに何やら言いながら足を踏み出すが、それは許さないとばかりにイオの腕が伸び、再びティファの体を捕らえてしまった。ブーツの中の足先が冷え切っているからか、ティファは僅かによろけながらもイオの腕の中に戻ってしまう。それを見て、アレイズはこめかみに青筋が一

本浮かび出たのを自覚して次瞬困惑した。
ティファとイオにではない。苛立ちを抑えられぬ、自分自身にだ。
（俺は何を考えている……？）
腹の底からむかむかと沸き上がってくる負の感情。ともすれば感情ごと魔力をイオにぶつけて殺してやりたいほどの不快感は、一体何だというのだろうか。
自問自答する。だが、そういう時に限って答えは出てこない。
「イオ！」
「駄目。離さない」
不快感に顔を歪めて思案するアレイズを他所に、ティファは声を張り上げて拘束を解こうとする。しかし他人相手ならば剣なり魔法なり鉄拳なり使えるティファも、自分を慕う神には手を出せないのだろう。細いが力強い拘束に抗いきれないまま、困ったような泣きそうな表情でイオを睨み据えていた。
「……」
イオは、ティファの視線の抗議を無視してただアレイズを見ていた。雪片がちらつく碧眼を細めていく。勝ち誇ったような「どうだい？　羨ましいだろう」と言わんばかりの嫌みたらしい目に、アレイズは本気で魔力を叩き込みそうになってしまった。
（羨ましいか、だと？）
そんなの羨ましいに決まって――。内心で吐き捨てるように言い、アレイズははっと顔を上げた。今、自分は何と？
瞠目する。漆黒の瞳に映り込む年若い男女の姿に感じる不快感に対し、アレイズはようやく自分が抱える感情が悋気なのだと気付いた。だが、そも悋気とは元来女性が抱えるものだ。例えその定義が崩れたとしても、自分に関係があるものとは思えなかった。
（まさか俺はイオがティファに触れているのが嫌なのか）
それしかお互い道がなかったとはいえ、契約の仕方が仕方なだけにティファとアレイズの関係は一般的な契約者と神という関係とは言い難い。言うなれば、ティファは神の花嫁なのだ。とはいえ、テ

ィファは何も神の花嫁に好き好んでなったわけではなく、結果的にそうなってしまったというだけに過ぎない。神の花嫁となろうと、必ずしも神が独占してよいというものでもない。ならば、この感情は無意味だ。

何度も言い聞かせ、自己の考えを否定する。その都度強くなる不快感に、アレイズは拳をきつく握りしめた。勝ち誇ったイオの顔が憎らしい。その腕から抜け出せないティファも、こんな場所に転移する理由となったメイの異変も、そもこの屋敷に来る理由となった七年前の事件まで腹立たしく思えてくる。そこまで来ると八つ当たりとしか言いようがないが、理性が感情を止められるのならばアレイズはとうに自己の苛立ちを抑え込んでいる。それができないからこその、八つ当たりだった。

「くそっ」

心の中に溜まりに溜まった苛立ちが膨張して、弾け飛ぶ。その刹那、言葉を吐き捨てたアレイズは腕を横に突き出していた。一体何の呪文を唱えたのかも分からないまま、伸びた腕は衝撃波を生み出す。

ドォンッ！

「――え？」

風が何かに強くぶつかる音に、ティファは唖然とした顔でアレイズを凝視した。

アレイズが感情の赴くまま生み出した衝撃波は、手近な木に叩きつけられていた。精霊の力が弱まっていたのか、かろうじて生命を繋いでいた木がぎちぎちと音を立てて縦に裂ける。幹の中心に走る傷跡が、アレイズの衝撃波の強さを物語っていた。

荒い息を吐き出す。衝撃波を出すことなど容易いことのはずなのに、アレイズはその魔法に全身全霊をかけたと言わんばかりに大きく息を吐き出した。大袈裟に上下する肩に、更に苛立ちを覚えた。

眦を吊り上げ、鋭い眼光を二人へと注ぐ。多分に怒りを詰め込んだ眼差しに、ティファは驚愕と畏怖を返した。途端、アレイズの心

が冷えて落ち着きを取り戻そうとしたが滑り出た言葉は止まらなかった。

「ティファから離れろ」

底冷えする声に、ティファが身を縮こまらせる。

小さくなる肩に、アレイズは僅かに罪悪感を感じたが元はと言えばイオを突き放せないティファのせいでもあると強引に決めつけて、今までの旅の中で一番――フランがティファを口説いているのを見た時よりも――冷ややかな声を訂正せずにおいた。

斬りつけるような声に、イオはティファを抱きしめたまま肩を竦めた。

「どうして？　ティファは君の所有物じゃないはずだけど。神の花嫁って言っても、君の契約の仕方がおかしいだけだし」

まさしくアレイズが悩んでいた通りのことをずばりと突かれ一瞬たじろぐものの、肝心なことを思い出してアレイズは仁王立ちのまま不快気に鼻を鳴らした。

「状況を鑑みて言え。何故俺が戻ってきたと思っている」

その状況を今の今まで口に出さずに苛立っていたのは自分なのだが、そういうことは棚に上げておくに限る。アレイズの言葉に片眉を上げたイオと、息を呑んだティファを見据えて続ける。

「神の紋章を見た途端、メイの様子がおかしくなったから助けを呼びに来た。だから――」

急がなければ。そう続けられるべき言葉は、しかし別の言葉に取って変わっていた。

「――抱き合うなら後にしろ」

「なっ……！」

嘲る声にティファがさっと顔を紅に染める。心底腹を立てているのだと分かるものの、腹を立てたいのはこちらだとアレイズはティファの怒気を無視した。

「何だ。それなら早く言ってよ」

イオはアレイズの言葉など気にならない様子で、呆れたように言

いながらすぐさま魔力を展開して空間転移を始めた。ふわりと風に舞い、金の髪が消えていく。屋敷の構造についてイオは明るくないだろうから、恐らくはメイとマイの気配を辿ったのだろう。

一方、ティファは空間転移をせずに呆然と立ち尽くしていた。どこまでも冷ややかなアレイズの態度に、常ならばありえないほどの早さで怒気が冷えたのか。ティファはダークブルーの双眸を目一杯見開いて「ジュード」掠れた声で呟いた。まるで迷い子のような心許ない声に、アレイズはぎり、と歯を噛み締める。

アレイズとて、あのようなことを言うつもりはなかった。今の状況で最も急がねばならないことはメイを止めることであって、ティファを責めることではない。そも、ティファは責められなければならない立場ですらない。

（ならばなぜあんなことを……）

無意識とは言え自分がしたことだ。だというのに、アレイズには理由が掴めなかった。悋気など、今まであまりに無縁だったのだ。どう向かい合えばいいかなど分かりはしない。

心を渦巻く疑問と後悔と苛立ちに決着をつけられないまま、アレイズはふいと顔を逸らす。

「急げ」

端的なその声に、ティファは凝った息を吐き出してから足を踏み出す。そうして隣に並ぶのを確認してから、アレイズは魔力を展開して空間転移を開始した。ティファが空間転移をした所を見たことはあるが、あの時は状況が状況だっただけに今回はアレイズが運ぶ気でいた。

暗転する空間を渡り歩く。ティファは黒尽くめのアレイズの背中を追いながら、突然開けた世界に茫洋とした視線を向けた。意識が遠のいていくような魂が抜けていくような光のないダークブルーに、アレイズは辺りを見渡してようやく心からの後悔の念を覚えた。

雪が降る屋敷前から、アレイズ達はあの惨劇の場へと転移している。だが、転移する前も間も終始無言だったアレイズは――。

（何故思い出せなかった）

否、何故思いやれなかった。

惨劇の場に折り重なる男女の死体。水分を抜かれて枯れた花。神の紋章。

何の前情報もなしに見せなくてよかったと安堵していたのは、一体誰だ。

何も伝えずにここに連れてきたのは、一体誰だ。

既に転移を終えたイオはメイを止めようと神の紋章前へと駆け寄っている。だがそれを手伝う気には毛頭なれなかった。

「ティファ――！」

ティファの肩を掴み揺さぶる。

「父様……母様……」

見開かれた蒼い瞳から、滂沱のように涙が溢れ出た。

◇　◇　◇

空間を渡りながら、ティファは先程アレイズが放った言葉を思い返していた。

『抱き合うなら後にしろ』

（何でそんなこと言うのよ……っ！）

凍えるような声に、再び体が震えそうになる。

――あんな声、初めて聞いた。

自分の契約神が本気で激しているのだと知りティファは泣きたい気持ちになるが、そんなことは言っていられないほどに事態は緊迫していることも自覚していた。メイの身に何が起こったかは分からないが、尋常ではない。

前方を行くアレイズは、無言のままの背中を向けている。転移するまでの一秒にも満たない短い時間。その間に誤解を解けるとも思えず、ティファはまずは目先の問題を解決しようと気を落ち着け――眼前の光景に、意識を凍らせてしまった。

転移した先は、かつて夢に見た部屋だった。
夢とは異なり燭台の火は燃え尽きている。だが、逆を言えばそれだけしか違いがなかった。
「嘘」
ぽつりと零した声と同時に、慌てて扉に目を向ける。ティファが立つ場所から扉まで染み込んだ、夥しい量の血。割れた窓ガラスから入り込む風を無視していつまでも漂い続ける血臭は、質の悪い冗談か何かか。あるいは自分が血を見てあるはずのない匂いを感じているのかもしれない。だが、答えを出す時間も必要性も見つけられないままティファは扉から目を背けた。
倒れた時に割れたのだろう。花瓶は陶器の破片が散乱し、見るも無残な体で室内に転がっていた。中に入っていたアリシアの花は水分を抜き取られ、元々の色が何だったのかさえ判別させないほどに茶色く変色していた。額縁に入れられた絵は焼け爛れ、はらりと煤を落とす。
それぞれの命としては死して変質した存在。だがそれらは全て七年前の惨劇のまま、変わらない姿でティファの目に映っていた。ならば、彼らは――。
「ティファ！」
アレイズが肩を掴んで揺さぶる。先程までの冷たさとは一変して慌てた様子に、ティファは自分の予想が正しいことを悟った。アレイズの言葉を無視して、そこにあるはずの亡骸に目を留める。
「父様……母様……」
二人は自らを舐めたであろう業火の影響を受けず、綺麗なままの体でそこに倒れていた。綺麗なまま、自分達の命の紅を流していつまでもいつまでもそのままでいる両親。色褪せ、骨さえ残らないと予想していた死とはあまりに違う対面に、ティファは夢で見た時と同じ嘔吐感に耐えながら足に力を入れた。まるで今まさに死したばかりだと思わせる亡骸に、どくどくと心臓が早鐘を打つ。
（もしかして私はまた）

「また、助けられなかった……？」

両親は本当は今まで生きていて、ティファが助けに来るのを待っていたのではないか。そして自分は間に合わずに、両親は死んでしまったのではないか。

ありえない考えだ。そもそも両親は七年前に確実に死んでいる。ティファとてそのぐらいは分かっていた。ただ、自分が知る過去に自信が持てなくなるほどに両親の死体は新しすぎた。

（違う――違う違う違う！）

心の中で叫ぶ。涙がこみ上げて、ぼろぼろと頬を伝った。

よろよろと前に進み、亡き両親の骸の前にしゃがみこむ。そうして二人の体を撫でたティファはびくりと手の平を引っ込めた。つい今しがたまで命があったように感じられる温さに、今度こそ嘔吐しそうになる。

遠くではメイを止めるべくマイやイオが奮闘しているのが見える。だがそれが見えていてなお、ティファは前に進むことができなかった。ぺたんと座り込み。血臭に包まれて天井を仰ぎ見た。

深海を思わせるダークブルーの瞳からはとめどなく涙が溢れている。よほど耳を済ませない限り聞こえないような嗚咽を上げながら、ティファはしかし哀しみとは違う思いに心を奪われそうになっていた。

（七年前に二人は死んでいる。じゃあ、これは誰の仕業なの）

七年前と変わらぬ姿で、変わらぬ死体のままこの場に在り続けることを余儀なくされた両親達。こんな残酷なことを、一体誰がした。

「許せない」

大切な人達の死を弄ぶ行為に、ティファは殺意を吐き出すように呟いた。瞬間、記憶が蓋をこじ開けられたようにティファの脳裏に浮かび上がってきた。

両親が死ぬ光景。焼け落ちる屋敷。そして――何一つ救えなかった自分。

（私にもっと力があれば）

治癒の魔法を知っていれば、自分を殺そうとする敵に抗う術を知っていれば。せめて――相手を殺してやれれば。そうすれば、こんな残酷な事は起こらなかった。

湧き上がる殺意に手を握り締める。そして気付いた。――敵なら、知っているではないか。

ゼルの言葉。世界の予知夢。世界の意志を殺す、ティファニエンド。

いつか殺されるという予知夢を現実にしないために神が動いたのなら、自分が殺すべきなのは神だ。だが、全ての元凶はティファニエンドの名を出し安寧を乱したレイナだ。ならば自分は死んでしまった者達の敵を取るためにどうすればいい？　犯人が見つからない今、自分はどうすれば。

（そんなの簡単だわ。神は世界の意志があってこそ存在する。だったら、世界を殺してしまえば――……！？）

答えを見つけた歓喜と殺意に震えた声が胸中に木霊する。その刹那、ティファは目を見開いて吊り上がった口の端を慌てて元に戻した。心を覆い尽くす殺意が霧散する。

（私、今何考えてた？）

見下ろす手ががくがくと震える。この手は、一体何をしようとしていた？　世界を殺す手、殺すために歩む足、どう殺すか策を練る頭。その全てを否定すると誓ったのに、いとも容易く殺意を抱いた自分は――。

ティファはおずおずとアレイズを見上げる。彼は正気を取り戻した様子のティファを見下ろし、ほっと安堵の息をついて「少し休んでいろ」と言い残しメイの元へと駆けた。恐らく、メイを止めたいと思いつつもティファが落ち着くまで離れられなかったのだろう。いつも通りの、素直じゃなくも優しい神。だがティファはアレイズの柔らかな表情を思い返し、心が鋭い刃で傷つけられたように顔を歪めた。

（絶対レイナの所に連れて行くって、決めたのに）

自分を救ってくれた神。彼のために自分は絶対アレイズを世界の所に連れて行くと決めたのだ。誰も殺さずに、アレイズを悲しませずに願いを叶えてあげようと。だというのに、ティファは今も胸に燻る殺意を完全に消し去ることができずにいる。殺しただけでは飽きたらず、いつまでも時を止めたままでいる残酷な神に対する殺意がいつまでも消えてくれない。

「殺してやりたい」

誰もが目を逸らすような残酷な死を与えてやりたい。温かな家族を奪った罪過を身に浴びせてやりたい。そしてこの惨劇を、どこかで見ていたであろう世界を責め立てたい。だが――。

（殺せない。殺せるわけないじゃない……！）

世界を殺す力があろうとなかろうと、ティファには世界の意志たるレイナを殺すことなどできはしない。それは、誰よりもアレイズを傷つける。だが、それなら一体自分はどうすればいいのか。

殺したい、殺せない。殺したい殺せない殺したい殺せない殺したい殺せない――！　胸中で狂ったように叫ぶ。そうしてティファは、もう何度目かになる「殺せない」を呟いてから気付いた。誰かを殺すとか殺さないとか、そういう問題ではない。――自分さえ産まれてこなければそれで事は足りたのだ。だが今死んだ所で、誰一人生き返らない。喜ぶのは敵である神と世界だけだ。

「どうして」

何故自分が生まれたのか、生き残ったのか。何故ここで、情けなくも座り込んでいるのか。殺したいと思いつつも殺せないまま、一体どこに行こうというのか。もう何もかも投げ捨ててしまいたい衝動に、ティファは頭を抱えた。

「もう、嫌……！」

その時、何が起こったのか部屋中が白光に包まれる。白銀の刺すような光はティファの両親の死骸もアリシアの花も消し去っていく。

消えてしまう、何もかも。そう感じたものの光を消す術を知らないティファは、また何もできないのかと思い知らされた。自分はま

た、目の前で起こる事態に何一つ対応できないまま大切な物を奪われるのかと。

殺意と誓いと願いと空虚が胸を支配する。混沌と混ざり合った感情に、ティファは耐えかねたように叫んでいた。

「――あぁぁあああっ！！」

（殺したい）

誰にも殺意を抱かずにいられると甘い考えを抱いていた自分への怒りと。

（殺したくない）

けれども誰も殺したくない自分の強い声と。

（私は、人間でいたい――！）

自分は人間でいたいと願う強い叫びが生み出すジレンマに、心の傷がビリビリと裂けていくようだった。

◇　◇　◇

メイの様子がおかしいことすら失念して泣き続けていたティファは、やがてアレイズを恐れるように視線を上げた。その瞳に宿る理性に、アレイズはほっと息をつく。怯えている様子は気になるが、恐らくは両親の死体を目の当たりにしたからだろうと判断する。

先程まで苛立っていたのを捨て置き、アレイズはティファへと手を伸ばす。傍にいるからそんなに恐れなくてもいいのだと伝えたかった。だが、スカイブルーの髪に触れる前に手は止まった。

「駄目です！　アレイズ様、急いでください！」

マイの悲鳴が耳朶を打つ。どうやらイオとマイの力ではメイは止められなかったようだ。

今までは無理矢理にマイのモーニングスターでメイが壁に触れるのを防いでいたものの、それも限界に近い。イオは魔法を使おうにもメイを傷つけてティファを悲しませる事を躊躇っているのか体を羽交い締めにしているが、どんな原理かメイはイオの力をものとも

せずに前進する。
「ちっ……ティファ、お前はここで少し休んでいろ！」
悲鳴を受けて、アレイズは急いでメイの下に駆け寄った。ティファの事は気がかりだが、今一番優先されるべきはメイを止めることだ。神の紋章に触れたからとて何が起こるとも思えないが、尋常ではない様子がアレイズ達に楽観視することを放棄させていた。
神の紋章へと近づき、二人がメイを押さえつけている間に一体紋章が何を起こしているのか確認すべく目を閉じる。そこから魔力の糸が伸びていやしないかと探るためだ。その耳に、ティファの声が滑りこむ。
「どうして」
囁いたはずの声に、しかしその場の誰もがティファの方を振り向いた。理性を失っているはずのメイでさえ、一瞬動きを止める。四人分の視線を受けつつ、ティファは自己の世界に入り込んだように虚ろな目をさ迷わせた。
「もう、嫌……！」
絶望し、怯えきったティファの声に、アレイズは集中していた意識を乱される。その隙をつき、いち早く動いたメイが二人の腕をすり抜けて紋章に指を触れさせようとする。するりと流れる真紅のメイド姿に「しまった！」と声を上げたアレイズだったが、時既に遅し。
とん、とメイが神の紋章に指先を触れさせる。瞬間、メイの体が仰け反った。幻覚のようにメイの体が一瞬ぶれる。
「メイ！」
甲高いマイの悲鳴が室内を埋め尽くす。
その間にも、ぶれた体は元に戻った。紋章から光が迸り、白銀が部屋を覆い尽くす。
「く……っ！」
「一体、何がどうなって……！」
目を焼く光に、アレイズとイオがきつく目を閉じながら言い放つ。

瞼を僅かでも開いていたら視力を奪われてしまうほどの鮮烈な光は、閉じられた瞳によって与えられた闇さえも明るく照らした。

（ティファは、ティファはどうなっている！）

未だ収まらない光の中で、アレイズは焦燥感を募らせる。ティファの虚ろな瞳を思い出す。何者をも覆い尽くす光の中、彼女は無事でいるのか。

アレイズがティファの身を案じ、光が消えていくことを願った、その時だった。

「――あぁぁあああっ！！」

「ティファ様！？　ティファ様、どうなさったんですか！？　ティファ様！　返事をしてください！！」

近いのか遠いのか、距離感さえはっきりしない場所でティファの絶叫が聞こえ、マイが半狂乱になってティファの名を呼ぶ。アレイズも同じように「ティファ！」契約者の名を呼んだ。

（何があった。まさか、誰かに攻撃されたのか！？）

「アレイズ神」

「貴様は何か感じるか？」

焦りを含んだイオの声に、アレイズは早口に返す。するとイオが首を振った気配を感じた。

「ティファが攻撃された様子はない。……でも、何かが来るのは分かる。このままじゃ」

答えが、アレイズとイオの心に更なる焦りを生み出す。前方では、ティファと同じようにメイの絶叫が聞こえた。

「メイまで――くそ、何が起こっている！」

「ティファ！　メイ！」

「しっかりしてください！　ティファ様！　メイ！」

相手の姿が見えない目くらましの状態で、三人はティファの絶叫を聞き声を張り上げる。

場は、混乱の極みへと至った。

◇　◇　◇

数分の後。ようやく光が収まった頃にアレイズが目を開くと、室内には男女の死骸の他に、青い髪の少女と長い亜麻色の髪を乱れさせたメイド姿の少女が横たわっているのが見えた。

「二人ともっ！」

マイが慌てて駆け寄る。二人の顔へと耳を近づけ、ほっと息をつく。その様子に二人が無事であることを知り、アレイズも深く息を吐き出した。だが、事態はそこで終わらなかった。

「ようやく覚醒したようだな」

誰のものでもない第三者の声が、窓ガラスの外から放たれた。目を見開いたアレイズは、メイを抱えて後ろへと下がる。いつでも魔法を出せるように意識を集中させていると、ふわりと風に舞って一人の男が入り込んできた。

硬質な銀の髪と双眸を持つ、おおよそ人間らしいとは言えない風貌の男。彼は室内に立つイオを見るなり「ふん」と鼻を鳴らした。

「誰かと思えば貴様か。この裏切り者めが」

嘲る声に、イオが一歩後ずさる。緊張感を孕んだ声が、男の名を呼んだ。

「ダグラス……」

二人の少女は、まだ目覚めない。

第三十四話

この世に生まれ落ちた時から、マイの日常はこの屋敷でのみ展開されていた。

キビキビと働く傍らで自分達を育ててくれた父母、血を分けた双子の妹、使用人の子どもを実の子のように可愛がってくれたグランハート一家。マイが見る世界は彼らによって構成されており、他のものはあってないようなものだった。

その世界でマイが最も心を砕いた存在がティファだった。

今でもマイは、自分がたった二歳という物心ついていない時期だったにも関わらず、ティファが産まれた時の事を思い出すことができる。忙しなく廊下を右往左往するグランハート当主、夫人の絶叫に近い悲鳴。ひたすら励まし続ける産婆と、夫人に声を掛け続ける母。あの日、屋敷の全ては産まれてくる子どものために動いていた。そしてマイも、メイと一緒になって夫人の悲鳴を聞いて怖がりながらもその時を待ち続けたのだ。

何分幼い頃の事なので、当時感じた空気や、恐怖と不安、何が起こっているのだろうという好奇心の残滓しか感じることはできないが、それでも十分すぎるほどだろう。ともあれマイは産まれてきた女の子の手を握って、その小ささに驚いた時からこの子を大事にするのだと決めたのだった。恐らくはメイも同じだろう。

お互い成長し、言葉を交わせるようになり双子とティファは初めて出会った時よりずっと親しくなった。優しい両親に囲まれて真っ直ぐに育ったティファの笑顔をメイと二人で追いかけた、あの楽しくも温かな時はマイにとって宝物以外の何者でもなかった。庭一面に咲く、真っ青なアリシアの花も午後の日差しも、遠くへ行かないようにと背中にぶつかる父母の声も、全てが当たり前に続くと思われたものだった。

その穏やかな日々は、一体いつから崩れ始めたのだろうか。

マイにとって、ティファはもう一人の妹であり親友であり主。だから例え、真っ青な髪と瞳という異常な色を持っていても気になどしなかった。父母や当主達はティファが何者なのかを気にしていたようだったが、マイはそんな家族に何を大袈裟なと考えるばかりだった。そんなことよりも「自分は自分だ」と言い続けるティファの姿が痛々しくて見ていられなかった。だが、今思えば、それが間違いだったのか。

呪文の詠唱なしに空間転移を行える人間。その特異性にもっと早く気付くべきだったのかもしれない。もっとも、ティファが易々と空間転移を扱えたのはアレイズの魔力あってのことだろうが、それだけの膨大な魔力をあっさりと扱えることからして問題だったのだ。これればかりはアレイズと契約しない限り気づけなかったこととはいえ、事ここに至ってマイは激しく後悔していた。

狙われたのが当主達ではなくティファであることを、マイは逸早く察知して避けるべきだったのだ。

（メイが真相を知りたがらなかったのは、これを予感していたからかもしれない……）

胸中で呟き、マイはぐったりと倒れたまま動かないティファを抱き上げて眼前を睨み据える。

（きっとあの男が、七年前の犯人。そして、屋敷の時を止めているのも――）

確証はない。だが、マイの腕を流れるスカイブルーの髪に向けて放たれる濃密な殺気は、マイにそう確信させるだけの力があった。今すぐにでも自分達を切り刻めるとでも言うかのような、悠々とした態度で浮かぶ銀髪の男。マイはティファを抱えてじりじりとメイに近づきながら、ぎゅっとモーニングスターの柄を握りしめた。

相手はイオと同じ高位の神。だが、それがどうした。

（もう誰も殺させはしない）

泣かせはしない、悲しませはしない。

何度も胸中で繰り返し、マイは意識を失ったままのティファを見

下ろした。

七年前の惨劇の後、しばらくは笑うことを忘れてしまったようにぼんやりとしていたティファ。時間を掛けてようやく笑えるようになった彼女は今、頬に涙の跡をこびりつかせている。青白い肌を見て、屋敷内の光景がティファにとってどれだけ衝撃的だったのかを知った。否、もしかしたらティファはこの惨劇の理由を知っていたのかもしれない。そうでなければ、あのように狂ったりはしないはずだ。だとすれば、何と自分は愚かなことか。真実を知りたいばかりに、ティファを最も近づけてはならない場所へ近づけてしまったのだから。自分もアレイズも、もっと気を遣わなければならなかったのだ。――だがそれも全て後の祭りだ。

「ティファ様……」

冷たい体に呼びかける。指先一つ動かない体を見下ろして、マイは唇を噛み締めた。

顔を上げ、殺意を跳ね返すように意識を集中させる。張り詰めた気が、しんしんと降り積もる雪の気配に重なった。

◇　◇　◇

「ようやく覚醒したと思って来てみれば、まさか貴様に会うとはな」

ダグラスと呼ばれた男は、マイの視線を無視して長い髪をかき上げながら面白くもなさそうに言う。まるで人間が見えていないかのように振舞う姿は、マイ達が一度たりとも見たことがない神らしい態度だった。傲岸不遜でおおよそ人間味に欠ける姿。こんな神がティファの契約神でなくてよかったと心底思っていると、イオが呟いた。

「どうして君がここに……」

言いながら、既に答えは見つけているのだろう。イオは碧眼を滑らせ、ちらと壁に描かれた神の紋章を一瞥して吐息した。

「ティファの話から僕と同程度の神の仕業だってことは分かってた

けど、こんな悪趣味なことをするのが君だったのは驚きだよ」
「そうか？　なかなか良い余興だと思ったんだが」
吐き捨てられた毒に、ダグラスが目をぱちりと開いた。水銀をとろりと垂らしたような銀の瞳が光る。心から良い余興だと思っていたのだろう。若干残念そうな声色にイオは眉根を寄せて刺々しく言い放った。裏切り者、とダグラスが言っていた所からして仲が悪いのかもしれない。
「はっきり言って悪趣味極まるね。よくやるよ、まったく。――で」
イオの双眸が剣呑な光を帯びる。だがやはり同位の神との戦闘は経験がないのか、横顔からは緊張感が滲み出ていた。屋敷に入らずティファと外にいた事からして、イオはダグラスが犯人だと知らなかったのだとマイは予測した。
微かに動揺が感じられる、しかし静謐な声が耳朶を打つ。
「七年前、この屋敷の人間達を殺したのは君か」
場の空気がこれ以上ないほど張り詰める。核心を突くイオの問いに、マイの頬が強張った。視界一杯に室内の様子が飛び込んでくる。イオも同じなのか、彼はやるせない様子で目を細めた。
時を止められるという酷い仕打ちで取り残されているグランハート当主と夫人の骸。崩れそうで決して崩れない廃墟。結界でも張られていたのか、誰も近寄らずにいたかつての権力者の屋敷。今に至るまで悪趣味にも保存されていたとはいえ、元はと言えばこれは七年前に起こったことだ。そしてその惨劇を――。
（ここにいる神が……）
唾を飲み込み、震える手の平を握り締める。むせ返るような血の匂いと全てを消し去ろうとする雪の匂いの対比、何より緊張感にどうにかなってしまいそうだった。
イオはティファやメイを庇うように立ち、湖面を思わせる静けさのまま目だけに力を籠めてキッとダグラスを睨めつけた。今まで様子を伺っていたアレイズも、ダグラスの返答次第ではいつでも攻撃できるようにと剣を鞘から抜いていた。

「どうなんだい？」
　ティファの前では決して出されることのない、静かな怒気を孕んだボーイソプラノが響き渡る。だが、ダグラスはそんなイオの怒りを受け止めながらも何が可笑しいのか、愉快そうに喉を鳴らした。くつくつと、こんなに楽しいことはないと言わんばかりに肩を大きく揺らす男の姿はこの状況では狂人にしか見えない。しかしダグラスが狂人でないことは、次瞬放たれた答えによって明らかになった。
「そうだ。だが、それがどうした」
　何の悪びれもない声は冷酷極まるもので、マイはダグラスの声を聴覚で受け止めた瞬間ぞくりと背筋を凍らせた。狂気ではない。どこまでも冷えた正気でダグラスは屋敷の人間を殺したことを当たり前だと思っている。殺された者達の命など、この男の前では虫けら同然なのだと知った瞬間マイは無意識のうちに立ち上がっていた。
（神は畏れ敬うもの。でも、それは神が人の命を奪っていい理由にはならない――なのに、この男は）
　泣いて詫びろ、悔い改めよと言うつもりなど毛頭ない。だが、決して彼らの死を当たり前になどしてはならない。モーニングスターの柄をきつく握り、マイは一歩踏み出しながら不思議と殺意が湧かない自分に驚いていた。
　無論、赦しを与えているわけではない。時が解決したことだと水に流すつもりもない。
　ただ――。
（これ以上被害を出させない方が先決だわ）
　肝心なのは今生きている人間を守り通すことだ。そう考え、自分がこんなに前向きな性格だったのかと呆気に取られそうになった。だが、例え眼前の神に死を願った所で無意味であることも分かっていた。
　血を流させ体を枯らせる、業火の中に放りこむ、生きながら地に埋める、一つ一つ拷問にかけながら緩やかに死を与えていく。酷い殺し方には多くの方法があるが、そのどれもがマイの納得がいく殺

し方には成り得なかった。きっと死では甘すぎるのだと結論付け、じゃらりと鎖が揺れる音に意識を集中させる。

突然、その手をアレイズに掴まれた。ぐいと体ごと後退させられる。

「お離しください」

「駄目だ。……今奴と戦うのは危険過ぎる」

眦を吊り上げて冷ややかに抗議すると、アレイズは囁きながらもゆっくりと首を横に振る。そのままイオへと視線を滑らせ「今は様子を見るべきだ」と至極真っ当なものを言うものだから、マイはきつく唇を噛み締めた。ぷつ、と破れた唇から小さな玉となって血が落ちた。

戦意を奪われ、続いて生まれた耐え難いほどの悔しさに目頭が熱くなる。そうしてマイが目尻に涙を浮かべるのを横目に、アレイズは彼女の手を掴んだまま「あの神は、何故この屋敷を」と独りごちる。それが聞こえたわけではないだろうが、イオが腰に手を当ててダグラスに近づいた。金と銀の髪が室内の景色は不似合いなほどに眩しい。

「君がこの屋敷を襲ったのは、レイナの予知夢があったからだね」

イオの口から、今度は別の問いが発せられる。

（レイナ、ですって？）

放たれた名前にマイが目を剥く。

それは紛れもなく、この世界の意志――神々の統率者の名だ。しかし、予知夢とは一体。

途端に掴まれていた手に酷い圧迫感と痛みを感じ呻き声を上げる。何事かと隣を見るが、アレイズは手に力を籠めたことなどまるで気が付いていない様子で、目を見開いてイオとダグラスを凝視している。二人の眩しい神がこの部屋に光でも与えているのか、アレイズの柔らかそうな睫毛が震えていることまではっきりと認識できた。

「イオ！」問い質すようなアレイズの声。だがそれに重なるように、至極あっさりとしたダグラスの声が返った。

「肯定だ。そうでなければ、わざわざ人間を殺す理由がない。俺もそこまで暇ではないのでな」

にやりと口の端を上げて嘲るダグラスに、胸の奥底から怨嗟が飛び出しそうになりマイは自分の腕を掴む手の存在を無視してダグラスに掴みかかろうと前に踏み出す。深青が流れる様にアレイズが我に帰ってマイの腕を引くと、そこでようやく気付いたのかダグラスはマイ達に視線を向けた。

銀の双眸がすっと細められ、マイとアレイズの姿を上から下まで検分する。と、笑んだ口の端が更に吊り上がり「やはり貴様は裏切り者だな、イオ」と実に楽しげな声が響いた。

「まさかあの時呪いをかけた人間と行動を共にしているとは。こんな人間を連れて、貴様こそ悪趣味ではないか？」

くいとダグラスが顎でしゃくってみせた先にはアレイズが立っている。「な……っ！」彼は愕然とダグラスを凝視するが、話を振られたイオはいつもの飄々とした笑顔で返す。

「アレイズを神にしたのはレイナだから、命令違反にはならないはずだよ」

「ふむ、正論だな。だが趣味が悪いことには変わりない」

マイからすればどう考えても趣味の悪さではダグラスの軍配が上がると思うのだが、言われてみればイオも変わっていることに気がついた。森でメイを操った時、イオはアレイズを呪い殺そうとしたと言っていた。だというのに、今彼らは同じ人間を守るようにして立っている。ダグラスのように趣味が悪いとまでは言わないが、些か複雑な関係だとマイは眉を顰めた。

ダグラスの背後で雲が晴れていき、温い日差しが差し込む。眩しさに目を細めると、一人だけ深い闇を纏ったアレイズが口を開いた。

「貴様もあの場にいたのか」

あの場とは、アレイズが神々に呪い殺されそうになった時か。黙ったままやり取りを見守っていると、ダグラスは整いすぎてもはや人間らしさの欠片もない端正な顔を不快げに歪めた。下々の者とは

話したくないということだろうか。だとすれば、本当にどこまでも傲慢な神だと聞いているこちらが不快感を覚えた。

これだけ人に不快感を与えられる存在も珍しい。ある意味尊敬に値するが、ダグラスに伝えようものなら褒め言葉として受け取られそうなので口にはせずにおいた。誰も敵である神を喜ばせる気などないのだから。

（それよりも今は、どうやってこの場を切り抜けるかを考えなければ）

敵は高位の神。そして味方は敵と同位の神に低位の神、そして人間が一人。数だけならば何ら問題はないが、一度殺されかけたマイにはそれだけの優位が見えていても不安が拭えなかった。死のトラウマは通常時の冷静さえ奪ってしまう。それが故に、自分が納得し余裕を持てるだけの策が欲しかった。――もっとも、そんなものがあれば何の苦労もしないのだが。

怒気と不快感を顕にしたまま、ダグラスは腕を組んで答える。

「何だ、憶えていないのか。やはり強制的に神になんぞするからこうなるんだ。自分の記憶一つ管理できぬ神を創って、レイナも何が楽しいのやら」

嘲笑にアレイズが殺気立つ。だがマイを止めるだけの冷静さがあるアレイズのことだ。彼はすぐにダグラスと似通った笑みを持って首を振った。

「確かに前後の記憶が曖昧なことは認める。……だが、俺は貴様を見た憶えがない。もしもあの場にいたというなら、影が薄い自分を恨むんだな」

ダグラスの片眉が跳ね上がる。刹那、面白い玩具を見つけたとばかりに口元が歪められた。中性的で端正な顔立ちは、男女のどちらが見ても黄色い歓声を上げそうなものだというのに、ダグラスにはこうした狂気を孕んだ表情がよく似合うことが不思議だった。

「ならばその記憶は正しい。俺はあの時貴様を閉じ込める結界を作るために別の場所にいたからな。不運だったな人間。あのまま死し

ていれば次の世で安穏としていられたものを、レイナに気に入られたばかりに死ぬことすらできぬか――レイナは貴様を神にしたという話だが、俺には貴様が亡霊に見えるぞアレイズ。忠誠を誓う相手さえ与えられず、ただ永遠を生きる。何とも残酷な話ではないか。なぁ？　イオ」

「さてね、アレイズ神がそれを不運に思うかどうかは彼次第だよ。大体、僕にはどうでもいい話さ」

ダグラスの言葉の真意を確かめるべくアレイズがイオを一瞥すると、彼はアレイズの方を見ることなくただ一度だけ首を縦に振った。ダグラスがかつてアレイズには見えぬ場所で暗躍していた事も、世界の意志たるレイナがアレイズを神にしたことも、全ては真実なのだと教え諭すように。

寒風にアレイズの外套が揺れる。ティファの頬と同じぐらいに真っ青な横顔が、痛みを堪える度に次第に熱を帯びていくようにマイには見えた。恐らくは、呪いを掛けられた時の事を思い出しているのだろう。そして記憶を探っている。真実を得るために。

（私もアレイズ様のようだったらよかったのに）

アレイズのように大切に想っている者こそが事態の元凶だと言われるのは真っ平御免だが、記憶を失ったのがメイではなく自分であったなら自分自身の責任のみで記憶を欲しがれたものを。もっとも、三人が三人とも惨劇の舞台に関わっている以上自分だけの問題では済まされないのだと今まさに思い知らされているのだが。

ティファとメイに視線を向ける。寒さに震えるでもなく、目の前で繰り広げられている神々の会話に気付くでもなく昏倒し続けている二人の顔色の悪さを見て取って、マイは早く温めてあげなくてはとやきもきした。だがどれだけ焦ろうと、神々の剣呑極まりない会話が終わる気配は見られなかった。

ダグラスは誰彼構わず嘲笑を浴びせかけ、イオはにっこりと笑顔のまま刺を撒き散らし、アレイズは飛んでくるそれら諸々のものを跳ね除けながらも斬りつけていく。これではきりがない。

そもそもマイは、アレイズが神となった原因に興味がなかった。イオの台詞ではないが、その辺りの事情もアレイズが自分を不運だと思い込むかも別に関係がないのだ。そもそも、そんなことは世界の前で勝手にやってくれればいい。

どうやって会話に斬り込むか思案していると、マイと同じ考えのイオが「そんなことより」と軽い口調で言い放った。

「僕にはもう一つだけ、君に訊かなきゃいけないことがあるんだ」

「何だ？　同じ神の誼だ。答えてやる」

アレイズなど眼中にないと言わんばかりのイオの態度に、やや意外そうな顔をしたダグラスが促す。するとイオはにこやかに「ありがとう」と言ってから続けた。

「レイナの予知夢の件でここに来たって言ってたよね」

「あぁ、そうだ。ティファニエンドが生きている限り、いつまで経っても用事は終わらないからな。おかげでこちらはティファニエンドがあのくそ忌々しい聖堂から出て来るまで待ちぼうけだ」

ダグラスの言葉を予想していたにも関わらず、マイはびくりと身を震わせた。ティファニエンドが生きている限り。それはやはり、殺害目標がティファにあることを指している。恐らくそれは、七年前から今に至るまで変わっていないのだろう。レイニウム大聖堂が如何様にしてダグラスを近付けずにいられたのかは分からないが、彼はティファが外に出るまでずっと待ち続けていたのだ。こんな趣味の悪い術を施してまで。

（私達には居心地が悪かったけれど、大聖堂はシェルターだったのね……ティファ様を神の手から御護りできるほどの）

ならばいっそのこと一生そこに留まった方がティファにとっては良かったのかもしれない。そう考え、マイはアレイズに対し理不尽な怒りを抱いた所で違和感に気付いた。そういえば自分は、何故ティファに対して腹を立てないのだろうかと。

自分の両親が殺された原因がティファにあったというのに、マイはそれについて何の感慨も抱いていない。それよりもずっと、ただ

彼女に生きていてほしいと思っている。
（父さんと母さんは、こんな娘を恥じるかしら）
疑問に思いながらも、マイは即座に否と断じた。恐らく二人がティファを責めることはないだろうと思えたからだ。もし責めるつもりだったのなら、最後に怨嗟の一つでも吐き出していたことだろう。それがなかったということは、つまりはそういうことなのだ。
（そう、だから私はこの方を守ることに何ら疑問を抱く必要なんかない）
ティファが世界の予知夢とどう関係があるのかは分からない。そのために神に命を狙われる理由も、無論理解出来ない。だがどんな理由を並べ立てられようと、ダグラスがティファを殺すことを許す日は来ないだろうとマイは確信していた。ならば自分は自分の望みのために、ティファを守るだけだ。
「一応訊いてみるけど、ティファニエンドをどうするつもりだい？」
ただ、そんなマイでもニコニコと笑ったまま放たれたイオの声には背筋を凍らせた。見れば、アレイズも同じようにひくりとこめかみを引きつらせて冷や汗を流している。
理由などない。イオは剣呑に目を光らせているわけではないし、武器を突きつけているわけでもない。だが何故か、この嵐の前の静けさのような凪いだ声が恐ろしかった。
（この神がティファ様を殺すなんて言った日には、何をしでかす事か……）
無論マイも自分が何をしでかすか正直予測することは不可能だ。とりあえずティファを守るために立ち回ることぐらいか。しかしイオの声はそれだけでは済まない何かが籠められていた。
無駄だと知りつつも、一応祈りを捧げてみる。祈りを捧げるべき神という存在が目の前に三人もいるが、それは見なかったことにする。どうか、イオの迫力に圧されてダグラスが帰りますように。
祈りは、勿論届かなかった。
何を分かりきったことをと笑ったダグラスが殺意の籠った薄い笑

みを浮かべ、即答する。
「殺す他あるまい」
「……そっか」
吐息のような淡い声には、隠しようのない喜色が含まれていた。
さっぱりとした、それでいて顔立ちのせいかどこか甘やかにも見える笑みが浮かぶ。女性ならば誰もが目を留めて悲鳴を上げる、魅力に満ちた笑顔。だがマイとアレイズは別の意味で悲鳴を上げていた。勿論、心の中でだが。
凝った息の中に立つイオのあまりの動揺の無さにダグラスが柳眉を寄せる。しかしそこで何となく納得した様子が見られた所を鑑みると、恐らくイオが実はティファを殺す機会を窺っていただけなのかもしれないとでも思ったのだろう。何とも楽観的なことだが、何千年も共に世界を支えてきた者同士、信じたくなるものなのかもしれない。
敵意を緩めて笑いかけるダグラスに、イオは同じく笑い返しながら右腕をダグラスに突き出す。
さながらそれは、握手を求めるようでもあった。
「？」
唐突に伸ばされた腕に、ダグラスが何事かと口を開きかける。それを遮って、イオは実に甘い笑顔のまま言い放った。
「ティファニエンドは、殺させない」
冷ややかに宣言される。刹那、イオの手の平から人の頭ほどの大きさを持つ氷の礫がいくつも顕現し、一斉にダグラスに襲い掛かった。一切の情け容赦なく、急所だけを狙って放たれたのだとマイは即座に判断する。快哉を送りたい所だが、何てえげつない事を、とも思ってしまう。
大体氷の礫を急所に受けて死ぬというのは、マイが納得できる殺し方ではない。
「なっ……！　イオ、貴様！」
油断していた所で魔力の流れさえ感じさせずに突然攻撃されたダ

グラスは慌てて結界を張ったものの、間に合わなかったようだ。急場で作り上げた薄い結界でいくつかは攻撃を防いだが、結界を通り越して向かってきた礫の一つが脇腹に命中したのをマイは見た。

「――ぐあっ！」

決して軽症とは取れぬ呻き声を上げたダグラスは、仰け反り、壁に手をついてもたれかかる。その口元からは、マイが先程唇を噛んで流したものとは明らかに量の違う血が流れていた。脇腹だけではなく、内臓も傷付いたのかもしれない。家族を殺された身としては、ざまあみろと言いたい所ではあるのだが。

「これでは誰が悪役か分かったものじゃないな」

アレイズがげんなりとした様子で言う。全くもってその通りだ。

「えぇ……。まぁ、助ける義理はありませんけれど。それよりどう致しましょう。イオ様に加勢しますか？」

「やめておけ。今下手に出ていけば俺達まであれの餌食になる」

マイの問いに、アレイズが首を振って前方を指差す。もはや形勢逆転という言葉さえ使い辛くなったほどに、堪忍袋の緒が切れたらしいイオが一方的にダグラスを痛めつけている様子は確かに加勢の必要がなさそうだった。イオよりもまずダグラスに助けが必要に見えるほどだ。無論、助ける気など毛頭ないが。

二人して困り切ったように溜息を漏らす。そこで耳朶を打った「何故邪魔立てする！」とのダグラスの声に、二人同時に顔を上げた。問いに興味を覚えたわけではない。攻撃が止んだからだ。

「分からない？」

柔らかそうな頬を緩めてイオが笑う。

「僕はね、ダグラス。レイナの夢は覆ると思ってるんだ」

「……何？」

イオの言葉に息を詰める。三人の神々の中では最も幼く見える横顔を凝視すると、彼は滔々と――けれど楽しげに語った。

「初めてレイニウム大聖堂でティファニエンドを見た時、彼女を殺せるのは僕だけだと思った。大聖堂建造前からいたアレイズ神と僕

以外の神は決して大聖堂の中に入れないし、ティファニエンドの事を知っている神は僕だけだったから。でも、違うと思った」

「何が違う。青い髪と瞳のティファニエンドなんぞ、そう何人も産まれるものじゃない」

「あぁ、勿論彼女はレイナが夢で見た通りのティファニエンドだと思うよ。でも僕が言いたいのはそうじゃない。肝心なのは、魂だよ」

「魂？　そんなものが何の役に――」

イオとダグラスのみ理解できる話に、アレイズが苛立たしげに顔を顰める。しかし彼らは部外者を置いてけぼりにしたまま、話を続けた。

「仰々しい役割を持っている割に、彼女の魂は綺麗なままだ。罪なんて過去にも未来にも、勿論現在にも見えない。……ダグラス。君、僕が何の神か知ってるよね？」

「“審判者”か」

頷くイオの誇らしげな顔を凝視する。

（審判者――もしかして御伽話に出てくる、最後の審判をする裁判官……？）

何ということだろう。それでは、ティファが兎につけた名は真実彼の名であったということか。御伽話の登場人物にちなんだつもりが、まさか本物に出くわすとは。

「魂を見て疑問に思った僕は、それから七年間彼女を見てきた。そうやって彼女の人間性を知って、僕は選んだ」

罪に溺れた人間に裁きを下すか否かを判定する兎の裁判官。彼は人間の顔をして、ふわりと笑った。

「審判は下された。――罪なき魂は総じて救済され、護られなければならない。だから、レイナや神々がティファを殺すと言うなら、僕はティファの側につくよ」

「やはり裏切るつもりか、貴様」

「いいじゃないか。どうせ多勢に無勢でこっちの方が不利なんだし」

清々しいまでにあっけらかんとした声に、ダグラスが苦々しい顔

をする。それがどこか迷いを帯びているように見え、マイは「おや？」と首を傾げた。世界に対して盲目的なまでに忠誠を誓っているように見えるが、ダグラスにはダグラスなりに思うところでもあるのか。

仮にそんなものがあったとしても過去の恨みは一切消えないが、彼の迷いをつければ勝機があるのではないかと思い、考えを巡らせる。そんなマイの耳に「それにさ」と続けるイオの声が聞こえた。

「世界の敵としてほぼ全ての神に殺意を抱かれている娘に、一人ぐらい神の味方がいたっていいじゃないかと思うんだよね。僕は、その一人になりたい」

碧眼を細め、キラキラと光を放つ金髪を風に揺らせて心からの笑みを浮かべるイオの姿は、昔大聖堂で読んだ御伽話に出てくる王子のようだった。着ている服の質も貴族と同じ程度なので、実際にどこかの国の王子だと言っても通用するかもしれない。聖王国以外の国の名を出した所で、大した役にも立ちはしないが。

眩しいまでの笑みに視線を縫い止められる。同時に、グラドに向かう途中で抱いていたイオへの警戒心が霧散するのを感じた。メイを操った罪は重いが、ことティファ関連であればイオは決して裏切らないだろうと踏んだからだ。アレイズといいイオといいゼルといい、ティファが出会う神は当たりが多いなとマイは不遜な事を考えた。外れは今の所ダグラス一人だ。

しかし、とマイは不遜な考えを打ち消して逡巡するように視線を微かに動かすダグラスを見据える。

（世界の敵とは一体何なの……？　一体、何が起こっているというの？）

一人の人間として生を受け、それなりに大人しく――少なくとも世界に対しては――生きてきたティファが世界の敵とはこれ如何に。もしそれが事実であるなら、真なる敵はダグラスではないということになる。

雪の反射を受け彩度を増す光の中に立ち、ダグラスはイオを睨み

据えて舌打ちする。
「味方役？　そんなもの、そこの亡霊に任せればよかろう」
光に溶けいるような銀瞳がアレイズを一瞥する。だが、イオはその提案を鼻であしらった。浮かぶ侮蔑はアレイズとダグラス双方に向けられたものだ。
「それだけは絶対嫌。大体先に味方になりたいと思ったのは僕の方が先なんだから、アレイズ神が譲歩すべきなんだよ」
「……別に味方が一人じゃなければならないとは限らんだろうが」
「一人っていうのは、それだけで特別な意味を持つものだよ。二人じゃ特別性も半減だ。それなのに君ときたら勝手にティファと契約なんかして――」
げんなりと息を吐くアレイズにぶちぶちと文句を言いながら、イオは次々と氷の礫を生み出してはダグラスに放っていく。朗らかな空気とは裏腹に、当たり所が悪ければ死へと繋がる攻撃を繰り出すイオの笑顔はどこまでも優しく冷ややかだった。
脇腹の痛みから回復していないのか、ダグラスは放たれる攻撃に呻き声を上げながら応戦する。細くしなやかな指から生まれた鎌鼬が室内に吹き荒れ、礫を切り刻んでいく。光を反射しながら砕けていく様は、ダイヤモンドダストのような幻想的な光景を生み出した。
剣戟による激しい戦いではなく、あくまで静けさを感じさせる戦い。マイもアレイズも二人の神々の光に満ちた戦いに目を奪われ、加勢できないままその場に立ち尽くすのみだった。
飽くなき美しき戦いは、まるで舞踊のようだった。
礫は槍になり、鎌鼬は盾へと姿を変え、再び鎌の形へと戻る。その都度伸ばされる腕と軽やかに絨毯を踏むステップが、これだけの攻撃を見せながらも血や死の気配を感じさせない原因だった。だが、その戦いは一方的に止められた。
「――く、くくっ……」
今まで苦痛に喘ぎながらもイオの攻撃を防いでいたダグラスが、突然肩を小刻みに揺らしながらしゃがみ込む。初撃からこれまで数

発の攻撃を受けているダグラスだが、顔を伏せて笑う姿はダメージを感じさせるような姿には見えず、警戒心を纏ったイオが攻撃の手を止める。代わりに、何があっても対応できるように氷の槍を背後にいくつも顕現させた。僅かでも不審な動きがあれば即座に仕留められるようにとの考えなのだろう。

命を容易く貫ける槍に背中を守らせ、イオが口を開く。

「何か可笑しいことでもあるのかい？」

問いに、ダグラスは顔を上げる。とろりと多分に水分を含んだような瞳が上目遣いにイオを見上げた。そうしてまだ止まぬ笑いの衝動に身を任せつつ、イオの背後を指差す。

「貴様がいくらあの娘を守るために俺と戦った所で、俺以外の者に殺されたらどうしようもあるまい？」

「君以外？　何を……」

含み笑いに顔を顰め、イオはダグラスを牽制しつつも、言葉の意味を確かめるべく背後を振り返る。そこにはマイとアレイズ、そして倒れている少女二人がいるのみだ。

「何が言いたい？」

前に進み、イオの隣に並んでアレイズが低い声で問う。怪訝そうな様子からして、別段異常を感じ取れなかったということだろう。無論マイにもダグラスの言葉の意味は分からず、一瞬隙を突くための嘘ではないかとさえ思った。だが、そのような小細工をする神にも見えない。

（やるならもっと別の陰湿な……。そう、例えば自分以外の者の体を乗っ取るとか――）

「……っ！　まさか！」

以前イオがしたように、再びメイかティファの体が奪われることになるのではないか。そう思い至り、慌ててティファ達の方へと視線を向ける。マイの声にイオとアレイズも振り返った。だが、イオがメイの体を奪った時のようにダグラスの魂が体から離れることはなかった。

「依代じゃない？　なら一体……」
イオが囁く。刹那、床に散らばっていた亜麻色の髪が僅かに動いた。
「メイ？」
マイが声を掛ける。だが、メイは姉の声など聞こえないように無言のまま茫洋とした表情でのろのろと立ち上がった。光の中で何があったのか解けた髪は乱れている。それさえも気に留めず、何の感情も浮かべないメイはダグラスを一瞥した後でマイやアレイズの方へと視線を向けた。痛みや絶望さえ感じさせない目に、マイは同じ顔だというのに戦慄した。
「メイ。ねぇ、メイ、どうしたの？」
（ティファ様が倒れていらっしゃるのに、敵が目の前にいるのに、どうして何も言ってくれないの）
双子とはいえ、自分達の魂の何が繋がっているわけでもない。怪我の痛みを共有したこともなければ、虫の報せを受け取ったこともない。だというのに、なぜだかマイはメイと魂が分かたれてしまったような、取り返しの付かない孤独の闇に叩き込まれてしまったような心持ちになり、慌てて立ち上がってメイへと手を伸ばした。だがその手を掴んだのはメイではなく、マイの行動を止めようとしたイオだった。
「……イオ、様？」
「駄目だ。あれはただの依代じゃない」
呆けた声でイオを呼ぶと、彼は真っ青な顔で首を振った。碧眼は一度も逸らされることなくメイへと向けられていた。まるで、人間ではないものを見るような目にマイは再び戦慄する。
（どうしてそんな目をするんですか？　あの子は、私の妹なのに）
例え感情の宿らない顔をしていても、焦点の合わない目で虚ろに立っていても、この世でただ一人の自分の片割れだ。けれどマイはメイと合わせた瞬間、イオが自分を止めた理由を察した。
アーモンド型の大きめの目。その色はマイと同じ亜麻色ではなく、

紅だった。――丁度メイが着ているメイド服の真紅よりも濃い、血のように赤い瞳。その瞳がギロリと細い光を宿すのを見て、マイは妹相手に決して上げたことのない悲鳴を上げた。生まれて初めて、自分の片割れに耐え難い恐怖を覚えた。

「ようやく目覚めたか」

マイの悲鳴に満足気な笑みを浮かべたダグラスが両腕を広げる。

「俺が覚醒を望んだのはその娘だ。さぁ……貴様等にその娘がティファニエンドを殺すのを止める事が出来るか？」

耳障りな哄笑が響く。勝ち誇った笑い声の中で、メイがゆっくりとリングリングを構えた。

第三十五話

「メイっ！」

妹を止めるべくマイが叫ぶが、メイは一向に気にした様子もなくティファへと近づいていく。元々距離が近かっただけに、数歩踏み出せば安易にティファに触れてしまうだろう。第一リングリングは中距離用の武器だ。この部屋程度の広さであればどこからでも攻撃は可能ということになる。それが分かっていてマイは、メイを呼ぶことでしか止める術を見つけられなかった。

（紋章に近づいた時の事を考えれば、体を抑えるぐらいでは何の解決にもならない）

だが、モーニングスターで攻撃することもできない。いくらティファに忠誠を誓っているマイであっても、自分の妹を本気で攻撃することなどできようはずがなかった。せめて盾になるべく、ティファとメイの間に立つことで精一杯だ。

「ダグラス！　君という奴は……！」

余裕の笑みを浮かべて立ち上がるダグラスをイオが血走った目で睨めつける。険しい表情は鬼のようでさえあったが、ダグラスはそんなイオの表情も含めて可笑しいらしく哄笑をやめない。

狂気に見せかけた理性的な哄笑が部屋に満ちる。その中心に立ち、ダグラスは緩慢な動作で腕を上げ、にたりと笑った。

「――やれ」

腕が振り下ろされる。「やめて！」声を張り上げるが、そんなものは何の役にも立たず、メイはリングリングの刃を外側に向け、回転を利かせるようにティファへ向けて投げつけた。

歯を食いしばり、モーニングスターの柄を構えてティファの前に立つ。メイの攻撃を完全に受け止めきれる自信はなかったが、今はやるしかない。だが――。

ガキィィンッ！！

「え？」
「何だ」
マイがモーニングスターでリングリングを跳ね返す前に、甲高く別の音が響いた。瞬き、何があったのかと前方を注意深く見るが、分かるのは殺意の光を失った円状の刃が絨毯の上に転がっていることぐらいだ。加えるなら、鋭さを緩めもしない刃の隣に転がっている小さな石礫が転がっているが、まさかこれが――。
「魔力を察知すれば分かるだろうが、貴様が殺そうとしているのは俺の契約者だ」
低く、緊張感を孕んだアレイズの声が耳朶を打つ。見ればアレイズは指先をついと動かし、イオの攻撃によく似た石礫を顕現させている所だった。白く滑らかな肌を惜しげもなく晒す石礫は、見るからに高い硬度を持っている。恐らく、あの石でリングリングの攻撃を防いたのだろう。マイはほっと息をつき、混乱から立ち直るべく数度深呼吸を繰り返す。
「貴様か」
攻撃を邪魔され、不快げに顔を歪めたダグラスがアレイズを睨み据える。指が動き、魔法陣を描き出す。アレイズを拘束するつもりなのだと直感的に察し、外套を掴んで後ろに下がらせようとする。だが神であるアレイズはダグラスの考えなどとうに読んでいたらしく、彼は早々と結界を練り上げて応戦した。その隙を突き、メイが二撃目を開始する。
落ちたリングリングは一つ。あと一度攻撃を防げばあるいは――。
「こうなったら……」
じゃらりと音を立てて鎖を揺らす。伸びた鎖の先についた鉄球を軽々と振り、心の中で詫びてから防御と反撃のため背を伸ばす。メイがリングリングを失う瞬間。そこを捕らえなければ。
（ごめんね、メイ）
もう一度胸中で呟く。そうして襲い来る攻撃を待ち構えて、マイは瞠目した。

攻撃が、いつまで経っても来なかったのだ。
「う……」
恐らくは自分と同じなのであろうメイの呻き声が耳朶を打つ。呆気に取られていると、メイはリングリングの刃をこちらに向けていつでも投擲できる体勢のまま、ぎちぎちと音を立てるような不自然さで硬直していた。小刻みに震える体に、マイは理由もなく泣きたくなった。
「メイ」
「君」
アレイズとイオがそれぞれにメイに声を掛ける。その刹那に強くなった衝動に、今自分はメイと感情を共有しているのだと気付く。目頭が熱くなる。滲んだ視界でメイを見れば、彼女は無感情の赤い瞳から血を流すように涙を零していた。
「……い、や」
涙が溢れる度に、メイが苦しそうに呻く。その様子を、マイ達はもとよりダグラスまでもが凝視している。よほど驚いたのか、ダグラスは興味深げにメイをしげしげと見ている。その間にも、メイは小刻みに震える体を抑えて叩きつけるように言い放った。
「だからって……そんなの、いや……！」
血を吐くような声が絨毯から壁から跳ね返るように耳朶を打つ。メイは他の者達には意味の分からないことを吐き捨てながら、延々涙を流し続けていた。その言葉の意味は感情を共有するマイでさえも分からなかったが、一つだけ確実なことがあった。――メイはティファを殺したくなどないのだ。どんな状況下であろうと、例え神が命じようと、彼女の魂がそれを許さない。
「本質を無視して抗うか、娘。まったく、人間とはかくも面倒な生き物だな」
苦しげなメイの声に何を思ったか、ダグラスは哀れむように目を伏せながら肩を竦める。だがマイにはそれ以上メイを見ていることなどできなかった。心が、魂が痛くて苦しくて堪らなかった。

「……止めなさい」
メイから視線を逸らし、イオとアレイズにティファの護衛を任せ、マイは歩を進めながらダグラスの銀の双眸を射るように見据える。そのまま手を伸ばせば届くほどの距離に近づき、一切の躊躇なく怒鳴りつけた。凛とした声が鬼気を孕んで放たれる。
「今すぐメイを解放なさい！　これ以上私の妹を縛り付けることは、例え神であろうと許しません！」
敬うことも畏れることも忘れ去ったかのような鋭い声色に、ダグラスが僅かに身を強ばらせる。だが人間相手に怯む必要などないと気付いたのか、すぐさま余裕の笑みを浮かべたダグラスは「無駄だ」とマイを嘲った。
「あれは俺が洗脳しているわけではない。ただ、覚醒しただけに過ぎん」
「……かく、せい？」
覚醒というなら、世界の敵とまで言われているティファではないのか。反芻すると、ダグラスはくつくつと笑ってマイを見下ろした。メイとまったく同じ顔をした人間をじっくりと検分して、小首を傾げて問い返す。「お前はあの娘の半身だろう。なのに気付かないのか」
ゆったりとした口調に、マイは苛立ちと焦りを募らせながらきっとダグラスを睨む。苦しげなメイの呻き声が断続的に響く。今は正気を手にしかけているものの、これ以上時間を掛ければメイは再び攻撃を再開してしまうだろう。その前に何とかしなければならなかった。
「気になる話だけど、今はそれどころじゃないわ。覚醒させたというなら、早く元に戻しなさい」
神を神とも思わぬ物言いにダグラスはぱちりと目を見開く。しかし数瞬の後に「成程」呟き、それからメイへと視線を移した。
「そんなにあの娘が大事か。あの、既に人ですらない代物が？」
「……何ですって？」

聞き捨てならない言葉だった。
「何を馬鹿なことを。あの子が、人以外の何だって言うんです」
（人ですらない代物、ですって？）
ティファを傷つけたくないと今も何者かに逆らっている少女を貶めるダグラスの発言に殺気立つ。つかつかとブーツの踵を踏み鳴らし、掴みかからんばかりに詰め寄る。だが、ダグラスは自身の発言を撤回しなかった。
憐れむように、嘲るように、これが真実なのだと突きつけるように口元が緩められる。
「あの娘は、狂人だ」
聞き慣れぬ言葉が脳裏を縦横無尽に駆け巡る。その言葉とメイのあまりの似合わなさに、マイは笑おうとして失敗した。メイの瞳を見て自分が上げた悲鳴。一度は確実に絶たれた魂。自分とはあまりに違う命の在り方。その全てがダグラスの言葉を肯定しているようで、泣き笑いの顔を浮かべたマイは襲い来る目眩に耐えるべく必死に足に力を籠めた。
何かが理不尽に思えてならなかった。

◇　◇　◇

「アレイズ神」
「どうした」
ダグラスに詰め寄るマイの背中を注意深く見守りながら、イオがアレイズに囁きかける。二人に聞こえないにと細心の注意を払って放たれた声に、アレイズも同じく密やかな声で返した。
ティファの前に立ち、メイの攻撃がいつ来てもいいように身構えているアレイズは数秒落ちた沈黙に耐えかねてイオを一瞥した。催促する黒瞳に逡巡を見せ、イオはメイの呻き声に重なるように続ける。
「ダグラスはメイが覚醒してるって話していた。だけど、どんな存

在が覚醒するにもそこには必ずいくつかの手順が必要になるんだ。
だけど、メイにはそんな面倒な手続きを踏むだけの時間はなかった」
「強引に覚醒させられたということか？」
「そう。そして、強引ってことは覚醒が一時的なものである可能性が高い。だったら、まだ手はある」
少なくとも、アレイズから聞かされた話の中でそうした手順は存在しなかったとイオは認識している。メイはただダグラスの持つ紋章に触れただけだ。それだけの手順でメイの中の何かを覚醒させるとなると、そこには必ず綻びが存在する。
自分の内にある何者かに抗うメイの姿を痛々しそうに見つめるアレイズは「手？」と呟き、しばし熟考した後で息を呑んだ。
「再封印か」
「そういうこと」
覚醒とは、何らかの封印を解くことで起こる現象だ。ならば早い話が、もう一度封印してしまえばメイは元に戻るだろう。よく出来ましたと笑うと、アレイズは心底嫌そうな顔をしたが無視した。笑顔のまま、綻びを見つけようと視線を巡らせる。
（でも、一体どうやって再封印したらいいものかな）
そもそも何が覚醒したのかさえ分からない。情報が足りなさすぎて、イオは途方に暮れてしまいそうになった。
（魂か肉体……メイが抗った所からして多分この場合は肉体なんだろうけど、一体どこに）
どこかにあるはずだ。ただ、その場所が分からない。目を閉じてメイの纏う気を探っていく。体を借りた時でさえも分からなかった封印だが、出現している今ならば感じられるはずだ。
だが、目を閉じていたのが悪かった。
「イオ！」
肩をぐいと押され、目をぱちりと開く。自分のものよりもごつごつとした手の平はアレイズのもので、一体何故こんなことになっているのかと周囲を見渡すと、眼前に円環状の刃が迫っていた。

「しまった！」
（正気を奪われたのか！）
アレイズが石礫をリングリングへとぶつけ、遠くへ追いやるのを尻目にイオはティファの周囲に結界を展開する。半透明の青い壁が眠り続けるティファを囲う。これでひとまずはティファの身が守られる。
（人間だと思って侮っていたのかな。まさか、結界を張ることも忘れていたなんて。……いや）
侮っているのとは違うとイオは即座に自分の考えを否定する。自分はただ、メイがティファを傷つけないと楽観的に考えていたに過ぎない。メイの力が自分に及ばないなどと考えていたわけではないのだ。
時に喧嘩をすることはあれど、いつだってティファを支えてきた双子が主を害することなど有り得ないと思っていた。それは七年間、ティファのついでと双子を見守り続けてきた末に得た結論だった。だからこそ、胸が痛んだ。
（こんなことを許しちゃいけない）
純然たる殺意ではなく、涙を流して嫌だと泣き叫びながら誰かを殺すことなどあってはならない。例え世界が望もうと、イオは徹底抗戦する考えだった。それはダグラスの言う通り、世界への裏切りになるだろうが構いはしなかった。世界が非情になるなら、自分はそれを止めるだけなのだから。
（ティファがレイナを殺すことも、レイナがティファを殺すことも、絶対にさせない）
硬い水晶に守られるティファを見ても尚、メイは行動を止めなかった。前傾姿勢になり、身を滑らせるように動かし落ちたリングリングを取りに行く。猫のようなしなやかさで流れる体に、イオとアレイズは同時に動いた。リングリングを取られたら再び攻撃が始まる。機会は今しかないのだ。
「すまない」

アレイズが空間転移でメイの背後に移動し、その背に触れて電流を流し込む。峰打ちではどうにもならないと知ってか、決して弱いとは言えない電流だった。細い光が糸のようにアレイズの手からメイの体へと伝う。

「――っ!?」

メイの体がびくりと大きく跳ねる。折れた膝から絨毯に倒れこみ、数度痙攣した体はそのまま動かなくなった。イオはアレイズの手がメイから離れる時を見計らって早口に封印の呪文を紡いだ。

（封印場所は……）

考え、ふと一つだけメイの体の中で異変がある場所を思い出す。もしかしたら、そこが封印場所かもしれないと思い、イオは倒れこんだメイの目に向けて手を突き出した。小さな魔法陣が展開され、羽音に似た音を立てた後にメイの体へと吸い込まれていく。どうやら、封印場所は合っていたようだ。

室内に静寂が満ちる。騒がしかったメイの呻き声が消えた途端、イオもアレイズも安堵の息をついた。

「これでこっちは大丈夫かな。さて、残る問題は彼だけど……」

銀の神へと視線を向ける。忌々しげに舌打ちしたダグラスが諦めるとは毛ほどにも思えなかった。

◇　◇　◇

メイが封印されるまでの様子を、やや反応に遅れながらもマイとダグラスは目を見張って追っていた。マイにはイオ達が何をしたのかさっぱり分からなかったが、倒れこんだメイが静かになった所を見て危機的状況を一時的に逃れたのだと知った。崩れ落ちそうになる安堵に深く息を吐き出す。

とはいえ、ダグラスはそうはいかない。

「……ちっ！」

舌打ちをしてイオを睨めつけたダグラスは、電流を受けてぴくり

とも動かないメイへと腕を伸ばす。そのまま聞き慣れぬ――恐らくは神聖言語だ――呪文を唱え始めた。空気を震わせる魔力に鳥肌が立った。

「封印されたのなら仕方がない。今度は俺自ら操ってやろう」

紅を引いたような唇がにゅうっと吊り上がり、邪悪な笑みを浮かべる。誰が見ても邪神としか思えない顔をしたダグラスは、素早く呪文を唱えていく。「させないよ」イオがダグラスの呪文を打ち消すため同じような発音で何やら唱えている。マイはそれを見て、何だかとても滑稽だと感じてしまった。

ダグラスはメイを操ろうとし、イオはそんなダグラスからメイを護ろうとしている。

後者には感謝すべきなのだろう。だが、何かがおかしい。

「喜べ娘。貴様はこれから神の手足となるのだ」

疑問に思うマイの耳に、ダグラスの焦りを含んだ言葉が飛び込んでくる。それを聞いた瞬間、マイはようやく違和感に理由を付けることができた。

多勢に無勢。自らでティファを殺すには分が悪いことを――そもそもイオの堪忍袋の緒が切れたら誰にも勝ち目はない――自覚しているからこそ、ダグラスはメイを操りこちらが手出しできないようにとしているのだろう。それは理解できる。だが、まるでこの二人の神はメイを取り合っている子どものように見えて仕方がなかった。無論イオにその気はないだろうが。

七年前の事にしても、今の状況にしてもそうだ。

（事態は全て、当事者とは全く関係のない所で進んでいる）

世界の意志が見た予知夢。ティファを世界の敵とした夢。そこから始まった過去の惨劇と、メイを使って繰り返されようとしている惨劇。だが、そこに登場する主要人物の中のどこに自分やメイがいるのだろう。ティファは僅かに関わっているようだが、それとて自ら望んだことではない。彼女は当事者になるつもりなどないはずなのだ。

だというのに、ティファは勝手に夢に出されて勝手に世界の敵にされて、挙句人生を滅茶苦茶に壊された。そもメイとマイは夢にすら出ていないのに両親を殺されている。誰も彼も、全く世界と面識などないのにだ。だというのに、しっかりと被害者にだけはされるこの状況は何と滑稽な事だろう。こんなもの、全ては世界と神の独りよがりだというのに。

虚しい気持ちになりながらも、沸々と怒りが湧き上がるのを止めることができない。

ティファはまだ世界の敵と言われるようなことはしていない。となると、それは恐らく未来で起こると予知されているということだろう。一体何をしでかすのかは知らないが……。

（世界の敵？　上等だわ）

ここまでされて引き下がる方が問題だ。だからマイはティファが世界に歯向かうというなら、快哉を叫ぶ気でさえいた。だが、まず自分にはやるべきことがある。

イオとダグラスの呪文合戦は、ダグラスの方に軍配が上がろうとしている。次第にメイの体が光に包まれるのを見て、マイは今までなら見ていることしかできなかった自分を捨てて足を踏み出した。

大きく手を振りかぶる。ダグラスは呪文に夢中で、隣に立つマイが見えていないようだった。それもまた腹立たしくて、マイは普段の丁寧さをかなぐり捨てて怒声を上げた。

（全く関係ないくせに――）

パンッ！

「――勝手に出て来てるんじゃないわよ、この三下！」

苛立ちを全て吐き出すかのような大音声で怒鳴り、ダグラスの右頬にありったけの力を籠めた平手打ちを食らわせた。呪文を唱えていたダグラスの声と、応戦していたイオの声がぴたりと止んだ。呆然としたダグラスと目が合う。その目に煮えたぎる怒りを湛えた視線を叩きつけ、マイはなおも言い募る。

「いい加減になさい！　世界が何を言ったって、貴方が私の妹とテ

ィファ様を傷つける権利なんてない！　……本当なら、あの時皆を殺す権利だって！」

加えて言うなら、この世界にそんな権利を持つ者は一人足りとも存在しない。ティファとメイを害する者は、須らく殲滅されて然るべきなのだから。

大きく吸った息の冷たさに、肺が凍えそうになる。だがダグラスに一言でも言葉を発させる気にはなれず、怒りに顔を赤らめる隙さえ与えずマイは最後の言葉を言い放つ。

「文句があるなら世界自ら来いと伝えなさい！　貴方じゃ役不足です！」

射殺さんばかりの視線と平手打ちを受け、あまつさえ役不足とまで言われたダグラスは荒い息を吐くマイをぽかんと見下ろしていた。殺気や嘲笑のない、純粋な驚きが銀の瞳に滲み出ている。その呆気に取られた顔を鼻で笑ってやると、イオもダグラス同様呆然としながら「神にここまでできる人間なんて初めて見た」と呟いた。

「あ、でもさっきダグラスを三下呼ばわりした時、君とティファが重なって見えたよ」

「俺もだ」

「……ティファ様の言葉を意識したわけではありませんが、そう指摘されても仕方ない気がします」

三下だの何だの、言うとしたらそれはマイではなくティファだ。そう思うと急に恥ずかしくなり、マイはやや熱の冷めた頭で一歩下がりながら赤みが差す頬を押さえた。勢いの行動であり、ましてや後悔は全くしていないがイオとアレイズに見られていたのは恥ずかしい。

頬を染めるマイに小さく笑いかけ、イオは案ずるようにティファを見やる。

「ティファも起きてたら同じことしたかな」

「十中八九そうだろうな。第一、メイとマイの気質は主譲りだろう。神に荷物持ちをさせようとするメイドなど、この二人ぐらいだろう

しな」
　アレイズが苦笑交じりに答える。更に恥じ入ると、イオは「そうだろうね」と嬉しそうに笑った。
「だからこそ守りたいんだよ、三人ともね。……それでダグラス。もうメイを操ることはできそうにないみたいだけど、どうするつもりだい？」
　余裕ある笑みに嘲笑で返すでもなく、ダグラスは黙っていた。痛みを楽しむように叩かれた頬に指先を這わせ、マイだけを見ている。人間ごときに馬鹿にされたと頭に血を上らせる様子はなく、ただその瞳にマイの姿を焼き付けようと上から下まで凝視するのみだ。だが、マイとしてはそちらの方が不気味だった。こんな風にジロジロと見られる理由が分からない。
　困惑していると、やがて衝撃から立ち直ったのかダグラスが口を開いたが、その声はやはり茫洋としていた。
「お前、名は？」
　空気に溶け込むような声に、マイは初め何を言われたのか分からず「何ですか？」と訊き返した。怪訝そうに眉を顰めると、ダグラスは律儀にも繰り返した。
「だからお前の名だ。何という」
　今度はややはっきりとした声が耳朶を打つ。ただ、名前を訊かれる理由が分からない。
（私でさえ知らないメイの体の事を知っていたということは、私達の事を調べたのだと思っていたのに）
　メイの事だけ調べてそれで終わりだったのだろうか。もしくは、調べたが名前など気にも留めなかったか。どちらもあり得る話だが、肝心なのは今ここで名を問われた理由だ。
（……これから殺す人間の名を、聞いておきたいということかもしれない）
　何せ自分は神を平手打ちしたのだ。更には三下だの役不足だの言ってしまった。マイはモーニングスターの柄を握り締め、今度は鉄

球を顔面に叩きつける覚悟をしてから胸を張って答えた。敵に弱みを見せるつもりなどない。

「マイティーナ・グラスです。憶えたければ勝手に憶えなさい」

不遜極まりない堂々とした態度で答える。凛とした声が真っ直ぐにダグラスを打つ。するとダグラスはそれには何も答えず、手を伸ばしてマイの腕を軽く掴んだ。メイド服越しに伝わる長い指は、思いがけず温かかった。

「「――!?　マイ!」」

マイが拘束されたと取り、危険を感じたイオとアレイズが同時に剣を生み出して構える。しかし、二人が足を踏み出してもダグラスは何もしなかった。それどころか――。

「え?　な、何を……」

突然の行動にマイが素っ頓狂な声を上げる。それもそのはず、ダグラスはマイを攻撃するどころか目の前に跪いたのだ。

あれだけ嘲笑を振りまいていた男に跪かれ、マイは驚きつつもこれは何かの罠なのではないかと一瞬疑ったものの、ダグラスの双眸のあまりの真剣さに何も言えなくなる。その間にもダグラスは指を滑らせ、マイの手の平を取る。愛おしげに手の甲をなぞられ、背筋が粟立った。

「だ、だから一体何を――」

しかし事はそこで終わらなかった。

ふわりと吐息が手の甲を滑る。指に比べて随分と冷たい呼気にマイが手を引っ込めようとすると、それに先んじてダグラスの顔が近づいた。柔らかな感触が手の甲に触れる。口付けられたのだと知ったのは、ダグラスがその唇でマイを呼んでからだった。

「マイティーナ」

「な、なな何ですか?　というか貴方一体何してるんです!」

紅を引いた唇。触れるはずのないものが自分に触れた事実に、マイは相手がダグラスであるにも関わらず頬が熱くなるのが分かった。透明感のある肌に差す紅を見つめ、ダグラスは続ける。それは、こ

の場の誰もが予想し得なかった言葉だった。
「俺と契約してほしい」
一瞬、言葉に詰まった。それはイオもアレイズも同じだったらしく、三人はそれぞれ唖然としながら顔を見合わせる羽目になった。だが、どれほど周囲を混乱させようともダグラスは気に留めずに話を続けるつもりらしい。
マイの手を掴んだまま立ち上がったダグラスは、これ以上ないほどの極上の笑みを浮かべてマイを見下ろした。イオが瑞々しい甘さで女性を惹きつけるのだとしたら、ダグラスのそれは熟した甘さだ。そんな知らなくても良い事を実感してげんなりするマイに何を思ったのか、ダグラスは「契約が嫌なら」と続けた。
「それはそれでもいい。ただし、勝手についていくが」
何でそうなる。
「意味が分かりません。何で今の話の流れでそうなるんです？　人をからかうのもいい加減にして頂かないと、次は鉄球をお見舞いしますよ」
からかわなくとも鉄球を食らわせることに変わりはないが、マイはいつも通りの丁寧な口調を取り戻しつつも、牽制のためにモーニングスターを構える。ことあらばすぐにでも撲殺する為に。
眉間に皺を寄せ、断固拒否の姿勢を貫くマイに、ダグラスは「あぁ」と笑った。
「簡単だ。俺はお前が気に入ったんだ、マイティーナ。神に手を上げる人間なんぞ、何千年と生きてきた身の上でも初めてだからな」
「そうですか。ですが当然契約も付いてくるのもお断りです。……それにしても、殴られて気に入るだなんて、随分と変態嗜好の神もいたものですね。貴方のせいで世界を嫌いになった私も、さすがに世界に対して同情せざるを得ません」
「そうして何の遠慮もなしに突っかかる所も可愛いが、照れる必要はないぞマイティーナ。それと、俺は別に世界に殴られた覚えはない」

「照れてません！　人の話を少しは聞きなさい！」
清々しいまでにマイの意見を無視するダグラスの姿に、マイはイオとアレイズの方を振り返り“助けてください”と視線で訴える。だが二人は展開の早さについていけず、困ったようにマイを見返すのみだ。
（あぁもう、誰も彼も役に立たない！）
嘆き、一体どうすればダグラスを納得させられるのかと思案する。ダグラスはそんなマイの手を取って今後の事を話し続け、イオとアレイズは二人して遠い目をしてぽつぽつと言葉を交わしていた。
「一体何がどうなってるんだ、これは」
「僕が知りたいよ。だけどダグラスがあんな顔するなんて、ねぇ。……それに、契約なんて彼に一番似合わない言葉だと思ってたんだけど、まさかこんなことになるとはね」
聞こえてきたイオの言葉にはマイも胸中で同意した。この自尊心の塊に見える男は、人間に積極的に関わろうとするタイプとは思えない。だというのに、何だこれは。
混乱する頭を押さえると「頭が痛むのか？」とダグラスがそっと指先に光を生み出し、マイの頭を撫でた。もしや、治癒の魔法でも使ったのか。そんなことより心的要因を取り払ってもらった方がどれだけ楽になれるかしれないというのに、理解させようにも方法が思い浮かばない。大体直接的な言い方をして伝わらないものを、どうして理解させることができるというのか。
「君がそんな顔するなんて驚きだよ」
呟き程度だったイオの感嘆の声が、今度はダグラス本人へと向けられる。するとダグラスは眉根を寄せて唇を歪めた。「悪いか」吐き捨てるような声は、マイに向けるものとは遥かに温度が違うものだった。どうやら、マイ以外の面々についてはどうでもいいらしい。分かりやすいと言えばそれまでだが、マイは心底イオ達と同じ立場にいたいと願った。
とはいえ、この調子ならばダグラスが今すぐ攻撃を仕掛ける心配

はない。その事だけでも良しとしようと、マイはそっと息をついた。
アレイズよりも長身のダグラスは、マイに覆いかぶさるように身を屈めて頭痛の心配をしている。片やその肩にも身長が届かないマイは「さっさと離してください」とすげない返事をする。完全に立場が逆の二人に、イオがぷっと吹き出した。
「神々の中で一番レイナに忠実で残酷な君がねぇ」
含み笑いと共に漏らされた呟きを聞き取り、マイがイオとダグラスを交互に見やる。イオの言葉にダグラスは小さく舌打ちし、聞く必要はないとばかりにマイを抱き寄せた。力に負けて胸板に頬を押し付ける形になり、半ばパニックに陥りながらマイは悲鳴を上げた。
「イオ様、この男の事はどうでもいいですから助けてください！」
だが、マイの悲鳴に対しイオはくるりと背を向けてティファとメイの元へと歩いていく。
「ごめんね。助けたいのは山々だけど、その前にメイが何を覚醒させたのか確認したいから、もうちょっとだけ彼に付き合ってあげて」
「そんな、酷すぎます……っ」
酷いどころか殺意すら湧いてしまう。この男とこれ以上一緒になど、到底いられないというのに。こうなったら、モーニングスターを食らわせて逃げてしまおうか。ただ、そうすると解けた緊張感が再び戻る可能性がある。ティファやメイ達を危険に晒す事を考慮すると、イオの言う通りダグラスに付き合うしか道はなかった。
（だからと言って、我慢できるものじゃないのに……）
吐きそうな程の嫌悪感を感じるというわけではない。だから触れられていても問題はないに等しい。だが、嫌なのだ。この訳の分からない変態嗜好の神に今後付き纏われるかもしれないという予感が、何より恐ろしいのだ。
ぶるりと身を震わせ、一体どのような拒絶の言葉が効果的なのかいよいよ真剣に考え始める。その思考を断ち切るように、あっさりとしたダグラスの声が耳朶を打つ。
「あぁ、そいつが覚醒させたものは記憶だ。……どうやら親に封印

されていたらしいな」
混乱と怒りと冷静な思考がぴたりと止まる。糸を切るようにふつりと停止した思考が動き出すのに、数瞬の時間を要した。――今、ダグラスは何と？
頭を撫で続けるダグラスの顔を見上げる。するとマイの視界に入ったことが嬉しいのか、ダグラスは微笑を浮かべながら「どうした？」と甘い声を発する。けれど、それに気持ち悪いなどと文句を言っている場合ではない。
「父さんが母さんが……どうしてそんなことを」
何故両親がメイの記憶を封印しなければならないのだろう。グラド一の腕を持つ記憶師でさえ歯が立たない力で封印されるような記憶とは、一体。そもそも両親が封印したのであれば、あの惨劇の記憶ではない。あの日両親は、メイの記憶を封印している暇などなかったのだから。では、以前イオが言っていた“あの時の真相”を封印したのは一体誰なのか。
（真相はともかく敵は見つかった。でも、一難去ってまた一難なのかもしれないわね）
肩を落とす。そうして敵の腕の中にいる情けなさにじわりと涙が浮かんだ。だがマイの涙に気付かないダグラスは、頭上からやはりあっさりとした声を放った。
「あの娘の記憶には、数多くの秘術が眠っているからだ」
秘術。
やはり聞き慣れない言葉に瞠目し、しかし心がざわりと波立つのを感じてマイは一人息を詰まらせながら、朗々と流れるダグラスの説明に耳を傾けた。

第三十六話

「秘術の説明をする前にまず尋ねたいことがある」
マイを腕の中に抱き込んだダグラスはそう言って彼女の顔を覗き込んだ。涼やかな銀の瞳が糸のように細くなる。
「お前は、自分の一族がどういう力を持っているか聞いたことがあるか？」
「私達の一族……？　父なら、グランハート家に仕える執事でしたけど」
怪訝そうに眉を顰めてマイが答える。するとダグラスは「仕えるか」と呟き薄笑いを浮かべた。
「とんでもない話だな。もしかすると、グランハート家の方こそグラスに仕えていたのかもしれんぞ」
「何を――」
「片や世界の敵を輩出した一族、片や世界最強の魔術師の末裔。狙い済ましたような取り合わせだと思わんか。なぁ、イオ？」
薄笑いのまま向けられた問いかけに、イオは無言で答える。だが、隣に立つアレイズはイオが「本当に二人がグラスの末裔だったなんて」と呟くのを聞いた。次から次へと出てくる意味の分からない単語に業を煮やし、アレイズは早口に「誰だ」と尋ねる。
世界の敵だの封印だのグラスだの、既にアレイズの手に負える話ではなくなっている。それはティファが眠り続ける焦燥感と相まって、胸が焼けるような苛立ちをアレイズに与えた。
腕を組み横目にイオを見やる。彼はそんなことも知らないのかと溜息をつきつつ「ダグラスが言ったのを聞かなかったのかい？」と返した。
「グラスは世界最強の魔術師だよ。神でさえその名を知るほどの有名人。多分知らないのは君ぐらいじゃない？」
そんなことを言われても、そもそも神になってこの方寝てばかり

いたのだ。情報など得られようはずもない。憮然とした表情で黙りこむと、イオは満足気に笑ってから続ける。

「グラスを祖先に持ち、世界に従うことも抗うこともしない一族がグラスの一族さ。いわば、中立者かな。もっとも、血が薄れて今では大分力が弱まったと聞いているけど……。マイ達がそうだったなんてね」

「名を聞いて気付かなかったのか？」

「グラスの姓自体はありふれたものなんだ。だからてっきり僕は、二人は分家筋の人間だと思ってた。……中立者ともあろう一族が、まさかメイドをやってるなんて考えもしなかったからね」

肩を竦めるイオの姿から目を離し、きょとんと目を丸くしているマイを見る。よくよく見てみればその体の線を魔力の光が包んでいるのが感じ取れるが、質も量もティファには遠く及ばない。だというのに世界最強の魔術師の末裔と言われても、確かにピンと来ないだろう。せいぜいが一般人より魔力が強い程度なのだ。

とはいえ、メイの封印の件もある。アレイズの目に見える魔力がはたして全てなのかどうか、もう断言することができなかった。ティファといいこの双子といい、見えない所に逸物抱え込みすぎている。

（主と従者は似ると言うが、そんな所まで似なくてもいいものを……）

誰にも聞こえぬようそっと嘆息する。抱え込んだ謎の中で最も気になるものの正体をアレイズはまだ掴めていなかった。契約者であるティファが何故世界の敵などと言われなければならないのか、その理由を。だが、尋ねようにもダグラスが「まぁいい。それよりグラスだが」と話を続けたせいで叶わなかった。本当にとことんマイペースな神だ。

割れた窓ガラスから遠慮無く吹き荒ぶ風が外套も髪も引っ括めて遠くへ追いやっていく。その風に流されるようにダグラスの声が耳朶を打った。

「奴等、俺がこの屋敷の襲う事を察知していたのかもしれんな。殺し尽くされる前にと時期尚早にもお前の妹の中に秘術を隠し、俺へとぶつけた。……おかげで獲物を三人も逃してしまった」

薄い唇が吊り上がり、挑戦的な眼差しで告げるダグラスの言葉に、マイが眉を跳ね上げる。

「ぶつけたとはどういう意味です。あの日、メイは屋敷にはいなかったはずですが」

「言葉通りの意味だ。お前の妹はティファニエンドを守るため、己の裡にある秘術を駆使して俺に相対した。あれには驚いた。あの獣、よもや神である俺を退かせるとは」

狂人の次は獣か。アレイズは楽しげなダグラスの声に顔を顰めながらも、それ以上に苦々しい顔をしているマイがいつ怒りをぶちまけるか気が気でなかった。近しい者を獣呼ばわりされて笑っていられるほどマイは日和見主義ではないとこの場の誰もが知っているにも関わらず、何故ダグラスはマイの勘気を悟らずに無神経な事ばかり言うのか。アレイズには最早理解できなかった。

（だが、狂人ではなく獣と評したのは気になる。誰にも悟られず秘術をメイの裡に潜ませ、かつあの神と戦った記憶がないということは、恐らく戦いの前に封印を解き、戦いが終わってから再度封印するよう仕掛けが施されていたんだろうが……何故そんな面倒なことを？　事が終わったら封印しなければならない程、手に負えないものだということか？）

顎に手を当てて考えこむ。確かに先程の様子は尋常ではなかったが、それは見知った人間が正気を失ったという点での異常さだ。もしもメイを知らぬ者が彼女と戦うとしても、腕の立つ者なら彼女を打ち倒すことは可能だろう。アレイズにはそれがダグラスの言う獣だとはどうしても思えなかった。

ダグラスの言葉に、マイは亜麻色の瞳に再び怒気を滾らせ始める。色素の薄い瞳に宿る熱は、冷ややかながらも恐ろしい。だがマイは怨嗟の言葉ではなく、問いを発していた。

「答えなさい。貴方は、世界に何を命じられてこの屋敷を襲撃したんですか」
「無論ティファニエンドの抹殺だ。だが、レイナは俺にこの屋敷の全ての住人を殺せとも命じていた。決して逃がすなと」
殺せという言葉にマイが身を震わせる。そんなマイの肩をダグラスはやんわりと掴み「グラスはあまりに危険過ぎると判断されたんだろうな。現に俺は一度お前の妹が持つ秘術に撤退を余儀なくされた」と苦笑を浮かべた。だがアレイズはそんなダグラスの甘ったるい声よりも、世界が彼に命じた内容に衝撃を受けていた。
（レイナが、人間を殺せと命じた？）
鼓動が不必要なまでに大きく響く。動機に息がしづらくなり、浅い息を切れ切れに吐き出すのが精一杯だった。
（あり得ない。あのレイナが誰かの死を願うなど）
神の紋章の存在をティファが知った時、彼女は確かに「世界が関係しているかもしれないんだよ」と警告していた。だが、まさかそれが事実になるとは思いもしなかった。仮にティファの言葉が本当だったのだとしても、そこには必ず理由があるのだと思っていた。だというのにこれは――。
（関係の無い者まで殺せと命じたのか）
急速に膨れ上がる嘔吐感に唇を噛み締め、胸をかきむしる。
イオとダグラスの話が真実であれば、グラスの一族は確かに危険だっただろう。中立者だった存在が、今や世界の敵の味方をしているのだから。しかし、アレイズにはどうしても納得ができなかった。
（ティファニエンドが俺と契約することは予知されていたことだ。ならば何故抹殺指令が下る？）
「イオ」
「何だい？」
「レイナはどんな夢を見た」
そも、何故ティファニエンドは世界の敵と呼ばれなくてはならないのか。一族もろとも命を狙われなくてはならないのか。その疑問

を解決すべくイオに声を掛けると、彼は一瞬――本当の僅かに躊躇した。眉尻が下がり、言うべきかどうか逡巡する空白に「答えろ」と切り込む。

「君に答える義理なんてあったっけ？」

ダグラスとマイに聞こえないよう、息のみを吐き出しているような囁かな声が返る。小生意気な発言にしかしアレイズは冷静に「ない」と囁く。そんな義理があるような関係になった覚えはない。だからこの場合教えないと言われた所で、文句の言いようがないのだ。

だが、アレイズには奥の手があった。

「義理がない奴からタダで情報を貰う気はない。貴様が世界の予知夢とやらの内容を話すのなら、その情報の代わりに俺も貴様に情報を渡してやる」

「情報？」

「ティファニエンドは七年前、例え神に襲撃されようと死ぬ予定にはなかった。その証だ」

（あるいは、そちらが真実で俺への情報こそが偽物なのかもしれないが）

胸中で嘆息する。もう何が真実で何が偽物なのか、恐らくは誰にも判断できはしないだろうとアレイズは思案した。世界は一体何を考えて行動しているのか。こうなれば、もう自分の持つ情報を秘密にしておくことも難しく思えた。他の誰でもなくイオに話すのは業腹だったが、第三者として最も冷静に判断ができる者、そしてティファに害意のない者はアレイズが知る中でイオしかいなかった。

アレイズよりもやや低い位置にあるイオの頭を見下ろす。柔らかそうな金髪は一体普段どういう手入れをしているのか、光を鮮烈に反射している。頭を取り囲む光の輪は、リングリングに似た円環状の白刃にも見えた。その金髪が、溜息と共に沈んだ。

「ティファの手前、君にだけは勝手に話したくなかったけど、この状況でそんなことも言えないか」

顔を上げ、アレイズを見上げる眼差しが鋭くなる。「でも、これ

だけは憶えておいてほしい」どれだけ怒りを湛えていても浮かべられていた笑顔がすっと消え、冷徹な神の顔になる。

「今から話すことで君がちょっとでもティファを傷つけることがあったら、今度こそ僕は君を殺すよ」

イオなら本当にそうするだろう。アレイズはそう思いつつも、即座に頷いた。ティファニエンドがどういう存在なのかは知らないが、ティファはアレイズにとって今や世界と同等かそれ以上の存在なのだ。今更何を言われた所で契約を解消したり、命を狙う事などありえない。

感情の波を感じさせない、静かな碧眼を同じ心持ちで見返す。そうしてダグラスとマイが話を続けるのを無視して、ただイオの話が始まるのを待った。

ティファの心情を慮ってのことか、イオはどことなく悲しげに瞼を伏せて話し始めた。

「レイナが見た夢は――」

やや低く下げられたボーイソプラノに神経を傾ける。そうして与えられた情報にアレイズは瞠目した後、震える息を吐き出して目を閉じた。

狂ったようなティファの叫び声が脳裏に木霊する。

◇　◇　◇

イオとアレイズが囁き合っているのを尻目に、マイは冷笑する。

「両親も、メイではなく私に秘術を施してくれたらよかったものを。そうすれば貴方を殺せたのに」

獣と呼ばれようと狂人と呼ばれようと、妹であるメイに責を負わせるぐらいならば自分が変わってやりたかった。凍える笑みを見せつけるようにマイが顔を上げる。するとダグラスは苦笑を浮かべたまま続けた。

「それは仕方がない。お前の両親も、お前に秘術を施してもすぐに

記憶が戻ると踏んだんだろうからな」
「記憶が戻る？　どうしてそう思うんですか」
十年も居座り続ける封印に自分が抗えるとは思えない。幾ら何でも買いかぶりすぎではないか。そう考え、マイは不快げに亜麻色の双眸を細めた。
眼球に映り込む銀髪が大きく揺れる。ダグラスが肩を竦めたのだと気付いた時には既に教師然とした平坦な声が室内を響かせていた。
「魔法というものは、そもそも世界の摂理を味方につけるなり強引に捩じ曲げることで発生する。他に精霊の力を借りる方法もあるが、それは今は置いておこう」
「……？　はぁ」
静かに流れていく声に呆けた返事をする。それはいつかティファと共に受けた授業で聞いたことがあるが、一体何を言いたいのか。
疑問に思っていると、ダグラスはやはり教師のようにマイに問うた。
「そこで質問だ。マイティーナ、魔法を打ち破るために必要は力は何だ」
その程度は知っている。
「魔力でしょう」
「それも間違っていないが、俺が言いたいことは違う」
だが当たり前のように返した答えに、ダグラスは即座に首を振った。さらりと揺れる銀糸に、マイは困惑を籠めた視線を向けた。向けられた魔法を打ち破るには、同程度かそれ以上の魔力をぶつけて相殺させること。それはマイが知っている唯一の方法だ。だというのに、他に魔法を打ち破る術があるというのか。
肩に触れる手から離れるべく一歩後退る。そんなマイの体を離すまいと手に力を込めながら、ダグラスは眩しいものでも見るかのように目を細めた。
「魔力をあまり保有しない者が魔法を打ち破る時、そこには世界の摂理を強引に捩じ曲げるだけの意志の力が存在する」

肩に触れた手が移動し、マイの髪へと伸びる。亜麻色のセミロングを撫でる手つきは、つい今しがたまで自分達を殺しに来た者の手とは到底思えぬほどに優しく、マイは苛立ちとも困惑ともつかぬ微妙な顔を浮かべた。

「何が言いたいんです」

封印は魔法によるもの。それをマイがすぐに打ち破るということは答えは一つしかないのだが、問わずにはいられない。キッとダグラスを睨み上げると、彼は満足気に微笑してマイの髪に指を差し入れた。

「お前は人より遥かに意志の力が強すぎるんだ、マイティーナ。神を畏れず敬わず容赦なく引っ叩く。そんな事、例え恨みつらみがあろうと常人にできることではない。つくづく不遜で面白い人間だな、お前は。きっとお前には封印なんぞあってないようなものだろうよ。どうせ思い出したいと心から願った瞬間には既に封印が吹き飛んでいるだろう」

褒められているのか馬鹿にされているのか分からない微妙な線だ。

（封印を吹き飛ばすって……まるで破壊魔みたいな言われ様だわ）

物を吹き飛ばすのはティファの専売特許であって自分のものではない。マイはティファが聞いたら怒り出しそうな事をさらりと胸中で呟き、自分の髪を撫でる手をパシリと叩いた。いくら手つきが優しくとも、遠まわしに人を破壊魔呼ばわりする男に触れられたくはない。

「さっきからうっとおしいんですけど、触らないで頂けますか」

力の加減をせずに叩いたせいか、ダグラスの青白い手が仄かに赤く染まっていた。だがダグラスは叩かれた手よりもマイの言葉に傷ついたように肩を落とした。

「何故そんなにつれないんだ、マイティーナ」

しゅんと落とされた肩と悲しげな声は、まるで捨てられた子犬のような風情に見え、マイは一瞬――ほんの一瞬だけ良心が痛んだが、すぐに思い直した。第一、ダグラスほどの図体で子犬という表現は

似合わない。子犬に失礼だ。あまりの似合わなさに嘲笑しそうになるのを堪え、マイは腕を組んで溜息をつく。

（むしろどうしてつれなくされないと思っているのかが分からないのだけれど……自分が何をしたのか、分かってないのかしら）

ティファや自分達双子から多くのものを奪っておいて、その敵と仲良くしろと言われても無理なものは無理なのだが、もしかするとダグラスはそこから分かっていないのではないかとマイは急に不安になった。アレイズとは違い、人間らしさの欠片もない神だ。彼にはマイが感じているような痛みなど知り得ようがないのかもしれない。

大切な者が殺される辛さも、残された者達が背負うものの重さも、眼前の神には到底似合わない代物だ。そも、マイでさえ重すぎて全てを把握しきれない感情をダグラスが理解できるとも思えない。ならば、どう言葉で伝えようとしても彼には伝わらないだろう。

（それに、こんな神に弱さを吐露するだなんて考えられない）

そう思い、マイは言いたいことの九割以上を心の裡に仕舞い込んでダグラスを睨みつけた。

「私は貴方が嫌いです。理由なんて、それだけで十分でしょう？」

感情を瞳の奥に押し込め、細かい説明は一切せずに簡潔に告げる。激情に因われもう一度攻撃を仕掛けてもいいが、そうすることで自分が閉じ込めた思いをうっかり吐き出してしまうことはしたくなかった。普段理知的なマイだが、その分一度堪忍袋の緒が切れると自分で自分の感情のコントロールが上手くできなくなってしまう。それを自覚しているだけに、下手な行動は慎みたかった。

無感情な分鋭さを増したマイの眼光を一身に受け、ダグラスはなお理解出来ていないようだった。

「だから何故そんなに俺を嫌うんだ……」

やや語尾が掠れ気味の沈んだ口調にほとほと呆れ果ててしまう。神なのだから人間の感情など知らなくても問題はないのだろうが、こうまで感情の機微に疎い存在も珍しい。

（疎いというより、まるで子どもね）

となると、あながち子犬という表現は間違っていなかったのかもしれないと考え、やはりそれだけは認めないようにしようと即座に否定する。しかしダグラスの精神が子どものそれだということは、恐らく間違いではないだろうとマイは結論づけた。面白いものを見つけた時の好奇心も、善悪の区別が出来ていないかのような残虐さも、どちらかと言えば子どもに近い。無論長い時を生きているだけあり、円熟した部分がないわけではないだろうが、今こうしてマイの前で落ち込んでいる姿は何も知らない幼子のようであった。

その純粋なまでの幼さに自分のどす黒い感情を流し込んだらどうなるのだろうか。一瞬そんな風に考え、小さく首を振る。その前に罪の意識というものを植え付けなければ意味がない。マイにはダグラスにそんな高尚な感情を植え付ける方法など思い浮かばず、ふぅと重たい息を吐き出した。

「心当たりは貴方の中に沢山落ちてるでしょうから、自分で探してください」

その必要もないのに自分の心まで重くなってしまった事に腹が立ち、突き放すような声を上げる。そうしてするりとダグラスの腕から抜け出す。「マイティーナ！」この世の終わりが来たような声で叫ばれる。だがそれに毒を吐いて答える余裕はすぐさま消え去った。

「うーん……」

微かな吐息が空気を震わせる。馴染みのある気配が動いた瞬間、マイは自分でも驚くほどの早さで身を翻した。

「メイっ！」

振り返った先には、真紅のメイド服を着たメイが小さく呻いて体を起こそうとしている姿がある。寒さに凍りつく足を必死に動かしてその姿に縋りつき、起き上がろうとする背をそっと支えた。窓も壁もほとんど意味をなさない場所で眠っていたせいか体温は下がっているが、血が通って桜色を保っている唇を見る限り、体温が低下しすぎて体調に異変を起こしているということはないだろう。それ

が救いだった。
濃い影を落とす睫毛が震え、薄く目が開かれる。その目をやや緊張しながら見つめ、自分と同じ亜麻色だったことに何より安堵した。イオの封印は成功したようだ。
膝を立て、自らが立ち上がりながらメイが立つのを手伝う。メイは多少ふらついてはいたものの大した怪我はないらしく、数度足踏みをしたらもうマイの手が必要ないほどの回復を見せた。「体におかしな所はないか？」解けた髪を不思議そうに見ているメイにアレイズが声を掛ける。
「痺れていたり動かない場所があったら言え。すぐに治す」
「へ？　全然大丈夫ですよ？　動かない所なんてないし」
メイの体に流した電流のせいで不調が起きていないか気にしていたのだろう。アレイズはメイの朗らかな声を聞いて、安心したように吐息した。マイもいつも通りの妹の姿に泣きたくなるほどに緊張感が解けるのを感じていた。敵が未だすぐ傍にいる上にティファは目を覚ましていないが、とりあえずこれだけの戦力があればダグラスにも負ける気はしない。
乱れた髪を梳きつつ、メイは「あれ？」ときょろきょろ辺りを見渡す。心底不思議そうな横顔は、今の今まで何が起きたのか理解していないようだった。それに逸早く気付いたのか、イオとアレイズが「おはよう」と苦笑した。
「おはよーございます。あのー、もしかしてとは思うけど私寝てた？」
もしかしても何も、どう考えてもこの部屋で爆睡はできないだろう。マイは妹の呑気な姿に頭痛を覚えながら「寝てたというか気絶してたというか……」と呟いた。緊張感がないのは悪くないが、もう少し驚いてもよさそうなものを。しかしメイはこのぐらいで丁度いいのだろうと思い直し、マイは窓から降り注ぐ陽の光を背中に浴びるメイへと問うた。
「それよりメイ、体は大丈夫？」

案ずる声に、しかしメイは体を慣らすような緩慢さでステップを踏んで笑った。

「アレイズさんに続いて姉さんまで？　大丈夫だよ。本当に二人とも心配性なんだから」

明るい声は、どうしてそんなことを訊かれるのか不思議で仕方ない様子だった。ふわりと風に揺れる亜麻色の髪が放つ明るさにマイは長く息を吐き出した。

（よかった。本当に何も憶えていないみたい）

何も憶えていないということは本人からしてみれば恐ろしいことかもしれないが、マイとしては出来れば覚醒していた間の記憶はなくしていてもらいたかった。秘術を伝授された時の記憶も七年前の真相も、メイには重すぎる記憶だろう。　そう考え、グラドの記憶師の腕では記憶を取り戻せなかった幸運に感謝した。もしも思い出していたなら、どうなっていたか知れない。強引な覚醒とイオによる再封印の影響で記憶も封じ込めることができたが、記憶師の手によってしっかりと手順を踏んで記憶を取り戻してしまったらそこから先忘れようがないのだから。

無論いつかは話さなくてはならないことだろう。姉だからと言ってマイが勝手に胸の内に秘めていて良い事ではない。ただ、その時期は再封印を施したイオと相談した上で決めようと思った。……後手に回る事で面倒が起こる可能性は高いが、今は後手に回らざるを得ない。

来るべき時を想像し暗い気持ちになる。その時、ステップを踏んでいたメイの足が絡まりふらついたのが見え、マイは慌ててメイの体を支えた。正面から抱きしめるように支えた腕の中にメイが収まる。刹那、マイにのみ聞こえる声が耳朶を打った。

「ごめんなさい、姉さん」

「……え？」

何を言っているのだろうか。

慌てて「何？」と聞き返そうとする。しかし「ありがと姉さん」

メイはすぐに体を離し、どこか大人びた笑みを浮かべて背を向けてしまった。光を浴びた横顔から覗く瞳が刹那の間痛みを堪えるように細められたのを見て、マイは心に氷を投げ込まれたような気分になった。

（まさか、記憶が封印されていない？）

確証はない。こんなものは予感に過ぎない。だが今はその予感が恐ろしかった。

ダグラスの口ぶりから、イオがメイに再封印を施したことは確実だ。ならば、一体何故メイはあんな顔をしているのか。心を狂気で彩る記憶は一体どこにあるのか。不安に自分の心が冷えていくのを感じながら、マイはようやくダグラスの方を向いたメイへと手を伸ばした。この期に及んでダグラスがメイを操るとは思えなかったが、唐突に現れた銀の神と紋章に再び意識を持っていかれたら事だ。せめてメイの前に立ち、彼女を守らなければ。

足を数歩踏み出し、手を伸ばす。しかしそこにいるはずの銀の神の姿は影も形もない。

（どういうこと？　あの神は一体どこに――）

メイの前には降り積もった雪景色が広がる閉じられることのない窓と、柔らかな午後の日差しだけだった。神の紋章は大幅に薄れ、壁の色に埋もれるように存在感を消している。そしてこの部屋を作り上げた元凶は――。

「マイティーナ」

「……っ！？」

耳元に触れた吐息に脊髄反射的に手が動く。しかし振りかざした拳を容易く掴まれ、マイは暗転する視界にきつく目を閉じた。浮遊感に包まれ、閉じた瞼の裏が真っ白になる。何とも言えない不思議な感覚に恐慌状態に陥りそうになるものの、元凶が元凶なだけに素直に怖がることができず、マイは必死に叫び声を押し殺した。途端、浮遊感が収まり地に足がついたので目を開け、マイはようやく自分の身に起きたことを理解した。

空間転移。ティファやアレイズ達が扱う高等魔法に巻き込まれたのだ。ただ……。

「何でこんな短距離で使う必要があるんですか」

ダグラスとマイが移動したのはほんの数メートル。他の面々から離れた場所、窓の先にあるテラスだった。ここだけは丈夫な石で作り上げたおかげかほとんど損傷もない。だが、ダグラスはそんな理由で自分を連れて来たわけではないだろう。

（私を皆から引き離さないといけない理由があるんだわ）

その理由にはいくつか心当たりがある。だがマイはあえて口に出さずに、拒絶の言葉だけを吐いた。理由を訊いて行動に移されては困るし、何より伸ばした手が行き先を失った事が気がかりだった。

「どいてください」

（こんな状況ではメイに確認のしようがないのに）

否、そもそもダグラスがこの場にいる地点で確認など夢のまた夢か。本心からの拒絶の言葉にダグラスは再び傷ついたように眉尻を下げ、しかしきっぱりと首を振った。銀の双眸に宿る決意の色に、じわりと緊張と焦燥感が再燃した。

「すまない。お前を殺すことなどできないが、レイナの命令に逆らうこともできんのだ」

集中力が研ぎ澄まされる。緊張感が痛いほどに張り詰めていくのを感じながら、マイは口に出したくもなかった問いを放った。できる事なら避けたい事だったが、ダグラス自身が決意している今誤魔化す事などできない。

「へぇ……ではどうすると？」

モーニングスターの柄を握り締める。今度こそ顔面を殴ってやると決意を新たにすると、マイの緊張感を察しイオとアレイズも涼やかな音を立てて結界を展開した。メイはふらつく体をどうにか真っ直ぐに保ちながらもティファを守れるよう前に立つ。

ただ一人、囚われの身となって主を守れる位置に立てないことを悔しく思いながら、マイはダグラスの返答を今か今かと待ち続けた。

緊張と殺意で凍りついた時は、その時動き出すのだから。
たっぷりの間を取って、ダグラスの声が響き渡った。
「お前以外の者を殺すさ。……どの道、ティファニエンドは殺さねばならんからな」
そうして神をも敵に回す死刑宣告が放たれた瞬間、銀に煌く鎌鼬がマイとダグラス以外の存在を破壊しようと吹き荒れた。

第三十七話

全てを切り刻まんとする凶暴な鎌鼬を前にして、命無き者達が軋むような悲鳴を上げて木っ端微塵になっていく様をどこかスローモーションに感じながらメイは見ていた。血をたっぷりと吸い込んだ絨毯が破れて室内に吹き荒れる。肌を打つそれらの中に肉片が混じっていることに気付き、メイはティファの両親の亡骸までもが細切れにされたのだと知った。七年も前に息絶えているはずの肉片は何故かとても温かく、鼻孔を突く血臭に胃液が迫上ってくるのを必死に耐えた。

「皆、避けて！」

マイがびゅうと吹き荒れる風に負けじと声を張り上げる。だがその時には密度の高い風は白刃の姿を取り、メイの眼前へと迫っていた。それをやはり細切れの風景として捉えつつ、しかし避けようがないと結論づけ彼女は両手を広げてティファの前に仁王立ちになった。

これだけの白刃相手であろうと、イオとアレイズは問題ないだろう。二人には結界という力がある。だがメイには結界を張るだけの知識も力もない。そんな状態でティファを守る術など、一つしか思い浮かばなかった。

（どこまで耐えられるか分からないけど……）

リングリングで防げるような可愛らしいものではない。ならば、この身を盾にするのみ。

眠り続けるティファは水晶らしき結界に守られているものの、どれほどの強度を持つのか実際に確認したわけではない。そんな不確かなものに頼ってなどいられなかった。それで万が一ティファが傷ついたら事だ。

ぐわんぐわんと音を立てて揺れる思考を無理矢理凍らせ、メイは迫り来る白刃のみを睨みつける。刹那、予想していた以上の痛みが

全身を襲い、スッパリと斬られた肌から血が筋となって宙を舞った。
「――――っ！！」
痛い。いや、痛いなんていう次元の話ではない。
攻撃された直後は全身に焼きごてを当てられたような熱さしか感じなかったが、数秒も経てば仕事をサボっていた痛覚がまざまざと痛みを突きつけてきた。冷気が肌を打つ度、傷口に塩を塗りこまれた時のような鮮烈な痛みに呻き声を漏らした。
数分と耐えられない程の激痛に苛まれながら、しかしメイは痛みとは全く関係の無いことばかり考えていた。
（血飛沫が舞う所って、初めて見たかも）
脇腹に太股に腕に肩に顔に。部位を選ぶ事のない攻撃は、このまま手を施さずにいれば死へと直結するだけの血液を流させた。室内に舞う絨毯の破片になおも血が染み込むのを見て、今の自分はどれだけ凄惨な姿をしてるのだろうかと考える。肉片を浴び、自ら血を垂れ流し、真紅のメイド服はボロボロになっている。このような姿をティファに見られなくて本当に良かったと思いながら、メイは知らず膝をついていた自分の体を再び立ち上がらせた。
真紅のメイド服がそれよりも若干黒い血で濡れていく。重みを増した服に、いっそ絞ってやれば軽くなるかもしれないとメイはやはり重要さの欠片もない事ばかり考えた。死ぬかもしれないという事実も今すぐにでも意識を持っていきそうな痛みも、思考の中にはない。ティファさえ守れることが出来るのならば、何を考えていようと別に問題などないのだ。
傍から見ればどこまでも痛々しいメイの姿に、マイの精神が耐えられなかったのだろう。
「メイっ！　……ちょっと貴方、今すぐ鎌鼬を止めなさい！」
涙混じりの悲鳴と共に細い鎖がひらりと宙を舞う。マイがモーニングスターでダグラスに攻撃を仕掛けたのだ。
しかし最速で繰り出されたはずの攻撃はあっさりと躱された。ダグラスは猛り狂う怒りを宿したマイの目を楽しげに見つめ返し、軽

やかに足を動かしてマイの後ろへと回りこんだ。新雪の色のローブに包まれた腕が伸び、マイを柔らかく抱きしめる。鎌鼬で血に濡れたメイを前にしているとは思えぬほどに甘やかな低音が場違いにも響き渡った。

「そう怒るな。何、すぐに終わる」

瞬間、マイの頬にさっと朱が走る。こめかみに青筋が立つのが見えた。

「終わったら困るから言っているのが分からないんですか！　離しなさい！　今度こそその顔に鉄球を食らわせてあげます！」

怒声を上げつつ、身を捩って肘鉄や蹴りを繰り出すマイは、明らかに堪忍袋の緒が何本も焼き切れてしまっているようだった。だが護身体術の心得もあるマイの攻撃もダグラスには児戯にも等しきことなのか、彼はますます笑みを深めながら指をくいと動かした。

鎌鼬が再び吹き荒れる。

メイは襲い来る鎌鼬に備え足に力を入れる。ほっそりとした脚からは血がどくどくと流れ、僅かに力を籠めただけでも痛みが走るがそのようなことを気にしてはいられない。今はただティファを守らなければならないのだ。それが叶うなら痛みも出血も気にならない。だが、いくら覚悟して待ち受けようと、確実に死へと誘う凶刃がメイの身を切り裂くことはなかった。

「……？」

ふわりと緩やかな風が頬を打つ。あまりに優しい感触に目を見開いた時、メイは周囲を取り巻く薄い光のヴェールに視界を奪われた。これに似たものをメイはレイニウム大聖堂の地下で見たことがある。

（これ、結界？）

「全く姉妹揃って無茶ばかりするんだね、君達は」

「同感だ。これでどちらかが欠けでもしてみろ、誰がティファに怒鳴られると思っている」

「イオさん？　それにアレイズさんまで！」

胸中での呟きに呼応するように二つの影がメイとティファを守る

ように前に立った。輝かしい金の光を持つ神と、全身を闇に浸したように黒い神はメイに背を向けたまま、珍しくも共闘体勢を取るつもりなのか文句を言いながらも二人で結界を織り上げていく。

常ならば見えるはずのない魔力の流れが、あえかな細い糸となって結界に織り込まれていく。頼もしい二神の背中と結界に守られ、メイは緊張が解けて崩れ落ちそうになりながらも思考した。

秘術。今己の裡にあるはずの禁忌が、感じられるはずのない存在をメイに感じさせている。それは不可思議であり不快であり、そしてどこまでも懐かしい感覚だった。

（私、この感覚を知ってる。……ずっと前に“覚醒”した時にも、こんな気持ちになったのが分かるもん）

浮かぶのは記憶の断片。自分が肌で感じて実感できる記憶ではない。しかし、脳の奥深くに眠るその断片が偽りのものではないことをメイは悟っていた。その証拠に、今マイを腕に抱き鎌鼬を自分達に浴びせる存在が誰なのかをメイは知っていた。銀髪の男――あの神こそが惨劇の真犯人であり、ティファの命を脅かす敵なのだと。

全身を襲う灼熱の痛みに顔を顰めながらも、メイは殺意を籠めてダグラスを睨みつける。ダグラスはそんなメイの視線を興味深そうに眺めながらも、しかしマイとは明らかに違う何かを感じているのか嘲笑を浮かべていた。その笑みにも憶えがあった。

（七年前も、あの男はこんな風に誰も彼も馬鹿にするみたいに笑ってた……だから私は、殺したくて殺したくて仕方なかったんだ）

自らが生み出した亡骸を愚弄する行為を見て感じた怒り。それこそがメイが覚醒したきっかけだったことなどダグラスには知る由もない。

両親に呼び出されて戻った屋敷で見た惨劇。今となっては他人事としか捉えられない記憶の中で笑っていた男をメイは一生許すことはできないだろう。マイには記憶など何も覚えてない風を装ってみせたが、最早忘れることさえ叶わない記憶は鮮烈な怒りを持ってメイを苛んでいくと確信していた。

その神がまたもやティファの命を狙い、あまつさえ姉まで奪おうとしている。メイは取り戻した正気を再び手放しそうになる感覚に必死に抗いながら、胸中でマイに怒鳴りつけた。

（そんな所に収まってないで、姉さんも早くそんな奴倒しちゃってよ！）

無論相手は神だ。人間であるマイに手が出せるはずがないのは分かっている。今この場でダグラスを倒せるのは神であるイオかアレイズ、そして完全に覚醒したメイぐらいのものだろう。しかし結界で身を守る三人はマイを巻き添えにしたくないがために手が出せない。

結界に阻まれて四方八方に方向転換する鎌鼬に切り刻まれ、床も壁も存在意義を失ったかのように崩れ落ちていく。後は柱を失えば、屋敷ごと崩れ落ちるだろう。何もここまで無残な姿にすることはないだろうと内心で舌打ちし、メイは突如襲い来る胸の痛みに眉を顰めた。

茫洋とした意識の中で近づいた神の紋章。

その紋章に指先を触れさせた瞬間頭に飛び込んできた記憶は、メイの中で未だに整理が付けられないものだった。

（だって、信じられるわけないじゃない）

遠い遠い、父母も祖父母も産まれていなかった遠い昔。世界の意志が見た不吉な夢から端を発する、ティファが殺されるに足る理由。生まれたその瞬間から世界の敵と呼び忌み嫌われたティファニエンドこそが、七年前の惨劇の元凶だったなど。

痛みに心の目を閉じた時、誰かがメイの精神を奪った事を覚えている。その存在がしきりにティファニエンドを殺せと声高に叫んでいたことも、ありありと思い出せた。両親が死んだのは全てティファニエンドのせいなのだからと。だが……。

（それでも私はティファ様に生きていてほしいよ）

普通の人とは少し違う見た目を持つだけの、ただそれだけの少女。水晶の結界に守られて穏やかに眠る主の姿を振り返り、メイはきつ

く手の平を握りしめた。そうでもしなければ涙が溢れ落ちそうだった。

悲しかった。姉と同じ程に大切な存在が自分達の両親を奪った事が、そして自らも両親を奪われたティファの心中を考えると悲しくて仕方がなかった。何も知らないティファが哀れで泣きたくなった。

（……ううん、もしかしたら姉さんもティファ様もとっくに知ってるのかもしれない）

なぜなら今目の前には真犯人がいるのだ。七年前に相対した時もよく喋る男だった。恐らくティファニエンドの存在も話したに違いない。ティファはいつ倒れたか定かでないから分からないとしても、マイは全てを掴んでいる可能性が高い。それでもダグラスを睨みつけ身を捩る姉の姿に、メイはほっと安堵の息をついた。確認したわけではないが、姉も自分と同じくティファを恨む気持ちがないのだと感じ取れたせいか。

ドクンと鼓動が一つ大きく鳴る。気を緩めた隙に忍び寄る何者かに、メイは胸中で静まれと命を下す。叩きつけるような声にそろりと動き出していたはずの何者かは素直に鳴りを潜めた。

（父さんと母さんは、私に何を託したんだろう）

自分では見ることの出来ない存在。体の中――魂に刻みつけられた何か。それは一目散に敵の首筋に食らいこうと、今も虎視眈々とメイが気を許すのを狙っている。咆哮を上げて血を吸う歓喜を、今か今かと。そう、それはまるで獣のように――。

頭が激しく痛み出す。小さく呻いて歯を食いしばると、冷や汗がどっと吹き出した。記憶の大部分を思い出したとはいえ、メイにはまだ思い出せない事がある。秘術の内容。それらを思い出そうとする度に、頭が酷く痛んだ。

「来るぞ、構えろ！」

痛む頭を振る。その時アレイズの声がして、傷付いた結界を突き破る程の大きな鎌鼬が吹き荒れた。イオとアレイズがそれらを防ぐ間にリングリングを構え、攻撃の機会を狙う。

（悩んでる場合じゃない。今は姉さんを助けなくちゃ）

だが、いくら武器でダグラスを攻撃しようにもマイが盾にされているためリングリングを投擲することができない。かといって投擲せずに接近するには、ダグラスはあまりに危険すぎた。

（もう……姉さん、早くそいつから離れて！）

この際うっかり殺してしまっても構わないから、と心の中でぶつぶつと剣呑な文句を放ち、同時に秘術の事をもう一度考えてみた。かつてダグラスを退かせた禁忌の力。それを今活用できるなら、状況を打開することだってできるはずだ。

「早く、答えを出さなきゃ……」

痛み始める頭を押さえ、呻くように呟く。その間にも襲い来る暴力的な風をアレイズが防ぐのが見えた。砕かれた拳大の壁面が横手から突っ込んでくる。それをリングリングで弾き飛ばし、メイは意識を集中させる。

場は膠着状態に陥っていた。

◇　◇　◇

このままではいけない。

マイは血まみれになりながらも立ち続けるメイを僅かに高い位置から見下ろしながら、胸中で呟いた。

（あの子はもう限界なのに）

常人ならば、あれだけ血を流せば倒れていてもおかしくはないというのに、それでも彼女は立っている。限界を超えて、主であり親友でもある少女を守るために。だというのに自分は何をしているのだろう。

自分が纏うものとは対照的な真紅のメイド服はもはや元々の色なのか血なのかが判別出来ぬほどに濡れそぼっている。白いエプロンは鮮血に染まり、ダグラスが風を生み出す度に小さな血の珠を絨毯へと落としていた。同じ色と形をしているはずの顔は唇も含め蒼褪

め、小さな切り傷から流れる血だけが生気を感じさせた。夥しいまでの血。死への階を登る妹の姿に、マイは何度もやめてくれと叫びそうになっては口を閉じた。恐らく、マイがメイの立場だったならやめろと言われた所でやめはしないと分かっていたからだ。メイもマイも、ティファを守るためにこそ武器を扱う術を学んだのだから。

初撃の衝撃から立ち直ったのか、イオとアレイズはメイの前に立ち彼女の周囲に結界を張り巡らせている。それだけが唯一の救いだが、予断を許さない状況下でメイの傷を癒すほどの余裕は得られない事が不安の種だった。だがそれも、そもそもは自分が原因で長引いている事態に過ぎない。

リングリングを構えるメイが悔しげに顔を顰める。本当であればとうに投擲されているはずのリングリングがいつまでもメイの手から離れないのは、マイがいるからだ。それが分かっていてもなおマイには状況を打開できなかった。

「離しなさい！」

「マイティーナ……そんなつれない事を言わないでくれ」

切れ長の銀の双眸が緩やかな熱を孕んで細められる。同時に近づく顔を押しのけるので精一杯で、それ以上の攻撃は全て阻まれてしまっていたのだ。情けなくて情けなくて、できる事なら消えてしまいたいほどに悔しかった。

片や目の前で主を命がけで守る妹。片や神に暴言を吐くことしかできない姉。

こんな事しかできないでティファの従者を務めているのだからお笑い種だ。しかも質の悪い事に、ダグラスはマイを抱きしめるばかりで攻撃対象の方を見もしないのだ。時折メイを見ては「お前の妹も面白いが、やはりお前の方がいいな」などと言って笑っている程度だ。その余裕に余計に腹が立ってきた。

初めて顔を合わせた時から、常にティファが引き連れてきたトラブルに巻き込まれてきたマイだ。疲れることも諦めることも、腹立たしい気持ちにさえ慣れてきたはずだというのに、事態の深刻さの

せいか神経が焼ききれそうなほどに苛立ちがこみ上げてどうにかなってしまいそうだった。

近づいた顔に全力で拳を叩き込む。それはするりと避けられてしまったが精神的に効力があったようで、ダグラスは柳眉を下げて「どうしてだ?」と呟いた。

「俺がこんなに好意を寄せているのに、何が不満なんだ」

「好意? そんなもの今すぐゴミ箱に捨てなさい。貴方がどうでも、私は貴方なんて大っ嫌いなんです!」

身を捩りすぎて、今や羽交い締めにされているような感覚に陥りながら吐き捨てるように叫ぶ。嘘偽りなどどこにもない叫びに衝撃を受けたのか、室内を襲う風がぴたりと止んだ。攻撃が止み、ようやくほっとひと息つく。

だが、安堵するのは早かった。

「……」

全身全霊を籠めた拒絶の言葉に銀の瞳が伏せられる。これでようやく諦めてくれるかと、モーニングスターの柄を遠慮なしに振り上げるとダグラスはマイの手を優しく掴んで再び風を起こした。

憎らしいまでに晴れやかな笑顔があった。

「今はそうでも、一緒にいればそのうち好きになる」

その自信はどこから出てきた。

マイは不意に襲ってきた目眩に目を閉じ、やさぐれた気分で首を振った。

(あぁ、頭が痛い……。何なのこの人、これだけはっきり言っているのにどうして落ち込まないの)

最早打つ手が無い。少なくとも精神的に打撃を加える手は諦めた方がよさそうだ。相手が悪すぎる。

しかし今この瞬間にも皆が傷つけられるかもしれないというのに、手をこまねいているなどと馬鹿な真似はできなかった。ダグラスの言葉が甘くなればなるほど風は強くなり、膠着状態は長引いていく。最初こそイオの圧制だったものの、やはり同位の神。ダグラスの風

がイオ達を傷つけられない代わりに、イオ達の攻撃も風に阻まれてしまう。誰も傷つかない、だが誰も勝てない状況ではメイがいつ倒れるか分からない。

一体、どうすればこの状況に決着がつけられるだろう。

マイは必死に考えを巡らせ、はっと息を呑んだ。

（一つだけ、あったわ）

エスカレートするダグラスの言動、好意。それらはただマイにのみ向けられている。マイとしては心底認めたくない事実だが、今ダグラスの目に映っているのはマイのみなのだ。ならば、一つだけ手がある。

「……ダグラスさん」

静かに名を呼ぶと、ダグラスは「どうした？」と声を掛けられたことを喜ぶように笑みを浮かべて問い返す。脳天気な男の姿に一瞬恨めしい気持ちが再燃するが、マイはぐっと堪えて愛想笑いを浮かべた。

「もし私が貴方の願いを叶えたら、ティファ様を含む皆の命を今後一切狙わないでいてもらえますか？」

（後戻りはできなくなるかもしれない。でも、もうこれしか手がないわ）

イオは言っていたではないか。レイナに一番忠実で残酷な神がダグラスなのだと。もしそれが本当でならば、この男が目を瞑りさえすればティファの命が守られる可能性は極めて高い。いつか最も残酷な方法で罪を償ってほしい対象の願いを叶えるなど業腹だが、主の命には代えられない。

「……」

愛想笑いと共に放たれた提案にダグラスが沈黙する。だがそれも仕方のない事だろうとマイは内心で苦笑した。そこであっさりと頷かれたら逆に不安感が生まれる。

何やら考え込むように黙りこむ姿が風は未だに風を吐き出し続けている。一刻も早くその風を止めたいと思いつつも、マイは焦燥を

悟らせない様に殊更ゆっくりと続けた。
「ティファ様達が助かるのでしたら、代わりに貴方の願いは必ず叶えてみせましょう」
必ずという言葉に自ら冷や汗を流したものの、一度口にした言葉を覆せはしない。第一、そのぐらい言わないと効果がないのだ。マイはダグラスの言葉を今か今かと待ちながら、祈るように目を閉じた。
（これで駄目なら後がない……）
風の音にかき消され、今の提案を聞いた者はダグラス以外にいないようだった。三人は攻撃の機会を伺いつつ、けれども決して攻撃してくる事もなくダグラスを睨んでいる。
床が崩れ落ち、メイ達の立つ場所以外は既に穴だらけになっていた。このままではいずれ屋敷ごと崩壊するだろうと焦りを募らせていたマイの耳に、ダグラスの問いが届いたのはそれからたっぷり数十秒を空けた後だった。
「どんな願いでもいいのか？」
マイを背後から抱きしめたまま、ダグラスはマイの顔を覗き込むようにして見つめる。体を屈めるような体勢になっているのは、身長差がありすぎるからだ。顔を後ろへ向けると、吐息が触れ合うほどに顔が近づく。端正な顔があまりに近くにある事に驚いて顔を離そうとすると、ダグラスが笑った。
ニヤニヤと意地悪く悪く表情にしかしマイは「はい」と力強く頷いた。熱くなりそうな頬を無視し、凛とした声を放つ。
「貴方が世界に逆らうに足る価値を私に見出せると言うのなら」
これはマイにとってこの上なく負担の大きな提案であると同時に、ダグラスにとっても負担を強いられる提案だ。だからこそマイはダグラスに自分の言葉が偽りにならぬことを証明するだけの力強い意志を見せる必要があった。
ティファと契約したアレイズや全てを知った上でティファを護ろうとするイオはともかくとして、他の神々がティファを助けるとい

うことは世界の意志に反する行為だ。それを他ならぬダグラスにさせようと言うのだから、ある程度の犠牲は覚悟して然るべきだった。

ダグラスと話していた際、イオがアレイズに告げた世界の予知夢。その内容は風に乗ってマイの耳にも届いていた。そこから得られた情報は、神が無視するには余りあるものだ。

緊張が心を侵していく。この提案が退けられた場合、自分はどうやってティファを護ればいいだろうかとそればかり考えていた。

（何としてもお護りしないと……！）

どのような存在であろうとティファはティファ。守るべき、かけがえのない主だ。この時メイも同じ事を考えていたことをマイは知らない。だが、姉妹二人の目的が同じものであることは理解していた。多少、取った道は異なるが。

そうして二人は別々の道で主の無事を願った。

一人はその身を盾にし、一人はこれから先の未来を神に委ねて。

今度の沈黙は短かった。

「ならば」

ダグラスが爽やかなまでの笑みを浮かべる。本来ならば見る者に安心感を与えるはずの笑みに、しかしマイはぞっと身を震わせた。身構えるマイの頭を撫で、ダグラスは望みを告げた。

「俺と契約しろ。それがお前の叶えるべき望みだ」

「……それでいいんですか？」

予想通りの答えだった。マイはやや呆気に取られた気持ちになりながらも、できる事なら予感が外れてくれればよかったのにと内心で文句をつけた。敵と契約など、とんでもない話だ。

とはいえ約束は約束。提案が退けられなかっただけでも儲け物だ。マイは溜息をつかないように気を遣い、念押しとばかりに尋ねる。するとダグラスはやはり清々しい笑みを浮かべて頷いた。

「あぁ。これ以上の望みはない」

晴れやかで嬉しそうな笑み。子どものように無邪気な表情に最後の問いを放った。問いを重ねることで考えが変わったら事だが、言

わずにはいられなかった。
「世界を裏切ってでも、私と契約したいと？」
世界のためならば誰が死のうと関係ないという顔をしているこの神が、こうもあっさり世界を捨てる不思議にマイは多少の驚きを禁じ得なかった。もう少し葛藤するとばかり思っていたのだが、そんな様子は微塵も感じられない。
だが、悩むマイの姿をダグラスは一笑に付した。
「この世界よりも気に入ったものがあるんだ。それを前にすれば、裏切りなど大した問題ではない」
あくまで簡単なことのように、そうすることが自然だと言うかのようなダグラスの軽やかな声に、マイはいっそ潔いと感心しながらも苦笑を漏らした。
「本当に怖い性格をしていますね、貴方は」
一瞬前まで大事にしていたものを簡単に捨てられる心の構造とは、一体どんなものなのだろうか。皮肉に満ちた言葉はあえて胸の内に潜ませ、マイは自分を抱きしめるダグラスの腕にそっと手の平を重ねた。向けられた笑み同様、諦めに似た晴れやかさが胸を満たす。相も変わらず残酷な神に対する諸々の感情は消えないが、先程の台詞は嫌いではない。自分とてティファやメイのためなら世界ぐらいくらでも裏切ってみせるだろうから。
目だけをダグラスへと向け、世界を裏切れと提案した時同様に凛とした声を放つ。主であるティファにしか向けない、従順な声を。
「承知致しました。――その願い、私が叶えましょう」
そうしてお互いの利害が一致した刹那。
「あれ？」
「……何事だ？」
先程まで五月蝿いほどに吹き荒れていた銀の鎌鼬が唐突に掻き消えた。

第三十八話

突如として止んだ風に、アレイズ達は困惑を隠そうともしなかった。

事情が分からずきょとんと目を見開いたイオが、しかし何の遠慮もなくダグラスに氷の礫を放つ。当たり所が悪ければ即死することも十分にあり得る掌よりも巨大な氷の礫は、僅か数歩分の空間転移により避けられた。巻き込まれる形で空間転移したマイの横を通り抜けた氷の礫は外へと身を投げ出し、鈍い音を立つ。恐々振り返ってみれば、礫は雪を突き抜けて土中深くまでのめり込んでいた。ひやりと肝が冷える。

「何があったんだい？　突然攻撃をやめるなんて」

冷や汗を流すマイの耳朶をイオの無邪気な声が打つ。もっとも、無邪気に見せかけているだけで顔に張り付いているのは凶悪なまでの敵意なのだが。こういう表情をしていると、ダグラスとまるで変わらない残忍さが見え隠れするようだった。イオがティファの敵とならなくて本当によかった。

胸中でひっそりと溜息をつく。すると憮然としたダグラスの声が放たれた。

「貴様、マイティーナに当たったらどうしてくれる」

冷ややかな怒りが内包された声にイオはひょいと肩を竦めた。

「どうせ君が守るんだから万が一にもあり得ないよ」

それはダグラスがマイティーナに寄せる好意を一切疑っていない声色だった。マイは羞恥や悔しさや腹立たしさを籠めた複雑な顔を浮かべる。しかし一人事情を知らないメイは何故ダグラスが姉を守るのか理解できないのか、アレイズの服の裾をくいと引っ張って何やら囁いているようだった。恐らくは問うているのだろう。なぜ敵であるダグラスがマイを守るのかと。だがその問いにアレイズが答える前にマイが口を開いた。

「攻撃をやめたのは私が頼んだからです。ですからどうか皆様は、この神が何もしないうちにティファ様を連れてお逃げください」

長い間触れられたせいでともすれば慣れてしまいそうなダグラスの体温を、べりっと音を立てるようにして引き剥がす。「うっとおしいです」悲しげなダグラスの顔を一瞥し、すぐにメイを見下ろす。

彼女――いや、彼等は見事なまでに同じ反応を示した。

「「「……はぁ？」」」

マイの力ない微笑とダグラスの満足気な笑みを見上げ、声を揃えてぽかんと口を開く姿は何とも言えず奇妙な光景だった。滑稽ですらある。無論それも仕方が無いこと。マイとてできることならば口にしたくない言葉だったのだから、三人が驚いた所で笑う資格などないのだが。

呆けた顔でマイを見上げる面々の中で最も驚愕を隠しきれずにいたのは、やはりと言うべきか妹のメイだった。彼女はだらだらと脚を濡らす血液の存在さえ無視して腰に手を当て、マイを一睨みする。呼吸をするのも苦しいだろうに、大声を張り上げる。

「ちょっと姉さん！　冗談なら後にしてよ！」

「冗談じゃないわ」

メイの履く白いブーツは今や血が染み込み本来の色を失っている。それを痛々しげに目を細めて見下ろしながら、マイは溜息と共に吐き出した。「気持ちは分かるけど」そう、気持ちは痛いほどに分かる。痛すぎてこちらが顔を顰めたくなるほどに。それでもこれは冗談でも嘘でもなかった。

（盾にはなれないけれど、私には私にしかできない護り方がある）

例えそれがどれだけ嫌な事柄であっても、メイやティファを護れるのなら背に腹は代えられない。マイは芯の通った声できっぱりと言い放つ。亜麻色の双眸に浮かぶ決意の色にメイはようやっと姉の本気を理解したのか、愕然と目を見開いた。

だがそれでも信じがたい事に変わりはない。メイはなおも言い募る。

「今私達に逃げろって言ったよね？　どうして姉さんは来ないのよ！」

私達はいつだって一緒だったのに。そう続くような言葉にマイは僅かに目を伏せる。少しでも気を緩めれば睫毛が震えて動揺を悟られそうな程、メイの言葉は心を強く揺さぶった。

よほど混乱しているのか、メイは普段出すことのないヒステリックな声を張り上げて涙混じりにマイを睨み上げていた。乱れた髪も血に濡れた服も何もかもを無視して腕を上下にブンブンと振り、姉が言葉を覆す事のみを懇願するようにマイの返事を待っていた。

唐突に始まった姉妹喧嘩を三人の神々は黙ったまま見守っていた。ダグラスですら黙りこみ、満足気な表情を崩さないままマイの隣に並んで立っていた。

生真面目そうな印象を与える涼やかな微笑が向けられる。上機嫌の笑みはマイの答えを待っていた。自分の半身であるメイの懇願を退けるための言葉を。ダグラスはマイがそれ以外の言葉を発さないと信じきっていたのだ。向けられる理解不能な信頼に苛立ちがこみ上げる。しかしダグラスが思う通りメイの懇願を退けるしか無いことは、誰よりも自分が一番よく理解していた。

今まで一度足りとも発したことのない別れの宣告。それを口にすることへの緊張で手の平にはびっしりと汗が滲んだ。血液が通わず冷たくなった指先を温めるように両手の指を絡ませ、マイは浅く息を吸い込んだ。そうしてようやく言葉を紡げた。

「私はもう皆と一緒には行けないからよ」

細かい理由など一切合切割愛した、酷く簡潔な言葉。常ならばメイやティファに事細かな説明をして諭すように話すマイのその簡潔さは、話し手以上に聞き手に秘めた冷たさを与えたようだった。その証拠に、あれほど勢いよくマイを睨みつけていたメイが雷に打たれたように体の動きを止めた。

「……ダグラスが何か言ったのかい？」

動きを止めたメイに代わりイオが静かに口を挟む。諦めに近い苦

味を浮かべた表情は全てを悟っているように見え、マイは言葉にして何も言えない代わりにイオの予想に対し曖昧な笑みを浮かべた。確かにダグラスの提案でこのような目に遭いはしたが、元々は自分が蒔いた種なのだ。

肯定も否定もしないマイの笑みをどう受け取ったのか、アレイズが剣の柄に手を当てて「貴様！」と声を荒げた。

「マイに何を言った！」

戦うことを極力避け、ティファが激怒するほどの悪党と相対しようと常に冷静だったアレイズがティファ以外の事で感情を顕にしたのを見たのは初めてだった。それだけダグラスという神に対し敵愾心があるということか。いや――。

（きっと、ティファ様が眠っていらっしゃるからだわ）

今この場でティファが目を覚ましてダグラスと相対していようものなら、誰よりも彼女が怒号を上げるだろう。しかしティファは眠っている。アレイズは、ティファの代わりに怒っているのだ。あるいは、普段アレイズの代わりにティファが怒っているという見方もできるのだろうが。

気付かなかった。アレイズがティファとこうも似ているなどとは。

無論そう思わされる事が皆無だったとは言わないが、ここまでとは。マイはこんな状況だというのにくすりと笑みを漏らし、自分の為に腹を立ててくれる神に胸中で感謝した。捨てる神あれば拾う神ありとはよく言ったものだ。もっとも、この場合アレイズもダグラスも自分を拾う神ではあるが、マイの心情としてはダグラスは捨てる神でも拾う神でもなく、捨てたい神だった。

アレイズに向かって笑いかけるマイに何を思ったのか、ダグラスがすっと目を細める。次いでたっぷりの余裕を含んだ嘲笑が前方の三人へと向けられた。

「別に何も？　お前達の弱さにこれ以上伴は出来ぬと告げただけではないか？」

喉の奥で鳴る笑い声と共にダグラスの肩が揺れる。銀糸に似た髪

が上下する度に、マイはきつく目を閉じて耐えた。今すぐにでもダグラスを殴り飛ばしたい所だったが、そんなことをすれば約束が反故になる事は明白だ。それでも、心の中だけでも言わずにはいられない。

（違う、そうじゃない……！）

弱いなどと思ったことは一度もない。叶うものならずっと伴をしたい。アレイズの目的である世界の意志へ辿り着くまで、マイはティファの傍にいたいと願っていた。だがそれも今や儚い願いだ。

相も変わらずマイ以外には嘲笑を撒き散らすダグラスは、耐えるようなマイの姿に笑い声を止める。慰めるように伸ばされた手を、辺りに響き渡るほどに強く叩いた。同時に目を開き、取ってつけたような笑みを浮かべる。

「ともかくこれから先私は同行できません。ですから、皆様はティファ様を連れてこれまで通り旅を続けてください。――世界に会わなくてはならないのでしょう？」

あくまで明るく軽い口調になるように努めて放った声は、しかし手が震えていたせいで無理をしていることが丸分かりの、何とも情けない体で放たれた。

本音も真相も一切語らない、そのくせ強がりの声にメイが「姉さん！」と声を荒げる。その声に何か言いかけ、マイは口を噤んでから無言を貫くことにした。これ以上言いたくない事を口にしたくはなかったし、うっかり本音を口にしてしまったら泣いてしまいそうだった。しかしどこまでも無言を貫くと決めたマイの決心を、メイは易々と打ち砕いた。

「ティファ様はどうすんの！　姉さん、ティファ様が結婚したってどうなったって傍にいるって言ってたじゃん！」

（そんなの今でも思ってるわよ！　第一、好きで離れるわけないじゃない！）

反論は心の中でだけ放たれた。仮面のように張り付いた笑みが凍り、浮かべたくもない痛みが表出するのを感じて慌てて表情を引き

締める。
（だからお願い、もう何も言わないで）
形勢逆転し、今度はマイがメイに懇願する。だがどれだけ魂の形が近くとも、マイの懇願がメイに届くことはなかった。あるいは届いた上で無視されているのかもしれないがそれを確かめる術はない。
日差しに薄桃が混じる。空気の色さえ変わる感覚に夕暮れが近いのだと気付き、それだけの長い間アレイズ達とダグラスの攻防は続いていた事を知る。それは総じて、自分の決意が固まるまでの時間でもある。ティファを守るために自分が為すべきこと。その形のあまりの歪さと不快さを受け止めるまでの時間は、あまりに長かった。そしてその時間こそが、マイの決意の重さでもある。
冗談でさえ口にしない言葉をこの状況で口にする理由を、メイはとうに理解しているだろう。マイの決意が揺らがぬ事も、何を言っても無駄である事も。それでも駄々をこねるように声を張り上げるのは、この選択が誰を傷つけるか熟知しているからだ。
（こんなもの、この神以外誰も得をしないわ）
だから傷つくのは他の全ての者達。そんな事は分かっていた。
気を落ち着けるため数秒目を閉じる。真っ暗闇の世界を切り裂くように視界に桃色の光を取り込み、マイはただ一言「それでも私は行かないわ」と言い放った。出来る限り冷徹に聞こえるように、誰を傷つけても素知らぬ顔ができるとその表情で思い知らせるように。
メイは気付くだろうか。マイは胸中で独りごちる。今自分は「行けない」ではなく「行かない」と口にした意味を。誰のせいでもなく、自分の意志で選び取った道だから邪魔立てをするなと最終宣告した姉の覚悟を汲んでくれただろうか。
無言の問いに答えるようにメイが顔をくしゃりと歪める。絶望を語る表情にマイは淋しげに笑いながらも、静かに頷いてみせた。もう自分はそちらには戻れないとダメ押しをするように。
（契約をすればこの神は付いてくる。約束が守られる限り契約自体は決して悪い事ではないけれど、この神の存在は他の神を引き寄せ

る指標となるかもしれない）

もしも神が互いの魔力を辿る力を持っていたなら、もしも神が特有の波長を共有していたとしたなら。神々はダグラスを追うだけでティファニエンドの居場所へと至ることができるのだ。それだけは何があっても避けなければならない。

もっともそれを言い出すとイオとアレイズも不安要素だが、幸いアレイズは神となった事情が事情でありなおかつ新参者だ。世界と神々の在り方と少しばかりずれている彼は、他の神々に嗅ぎつけられる可能性は極めて低い。そしてイオは本体である兎の体に宿っていればある程度存在を隠すこともできるだろう。アレイズですら神の紋章を見るまではただの兎だと思っていたのだから。

だが、ダグラスはそうもいかない。彼は世界に一番の忠誠を誓う神。となれば、他の神々からの信頼も厚いはずなのだ。そんな神を連れてティファと旅などできようはずがない。そもそも、いくら約束があるとは言えダグラスはティファの傍に置くには些か危険すぎた。酷い言い様だとは思うが、彼は存在自体がマイにとって有害なのだ。

（けれど、誰よりも世界に忠誠を誓っている事が知れ渡っているのなら私としては好都合だわ）

世界がティファニエンドの死を願い神々が執行するのならば、近づく神はすべて打ち倒せばいい。それはなるべくならティファのいない場所の方が好都合だった。マイはダグラスを餌に神々を誘き寄せる策を自分の胸の中にのみ秘め、薄く笑った。世界への憎しみに満たされた自分の、何と醜いことだろうかと考えながら。

「マイティーナは俺と契約をする道を選んだ」

沈黙の中、楽しげに微笑みながらダグラスが簡潔に言った。「だから別れるのだ」不快感と驚愕を顕にする三人に見せつけるようにマイの肩を抱く。半身がダグラスに触れ、マイは自分に触れる熱を睨み据えたが続いた言葉にそれどころではなくなってしまった。

「俺がいれば他の神がティファニエンドを見つける指標になる。…

…マイティーナはそこまで考えているのだろう？」

読まれていたのか。

ちらりと見下ろされる銀瞳が悪戯っぽく揺らめく。その瞳にきつい眼差しで応え、マイは内心で舌打ちした。他の誰でもなくこの神に自分の考えを読まれていたことが腹立たしかった。こんな風に簡単に想いを悟らせるようなヘマをすることは今までなかったというのに。

神に従属することを誓いながらも変わらず反抗的な態度を取るマイの姿にダグラスは寛容なまでの笑みを向ける。うっとりと細められる瞳に戦慄するが、どれほど嫌悪感を抱こうとダグラスが向けるこの好意のみが仲間を救うことを知っていたマイはそれ以上の反抗を我慢した。

「……そうなの？」

肩を抱かれても身じろぎ一つしない姉に探るような目を向けたメイが問いかける。亜麻色の瞳の奥からはそんな神からはさっさと離れなさいよという敵意が燃え上がっているのが見えたが、マイはそれを無視して小さく頷いた。

「えぇ」

全てを隠しておきたかったが、ダグラスが口にした以上沈黙を貫き通すことはできないだろう。それにどうせ隠そうとしても信じてはもらえない。相手は自分の半身なのだから。

頷きと共に放たれた言葉は決別の言葉と同義だ。

妹や主、そして彼女達を守ってくれた神々との別れ。胸にぽっかりと穴を空ける言葉を、しかしマイは毅然とした顔で言い放った。

刹那、泣きそうに歪んだメイが責めるような目を向ける。その鋭い眼差しを真っ向から受け止め、マイはダグラスが「よし」と口にするのを聞いて今度は胸中で別れの言葉を口にした。

（さようなら）

大切な人を守るために、自分は両親達の敵と契約をする。そんな自分がティファやメイの傍にいられるなどとは思えなかった。仮に

誰かが許しても自分が許せないだろう。
何より自分は世界を憎んでいる。こんな心境でアレイズが世界を友人だと口にするのを聞いていられる自信がなかった。
「それでは契約を行うとするか」
マイの心境など露知らず、ダグラスはパンッと手を打ち鳴らしマイに向かって言った。だがマイにはそれに対して文句を言う権限もなければ、反対をする資格もない。約束を違えたが最後、銀の鎌鼬は再びティファ達を襲うのだから。マイは頷くしか選択肢のない自分に腹を立てながらも、不思議と心が凪いでいるのを感じていた。覚悟などとうに固めていたせいかもしれない。
（契約を済ませれば、その時こそ皆と別れる時ね）
寂寥感がこみ上げる。同時にそんな想いをどこか遠くから見ている自分が挑戦的に笑っているのも感じられた。一体この世界とそこに生きる神々にどう落とし前をつけてもらおうか、そんな考えばかりが頭を巡っていた。あくまで主を害すつもりなら、容赦するつもりはなかった。
だが挑戦的な笑みはダグラスの不思議そうな声により凍りついてしまった。
「ところで、契約とはどう行うものなのだ？」
マイだけではない。ピシリと部屋中の空気が凍りついたような錯覚を感じた。
「……君、知らずに契約を迫ってたのかい？」
イオが心底呆れたとばかりに凝った息を吐き出しながら肩を落とす。アレイズはと言えば何も言えない様子で、ひくりとこめかみを引きつらせて黙っていた。そしてメイは――。
「あんたそんなことも知らないで勝手な事ばかり言って！　契約もできない神なんてお呼びじゃないんだから、早く姉さんを返しなさいよ！」
怒りに顔を紅潮させてダグラスを怒鳴りつけていた。どこからどう見ても神をも畏れない態度だ。もし状況が状況だったならメイもダグラスを張り倒していたことだろう。こうして契約を

迫られるような事態にメイが陥らなかったことは幸運と言えるかもしれない。そしてティファがその役目を担わなくて済んだことも。

（考えてみれば、この場の誰も神を畏れたりしないんじゃないかしら）

もっとも、自分達が尋常ならざる神経の持ち主なのか、他の人間達の肝が小さすぎるのか判別がつけられないところだが。マイはひっそりと溜息をついて、とにかくも自分がここに立っている事が一番良い道なのだと言い聞かせることにした。

一方、メイに怒鳴られ続けているダグラスは前方に並ぶ三人を無視してあくまでマイペースだ。首を傾げ思考した彼はマイに目を留める。

「マイティーナ、お前は知っているか？」

「え？　いえ……元々神との契約は聖人聖女が行うものですし、彼等以外には伝授されないものですから」

（恐らく、この場で契約の仕方を知っているのはティファ様だけでしょうけれど）

心の中で呟き、誰にも悟らせない様なさりげなさでティファを一瞥する。豊かなスカイブルーの髪を床に広げて眠り続ける主の姿に胸が痛んだ。これだけの騒ぎがすぐ傍で起きていようと身じろぎ一つしないことが気に掛かる。

（いつもなら寝言ぐらいは仰っているのに）

眠るというよりも気絶しているという表現が正しい姿に心配が募っていく。だがそれをおくびにも出さず、マイは表向きはただダグラスがこれからどうするかのか注視するような態度を取った。

「そういえば」

呆れと怒りが入り交じった沈黙の中、ダグラスがふと何か思いついたように顔を上げた。晴れやかな顔が瞬時に消え、次の瞬間にはアレイズの前に現れる。「な……っ！」ぎょっとするアレイズの襟首を掴み、苦しげに顔を顰める彼に向かってダグラスはにやりと笑った。「おい、亡霊」

「確か貴様はティファニエンドと契約をしていると言ったな」
「それがどうした！」
呼吸さえままならぬ力に耐えきれなくなったのだろう。アレイズは力任せにダグラスの腕を引き剥がし、一息に剣を横薙ぎにした。空を切る音と共にダグラスがふわりと宙に静止する。
「ならば知っているはずだ。貴様はどのようにしてティファニエンドと契約した」
舞うような動きの中でダグラスは好奇心を隠さずに問うた。無論アレイズの怒りなどまるで見えていない。それどころか、ダグラスは自分の望む言葉以外は聞く耳すら持たないことだろう。どこまでも傲慢でマイペースな神だ。アレイズもダグラスのそんな性質に対し文句を言うのが面倒になったのか、大きく溜息をついて首を振った。
「さぁな。第一俺は貴様等正規の神々とは違い中途半端な存在だ。だから契約方法も異なっている」
皮肉げな声はダグラスとイオに対する当てこすりだろう。効果は勿論ないが言わずにはいられないのだとアレイズの目が言っていた。それに、例え嫌味自体に効果はなくとも答えなど持っていないと示唆することが一番の嫌がらせにもなる。アレイズはそれを狙っていたのだろう。
だが悲しいことに、ダグラスはどこまでもダグラスだった。アレイズの言葉に「ふむ」と頷いた彼は、事も有ろうに「それでもいいから教えろ」と言ったのだ。「だから俺とティファの契約方法は――」きっぱりとした物言いにアレイズが口を開く。だがそれを制するようにダグラスが言い放った。
「俺はマイティーナと共にいる為の方法として契約を選んだ。裏を返せば、共にいられるのならば契約自体も必要がない。だったら方法など別に正規のものである必要もなかろう？　ある程度縁が結ばれれば事足りる」
「……そういうものか？　まぁ、こちらの契約方法は縁を結ぶとい

う意味では効果的だが、魔力はどうやって共有するつもりだ」
「グラスの末裔ならば魔力など与えずとも問題はなかろう。仮に必要になる時が来るとすれば、それは戦闘時だ。契約者を害す敵は俺が直々に殺せばいい」
アレイズの呆れ混じりの問いにダグラスは事もなげに剣呑なことを言う。マイはこの個人的に有害指定した存在を窘めるか否か一瞬悩んだが、どちらにせよダグラスのことだ。話など聞かないだろうと諦めた。
精神的疲労感に淡く息を吐く。その時アレイズと目が合い、逡巡するような眼差しに射抜かれた。
「マイ」
早く答えろと催促するダグラスの言葉を無視し、アレイズがマイを呼んだ。それはメイのように自分達と共に来いと懇願する目ではなく、これから先自分が口にする事に対してマイを案じているように見えた。
「本当に契約するつもりか？」
何度となくメイに言われた言葉。それをあえて今言われる意味に気付けないまま、マイは「はい」と頷いた。
「それが私の選んだ道ですから」
「そうか……」
アレイズの肩が落とされる。ついと逸らされた目が何やらやましいものを抱えているように見えるのが気になったが、どの道契約自体は避けられない。正規の契約方法を使わず適当な契約行為で済ませるのなら万々歳だった。それならば、いつかまたティファ達の元に戻れる日も来るかもしれない。
しかし、マイは気付いていなかった。否、思い出せなかった。
その証拠にアレイズが「すまない」と囁いたと思った瞬間放たれた言葉に、覚悟がパリンと音を立てて崩れそうになったのだから。
「俺とティファの契約方法は口付けだ。その後自分が眠るために宿る物を与えて身に着けてもらえばいい」

さぁっと血の気が引いていく。
イオがアレイズとティファが口付けている所でも想像したのか、こめかみに青筋を浮かべて凍えるような笑みを浮かべる。「わ……」メイは絶句し、わなわなと震える唇でマイを見た後頭を抱えた。
「忘れてた！」
（忘れてた！）
メイの悲鳴とマイの心の叫びが重なる。
（そうだわ、だからアレイズ様は私にあんな事をお尋ねになったんだわ！　契約するとなったら私はあの男と――）
そういえばダグラスはどこだ。きょろきょろと辺りを見渡すが、ダグラスはアレイズの前から忽然と姿を消していた。空間転移だ。だが、どこに現れる……？
胸元に手を組み合わせ、視線を何度もさ迷わせる。そうして正面を向いた時、空間を渡って現れたダグラスが至近距離に現れた。
「というわけだ！　さぁ、契約をするぞマイティーナ」
マイの肩を両手で掴み、ダグラスが蕩けるような笑みを浮かべて上体を傾げた。美麗な顔が音もなく近づく。マイはぎょっと目を見開き、咄嗟に腕を伸ばした。
「ちょ……っ！　それじゃ契約方法が違います！　古来より神との契約には神聖文字が必須だって事ぐらい、私にだって分かっているんですから！」
問題はその神聖文字がどういうものなのか、どういう手順を踏むのかが分からない事なのだが、どんな方法でもいいというのなら適当な神聖文字でも教えてもらって簡単に済ませてしまいたかった。断じて、断じてこのような契約方法は認められない。敵とそこまで縁を結ぶつもりなど毛頭ないのだ。
（大体こんな所で口付けなんて……！　いいえ、こんな所もどんな所もないわ！　相手が悪すぎる）
「離して！」
近づいてくる顔を力一杯手で押しやりじたばたともがく。無論体

格差もあり力の差は歴然だ。それでもマイは自分の心が拒否しているのだと知らしめるために全力で腕を突き出した。
「ちょっと！　姉さんから離れなさいよ！」
今度はダグラスが盾になる体勢になったのをいいことに、姉に加勢すべくメイがリングリングを思いきり投げつける。しかしそれは薄い風に阻まれてことごとく跳ね返された。知らぬ間に結界を張られていたのだ。道理でアレイズとイオが手を出さないわけだと、マイは絶望的な気持ちになった。アレイズはここまで予想していたのか。
「メイ」
全身全霊で逆らうマイの耳に、イオの諦めきった声が響く。心なしか肩を叩く音もする。事実イオは碧眼を諦め一色に染めて、怒りに燃えるメイを諭すように首を振った。
「ああなったらもう諦めた方がいい。……まぁ、マイが旅に同行しないのは反対だけど、ダグラスが味方になるのならこっちにも得だし」
「イオさん！？　何でそんなこと――このままじゃ姉さんが！」
メイが涙混じりの声で抗議する。それをやんわりと受け流すようにアレイズが頷いた。
「強敵が減るという点だけで言えば、確かに得だな」
「アレイズさんまで！　あぁもう神様が二人も揃ってこんなに役に立たないなんて！」
同感だ。いくら自分が選んだ事とはいえ、いらぬ爆弾を落とした上に諦めムードで傍観され、マイは鉄球は彼等にこそぶつけられるべきなのではないかと一瞬考えてしまった。
神との契約。それは確実にマイの人生を縛りつけるものだ。その認識をしっかりと受け止めた上で、マイはこの道を選んだ。だが……。
（神の花嫁だなんて冗談じゃない！）
ティファはいいだろう。アレイズのように良き神に出会えたのだ

から。しかしマイの相手はダグラスだ。全力で拒否してもなお余りあるだけの因縁がある相手の花嫁に、誰が好き好んでなるものか。

ぎりぎりと拳に力を籠めるマイを救うため、メイは一人奮闘していた。彼女はダグラスの強さを見に染みて実感しながらも、諦めずにリングリングを投擲する。その間にも日は暮れ、世界は群青色に包まれていく。宵闇に各々身が浸される。

ダグラスが口を開いたのはその時だった。

「マイティーナ……まさかとは思うが、嫌なのか？」

「……う」

（まさかも何も）

嫌に決まっていると口が裂けても言えない身の上が恨めしかった。契約自体は必ず行われなければならないことなのだ。

悲しげな声はこれ以上無いほどの至近距離で放たれている。なまじ顔がいいだけに、マイはやたらと早鐘を打つ心臓を抑えつけることすら出来ないまま口を噤んだ。いくらモーニングスターを振るって血の海を作り上げるマイとて、年相応の女。端正な顔を持つ男に言い寄られて緊張しないはずがなかった。敵でなければ卒倒でもしていただろう。

何も言えずにいるマイの頬にダグラスの手が当てられる。

「ダ、ダグラスさん……？」

「俺はお前と一緒にいたいんだ。そのためにお前と契約したい」

ひんやりとした手の熱と共に与えられた言葉は、イオのような純粋な素直さからでもアレイズのようなどこか屈折した優しさからでもなく、どこまでも自分と相手しか目に入っていない熱くて真っ直ぐなものだった。

甘く低い声に引きずり込まれるように、メイが投擲するリングリングが跳ね返される音が聞こえなくなる。マイは熱くなる頬をそのままに、両頬に当てられた手を振り払うように数度首を振った。

「分かりません。……何故私なんですか。神をも畏れぬ人間なら、ティファ様やメイだって同じなのに」

無論二人がダグラスと契約をするなどマイが許せることではない。それでも問わずにはいられなかった。たった一度の攻撃でここまで甘い顔をされなくてはいけない理由が思い浮かばなかった。

朱に染まった頬を見られないように顔を背ける。すると今度は顎を優しく掴まれて引き戻された。寒さも血の匂いも何も感じられない、空間ごと切り離されたかのような場に見えるのはダグラスの真摯な銀の瞳だけだった。宵闇に負けダグラスと同じ銀に近い色を放つマイの眼差しが揺れる。

「何故かと問われても俺にも理由は分からん。だが、恋とは総じてそういうものなのだろう？」

「こ、恋!?」

今何か聞こえてはいけない言葉が聞こえた気がする。

そう思いマイが素っ頓狂な声を上げると、ダグラスは不思議そうに首を傾げた。

「何だ、俺があれほど好意を振りまいていたのに気付いていなかったのか？」

「いえ、気付いていないのかと訊かれましても……。そもそも、恋なんて言葉を知っていたことに驚きました」

「何を言う。いくら俺が神でも恋ぐらいは知っているぞ。昔レイナから一目惚れだの略奪愛だの聞いたことがあるからな」

（せ、世界は一体神に何を教えているのよ！）

確かに、誰かを殺すための術を教えるよりは余程良い事を教えていると思わないわけでもないが、この場合はそれが仇になった。殴られて一目惚れ。何だそれは。大体略奪愛は強いて教えるべきことでもない。

「神の持つ感情など、人間の私に分かるはずがありません」

溜息と共に吐き出した言葉はあくまでも丁寧なものだ。そうしてダグラスの告白を受け流そうとすると、遠くでイオが密やかに笑っているのが聞こえてきた。「ダグラスが恋！」……そんな風に笑う暇があったら助けてくれれば良いものを。

やはりいつか殴ってやろうと心に決めていると、ダグラスは「そうか」と少しだけ残念そうな声を出した後で晴れやかに笑った。この笑顔で、マイは自分の努力が無駄になったことを悟った。どこまでも彼女の拒絶は届かない。

「確かにはっきりと言わなかった俺にも非があるから、それは仕方がないな。だが大丈夫だ、お前にもいつかは必ず分かる」

いや、と呟く声色に不吉なものを感じて体を離そうとする。それを力づくで阻止し、ダグラスは不敵に笑って続けた。

「分からせてやる。契約をして四六時中一緒にいれば自ずと見えるものもあるだろう。お前はただそれを受け止めるだけでいい」

「何を勝手な――……っ！？」

もがきながらもダグラスを睨みつけようと顔を上げる。そうして抗議しようとした唇が動きを止めた。否、止まらざるを得なかったのだ。

不意打ちだった。

唇に温かい感触が当てられる。驚愕に目を見開くマイに、ダグラスは嬉しそうに目を細めた後で更に深く口付けた。ぴったりと触れた唇のせいで、呼吸さえままならない。

飽和状態の頭で、マイはぼんやりと考えた。

（ティファ様も、契約をする時こんな感じだったのですか……？）

大事にしていたわけではない。後生大事に守っていたわけではない。だがまさかこんな所でファーストキスが奪われるとは思いもしなかったと。きっとティファならそう考えたことだろう。主と従者はよく似るものだ。そしてマイは今まさにそんな考えを何度も何度も繰り返していたのだから。

ダグラスは慈しむように優しく唇を重ねる。形を確かめるように味わうように何度も繰り返される行為の中、マイはふと自分の体に異変が起きていることに気がついた。

緊張や羞恥とは違う熱が緩やかに自分を満たしていく。ひんやりとしたそれはまるでダグラスが扱う風のようだった。ではまさか、

契約は成立しているというのか。
「何だ」
僅かに離された唇が動く。低い囁きは深い満足感に浸されていた。
「この方法でも契約できたのか。てっきり魔力は供給できないものと思っていたんだが……いや」
一度言葉が区切られる。数瞬の間を空けて放たれた言葉に眉を顰める。
「そうか。魔法だけではないのか」
「魔法だけではない？」
「あぁ。……覚えているか、マイティーナ。魔法を打ち破る方法には何が必要か」
「意志の力ですか？」
魔力をあまり持たない者が魔法を打ち破る時、そこには世界の摂理をねじ曲げられるほどの意志の力が存在する。ダグラスの言葉だ。しかしそれがどうしたというのだろうか。首を傾げると、ダグラスは「そうだ」と頷いた後で続けた。
「これは意志の力が摂理をねじ曲げた結果だ。まさかこんな事になるとは思いもしなかったが」
肝心な事柄は何一つ告げぬまま、ダグラスは静かに目を閉じる。額が触れ合う。そうして同じように目を閉じてから、マイはようやくダグラスが何を言わんとしているのかを理解して余計に混乱するのを感じた。
魔法だけではない。それは契約行為が魔法とは違うものだということを指している。そして意志の力とは本来魔法を打ち破るためのもの。だが常ならば正規の方法しか受け入れられないはずの契約は、あろうことか全く他の方法で受理されてしまった。これが意味することは――。
（ダグラスさんが私と契約することを願ったから）
形だけでいいと言いながら、自分との約束は反故にできまいと不敵に笑いながら、その実ダグラスは自分と魔力を共有して繋がる事

を望んでいたのだ。世界の摂理を捩じ曲げるほどに。
本当に、なんて。
（適当な世界なの、ここは！）
神とは言え、世界に劣る存在の恋情一つでねじ曲げられる重要事項とはこれ如何に。
もうどうしようもない。マイはがっくりと肩を落とし、当初の狙いとは大幅に違う結果に終わった契約に疲労感を感じて深く息をついた。
これでもう、本格的に退路は絶たれてしまった。唯一の希望である不安定な契約による立場の確保も、今では打ち砕かれてしまっている。
（でも、これは最初から予定されていたことでもあるじゃない）
そうだ。本来は正規の手順を踏んで契約するつもりだったのだ。未来の全てがダグラスの手に委ねられたからと言って嘆いている場合ではない。全て覚悟の上なのだから。ただ僅かばかり希望をちらつかされて落ち込んでしまったが。
気を取り直して顔を上げる。ダグラスと目が合う。見た瞬間逸らしたくなった程に熱を孕んだ瞳を射るように見据えると、ダグラスの背後からイオの声が聞こえてきた。
「これで契約成立かな？」
「いや、まだ証を渡していないぞ」
……なぜだろう。自分で選んだ道だというのに、殴りたくて仕方がない。
ダグラスがマイに対し一切の敵意を持たない事、味方につければ有利なことを知っているせいかイオもアレイズも契約に関してはそれほど危険視していない様子だった。もっともアレイズの場合、契約方法が方法なだけに案じていたようだがそれも今となってはどうしようもないと諦めているのだろう。実際奪われたものはどうしようもない。ただ、分かっていても腹は立つ。
「二人とも？」

だからメイがわざとらしいまでに明るい声を上げた時は、内心快哉を上げた。

傍観者に徹し黙って契約が行われるのを見ていたイオとアレイズを断罪するように、メイがリングリングを構えてにこやかに笑う。乾いた血が張り付いた長い髪が見る者に凄惨さを与える。だがメイの声が聞こえないのか、イオとアレイズは二人で続けていた。

「だけど本当にあれでいいのかな？　契約者欲しさに摂理捩じ曲げる神なんて初めて見たから、いまいち判断ができないんだけど。というかできたんだ、あんな事」

「知らん。しかし本人がいいのならあれで契約になるだろう。見た所魔力も供給されているようだからな」

二人には見えていたのか。口付けによってねじ曲げられた摂理と、与えられる魔力が。羞恥にふるふると肩が震える。そんなマイをダグラスが困ったように見下ろすが、気にしている場合ではない。

耳を澄ませる。やはりメイに気付いていない様子のイオとアレイズは二人揃って溜息をついていた。

「不思議なものだね。……いや、適当なのかな？　この世界が」

「あぁ、全くもってそうだな。意志によって動かされる世界、か」

感慨深げに放たれたアレイズの言葉をマイも胸中で繰り返す。意志によって動かされる世界。それは世界が意志によって動かせる事を指している。ならば、神が太鼓判を押す意志の強さを持つ自分の想いは、一体世界にあるもののどこからどこまでを動かせるだろう。

（世界の見た夢ごと、世界が殺されるという運命ごと捩じ曲げることができたなら）

だが、自分も世界とティファニエンドの関係の前では第三者だ。だとすれば、世界を動かせるのは唯一人。

「二人とも」

しみじみと頷き合う神々の横から、今度ははっきりとした高い声が上がった。その声に思考を止めると、イオとアレイズは話すのをやめて一斉に冷や汗を浮かべた。当然だ。マイですら思考を停止せ

ざるを得ない力を持った声だったのだから。
イオとアレイズの前にはニコニコと笑ったメイが立っている。彼女自身汗をかいているということは、契約の間中マイを助けようと動いていたのだろう。自身の血で汚れたリングリングの刃を月明かりに照らして、冷ややかな怒りを内に秘めた軽やかな声でメイは言葉を紡いだ。
「さ、姉さんがあんな目に遭うのを傍観していたお二人さん。……覚悟、できてるよね？」
語尾に星がちらつくような明るさと残忍さだった。「イオ」アレイズが硬い声で言う。「うん」イオも珍しく素直に頷く。と同時に、彼等はティファの傍に立って結界を張り巡らせた。二人して言葉を揃える。
「「そんな覚悟を作った覚えはない」」
だがメイも冷静なものだった。くすくすと笑ったかと思えば、リングリングを大きく振りかぶる。天真爛漫な笑みが血まみれの顔に酷く不似合いだった。
「私、今なら二人の結界を破れるかも」
意志の力で。そう付け加えた後で何が起こったか、マイは見なかったことにした。代わりにダグラスに向きあう。と、彼はおもむろに手を差し出した。「何ですか？」言いながら見下ろすと、そこにはシルバーのイヤリングが一つ置かれていた。
風をモチーフにしているのか、緩やかにうねっている細長いイヤリングは鋭い光を放ちダグラスの手の上にあった。
「契約の証だ。肌身離さず身につけておけ」
ダグラスの手からマイの手へと渡されたイヤリングをしげしげと見つめて尋ねる。こんな小さなものに、ダグラスは宿っていたのか。
「この中で眠っているんですか？」
「そうだ。俺は元々ゼクスだから本体で眠れば事足りるが、長いこと眠るには世界は騒々しいからな」
「ゼクス？　貴方が？」

ゼクスとは人間と同等かそれ以上の知能を持つ動物のことだ。イオはともかくとして、ダグラスは元人間だとばかり思っていたのに意外だった。目を丸くしているとダグラスは「そうだが？」と不思議そうな顔をした。当たり前の事を言うような態度にマイは途端に不安になった。まさかとは思うが彼は。

「まさか兎なんてことは……」

そんな可愛い動物だったら衝撃は大きい。恐る恐る尋ねるとダグラスは口の端を吊り上げた。

「あんな草しか食えん動物に見えるか？」

「見えません」

見えないからこそ尋ねたのだ。催促するようにダグラスを見上げて答えを待つ。すると彼は窓の外の雪景色を懐かしそうに眺めて言った。

「イオのような兎と違い俺は狼だ。それも極北に棲む、銀狼と呼ばれる種族だった。もっとも、銀狼は俺を残して絶滅したが」

あっさりとした言葉に息を呑む。大切な人達を殺した敵とはいえ、今の言葉には心を揺さぶられた。……ダグラスはもう、二度と同じ種族に遭うことはできないのだ。

感慨を凝った息にして吐き出す。その刹那、ダグラスは唐突に「悪くなかったな」と呟いた。

「レイナの話を聞いた時は口付けなど何がいいのかさっぱり分からなかったが、悪くない」

「……はぁ」

頼むから思い出させないでほしいものなのだが。マイが辟易しながらも相槌を打つと、ダグラスは懐かしそうな眼差しを甘い熱に変えてとんでもないことを言い出した。

「好き合った者同士の行為だからだろうな。だからこんなにもいい気分になる」

今日何度目かの思考が停止する感覚に襲われる。今この神は何と言っただろうかと、イオとアレイズの叫び声が聞こえる中で考える。

好き合った？　誰と誰が。
　慌てて首を振る。そうして体を離して大声で抗議した。
「いや、合ってません！　合ってませんから！　ただの一方通行でしょう、これは！」
　しかし、言った所で聞かないのがダグラスだ。
「何を驚いている。口付けとは好き合った者同士がするのだろう？」
（その口付けだって好きでしたわけじゃないってことに、どうして思い至らないのこの神は……！）
　頭を抱えている間にも、ダグラスはマイの手からイヤリングを取って手ずから着けている。人の意見などお構いなしのその態度にカチンと来て、マイは自分の髪を撫でる男を殴ろうとして、咄嗟に柔らかく微笑んでみせた。途端、ダグラスは相好を崩す。その隙を見逃さず、甘く媚びるような声を作った。
「私は貴方以外の人と家庭を持つことを今から最上の願いと致しましょう」
　ダグラスの手が止まる。衝撃を受けて震えた手が滑稽だった。
　約束は守られた。これ以上従順にする必要はないだろう。……元々従順ではなかったなどと言われた所で聞く気はない。
　マイはふいと顔を逸らしてダグラスと目を合わせないようにした。その瞬間聞こえた悲しげな声は、しばらくの間イオの笑いを呼び起こすほどの威力を持っていたがマイの心には響かず、結局ダグラスはマイの機嫌を取り戻すのに一刻を要する羽目になった。
　長い長い一日の終盤はこうして近づいていった。

第三十九話

「さて、これで契約が完了したわけだが」
ようやくマイの機嫌を直すことに成功――というよりも、面倒になったマイが渋々許しただけなのだが――したダグラスは、今まで諍いなどなかったかのような気安さでイオに声を掛ける。何事もなかった顔をするダグラスにイオは肩を竦める。
「本当にあれで完了したと言えるのかは、甚だ疑問だけどね。大体契約してすぐ契約者に嫌われる神なんて初めて見たんだけど」
イオの額にはじわりと汗が滲んでいた。メイに散々いびられ、アレイズ共々逃げ回っていたせいだ。そのため声にも疲労が色濃く滲んでいたが、誰もそれを指摘することはなかった。マイでさえ取りなそうとしないのだから当然だ。
とっぷりと日が暮れ、空には星々が煌めいている。壁に床に飛び散った肉片も血の色も、暗がりの中ではよく見ることができない。むせ返るようだった血臭も寒風に吹き飛ばされてしまった。あるいはダグラスが悪趣味な魔法を解除したため、時が動き出して全てが風化しただけなのかもしれないが。
濃密な夜の気配が忍び寄るのを感じ、マイは小さく吐息した。銀のイヤリングが揺れる。
（まだティファ様は目を覚まさない……一体、何が起こっているというの）
これだけの長時間眠り続けたままなのだ。ただの気絶だとは思えない。かといってダグラスが何か術を施したわけでもないだろう。もしそうならダグラスは早々と口にしているはずだ。では、一体何が。
眠っているせいか、それとも闇のせいか輝きが失われているものの決して色を失わないスカイブルーの髪を見下ろす。じっと凝視しても身動ぎ一つしない華奢な体を揺り起こしたい衝動に駆られながら

らも、マイはそこから一歩も動けないでいた。動いてしまえば、未練が残ると分かっていた。

だがそんな未練を呼び起こすようにアレイズがマイに問うた。

「それで、お前はこれからどうするつもりだ？」

それは何度もメイと繰り返した問答だ。ダグラスと契約しティファが命を狙われる危険を回避した今、残されるのはマイの今後の問題だけだった。主であるティファを置き、本当に離脱するのか。それはアレイズだけでなく、イオにもメイにも共通した問題だったに違いない。

「私は……」

掠れた声が漏れる。背後から刺すような冷気が体を撫で、鳥肌が立った。震えるマイの体をダグラスがそっと支え、初雪のような淡い外套で冷気から契約者を守っていた。

（覚悟はもうとっくに決めてしまった。けれど……）

未練が全く残っていないわけではない。むしろ、未練など時が経てば経つほど募るものなのだ。

じわりと熱が触れる感覚に、マイはダグラスを見上げる。そうして逡巡の後、穏やかに笑む諸悪の根源を軽く睨みながら「貴方はどうしますか」と問うた。

「契約神である貴方には、契約者たる私の今後を決める権利がありますが」

「それは俺の台詞だ」

無理矢理に作った誠実な声色にダグラスが即座に反応した。真っ直ぐに睨み据える亜麻色の視線を受け止め、怪訝そうに眉を顰める。

「確かに俺はお前の契約神だ。だが、お前の行動を制限する気がないことぐらい分かっているだろう」

心外だと言わんばかりの声色に、確かにそうだろうとマイは胸中で呟いた。ダグラスは自分と共にいる事が目的。ならば行く先などどこでもいいのだ。例えそれが世界のいる場所であろうと、今なら気にしはしないだろう。

硬い腕が肩に触れる。包み込まれるように横から抱きしめられた。月明かりに照らされた銀髪が亜麻色の髪と溶け合うように重なったかと思うと、耳元で囁かれる。

「仮にティファニエンドと行きたいと思うならそうすればいい。約は守られたのだ。俺がティファニエンドを害することはもうない」

ティファだけではない。この場にいる者全てと、そしてこれからマイが出会って親しくなる存在全てをダグラスが害することはないだろう。自分は約束を守り、ダグラスは約束を守る。誰も害されることはないのだ。……恋でもしようものなら話は別だが、生憎そんな予定は今のところない。嘆息し、マイは一度大きく頷いた。

「そうですね。でも……」

瞳を揺らめかせ、ティファを見下ろす。決断は急がなくてはならない。

眠るように気絶するティファが何らの外傷を負っていないことは予想できるが、それも確実とは言えないのだ。できる事ならすぐにでも医者に見せた方がいい。否、仮に怪我がないとしても外気が通り抜ける部屋で布団もかけずに眠っているのだ。一刻も早く温かい場所へ連れて行かなくてはならない。

（でも、私がダグラスさんを連れてティファ様と共に行くことが良い事とは思えない）

約束は守られるだろう。きっと、何があってもティファの命が狙われる事はない。

分かっているが不安が拭えないのが問題だった。そもそもダグラスという存在自体が危ういのだ。下手に他の神に嗅ぎつかれるのもまずいが、マイを守るためにティファを平気で見殺しにしそうな性格も困り者だった。

「貴方がもう少し穏やかで優しい性格だったらよかったのに……」

溜息と共に吐き出した言葉にダグラスがむっと眉根を寄せた。

「何を言う。俺はいつだって穏やかで優しいだろう。おまけに紳士的だ」

どこがだ。胸中で呟くと今度はメイが反応した。
「何さらりと大嘘ついてんのよ！　全部逆じゃない！」
びしりと人差し指でダグラスを突き刺し、大声を張り上げて反論するメイにダグラスが視線を逸らす。どうやら嘘をついたという自覚はあったらしい。こめかみに手を当ててやれやれと首を振ると、ダグラスは子どもっぽい拗ねた表情を見せながら何か言おうとして口を噤んだ。賢明な判断だ。
「とにかく……」
マイは拗ねたダグラスを完全に無視して呟く。
決断は急がなくてはならない。強迫観念のような感情に心を支配されながら、マイは決断を下した。
「少し時間をください。もし共に行けると判断できたなら、その時はすぐに追いかけますから」
やらねばならないことがある。やりたいことがある。そしてそれは恐らく、ティファの元では一つも行えないだろう。ならば自分は離れるしかないのだ。
ただ、それが分かっていて逃げるような言葉になったのは未練が邪魔をしたせいだ。三人を順々に見渡して自分の答えを述べたマイは、あまりに情けなく突っ込みどころの多い言葉に一人苦笑を漏らした。
深青のメイド服が風にはためく。血や泥による汚れのないそれを見下ろし、何故こんなに綺麗な状態なのだろうと考える。何故自分は服を汚してでも向こう側に行けないのか。だが、考えても詮無い事なのは分かっていた。どうせ自分はこれからこの手を汚していくのだから。
「そんなの一体いつになるか分からないじゃない！」
マイの言葉に逸早く反応したのはメイだった。瓜二つの顔、遜色ない声、けれども表情も見た目の身奇麗さは正反対の妹の姿に口ごもる。どこまでも真っ直ぐな言葉が眩しすぎた。
「それは……」

反論する言葉が見つからず口ごもる。瞳の揺れが大きくなり、しっとりと潤いを増す。

メイの言葉は、まるでマイの心を映し出す鏡のようだった。闇にも屈さず曇り一つ作らない鏡。

（いくら時間があっても、きっと私は見つけられない）

否、答えを見つけることはできる。ただ、メイが望む展開を与えることはできないだろう。自分はきっと彼等を追いかけることはないのだ。いつか、世界がティファを神々の標的から外させるその時まで。

勢いの良い言葉に言葉を詰まらせていると、メイはなおも言い募る。

「昔から姉さんは悩み出すと長いんだから！　今回だって、悩んでる間に一生が終わっちゃうわよ！」

「そうだね。一生っていうのは確かに長い」

あながち大袈裟とも言い切れない言葉にイオが呆けたように賛同してマイを見上げる。しんと静まり返った碧眼を見返すと、彼は困ったように笑った。誰の想いも理解した上で、どうしたものか途方に暮れているようにも見えた。ただ、マイには彼がどういう態度に出るかを容易に予想することができた。

イオの両腕が遠慮がちに広げられる。甘やかな顔立ちに透明な笑みが浮かんだ。

「大丈夫。ダグラスが何かしたら僕達が抑えるよ。だからそれに関しては気にしなくていい」

それもやはり、全てを理解した上で浮かべられたものに違いない。その腕にマイが飛び込むことなど有り得ないと優しい笑みが告げている。それでも言わずにはいられなかったのは、自分がいなくなればティファが悲しむからだ。契約こそしていないがイオはティファの契約神同然。彼にとって何が一番大切かなど、訊かずとも分かる。

広げられたままの腕を見て口元を緩めてみせる。同時に下ろされた腕がマイの考えを裏打ちした。ほんの刹那の間、二人で密やかな

笑みを交わす。主を任せ任される者としての、それは儀式のようなものだった。

そんな二人の態度にしかしアレイズは気付かないらしく、何度も頷いて賛同した。

「当然だ。第一今回はティファが寝ていたから不覚を取ったものの、あいつがいれば神一人ぐらいどうとでもなる」

信頼が籠められた眼差しに、契約者に頼るのは神としてどうなのかと考えるものの、マイは内心で何度も頷いていた。この中で最も攻撃性の高い性格をしているのはティファであり、タガが外れたらイオ以上にダグラスを圧倒する力を見せるであろうことも承知していたからだ。

理性ではアレイズが言うとおりティファがいれば何等の問題もないと理解している。イオも言っているように、ダグラスが牙をむこうとティファが害されることはないだろう。元々彼等の力は拮抗状態なのだから。しかしマイは理性を振りきって首を振った。

良き仲間を得た。主は良き神々に選ばれ、申し分ない面子であると思う。

だが、それだけで世界に対抗するにはあまりに心許ない。

「大丈夫、すぐに追いつきますから。……多分」

「全然大丈夫じゃないでしょ！」

曖昧な返事にメイが激昂する。紅潮した頬は湯気を立てそうなほどに熱されており、メイの周囲を取り巻いていた。そこだけ温度が高く、白く烟った湯気で冷ややかなマイ達と断絶しているような錯覚さえ感じる。無論それは妄想でしかないのだが。

天真爛漫な姿をかなぐり捨てた激昂にイオが肩を竦める。さぁ、この始末はどうつける？　といたずらっぽい目がマイに向けられた。そんな事を言われても、どうしようもないのだが。

イオに釣られて肩を竦めそうになった時、それまで黙っていたダグラスが口を挟んだ。とはいえ、マイにしか聞こえないような囁き声だが。彼としてもこのままでは埒があかないと思ったのかもしれ

ない。声には手を差し伸べるような慈愛が籠められていた。
「マイティーナ」
「……何ですか、この忙しい時に」
掛けられた声にうっとおしいとばかりに冷ややかな声を返す。しかしそんな事はとうに慣れてしまったのか、ダグラスは憤るでも苦笑するでもなく続けた。空気を震わせる声にダグラスが身近にいたことを思い出す。
「そんなに困っているのなら、俺があいつらを飛ばしてやろうか？」
「飛ばす？　どういうことですか？」
ダグラスの突飛な意見にマイは反射的に問いかけた。
飛ばすとは風で吹き飛ばすということだろうか？　それとも別の意味が？
背中に触れる熱を意識しないように努めて首を傾げると、ダグラスはにやりと口の端を吊り上げた。悪戯を思いついた子どものような明るさのある表情だった。
「お前の見ている前で、奴等を別の場所へと空間転移するんだ」
「空間転移？」
成程それならば話は早いだろう。
言うべきことは既に告げている、それでも決着が着かないのなら強制的に離脱すればいいだけの話だ。
「何もティファ様達ではなく、私達が移動すればいいでしょう」
しかしそれならば自分達が空間転移すればいいだけの話ではないだろうか。そう思いなおも問うと、ダグラスは少し考えこむように目を伏せた後で「いや」と告げた。
「魔力を隠蔽するにはしばし時間がかかる。その前に転移するのは避けたい」
となると、やはり神々の魔力は探知される可能性があるということか。マイは胸中で呟き、きっと視線を鋭くした。ダグラスの提案も、自分達が転移しない理由も納得がいく。だが一つだけ確認しなければならないことがあった。

「……それが罠じゃないと言いきれますか？　貴方が敵陣へ彼等を叩きこむ可能性だって、ないわけではないでしょう」

神々が世界のどこかに集っているなどという話は聞いたことがないが、一度アレイズを呪い殺そうとして幾人かは集結しているはずだ。ダグラスの号令でティファを抹殺せんがため、どこかに集結している可能性とてゼロではない。……自分と契約をすることを予想していなかったのだから、あり得ない話だとは思うが。

（それでも気は抜けないわ。……私はもう、世界も神も信じられない）

当たり前の顔をして自分達が生きる大地を抱く世界が牙を剥く。そんな状況に放り込まれてなお世界を信じられるほどマイはお人好しではなかった。

疑念をストレートにさらけ出すマイに、ダグラスは肩をすくめて片目を瞑ってみせた。

「言いきれるが、お前はそれを信じるのか」

「信じません」

困りきった声にきっぱりと返す。言葉にせずとも証明を求める姿に、ダグラスはなおも苦笑を深めた。

「そう言うだろうと思っていた。……転移時はともかく、転移後であれば罠ではないと証明する術がある」

「何ですか？」

「奴等を飛ばした後に、きちんとあいつらが無事な姿を見せてやる。それならどうだ」

胸をはって告げたダグラスに目を伏せて思案する。無事な姿。それが偽りの映像でないなどとどうして言えようか。頭の中で冷静な自分がそう断じる。しかし、疑いだせばキリがないことは分かっていた。

（それにこの方法以外に、転移を利用しなおかつ罠ではないと証明する術はないでしょうね）

「……良いでしょう」

じっと息を詰めて答えを待つダグラスに向けて鷹揚に頷いてみせる。途端彼の相好が崩れ、安堵の空気が散らばった。本心からの喜びを示す横顔を、値踏みしていることを気付かれぬよう静かに見据え胸中で呟く。

（これはダグラスさんが信用するに値するかを見極めるいい機会でもある）

下手をすれば、とんでもなくアレイズ達に負担がかかる話だが、神が二人いれば逃げるぐらいはできるだろう。一番の強敵はマイが引きつけているのだから、後は何とかなるはずだ。そう思いたい。

「よし」

吐息し覚悟を固めていると、ダグラスの声と共に背中に感じていた熱が離れた。離れていった箇所が急激に冷え、途端に心細くなった自分を叱咤した。手の平をぎゅっと握り締め、一歩分前に滑り出たダグラスの背中を見つめる。

「おい、お前達」

囁かに交わされた言葉が聞こえていなかったせいか、唐突に動き出したダグラスに三人は一斉に臨戦態勢を取った。

「何だ？」

「何？」

「うるさいわね、何よ？」

それぞれが武器を持ち、魔力の波を揺らがせ、緊張感の漲った表情で三者三様に答える。

イオが手の上に顕現させた氷の断面の透明さが月明かりに透かされて硬質な光を放つ。ほんの僅かでも欠けてしまえば鋭い刃と化すその光を美しいと感じる心を「今すぐティファニエンドの傍に立て」と放つダグラスの言葉が無遠慮に遮った。

銀に見えなくもない白地の外套が風にはためき広がる。髪の毛の間に星を散りばめるような煌きが宿っているのが見えた。――幻想的な光景だ。御伽話に出てきては美を讃えられる神にふさわしい。

だがダグラスが続けた言葉は美しくも何ともなかった。

「さもなくばティファニエンドを殺す」
「な……っ！」
突然かつ剣呑な言葉に眉を顰めると同時にメイが怒りに震える声を上げる。ぶるぶると震える手の平を覆う乾燥した血の黒さは、先ほどまでの幻想的な光景とは打って変わって生々しい。その生々しさに意識を取り戻しダグラスの背を睨みつけると、彼は首だけで振り向きニヤリと笑った。問題ない。そう告げる顔だった。
群青とも紫紺とも漆黒とも形容できる、曖昧な夜の色の中で怒りを昂ぶらせるメイを見下ろすと丁度イオとアレイズが彼女を宥めている所だった。二人でメイの肩をそっと掴み、ティファの傍へと押しやる。
「意味は分からんが、とりあえず言う通りにしておこう」
「そうだよ。何も出来ないことを要望してきたわけじゃないんだからさ」
メイと違って冷静な判断を下せる二人は、ダグラスを刺激してティファを害されることだけは避けたい所なのだろう。幸い、ダグラスが望んでいるのはティファの傍に立つことだけなのだ。その程度ならば何らの問題もない。そしてそれこそがダグラスが問題ないと笑った理由だ。
「……分かったわよ！」
二人がかりの説得にメイが渋々頷く。神相手とは思えないようなぞんざいな声で言い放ち、素直にティファの隣に立つ。血まみれの立ち姿が冷静さを取り戻すのを見て明らかに安堵した様子のイオとアレイズも、その傍に並ぶ。
水晶の結界は解かないまま、ティファを囲むように立つ三人を見下ろし、マイはそっとダグラスの背に問いかけた。空間転移というものがどれだけの魔力を使うものかは知らないが、大人数を転移する為に大量の魔力が必要になることぐらいは分かる。しかしダグラスならばその点は問題ないだろう。問題は、別の所にあった。
「で？　どこに送るんですか？」

どこに送ろうと、そこが敵の眼前でない限りティファもメイも救われるだろう。ただ、二人は今すぐにでも医者に見せなければならない体だ。出来れば人里に送ってほしい。そんな思いを籠めて問うた声に、ダグラスはしばし黙考した後で。

「奴等の目的はレイナだろう？　ならばレイナに縁のある場所がいいだろう。会えるかはともかく、手がかりぐらいはあるはずだ」

「レイナに縁がある場所？　一体どこなんですか？　それは」

世界の意志に縁がある場所というのは、言葉にしてみると酷く不思議なものだ。世界そのものを抱く存在に縁も何もないだろう。言うなれば全ての大地が縁深い場所なのだから。

ともあれ手がかりがあるかもしれないというのは願ってもない話だと思考を結び、マイは幾分口調を柔らかくした。勝手に離脱する分、少しでも彼らの役に立てるのならば本望だ。

柔らかな声色に気分を良くしたのか、ダグラスは嬉しそうに笑って片目を瞑って答えた。

「それは後のお楽しみだ」

「そうですか。それでは楽しみに致しましょう」

だが、その喜色はすぐに凍りついてしまった。

くすりと笑ったはずのマイが硬質な鎖の音を響かせたせいだ。

「ですが」

だらりと垂れ下がった鉄球を揺らしつつ、ぴたりとモーニングスターの先端をダグラスの背に押し当てる。僅かでも動かせば揺れた鉄球についた鉄刺が外套を引き裂くぞと示し、マイはもう一度小さく笑った。今度の笑いは殺意を押し包むような柔軟な笑みだった。

顔を見ているわけではないだろうにダグラスが体を硬直させる。柄を通じてその気配を感じ取り、マイは甘い声を吐いた。

「もしおかしな場所に転移したと分かった時は容赦しませんので、御覚悟を」

睦言のような甘い声に息を詰める男を見、先を促すようにそっと柄を引く。刹那、ダグラスはともすれば掠れそうになる声を必死に

張り上げて余裕を見せつけるかのごとくイオ達と対峙した。勿論マイがモーニングスターを突きつけていることはティファの隣に立つイオとアレイズには見えているのだが、威厳を保つのにその程度の事は気にしていられないと見える。

「では、準備はいいな」

「準備って何の話？　いや、それより君、何でモーニングスターなんて突きつけられてるんだい？」

「少々事情が込み入っているだけだ」

「馬鹿じゃないの？　単に嫌われてるだけじゃない」

バサリと音を立てて右腕を広げた男を見上げ、イオは片眉をぴくりと上げた。困惑を宿す瞳が空気に溶け込んだのか、メイとアレイズも意味が分からないと目を瞠る。当然だ。いきなりティファの傍に立たされたかと思えば準備云々と言われれば、普通おかしいと思うだろう。事情を知っている自分達はともかくとして、イオ達にはダグラスの言わんとすることが分からないはずなのだから。

ただ、自分がモーニングスターを構えていることについては指摘しないでほしかった。メイに至っては暴言を易々と吐き捨ててしまっているが、その辺りもきっぱり指摘しないでほしい所だ。これでダグラスが嫌われているのかと落ち込んでしまったら面倒臭いことこの上ない。

マイと同じ顔をした人間に断言され流石に堪えたのかダグラスがちらりとこちらを振り返る。ほらみろ面倒くさいことになったじゃない、と嘆息し「これはただの保険です」囁きつつ首を振っておいた。嫌いではないと否定するのは嘘になるのでやめておいた。

首を振ったマイを見やりダグラスが再び前を向く。その時広げられた右腕と体の間から亜麻色の瞳がじっとこちらを見据えているのが視界に入った。

「……」

口を噤んだまま姉を見つめるメイは、何かを問いかけているように見えた。そしてマイには何故かその時メイが言わんとすることが

はっきりと読み取れたように思えた。すなわち、これはダグラスを葬るための罠なのか否かと。しかしマイはそれには答えず、突きつけられたモーニングスターを無視するように振舞うダグラスの背中い再び視線を戻した。

自分がおかしなことをしなければ何もされないと理解しているのか、それとも神故の余裕か、はたまたマイが首を振った効果か、ダグラスはマイが向けるきつい殺意を受け流し悠然と立っていた。「行くぞ」三人には分からない合図が放たれる。マイはその声に対し、白く広い背中に囁きを零した。

「お願いします」

刹那、ダグラスが広げた腕からやや小さな魔法陣が生まれる。紅よりはやや薄い深い桃色が、鮮烈な光を持ってブンと音を立てて生じたかと思えば同じ魔法陣がティファを中心として広がっていく。中央に神の紋章を宿したそれは四人を収めた辺りで拡大することを止め、緩やかに回転した。

「これは――……」

「空間転移!?」

光に照らし出された三人が驚愕を浮かべる。攻撃は覚悟していても空間転移は予想していなかったのか、イオとアレイズは慌てて魔法陣の外に出ようとするが、眠るティファを抱いて外に出るにはあまりに時間がなさすぎた。

くるくると回転する魔法陣はやがて風を生み出し、天を目指す小型の竜巻へと変貌していく。激しい風に髪と服を弄ばれながら、しかしメイは空間転移によって発生するただ一つの事象を見抜いて腕を伸ばした。桃色の光に淡く照らし出された細い指先が空を掻く。

「姉さん!」

身を切るような悲鳴に目を閉じる。するとそこでようやく思い至ったのか、メイが膝をつく音が聞こえてきた。その間にも風は勢いを増し、色のついた風にお互いの姿を判別することが難しくなってくる。

「まさか、これ……姉さんが？」
風の音よりも遥かに小さいはずの呆けた声がはっきりと耳朶を打つ。それを聞き、マイは柔らかく微笑んでみせた。もうお互いの姿を見ることも言葉を交わすことも難しい場所を見下ろし、届くようにと願いながら毅然とした声を放つ。
「少しの間別れるだけよ。……ティファ様に、くれぐれも寝冷えはしないように伝えてちょうだい」
「そんなの、ティファ様が起きてから姉さんが言えば良いじゃない！」
寝冷えだけではない。料理の練習をするようにとか、夜更かししないようにとか、トラブルに首を突っ込まないようにとか言いたいことは沢山ある。だが、全てを言うには時間がなさすぎた。転がり落ちた状況は、もうティファと話をする時間さえくれはしない。
だというのにどうしてだろう。寂しい、悲しいと思うと同時にマイはひどく穏やかな心持ちだった。もう会えぬかもしれぬというのに、こうなったことを後悔していなかった。
穏やかな声に即答で怒声を放つメイに向け、やはり表情を変えないまま風は止めようもなく強くなっていく。もう別れが近いのだ。
「何とかならないの！？」
姉の安らかな顔を見たのか定かではないが、メイがイオ達に声を掛けるのが朧気ながら聞こえる。
「これはもう僕達じゃ……」
「解除は無理だ。一度転移し、再び戻るしかない」
イオとアレイズが嘆息する気配が伝わる。恐らく解除を試みていたのだろう。優しい蒼や緑の光が風に紛れて視界に飛び込んでくる。その光も声同様やがて諦めたように霧散した。いくら神と言えど、空間転移を解除する術は持たないのだろう。
「そんな――姉さん！」
風に巻き取られるようにして手を伸ばし続けるメイの必死さにマイはちくりと胸を痛める。これから多くの罪を重ねるであろう自分

にそこまで必死になってくれる存在がいることは、嬉しくもあり悲しくもあった。いつか再び会える時があったとして、どんな顔をしていいのか分からなかったから。

伸びた手を掴もうと伸ばしかけた手を、何かに怯えるようにしまい込む。そうしてマイは宥めるような声色で震える声を吐き出した。

「少し、ほんの少しだから。だからお願い――」

（どうか無事で）

誰にも届かずに霧散した声に縋るように胸中で呟く。そこでマイは自分の穏やかさがどこから来るかを再確認した。

（生きていてくれればいい。お傍にいられなくても、言葉を交わせなくなっても、生きて幸せになってくだされればそれだけで十分）

ティファにもメイにも同じことを願う。願える。だからこそマイは穏やかな心持ちでいられるのだ。できればメイのように盾になりたかったが、それが難しいのなら自分は矛になればいい。攻撃は最大の防御とも言う。ならば自分は敵が主に近づく前に倒してしまえばいいのだ。

そしてこれは最初の一歩だ。自分が矛になり、かつダグラスという神を信じるに足るか確かめる大事な一歩。この一歩を確かに踏み出せたなら、マイは今度こそ感傷を振りきって戦いに身を置ける。

（それにダグラスさんには聞きたいこともある。グラスの一族のこと、メイのこと……それに覚醒のことも）

そして自分にも同じ力があるのなら、それをコントロールする術も。秘術はメイに与えられたと聞くが、同じグラスの一族に生まれついたのならば何らかの力が知らず備わっているかもしれない。別になければないで問題はないが、あるのに使わないでいるなどということがないよう、その辺りは確かめておきたいことだった。

ティファと旅をしていればそのようなことをしている時間などないだろう。だからこれでよかったのだと考え、こじつけでしかない理由に苦笑を漏らした。

メイが伸ばした腕が完全に風に巻き込まれ、言葉が完全に届かな

くなる。光が彩度を増し、もうじき転移が行われるのだと感じたマイは風の壁に阻まれて見えない四人の姿を頭に思い浮かべ、口元を吊り上げて静かに笑った。

「ティファ様をよろしくお願いします」

誰にも届かない自己満足の言葉。だがそれでもよかった。どうせ聞かずとも三人は勝手によろしくしてくれるだろう。

風が天に伸びていく。ごうっと音を立てて空へと突き抜けた竜巻を見上げ、既に見えない存在達から視線を逸らしマイは微笑をかき消した。風はまだ残っているが、別に彼等は風に飛ばされたわけではない。それが分かっているから未練たらしく風を見続けるなどという愚は冒さなかった。

「彼らの無事を」

「分かっているさ」

硬質な声にダグラスが肩を竦め、再び魔法陣を生み出す。

闇を切り裂くように細い線が四角を描くように流れていく。それをぼんやりと眺めていると、ダグラスの前に鎮座するように固定された四角い線は前方の竜巻ではない別のものを映しだした。

室内を映すはずの光が砂嵐を呼び、数瞬後に大きくぶれた後でメイ達の姿を映し出す。力なく倒れこんでいるが、恐らくは気絶しているだけだろう。胸が上下しているのを見てほっと息をつく。

「どうやら無事のようですね」

「当然だ」

安堵の声に、言葉通り当たり前のように放たれるダグラスの声を聞き流し、マイは映像をまじまじと見つめた。魔法がここまで便利だということも知らなければ、映し出された光景も見たことがないもので、ただただ感心しきりだった。

四角い線の中に映し出された場所には、陽の光に照らし出された桃色に支配された景色が広がっていた。それを花だと感じた時、見たことがない種類のものだということに若干の不安を覚えたものの、風にそよぐ花が思いがけず綺麗だったので見惚れてしまった。木に

花がなるということは、何かの果実が取れるのだろうか。
それにしても何て優しい色なのだろう。聖大陸ではもう少し鮮やかな色合いの花が多いが、この花が持つ桃色はともすれば輪郭をぼんやりと滲ませるようにも見える。一体何という花なのか。
「これで俺を信用したか？」
胸をそらして言い放つダグラスの声に思考を中断され、マイはふぅと息を吐き出した。
気絶こそしているものの、見た所誰にも怪我はなく飛ばされた場所も危険はなさそうと来ていれば、頷かないわけにはいかなかった。
「一応は。本当に一応ですけれど。……それより、この場所は？」
ダグラスが敵中にティファ達を転移したわけではないことについては認めるしかない。だが、彼女達がいる場所が自分の知っている場所とはかけ離れていることも事実だ。大体今は夜だというのに、何故こんなにも明るいのかが分からない。美しく幽玄な場所ではあるが、一体あの場所はどこなのだろうか。
「あぁ、あそこは――」
再び景色に見蕩れそうになっていると、ダグラスが何か含みがある笑いを漏らした。眼前の光景とは違い闇の色が濃い室内で肩を震わせる姿に「早く答えなさい」と心持ちきつい声を放つと、ダグラスはようやく口を開いた。
朱を差したような唇が艶やかに弧を描く。
「奴等の転移先はビビッドだ」
ビビッド。マイは聞き慣れない言葉を一瞬舌の上で転がし、次いで愕然とした。
「ビビッド……ビビッド大陸ですか？」
聖大陸では見られない花、夜だというのに陽光が差している理由。その全ての疑問に理由がかっちりと当てはまり、マイは脱力する体を止められずそのままへたりこんでしまった。
ビビッド大陸とは、聖大陸とは季節も時間も異なるとされる、遥か南方の大陸の名前だ。しかし問題はそこではないとマイは重々理

解していた。

（南方は蛮族が闊歩する未開の大地――レイニウム大聖堂の教えが本当なら、人がいる所に行った所でどうしようもないわ）

蛮族とは、自分達とは異なる人種「アズマ」のことだと教わったことがある。アズマが本当に蛮行を働く輩かどうかはさておき、彼等とは扱う言葉や文化が違うことをマイは知っていた。敵である神がいなくとも、そもそも助けがいない場所に飛ばされたのだ四人を想い、マイは肩を震わせて笑うダグラスを威嚇するようにモーニングスターを構える。よもや攻撃することはできなかったが、威嚇ぐらいしなければティファ達に申し訳が立たなかった。

（ティファ様、皆）

訪れた極度の疲労にちりちりとこめかみが痛む。指先でこめかみに触れ、マイは強制転移させられた四人に心の中で詫びてから深々と息を吐いた。

第四十話

生温い風が頬を滑るように撫でていく。

「ん……」

柔らかな手の平に触れられているような感覚に、アレイズは一度目に力を入れてからゆっくりとそれを開いていった。長くたっぷりとした睫毛の間から、深い漆黒の双眸が現れていく。微かに潤いを帯びた、どことなく気だるそうな瞳を数度瞬く。閉じては開かれる視界の中に映るのは、一面の緑だ。

「ここは――……」

倒れこんだその先に感じる、むせかえるような土と草の匂いに呟き身を起こす。すると草いきれの先に、薄桃色の花が咲き誇っているのが見えた。淡く輪郭を背景の空に溶かす花弁は風に揺れるたびに身を散らし、雪のように降り積もっていく。しかし雪とは違い、花弁はただ温く柔らかかった。

「サクラ、か？」

手の平を空に向ける。ひらりと舞い降りた花弁にじっと目を凝らすと、その花は確かに自分が知るものにそっくりだった。

（だが、何故サクラがここにある。それだけじゃない、そもそも俺達はどれだけ眠っていたんだ？）

記憶にある限りでは、サクラは聖大陸には持ち込まれていない希少な花だ。そんな花が一面に咲き誇っているのは、何とも解せない話だ。となると残る可能性は一つなのだが、アレイズは認めるのが嫌だと言わんばかりに嘆息して視線を緑の中へと向ける。

宵闇の中に現れた魔法陣に巻き込まれたのは自分一人ではない。ならば他の者達はどこへ消えたのか。

白くけぶった陽光の下、地を舐めるように視線を移していき、真っ先に見つかったのはひょっこりと立ち上がった金髪の青年だった。

「イオ」

声を掛けると、彼は一度戸惑ったように動きを止めてからくるりとアレイズへと向き合った。夜よりも昼の日差しの中でこそ真価を発揮するのだと言わんばかりの碧眼は、アレイズの姿を認めてから苦々しげに細められた。

「神が二人も揃っていて、こうもあっさり転移させられるとはね」

情けないと呟くボーイソプラノに、こちらはあっさりと白旗を上げて肩を竦める。

「仕方がないだろう。そもそも抵抗ができなかったんだからな」

「それはそうだけどさ。それより、ティファとメイは？」

「分からん。今探していた所だ。貴様も手伝え」

言うなりさくりと音を立てて先に進む。イオはそんな後ろ姿に追いつくべく大股に歩こうとし、アレイズ同様薄桃色の花が咲き誇る場所へと目を向けた。雪のように砂のように辺り一面を埋め尽くしていく花弁をじっと見据え、足を踏み出そうとしない。

「おい。二人を探すと言っているだろうが」

焦れたアレイズが声を掛けてもイオは答えようとはしなかった。ただ薄桃色の花弁を手の平にそっと載せ、日に焼けることを知らない肌をますます蒼く染めていく。

「イオ」

「ねぇ、アレイズ神。もしかして、とは思うけど……さ」

再度声を掛けたアレイズに、今度はぎこちない笑みを浮かべてイオが振り向いた。何らかの答えを掴んだ声色に、アレイズは辟易する。やはり思っていた通りか。

「ここ、もしかして」

「あぁ。……恐らく、ここはビビッド大陸だろう。あまり考えたくもないことだが」

もしここが自分達が先程までいたはずの聖大陸ではなく、遥か南方のビビッド大陸ならばこの状況にも合点がいく。季節も、時間さえも異なるこの大陸は今丁度春を迎えた所なのだろう。だが、一種楽天的な空気を漂わせる気候を前に、イオは困惑も顕に「ど、どう

してこんな場所に？」と声を上げる。そんなもの、知っていれば苦労しない。

「俺が知ると思うか？」

声を落として不機嫌に言い放つ。そうして諦めたように肩を竦め「とはいえ、何の理由もないとは言い切れない」と続けた。人間であれば到達が困難なビビッド大陸も、神であれば空間転移で一瞬なのだ。しかし、ダグラスはそれを承知の上で四人を転移した。そこに何の意味もないとは思えなかった。もっとも、マイに頼まれたからだと言われればそれまでだが、マイとてティファを未開の地へ放り出すことはないだろう。どこまで行ってもあのメイドは主一筋なのだ。

（となれば罠か？）

だがマイがいる限りそれもあり得ない。ティファの命を守るための代償は既に支払われている。ダグラス単体ならば疑う所だが、契約者たるマイが傍にいる間、ダグラスがティファを傷つけることはないだろう。むしろダグラスは契約者に好かれたい一心でこちらに加勢するはずだ。

（ならば、ここにレイナに続く何らかの手がかりがあると考えることもできるだろうが……。どの道、奴等がいない以上答えは出ないか）

何より、突然転移されて迷惑千万であることに変わりはない。

さて、これからどうするか。

嘆息しつつそう考えていると、一体どんな解釈をしたのかイオが髪を逆立てんばかりに声を荒げた。

「アレイズ神が止めないからこんなことになるんだよ！」

「貴様に言われたくない。大体貴様の方が奴と付き合いが長いんだろう。転移される前で気付け」

きっと吊り上げられた目尻を睨んで吐き捨てる。自分の不始末でもある事を人のせいにするとは何事か。

だが、常ならば即臨戦態勢に入る二人は耳朶を打つ声に散らされ

た。
「どこよ、ここ」
「「……メイ？」」
　呆けた声に二人して顔を動かすと、遠くで亜麻色の髪を下ろしたままのメイがあちらへこちらへと首を回しているのが見えた。真紅のメイド服はボロボロに破れ、ただでさえ足の露出の多いスカート部分は今や目に毒とも言えるほどの状態だったが、混乱一色の横顔が思ったより元気そうだったことにアレイズは胸を撫で下ろす。多少ふらついてはいるが、あれだけ血を流してその程度で済んでいるのは僥倖だった。
「無事だったか」
「起きたんだね。よかった」
　言い合いを一時中断して声を掛けて二人がメイへと近づいていく。時折左右に揺れる体を労るように支えたイオは、少し思案した後で「ちょっとごめん」と手の平をメインの額へとかざす。魔力が手の平から額へ、額からメイの体内へと流れこんでいくのを見る限り、治癒術でも使っているのだろう。元気そうとは言っても予想よりという程度に過ぎず、未だメイの顔色は蒼い。
「あったかい……」
　早速効果が出てきたのだろう。しみじみと呟く声に少し遅れて血色を取り戻していくメイを見つつ、アレイズは数歩前へと進む。二人は見つけたが、残る一人の姿が見えないことに急に不安を覚えたせいだ。
（ティファの奴、まだ寝ているのか？）
　あるいは気絶しているとも言うのだろうが。内心でそう呟きつつ原っぱの中を探すと、あっけなくティファは見つかった。ただ、アレイズが予想した通り彼女はまだ目を覚ましていない。天を仰げば見られる空と同じ色の髪を草の中に広げ、目を閉じたままピクリとも動かないティファは白いブラウスに包まれた胸が上下しているのが見えなければまるで死んでいるようにも見える。

縁起でもない。そう思うものの、普段アレイズ達に見せつける強い生命力が感じられない彼女の姿は一種異様だ。アレイズは腰を落としてティファの肩を揺さぶりたい衝動に駆られるが、それより先に足りない血を魔力によって補ったメイがアレイズの名を呼んだせいで、衝動は頭の隅へと追いやられてしまった。「何だ」振り返り振り返りしながら渋々メイに向き合うと、彼女は心配げにティファを一瞥した後で、しかしきっぱりと言い放った。

「ここ、どこですか？　アレイズさんは知っているんでしょう？」

「何でそう思うんだ」

「だってイオさんが、アレイズさんなら知ってるって」

「僕何も知らないからさぁ、アレイズ神説明よろしく」

「貴様、何いけしゃあしゃあと！貴様だって知ってるだろうが！」

「知らない知らない、全然知らない。あぁ、何だか疲れちゃったから兎に戻ろうかな」

（疲れたんじゃなくて、メイに説明するのが怖いだけだろう！）

第一、メイにこの状況を説明するなどアレイズだって御免なのだ。神が揃いも揃ってあっさり転移された挙句、その場所が未開の地と言われるビビッドであるなどと話そうものなら説教では済まされないのは確実だ。転移でグランハート家へ戻れたとしても、そこにマイとダグラスがいないのは目に見えているのだから。

ぐっと目に力を籠めてイオを睨めつける。だがその程度で動じるイオでもない。彼は兎が入ったケイジをどこからともなく取り出し、中で眠る白兎に手をかざし――。

「待ってイオさん。まだ、兎に戻らないで」

強い調子のメイの声に、ぴたりと手を止めた。

「どうかしたの？」

まさかこれ以上自分に話が振られるとは思っていなかったのだろう。びくびくしながら尋ねるイオに、メイはアーモンド型の瞳を真っ直ぐに向けて頷いた。天真爛漫で、姉のマイに比べればどうしても楽天的に見えるはずの彼女はしかし、今や姉に匹敵するほどの強

い眼差しの中で考えを巡らせているように見えた。
「ここがどこかは分からないですけど、どこであろうと戦力が減るのは困ります」
「一応僕本体が兎だから戻っても戦力にはなると思うけど」
「それはそう、ですけど」
ぐるぐると何かを思案する双眸が逡巡するように細められる。しかし正論で返されることは予め予想済みだったのか、メイは手を胸元に当てて深く息を吸い込んでから言い募った。
「でも兎って喋らないよね」
「ゼクスとはいえ、声帯が喋れるようにできてないんだよ、兎って。ゼルみたいに竜族だったら別だけど」
「じゃあやっぱり、イオさんはまだ兎にならない方がいいよ」
何かを確信している声だった。
「だから、どうして？」
「姉さんが別行動取っちゃったのにこれ以上イオさんまで兎に戻って喋らなくなったら、ティファ様きっと寂しがるから」
零れた言葉にイオとアレイズが揃ってティファを見下ろす。静かに呼吸を繰り返す青白い少女の顔を見据えたまま、二人はどちらからともなく息を吐き出した。メイの言う通り、このままイオが消えてしまえばティファは寂しがるだろう。無論メイとアレイズがいる以上表に出そうとはしないだろうが、いくら隠していても分かってしまうのだ。
（元はと言えば俺のせいで気絶しているようなものだからな……）
あの時、何の配慮も無しにティファを転移させたのがそもそもの過ちだった。せめて彼女が起きていたならここでイオが兎に戻ろうと大した問題ではないが、何らかの衝撃を受けて気絶した挙句、二人も姿を消していたら驚きもするだろう。下手をしたらまた倒れかねない。……そこまで神経がか細いかという疑問はこの際無視することにする。
「メイの言う通りかもしれないね。それじゃあ、せめてティファが

起きるまではこのままでいるよ」
「ありがとうございます。……それで話戻すけど、ここってどこなんですか？」
「あー……それはだな」
メイの問いに白ばっくれたように口笛を吹き始めたイオを睨めつけつつ、アレイズは覚悟を決めた。このままイオと言い争いをしていたら日が暮れる。ただ、緊張を表すように数秒の間が空いたのはどうしようもない。「ビビッドだ」ぼそりと呟いた時、窺うような視線を向けたのも、この際仕方がないことにしておこう。たかが人間一人に神が怯えるのもおかしな話だが。
「ビビッド」
陽光を淡く照らし返す亜麻色の髪が大きく横に流れる。そのまま何度も同じ言葉を繰り返しながらメイは首を捻り。
「何ですって！？」
ようやく事の次第を理解したのか、キーンと辺りを響かせる甲高い声を張り上げた。手の平でぽかんと開いた口を隠しつつ、呆けたように呟く。
「何でそんな遠くに……」
「さぁ。でも、全員無事なのは不幸中の幸いだね」
些か間の抜けた態度と声は、神であるアレイズ達とは違いビビッド大陸の遠さを途方も無いものだと実感しているからこそだろう。そう考えた途端、メイの立ち姿が際立ち、辺りの風景からきっぱりと隔絶されているように感じられた。無論錯覚でしかないが、花の色の濃淡が違うように、人間の気配の濃淡も二つの大陸では違うのではないだろうかとアレイズはふと思った。だからこそ、メイは溶け込めない。ただ。
「ティファが無事なら、あとはどうとでもなるさ」
メイの言葉に軽い調子で返したイオが、ティファを見下ろしてそっと微笑む。たっぷりの砂糖を塗りたくったような甘い笑みに不快感を覚えたが、それよりもアレイズは視線の先にいるティファに疑

問を抱いた。
（こいつの姿は、何故浮かないんだ）
ビビッドの風景にも聖大陸の風景にも、ティファは溶け込み一体化している。人ごみだけは別だが、それは彼女が持つ色があまりに異質すぎるからだろう。代わりに風景の中では、彼女は誰よりも世界に溶け込む事ができる。大地の上に等しく存在する空。その色と同じ髪を持つせいか。だがそれにしては気配まで溶けこむというのは不思議な話だ。
（寝ているせいか？　起きたら変わるんだろうか）
いつか世界を殺す存在として夢に出てきた少女。その夢が真実ならばティファは紛れもなく世界の敵だ。ならば、ティファはこの世界に生きる誰よりも世界と相反する存在だ。溶け込むことなどできはしない。或いは、完全に溶け込めることこそが世界の敵たる所以なのだろうか。
（ティファはあの話を、ずっと胸に抱え込んだままでいたのか）
自分には話さずに。
頭の奥でそっと囁いた言葉に、心が重石を載せられたように重くなる。そんなに大事な話を今まで打ち明けられなかったことを、ただそれだけをアレイズは不満に感じ、それから心の中で首を振った。話さなかったのではない。話せなかっただけだ。
世界に会うためにティファと契約をしたアレイズ。契約神の願いを叶えるために大聖堂を出たティファ。
彼女は誰よりも、アレイズにだけは世界が見た夢を打ち明けるわけにはいかなかったのだろう。アレイズとて、立場が逆であれば同じ考えを抱いたに違いない。言えば、相手が自分に対してどんな感情を抱くか、想像するだに恐ろしい。だが、それでもアレイズは不満を隠せなかった。
否、不満なのではない。
（俺はきっと、悔しいんだ）
理由を問われた所で答えられはしないが、この感情に名前をつけ

るとしたらそれは悔しいという言葉になるだろうことは分かっていた。その感情の前では、このまま旅を続けるべきかとか、ティファは本当に世界の敵ではないのかなどといった問題は何ら意味を持たない。そもそも、それらの問題はとうに決着が着いているのだ。

犠牲になどしないと決めた、大切な存在。その彼女が自分の友人を殺すことなど有り得ないと、アレイズは確信を持って言うことができる。ティファが自分に向ける信頼には、それだけの重みがあることを知っているのだから。

そう、だから問題は一つだけなのだ。

「ティファ……」

柔らかい声で呟き、しゃがみ込んでティファの髪を撫でる華奢な青年の姿だけが、大問題だ。

愛おしむかのような優しい指先に、苛立ちを籠めた視線をぶつける。イオはそんなアレイズの視線などおかまいなしに、ティファを起こしたいのかこのまま寝かせておきたいのか、一見したら分からないような声で彼女の名を呼んでは幸せそうに笑っていた。その表情一つとってもいちいち腹が立つ。

（人の契約者にベタベタと……！）

せめてイオがティファを害する存在であれば魔法の一発や二発食らわせてやれたというのに、イオはダグラスの前でさえ堂々と「夢は覆る」と宣言したほどの強者だ。例えこちらが望んでも敵になどならないだろう。この神にとっても、ティファは世界に匹敵する存在なのだ。その事もまた、腹立たしい。

一体何でこうも腹が立つのだろうかとアレイズ自身不思議に思う。無意味な感情だ。そもそも全ての元凶はこの苛立ちにあるのだと思うと、冷静にならなければと頭の中で警鐘が鳴るのも頷けた。だというのに、心はいつだって理性の枷を逃れて勝手気ままに動いていく。

「イオ、貴様いい加減に――！」

幸福感を纏う背中に手を伸ばす。しかしその手をしっかと掴み返

したのは、イオではなくメイだった。
「待って、アレイズさん」
「何だ。俺は今忙しいんだ」
イオを引き剥がす手を止められ苛立ち紛れに吐き捨てるが、メイはそんなアレイズにはお構いなしにティファを指差した。
「もうちょっとでティファ様が起きそうなんです」
「ティファが？」
言われて見てみれば、固く閉じられたままの瞼が微かに動くのが分かる。イオの声かけが功を奏したとは思いたくないから、いい加減寝飽きたのだろうと考えることにする。
イオが手を止めたのと同時に、ティファの睫毛が震える。そのままうっすらと開かれた眸に、三人がほっと安堵の息をついた。
「ティファ」
呼びかけると、ティファはとろんとした目を宙にさまよわせながら立ち上がり、スカートについた土を払い落とす。どうやら体に不調はないらしく、足取りは安定している。ただ、サクラを見つめる視線は茫洋としたままだった。「完全に寝ぼけてるな」起きたての姿に呆れつつ言うと、イオも苦笑交じりに頷く。
「長いこと目を覚まさなかったから仕方ないよ。でも、ちゃんと目を覚ましてくれてよかった」
しみじみとした言葉には同感だったので、反論せずに頷き返す。そうして一歩踏み出し、アレイズはティファの前に立った。
（どう言ったらいいか分からないが）
何をどう説明し、どう話せばいいか分からないが、とにかくアレイズはティファに謝罪がしたかった。この無意味な感情については伏せるとしても、配慮が足りず辛いものを見せてしまったことを、きちんと謝る必要があった。
だが躊躇いがちに謝罪を舌の上で転がした瞬間、アレイズは目を疑った。ティファは眼前に立つアレイズのことを、まるで存在しないもののように無視してすり抜けていったのだ。流れていったスカ

イブルーの髪と微かに漂う花の匂いに愕然とする。だが、脅かされたのはアレイズだけではなかった。

「――メイちゃん？」

アレイズの横を通り過ぎ、イオの横をも通り過ぎ、ティファは真っ先にメイの前に駆け寄った。そうしてメイのボロボロの姿を見て、一瞬きょとんとした顔を浮かべる。常ならば勝気につり上がっている瞳は今はひどく子供っぽく見開かれ、困惑を宿していた。

寝ぼけているのだと誰もが思った。だが、寝ぼけているにしてはあまりに様子がおかしい。

「メイちゃん。どうして、そんなに大きくなっちゃったの？」

「……は？　ティファ様、どうしちゃったの？　もしかしてまだ頭が寝てる？」

「ちゃんと起きてるもん。それよりメイちゃんこそ、さっきまであたしと同じぐらいの身長だったのに、変だよ」

いつもよりやや高く、どことなくのんびりとした声も、メイの言葉に頬を膨らませる態度も尋常ではない。アレイズはイオと目を合わせ、次いで頭の上に疑問符を浮かべっぱなしのメイを見やる。メイはティファの言葉に何と言っていいか考えあぐねて口をぱくぱくさせながらも、何か思い当たることがあったようで大きく息を呑み込んだ。「ティファ様。ねぇ、ティファ様って今、何歳だっけ？」

恐る恐る、という表現が一番的確な声で問いかける横顔は、鎌鼬で切りつけられた後よりも蒼白だった。

何歳かと言われても。

「何を馬鹿な事を」

「――静かに！」

幼い頃から仕えてきたメイドであれば、主の年齢を忘れることはないだろう。だというのに、何を今更。

意図が分からず、思わず怪訝な声を漏らす。するとイオの鋭い声が耳朶を打った。その顔も蒼白で、アレイズはイオにも何か思い当たることがあるのだと知って再び腹立たしくなった。ただ、この状

況で文句など言ってはいられない。アレイズは素直にイオに問うた。
「何か思い当たることでもあるのか」
「ある」
ぴしゃりと、間髪入れず答えが返る。その切羽詰った様子に眉間に皺を刻むと、独り言のようにイオが呟いた。
「これがティファの冗談だとか、寝ぼけてるとかだったらいいんだけど。もしそうでなきゃ、あれは」
願うような声音に、アレイズまで不安感を煽られ黙りこむ。そのまま二人でティファの返答に耳を澄ませると、彼女は相変わらず二人の神を無視してメイに向けて小首を傾げた。一瞬丸く見開かれた瞳は次の瞬間には楽しげに煌く。そんな事を訊かれるのがおかしくて堪らないという表情だ。その証拠にティファはくすくすと笑い出す。
「やっぱり変なの。ついこの間十歳のお誕生日会したばっかりなのに、もう忘れちゃったの？」
それともからかってるの？　そう訊いて笑い続けるティファに、メイの顔がみるみるうちに色を失っていく。イオも同じだ。ただ、アレイズだけが状況についていけずにティファに向けて険のある声を返した。状況が深刻であることは分かっていても、何故ティファがそのような事を口にするのかが理解できなかった。突然自らを幼くする見せるなど、聞いたことがない。
「一体お前は何を言って――んぐ」
存在を無視されている苛立ちも相まって知らず詰問口調になるアレイズの声はしかし、間が抜けた声と共に途切れた。
（何をする！）
「事情は後で！　それより、今は黙ってて！」
強引に口を塞がれてもがくと、耳に鋭い声が入り込んでくる。見ればそれはイオで、彼は恐怖と困惑を綯い交ぜにした鋭い視線をティファを見据えていた。額には冷や汗が浮かんでいる。
（まさか存在するのか？　突然幼くなるような事象が？）

到底信じられない話だが、イオの様子を見ている限りあり得ないとは言い切れない。イオはアレイズより高位の神であり、永遠とも呼べる時間を生きているのだ。癪だが、知識量では到底叶わない。アレイズは緊張を再燃させ、ティファの相手をするメイの無理矢理に明るい声に意識を集中させた。

「――あはは、そうだったね！　すっかり忘れちゃってたよ」

空笑いには天真爛漫さどころか、陰鬱ささえ漂っているがそれを指摘する者はこの場にいない。依然として変わらない白い顔を見返すティファは、メイが必死に場を取り繕っていることなど気付きもせず満足気に頷いてから、ようやくアレイズ達に目を向けた。

「ねぇ、ところでそこのお兄ちゃん達はだぁれ？」

「え？　えーっと」

（誰、だと？）

あどけない声に一瞬頭が真っ白になった。

口を塞ぐイオの手が大きく震える。アレイズは今すぐにでもその手を振り払い、馬鹿なことを言うな！　と怒鳴りつけてやりたい衝動に全身を燃やされそうになった。そんな他人行儀な言葉を言われるなど、今まで考えもしなかったというのに。忘れられてしまうなど、夢にも見たことがなかったというのに。

（罰が当たったのか）

八つ当たりをして傷つけたことへの罰が、今自分に与えられているのだろうか。ティファが受けた衝撃を考えれば到底文句など言えないが、それにしてもこれは酷過ぎる。第一、罰は自分にだけ下されたわけではないのだ。

「ティファ……」

泣き出しそうなボーイソプラノに目を瞠る。寄る辺を失ってしまったかのような痛々しさに先程感じていた苛立ちが消え、同情心が芽生える。腹は立つし癪でもあるが、イオのティファへの好意は年季が入っているだけに衝撃も一入だろう。慰めの言葉も事態を解決させる術も見出せず、アレイズは口元から離れていった手を見送り

つつも一言も発することができなかった。
どことなくおっとりとしたティファの好奇心に満ちた視線から目を逸らす。同時にメイが明るい声を取り繕ったままで答えた。
「この人達はメイのお友達だよ。だから、ティファ様のお友達でもあるの！」
「お友達？　じゃあ仲良くしようね。よろしく、お兄ちゃん達」
メイの言葉を疑いもせず、ティファは両手を差し出した。アレイズは自分に差し出された左手の薬指に嵌る翡翠の指輪を見て、ティファに悟られないように小さく溜息をついた。指輪から魔力を供給し絆が生まれたなどと言っても、今自分達はあまりに遠い存在なのだと思い知らされた。
出された手を握り返せないまま時が過ぎる。黙りこむアレイズにティファが不思議そうに「どうしたの？　お兄ちゃん」と訊くが、メイのように取り繕った笑みを浮かべる事などできず、口を閉ざしたまま小さく首を振った。
イオとて思うことは同じだったに違いない。だが、アレイズとは違いイオは僅かばかりの逡巡を見せた後で、それでも笑ってティファの手を握り返していた。
「よろしく、ティファ」
「うん！」
楽しげに笑うティファを見てイオが苦しげに目を細める。しかしそれも一瞬の事で、すぐにティファを安心させるようにもう一度笑みを浮かべてから、優しく彼女の手を握りしめた。
包み込むようにそっと触れる手の平は、まるでティファの手の形を確かめようとしているようにも見えた。あるいは、触れることで何かを見出したいと願っていたのかもしれない。それだけの切実さを持っていて尚、笑みを浮かべられる強さを羨ましく思ったが、結局アレイズはティファに何も言えないままだった。――罪悪感に胸が押しつぶされそうになり、心の均衡を保つので精一杯だったのだ。
イオに笑いかけると同時に下ろされた手から一歩遠ざかる。イオ

もそれを見届けてからすっとメイに道を譲った。
「これ以上話すのはさすがに辛いよ」
震える声は、ようやっと本音を吐き出す。その言葉に頷き、アレイズもいつになく素直に告げていた。
「貴様はよくやった。……俺など、何も言えなかった」
必死にティファと向き合うイオやメイに比べて、自分はあまりに無力だ。その事実に打ちのめされ唇を噛み締めると、イオがひょいと肩を竦めた。
「下手に動揺悟られるぐらいなら無言を貫いた方がいい時もあるさ。大体君気付いてないだろうけど、相当顔色悪いよ」
「貴様に言われたくはない」
「僕より重症って意味だよ。まぁ、よりによって契約者に忘れられたんだから当然だろうけど」
言われ、改めて自分がふらついているのを自覚する。そういえば指先もやけに冷たいが、血が通っていないのだろうか。
開閉させる指の間からティファのスカイブルーの髪が陽光に照らされるのが見える。もうすっかり見慣れた後ろ姿だというのに、纏う気配はこの世界の誰でもないように感じられ、ぞっとした。ティファがティファであることに変わりはないが、このあまりにも幼い少女はアレイズにとって異質な存在にしか見えなかった。
「ここに転移したダグラスも、まさかこうなることまでは予想してなかっただろうね」
辟易と漏らすイオに内心で同意する。と、ティファから一時離れたメイが泣きそうな顔でがっくりと項垂れた。
「こんな大事な時に姉さんがいないなんて……」
右にも左にも、広がるのは未開の大地。
三人は振って湧いた状況を持て余し、幻想的に咲き誇るサクラの花びらに埋もれながら空を仰いだ。

第四十一話

はらり、ひらり。花吹雪が舞い散る中、三人の男女が声もなく立ち尽くす。

唯一人少女だけが華やかな笑みを浮かべて草原の中をくるりと回る。

多くを忘れてしまった少女を大人に戻す術は、未だ見つからない。

◇　◇　◇

聖大陸から海を渡った遥か南方に位置する大陸、ビビッド。

多くの冒険者が希望に胸膨らませ足を踏み入れる未開の大地には数々の固有種が存在し、独特の雰囲気を生み出している。季節も時間も聖大陸とは逆さのこの大陸では現在春を迎えており、サクラと呼ばれる薄桃色の花弁が草原一杯に舞っていた。淡く茫洋とした輪郭を映し出すその花は聖大陸にはない趣があると、メイはぼんやりと考える。

（お弁当持ってきたらよかった。そうすればここでお花見できるのに）

鮮やかな花の色ばかり目にしてきたメイにとってサクラの色は薄すぎる。だがその薄さが空に溶け込む様は素直に美しいと思えた。こんな光景が見られると分かっていたなら色々と準備したのに。そこまで考え肩を落としたメイは、心の中でのみ首を振る。無理無理、そんなの無理。例え弁当を持参していたとしても、花見などできる状況ではない。

「ティファ……」

隣でアレイズが震えを必死で押さえ込んだような硬い声で呟く。常になく蒼白の横顔はひどく強ばり、表情一つ作れそうに見えない。事実彼は笑うことも泣くことも焦ることもせず、無表情のまま眼前

の少女を一心に見つめている。ぐっと握り締められた左手から翡翠の輝きがちらつく。二人を繋ぐ光を見てメイは口を開きかけたが、結局は何も言えずじまいだった。この状況で言えるような慰めなど心のどこにも見当たらなかった。

位が低く年も若く、更には正式な手順を踏んだわけではないとはいえアレイズは神であり、ティファは彼と契約をした神の花嫁だ。だがティファは自身と魔力同士が繋がっているアレイズを見ても何も感じないのか、頭に疑問符を浮かべたままあどけない笑みを浮かべる。そこには絶対の信頼もなければ自分の半身とも言える神の無表情を案じる様子もない。ただ無防備に見返しているに過ぎないのだ。その態度こそがアレイズを傷つけているとも知らずに。

奥底まで見通せそうな深いダークブルーの瞳に黒の外套が震える。それきり視線をすいと逸らしたアレイズは沈痛な面持ちでティファに背を向けた。その目に苛立ちが宿っているのは、自分がティファの記憶を取り戻させる術を知らないからだろう。神とは決して全能な存在ではないのだと、今ではメイもよく理解していた。彼等は世界を守る騎士であり、世界を統べる者ではない。

「本格的に覚えてないみたい、だね」

アレイズの声にも心一つ動かさないティファの様子にイオが零す。

見ていられないとばかりに遠くを見やる碧眼に嘆息を投げつける。世界の騎士たる二人の神はティファの状態に衝撃を受けて冷静さを欠いてしまっている。その目には世界を追い求める色はなく、彼女の姿しか見えていない。そんな二人の姿を見るのは何だか不思議な気分だった。

おおよそ神らしくはないが、二人の魔力が桁外れに大きいことは今までの戦いから実証済みだ。今ならば二人はティファをこの世界から消し去ることができるはずだ。否、仮にティファが万全の状態で挑んだとしてもこの二人の神を相手に勝利するのは難しいだろう。神と人間では、あまりに存在の格が違いすぎる。しかし二人はティファを害するどころか、逆に害する者を打ち倒すような輩だった。

あまり深く考えたことはなかったが、ティファの存在を知った今になってみれば、それがいかに大変なことかが分かる。しかもそれだけでは飽き足らず、ティファは自分が意図しない所でこうやって二人を絶望のどん底に叩き込んでいるのだ。その存在が、言葉が、振る舞いがどれだけ彼等に影響を与えるのか、今更になって思い知る。

（すごい人達に好かれちゃったんだね、ティファ様）

呆れ混じりに胸中で呟くと、思い当たる事があるのかイオがアレイズとは異なり思考を纏めるように小声で何やら呟いているのが聞こえた。逼迫した雰囲気を纏って解決策を捻り出そうとするイオの姿に、メイはもう一人とんでもない男に好かれた半身を思い出す。

「どうしてこんな時にいないのよ……」

あの男次に会ったら殺す、絶対殺すと呪詛のように呟き肩を落とす。

こんな時、双子の姉であるマイならば絶望の淵に立つアレイズとイオを引っぱたいてでも冷静にさせられるかもしれないのに、彼女はこの非常時によりにもよって両親の敵であるダグラスと契約して別行動を取っているのだった。今頃どこで何をしているのか知らないが、次に会ったらとりあえずたっぷり文句を言うのを忘れないでおこうと思う。

（でも、もしかしたら姉さんが一番パニックになっちゃったりして）

主の非常時に不在だったと知ったらマイは卒倒してしまうかもしれない。よくよく考えたら大体のことでは冷静なのにティファの事になると途端にその冷静さをかなぐり捨ててしまうのがマイだった。この場にいたらアレイズやイオが宥めるような様相を呈していたかもしれなかった。いなければいないで腹が立つのに、いたらいたで困るかもしれないというのは難儀な話だ。

（まぁ、姉さんの事は後々考えればいいよね。それより今はティファ様をどうするかだけど……）

血がこびり付いたメイド服の裾をぎゅっと掴みティファを見やる。記憶を失ったのならば、さほど問題ではないだろう。メイとて長

いこと記憶がなかったが生活に支障はなかったし、イオがバラすまで誰も気付かなかったほどなのだ。だから一部の記憶を失ったというだけならばどうとでもなる。アレイズやイオと過ごした日々を忘れてもティファはティファのままなのだし、思い出を積み重ねていけばいいと慰めを口にすることもできるだろう。彼等もそのぐらいのプラス思考は持ち合わせているはずだ。

だが、これは一体何だろう。

「メイちゃん？」

何も言わずにただじっと自分を見据える亜麻色の瞳にはて、と首を傾げるティファはとても十代も後半に差し掛かった女性の顔とは思えない。明らかに幼子のそれだ。そしてメイは一つだけ、ティファの状態を表現できる事柄を知っていた。

レイニウム大聖堂。その奥底に秘められた、聖人聖女だけが知らされる暗部。神と契約することの誇りと尊さの裏で語り継がれる、壊れていった者達の末路の一つ。メイはティファやマイと共に座学でその話を聞いたことがある。普段の授業ならば全く耳に入っていないのだが、あまりに怖くて印象的に過ぎたので今日までしっかり覚えていたのだ。

（でもあれはかなり特殊なケースだって言ってたし、大体ティファ様には当てはまらないのに）

稀に、極々稀に契約神との関係が拗れに拗れた場合に起こるだとか、強すぎる魔力に耐えうる精神力を持たない者に振りかかるだとか聞いたことがあるがどれもティファには当てはまりそうになかった。だが他にこの状況を説明できる言葉が思い浮かばないのも事実だ。

（イオさんはこの状況、どう考えてるんだろう。アレイズさんは――それどころじゃなさそう）

茫然自失といった体のアレイズは、仮に知識があったとしてもそれを思考する事を放棄しているようにさえ見えた。あの様子では頼りにはならない。

「これから一体どうしたらいいんだろ……」
冒険者が語る物語でのみ目にしたことのある場所で立ち尽くし、呆けた声を上げる。すると親友の嘆きを見て取ったティファが不安気にメイの服をちょいちょいと引っ張った。
「ねぇ、どうしたの？　あたし、何か変なこと言った？」
幼子のつもりでメイを上目遣いに見るティファの仕草は、しかし元々身長が変わらないだけに少々滑稽に見える。自分の発言がメイを困らせていることだけは分かったらしく、ティファは暗い顔で俯いた。その眼前に慌てて両手を振ってみせる。
「そ、そんなことないよー！　全然変なこと言ってないから！」
（ごめんなさいティファ様、本当は滅茶苦茶変なことしか言ってないんですけど！）
だが心の声にはしっかりと蓋をし、メイはあくまでひきつり笑いのままティファの不安を否定した。事実を言いたくとも状況が掴めないし、何より「変」と一言であしらってしまったら傷つくだろう。本人は至って普通に話しているつもりなのだから。
ティファを安心させようとにこやかな笑みを無理矢理浮かべ、とにもかくにもどうしてこんなことになったのかを考えなければとメイは背後を振り返った。そこにはイオがいるはずで、彼なら何か知っているはずだと踏んでのことだ。
「あれ？」
が、そこにいるはずのイオがいない。
「イオさん？　どこ行っちゃったんですか？」
声を掛けても返事はなく、メイはしばし呆気に取られた後で「あ」と声を上げて草むらに視線を滑らせる。空間転移をしたわけでもないのに消えた神の行方など一つしか思い浮かばない。
メイの予想は見事に的中した。
「こんの薄情者……！」
先程イオが立っていた場所から数歩分離れた場所。緑生い茂る中に見える真っ白な体毛にメイは小声で震える声を吐き出す。その声

にびくりと身を竦ませた体躯をがっしりと掴み上げ、傍目には可愛がっているように頬ずりしながら耳元で「まだ戻るなって言ったばかりじゃないですか」と囁いた。すると白い毛だるまこと兎のイオは普段は血のように赤い瞳を蒼に変えて身を縮めた。

“ごめん、メイ。でも僕はもうあんなティファを見てられないんだよ”

声帯が人間の言語を扱うのに適していないという話は本当らしく、彼のボーイソプラノは頭の中心部へと直接伝えられた。こんなことで魔力を消費するぐらいなら人間の姿をしていて欲しいと思ったが、イオがもう限界を迎えていることを察し文句の言葉を呑み込んだ。片や兎へと戻り片や茫然としてろくに話もできない神に囲まれ、メイは孤立無援となってしまった。少なくともティファと話す役目は誰にも譲れそうにない。

“僕はしばらくこのままでいることにするよ。神でも出てくれれば加勢するけど、人間相手なら君とアレイズ神でも大丈夫そうだし”

おまけに、さらりと戦線離脱宣言までされてしまった。こんな風に役に立たないからマイが神に楽々刃向かえるようになってしまったんじゃないかと恨めし気に心の中で呟き、よくよく考えたら自分も大概神を冒涜しているなと気付く。だがこの状況なら少しぐらい冒涜しても誰にも文句は言えないだろうとも思う。

ふさふさとした兎の背中を一撫でし、問いかける口調には諦念が漂っていた。

「それで、ティファ様がこうなっちゃった理由分かる？」

“多分、僕が知る限りではあれは退行って呼ばれる現象なんだと思う。君も大聖堂で習ったはずだけど”

「……やっぱりあれなんだ」

神との契約中、精神を病むか膨大な魔力を注がれて壊されるかした結果起こる現象、退行。

座学でさらりと聞いた程度なので詳しくは知らないが、大の大人が幼子のように話したり行動することを指すと記憶していた。大き

すぎる精神的負荷に耐えきれず、今ある自分を失う、もしくは故意に放棄する。契約中死の次に恐れられる危険だと話された時の恐怖が蘇り、メイはぶるりと身を震わせた。

イオはそんなメイの動揺を肌に感じたのだろう。努めて冷静な声で続けた。

“ただ大聖堂で伝わっているものとは違ってあれには神は関わっていないよ。恐らく、ダグラスにも予想できてないと思う”

「当然よ。ティファ様の精神壊したなんて知ったら、姉さんは即あの男を殺すはずだもん」

殺すどころか、死んだ方がマシだって思えるようなことを必死に考えるに違いない。

遠く聖大陸にいるであろう銀の神への怒りを滾らせて囁くと、くすぐったいのかイオが身を捩りながらアレイズを一瞥する。

“アレイズ神にも話を聞いてみた方がいいんだろうけど……。そもそも彼は退行って言葉自体知らないかも”

「え？　でも神様なんだからそのぐらい」

“人間から突然神にされた挙句、そこから先はずーっと寝てたような神にそんな知識はないよ。普通の人間は退行なんて知らないしね”

仮にいたとしてもそれは呪いつきだの何だのと別の言葉で称されているに違いないとイオは話す。メイはその言葉に一つ頷き、疑問を零す。

「でも神様が関係ないとしたら、一体何が原因なんだろう？」

聖人聖女にこの話が伝えられるのは、あくまで彼等が神との契約を最終目標に定めているからだ。では何故、神に何もされていないティファが退行を起こすのだろうか。そこまで考え、メイはもう一度体を震わせた。

「大きすぎる精神的負荷――これって神様が関係なくても発生することなんじゃない？」

退行を起こす程の負荷がどれほどかは分からない。だが、派手な戦闘を前に気絶したままでいたほどの何かがあったのなら話は別だ。

屋敷で神の紋章に触れた時の事は正直よく憶えていない。強い歓喜が湧き起こったことは確かだが、ティファがあの時何をしていたかは思い出せなかった。

（でも、記憶がなくたってあの状況見れば嫌でも予想できちゃうものだよね）

あの部屋はティファの両親が殺された場所。七年の時を経たというのに時を止めた屋敷は、二人の死体までをもしっかりと当時のまま留めていたのだ。そしてこれは予想だが、七年前と違いティファは自分が何者かを知っているはず。何が両親を死に至らしめたのかを、彼女は知ってしまったのではないだろうか。

（だったらティファ様はあの時、あの部屋に行くべきじゃなかったんだ）

無論向き合うために行ったようなものなのだから、いつかは起こる事態だったのだろう。だがあの時ティファは外で待っていたのだ。あのまま何事もなければ、メイの封印が解かれずダグラスが現われなければ、もっと別の対面の仕方があったのではないか。

“……俄には信じがたいけど、あり得ない話じゃないね”

イオが首肯するのを見下ろしながら罪悪感を強く噛み締める。

自分がもっと強ければ、この体の裡にあるものの正体を正確に把握して使いこなせていたなら。

どんなに責めた所で過ぎてしまったことだ、無意味だと思っても募る想いをきつく目を瞑ることで抑えこみ、少ししてから恐る恐る瞼を開けてみる。丈の低い草原の先にある淡い色の花も無邪気なティファの横顔も何も変わってはいない。当たり前と言えば当たり前の事実に、メイは覚悟を決めてイオを抱く腕に力を込めた。

（もう二人が役立たずだとか文句言ってる場合じゃない。私がティファ様を元に戻してあげなくちゃ）

そして今度こそ自分の事を話そう。ティファにも世界の見た夢について訊いてみよう。

これ以上すれ違わないように、お互いのフォローもできないよう

な薄っぺらい関係に格下げさせないように。
　誰もが自分の事情で一杯一杯になっている。だがそれが事態をややこしくするというなら、まずは情報共有から始めようと心に決める。そして今情報共有ができそうなのはイオとアレイズだ。
（イオさんには退行の話を聞いたから、次はアレイズさんに話さなくちゃいけないんだけど）
　あまり長い間ぼそぼそと話し込んでいるとティファに不審がられるのは目に見えている。かといって自分が相手をするわけにはいかないし、と考えメイはふと名案を思いついたように顔を綻ばせた。
　いくら退行しようとティファはティファ。好みは昔から変わっていない。つまりは――。
「イーオーさんっ」
　弾けるような明るい声で兎を抱きしめると、危険を本能で察したのかイオが身を竦ませる。それを逃がさないように両腕で抑えこんでからにっこりと笑ってみせた。
「丁度いい具合に兎になってくれてて助かりました。ティファ様、小動物大好きなんですよぉ」
　人間のイオ相手なら多少は遠慮があるだろうが、兎相手なら話は別だ。これなら落ち込んでいても黙っていてもティファの気を引ける。役に立たないという言葉は撤回しなければならない。
　暴れる体躯を締め付けんばかりに両手に持ち、ぶらんと伸びる背を左右に揺らす。
“メイ、まさか……。いや、僕ティファと話すのが辛くて兎になったんだけど。ていうか最近君マイに似てきて――”
「聞こえません聞きません。――ティファ様、パスっ！」
「ふぇ？　う、わわっ」
　早口に保身を図るイオの言葉を無視してぶんと大きく振り投げる。ティファとの距離はそれほど開いているわけではないからそれほど力は入れていないが、余程驚いたのか飛びながら豚のような鳴き声が聞こえてきた。

「兎って鳴くんだー」
知らなかったと呑気に言うと、見事イオを抱きとめたティファが怯えた様子の背中を撫でて眦を吊り上げた。
「メイちゃん！　ウサギさん投げちゃ駄目だよ！」
「あはは、ごめんごめん。でも普通に渡したら逃げちゃうと思って。その子往生際悪いから」
嘘ではない。あのぐらいしなければイオは逃げようとするだろう。だがそうは問屋が卸さない。イオにはここでティファを引き止めておくという重要な使命があるのだ。……恐らく今回だけじゃなく、何度も発生する使命になるだろうが。
ティファの言葉を笑って流すと、彼女は一瞬頬を膨らましかけたが腕の中に収まる兎を見るとすぐに顔を綻ばせた。
「わぁ……！　可愛いね、このウサギさん」
じっと顔を覗き込まれた碧眼の兎は、ただの兎に戻る機会を失ってしまったらしい。恨めしげな視線を向けてくるが、メイはそれをあっさりと無視して「その子ピコって言うの」と説明しておいた。イオと呼んでもいいが、兎の時はピコと呼んでいたのだから嘘ではないだろう。それに、今のティファにイオと呼ばれたからといって彼が喜ぶとも思えなかった。
「もうちょっとここでのんびりしていこうね。ティファ様はピコと遊んでていいよ」
「うん！」
満面の笑みで頷くティファの姿に観念したのか、イオは兎らしく何も考えていないような顔をして小首を傾げている。とりあえずはこれで安心だろうと、メイは二人から背を向けて棒立ちになっているアレイズの外套をぐいと引っ張った。
「ちょっと来てください」
抗わず素直についてくる全身黒色の神をティファやイオから遠ざけ、メイは小さく吐息してからふと眉を顰める。いつもなら「何だ」だの「引っ張るな」だの言われるはずなのに、あまりに無言に過ぎ

たことが不気味だったせいだ。
「アレイズさん」
「あぁ」
声を掛ける。だが、その声にも覇気がない。
顔を覗き込むと、目の前で咲き誇る花々も何もかも漆黒で塗りつぶした無感動な眼差しが返ってくる。
「イオさんがティファ様のお相手をしている間に、今後の事を相談したいんですけど」
「あぁ」
「アレイズさんはこれからどう行動したらいいと思いますか？」
「あぁ」
「……一応訊きますけど、私の話聞いてます？」
「あぁ」
（いや、絶対聞いてないこれ絶対聞いてないよ！？）
せめて話を聞いてないと言われた方が――いやそれはそれで腹が立つから嫌だが、とにかくこれでは埒が明かない。
「これは重症だわ……」
嘆息するメイの前で、アレイズは相変わらず茫洋とした目を遠くへ向けている。その視線の先で何を思っているかは知らないが、イオの言う通り退行という言葉を知らないのであれば衝撃が大きいのも肯けるから文句の言いようがない。
アレイズにしてみれば唐突に、それも原因不明の何かで自分の存在を忘れられたのだ。自分とてそんな状況に放り込まれたらもっと慌てていたかもしれない。……無論それは退行という言葉を聞かされたとて変わりはしないし、知った方が悩む事も多いのかもしれないが、知らないより知っていた方がいいだろう。
（それにどんな状況であろうとティファ様はアレイズさんの契約者なんだし）
だから記憶がないからと言って、幼くなってしまったからと言って現実逃避をしてティファを見ることをやめないでほしいと自分本

意に思った。今までの旅の中で、アレイズが徐々にティファに対して好意を抱きつつあることをマイ共々見抜いていただけにその想いは強い。

第一、イオもアレイズも分かっていない。

魔力によって施された術ではない。あくまで精神的なものならば、失われた記憶は体のどこかに残っているかもしれないのだ。魔法で封印されたという可能性が万が一にもないとは言い切れないが、それはそれで好都合だ。封印というなら解けばいい。幸いこの世界は正規の手順を踏まなくとも神と人間が契約できるような適当さなのだ。封印ぐらい解こうと思えば解けるだろう、多分。

そう、例え退行とはいえ記憶は取り戻せるのだ。かなりの困難が伴う事は必須だが、絶対にできないことだなどと決めつけられているものではない。幸いここには神が二人もいるのだ。世界自身が絡んでいない限り、出来ないことなどないように思えた。ないことと言えば、彼等の自信ぐらいか。

（まぁ、多分アレイズさん達も私みたいに罪悪感を感じてるんだろうけど）

あの場に空間転移したのが誰の仕業なのかは知らないが、止められなかったという気持ちは誰の胸にも拭えないものだろう。だからこそ気持ちが押しつぶされて尻込みするのだろうが、そんなものは何の役にも立たなかった。

大切なのはこれから如何にしてティファを元の状態に戻すかだ。

深く腹の底に溜めるように息を吸い込み、アレイズの両腕を掴む。

「聞いてください、アレイズさん」

はっきりした声にぼんやりとしていたアレイズの焦点が合う。

「ティファ様がこのまま記憶を失っちゃっていいんですか？　アレイズさんはそれで平気なんですか？」

鋭い問いにアレイズが瞠目する。氷が水へ溶けていくような緩慢さで無感情だった顔に色が灯り始めた。

ぎり、と拳が握られる。その様子を気を長くして見ていると、や

がて搾り出すような声が返ってくる。
「平気なわけがない……！」
漆黒の双眸の奥に宿る怒りは誰に向けられたものなのか、メイはそれを確認するよりも先に口を開いていた。
「じゃあもっとしっかりしてください。姉さんがいない今、私達が頑張らなくちゃ何も先に進まないんだから」
それにアレイズもイオも神なのだ。数多くの特権と力を持っている存在なのだから、退行した契約者を見ても余裕たっぷりでいてほしい。願った所で無理なのは分かっているので結局がメイがしっかりしなければならないのだが。
「しっかりしろと言われても……。お前には何か考えがあるのか？」
嘆息に混じって放たれる問いに首を振る。あれば苦労しない。
「いえ。でも私とイオさんはティファ様が今どういう状況なのか大体予想してるよ」
「予想？」
「できれば外れててほしいなーとか思うような話ですけど」
そう、できれば誰か術者――ティファの言葉で言うと悪党――がいて、そいつを倒せば済む話だったら楽なのだが事はそんなに易くない。メイは一息ついて続けた。「アレイズさんは、退行って知ってる？」
イオの予想通り、アレイズは首を振る。
「退行？　いや、知らないが何だそれは」
「あんな感じです」
言いつつ遠くを指差すと、アレイズが怪訝そうな顔でそちらを見やる。
そこにはイオと戯れるティファの姿があった。
体だけは十七歳のまま、しかし声と喋り方はすっかり子どものもので無邪気に笑う姿を見て口を噤むアレイズに「私も詳しくは知らないけど」と大聖堂で聞いた話とイオから聞いた話をかいつまんで話した。

「という具合なんですけど」
「つまり精神――心が逆戻りするということか？　幼くなる、とか」
「そうです。今のティファ様にはぴったりの症状だと思いません？」
大雑把な説明に目を閉じて聞き入っていたアレイズは、一つ頷くと顎に手を当てて何やら考え込んでいる様子だった。その姿に、そんな症状が存在するとは思いもしなかったのだろう事が分かる。やはりアレイズにも解決策は見つけられそうにない。メイは嘆息して頼りない神を見た。
（しっかりしろって言われても難しいのは分かってるんだけどね）
神は元々人と関わるために存在するわけではない。あくまで世界を守るため。そして世界の意志は少々の衝撃で退行などしないだろう。彼等に対抗策が浮かばないのも、本当なら仕方のない話なのだ。分かってはいるのだが。
深い縁というのは、こういう時に被害が大きいなとメイは天を仰いで思案した。
マイやダグラスのように契約方法が特殊で契約者というより神の花嫁という表現が近いような関係、普段は口喧嘩の耐えない二人がお互いを深く信頼している良い関係。が、それ以上にやっかいなのが。
（それにアレイズさんはきっとティファ様のことを、神様としてじゃなくて――）
契約者、神の花嫁、仲間。どれにも当てはまるようで当てはまらない複雑な感情が二人の間に横たわっていることに気付いていないのは、恐らく当人達だけだろう。そして想いが強ければ強いほど、痛みも強い。
苦味を含んだ思考はそこで止まった。
雲の影とは違う何かが視界を黒く染めたように見え、慌てて顔を上げる。そこでメイはぎょっと目を見開いた。
「な、何あれ！」
メイの視線の先。果てることない、突きつけるような青空が広が

っているはずの場所にぽっかりと穴が空いていた。
「これは、ゲートか？」
素っ頓狂な声に釣られて顔を上げたアレイズがメイの視線を追って呟く。その声に、はてゲートとは何だろうと考えるものの結論は出なかった。
否、出せなかったのだ。
「――誰か来る」
今まではほとんど感じることができなかった魔力の奔流が肌をちりちりと焼く感覚に表情を引き締める。
空を切り取って開かれた小さな穴は丸く円の形を取り、底の見えない闇を覗かせる。
（気配がある……ってことは、誰かが転移でもするのかな）
胸中で呟き、更なる情報を得ようと目を閉じる。そしていつでもティファを護れるよう、傍に立ってリングリングを構えた。刃を外に向けた円環状の白刃には己の血がこびりついている。目を開いてそれを何とはなしに見た時、メイは息を呑んで警告もせずリングリングを放った。
「メイ！？　お前確認もせずに何を！」
度肝を抜かれたのか声を荒げるアレイズに、しかしメイは焦りより先に歓喜さえ浮かべて笑った。
「この魔力ってあの男のじゃないですか？」
銀色の吹き抜ける風のような魔力。
間違いない。血と殺意と共に肌に馴染んだこの魔力はダグラスのものだ。
「現れた瞬間集中攻撃しましょう」
にこやかな顔で提案すると、一体何が怖かったのかアレイズが「あ、あぁ」と顔を引きつらせた。
戻ってくるリングリングを受け取りゲートを睨む。
さぁ来い。さぁさぁ、早く来い。
（今度こそ負けないんだから）

手に汗握り、魔力がこちらに現れるのを辛抱強く待つ。
だが、いくら待ってもダグラスは現われなかった。代わりに――。
「何これ」
「手紙みたいだな」
人影の代わりに現れたのは、ひらひらと薄っぺらい紙切れだった。
拍子抜けしてぽかんと口を開くと「ダグラスからだ」アレイズが指先で摘まんでメイに見せた。そこには確かにダグラスの名が記されている。
「何であの男からの手紙なんて受け取らなきゃいけないのよ……」
どうせ勝ち誇って高笑いしながら書いたんだろうと言うと、アレイズは「いや」と首を振った。「余計に質が悪い」思いきり不快そうな顔になるアレイズの姿に不安を覚えていると、彼はティファが抱く兎にも聞こえるようはっきりとした声で文面を読んだ。

◇　◇　◇

――気分はどうだ諸君。こちらはマイティーナと過ごせて大変満足している。
さて、既に想定しているだろうが貴様等の転移先はビビッドだ。
レイナに近づくならそれなりの情報が得られるだろう。好きに動け。
一つ注意し忘れていたが、この地では安易に空間転移で脱出を試みる事は不可能に近い。魔力が乱れているからな。
転移場所は自力で探せ。
追伸。何故かマイティーナが貴様等の居場所を知って嘆いている。俺が嫌われる前にさっさと出て来い。

◇　◇　◇

「誰のせいでこんな事に――」

くしゃりと手紙を握り締めてアレイズが呻く。メイも地団駄を踏みながらゲートに向かって怒鳴りつけた。

「っていうか姉さんが嘆いてるのはあんたのせいじゃん！　何よダグラスより愛を籠めてって！　姉さんに向けた愛をこっちにまで向けないでよこの変態！　どうせ定型文だと思い込んで書いたんだろうけど、こんな気色悪いの書くぐらいなら署名だけしときなさいよ！」

「いやメイ、腹を立てるのはそこじゃないような気が……」

この混乱した状況を作り出した張本人に向かって全力で怒鳴る。あまりに疲れたので乱れた息を吐き出すと、ゲートが一瞬びくりと震えた後で閉じていく。小馬鹿にするような態度にカチンと来て、メイは一瞬イオでも放り込んでやろうかと剣呑なことを考えたが結局は唇を噛みしめて送り出した。

（どうせあの男にもティファ様は治せない。だったら傷めつけるのは後にして、今はティファ様を治す方法を探さなきゃ）

それにダグラスはビビッドにレイナの情報があると書いていた。村々で何かめぼしい話でも聞けたら、後々ティファの役にも立つに違いない。というかそう思わなければやっていられない。

「それにしても、どうして魔力が乱れていると脱出ができないんだろう」

独りごち首を傾げると、隣からあっさりと答えが返ってきた。

「座標が狂うからだ。転移できないことはないが、どこに出るか分からないからやめとけと言いたんだろう」

下手をすれば海の上に落ちることもあるということか。

「そうなんですかー……。何だか話を聞けば聞くほどあの男への殺意しか湧いてこないんですけど」

「心配するな。別にそれはおかしなことじゃない」

絶望的な気分を怒りに還元して空を睨めつける。アレイズはそれに肩を竦めて答えてからちらりとイオを一瞥した。

「だが、転移場所がないわけではないらしいな。問題はそれがどこ

かだということだが」
　いつの間にティファの手から逃れたのか、白い兎はピョコピョコと軽やかに四肢を伸ばして跳ねている。土の色を寄せ付けない艶やかな体毛を見下ろすとイオがこちらに近づいてきた。
“転移場所なら心配しなくていいよ。僕が知ってるから”
「本当!?　それって近い？」
　世界の情報を手に入れたい気持ちは強いが、万一の時にはすぐに退避できるようにはしておきたい。そう思い勢い込んで訊くとイオは頭を小さく傾げた。
“ここの位置が分からないから距離は分からないけど、ビビッドの最東端にある町に行けばあると思う”
「最東端……何となく遠そうだね」
“ここが大陸の東側だったらいいんだけどね。それにアズマもいるから道中苦労するだろうね。特に君は”
「そうだった。私アズマ語知らないんだよ」
　ビビッドにはアズマと呼ばれる人種が暮らしているが、レイニウム大聖堂を始めとした聖大陸の人間は彼等を蛮族と呼んではばからない。しかし実際ビビッドを訪れた冒険者が殺されたという話は聞かないから、決して乱暴なわけではないのだろう。その証拠に冒険者がアズマを蛮族だなどと称しているという話は聞いたことがない。気性の荒い者が多いという話を蛮行に繋げてしまった結果、先入観が生まれたのではないかとメイは考えていた。おっとりした人間の多いレイニウム大聖堂ならあり得ない話ではない。
　ビビッドに渡った商人や旅人が帰ってこない事が多いという話も聞くには聞くが、もしかしたらそれは単に移住しただけかもしれない。……どれもこれも希望的観測でしかないが、今はこの考えを信じなければ怖くて人のいる場所に行けない。
　だが、もし仮にアズマが蛮族でなかったとしても問題はそこで終わらない。独自の文化圏を持つアズマと聖大陸の人間では、そもそも扱う言葉が違うのだ。そんな状況でティファを元に戻す方法を探

すことなどできるのだろうか。
（それに、アズマって聖大陸の人間を毛嫌いしてるって姉さんが話してたような）
どれもこれも人伝の噂のようなものだからあてにはならないが、万が一マイの言う通りなら事だ。蛮族であろうとなかろうと、好悪というのは人の気持ちを荒ませる。喧嘩にはならないにしても、情報を手に入れることなどできないだろう。
「このままアズマのいる所に行って本当に大丈夫かな……」
“何かあったらその時はアレイズ神が頑張るさ。君だって対人戦なら十分強いわけだし”
「貴様は何もしないのか」
“僕兎だから”
悪びれもなく言い放つ兎を前にアレイズが拳を握り締める。「こ」一言だけ放たれた言葉が何を言いたかったのかを大体察し、メイは内心で頷いてから小さく首を振った。この役立たず。そう言いたいのは山々だが、イオとてできることはあるのだ。
「あ、ウサギさーん！　メイちゃんの所にいたんだ。こっちおいで」
自由気ままに走りまわる兎を探し求めていたティファがメイの元へとやって来た。大きく手を振りつつ息を切らせて走る様子はいつも通りのティファに見えて、やはりどこか幼い。グランハート家の庭を駆け回っていた頃のティファの姿がどうしても頭にちらついてしまうせいで違和感が拭えなかった。
腕を伸ばすティファへと駆け寄り、イオは素直に彼女の腕の中へと戻っていく。その様子が全力でこちらに向かって責任転嫁をしているように見えて、実は先程ぶん投げた事を根に持っているんじゃないかとちらと思ったが、あれぐらいしか役に立たないのだからと開き直ることにした。
遠ざかる一人と一匹の後ろ姿を見送り、メイは腕組みしてはぁと溜息をついた。
「とりあえず東に行くしかないみたいですね」

げんなりした声で言うと、アレイズは少し考えこむように顎に手を当てた後で「そのようだな」と頷いた。
「だがまぁ、アズマについては気にすることはないだろう。アズマ語なら多少扱えるからな。無用な争いは避けられる」
「アズマ語が分かるんですか？　もしかしてアレイズさんって、ビビッドの出身？」
「いや。故郷にアズマから移住してきた老人がいたから教わっただけだ」
驚きに目を見開いて尋ねた言葉にさらりと否定したアレイズは「ん？」と眉を顰め、メイに耳打ちした。
「あいつらはどこに行こうとしているんだ」
「どこって……転移場所のある町じゃないんですか？」
もしや転移場所の町に行こうとしている話が聞こえてしまったのか、ティファはずんずんと先へ進んでいく。太陽が昇る方向、東へと。だがそこでアレイズはますます怪訝そうな表情を浮かべた。
「おかしいと思わないか？」
「え？」
「ティファが東に進んでいる」
そこまで言われ、メイもはっと気付く。
（ティファ様は昔からとんでもない方向音痴のはずなのに、何で東なんて方向がちゃんと分かったの？）
朝夕ならばまだ納得もできる。朝日が昇る方向、夕日が沈むのとは逆方向と考えて行動したと言われれば、メイとてあっさり引き下がるだろう。だが今は昼だ。太陽は東にあるわけではなく、どちらかといえば南天に近い。そしてティファは南天まで昇った太陽を見て東を見極めて歩けるような真っ当な方向感覚を持ってはいないのだ。
「一体どうしちゃったんだろ、ティファ様……」
「偶然か、もしくは気紛れに歩いている方向が東という可能性もあるが、珍しい事もあるものだな」

きちんと目的地へ向かっている人間に向かって、あまりと言えばあまりの言葉を言い合いメイとアレイズも後を追う。だがメイはアレイズが珍しいと評したティファの方向感覚に腑に落ちないものを感じていた。

（アレイズさんの言うとおり、偶然って考えるのが当然なんだろうけど……。でもティファ様って、例え偶然にでも目的地に辿りつけたことがないんだよね。いつもきっちり間違った道を選んじゃってたし）

一度教えてもらった道ならば完璧に覚える事ができるが、一人で初めての場所へは絶対に行けないのだ、ティファは。そしてティファはビビッドになど来たことがない。やはりおかしな話だった。

何がと言われれば上手く答えられそうにない程に心もとない感覚だが、直感を馬鹿にしてはいけない。事マイとティファに関しては付き合いの長さから来る直感はそれなりにあてになるはずなのだ。ならば安易に否定はできない。

とにかく一度今の状態のティファと話してみる必要がありそうだった。

第四十二話

「お花がいっぱい咲いてて綺麗だね！」
「うん、綺麗だねー」
左右一帯に広がる薄桃色の花びらが散る様を見送りつつ、三人と一匹はひたすら東を目指して歩いていく。
途切れることのない桜並木にティファが無邪気に声を上げるのをメイは心持ちおっとりとした様子で返す。ちらとティファの腕の中を見やる。そこにはふさふさと真っ白な体毛に包まれた兎が身動きもせずに収まっていた。目を閉じているので判別できないが、恐らく青い瞳をしているのだろう。いくら退行したティファの傍にいるのが辛いとはいえ、何が起こるか分からない状況下で意識を眠らせたりはしないはずだ。
（そう思いたい所ではあるんだけど……。イオさんってちょっと感覚ズレてる気がするんだよね）
だが一度ティファの身に危険が迫れば参戦するはずなので、メイはあえて兎に話しかけることはせずにティファとの会話に集中する。日は次第に赤焼けへと変化していた。
「聖大陸にはああいう花はないけど、お屋敷に咲いてたアリシアの花も綺麗だったよね」
瑞々しく鮮やかな青の色彩を持つアリシアの花はグランハートの屋敷の庭一面に咲いていたものだ。ティファの母親と同じ名の花を話題に出すと、彼女は大きく頷いた。
「色は違うけど真っ青で綺麗だったね。あれね、パパから貰った苗をママが大事に大事に育てて増やしたんだよ」
首肯に合わせて揺れるスカイブルーよりもなお深い花の色を思い描いているのか、うっとりと目を細めるティファに笑いかけた所でふと違和感を覚えた。
（パパと、ママ？）

自分が知っている主は十歳の地点では既に両親にパパやママという呼称は使っていなかったはずである。そもそも、何故ティファは「咲いてた」という言葉に何も言わなかったのだろう。今までの言動から察するに、ティファの記憶はダグラスに屋敷を襲撃される以前のものなのに。

メイはすっと目を細めてティファの横顔を凝視するが、彼女は自分自身に向けられた視線になど気付かずスキップするような軽やかさで先へと進む。それが気付かない振りをして逃げているように見えるのは自分の考えすぎだろうか。ふぅと深く息をつき、風通しのよくなった服をひらめかせて後を追いながら、メイはティファの後ろ姿に胸中で言葉を投げかけた。

（ティファ様の年齢、もしかして十歳じゃない？）

退行をしているのは明らかだ。悪ふざけにしては質が悪すぎるし、そもそもティファはそのような悪ふざけをする趣味はない。だが、今のティファと本当に十歳だった頃のティファとでは差異があるのも事実だった。では、このティファは一体いつの頃のティファなのか。何故彼女は自分の歳を偽ったのか。

（駄目だわ。話せば話すほど混乱してきちゃったじゃない……）

ぷかぷかと船のように浮かぶ雲を見上げ途方にくれる。徐々に色を変えつつある太陽の影響で桃色の腹を見せる雲はメイの苦悩などどこ吹く風とゆったりと流されていく。その呑気さが恨めしくメイはきっと雲を睨み上げたが、やがて諦めたように首を振った。雲に八つ当たりしてどうする。

ともかく今得た情報をアレイズに話してみようと視線を巡らせる。すると斜め後ろに全身真っ黒の長身が立っているのが見えたので、メイはティファに「ティファ様、私ちょっとアレイズさんと話してくるね」と声を掛けてから数歩後ろに下がった。

「アレイズさん」

「……どうした？」

そっと声を掛けるとアレイズは何やら考え事でもしていたのか、

僅かに驚きを見せつつ答える。
　退行の事実を知ってからそれほど時間は経っていない。ということはアレイズはまだ衝撃から立ち直っていないのだろうなと溜息混じりに考えつつ、しかしメイは慰めを口にしなかった。本当ならばゆっくりじっくり慰めて落ち着かせて頼りになる状態にしたいのだが、そんな事をしている時間的余裕があるかというと話は別である。そもそもティファがあのような状況である以上、何を言っても無駄な気がする。だからメイは自分が得た情報だけを簡潔に放った。
「ティファ様、実は十歳じゃないよ」
　だが、些か簡潔すぎたようだ。
「何を今更」
　耳を打つ囁きを聞くなりアレイズは胡乱気に目を細めた。これ以上何を言われるのかと身構えていたせいだろう。脅かすなと言わんばかりに肩を竦められた。
「ティファが十歳でないことなど見れば分かる話だろう。なのにいきなり何を言い出す」
「違うよ！　そういう意味じゃなくて」
　確かにそれはそうなんだけどそういう意味じゃなくて。
　前提とも言える話を諭すように持ち出され、メイは苛立ち気味に声を荒らげながら説明の言葉を探す。そうして大声を不審に思ったティファに「何でもないよ！」と両手を振って見せてから声を落として、自分自身に言い聞かせるように説明した。
「ティファ様の実年齢は私だって知ってます。問題は、ティファ様の今の精神年齢が十歳じゃないってことなんです」
「何だと？　だがティファは自分が十歳だと言っていただろう」
「自己申告ではそうなります。でも、本当に十歳だった頃のティファ様とは明らかに違う所があるの」
　メイに合わせて声を落とすアレイズの横に立ち、声が聞こえやすいように顔を近付けてから「さっき」と続ける。
「ティファ様がお館様達のことをパパとママって呼んだんです。実

際に十歳だった頃のティファ様はあの頃既に父様母様って呼んでたのに」

「成程、それでお前はティファの年齢が十歳ではないと」

「そういうこと。それに、庭に咲いてた花を過去形で話しても全然気にしてなかったのも気になります。あれはダグラスの襲撃で庭ごと壊されたものだから、今のティファ様は知らないはずなのに」

「聞き流しただけじゃないか？」

「ティファ様は方向音痴だし割と鈍いとこもあるけど、ああいう微妙な言い回しに気付けないほど馬鹿じゃないよ。でも、もし聞き流したわけじゃないんなら余計に分からなくなっちゃって」

「両親の呼称は襲撃以前だが、今の話だと襲撃後の記憶ということになるからか」

「はい。退行を起こしたせいで記憶に混乱が生じてるって可能性もないわけじゃないんでしょうけど、話した感じそういう風にも見えないし……」

もっとも、記憶が混乱していると自覚していないのだから当然といえば当然の話だが、ティファと話した印象では彼女の中では記憶がしっかりと確立されているように思われたから余計に訳が分からない。視線を足元に落として考えこむメイの隣で、アレイズもふむと呟いた。

「確かに矛盾しているな。……実際、今のティファは何歳なのか」

十歳より若いのか、それとも歳をとっているのか。実年齢とは違う精神年齢について真剣に考える様は滑稽だなとふと思う。だがたかが精神年齢と侮ることはできない。メイは立ち止まり首を振る。

「分かりません。でもティファ様に直接訊いちゃいけない気がします」

「どうしてそう思う」

「だってよく考えてみてください。今ここで襲撃の話……はぼかして話すとしても、ティファ様が持つ記憶がごちゃ混ぜになってるなんて話したら、じゃあ自分は一体何歳なんだろうって疑問が出ると

思うんです。そうなれば余計に混乱しちゃって、状況が悪化しそうじゃないですか？」

運がよければそれがきっかけで退行状態を抜け出せるかもしれないが危険過ぎる。ただでさえ尋常ではない状況が目の前で起こってしまっているのだ。これ以上の混乱を招くのは御免だった。

「自己を確立しているものが揺らぐ、か。お前の言う通りかもしれないな。今の退行も、ティファの中の何かが崩壊したせいで起こったと考えるのが妥当だろうしな」

強すぎる揺さぶりが精神を、魂に罅を入れたがゆえティファの在り様が変わってしまっている。その事実を再確認し睫毛を伏せると、アレイズが「あとは」と呟いた。

「他に考えられる事があるとすれば、ティファが嘘をついてる可能性か」

「私もそれは考えましたけど、退行した状況で年齢詐称する意味なんてあるのかな。子どもだよ？」

それなりの歳を経た大人がサバを読むぐらいならばありそうだが、子どもが自分の年齢を誤魔化す理由など考えが及ばない。濃い草の匂いに包まれてゆっくりと先を行くティファの背を見据えつつ言うと、アレイズは困ったように眉尻を下げてから頷いた。

「今のはただの希望的観測だ。気にするな」

苦いものを含んだ声に目を瞬く。

「……希望的って、もしかしてティファ様の退行自体が虚言だってこと？」

「そうだったらいいなと思ってな」

メイの言葉に頷きを返すアレイズは、しかしちっとも自分の希望的観測を信じていない様子だった。当然だ。ティファがそのような虚言を口にするなど、この場の誰も思ってはいないのだから。ただ、気持ちは痛いほど分かるからメイも苦笑で返す。頬を吊り上げて笑う気力もなく、どうにもしゃっきりしない顔になってしまったが。

「異常事態の中の異常事態。何だか私達、とんでもないことに巻き

込まれちゃってるみたいですね」
「まったくだ。こんな中でどうやってレイナの情報を得ろって言うんだ。……しかし、尋常ではないな。こんなに妙な退行をするとは」
「退行なんてした地点で尋常じゃないけどね」
二人して肩を落とす。どんよりと暗雲に纏わり付かれているような錯覚を覚えるほど重苦しい空気に、頭痛すら沸いてきそうだ。やるべきことは山ほどあるのに、何から手をつけたらいいのか分からないということがこんなに疲れることだったとは。
ちくちくと草の先端に足を刺される痛痒さも相まって、次第に苛立ちが込み上げてくる。だがそんな二人の声を無視して、前方から大きく手を振るティファの姿が見えた。
「ねぇ、メイちゃん！　お兄ちゃん！」
手招きするような大仰な動きに顔を上げ、ぎょっとする。瞬間、アレイズと二人して駆け出していた。
ぱっと光に照らされたようなティファの背後に道がない。少しそり上がったそれは、確認するまでもなく崖だと分かった。
「あ、危ないよ！」
「大丈夫ー！」
慌てたメイがティファを崖の傍から引き剥がそうとするが、ティファは笑って答えるのみで危機感に乏しい。もっともそれは退行する前からのことなのでメイは小言を漏らしながらも首を振る程度に留めた。アレイズはそれが子どもゆえの危うさだと感じたのか、青い顔をしてメイが掴んでいるのとは逆の腕を掴んだ。
「子どもは何をするか分からないというのは本当だな」
「ティファ様は元々こんな風ですよ……」
そうでなければゴロツキに啖呵切ったり盗賊の根城に一人で乗り込もうとはしないだろう。あれは力に自信があるからというのもあるが、元々の性分なのだ。無鉄砲で危なっかしい。そんな性格を知っているからこそ、メイもマイも気が気でない。
ティファを崖から引き剥がしほっと息をつき、腕の中で丸まって

いる白い物体に手を伸ばす。本能の赴くまま長い両耳をそっと手の中に収めると、それはびくりと震えた。握りつぶされると思ったのだろう。それだけの判断ができるのなら、今兎の中にいるのはイオだ。……イオ以外の魂が他に入っているという話を聞いたことはないが、少なくとも狸寝入りはしていないのだろう。だというのにティファが崖近くにいても止めないとはどういう了見だ。

メイはにっこりとティファに笑いかけ、腕の中の兎を取り上げる。そうして背中を一撫でしながら、優しく優しく囁いた。

「イオさーん。もうちょっと働こうねー」

耳に吐息を吹きかけるような囁きと同時に、背中を撫でる手に湿り気を感じた。ぷるぷる震えているところからして、冷や汗でもかいているのか。

空を小さく丸めたような碧眼が必死の色を浮かべて向けられる。

“と、止めたくても僕今兎だから喋れないんだよ！”

確かにそれは一理ある。メイはうーんと考え込んでから、にたりと笑った。

「じゃあもうゼクスだってばらしちゃえばいいんじゃないですか？兎が喋ったぐらいじゃ驚きませんよ、きっと」

そもそも人間体だったイオは一度ティファと話しているのだ。今人間に戻ってもらってもいいぐらいだ。

（そういえばティファ様、イオさんが消えちゃったのに全然気付いてないみたいだよね）

混乱に取り紛れて忘れていたが、普通に考えたらあり得ないだろう。人が一人消えているのだ。嫌でも気になるはずだというのに、ティファはイオの消息について一切訊いて来なかった。イオは決して目立たない容姿ではない。むしろ目立つ部類に入るはずなのだが。

（気付いてて無視してる？　それとも、本当に気付いてないだけ？　でも、どっちにしろティファ様らしくない……）

胸の奥をくすぐるような不安感がこみ上げる。

（退行したからってだけじゃない。何だか本当に、ティファ様じゃ

ない別人がいるみたいな。でも、一体誰が？）

幼くなっただけならばずっと傍にいたメイには馴染みのものだ。しかし今のティファの様子は、メイにも理解できない点が多すぎる。初対面の人間と接する時のようにどこか噛み合わないのだ。

“メイ？”

黙り込んだままのメイにイオが意識を飛ばす。頭に響くその声に、メイは逡巡してから問うた。

「ねぇ、イオさん。ティファ様は本当にティファ様なんですよね？」

“何か気になることでもあるのかい？”

「分からない。でも何だか不安で。上手く言えないんだけど、まるでティファ様じゃないみたいで」

もう二度と戻ってこないような不安が拭えない。吐き出すような声に、イオはしばし目を閉じてから答えた。

“……少なくとも、前に僕が君にやったように体が乗っ取られているようには見えない”

ただ、と続ける。

“グラスの末裔である君が違うって感じるんなら、それは無視できないと思う。僕も少し考えてみるよ。覚えてないだけで何か方法があったのかもしれないし”

「別にイオさん達みたいに魔力で感じたわけじゃなくて、付き合いが長いから分かっただよ。グラスだからってわけじゃない。……でも、お願いします」

ぺこりと頭を下げるとイオは“うん”と頷いてから嘆息した。

“やれやれ。もうちょっと黙っていたかったんだけどな”

「神様が横着するものじゃないってことですよ。――さてと」

イオを抱き直し、ティファへと近付く。するとようやく血色の戻ったアレイズが崖の傍からメイを手招きした。

「どうしたんですか？」

「あれを見ろ」

風に髪を嬲られながらアレイズが指差す方向に目を向ける、遥か

眼下に広がる草原を取り囲むようにサクラが植わっているのが見えた。桃色の花びらが遠目にも見えるほど咲き誇っている。赤焼けに染まる山々の緑や草原と相まって、体の力が抜けるほど壮麗な景色だ。

頭上でピロロロ……と鳥の鳴く声がする。本当に弁当でも持ってきていればよかったと後悔する程の、長閑な静寂に満ちた景色に感嘆の息を漏らした。と、そこで目をぱちりと見開く。

開けっぴろげに過ぎる草原から少し外れた場所に煙が立っている。それが山火事の類ではないことは、火の手が見えないことから明らかだ。よく見えないが、目を凝らせばそこに黒っぽい塊が密集しているのが分かる。大きさとしては聖大陸に点在する村々と同じだろう。グラドやレイニウム大聖堂の敷地とは比べ物にならないほど小さい。しかし未開の地と呼ばれる場所で見るには十分すぎると言えた。

「あんな所に村が……」

「いや、ビビッドであの規模だと町と言った方がいいだろうな」

呟いた声にアレイズがそう付け足し、崖から離れる。

「あの程度の距離ならば、急げば夜までには辿りつけるだろうが……どうする、行くか？」

「うーん、行くって選択肢しかなさそうですもんね。行きましょうか」

野宿をするには荷物が些か心もとない上に、夜になって冷え込んだらメイの今の格好では寒い。それに今のメイ達には情報が必要だった。……アズマと意思疎通が上手く取れるかという問題については目を瞑っておく。

胸元でほくほくと熱を放つイオの顔を覗き込む。すると彼は片目を開けて、ティファにも聞こえるように答えた。

“そうだね。今はとにかく情報収集が先だ”

頭の中に直接響いてくる声にティファがイオをじっと見つめる。だがダークブルーの双眸に宿るのは意外そうな感情だけで、驚愕で

はなかった。その証拠に笑みを浮かべたティファの声は一切の動揺を感じさせない。

「このウサギさん、ゼクスなんだね」

そしてそれきりティファはイオに話しかけるでもなく、崖から降りる道を探し始めてしまった。小動物に興味はあっても、ゼクス――この場合イオという存在自体に興味は持っていないように見える。否、事実興味がないのだろう。

（兎が喋っても驚かないんじゃないかなとは思ってたけど、誰も説明してないのにゼクスの事知ってるなんて）

ゼクスに関する知識はレイニウム大聖堂で与えられたものだ。絵本でも読んだのかと思ったが、最後の審判を下す兎の神様の話を描いた絵本は大聖堂にあったはずだ。メイ自身がそう記憶しているのだから間違いない。それに、兎の名がピコだと教えてもティファは兎の神様の話を出さなかった。恐らく、絵本のことは知らないのだろう。

（知識も記憶もごちゃごちゃになってるってことかな。一体今、ティファ様の頭の中ってどうなってるんだろう）

これはこの時の知識や記憶、と一つ一つ精査しているとこちらの頭が混乱しそうだ。メイは一つ息を吐き、とにかくそういうものなのだと簡単な結論を出すに留め、ティファの後を追った。

記憶も知識も十歳時点のものではない。その事実だけで不安はいくらでも倍増してくれた。

◇　◇　◇

月が山の端を超える前に辿り着いたその町は崖の上から見下ろした時よりも遥かに大きく、メイの予想を遥かに超えた光景だった。とにかく聖大陸とは何もかもが違うのだ。

まず、家が違う。壁は煉瓦や大理石ではなく木材で造られており、少し地面から離れていた。よく見ればこれも木でできた大きな柱で

支えられており、床下には闇が巣食っている。何でそんな事をするのか分からないままに視線を上げると、聖大陸の家を上から叩いてぺしゃんこにしたような横に長い家々が連なっているのが見えた。どの家も一階までで、二階がない。

勿論聖大陸の村にも二階がない家はある。だがこれほどに横に長く平べったくはなかったとメイは家の形を見ながら心の中で呟いた。見れば三角形に盛り上がっている家もあるが、殆どが平らだ。

窓は硝子ではなく、これもまた木でできた板だ。これでは雨が降った時に木が水を染み込むのではないかと思うのだが、もしかしたら硝子の素材がないのかもしれないと考え直し納得した。第一、何の考えもなく使いはしないだろう。……理由は分からないが。

石畳のない、じゃりじゃりとした砂を踏みしめて歩きつつメイは辺りを見渡す。どの家も今が夕食時らしく、ふわりと暖かな匂いが漂ってくる。美味しそうな匂いではあるが、何であるかは分からなかった。

だがそんな町並みの中でも最も疑問に思ったのが、崖から見た時に見えた黒い物体だ。メイは平らや三角形の家を覆う黒々としたものを指差しアレイズに尋ねた。

「アレイズさん、あれ何ですか？」

間違っても聖大陸ではお目にかかれないような黒い何かは、どの家にも必ずあるものだった。最初は装飾品かとも思ったが、それだけではないだろう。

尋ねられ、アレイズは知識をさらうように首を傾げてから「あぁ」と一度頷いた。

「あれは瓦と呼ばれるものだ。材質は……石灰だったか？　よく覚えていないが、確か名前は合ってるはずだ」

「カワラ？　何に使うんですか？」

頭の上に疑問符を浮かべながらカワラを見上げると、アレイズは「よく見ろ」と家々を指差した。

「あれは一枚じゃない。何枚もの瓦を敷き詰めている。それに、平

らに見えていても実は少しずつ斜めになるように組み合わさっているんだが、分かるか？」

「んー？　……あ、本当だ。ちょっと分かりづらいですけど、横から見れば斜めになってますね」

アレイズの指摘に目を丸くする。言われた通り、家の造り自体は平らでも屋根だけは少し斜めになっている。地面に頭を垂れるように、中心から下に向かっていた。

「雨なり雪なり降った時に、重さに耐えられなくならないようにあれで水はけを良くしているんだ」

「へえぇー……。そういう理由があったんですね、あれ。でも雨と雪は分かったけど、壁を木で作ってたら燃えやすそう」

「風通しを良くするためだ。今の季節はいいが、夏は湿度が高く蒸し暑いと聞いた」

風変わりな造りについて一つ一つ説明を受けると納得が胸に積まれていく。アズマが蛮人と呼ばれていても、やはり先人の知恵というものがあることに感心した。この様子ならば、いきなり攻撃されるということはないだろう。これだけの知恵を用いて集団生活ができれば、話し合いもできるはずだ。

ブーツの底が小石を踏む感触を捉える。さすがに大きな石はどけられているようだが、聖大陸の森を歩いていた時よりもやや大雑把な印象を抱いた。人が住むにしてはあまり整備されていないせいか。だが、その程度の差なら大したことはない。問題は別のところにある。

「私達って目立つね」

「あぁ。さすがにこの服だとな」

家も地面も見たことがないものならば、道を往く人々が身に纏う衣服も全く違うものだった。

上下が離れたものではなく、長い布を巻きつけているように見える。体裁を整えるためか、腰の部分には別の布を巻き付けている。袖はたっぷり布を使っているらしく、聖大陸の人間が着るようなぴ

っちりしたものではなかった。
色は緑や紺が多く、菱形や縦縞の模様が走っている。ついと視線を動かすと時折花をあしらった模様もあるが、そういった人は極々稀なようだった。どうやら富裕層の女性が着ているもののようだとしばらく人々を観察していて分かった。彼女達は豪奢な髪留めできっちりと髪を結い、従者を連れて足早に家へと帰っていく。
意外なことに顔の造りはそれほど聖大陸の人間とは変わらなかった。薄暗いので分かりづらいが、肌の色が黄色っぽく背が若干低めであることぐらいか。もっとも、だからこそ服装の違いが際立つのだが。
元々の服の色もあって血の跡はあまり目立たずに済んでいるが、ボロボロになったメイの姿を見てぎょっとする通行人も多い。予想していたとはいえ、かなり目立つ。
メイは薄紙で作られた四角い箱の中で火を揺らめかせる照明から離れ、暗がりへと身を寄せた。アレイズもそれに倣う。すると元々漆黒を纏っていた彼はあっさりと闇に溶けこんでしまった。気配と息遣いが背中に触れ、メイは一瞬身を震わせそうになった。
「突然攻撃してくるとは思えんが、このままだとまずいな」
「攻撃されちゃうってことですか？」
「それはない、と思いたいが……どの道聖大陸の人間が訪れたとあっては上役が黙ってはいまい。歓待するにせよ追放するにせよ、何か接触があるはずだ」
“歓待ねぇ。グラドの二の舞にならなきゃいいけど”
イオの言葉にアレイズと二人ぎくりと顔を強ばらせる。
グラドの二の舞。それはアレイズ――神を目的とするならイオも含まれるはずだが――を掌中に収めるための陰謀を差している。無論神を手に入れようなどという罰当たりな事をしようとしたグラドはそれなりの報いを受けることになったのだが、今回もそうなるかもしれないということか。
（でもアズマの人達はアレイズさん達のことを知らないはずだし）

正直に言うと、グラドの時も何故情報が漏れたのか分からないのだ。

ティファなら何か聞いているかもしれないが、今の状態では訊けようはずもない。メイはげんなりする思いを頭の一振るいで遠ざけ、努めて明るい声を出した。

「だ、大丈夫だよ。そうならないように、変装でもすればいいわけだし。あ、でも」

顔の造作に大差がなければ、あとは肌と服を誤魔化せばどうとでもなる。そこまで考えメイははたと気がついた。ごそごそと袋から銀貨を取り出す。

「お金、聖大陸ので大丈夫かなぁ……」

コロンと手の中に転がる銀貨は聖大陸の共通通貨だ。これがビビッドで通用するだろうか。眉尻を下げて考えこむと、アレイズも考えこむように顎に手を当てる。彼とて実際にビビッドに来たのは初めてなのだろう。しばし考えた後で一つ頷いた。

「聖大陸とビビッドでは使用言語が違う。恐らく試しに出してみても俺達の事はバレないだろう。それなら一度試してみればいい」

「駄目だったら？」

「その時はその銀貨を売って通貨を手にいれればいい。鉱物ならどこの地方でも稀少価値があるはずだ」

「そっか、そういう方法もあるんですね。後は言葉かぁ」

物を買うにしても売るにしても言葉が通じないのでは相手の言いなりになるしかない。

頼みの綱はアレイズだが、彼は確か簡単な言葉しか教わっていないと言っていたはずだ。商談をするにはやや心もとない。

そうして些細な不安に空を仰いだ時だった。

「大丈夫よ、アズマにも私達の言葉が通じる人がたくさんいるらしいから」

「「……え？」」

不意に放たれた声に足を止める。しっかりとした口調に思わず辺

りを見渡す。そこでイオの声が耳朶を打ち、はっとした。
“ティファ？”
そうだ、今の声はティファのものだったではないか。
メイは勢いよく振り返りティファの顔を覗き込んだ。腕の中のイオもぴたりとティファの目に視線を向ける。
「ティファ様、今何て？」
もしかして、もしかして！
（ティファ様の記憶が戻った！？）
メイはぐっと膨らんだ期待がぱちんと割れてしまわないよう慎重に声を出す。しかし縋りつく声にティファは目を瞬いて首を傾げただけだった。
「ふぇ？　あたし何も言ってないよ？」
何か聞こえた？　そう言って両手を耳に当ててきゃたきゃた笑うティファの姿に、メイは愕然とした。
「「そんな――」」
（そんなわけない！）
今のは確かにティファの声だった。他の誰のものでもない。なのになぜティファは自分ではないと言うのか。しかも今の口調を聞く限り記憶は元に戻っていない。
アレイズとメイは否定の言葉を口にしようとして、ぐっと押し黙る。闇の中にいてもそこは完全な闇ではない。突然気色ばんだ三人と一匹の姿に、足を止めて奇異な視線を送る者がいたのだ。
「……とにかく、宿を探しましょう。今から行動した所で、誰からも話を聞けそうにないし」
メイはしばし熟考した後でそう搾り出した。アレイズもそれに頷きを返し、胡乱気な一瞥をメイに寄越す。困っているような失望しているような複雑な感情をその瞳から見て取って、メイは一瞬迷った後でティファにイオを託してアレイズに近づいた。ひそひそ小声で話す。
「今、ティファ様」

「あぁ、いつも通りだった。記憶が戻ったんじゃないのか？」
「私もそう思ったけど、でもあの様子じゃ多分……」
ティファを視界に収めつつ歩を進める。その頭上から深々とした溜息が降ってきた。
「違う、か」
希望を突きつけられた後だからだろう。その声は重い。メイとてずんと重くなった体を引きずるようにして歩いているのだ。
（多分記憶は戻ってない。でも、じゃあ、あれは何？）
不安がますます強くなる。本当に、ティファはティファなのだろうか。
夜のひんやりとした風に運ばれてサクラの花弁が肩や頭にくっついて服に模様を描いていく。だが常ならば見惚れるような花弁に目もくれず、各々思考にのめりこんでいった。ただ、ティファだけが何に興味を惹かれたのか唐突に走りだす。軽やかに揺れる白いスカートが、スカイブルーの髪が宵闇とサクラの花吹雪に掻き消されそうに思えて、アレイズとメイは思わず悲鳴じみた声を上げていた。
「ティファ！」
「ティファ様、遠くに行っちゃ駄目！」
月明かりと茫洋とした照明だけが頼りの道はあまりに暗く、二人は人にぶつからないようにするのが精一杯の中ティファを追いかける。
そのせいで気付けなかったのだ。
遠巻きに見ている者達の中に、明らかに常人離れした視線があったことを。

第四十三話

世界が寝床で目を閉じているかのような温い沈黙の中、マイはひっそりと吐息を漏らした。

「どうやらアズマ達の町に入れたようですね」

プラクトを上空から眺めるマイの横顔をしんと静まり返った午後の日差しが照らす。それとは対照的な宵闇の中寝床に入ったティファ達を瞬きを惜しみつつ見ていると、彼女達を映し出す魔法陣が揺らめいた。きっと魔法陣の奥を睨み据える。

「何をしているんです。これじゃあティファ様達が見えないじゃないですか。この程度の魔術で疲れるなんて、貴方本当に神なんですか？」

突き刺すような声を放ると、長い銀髪を揺らした男が眉尻を下げ、地についていない体をついと動かしてマイに近づいた。魔法陣が消え、熱を加えれば溶けるのではと思えるような銀の瞳が悲しみと不満を湛えて向けられる。

「奴等なら大丈夫だと言っただろう。俺を信用したというのは嘘か？」

「信用は時と場合によります。今は信用できません」

腕を組みつつ淋しげな声を一蹴すると銀髪の神ことダグラスはしゅんと肩を落とす。その様子はさながら主人に叱られた犬のようで、マイはふとかの神の正体を思い出す。確かダグラスはゼクス――高い知能を有する動物だという話だ。その中でも、今はもう絶滅した銀狼だとか。

（狼と犬は見た目がよく似ているけれど、狼も叱られたらこんな風になるのかしら）

だが、ダグラスが誰かに叱られてしょげている姿など想像ができない。現にマイに叱られて落ち込んでいるというのに、他の誰か……例えば世界に叱られている姿を想像しようと思ってもどうにも上

手くいかなかった。
恐らくは彼とて誰に言われても落ち込むわけではないのだろう。それだけに質が悪かった。今世界でこの凶悪な神の手綱を握れるのは己だけなのだと自覚するのが怖い。
相手が神だから、剣呑だからではない。自分がティファの傍にいられなくなる原因がそんなくだらないことだという事実が一番怖かった。
少し前までならマイもそこまでは思わなかっただろう。ダグラスが危険な存在であることも、ティファの傍に置いておけないことも承知しているのだ。しかし、今のマイの心には理屈が通用しない理由があった。
「……マイティーナ、いい加減に機嫌を直せ」
もう一度魔法陣を展開し、ビビッド大陸とそこで眠る一行を映し出しながらダグラスがやや不満げに言う。本人としては世界の情報が得られる場所へ案内したのに何故怒られるのか分からないせいだろう。
故郷の町から見上げても決して見えないほどの高みに浮かんでいるのに、二人は強風に煽られるでも寒さに震えるでもなく温い空間に漂っている。それはひとえにダグラスが結界を張っているからだが、そんな異形の力さえも忌々しく思えてきて、マイは自分のこめかみが引き攣るのを自覚しながら腕を大きく一振りした。
「皆をビビッド大陸に送り込んでおいて何をいけしゃあしゃあと。それにあれは何ですか。どうしてティファ様があんなことになっているんです！」
四角く切り取られた空間にはティファの寝顔が映し出されている。だが白い兎を抱きしめて眠る姿は、ここ数年見慣れたものとは別人のように違ってみえた。顔が、ではない。その人間が持つ雰囲気のようなものが明らかに違っているのだ。もっともこれは直感でしかないが、それだけで十分すぎるほどダグラスに当たる理由になった。

一方、神々の中で最も残酷だと評されるダグラスは契約者の剣幕に尻込みしながらもはっきりと答えた。ティファにさほどの興味を払っていない彼はアレイズ達と違い、至って冷静な声だ。

「あれは退行だ。今の年齢からはかけ離れ、子どもの時の自分に戻る現象を指す。原因は不明とされているが、主に神との契約に耐えきれなかった者が起こすことが多いな」

マイは落ち着き払ったダグラスの態度に自身も頭を冷やしつつ眉を顰めた。

「契約に？　ですがアレイズ様とティファ様の魔力は安定しているように見えます」

魔力は見えないが、少なくとも暴走していないことぐらいは分かる。ならば二人の契約に問題が生じたわけではないだろう。そう判断しきつい眼差しを前に立つ神に向けると、彼は無言の催促に答えるように瞼を閉じた。陽光にささやかな光を返す銀の睫毛は長く、霜のように見えた。

「あとは、そう。精神に著しい衝撃を与えたらあんな風になるだろうな」

閉じられたままの瞼を見つめているとそんな声が耳朶を打ち、マイはその揶揄も嘲笑も含んでいない事実のみを伝える言葉の中の一つを繰り返す。

「著しい衝撃」

混乱の中響き渡ったティファの絶叫が頭を打ちつける。

あの時、ティファは腐敗さえしていない両親の死体と対面した。もしもあれが彼女の心を壊してしまったのなら、原因は――。

「結局、回りまわれば貴方が原因ですか」

大本は屋敷の時を止めるなどという悪趣味極まりない事をしたダグラスの、欠如しすぎて満ちている所がまったく見えないほどの人格破綻のせいだ。しかし屋敷に足を運んだ地点で失敗は失敗。責はあの場にいた全員にある。だから契約者に責められてぐっと言葉を詰まらせるダグラスにそれ以上の追求はしなかった。

（大切なのは今後のことだわ）

恐らくはメイも同じ事を考えたはずだ。責任を追求することも誰かに八つ当たりするのも、全てティファを元に戻してからでいい。自分達にとって大切なのはティファであり、誰かをいたぶることではない。

いつの間にか目を開いてマイをじっと見つめていたダグラスの脳に滑りこませるように問う。

「治療手段は」

「ない」

眉間に皺を刻むマイを見て慌てた様子でダグラスが言葉を続ける。

「手段は確かにない。だが、決して治らないというものでもない」

「？　手段がないのに治らないわけじゃない？」

「人間が心を癒す手段が一つしかないということはなかろう。退行にもそれは当てはまる」

これ以上マイに嫌われたくない一心で真面目に答えるダグラスを一瞥し、足先へと視線を落とす。

「方法はないけれど希望がないこともない、ですか……」

退行の原因を精神へのダメージとするならダグラスの言い分は正しい。心を壊す原因は人それぞれ。ならば癒す方法も十人十色だ。しかしいつもかっちりと道を定めて進んできたマイとしては、何も手立てがないというのは些か不安が大きかった。第一今の自分ではティファの手助けをすることができない。

（アレイズ様やイオ様は殆どティファ様に話しかけていらっしゃらなかった……。多分ショックが大きかったんだわ）

アズマの町に入った辺りからダグラスの魔術で彼女達を見守っていたが、イオは兎の姿に戻っており、アレイズに至ってはメイと話すばかりでティファに話しかける事など殆ど無い。仮にも契約者であるというのにだ。もっとも、退行が言動だけでなく記憶ごと奪ってしまっているなら話しかけられない気持ちも分かるが。

魔力の乱れが大きすぎて話し声が聞き取れなかったのが口惜しい。

動きだけでなく話が聞き取れればティファの状態がより詳しく分かるというのに。

（せめてメイと話ができれば）

最強の魔術師の末裔ならば少しぐらい特別な力を持っていればいいものを、メイはともかくとして自分に何の力がないことが憎らしい。唯一神にさえ褒められるのは意志の強さだが、自覚がない上に使い道が思い浮かばない。だが、そもそも自分がティファ達から離れたことが原因なのだと思うと愚痴一つ零せなかった。

爪を噛み眼下に広がる故郷を睨みつけていると、そんな彼女を見守るダグラスの囁きが耳に入る。

「それよりも見たか、マイティーナ」

媚びるでも甘えるでもなく、ただどこまでもマイの意志を尊重し甘やかす声に顔を上げる。その表情からは既に苛立ちが消えている。好きにしろと態度で示された途端に冷静になる自分は相当な天邪鬼だと内心で苦笑した。

「それよりもとは何ですか。……見たというのは？」

自己嫌悪や苛立ちを足蹴にして一瞬にして凍えるような冷静さを瞳に宿したマイの姿に満足気に頷いたダグラスは、切り取られた空間の中に見える景色よりもなお遠くを見据えて言い放った。

「宿を探し始める前、一瞬だが強い魔力が奴等を捉えていた」

「――っ！　まさか他の神が？」

「いや、それはないだろう。何のために俺達がここにいると思っている。第一、あれほど魔力のある神が一瞬でティファニエンドから目を離すとは思えん」

目を細めて闇を見つめる銀の瞳の鋭さに背筋が凍りついた。

本人の意思にかかわりなく、ティファは世界の意志たるレイナを殺すと遥か千年前に予言されている存在だ。よって、世界に生きる誰もがティファの命を狙っていても不思議ではない。しかし人間はレイナの死など知る由もないし、かといって神々ではないとダグラスは言う。

「なら一体誰が……」
まさか自分達が予想していない第三者がいるというのだろうか。
（グラドのフランベルジェ王子？　ゼル様？　……どれも有り得なさそうだけれど）
少なくともティファを見つけて話しかけずにいるとは思えないし、そもそもフランベルジェに魔力があるなどという話は聞いていない。マイはいくら考えても大した候補しか浮かべられず首を捻った。するとダグラスが含み笑いを漏らす。
「ふむ。少し厄介なことになりそうだな」
「厄介なこと？」
何か知っているダグラスの様子にぴくりと眉が跳ね上がる。
「どういうことです。貴方はその魔力の持ち主を知っているんですか？」
「予想が正しければな。だが確信はある。まぁ、今しばらくは何事も起こらないはずだ」
腕組みし鷹揚に笑う姿には焦りなど微塵も感じられない。
（だけど信用ならないわ）
マイは一瞬安堵しかけた自分を叱咤し表情を引き締める。
認めたくないがダグラスにとって一番大事なのはマイであり、ティファではないのだ。仮に彼女が死んだとしてもダグラスは眉一つ動かさないだろう。否、マイが荒れて宥めるのに苦労する事を恐れはするだろうが。
視界の隅にちらちらと陽炎が揺れる。それをあえて見なかったことにして畳み掛けるように問うた。
「はず？　いい加減なこと言っていると殺しますよ」
「……そうつれない事を言うな。ティファニエンドに接するのとは大違いじゃないか」
「当然です。私の忠誠は全てティファ様のためにあるんです。貴方にあげる分なんてありません」
肌をぞわりと貫く感覚が一つまた一つと増えていく。それさえも

無視しているとダグラスが眉尻を下げて唇を尖らせた。……いい年した男がそんな顔をしても可愛くもなんともないが、顔が無駄とも言えるほど美麗なだけに複雑な気分になり心底嫌そうな顔をしてみせる。

魔法陣によって切り取られた空間が溶けるように消えて行く。それと同時にダグラスは獰猛な笑みを浮かべたのを見て、マイはモーニングスターの柄を握りしめた。

「まぁいい。それよりマイティーナ、そろそろ構えろ。――来るぞ」

刹那、周囲を取り巻く結界が弾け唸りを上げて風が吹き抜ける。しかしマイとダグラスは余裕さえ見せて風を避け、ふわりと己を刺し貫く殺気の包囲網から逃れた。とんと背中を合わせ、油断なく辺りを見回す。

二人の周囲を取り囲む神の姿は一人二人と指折り数えられる人数ではない。姿も人型から原型であるゼクスまで様々だが、ダグラスと同位の神はいない事は彼の様子を見ていれば分かる。とはいえ彼ならば同位の神がいようといまいと関わりなく嘲笑を撒き散らすのだろうが。昨日までの態度がいい例だ。

マイもダグラスに倣ってというわけではないが、平静を保ちつつモーニングスターを構える。

グランハート家を出て半日と少し。それだけの短時間で二人がこのような場所にいるのには勿論理由があった。襲撃はこれが初めてではないのだ。

（ティファ様の気配が消えたからか、それとも私とダグラスさんが契約したからか……。理由は分からないけれど、神々はすぐにダグラスさんがティファ様を逃がしたことを察知したんだわ）

一度目はグランハート家。そしてここプラクト上空での襲撃で二度目になる。ダグラスは己の心変わりを悟られないようにとグランハート家に留まる考えだったようだが、世界は敵対者に容赦する気はないらしい。しかしそれが幸いでもあったとマイは内心で安堵していた。もしあのままティファに付いて行ったら彼女達までもが危

険に晒されていたのだ。
　疑問なのは、レイニウム大聖堂を出てから襲撃されることなどなかったというのに何故プラクトに来てからこちら襲われてばかりなのかということだ。それに神々はビビッドではなくここプラクトにいる。
（ティファ様の気配を探っているわけじゃない……？　ということはやっぱり、ダグラスさんが原因かしら。でもそれにしては情報が伝わるのが早過ぎる。誰かが伝えたとしか思えないけれど、一体誰が。もしかして皆を捉えた魔力というのと同一人物？）
　ますます剣呑な話になってきたとマイは内心で頭を抱える。その間にも神々と言葉を交わすでもなく挑発的に笑っているだけのダグラスは余裕綽々だ。元とはいえ仲間に襲撃されているというのに呑気なものだ。
「随分人気があるんですね、ダグラスさんって」
　いくら寝返ったとはいえあっさりと刃を向けられる神に向けた揶揄とも嘲弄ともつかぬ言葉に、ダグラスは首だけを振り向けてにやりと笑った。
「殺したいぐらい愛されているということだろう。ん？　殺す？……はっ、まさかマイティーナ。お前がいつも俺を殺すと言っているのは――」
「私のはただの殺意です！　変な誤解しないでください！」
　いくらなんでもそれはプラス思考に過ぎる。
　ぴしゃりとダグラスを叱り飛ばす。するとそれを隙と見たのか幾人かの神々が炎の矢を放った。
　地上に比べれば大分薄い空気の中、ひゅっと細く長い軌道を描いて飛ぶそれはマイに向けられたもので、彼女はひらりと身を躱す。最初の襲撃の際、ダグラスからは「お前なら願えば相手の魔力ぐらい打ち砕けるだろう」と言われてはいるものの、思い一つという不確かなものに命は賭けられない。
　レースのエプロンの裾を僅かに焦がしつつすり抜ける炎の矢をち

らりと一瞥し、何とか打ち砕けるよう意志をぶつけていく。今はそうして危険性のない攻撃を練習台にするしかなかった。

消えてしまえと念じられ、炎の矢が一瞬ぶれる。だが結局炎は勢いを失わず遠くへと消え去った。今のところ成功率は四割。まだまだあてにはできない。

襲撃が落ち着いたらメイにかけられた秘術について教わると同時に、自らも魔術を教わろうかと密かに考える。しかし今はとにかく刺客を倒すことが先決だ。ここで一人でも逃そうものなら、その者が明日ティファを襲うかもしれないのだから。

（ティファ様のことは心配だけど、刺客がこれだけ放たれた以上ビビッドへは近付けない）

そんな愚策を冒そうものならますます主を危険に晒すだけだ。

空いた手で鎖部分を持ち、鈍く風を切る音を立てて鉄球を回す。いつでも懐に飛び込んで殴り倒せる態勢を取りつつ、マイはあえてビビッドとは反対方向を見据えた。視線一つ、態度一つでも敵に情報を与えたくはない。

包囲網は縮まるでもなく、等間隔をとりながらこちらに動きに合わせて殺気のみで威嚇する。初撃以外の攻撃がないのは、マイが攻撃を避けてしまうからだと認識された――からでは勿論ない。こちらに近づいてこないのも、接近戦に持ち込まれたくないと思ってのことではないだろう。

「俺のマイティーナに手を出すとはいい度胸だな」

低く唸るような、そのくせ甲高い声で歓喜を謳っているような声が耳朶を打つ。

背後から風が吹き付ける。マイにはあくまで優しく、二人を包囲する神々には白刃のような鋭さで乱される空気は次第に白のような銀のような色を帯びてくる。誰の仕業かなど確かめるまでもない。他の誰に分からなくともマイにはそれがダグラスの魔力だと分かっていた。シルバーのイヤリングが風に揺れるのが耳朶に伝わり小さく嘆息する。

（敵ながら同情を禁じ得ないわ）
焼け焦げたエプロンを見下ろす。肌には傷一つない。しかし神々はたったこれだけの事をしでかしたせいで、これから再起不能に陥ることが確定してしまった。それどころか、敵の半数以上は一刻とせず命を奪われてしまうだろう。
モーニングスターを一振りし、同時にきっぱりと言う。
「貴方のじゃありませんし。大体これ全部貴方のせいですから」
それだけははっきりさせておかないと気が済まない。じろりと睨めつけてみせるとダグラスは芝居掛かった様子で大仰に肩を竦めた。
「お前のために世界まで捨てたのに何を言う」
「貴方が勝手に私を気に入って勝手に世界と敵対しただけでしょう」
「……なぁマイティーナ。お前は一体何をしたら喜んでくれるんだ？」
「ティファ様や私達が心穏やかに生きられる世界をくださったら十分です」
「よし分かった。待っていろ、こんな奴等すぐ殲滅してやるから――」
「そして然るべき後に、その平和な世界で貴方を殺せれば更に満足なのですが」
付け足した言葉に情けない表情を浮かべるダグラスから目を逸らす。
「さて、そういうわけですので」
自分達の話に下手に水をさすことを恐れてか当惑している神々に向け、唇に弧を描き慇懃無礼な礼を一つ。だがその表情には崇拝の色など微塵もなく、心根は契約神同様どこまでも不遜であることを神々が知ったのはダグラスの放つ鎌鼬が周囲を圧倒し、あくまでにこやかなマイが顔を上げて放った言葉が聞こえてからだった。
「我が主に害なす者はたとえ神でも容赦しません。――皆様には不本意でしょうが、ここで御退場願います」
大地も水も炎も風自身でさえ容赦なく切り刻む鎌鼬の中心に立ち、

マイは懐に飛び込もうとする神の肩口に鉄球を食らわせる。ぐしゃりと潰れ飛び散る肉片を頬に浴びながらも笑顔を崩さない人間の姿に、神々は初めて恐怖した様子を見せた。波が引くように包囲網が広がっていく。

ダグラスはその様子を愉快そうに見ながら自らも血を求めて腕を振るった。その刹那、鎌鼬の音にかき消されるような呟きが漏れる。

「世界は手強いぞ、ティファニエンド。さぁ、お前はどうする？」

視線がビビッドへと向けられる。が、すぐに興味をなくしたのか血に飢えた神はすぐに一方的な暴力へとのめりこんでいった。

◇　◇　◇

幸いだったのは、アレイズがアズマの言葉を多少でも理解していたとことだった。

日が明け、一行は服を買うべく大通りに出た……のはいいものの、そもそも店の看板が読めないのだ。メイは必死に目を凝らして解読しようと試みたが五分とせずに諦めてしまった。何せ文字の形からして違いすぎるのだ。

（言葉も全然意味が分からない単語ばかりだし、アレイズさんがいなかったら宿屋に泊まるのも苦労したんだろうなぁ）

突然駆け出してしまわぬようティファと手を繋いで歩くメイはアレイズの知識に感謝しつつ、道行く人達の会話に耳を澄ませる。当然のように意味は分からないが、聴き続けていれば少しは分かるかもしれないと期待してのことだ。……成果は芳しくないが。

メイはせめて聖大陸の言葉を聞かれないように極力口を噤んで黙々と歩く。ティファも話し相手が兎しかいないのでつまらないのか黙ったままだ。そうして通りを歩き続け、一つ発見したことがあった。民家と違い、店には扉がないのだ。

民家は出入口を木の板で塞ぎ、心張り棒と呼ばれる木の棒で外からは開かないようにしているとアレイズから教わっていたが店はそ

うではないらしい。少なくとも昼間は違う。扉があることさえ悟らせないほど出入口は開放的に見えたし、何より人の出入りが激しいからか入り口の大きさが違う。

大きな出入口と店内を隔てるのはこれもまた大きな布だ。扉の左端から右端へと布をかけることによって外から店内が見えないようにしている。もしかするとそれだけではなく、砂埃を防ぐ役割もあるのかもしれないが。

布には各店違う文字が書かれている。これが扱っている品か、もしくは店名でも書いているのだろうとはメイにも分かるがいかんせん読めない。この辺りは先頭を歩くアレイズだけが頼りだった。

通行人がメイを見てぎょっと目を見張る。もう何度目か数えるのも馬鹿馬鹿しい反応にすっかり開き直って堂々と歩いていると、前を行くアレイズが立ち止まった。

「着いたぞ、ここだ」

アレイズが指さすのは紺の布に白い文字が書かれた店だった。しかし、ここだと言われても。

「……えーっと、これ何て書いてあるんですか？」

「呉服。アズマ達が着ている服があるだろう？　ああいうのを扱っている店だ」

「ゴフク」

紺の布の奥に色鮮やかな布が見える。通行人が着ているものに比べるとやや派手だが、模様は確かにアズマが着ているものと同じものだった。人目につく場所だからあえて目立つものを置いているのかもしれない。

聖大陸のものだろうと何だろうと、年頃の娘としては服を選ぶのは楽しい作業だ。レイニウム大聖堂に身を寄せてからは服を買うということがなかっただけに、余計興味が湧いた。メイは不謹慎だとは思いつつも心を浮き立たせつつ、しかし言語の壁という大きすぎる障壁に緊張感を漲らせる。

ティファはと言えば緊張感の欠片もないキラキラとした瞳で店を

覗いている。手を離せば今すぐにでも店に入りそうだ。
アレイズはそんな二人に苦笑を漏らしつつ、布を手で上げてティファを手招きした。
「問題は通貨が通じるかだが、こればかりは訊いてみるしかあるまい。……ほらティファ」
店の中に入ってもいいという合図にティファがぱぁっと顔を明るくする。それに合わせて手を離すと彼女は好奇心の赴くまま店内へと足を踏み入れた。
「店から出るなよ。あと店の物を壊すな」
「そんなことしないもん！」
今まで酒場を壊したり悪党を叩きのめしていた記憶は綺麗さっぱりないせいだろう。ティファは頬をむくれさせながらも嬉しそうにずらりと並ぶ布を食い入るように見つめている。
一方、一人残されたメイは親しげにティファに声を掛けたアレイズの真意を推し量るべくじっと彼を見つめていた。昨日まであれだけ打ちひしがれていた男が、一日で変わるなどあり得るのだろうかと不思議だった。
真っ直ぐ問いかけられる視線にアレイズがたじろいだが、咳払いを一つすると「見てみろ」と顎をしゃくった。そこには他の何も見えていない様子のティファが見える。
「何かに興味が向いているうちはあいつも大人しくしているだろう。店内にいる限り見失うこともない」
「それはそうですけど。……随分手馴れてますね」
「興味のあるものには何にでも飛びつく。人間の子どもがそういうものだと昨日一日で嫌というほど思い出させられたんでな」
足元に忍び寄る陽の光のみを頼りにしているせいか、薄暗い店内にティファの髪の色は一際目立って見えた。一寸黙りこんで彼女を見守っていたメイは、不意に聞こえたアレイズの声に顔を上げた。
「退行したからといって放置していては、元に戻った時あいつに何を言われるか分からん」

「アレイズさん……。そうですね」
おどけた声色だったが、メイにはそれが強い決意を宿したものに聞こえて大きく頷いた。
「ティファ様、怒って口利いてくれないかも」
「それでもって背を向けながら自己嫌悪するんだろうな、あいつは」
「そうそう、皆に心配掛けたのは自分なのに何で怒ってるんだろうって。……あぁ、よかった」
「何がよかったんだ」
「アレイズさんってば、何だかんだ言いながらやっぱりちゃんとティファ様のこと理解してるんだなって思って」
加えて言うなら大事に想っているんだなと微笑ましく思っているがそれは口に出さずにおく。
しかしメイの言葉にアレイズは口元を苦々しく引き歪めた。
「理解していれば今頃ティファはあんなことになっていない」
吐き捨てる声には自分への苛立ちが籠められており、メイは一瞬目を瞠るもののすぐに首を振った。
「理解してもどうにもならないことは起きるよ。私だって誰より大事な友達をあんな目に遭わせちゃったし」
「だがお前は――」
「だから」
なおも言い募ろうとするアレイズを制して潔いまでの笑顔を浮かべる。
「ちゃんと謝ろう、皆で」
その時傍にマイやダグラスがいるかは分からないが、今いる面子だけでもきちんとティファに謝ろう。あんな胸が悪くなるような光景を見させてしまったのだ。謝っても済まないかもしれないが、このまま何の目的もなしにいるよりはいいだろう。
（誰のためにいいかって言えば、私達のためになんだけど）
これは逃げだ。だけどいいじゃないかと思った。どの道こちらがずっと落ち込んでいようものならティファは申し訳なさに押しつぶ

されてしまうだろうから。
後ろめたさを隠すために背筋を伸ばす。その立ち姿にアレイズはふっと笑みを浮かべて頷き、店内を物色するティファを追うべく足を踏み出した。メイも後を追う。
店内には木材の濃密な匂いが漂っていた。少し黴の匂いが混ざっているのはそれだけの歴史が刻まれてきた証拠だろう。民家よりは高めに取られた天井を見上げると重厚な貫禄を見る者に感じさせる圧迫感を感じた。
「いらっしゃいませ！」
縦横に走る梁を見ていると、横手から声が掛けられた。若い女の快活な声に何の違和感もなく。
「あ、すいません服を見に来たんですけ」
ど、と言いかけ強烈な違和感に口を閉ざす。だが相手は気付かないらしく小走りにメイの前に立ち商売用とは思えぬような眩しい笑みを浮かべた。
「何をお探しでしょうか？　小袖、振袖、訪問着と何でも揃っておりますが」
「え？　あ、えぇと」
女の言う言葉の意味が分からず狼狽えつつ、メイはさっと彼女を上から下まで見た。
色鮮やかな布に囲まれて立つ女性はアレイズとさほど変わらぬ年に見えた。もっともアレイズは神なので半端じゃなく長生きしているはずだが、あくまでも見た目の話だ。少なくとも自分達よりは年上だろう。マイのような凛とした生真面目な態度とは違う、年相応の落ち着きが感じられた。
入り口に掛かっていた布と同じ紺の服を着て――アレイズが言うにはそれは“キモノ”というらしい――立つ彼女はメイの出で立ちを見て一瞬不思議そうな顔をしたが、すぐに笑みを浮かべていくつかの布を取り出した。説明されるまでもなく彼女は店員だろう。そう、このビビッド大陸に住むアズマの町で商売をしている――。

（そうだ、アズマだ！）

この大陸に住む民族アズマは聖大陸の人間とは使用する言語がまるで異なっている。なのに今自分はこの女性と会話が出来たではないか。心の中で手を打ち鳴らし、メイはおずおずと切り出した。

「あ、あの。……変な質問するようですけど、あなたアズマ？」

「？　そうですが、それが何か？」

それが何かと言われるとこちらも返答に困る。メイはちらりとアレイズに助けを求めるように視線を向け「えぇと」と言葉を詰まらせる。するとメイの質問に小首を傾げた女は質問の意図を吟味するように数秒黙った後で「あぁ、そっか」と呟いた。そのままくすくすと笑い出す。

「確かにアズマが聖大陸の言葉を話すのは不思議に思われるかもしれません。他大陸の語学なんて普通勉強しませんから」

「でもあなたは聖大陸の言葉を勉強したんだね」

「えぇ。遠く海で隔てられているとはいえ、まったく交流がないわけではありませんから。商売の役にも立ちますし」

成程、確かに現在進行形で役に立っているのだから彼女の選択は正しい。メイは納得し、ふとどうして彼女が第一声から聖大陸の言葉を使ったのかと考えてすぐに答えを見出した。店内にはティファがいたではないか。きっと彼女が連れの存在を話していたに違いない。

「成程な」

一人頷くメイの心中をなぞらえるようにアレイズが漏らす。「これなら俺が通訳する必要はないな」心なしか安堵した様子なのは、女達の買い物に巻き込まれるのが面倒だからか。

（まぁ、これはどうでしょうなんて勧められてるのまで全部通訳するのは面倒だよね）

そういう意味では店員と言葉が通じるというのは便利だと思った。ビビッド大陸に来たからこそ分かる有難味だ。

「綾」

その時、奥から恰幅の良い女性の声が響いた。年かさの女は他の店員と違い、仕立ての良い服を着ている。きっと店の女主人なのだろう。店員の女性が何やら返事をしている所を見るに、それが彼女の名前なのだろうと察しをつけたメイは口の中で「アヤ」という言葉を転がす。自分達のように愛称で呼ばれているのかどうかは判断できなかった。

女主人はアズマ語しか話せないらしく二人の会話の中身を知ることはできない。しかしさほど重要な話ではなかったらしく、二言三言話したアヤはメイとアレイズを見て「それで」と柔らかく笑んだ。

「今日は何をお探しでしょうか」

再度繰り返された問いにメイは「この大陸の服を探しているの」とだけ答えた。客に親しみを覚えさせるような笑顔に釣られ、その表情は明るい。

「かしこまりました。いくつか見繕いますので少々お待ちください」

色も形も指定しないメイの端的な言葉に、しかしアヤは怪訝な顔一つせず頭を下げた。ぼろ布のようなメイの姿を見かねたのか、さっと店内に視線を走らせる。その目に留まる布の鮮やかな色合いにメイは心を浮き立たせ、アレイズはもっと地味は色はないかと自分で服を探しだした。

第四十四話

そして一時間程経ち。

「ありがとうございました！」

いくつかの候補を試着し、ティファと騒ぎ合いながら吟味に吟味を重ねた結果、ようやく服を購入する段階に至った三人は早速着替えることにした。アレイズの顔がげんなりしているのは言うまでもない。

メイは薄桃色に白い縦縞の入ったキモノを物珍しげに眺め、ティファとアレイズをそれぞれ見やる。

髪の色に合わせてかティファは空色の、アレイズは黒のキモノを着ていた。二人共のキモノに柄がないのは好みだろうか。腹部を圧迫するように締め付ける帯を指でなぞり、メイはようやく服だけでも町に馴染めたと安堵の溜息を漏らした。さすがにボロボロのメイド服ではまずいだろうと思っていた所だ。イオは兎の姿だから全大陸でその姿が通用するだろうが、人間はそうはいかない。

心配していた支払いについてもアヤが取り計らってくれたらしく聖大陸の通貨を使用することができたのが幸いだ。

ティファに名を教えてほしいと言われ、予想通り「綾です」と文字を書きながら教えてくれた彼女に大きく手を振って別れを告げる。

「お姉ちゃんありがとう！」

「お世話になりましたー」

人の往来で砂埃が立ち、店内に立つ綾の姿があっという間に見えなくなる。メイは再度大きく手を振って次はどこへ向かおうか考え、身を翻し――。

「あ、ちょっとお待ちください！」

何を思い出したのか、慌てた様子の綾に呼び止められた。

「何だ？　メイ、お前まさか釣りを貰い忘れたんじゃないだろうな」

「それはないです。ちゃんとお釣りが出ないように渡したし」

じゃあ何だと言わんばかりのアレイズを無視して振り返ると、店から出てきた綾が話を続けるべきか逡巡した様子を見せた。憂いと不安を綯い交ぜにした表情からは、先程までの闊達さが失われていた。

「どうしたの？　もしかしてお金足りなかった？」

「いえ、そうではないんです。ただ……」

ティファの問いに言葉を濁らせて綾が口を閉ざす。しかし今度の沈黙は短く、彼女は意を決したように顔を上げると三人を見据えた。

「お気をつけください。何か、嫌な予感が漂ってます」

「漂う？　どういう意味だ」

不吉な言葉にアレイズが警戒心を滲ませる。

綾はますます困ったように視線をさ迷わせてから「こんな事を言っても信じてもらえないかもしれませんが」と前置きしてから言った。

「私には他人の未来が見えるんです。うっすらと、ですが」

秘め事を告白する後ろめたさと信じてもらえないかもしれないという不安を混ぜた言葉に、メイとアレイズはお互いの顔を見合わせた。綾の深刻さとは裏腹に、何がそんなに問題なのだろうかと考えたせいだ。しかしその考えもすぐに吹き飛ぶ。

（そういえば最近すっかり感覚が鈍っちゃったけど……）

ティファがアレイズから契約してからこちら、周りには変わった経歴の人間や神しかいなかったので不思議には思わないが、よくよく考えたらすごい話ではないか。

綾が言うのは恐らく予知の力だ。神でも魔力を持つ人間でもない一般人がそのような力を持っているというのは、確かに不思議だった。

綾の力が普通なのではない。自分達の周囲が異質すぎるのだと再認識させられた。

視線だけで互いの意見が一致したのを察し、二人して頷く。

「それは、ちょっとすごいね」

「変わっているな」
頷きまでの一拍を何ととったのか「確かにそうですね」と呟いた綾は苦笑していた。しかしその一瞬後、真面目な顔に戻り念押しする。
「ですから気をつけてください。何だか嫌な予感がするんです」
うっすらとした感覚でしか掴めないからだろう。綾は詳しく伝えられないもどかしさに歯噛みしながら言葉を探しているようだったが、結局言葉は続かなかった。
人の行き交う音、道を練り歩いて商売する者達の声に支配されていた大通りに轟音が鳴り響く。
「ふぇ？　な、何？」
リングリングへと手を伸ばし、音の発信源を探る。
メイ達の右手方向から聞こえてくる轟音は自然災害の類とは別のものに思われた。かといって魔術の類でもないのは、アレイズとイオが構えていないことから明らかだ。ならば一体何だ。
大通りが一斉に緊張する。鋭く尖った空気に圧倒された。もしやこの轟音の正体をアズマは知っているのだろうか。「ねぇ綾、これって――」そう思い声を掛けた所でメイはアレイズ共々視線を綾へと留める羽目になった。
綾はすでにメイ達の事など眼中にないようだった。
「またなの！？」
憤りをそのまま吐き出し、綾は脇目も振らず駈け出していった。
その姿に迷いはない。
「軍隊だわ」
怒鳴り声だけを置き土産に消えてしまった綾の姿をぽかんと目で追い、自分達はどうするべきか考えあぐねていると不意にティファの声が聞こえてきた。小さな呟きのはずのその声は妙に芯が通っており、この轟音の中でも存在感を保っていた。その声に誘われるように目を向けると、既にティファの姿はない。慌てて砂煙の中スカイブルーの髪を探すとティファは綾を追うように轟音に向かって駆

け出していた。兎の神も一緒に連れ去られていく。
「おい、どこへ行くんだ！　イオ、貴様少しは止めろ！」
「ティファ様！　勝手に飛び出して行かないで！　――あぁもう、あの役立たず！」
メイはアレイズと悪態をつきつつ人ごみをかき分けて走りながら、辟易とした思いを胸中に落とし込んだ。
（退行してもしなくても、結局トラブルに首突っ込むティファ様に振り回されるのは変わらないってわけね……）
幼くなったのだからせめて少しぐらい大人しくしていてもらいたいのだが、と思うのは我儘だろうか。
メイは半ば自棄になりつつ人ごみを勢いよく押しのけていく。しかし轟音はまだ鳴り止まず、それどころか遠くから運ばれる大量の土煙に道行くアズマ達が咳き込んで邪魔なことこの上ない。仕舞いにはメイも土煙に耐えられなくなり立ち止まった。喉に張り付くざらざらとした砂が気持ち悪い。誰だ、風上で動き回っているのは。
量を増す土煙に足が止まりそうになる。それを見かねてか、それとも自分もいい加減苦しくなったのか、アレイズが他の人間達に聞こえないようにスペルを唱えた。
「――風よ」
人々の咳き込む声に溶けいるようなスペルは絶大な効力を発揮した。
メイとアレイズの間からぽっかりと土煙が消えていく。それを幸いと一気に駆け出し、二人はようやく人ごみを抜けた。だが、そこで立ち止まることになった。
「何だあれは」
ぽかんと口を開けたアレイズの間が抜けた声が聞こえてくる。それに答えようとするものの、メイには何も言えなかった。
二人の正面おおよそ数キロ地点。そこから見えるのは聖大陸でも滅多にお目にかかれない光景だ。
槍を構えて整然と列をなす鎧姿の男達。

それは正しく軍隊と呼ばれる集団の、敵意と殺意を纏った行進だった。

◇　◇　◇

土煙舞うその先に見えた鎧姿の人間達に二人は寸の間目を奪われる。

「何故軍隊がここに」

砂を吸い込み過ぎたのだろう。アレイズがざらざらとした掠れた声で呟いた。メイはといえばまだ喉の不快感が拭えないらしく咳払いを返事に頷いていた。

既に自分の着物には白い砂塵がびっしりとついており、黒というよりも砂鉄色に変色しているように見える。しかし今は洗濯の心配などしている場合ではなかった。

軍隊。聖王国グラドやレイニウム大聖堂周辺ではとんと見かけることのなかった戦闘用の舞台が、何故ビビッドを闊歩しているのかアレイズには理解できない。仮にアズマ同士で諍いをしているにしても町は穏やかに過ぎた。これで軍隊が町を襲うようなことがあれば、それは一方的な暴力に他ならないのではないか。

（ただ、綾の話ではこれが最初ではないと見えた。にもかかわらず町の人間がやり返さないということは、これはただの脅しか？）

ならば町の住民に危害が加えられるわけではないのだろう。アレイズは僅かに安堵してから、すぐに顔を強ばらせた。

遠巻きに見ている民には手を出さない。

しかしそこに自ら飛び込む者があったなら、はたして彼等はそれを放任するだろうか。

「おい、メイ」

「コホッ……何ですか？」

「ティファは、あいつはどこに行った！」

着物から立ち上る埃に咳き込むメイを無視してティファの姿を探

す。するとメイも目尻に涙を浮かべて苦しげにしているものの、すぐに目を凝らして辺りを見渡した。具合が少々悪くても、メイにとって一番大切なのはティファなのだ。

砂嵐が通り抜けているかのような砂色の世界で、二人目を凝らしてティファのスカイブルーの髪を探す。いつもと服が違うせいで白のスカートやブラウスを探すことはできない。となればあの嫌でも目立つ髪を目印にするしかなかった。だが鎧と鎧の間にも槍の先にもその姿を見つけることはできない。

「あの馬鹿、一体どこに行った……！」

苛立ちと焦燥感がこみ上げる。

退行してからこちら、ティファはアレイズやメイの手を離れてひらひらと風にたゆたう紙切れのように何処かへと飛んでいってばかりだ。そのうち何か取り返しの付かないことになってしまうのではないかと心配にもなる。否、もう既に取り返しの付かない事態に陥っているのでは。

アレイズは舌打ちを漏らし、メイに八つ当たり気味に怒鳴る。

「メイ、お前はティファのあの放浪癖にも慣れているんじゃないのか！」

「慣れてるわけないじゃん！　ティファ様、小さい頃はあんなじゃなかったもん！　どこか行く時は絶対私か姉さんがいたし、勝手に単独行動なんてしなかった！」

すると目尻に涙を溜めたまま怒鳴り返されて閉口する。疑念が渦を巻き、心をそろりと掴み上げた。

「退行は精神が壊されてなるというが、性格まで変わるものなのか？」

記憶も言動も幼い頃に逆戻りしてしまうということは理解しているが、それはそもそもの性格を捩じ曲げるようなものだろうか。もっとも精神に傷を負ったのだから性格の一つや二つ変わってもおかしくはないだろうが、何となく腑に落ちない。

アレイズの問いにティファを探しつつメイは首を振る。

「分かりません……。私達が聞いた話には特にそういうことはなかったはずだけど」

着物と同じ薄桃色の飾り紐で結ばれたツインテールが揺れる。それを見て再び考え込んだアレイズの頭の中に溜息混じりの音が響いた。

“君達さ、今それ考えてる場合じゃないから”

「イオさん？　どこ？」

ティファに連れ去られる形で姿を消していた兎の声にメイがきょろきょろと視線をさ迷わせるが、目当ての姿は見当たらず辺りは砂塵に包まれたままだ。怪訝に思いアレイズも共にイオを探しながら足を踏み出そうとして、やけに弾力のあるものを踏みつけた。途端、豚のような鳴き声が甲高く響く。

“痛っ！　重っ！　ちょっとアレイズ神、早く足どけなよ！”

「あぁ、すまん。見えなかった」

キーキーと喚き立てる脳内の声に足を引っ込める。体重をかけてしまったら危うく潰してしまう所だったと靴裏の形に泥を付けた白兎を見てほっと安堵する。……積年の恨みを思うとそれでもいいかと思わないでもなかったが、それは口にも態度にも出さない。

純白の体躯をよりによって足型で汚されたイオは落ち着かなげに耳を撫でさすりながら、空よりも透明感のある碧眼でアレイズを睨めつける。その視線を無視して首根っこを掴み、メイが詰問口調でイオを揺らした。

「ティファ様は何処？」

首の皮が伸びる音でも聞こえてきそうなほどに体を長く垂らしたイオはその問いに器用に肩を竦めた。見てくれこそ兎だが、その仕草は人間そのものだ。それならば最初から人間の姿でいればいいものを。

“分からない。僕よりアレイズ神の方が詳しいんじゃないかい？指輪があるんだし”

「言われてみれば。アレイズさん、ティファ様の居場所分かります

か？」

飄々と言い切ったイオを抱き抱えたメイに問われ、アレイズは無言でぽんと手を打った。言われてみればその通りだ。退行を起こしたとはいえ、指輪まで外してしまったわけではない。尋ねもしなかったところを見ると恐らく気にも留めていないに違いないし、それを考えると胸が痛むが今は幸いだ。

契約は続行している、指輪も肌身離さず身につけている。地理的に魔力に揺らぎがあるとはいえ、契約者の居場所ぐらいならば探れるだろう。アレイズは目を閉じ、意識を頭の中心に集中させた。魔力の糸を手繰り寄せる。

（……あれは）

細くつたない糸を手繰り寄せていくと、次第に空色の髪の少女が見えてきた。瞼の裏に浮かぶ姿は着物を着ているせいかひどく歩きにくそうだ。

てくてくと、一歩一歩を踏みしめるように歩く姿は頼りない。だが何故だろうか、その歩みには迷いが微塵も感じられない。無謀にも飛び出して迷子になった風にはとても見えなかった。

（どこにいる。いや、どこに行くつもりだ？）

何の目的かは知らないが、ティファは何かを探しているように見える。眉を顰め、アレイズはもっと状況を確認しようと視野を広げた。

ティファの周囲に広がっているのは何の代わり映えもない草原だった。しんと静まり返った空間に春の柔らかな風が吹く。そしてその前方には――。

「あれは軍隊……！？」

知らず呻き声が漏れる。

ティファがゆっくりと歩んでいく先、静寂に支配された草原には遠目に見た軍隊の姿があった。哨戒はしていないのか誰もティファに気がついていないようだが、このまま鉢合わせしたのでは彼女の身が危うい。

「ど、どうしたの？　軍隊ってどういうこと？」
「何が見えたんだい？　まさかティファが――」
アレイズの声にメイとイオが不安を孕んだ声で問う。しかしアレイズは何も答えず、意識をさらに集中させた。軍隊がいる場所であればこちらからも目視することができる。問題は距離とティファのいる方角だ。あの軍隊の西側か東側か、それだけでも知っておきたい。
その時だった。
それまで前だけを見ていたティファが立ち止まり、空を見上げたのだ。――まるでアレイズを見るように。
ダークブルーの双眸が優しげに細められる。豊かな知性を湛えたその眼差しに息を呑んだ瞬間、今まで見えていた光景がぷつりと途絶えた。
「――っ！？」
魔力の糸が強制的に断ち切られた感触に荒い息を吐き出し、かっと目を見開いたアレイズの前にはメイとイオが心配げに立っていた。指輪に目を落とす。鈍い輝きを放つ翡翠の指輪は契約こそ続いているものの、魔力の供給を強制的に止められていた。神であるアレイズの意志に反して、だ。
（何が起きている。……あいつは一体、誰なんだ）
背中にも額にもびっしりと珠の汗を浮かんでいる。アレイズはそれを拭うのもそこそこに駈け出した。ティファの状態が気にかかるが、今はそれよりも彼女の安否を最優先しなければ。
「アレイズさん！？　ちょっと待って、ティファ様はどこなんですか！」
慣れない服装のせいで走りづらい。舌打ちした背中にぶつかった問いにアレイズは走りながらも顎をしゃくって見せた。
「あそこだ！　ティファは軍隊と接触しようとしている！」
「嘘ぉ！　どうしよう、もしかして軍隊のこと悪者だって思っちゃったのかな」

「知らん。だがさっさと止めんと、今のティファじゃ魔術が使えるかどうか怪しい所だからな……」

“手伝うよ”

着物の裾がはためくのを無視して全速力で駆け出す。しかしそれでも速度が出ず苛立ちを募らせていると、イオがメイの腕から飛び降り、首輪に刻まれた紋章をペチペチと叩いた。

“僕はちょっと行く所があるからここで一旦別れるけど、その前にこれを”

頭に声が響く。それと同時に光を放ち始めた紋章がアレイズとメイを包み、着物を先程まで着ていた黒尽くめの服と真紅のメイド服へと変えていく。おかげでぐんと速度が上がった。二人は更に大きく足を踏み出しながらティファの元へとひた走る。しかしメイだけは不満が隠しきれない様子で叫んだ。真新しいスカートが大きくなびく。

「この服直せるんなら最初からしてくださいよぉー！」

もっともだ。

着物は形状をイオが知らなかったと言えば済むが、メイド服なら直せただろうにと考えアレイズは口の端に苦笑を浮かべて前方を見据えた。

轟音はまだ鳴り止まず、武の力を町に知らしめるかのように槍が陽光に鋭い光を放っていた。

◇　◇　◇

アレイズからの魔力供給が止まったのを感じたティファは、一度目を閉じてから再び歩き始めた。轟音も槍を構えた軍隊の姿にも頓着せず、ただ前に足を進める人形のような横顔からは先程までの知的な光は失われ、茫洋としていた。闇に囚われたかのようなダークブルーの双眸が、深く暗く眼前の光景を映し出すのみだ。

もしこの場にアレイズかメイがいたなら、春にも昼にも相応しく

ない横顔に異常を感じ取っただろう。しかしティファは異常に思われることにさえ頓着しないことを思わせる無機質さで轟音の正面へと足を踏み込んだ。

町に向けて前進していた軍隊の足音が、その一歩でぴたりと止んだ。

「何だ？」

「あんな子供が何故こんな所に？」

「面妖な姿をしておるな、あの村の者にあんなのいたか？」

砂埃が晴れるのと同時に見えた少女の姿に、槍を構えた人間達がざわめき立つ。

ティファはそんな声をまるきり無視して歩き続け、先頭に立つ男の前に立った。

十歩ほどの距離を開けて足を止めると、男がぎょっと目を剥いた。鎧が豪奢に飾り立てられている所からして彼が指揮官であることは一目瞭然だったが、多量の軍人を従えている割に男はティファの眼差しに落ち着かなげに身動ぎした。光を宿し始めるダークブルーに怯えるように、男が放った声は無様にも震えていた。

「な、何用だ？」

虚勢と共に放たれた声と同時に、ざっと土が踏みしめられる音が四方から上がる。指揮官を守るべく動いた忠実な兵士達が向けた矛先がティファの細い首に影を落とす。が、その影もカタカタと震えていた。

本来ならばあり得ないことだ。武器を持った大の男達が丸腰の少女に恐怖したなどと聞けば、誰もが笑い転げるに違いない。だが今この場でそれを指摘する者は誰一人としていなかった。彼等は忽然と現れた少女の眼差しに圧倒され、恐怖していたのだから。

ティファは矛先が自分を捉えない事を確認し、つまらなさそうに前方に視線を戻した。そうして賢しげな声で問うた。

「目的はセラフィムなんでしょう？」

「な……どうしてそれを！？」

「まさか情報が町の外にまで漏れているのか！」

問いに男達がどよめく。それが肯定の証だとしてティファは目を伏せた。

男達が驚くのも無理はなかった。

セラフィム。その言葉はこれから襲う予定の町はおろか、軍本部ですら知らぬ言葉である。それを突如として現れたティファがさらりと言ってのけたのだから、動揺しない方がおかしかった。情報が漏れていることはすなわち、軍本部に伝わっている恐れがあることに繋がる。

狼狽を顕にしたどよめきが兵士達から戦意を奪っていく。情報が漏れたとしたらどこからか、まさか隣に立つ男が――疑念が膨らんできたせいだ。

その疑念と動揺が静まったのはティファが口を開いてからだった。

もはや土煙も立たなくなった草原に心もとなげに立つティファはぼんやりと空を見上げた。先程までの快晴とは一転し、黒雲が西方の空に浮かんでいる。このままだと夜半には嵐が来るだろうことは誰の目にも明らかだった。

「私が知らないことなんてない。……望む望まぬとに関わらず、私は全てを手にしてしまうのだから」

空を見つめたまま、誰に聞かせるでもない歌うような声で漏らした声を、男達は固唾を飲んで聞いていた。槍を持たず、この場に誰もいなければ彼等は自尊心も誇りもかなぐり捨てて膝を屈したに違いない。

着物を身に纏いアズマの平民と同じ形をしてはいるが、ティファは今やこの場を支配する女帝だった。誰もティファに逆らわず、怯え、畏怖を顕に口を閉ざしている。放たれる言葉を一言でも聞き漏らそうものなら首が飛ぶと本気で信じているのではと感じさせるような必死の形相で、全ての兵士が背筋を伸ばしてティファを見ている。

突き刺さる視線を受け、ティファはすぐに空から視線を外して男

達を睥睨した。宣託か命令か、何らかの言葉を待っているであろう彼等に薄く笑いかける。そうしてたっぷりの間を空け「無駄よ」一言返した。

男達が肩を震わせるが何も言わない。しばしの沈黙が落ちる。

春風が吹き抜け、ティファの空色の髪をなびかせる。草原にも大地にも空にも全てに溶け込むように淡い輪郭を男達は目で追った。何とも争わず融合している様は文句の付け所がなく美しかった。だが一つだけ、ティファが左手薬指に嵌めている指輪の翡翠だけが何かを拒絶するように輝き調和を乱しているのが男達の目に印象的に映った。

ティファも気付いたのだろう。指輪に目を落とし悲しげに目を細める。同時に後方を振り向いた。扇状に豊かな髪が広がる。

「ここまで、ね。とにかく貴方達はセラフィムを手にすることなんて出来ないわ。潔く諦めなさい」

「――ふざけるな！」

背を向けたことが男にとっては幸いだったのか、指揮官がティファの言葉に思考を取り戻し槍先を前に突き出す。少し前に突き出すだけで楽々とティファの頸動脈をかききるはずだったそれは、しかし届くことはなかった。

「無駄なことだわ」

ティファが横顔でちらりと笑ってみせる。憐憫とも嘲弄とも取れる笑みに兵士達が殺気立つが、誰も手を出すことはできない。指揮官は呆気に取られて自身の手元を見ているのみだ。

魔術を駆使して結界を張ったのではない。壁に突き当たった感触も指揮官は感じなかっただろう。だが彼の手の内に槍は存在しなかった。まるで初めからそこには存在していなかったと言わんばかりに、手の平は空を掴むばかりだ。

「槍が……消えた」

そう、消えたのだ。壁で守るのではなく、存在を消し去ることでティファは自分の身を守ったに過ぎない。だが魔術を直に目にした

ことがない兵士達は殺気を恐怖に変え、青ざめた顔で一歩足を引いた。

殺される。誰もがそう思ったはずだ。槍のように、自分達も存在ごと消されてしまうと。

ティファが一歩踏み出す。その度に轟音を立てて男達が引いていく。彼女はそれを無感情に見送り、ふと視線を落とした。男達の視線を無視してしゃがみ込む。そこにはこの荒々しく踏みしめられた大地に何故か咲いてしまったという申し訳なさからか、しおらしく頭を垂れた花が一輪あった。

これだけの人数が行進したにも関わらず踏まれることなく咲いている花にティファはそっと微笑み、すぐに立ち上がった。男達はそんなティファの不可思議さに首を傾げながらも、一挙手一投足に注意を払い続ける。

ティファの微笑が消える。恐怖に引き攣る男達が更に足を引くのを無視し、後方彼方を見やる横顔が溜息を漏らした。

「そろそろね」

「そろそろ？」

兵士達全員の命を握る女帝の言葉にオウム返しで答え、指揮官が同じく後方を見やり――目を見開いた。

いつの間に現れたのか、砂埃を引き連れて二人の男女がティファから随分と離れた場所を駆けていた。ビビッド大陸ではお目にかかることのない聖大陸の服を着込んだ彼等はこちらに向けて全速力で走っていた。真紅と漆黒が猛烈な勢いで砂を撒き散らす。

第三者の介入に指揮官は困惑を隠せずティファを見る。彼女は相変わらず冷静なまま、男達から離れるように歩き出した。

「私は帰ります。先程の言葉、胸に留めておきなさい」

淡い輪郭がはっきりとした形を取っていく。幻でも見ているのかと目を擦り、指揮官が離れていく姿に声を掛けた。

「待て！　お前は一体誰なんだ！」

颯爽と歩くティファに掛けられた言葉はあまりに陳腐でありきた

りなものだったが、彼女は律儀に振り返り口の端を吊り上げた。あざ笑うような悲しむような諦めているような、実に曖昧な顔で答える。

「私の名は誰もが知っているのでしょう？」

一瞬虚ろに揺らいだ瞳に指揮官が頭に疑問符を浮かべながらも口を閉ざす。それを見届け、ティファは今度こそ駆ける二つの影と合流すべく歩き出した。

◇　◇　◇

町と草原の境目に立ち、イオは前方彼方に見える軍隊とティファの姿を見ていた。その立ち姿は人のそれで、彼は金髪が砂に汚れることを厭わずただ愛しい少女の動向を注意深く追っている。その口が不意に開かれた。

「ねぇ」

甘やかなボーイソプラノが何の敵意も見せぬような軽やかさで隣に立つ女へと放たれる。ぴんと背筋を伸ばし厳しい視線を軍隊に送っていた女はその言葉に大きく肩を震わせ、それからぎょっと目を剥いた。

「え？　な、何ですか」

「あんなに沢山物騒な人達がいるけどさ、一体何しに来たんだろうね」

愛想笑いを浮かべながらも、まるで幽霊でも見ているかのような驚愕を顔に貼りつけている女にイオは内心で笑みを漏らした。声を掛けるまで、彼女は自分一人しか立っていないと本気で思っていたのだろう。転移の魔術を使わず徒歩で隣に並んだというのに。

「……分かりません。でも、前から何度もこの町を襲撃しているのは確かです。いつもは少人数だったし、小競り合いで済んでたのに」

緊張と警戒心を商売用の笑顔でさっと素早くかき消した女は、先程ティファ達に着物を売った呉服屋の綾だった。店ではあれほど闊

達だったというのに、今は濃い影が魂を覆っているようにどこか頑な横顔がもう一度軍隊へと向けられる。

イオも綾の視線を追って前方へ視線を戻した。

ティファが現れたことで歩みを止めた男達は最初こそ彼女に槍を向けたものの、そこから先は凍りついたように動かない。何を話しているのか大いに気になる所だったが、探ろうにも魔力の乱れが邪魔をして声を聞くことさえできなかった。アレイズが慌てて駈け出したのも状況が読めなくなったからに違いない。それに、彼等を繋ぐ魔力の糸が断ち切られていたことも気にかかる。

（でも魔力の乱れだけでそんなことが起こせるとも思えない。ということは、ティファが？）

退行を起こし、神の花嫁――イオとしてはこの表現を使うのは心底腹立たしいが――となったことさえ忘れてしまっている状態だというのに、一体どうやって。

契約を強制的に断ち切れば可能ではある。しかしそれは契約者に相当の負担を強いることになるのだ。グラドの時然り。

（なのに今回ティファは普通に歩いてる。きっと契約自体はまだ続いてるんだ）

それならば契約のし直しをしなくて済むだけ気が楽だが、契約を続けたまま魔力供給だけを断ち切る理由が分からない。いや、一つだけ理由に心当たりがあるからこそ自分はここでティファを見守っているのか。

ティファはあの男達と、自分やアレイズ達には聞かれたくない話をしている。

思い当たる唯一の理由に好奇心がうずく。そうまでして彼女が隠したい何があるのか、何故隠すのか、そして――。

（彼女は一体誰なのか）

イオは今軍隊と相対する少女のスカイブルーの髪を見ても見慣れた立ち姿を見ても彼女をティファだとは認識できずにいた。

魔力はティファの物だ、魂も器に収まっているのだろう。だが最

後の審判としての勘が訴える違和感が拭えない。そもティファにはわざわざイオやアレイズからの探査を逃れてまで隠し事をする理由がないのだ。少なくともここビビッド大陸では。

彼女は一体誰なのか。もう一度胸中で呟き、イオはそっと嘆息した。

仮に彼女が他の誰でもなくティファニエンド・グランハートであったとしても、その在り方が大きく変わってしまっている。イオにはそれが不吉の象徴に思えてならなかった。もしや彼女は、今のティファこそが世界を殺す存在なのかもしれないと疑念が止まらない。

静寂に一滴の水滴を落としたような短い轟音が響く。見れば男達はティファから身を引くように僅かに後退していた。

一体何を話しているのか。彼等は“何”と相対しているのか。

遠目にアレイズとメイが駆け寄っていくのが見える。それを潮にくるりとこちらを振り向いたティファと一瞬目が合った。無邪気で、それでいて老獪な眼差しが距離を隔てた先でもよく見え、イオは戦慄に背筋が凍りつくのを感じた。何故か、とても懐かしく感じる視線が怖かった。

女帝のごとく君臨するティファの背を微動だにせず眺める男達が生み出す静寂に、ぽつりと町人の声が染み渡った。見れば綾の他にも様子を伺いに来ていた者達がいたようで、彼等は軍隊の規模を確かめて顔を蒼褪めた。

「またあいつらだ……。それも、今度はあんなに」

木霊のごとき連鎖は即座に返ってきた。

「今度こそ町が」

「自警団であんなのを防げってのか？」

「そんなの無理だ！　あの数だぞ！」

「次こそ町を壊滅させるって脅しは本気だったのか」

「お、俺達が何したってんだ！」

「知らねぇよ！　それでも来ちまったんだ！」

「このままじゃ、このままじゃ殺される……」

気配を探るまでもなく喧騒が恐怖と混乱を孕んでいく。圧倒的な武力の前に民衆は今や爆発寸前だった。

（このままじゃまずい）

彼等には軍隊がティファ一人に怯えていたことなど知る由もない。否、仮に知っていたとしてもそれが何になるというのか。軍隊はティファにこそ怯えていたが、丸腰の民衆に対しては変わらず死と滅びの象徴だ。

綾は今までは小競り合いで済んでいたと話していた。それだけで民衆の緊張感を否応なしに高め、ピリピリさせていたはずだ。それがまさかこれだけの人数で攻めて来られてしまった。恐怖と混乱が倍化するのも当然のことと言えた。

空気の剣呑さに綾が弾かれたように民衆を振り返り、落ち着かせようと口を開く。だがそれよりも早く緊張感が破裂した。

「きゃぁぁぁぁっ！！」

誰が放った悲鳴か。女のものと思われる甲高い声が辺りをビリビリと震わせる。続いて逃避の足音が聞こえたかと思えば、後は止める間もなく事が動いた。

次々と踵を返す人が生み出す土煙と足音に場が騒然となる。

イオは薄い結界を張って難を逃れたが綾にそんな芸当ができるわけがない。彼女は器官に入り込んだ砂に激しく咳き込みながら、それでも他の民衆に混じって逃げ出しはしなかった。涙を浮かべた目で軍隊にぴたりと視線を合わせたままだ。

「逃げないのかい？　もうすぐここは戦場になるんだろう？」

正しくは略奪の場か。内心で訂正し、イオは綾の答えを待った。

神に比べれば僅かとはいえ人外の力を持つ綾はこの状況を予知していたのだろうか。ふとそんな事を考え、ではこの先どうなるのだろうと興味をそそられた。この町は略奪されるのか、それとも戦場となり民衆が勝つのか。どちらにせよ戦いが避けられないとは思うのだが。

イオの問いに、綾は同じく身動き一つ取らないイオを見上げた。

逃げないのはこちらも同じで、アレイズ達がティファと合流して町に戻るまでここで待つつもりだった。自分ではなくアレイズが迎えに行くのは癪だが、今の自分ではティファの傍にいて何も訊かずにいられる自信がない。

「貴方は誰なんですか？　さっきまではいなかったはずなのに」

綾は問いに答えず、逆に訊き返した。悲鳴と怒号が飛び交う中で放たれた囁かな声が耳朶を打つ。

「僕？」

イオはそれに答えるように甘い笑みを浮かべた。女ならば誰もがとろけるであろう笑みを逆光で隠し、ボーイソプラノを軽い口調で彩り答える。

「僕はイオ。あそこにいるティファ達の仲間だよ」

役立たずだの何だのと言われるが、まぁ概ね仲間だと口にしても怒られないだけの関係ではあるだろう、きっと、多分。少なくとも敵ではない。

「ティファ、達……？」

何の気負いもなく返ってきた言葉に綾が軍隊から視線を逸らし、不思議そうに辺りを見渡す。そして「あ」と声を上げた。

軍隊から遠ざかるティファの横、そこから先程出会ったばかりの二人組が猛スピードで駆けているのが見えた。あの様子だとすぐにでもティファに合流できるだろう。「さて」うんっと伸びをして首を鳴らす。人の姿は肩が凝りやすくて困る。

「僕も戻ろうかな」

綾の問いかけるような眼差しをさらりと避けて足を踏み出し、軽やかに駆ける。急がなくてはと少しだけ焦った。

今ならば、いないのを幸いと仲間外れにされてしまいそうだ。

第四十五話

「ティファ！」
「ティファ様大丈夫？　怪我ない？　何もされてない？」
大きくぶんと振られる細い腕に向けてメイと二人全速力で駆けたアレイズは、ティファのあまりに呑気な態度にがっくりと肩を落としそうになった。着物にも慣れたのか大分楽そうに歩くティファは、背後に大勢の男達を従えている事などまるで意に介さず小首を傾げたのだ。
「？　大丈夫だよ、あのおじちゃん達悪い人じゃないもん」
前方に警戒しつつティファの肩に手を置く。すると彼女は不思議そうに目を丸くした後でコロコロと笑って後ろを指差した。そこに何も危険なものはないと示す無邪気な顔にメイが眉根を寄せた。
「悪い人じゃないって、じゃあ何でティファ様あの人達の所に行っちゃったの？」
ティファの肌に傷がついていないか念入りに確認していたメイは早くこの場から去ろうとティファを促す。それについて歩きながら答えるティファはメイの質問の意味を吟味するように口の中で転がしてから「むー」と唇を尖らせた。難しげな顔で首を捻る。
「あれ？　何でだったっけ」
「考えなしか……」
今度こそ本当に肩を落とす。突発的な行動はティファの十八番だが、今や十歳の思考しか持っていない彼女がやると心配なことこの上ない。今までならば倒せていた敵が、今は倒せない可能性が高いのだから。そもそも魔術が使えないだろう。
（魔術といえば、指輪はどうなっている？）
慌ててティファの左手を取り指輪を確認する。
契約神が触れたからか歓喜の光を放つ翡翠は徐々に温かな力を帯び、アレイズが呪文を詠唱するまでもなく魔力供給を開始した。…

…これも、異常といえば異常なのだが。　魔力を辿り、行き着く先にある存在がティファなのかどうかアレイズは何度も何度も走査し、五度目の走査を終えてやっと息をついた。先程こちらを見据えた眼差しの異質さがもたらす違和感がひとまず消えたことに緊張感が解け、どっと汗が出る。思えば体力を無視して疾走していたのだ。疲れて当然だった。

「ティファ様、お願いだから勝手にどこかに行かないで。これもう何度も話してるでしょう？　人の話を無視するなんて、旦那様や奥様が聞いたら怒るよ」

　疲労はメイとて同様だろうが、こちらは普段から転移の魔術を使わずに体力勝負をしているだけに余裕がある様子だった。ティファの両肩を掴み、顔を覗き込むようにして声を低める。どうやら脅しのようだが、そんなものがティファに通用するとも思えない。元々人の話を聞かない人間に今更何を。

　と思っていたが、効果は抜群だったようだ。

　ふぇ、と間抜けな声が微かに開いた唇から漏れる。同時に左右に激しく首を振ったティファはメイに掴みかからんばかりに「駄目駄目駄目！」と叫んだ。

「パパとママに言っちゃ駄目ー！」

「じゃあちゃんと私と一緒にいようねー。次どこか行ったらしっかり旦那様と奥様に報告するから覚悟してね」

「メイちゃんひどい！」

「ひどくない！　ティファ様がメイティーナを置いて遠くに行っちゃうのがいけないの！」

　放っておけば泣いてしまいそうな顔にアレイズはちらりとメイを見る。だがメイは腰に手を当てて毅然とした態度を崩さない。どうやら泣いたぐらいでは許す気はないようだ。当然といえば当然だが。

（もしティファに何かあったら、俺達だけの責任問題では済まないからな）

　無論メイもアレイズも、そしてイオも自分を責めるだろう。ティ

ファが退行を起こしてしまった時とてそうだった。しかし自己嫌悪に陥り未来への解決策を練るだけでは済まない問題が、この世界にはある。……否、世界というよりもティファの周囲にはと言うべきか。

最強は世界を守護する神でも自分達でもなく、今この場にいないメイドの片割れだ。もし彼女の耳にティファが害されたなどと聞かれたら、まず自分達の命はない。

メイもそれを知っているからか、いや自分よりも遥かに理解しているからか念入りにティファを攻め立てた。それも、最強のカードを切って。

「そうそう、勿論その時は姉さんにも報告するから」

「マイちゃんに!?」

これも効果は抜群だった。ティファは見る見る顔を蒼褪めさせてメイに取りすがった。それを満足気に見てメイは焦らすように遠くを見てあからさまな呟きを放った。

「姉さん怒るだろうなー。きっと心配口調でじわじわ責めるんだろうなー。それか激怒してモーニングスター振り回すかも」

「さすがにモーニングスターは振るわないだろう……」

そもそも十二歳のマイはモーニングスターの存在も知らなかったのではないか。仮にも使用人の娘だというなら。思わず突っ込むとメイに鋭く睨めつけられた。

「アレイズさんは黙っててください。さ、ティファ様。今度こそ約束守れるよね？」

「……あのおじちゃん達とお話しただけなのに」

「それでも駄目」

「……大丈夫だったのに」

「毎回大丈夫な保証なんてないんだよ。怖いことされちゃうかもしれないんだよ」

「……メイちゃん、知らないうちに心配性になったね」

「ティファ様が心配させるからこうなっちゃった」

「……マイちゃんに似てる」
「やめて」
あの姉にしてこの妹あり、か。
歯切れの悪いティファの反論を即答で切り捨てるメイに舌を巻いていると、観念したのかティファはやがてこっくりと頷いた。
「約束、する」
「よし」
不服そうではあるが確かな脅しを突きつけた上での言質を取ったメイは大きく一つ頷いて、それからはたと我に返った。その様子にアレイズも忘れ去っていたことを一つ思い出してしまった。
亜麻色の瞳と目配せをしあい、気まずい思いを抱えたまま前を見る。
軍隊はまだいた。
彼等は各々ぽかんと口を開けてティファを見、それから何度も目を擦っている。まるで今見たものが信じられないとでも言いたげな様子が気になったが、いつまでもこちらを見ているのは好都合だ。
メイは早々にこの場を去りたい様子だったが、ただ町に戻るだけでは状況は変わらない。ならばここで話を引き出しておきたかった。空間転移は無理そうだが、攻撃魔術のスペルぐらいは唱えられるだろう。
素早く視線を巡らせ、豪奢な鎧を纏った男に照準を合わせる。次いで流れるような足さばきで近づいたアレイズは腕の一振りで剣を生み出し、ぴたりと切っ先を男の頸動脈に突きつけた。
「貴様等、あいつと何を話していた」
沈黙を許さぬ声色に恐らくこの中で最高位にいるであろう男が頬を紅潮させる。それでも武器がこちらに向けられないのは不可解にも見える驚愕から立ち直れないせいか、それともメイが今にも投擲せんと構えているリングリングの銀光のせいか。
（いや、そうじゃないな。何だあれは）
他の兵士達が槍を構えているにも関わらず、男は丸腰だった。最

高位といえども前線に立つ以上何かしらの武器を持っているはずだが、一体どういうことか。男が見えない槍を構えるように手の平を握り締める所作も気にかかった。しかしそれは後だ。

アレイズはティファの「大丈夫」という言葉を一欠片も信用していなかった。メイとてそうだろう。ただそれを本人に言うと癇癪を起こされそうだから言わないだけで、この尋常でない状況でただの世間話をしていたとは思っていない。

幼子とて軍人であれば容赦なく殺すだろう。ましてやティファは本人に自覚はないだろうが成人した女性だ。これだけの男に囲まれ、死よりも屈辱的な目に遭わされたとしても何ら不思議な事ではない。

（最後に見たティファの様子だとあり得ない話かもしれんが、絶対という言葉はない）

つまりは自分達が来なければティファの身が危うかったと、メイもアレイズも信じて疑わなかったのだ。もっとも、本当に危険な目に遭わされていようものならイオも交えて殺すだけでは足らないだけの報復をするつもりではあるが。

そこまで考え、アレイズは自分がいかに剣呑なことを考えているかを知って驚いた。グラドの時といいプラクトの時といい、自分がここまでどす黒い感情を持っているとは思ってもいなかった。仮にも神だというのに。

だがアレイズは驚きに反して切っ先を前に突き出していく。いつまでも答えない男に業を煮やした切っ先はとうとう厚い首の皮をぷちりと切り裂いた。血が珠となり滑り落ちていく。

「た、隊長……」

後方に控える兵士が怯えを孕んだ声で男――部隊長を呼ぶ。その目はティファに釘付けで、驚愕と恐怖を顔に貼りつけた彼等が真に恐れているのが自分が突きつけた剣ではなくティファであることを悟った。「うむ」その証拠に頷く部隊長はアレイズやメイなど見てもいなかった。兵士の言葉に頷き――隣を歩く馬にひらりと飛び乗り一目散に逃げ出した。

「あ、逃げた！」
「待て！　まだ話が終わっていないぞ！」
部隊長の逃亡を皮切りに歩兵も騎兵も逃げ出していく。示し合わせたかのようなタイミングで踵を返す姿はいっそ清々しいが、こちらはまだ何の話も聞けていない。アレイズとメイはティファに離れずついてくるように指示して男達の後ろ姿に攻撃を仕掛けながら疾駆する。
メイがリングリングを放ち、アレイズが石礫を勢いよく投げつける。
その時だった。部隊長が不意に背後を振り向き、ティファを睨み怒号を上げた。
「セラフィムは我らのものだ！　誰にも渡さん！」
「セラフィム？」
「何それ？　おじちゃん、セラフィムって何――」
聞き慣れぬ言葉を反芻しティファに問いかける。だが言われた当人は訳が分からないらしく、目をぱちくりさせている。困ったように訊ねる姿は真実何も知らないように見えた。
無論、答えは返ってこなかった。
ティファの問いを無視したのか聞こえず聞き流した部隊長は「次があると思うな！」と、元のティファが聞こうものなら雑魚の台詞だと嘲笑いそうな捨て台詞を吐いて今度こそ全力で逃走を開始した。
部隊長の姿に続く兵士達も颯爽と去っていく。
メイとアレイズも一人ぐらいは捉えようと必死になって追跡したが、逃走に関してはプロだと言うべきか、鮮やかなまでの素早さで背中が遠ざかっていく。ついに砂塵に姿がかき消され、二人はそこで追跡を断念してその場にへたり混んだ。
「はぁ……はぁっ……。に、逃げ足早過ぎるよあいつら……っ。こっちは三人しかいないのに」
「そ、うとう動揺……してるみたい、だったな」
無言で荒い息をつくティファと三人、汗だくになって疲労を吐き

出していく。髪を束ねていた紐を解くと闇色の髪が広がり、頭皮に触れる風が心地良かった。思えばこんな風にへたり込むほど体を動かすのは久しぶりだ。普段いかに魔術に頼っているかが分かる。明日からは真面目に体を動かした方がいいかもしれない。

それにしても――。

「セラフィムとか言っていたな」

我らのものだということは、それを狙ってわざわざここまで来たということになるが、セラフィムとは一体何だろうか。呟きにメイがぱたぱたと手で顔を仰ぎながら答える。「よほど大事なものなのかも。それかとっても高価な物とか」

「宝か。それにしては妙だな」

「何がですか？」

「名前だ。アズマの物にしては響きが聖大陸に近い。アズマの文字で書けるような言葉じゃない」

簡単な文字なら教わっているが、よほど無理をして文字を当てはめなければならないのではないだろうか。

「じゃあ聖大陸から伝わったものなのかな」

「さぁな。その辺りをあいつらに訊きたかったが……まぁ町にいればそのうち向こうから来るだろう」

「町の人に訊いてみてもいいんじゃないですか？　もしかしたら誰でも知ってるものかもしれませんし」

「そうだな……」

落ち着きを取り戻しつつある鼓動に手を当てぼんやり考える。ティファの退行だけでも一大事だというのに、変なことに巻き込まれそうになっている事実に頭が痛くなってきた。かといって放っておくこともできないのはティファの性格が移ってしまったか。

「そういえばティファ、お前大丈夫か？　かなり走らせたが」

頬を流れる汗を拭って尋ねる。「うん」ティファは立ち上がり、アレイズの隣に座った。

「一杯走ったからちょっと疲れたよ」

「そうだろうな。いきなり走って悪かった――お、おいティファ？」
「んー？」
にこにこと笑いながら答えるティファは確かに疲労こそ滲ませているものの、普段から鍛錬しているだけに回復は早いように見えた。だからそれは安心したのだが。
上機嫌に笑うティファがアレイズの胸に体を預ける。人ならざる青い髪が流れてアレイズの黒尽くめの服を彩った。頬をすり寄せ甘える態度にアレイズが声を上擦らせるもティファは気にした風もなく、日溜まりで微睡む猫のように心地良さげに目を細めるのみだ。
いつもなら到底あり得ないことだった。
（何だ、何なんだこの状況は。というか体勢は！　……これがあのティファか？　本当に？）
甘えるという行為に関してとことん素直じゃないティファがこうしてアレイズに寄りかかるなど、普段では考えられない。もしや相当弱っているのかと案じもしたが、表情は穏やかで追い詰められている様子は微塵も見えない。
メイが見ていることもあり羞恥心が増す。しかし顔に血が昇っているのを自覚していても今この体を離すのは惜しい。そう真剣に考える自分に笑いそうになった。
試しにティファの髪を撫でてみる。柔らかな髪を指先で梳くと彼女が身動ぎしたが、それが拒絶ではないと分かり今度は手の平全体で頭を撫でてみた。まるで気を抜けばすぐに逃げてしまう動物にでも触れているような慎重さだが、普段のティファを思うと当然のことと言える。
素直に撫でられているティファは嬉しそうに口元を緩めている。その横顔を見て可愛いなと思った。これで普段からこうだともっといいんだが。
そこまで考え、アレイズははっと息を呑んで口を押さえた。
（いや、普段からこんな風に触れるわけがないだろうが。どうしたんだ俺は）

かぁっと頬が熱くなる。自分が一体何を考えていたのか、突き詰めようとすればするほど混乱する頭を振った。そこで首筋にひやりと冷たいものを感じて動きを止める。

「何してるのかな？」

硬質な、絶望的なまでの切れ味と冷気が触れ、たちまち顔から血の気が引いていく。恐る恐る見れば、先程まではいなかった少年がにこりと笑った。

「……貴様、いつから人間に戻った？」

「ついさっき」

アレイズの首筋に氷の刃を当てながら、イオがにこにこと笑みを深める。それはもう、殺意なんていう言葉では片付けられないほどの憎悪を露にして。その証拠に目が笑っていない。

アレイズは背中を伝う冷や汗を不快に感じながらそれでもティファの背に腕を回し、にやりと笑ってみせる。その行動が自分の首を絞めると知っていても、イオを恐れてティファから離れるなど愚の骨頂だ。そんなことをすればますます図に乗る。

つ、と鮮血が首から流れ落ちる。傷口に触れた氷が染みるように痛い。

「そ、の、手、を、は、な、せ」

「貴様の意見など聞かん」

ぎゅっと腕に力を籠めてせせら笑うと、イオの怒気を感じ取ったメイが溜息をつきつつアレイズを諭した。

「もう……アレイズさん。イオさんを怒らせちゃ駄目ですよ」

諭した相手がアレイズなのは、こちらの方が話を聞いてくれると踏んでのことか。それともイオに一分の期待もかけていないからか。ティファから手を離しつつ思案するアレイズの微妙そうな顔にイオが拗ねたようにふいと顔を逸らした。それ以上文句を言わないのはティファを休ませるのが先決だからだ。

ただ、アレイズも単にティファから離れるために手を離したわけではない。

休ませたいのなら、こうすればいい。
「――あっ！」
イオの咎めるような声が耳朶を打つ。驚愕を孕むその声に溜飲が下がる思いだ。
ティファを横抱きにしたアレイズは口の端を吊り上げ、鮮やかに笑った。
「こうしなければ運べんだろう」
にやにやと笑うアレイズはいつになく意地悪げな瞳でイオを見据え、きょとんとするティファをそのまま運んでいこうとする。彼女が怒って暴れないことも、アレイズをより大胆にさせた。本当に、いつもこうだと可愛いのだが。
しかし、これはやりすぎだったのか。
「アレイズさん……」
メイが額に手を置いて首を振る。吐き出されるのは呆れたような溜息だ。
そしてイオは――。
「氷結の精霊よ」
ぽつりと零す。その冷え切った静かな声に、しかしアレイズは大きく肩を震わせた。
真っ直ぐ空を見上げるイオからは殺気はとうに消えていた。そよと金髪を揺らし、静かに立つ姿は絵になるほどだ――ぶつぶつと聞こえる声さえなければ。更に言えば、それがとてつもなくよろしくないスペルでなければ。
「仕えよ、讃えよ。今こそ我に服従し――世界を、清らかなる静寂へ」
「ちょっ、ちょっとまて！　それはまず――！」
自分が知る限りでは最大級と言える魔術のスペルに慌て、くるりと背を向けて駆け出す。ティファに負担を掛けないよう気を遣っているのがアレイズらしいが、そんな余力を見せたのが悪かった。
「逃がさないよ」

くすり、ぞっとするような凍えた笑い声を漏らしイオが手の平を天に掲げる。刹那凝固した水分が霜を振りまきながら氷の槍と化し、アレイズを捉えんと矛先を向けた。陽光に照らされ、きらりと暴力的な輝きが視界の端に映る。刺さる場所が悪ければ即死だ。そも、あの魔術は氷の槍を生み出せるだけのものではない。そこから凍てついた世界を生み出せるからこそ驚異なのだ。

肌に触れる空気がみるみる温度を失っていく。それを実感しながら、アレイズは声を張り上げてティファを抱き直した。

「待てと言っている！　ティファに当たったらどうするつもりだ！」

スカイブルーの髪がよく見えるようにちらつかせて叫ぶ。するとイオは目を丸くするティファと目を合わせ「それもそっか」とあっさり頷いた。すると呆気無く霜が消え、空気が熱を取り戻す。もっとも、既に氷漬けになりかけていた草原が息を吹き返すにはしばしの時間が必要だろうが。

アレイズは自分や世界の命を取り留めたことに安堵し、深く息を吐いた。

「……とりあえず一度町に戻るぞ。ティファを休ませる」

「仕方ないなぁ。それじゃこの件は町に戻ってからきっちり話し合おうか」

ということは町に戻った後で騒動になるということか。

げんなりすると、メイがこめかみを抑えながら溜息をついた。すでにこれから起こる騒動を予想しているのだろう。

「最近溜息ばっかりついてるんだけど……。今なら姉さんの気持ちが分かる気がする」

だがそのぼやきに答えるととばっちりを食うことは確実だったので、アレイズは聞こえない振りをして町へと足を向けた。

◇　◇　◇

しかし――。

「何だ……これは」
先程まで活気に溢れていた町には、何もなかった。
否、家はあるのだ。聖大陸とは違う独特の形をした家々が並んでいるのは変わらず、景観は変わらない。だが、それ以外の何もないのだ。大通りを歩いていた人々も、出店に並んでいた商品も。ぽっかりと生気だけが抜き取られたかのように、町からは気配というものが消えていた。
がらりと変わってしまった町を鮮やかに咲き誇る桜の花びらが舞っていく。掃除をするものがいなくなったからか、それらは着々と道に降り積もり地面を埋めていた。
「皆別の町に逃げたんだよ。君達がティファの所に行って、すぐにね」
呆然と町を見るアレイズとメイにイオが説明する。怒号を放ち、恐怖に混乱していた人々は圧倒的な力を持つ軍隊の姿に耐え切れなかったのだと。
「まぁ、ほとぼりが冷めたら帰ってくる気なんだろうけどね」
「……そうか」
肩を竦めるイオに囁くように返し、アレイズはティファを抱き抱えたまま町の奥へと進む。緩やかな坂を上り、草原全体を見渡せる場所まで行きたかった。万が一非難途中の人間が軍の人間に見つかっていたら事だ。
しかし坂を上り切る前にアレイズは足を止め、眉根を寄せた。
「お前は――」
「綾！」
アレイズの後を追う形で坂を上っていたメイが、アレイズの言葉を引き継ぎながら駆け上がる。亜麻色の髪を大きくなびかせて進むメイの先には、先程呉服屋で会ったばかりの綾の姿があった。「お姉ちゃん……？」ティファが寝ぼけ眼をこすりながら呟いた。だがそれには答えず、綾は一行の中からイオの姿を見つけそっと息を吐き出した。

「本当に皆さんのお仲間だったんですね」
綾の言葉に、イオが小さく頷く。
「そうだよ。さっきは世話になったね。君が道を教えてくれたおかげで予想より早く合流できた」
甘い笑みが発した言葉にメイが小首を傾げる。
「道を教えた？」
「うん、君達の所に行くための最短距離を教わったんだ。聞いておいてよかったよ。そのおかげでティファがアレイズの毒牙にかかるのを防げたんだから」
「お役に立てたのは嬉しいですが、それはちょっと違うような気が……」
胸を張ってうんうんと頷くイオに綾が苦笑交じりに答える。そんな二人の間で肩を震わせて怒るアレイズなどまるで見えていない様子だ。そしてメイもアレイズのことはひとまず無視して綾に近づいていった。
「ねぇ、どうしてここにいるの？　皆逃げちゃったよ？」
人気のない町にぽつんと一人だけ残っている姿を見ればメイでなくとも気になるだろう。メイの問いにアレイズが気を取りなおして綾を見ると、彼女は弱々しい苦笑を深めた。
「逃げても変わらない気がして。……それに、彼らも逃げてしまいましたし」
言いながら草原を見やる。そこには先程まで留まっていた軍隊の姿はなく、穏やかそのものの光景があった。そんな草原を見据えて答える綾のさっぱりとした声には悲壮感はない。今度こそ襲撃されるかもしれないというのに、とアレイズが眉間に皺を刻んだ所でイオが補足するように言う。
「この町は以前にも何度も奴等に襲撃されていたらしいよ」
「あの大軍が何度も？　よく無事だったね」
「いえ、いつもはもっと人数が少ないんです。だから町の皆でも対処できてましたし……」

目を丸くするメイに、草原から視線を逸らさず綾が答える。それはまるで再びの襲撃を恐れているようでも、来るなら来いと挑発しているようにも見えた。その一見すると考えの読めない横顔を見つめ、アレイズは心中で独りごちた。

（そういえば奴等、気になることを言っていたな）

セラフィムは我らのもの。

セラフィムとは、一体何なのだろうか。

あれだけの大軍が押し寄せて町を襲わなくてはならないほどに、価値あるものなのだろうか。

「なぁ」

気付けば声が漏れていた。

「はい、何でしょうか？」

それにいつも通りの接客口調で答える綾に向け、アレイズは僅かに躊躇った後で問うた。

「セラフィムとは何だ？」

綾がセラフィムを知っているか、そんなことは知りもせずにあたかも知っていることを前提として問うたのは、単にカマをかけただけだ。だが効果は抜群だったらしい。

「どうして、その言葉を」

綾の顔がさっと強ばり、青くなっていく。滑らかな体のラインから警戒心が膨れ上がり、吊り上がった眦がアレイズを射抜く。その敵意に似た壁を崩すように「落ち着け」と柔らかく言って続ける。

「奴等が言っていただけだ。セラフィムは我らのものだと。恐らくそれが町を襲撃する理由になるんじゃないかと思ってな」

「彼らが、ですか？」

綾を落ち着かせようと静かに放った言葉に綾が囁きで返す。刹那、場の空気が変わっていくのを感じた。それは微々たるものだったが、うたた寝をしていたティファでさえ目をぱちりと開けるだけの変化だった。

（綾か？）

緩やかに、密やかに空気が塗り替えられていく感覚に綾を凝視する。イオやメイも同じように彼女を見ていた。
肌をちりちりと焦がすように気が渦巻く。
それは殺気に似て紙一重で異なる気で、三人はそれぞれ警戒しながらその気の発信源であると思われる綾を観察し――揃って首を傾げた。
「おい、どうした」
思わずと言った風にアレイズが声を掛ける。
剣呑な気を放っていると思われた綾はしかし、先程とは打って変わって怯えた様子を見せていた。自分自身を抱きしめるようにし、小刻みに震えている。まるでこの気の主が誰かを理解しているかのように。
黒い眼が一点を見据えたまま動かない。それを見てイオがおもむろに手をひゅっと振った。
「そこだね」
刹那、氷の飛礫がアレイズ達の脇をすり抜けて飛んでいった。硬い音を立ててと木材と氷がぶつかり合う音が響く。砕かれる家の壁。そこから、白い布着に赤い袴を纏った少女がすっと現れた。足首まで伸びた艶のある黒髪が踊るようにふわりと舞う。顔をも覆い隠さんばかりの舞いの中、ちらりと覗いた金の瞳が四人を睨めつけた。
足を止めると同時に髪が落ち着きを取り戻し、やや青白い面が見える。一つだけ鮮やかな色を持つ唇がにゅっと笑みを刻む。
「魔術……やっぱり貴方達ね、ノルマンの手先というのは」
「何だと？」
腕を組み、ふふんと笑う姿にアレイズが怪訝そうに問う。その後ろではメイが訳が分からないという風にイオに尋ねていた。
「ノルマンって、あのノルマン様？　でもあの人は聖大陸にいるのに」
「さぁ、でも他に僕達の知ってるノルマンなんていないしね」
別の大陸のいるはずの人間の名を出され困惑するメイを余所に、

イオはどこか惚けた様子で首を傾げるのみだ。そんな彼等の元に綾の声が届いた。

「春日様……」

恐怖を孕んだ声にメイが振り向く。

「カスガ？　それがあの子の名前？　って、ど、どうしたの！？」

そのまま綾に問いかけた所で、メイは慌てた様子でハンカチを差し出した。彼女の顔にはびっしりと玉の汗が浮かび、顔は恐怖を浮かべていたのだ。綾がノルマンの手先だと言われているわけでもないというのに、何かを酷く恐れている。

しかし綾は差し出されたハンカチにも汗にも目をくれず、ただ一言答える。

「巫女姫様。……セラフィムの、守護者です」

じり、と草履の裏が土を浅く抉る。軍隊を見ても引かなかった綾が、たった一人の少女に怯えている様は滑稽にさえ見えた。

第四十六話

「俺達はノルマンの手先じゃない」
「そうだよ。むしろ罠にかけられたことがあるぐらいなんだからさ」
ぺたんと座り込んでしまった綾を注視しながらも、メイは春日を視界の端に入れる。「馬鹿ね」彼女はその金色の瞳を綾に向けることなく、アレイズとイオを小馬鹿にするように鼻で笑った。
「そんな話を信じるわけがないじゃない」
長い黒髪を頭頂で一つに結い上げている春日は見た目こそ愛らしいが、嘲りを孕んだ笑みを浮かべるとまったく可愛げがない。きっぱりと二人の言葉を否定する姿に綾が肩を震わせる。ガタガタと小刻みに震える体は痛々しいほどに弱く見えた。――どう考えても尋常ではない。
恐らくは春日の放つ空気に呑まれているのだろうが、それにしても。
メイは震える綾の肩を抱き、未だアレイズ達と口論している春日を見やる。
（そういえば）
言い争う三人の姿にふと素朴な疑問が浮かぶ。
（あのカスガって子も、聖大陸の言葉を使ってる……よね）
綾のように商売用に勉強したというわけではないだろう。
では一体何故アズマであるはずの春日が聖大陸の言葉で流暢に話しているのだろうか。疑問さえ感じさせぬほどの自然さで。
（あの子は私達をノルマン様の手先だって言ってた。彼が本当に私達の知るノルマン様だったら、その話を彼女にしたのは誰？）
少なくともそれはアズマでも聖大陸出身者でもないだろう。
今確かに聖大陸にいて、かつレイニウム大聖堂に縁のある人間。
そうでなければ説明がつかない。
（姉さん……はありえないか。となるとダグラスも違う。じゃあ一

体誰？）

頭に浮かぶのはどれもこれも神ばかりだが、ダグラス以外の神はティファに好意的だった。わざわざティファを危険に晒すような真似はしないだろう。

視線を下げ、地面を睨みながら考え込む。そのメイの耳に春日の高飛車な声が入り込んだ。

「さっきから違う違うと言っているけれど、嘘をつかない方が身のためよ」

「嘘じゃないから違うと言い続けているのが分からんのか」

「分からないわね。……まぁ本当に違っていたとしても、どの道今ここでわらわが浄化するから変わりないんだけど」

苦々しいアレイズの声をさらりと受け流し、春日が腕を突き出す。リィンっと着物の裾に縫いとめられた鈴の澄んだ音が辺りを満たす。すると、場に流れる圧力が強まり春日の傍にある木材がパラパラと破片が飛び散らせた。魔力に似た、けれどどこか違う力にアレイズとイオが顔を強ばらせる。ビビッド大陸に術者がいることなど想像していなかったせいだろう。メイとて予想だにしなかった。

霧のような細かな木屑がふわりと舞う。視界が悪くなる中、春日の金の瞳がにっと笑った気がした。

「大丈夫、すぐ楽になるわ」

慈愛に満ちた嘲笑にメイがリングリングを取り出す。

いざとなればこれでティファと綾を護らなければならない。指先でついと円環を撫で、刃を外側に向ける。最悪相手を殺す可能性も出てくるが、主を殺されるよりましだった。

（どんな力か分からないけどすごくやばいよ、この子）

言うなればダグラスに似た危うさか。

もっともダグラスは世界に忠誠を誓い、今ではマイに忠誠を誓っている。全ては忠誠心ゆえの行動だったのだ。だが春日は違う。彼女からは何かに忠誠を誓うだとか仕えるだとか、そういう雰囲気は感じられなかった。だから危うい。……止めたくともブレーキがな

いのだ。
　中腰の体勢で春日の動向に注意を払う。視界が悪いせいでよく見えないが、彼女は突き出した手の中に一枚紙切れを持っているように見えた。
「あれは……」
　何やら文字が書いてあるようだがメイには読めない。アレイズならば何か分かるだろうかと目を向けてみたが、彼にも読めない文字らしく怪訝そうに眉根を寄せている。ただ警戒心を顕に剣を構えているのを見る限り、練度を増した圧力がただごとでないと告げていた。
「護符？　――おやめください、春日様！」
　メイの呟きに綾が息を呑み、慌てた様子で悲鳴を上げる。
　だが春日は相変わらず綾に一瞥もくれぬまま哂った。
「やめると思っていて？」
　絶望的な宣言に綾とティファ以外の三人が構える。
　ぱち、と何かが弾ける音がする。それを皮切りに綾が立ち上がった。
「駄目――早く逃げて！」
「……え？」
「遅いわ」
　突然の立ち上がった綾に呆けた声を返す。その声と重なるように春日がスペルを唱えた。聞いたことのない、アズマの言葉で。
　人差し指と中指に挟まれた護符がゆらりと揺れる。じゃり、と音を立てて片足を横に擦った春日の周囲を囲むように圧縮された空気が集まった。
「これは……！？」
　イオが驚愕で声を上げる。
　アレイズはと言えばティファを抱き寄せ、即座に結界のスペルを唱える。
　だが、僅かに遅かった。

春日の言葉に呼応するように護符に書かれた文字が光に包まれる。
彼女を取り囲む風が空に向かって吹き上がり、一つにまとめていた黒髪ごと天に向かって乱していく。しかし彼女はそんなことは関係ないとばかりに目を閉じたまま、厳かな声でスペルを唱え終えた。
「消えなさい」
放たれた無感情な声に綾が弾かれたように駆ける。
そしてアレイズとイオの腕を掴み、速度を落とすことなく春日の死角へと入った。「ほえ？」アレイズに抱きかかえられたティファが間の抜けた声を漏らす。メイもティファを追うように彼等についていく。大きく地面を踏みしめて跳躍する。
刹那、世界が弾け視界が白で埋め尽くされた。
「……っ！」
悲鳴を上げた、はずだ。
しかし甲高く響くはずの悲鳴ごと閃光に包まれ、聴覚が麻痺したように何も聞こえなくなった。
目をぎゅっと閉じ、瞼の裏の光が消えるまで無音の世界で耐える。
一秒、二秒、三秒……それでもまだ光は消えない。
そうして気が遠くなるほどの忍耐で持ってきっかり十秒。
ようやく少し光が薄れたのを確認しおずおずと目を開くメイは、アーモンド型の大きな瞳を更に大きく見開く羽目になった。
春日の前方およそ十メートルほどだろうか。
先程まで木材や草木が生えていた場所には何もなかった。ぽっかりと空いた穴のみが、そこに何かがあったのだと知らせてくれる。
（閃光、それに地面が焦げてる。これってまさか……）
抉るように地面を穿ったのは大地を焦がすほどの何かだ。
メイは胸中で呆然と呟き、ふと頭に浮かんだ答えを口にした。
「稲妻……？　でもあれだけ大きな穴が空いてるのに感電してないなんて」
確認を籠めてぺたぺたとメイド服を触る。だがそこには地面のような焦げは見当たらず、体が痺れるといった不調もない。どこにも

異常などなかった。あれだけの稲妻だったのに？

最初、メイはアレイズかイオが結界でも張ったのだと考えたがすぐに否定する。あの時スペルは間に合わなかったのだ。

混乱するものの、しかし先にティファの安否を確認するのが先だと後ろを振り向く。そこでようやく、メイは何によって救われたのかと知った。

「……大丈夫ですか？」

ティファを抱きかかえたアレイズとイオの頭上から声を掛けるのは綾だった。恐らく彼女は三人を安全圏まで連れて行って、そこに彼等を座らせたのだろう。自分だけが立っているのはまだ警戒を解けないからか。

否、それはいい。

「綾、あなた――」

「お姉ちゃん、それ……！」

メイが言いかけた言葉から重ねるようにティファが怯えた声を上げて綾の腕を指さす。だが彼女は「あぁ」と苦笑を洩らしながら、ティファが指差した方の腕をさするのみだった。本当は、その程度の反応で済まされるものではないのに。

綾がさする腕。それはすでに腕と呼んでいいのかさえ分からない代物だった。

三人を庇った代償か、一人稲妻の余波を受けたその腕は黒ずんでいる。炭化の一歩手前、そんな言葉が頭をよぎりメイはさっと血の気が引いた。どうしようもならないダメージを追わせてしまったのだ、よりによって無関係の綾に。

触れてしまったら崩れ落ちてしまいそうな脆さを感じさせる細く黒い腕を凝視する。瞳を零れ落ちそうなほど見開いて見つめられ、綾は困ったように笑うのみだった。青ざめた額に大粒の汗を浮かべているのは、血液が沸騰したせいか。呻き声一つ上げていないが、想像を絶する痛みであることはメイにも分かっている。助けを求めるように視線をさ迷わせると、アレイズと目が合う。彼はメイの顔

を見て何を思ったのかそっとティファを下ろし、メイの頭をぽんと撫でた。
「少し下がっていろ」
ティファごとメイを下がらせ、アレイズはおもむろに綾の腕へと手を伸ばす。「あっ！」咎めるように声を上げるがアレイズの動きは止まらない。そのままそっと腕に触れると「痛いか？」と問うた。
そんなの当たり前だ！　そう言いかけたが、綾が首を振るのを見て疑問符を浮かべる。
「体は熱くて苦しいんですけど、腕自体の痛みはもう分からないんです」
「綾……」
苦く柔らかな声にイオが顔をしかめる。痛覚さえ失ってしまった絶望を嘆くように。
皆の視線を背中で受け止め、アレイズは考え込むように目を閉じ深く溜息をついた。
「昔よりも今の方が魔力も強い。成功するといいんだが」
成功。それは綾の腕が回復するということだろうか。
（そうだ、この人達神様なんだよね。それなら――）
期待に鼓動が早くなる。それはティファも同じらしく、ダークブルーの双眸が期待と緊張を籠めてアレイズを捉えていた。
「君回復魔法使えるの？」
「必要だったからな。最近では使う必要もなかったから随分久しぶりになるが」
イオの問いにそっけなく答え、アレイズは集中するために再び目を閉じた。それを邪魔せぬよう僅かに離れてからイオの服の裾をくいと引っ張る。
「神様ってどんな魔術でも使えるんですか？」
囁きで問う。もし何でも有りだというなら、最強ではないか。
そうは思うものの、今までの戦闘で何でも有りという印象を受けたことはない。それが不可解だった。

イオはメイの問いに「うーん」と唸ってから首を振った。
「魔術は使えるけど、何でもできるわけじゃない。僕達にも得手不得手があるからね」
「得手不得手？」
「例えば僕は氷を使った攻撃や憑依魔術、それから結界魔術が得意だけど、アレイズ神は違う。彼は大地や炎を使った攻撃や結界魔術が得意なはずだ。あとは……前に精霊を使った気配を感じたから、精霊の力を借りるのも得意なのかもしれない。回復魔術を使えるのは知らなかったけど」
「怪我しても手当してくれませんでしたしね」
むくれて言うと「案外今の今まで忘れてたのかも知れないね」と笑われた。あり得る。
と、そこで二人揃って遠く前方へと視線を向けた。
綾の反論を待たずアレイズがスペルを唱え始める。それはいい。空気が震え、温かな光が溢れ出すのも綾が元のように腕を動かすのに必要なことだ。
問題は他の、不要なもの。
二人の視線の先には、全員が無事であることを悟った春日がこちらに近づいてくるのが見えた。
術を使ったせいか、その歩みは気だるげだったがもう一度稲妻を浴びせるぐらいのことはしそうだ。
「僕が出る」
警戒心で身動ぎした綾を制し、イオが歩を進める。
「私も行きます。ティファ様は綾とアレイズさんの傍にいて」
「うん」
（せめて綾の怪我が治るまで何とかしないと）
相手の力の一端を垣間見た今、遠慮などする必要はない。イオとて同じ考えだろう。このまま春日を放っておけばティファの身も危うくなるのだ。普段は役に立たない神だが、ティファが関われば話は別だ。その点においてメイはイオを信頼していた。

イオが両手を広げ、ぼうと蒼い光を浮かべる。いつでも必殺の攻撃を放てるように。

メイもリングリングを構え、怪しい動きがあればすぐ投擲できるように春日を睨めつけた。

「生きていたのね。……しぶとい奴」

憎悪を露に近付く春日を牽制するようにイオがにやりと笑う。甘い顔立ちをしているだけにやけに迫力のある顔だ。……きっと今の自分も似たような顔をしているのだろうが。

「僕達よりも君の方がしぶといんだろうけどね」

「違うよ。あれは図太いって言うんです」

「それもそうか。僕達を浄化だなんて、まるで穢れているみたいな言い方だよね。突然人に一生ものの傷を追わせる人間の方が余程穢れているっていうのにさ」

「本当に質が悪いですよね。そんなに浄化したけりゃ自分を浄化すればいいじゃん」

「貴方達ね……！」

つらつらと放つ当て擦りに春日が気色ばむ。

だが彼女は相手にならないとばかりに首を振り、すぐに冷静さを取り戻して二人の奥を見た。金色が見据える先、そこには綾がいる。

「弱っている人から狙うつもり？」

綾を庇うようにリングリングの白刃を見せつける。そんなメイを無視して、春日はイオやアレイズに向ける声とは全く違う柔らかな声色で尋ねた。

「ねぇ、綾。どうして彼等を助けたの？　わらわを裏切るつもり？」

「……」

純粋に不思議で仕方がないという声に、しかし綾は無言のまま俯く。その間にも春日の問いは続いた。

「彼等がこの村に来た時からわらわはずっと見張っていたのだけれど、随分親しくなったようね」

「……お客様、ですから」

くすくすと笑う春日にようやく綾が口を開く。
腕を纏う光は確実に体を癒しているのか、次第に血色を取り戻した顔が春日に向けられる。からからに乾いた掠れた声は、きっと不調のせいではないのだろう。恐怖と罪悪感、それと一本の芯が通った強い意志を感じる声だった。
「お客、ねぇ？　でも彼等は招かれざる者達だわ。ノルマンの仲間なんだもの。それに……」
ノルマン。その言葉にありったけの侮蔑を籠めて春日はイオとメイを指差した。
くすり、艶やかに零れた笑い声が一つ空気を震わせる。
「わらわのセラフィムを奪おうとした輩ですもの。放ってはおけないわ」
「セラフィム？」
（そういえばセラフィムが何かって話、まだ聞いてなかったよね）
春日が現れたせいだ、と毒づきながらメイは敵意を隠しもせず春日を見据える。一点の曇りのない亜麻色の瞳。しかし、春日にはその真っ直ぐさが気に食わなかったようだ。眉を顰めた彼女は再び腕を伸ばし、凍えた声を放った。
「だから早く浄化されてしまいなさい」
先程と同じ空気が周囲を満たす。
風が舞い上がり、閃光が迸る予感がメイとイオの脳裏を襲う。
だが、先程のように稲妻が迸ることはなかった。それどころか、春日の手から護符が出てくることすらなかったのだ。
「……何がしたいのかしら？」
春日の戸惑ったような声が落ちる。
彼女の前ではいつの間にすり抜けたのか、スカイブルーの髪が流れている。
「ティファ……いつの間に！」
ティファは春日の凍るような声からメイ達を守るようにして立ちはだかっていた。

空間転移は使っていない。もしそうならイオかアレイズが気付くだろう。しかし彼等の様子を見る限りそうではない。……自分達の横をいつすり抜けたのかも分からないから、余計に困惑するのだが。

断固として動く気配を見せないその立ち姿は、紛れもなくティファニエンド・グランハートのものだ。

「ティファ！　危ないから離れていろ！」

背後からアレイズの悲鳴じみた声が聞こえてくる。

綾を治癒している彼はティファの傍に駆け寄ることができない。その代わりとばかりにイオが駆け寄り、慌てた様子でティファの周囲に結界を張り巡らせた。

そんな周囲の焦燥を無視し、ティファは春日から目を逸らすことなく真っ直ぐに前を向き、苦しげな声で言った。駄目だよと。

「誰かを傷つけるなんて、そんなの駄目だよ」

呻くように言い、小刻みに震える左手で頭を押さえる。痛みを堪える様子に、メイははっと息を呑んだ。

（記憶が戻ってきてる！？）

いつ稲妻に打たれるか分からない危険な状況であるにも関わらず、メイにもイオにも喜色が浮かぶ。ぱっと顔を輝かせたイオなど春日を無視してティファしか見えていないようだった。

いつか姉から聞いたことがある。

人は記憶を取り戻す時、激しい頭痛を伴うものだと。文献でしか見たことがないし、実際に記憶を失った人間に会ったこともない自分達にはそれが事実か確かめる術はないが、これが希望であるなら縋りたかった。口調こそまだ幼いがティファは記憶を取り戻しかけていると。

「でも、どうして？」

何故、今この時に記憶が戻りつつあるのか。それが分からない。

ティファの肩を掴んで下がらせながら考え込んでいると、溜め息混じりに春日が呟く。

「仕方ないわ。わらわだって好きでやっているわけじゃないもの」

あれほどイオやアレイズの言葉をあしらっていた春日だが、ティファの言葉に何を思ったのかその声は酷く疲れていた。あるいは綾を傷つけたことが彼女を疲弊させているのかもしれない。

だからだろう。

「春日様。どうか、彼等の話を聞いてみてはいただけませんか？」

聞こえてきた声に彼女が悲しげに目を閉じたのは。

「綾……。貴女まで」

一歩、一歩と頼りない歩みでティファの前に立った綾は先程までの苦しみが嘘のように穏やかに笑んでいた。炭化寸前だった腕もアレイズの治癒によって元通りになっている。まだ少し顔色が悪いものの、それでも気丈にティファの隣に並ぶ彼女は完全に回復しているように見えた。

「そこをどきなさい。死にたいの？」

春日の戸惑いがちな声に綾は苦笑し、ティファは体を強張らせる。

死にたいの？

そのたった一言で動揺したティファを、三人は見逃さなかった。

（お館様達の事を思い出している？）

「でも、それならティファ様は」

（ティファ様はちゃんと分かってるんだ）

無意識か意識的にはそれは分からない。

だが両親の死の記憶がティファの内に存在しているのは確かだった。

「構いません。彼らを守れるのなら本望です」

「会ったばかりの人間に命を差し出すとでも？」

「そうしたいと思うし、一度ぐらい自分の予感を覆したいですから」

ティファの様子に気付かなかったのだろう。綾がきっぱりと返す。

その横顔は吹っ切れたような晴れやかな笑顔で、恐怖など一欠片も存在しなかった。腹をくくったのだと、その笑顔を見ただけで分かった。

「予感？」

「はい。貴方達を見た時感じた予感。……貴方達が傷つく予感です。私は、それを覆したい」

イオの問いにくすりと笑って返す姿にも余裕がある。

綺麗だな、とふと思った。

恐怖を乗り越えて、知り合ったばかりの誰かの盾になってさっぱりと笑える姿は自分には到底辿りつけない場所のような気がして。

何故綾が自分達のためにそこまでしてくれるのかは分からない。分からなくとも、彼女の美しさは変わらない。

「それを覆すと？　予知能力者の貴女が言う言葉じゃないわね」

リィンっと鈴の音がする。

突き出した腕を下ろした春日は苦々しい物を呑み込んだような顔で眉間に皺を刻んだ。

「悪い予感なら覆せた方がいいのです。私は春日様の力が怖いけどそれ以上にこの願いも強いんです。だから譲れません」

それに、と綾は続ける。

「仲間の事も春日様の事も護ろうとする彼女を見ていたら放っておけませんから」

ティファを見つめる綾の力強い声が春日に届くと、彼女はうっすらと笑みを浮かべた。それは今まで好戦的だった彼女とは違い、ひどく力無いものであった。

綾の視線にティファが何度も頷いた。

「誰かを傷つけるのは駄目だし、傷つくのも駄目だよ。もしそれで死んじゃったら、二度と会えないんだよ」

「ティファ様……やっぱり」

死の影などまるで知らないと振舞っていたティファの言葉に胸を打たれる。

やはりどこかで知って、認めているのだ。

大切な人の死。その記憶があることが良いことか悪いことかは分からない。それでも、認めないことには始まらない。

息苦しい程鼓動が早くなる。胸に手を当てて息を吐き出すと、同

じ事を悟った様子のアレイズが「だったら」と独りごちた。
「だったら、今ティファの隣に並ぶのは綾じゃないな」
「アレイズ、さん？」
何かを決心した様子のアレイズの声に振り返る。同時に束ねられた黒髪がするりとすり抜けていき、隣に並んだ。自分が立つ位置とは逆の、ティファの隣に。
何故だか、手を離さなければいけない気がしてメイはティファから離れた。マイに知られたら怒鳴られそうだが、今はそうすべきだと思った。
一歩下がるメイにアレイズが感謝するように微笑む。そのままティファの肩を抱くと苦痛を和らげるようにそっとつむじにキスを落とした。
「退行の原因を作ったのは俺だ。だから俺が」
続く言葉はない。それでもメイにはアレイズが何を言いたいのかよく分かった。
自己嫌悪、義務感、良心の呵責。色々と胸に渦巻く感情はあるだろう。
（でも何でかな）
今自分はとびっきり甘いラブシーンを見た気持ちになっている。
（きっとアレイズさんが、ちゃんとティファ様と向き合おうとしてるからだ）
アレイズならばティファの痛みを取り払うこともできるはずだ。それをせずに一緒に痛みを分かち合おうとしているのは、この痛みが必要なものだから。
「大丈夫か？」
「……」
アレイズの問いに答えはない。
本格的な頭痛に言葉を発する余裕さえないティファをぎゅっと抱きしめ、アレイズは黙した。祈るように、願うように目を閉じる。
そうすることで少しでも彼女の痛みが癒えるようにと。

もう大丈夫だ。
安堵と共にそう感じ、メイは二人より前に出てリングリングを構え直した。
（攻撃を仕掛けそうな雰囲気じゃないけど、何があるか分からないもんね）
癪だが、ティファのことはアレイズに任せ自分は二人を全力で護ろう。
今の自分にはそれしかできない。
だが常ならば悔しくて歯噛みしそうな事実に、メイはまったく痛みを感じていないことに気付いて苦笑した。こんなこと、怖くてマイには話せない。
さすがにイオは苛立たしげにアレイズを睨んでいたが、それも一瞬のことだ。
突然笑い出した春日に、二人して意識を削がれる羽目になったせいで。
「ふふ……っ」
「春日様？」
淡い笑い声に綾が問いかけるような声を上げる。金色の視線を追うと、その先には綾ではなくティファとアレイズが映っていた。
「とんだ茶番だわ」
「え？」
「どういう意味ですか、春日様」
甘ったるい空気ではなく、別の何かを嘲笑っている。そう直感し腕を振りかぶり投擲の体勢に入ると、春日はようやく綾に目を向けた。
「わらわはね、何も適当に彼等を襲ったわけじゃないのよ」
「……え？」
「ちゃんと知っていたわ。敵がどんな容姿をしているか。そうでなければ過ちを冒すかもしれないもの」
呆けた声で聞き返した綾に呟き、春日はやっていられないとばか

りに残忍な笑みを形作る。
腕が伸びる。一層高い鈴の音と共に。
すいと裾から覗く人差し指が、ティファを指差した。
「敵は青い髪と瞳の女。ほら、分かりやすいでしょう？」
刹那、身が凍るほどの恐怖に駆られてイオとメイが振り返った。
恐怖は自分達が害されるが故ではない。
大切な人が奪われる。その恐怖が故にだ。
「二人ともっ！」
「早く逃げて！　ティファ様、アレイズさん！」
錯乱した声は何の確信も持たない警告だ。
イオもメイも数瞬後に起こることなど知らない。それでも叫ばずにはいられなかった。
くすり、笑い声が落ちる。
それを合図にティファとアレイズは、先程とは比較にならない程の閃光に包まれた。
「――ジュード！」
幻聴のような、そんな声を残して。

第四十七話

ここは、一体どこだろう。
茫洋たる光の渦の中、ティファはゆっくりと目を開けてそんなことを考えた。
（あ、れ？）
自分は一体何をしていたのだろうか。
確かプラクトの屋敷前にいて、その後空間転移であの部屋に入ったのだったか。
――その後は？
（……分からない）
心が軋んでバラバラになる、その感覚は覚えている。大切な者を奪った存在への復讐心と、人で在りたいと願う気持ちの矛盾が自分を壊そうとしたことも。だがその先が思い出せない。自分はその後どう在りたいと願ったのだったか。
視界を灼くほどの閃光に溢れるこの場所は一体どこなのだろう。
何故自分はここにいて、誰もいないこの場所で一人ぼっちで、たゆたうように流れているのだろう。
上下感覚さえ失い、ティファは軽い目眩を覚えながら自分の掌を見た。
無論光の強さのせいで輪郭さえ薄ぼんやりとしているが、今はこうして自分の存在を視覚的に確認しなければ不安だった。自分は本当にまだ生きているのかどうかさえ怪しいのだから。
「皆は」
呟くが、喉がカラカラに渇いているせいか掠れた声しか出なかった。
そういえば随分長い間話していなかった気がする。
その前は叫んでいたのだし、喉が壊れているのも当然だ。
ティファはふぅと息を吐き出し、こんな光の中でも鮮やかに流れ

る空色の髪を見やり、それからぱちりと目を見開いた。
感覚が鈍いので今まで気付きもしなかったが、背中がやけに温かい。
不思議に思って振り返って、ティファは「あ」と声を上げた。
「……アレ、イズ？」
圧倒的な光の前にその姿はよく見えない。
だがティファは自分の背後で眠る体躯がアレイズのものであると確信していた。
長い髪も全身黒一色であることも理由の一つだが、それ以上に魔力が自分達を繋げてくれている。薬指の指輪から、アレイズの指輪まで流れる糸が温かい。だからきっとそうなのだと思い、途端に全身から力が抜けた。
ここがどこかも何があったのかも分からないというのに、アレイズが傍にいるだけでそんなことどうでもよくなる。
その理由を深く考えもしないままティファはアレイズの方に体を向け、そっと手を伸ばしていた。
否、手を伸ばすというのは間違いかもしれない。
背中に体温を感じるほどの距離で眠るアレイズは、ティファにぴったりと体をくっつけて守るように抱きしめていた。まるで離すまいとするかのように。
「アレイズ」
声を掛ける。だが返事はなかった。苦しげに眉を顰めるだけだ。
「どうしたの？　ねぇ、何があったの？」
再度声を掛けるが、やはり返事はない。ティファはたちまち不安に捕らわれ、ようやくこの光が何なのかを察知した。あまりに膨大すぎて気付かなかったこれは、魔力の塊だ。悪意も敵意もないが、あるだけで精神を磨り減らしていくだけの力がそこにはある。それに気付けなかったのは屋敷で見た光景の衝撃が強かったせいか。
それにしても何故アレイズはこんな体勢でこんな場所にいるのか。
目を細めてアレイズを凝視する。

苦しげなのも当然だ。これだけ顔色が悪いのでは。
（まさか私を庇って怪我でもしたんじゃ……）
理由も状況も分からないが、今こうしてアレイズが動かずにいるなんて大事だった。
「待ってて、すぐに治してあげ――」
あまり大きな傷でなければ、応急処置ぐらいはできるかもしれない。
そう思ってアレイズの肩に触れようとした時。
“触らないで”
頭にガンと鳴り響いた声に、ティファは声にならない悲鳴を上げた。
鼓動がやけに大きく感じられる。頭の痛みが感覚を鋭敏にしているのだと分かった。
「だ……、れ？」
外からではない内からの声が誰の者なのかティファには見当もつかない。
声の高さから言って女だろうが、メイでもマイでもない。
痛みに耐えながらぼんやりそう考えていると、再び声が響いた。
“まさかこんな早く元に戻るなんて予想外だったわ……。どんな魂をしているのよ”
（知らないわよ。大体、貴方誰よ）
舌打ち混じりの声に心底怒鳴り返してやりたかったが、頭が痛くてそれどころじゃなかった。言い返してまた喋られても困る。仕方が無いので口を噤み、何とか状況を整理しようと試みる。
光はまだ収まる気配を見せない。
膨大な魔力の渦。そこに存在するのはどうやらティファとアレイズだけのようで、他には誰の姿も見つけることができなかった。出て行くにしても頭の中の声を追い払うにしても、頼りになるのは自分とアレイズだけなのだ。しかし。
「……うぅ」

苦悶の表情を浮かべるアレイズに起きて魔力を使えというのは酷な話だ。かといってアレイズから供給された魔力を使った所で、疲弊させることに代わりはない。

ティファはなるべくアレイズの魔力を遠ざけるように目を閉じ、ゆっくりとスペルを紡いだ。

出来る限り自分の持つ魔力を使ってアレイズを少しでも楽にできるように。

そう意識して紡いだ言葉を、伸ばした手を止める声は今度こそ聞こえなかった。

少しでも光の持つ魔力から庇えるように結界を織り上げる。

薄い緑色のヴェールに周囲を包まれると僅かに呼吸が楽になり、ティファはほっと息を吐きながら次のスペルを唱える。

(大した怪我じゃないといいんだけど)

そう考え、もしかしたらこれは怪我じゃないかもしれないと不安になる。

もしそうだったら自分では治せない。ただ、願うしか。

(お願い、アレイズ。どうか起きて)

眠ってしまわないで、早く目を覚まして。

じわじわとこみ上げる孤独感に苛まれながらもティファの手の平から生み出された光がアレイズを包み込む。黒い外套に、青ざめた顔に滲み込むように薄い光が入り込み、やがて苦悶の表情が和らいでいった。柔らかな表情に、ティファは随分長い間夢を見ていたような心地になる。何だかとても長い間、彼のこんな顔を見ていなかったような気がしてならなかった。

嬉しくなり目を細める。その細長い視界で、アレイズの睫毛が震えるように動いた。

「ティファ……?」

「アレイズ? 目が覚めたの!?」

ティファ同様掠れた声で名を呼ぶアレイズに、飛びつかんばかりに声を掛ける。

するとふっと笑ったアレイズがティファの頭に手を伸ばして、安堵したように息をついた。その呼吸はまだ辛そうだったが、どこも痛そうにしていない所を見ると周囲を圧倒する魔力に当てられているのかもしれない。彼は自分よりずっと魔力に敏感だろうから。

「よかった、無事だったか」

どちらかと言えば無事でないのはアレイズの方だというのに、彼は小さく笑ってティファを更に抱き寄せた。頬が外套に触れ、そこから規則的な鼓動が響く。これだけ近くにいるのも熱を感じるのも、本当に久しぶりだった。

“……っ！”

「痛……っ」

だが安心して身を任せる寸前頭の中で声無き悲鳴が上がり、衝撃波のような波動が脳内をガンガンと揺らす。激痛なんてものじゃない痛みにぎゅっと目を閉じると、眦に涙が浮かんだ。

アレイズから身を離し上半身を折り曲げて頭を抱え込む。立っているのか寝ているのかも分からないような空間なのでアレイズから離れてしまうと周囲への違和感が増すが、そんなものはこの激痛の前では何の意味もなさなかった。

「ティファ！　おい、大丈夫か！？」

アレイズの焦ったような声がかかる。しかしどうにかしようにも状況が掴めず混乱している様子で、彼は必死にティファに手を伸ばしてあやすように背中を撫でた。大きく優しい手がぽんと背中を叩く。それだけだというのに涙が流れ落ちた。

「どこか痛むのか？　まさか怪我でもしたのか」

ここが何処か、何故ここにいるのか。そんな事は訊かれなかった。いくつもの質問は全てティファの身を案じるもので、しかし痛みに耐えながら何とか口を開こうとすると何も言わなくていいというように頭を撫でられた。痛みが遠ざかっていくような優しい仕草に何故だか泣きたくなる。だというのに泣くことさえ許されない。

“離しなさい！”

一際大きな声がヒステリックに響く。それに耐え切れず、ティファは声を限りに叫んだ。

「だから一体貴方は誰なのよ！」

名乗りもせず好き勝手に人の中で叫んで痛みを与えて、大体何故そんな命令口調なのか。

（それに、どうしてアレイズと離れなくちゃいけないのよ）

アレイズは自分の契約神だ。そして自分は神の花嫁だ。離れなければならない理由などなく、この場で邪魔者扱いされる存在がいるとしたらそれはこの頭の中に巣食う何者かに他ならない。

目を閉じ、ぴたりと静まり返った声に怒気を放つように暗闇を睨めつける。その額にそっと吐息が落ちた。

「……何か、聞こえるのか？」

困惑した声は、ティファが突然叫びだしたが故だろう。

（そっか、この声はアレイズには聞こえないのよね）

ならば驚かれても仕方がない。

ティファはこくりと頷き、ゆっくりと目を開けた。

「うん。さっきからずっと頭の中で聞こえてる」

「俺には聞こえないが。……となると憑依か」

「分からない。でも憑依にしては表に出てこないのが不思議ね。イオの時はちゃんとメイの魂が引っ込んでたのに」

首を傾げて返すと、はたとアレイズが動きを止めた。

「な、何？」

じーっと至近距離で見つめられ動揺していると、アレイズは漆黒の双眸を丸くして尋ねた。

「お前、年は幾つだ？」

何を今更言うのだろうか。

それよりもそれは今問うような事なのだろうか。

「は？　十七だけど、言ったことなかった？」

唐突な質問にぽかんと口を開けるが、アレイズは至極真剣だったようでその答えを聞くと何故か満面の笑みを浮かべてぎゅっとティ

ファを抱きしめた。
「ちょ、ちょっと何？」
「戻ったんだな！？　あぁ、本当に良かった」
言葉通り嬉しそうなアレイズの声が耳朶を打つ。
一体何があったのかはとんと分からず仕舞いだ。だがアレイズがこんなに嬉しそうなのだからいいかと思い、ティファは口元を緩めてされるがままにした。
“貴方は……”
頭の中の誰かが静かに呟く。その声色をよく感じ取れたのは、今までと違い頭痛がしなかったせいだろう。絶望にも似た声はとても深い闇を孕んでおり、この溢れんばかりの光の中で呟くにはあまりに不似合いに感じられた。今までむかっ腹が立っていたティファだが、流石に放っておけなくなり問うた。
「どうしたの？」
しかし声は返ってこなかった。それから先も、ずっと。
頭の痛みが引き、体が軽くなったように感じられる。
「どうかしたか？」
「声がなくなったわ」
「消えたのか？」
「多分」
黙り込んだティファの顔を覗き込むアレイズに言葉少なに返すと、こつんと額に彼の額が触れた。
まるで昔母が熱を測る時にしていたような懐かしい温度に、嬉しいような気恥ずかしいような気分になり目を逸らす。そのせいでアレイズの顔は見えなかったが、彼が今とても真剣な表情をしていることは声から読み取れた。
「もう俺の傍からいなくならないでくれ……頼むから」
真摯に希う声に目を瞠る。
「何言ってるの？　いなくなってなんかいないじゃない。だってさっきまで屋敷にいたんだし――」

「俺達が今いるのはビビッドだ。正確に言うとここは別の場所だろうが」
は？　と声が漏れる。
しかし一体何を言ってるんだこの神様は、という言葉までは出せなかった。
ビビッドといえばプラクトより遥か遠い聖大陸とは違う大陸だ。
おいそれと行けるような場所ではないし、大体来た覚えがない。第一、ここは違う場所だろうというのはどういうことか。アレイズはここが何処か分かっているのだろうか。
数々の疑問と共に呆けた声を出すと、低く笑ったアレイズが答える。
「お前は退行を起こしてたんだよ。その間に俺達はビビッドに転移させられたんだ」
「転移って、誰に？」
「マイだ」
「マイが？」
確かに彼女ならば必要ならやりかねないが、そもそも魔力などあっただろうか。
……いや、なくとも必要ならやはりやりそうだ。
「まぁ、その辺の事情は後で話すさ」
ひくりと頬を引きつらせるティファから身を離し、アレイズが軽く肩を竦める。
「本当に心配したんだからな」
「あ……」
おどけてはいるが、自分がどれだけ彼に心配を掛けたか痛いほどよく分かった。
あんなに嬉しそうにしていたのだ。
退行時の自分など想像つかないが、きっと沢山傷つけてしまったのであろう事は分かる。
「ごめん」

素直に謝ると苦笑で返される。
「いや、あれは俺が悪かったからお前が謝る必要はない」
「アレイズが悪かった？　何のこと？」
謝るのはこちらの方でアレイズではない。
だというのに何故そんな事を言うのだろう。
目を白黒させていると、今度は頭を下げられた。
「先に謝っておく。――すまなかった」
（どうしてそんな。そんな事される覚えなんてないのに）
自分は傷ついていない。退行した理由は覚えていないのだし、仮にアレイズのせいだとしても自分はそれを理解していない。そんな状態で謝られても、何も返してあげられない。
「やめてよ、私何も分かってないのに」
「いいんだ」
慌てて放った言葉にようやく頭を上げたアレイズは、一瞬だけこちらを眩しそうに見てから再度ティファを抱きしめ、静かに髪を梳いた。その所作はどこまでも優しく、ティファは嬉しい反面不安になる。
（何でこんなに優しいの？　そんなに機嫌がいいのかしら）
表情の柔らかさに、瞳の優しさにティファは胸中で呟いた。
今までも勿論大事にされてきた自覚があるが、こんな風に誰に憚ることなくくっつかれた事など……無いとは言わないが数えるほどしかない。しかもこんな風に触れている最中に。
「もう俺から離れるな」
そんな事まで言われたらどうしたらいいか分からない。
ティファは熱くなる頬を必死に隠そうと手の平を当てながら、それでも視線だけは逸らさなかった。
強い口調はしかしどこか弱気な心を抱えている。
その声に答えるには、きちんと目を見て答えなければならない気がした。
縋るような目を見据え唇で弧を描く。

「当たり前でしょう？　私はアレイズの契約者なんだから離れたりしないわ」

笑って答えるとアレイズも釣られるように微笑む。

静謐なその笑顔は今まで見たことがない程綺麗で、いつまでも見ていたくなる。

結界に光の渦が触れる。その度に影が生まれては消えていく。

一瞬アレイズの表情が見えなくなり、次の瞬間鮮やかな光を引き連れて浮かび上がる顔。その微かに熱っぽい視線がティファの視界に焼きついた。

「アレイズ……？」

「どうした？」

問う声に静かに返しながらアレイズが少しずつ顔を近付けてくる。

まさかこれは。

（また契約させられるってんじゃないでしょうね？　あれ、でも今契約は解けていないのに）

疑念で広がる波紋を心で感じ、ティファは何か言わなければと必死に考える。何をする気なのか、一体どうしてしまったのか。だがそのどれも問えないまま、時折影に消えるアレイズの、次第に熱を高める視線を受け止めることしかできなかった。

「ティファ」

熱く無骨な手が頬に触れる。そのまま一緒に耳を塞がれた。

「俺は――……」

（何？　何て言ってるの？）

アレイズが何を言っているのか全く聞き取れず、ティファはやきもきしながら自分に触れる手に自分の手を重ね合わせた。それに何を思ったのか、アレイズが更に顔を近づけ――唇が触れた。

契約をした時のように、ただ触れるだけのものではない。

優しく何度も落とされる唇はティファのそれに啄むように触れ、満足気な吐息を漏らした。

（これ、契約の儀式じゃない）

その証拠に魔力が流れてこない。
契約をした時のような、指輪と指輪を繋ぐ魔力が強くなるわけでもない。
（じゃあ、じゃあこれって――！）
かぁっと頭に血が上り、衝動的にアレイズの体を突き飛ばそうとする。しかし結局そうすることはできず、ティファは困惑したままどうしたらいいのかそればかり考えていた。
唇から伝わる熱が次第に上がる。時折落ちる吐息からアレイズの気持ちまで流れてくるようで、ますます抵抗する気力が失せていった。
勘違いかもしれない、自惚れかもしれない。
だが感じる熱や唇の感触はまるでアレイズから好意を渡されているようで、全身が、脳が茹だっていく。嫌悪感などこれっぽっちも感じなかった。
（嫌じゃないんだ、私……こんなことされてるのに）
分からない。そんなことは分からない、が。
（今はこのまま）
ティファは自分の気持ちを持て余したまま、そっと目を閉じる。
体から力が抜けていく。アレイズが喉の奥で笑って、再びキスが落とされた。
――その刹那、信じられない事が起きた。
「……っ！」
瞼の裏で強烈に存在を示していた白い光が消えていき、代わりに目が痛くなるほどの緑色の光が迸った。それは今までの強烈な魔力の光を押し返して自分達の体をどこか遠くへと追いやろうとしていた。
「な、何なのこれ！　アレイズがやったの!?」
「違う、俺じゃない！　……だがこの色、まさか指輪の力か？」
あまりの眩しさに目を閉じながら身を離し、ティファとアレイズはお互いが離れないようにしっかりと手を握る。すると今度は無音

とも轟音ともつかない、聴覚を支配する何かに言葉を交わす事もできなくなる。ただ戻ってきた上下感覚が奇妙な浮遊感を伝えるのみだ。

（一体何処に流されてるっていうのよ！）

指輪と同じ翡翠色と白光が混じり合って渦を生み出す。

その中心に放りこまれ、平衡感覚を失うほどぐるぐると体を回され吐きそうになる。

そんなティファの下方に、幾人かの姿が見えた。

「何故生きているの！？」

「二人とも！」

「ティファ様！　アレイズさん！」

黒髪の女が二人とメイとイオ。

彼らの周りには草原が広がり、ふわりと桃色の花びらが舞っているのが見えた。背後には町もあるが人影は見当たらない。

（……本当にここは何処なのよ）

途方に暮れて考えるとくらりと強烈な目眩に襲われる。その目眩に耐え切れず瞼を閉じると、あっさり意識が途絶えた。

◇　◇　◇

「一体どうして」

ようやく普通の光度に戻り、先程までの眩しさとの差異に何度も目を瞬かせているアレイズの耳にイオの声が届く。

草原に立ち、意識を失ったティファを抱き上げる。柔らかな熱に満足げに笑うとイオが微かに不機嫌そうに眦を吊り上げたがそれは無視した。

「どうやって戻ってきたんだい？　君、結構重症だったはずだけど」

「さぁな、戻れた方法は知らん。だが傷はティファのおかげだろうな」

あの光の奔流に巻き込まれた際、アレイズはティファを庇って体

にも精神にも重症を追っていた。神とはいえただでは済まないほどの傷だ。人間ならばあっさり死んでいただろう。だというのにティファもアレイズもほぼ無傷の状態で戻ってきたのだ。――術者である春日の前に。

「……わらわの出せる最高の術だったのに」

よほどショックを受けたのか、春日はぼんやりと呟いて地面にへたりこんだ。しかし慰めなど口にする気にはなれないし、そもそも春日の動向になど興味がなかった。今重要なのはティファだ。

（退行は治ったようだが、誰かに憑依されていたのが気になるな。一体誰が）

もしかするとアレイズがティファの居場所を探していた時に切られた魔力。あれもティファに取り憑いた者の仕業なのだろうか。となると厄介だとアレイズは内心で舌打ちした。魔力が繋がっている自分にも気付かせない術者となれば、十中八九神だろう。まさかビビッドにまで来ているとは想定外だった。

「さっきまで二人ともどこかに飛ばされてたのに」

黙っているとイオが不思議そうに呟く。

それに「知るか」と答えようとした時、力ない声を返したのは春日だ。

「当たり前よ。あれは次元転移の術なんですもの」

「時空転移？」

「ちょっと待て、じゃあ俺達は今別の次元にいたということになるのか！？」

春日の言葉にイオとアレイズの声が上擦る。春日が頷くと二人は目を合わせ、改めてアレイズとティファがこの世界に戻ってこられたことに驚愕を覚えた。

（別の次元など存在自体怪しいと思っていたが……確かにあの場所なら、別の次元と言われても納得がいく）

膨大な魔力。生物の住まうことのできぬ場所。あれはレイニウムなどではない。

しかし、そうだとしたらとんでもない話だった。
別の次元に行って戻ってきた者など皆無なのだ。それは神でも人でも例外はない。
戻ってきた者がいないということは、その存在を伝える者もまたいないということだ。だからアレイズはどうせ眉唾ものだと侮っていたのだが。
（本当に存在するとはな。いや、それ以前にそんな術を使えるあいつは一体何だ）
今でこそ呆けているが本気でこちらを殺す気だったのであろう春日の力に、今更ながらにぞっとした。
肩を大きく震わせると、視界の端にイオの驚いた顔が見える。
どうやら同じ事を考えているのか、彼の体も震えたように見えた。
（それにしても、一体どうして戻れたんだろうな）
あの時ティファの体が一瞬翡翠の光に包まれたのは見たが、それは本当に一瞬の事だったし気付けば視界全てを同じ色の光で奪われていたのだから発生源が何か上手く特定できない。救いなのはティファが意識を失った理由が魔力不足ではないということだが――そうなると光を放ったのは。
やはり、と呟く。
「指輪の力か」
ぽつり漏らすとイオが「指輪？」と問い返す。
その声に我に返ったメイも含めて二人に、アレイズは色々と省略をした説明をした。
「いきなり指輪が光りだしたかと思ったらここにいたってことさ」
説明するというよりは、とてつもなく割愛しすぎた気がしないでもないがそれは気にしないでおく。
まさかキスしていたら指輪が光ったなどと口にできるわけがないのだから。……特にイオには。
（今の状況で最大級のスペルなんぞ唱えられた日には、いい加減死ぬ）

説明不足に不満を訴える碧眼からついと視線を逸らし、げんなりと胸中で呟く。

（だが、仮に指輪だったとしたら何故）

もしもあの光の発生源が指輪だったなら、口付けによって契約が強固になって指輪の力も強まったと考えるのが妥当だろう。お互いを繋ぐ魔力の糸が太く織り上げられれば、それだけ発揮できる力も強い。だから指輪の魔力が春日の魔力に打ち勝つほどに強くなったということで、ある程度納得はできる。

（しかし、あの時俺は……）

気まずさにぐっと口元を引き締める。

ティファには悪いが、アレイズはあの時別に契約をするつもりでキスしたわけではなかった。口が裂けても言えはしないが、ただしたいからしただけだ。それだけだ。……それだけの理由しかないから余計に気まずい。しかも多分、ティファは気付いていたのではないかと思うと自然顔が熱くなった。

（……だが、拒絶されなかったんだからよしとするか）

勘づいてなかったら気の毒だが、謝る気は毛頭ない。行為自体を否定などできるはずがないのだ。

ただ、やはり勘づいてないということはないのではないかとアレイズはふと思った。

見開かれたダークブルーの瞳。何かに気付いたように一気に熱くなった頬。迷うような、躊躇うような吐息にそんな風に感じた。

（まぁ、余裕なんて殆どなかったからな。よく見てないんだが）

そう。余裕など一欠片も残ってはいなかった。

「ティファ」

腕の中で眠りこけるティファに声をかける。

（お前には聞こえていたか？　俺が言った言葉が）

勿論聞こえるわけがない。耳を塞いだのは他ならぬアレイズなのだから。

安らかな呼吸を繰り返すティファの髪を撫でる。そうしてやっと

本当の意味で自分の元へ戻ってきたティファを見下ろし、もう一度心の中で呟いた。

（俺はお前が好きだよ、ティファ）

失いたくない、守って、大事にしたい。

ティファが悲しまないように、痛みに喘がないように。

そして自分もまた同じように思われたい。間違っても忘れられたくはない。

今まで自分が抱いていた落ち着かない感情がすとんと音を立てて、心の中の在るべき場所へと嵌り込む。その心地よさに口元を緩め、アレイズはそっとティファの唇に親指を触れさせた。

第四十八話

ティファは無事自分達の手の中に取り戻した。その命も精神も。
そのことに深い安堵感を覚えつつティファを除く三人が前方を睨み据えた。
残る問題はただ一つ、彼らにとって大事な少女に手をかけようとする物騒な巫女姫だけだ。
「さて……とりあえず、どうしよっか？」
メイがリングリングを春日に向け、冷え冷えとした声を発する。
舞い散る桜の花弁に飾られた亜麻色の髪が緩やかな風に揺れ、より一層淡々としたメイの声を引き立てた。その静けさに重なるようにイオも手の平を春日へと向けた。攻撃されればすぐに結界を張り、ティファを守れるように。
三人に囲まれ、あっさりと攻守が交替する。
だがてっきり悔しがっていると思いきや、春日はイオとメイを見て金色の目を細め両腕を上げた。
「警戒することなどないわ」
ひらひらと手を振りつつ立ち上がり、警戒を怠らない二人を無視して袴についた土を払う。緋に触れた白い指先の艶めかしさに気を取られていると、ティファよりも幼い顔立ちがくいと後方に向けられる。
「付いてきなさい、その人をわらわの家に連れて行きます」
「……そんな危険なこと出来ると思っているのか？」
力無くもしゃんとした声にアレイズが警戒心を露にして答える。
メイもイオも同感らしくその場から動こうとしない。当然だ。下手をすればティファが殺される所だったのだから、これでもまだ警戒し足りないぐらいだ。マイがいようものなら背中を見せた瞬間モーニングスターを振り下ろしているだろう。
背を向けすたすたと歩いて行く春日に更に何か言い募ろうと口を

開く。だがそれは綾によって止められた。
「綾？」
問うと大丈夫というように首を振る。
「大丈夫です。あの方は一度敵対心を失った相手に刃を向けることなどありませんから」
「……」
深い黒の瞳が理知的な光を宿してティファに向けられる。アレイズの腕の中でくったりしているその体は軽く、大丈夫だと知っていても不安がよぎる。
（確かにティファをどこかで休ませたいとは思うが……）
しかし、だからといってあんな危険因子と行動を共にしてもいいものか。
沈黙し数瞬思案する。
春日が危険なことに変わりなどない、が。
「分かった」
「え、付いて行っちゃうんですか？」
頷くアレイズにメイが素っ頓狂な声を上げる。
「あぁ。どの道俺とティファには次元転移も効果が無いと証明されている。この上どうこうしようとは思わんだろう」
「……まぁアレイズさんがそう言うなら」
「次元転移以外なら僕達でも防げるか」
さらりと自分が優位に立っていることを口にし、そのまま春日についていく。その背中をメイが渋々、イオが若干不機嫌そうに付いてくる。……イオの場合はティファの居場所が不満なのだろうが。
ともかくも二人とも綾の言葉自体は疑っていないようだった。先程春日の前に立ちはだかったことが大きかったのだろう。かくいうアレイズが春日についていくのも綾の言葉があったればこそだ。
一度ティファを抱えなおし慎重に歩く。
大きく揺れたスカイブルーにイオが何か言う気配を感じたが、メイが止めたのか声をかけられることはなかった。

「ティファ様が起きたらどうするんですか！」
「……ごめん」
どんな剣幕だったのだろう。こそこそと小さな声で飛んだ叱責に素直に従うイオは、しかし決して従順さなど感じられない殺気を孕んでアレイズの背中を睨んでいた。ぴりぴりと突き刺さる殺気。だがそれもアレイズに優越感を感じさせた。
何だこういうことだったのか、と目から鱗だ。
（腹が立つなら取り返してやればいい）
イオの腕の中にいようとどこにいようと、自分が取り返せば話が早い。
そうすれば嫉妬せずにいられるのだ。ティファとしては迷惑極まりない話だろうが、そこは神の花嫁なのだからと納得してもらうしかない。彼女にはもう少し自分の我儘に付き合ってもらおう。
小さく笑いぴったりと体を引き寄せる。触れる温かな熱に酔いしれるように目を細めた。
そこで自分達が次第に町の最奥部へと近付いていることに気付いた。
「ここは……」
徐々に密度を増す木々の中をくぐり抜けると、やがて巨木が一本立っている開けた場所に出た。見れば中心に木造の平屋がある。一人で生活するには広すぎるそれをまじまじと見ていると春日が引き戸に手を掛けた。
「ここがわらわの家よ。言っておくけど、靴は脱いでよね」
「靴？」
三人のブーツを見て顔を顰める春日にメイが首を傾げる。彼女としては何故そんな手間を掛けなければならないのか理解ができないのだろう。聖大陸には靴を脱いで家に上がるという習慣がそもそも存在しない。仮に靴を脱ぐ時があるとすれば就寝時か風呂に入る時ぐらいのものだ。無論アレイズも例外ではないが、ここは春日に従うべきだと判断した。郷に入れば郷に従えだ。

だがメイを説得する前に綾が口を開いた。
「家の中にあがる時は靴を脱ぐのがアズマの常識なんです。床が汚れちゃいますし」
「え？　そうなの？」
そっと囁くような説明にメイが目を丸くし「へぇー」と家を凝視する。それなら掃除も楽だとか考えているのだろう。普段泥だらけで帰って来るティファのことを思い浮かべながら。
引き戸がさっと開けられる。飛び込んできた玄関は思ったよりこじんまりしており、木の色がより際立った壁が遠くまで続いていた。
「お、お邪魔します」
やはり慣れないのか、多少緊張しながらメイが靴を脱いで家に上がる。
アレイズもそれに続き、足裏に感じる冷たさが与える違和感に慣れるまでぎこちなく歩いた。まるで素肌を晒しているようで、どうにも慣れる気がしなかったが。
ただ広いだけで町にある家と同じ外観だと思っていたは家はしかし、全く違う構造になっていた。
綾の店を訪ねた時や道を歩いて目に入ったものとは違い、この家には廊下というものが見当たらない。少なくとも玄関を入ってすぐの場所には存在しなかった。代わりにだだっ広い部屋がある。家具は見当たらず、どうやらここが居間でないことは分かったがかといって何の部屋かは想像もつかない。
薄い色の木で形成されているせいか、濃い木材の匂いが鼻腔をつく。聖大陸の家とは全く違うなとぼんやり考えている間にも春日はさっさと部屋を通り抜けていく。
「こっちよ」
先導され素直についていく。
そうして部屋を抜けた先にようやく見えた廊下を歩いていると、壁とは違うものが目に入った。
細い木枠に嵌めこまれるようにして、厚い紙が部屋を仕切ってい

る。襖だ。

（聞いていたより華やかだな）

以前元アズマの老人に聞いた時は、ただ白いだけの紙が貼りつけてあると聞いていたのだがあれは襖ではなく障子だったか。どちらも部屋を仕切るものと認識しているのでアレイズにはいまいち違いが分からないが、少なくとも目の前にあるのが老人が言っていたような代物ではないのは理解できた。襖にしろ障子にしろ、これほど華やかな絵が書かれているなど聞いたことがない。

否、華やかというのは語弊があるかもしれない。色としては極めて地味なのだ。

やや黄味がかった紙を飾る絵は薄墨によって書かれたものだった。しかしそこに描かれるほっそりとした柳の木も椿の花も、まるで生きているかのような力強さを感じさせる。別の襖に描かれているあれはドラゴン――龍だろうか。グラドにいたゼルとは違い随分と細い体躯だが、天高く飛翔する様は神々しさすら感じさせる。あれも神なのかもしれない。

「本当に文化が違うんだね」

イオが感嘆の息を吐く。それにメイがこくこくと頷くと、綾がふっと笑った。

「聖大陸にはこういったものはないんでしたね。私達からすれば当たり前にあるものなんですけど」

「私達の家のドアは木で出来てるし、こうやって色々描いてはいないんだよね。それにこれとは違ってドアノブがあるし……。何だかすごい所に迷い込んじゃったのかもしれませんね、私達」

「迷い込んだというか、送り込まれたんだがな」

物珍しそうにきょろきょろするメイに溜め息混じりに返す。

確かにアズマの文化には興味があるが、今はやるべきことがある。

一刻も早く帰ってダグラスを見つけるなりレイナへの手がかりを探さなければ。

（会うのが得策なのかは分からないが……もう後戻りはできないし

な）

それに訊かなければならないこともある。

自分だけでなくイオもメイも、そしてティファも同じ気持ちだろう。マイは……彼女だけは連れて行くのが恐ろしいので、できれば同伴させたくないのだが。放っておけばティファのために世界の意志であろうと関係なく殺しそうだ。

「ここよ。入りなさい」

考え込むアレイズの前で春日が止まり、襖に手を掛ける。すす、と音を立てて横に引くと「おぉ」とイオとメイが感心した声を上げた。

「これ本当にドアだったんだ」

「あの緑色のは何？　綾のお店にも似たのがあった気がするけど」

「あぁ、同じものですよ。ここの畳は良い草を使っているので色も匂いもちょっと違いますけど、絨毯に近いものだと思ってもらえればいいです」

襖が開いたと同時に飛び込んできた匂いはどこか懐かしく、暖かい。

「慣れない匂いだろうでしょうけど、毒物じゃないから警戒する必要はないわ」

立ち止まったまま歩を進めないアレイズに春日が小さく笑って付け足す。

別に警戒はしていないのだが。

口を引き結んで部屋へと入る。廊下とは違った感触が足に伝わり、とてもくすぐったい。その反応がおかしかったのか春日はますます笑いながら部屋の奥にある襖を開けた。

「本当に何も知らないのね。それでもノルマンの仲間？」

「だから違うと言っているだろう」

「そうかもしれないわね。それよりほら……よい、しょっと」

声を掛けて勢いをつけ、春日が大きな白い布を抱えて戻ってくる。綾がさっと駆け寄って二人で広げると、それはふかりと柔らかそう

な寝所に変わった。恐らくは布団だろう。アズマにベッドなどというものがあったとは聞いていない。

「早くその子を寝かせてあげなさい。その間に貴方達に色々聞かせてもらうから」

「……あぁ」

ベッドでない場所にティファを寝かせるのには抵抗があったが、元々寝袋に包まって眠るような生活もしていたのだから今更というものだ。少なくとも寝袋より寝心地がいいに違いない。そう考え、清潔そうな布団の上にティファを横たえた。手の甲に微かに触れたシーツの柔らかさにとりあえずはほっとする。……ほっとして、愕然とする。ここまで自分は過保護だったのかと。

静かな寝息に悟られないようやや急いた動作でティファから手を離す。

今まで触れていた熱が消え、急激に寒くなる。無論それは気持ちの問題でしかないが、アレイズは耐えかねてそっとティファの前髪を撫でた。イオに見られないよう、あくまで一瞬だけだが。

（ゆっくり休め）

起きればまた面倒な話が山積みだろうから、せめて今は。

優しい色を浮かべるアレイズの横顔に、ティファが小さく笑うように口元を綻ばせる。手が気持ちよかったのだろう。額を摺り寄せる姿が今まで以上に愛らしく思え、アレイズは自分の感情が行着く所まで行ってしまったように思いながら渋々手を離して立ち上がった。そんな彼を春日が呆気に取られて見ている。まさか、今の顔が見られたのか。

「さぁ、訊きたいことがあるんだろう？　訊いてやるから部屋に案内しろ」

ここでは話をする気にならないと告げ、その金色の瞳に挑戦的に笑いかける。

もっともそれは照れ隠しに過ぎず、全てを理解していた春日に笑い返されてしまったが。

「分かったわ。ここでは何だし隣の部屋で話しましょう。綾、あなたは」
「はい。私が彼女の傍についています。ですから皆さんはどうか春日様と」
促す言葉を最後まで聞かず綾が頷く。
ティファに何かが起きた時のため、傍に付いているつもりだろう。正座して座り込んだ彼女は三人を見送るように頭を下げた。そうされると誰も否やを言えなくなり、イオとメイは不承不承といった体だったが隣室へと移動した。
隣室もティファが寝ている部屋と同じく、畳の敷かれている広い部屋だった。違うのは背の低い木のテーブルが置かれていることぐらいか。丸いそれの傍に座り四人で向き合うと、やけに距離が近く感じられて落ち着かない。
「で？　訊きたいことって何？」
そんな距離感への違和感もあってか、メイが多少棘を含んだ口調で春日に問う。主であるティファに手を出したことをまだ許してはいないのだろう。それは無論この場にいる誰もが同じなのだが。
普段高めの声を捨ててドスの効いた声を出すメイに、アレイズはビビッド大陸に来てからこちら鳴りを潜めた無邪気さを懐かしく感じた。常ならばこういう役はマイが請け負っているのだ。そしてブレーキ役がメイ。だというのにメイは今姉の代わりにアクセルを全開まで踏み込んでいる。
（いや待て。じゃあ誰がメイを止めるんだ？）
ふと考えぶるりと身震いをする。
止める者などいようはずがない。そんな結論に達したせいで。
助けを求めるようにイオを見やる。彼の持つ碧眼もまた、同じような色を湛えてアレイズを見ていた。……要するにどちらにも手が出せないということか。
メイは春日に、アレイズとイオはメイに対して緊張感を漲らせる。
それを払拭させたのは肩を竦めた春日だった。

「まぁ、そう警戒しないで。……わらわは貴方達が本当にノルマンの仲間でないと確信を得たいだけよ」
「随分譲歩してもらったものだね。でも証拠なんてないよ」
軽い口調で言った春日にイオが答える。事実証拠などなかった。
この場にノルマンでもいれば話は別だろうが、いたらいたで事態が混乱するだけだろうということも分かっているのでいなくてよかったという気持ちの方が大きかった。もしここにいたらグラドでの話を問い質している所だ。いや、下手をすれば手が出かねない。……ノルマンはよりによって神と聖女から契約を奪おうとしたのだから。
思い出せば出すほど怒りがこみ上げるが、ぐっと我慢する。こんな遠い大陸で鉄槌を下すには無理がある。
春日もイオの言葉は理解していたらしく、証拠を出せとは言わなかった。
代わりに立ち上がり、すり足で傍にあった棚から何やら丸い物を取り出した。
あれは球だろうか。
「何だそれは？」
「これ？　わらわのセラフィムよ」
硝子でできた球体を指さしつつ尋ねると、至極あっさりと言われてしまった。今まで何度となく聞かされてきた言葉に一同目を丸くする。
「ねぇ、あんなにあっさり出しちゃいましたけどいいんですか？」
「俺が知るか。大体セラフィムって何だ」
「ティファのおかげかな？　それにしてはカスガの態度の変わり様がおかしいというか……」
お互いの腕をつつき、そんなことまで言い出す始末だ。
加えて三対の視線を浴びせられ、春日は「うっ」と怯みつつ腰を落とす。
「な、何よ。敵じゃないならセラフィムを見せても大丈夫でしょう

？」

「それはそうだが……」

気丈な言葉に力なく答えるものの、どうにも尻すぼみになってしまう。いくら信用されたとはいえ、こうも手の平を返されたようだと何か裏があるのではと勘ぐってしまうものだろう。

だがその間にも春日はセラフィムと呼ばれる硝子の球体を三人の前に掲げた。硝子越しに金色の瞳が揺れる。すると波打つように球体が光を放ち、春日の手を照らした。眩いばかりの金色だ。透明だった頃は水晶球のようだったというのに。

誰からともなく感嘆の息を吐く。聖大陸にある神器に似た荘厳さに口を挟む余裕などなかった。その耳に聞こえる微かな呟きは春日が放っているものだ。スペルのような響きに肩が強ばる。一度諦めたかのように見えても攻撃を仕掛けられたこともある。自然警戒心が増した。

メイが片膝を立ててリングリングに手を伸ばす。

その手にイオがそっと自分のそれを重ねた。

「？　イオさん？」

「大丈夫だよ。あれは攻撃性のあるスペルじゃない」

「でも――」

「しっ」

首を振るイオになおも言い募ろうとするメイの唇に人差し指を当てて黙らせる。そうしていると仲の良い兄妹のようだったが、アレイズは二人からすぐに目を離すことになった。メイの唇に当てた指。それがセラフィムへと向けられる。

「……あ」

目を離していた隙に、セラフィムの色は変化していた。

それは音のない緩やかな変化だったが、確実に異なる何かへの変貌を遂げていく。黄昏に似た金色からアメジストのような深い紫へ。昼から夜へ暮れていくように。それはセラフィムにどんな負担を強いるのか、球体の中身が揺れ歪みが生じていく。否、あるいは負担

ではないのかもしれない。
「……」
歪みから情報を引きずりだそうとでもいうのか、春日が真剣な表情で球体を凝視している。アレイズには何も見えないが。
（彼女には何かが見えているのかもしれないな）
恐らくはそれが、自分達がノルマンの手先じゃないという証なのだ。もしくは手先だと証明する何か。願わくば早々に前者が出てきてくれることを祈る。身に覚えがないのに手先になどされたらたまったものじゃない。
息を詰めて三人が春日の動向を見守る。
「……ふぅ」
やがて溜息と甲高い音を最後にセラフィムの色が元に戻っていく。尖った光が細く消えていく様を眺めていると春日が晴れやかな笑顔を三人に向けた。額には汗がにじんでおり前髪が貼りついていたが、彼女はそれを気にした様子もなく「終わったわ」と告げた。
「貴方達、本当にノルマンの仲間じゃなかったのね」
「当然だ」
「散々そう言ったのに」
けたけた笑われアレイズもイオも憤懣やるかたない様子で毒づく。内心ではこれ以上戦わずに済んだことに安堵していたが、こうもあっさり信じるぐらいならばもっと早く信じていればよかったのだ。
（ともあれこれでティファの身の安全は保証されたわけか）
体力的にも精神的にも疲弊したティファをこれ以上動かすのは忍びない。それに自分達もビビッドに来てからこちら気が休まることがなく疲れているのだ。ここで落ち着けるのならばそれに越したことはない。
だが誰もが人心地つく中、一人メイだけが眦を吊り上げた。
「何で最初からそれ使わなかったの？　そうすればティファ様やアレイズさんだって遠くに飛ばされずに済んだのに」
それはアレイズも気になっていた。

こんな家の中にまで招き寄せて真偽を確かめるよりも、出会ってすぐに使えばいいものを。

神二人が役に立たないと思い込んでいるのだろう。いつまでも警戒を解かないメイに春日が笑い声を上げる。

「あら、だって本当に敵だったらわらわのセラフィムが奪われてしまうじゃない」

「それはそうだけど、そんなのそっちの都合でしょ！」

もっともな意見だ。

「……メイ、やめておいた方がいいよ。どうせ何言っても聞かないし、今更だから」

それも正論だがもう少し言い方を考えた方がいいんじゃないか。

自分達の今までの苦労を思うとメイの肩を持ちたくなり、アレイズは内心でイオに突っ込みながらもあえて何も言わずにおいた。メイには賛同するがイオの言う通り今更な話だ。それに今止めねばメイが血の雨を降らしにかかってしまう。いくらなんでもそれはまずい。

リングリングに手を掛ける剣呑なメイドをさりげなく二人がかりで止める。それに気づいているのかいないのか、春日はすぐに真剣な面持ちになった。

「それはそうと。貴方達はノルマンを知ってるんでしょう？　セラフィムで見たわ」

ノルマンという言葉に込められた嫌悪感と敵意にメイがぴくりと指先を震わせたのが分かった。しかしすぐに春日の表情に何を思ったのか、耐えるように目を閉じてから座り直した。

「そうだよ。だって私やティファ様は、ノルマン様に連れられて大聖堂で育ったんだもん」

あっさり頷きノルマンとの関係性を語るメイを、アレイズは微かな驚きと共に見ていた。

（てっきり隠すと思っていたんだが）

無論セラフィムによって映しだされたという春日の言葉が正しけ

れば、メイがどう偽ろうと悟られるだろう。しかし虚言だけが武器ではない。時として沈黙が最強の武器となることもあるのだ。主を傷つけられ激しい敵愾心を抱いているメイは沈黙を貫き通すと思っていたのだが、彼女はアレイズが思っていたよりよほど大人であり気持ちの切り替えが早かった。

あれはあれ、これはこれと割り切った様子のメイは既に滾らせていた敵意を抑えこんで凪いだ視線を春日に向けていた。今この情報を共有する必要性を、彼女は誰より理解しているのかもしれない。理性か、或いは本能で察して。

「そう」

素直に話に乗ってきたメイに薄く微笑み、春日が頷く。

「そして今寝ているあの娘――ティファニエンドは何らかの形でノルマンに狙われている。そうでしょう？　企みは失敗したようだけど」

「……そこまで見ていたのか」

彼女が言っているのは恐らくグラドでの話だろう。

プラクトへ向かう道すがら、イオからあの時の黒幕については話を聞いている。自分とティファの繋がりを奪い、神を手にしようとした愚かな人間達。

（次に会ったら容赦しない）

ぎり、と歯を噛み締める。

そのアレイズの隣でメイもイオもセラフィムを凝視し、今は光なきそれに秘められた力を思っているようだった。時も場所も超えて事実として起こってしまった事態を透視するのは神にもそう易々とできることではない。

沈黙が驚愕を引き連れて室内に満ちる。

その中で春日はしゃんと顔を上げ三人をぐるりと見渡した。

「ノルマンはきっと貴方達にとっても敵となるわ。今にきっと、奴は手を出してくる」

「……」

「だからそれを阻止するために、わらわと手を組んでみない？」
くすり、音を立てて吊り上がる赤い唇の不敵さに三人が言葉を詰まらせる。先程まで敵だった相手に今度は味方になれというのか。あまりにも潔すぎて文句を言う気も起きない。
「？　どうしたの？　悪い提案じゃないと思うのだけど」
あまりに長い間黙り込んでいたせいだろう。
バツが悪そうに、けれども意見を取り下げる気もないとばかりに鋭い声で問われる。凛とした響きが引き金に鳴り何か言わなければと口を開く。
「手を組むとは？」
文句を言うべきか頷くべきか考えあぐねている二人の代わりにアレイズが問う。
するとようやく反応を得られ、春日が満足気な笑みを浮かべる。セラフィムを胸に抱きかかえ、指先で撫ぜる。透明な光が、撫でられる時だけその艶を隠す。春日の持つ金色も瞼に隠された。
しんと室内が静寂で埋まる。
痛々しさや白々しさよりもどこか粛然としたそれを受け入れると、目を開いた春日が三度笑んだ。だがそれは不敵さでも快活でもなく、淡く親密さを含んでいた。
「先に町に寄った軍隊がいたでしょう？　あれはノルマンが放ったものよ」
「あれをノルマン様が……？」
「そうよ。そしてわらわは」
途切れた声。続く言葉には万感の想いが込められていた。
「わらわは奴等から、セラフィムを取り返したい」

第四十九話

澄んだ、青い匂いがする。

今まで嗅いだことのない、けれどもどこか懐かしい香りに包まれてティファは自分の心が柔く解されているのを感じた。感じ、自分が緊張していたことに気付く。いつからか――グラドで捕らえられた時か、それともプラクトを訪れた時からか。分からないが、知らず知らずのうちに心には幾重もの壁を張り巡らせ、凝り固まっていたらしい。

思考に靄がかかっていたような違和感が薄れていく。

枷が外れ、自由になるこの感覚は契約神が隣に居てくれる時のそれに似ている。

（ジュード）

自分の心の叫びを聞いていつだって助けに来てくれる、自分だけの契約神。

殺されかけ、呪いをかけられたあの幸薄い神はいつもティファのことを考え、大事にしてくれた。

ちり、と頭が痛む。あるいは痛むのは心かもしれない。

（私は世界を殺したいと思ってしまった）

憎くて、忌々しくて、消し去りたいと思ってしまった。願ってしまった。

記憶が静かに蘇っていく。その都度襲う罪悪感と痛みはティファの心を壊さんと鎌を振るっていたが、もう叫びだしたりはしなかった。代わりにひどく静かな気持ちで自分を客観的に見て、認識する。この身体は世界を殺す凶器。これだけはどんなに否定しても変わらない。胸の中に殺意と怨毒が宿っている限り器としてのティファは世界の死を願って動くのだから。

（でも、私はそれを許したくない。レイナが死ねばジュードが悲しむのに）

どれだけ永い眠りに就いていても忘れずにいたのだ。会いたいと願う気持ちも一入だろう。そんな彼と共に行動するティファがレイナを殺してしまうわけにはいかない。自分も彼も、世界に会うために契約してレイニウム大聖堂を出たのだから。

返り血で濡らされた室内を思い出す。

折り重なるように倒れる両親の姿を、枯れたアリシアの花を。

そしてティファは最後に一度だけ鋭い痛みを胸に取り込んでから、それらに別れを告げた。

（私は人で在りたい。……だから、探そう。私がそう在れる道を）

殺したい。本当なら今すぐにでも殺して復讐してやりたい。

だがそうしたくないと思う気持ちも本当だ。

ならば探すしかない。

それは例えば憎しみを消し去る力でも、何でもいい。いざという時理性が保てさえすればそれで。

（ジュードにも話さなきゃ）

世界に会う旅をやめることはできない。ティファがアレイズから離れて世界から遠ざかるのも一つの手だが、一人になった途端復讐心が芽生えそうで怖かった。自分がレイナを殺したくないと願うのは、ひとえに彼がいるからだ。だから彼が傍に居なければこの気持ちも持続しないような気がした。それに彼が他の誰かと契約する様を想像するのは、なんというか嫌だった。

（そういえばジュードはレイナをどう想っているのかしら）

会って、訊きたいことや願いたいことがあると彼は話していた。

だがそれだけではないだろう。

レイナの話をする時のアレイズを見ていて、ティファは直感的にそう察していた。大事に想っているのだと知り、だからこそ自分も二人を会わせてあげたいと願ったのだから。無論、彼の人間に戻りたいという願いを叶えてあげたいと思ったのもあるが。

やはり好きなのだろうか。

ティファはまだ見ぬレイナとアレイズが仲良く寄り添っている図

を想像し、自分でも驚くほどむかむかするのを感じた。消化不良を起こしているような、体のどこかで何か凝ったものが詰まっているような気分の悪さだ。吐きそうになる。

（……何よ）

プラクトの屋敷前でイオに抱きしめられた時、アレイズが冷たい声で放った言葉を思い出す。

今思えば、あれはとても理不尽な言葉だった。

アレイズがレイナを好いているのなら、尚更理不尽だ。いくらティファが神の花嫁といえど、謝られたといえど。

（それに……あ、あんなこととしといて）

光の渦の中でされた行為を思い返し、恥ずかしさにのたうちまわりそうになりながら怒りの炎を燃やす。自分があの時受け入れていたことはこの際棚の一番上に置いておく。

腹が立つと無性に文句を言いたくなり、ティファは闇の中に浸った思考を無理矢理浮上させる。

レイナを殺したいと思ってしまったことを告白するのは、正直とても気が重い話だ。だが、何も事情を知らずにティファが迷い続けている姿を見せられる方はたまったものではないだろうなと思い、うじうじ悩むのは即座にやめた。とりあえず今は文句を言って事情を話して、色々とすっきりさせたかった。

瞼の奥にアレイズの笑顔が浮かぶ。自分を見て浮かべた心底嬉しそうな顔に怒りが薄れそうになり、ティファは自分の気持ちをしっかり保つことに苦心した。

「――ん」

小さな吐息と共に薄く目を開け、眩しさにもう一度目を閉じる。それを何度か繰り返すと、青い香りが濃厚に漂ってきた。意識の覚醒と共に嗅覚も戻ってきたらしい。

「気が付きましたか？」

乱れたスカイブルーの髪を鈎のように折った指で掴む。その横から放たれた声を辿って視線を上げると、アレイズによく似た黒髪が

見えた。咄嗟に文句を口から出さずに済んだのは、明らかに違う性別が故だ。

「あなたは……？」

見慣れない服を身につけた女はティファを見下ろし、ちょいと小首を傾げた。

「あら、言ってませんでした？　綾ですよ、呉服屋の」

「ゴフクヤ……？　アヤ？」

まったく覚えていない。

意識を失う直前に一度ちらと顔が見えた気がするがあれは外だった。一体自分はいつ彼女に出会ったのだろう。

身じろぎするとシーツから太陽の匂いがふわりと鼻孔をつく。その温かさに少し気持ちが落ち着いたが、状況が分からず困惑するのは同じだった。何せ見れば見るほど訳が分からないのだ。

部屋を見渡す。

まず、建物の造り自体が自分の知るものとは違っている。材質も恐らく違うだろう。

苦笑を浮かべる綾に答えられないまま、頭の上に疑問符を浮かべて途方に暮れる。

ここは一体どこだろう。何故自分はここで寝ているのか。

「アレイズや、他の皆は？」

不安なまま口にする。今はただ彼らに会いたかった。

だるい体を無理矢理起こし、仲間を探しに行こうとするティファに綾がそっと頭を振った。両肩をやんわり押され、布団に逆戻りする。

「まだ寝ていてください。あの人達なら今は春日様とお話をしていますが、すぐに戻って来ますよ」

「カスガ……って、さっきいた黒髪の？」

「はい」

頷く綾を見て、ふっと体から力を抜く。邪気のなさに当てられたのかもしれない。

（早く戻って来ないかな）
メイもイオも、もう随分顔を見ていない気がする。早く会いたかった。
光の渦の中にいた影響か、気だるさが体を覆うようにティファから力を奪う。微かな眠気が意識の奥に灯るのを感じながら天井を見上げると、躊躇いがちな声が耳朶を打つ。
「あの、お名前を聞いてもいいですか？」
訊くべきか迷うような声は、自分の名などとうに知っているようにさえ見える。
だがティファは自分がちゃんと彼女に名乗ったかどうかを覚えていない。まさか相手に名乗らせて自分が名乗っていないということは考えられないし、考えたくないが――ありえなくもないのでティファは苦笑交じりに答えた。
「ティファニエンド・グランハートよ。挨拶が遅れてしまってごめんなさい」
いえ、と囁く綾はそれきり黙りこむ。それに甘えティファも口を閉じた。
天井を見つめる。人の気配が希薄な室内で、ただ仲間の帰りを待ちながら。
（――ジュード）
早く会いたい。

◇　◇　◇

「何を言っている」
その頃アレイズは春日の言葉に胡乱気に返していた。彼女が胸に抱く水晶球。それが何であるか話した後に、何故彼女は取り戻したいなどと口にするのか理解出来ない。
小馬鹿にするようなアレイズに春日が目尻を吊り上げる。
「だから、セラフィムを取り返すのに協力してほしいって言ってる

のよ」
「取り返すって言っても、もうそこにあるじゃん」
口を尖らせる姿は愛らしいと言えなくもないが、そこに気を取られる面々ではない。
呆れて黙りこむアレイズに代わり、メイが水晶球を指さした。だが春日はその当然の問いにふんと鼻を鳴らした。
「何言ってるの。いつ、誰が、セラフィムが一つしかないなんて言ったのよ」
「まさか……」
嫌な予感がする。
メイも同じなのだろう。辟易した顔で呟き、しかしその先は言いたくないと口を閉じた。春日から顔を逸らしたのか、ツインテールが揺れる。いよいよ面倒なことになってきたという言葉が聞こえてきそうだ。もっともアレイズも同意見なのだが、この場合面倒とはどの点なのかは判断できない。
嫌そうな顔をする三人に春日がにたりと笑う。何となくそれがティファに似て見えて、アレイズは誰に謝るべきか一瞬迷って結局沈黙を貫きそっと壁を見た。今もティファは眠っているのだろうか。
それが気になった。
(起きたらどんな顔をすればいいんだ)
色々と後ろめたい気持ちがあるだけに、顔を合わせるのに緊張を覚える。気まずいことこの上ない。
だが自分の身の振り方を考える前に春日が面倒な事態を一つ掲げた。
「セラフィムは二つあるのよ。金色のセラフィムと白銀のセラフィムが」
「……やっぱり」
春日の言葉にメイが肩を落として呟く。大体予想の範囲内だった。
対になった神器の存在は聞いたことがないが、巫女姫たる春日が取り戻したいと口にするのだ。今胸の中にあるセラフィムだけでは

存在意義が失われるというのだろう。本来なら勝手にしろと言いたい所だが。

（ノルマンが関わっている以上、火種は放っておいてもこちらに来るだろうな）

既に狙われているのだ。今後も同じ事が起きる可能性は十分ある。ならば春日の言う通り、ここらで手を打っておきたい。本気でこちらを殺しにかかった人間と手を組むのは、どうにも複雑な気分だが。

手首に顎を乗せ観念したように溜息をつく。

そんなアレイズに笑いかけ、春日はふと思いついたように尋ねた。

「ところで貴方達の名前を聞いていなかったわ。わらわは春日……ってそれはもう言ったわね」

どこまでもマイペースな春日は三人の意志などまるで無視して話を続ける。

それに文句を言うべきかと思わないでもなかったが、突っ込むのも衝突するのも疲れるし何の意味もなさないと判断して放り投げるように答えた。

「アレイズだ」

やる気のないアレイズに釣られ、イオとメイも似たように答える。

「僕はイオ」

「私はメイティーナ。メイでいいよー」

机に両肘をつき、ひらひらと手を振る。

そうして名乗りを上げた三人に春日があどけない笑みを見せる。

「分かったわ。それじゃ早速だけどわらわに協力してね？　でないとまた術食らわせるから」

幼い顔に似合わない剣呑な言葉と収束する魔力にメイが「げ」と声を上げる。彼女には魔力を感知する能力はないだろうから、あれは本能だろうか。だとしたら大したものだと言わざるを得ない。今春日が纏う魔力は自分達を別次元に飛ばさんと練り上げられているのだから。

（さっさと帰るはずが、何でこんな話になっているんだ）

早く帰りマイとダグラスを探さねばならないというのに、気付けばビビッドに随分と拘束されている気がしてならない。もっとも時間としては二日しか経っていないのだが、あまりに色々ありすぎて時間の流れが引き伸ばされた気分だ。

はぁ、と息をつく。その吐息に触れ、指輪についた翡翠がきんと音を立てた。

「――っ！？」

ぴんと糸が張ったようにぐいと背筋を伸ばす。咄嗟の動きをイオとメイが不思議そうに見ている。アレイズは二人に何も悟らせないようさりげなく姿勢を戻し、そっと指輪を撫でた。

（起きたのか）

ティファの魔力と共に彼女の状態がつぶさに伝わってくる。困惑も苛立ちも、そして自分を思い浮かべていることも。今までこれほど詳細に相手の心を読み取れはしなかったというのに、今は不思議なほどよく理解できた。読み取れるということは、自分の気持ちもすべて筒抜けになっているのだろうが。

（ティファ）

一人の孤独を噛み締め、寂しい思いをしている彼女にそっと呼びかける。相手の心が震える感覚に、アレイズは知らず立ち上がっていた。

「詳しい話は後で聞く。悪いがカスガの話はお前達が聞いておいてくれ」

「？　それはいいですけど、アレイズさんは？」

「少し用がある」

言うと案の定イオが食いついてきた。

用など、細かく言わなくともティファ関連だとすぐに分かるのだろう。

「はぁ？　ちょっとアレイズ神、君まさか一人だけティファの傍にいようなんて思ってないだろうね。僕だってずっと心配してるのに」

日頃は甘いボーイソプラノにドスをきかせるイオは、膝立ちにな

りアレイズを止める体勢に入る。こちらをひたと見据える碧眼には本気しか感じとれない。またこいつと戦うのか。考え、しかしこちらも譲れないとばかりに肩を竦める。一触即発。そんな言葉が似合う二人の絡みついた視線を、ぶった切るように制したのはメイだった。

「待ってください。アレイズさん、もしかしてティファ様は起きてるんですか？」

「あぁ」

「え、本当かい？　じゃあ僕達も――」

「いいえ」

浮き立ち、立ち上がろうとするイオの肩にメイが手を乗せる。

「イオさんは座ってて、私達は後で行けばいいんだし。話したいって言ってるんだから、二人にしてあげようよ」

「……メイ、何で」

本当はメイこそティファに駆け寄りたいだろうに、彼女は健気なまでの気丈さでアレイズに笑いかける。

「アレイズさんはずっと自分を責めてたから。謝るんなら、私達はお邪魔でしょ？」

「僕だって一応責任は感じてたんだけどな」

「兎になって逃げた神様は黙ってて」

不満げなイオをぴしゃりと黙らせ、メイはもう一度笑みを浮かべる。

「ただね、ちょびーっとでも早めにお話を終わらせてくれると嬉しいなぁって思うんですけど」

心配でないはずがない。主が今どんな状況か、記憶はどうなったのか、怪我はないか、何処も痛くないか、メイは今すぐにでも訊きたいに違いない。両膝に乗せられた、震えるほどきつく握りしめた拳がそれを物語っている。それでも立ち上がらないのはお節介であり、アレイズへの断罪でもあったのだろう。ティファが退行した直後、叱り飛ばしたくなるほど放心して役に立たなかったアレイズへ

の。その証拠に、これ以上ティファを傷つけることがあったらメイは容赦なくアレイズを殺そうとするだろう。神だの何だのと、この侍女は気にもしないのだ。

強い眼差しが彼女の姉のものと被る。だが神さえ屈服させるマイの硬質な強さと違い、彼女のそれはしなやかだ。双子とはいえ意外と似ていないものだと感嘆した。何かに耐える強さは、そう誰もが持ち得るものではない。そしてこんな風に、一切の無理なく笑って見送れる強さも。

あぁ、と頷く。

「分かった。すぐ戻る」

気付けば漏れていた笑みは、誰へのものだっただろう。

考えつつ背を向け、襖を開けてひらりと廊下に飛び出す。部屋は隣だというのに、随分と長い距離に感じられて仕方がない。

“ジュード”

（ティファ）

伝わる心に名を呼ぶことで返す。他に何を言えばいいのか思い浮かばない。

ただ名を呼んで、答えてほしい。ちゃんと自分を覚えているのだと教えてほしい。

床を軋ませて数歩進み、ティファが眠る部屋の前に立つ。襖越しに伝わる二人分の気配に向け、囁くように呼びかけた。

「ティファ」

息を呑む音が聞こえる。それから身を起こしているであろう気配も。

こちらを待つ気配に耐えかねて襖を開ける。

一瞬と置かず視線が絡んだ。ダークブルーの双眸に自分が映る。その瞬間、ティファがふっと表情を緩めた。その安心しきった顔が愛しくて腕を伸ばす。が、綾がいることに気付き慌てて引っ込めた。それに気付いた綾がくすくすと笑いながら立ち上がる。

「席を外していますね」

「……すまない」
バツが悪くなり視線を落とすと、笑ったままの綾が「いえいえ」と言いながらアレイズの横を通りすぎていく。ご丁寧に閉められた襖の音がやけに大きく感じられた。
「ジュード」
今度は肉声で名を呼ばれる。レイナ以外では彼女しか知り得ぬ名を。
深く息を吐き出す。一体何の感情が混ざっているのか判別できないだけの複雑な気持ちを全て吐き出すと、最後に満足感だけが残った。
脳がじんと痺れる。腕を伸ばすと、ティファがおずおずと答えるように手を伸ばした。それを引き寄せて漸く腕の中に抱くと、ティファが体から力を抜き、はにかむように小さく笑う。その頬や首筋が赤く染まっていることは、アレイズしか知らない。

◇　◇　◇

――はずなのだが、その一部始終を見ている者がいた。
アレイズが出ていって数分としないうちに、イオが春日に声を掛けた。
「ねぇカスガ」
「何よ……。本当に何よ」
ニコニコニコニコ。音がしそうな笑顔に春日が「ひっ」と小さく悲鳴を上げて後ずさる。無理もない。笑ってはいるが目だけ怒りが灯っているのだ。むしろきちんと問い返せただけ春日は大物だとメイは感心した。メイもイオと対等に話せるクチだが、こんな彼と話したくない。
金色の瞳でじっとイオを凝視した春日は、ふと隣室に繋がる壁を一瞥して姿勢を正す。何を言われるのかは分かったようで「成程ね」と呟いた彼女はすでに冷静だった。こういう所は本当に度胸のある

娘だ。
　しかし春日を評価する余裕もないのか、周りが見えていない様子のイオはにこにこ笑顔のまま続ける。
「セラフィムで隣の部屋の様子って見える？」
「見えるけど、自分で見ればいいじゃない」
　イオが神であると見抜いているのか、それとも過去の様子から察したのか、イオが透視の力を持っていることを前提に春日が問う。もっともな問いにメイも心の中で頷いた。神器に頼るより、神である自分自身を頼った方がてっとり早いというのに。
　不思議に思っていると、地響きのような低い音が鳴り響く。体を竦ませておずおずと前を見る。するとどす黒いまでの笑みを浮かべたイオが力一杯手近な壁を殴りつけているのが見えた。そのせいで木でできた壁に穴が開いているのも。あんな華奢な腕で、木とはいえ壁をぶち破るなんて。
「結界のせいで、透視ができないんだよね」
　ニコニコニコニコ。
　ひたすら笑うイオに、春日だけでなくメイまで動揺を覚えた。いや、これは戦慄か。
（本気でティファ様とアレイズさんを一緒にしたくないんだぁ……イオさんって）
　態度を見ていて大体理解していたが、これほどとは。
　神に挟まれた三角関係なんて、自分の主も随分厄介な事に巻き込まれたんだなとメイは天を仰ぎたくなった。いくらなんでもおかしなものに好かれすぎだ。
「……はぁ」
　溜息は春日とメイ、どちらのものだったか。
　確認する間もなくセラフィムが再び金色に輝き始めた。
　ゆらり、波のようにたゆたう中身が光となって溢れ出てくる。引いては返し、ざざ、と音を立てながら。
「見せるわよ」

春日がセラフィムを眼前に掲げる。
そこには隣室の――ティファを抱きしめるアレイズの姿がくっきりと映し出されていた。

第五十話

「い、今の何の音？」
地響きのような音にティファがぱっと身を離す。
それを惜しいと思いながらも、アレイズは素直に腕を離した。
「分からん。……だがまぁ、誰も声を上げてないから大丈夫だろう」
「そう、よね。大丈夫よね」
「あぁ」
実際は全くもって大丈夫とは言えない状況だ。
（あの馬鹿、何を壊した）
脳裏に不機嫌そうなイオの姿が浮かぶ。十中八九、この音は彼が何かを壊した音だろう。それが分かっているからこそ、アレイズはティファから距離を取ったのだ。よもや見られているとは思えないが、先程から壁一面を魔力が覆っているのを感じるだけに不安は拭えない。もっとも今からすることを考えれば別に見られていてもいいのだが、邪魔をされてしまっては敵わない。
（しかしな。この状況はどうにも……）
布団に座り込むティファと正座で向かい合う。肩が強ばっているのは言うまでもない。ティファも同じらしく、どことなくぎこちない様子でこちらを見ては視線を逸らしていた。仕舞いには目が合わなくなる。
（き、気まずい）
まさか自分が今から言おうとしていることを察しているのだろうか。そう思うと顔から血の気が引いていく思いだった。引いた後でまたぶり返して熱くなるのが困りものだが。
ダークブルーの双眸がアレイズをじっと見つめている。何か言いたげな視線に問いかけるように返すとすぐさま逸らされた。そんな事を何度も繰り返していると、隣室からとうとう殺気が漂い始めてきた。……やはり見られているのだろうか。ならば急がないと、も

うこうやって二人で話すチャンスはないかもしれない。
「ね、ねぇ……ところで私一体どうなってたの？」
一人焦る中、口火を切ったのはティファだった。伺うようにちらりとアレイズを見て再び視線を逸らすが、彼女の方が余程度胸があると見える。アレイズはこの気まずい空気を打開できてほっと息をつきながら、しかし返答に窮していた。本当の事を告げるべきだとは思うが、直接的に伝えてもいいものか迷う。だが答えないわけにもいかないだろう。下手に隠し事をしてすれ違うのは御免だ。
いつまでも答えないアレイズに業を煮やしたのかティファが真っ直ぐな目を向ける。澄んだ色の瞳を見返し、アレイズはおもむろに口を開いた。
「プラクトからビビッドに転移してきてからこちら、お前はずっと退行を起こしていた」
「退行？」
「あぁ、お前はさっきまで自分が十歳だと言い張っていたんだ」
「嘘！？　私が？　……あぁ、でもそれなら納得だわ。私今までの記憶がないもの」
退行がどんなものかは理解しているようで、ティファはまさか自分がと驚きを隠せない様子だった。視線を落とし深く考え込んでいる彼女の頭に手を置いて優しく撫でながら、アレイズはプラクトからビビッドまで来た経緯を簡潔に説明した。彼女達の敵であるダグラスがマイを殊の外気に入り、強引な手段で契約したこと。自分達のことを思ってマイが自分達と別行動を取る決意をしたこと。ダグラスによってビビッドへ転移させられたこと。そして簡単には帰れないことも。
マイの話を聞いて取り乱すかと思いきや、ティファは冷静だった。否、彼女には分かっていたからかもしれない。自分の侍女がその程度の事なら平気でやりかねないと。
「何だか、私が気絶してた間に色々あったのね」
説明を終えたアレイズに苦笑を浮かべられるだけの余裕はあるら

しい。
「全くだ」
だからアレイズも必要以上に心配せず、大仰に溜息をついて答えた。ただプラクトに行っただけだというのに一年分以上の出来事が詰め込まれたように思われる、短く濃密な時間だった。自分がそう思うのだからティファはもっと強く実感しているに違いない。
「すまなかった」
「何が？」
謝ると、訳が分からないとばかりに首を傾げられた。
「俺が神の紋章の間にお前を連れていかなければあんなことにはならなかった。……すまない」
全ての元凶はあの場所にある。だからもう一度謝ると「何だ、そんなこと」と笑われた。晴れやかな笑みがあっさりとアレイズを赦す。
「どの道確かめようと思ってたことだもの。だから貴方のせいじゃないわ」
「しかし」
「いいのよ。むしろうじうじ悩んでいた自分を後押ししてもらったぐらいに思ってるから」
「……そうか」
「うん。だから気にしないで」
そう言われても、気にしないでいるというのはなかなか難しい。アレイズは途方に暮れて嘆息した。
真面目な話をしているからか、壁の向こうから放たれる殺気が目減りしている。今度こそ気まずさのない沈黙が落ちているせいもあるだろう。アレイズは正座を解き足を崩してから、自分にとって言いづらい言葉を何度も頭の中で反芻した。その前でティファが大きく深呼吸する。
「不思議な匂いがする」
「い草と言うんだそうだ」

「へぇ……」
「ティファ、お前もう体は大丈夫なのか？」
感嘆の息にそう問いかけたのは、会話を繋げようと足掻いただけだ。
だがティファはその言葉に少し考えこむ素振りを見せ、小さく頷いた。
「うん、もう大丈夫よ。魔力だって戻ってるし、退行前までなら記憶もあるから」
「そうか」
晴れやかな笑みを向けられる。久しぶりに見る今のティファの笑顔に頬を緩めると、彼女は何を思ったかすぐに眉尻を下げた。
「ティファ？」
「アレイズ。私ね、世界を殺したいと思ったの」
真名ではなく神としての名を呼んでの独白は、何を意味しているのだろうか。
胸の前で両手を組み、懺悔するように目を閉じる彼女はいつもの苛烈さが嘘のように静かで淋しげで、今にも泣き出しそうだった。
「私、絶対貴方を世界に会わせるって誓ったのに。なのにプラクトで両親を見た時、神ではなく世界に復讐すればいいと思った。皆が殺されてるのに見てるだけで何もしなかった世界が憎くて、殺してやりたくて」
「……ティファ」
「皮肉なものよね。予言された私を殺そうとして皆が死んで、そのせいで私は予言通り世界を殺そうと思ったんだから。世界も何も言わなければよかったのに。そうすれば私だってこんな気持ちにならなかった」
「……」
言葉が出ない。肩を震わせるティファに、何も言ってやれない。
ただ黙ったまま続けられる懺悔に耳を傾けていると、ぽたりと彼女の膝を涙が濡らした。

「でもね、私はそんなの嫌だった。だって、世界を殺したらアレイズはきっと悲しむもの。貴方は私を助けてくれたのに、恩返しもできないで仇を返すなんてできない」

それだけじゃない。濡れた声が耳朶を打つ。

「私だってもう人じゃいられなくなる。そんなの、嫌よ……っ！私は、私は人でいたいのに！」

（あぁ、だからこいつは）

あの時心を壊してまで、アレイズと彼女自身を守ろうとしたのだ。世界の事など関係なしに、ただ自分達のためだけに。そういえばこいつはいつもそうだったとアレイズは苦い気持ちを噛み締めた。いつだって優しかったのだ、ティファは。誰かが傷つくことを恐れ、嫌悪し、幼馴染である侍女に命令という手段を使ってまで止めようとするほど憎んでいた。その彼女自身が誰かを殺したいと思ったのだ。そこにどれだけ強い感情があったかなど想像に難くない。……だというのに、彼女はその感情を抑えこもうとしたのだ。

「アレイズ」

神としての名を呼ぶのは、覚悟の現れだったのかもしれない。

ひたとアレイズを見据える視線を受け止め、沈黙で促す。涙に濡れた瞳に腕を伸ばすことは、まだできない。

「私は人で在るための道を探して、二人を会わせてあげたいと思ってる。アレイズがレイナに会いたがっていることも、大事に想ってることも知ってるから。でもそれは私の都合だし、絶対道が見つかるなんて言えないわ。だから選んで――このまま私と契約を続けるか、終えるか」

それは、このまま行けばもしかしたら世界を殺してしまうという警告だろう。だから一緒に行動していいのか、他でもないアレイズに問うている。恐らくここで契約を終えると告げても彼女は世界を探しに行くだろうが、共に行く道は捨てるはずだ。涙を湛えた強い眼差しにはそれだけの覚悟が宿っている。だが、だからこそアレイズは笑ってしまった。

「何がおかしいの」
「いや」
（契約を終了するかだと？）
剣呑な声が耳朶を打つ。それすらもおかしくて肩を震わせると胸ぐらを掴まれかねない勢いで腕を伸ばされたので、そっとその手を握りしめた。僅かでも力を込めれば折れそうな華奢な腕。こんな体で殺意に耐えていたのだと思うと、無性に彼女を抱きしめたくなった。
（そんなこと考えたこともなかった）
衝動のままきつく抱きしめ、腕の中に閉じ込める。例え自分が何を言ってもティファが離れないように、他へ逃げないように。
「馬鹿な事を言わせたな」
「馬鹿な事って……」
馬鹿と言われて頭に血が上ったのか、ティファが腕の中から逃れようと藻掻く。それを体格差で抑えつけてアレイズはくつくつと笑った。言おう言おうと思っていた、非常に言いづらい話が今ならさらりと言える気がした。否、言わなければならない。今言わなければ、きっともう機会は来ない。
「離して」
ぐいと胸を押す腕の力に負けないようにこちらも腕に力を込め、耳元に唇を寄せる。
「知っていたか？」
膝の腕に座らせ、耳に触れた息に動きを止めたティファの頭を撫でる。
「プラクトの屋敷の前で抱き合うお前とイオを見て、俺が何を考えていたか」
「何を言って――」
「俺はな、嫉妬していたんだ。だからお前の気持ちも考えず強引に転移させた。……お前は謝らなくていいと言ったが、それじゃ気が済まないんだよ。あんな理由で傷つけたからな」

こんなこと口に出来るかと思っていた言葉の数々を吐き出すと、心が軽くなるのが止められない。腕に抱いた体が熱を増すたび自惚れそうになるのも。

顔を見ないように頬をくっつけて話す。お互いの熱を感じられないのは、きっと同じだけ熱いせいだ。こんな風に人に接したことも触れたこともないからよく分からないが、そういうことなんだと思うことにした。

世界を大事に想っていると知っている。そう口にした時のティファの、どこか諦めているような傷ついているような顔が頭をよぎる。そんな顔をさせるほど自分は冷淡だっただろうかと過去を思い返し、ふっと苦笑を漏らした。心当たりが多すぎる。ならば、今伝えなければ。

「春日が俺達を別の次元に飛ばした時」

抱き止めた腕が震える。強ばる体をあやすように背中を撫でる自分の手も、すぐに握り締められた。さすがにここから先は言い辛い。

(平手を食らう程度ならまだいいがな)

もう取り返しが付かないレベルで嫌われるのではと考えると躊躇いが生じる。

それでも、今でなければという想いが何とか喉元まで出かかった言葉を外に押し出してくれた。

「あの光の中でお前に口づけたのは、契約のためじゃないんだ」

本当ならばそんな話、わざわざする必要はない。秘めたままでいても十分だった。口にしたのは、ティファに色々と誤解されている気がしたからだ。自分がレイナを想っていて、だからこそ会いたがっていると。

無論大事に想ってはいる。だがそれは友人としてであり、ティファに向けるものとは違う。そこの所を取り間違えてもらっては大いに困るのだ。それにイオの存在もある。いい加減けじめをつけなければ、本気でティファを奪われかねない。

(それにこれ以上ティファに手を出されては敵わんしな)

その度に嫉妬する方もされる方もたまったものではないだろう。
言葉を止め、ティファの反応を伺う。真っ赤に染まった顔を俯けた彼女は幾度かの逡巡を経て「うん」と頷いた。
「何となくそんな気がした。何でかは知らないけど」
「……そうか」
さすがにばれていたか。
それでも逃げないのは、やはり自惚れてもいいということなのだろうか。
顔から火が出るほどの羞恥に苛まれながらもそう考えたアレイズは、きっと世界で一番滑稽だろう。神が人間に恋など聞いたことがない。しかも世界の敵と言われるような人間を好きになるとは。……これからその二例目が発見されそうな気はするが、あの物騒なメイドと銀の髪の事は今は忘れよう。
ともかく、覚悟を決めなければ。
「ティファ」
自分の声が緊張しているのが分かる。
「何？」
答えるティファの声が緊張しているのも、手に取るように。そこに拒絶の色が感じられず、アレイズは小さく息を吐き出して頬をすり寄せた。すべすべとした感触に酔いそうになる。ずっとこのままでいられたならと思うほどに。ただ抱きしめているだけでこんなに幸せな気持ちになれるのだと、ティファに出会うまで知らなかった。
顔を離して目を合わせる。刷毛で何度も塗りたくったように朱に染まった顔の中で、そこだけ色を失わないダークブルーの目がこちらを見据えた。涙の残滓が張り付いたそれを見て理性が飛ばさなかったのを褒めてもらいたいぐらいだ。
「ティファ」
もう一度名を呼ぶ。
放っておけばすぐに人に喧嘩を売って建物を破壊して、けれども誰よりも優しくて傷つきやすくて放っておけない存在は、唇の動き

だけで自分の真名を呼んだ。それが、自覚すればするほど歯止めの利かなくなる想いを形にした。

「好きだ」

あぁ、やっと言えた。

体中から力が抜ける。細く息を吐き出すと魂が抜け落ちそうで、必死に自分を保つので精一杯だ。そんなに緊張していることを、ここに来てようやく理解した。

世界よりも誰よりも自分はティファが好きなのだと、この一言できちんと通じただろうか。そこが不安だったが、これ以上言葉を重ねる気力がなかった。

アレイズの言葉に、ティファは大きく身を震わせて黙っていた。それも不安を助長するきっかけとなり、アレイズはらしくなく狼狽えてしまう。

（やはり迷惑だったか……？）

一方的に口付けした挙句、想いまで告げられたのだ。もしティファが迷惑に思っていたのなら、とどめを刺してしまった形になる。……刺されたのは自分ということになるが。

「気付くのが随分遅れたがな。だが、自覚してないだけで随分前から想っていたんだと思う。イオがお前と行動を共にした時も、フランベルジェがお前と一緒にいた時も腹立たしくて仕方がなかった。自分の気持ちも知らないまま嫉妬だけしてたんだ、俺は」

言葉を重ね嫉妬心を吐露したのは、沈黙に耐えかねたからだ。

困惑と狼狽を宿した目がアレイズに向けられる。だがそこに嫌悪の色はなく、微かに笑んだ顔が迷惑そうにしていないのが救いだった。

「ジュード……」

真名を呟き、それきり何を言うべきか考えあぐねた様子のティファを見下ろして苦笑する。想いを告げるにはまだ早すぎたのかもしれないと。自分だけ気持ちが膨らんで、相手の気持ちがどうかなど考えもしなかったのだ。当然といえば当然だ。

それにしてもと考える。これが告白というものになるんだろうか。
（よくよく考えてみれば、これだけ長生きしてきたくせにこれが初めてなんだな）
あまり興味がなかったせいもあるが、ある意味これでよかったのかもしれない。どれだけ過去を問われても嫉妬される要素を持っていないということだから。……もっとも、ティファはあまりそういうことを気にしそうにないのだが。
ともかく、これが告白であるならこれからされるのは返事以外の何者でもない。
そう考え、失敗したと自分で自分を罵りたくなった。
（断られたら契約自体危ういじゃないか）
好かれていないのに口付けなど恐ろしくてできたものではない。大聖堂で出会った時ならともかく、今は無理だ。
（最悪だ）
ティファは何も答えない。それこそが答えなんじゃないかと思うと、アレイズは頭を抱えて倒れこみたくなった。それを知ってか知らずか、ティファが顔を上げる気配がした。
「ジュード」
いよいよか。
目を閉じたまま声を受け止める。意を決したようなそれにこちらも覚悟を決めて目を開く。その瞳に己が映されたのを確認してティファが続けた。
「わ……私のこと嫌いになったから怒ってたわけじゃないの？」
硬い声に目を丸くする。
「当たり前だ」
それどころか嫌いだと思ったこともない。
即答すると「じゃあ」と矢継ぎ早に口を開く。
「このまま契約を続けてもいいの？　一緒に世界に会いに行っても」
早口で泣きそうな声を包むように抱きしめる。そうして思うままに頷いた。

「当然だ。俺の契約者はお前一人だと言っただろう。それに、仮にお前がいることで世界に会えなくなったとしても俺は後悔しない」
「え……？　だってジュードはそのために旅を」
「お前がいないのなら意味がない。だから消えると言ったって許さないし、逃げたら追いかけるからな。――そういうわけだから、お前はいい加減観念して俺の傍にいろ」
　契約に関することなら、ここだけは神である自分が有利だ。少なくとも告白の返事を聞くまでは。だからそこだけ偉そうに言ってやると、しゃくりあげる声と共に胸に重みが増した。ティファが自分から身を寄せたのだと、数秒経つまで気付かなかった。
　無言のまま何度も頷くティファの背をさすってやる。すると濡れた声でとんでもないことを言われた。
「ジュードはレイナのことが好きなくせに、何であんなことしたんだろうって思ってた……」
「……あのな、俺がいつそんなこと言った」
「言ってない、けど！　でも大事にしてるんだなって思ってたから」
「それはまぁ、数少ない友人だからな」
　確かに大事だ。それは今でも変わらない。ただ、順位は大幅に変わってしまった。
「友人……？　レイナが？」
「そうだ。だがお前は違う」
　絶対に成り代われない一位。世界がその下に埋もれてしまった以上、その一位が気にすることなど何もないというのに。
　ポロポロ流される涙を指で拭ってやる。そんな所作一つでも自分がどれだけ本気か伝わればいいと思った。
「ティファニエンド」
「は、はい」
　長らく呼ばなかった名を呼ぶとティファが背筋を伸ばす。ぴんと伸びた背を撫でた手で両頬を包むと、思いの外熱かった。
「お前は俺の契約者で仲間で友人だがそれだけじゃない。俺はお前

を一人の女性として見て好きだと言ったんだ」
　これも、本当は言う予定ではなかった。
　ただ言わなければ色々誤解されそうだったので、羞恥心を押し殺して口にする。そうすることで彼女の涙が止まるなら、それでいいと思った。
　大きく見開かれた瞳から涙が止まる。そうしてそのまま固まるかと思うほど長い時間を経て、ティファは静かに笑んだ。透明で優しい、少しはにかむような笑みを。こちらが目を奪われるような、綺麗な笑顔だった。
「ティファ」
「ジュード、私……私ね――」
　必死に言葉を紡ごうとする様から目が離せない。
　顔が近づく。ティファは無意識に、アレイズは意識的に呼気が触れ合いそうなほどの至近距離でお互いを見ていた。他の何も見えないほど、相手のことだけを。
　だから失念していたのだ。膨れ上がる、隣室からの殺気を。
「――っ！　まずい！」
「え？　じゅ、ジュード？！」
　横に倒れこんで攻撃を回避できたのは、ひとえに戦闘経験を積んできたおかげだ。でなければ……。
　先程聞こえた地響きとは比べ物にならない低い破壊音にティファが息を呑む。もうもうと立ち込める砂埃に、何が起こったか判断しかねる様子でもある。だがアレイズには何が起こったか、おおよその見当がついていた。
　砂煙から庇うようにティファを抱く。そうして背後を振り返ると、ゆらりと青い光が見えた。
「やあ」
「……イオ」
　まずいことになったとは思わなかった。
　むしろ来るべき時が来たと言うべきだ。

舌打ちと共に立ち上がり、ティファを背後に庇って立つと青い光――碧眼が凄みを増した。訊ねるまでもなく怒り狂っているのは、やはり部屋の様子を見られたせいか。……真名を知られたのは痛手だが、これも予想済みだ。それでも話を続けたのは自分なのだから。

（それにしてもこいつ、春日の家を壊す気か？　全然遠慮ってものを知らずに魔力を放ちやがって）

惨状につい心が逆立つ。咎めるように睨み据えるが、イオは気にした様子もなくにっこりと笑った。

「ティファを離してもらおうか」

感情を押し殺したようなボーイソプラノが部屋に満ちる。そこでようやく気付いたのか、ティファも立ち上がってイオを睨めつけた。

「これ、まさかイオが？　駄目じゃない、人の家を壊すなんて！」

「アレイズ神が悪いんだよ。僕だってティファの心配してたのに抜け駆けなんて」

「……っ！」

見られていたとは思わなかったのだろう。ティファの顔が一気に赤くなる。……それがますますイオの神経を逆撫ですることを、いつ教えればいいのだろうか。

砂に汚れることのない金髪が静電気でパチパチ音を立てる。

氷の次は雷撃か。本当に容赦のない。

構え、相対する。その前方からメイが怒鳴り声を上げる。

「イオさん！　人の家壊しちゃ駄目だよ！」

「後で修理するから大丈夫」

ティファと違い人のせいにして逃げないのは、そんな事をしても無駄だと悟っているからか。ともかくも適当なことを言いながら歩を進めるイオを追って、メイと春日も部屋に入ってきた。その胸には金色のセラフィムが鎮座している。あぁ、あれかと直感的に思った。魔力の質が同じだ。

（それにしても厄介なものを敵に回す羽目になったな）

相手は高位の神。それもダグラスをも圧倒する力を持つ審判者だ。

加えて言うならティファにベタ惚れしている。性格的にも能力的にも、一番敵に回したくない相手だ。

「さぁ、覚悟してもらうよ」

ペキペキ音を立て、イオの手の平から氷の粒が生み出される。それはやがてお互いの身をすり合わせ、小さな雷を生み出していった。小さいとはいえ、家一軒壊す程度訳ないと小憎らしいまでのイオの笑顔が物語っていた。

部屋の温度が一気に下がっていく。

こちらの戦闘準備ができないまま、イオはやる気だった。

「ちょっと待て――！」

「待たないね」

腕が伸びる。脊髄反射で繰り出した結界を破らん勢いで繰り出された氷の刃と雷撃はしかし、ティファだけは傷つけないように放たれている。その理不尽なまでの冷静さにアレイズも今までの鬱憤を思い出して魔力を練り上げた。

◇　◇　◇

「イオ、アレイズっ！」

「あー……やっちゃった。まぁイオさんも我慢した方かな。それよりティファ様、こっち来て」

二人の神の猛攻に声を張り上げると、駆け寄ってきたメイが慌ててやって来てティファの手を引いた。安全圏に避難させようという腹だろう。だがこのまま安全な場所にいていいものかティファは悩んだ。無論、正しい判断だとは思うのだが。

キィンッ！　甲高い音に耳を押さえる。

「だから止めろと言っているだろうが！」

「嫌だね。君が死んだらやめてあげるよ」

……氷が、雷撃が、炎が踊る。

あの中にいたらいかにティファと言えども無傷ではいられないだ

ろう。袖を引っ張るメイに従い、ティファは深々と溜息をついた。
仲が悪いとは思っていたが、こんなに派手にやりあうとは予想外だ。
理由は……考えないことにしたい。
髪を結んでいた紐がほどけたのか、黒い長髪が魔力の生み出す風に流れるのが見える。その髪の持ち主に言えなかった言葉は、まだ心の中にあるままだ。
（イオが来てくれて良かったような悪かったような……）
そんなことをぼんやりと考えてしまうのは、口にすると相当恥ずかしいことを言おうとしていたせいか。
それにしても、まさかアレイズがあんな事を言うとは思いもしなかった。あんな真面目な顔で、嘘なんてどこにもないと言わんばかりの真っ直ぐな目で。いつもの冷静さが嘘のようなぶつけるような言葉に、ティファは一人顔を赤くする。
（あんなの反則じゃない）
眠っていた時間が長いとはいえ、アレイズはティファに比べると長生きだ。それにあの容姿であれば今まで付き合った女性の一人や二人や三人……では足りないぐらいいるかもしれないが、ティファはその手の経験は一切ないのだ。レイニウム大聖堂にいた時とて、ノルマン以外の男性と話すことはなかった。だというのにあんな風に好意を向けられたらどうしていいか分からない。
（でも……）
あの時のアレイズが純粋に格好良く見えたのは事実だ。抱きしめる腕が強くて優しかったのも。そして、レイナへの好意が自分へのそれと違うのだと言われた時に嬉しく思ったのも紛れもない事実。
だから思わず言いかけたのだ。私も好きよと。
（あぁもう、思い出しちゃ駄目！　絶対駄目！）
たちまち熱くなる体を叱咤し、首を振る。そんなティファの様子を見てメイが複雑そうな顔をしたが、恐らくそれは目の前の戦いのせいだろう。でなければ赤飯でも炊いているに違いない。一番喜びそうなマイがいないのが残念だが、彼女もどこかから見てくれてい

るのだろうか。早く会って訊いてみたい。
『好きだ』
頭にアレイズの声が響く。熱の籠った声が胸を締め付けるような痛みを生んだ。
（そういえばあれって告白なのかしら。だったら……自惚れてもいいのかな）
大事に想われていると、傍にいてもいいと。
自分の感情に戸惑いながらも、契約を続けてもいいと言った言葉に安堵してティファは二人の神々の戦いを見やる。
（好きだって、伝えてもいいのかな）
まだよく気持ちの整理がついていないが、好きだという以外にこの感情を落ち着ける言葉をティファは知らない。
だからただ待った。伝えられる時を。
結果として、随分と長いこと待たされるわけだが。

◇　◇　◇

アレイズとイオの戦いは決着がつかず終いに終わった。
にも関わらず戦いは三日三晩続き、四日目の朝には春日の家はボロボロになってしまう。……それによって強制的にティファ達がセラフィム奪還に手を貸す羽目になったのは言うまでもない。ティファも気持ちを伝えられないまま、セラフィム奪還作戦に参加することになる。
――そうして誰もが想いを抱え込んだまま、五日目の朝が来た。

第五十一話

世界に予言された空を持つ少女の眠りと共に黄昏が目を覚ます。
一つの体に宿る二つの魂。その邂逅の序幕はまだ上がったばかり。

◇　◇　◇

嫉妬に狂った神と応戦する神の数日に及ぶ戦いは、春日の家を完膚なきまでに破壊することでようやく終焉を迎えた。焼け焦げ、燻る家の前に立ちバツが悪そうに顔を逸らすイオとアレイズの頭には大きな瘤が出来ていた。無論春日の制裁によるものだ。いくら修理すると言い聞かせた所で家主の怒りが収まるわけもなく、二人は人間に手を上げられても文句一つ言えないまま黙り込んでいた。

ティファもそれに関しては自業自得だと思う。

第一こちらはアレイズに伝えたい言葉があったのに、どたばたしすぎて結局何も言えなかったのだ。少しぐらい痛い目を見てもらわなければ困る。かといってティファが直接二人を止めなかったのは、やはり体力が落ちていたせいだった。今も少し目眩がしており、メイが隣に張り付いているぐらいだ。

「それじゃ、セラフィム奪還のことを話すわね」

春日は頭をさする二人の事など気にかけずに話を切り出した。頭の天辺で一つに束ねられた黒髪が揺れる。緋色の袴は金糸が縫いつけられており、最初に見た時よりも豪奢だ。どうやらこれが正装らしい。

聖大陸で言う所のローブやドレスに近いものがあるというのに、春日が纏う巫女装束は穢れを知らない清浄さがあった。着飾るというのとはまた別物なのだろう。その証拠に彼女は戦う気満々だ。もしかしたら魔力を高める効果があるのかもしれない。

セラフィムについて全く事情を知らなかったティファも、イオと

アレイズが戦っている間に説明を受けている。そして此度の件にノルマンが関わっていることも。

（ノルマン様は一体何をなさろうとしているのかしら）

自分の親代わりとしてここまで育ててくれた恩義は、確かにある。だが一度裏切りに近いことをされているだけに疑念は膨らむ。少なくとも無邪気に信じるなどという愚かな真似はできない。自分一人ならばともかく、下手をすればアレイズ達が傷つくのだから。

（直接本人に訊いてみるしかないんだろうけど……）

いつかアリアが話していた世界の礎の話も気にかかる。

あの頃は特に注意していなかったが、ここまでの旅を振り返って見た時、実はあの言葉はとても重要な言葉だったのではないかと思えてならないのだ。世界の礎。アリアは自分に何を望んでいたのだろうか。

（てっきり神と契約して、きちんとした聖女としてレイニウム大聖堂を支えてほしいって意味だと思ってたのに）

とてもじゃないがそうとは信じられない。

疑心暗鬼に陥っているとは思う。だが、それでも自分の疑念は正しいんじゃないかとティファは思っていた。……仮にそうだとしたら、アリアやノルマンは自分に世界を殺してしまえと言っていることになるのだが。

（私は世界を殺さないわ。そう決めたんだもの）

ぎゅっと手を握りしめる。緊張した面持ちにメイがティファを見たが案ずる言葉は春日の声にかき消された。

「敵は、ノルマンの甘言に惑わされた傭兵集団」

リィンッと音を立て、巫女装束の袖に付いている鈴が揺れる。

その音に合わせて全員が春日の指差す方角を見るが、そこには遠くに高く聳える山々が見えるだけだ。

「あの方角にいるの？」

「そうよ」

訝ったメイが春日に問うと即答される。

方角としては北北東。山越えが必要な距離かは分からないが、少なくとも山の手前には。

「草原のある方向だな」

アレイズが漆黒の双眸をすっと細めて呟いた。綾が同調するように頷く。

庭を、一陣の風が通り抜ける。

春の訪れを感じさせるその暖かい風が吹いたのを合図に、春日はこちらが目を剥くような凄艶な笑みを浮かべた。

「恐らくセラフィムはすでにノルマンの手にあるわ。急ぎましょう。全てが手遅れになる前に取り返さないと」

聞いている者を催眠状態に陥れそうな、透明な鈴の音が響く。巫女の名は伊達ではないのだとティファは呆気に取られた顔で春日を見ていた。幼い顔立ちにひどく不似合いな艶やかさと無垢な巫女装束、それに鈴の音に誰もが意識を奪われるに違いない。自分達もその一人だ。

歩を進める春日について足を踏み出す。躊躇いも迷いもあったが、気付けば無言のままセラフィムが指し示す方向へ進んでいた。知らず、早足で。

だから順調に行けば一刻とかからず敵陣に入り込めるはずだったのだが。

「いないわね」

「ねぇ、あいつら本当にいるのー？」

草原を奥へ奥へと進んでいく。しかし一向に見つからない人山にティファとメイが首を傾げていた。イオとアレイズもできる範囲で魔力を張り巡らせているみたいだったが、芳しくはない様子だ。少なくともここら一帯に軍隊はいないに違いない。

元々の人数が多いのだ。それほど早く移動できるとは思えないが。

（となると、春日の読みが外れたということかしら）

しかしセラフィムの読みが外れるものだろうか？　仮にも神器だというのに。

「……おかしいわ」
メイの問いを無視し、春日は理解出来ないという風に顔を俯けて前へと進んでいく。その横顔は力ない。彼女としてもセラフィムが別の光景を見せたとは思えないのだろう。ただ、目の前に見えるものこそが事実でもある。草原の何処にも、彼等の拠点はないのだ。
吹く風が熱を失い、どんどん冷たくなってくる。
体を冷やす風に身震いするが、ティファよりも薄着の春日は一向に気にした様子もなく黙々と歩いていく。今の彼女には、温度などあってないようなものなのかもしれない。そう感じるほどに彼女は自分の思考に没頭していたのだ。
南天まで上っていた太陽が月と入れ替わる。それでも春日は歩みをやめない。
「ねぇ、いい加減休んだら？」
イオがそう提案したものの、それも耳に入っていない様子だった。金色のセラフィムを胸に抱いて、それが指す方向へ進むのみだ。既に色を失ったそれが今どこを指しているか、ティファには分からない。ただ巫女である春日だけがセラフィムから発される魔力を感知して読み取ることができるのだ。だからティファもメイもいつしか無言のまま歩き続けた。今はそうするしかないのだ。こちらに手がかりがないのだから。
幸い、旅ばかりしてきたから歩くのには慣れている。
綾が気がかりだったが、彼女も気丈についてきていた。もしかするとこういった荒行に付き合わされるのは一度や二度ではないのかもしれない。多少疲労の色が見えるものの、足取りはしっかりしている。
「……強情だね」
ぽつりと囁いた声にようやく春日が足を止める。
「うるさいわよ、そこ」
しばらくぶりの返答にイオが肩を竦める。だが諌めるような口調と共に、春日はまた歩き出してしまった。どうやら休む気はさらさ

らないらしい。
「あなた達は休んでていいわよ」
だからそう声を掛けられたのは意外だった。
流石に一日中歩き通しだと常人には辛いというのは分かっているらしい。ティファからすれば春日も立派な常人なのだが。
こちらを立ち止まって振り返る春日はティファとメイを気遣わしげに見て反応を伺う。月明かりに濡れるその姿はひどく幼く華奢で、先程見た凄艶な雰囲気が薄れていく。代わりにとても清らかに見えた。義務感と使命感。それが彼女の清らかさを引き立てているのだろうか。
（それだけ大事な物なのね、セラフィムって）
言っても詮無いことではあるし、春日のプライドもあるので声には出さないが、必死に前を見る春日をティファは案じていた。
ちらとメイを一瞥する。亜麻色の瞳と視線を絡ませ、無言のまま二人首を振った。
「駄目よ。奴等の拠点が見つかった時に一人だと大変でしょ？」
「うん。私達ならまだまだ大丈夫だし」
うんうんと頷きながら放つ言葉は軽く、しかし決意を籠めた声だった。
どの道ティファ達もここで引くことはできないのだ。アレイズやイオが春日の家を壊したというのもあるが、それ以上に自分達はノルマンに会わなくてはならない。それも、できればレイニウム大聖堂以外の場所で。
そう考え、ティファはスカイブルーの髪がかからないよう耳にかけ、再び歩き出す。セラフィムが金色に輝き微かに光を放つその方向へ。
「……そう」
微かに笑う気配と共に春日も付いてくる。
きっと春日は何故自分達がこうも付き合ってくれるのか、おおよそ予想できたのだろう。ありがとう。そんな声が聞こえた気がする

が、ティファはそれを聞かなかったことにして先を行く。
後ろを歩くアレイズとはあれ以来話していない。
今は甘い空気に浸っている場合ではないというのもあるし、あの時の勇気が再び湧いてくるかも分からず、どんな顔をしていいのか分からないせいだ。アレイズもそれは同じらしく、彼の方から話しかけてくる気配もない。何となく味気ないが、文句を言っていられる状況でもないのでティファはこれ幸いと目さえ合わせずにさっさと先を進んだ。
そうしてしばらく歩き、月さえも姿を隠しそうな刻限になってセラフィムから放たれていた光が途切れた。
「この辺りか」
後方で立ち止まったアレイズが言い放つ。それに合わせて辺りを見渡す。
光が消えた先は草原のど真ん中だった。
そこにはテントはおろか、人っ子一人いない。野営をしているとは到底思えなかった。
「誰もいませんね」
ティファ達の歩く速度に追いつけなかった綾が、僅かに遅れて立ち止まる。寒いのか麻でできた着物の裾を握り締め、震えに耐えるように目を閉じる。それは同時に何かを見出そうとしているように見えた。彼女に先見の力があることを教わっているからだろうか。
「セラフィムの光が嘘だとは思えないわ」
春日はそんな綾の姿を視界に入れつつさく、と草を踏んで進んでいく。丈の高い草が春日の体を腰まで隠した。
雲に月が隠れる。
途端に周囲が闇に染まり、お互いの姿さえ判別できなくなる。不安感に目を凝らす。するともっとも闇に染まりやすいはずのアレイズが隣に立ったのが、気配で分かった。否、気配ではなく魔力でと言うべきか。指輪を通して伝わる魔力に、誰にも知られないように吐息する。

さわさわと草をかき分ける音がする。耳に入り込むその音を辿って目を向けると、きらりと金色の輝きが放たれた。春日が空に向かってセラフィムをかざしているのだと、球体の高さから窺える。しかしそれもすぐに下ろされた。

「どうしてなの……？」

どうやらセラフィムの反応がないらしい。

加えて体力の限界なのか、掠れた声で呟いた春日はそのままぺたりとへたり込んでしまった。当然だ。旅に慣れた自分達ならばともかく、あんな幼い少女が一日中歩き通しで平気なわけがなかった。止められなかったのは彼女の覚悟が強かったからであって、普通ならとうに止めている。

すっかり萎れてしまった姿に誰も声を掛けることができない。

ティファも何と言うべきか考えあぐねて、結局口を閉ざしていた。が、いる所にはいるらしい。

「大丈夫ですよ、春日様」

春日の隣に並び、綾が声を掛ける。雲間から月明かりが漏れる。自信に満ちた横顔に、こんなにしっかりした人だったかとティファは目を瞠った。てっきり気が弱そうな印象があったというのに。

「どうしてそう思うの」

てっきり気休めを言うなと思いきや、春日は素直に問い返していた。

その素直さに柔らかく笑いかけ綾が前方を指差す。

「さっき、私達がここで彼らと戦っているイメージが浮かびました」

それが意図するところが分かったのか。

「本当！？」

「はい」

ぴょこんと立ち上がった春日が綾に詰め寄る。ポニーテールが大きく揺れ、期待に満ちた笑顔が覗く。子どもらしいその顔には今まで積み重ねられてきたのであろう信頼が浮かんでいた。恐らくは彼女自身そうと自覚していないのだろうが。

綾は春日に恐怖心を抱いている風と聞いている。
だがただそれだけの関係ではないのだと、ティファは優しい気持ちになりながら二人を見守っていた。そんな自分達に春日がこちらを向いた。
「だそうよ。じゃ、後はここで待つだけね！」
「ここでか？」
ふふふ、と笑う春日にアレイズが怪訝そうな声音で問う。
不敵に笑う眼差しには既に力が宿っている。先程まで落ち込んでいたのが嘘のようだと声を上げて笑いそうになった。が、ここで待つというのは少し気にかかる。端的に言えばここは寒すぎるのだ。いくらビビッドが春を迎えていると言っても夜分は冷える。実際綾は寒そうだ。
そう思って黙っていると、何を勘違いしたのかアレイズが顔を顰めた。
「病み上がりのティファをいつまでも外に置いておくのはな」
確かにティファは白いブラウスとスカートといういつもの出で立ちだ。決して厚着とは言えないし、寒いに決まっている。ただ、そう直接的に心配されるとどんな顔をしていいか分からずティファは困ったように笑うしかできなかった。
ただ、いくら寒くとも今帰るのは問題がある。
家ならばイオとアレイズに修復してもらえばいいが、ここまで来るのに随分時間がかかっているのだ。目を離して軍隊が別の場所に移動しても困る。そう考え冷たくなった腕をさすると、ふわりと黒い外套が掛けられた。
「大丈夫か？」
「あ……ありがとう。でもアレイズが」
「北方の出身だからな。この程度は何てことない」
温いそれを引き寄せて問うとあっさり返されてしまった。確かに見た感じ寒そうには見えないが、いいのだろうか。にやにや笑うメイの視線も大いに気になる所だし。

気まずさが払拭されて暖かい気持ちになる。
その気持ちのまま着込んだ外套はやはりとても温かい。
「あ、アレイズ神ずるい！」
二人のやりとりを見ていたのか、イオが剣呑な声を上げる。それにそっぽを向いたアレイズの顔があまりに意地の悪い笑みを浮かべていたので、ティファはくすりと笑い声を漏らした。
（もしかしてわざと挑発したのかしら）
そんな事をしても得などないのに。
「意地悪いのね、案外」
ともすれば赤く染まりそうな肌を笑いの衝動で抑えつけ、揶揄するようにアレイズを見上げる。
「うるさい」
それを見たアレイズが耳まで赤く染まっていたことを知るのは、きっと自分ぐらいのものだろうと思うとますますおかしかった。

◇　◇　◇

結局、その日は草原で野営をすることになった。
元々食料は準備してあるので、水などを汲みに行く必要はなかった。そこは救いと言えよう。ここで小川を探せなどと言われてもどだい無理な話だ。
「寝る場所はどうしましょうかしらね」
唸りながら春日が首を捻る。きっと野宿そのものをしたことがないのだろう。困り切った顔がそれを物語っていた。
しかしそれにはメイが笑って答える。
「あぁ、それなら大丈夫大丈夫。よい、しょっと」
言いながらドシンと地面に鞄を下ろす。
その中をごそごそ漁っていたかと思うと、メイは突然勢いをつけて鞄から何やら取り出した。
大きな布と棒は、テントだった。

そういえばとティファは目を凝らして鞄を見る。あれは確かいつもマイが持っている鞄ではなかったか。

「君の鞄の中って一体……」

イオが心底呆れた声で呟く。

それにえへへと恥ずかしそうに笑い、高い音を立てながらてきぱきとテントを組み立てるメイに疲れた様子は見えない。

「姉さんがいない分一杯持つ羽目になったからちょっと重かったんだよねー」

「いや、重いとかそういう次元じゃないから」

まったくだ。

元々体力があると思っていたが、まさかあれほど重量のある荷物を持って一日歩いていられるとはティファも予想外だった。魔術師というのはかくも根性があるものなのだろうか。メイはとっくに血が薄れているはずだが。

ともかくも出来上がったテントに各々寝転がる。

大きめのテントは全員が入ってもまだ余裕があるほどで、ますますメイの腕力に感嘆する。

しんと静まり返った草原に、他に人の気配は感じられない。ノルマンに雇われたのであろう傭兵集団もまだやってこない。この様子では今晩中には来ないだろう。

「イメージではとても明るい場所でした。恐らくは昼頃だと思います」

誰も抱く疑問に答えるように綾が囁く。

それを信じ、各々目を閉じて眠りに就いた。

ただ一人、ティファを除いては。

「……」

隣からメイの寝息が聞こえる。やはり疲れたのだろう。熟睡する彼女を起こさないようにティファはそっと溜息を漏らした。

（全然眠れない）

眼を閉じても全く訪れない眠気に辟易する。体はくたびれている

のに、目だけが冴えて眠るどころではなくなってしまった。
無論目まぐるしい展開に心が追いついていないとか、緊張しているとかそういうわけではない。頭の中で響く声。別の誰かが話している声が気になって仕方がないのだ。幻聴に過ぎない声は、あの時聞いた声と同じだ。
『貴方は……』
閃光の中、絶望的にそう言った声が頭から離れない。
（あなたは、誰なの？）
何故自分の中にいたのか、辛そうな声をしているのか。
問いたいことは山ほどある。けれど脳に響く声に手を伸ばそうとした瞬間、激痛がティファを襲った。
「痛っ……！」
ガンと刺されたような感覚に頭を抱える。その鋭い痛みに耐えかね、ティファは気絶するように意識を失った。

◇　◇　◇

「……」
血溜まりの中に佇み、四角く切り取られた光景をじっと見上げる眼差しがふいと隣に立つ銀髪の男に向けられる。アーモンド型の大きな亜麻色の瞳は静かに、しかし嬲るように男を見て問いかける。
これはどういうことかと。
じゃら、と鉄球と持ち手を繋ぐ鎖が揺れる。獲物のモーニングスターをちらつかされ、男は肩を竦めた。
「俺にも分からんよ、マイティーナ」
軽い口調にマイの亜麻色の瞳が怒気を孕む。
「ティファ様は解放されたはずです。貴方もそう言ったでしょう、ダグラスさん」
「あぁそうだ。確かにティファニエンドは解放された。退行も治り、あの亡霊といちゃつくぐらいに回復した」

「下世話な話はしないでください。それで、解放されたのにあれは何なのです」

「だからそれは俺にも分からんよ。あれの正体は伝えただろう？俺に理解できる類のものじゃない」

気絶したように眠りこけるティファに目を向ける。そこからはただ彼女の事しか見ないマイに業を煮やしたのか、断ち切るようにダグラスが魔法を打ち消した。すぐさま向けられた殺気に満足気な顔を浮かべるダグラスは真性のマゾヒストなのではないかと、マイは最近になって真剣に考え始めている。人を怒らせて満足しているのだから、本当にとんでもない男だ。

一歩足を踏み出す。ブーツの踵が鈍い水音を生んだ。

最初のうちは嘔吐感を拭えなかった血臭も、今ではすっかり慣れてしまっていた。

その身に浴びたのは神の返り血。レイニウム大聖堂の人間に知られたら罪深いことをと罵られること必至な行為に身を浸し、それでもマイは正気を保ったままダグラスを見据えた。

「教えてください」

何度目かの言葉を口にする。一度は秘術について尋ね、一度は神の弱点について尋ね、一度は魔法を跳ね返す術について尋ね、一度は魔法の使い方そのものについて尋ね。そして五度目のこの問いにも、ダグラスは寛容に頷くのみだった。

「答えよう」

マイを愛おしむような眼差しは、この場にはひどく不似合いだ。

プラクトから少し離れた森の廃墟で神を迎えては返り討ちにしてきた自分達には、ある意味ではお似合いなのかもしれないが。

あれから、一体どれだけの数の刺客を屠ってきただろう。

既に数えることをやめて久しい。

今から思い出そうとした所で、正確には数えられないに違いない。

それだけの数の血を浴びて、ようやく訊けた。

「今から私やティファ様を襲う刺客の全てと今ティファ様を襲う刺

客。どちらが危険だと思いますか」
　世界への殺意を必死に抑えこんでいるティファの魂に干渉する不埒者を放ってはおけない。かといって自分達のせいでティファが危険に晒されるのもまた許されざることだ。その二つを天秤にかけ、どちらがより必要性の高いことかとマイはダグラスに問うた。
　今までの刺客の数を鑑みるに、そろそろ底が尽きるはずだ。それに今までの戦闘経験から、マイはようやくティファを守り切る自信を得つつあった。ティファと向き合い、世界より大事だと断言したアレイズの心境も評価に値するので、自分でなくとも彼女は守られるに違いないのだが。
（でもティファ様の変化にアレイズ様達は気付いていらっしゃらない）
　知っているのはダグラスとマイのみなのだ。
　当の本人ですら、何が原因かは分からないだろう。そんな状況で放任などできようはずもない。
　広がる血溜まりの中心で黙したままダグラスの返答を待つ。
　するとダグラスが腕を伸ばし、そっと包むようにマイの頬に触れた。血に染まる右手ではなく左手を当てたのは大事な契約者が穢れないようにとの配慮だろうか。
「今のお前ならティファニエンドを護れる」
　甘い笑みと共に発された言葉に目を閉じる。
「では」
　震える瞼に口付け、ダグラスはにたりと笑った。
「ティファニエンドに干渉する者。それが今一番危険な存在だ」
「……そうですか」
　湧き上がる闘争心と殺気を隠しもせずに目を開ける。鋭い眼差しにダグラスが嬉々とした笑みを浮かべた。
（これ以上あの方を傷つけさせたりしないわ）
　それでも向かってくるのであれば、例え相手が誰であろうと叩きのめすのみ。

「行きますよ」
「何処へ」
モーニングスターを振るう。鉄球から滴り落ちていた血潮が床に飛び散った。飛沫はマイのブーツをも濡らしたが、彼女は慣れたこととあっさり無視してダグラスに背を向けた。
「決まっています」
そうして首だけを振り向けて口の端を吊り上げた。
「ビビッドへ。ティファ様の元へ連れて行きなさい」
凄絶なまでの笑みが血に濡れた廃墟によく似合うと我ながら思った。

第五十二話

きつく閉じた瞼を通して朝日が目を灼いていく。その眩しさに耐え切れず目の前に手をかざしながら起き上がると、テントの入口が大きく開かれパタパタと音を立てて揺れていた。大手を振って入り込む早朝の清涼な風の奥で、白んだ空が見える。

誰か外に出ていったのだろうか。

ティファは寝ぼけ眼を擦りつつ疑問を感じ、はためく入り口を押さえて外を覗き見た。しかし広がるのは青々とした草原のみで、そこに人の姿は見られない。不思議に思いテントの中を見るが、やはり一人足りないようだった。近くに眠っていた鮮やかな金髪を持つ神が。

（イオったらどこに行ったのかしら）

元々彼は単独行動が多いが、この状況でどこかに行かれると心配になる。

ここは春日のセラフィムを奪った輩が訪れるであろう場所なのだ。しかも見晴らしが極めていいという、待ち構えるには不利な地形でもある。そんないつ戦いに突入するか分からぬ場所で野営しているのだ。万一彼が一人で敵に遭遇しようものならと考えるとぞっとした。――主に敵への同情心で。

探してみようか。そう考えた時ちくりと頭が痛み、ティファは溜息を漏らした。昨晩程の激痛ではない。だがまた同じような痛みに襲われるのではないかと恐怖心が頭をもたげるのを止められない。

（あれは一体誰だったの？）

自分が自分でなくなりそうな、あの声の持ち主に思考を奪われてしまいそうな気持ちになる。知らず震える肩をさすると鳥肌が立っているのが分かる。自分がこれだけ恐怖しているという事実に舌打ちしたい気持ちになった。しかし結局は思考を止める。……答えなど出ないのだ。だったら考えるだけ時間の無駄とも言える。

それよりも今はイオが心配だ。
否、イオに遭遇して倒される敵が心配だ。
綾の予知では自分達が戦うのは明るくなってからということだった。まさか今じゃなかろうかと考え耳を澄ませるが、幸いなことに人の気配は感じられなかった。待つにが不利で心もとない地形とはいえ、相手の気配を読み取りやすいという点では便利な場所だ。
ふぅと息を吐き、微睡みの中に横たわる者達を見下ろす。
朝日にも身動ぎせず眠り続ける者の中にメイとアレイズの姿を認め、静かに腕を伸ばす。
「二人とも、起きて」
軽く触れる程度にメイの肩を持ち、優しく揺り起こす。
熟睡している所を起こすのは申し訳ないが、日が高くなるまで眠られていたら万一の時対応できない。三下の悪党程度であればティファ一人でも十分対処が可能だが、そんなことをすればアレイズとメイに怒られそうだ。
「ん……」
メイが身動ぎし微かに声を上げた。
朝日に照らされた亜麻色の髪が艶やかに光を放つ。こうして眠っているとマイ同様、ひどく大人びて見えた。もっともティファより年上なのだから当然と言えば当然だが、起きているときの無邪気な明るさとの差異が大きいせいでついそう思ってしまう。アレイズから今までの経緯を聞かされたせいもあるかもしれない。
（ずっと一人で頑張らせてしまったのね）
姉であるマイは両親の敵である銀の神と行動を共にし、自分達をビビッド大陸へと転移させた。加えて主であるティファは記憶を失った上退行まで起こしたのだ。いつも三人で行動していた自分達は、見事なまでにバラバラになってしまった。大人びて見えるのも当然なのかもしれない。これだけの面倒事を背負って、肝心の神二人はほうけて頼りにならない状況だったのだ。大人にならないでいられる方が不思議だ。

触れる肩は見た目よりずっと華奢に感じられる。この細い肩に沢山のものを背負わせてしまったのだと、ティファは居たたまれない気持ちになった。けれども謝罪の言葉を発せられなかったのは、メイがそれを望んでいないと知っているからだった。

「もう、あさー……？」

んーっと寝転んだまま伸びをしたメイがぼんやりと呟き、スカートの皺を伸ばす。その声にアレイズもようやく目を覚ましたようで、無言のまま立ち上がった。こちらは随分と寝起きがいいようだ。清涼な朝の空気を胸いっぱい吸い込んだ彼は外へと出て行き、日差しを全身に浴びている。それについて行き周囲に他の人影を探したが、やはりイオはいなかった。

（確かこの辺りは転移するには不向きなのよね？　ってことは自分の足か浮遊するかして移動したんだろうけど）

それにしては目に見えない場所に行くのは不可解だ。

何か事情があったのかもしれない。ふとそんな考えが頭を過ぎった時、同じ疑念を抱いたアレイズから声が掛かる。

「イオはどこに行った？」

「それが分からないの。私が起きた時にはもういなかったし」

「ふむ……。まぁイオのことだ。誰かにやられたりはしないだろうが」

「それより相手の方が心配よ。大丈夫かしら」

きっぱりと首を振ると「何だそっちか」と苦笑された。

「魔力の気配は感じられない。少なくともまだ何も起こってない証拠だろう」

言われ、自分でも魔力を探ろうと前方を遠く見据える。そうして意識を集中させると自分とアレイズの魔力は感じられるものの、イオが魔力を行使した気配を感じ取れないことに気付く。そこでようやく安心してティファはほっと胸を撫で下ろした。どこにいるかさえ感じられないのは不安だったが、ひとまずは大丈夫そうだ。

視界の端にアレイズの黒髪がちらつく。紐で縛られていない髪は

自由を謳歌するように風になびき、そこだけが黎明に闇を落としていた。男の髪になど興味はなかったが、イオといいアレイズといい彼等の髪はとても綺麗だとティファは認めていた。華やかな金も夜に溶ける漆黒も、彼等によく似合っている。ぼんやりと考えながら手を伸ばしかけ、慌てて引っ込める。そんなティファの行動に気付いていたのかなびく髪の先にある横顔が小さく笑みを刻んだ。精悍な顔に浮かぶ笑みは柔らかく、そういえば彼はこんなにも笑えるようになったのだと今更ながらに気がついた。

（大聖堂の地下で出会った頃は、こんな風に笑うのを見たことがなかったのに）

不敵な笑みなら見たことがある。堂々とした真っ直ぐな眼差しもこの身に浴びた。けれども彼は突き放すような無表情の持ち主でもあった。それを恐いと思ったことは一度もないが、こうして笑う姿を見ると素直に嬉しく思える。

本当は表情豊かな元人間の神は、いつから自分を抑えるようになったのだろうか。

そんな彼の心を自分は僅かでも動かせただろうか。

熱い言葉が記憶を掠める。真っ直ぐで飾り気のない、誤魔化しようのない告白が。

（……って、何考えてるのよ私。今はそれどころじゃないのに）

頭が痛む。指先でなぞるようにその場所を押さえ、ティファは地平線彼方まで広がる草原を見渡すアレイズを一瞥した。背後では起きだした面々が食事の支度を始めている。ゆったりと流れる時間。贅沢なその時を逃したら次がいつ来るか分からないと、逡巡を押し殺してティファは口を開いた。

痛む頭、頭にこびりついて離れない声。

それが何であれ、黙っているわけにはいかないことをティファは知っていた。

「ねぇ、アレイズ」

「なんだ？」

真剣な声に、冷静を装うアレイズの声が返る。
その声が心持ち緊張を孕んでいるのは、ティファ自身が同じような声をしていたせいだろうか。あるいは指輪が伝えてくれているせいか。躊躇う気持ちの中でそう独りごち、不思議そうに首を傾げるアレイズを見据えて続けた。
「私ね、最近変なの」
最近というのははたしていつからだろう。
言いながら自分で首を傾げる。
頭の痛みを感じ始めた時からか。旅を始めた時からか。アレイズと契約をした時からか。レイニウム大聖堂に来た時からか。両親を殺されたあの日からか。それとも――生まれた時からか。もはや正確な意味では計り知れない。世界を殺したいと思った自分の精神が正常ではないと、その程度ならば分かるのだが。
痛みに下がる眉尻をアレイズが怪訝そうに見ているのが分かる。その視線に気付かない振りをして、揺れるダークブルーの双眸も無視してティファは顔を上げた。高く上った太陽の光に晒された顔が、見えない恐怖に怯える子どものように歪む。
「あの光で意識を取り戻した時からずっと頭が痛むの。それに、あの時聞こえた声が頭から離れない。だから私、いつかその声が自分を乗っとるんじゃないかって、そんなことばかり考えてる」
思考をさらっていく痛みと声が恐い。
他のことを考えられなくなる、この痛みが。
本当ならばこんなことを話した所で何が解決するわけでもない。だから言わずに胸にしまっておくのが得策なのだ。ティファとてそれは分かっていたが、このまま黙ってもいられなかった。言うべきではなかったとしても、言わずに迷惑を掛ける方が余程事だ。
「どういうことだ？」
意を決したティファにアレイズが問いかける。けれどもティファとて自分に何が起こっているのか分からないのだ。苦笑して無言で首を振ると、彼もティファの考えを察したのか「そうか」と言って

口を噤んだ。そんな二人の間を冷たい朝の風が滑っていく。失われていく熱に息を漏らすと、白い呼気が舞った。しかしそんな冷たさも勇気を奮い起こしたばかりのティファには関係ない。そしてティファの身に何が起こっているか真剣な表情で考え込むアレイズにも。

漆黒の双眸がティファのそれをじっと見据える。

傍から見れば恋人同士が熱い視線を交わしているように見えるだろうが、生憎二人はこの時ばかりはそんな風に考えなかった。例えお互いがお互いを穴が開くほど見ていたとしても、甘い空気など欠片もないのだ。相手を凝視しながら、自分の考えに没頭するので精一杯なのだから。

（本当は、言わなくちゃいけないことは他にもあるのに）

罪悪感がティファの胸を占める。

グラドを訪れた際、ゼルから告げられた世界の夢。自分はまだそれをアレイズに話していない。

ただ殺意に負けたくないというだけではないのだと、そんな肝心なことをまだ口に出来ていない自分を張り倒したい気分になりながらも、ティファは未だに口を開けずにいる。自分を契約者と認めてくれた、救ってくれた神相手へ秘密を抱いたまま。

爽やかさの欠片もない真剣な表情に見入る。

「あの時の声が原因だと思うか？」

やがてアレイズが口を開いた。

「多分ね」

静かな声に軽く答えると、顎に手を置いて首を捻るアレイズの眉間にこれ以上ないほど皺が寄る。無理もない。ティファとて光の渦から脱した時、全てが終わったのだと思ったほどだ。未だに似た状況が続いているなどとは信じたくない。

「心当たりは」

「勿論ないわ」

「そうだろうな……」

嘘だ。本当は嫌になるほど心当たりはある。

ティファは胸中で溜息を漏らし、この痛みの原因と犯人について考えを巡らせた。

仮にこれが憑依であるなら犯人の魂がこの身体に宿っているはずだ。

しかしどれだけ耳を澄ませてみても胸に手を当てても何の気配も感じられない。それどころかメイのように完全に体が乗っ取られるわけでもない。一体、これは何なのだろう。

（メイに聞いたら分かるのかしら。……ううん、やっぱり駄目よね。メイはイオに憑依された時のことを覚えてないはずだもの）

神に憑依された人間の気持ちを確かめるには、体験した本人に訊くのが早い。残念なことに訊いても意味はなさそうだが。ティファは自分の中に宿る魂を神と決めつけた上でそう考え、盛大な溜息をついた。

（銀の神はマイが押さえてくれているはず。じゃあ一体誰が）

ティファは世界を殺すと予言された人間だ。そして神は世界を守る騎士。狙われる理由など十分すぎるほどあった。ありすぎて敵の正体を絞れないほどに。ただ、と胸のうちに潜む疑問にティファは顔を顰める。

（どうして敵は私を殺さないのかしら）

憑依するならするで自害させればいい。

もし憑依が上手く行かないのであれば他の誰かを操って攻撃を仕掛けてもいい。しかし敵はそうしないのだ。与えられるのは激しい頭痛と時折聞こえる幻聴のみ。一体何がしたいのか理解出来ない。

「今も痛むか？」

考え込むティファを見下ろすアレイズが気遣わしげに問う。あの時痛みに喘ぐティファを見ているせいだろう。硬い手の平が優しくティファの頭を撫でる。そこからじわりと熱が伝わるようで、ティファは安心感から目を細めた。

「大丈夫。少し痛むけど、苦しいってほどじゃないから」

「そうか」

「うん。でも心配してくれてありがとう、アレイズ」
本心から笑いかけるとアレイズが渋面を向ける。
「いや……今は心配するぐらいしかできんからな。すまない」
そんな風に謝る必要などないのに、とことん真面目な性格のようだ。
律儀で真面目で優しい神。彼がいれば、それだけで痛みは癒える。
（ありがとう、ジュード）
けれどもティファは気付いていた。本当は癒えるわけではないのだと。
優しく頭を撫でられる度、気遣わしげに声を掛けられる度、嬉しく思う自分の中で別の何かがざわつくのだ。絡みつくような怒りを伴って。そしてちりちりとした痛みが嵐のような激しさでティファを襲うのだ。
（ねぇ、あなたは誰なの？）
今もいるであろう誰かに問いかける。光の渦から帰還してから幻聴は聞こえないが、拭えない違和感が誰かが体の中にいることを嫌でも伝えてくる。返事がなくとも、息を潜めるように痛みが消えても、必ずここにいる。
「ティファ？　どうした？」
視線を落として考え込むティファにアレイズが声を掛ける。
「え？　ううん、何でもないわ。ちょっと考え事してただけ」
胸の前に置いた両手を重ねる。左手薬指の指輪が冷たさに意識を前に向けた。
首を振るアレイズに「それより」と続けた。
言わなければならない事は何一つ口にできないくせに、こうやって話を逸らすのばかり上手くなった自分が嫌になるが、覆せもしなかった。
「やっぱりこれって憑依だと思う？」
「分からん。近いとは思うが、憑依魔法は俺の専門ではないしな」
そういえばアレイズが誰かに憑依しているのは見たことがない。

「そっか……じゃあやっぱりイオに訊いてみた方がいいわね」
「あぁ」
役に立てないことを恥じているのだろうか。アレイズが眉尻を下げて頷く。そんな顔一つとっても自分が大事にされているのだと感じられて嬉しくなる。あの時、好きだと言われた時から自分の気持ちまでアレイズに引き寄せられているのではないかと思えるほどに、彼の一挙一投足が気になって気持ちがざわついた。もっともそれが自分の気持ちなのか、他の誰かのものなのかは判別つけられないのだが。しかしいくら分からずとも、この状況を打開する術もない。だからティファはこれが自分のものだと思い込むことにした。
冷気が白いスカートを揺らしていく。パタパタと音を立てて後方へと流れるそれを見てから、ふとティファは自分の足を見た。いつもと変わりない自分の足。編みこみブーツに包まれたそれは後ろに本来の自分の足よりもずっと長い影を生み出している。至って普通の光景だ。だというのにぞくりと背筋を駆け上がったこの感覚は一体何だろう。
(何かしら、この違和感。感覚が曖昧なような、立っているのが自分じゃないような)
ふわふわと夢の中にいるような感覚に、自分の手の甲を抓ってみる。「痛い」呟くとアレイズが赤くなったティファの手を握り「何やってるんだお前は」と呆れた声を出した。まったくだ。痛いのは目に見えてるのにわざわざ抓るなど。だがティファはその痛みがひどく意外なものに思え、ぽかんと自分の手を凝視した。途端に戻ってきた現実味に、思わず泣き言を漏らしそうになる。
大きな手が自分の手を包みこむ。今はその熱だけがティファの魂を現実に引き止めていた。
「ジュード、私は……」
自分は一体どうなってしまうのだろう。
この身体は、魂はどうなるのだろう。
そして――はたして自分は世界の見た夢に抗えるのだろうか。

多くの疑問が浮かんでは消える。それを掠れた声で伝えようとした矢先、大きく手を振るメイが二人を呼んだ。

「ティファ様ー！　アレイズさーん！　ご飯ですよー！」

聞き慣れた声に同時にテントへと目を向ける。そこに立つメイは大人びた雰囲気を消し、いつも通りツインテールを揺らして無邪気に二人が来るのを待っていた。アレイズがそんなメイを見て表情を緩めたのは、ようやく戻ってきた笑顔に安堵したからだろう。そんなことは分かっているのに、ティファの中で頭をもたげるのは嫉妬心だ。けれどもそれが自分の感情でない。理由もなくそう思い、ティファは振り切るようにアレイズの手を引き剥がして「えぇ」と返した。

「今行くわ。行きましょう、アレイズ」

「あ、あぁ」

やや乱暴な動作にアレイズが目を瞠る。しかしそれもティファの笑顔を見るまでのことで、怪訝そうな顔はすぐに消え失せた。冷静にそれを見届け、ティファはアレイズに背を向けて口を真一文字に引き結んだ。自分を強く律していなければ何を言い出すか分からなかった。

ティファの様子がおかしいことをアレイズはきっと見抜いていただろう。

それでも何も言わずティファについて歩き出した彼に、内心で感謝した。

その沈黙は今のティファにとって最上級の優しさだ。ありがたくないわけがない。

二人はただ前を向いてメイの元へと歩く。沈黙を破らず、ただ前を。

◇　◇　◇

だから、誰も気付かなかったのだ。

ティファのほっそりとした左手の薬指にはまる指輪。そこにはめ込まれた翡翠が微かに赤く光ったことを。それは指輪を身につけていたティファも例外ではなく、彼女のいに反して赤い光を放つ翡翠は密やかに自己を主張し、数瞬の後に消えていった。

◇　◇　◇

その頃、行方を案じられていたイオはティファ達がいるテントより遙か北にいた。

碧眼が見渡す方向も北である。その先に見える不穏な気配にぽつりと呟く。

「……いた」

浮遊し、木の葉に潜むイオは眼下に見えた人影に顔を顰めた。低くも高くもある声に宿るのは嫌悪。その昏い声に気付かぬまま歩き続ける人影を注視した。

恐らくはあれがセラフィムを奪った者達だろう。

確証はない。しかしそれ以外に考えようがなかった。

これより北に進めばあるのは険しい山々だ。こんな所にわざわざ来る人間がいるとも思えない。いるとすれば冒険者か、余程後ろ暗い事情がある者ぐらいだ。それに彼等は町を襲った軍隊と同じ鎧を纏っている。ほぼ間違いないだろう。

「この前の奴らで合ってるなら、やっぱりあいつらが犯人ってことだよね」

音もなく身を乗り出して目を細める。それを合図に発動した透視の魔術が人波をかき分けセラフィムの輝きを探す。別に見える物に透視をかける必要などないが、こうしなければセラフィムを鎧の内に隠されていた場合見つけられない。面倒な上に男の体など見たくないイオにとってはある意味拷問だ。

（でも、ここでセラフィムを取り返せればティファが戦わなくても済む）

ならばやるしかない。
春日の家を壊した負い目もあってか反対はできなかったが、イオは内心ではティファが戦うことに関して否定的な考えを持っていた。彼女はまだ退行から復活したばかりだ。あまり血なまぐさいことをさせたくない。プラクトの屋敷で見た血に濡れた部屋。それを連想して、もしまた同じ状態に陥ってしまったらと考えると全身が総毛立つほど恐ろしいというのに。
（なのにアレイズ神は何を考えてるんだか……いや、何も考えてなさそうだけど彼の場合）
どうせ頭の中にサクラでも咲いているに違いない。今ならあり得る。
（そういえばティファはアレイズ神のことをどう思ってるんだろう）
答えを聞く前に乱入したせいで結局何も分からず仕舞いだ。だがイオはティファが言おうとしていた言葉の続きが何であるか予想がついた。邪魔をしたのはそのせいかもしれない。
メイやマイほどではないが、長年ティファを見てきたのだ。だから彼女が言いたいことも考えていることも手に取るように分かる。分からなければこんなに胸が痛むこともないのにと考えると、それがいいことなのか悪いことなのか分からなくなるが。ただ、同時にこうも思うのだ。あの背中を押してあげたいと。
（メイとマイも同じように思ってたのかもしれないね）
もしそうなら、自分がティファに抱いていた気持ちもあの双子と同じなのかもしれない。
大事で大事で、この上なく大切な守るべき少女。
野を駆け笑顔を振りまく姿を見る度に込み上げてくるその愛しさを表現する言葉を、イオは何千年と生きてきた中でもついに見つけられなかった。抱きしめて閉じ込めたいと思う執着心と、もどかしい気持ちを何とか口にしようとする彼女の背を押してあげたくなる優しい気持ちに、一体なんて言葉を与えればいいだろう。
鎧の中に神器の輝きがないか舐めるように透視する。それこそが

ティファを救うと言わんばかりの熱心さで。
しかし――。
「ない……？」
呟き、そんなはずはないともう一度透視しなおす。だが何度見ても、彼等の中にセラフィムを持つ者はいなかった。愕然とした気持ちで肩を落とし、凝らし続けて疲労を隠せない目を閉じて眉間を軽く揉む。渇いて痛みを訴えていた瞳が潤いを取り戻す感覚に息を吐き出した。
しかし、誰も持っていないというのはどういうことか。
「もう誰かの手に渡ったってことかな……？」
ただ、その場合誰かというのはノルマンを意味する。
イオは自分の呟きに辟易した響きがあることに気付き、敵意を隠しもせず木の幹に背を預けて嫌そうな顔を空に向けた。
レイニウム大聖堂で見かけた時から胡散臭い男だと思っていた。
（しかも僕がティファと契約しようとしたら邪魔したし。何者だろう、あの人間）
ともあれ、やるべきことは終わった。
「とりあえず帰ろ」
金髪をくしゃりとかきあげる。
（ティファ達に話さなきゃ）
そうすれば綾の予知は外れるが、無駄な戦いをする必要はなくなる。それだけは収穫だ。
イオは自分を慰めテントのある方角へと体を向け、魔術によって跳躍しようと試みる。
「な……っ」
そこで始めて、自分の傍に立つ人間の姿を見つけ愕然とした。
「……」
フードを纏った人間は無言でイオを見据える。その絡むような視線に思わず身構える。
ここは木の上だ。浮遊するか登るかしなければイオの傍には立て

ない。そして誰かが木を登る気配などまったくしなかった。当然方法は限られる。浮遊術だ。

（どうやって……いや、そもそも僕に気配を気付かせないなんて）

混乱する頭の中で呟きつつ、イオは眼前に立つ人間を睨めつけて問答無用で手の平をかざす。

スペルもなしに生成された氷の刃が空気を切り裂いて全身を覆うフードへと襲いかかる。正体も知らないのに傷つけるわけにもいかず、狙ったのはフードだけだが。

相手もそれを察したのだろう。あえて逃げることはしなかった。切り裂かれたフードがはらりと地に落ちて行く。そこから覗いた顔に、イオは碧眼を丸くした。

「お前は……っ！」

驚愕に薄い笑みが返される。

駄目だ、このままじゃ駄目だ――！　本能が大きな警鐘を鳴らす。しかし体が引く前に、伸ばされた手が光を放つ。

「――お眠りなさい。魂の審判者よ」

視界が光に包まれる。

刹那、空から降り注いだ光の矢がイオを閉じ込め、貫いた。

第五十三話

「ねぇ、アレイズ」
「何だ？」
東から上った太陽が南天に近づき、超えていく。それをぼんやり見つめていたアレイズにティファが不安そうな声を上げた。
気付けば朝食も昼食も終わり、メイ達は傍で夕食の相談をしている。その間軍隊がこちらに近づくこともなく、至って平和な時間を謳歌していたアレイズは彼女の声に顔を上げる。柔らかな春の陽に照らされた顔の半分は白く眩しく、影となった部分は少し顔色が悪く見えた。まさか体調でも崩したのではと不安が過ぎる。しかしそれを口にする前にダークブルーの双眸がついと逸らされた。
「イオがまだ帰ってこないの。本当に大丈夫なのかしら」
地平線の彼方へと向けられた視線を辿る。その先からは誰も現れず、魔力の気配も感じられない。
アレイズはごろりと寝転がって目を閉じた。やはり気配は感じない。
「どこかでニンジンでも食べてるんじゃないのか？」
「いくら何でもそんなことでこんなに遅くならないわよ」
適当な答えにティファがむくれた声を出す。と、草が折れる音と共にティファが隣に寝転がる気配がしたので目を開けた。同じ目線で同じように天を仰ぐ横顔は頬を撫でる風を浴びて僅かに緩む。「慈悲の欠片もない神様ね」笑われ、今度はアレイズがむっとする。
「一応気にしてはいる。だが気配が掴めないんだから仕方ないだろう。それに奴の方が高位だしな」
口にした通り、一応、本当に一応気に留めてはいた。
しかしイオとて神だ。それもアレイズより遥かに高位の力ある神だ。仮に戦いになったとて切り抜けるだけの力はあるだろう。少なくとも人間相手なら何の問題もないに違いない。一人で行動してい

るのは確かに気になるが……。
（まぁ、何か目的があるんだろう。どうせいつも勝手に行動してるのだし）
誰にも話さず行動するのは迷惑極まりないが、ティファに危害を加えるわけでないのなら目を瞑ろうと寝転がったまま考える。自分を殺そうとした仇であるのにこんな風に信頼するのは不思議な話だが、ことティファに関しては信じてもいいとアレイズは思っていた。ティファが関係しなくなった途端血の雨が降りそうだが。
（だがティファが関係していたら、それはそれで火種になるか）
プラクトの屋敷の前でティファを抱きしめていた腕を思い出す。何度思い返しても腹の立つ笑みでアレイズを出迎えたイオは、自分でさえ気付いていなかった感情を見抜いた上で挑発しにかかったのだろう。あるいは人の気持ちなどお構い無く喧嘩を売りにきたのかもしれないが。本当に質の悪い。
「でも、本当にどうしたのかしら？」
気付けば横を向いたティファがアレイズに問いかける。スカイブルーの髪を絡めて重ねられた細い手首に隠れた顔半分が憂いを宿す。それでも自分が探しに行くと立ち上がらないのは、これもまたイオを信頼しているからだろう。やはり腹の立つ話ではあるが。
高く遠い空へと手を伸ばす。緩やかに流れる雲のゆったりとした流れに時の流れの遅さを感じる。
（そういえば随分違う気がするな）
聖大陸とビビッド大陸と、時間の流れ方が。
無論感覚としても随分違う。しかしそれだけではない気がする。
季節も時間も違う場所。まさかここは聖大陸とは根本的に何かが違うのではないかと今更ながらに気がついた。ならば自分が一日を過ごしていた間に、向こうではどれだけの時が過ぎているのだろうかと。
（早く戻らないといけないな）
自分達を取り巻く全ての事象は聖大陸を中心に起こっている。今

でこそノルマンの企みを知るために春日に協力してはいるが、ここにレイナがいるとは思えないしそもそもマイが残されている。あの、マイにべったりのダグラスが彼女を害されるのを黙って見ているわけはないだろうが、イオと違って向こうの神には信頼感の欠片も抱いていないアレイズの不安は募る。

意識を奥深くへと潜り込ませ、広く浅く世界をなぞる。そうして魔力の糸を張るものの、周辺に人の気配は感じられなかった。不自然なほど誰もいないのだ。今までは気付かなかったが、そちらの方が問題なのではないか。もしかしたら自分はとんでもないことを勘違いしていたのでは――。

内心で呟いた言葉が戦慄を呼ぶ。身を固くすると、視界の端からひょっこりと亜麻色の髪が見えた。

「ティファ様はイオさんのことよりも自分の体を心配してください」

洗い物でもしたのか、タオルで手を拭きながら現れたメイは窘めるようにティファを見下ろす。

「え、何で？」

「何でって、顔色が悪いじゃないですか！」

「……そう？」

「そうです！　もう、アレイズさんもちゃんとティファ様に言ってあげてくださいよ！」

目を丸くして頬を押さえるティファを見やる。

メイの言う通り、確かにその顔は青白い。顔色が悪い気がするとは思っていたが本人が元気そうなので気にしていなかったのが悪かったか。態度以上に体は正直に不調を訴えていたというのに。

身を起こし、そっとティファの頬に手を伸ばす。

「熱いな」

顔色には血の気が見られないのに、その頬は心なしか熱い。自分の手の平よりは熱があるから微熱があるのは間違いないだろう。相手の体温を知っているという事実に悶えそうになる気持ちはおくびにも出さず指摘すると、重ねるようにティファの手が触れた。いや、

それでは意味が無いだろうと言うべきか一瞬迷う。触れているのはアレイズの体温であって、ティファのそれではないのだ。

アレイズの手が冷たく感じられるのかティファが目を細める。普段勝気に吊り上がっている眦が優しく閉じられるのを見て、つい指摘を忘れてしまったアレイズときょとんと目を丸くするメイにティファが口を開く。

「自分では分からないぐらいだし、大丈夫よ」

いや、だから。

「それアレイズさんの手ですよ。あとティファ様はいつもそればっかりじゃないですか……」

呆れ果てて肩を落としたメイはしかし慣れたものと次の瞬間にはきっとティファを睨み据える。「ちょっとすみません」そのままアレイズの手を掴んで離させてから、ティファの腕をぐいと引っ張った。見事なまでに手慣れた対応だ。普段はマイがやっていそうな姿だが、もしかしたらメイも頻繁に体調を崩したティファを強引にベッドまで連れて行く役目を担っていたのかもしれない。

「ほら、いつ敵が来るか分からないんですからしっかり休んでおいてください」

「ちゃんと休んでたじゃない」

頬を膨らませるティファをメイが叱りつける。

「ベッドでです！　じゃあアレイズさん、私ティファ様をテントに連れていきますんで」

こうしていると退行した時のことを思い出すなと苦笑してアレイズも立ち上がった。

「それなら手伝おう」

「いえ、誰かが外で見張ってなきゃいけませんし。私一人で大丈夫ですから」

二人をそのままにして一番力のある自分が座りっぱなしというのも問題だろう。そう思って口にするとメイにきっぱり首を振られてしまった。それに反論しようかとも思ったが、彼女の言う事にも一

理ある。感じられない人の気配。沈む太陽。綾の予見がいつ当たるかは知らないが少し気にかかる。

引きずられるティファがこちらを振り返り、困ったようにアレイズを見る。

「少し休んでいろ」

「……でも、私」

「イオが見つかったら知らせる」

うん、と提案に小さく頷く。しかし憂いが拭えないままの顔はアレイズを見たまま、迷うように揺れている。何かを言おうとしているのだと指輪から伝わる逡巡の強さから察するも、アレイズはあえて言わせないままメイに目線で合図した。こくりと頷いたどこまでもティファに忠実なメイドは振り切るようにアレイズに背を向けた。

「ほら、ティファ様！」

「あ……」

頼りない声が風に乗って淡く消える。自分の脇をもすり抜けていく声を視線一つで見送り、アレイズはティファがテントに入るまでただじっと彼女の後頭部を眺めていた。何か言いたげな、けれども言いたくもなさそうな後ろ姿を。

「そういえば忘れていたな」

一人きりになった草原でぽつりと零す。

プラクトでイオから聞かされた世界の見た夢。それにアレイズがレイナから聞かされていたティファニエンドの役割。お互いまだ一番肝心なことを、当人同士で共有していなかったのだと思い出す。同時に言いたかったのはそれだろうと見当がついた。ティファからすれば、世界が見た夢は彼女が抱いた殺意と直接的に結びつくのだろうし、まさかイオから聞かされているとは知らないはずだ。

自分の気持ちの確立やティファの気持ちが気になるという衝動に支配されるあまり、重要なものを見落としていた。アレイズは苦笑し、しかし次の瞬間には顔を引き締めた。

（あの馬鹿、一体何処に行った）

不安感がむくむくと大きさを増す。
誰の気配も感じられない草原、消えたイオの行方。考えてみればおかしなことばかりだ。
ビビッドは魔力の流れが不安定なはずだ。透視が上手く行かなくとも不思議ではない。ただイオが誰にも存在を感知させないような場所にいつまでもいるだろうか。仮にそんな事情があるとすれば何故か。
（イオは敵を見つけたのか？）
しかしそれならそれで魔力を行使するはずだ。となると見つけるのは容易い。
風に吹かれる草の一本一本を注視する。その先端は水分を根から吸い上げ瑞々しい緑をそよがせている。大地に埋もれる根は人に踏まれようとも強風が吹こうとも折れることのない力強さで己を立たせている。更に先を追う。水が、養分を求めて伸びる根の先を。いつしか魔力という見えない力が流れる場所まで、神経を集中させて辿っていく。世界中の魔力の流れを大まかに把握するのではなく、周囲の魔力を感知するだけではなく、細くあえかな流れを辿り、アレイズは弾かれるように顔を上げた。
「微かだが……まさか」
一瞬、ほんの一瞬こめかみに触れた冷たさ。
氷の刃を連想させるあの魔力はイオのものではないか。
（どこにいる……！）
イオが刹那に消えるような魔術で終わらせたとは思えない。だというのに感知できる魔力はあまりに細く脆い。何かに断ち切られたような、そんな印象させ感じる弱々しさにアレイズはより深く大地に意識を浸透させる。人間の時にはできなかった芸当だ。こういう時は神になってよかったと思う。
頬を紅の光が染め上げる。夜が忍び寄り、逢魔が時がやって来る。
だからだろうか。さほど熱を持たない夕日が照らす頬をつと冷や汗が滑り落ちる。やや鋭さのある輪郭をなぞって顎から滴るその冷

たさにも気付かず、腕を伸ばして指先に収束する魔力から情報を吸い上げる。

きらきらと束ねた黒髪が汗に濡れて光を放つ。火照った肌を冷やす水滴の温度に漸く気付いたのか、アレイズは静かに目を開けた。風に抗えず億劫そうに揺れる外套がアレイズの周囲を闇色に染め上げる。くっきりとした影を落とす暗がりの中心で澄んだ意識と聴覚を閉じた。刹那、テントのある方へ振り向き声を張り上げる。

「春日！」

低く鋭く地を這う声にテントの入口からするりと春日が顔を覗かせる。

「うるさいわね、何よ」

垂れた黒髪が蛇のように地面をうねる。そこから何を感じたわけではないだろうが、彼女は「……あぁ」と頷いた。にたりと笑う唇の赤さが鮮烈に浮き上がる。吊り上がった唇を指でなぞり、アレイズの後方を見やる。彼女にも感じられるのだ。大地の振動が。

「来たのね。わらわのセラフィムを奪った奴らが」

「あぁ、恐らくは町を襲った連中だろう」

ただ、あの頃よりは遥かに数が多い。五割は増しているのではないか。

イオを探すべく精神集中をしていたアレイズが見つけた気配は、以前見た時よりも整然としており統制が取れている。ここにいるのが常人ならば誰もが尻尾を巻いて逃げたに違いない。力強く歩を進める彼等の存在感は人々に恐怖感を植えつけるにはうってつけだ。もっともこの場に常人と呼べる人間はいないのだが。

傭兵集団はティファ達のいるテントを突き止めてはいないらしく、彼等が纏う空気に殺気や敵意といったものは見られない。これならば十分打って出ることができるだろう。何ならこの場所から魔力を放出してもいいぐらいだ。セラフィムまで破壊されてはたまらないのでやらないが。

腕を伸ばしてビビッドを夜に包み込む闇が遅々とした動きで草原

を埋めていく。綾の予言では明るいうちという話だったが少し外れたようだとアレイズはテントから出てきた綾の、深い漆黒の瞳を見て胸中で呟いた。

しかし彼女は決して自分の予知が外れたことを嘆いていなかった。

「……あ」

ぴくりと肩を震わせ、思わずといった様子で零れた声を手の平で閉じ込める。怯えを孕んだ綾の様子に春日と目を合わせると、次第にぶるぶる震えだした体を必死に抑えつけるように両腕で抱きしめ、彼女が僅かに高い声を上げた。

「何か、来ます」

「綾？　何かって何なの」

「分かりません。……分からない。でも」

混乱しているのだろう。自分の中でも収まりのつかない感情をどうにか言葉にしようと、ひたむきなまでに春日とアレイズを見据える綾は春日の付き人ではなく、彼女自身が巫女であるかのように見えた。震え、頼りなくあるが、異能を発現しそれでも自らの足で立ち状況を説明しようとする強さがそう見せているのかもしれない。綾の尋常ならざる様子に春日がアレイズを一瞥する。それに頷いてみせて透視のスペルを唱えた所で、茫洋とした綾の声が耳朶を打った。

「あの人達じゃない、誰か――とても魔力の強い人が来ます」

焦点の合わない目が空を見上げる。

どこを見ているのか定かでないその瞳に問いかける。

「魔力の強い、人？」

「それは本当に人間か？　それ以外のものじゃないのか？」

たとえばそう、神とか。

「わか、らない」

弱々しい声に宿る恐怖に春日とアレイズが口を噤む。その間にも虚空を見据えていた綾は、天から自らを操っていた糸が切れたと言わんばかりの唐突さで足元をふらつかせがくりと全身の力を抜いた。

否、強制的に意識を失い――気絶したのだ。
「おい！」
「綾！」
アレイズが抱きとめると、麻のざらざらした感触が手の平に伝わる。薄手のそれは大量の汗を吸い込んでおり、彼女がどれだけ緊張していたかを否が応にも感じさせる。それを見下ろし春日は金色の瞳を苦々しく細めてからテントを指差した。
「とりあえず綾を休ませるわよ。テントに運んでちょうだい」
あぁ、と頷き綾を抱き上げる。巫女らしい清浄な空気を纏っていた彼女は軽く、薄い生気を吐き出すのみでおおよそ熱が感じられない。力を使いすぎたのか他の理由があるのか……判別はできないが、春日の言う通り今は休ませた方がいい。
テントの入口を開ける春日に促され先に進む。しっとりとした闇に包まれた広い空間の奥に進み、眠るティファの隣に綾を横たえる。その上にタオルケットを掛けてやると、幾分か楽そうな呼吸が聞こえてほっとした。しかしまだ事態は解決していない。
「……メイ」
ティファを介抱するメイに囁くように声を掛ける。
それだけで異常を察知したのか、彼女はリングリングを手に立ち上がった。
（メイも感じたのかもしれないな）
この地響きを、綾が気絶するほどの異常を。
音を立てないようにテントから滑り出た三人は周囲を警戒するように視線を走らせる。
「しかし、誰かというのは誰なんだろうな」
ぼやくように漏らすと春日が舌打ちで返す。
「分からないわよ、そんなもの。でも綾が気絶することなんて今までなかったから――」
「かなりの使い手か。くそ、こんな時にイオは何やってるんだ」
言いながら意識を集中させる。大まかにでも情報を得ようと、綾

が見ていた空を見上げて魔力を探る。緊張感に握りしめた拳がぎりぎりと音を立てる。

「イオさんはまだ戻ってこないんですか？」

「そうだ。あの馬鹿兎、とことん役に立たない――」

「それどころじゃないわ！　上！」

「何……？」

心配そうなメイの声に悪態で返した所で春日の悲鳴じみた声を聞き、そのまま息を呑んで目を見開く。見上げた空。しゃらん、と幾重にも連なる鈴を鳴らして指し示される先にある、紅と群青の境目。あまりに違う色でありながらきっぱりと境界線を引くことのできない曖昧な場所を見上げ、アレイズは星が映る瞳を震わせた。

夕日と月が競り合い空を飾る権利を奪い合っているはずの空。

快晴の、雲一つないはずの空。

鮮烈なまでの明るさが世界の西側を照らしているはずの空。

だというのに、春日が指し示したたった一点だけがアレイズの知る空とは異なっていた。

雲があるわけでもないのに暗く、まるで井戸の底を覗き込んでいるようにぽっかりと空いた暗闇が小さく空を穿っている。そして、その中心には――。

「イオさんっ！」

メイが悲鳴を上げる。

ぐったりと力を失い抱えられているのは、あの鮮やかな金髪と細い体は紛れもなくイオのものだった。彼はメイの悲鳴も聞こえない様子できつく目を閉じている。高位の神でさえ圧倒する力を持つ、あの兎の神が。

「……」

じり、と前に進み出るメイを腕で制しギンと眼前に浮かぶ人間を睨みつける。漂う濃厚な魔力に気を狂わせもしない人間は、フードの奥で慈悲深いと言えるまでの笑みを浮かべていた。恐らくはメイやマイ、そしてティファにも見せていたであろう深い愛を持って。

「ノルマン、様」
「貴様、イオに何をした！」
紫紺の瞳に見つめられ、メイが呆けた声を上げる。
そんな二人の声に答えず沈黙を守るノルマンは、その慈悲深い笑みのまま腕を伸ばす。優しい夜の風に金の髪が嬲られる。ぽっかりと空を侵食する闇から半身が出て自然の光がイオを包み込む。その体が、ふわりと浮かぶ。放るように投げられた肢体が落下を始める。
「イオ！」
虚空から地面まではかなりの距離がある。四肢を投げ出して落下するイオはぐんぐんとスピードを上げて地面を目指す。ばさりと大きな音を立てて揺れる汚れ一つない衣服が泥に塗れるのを想像し、アレイズは声を張り上げながら腕を伸ばす。しかし一歩進んだ所で青い炎がアレイズの足元を灼いた。
「き、さま……！　邪魔をするな！」
「ち、仕方ないわね」
アレイズが足止めを食らっているのを見かねてか、今度は春日がセラフィムをかざし魔力を練り上げる。すると今度は氷の刃が春日の脇をかすめて飛んだ。しゃらん、と鈴が鳴り袖が切り裂かれる。ぱっと白い布地が飛び散り、春日の動きが止まる。見ればメイも氷の刃を投擲されて防御に忙しく、イオを助けに行ける状態ではない。
「く……っ、イオ！　さっさと起きろ！」
すぐさま結界を張り炎に対処するものの、綾が感じた魔力は紛れもなく本物らしくノルマンはアレイズの結界を破らんと熱を上げてくる。魔力の濃度が増す度にひやりとさせられた。意志の力で魔術に対抗できるとダグラスは言っていたが、ノルマンのこれも似た類のものなのだろうか。
灼熱の炎が結界を道連れにして消え去る。同時に放たれた氷の刃を剣で弾き返す。刃物と氷が触れ合う甲高い音が周囲を圧倒し、嫌でも自分達の劣勢を伝えた。こちらは三人いるのに相手はただ一人なのだ。力の差は歴然だ。

「アレイズ、あなたどうにかできないの！？」
予想以上の攻撃に春日が焦りを露にアレイズを怒鳴りつける。その間にもみるみるうちに地面に落ちて行くイオの体から目を離さない。機会を、ただ一瞬の機会を得た時すぐに動き出せるようにと。
（ティファ――！）
指輪を通じて声を掛ける。しかし仮に聞こえたとしても、もはや間に合わない。
アレイズはぐっと唇を噛み締め、氷の鋭い切っ先を力任せに叩き折る。
少年と青年の中間点。幼さを含んだ甘く青白い顔がちらとアレイズの視界の端に映る。もう、着地まで数秒とかからない――！
「イオさん――っ！」
プラクトの屋敷同様、刃に傷つくことも厭わずメイが駆ける。ノルマンもその勢いには押されたのか一瞬動きが止まった。しかし時既に遅しだ。
アレイズと春日は手出しできない状況と己自身に舌打ちし、メイを追うように魔力を走らせる。
二人の手から風が生み出される。
イオの下敷きになるようにと放ったそれさえノルマンに打ち消され、二人は絶望に染まった顔で敵を睨めつけた。フードに隠されたノルマンの唇が薄く弧を描き、絶望的な状況を裏打ちする。
だが、落下して地に叩きつけられた体躯がバウンドする光景はいつまで経っても訪れなかった。
「え……？」
腕に傷を負ったメイがおずおずと視線を上げる。アレイズも釣られてそちらを見て愕然とした。
「やれやれ、狼使いの荒い人間だ」
「お黙りなさい」
全身の骨を折る程度では済まされない程の距離を落下したイオの体。その柔らかな体を銀の風がすくい上げていた。人を容易に殺傷

するはずの風は今や神の命を救い、悠々と浮遊している。
その奥に濃紺のメイド服を着た亜麻色の髪の女と、彼女に寄り添うように立つ成熟した甘さを持つ男が見えた。男はイオのこともアレイズのことも、ノルマンのことさえ気にならないのかただ隣にいる女だけを見ていた。そして女は自分と同じ顔立ちのメイを、半身である双子の妹を見て微笑んだ。メイが負った傷が浅いのを見て取ったのかもしれない。微かな安堵が含まれた声が静かに落ちた。
「間に合ったようね」
「姉さん？　何で、ここに？　しかも何でそいつとなんか」
次から次へと現れる親しい人間にメイがついていけないとばかりに頭を振る。
その時アレイズの意識を受け取ったのか、テントからティファが顔を出し一目散に浮遊する二人の元に駆け寄った。スカイブルーの髪が風に舞う。それを誰も邪魔せず受け入れる中、ティファが泣きそうな声を張り上げる。
「マイっ！　マイなの！？」
それに目を細めて答え、マイはスカートの裾をつまんで優雅にお辞儀をした。
「勝手をして申し訳ありませんでした、ティファ様、アレイズ様。それから」
月が登り始めた空でも映える銀色の鎖と鉄球が音を立ててフードの男に向けられる。冷徹な殺意にしかし怯えた様子を見せない男に、マイは血の匂いのする凄艶な笑みを浮かべた。
「お久しぶりです、ノルマン様。お会いできて嬉しく思いますが……これはどういうことでしょうか？」
黙秘など許さない声が空を切り裂いていく。その声色を満足気に眺めるダグラスを見て、彼等は自分達以上に事情を理解しているのだとアレイズは察した。

第五十四話

銀の軌跡が二人の人影を映し出す。
一人はその銀の軌跡に相応しい銀髪を持った男。そしてもう一人は――。
「よかった、無事だったのね……マイ」
亜麻色のセミロングに濃紺のメイド服。ノルマンに向けて構えられるモーニングスター。凄艶な笑みはメイでは浮かべられそうにない不穏さを湛えていたが、その横顔は瓜二つだ。纏う雰囲気に鋭さが加わっているが、彼女は紛れもなくメイの双子の姉マイティーナ・グラスだった。
（こんなに早く会えるとは思っていなかったけど……）
アレイズからは袂を分かったと言ってもいい別れ方をしたと聞いている。そのマイとさほど時間を空けずに再会できたと思うのは、ティファがぽっかりと記憶を失っているせいだろうか。しかしアレイズやメイの驚きようを見ると、それだけではない気がするのだが。
（それにしてもあの男。彼がダグラスとかいう神、なのよね）
ティファの両親達を惨殺し、時を留めて待ち構えていたという悪趣味極まりない神。自分達が殺すべき神。
だというのにこれは一体どういうことか。
「ちょっと、肩に寄りかからないでください」
「寄りかかってなどいない。抱いている」
「余計質が悪いじゃないですか。気持ち悪いから早くどいてください」
マイの肩に手を置き抱き寄せる腕に力一杯対抗する彼女をやに下がった顔で見るこの男は一体何か。
爽やかさのない、くどいと言えるほど熟した妖艶さを漂わせる美貌の持ち主はこの場の誰でもなくマイだけを見ている。そこにはティファへの殺意も害意もない。というよりも、完全にダグラスは自

己の世界に入り込んでいる。別にそれに腹を立てるわけではないが、あんまりにも予想とかけ離れているのでティファは状況も忘れてぽかんと彼等を見上げていた。本当ならばイオの体の心配をしなければならないのにだ。

「こんなに早く帰ってくるとはな」

「一生帰ってこなかったらどうしようかと思っちゃってました」

動かない敵を警戒しつつ、アレイズとメイが呆れ混じりに呟く。

ただ、ティファほど驚いていないのは既にこの状況を目の当たりにしたことがあるからか。

（ここまでなんて聞いてないわよ！）

達観した眼差しを睨めつけ、ティファは胸中でアレイズを怒鳴りつける。

（確かに私とアレイズみたいな契約をしたって言ってたから、予想できない話じゃないけど）

それでも自分達はこうはならないだろう。その自信がティファにはあった。

風が静かに威力を失っていく。同時に降りてくるイオの体をそっと支えると、用事は済んだとばかりに風が散る。随分余裕があることだと思いながらダグラスに嫌味の一つでも言おうと口を開いた時、感じる魔力の流れにはてと首を傾げた。

「あれ、これ……」

風を生み出した魔力。その色はとても透き通っていて綺麗だ。

とてもじゃないがあの性悪な神のものではないだろう。そう思い目を凝らして魔力の糸を辿るが、そこにいるのはマイしかいない。彼女の片耳できらりとシルバーのイヤリングが月明かりを反射するのが見えた。片方の耳たぶだけを飾るそれは隣に立つ男にひどく似ている。

無言のまま自分の左手に視線を落とす。柔らかな光を帯びる翡翠の指輪に、あのイヤリングが何であるかを理解する。何故マイがイオを救う風を生み出せたのかもはっきりと。ただ一つ納得がいかな

い。
（何故私達の仇とマイが一緒にいるの）
本当ならば殺さなければならない相手だ。仮に黒幕が世界の意思であり、彼自身の意思ではなかったのだとしても断罪もなしに終えていい話ではない。
ティファとて理解してはいるのだ。マイが契約したその一番の理由を。
だからこそ自分が起たなければならないことも。
手の平に熱が宿る様を頭に描き、魔力を充填しながら剣を鞘から抜き放つ。細身のそれは十分すぎる殺傷力を湛えて月光にその身を晒す。冷たい怒りを宿したダークブルーの双眸を見下ろし、マイが困ったように笑んで高度を下げる。そうして傷つけられても仕方が無いと言わんばかりの落ち着き払った態度で、そのままティファの目の前に降り立った。マイの足元にある草が静かに頭を垂れる。ふわりとスカートの裾が広がり、つま先が地面に触れ合った。
「ただいま戻りました、ティファ様。どうやら記憶は戻られたようですね」
「えぇ、おかげさまで色々と思い出したわ。心配をかけて御免なさい」
言いたいことをぐっと堪え、とりあえずはマイを労う。
面倒も心配も山ほどかけたことだろう。だからこの言葉は真っ先に言わなければならなかった。
素直に頭を下げるティファにマイが悲しげな微笑を漏らす。
憂いを帯びた横顔にメイが素っ頓狂な声を上げた。
「姉さん、魔術使えるの？」
魔力の出所を春日かアレイズに聞いたのか、目を丸くして訊ねるメイにマイが頷いた。
「えぇ。この人に教えてもらったのよ」
その言葉に、指し示された先に立つダグラスが尊大に胸を反らす。
「マイティーナはお前と違って魔力が強いからな。覚えも早い」

「うるさい銀髪馬鹿！　こっちはあんたのせいで散々苦労したんだから！」
「転移させろと言ったのはマイティーナだ、俺じゃない」
「ビビッドに飛ばせとは一言も言っていませんが」
珍しく声を荒げるメイを嘲笑で受け流すダグラスもマイの冷淡な言葉には弱いらしく、途端に萎れた顔を見せる。コロコロと変わる表情は見ていて飽きないが、好意は微塵も湧いてこなかった。しかしやはり咎める言葉は出てこない。それよりも見なければならない現実が横たわっているからだ。
この場の誰よりも早く敵へ視線を向けたのはダグラスだった。
「こんな所で会うとは思いもしなかったぞ、ノルマン」
フードの奥で静かに自分達を見下ろす壮年の男を見てふんと鼻を鳴らすダグラスの言葉に、息が詰まる。胸の前で手を握り締める自分を観察するように紫紺の視線が向けられた。穏やかな眼差しだというのに呼吸が凍りつく。
固く瞼を閉じているイオだけがすやすやと気持よさそうな寝息を立てている。以外は誰もが息を詰めノルマンへと視線を向ける。緊張と嘲笑と凄艶さが混ざり合う。しかしそれぞれ持つ感情は違えど、ノルマンを敵と認識していることに変わりはないらしくいつでも攻撃できるように力を充填しているのが感じられた。特に春日は殺気を隠しもせずセラフィムを発動させようとしている。
テントからよろめく影が見える。
「あれが……」
零れる声は綾のものだ。騒がしさに目を覚ましたのかと彼女を見やる。顔面は蒼白で今にも倒れそうな綾はしかし、毅然とノルマンを見据えこれから起こる事象を予知しようとしていた。春日を救うには力を揮うのが一番だと分かっているのだろう。
ティファは綾から視線を離し、一歩踏み出す。踏みしめられた草が音を立てる。
「――本当に」

メイの横を通り過ぎた時、苦しげな顔を浮かべたことに気付く。
同時にマイの横を通り過ぎた時、その横顔が一切の痛みも驚きも浮かべていないことにも気付いていた。苦しげな妹を憐れむような視線さえ向けているのだ。恐らく彼女は、何らかの方法で事情を知ったのだろう。だからこそビビッドまで、ティファの元まで戻ってきた。そこまで予想しながらもティファは未だ信じられない気持ちを捨てきれずにいた。
グラドで自分とアレイズを嵌めようとしたのは分かっている。
あの日レイニウム大聖堂に迎え入れられてから過ごした日々と、そこで見た姿だけが全てじゃないのだということも地下牢にいる時散々理解させられた。それでも彼が魔術を駆使しビビッドに現れ、神器を奪い、傭兵を雇い町を襲わせているとはどうしても信じられなかった。
レイニウム大聖堂は神の名の下に戦いの調停をするのが主な役割なのだ。
その頂点に立つ人間が自ら武力を行使するなど考えられない。
「本当に、あなたはノルマン様なのですか？」
声を絞り出す。独白に近い声だった。
何もなく、声が響くとも思えない草原の真っ只中にティファの声が木霊するように余韻を帯びて響く。
しっとりとした草の折れる音を耳に入れながらまた一歩踏み出す。
ノルマンは動かなかった。ティファを受け入れるように黙って見守るのみだ。
だから何の邪魔をされることもなく、あと数歩で肌が触れ合いそうなほどの距離まで近づくことができた。アレイズとマイが後ろで下がれと声を上げるのが聞こえるが、今はそれを聞き入れる気になれなかった。
フードの奥の顔を覗き込むように見上げると、微笑するように細められた目とは対照的に唇が引き結ばれているのが見える。何も言う気はないとその口元を見て感じたが、ならば何故ノルマンはこん

なに傍に立つことを許したのだろうかとティファは自問自答した。
孤児となった自分を育て、雨露を凌げる家を与え幼馴染と共に生きる環境を与え、聖女としての教育も受けさせてくれた。飢えたことなど一度もなく、誰かに虐められて辛い思いをしたこともない。今この世界に生きる多くの人よりも遥かにいい生活をしていたのだと、大聖堂を出てから知った。だから当然のように恩義を感じている。しかし――。
（ノルマン様は私を何かに使うために、そのために育ててくださったの？）
いつか自分を駒にするために。
そう考えると胸が痛んだが、それよりも何も答えてくれないノルマンが悲しかった。
静寂が満ちる。お互い何も言えないまま、時だけが過ぎていく。
だがそんな状況がいつまでも許されるほど世の中甘くない。
「ノルマン！　わらわのセラフィムを返しなさい！」
リンっ、と今までいない力強い鈴の音が響く。軽やかであり高らかでもある、歌うような音は多分の魔力を籠めてノルマンに叩きつけられた。それが戦闘開始の合図であると察した瞬間、金色のセラフィムに魔力が流れこむのを感じた。
「あくまで返す気がないというなら――滅びなさい！」
ぶつける気だ。
ひやりと冷や汗が伝う。なぜそんな風に怯えたのか分からない。
「――待って！」
だが気付けばティファは自らの魔力で持って結界を生成し、春日が放ったありったけの魔力を強引に打ち消した。指輪の力を頼らなかったのは、そうすることが正しいのか分からなかったからだ。おかげで随分体に負担がかかったようだが。
指輪から魔力が流れていなかったのに気付いたのだろう。「馬鹿なことを」久々に魔力を使い膝をつくティファにアレイズが走りより、その肩を支えた。温かな熱にほっと息を吐く。

「何するのよ」
耳朶を、驚愕と怒りで塗り込められた春日の声が打つ。
金色の光が怪しく光り、ティファにまで殺気を放つ。
（そうね、当たり前だわ。カスガにとってノルマン様は絶対的な敵なんだもの）
大切な神器を奪った憎き敵。そんな男を庇った地点でこちらが敵と認識されてもおかしくないのだ。自分がダグラスと共にいるマイに無言で怒気をぶつけたように。
春日の声に隠れた狂気を感じ取り、アレイズがティファの体を背中に隠す。しかしそれをやんわりと制し、立ち上がったティファはノルマンを見据えたまま春日に声を掛けた。
「悪いけど、この方と少しだけ話をさせて」
その後で断罪されるべきなら、その役割は春日に譲るべきだろうが。
静かな決意を籠めた声に春日が殺気立つ。
「ノルマンと？　何、やっぱりあなた――」
だが完全に敵と認定される前に、メイが声を張り上げた。
「違うわよ！　ティファ様はノルマン様の共犯者じゃない！」
大きく揺れたツインテールが必死さを表している。今ここで春日を敵に回すわけにはいかないとひたむきな声が言っていた。アレイズの警戒心も相まって、春日がどれだけ危険な存在かティファにも伝わる。それでもノルマンと話したいと思ったのは、きっと彼しか真実を知らないからだとティファは思っていた。レイニウム大聖堂の真の目的。神を掌中になどという不遜極まりない願望だけではなく、もっと他の何かがあるはずだと。
仲間の牽制の元、再びノルマンに近づく。夜に染まらない白いスカートが風に靡いた。その間にも春日が魔術を行使しようとする気配が伝わったが、ティファは結界も張らずにその思いを受け止め、けれども視線だけは前に据えた。
（この様子じゃまた皆に心配を掛けちゃうんでしょうね。ノルマン

様が本当に黒幕だっていうのなら、何をされてもおかしくはないんだもの。でもそれならどうしてこの方はもっと早くに私に手を下さなかったのかしら）

恐らくノルマンはセラフィムを奪った張本人で間違いないだろう。イオが眠り、落下させられた原因も彼にあるだろう。

ならば先手必勝、問答無用で叩きにかからないと勝ち目はなくなってしまう。アレイズがわざわざ助けを求める思念を送り込んだぐらいなのだ。感知できる魔力も含めてノルマンが強敵であると分かっている。だがそれでもノルマンはティファには手を下さないような気がしていた。何しろ彼には山のようにティファを殺す機会が訪れていたはずなのだから。

「ノルマン様」

もう一度呼びかける。その声には已然として答えはない。

だがもうそんなことは全くお構いなしにティファは続けた。

「グラドで王を唆したのは貴方なのですか？」

グラド王がティファの写真をノルマンから貰ったと言っていたことを思い出す。欲にまみれた罪深き男の顔を思い浮かべ、ティファは胸焼けを覚えながら確認の意味を籠めて問うた。

一途なまでの真っ直ぐさえ見据えられ、ノルマンがふっと表情を和らげた。

弧を描いた唇がどっしりとした大樹のような声を放つ。

「そうですよ。私が王に進言したのです」

「――何故です？　貴方は、自ら私を送り出したではありませんか！」

背中に閉じていたはずの魔力が解放されるのを感じ、イオが目覚めたことを知る。

もうあまり時間がない。

（イオがノルマン様に攻撃されたのなら、やり返すのは必至でしょうし）

イオの方を振り向かずにノルマンに叩きつけるように声を上げつ

つ、募る焦燥感を足に力を入れることで抑えこむ。ただ続けた言葉の早さまでは抑えきれず、気付けば早口になっていた。

「貴方は何がしたいのですか？　何を知っているのですか？」

かつて自分が所属していた大聖堂の教皇に言うには、あまりに猜疑心に満ちた言葉だ。

聖女が罰されるなどという話は聞いたことがないし、教皇に逆らった所で何が起こるわけではないがティファは少々の罪悪感と良心の呵責を感じながら痛みに穿たれた心をさするように胸に手を置いた。

ノルマンはティファを咎めるでもなく、ただ静かに笑んで答える。

「世界が見た夢を叶えたい。……私達の目的はそれだけなのですよ、ティファニエンド」

そうしていつかと同じように自分の名を呼ぶ柔らかくも老獪であり、自然と心の支えにしてしまうような悠然とした声色に体が震えた。敵と呼ぶにはあまりに優しい声と、それとは裏腹に告げられた言葉の重みに潰されてしまいそうだった。恐怖心が、過ぎる。

（ゼル様が言っていた、世界が見た夢……）

いずれ自分を殺しに来る者が代わりに世界の意志となる。

それは蒼い髪に瞳を持つ、ティファニエンドの名を持つ娘。

世界の意思たるレイナが神々に語った夢。高確率で当たる。けれども外れるかもしれない予言。

ノルマンが言うのはそのことだろう。

何故この情報を掴んだのかは知らない。ただ一つだけ確実なのは。

（私が世界を殺して、次の世界の意思になる人間だから……？　だから私を育てたというの？）

今こうして目の前で優しく自分の名を呼んだ人は、父親とも言える人物は、自分に人殺しをさせるために長い時を幸福のうちに過ごさせてくれていたのだろうか。いつか来たるべき時に備えて。アレイズと契約をするその日のために。

人々に平和を与えるはずのレイニウム大聖堂の教皇が世界の殺害

を望んで？
（私はそのために、そのためだけに生かされてきたというの？）
窮屈でも温かなあの場所は決して嫌いではなかった。だが、だからこそこんなのはあんまりだ。
「私は夢を叶える気はありません」
気付けばきっぱりと拒絶の言葉が口を突いて出てきていた。
当たり前だ。自分はそうなりたくないから道を探すのだ。
九割八分当たる夢。外れる二分をこそ狙って。
（私は誰かを殺すために生まれてきたんじゃない）
そうだ。人が生まれる理由がそんなものであっていいはずがない。
自分だけではなく全ての人が、命がそうでなくてはならない。
ぎり、と握りしめた拳に力が籠り爪が突き刺さる。鋭い痛みに意識を保っていると硬いアレイズの声が聞こえた。
「世界……。レイナが見た夢を叶える？」
低い囁きに、ぎくりと心が音を立てる。
恐る恐る振り返った先ではアレイズがノルマンの答えを待っているのが見える。合わない視線が今は怖い。けれども目を合わせてしまった時自分は何を言えばいいのだろう。言わなければと思っていたことが暴かれる予感を前に一体何を。
湿度が少し高い風が吹き抜けていく。ノルマンの被るフードが揺れ、中からは戦慄するほど優しい笑みが広がっているのが見えた。
駄目だ、その先は決して。
（私はまだアレイズに何も話せていないのに）
ノルマンを止めようと口を開き、何を言えばいいのかと逡巡する。
その隙をついてノルマンが先に言葉を放った。
「彼女の行く先には九割八分世界を殺す運命が待っています。世界は自らそれを夢に見た」
「――ノルマン様、それは！」
「もちろん二分の確率でその夢は外れるでしょう。ですが何せ予知夢と言われるほどのものですから、当たる可能性の方が高い」

優しく、じわじわと突き刺すような声と言葉が耳朶を打つ。瞬間胸に宿った絶望に、ティファはわなわなと唇を震わせた。その言葉だけは、自分が言わなければならなかったのに。

震えるティファを尻目にノルマンは大きく腕を広げた。

それはさながら礼拝堂で説教をする時のようであったが、続く言葉には一欠片の希望も慈悲もない。

「世界は滅びます。ティファニエンドの手によって、そして世界自身の手によって」

春日がティファをまじまじと凝視する。自分達の暮らす世界を、その根幹を殺すとされた人間を目の前にして何をすべきか考えあぐねているように。

イオを抱くメイと傍に立つマイは表情を殺してノルマンを見ている。驚くでも嘆くでもない姿に、二人はとっくに自分が何者であるか知っているのだと理解した。その上で傍にいてくれることに目尻が熱くなる。

「？　世界自身の手によって？」

凍りついた面々を無視して口を開いたのはダグラスだった。

「何故レイナが滅びを望む」

彼女の死を望まずティファニエンドを殺すべくプラクトを襲撃した張本人の言葉は、より重みを増してノルマンに向けられる。

当然の話だ。

ティファ自身も驚いていた。

もしレイナ自身が死を望んでいるのなら、なぜ両親は殺されたのか。自分が狙われたのか。そしてダグラス自身もまた、自分がしたことが何であったのか自問自答していることだろう。人を殺した罪悪感からではない。愛するマイティーナに嫌われるきっかけを生み出した苛立ちから、膨らむ疑念に答えを求めている。

「それは本人に訊くのが確実でしょう」

寒々しい薄ら笑いがダグラスに向けられる。と、ノルマンはおもむろに自分の首にかけられたネックレスを手に取り、鎖の先につい

たルビーを一撫でした。
「今日の所はこれで失礼しましょう」
光が爆ぜる。彼の羽織っているフードが強風に煽られて後ろに流れた。そうしてようやく堂々と晒された顔を一向に見せた時、そこに先ほどまで見た壮年の男の姿はなかった。金の髪も消え失せている。
「ノルマン、貴様……」
憎悪に歪んだダグラスの声、それににこりと笑い掛けた男は艶やかな黒髪を後ろにかきあげ紫紺の瞳を細める。穏やかな顔つきのみがかろうじて彼がノルマンだと示しているが、ガラリと変わった立ち姿にティファは息を呑んだ。
執拗に迫る殺意をくすりと笑って受け流したノルマンは、呻きながら身を起こすイオにも聞こえるよう朗々とした声を放つ。
「何を驚いているのですか？　理由などとうに分かっているでしょうに」
「神の体を喰らったのか……！」
息を詰まらせるダグラスに変わりイオが多分に刺を含んだ声を上げる。自己防衛で殺すのとは訳が違う。神の身を喰らうという暴挙に耐えかねたのか、イオは殺気さえ孕んだボーイソプラノを大音声で響かせる。緊張し、チリチリと肌が焼けつきそうな空気がティファ達の間に流れた。
「ティファニエンド」
緊張を静穏な声で打ち破るノルマンにティファが顔を上げる。
「――何ですか？」
若返り、アレイズと殆ど変わらないような年齢となったノルマンに強い違和感を覚えつつ返す。
神の体を喰らうことが若返りに使えることを何処で知ったのかとか、何故そんなことをしたのかとか問うことは多々ある。しかしそのどれも問わせず、ノルマンはそっとティファに手を出すよう言いそこに銀色の球体を置いた。

「これを。貴方はこれを探していたのでしょう」
ひんやりとした、ガラスに似た感触が手の平全体に伝わる。
「わらわのセラフィム！」
春日が慌ててティファに近づき、手の上にある物が本物か否か確認していた。見ればそれは春日の持つセラフィムに瓜二つで、色だけが異なっている。これが彼女の探していたセラフィムかと思うと同時に、何故これを彼が返すのだろうかと疑問に思った。返すぐらいならば奪う必要などないというのに。……まさか。
（私達を、私をここに呼ぶために）
しかしそれでも疑問は残る。会うなら別の方法とて取れるのだ。何もかもに確たる理由をつけられないノルマンの行動にティファは目を丸くし、頭の上に疑問符をいくつも浮かべる。その様子が微笑ましいのか落ち着きのある柔和な笑顔がティファをそっと包んだ。
「急ぎなさい。……貴女が全てを奪われる前に彼女を殺しなさい」
「え……？」
濃厚な花の匂いがする。甘い香りにノルマンが顔を近づけたのだと分かった。この言葉を他の誰にも聞かせぬよう発するためにそうしたのだと、一瞬遅れて気付く。
顔を上げた時ノルマンは踵を返し、背を向けていた。
「待て！」
ダグラスが銀の風でノルマンを切り裂かんと腕を揮う。その鋭い切っ先が触れるや否やサラサラと彼の姿が崩れ、砂のように細かな粒子となって舞った。
「今のは空間転移？」
だがあんな魔術など存在しただろうか。
「ダグラスさん」
「あぁ、ここでは空間転移は不可能のはずだ。仮にできたとしても、どこに飛ばされるか分からん」
追うこともままならず、呆然とティファが呟いたと同時にマイが緊迫した声でダグラスを呼んだ。その会話を聞いて、ノルマンがこ

の場から魔術を使って消えるのがいかに無謀かを知る。ただ、彼の様子には慌てた様子も覚悟した様子もなかった。自分が望む場所に行けるという絶対の自信さえ覗かせていたように思う。ではあれは一体何の魔術を駆使したというか。

「くそっ！　何のつもりだ！」

「まさか神を喰らうとね。……そこまで堕ちていたとは気付かなかったよ」

舌打ちし、苛立たしげに怒鳴るアレイズと頭を振って唸るイオ。

二人の声を聞き、ティファはがくりと脱力したように足から力を抜いた。その手から銀色のセラフィムがさらわれる。そういえばまだ持ったままだったとぼんやりと思い、くらりと自分を襲う目眩を瞼を閉じることでやり過ごした。

「ティファ様、大丈夫ですか？」

マイが大股に近づきそっとティファの肩に手を置く。

「えぇ……」

それに頷くこともできず言葉だけで返しながらこめかみに触れた。ずきずきと痛む。

（頭、痛い）

緊張が解けたせいか他の理由か、再度襲ってきた激痛に苛まれ汗がとめどなく流れる。

だが、それをイオやアレイズに伝えることはしなかった。

痛みに寝ている場合ではないのだ、もう。

今はそんなことよりも先にする事があるのだから。

「ティファ様」

「いいから」

休むべきだと言外に訴えるマイをぴしゃりと黙らせ、春の夜風に冷えた体をそのままに闇に溶けそうな自分の契約神を見上げる。アレイズ、と呼んだ自分の声の何と弱々しいことか。微かに掠れた声の、何と力ないことか。

（それでももう黙っておくことはできない）

「話があるの」
自分がただ殺意だけを持っているのではないと、世界への復讐心を押さえるだけでは済まない、のっぴきならない問題を抱えているのだと彼には伝えなければならなかった。それはティファの、契約者であり世界の敵たる自分の義務なのだ。
「カスガ、アヤ。あなた達も聞いていて」
優しくも残酷な沈黙で持ってティファを見たままの二人に声を掛ける。そんなティファをアレイズが気遣うように呼んだ。
「……ティファ」
アレイズの痛みを含んだ眼差しに何故か笑みを浮かべた自分は、一体何を彼に伝えようとしたのだろうか。大丈夫とでも言おうとしたのか。こんな、どう贔屓目に見ても大丈夫とは言えない心境で。
「あのね――」
そうしてティファは、自分でも分からぬ笑みを浮かべたまま、グラドでゼルに教えてもらった話を洗いざらい話すことにした。
春日や綾にとってはセラフィムを取り返すだけの単純極まりない事態だったに違いない。それを劇的に変えてしまい申し訳ない気持ちになったものの、ここで何も話さず自分達だけの問題にしようものならセラフィムで叩き潰されそうなので、これはこれでよかったのかもしれない。
事態は動き始めている。もう自分達だけでは手に負えないのだ、きっと。
ずきり、頭が痛む。その度に薄れそうになる意識を必死に抱き寄せ、漠然とした不安を奥へ奥へ押し込んでいく。それでも声だけはしっかりと吐き出し、ティファが世界が見た夢をその場にいる全員に告げた。

第五十五話

どうやら、世界はティファに殺されたがっているらしい。
ノルマンから聞かされた言葉が頭にこびりついて離れない。
アレイズは唸りながらゴロンと草原に寝転がり、白んでいく空を見上げた。
セラフィムは取り戻したが、自分達があの傭兵集団と戦うという予知は覆っていない。
正直な話、このまま帰ってしまうのが一番穏便だとは思うがそれでは春日はこれからも狙われ続けるだろう。それでは根本的な解決にはならないとその場にいた全員の意見が――ダグラスは除いて――一致したので、こうして明るくなると同時に誰かが見張りについてテントの前で警戒している。もっともノルマンに戦意がないのなら気配を消して近づいてくるなどという戦法は使わないだろうから、テントの中にいても十分警戒はできるのだが。
首だけでテントへと振り返る。ぴたりと入り口を閉じられたその奥では、女性陣が穏やかな寝息を立てていることだろう。昨日は色々ありすぎたから無理もないと、そこには何ら不満はないのだがアレイズはどうしてもあの中で眠っていることができず、こうして夜通しテントの前で寝転がっている。
『世界は私に殺される夢を見たらしいの』
ティファの独白が繰り返される。
彼女には悪いが、その話は別段驚くことではなかった。プラクトでイオに聞かされた時に驚愕は全て捨ててきたのだから。自分が既に知っていることを彼女に伝えていないのは申し訳ないと思うが。
（ただ、あの様子は何なんだ）
世界に復讐したいと、殺意を持ったと告白したティファは自分との契約を断ち切ることも念頭に置いていた。微かな怯えと決意を綯い交ぜにした、強い眼差しで。あの時自分は言ったではないか。契

約者はただ一人なのだと。

（それなのにあいつはまた俺が契約を切るんじゃないかと不安に思っている）

気持ちは分かる。嫌になるほど。だが腹が立つのも事実だった。

そんなに柔な絆ではないのだ。少なくともアレイズはそう思っていた。たとえそれが世界を殺す殺さないの話になったとしても、自分はもうとっくに決意を固めている。その決意をさえ疑われているようで、それがアレイズにとって不満だった。出会った時、ティファニエンドを贄にして世界に会おうとしていたことなどすっかり忘れてしまうぐらいに、アレイズにとってティファは大切な存在なのだ。ただ、本当に相手の気持ちが分かるだけに文句は言えなかった。

（あいつはずっと俺が世界の見た夢を知らないと思ったまま、一人で抱えていたんだな）

人でいたいと濡れた声で言い放ったあの言葉は、予知夢があったればこそだ。

だから本当は分かっているのだ。悪いのはティファではなく自分だと。

（あの時、予知夢も何もかも知っていると口にした上で抱きしめてやるべきだったんだ）

そうすればほんの少し、僅かな時間でも彼女が思い迷う時間を減らせた。

寝返りを打つ。結んでいない黒髪が風に吹かれてふわりと浮かんだ。

そのすぐ傍に見える靴先の上から呆れた声が降ってきた。

「いつまでそうしているつもりだい？」

「うるさい」

こちらを眺める碧眼を見返しもせずにそっけなく答える。それに対しイオは溜息をつくのも面倒になったのか黙ったまま隣に座った。

今ので一体何回目の問い掛けだろうか。

アレイズはげんなりしながら溜息をつく。

いつまでもこうしていて悪いな。そう言ってやりたくなる。
だが動きたくとも、ノルマンに夢の話を暴かれた時のティファの絶望に染まった顔が思い出されてどうしても動くことができない。もはや、ただ慰めるだけでは駄目なのだ。この際膿を出し切るようにお互い全て話さなければ。
（そうなると、俺がティファを贄にしようとしていた話もしなくちゃならんわけだが）
一番気が重いのはそこだ。
ティファが世界をどうするかよりも、自分がその話をして彼女にどう思われるかの方が恐い。こんなことを言えばイオに鼻で笑われそうなのでとても言えないが。
イオもテントの中にいられないのか、アレイズに声を掛けては黙ってを繰り返している。
二人になったというのに嫌味も魔術合戦もない静かな朝だ。
上半身を起こして二人で並んで座る。と、そこでイオが呟いた。
「カスガとアヤは起き次第能力を使うみたいだよ」
「……そうか」
能力というのは、セラフィムと予知能力のことだろう。
『セラフィムで奴らには牽制をかけるわ。不意打ちなどさせないつもりよ』
『私も予知で彼らの位置ぐらいは掴んでおきます』
昨晩そう話していたのだからまず間違いない。
神よりも人間の方が遥かに役に立つ状況というのは何とも情けないものではあるが。
「後悔してるの？」
ボーイソプラノが耳朶を打つ。
「何の話だ」
「惚けないでよ。ノルマンが言っていた話さ。ティファがレイナを殺すって話、あれで後悔なんてしてないよね」
つまるところそれは、ティファとレイナのどちらを取るのかとい

う話なのだろう。
ひたと見据えられた眼差しの強さは、潔いほど真っ直ぐで純粋だ。
アレイズはイオのその視線を羨ましいと感じながら首を振った。
「プラクトで話を聞いたあの時から俺は一度も後悔なんかしていない」
そう、一度も後悔などしていない。
大事なものはすでにこの手にあるのだ。
きっぱりとした答えに視線が逸らされる。凍えるような冷気も清涼な空気に霧散した。
「そ。じゃあいいんだけどさ」
返答を間違えれば殺す気だったのだろう。視界の端に見える横顔は安堵に緩んでいた。
思い返せば、プラクトで宣言されていたのだ。あの話を知ってティファを傷つけることがあれば殺すと。……状況を鑑みるに、殺されてもおかしくない程にティファを傷つけている気はするのだがこれは許容範囲内なのだろうか。ヒヤヒヤしながらアレイズは「ただ」と付け足した。
「ただ？」
「いや、レイナはどうなんだろうなと思ってな」
「……ノルマンの話か。あんな情報、アテになると思うのかい？」
イオの目がすっと細められる。それには肩を竦めて返した。
「分からん。だがもし本当なら、何故レイナはティファの家を襲撃したのかと思っていた」
あの惨劇の直接的な原因はレイナだ。ティファ達の精神を傷つけ、人生を完膚なきまでに破壊した。親に愛され幸福のうちに終えるはずの生涯を、神と契約するわ追われるわと面倒な目にばかり遭わされるそんな人生に。
だがもしレイナが死を望んでいるのなら、何故ティファは殺されかけたのか。
あの惨劇に一体どんな意味があったというのか。

知らず二人揃ってテントを振り返る。相手の心など読めないが、イオも今ティファのことを考えたのだろうと察することができた。

血溜まりの中に立つ幼い少女は、その心をどれだけ傷つけられただろうか。

それはきっと、長い時を生きて世界を巡ったイオにも分からないに違いない。その者の痛みは、命が負った傷は本人にしか分からないのだ。

「もしかしたら、さ」

イオはやりきれないとばかりに目を閉じた。

「万一ノルマンの言葉が正しかったとして、レイナが自分が死ぬことを願ってたのなら。……きっと、そのためにティファを襲ったんじゃないかな」

「？　意味が分からん」

「だから、殺してもらうためだよ。そのためにティファじゃなくて屋敷の人間を全員殺すように指示したんじゃないかって」

ますます訳が分からない。

苛立った様子のイオを見ながら、アレイズはイオの言葉を胸中で反芻した。そしてガツンと脳天を揺さぶられたような衝撃に口を押さえそうになった。

（レイナは、ティファに殺意を植えつけようとしていた……？　そのために家族を殺して？）

もしもあの惨劇に意味があったというなら、ノルマンの言葉が正しいというなら理由はそれぐらいしか思い浮かばない。だがそれを確定させるにはまだ疑問が消えない。

「奴はレイナからティファを殺すなと指示は受けていないはずだ」

言うとイオは素直に頷いた。

「ダグラスかい？　そうだね、確かに彼は聞いていないと思うよ。でもレイナは知ってたんじゃないかな。あの日、ティファが殺されないって」

「……メイがいたからか」

「グラスの一族が秘術を施したことを掴んでいたのかもしれない。まぁ、憶測に過ぎないけどね。それにしても、考えれば考えるほど変な取り合わせだよ」

くすくすと笑う姿に溜息で賛同する。

「世界を殺すと予言された人間に、世界最強の魔術師の末裔か」

「それも、魔術さえ消し飛ばす意志を持った人間と高位の神を退けるような獣を飼う人間だよ。彼女達が揃ったら世界征服だって目じゃないだろうね」

どんな人生を送っていても巡りあいそうにない取り合わせだ。

そんな三人が幼馴染だというのだから世の中本当に分からない。あるいはその取り合わせも世界が望んだことなのかもしれないが、これぱかりは操作のしようがないだろう。そもそもレイナが世界に干渉できる出来事などそうあるものではないのだ。あるとすれば神に願った時だろうが、ダグラスでさえ襲撃する時までグラスの存在は知らなかったはずなので、それはないと判断した。

テントの中で誰かが起きる気配がする。

昇る朝日の眩しさに目を細めると、イオが立ち上がってうんっと伸びをした。

「とにかく、これで是が非でもレイナに会わなくちゃいけなくなったわけだ。彼女が何を願っているのか、それによって神々の対応も決まってくるだろうし」

「貴様はそれを聞いてどうするつもりだ」

「僕はどうもしない。多分ダグラスも同じ答えだろうね。レイナが何て言ったって答えは決まってるから。アレイズ神は？　これからどうする？」

いっそ清々しいほどの答えは同じだけの覚悟の強さを物語っている。

それに比べて自分は何をうじうじ悩んでいるのだろうかと、真っ青なイオの目を見ているとそんな気持ちになってくる。それでも立ち上がってテントに向かえない自分の腰の重さがとことん嫌になる。

溜息をつき、鬱々とした気持ちを吐き出しながら答えた。
「ティファと話をしなければならんと思っているところだ」
「話？　何の」
「俺が貴様に渡した情報があっただろう。あれをまだティファに話していないからな」
七年前の惨劇。あの時ティファは殺される予定ではなかったはずだと、イオに話した情報。
それを伝えればきっと傷つけると分かっていても、もう黙ってはいられない大事な話。
（言うのは憂鬱だがな……）
盛大に息を吐き出し、膝を抱えて項垂れる。そんなアレイズを腕組みして見下ろすイオは「うじうじしないでほしいんだけど、鬱陶しいから」とすげなく言い放った。あまりといえばあまりな言葉だ。しかしそれがイオらしく感じられ、ついアレイズは問いかけていた。
「イオ」
「何？　やっとティファの所に行く気になった？」
イオからすれば喜ばしくない話だろうに、何故か彼は嬉しそうに声を上げた。その喜色を自分の暗い色の眼差しで押し留まらせ、続く言葉を放つ。
「あの夢は現実になると思うか？」
ぴしり、空気が凍りついた。
表情を消したイオが一度引っ込めた冷気を再び纏う。そのまま唇で弧を描いて、嗤った。
「次同じこと訊いたら殺すよ？」
問いに問いで返される。
同時にそれは絶対的な否定の言葉なのだとアレイズには分かった。
（そうか、そうだったな）
ダグラスさえ敵に回して結論を得た魂の選定者は、メイやマイほどではないにせよ長い時間ティファを見守ってきたのだ。その彼に今の問いは愚問だった。

「すまない」
自然と溢れでた言葉に冷気が消えた。最後にちくりと肌を差すようにアレイズに触れて。
だがそれで許されたわけではないらしい。
イオはふぅと息をつくと、意を決したように手を伸ばしアレイズの腕を掴んで無理矢理立ち上がらせた。
「なに、何を……っ！」
「アレイズ神がいつまで経っても立たないからだよ」
慌てた様子の声に憮然とした声で返し、イオはアレイズの顔を見つめる。そうして小さく鼻で笑った。
「彼女は僕が君に情報を渡していたことをまだ知らないはずだ。だったら今誰が一番不安を抱えてるか分かってるはずだよ」
「……」
「君、契約者が苦しんでるのをそのまま放置して見てるわけ？　とんだ神だね、本当に。あ、そうか。君正規の手順踏んでないんだっけ？　だったら仕方ないか」
ティファに見せる甘さなど欠片もない、敵意さえ感じさせる笑い方はしかしひどく大人びていて、これではどちらが大人か分かったものではないとアレイズは内心で苦笑した。無論、年齢だけで言えばイオの方が大人なのだろうが。
嘲りの言葉に普段なら怒気をぶつけるアレイズは、今回ばかりは黙りこんだ。
イオの言う通りなのだ。
契約者を守るのは他でもない神の役目。
その身体も精神も守り通し加護を与えることが契約者が得る最大の利点なのだから。
「それに」
ぐっと言葉を詰まらせるアレイズにイオが続ける。
「認めたくないけどティファは君を待ってるはずなんだ。君が行かなくちゃ終わらないし、始まらない」

世界が見た夢が実現するか否か、それを確かめる舞台はまだひっそりと静まりかえっており、幕開けすらされていない。イオはそう言いたいのだろう。そもそも世界に出会ってすらいないのだから当然だ。

掴まれた腕に熱を帯びた痛みを感じる。自分よりもやや低い位置にある目を見下ろすと、そこには若干悔しげなイオの顔があった。

「意外だな。貴様が俺をティファの下に行かせようとするとは」

ティファが願っていたとしても、イオならば自力で慰めに走りそうだ。

そんな事を思って口走った言葉に彼自身も意外そうに瞬きをした。

「自分でも不思議に思うことがあるよ」

そしてふと表情を和らげる。

「僕はティファが誰よりも大事で、彼女がレイナを殺さないようにってずっと願ってるし信じてる。だからもしレイナ自身が願ったとしても、体を張って止めるんだろうと思う。分かるかい？　僕は絶対にティファの手を血で濡らしたくないんだ。あの子の魂がずっと純粋なままであってほしいから」

全ての命の罪を裁く立場にある神の独白に耳を傾ける。飄々とした口調だが、それにどれだけの重みがあるのかアレイズには計り知れない。ただ、強く切実な願いがあるとしか。

腕を掴む手が緩む。それに合わせて背筋を伸ばしたイオはアレイズを静謐な眼差しで捉えた。

「彼女が大切だよ。何よりも」

分かりやすすぎる程に直球な言葉だった。

だけどさ、と明るい声が続く。

「それと同じぐらい、君達がうだうだ悩んでると背中を蹴り飛ばしてやりたくなるんだよ」

それでこうやってせっせと自分をティファの所に連れていこうとしているのか。

自分の仇であるはずの神の、可笑しいぐらいにお節介な一面にア

レイズは一瞬ほうけた顔をする。「あーあ」それをからりと笑って受け止めたイオは、一歩下がってから背を向けた。
「これって何なんだろうね。一応僕とアレイズ神って恋敵のはずなんだけど」
「……俺が知るか」
「うん、そうだろうね。僕に分からないことを君が知ってるなんて耐えられそうにないし」
細い背中が朝日に照らされて鮮やかに浮かび上がる。柔らかな金髪が目に眩しい。
「行っておいでよ」
ちらとこちらを見やる眼差しの静けさと柔らかさに思わず呆気に取られる。
しかしなぜだか今はそれを指摘せずに行かなければならないような気がして、アレイズは「あぁ」と言葉少なに答えてイオに背を向けた。本当は己もティファの下に行きたいだろうに、あえて我慢した彼を見てこれ以上悩んでもいられなかった。
「――ねぇ、アレイズ神」
背中に声が当たる。
「なんだ」
掻き消えそうな声に立ち止まる。
お互い背を向け合っているというのに、これもまたそうしなければならない気がして。
イオはしばし逡巡するようにたっぷりとした間を取り、やがて浅く息を吐き出した。なんでもないよ。何かを悟ったような、受け入れたような声に振り返りそうになる。しかしアレイズにそうさせる前にイオが口を開いた。
「ティファを頼んだよ。今は君が頼りだ」
何の感情も含まない声に後押しされ、一歩踏み出す。
「分かっている」
答えた声に満足したのか、それ以上イオは何も言わなかった。

テントの中からティファとマイ以外の面々が出てくる。彼女達はアレイズとイオを見比べ、首を傾げながらも朝食の準備をするために各々動き出す。そんな中、イオがメイを呼び止める声が聞こえたが、それを無視してアレイズは勢いよくテントへと入った。

◇　◇　◇

その少し前。

テント越しに伝わる明るさに目を覚ましたティファはじっと天井を見上げ、何を言うでもなく口を閉ざしていた。

辺りを見渡すとイオやアレイズ、ダグラスなど神だけがいなくなっており、他はまだ泥のように眠っているようだった。……ただ一人を除いて。

「おはようございます、ティファ様」

「……ん、おはよう」

すっかり身支度を終えた様子のマイの声に答えると、彼女は何も言わずにティファの額に手の平を押し当てた。そういえば昨日も頭が痛くて遅くまで眠れなかったと、ひんやりとした感触に思い出す。マイの手があまりに冷たいということは熱でもあるのだろうか。

「熱がありますね」

「大丈夫よ。……多分」

他の面々を起こさないよう囁くように言うものの、多分とつけた辺りあまり大丈夫ではないなとティファは自己判断した。成程、つい大丈夫と言ってしまうのは悪い癖かもしれない。

とにかく身体がだるくて仕方がない。

恐らく、今戦いになったら指輪の力を揮うことすらできないだろう。他人の魔力で戦えもしないとは、戦力外通告をされてもいいぐらいだ。

「大丈夫よ。本当に」

だというのにティファは納得していない様子のマイに笑って答え

る。それを無言で見下ろすマイは、降参したとばかりに溜息をついた。

「何も仰らないのですね」

不満たらたらの言葉に片眉を上げて応じる。

するとマイはきっと眦を吊り上げてティファを睨みつけた。

「私が契約しているあの神です。何故何も仰らないのですか」

いつか指摘されると信じて疑わなかったのだろう。マイは拍子抜けどころか失望したと言わんばかりの眼差しでティファを見下ろす。

（確かに言わなくちゃいけないとは思っていたけど……。怒られるようなことかしら、これって）

むしろこちらの方が驚きだ。

ティファは寝転がったままぱちぱちと目を瞬き「だって」と呟いた。

「元々は私のせいなんでしょう？」

そこまで言ってあぁ、と理解した。

上半身を起こし、そのままマイに向かって頭を下げる。

ぎょっと目を見開いた彼女の珍しく動揺した様子に向けて、更に深く頭を垂れた。

「私のせいであんなのと契約させちゃったのよね。本当に御免なさい」

自分の親の仇は彼女の親の仇でもある。

そんな男と契約をする羽目になった元凶は自分なのだ。何か言わなければいけないとすれば、まず謝らなければならなかった。契約方法が契約方法なだけに、特に。無論彼女がダグラスの花嫁になることを許す気など毛頭ないが。

「お、御止めください！　それに私が言いたいのはそういうことじゃなくて……っ！」

マイが大声を上げかけ、慌てて小声に切り替えながらティファの肩を掴んで頭を上げさせる。近づいた顔の横にある銀色のイヤリングに目を留めると、彼女は心底嫌そうにそれを手の平で包み込んだ。

ティファには見られたくないと思っているのかもしれない。
「私は旦那様達の仇と契約したんです。御叱りを受けても不思議ではないと思っていたのですが……」
だというのに、よりによって謝られるとは思っていなかったのだろう。
きちんと座り直したマイの耳を飾るイヤリングを見たまま、ティファは肩を縮めるマイに問いかけた。
「マイはあの神をどうしたいと思っているの？」
「殺します」
即答だ。見事なまでに綺麗な即答にティファは一瞬言葉を失う。
「そ、そう……なの」
しかもどうしたいかという希望ではなく、確定なのかそれは。
きっぱりとした態度にしどろもどろに返すと頷いたマイが「ですが」と続けた。
「今はまだ殺しません」
「？　今は？」
そっとイヤリングに触れた指先がキラリと光るそれに爪を立てる。まるでそうすることで契約神にも聞こえるのだと言わんばかりに、きつく。
「そうです。今はまだ。……使えるので契約は続けますが、ティファ様や私達が平穏に暮らせる世界を手に入れたら、私は彼を殺します」
神に向かって放つには、随分と尊大で不穏な言葉だ。
自分とアレイズの関係とは全く違う関係性に驚かされる。しかし彼女の気持ちは、割とすぐ理解できた。要するにノルマンが自分を育てたのと根本的な部分では同じ理由なのだ。役に立つから、立たせるから。そのために傍に置いている。何も知らずに振り回される方にとっては堪らないが……。
（でも、あの男は多分知っているんでしょうね）
マイは決してダグラスに媚びへつらってなどいない。

むしろはっきりと嫌っていることを主張しているのだ。気付かぬわけがない。否、もしやマイは既に口にしているかもしれない。

「マイティーナ、どうしてそうもきついことばかり言うんだ？」

その証拠にイヤリングを通じて空気を震わせた声は、大仰に嘆いている様子ではあったが心底悲しんでいる風には聞こえなかった。

「呼んでもいないのに口を挟まないでください。邪魔です」

……それにしてもマイの態度はあんまりだと言えるが、相手が相手なだけに取りなす気にもなれない。じゃれあうにしてはあまりに剣呑な態度に、ティファはしみじみと呟いた。

「本当に仲が悪いのね」

するとダグラスがむっと口を尖らせる気配が伝わってきた。

「どこがだ。これだけ仲睦まじいというのに」

「それこそどこがと問うべきでしょう。いいからもう黙りなさい。貴方がティファ様と口を利くなど千年早いです」

今にもマイを抱きしめようと顕現しかけた魔力をねじ伏せ、マイがふいと顔を逸らす。冷淡な態度に、無言だというのに落ち込んでいるのがありありと分かる空気が伝わってくる。本当に、予想外の仇だ。

口を挟むとマイに叱られそうなので黙っていると、ふと彼女が首を傾げた。

「そういえばティファ様。あれからアレイズ様とは御話をされましたか？」

「……ううん、まだよ。何だか気まずくて」

問いかけに首を振ると「そうですか」と困ったように笑う気配がした。

「ではきっと、アレイズ様はティファ様に会いたがっているでしょうね」

「？　何で？」

あんな話をした後だというのにアレイズが自分に会いたがる理由が分からない。

きらきらと布地の隙間から光の粒子が降り落ちる。それを浴びてマイは少し言いづらそうに笑みを深めて告げた。
「ティファ様は御存知なかったようですが、アレイズ様はとっくに世界が見た夢の内容を知っていますよ」
「へ？」
「メイが言う所の銀髪馬鹿男のせいで、私達はその話を知ってしまったんです。メイは……確証はありませんが、多分あの子も」
くぅくぅと寝息を立てるメイの髪を指で梳き、マイが目を細める。
しかし、そんな。
（そんな話、知らなかった）
「ま、待って。じゃあ私が世界を殺すかもしれないって知っててアレイズは――」
契約者はただ一人だとアレイズは言っていた。
その言葉は、ゼルから聞かされた夢の話を知った上で放たれたということなのだろうか。
勢い込んで問いかけるティファに今度は柔らかな眼差しを注ぎ、マイは「はい」と囁いた。
「アレイズ様もイオ様も私もメイも、全て知った上でティファ様の御傍にいます。今までもこれからもそれは変わりません。だからきっとアレイズ様は、今一番ティファ様に会いたいんじゃないかと思うんです」
というよりも思っていなければ許しませんけど。
ふんわりと笑いながらの言葉は聞かなかったことにするとして、ティファは茫然自失の体でまじまじとテントの入口を見ていた。彼は、アレイズは今何を思っているのだろう。伝え損ねたことへの謝罪だろうか。大丈夫だと安心させる言葉を考えているのだろうか。分からないが――少なくとも彼が今自分を想ってくれているのだけは何となく分かった。言いたいことは色々あるが、その気持ちだけで全てを許せてしまう自分が悔しい。
膝の上に置いた拳に力を込める。そうしてアレイズを想う時、い

つも頭に浮かぶ問いを口にした。
「マイ」
「はい」
「私は世界を殺すと思う？」
「いいえ」
端的な答えだった。顔を上げると、彼女は亜麻色の双眸に凛とした光を宿す。
「ですがもしティファ様が世界を殺したいと願われるのでしたら、私は止めません。ティファ様が世界の敵になっても、喜んで付き従います。そしてもし殺したくないと願っていても、世界がティファ様を排除しようとするなら私が世界を殺します」
あの時、プラクトの屋敷で自分が眠っている間に何があったかは知らない。
だがマイは確かにあの時覚悟を決めたのだと、何の迷いもない眼差しを見て理解した。
握りしめた手を胸へと移動させる。そうしてティファも、眼前に座る幼馴染と負けない強さを持って彼女を見返した。
「私は誰も殺さないわ」
頑として譲らない。そんな態度で言い放つ。
主の断固たる決意にマイは僅かに複雑そうな表情を浮かべる。しかしすぐに頭を垂れた。
「――承知致しました」
深く下げられた頭が衣擦れの音と共に上げられる。ふぅと吐き出された息が淡く消えた。
「正直に白状しますと、私はティファ様が世界の敵になってくださった方がいいのにと思っていました」
苦笑交じりの声に眉根を寄せる。
「……そうね、きっとその方が父様と母様のためにもいいと思う。でも」
「はい。アレイズ様のためですものね」

うん、と頷くティファは自分でも驚くほどの素直さだった。そんな彼女を抱きしめ、マイは「大丈夫です」と囁く。

「ティファ様が世界の意志を殺したくないのなら、決して殺させはしません。そうさせない力を私は持っているつもりです。……そうでしょう？　ダグラスさん」

名を呼ばれ、歓喜と共に空気が震える。

「当然だ。マイティーナがいる限り、ティファニエンドがレイナを殺すことなどあり得ない」

それはお互いへの信頼が込められた、強い言葉だった。

マイはダグラスの言葉に答えず、イヤリングを握って口を挟まないようにさせるのみだ。相当鬱陶しいのだろう。だがそれでもマイがダグラスの力を頼り、この契約を続けようとしているのが分かってほっとした。嫌悪と憎悪しかないのなら、自分が代わりを務めないといけないかと密かに思っていたのだ。いつかは破綻する関係であろうと、ティファとしては罪悪感を感じるだけの絆であろうと、そこに幾らかの救いがあるのなら。そう思い、ティファはマイをぎゅっと抱きしめた。

日が昇る。朝が来る。

世界の目覚めに皆が目を覚ますまでには、さほどの時間はかからなかった。

第五十六話

勢いよく開かれたテントの入口。
二つに割れた布から、闇に慣れたテント内を朝日が貫通する。色濃く影を落としたその中でアレイズは探し人を呼んだ。
「ティファ」
日差しをたっぷり浴びたスカイブルーの髪が揺れる。
おずおずと向けられる顔はこちらが動揺してしまう程強ばっていた。恐れているのだと、頭で理解するよりも先に心で察した。身の内を焦がすような苛立ちと共に、申し訳なさがこみ上げる。同時にたまらなく愛しくも。離れていく事を恐れる程には、ティファはアレイズを想っているのだと分かるだけ苛立ちも愛しさも大きい。
何も言わずアレイズを見上げるダークブルーの双眸がもの問いたげに揺れた。
「少し話があるんだが、いいか？」
答えには一瞬の間があった。
「……うん」
頷くティファの背をマイがそっと押す。彼女は実の姉のような慈しみに満ちた眼差しでティファを一瞥した後、今度はアレイズに向けて深く頭を下げた。
「御早く願います。敵が来ないとも限りませんので」
亜麻色の髪がさらりと肩から流れていく。少し伸びたように見える。
「あぁ。なるべく早く戻る」
「行ってきます」
はい、とにこやかに笑うマイはアレイズ達に手を振りながら空いた方の手でパシンとイヤリングを叩いているようだった。傍から見るとおかしな光景だが、風を模ったそれが何であるのか知っているので悲しげな気配も声も見なかったことにして、アレイズはイオ達

からも少し離れた場所へティファを連れていった。その間付かず離れずぎこちなく隣を歩くティファが百面相を繰り出していた理由までは分からなかったが。

「この辺でいいか」

遠目にテントが見え、異常を察知するにも不便のない距離で立ち止まると、ティファも「そうだね」と言いながら立ち止まる。その距離もやはり近すぎず遠すぎずと言った風で、アレイズはむっと眉根を寄せておもむろに腕を伸ばした。ティファの腕を掴み、そのまま引き寄せる。

「――っ！」

息を呑み、けれども何も言わずにされるがままの彼女はアレイズの腕の中で目を白黒させている。だが一秒また一秒と時が経つ程に、次第に頬が赤く染まっていく。それでも逃げる気配がないのは幸いだが、アレイズはもはや逃げたくても逃がさんとばかりに両腕に力を籠めた。華奢な体が軋まない程度の大した事のない力だが、その程度の力でも効果があるのかティファは微動だにしない。

「ティファ」

何も言われないのをいい事に滑らかな髪に顔を埋め、吐き出すように名を呼ぶ。

体内から喉を口内を通過した息の熱さのせいで腕に籠る力が増す。ぴったりとくっついた体から交わる体温が、自分達が零距離にあることを伝える度満足感が胸を支配した。好きだ好きだとは言ってはいたが、ここまでとは思いもしなかったとアレイズは少なからず驚愕を覚える。まだ自分はティファの気持ちすら聞いていないというのに。

（それでも、聞くより先に俺には言うべき事がある）

イオがわざわざ与えてくれた機会なのだ。無駄にするわけにはいかない。

青々とした匂いを胸一杯に吸い込み、アレイズは意を決したように口を開いた。

「お前が記憶を取り戻した後、一つだけ話していなかった事があるんだ」
沈黙が返る。ただ、背中に縋るようなティファの手の感触が伝わった。
このままでは溺れてしまいそうな切実さを払拭させたくて、アレイズは心持ち早口に続ける。
「プラクトの屋敷でお前が倒れた後、俺はイオからレイナが見た夢について全てを聞かせてもらった。お前がレイナを殺して新たな世界の意思となる夢の話だ」
しかし驚愕の息は聞こえなかった。
「うん」
知ってた、と漸く返ってきた声にアレイズの方が目を見開く。
「……知っていた、のか？」
「ついさっき、マイが教えてくれたから」
弱々しい声にどっと力が抜ける。今まで緊張していた分、余計に疲労感が増した。まさかティファがこの話を知っているとは思っていなかったのだから当然と言えば当然だ。だが――。
（知っていたなら、何をあんなに恐れていたんだ……？）
マイから話を聞いているのなら、自分がティファだけを契約者と定めた言葉がどの前提の上に成り立っていたのか、聡い彼女ならすぐに察したはずだ。ならば何故、彼女は自分に縋っているのだろうか。こんなに肩を震わせて。
「ティファ……？」
「ねぇ、ジュード」
声が重なる。
譲るように口を噤むと、ティファは少し身を離してからひたとアレイズを見据えた。
「あなたは私が世界を殺すかもしれないと知っていて、私を契約者に選ぶのね」
その毅然とした声と眼差しに、これがこの件に関しての最後の問

答になるのだとアレイズは理解した。
「あぁ。俺はお前以外の契約者を選ぶつもりはない」
だから今までよりもあっさりと頷く。覚悟などとうに決めているし、これ以外の答えを自分はもう持たないのだ。他の誰とも契約などしたくはないし、今一番大事なものを見失うわけにはいかない。一瞬でも手を離してしまうこと。それはティファをイオに奪われるのと同義なのだから。
ただ、一つだけ。
これだけは伝えておかなければならない事実があった。
「レイニウム大聖堂の地下でお前に出会った時、俺はお前を利用するつもりだった」
緩慢に見開かれたダークブルーの双眸。草原を揺らす風に弄ばれるスカイブルーの髪。気の強そうな、それでもどこかあどけなさを残すこの眼前の少女は、いつかレイナがアレイズに話した鍵だった。
ティファニエンド。今まで滅多に呼ばなかった名を呼ぶ。
「レイナはお前を世界に至る鍵と呼んだんだ。だから契約してレイナに会うための贄となってもらう予定で旅に連れ出した。……プラクトでイオの話を聞いた時は俄には信じられなかった。俺がレイナから聞いた話じゃ、原理はどうあれ必要な場所に行けばお前が贄となって死に、彼女に会える事になっていたんだから」
見開かれた瞳がじっとアレイズを見据えている。双眸の奥深く、暗い場所に痛みを宿して。そこから一瞬足りとも目を逸らさず、アレイズは独白を続けた。
「ゼルによれば、それこそが二分の可能性じゃないかと言う話だったがな。だが、そうなるとティファかレイナ、どちらかが必ず死ぬ事になる」
もしもどちらの話も正しければ、の話だが。
「……ジュード、は」
喘ぐような、呼吸を忘れてしまったかのような苦しげな声が耳朶を打つ。

「鍵にするつもりで私を連れて行きたいと思ってる？」
痛みを孕んだ声に、内心で愚問だと吐き捨てた。
腹の底に怒りが滾っていく。しかしそれはティファが傷ついてアレイズを疑ったからではなく、仮に自分が頷いたとしても「そっか」と笑って受け入れそうだったからだ。その反応は、疑われるより余程心にくる。
離れかけた体を抱き寄せて今一度ぴったりと隙間なく触れ合わせる。そうして両手でティファの頬を挟んで顔を近づけた。呼気が触れ合う距離で止め、囁くように返す。
「最初はそう思っていた、という話だ。――今は」
泣き出しそうな目尻に口付ける。
「一緒にいたいから傍にと望んでいる。お前を決して死なせはしない」
触れた先から涙がこぼれ落ちる。
「でも、それじゃレイナに会えないじゃない」
「他の方法を探す。それでもし誰かを贄にしなければ到達できないって分かったら、その時は潔く諦めるさ」
いつか必ず助けると誓った友人だ。会いたくないわけがない。
それでもティファを犠牲にする方法だけは取れなかった。万一そんな方法を取ってしまったら、レイナに会えたとてアレイズはちっとも嬉しくないだろう。それどころか自分も後を追いそうだ。はっきり言ってそれじゃ意味がない。だから断言できるのだ。決してティファの死など願わないと。
ただ、それはどこまで言ってもこちらの一方的な言い分に過ぎない。
勝手に贄にするつもりで契約して旅に連れ出し、勝手に惚れて生を望んだ。メイやマイがこのことを知ったら、半殺しにするか許すべきか躊躇するだろう。それほどまでに自己中心的な考えなのだ。果たしてこんな事を言われてティファは許すのか、そこがアレイズには分からなかった。

（契約を続けてもいいか、一番尋ねなければならないのは俺の方だ）
口を開きかける。だが、ともすれば飛び出しそうになる言葉は必死で堪えた。
離れてもいいと口にするのは、存外、きつい。
自分から訊いて相手が「じゃあそうする」などと言おうものなら引きとめようがないではないか。こちらはティファが離れる事など考えられないというのに。そう思うからこそ訊けないし、度胸のない自分を詰りたくなる。アレイズは僅かに開いた唇から何を言うべきか思案し、何一つ浮かばない事に舌打ちしそうになった。
（ここまで話しておいて、肝心な言葉は何一つ言えない）
契約者に重大な隠し事をしていたのだ。有耶無耶にできる話ではない。
だというのにアレイズは自分から手を離すことができないまま、言葉を生めない代わりにふわふわとティファの顔中に軽いキスを落としていく。甘やかすように、ティファに離れるなと希うように。
卑怯だということは、誰よりも自分が一番よく分かっていた。
キスが落ちた先の目尻が、頬が緩んでいく。うっとりとした笑顔に見とれると、一つだけ眼差しに鋭さを残っているのがはっきりと分かった。
「知らないうちに殺されかけていたのね、私」
今この場に他の誰かがいたなら、静謐な声に宿る殺気に一歩後ずさったに違いない。だがその殺気はアレイズが口を開く前に霧散した。
押し当てられた両頬に手を添え、ティファが音も立てずに唇に笑みを形作る。
「言いたい事は一杯あるよ。人のこと勝手に殺そうとしてたのだって、何も教えてくれなかったのだって。でも――」
当たり前だ。人間誰しも殺されかけたら腹ぐらい立つ。
だというのにティファは密やかに笑って、そのままの静けさで泣くのだ。

「変だよね。本当は沢山怒らなきゃいけないはずなのに、全然腹が立たないなんて」
「……ティファ」
怒りをかなぐり捨てた嬉しそうな笑顔が仰向く。
「世界が見た夢の話をジュードが知っていたって聞いた時、嬉しくて仕方なかったの。あなたを何度も苦しめていたかもしれない話なのに、全部知った上で私を信じてくれたことが嬉しくて」
いとおしげに撫でられた手の甲が熱い。
それがどちらの熱によるものか分からないまま黙っているアレイズに、ティファは決意で塗り込められた声を放った。耳に痛いほどの静寂を打ち破る声の、何と強いことか。アレイズは自分と違うティファの声を聞いて自己嫌悪に陥りそうになり、しかし次の瞬間それどころではなくなった。紡がれたティファの言葉があまりに衝撃的で。
「私は誰も殺さない。殺したくないし、誰かを悲しませたくない。それを信じる信じないっていうのは誰に押し付けられるものじゃないから、私からお願いしたりはしない。ただね、一つだけ覚えておいてほしいの」
清々しいまでの笑みを浮かべたまま、ティファが気負わず続ける。
「もしも私が世界を殺しそうになったら、その時は私を殺していいよ」
息が、止まるかと思った。
「何を――」
先が続けられない。アレイズは言いかけた言葉の先を知らないまま口を閉じる。
殺してもいいなどと、そんないりもしない許可を与えられてどうしろというのか。
眉間に皺を寄せ、徐々に襲い来る怒りのままにティファを睨み据える。だが彼女もまた真剣なのか、アレイズの視線を受け止めるのみで否定の言葉は口にしない。本気でアレイズに殺されてもいいと

思っているのだ、ティファは。
「お前はレイナを殺さない」
「知ってるわ。だからこれはただの備えよ」
呟いた言葉に即答され、アレイズはますます眉間の皺を深くした。
無論、ここで頷くことなど本来ならばできない。自分はティファを護りたいと思っているし、命が奪われることをよしとしない。だが、その気持ちの裏側で思うのだ。ここで拒否するのは何より彼女を裏切ることになるのではないかと。
（ティファは信じろとは言わないと言った。だが、今の言葉はそういうことになるんじゃないのか？）
彼女が賭けるのは命。己が賭けるのは自分にとって一番大切な人。どちらも同じものだが、それぞれ失えないのに変わりはない。
そしてこの賭けに乗るのに必要なのは信頼であり、賭けの相手はティファではなく世界そのものだ。自分達はあくまで同じものを賭けて戦うしかない。一人では勝つことはおろか世界に到達さえできないのだから。
「……分かった」
こみ上げてくる苦いものを飲み下してアレイズは頷いた。
「その時は俺がお前を殺す。他の誰でもなく、必ず俺が」
きっぱりとしたアレイズの返答をティファは黙って受け止める。
そうして、そっと笑った。
「――よかった」
満足気な、幸福そうな顔が一瞬にしてアレイズの網膜に焼きつく。
静かに浮かべられた満面の笑み。
（真実俺に殺されてもいいと思っていたんだな。俺に殺された方がいいと）
何もかもを許容したその表情を見て、アレイズは胸中で呟くと共に衝動的に決意していた。
「だが、お前も覚悟しとけ」
水をさすように言い放つ。

「何？」
胡乱気な眼差しはまさかここで別の覚悟をさせられるとは思っていなかったと告げている。
どこか抜けた声に笑いかけ、アレイズは口の端を吊り上げた。
「お前が死んだら、もれなく俺も一緒についてくる」
「……は？」
「だから、俺も一緒に死んでやると言ったんだ」
神であるアレイズには死という概念についていまいちピンとこなかったし、第一死に方を知らない。だがとりあえず血を流し続ければ生命活動は終わるだろう事は分かったので、きょとんと目を丸くしたティファを見て笑ったまま続ける。
「何だ、まさか死んだら全て終わると思っていたのか？」
「い、いやだって。普通終わるものでしょう？　色々と」
「そうか？　だがそう思っているのなら悪いな。命が終わったぐらいじゃ俺から逃れられん」
死なないための道を探そう。世界もティファも、誰も死なない道を。
だがどれだけ世界を守ってもティファを止めても、世界が見た夢そのままの光景が生み出されようとしていたら、その時自分はティファを殺すだろう。彼女が望むまま、世界を殺す道具ではなく人間として生を全うできるように。
否、殺さないまでもそれに近いことをするかもしれない。
アレイズには、そのための当てが一つだけあった。
春日に飛ばされた別の次元。幾つもある次元の中には、もしかしたら人が生きられる世界があるかもしれない。誰も見たことがない、帰ってきたことのない場所だ。確証などないし生きられる場所などどこにもないのかもしれない。だが冷静にそう論じられようと、恐らく自分は死に物狂いで探すだろう。そしてティファと共に転移するに違いない。この世界を捨てて新たなる場所で生きるために。
だが命を奪うにしても別の世界に転移させるにしても、そこには

必ずアレイズがいるのだ。これは譲れない。もう二度と離したくないと思った瞬間から、これは決定事項なのだ。

信じられないとばかりに口をぱくぱくさせるティファの頬に口付け、きつく抱きしめる。

「勿論俺はお前を信じているし、万一の時も殺さなくて済むよう最善を探す。だがもし願われるままお前を殺す時が来たら、その時は俺も潔く諦めて死ぬ。そうすればお前も俺も一人じゃない」

もしかしたら自分は今とんでもないことを口走っているのではないかと、一人焦る。

死ぬと口にする事でも、ティファを殺すと口にする事でもない。一緒に死んで、死後も離さないと言う己は今果てしなく遠回しな求婚をしているように思えてならなかったせいだ。

（いや、実際そうか。……そうだな、これはプロポーズだ）

神の花嫁に向かって言うには、あまりに今更な気がするが。

とはいえあの鈍いティファがそんな事に気付くわけもない。

「だ、駄目に決まってるじゃない！」

あっさりと拒絶され、アレイズは苦笑を浮かべた。無論引きはしないが。

「そう言うと思った。だがティファ、お前自分が死んだ後の俺をどうやって止めようって言うんだ？」

「……っ！　卑怯だわ」

「どこがだ。よりによって俺に、自分を殺せと言う方が余程卑怯だろう」

揶揄するように笑ったアレイズを睨めつけ、ティファが一瞬口を閉ざす。だがすぐに尖った声が返った。

「これじゃ何がなんでも死ねないわ」

「それはいいな」

拗ねているのか心持ち尖った唇を親指の腹で撫で、そっと被せるように続けた。

「俺も生きているお前と一緒にいられる方がいい」

指の感触を味あわせるように唇をなぞる。その動作の一つ一つに赤くなったり狼狽えたりするティファを今すぐ押し倒したい衝動に駆られながら、それでもアレイズはそれ以上の事をせず、ただ笑った。

「これからもよろしく、ティファ」

これが最後の問答であることはお互いよく分かっている。

だからここでよろしくと言い合えれば、後はただ世界に向かって突き進むのみだ。

しっとりとした唇が震える。ダークブルーの双眸が泣きそうに歪んだかと思った刹那、どんと大きな音を立ててティファがアレイズに体当りするように抱きついた。「……よろしく」涙混じりの声が耳朶を打つ。遠慮無く背中に回された腕の縋り付くような強さを宥めるようにそっとティファの背中を叩くと、まるでそれに押し出されたようにティファが掠れた声で呟いた。大好き、と。

予想外の言葉に思考が止まる。「ジュード」そんなアレイズを無視してティファがなおも続ける。

「私、あなたが好きだわ」

甘さや羞恥よりも言わなければという焦燥感に支配された声に、アレイズが考えたのは何てことを言うんだの一言だった。こんな状況で、今、必死に色々と我慢している自分にこんな事を言って、どうなるか分かっているのか彼女は。

（せっかく、口付けだって我慢して……！）

どこにキスを落としても、ティファの気持ちが分からない以上唇だけは奪えなかった。その必死なまでの自制心をことごとく破壊して、一体ティファは何をしたいのか理解に苦しむ。否、理解に苦しむ以前に自分の欲求に負けそうで苦しい。

一生懸命伝えようとした“好き”の意味ぐらい、アレイズとて気付いている。

だから苦しいのだ。このまま衝動的に全てを奪ってしまいそうで。

その時不意に、悶々とするアレイズの肌にどこかで見ているので

あろうイオの気配が強くなるのを感じた。いい加減にしろと言わんばかりの濃密な気配は、イオにしては押さえたつもりだろうがアレイズにとっては肌を灼く程の痛みとなった。おかげで理性を取り戻せたのでそれはよしとするが。

「ジュード……？」

何も言わずにいたせいだろうか。

ティファが不安気にアレイズを見上げ、まさか自分は実は嫌われているのではないかと余計な事を考えだした様子だったので、否定するように彼女をかき抱く。そのまま、自分が望むものの片鱗だけを覗かせた問いを放つ。

「ティファ」

「何？」

「口付けてもいいか？」

イオの気配がより濃くなる。だが。

（せめてこのぐらいはいいだろう）

他の事は我慢するのだからせめてこのぐらいは。

実際はもっと色々と願いたい事はあったし、そもそもこんなことをわざわざ問うのもおかしな話だ。しかしどうしても今は、彼女に是と言ってほしくてアレイズはティファの答えを待つ。

沈黙がひとひら、ふたひら、桜の花びらとなって降り落ちる。

その度に不安を抱えるアレイズの胸にしがみつき、ティファは何も答えずただこくこくと頷いた。その耳まで赤く染まった肌をなぞると怯えるように彼女の肩が震えたが、優しく仰向かせた顔には拒絶はなく、やがて意を決したように瞼が閉じられる。羞恥に負けて言葉にできなかった彼女の精一杯の返事に、アレイズは本当に理性がもつのか心配になりながらも顔を近づける。甘く、柔らかな感触が体を焦がした瞬間理性が吹き飛ばなかったのは幸いと言えた。

第五十七話

――痛い。

割れるような頭の痛みに、額にどっと汗が噴き出す。袖で拭っても拭っても溢れるように流れていく脂汗に仕舞いには面倒くささが勝り、気持ちの悪さを目を閉じる事で無視して流れるがままに任せた。

その間も思考を切り裂いていく痛みは消えない。

だがこれは己に与えられた痛みではないと本能が訴えていた。

「……いたっ……！」

「どうした？」

「わか、らない。でも頭が痛くて」

遠く離れた場所でティファとアレイズの声がする。常人の聴覚では決して聞き取れないだけの距離を置いて話しているであろう彼等の声は、いつからこちらに筒抜けになっていたのだろうか。

目を閉じれば聴覚が嗅覚が触覚が彼等の様子を伝えてくれる。

頭を押さえて呻くティファを抱く気遣わしげなアレイズの腕の強さまではっきりと分かるようだ。しかし感知できるものはそれだけに留まらなかった。

“また？　でも、どうしていつも……”

喉から発した声とは違うティファの声は胸中での呟きだ。

誰に言われるでもなくそれと理解し、閉じた瞼に力を込める。

人の心を覗くなど趣味のいいことではない。ましてや主であり親友の心など。

アレイズに微笑みかけたティファが緩みかけた顔を即座に苦痛に歪める。気丈に振舞おうとしても頭痛が彼女を責め苛むのだ。自分にもよく分かる。同じ痛みを共有する身としては、嫌になるほど理解できる激痛だった。――こんな痛みをずっと抱えていたなんてと歯噛みしたくなる。

ティファはこの頭痛を原因不明なものとして、より一層の困惑を胸に抱いている様子だった。もやもやと体内をたゆたう心。その奥底に濁りがあるのを感知できたのは恐らくは自分だけだろう。

『貴女が全てを奪われる前に彼女を殺しなさい』

『触らないで』

ノルマンと、それから聞いたことのない女の声がティファの脳裏に甦る。育ての親であるノルマンがティファに影響を与えるのは分かるが、もう一人は一体誰なのだろうと考えを巡らせると、ティファが思わずと言った風に漏らした。

「世界……」

「世界？　レイナがどうかしたのか？」

ぽつり零れた声にアレイズが反応する。「何でもないわ」それをふるふると首を振る事で答えるティファの苦い顔を想像しながら、あの声が誰の物であるかを思い浮かべる。世界の意志レイナ。女性の姿を取って人々の前に現れるという神々の主が、あの声の持ち主なのだろうか。

――頭が痛い。

今度こそ本物の、己に与えられた痛みに顔を顰める。眼の奥に潜む何かが暴れださないようきつくきつく瞼を閉じると、僅かだが楽になった。

鋭敏すぎる感覚、それが肌を食い破らんとする何かによってもたらされた副産物なのだと朧気ながらに理解している自分が不思議だった。どこか懐かしくもある感覚にこのまま意識を明け渡したくなるものの、今だけは駄目だと己の心を叱咤する。

閉じられた目蓋の裏にあるもの常ならば闇のはずのものが、赤くアカク染まっていく。鮮血をまき散らして哄笑する“ナニカ”に決して口にできないような罵詈雑言を吐き捨てつつ、感じられるままにティファの心の声を受け止めた。

“ジュードに触れると痛くなる。……まさか、まだあの時の声の持ち主が私の中にいるってこと？”

アレイズの真名をそっと呼ぶティファは痛みに耐えながらも冷静に自分の体に起こる変化を観察しているようだった。神の花嫁としてアレイズに慈しまれるその度に襲う激しい痛みが何であるかは気付いていない様子だったが。

記憶の奔流に飲み込まれつつ、ティファが今何を考えているか組み立てるように分析していく。春日によって生み出された光の渦で一度は消えたはずの思念。その思念に襲われ困惑している様子と何故アレイズに触れられるとこんなにも痛いのか不思議に思っている様子が手に取るように分かった。

もしも口が開き、声が届くなら答えを教えてやりたい。

そう思うものの指は一本も動かせず口も開きそうにない。大体、どれだけ叫んでも声は届かないだろう。それだけ遠くにいるのだ、彼等は。

ただ一つ救いなのは、彼女は自分を襲うものが何かきちんと気付き始めているということだ。

“どうして私の中に世界が”

考えるのも恐ろしいと言うように早いスピードで駆け抜けた思考が震えていた。

ティファにはどうしても解せないようだった。否、理解できるものなど世界以外にいないのではないだろうか。自分の魂を乗っ取れるような存在なら、とうの昔にティファを殺せたはずなのだから。

だとすると、これは世界じゃなくて別の誰かなのだろうか？

疑念がティファと自分の心に渦巻く。そうこうするうちに痛みに耐えられなくなったティファが膝をつき、荒い息を吐いた。

「ティファ」

「大丈夫。……ちょっと頭が痛いだけ」

「ちょっとって、お前それは全然――」

「あの時みたいに、なってるだけだから」

ティファの顔を覗き込み顔を青くするアレイズに、彼女はスカイブルーの髪を鬱陶しそうにかきあげて首を振る。

本当なら彼に相談したいことは山とあるだろうに、ティファはあえて自分の中にいるものが誰か話さなかった。

“まだ確信は持てない。だけどもしこの状況を変えられるのなら”

代わりに別の言葉を放つ。

「大丈夫よ。それよりも、急いで世界に会わないと」

“世界を見つけられたら何か変わるかもしれない。ううん、こちらがどれだけ嫌がったって変わってしまうんだわ”

世界の意志たるレイナと、彼女を殺すと予言されたティファの邂逅にはそれだけの力がある。そのことを重々承知した上で放った言葉にアレイズが目を見開く。だが続けられた言葉を聞くことは叶わなかった。

「――ここにいたんだね、メイ」

テントの入口が開かれる。久しぶりに自分の聴覚でものを聞き、メイは漸く目を開けた。

頭痛が遠のいていく。

「……二人を見ていたんじゃないんですか？」

イオさん。呼びかけると、高くなった太陽の光を浴びてより柔らかさを増した金髪が困ったような苦いものを噛み締めているような笑みと共に揺れた。「何だか馬鹿らしくなってきてさ」嘯き、イオはメイ以外誰もいないテントの中をぐるりと見渡す。

「マイとダグラスは？」

「外に出て、カスガとアヤの手伝いをしてて……」

放置していた汗をぐいと拭い上半身を起こすメイを制するようにイオが傍に近づいて膝をついた。碧眼が近づき、じっとメイを見据えて弓なりに細められた。

「君の目、泣き腫らしたみたいに赤くなってるよ」

「泣いてないけど」

「そうだろうね。泣いたぐらいじゃ目の色は変わらないし」

憐れみの一歩手前で留められた感情が視線から伝わる。それで分かった。

（イオさんは気付いてるんだ）
自分でさえまだよく分かっていない事を、本能でしか察せられないものを。
「出てきたんだね」
唐突な問いに、何故か首が縦に動いた。
「体でどこか苦しい所とか痛い所は？」
「頭が少し痛かったですけど、イオさんが来たら治りました」
「そっか。……まだ神と対面するのは恐いみたいだね」
何がとは問わなかった。否、問えなかった。
男にしては華奢な手がメイの額に張り付いた髪を優しく剥がす。
労るような仕草に目を瞠ると、普段ティファにしか向けられないような優しい声が耳朶を打った。
「君はよく頑張ってるよ、メイ。“それ”は人間に御せるような代物じゃないのに、まだちゃんと正気を保ってられるなんてね」
あぁ、やっぱり知っているのだ。
メイは絶望に似た心持ちで睫毛を伏せ掛け、しかし思い直したようにイオを見据えた。
「姉さん達は」
「マイもダグラスも、君が全部知ってるのは気付いてない。知ってるのは僕だけさ」
打てば響く受け答えに深く息を吐き出す。それを安堵と取ったのか「でも」と続けるイオの声は昏い。
ぐいと顔を近づけられる。旅の初めに見た海と同じ綺麗な蒼い瞳を魅入られたように見るメイは、しかしそれが決して甘いものではなく放たれるものが絶望を帯びている事を知っていた。その証拠に、イオは今にも泣き出しそうな顔を浮かべる。
「これはもう僕でもどうにもならないんだ」
グラスは、君達の親は本当に酷いとイオが零す。
「ダグラスとの戦闘後に一度、僕が一度。これだけ封印できたのが奇跡なんだよ。……この秘術は再封印を想定していない術式だった

のに」

両親に向けているのだろうか。憎々しげな顔にメイは茫洋とした視線を返すのみだ。

理由は分からないが、何を今更という気持ちがこみ上げたせいかもしれない。

（ううん、違う。理由なんて分かってる。……分かってたんだ。父さんも母さんも、私を生かすつもりなんてなかった）

ティファの命が世界を殺す武器であるなら、メイの命は世界の敵を護る武器だ。目的の違う二つの武器に通じるのは、どちらも使い捨てであるということ。ただ一度の機会のためだけに生かされ、後の事は考えられていない。それを悲しいと思わないのは、秘術を植えつけられた時にこちらを見下ろす二対の目があまりに冷たかったせいだろうか。

世界の理をねじ曲げられるだけの強靭な意思を持つ優秀な姉。何処まで行っても平凡な妹。親の愛情がどちらに向かっているかは誰に言われるまでもなく、メイが一番理解していた。自分達は魂を分かつ半身なのだ。その身に受ける愛情の質と量の違いなど心を閉じていても分かる。

（でも私、姉さんが羨ましいとは思わないんだよね）

無論姉のように親に愛されたかったとは思う。

しかしそれとは裏腹に、ああなりたくはなかったとも思うのだ。

一心に向けられる愛情。あれは期待の裏返しだ。

（きっと姉さんも、自分では気付かない所で何かを期待されて背負わされてるんだ）

そしてそれはメイに掛けられたものよりも遥かに大きい。自分のように使い捨てになれた方がマシだと言えるぐらいに。だからメイはマイを哀れみこそすれ憎みなどしなかった。変わりたいとは思わないが、その時が来たら助けになりたいと思う程にメイはマイが可哀想だった。

「イオさん」

やや掠れた声で問う。
「私はあとどれぐらいもつかな」
あと一度封印が解けたら元には戻れないだろう。もう随分と綻びが大きくなってしまった。
だからただ、願う。
（せめてティファ様が世界の件で決着をつけられるまではこのまま）
結末を見届けるまではこのまま己を保っていたい。
イオは答えなかった。確たる答えを得られないまま、ただメイを見下ろしていた。その眼差しが両親のように冷たくないことに泣きたくなる。この甘く優しい魂の審判者が恋を成就させられなかったのを初めて気の毒に思った。そんな事を思われるのは業腹だろうから決して口には出さないが。
思考の奥深くで獣の哄笑が聞こえる。
癇に障る声を殴りつけてやりたいと思った刹那、肌が粟立ち反射的に背筋が伸びた。
「これは、火薬かい？」
イオも嗅覚を刺激するものが何であるか察して立ち上がる。当たり前のように差し出された手を取って立ち上がり、メイは髪を束ねる時間も惜しいとテントの入り口に手を掛け外を睨めつけた。
「急ごう。アヤの予知通り、戦いが始まっちゃうかもしれない」
感覚が次第に常人のそれに戻っていく。人である事を生まれて初めて感謝しながら、メイはリングリングを構えて外に飛び出した。

◇　◇　◇

メイの感知が途絶えた後、ティファとアレイズは困り顔を突き合わせていた。
ともあれ、ビビッド大陸から出ないことには始まらないとアレイズが告げたせいだ。
「決められた場所でないとどこに飛ぶか分からんらしいからな」

「ここは違うの？」
「まず違うだろうな。もし辿り着けばイオが黙っていないだろう」
眉を顰めて言うアレイズにそれもそうだとティファは納得した。
イオのことだから、きっとその場所に辿り着いたら春日も綾も放置して帰ろうと言うに違いない。見た目は誰よりも甘そうなのに、今まで出会ったどの神よりもドライなのが彼だ。
うーんと首を傾げる。その背後でふわりと風が舞った。
「そういうことなら問題はない」
低く耳をくすぐる声に顔をしかめつつ振り返る。すると先ほどまでイヤリングの中に宿っていたダグラスが人の姿を取って顕現しているのが見えたので、しかめ面を深める。声だけならばともかく姿など見たくない。
それがマイには分かったのだろう。半ば押しのけるようにしてダグラスを横に追いやった。……その程度で口を閉じないのが彼が彼である所以なのだが。
「あの神器があるだろう。セラフィムといったか？　あれがあれば空間転移ぐらい容易い」
「セラフィム？」
「カスガさんが持ってるあれのことですか？」
ティファとマイが尋ねると、ダグラスは自信満々に首を縦に振る。
「そうだ。あれだけの神器なんだ、余裕で目指す先に転移できるだろう」
自信の中に誇らしさが見え隠れする顔に、一同が驚きつつも目を逸らす。マイに至っては溜息さえついていた。全員分かっているのだ。ダグラスがマイの質問に役に立てて嬉しくて仕方がない様子なのが。これではまるで犬じゃないかと思っていると、当のマイは至って冷淡な声で返す。
「だったら早く言ってください。考える時間がもったいなかったです」
あれほどまで神に愛されているのに、全く臆せず気にせず辛辣な

口調を放てるマイにティファはつくづく感心する。最強の魔術師の家系であるグラス一族。彼等の真の恐ろしさはここに極まっているのではないかと一瞬だけ思った。これだけ神を手玉に取れれば上等だ。ティファには真似できそうにない。

冷や汗を流しつつ遠くを見やる。

「じゃ、とりあえずカスガに会わないといけないわけね」

「そうだな」

セラフィム奪還は叶えたのだし、折を見て頼んでみるのもいいかもしれない。ダグラスの提案に一条の光を見つけたティファは胸を撫で下ろし、鼻につんと香った剣呑な匂いに咄嗟に手を振り上げていた。

「――危ないっ！」

左手薬指に嵌る指輪が結界を練り上げる。刹那、ボォンッともドォンッともつかぬ轟音が鼓膜を強かに打ち付け、淡い緑色の結界中を覆うように火炎が舞った。魔力とは違う武器が放った一撃に、マイがさっと怒気を孕んだ目を向ける。

「敵っ！？」

その一言で自分達が襲撃されたのだと思い至る。だが一体どこから。

人の近づく気配をダグラスはおろかアレイズも気付かなかった。相当遠距離から放たれたのか。

結界を張る左手はそのままに、空いた右手を空にかざす。人差し指をくるりと回し光の円環を生み出す。次第に大きくなる光の輪は外側を空気に溶かしながら馴染むように広がっていく。そうして探知の手を広げていると思いがけずすぐ傍に人の気配を感じて、ティファは慌てて視線を前に向けた。すると慌てた様子で着物の裾をはためかせつつ駆け寄ってくる綾の姿を見つけた。

「皆さん！」

「綾！？　一体これはどういうことだ？」

遠方からの攻撃は一度きりだった。それでも警戒しつつアレイズ

が問うと、綾はその腕に縋りついた。
「春日様が……春日様が」
「どうした？　春日に何があった」
要領を得ない言葉を吐く綾と急かすような早口で問うアレイズにティファの不安が増す。そしてこういう時の嫌な予感というものは、総じて当たるのが世の常だ。綾は見事にそれを証明してくれた。
「……か、春日様とセラフィムが敵の手に落ちました……！」
目を見開き驚く者はいなかった。皆一様に想像していたのかもしれない。
「ティファ様！　姉さん！」
テントからメイとイオが掛けてくる。後ろに後ろにとなびいていく亜麻色の髪が真紅のメイド服以上の存在感を見る者に与えつつ、メイは周囲を警戒しつつリングリングを握りしめマイに目を向けた。
「火薬の匂いがしたんだけど……。敵は？」
「遠距離からの攻撃みたいね。姿が見えないわ。それよりカスガさんとセラフィムが」
「奪われたのね」
「えぇ」
「敵の居場所に心当たりは？」
「ないわ。でも方角なら攻撃された方向から割り出せるでしょう」
「武器が聖大陸で造られてた銃や大砲みたいなものだとすると、そんなに距離は離れてないはずだけど。ここから見えないってことは結構遠そうだね。……うーん」
冷徹な眼差しで前を見据え、顔も合わせずにポンポン言葉を交わす双子は話をするというよりも自分の考えを整理しているように見えた。相手の考えさえ、自分の思考と思って話している節が見受けられる。ダグラスは二人の姿が物珍しいのか微笑を浮かべて彼女達を見ていた。だがそれはダグラスだけだ。イオもアレイズもそしてティファも、これが珍しい光景だと思っていない。
（やっとマイが戻ってきたって実感が湧いたわ）

相手の言葉尻を受け継いで一つの言葉のように喋っていくような滑らかな二人の会話は幼い頃より慣れ親しんだものだ。ティファはこんな状況であるにも関わらずくすりと笑い、すぐさま結界に厳しい視線を注いだ。

（攻撃があったのは大体あの辺り……ということは、敵はあちらにいるのかしら）

生憎それが東西南北どちらの方角なのかは知らないが、位置としては理解できる。一人納得しているとアレイズが補足するように「北北西だ」と告げた。そうしてティファを振り返る。

「行くか？　神が三人もいるんだ。言ってくれれば俺達で奪還しに行くが」

「行くに決まってるじゃない。放ってなんかおけないわ。それにあんな危ないのとアレイズやイオと一緒にしたくないもの」

無論ダグラスの事だ。指差して言ってやるとマイがさもありなんと頷く。

「ごもっともです。では参りましょう……セラフィムが渡ってしまえばカスガさんに何があるか分かりません」

えぇ、頷き先導するアレイズとマイについていく。その時隣に立つメイの顔の蒼白さが気になり、ティファはこっそりと尋ねた。

「メイ、あなた大丈夫？　顔青いけど」

「え？　え、うん。全然元気だよ？　今ならどれだけ敵がいても引き裂けるぐらい」

それは色々と問題だろう。ティファは溜息をつきつつ、無邪気な笑みを振りまくメイを見てまぁ大丈夫かと判断してこの話を打ち切った。代わりに綾に話を振る。

「ところでどうしてカスガは捕まったの？　セラフィムがあったらほとんど無敵じゃない、彼女」

あれだけの魔力を持つ人間だ。容易く捕まるなどあり得ないだろう。

「それが……」

そう思って尋ねると、綾は胸の前に両手を重ねて深々と息を吐いた。
「魔術攻撃を全く受け付けない人が現れたんです。私達には他に武器がありませんでしたし……」
春日を奪われた時の事を思い出しているのか。皮が切れそうな程強く唇を噛み締める綾に、ティファが呆然と呟いた。
「魔術が効かない？」
（確かにそれなら春日や綾じゃ太刀打ちできないのは当たり前だけど、でも私そんな人がいるなんて聞いたことがないわ）
案の定、アレイズが怪訝そうな声を上げる。
「しかし、魔術が効かない奴とは一体どんな奴なんだ？　そんな人間、俺は聞いた事がない」
その声に同調するようにダグラスが頷く。
「俺もだ。どれだけ優秀な魔術師でも世界の理からは外れられんからな」
マイが飛行術を使うのを拒否したからか、すらりと長い足でしっかりと歩幅を取りながら歩くダグラスの呟きにイオが首を傾げる。
「神ですら魔術の攻撃はしっかり受けるからね。何らかの特殊な遺伝子でも持ってるのかな？　厄介だね」
厄介どころの騒ぎではないのだろう。イオの心底嫌そうな顔からそれが見て取れる。
一行は不穏な話にそれぞれ思う所があるのか、それきり口を閉ざして黙々と歩き続ける。
そうして四半刻程も歩いた所で、鼻腔をつく生活臭に立ち止まった。
「何？　この匂い」
「すごく美味しそうな匂いだけど、まさか食事なんてしてるわけないですよねぇ？」
ティファの言葉にメイが小首を傾げる。その考えには同意だった。まさか人や神器を攫っておいてのんびり昼食タイム、なんてことは

ないだろう。仮にそうなら病院送りではすませたくない。心情的に。
しかし、となるとこの先にいるのは傭兵ではないのだろうか。
相手が一般人かもしれないと思うといきなり攻撃を仕掛けるわけにもいかず、ティファはどうしたものかと途方に暮れる。その横から「いえ」と綾が口を挟んだ。
「傭兵達はこの先にいるようです」
目蓋を閉じて何処か――未来へと意識を集中させる彼女はそのまま人差し指を前方に向けた。丁度煙が立ち昇る辺りだ。
「もうじき、私達の前に傭兵が一人姿を見せます。どうやら私達を牽制しに来るつもりのようです」
そう遠くない未来ということは。考え、ティファは剣の柄に手を置いた。
「となると」
「もう気付かれてるってわけだね」
「はい、しかもそれは――」
アレイズとイオが緊張した面持ちで綾の言葉に応じる。すると綾はそんな二人の言葉に頷きつつ一旦言葉を区切り、巫女然とした清らかな声を放った。
「先ほどお話した魔術の通じない人、みたいです」
閉じられた視界、その暗闇に彼女は何を見ているのだろうか。恐れも震えもしていないことから、それ程不穏なものが見えていないのだろうと予測できるのは幸いだったが、厄介な相手と初っ端から出くわすことに変わりはない。
待ち構えればいいということでお互い背を向けて立ち尽くす。その風上から肉に匂いが漂ってきた。この辺りは岩場もあり、身を隠しやすい。だが他の戦地に比べれば格段に視界のいい場所と言えよう。だというのにこんな草原のど真ん中でよりによって食事とは。
（余裕ってわけ？）
随分嘗められたものだと、ティファは密かに舌打ちする。
「しかもこっちだってお腹減ってると思うと、余計に腹立つわね」

こちらは朝から何も食べていないのだ。いっそのことこのままこちらから襲撃して食料を強奪してやろうかと、元とはいえ聖女らしからぬ考えを巡らせて指輪に触れる。遠距離ではあるが指輪の魔力なら唯一人の敵を除いて倒せるに違いない。そんなティファの考えを読んだのか、マイがそっと指輪を撫でる指に触れる。

「ティファ様、まだ駄目ですよ。とりあえず様子を見ましょう」

殺伐とした雰囲気などまるで見せないたおやかな笑みに、しかしティファは動きを止める。

「分かってるわよ」

そうしてふいとマイから目を逸らしたのは、時期が来れば彼女が一番敵を多く殲滅するであろうと予感させたからだ。自分達と離れている間一体どこで何をしてきたのか、マイからは夥しいまでの血の匂いがした。誰も傷つけないでほしいと、傷つかないでほしいと願っていた身としては悲しい限りだが、それだけ強く在らねばならなくなった事情を考慮すると文句は言えなかった。そもそもダグラスと契約させてしまった地点でティファは彼女に頭が上がらない。

水銀を流し込んだようなダグラスの目がにやりと笑みを含めてティファを見下ろす。視線のみで命を一つ容易くひねり潰せそうなティファからあっさりと目を逸らし、ダグラスは歌うようにマイに問いかけた。両腕を広げて空気を滑るように放たれた声はまるで教壇に立つ教師のようだ。

「さて、マイティーナ。魔術が使えない奴と戦う際、一番適切なのは誰だと思う？」

「魔術がなくとも戦える者です」

正解だ。艶やかな笑みと共にダグラスがマイを讃えつつ問いを続ける。

「流石だマイティーナ。ところで、お前の得物は何だ」

意外な問いだったのか、マイが眉根を寄せた。

「……モーニングスターですけど」

「メイティーナ、お前は」

「何であんたなんかに質問されなきゃならないのよ。見れば分かるでしょ、リングリングよ」
「ティファニエンドは」
「剣だけど。……あ」
戦ったことがあるのなら分かるはずの問いを何故今更するのか不思議でならない。そう思いつつ問われるままに答え、ティファは漸く思い至った。
「私達なら何の問題もないってことね。魔力がなければないで戦えるもの」
大聖堂で散々護身術を学び、それ以上の技術を習得した。おまけに外に出てからは戦う機会も多くあったのだ。実戦経験もそれなりに豊富だ。特にメイとマイは元々魔術を行使する事がなかったのでここにいる誰よりも武器の扱いに長けている。
そのことに気付いたのかメイとマイは顔を見合わせ、同じタイミングでげんなりと肩を落とした。
「どうして殿方よりも私達が魔力無しの戦いで強いんでしょうね……？」
「貧弱すぎるよね、神様って」
確かにそれはそうなのだが。
ティファはどこかショックを受けた様子のアレイズを庇うように声を上げる。
「そ、そんなことないわよ。アレイズは剣が使えるじゃない。……イオとダグラスは知らないけど」
そうだ、アレイズなら自分達と互角かそれ以上に戦えるはずだ。最近魔術ばかり使っていたからすっかり忘れていたし、自分達が勝手に相手を倒すのであまり戦う気がないようだが真面目にやれば相当強いはず。必死に言い募ると二人は考えを改めたように、イオとダグラスにだけ冷ややかな目を向けた。
「ダグラスさんは攻撃を避けるのは得意ですよ。避けるのは」
「イオさんも避けるのは得意そうだよね。戦えないことはなさそう

だけど」
神を神とも思わぬ発言にイオとダグラスが打ちひしがれる。ティファも流石にそれは言い過ぎだろうと思わないでもなかったが、同情したのはイオに対してだけだ。ダグラスにはもっと言ってやればいい。
だが、いつまでもダグラスに落ち込まれているとそれはそれで鬱陶しいのでティファは彼から目を逸らして、イオを慰めるように頭を撫でつつ皆に提案した。
「でもそれなら二手に分かれたりしたほうがいいかもね」
「二手に？」
「そう、だって左右から攻撃した方がいいじゃないの」
昔読んだ戦術書にそんな事が書いてあったはずだ。
無論このまま馬鹿正直に待ち構えているのもいいが、それで仲間に被害が出たら目も当てられない。できることがあるならやっておきたかった。ティファは手を左右に交互させて振り、全員を見渡す。
「私とアレイズで一つ、メイとマイが一つ。それで左右に分かれて敵を迎え撃てばいいわ。イオとダグラスは好きなチームについて適当に逃げて」
「に、逃げて……。ひどいよ、ティファ」
ティファの言葉にイオが肩を落とす。それを無視してアレイズが問うた。
「綾はどうする？」
予知をしたせいか微かに疲労感を漂わせた眼差しがこちらに向けられる。このまま一人安全圏に逃げる気など更々ない視線を受け止め、ティファはさてどうするかと思案した。やるべき事さえ決まってしまえば、ティファは手を回すのは早かった。
「えーっと、アヤには予知で向こうにいる傭兵達の状況を教えてもらいたいの。だから少し離れた所で予知をお願いできるかしら」
それはある意味戦力外通告だったが、彼女は自分の能力をよくわきまえていた。文句も言わずに頷く。

「分かりました」
近い未来だから読みやすいのか、綾は集中力を高めて予知の精度を高めていく。「あと十分」いつか来るべき未来と今の距離を計り、岩場に身を隠す。
それを確認し、ティファ達も定位置についた。一緒のチームになったアレイズやイオが緊張した面持ちでいるのが見えた。何せ、魔術が通用しない者との戦いはこれが始めてなのだ。長い時間を生きた神ですら初体験の出来事らしいのだから緊張するのは仕方がない話と言えた。それでも不思議とティファだけは緊張という言葉からは無縁だった。左に行ったメイとマイも同じなのか、二人は肩の力を抜いていた。
綾の話では敵は武器を使ったと言った。魔力ではなく。それが恐怖心を和らげたのかもしれない。
「大丈夫よ」
イオとアレイズに笑いかける。
「魔術が効かないだけの相手なんて、一発殴って終わらせればいいんだから」
そう言ってにこやかに笑みを深め、ティファは手をパンと叩いてその時を待った。
「あと二分」
綾の囁きに耳を傾ける。距離としてもそろそろ相手の姿が見える頃だ。
「さぁ、そろそろ行くわよ」
岩場から踏み出し、林立する木立へと移動する。そうして各々隠れて敵が来るのを待った。細身の剣を構え、周囲を警戒する。その側頭部につきりと痛みが走る。
“させないわ”
(……また、あなたなのね)
今度こそ幻聴ではない声が聞こえる。ティファはそれをアレイズに悟らせない様に、ただ一点にのみ集中した振りをして彼と目を合

わせないようにした。

第五十八話

綾の予知通り、敵は一直線にティファ達の方へと歩いてきた。
どうやら自分にかなりの自身でもあるのか、悠々と歩を進める姿には余裕が漂っている。それを遠目にティファは馬鹿にするなと舌打ちしたくなった。魔力が通じないからといって、それが絶対的な強さではないのだ。
（一人ぐらいならなんとかなるわ）
ただ、と思う。これだけの余裕があるのには別の理由があるのだろうかと。
一応軍隊――傭兵だったか？　に所属しているのだ、それなりに戦えもするだろう。綾と春日は大した抵抗ができなかったはずなので相手の強さを測れなかった。となるとぶっつけ本番で相手を叩きのめすしかないのだが。
痛む側頭部を手の平全体で押さえる。奥から何やら声が聴こえるが、今は神経を尖らせその言葉を締め出すのに専念する。今まで聞こえてきた言葉はどれもこれも役に立たない事ばかりだ。この大事な時に意識を乱されたくなかった。
ティファはスカイブルーの髪を小さく揺らし、頭の中の邪魔な思念を取り除いていく。感覚を鋭敏にし心を研ぎ澄ませていくと、次第に心が凪いで落ち着いていった。さながら聖女としての務めを果たしている時のように。もっとも、まともに仕事をしたことなど人生で一度足りともないが。ティファ自身自分が魔術を使う時以外でこんな風に集中できる事を知らず、密かに驚いていた。
「他の傭兵達は動く気配がありませんね」
ティファ達の後ろ、少し離れた場所で綾が漏らす。両耳に手を添えて目を伏せた彼女は聴覚を最大限に利用しつつ、予知能力を駆使して迫る男の他に誰かいないか探る。そうして何事もないと言うように首をふるふると振った。見た通り、敵は一人しかいないのだろ

う。アレイズが「ふむ」と頷いた。
「やはり、あいつ一人でどうにかなると思っているんだろう」
「でしょうね。……そろそろかしら」
敵の後ろでたなびく煙は生活感丸出しで、戦いの兆しなどまるで見せない。
こんなに近くに自分達がいるというのに。
遠くを見やると、木陰に隠れているメイとマイが各々武器を携えてティファに向けて頷く。そろそろ出番のようだ。そう考え、ティファとアレイズも身構えて草を踏み分け進む敵をそっと覗きみた。大樹の生み出す影の下、白刃が鈍く光る。
「ちょっと待って、二人とも」
そんな二人の肩を押さえ、イオが慌てて止める。
「どうした？」
「何かあったの？」
慌てた様子のイオを訝った二人が尋ねると、彼はその碧眼を眇めた。
遠く、敵のいる方へと向けられた目に鋭い色が加わる。
「あいつ、様子がおかしくない？」
「……おかしい？」
「一体どういう――……あ」
ティファとアレイズを押さえていた手をどけ、イオは指先をついと敵へと向ける。その一連の動作に釣られるようにして二人が敵を見ると、しなやかな体躯の男の影がちらりと見える。そうして視線を上げて男の姿を捉え、ティファはイオが言わんとすることを察した。
「何、あれ」
思わずといった風に呟く。言わずにはおれない。
軍隊の中で鍛えられたのか引き締まった体と、まだ若い男の顔。
それだけならば何のことはない、ただの人間だ。けれども彼の手首はティファ達を狼狽させるに値する異質さを持っていた。

（金色？　それとも銀？）

金か銀かの区別がつかぬ眩い光に包まれた手首。ティファはそこに目を奪われていた。

太陽の日差しをも上回る眩さに、彼の影が濃く長く伸びていく。だがそれは男にとって本意ではないのだろう。突然光りだした手首に狼狽した男は慌ててそれに触れ、あの薄気味の悪い光を力づくで取り払おうとした。叶いはしなかったが。

「――っ！？」

男が息を呑むのがこちらにまで伝わる。

声無き悲鳴は男が自分の体に触れようとした直後、浅黒く焼けた手が光に弾かれて赤みを帯びた所で空気を伝わり響いてくる。それがただの見間違いではなく、正真正銘彼の肌は焼かれてしまったのだとティファは感覚で悟った。どうやらあの光、ただ眩しいだけではなく強い魔力を熱に変えて放出しているらしい。

（でも、それならあの男は魔術が効くってことなのかしら）

綾の話では敵の中には魔術が効かない者がいるという。

ティファはてっきりあの男だと思っていたし、綾もそうだと言っていたはずだが……。

「歪められている……？」

綾が眉を顰めて男の手首を凝視している。あり得ないと目を見開く姿に問いかけるような眼差しを向けると、彼女は「春日様は」と続けた。

「もしかしたら呪術を使われたのかもしれません」

「呪術？　巫女って聖大陸の聖女みたいなものなんでしょう？　呪いなんて使えるの？」

少なくとも聖女である自分は呪術を使った覚えはない。

「巫女が扱う巫術は元々呪術に通じる所がありますから。とは言っても、春日様が呪術を使う所を見たことはないんですけど」

そう言いつつちらりと男を一瞥する綾は困惑を隠せない様子だ。

ティファも綾と同様に困惑していた。

呪術や巫術を行使したからではない。魔術が通じず体術が使えないなら、有効に相手に働きかける術を行使するのは当然であるし、春日は自分達が助けに来るまでの間そうやって己の身を守ったのだろう。人間にとっては気味が悪いだけの力。自分が死んだらあれは二度と外れないと脅してやれば、短時間なら効果はありそうだ。しかし一つ気になるのは、あの眩く両手首に収まる光がセラフィムであった場合、春日がそれを手放したということだ。

（あんなに大事にしてたのに）

自分の手元から失われるのをひどく恐れているようだった。

だというのに呪術を用いて神器で敵を縛るなど、普段の春日からは考えられない行動だ。ティファはそう考え、ぞくりと背筋を嫌な予感が駆け上がるのを感じた。

（もしかすると、カスガはとんでもなく危険な状況なのかもしれない）

もしそうなら大変だ。急いで彼女を取り戻さなければ。

剣の柄を握る手に力を込める。その横でアレイズが囁いた。

「何があったかは知らんが……」

精悍な顔が横手に現れる。唐突に隣に並んだ彼にぎょっと目を見開き、いたって平静を装った顔を浮かべるとアレイズは一瞬怪訝そうに眉を顰めた後でくいと顎を男へと向けた。

「今がチャンスだろう」

彼等も急がなければならないと分かったのかもしれない。

イオも今度は止めなかった。

「……そうね」

焦りらしい焦りの見えない、しかし先を促す言葉にティファはこくりと頷く。

あれがセラフィムの力であるにせよないにせよ、男が動揺している今を置いて他にチャンスはない。

「行きましょう、二人とも」

囁き声にイオが無言で頷き、反対側に立つ双子に親指をくいと動

かしてみせる。その動きに二人も武器を構えたまますするりと前に移動する。

音も立てずに地を滑る足の妨げにならないよう、双子とティファを囲むように銀の風が巻き起こる。どうやらダグラスが、自分達が男に近づきやすいようにと援護しているらしいと気付くと、マイが「たまには頭を使うんですね」などと褒めているんだか貶しているんだか分からない言葉を吐き、じゃらりと鉄球付きの鎖を揺らした。

砂埃を上げて巻き上がる銀の竜巻に、男は今度は何だとばかりに目を見開く。その隙を突き、ティファは一歩大きく踏み込んで男の胸元へと突き進んだ。

「はあっ！」

浅く吐き出した息と共に男の至近距離まで迫る。そのまま水平に剣先を滑らせ男の首に切っ先を向け、ティファは背後に控えるアレイズに声を駆けた。

「アレイズ！」

「分かっている」

殺すのではなくあくまで脅すのが目的で剣を一閃したティファの横をすり抜け、アレイズが男の背後に迫る。細かな作戦など殆ど立てていなかったが、アレイズはティファの意図を察したらしく、回りこんだ背後から男のうなじに向けて剣を薙いだ。しかしそれは二人の動きを読んだ男が早々と横っ飛びに逃げたせいで避けられてしまう。

紙一重で避けられたせいでお互いに剣を向けそうになったアレイズとティファは舌打ちしつつ、男を追って目を走らせる。すると、飛んでふわりと舞った男の短髪を叩き潰すようにマイがモーニングスターを振りかぶったのが見えた。連携してメイがリングリングを大振りに投擲するのも。

（まさか殺す気じゃないでしょうね！？）

リングリングの刃が外向きになっていることや、マイが脅しなどではなく本気で男の頭を潰しにかかっている様を見てティファが一

人焦る。どれもこれも男は紙一重で避けていくが、これぱかりは避けてくれてよかったと心底思った。

リングリングが男の脇をかすめ、髪を幾本も落としていく。マイはその髪を叩きつけ、獲物を仕留められなかった事に口の端を吊り上げ酷薄に笑んだ。

「逃げ足の早い。久しぶりに楽しめそうです」

……今この場で誰よりもマイを恐いと思ったのは、ティファだけではないはずだ。

ひくりと頬を引き攣らせ一瞬動きが止まりそうになったティファは、慌てて連携の輪に加わりながら切っ先を右へ左へ走らせていく。だがいくら攻撃しても男は避けていくばかりだ。手首は相変わらず金や銀に染まっており、とても位置を測りやすい標的だというのに。

途中から面倒になったのかイオやアレイズが魔術を行使する。

それを避けるまでもなく、当然のことのように打ち消していく姿にティファは眉間に皺を寄せた。

(結界じゃないみたいだけど……だとしたらあれは何かしら)

マイのように意志の力で消しているとでもいうのか。

ただ、それにしては男の顔は強く何かを念じている様子には見えず、ティファはますます訳が分からなくなった。それに疑問は一つだけではない。

(この男、さっきから攻撃は一切仕掛けてこないわ。そもそも帯剣してないじゃない)

一人で敵が潜む場所に来たにしては、あまりに余裕を持ちすぎじゃないのか。

避けるのが得意なだけで、普段は隠密に徹していると言っても武器ぐらい携行するだろう。かといって体術を扱うかと言えばそうでもなさそうだ。しなやかな体でただ攻撃を避け、逃走するわけでもない。

異常なまでの身体速度。けれども言ってしまえばそれだけだ。

アレイズがまた剣を一振りする。最速で繰り出されたそれをお構

いなしにさらりとかわした男は、くいと口の端を吊り上げて笑っているように見えた。まるで楽しんでいるような、そんな風に見える。踊るような軽やかな動きがそう見せているのだろうか。

ただ一つだけ分かるのは。

（きっと、戦うためにここに来たわけじゃないんだわ。もっと別の思惑がありそう）

ティファは剣先を下げ鞘へと収める。

そうして三人の攻撃を舞踊じみた動きで避ける男の頬を掠める位置へとナイフを投擲した。ひゅっと風を切った短い白刃は予想するまでもなく男のすぐ傍を滑り、後ろに立つ木の幹に突き刺さる。とん、と軽い音がした。

「そこまでよ」

凛とした声に四人が動きを止める。アレイズ達が目を眇めてティファを一瞥した。

指と指の間にナイフを挟み込み、かといって投げもせずに前に足を踏み出す。

「私達はあなたの暇つぶしに付き合うほど酔狂じゃないの」

ある意味これは賭けだ。

こちらは春日という人質がいる以上、どうしても後手に回らざるを得ない。それでも自分が場を専制するのは男に戦う意志がないのが見て取れたからだ。それに、男が単独行動を取っているのが気にかかる。

「用があるんでしょう？　だったら早く言いなさい。聞いてあげるなんて約束はしないけど」

ダークブルーの目に慈悲深いまでの優しさを湛え、その笑みのままナイフをそっと男の胸元に当てる。彼は動かず、じっとティファを見下ろしていた。腕輪が金から銀に変わり、銀から金へと変わっていく。コロコロと色を変える鬱陶しいまでに眩い光にお互いの顔が照らされる。細く鋭い男の眼光が、興味深そうに細められた。

「お前達が春日の仲間か」

漸く口を開いた男の声は、顔に合わず実直そうだった。
生真面目な声にティファはにやりと口元を吊り上げる。
「だったらなに？　言っとくけど、人質がどうなってもいいのかなんて雑魚丸出しの台詞はやめてよね。聞いてて恥ずかしくなるわ」
小馬鹿にするような言葉に、男でなく味方であるアレイズ達が頭を抱えるのが見えた。
「戦いの最中に呑気に話を始めるのもそうですが、この状況であそこまで言うなんて」
「すごいのか馬鹿なのか分からないよ、ティファ様……」
「雑魚扱いされたあいつが少し可哀想になってくるな」
「ちょっと、外野は黙ってて！」
揃いも揃って呆れ返る姿にティファが怒鳴りつける。だが男は挑戦的な言葉に別段気分を害した様子はなく、敵に浮かべるには不似合いな嘲笑には見えない笑みを浮かべる。そうしてティファの髪の色を物珍しそうに眺めて「いや」と答えた。
「別にどうというわけじゃない。今となっては春日にもセラフィムにも用はないしな」
「用はない？」
聖大陸の言葉を流暢に扱う男が言い間違えたとは思えないが、一瞬訳が分からず首を傾げる。
「用がないなら何で連れ去ったりなんてしたのよ」
馬鹿じゃないの？　とそこまで言いかけ、それはさすがに酷いかと口を噤む。
その気遣いを察したのか男は肩を竦めた。
「雇い主の意向が上官殿に伝わるのが遅れた。俺達もついさっきセラフィムの奪取作戦の中止を聞かされたばかりだ」
「……そういえばあなた達はお金で雇われたのよね。ということは、雇い主ってノルマン様のことね」
問うが、男は肩を竦めるだけで何も言わない。雇い主の事を口にだすのはタブーなのだろう。

ティファはそう思い、自分の中でだけ答えを出してそれ以上問わなかった。

今の自分にとって一番重要なのは、春日とセラフィムを奪還できるか否かなのだ。

雇い主が作戦中止を宣言したのなら、春日の身の安全も保証されるしセラフィムも返してもらえるだろう。ほっと息をつき、漸くナイフを男から離した。自分にも相手にも戦う理由がないなら話は早い。肩の力を抜き、真正面から向きあってティファは質問を再開した。

「どうしてあなた一人で来たの？　上官は？」

「春日があんたの話をしたら怯えて外に出てこなくなったよ。悪いな、使えない上官で」

別にそれは自分に関係ないのでいいんだが。

「私の話をしたと言われても……。私、あなたの上官に会ったことなんて――」

そもそも軍隊と遭遇自体した記憶がない。

眉間に皺を寄せて考え込んだ時、記憶という言葉がふと頭の中で弾けた。

「あ、もしかして」

ぱっと顔を上げる。

「アレイズ、私もしかしてこの人の上官に会ったことがあるのかしら」

視線だけ向けて問うと、アレイズは「そういえばそうだったな」と首肯する。それで納得したティファは、次に一体怯えて外に出てこなくなるほどの何を彼の上官にしたのかと不思議に思った。

（殴り飛ばしでもしたのかしら？）

記憶にないので何とも言えないが、元々人様の物を奪おうとしていた輩だ、謝る必要もないだろう。さっくりと結論付け、ティファはまだ三十に手が届いていないのではと思われるような瑞々しさの見え隠れする男の顔を見上げた。

「とにかく、カスガもセラフィムも返してもらえるのよね」
戦う必要がないならそれに越したことはない。懲らしめたい気持ちがないわけじゃないが、今はそれよりも早くこの件を片付けて聖大陸に戻らなくてはならないのだから。
だが男は曖昧に頷き「いや」と呟いた。
「何？　返す気がないって言うの？」
まだセラフィムが欲しいなどと言うつもりか。
殺気を孕んだ目で男を射抜く。収めたナイフをもう一度構えようとすると、その手を掴み「そうじゃない」と否定されてしまった。
「返すのは上官命令だ。俺には命令に逆らう権限もその気もない。ただ、その前にお前達でこれをどうにかできないと思ってな」
「これ？　あぁ、その手首のやつ？」
「そうだ。……頼めるか？」
「いいけど、カスガに頼めばいいじゃない。彼女がやったんでしょう？」
「馬鹿か、呪い殺されたらどうする」
ここに来て初めて聞いた吐き捨てるような声に春日がいかほどの怒りと呪詛を男に叩きつけたかを察し、ティファは少しだけ男に同情した。神器の守護者にそこまで呪われてはそれは恐いだろう。効果としてはさほど大したことはなさそうだが、手首がきらきら光っていては隠密活動はできそうにない。戦うにしても邪魔なはずだ。
ただ、神器を扱うのは自分の専門ではない。
そう考えると不安だったが、そこでくるりと振り返って三人の神々を凝視する。見られた当の三人は何だか嫌な予感がするのか、ふいと目を逸らしたようだったが。
（神様なら神器が扱えるかしら。契約者の私が扱えれば一番いいんだろうけど）
もっとも、春日を返してもらって彼女を説得するのが一番早いのだが……。
（でも、聞いてみたいことも幾つかあるのよね。恩を売るのも悪く

ないかもしれないわ）

元聖女とは思えない考えだが、ティファは自分の考えに納得してこちらを見下ろす男ににやりと笑いかけた。

「いいわ。でも見返りは求めるわよ」

「見返り？」

「情報よ。……そんなに警戒しなくても、雇い主の事はもう聞かないわ。一応それらしい人から直接聞かされてるし」

一人でさくさく話を進め、取引まで始めるティファを今度は一同が凝視する。

「これならわざわざ二手に分かれてって考える必要なかったね」

イオが金髪をくしゃりとかきあげてそう呟くのが聞こえる。無言の肯定がそこかしこから返ってきた。ティファもそれに関しては是と言いたい。二手に分かれて総勢四人――魔術使った神を入れると六人だが――で攻撃しても全く当たらず、余裕で交わされてしまったのだ。挙句本当なら戦わなくてよかったと来ている。流石に茶番が過ぎた。

「弱いね」

「黙れ、ろくに戦っていないくせに」

「恐いね、そんなんじゃティファに嫌われるよ？　アレイズ神？」

イオの茶化す声にアレイズが半眼で応える。

あぁ、このままでは喧嘩になってしまう。

鈍いと口を酸っぱくして言われるティファにも分かる不穏な空気に、慌てたように「返事は？」と男に催促する。すると男は渋々と言った風に頷いた。

「じゃあ約束ね」

「仕方ないな……」

いい加減自分の手首が鬱陶しくて敵わないのだろう。存外素直な態度ににこやかに笑い返し、ティファはそっと男の腕を両手で持った。服越しに伝わる肌は硬く、男の俊敏さを考えると状況が状況なら面倒な戦いになっていたのだろうなとティファは密やかに思った。

特にイオやダグラスであれば敗北の可能性が濃厚だ。いくら魔力が強くともこの男には通じない。

「あなたにはどうして魔術が効かないの？　体質？」

手首を矯めつ眇めつ凝視しながら問いかける。

「俺は斥候をしていてな。春日に勘づかれた時のためにと、雇い主が呪いを施していった」

「呪い？」

「これだ」

言いつつ、男は詰襟をくいと引っ張って首筋を露にする。

「これは……」

そこには青い筋が数本、肌を飾るような鮮やかな文様として描かれていた。もう片側の首筋からだろうか、途中で黄色い筋と合流したそれはまるで稲妻のように見える。魔術とは違う、随分と原始的な呪いだった。もっとも原始的だからと侮ることはできないが。

「何、これ」

喘ぎつつも文様から目が離せないティファが自然と下がりそうになる足を無理に留める。知らず感じる恐怖心は、あまりに歪んだ力を目にしてしまったが故だ。

「こっちの方がよほど酷い呪術じゃない」

世界の理を曲げて打ち消す力。純然とした意志とは異なる力はあまりに禍々しく、歪みきっていた。

こんなものをレイニウム大聖堂の頂点に立つ男が施したというのか。

「効果はもうじき消えるという話だ。特に悪影響もない分、こちらの方がマシだ」

「……そう、あなたには分からないのね。具合が悪くないなら何よりだわ」

ティファやアレイズ達神は魔力の流れを強く感じることができる。その分文様が放つ歪んだ力に吐き気を催していたが、男はそうではないらしい。鈍感さは時として強いものなのだと、こんな場面で知

る羽目になるとは。あるいは魔力を持たない人間には害のないように予め術式が組まれていたのかもしれないが。

ともあれ、必要な情報は得た。

気分は悪かったが約束通り手首に嵌ったセラフィムを取り除かなければ。

「ティファ様、一体どうなさる御積りです？」

再び腕を掴んだティファを青ざめた顔のマイが慌てて止めにかかる。マイには分かっていたのだろう。ティファが無策で男の意見を呑んだことが。しかしそれにはあっけらかんと笑ってみせた。

特に理由などない。

ないが、ちくりと頭が痛み始めたから大丈夫な気がした。

「大丈夫。何となくできそうだから」

「何となくって……」

「だからほら、大丈夫よ」

根拠の無い自信にメイまで加わって不安げな顔をする。その肩を押して遠ざければ二人はもう何も言えなくなり、変わらず不安げなまま傍観者と化す。何かあったのではと案じる姿に申し訳なさを感じたが、もうティファにはそれを謝罪する余裕はなくなっていた。

一秒ごとに強くなる頭痛は、セラフィムを前に更に熱を帯びていく。

（何よ……）

その痛みに苛立ちのまま心の中で声を上げると、今まで散々聞いてきた幻聴が現れる。

“セラフィムね”

自分のものとは違う、けれども必ず呼びかければ出てくると本能で理解していた声。きっとこれはもう幻聴ではなく、真実どこかに潜む何かなのだろう。無論神器が喋るわけがないから、セラフィムとも思えない。その証拠にほら、まるで他人ごとのようにセラフィムを見ている——気がする。

漠然とした、しかし確信めいた思いでティファは男の手首をそっ

と撫でる。ゆっくりとセラフィムを撫でる指は扇情的で、男が静かに息を呑む。ティファもそれを自分のものではないような、感覚が失われて分別が分からぬような思いで見ていた。

草の青い匂い。それさえも遠ざかっていく中で、幻聴だけが鮮烈だった。

“二つで一つ。あの巫女姫はそれを分かっていたから二つとも使って男を縛ったのね”

（二つ……？　金と銀のセラフィムのこと？）

“そう。人の手には余る、強力な神器。このままではこの男、自分で気付かないうちに命を吸われて死んでしまうでしょうね”

（なら尚更取り除いてあげなきゃいけないわ。それより前から言いたかったんだけど、何であなた私の頭の中にいるの？）

“さぁ、何故かしら。レイニウムの思し召しかもしれないわね”

（何ですって？　レイニウムの思し召し？　レイナとは違うの？）

誰にも聞こえない言葉を誰にも聞こえない場所で答えるティファは、手首から男の手の甲へ指を走らせそう意識したわけではないのに唇で弧を描いていた。やはり自分ではないような気がした。決して自分では浮かべられそうにない笑みを、今この男に見せているように思えたから。鋭い眼光を蕩かせ魅入られるような顔など、ティファは今までの人生で一度だって作ったことはない。

では、一体今自分は誰なのだろう。

分からない。だが、それを問うても声は答えない気がした。

今自分の問いを黙殺する、この見知らぬ女の声は。

（……で、どうすればいいの？）

問いに答えてもらえず腹は立ったが、まずは状況を打開するのが先だ。そう思い先を促すと、声はそうねと思案するように呟いてからくすりと笑う。

“少し借りるわ”

既にティファを乗っ取っておきながらあえて宣言した声は、男の手首――金に色を変えたセラフィムに口付けた。無論ティファの意

思ではない。この、誰だか知らない魂がそうしなければと思ったからだ。だから唇に触れるものの熱も感触も、ティファには全く分からない。

「汝の光、戒めなり」

歌うような声が流れる。

威厳に満ち溢れたそれが自分の口から発せられているのだと気付くのに数秒を要した。だが気付くのが遅れて当然なのだ。これは――自分の声ではない。

「……ティファ？」

低く、掠れた声にアレイズが戸惑った声を上げる。

だがティファの変化をより敏感に感じたのは双子のようで、メイもマイもアレイズを囲んで彼を質問攻めにしていた。

「アレイズさん、ティファ様の声が！」

「明らかに別人です。……アレイズ様、一体何が起こっているんですか！？」

「俺に分かるわけがないだろう！　おい、ティファ！」

苛立ちを露に二人の手を振り払い、アレイズがティファに近づく。それを淡紅色の結界であっさりと制し、ティファは――もといティファの中にいる魂が小さく笑う。心を伝って全身を巡る彼女の感情が、アレイズを見てとても優しいものになるのをティファは感じた。そこだけは自分と通じるものがあると、不覚にも思ってしまうぐらいに。

セラフィムが光を放つ。その淡い輝きに手の平をかざし、彼女は聖大陸のものとは違う言葉を発した。

「その身を縛る戒めよ、その光、原初に戻りて、我が楽園へ還りなさい」

（知らない言葉……？　いいえ、それならどうして私には分かるの？）

神聖言語だろうか？　途切れ途切れの言葉を耳にして、ティファは記憶をさらっていく。だが神聖言語ともまた違う気がした。そも

そも神聖言語は文字としてなら読めるが、音声としては読み解くことができない。レイニウム大聖堂ではまだ解析が進んでいないのだ。音声言語として存在しているかどうかさえ、まだ議論が交わされ答えが出ていない状況だというのに。

自分の声帯のどこからこんな声が出ているのか疑問に思うような低い声が何を言っているのか、メイとマイには分からないのだろう。強張った顔で神々に視線を走らせるが、アレイズは困惑するばかりで答えられず、イオは目を見開いている。そしてダグラスと言えば。

「来たぞ、マイティーナ。お前が最も求める者だ」

不敵に笑い、静観していた。

その声にマイが息を呑む。そしてキッと吊り上げた眦に殺気を宿らせた時、自分の唇が最後の言葉を紡ぐ。

（セラフィム・コール）

「セラフィム・コール」

彼女の言わんとする言葉を胸中で呟く。お互いの声が重なり、奇妙なほどの静寂に満たされた時、ティファの意識がくらりと後ろへと遠ざかっていく。自分が心の中でなぞった言葉が特殊な言葉なのか、それともただ単語を並べただけなのかそれさえ分からないまま、後退を繰り返す。

眼前の男が目を見開き、瞬き一つせずこちらを凝視しているのが分かる。

「レイナっ！？」

愕然としたイオの声がティファの心を強く打つ。

（レイナ？　……あぁ、やっぱり）

悪い予想は当たっていたのだ。何故そうなったのか、理由は分からないが。

彼女はダグラスの不敵な笑みもイオの驚愕も全て受け止めているようだった。堂とした態度で澄ましたように笑い、超然と立っていた。ただ、一人だけ。

「どうして――」

真夏の空を思わせる青い髪が黄昏の緋色に変えられるのを見て、アレイズが掠れた声を漏らした時だけちくりと心を痛めたことは、ティファ以外の誰も知らない。体をさっさと返せと言えなかったのはこのせいなのかもしれないと、ティファはちらと考えてみた。

第五十九話

その変化は、離れた場所で囚われの身となった春日にも伝わった。
（体が熱い……）
肩で大きく息を吐く。体内をぐるぐると回る呼気は燃えるように熱い。両の手首を戒める麻縄をぎり、と鳴らし手近な木に身を預ける。そうでもしないと脱力した体を支えられそうになかった。
「お、おい何だありゃ」
「あいつまさかしくじったなんて事……！」
一人でティファ達の元へ向かった男の同僚達だろうか。震える声でそう言った男達に釣られ場がざわめきだす。肉を炙ってとろかせていた火は消され、黒くたなびく煙の残滓がすぅと空に立ち昇る。だが肉の香ばしい匂いも今は春日の食欲を刺激しなかった。とにかく気分が悪い。
（……わらわのセラフィムに何か起こったんだわ）
空気の振動が肌を打つ。細かいそれはまるで世界が震えているようだ。神器の力が引き出され、圧倒的なまでの魔力にありとあらゆる命がひれ伏す、憧憬にも似た怖れに巫女である春日の体も熱く震えた。
あるいはそれは歓喜だったのかもしれない。
何の枷もなくしたセラフィムは喜びに満ちた声で謳う。誰にも聞こえぬ清かな歌が大気中に広がるのがよく分かる。この熱され、朦朧とした意識の中でさえはっきりと。だが今ひとつ腑に落ちない。自分はこんな事を望んだわけではないのに。
（一体誰がわらわのセラフィムを）
まさかノルマンの手に渡ってしまったのだろうか。自分がいない間に。
うめき声と共に生まれた不安に顔を思いきり顰める。しかしそれはそれで腑に落ちない。

あの時、ノルマンはあっさりとセラフィムを返したのだ。あれはあくまでティファニエンドを呼び寄せるための餌。それ以外の何者でもなく、だからこそ春日は傭兵共に捉えられても身体を拘束される程度で済んでいるのだ。セラフィム奪取計画は中止になったと、ノルマン自身から命が下った影響で。

魔力を感知できなくとも異常が起きているのは分かるのだろう。傭兵共は次第に後退りし、魔力の源から遠ざかっていく。確か向こうには春日が呪術を施した男がいたであろうに、放置して逃げる気のようだ。ほとほと呆れ果てる。

だが春日とて、逃げられるものなら逃げたいと思うだけの力があの場所にはあった。

こっそりと持ち歩いていた短刀の先でじわじわと麻縄を切りつつ、春日は遠く輝きを放つ空間から目を離さない。抗いがたい、魅惑的な力の渦に本能が目を逸らす事を拒んだ。一方で、離れなければと理性が警鐘を鳴らす。

（あれは人間が触れていい力じゃないわ）

力が抑えられていた頃ならばともかく、今は危険だ。

思いきり力を籠めて縄を切り落とす。刹那、ふらつく足を叱咤して春日は光の立ち昇る空間へと駆けた。

「あの中に、わらわのセラフィムがいる……！」

緋の袴が大きくはためく。冷えた風が火照った身体に触れ、その温度差にぞっとする。それでも何とか駆けて駆けて、ようやくその場にいる人間を目視できる位置にたどり着いて足を止めた。綾、傭兵団にいた斥候兵、ティファニエンド一行。おおよそ春日の予想していた通りだ。だが、明らかに何かが違う。

「原初への回帰……？　でもそんな事、神でさえ不可能なはず」

金と銀の光が渦を巻き、混ざり合っては離れていく。幻想的な光は煌きを放ち空へ、高みへと昇っては降りる。螺旋階段のような大きな渦に目を見開いて見蕩れるが、呆けていて許される状況ではないと巫女姫である春日が誰よりも理解していた。力が解き放たれた

だけではない。それだけならば術者が身を滅ぼすだけだ。
だがこれは――神器が持つ、原初の姿だ。
神々が力を封じ込める前の、遥かな昔の姿。今となっては神でさえ扱えないであろう、春日にも顕現させることは不可能な太古の力を解き放ち、セラフィムが歌いながら上昇気流に乗っていく。その視界の端に、黄昏の色が靡いていた。
「あれは、何」
白いブラウスに白いスカート。編み上げのブーツ。
見慣れたティファニエンドの姿だ。神々しいまでの輝きによって生み出された影の形は、紛れもなく彼女のもの。だというのに何故だろうか、春日は戦慄しぶるぶると身体を震わせた。
「まさか」
呟くか細い声に気付いたものは誰もいない。春日がここにいることにさえ、恐らくは誰も気付いていないだろう。気配には敏感であるはずの斥候兵だって、今はそれどころではないはずだ。そう、それどころではないのだ。
浅い呼吸を何度も繰り返す。そうして春日は己が持つ金色の瞳で、鮮やかな緋色の少女を見やる。
ノルマンが招き、春日自身ここ数日でそれなりに親しくなったつもりでいる少女、ティファニエンド。彼女が世界の敵と呼ばれる所以である空色の髪は今や見る影もなく、黄昏に支配されたゆたっていた。夏の明るい空ではなく、慟哭を抑えきれずにいる、胸がぎゅっと締めつけられるような逢魔が時を体現した色に、春日は震えを抑えきれないまま掠れた声で喘いだ。
神器を原初の姿に還せる者。神々でさえ成し得ないなら、それは。
「ティファニエンド……っ！」
――それは世界以外に他ならない。
セラフィムがティファニエンドに似た誰かの身体に入り込む。そうして人体に溶け込みながらもなお輝きを失わない光が、こちらを向いた。あの紅の、恐らくはティファニエンドが最も逢いたくて最

も逢いたくない存在の瞳が。
　足が竦む。くすりと音を立てた冷笑が、動けない春日を一瞥してすぐに慈悲に満ちた笑みへと変わった。

◇　◇　◇

「セラフィム・コール」
　聞き慣れない言葉と共に現れた異形を見て、アレイズは声を失い立ち尽くしていた。
　どこからか重なりあったティファの声。それを覆い隠すように放たれた低く甘い声に気付いていない者はいないだろうと、アレイズは周囲を見渡して判断した。主の異変にいち早く気付いたメイとマイなどその典型だ。彼女達は仮にティファの姿が変わらずとも変化に気付いたに違いない。
　セラフィム自身の意思とは異なり、無理矢理引き出された力は歓喜し謳うように咆哮する。
　その中で光を纏って立つ少女の髪も瞳も涼やかな青色を失っていた。
「レイナ！？」
「漸く来たのか」
　驚愕に顔を染めるイオと、対照的に悠然と構えるダグラスの姿が視界の端に映り込む。知っていた者と知らない者の違いに、思わずダグラスの胸ぐらを掴んで最強クラスの魔術を叩きつけたくなった。ダグラスは知っていたのだ――ティファがとうにレイナに侵食されていたことを。知っていながら何も言わず、ただ待っていたのだ。この時を、ティファが消えてしまうこの時をずっと。
　無論アレイズとてティファの異変については随分と前から知っていた。頭痛に苛まれ、頭の中で声がするとあの光の渦の中で教えてもらっていたのだから。だがしかし、まさかこんな者が潜んでいたなどとは思いもしなかった。

イオもダグラスもアレイズも誰一人膝を屈してはいないが、今眼前にいる“彼女”は紛れもなく自分達が――神々が頭を垂れるに相応しい存在だ。

（姿形こそ違うが、あの声と色は間違いない）

かつて出会った友人はあんな色をしていたはずだ。

ただ違和感を感じるのは、あまりに鮮やかな蒼を見慣れたせいだろうか。

（この色はどうにも落ち着かない）

落ち着くとまでは思わずとも、あの頃は決してこんな気持ちにならなかったというのに。

アレイズは嘆息し、光と混じり合うようにたゆたう彼女の髪を見やる。

朝日も夕日もその色の質に変わりはない。それでもアレイズには彼女の持つ緋色が黎明や暁ではなく黄昏に見えた。始まりゆく希望や心地良さではない。終わりゆく憂いと僅かの絶望が内包された色。その先にある夜の色、ダークブルーの持つ安寧とは全く異なる心がざわつくような、落ち着かなくなる感覚に一人耐えてアレイズは彼女が口を開くのを待った。

「お久しぶりですね、もう何百年お会いしていないのでしょうか？」

低く穏やかな、包みこむような寛容さを持ってティファの唇から紡がれた言葉に、メイとマイが武器を向けられないままいきり立つ。

「ティファ様をどうしたんですか！？」

「そ、そうだよ！　ティファ様はどこ！？」

怖いもの知らずというか、主への忠誠心の強さが半端じゃないというか。飛びかからんばかりの勢いで言い放つ彼女達は、相手が神であろうと世界であろうと構うものかと足を踏み出す。これがティファの体でなければ武器を突きつけて脅しにかかっていてもおかしくないだろう。彼女達ならやりかねない。

緋色の少女の正体を知らないメイはともかく、ダグラスの言葉からマイはとうに察しているだろうにその態度はメイと変わりなかっ

た。必要ならば殺す気でいるのだ、彼女は。惜しむらくはこれがティファの体であり傷つけられないせいで、力でねじ伏せられない事か。

緋色の彼女は、レイナは二人の問いには答えずちらと一瞥した黄昏色の瞳を興味深そうに細めて囁いた。

「グラスの民……。こうして相見えるのは何千年振りでしょうね」

そこにどんな思い出があるのか、殺意と敵意と憎悪とを綯い交ぜにした二対の亜麻色の瞳に、それだけを言ってレイナは悲しげに目を伏せた。もう会えない最強の魔術師を思い出しているのかもしれない。レイナがグラスの祖先と繋がりがあったという話は聞いたことがないが、今となってはどれだけ知らない事があろうとも驚に値しない。知っていると思い上がっている方が余程危険なのだから。

「世界自ら来いとは言いましたけど、何もティファ様の体を奪わなくてもいいものを」

マイが憎々しげに呟くのが聞こえる。彼女としてはようやく出会えた仇に刃を向けられないのが辛いのだろう。もっとも、ティファが見る影もなくなってしまったのだ。そちらの方が余程気になる問題となっているだろうが。

信心深い者ならば一目で頭を垂れ体を深く地に這わせるであろう神々しさを纏うレイナは、誰一人自分に敬意を払わない事に腹を立てるでもなくぐるりと一同を見渡す。その目がアレイズで止まり、ダグラスで止まり、そしてイオの碧眼に向けられて止まった。

「イオン」

「っ！」

凛とした声にイオがびくりと身を震わせて背筋を伸ばす。伸ばさざるを得なかったのだ。

――レイナに真名を呼ばれれば、神ならば誰とてそうなる。

アレイズはイオの真名など知りもしなかったが、今の反応でそうだと判断した。そしてきっと自分も真名を呼ばれた時、同じように驚きながらも背筋を伸ばすのだということも。世界の意思として君

臨するレイナの威厳に満ちたあの声に本能が抗えないのだ。ダグラスとてそうだろう。

姿勢よく立つイオに目を向け、レイナは憂いのある顔をそのままに続ける。

「何故、真名を契約者でもない人間に教えているのです？」

「それは……」

「あなたにはピコという仮の名を与えたでしょう？」

びくりと反応し身構えるイオを憐れむように悲しむようにレイナが睫毛を伏せる。気だるげな声は決してイオを責めるものではなく、ただ問うてみただけのようにアレイズには思えた。だが言われた方としてはまるで責め苦のように感じられるのか、イオは苦渋に満ちた顔でレイナを見返した。痛みを孕んだ碧眼は許しを請うでも申開きをするでもなく、ただじっとレイナを見据えるのみだ。一片の反抗心を巧妙に隠して。

プラクトでイオが言った事が本当なら、彼にはレイナを害する気はない。魂の審判者として罪に汚れていないティファニエンドの魂を守り、世界の意思であるレイナの命をも守るのが目的なのだから、どちらが傷ついても困るのだ。

（そう、だから奴は上手く隠している。レイナへの敵意を）

ティファニエンドが害されている。イオが使ったような憑依魔術ではなく、世界の意思により侵食され魂は身体の奥深くへと追いやられてしまった。無垢で穢れ無き、救済したいと願った魂が異物に侵されている状況で魂の審判者が怒りを覚えぬはずがない。

だがイオはその怒気を、甘い顔立ちの中で上手く隠していた。どちらも大事で傷つけたくないが故に。……アレイズは今にもティファをどうしたと叫びだしたい気持ちに駆られているというのに、本当に大したものだと内心で苦笑した。

そんな自分達の耳に身体の持ち主よりも幾分低い、溜息混じりの声が響く。

「それに、よりによってティファニエンドに加担するなんて。……

正気ですか？」
　真意をはかろうと見据えられ、イオは再びしゃんと背を伸ばしながらも今度はきっぱりと言った。
「ティファが本当に君を殺すかなんて分からないじゃないか。それに今は君が彼女を害しているんだよ？」
　広い草原に響かせるには十分な声量で、イオはやはり怒りを巧妙に隠して窘めるように言う。わざと呆れたように放たれたそれが、どうかレイナがティファから離れてくれますようにと懇願しているようにアレイズには聞こえた。そしてこれがイオの堪忍袋が切れるギリギリのラインだと、知りたくもない事が不思議と分かった。
　セラフィムを奪われた斥候兵は、力の奔流に意識を奪われたのか草原に伸びている。吐息し、安全圏にその身を放り投げてやると、イオの周囲で水分が凝固していくのが感じられた。
　魔力が巡り、冷えていく。
　何も行動を起こさないレイナに業を煮やし、戦闘態勢に入ったのだ。
「レイナが何を考えてここに来たのかは知らない。だけど――」
　顔立ちだけティファと同じ、けれども決して同じ存在とは言えないレイナを睨めつけイオが棘のある声で続ける。
「それ以上ティファの魂を冒すって言うんなら、力ずくでもどいてもらう」
　腕を振るう。刹那顕現した巨大な氷は、無論攻撃ではなく牽制に使う為だろう。この程度で倒せる相手ではないし、何より体はティファのものなのだ。仮にイオが理性をなくして攻撃しようものなら、自分や後ろに控える双子が黙っていないはずなのだから。
　悠然と立つレイナは自分の姿を映し込む氷柱を見上げ、ついと目を逸らした。
「ジュード」
　そのままアレイズの真名を呼ぶ。知らず伸びた背筋に舌打ちが漏れそうになった。今となってはほぼ全員が知る真名だが、呼ぶこと

を許したのはティファとレイナだけだ。それをあえて呼ぶということは、やはり彼女はレイナなのだろう。分かりきっていたことが実感を伴ってアレイズの胸を突く。だが何故だか名を呼ばれても全くもって嬉しくない。

本来ならレイナに会うのは最終目的だったはずだ。

再会し、運命にがんじがらめにされた彼女を救う事がアレイズの願いだった。

「何故俺達がここにいると分かった」

だというのに答えた自分の声にも、イオ同様多分の棘が含まれていた。

きっとこんな形でなければ、アレイズも驚きこそすれ喜んだに違いない。しかし今は状況が悪かった。――よりによってレイナはティファの体を奪ったのだ。見も知らぬ世界が見た夢によって人生を狂わされ、愛する家族を奪われた少女の魂を侵食して。

（どうりで憑依魔術とは違うわけだ）

頭痛や頭に響く声についてを憂鬱そうに告げたティファの苦しみを自分では取り払えなかった。術者がいればそいつを倒せば事が済むが、周囲にそんな者は誰一人いなかったせいで。だが今となっては取り払えなくて当然なのだ。相手はこの世界そのものなのだから。

どこか一方から魔力を行使されるのではない。

ティファは空気を吸う度に、水を飲む度に侵されていったも同然。対処法などどこにもなかった。

（だが諦めるわけにはいかない）

体を奪われるのは、短時間でも相当な負担になる。それが長時間に及べば、ティファは再び精神を崩壊させてしまうだろう。今度こそ、元に戻らないかもしれないのだ。そんな事はこの場の誰も許さないだろう。

イオと同じく棘が混じったその声にレイナは苦しげに眉根を寄せた。

まるでアレイズにだけはそんな声を出されたくないと言わんばか

りの、心底辛そうな顔に知らず動揺が広がる。だがそれも、彼女が微笑を浮かべるまでの僅かな間だった。その時にはアレイズも再び敵意を取り戻していた。

「私は仮にも世界ですもの。分からない事などありません」

確かに愚問だった。

アレイズはふぅと息を吐き出し「そうか」と呟く。

「それで？　一体何をしに来たんだ。ティファニエンドの体を乗っ取ってまでしたいことでもあったのか？」

言いながら、果たしてそんな事があるのだろうかと考える。

誰かの魂を侵してまでやらなければならないような事など、そうあるものではないと。

それ程までにこれは禁忌なのだ。特に自分達にとっては。

ティファニエンドの体を奪うこと。それはこの場にいる全員に対しての宣戦布告も同然だった。

否、あるいは脅迫でもあったかもしれない。レイナはティファニエンドに殺される夢を見ていた。ならば己の手でティファニエンドを殺そうと画策しても何ら不思議ではないのだ。自己防衛はどんな生物でも持ちうる本能なのだから。その本能を振り上げ、レイナは何を要求するつもりなのか。

レイナは何も答えない。じっと皆を見据え、微笑するのみだ。

その笑みにぞっと背筋が震えた。何の含みもない笑みは以前なら心が安らいだものだったのに。

「「ティファを解放しろ」」

気付けば、イオとアレイズは同時に口を開いていた。重なりあった言葉にきょとんと一瞬お互いの顔を見合わせるが、耳朶を打つ剣呑な声に慌てて後方を見やる。

「御二人の仰る通りです。さっさとティファ様を解放なさい、この盗人」

「そうよ。大体、見た目だけティファ様なのに色が変わっちゃったから全然落ち着かないじゃない。話があるなら自分の体でもう一度

ビビッドに来てくださいね」
何に屈するでもなく、ただ前だけを見据える強い眼差しは神々よりも遥かに凛とした光を放ちレイナに向けられていた。
漸く見つけた仇を殺せないのは惜しくとも、主の命が一番と考えたのか窘める声はさっさと出て行けと言わんばかりだ。いや、言っているのか。本当に末恐ろしいまでに心根の真っ直ぐな、頑ななまでに強い精神を持っているものだとアレイズは内心舌を巻いた。
とはいえ、二人の気持ちは痛いほど分かった。
世界と会うために必要な因子である以上に、ティファは必要な存在なのだ。メイやマイにとってだけじゃなく、自分やイオにとっても。そして少しばかり関わりは違うが、ダグラスにとってもそうだろう。ティファを失えばマイが荒れ、マイが荒れればその全ての怒りをダグラスが請け負うことになるのだから。
（そうだ。だから俺は喜べないんだ。レイナに会えても、ティファがいないんじゃ意味がない）
例えこれから訪れる別れの先、二度と世界に会えなくなったとして。否、そこまではいかなくとも世界が再び遠ざかったとして。それでも自分はこの別れを受け入れるのかと考えた。自分が神となった経緯を知るレイナから真実を聞く機会も、必ず助けるという誓いも遠ざけてそれでいいのかと。自分の存在意義さえ曲げてまで、これはすべきことなのかと。
そして答えは驚くほどの素早さで導き出される。こんな事で悩むなと己を嘲笑うように。その嘲笑であっさりと覚悟を決めた。
「レイナ」
「……何でしょう」
手を握り締める。そうして口の端を緩めて笑った。
「お前に会えたのを嬉しく思うよ。だが、今の状況を手放しで喜ぶこともできない」
一瞬喜びに頬を染めかけたレイナの顔が凍りつく。罪悪感は浮かばなかった。

（あぁ、そうか。こんな簡単な話だったんだな）

ティファを失えない。

そう思うから、イオもゼルも世界の命を無視してまで彼女に手を出さなかったんだろう。世界が見た夢が覆されると信じて、その先に別の未来があると願って。そう考えると、あの空色の少女がどれほど大きな存在なのかを思い知らされた。

小さな子供が泣くのを見たくなくて、野党を倒し星夜祭を決行させ。神の紋章を持つ怪しげな兎を最後まで庇いきり、小さな酒場で酔っぱらいに絡まれているウエイトレスですら放っておけない。そんな究極のトラブルーメーカーでお人好しな彼女は、いつだってどんな時だって人の心配を余所に大丈夫だと笑うのだ。

あの明るい、根拠などないのにやけに自信に溢れた笑顔に周囲がどれほど勇気づけられただろう。同じように笑顔を返せるようになっただろう。あぁそうだ、だからこそ誰もが彼女を大切だと感じ誰が相手であろうと護るのだ。自分も、その一人。

「俺はレイナに会うことよりも……世界よりも、あいつと一緒に旅をすることの方が大事だったんだ」

イオやダグラスといった自分にとっての仇を討つ事よりも、ティファと共にいる道を優先させた。彼女さえ笑顔でいられればあとは別段気に留めることなどなかった。きっと最初にイオを討てなかった地点で、アレイズはティファニエンドを贄にする道を無意識の内に消していたのだと漸く自覚した。

大切な友人。世界の意思となってしまった哀れな少女よりも、ずっと大事に思ってしまった。

（レイナを見つけたらそこで終わってしまう。俺はそれが怖いんだ）

世界の敵と称されたティファにとっての決着、殺される夢を見たレイナの決着、そして自分自身の旅の帰結。何もかもがレイナを見つける事で終わってしまう。それは旅の終わり、この忙しなくも幸福な時間の終着点なのだ。アレイズはそこに立ちたくないと、心のどこかで思っていたに違いない。そんな事できるはずもないのに。

いっそ世界の敵でなければ楽だったのにと胸中でぼやく。
ティファがレイナと何の関わりもない存在だったなら、旅を続けてひっそりと生きていけただろうか。
（……一時はレイナに会うためにあいつを犠牲にしようと思っていたぐらいなのにな）
人の命を一つばかし犠牲にしても構わないと思うだけの誓いだった。
だが今はその誓いをやすやすと打ち砕き、鮮やかに笑うティファに会いたい。
（この調子じゃどうあっても贄にするのは無理だったんだろうな）
いつかティファが世界を殺そうとするなら、その時だけは彼女に手を上げなくてはならないだろうがそれさえもできるか怪しいものだ。無論止めはするが、殺せるかは甚だ疑問だと思っている。世界に会うのさえ時折どうでもよく思えてくる程大事な相手に、剣などそうそう向けられるものじゃない。
言い放った言葉に、緩慢にレイナの顔色が変わっていく。憂い顔が驚愕と絶望に塗り替えられ、肌が髪の色とは反対に青白く染まっていった。それでもアレイズは続ける。自分の誓いの余りの脆さと、それを後悔しない強さでもって苦笑混じりの声で。
「もう一度言う。ティファを離せ。……契約神として、これ以上そいつの体を痛めつけるのは許さん」
仮にあれが自分の体であったなら、きっと許したに違いない。だが相手はティファなのだ。ただでさえ自分が世界に会いたいなどと我儘を言って強引に連れ出したせいで、沢山傷つく羽目になった彼女をこれ以上傷つけたくない。両親の亡骸を再び見せられ、大聖堂にも裏切られ、散々な思いをした彼女だけは。
剣を鞘から抜き、離れた位置にいるレイナに突きつける。
その後ろからこの場には似つかわしくないうっとりとした声が聞こえた。
「アレイズさん格好良い……」

「本当、どこかの趣味の悪い神とは大違い……」
双子の息のあった声にダグラスがぐいと首を後ろに向ける。
「マイティーナ！？　まさかお前あの亡霊に」
「惚れ惚れしてしまいますね、ああも格好良いと。貴方も見習っては如何です？　いいえむしろ見習って頂かないと困りますね。ただでさえ情けないんですから」
「そうそう。じゃないとあんたみたいな男、すぐ姉さんに捨てられちゃうんだから」
レイナほどではないが、絶望に満ちた声でダグラスが肩を落とす。場の空気を吹っ飛ばす会話に呆れていると、にこやかに笑ったメイとマイがアレイズの隣に並んだ。
「申し訳御座いません。アレイズ様の事、少しだけですが疑っていました。ですがティファ様を選んでくださってよかったです」
「うんうん。ありがとう、アレイズさん。ティファ様もきっと喜んでるよ」
深青と真紅のメイド服が左右にちらつき、満面の笑顔と共に全幅の信頼が寄せられる。一時は世界を選ぶ可能性も考えていただけに、戻された信頼は随分と大きなもののようだった。
「ダグラスさん。力を貸してください」
「ほぉ、これだけの力を目にして尚戦う気でいるのか？」
「当たり前です。せっかくお膳立てされたんです、何もせずに黙っているわけがないでしょう」
鋭い声でマイがダグラスを呼ぶと、彼はニヤリと不敵に笑って応える。馬鹿な事を問うなと言わんばかりのマイの声に宿る覚悟を見抜いたのだろう。先ほどまで落としていた肩もやや上がり気味だ。頼られたのが嬉しいのかもしれない。……人間にこうも簡単に扱われる神もどうかと思うが、当の神が嬉しそうにしているのだから何も言わずにおいた。
銀の風が鎌状へと変化する。より鋭さを増したそれを見せびらかすように突きつけ、ダグラスは悪びれもなく告げた。

「悪いなレイナ。俺は今、マイティーナの契約神なんだ」
神々の中で最も忠誠心の厚かった男の言葉に、イオも無邪気に笑んで一歩踏み出す。
「ごめんね。僕は誰とも契約してないけど、ティファを守るって決めてるんだ。元々契約する気でいたぐらいだしね」
そうしていつまで経ってもティファから離れようとしないレイナを睨み据え、二人の神は高らかに世界の敵となることを宣言する。
グラスの末裔はそもそも味方すらしていなかったが、今は中立者としての立場を捨てティファを守るべく武器を構えた。
そこまではよかったのだ。
レイナも驚きこそすれ、何の動きも見せなかったしこちらから打って出られる程隙があった。最後に自分が一歩踏み出さなければ、ずっとそのままだっただろう。
「ティファは俺の契約者、花嫁なんだ。悪いが今回は御帰り願おうか」
花嫁という言葉にイオが殺気立った目を向けたが、それを無視して足を踏み出す。するととうとう耐え切れなくなったのか、レイナが淡紅色の結界を更に濃くし今や鮮血にも見える膜で己を包み込んだ。
「どうして、あなたは」
青白い頬に涙がとめどなく溢れる。
苦しげな声に一瞬動きを止める。それがまずかったのだと、数秒先の未来で思い知った。
「この子がいるから……っ！」
憎しみを込めた声色と共に大きく腕を振りかぶるレイナに、アレイズは慌てて手を伸ばした。レイナの手に握られたナイフ。それが何をするのか分かってしまった。
「――ティファっ！」
「「ティファ様！」」
叫びが虚しく響く。その中で鈍く肉が切り裂かれる音が、やけに

大きく聞こえた。

第六十話

そんなにも会いたいのなら会わせてあげよう。
初めはその程度の気持ちで、ティファはレイナが自分の体を乗っ取るのを黙って見ていた。もっとも反抗しようにも魂ごと雁字搦めにされ、身動きが取れなかったのだが。
アレイズはレイナを友人だと言った。数少ない友人だと。
ただレイナはそうではなかったのだと、ティファは朧気ながらに感じていた。他の誰を見る時より、アレイズを見る時だけ心が切なく軋みそのくせどこか喜んでいるようでもあったのだ。この感情を、自分はつい先日知ったばかりだった。優しくて苦しくて、とても純粋なもの。だから何も言わなかった。言えなかった。結果としてアレイズがレイナの手を取ったなら、それはそれで仕方がないのかもしれないと少しだけ思った程に。
レイナもそれを望んでいたからこそこうして出てきたのだろう。僅かな期待に逸る心の軽やかなリズムがティファの魂の周囲を踊る。セラフィムを用いて掛けられた呪術を解くために己を頼っただけのティファに仄かに漂う程度の罪悪感を滲ませて。
しかし、期待は裏切られてしまった。
アレイズはティファを選び、イオとダグラスさえもが刃を向けた。メイとマイは言わずもがなだ。そこまでならまだ彼女は我慢できたかもしれない。事実罪悪感を持っていたレイナは彼等の行動を否定しようがなかったのだ。だが、決定的な一言が放たれてしまったせいで全て壊れてしまった。
俺の花嫁。アレイズが言い放った言葉が、レイナの心に刃となって突き刺さる。
魂は決して繋がっていないのにティファまで痛みを感じた気になりぎゅっと目を閉じる。想いの深さを表す痛みは、想像を絶するものだった。

そして――。

（なに、これ……）

ティファは茫洋とした意識の中、己の身の内から鮮血が溢れ出ていくのを目にし、実感していた。熱い血潮が致命的なまでの早さで失われていく。風に冷やされた肌を伝い、草原を朱に染める。自分は指先一つ動かしていないのに何故か溢れる血。

痛覚が遮断されているのか痛みはなく、そのせいかティファはこれを他人事のように受け止めてただ意識の奥底で薄く目を開けているだけだった。ただこちらに目を向けて悲鳴にも似た叫び声を上げる仲間達がしきりに自分の名前を呼んでいるから、この血が自分のものなのだと気付く。

「「ティファ様！」」

（メイ、マイ……）

見慣れた双子の姉妹が同時に叫ぶ。涙混じりの、メイはともかくとしてマイならば滅多に出さない声が事態の大きさを否が応にも突きつける。

「レイナ！」

「早くティファから離れろ！」

ティファの体に掴みかからんぐらいの勢いで怒鳴っているアレイズやイオの姿も、危機感を高めるには十分すぎた。だというのに、ティファはそれだけの情報を与えられても自分がどんな状況に追い込まれているのか分からなかった。自分の体がよく見えないから。それもある。しかしそれよりも。

（……五月蝿い）

魂を轟かせる慟哭。

“どうして、どうしてどうしてどうして――！”

延々と続く「どうして」の声が煩くて、ティファは自分の体を確かめる事さえ忘れて耳を塞ごうとする。

大体何に対して、誰に対して言っているのだ彼女は。

アレイズ？　イオ？　それともこの場にいる全員？

世界の意思たる己より世界の敵を選んだ事に対して責めているのか。

それともアレイズの言葉だけが彼女の心を縫い止めているのか。

いつまでも紡がれる怨嗟の言葉はその質を秒単位で高めていく。

濃く強く紡がれる恨みと嘆きと呪い。

それを聞いていたくなくてティファはとにかく耳を塞ごうと体を動かす。だが意識の海を漂う自分の魂の腕は動いても、体としての腕に違和感を感じて顔を上げた。慟哭と怨嗟を無視して自分の体を注視する。

「？」

眉根を寄せ、怪訝な顔をして見た己の腕。

そこに違和感を感じた理由を見つけて、ティファは悲鳴を上げた。

「何よ、これ……っ！」

遠くにぼんやりと見える皆が何故悲鳴を上げていたのかを漸く理解した。当たり前だ、こんな光景を見て悲鳴を上げずにいられるわけがない。ダグラスのように趣味が悪い神でもない限りは。

当たり前のようにそこに在る腕。

そこは既に血で真っ赤に染まり、腕から千切れかけていた。ナイフで何度も突き刺されたのか、腕が揺れる度にずたずたの切断面が顔を覗かせる。見たくもない肉の間から顔を覗かせる骨の白さが鮮血の中でやけに際立っていた。

嘔吐感に口を押さえる。今こうして動かせる腕が現実にはどうなっているか考えると、胃の中からせり上がるものを抑え切れない。しかしティファには嘔吐する間も与えられなかった。閉じられていた痛覚が開かれ、急に襲ってきた激痛に意識を失わぬようにするのが精一杯だったのだ。

「ぐ、ぅ……っ！」

痛い、いたいいたいいたいたい――！

（何が、何がどうなって――……）

自分の体によって傷つけられた腕の痛みはショック死してもおか

しくないとさえ思えるような壮絶さでティファを苛む。その間にも響き続ける「どうして」は止まらず、ティファはそんなもの自分が訊きたいと毒づきつつ、意識の海をのたうち回りながら涙に滲む視界で必死に傷つけられていない方の腕を伸ばした。

「ジュード……っ」

自分にとって最も大切な、助けてほしいと願う人の名前を呟き続ける。

その度に大きくなる怨嗟の中、痛みに耐えながら意識を飛ばさないようにきつく目を閉じる。そうするとレイナと魂が繋がりやすくなるのか、次第に彼女との距離が縮まっていった。

手を伸ばせば届きそうな距離にある魂が浮遊する。その芯にある冷静さと理性に、ティファは思わず目を見開いた。そしてただ一瞬だけ見えた、アレイズにとてもよく似た立ち姿の男。

（あれは、誰？）

アレイズ本人だろうか？　それとも……。

考えても答えは出ない。だがティファはここに答えがあるような気がして、痛みを根性じみた精神論で耐えながらじっとレイナの魂を見据えた。

◇　◇　◇

レイナは口にこそ出さなかったが、憎悪を顔一面に浮かべて自分の体を――もといティファの体を切り刻んでいく。もはや誰が発しているのか分からない涙混じりの悲鳴など全く意に介した様子がない。

「どう？　彼女がいなければいいのでしょう？」

代わりにアレイズの怒号を受け流してうっすらと笑う余裕すら見せる。肩口から噴水のように噴き出す鮮血も、ずたずたに切り裂かれた左腕も全てティファのものでレイナ自身には何の痛みも与えないのか、額には汗一つ見られない。緋色の髪に同化するかのごとく

浸透する血を楽しげに見下ろし、回復が困難なまでに大きく裂けた腕に満足気に目を細める姿は狂っているとしか言いようがなかった。

アレイズの隣に立つイオが、相手がレイナだということも忘れて体を震わせていた。恐怖、憎悪、怒り。負の感情しか孕まない昏い瞳で今にも世界を凍りつかせんばかりの魔力を収束させている。

「どうする。……どうすればいい？」

切羽詰まったボーイソプラノが耳朶を打つ。

空に似た美しい碧眼を苦渋に染め、イオは必死で考えを巡らせている様子だった。

本音としては今すぐ攻撃してレイナを追い払いたい所だろう。だがあれはティファの体だ。何よりレイナを守る膜が攻撃の全てを防いでしまうだろう。

「僕はまだいい。でも、アレイズ神は」

イオはそう呟いてちらとアレイズを一瞥する。君だけは攻撃してくれるなと懇願するその冷静さに頷き返し、アレイズは爪が食い込んで血が滲み始めた手を更に強く握りしめた。

氷柱も銀の風も、膜を無視して攻撃し続ければいつかは到達できるかもしれない。認めたくないが彼等は高位の神なのだ。それも世界の右腕になれるだけの。だがアレイズはその攻撃の輪に加われなかった。魔力の強さの問題ではない。もし一度でも攻撃してしまえば何が起こるか分からないからだ。

ただでさえアレイズの言葉一つでレイナがこんな凶行に及んでいるというのに、これ以上何があったら今度こそティファが死んでしまう。しかし、ならば一体どうやってティファを助ければいいというのだ――！

「ダグラスさん！」

ティファを傷つけぬよう、冷静に冷静にと考えを巡らせるイオやアレイズとは対照的にマイが殺気立った声を上げる。

「急がないと、ティファ様の傷が治らなくなってしまう！」

モーニングスターを構え、契約神に声を掛けた彼女の睫毛の上で

涙の粒が光る。ずっと泣きながら耐えていたのだろうと、もう耐えられなくなったのだろうとその小さな光一粒で察し、アレイズは慌てて止めに入ろうとする。だがその前に傍で控えていた銀髪の神が珍しく緊張した面持ちで頷いた。

ダグラスにも分かっていたのだろう。今の状況を一秒たりとも長引かせるわけにはいかないと。溢れる血、それが命であるならティファはもうどうしようもなく危険な水域までその命を零していた。

契約の証である指輪の力の強大さを持ってしても、できることとできないことはあるのだ。

大体、神とて死からは逃れられない。だというのに神より非力な人間が死に抗うなど不可能。だからこそ事を急ぐ必要があったのだ。問題はどう事を起こすか全く目処が立たないなのだが。

「何をぼさっと突っ立っているんですか！」

押し黙ったままの神々を充血した目で睨めつけ、マイが怒号を放つ。

「こんなところで怖気づいてないで、ティファ様を助けるのに力を貸してください！」

凛とした声にメイが並ぶ。

「姉さん、それは無茶苦茶な言い分だよ」

そう突っ込み、こちらも同じく充血したそのくせ冷ややかな眼差しを注ぐ。

「神様って大抵役に立たないんだもん。だから、私達がやらなきゃ」

「……そうね」

爽やかなまでにきっぱりした毒にマイが静かに頷く。そうして一度だけ目を閉じ、構えたモーニングスターを大きく振りかぶってティファを覆う膜に突進した。

「ダグラスさん、加勢を！　まさか貴方まで怖気付いていないでしょうね！」

「馬鹿を言うな。俺が恐れるものなどお前ぐらいだ、マイティーナ」

「ならいいです。――行きますよ！」

赤い膜のことなど全く意に介していない様子で、否そんなものは壊せばいいだけだと言わんばかりに振りかぶった獲物を素早く振り下ろす。

「はぁぁぁっ！」

甲高い金属音が膜に当たって弾ける。刹那細かな粒子が風に舞った。

（あれは結界の欠片！？）

キラキラと光る粒子は一瞬だけ浮遊しすぐに消えていく。レイナが纏うセラフィムの中に還っていったようだ。魔力によって生み出されたのだから、結界が壊れれば還るのは道理。だが――。

「傷が付けられるのか……？　そんなまさか」

神器の魔力で世界の意思が産み出した、言うなればこの世界そのものですらある壁を人間が？

信じられぬものを見たとイオとアレイズが口をぽかんと開ける中、マイが二撃目を放つ。

「――まだまだっ！」

甲高い音と共に弾ける結界。もう一撃。結界が弾ける。もう一撃――。

何度も何度も赤い膜に向かってモーニングスターを叩きつけるマイの鮮やかなまでの力任せな攻撃。その数度に一度紡がれる覚えたての魔術はことごとくが弾かれたが、結界を傷つける確かな一歩となっていた。ただの人間が、グラスの末裔というだけで普通の人間として育てられた女がここまで。

「失いたくない……っ！」

微かに聞こえる切なる響き。その想いが為に、世界すら壊すのか。

心が震える。ここでただ見ているだけの自分とはあまりに違う人の姿に、アレイズはただ目を瞠り、今にも踏み出しそうな一歩に逡巡を覚えていた。踏ん切れないのは、自分が攻撃することで失われる多くのものを恐れての事だった。だがそれさえあの双子の姉妹には腑抜けて映るだろう。彼女達の強さはそれ程鮮烈だった。

（あぁ、そうだ。マイはそのためにわざわざあんな神と契約して二人でプラクトに残ったんだ）

全てはティファの為。主であり親友であり幼馴染でもある少女を傷つけさせない為。

その為に、彼女は今も世界に刃向かっている。

鉄球が打ち付ける度舞い散る粒子が次第に増えていく。

（これなら……）

案外いけるかもしれない。

ほんの僅かな巧妙に薄く笑うマイも同じ事を考えているのか、更に熱の入った一撃を加える。その隣でマイのものとは違う獲物が膜を叩きつけた。すぐさま弾き返された円環状のそれはメイの獲物であるリングリングだ。

「姉さん！　危ないから私が攻撃した後で叩きつけて！　一点集中した方が手っ取り早いだろうし」

使い古して鈍く光るリングリングを煌めかせ、息を弾ませるメイが大きく腕を振り上げる。マイの攻撃が膜を薄くしているのに気付いたのか、今度は更に二人で攻撃を加える考えのようだ。

第二陣の気配にマイが飛び退く。そうして神々を見て、今度は怒号ではなく懇願した。

「お願いです！　手を貸してください！」

もう少し、もう少しなのだ。その想いがマイが逸らせているのが分かる。同時に更に溢れ始めたティファの血がメイとマイの理性を打ち壊し始めていることも。

「頑張っているようだけれど、誰もこの膜は破れないわ。残念ね」

膜の奥からそんな声が聞こえる。挑発的な声に、イオが静謐な声を放つ。

「アレイズ神」

「あぁ」

「まさか、人間がここまでするなんてね。……さすがはグラスの末裔」

イオは碧眼をメイとマイに向け、感心したように呟く。双子を援護するように銀の鎌を振るうダグラスも相当だが、人間が世界に刃を向けるという事が神々である自分達には驚きだった。その攻撃が有効だという事実も。

レイナがその気になれば、彼女達など瞬殺されてしまうだろう。だがそんなことときっと関係ないのだ、あの双子にとっては。ティファさえ助かるならそれで。

「僕は行くよ」

何故かメイを注視し、イオは足を踏み出す。氷柱が大きくなる。

「俺も行くに決まってるだろう」

「駄目だ。君だけは何もしちゃいけない」

「だが――！」

「ティファを助けたいんだったら、今はレイナを刺激できないんだよ」

激情を堪えきれなくなり膜に近づこうとするアレイズをイオが制する。冷静な指摘に唇を噛み締めると、同情的な視線が向けられた。

「君はここで待ってなよ。後は僕達がやるからさ」

そう言い、ひらりとメイとマイの間に立ったイオの背を見ると途端に無力感がこみ上げ体から力が抜ける。

（こんな一番大事な時に何もできないのか）

誰より護りたい存在を他ならぬ自分が動く事で傷つけるわけにはいかない。しかし、だからといってこのまま見ていろというのか。

結界の欠片が舞う、溶ける。幻想的でさえある光景を睨めつけ無力感に耐えていると、不意に左手に違和感を感じた。

「これは、契約の指輪？」

左手薬指を中心にアレイズの体が薄い翡翠色に染まっていく。仄かに熱を持つ光に包まれ困惑していると、忌々しそうに舌打ちするレイナの声が聞こえ慌ててそちらに目を向ける。ティファの左手薬指に嵌る契約の指輪。その中心に在る翡翠が契約神たるアレイズに干渉するが如く光を放っているのが見えた。

「ティファ……？」
（意識があるのか？）
世界に取り込まれていて尚自我を保っているのか。目を瞠っていると、頭の中でティファのはっきりした声が聞こえてくる。
“お願い、少し離れてて”
あまりに鮮明な声にティファの方を見るが、そこにはレイナの姿しか見えない。
（幻聴か？　いや……）
いくら彼女の事ばかり考えているからとはいえ、この状況で幻聴はないだろう。他の誰にも聞こえていないようではあるが。
“早く”
急かす声に、しかし幻聴であるならもっと別の言葉が聞こえてくるだろう。だから空耳でも何でもなくこれがティファの言葉なのだとアレイズは確信した。翡翠の指輪は二人の契約の証。非常時にはお互いの意志を伝え合う事とて可能なのだから。
（何をやる気かは知らんが）
離れろと言うなら離れておいた方が無難だろう。その必要があるような何かを、ティファはやる気なのだ。
一歩踏み出す。攻撃のためではなく、彼等を引き剥がすために。
氷柱を叩きつけるイオが咎めるような目を向ける。
「アレイズ神？　君は来ちゃ駄目だって――」
「離れておけ。メイとマイもだ」
すると即座に「はい？」と言う双子の声が聞こえてきたが、それは意に介さず二人を抱きかかえ空間転移で遠くへ連れ去る。イオは自分で勝手に来るだろうし、ダグラスはマイがいないと知ればこれまた勝手についてくるだろうと見越しての行動だ。
そして全員が無事にレイナから離れた所で、それは起こった。
「あれはっ！」
抱きかかえられたままマイが驚愕に目を見開く。
散々攻撃してもなかなか壊れなかった真紅の膜。それが一瞬にし

て弾け、そこからレイナが実態を伴わず現れたのだ。
「生意気ね……っ！」
後ろに広がる草原をその身に透かし、レイナが毒づく。それはまるで、視線の先に立つ空の色を持つ少女に魂ごと追いやられたように見えた。

◇　◇　◇

「メイ、マイ。……もう、やめて」
メイとマイが必死に武器を振るっている姿を、ティファはただ見ていることしかできなかった。
鼓膜をつんざくような慟哭は止まず、激痛も引かない。意識を保つのが精一杯の状況でレイナの魂を見据えながら、ティファはアレイズの名を呼んでいた。だがいくら呼んだ所で声帯を震わせて実際に声が出るわけでもないのだ。ティファは諦念にも似た想いでそう理解し、必死に足に力を入れて立ち上がる。
レイナの心に一瞬だけ過ぎった男の姿は、あれから何度注視しても見えなかった。冷静さも理性も失われていないが、それだけはティファに見せまいと心を閉ざしてしまったのかもしれない。おかげでアレイズ本人なのかどうかさえ判断できなかった。
自分を助けようと藻掻くメイとマイの姿に、自分の体がいかに傷つけられているかを理解し、このままでは命が危ういと察する。この痛みはまだ序の口なのだ。命を全てもぎ取られるまでの通過儀礼でしかない。
当然のように痛みはまだ消えない。
しかし、だからといってこのまま手をこまねいていれば死しか待っていない事を知ってしまった以上放っておく事はできなかった。
自分はレイナを殺す気など更々無いが、殺されてやる気もないのだ。
大体自分が死んでしまえば双子の姉妹が何をしでかすか分からない。
（急いであの二人を引き剥がさなきゃ）

何せ、レイナは人の体を操って傷つけるなど朝飯前の存在なのだ。あの二人をいつまでも傷つけない保証がどこにある？　今はともかく、ティファが死ねば次は矛先が彼女達に向かうかもしれない。それは何があっても避けなければならない所だった。

とはいえ、一体どうすれば事態を好転させられるのかティファには分かる由もない。傷つけられてない方の腕で頭を抱えて悩むのが関の山だ。

（要は憑依を解けばいいんだろうけど）

それとて方法が分からない。憑依魔術の扱いさえティファには分からないのだ。こんな事なら一度ぐらいイオに聞いておけばよかったと後悔してももう遅い。

（イオならできるかしら。でも膜に邪魔されて魔術を使うどころじゃなさそうだし、あとは……）

そこまで考えて、ティファは自分の考えをゆっくりと整理していく。そうして頭の中で響き渡る怨嗟の声を嫌々ながら耳に入れ、不意に思い出した耳を澄ませた。

（そういえばさっきから、彼女はジュードの名前を呼んでいるのね）

どうしての声の中に、時折彼の名前が混じっている。それも真名で。

無論レイナは世界の意志でありアレイズの友人だ。真名ぐらい知っていてもおかしくはない。そも人間だった頃の彼を知っているのだ。アレイズの名の方がレイナにとっては違和感があるだろう。

分かってはいるのだが、何故だろう。

（無性に苛々するわ）

やらなければならないことは山ほどある。自分の命の無事を確保したいしメイとマイをレイナから引き剥がしたい。そうやって面倒なことを山積みにした張本人が放つアレイズの真名に、ティファは沸々と怒りを感じていた。

よくよく考えてみればこれは八つ当たりだ。自分はまだ世界の敵になっていないというのに、否それさえ理由にせず傷つけられてい

る。アレイズがティファを選んだから、それだけの理由で。だがそれは二人の問題であってティファには殆ど関係のない話だ。だというのに傷つくのは自分なのか。

（八つ当たりで殺されたんじゃ溜まったもんじゃないわよ）

左手を握り締める。そこに在る慣れ親しんだ冷たく硬い感触に、ふと視線を落とす。意識の海をたゆたう魂にさえついてきたのか、薬指には翡翠の指輪が嵌っている。自分とアレイズの契約の証。自分達を繋ぐ魔力が。

翡翠の温かな光が慰めるようにティファを包む。その熱にアレイズを想い、むかつきが更に強くなる。と、そこですっと肩の力が抜けた。

ティファがアレイズの事を考えるのも許せないのか、怨嗟が更に大きくなる。だがそれは痛みを伴わないので無視し、そっと翡翠を指で撫でた。光が大きくなる。淡く優しい光に包まれていると、不意に自分がこの状況を打開する道が頭に閃いた。

（私の魔力とアレイズから供給される魔力。これを全部レイナに叩きつけて、押し出すことってできないかしら）

勿論それは策でも何でもなかった。自暴自棄とも言える、無茶苦茶な案だ。それと八つ当たりに対して一言物申したいという気持ちから出た、ちゃちな反抗心でもある。だが不思議と無謀だとは思わなかった。

（でも不可能じゃないわよね。だってこの指輪は私とアレイズの契約の証なんだから）

できないことなんてないのだ、絶対に。

ほとんど言い聞かせるようにして呟く。そうして指輪を口元に近づけ、ここにいない神に向けて囁く。

「お願い、少し離れてて」

こんな風に意識して話しかけたのは初めてかもしれない。しかしティファには必ずこの言葉が届くという確信があった。

いつかグラドでアレイズが言った事を思い出す。

『この指輪は、お前の存在を教えてくれる』
（あの時は契約が切れかけていたのに私の声が届いた。……だったら届かないわけない）
今なら前よりもずっと鮮明に聞こえるはずだ。レイナに体を奪われていても契約はまだ続行し、こんなにも深くまで指輪がついてくるのだから。
おずおずと外の景色を確かめる。戸惑うアレイズに「早く」ともう一度声を掛けると、黒い影がメイとマイを抱えて消えたのが見えた。どうやらちゃんと伝わったようだ。幻聴でも空耳でもなく、契約者の言葉として。
「よかった……」
安堵し、今度は頭上を見上げる。そうしてティファは自分が持っている胸のむかつきとか苛立ちとかそういったものをありったけ放出するように深く息を吸い込んでから、意識を指輪に集中させつつぎゅっと目を閉じる。すると、眩いほどの翡翠の光が準備万端だと告げた。
口を開ける。そのまま思いつく言葉を考えなしに放った。
「貴方が誰かなんて分からないけど！」
何を考えてこんなことをしているのか、何故そんなにも冷静なのか。
そんなものは分からないし、これからも分からないだろう。
だが――。
（私を差し置いて、よりによって私の体で）
「――勝手にジュードの名前を呼ばないで！」
紡いだ言葉は、自分でも驚くほど純粋な嫉妬。
レイナがアレイズを大事に思っているのは分かっている。それでもこんな風によりによって自分の頭の中で彼の名を呼ぶのを聞くのが嫌で嫌で溜まらなかった。傍から見ればつまらない子どもじみた言葉。言いたいことは星の数程あったはずなのに、つまりはそれが言いたかったのだと気付いてティファはやや狼狽えながらも、自身

が放たれる限りの魔力を解き放った。
春日に取り込まれた閃光の中よりも更に眩しい光が周囲を満たす。
ティファにとって決して不快でないその光は頭上高くに飛び上がる。そうして嫉妬心と敵意を持った光は、今まで紡がれていた怨嗟を攫うようにレイナごと包み込み、押し流すように意識の彼方へと吹き飛ばした。
「意外と、やればできるものね」
消えていく不快感にそんな言葉を漏らし、ティファは今度こそ本物の目蓋をこじ開けた。視界には虚ろな光景ではなく、自分の目で見る空や草原が広がっている。閉鎖的でも退廃的でもない景色に安堵し、次瞬襲う激痛ですら嬉しく思った。できることなら気を失いたくなったが、今はまだ。
唐突に消えた膜にメイとマイがきょとんと目を丸くするものの、奥から現れたティファの姿に慌てて駆け寄って来る。そうして思いきり抱きついた。
「ティファ様！　御無事でよかった……！」
「ずっとあのままだったらどうしようかと思ってたんだよ！？」
「ごめんね。二人とも」
（出てきた経緯はさすがに言えないけどね）
目に涙を溜めて抱きついてくる二人に苦笑気味に呟き、はたと二人の言葉に違和感を覚える。
無事も何も、こちらは腕を切り落とされかねない勢いで傷ついているのだが……しかし何だ、自分はちゃんとメイとマイの頭を撫でているではないか。
「あれ？」
あれだけずたずたに切り裂かれた腕が、ちゃんとある。
あるどころか動くし、体中に血がこびりついているものの新たに出血してもいない。痛みとてそれを見た瞬間消えてしまった。幻痛だったのだろうか、あれは。しかし一体どうやって治癒したというのだろう。

「一体、何がどうなってるの？」
いつもの空色ではなく、赤黒く染まった髪の毛を揺らしながらティファは呆然と呟く。しかし二人の背後に現れたアレイズを見て、思考を一時中断した。
「アレイズ」
「ティファ……。体はもう大丈夫なのか」
「えぇ、もう大丈夫みたい。理由はさっぱり分からないんだけど」
当惑しつつも、ようやく会えた契約神の姿に全身から力が抜けていく。その身体をそっと抱きしめ、アレイズが血のこびりついた髪を優しく撫でた。やわやわと心をくすぐるような仕草に心が満たされていく。
怨嗟はもう聞こえない。それどころかレイナはもう消えたらしく、世界の意志の残滓さえ感じられなかった。もっともし彼女がいたらこんな風にアレイズに触れられて無事でいられるわけがないのだが。
すまない、と苦い声が耳朶を打つ。
「俺のせいだ」
自責の念に駆られた声はレイナを傷つけたのが誰か、何がきっかけだったのか気付いているのだとティファに思い知らせた。さすがにレイナがアレイズに抱く感情にまでは気付いていないだろうが。
「本当に大切だったんだね。あんなに名前を呼んでたんだもの」
レイナにとってアレイズは凶行に至るだけの価値があったのだ。しみじみ呟くと彼が不思議そうに首を傾げる。
「俺を？」
意外そうな声に頷いてみせる。
「うん、ジュードってずっと真名で呼んでた。それが何となく嫌だったから私」
「私？」
「思い切り怒鳴って、魔力をぶつけてやったの。そうすれば追い出せるかもって思ったのもあるけど」

なんて過激な。誰かがそう漏らしたのが聞こえたが、ティファも否定はできないので沈黙で答えた。しかし次の瞬間ぼっと顔が熱くなる。

（い、今のってよく考えたら……！）

あっさりと言い放った言葉はまさに嫉妬心に駆られた事を告白しているではないか！

間違っていない。確かにそれは正しいのだが口にするとなると恥ずかしいことこの上ない。羞恥心で茹で蛸のように赤くなったティファに、アレイズがふいと顔を逸らして「そうか」とぶっきらぼうに答える。しかしそれが無理矢理冷静さを装っているだけなのは、ティファでなくとも分かるだろう。自分同様耳まで赤いのがいい証拠だ。

「意志の力で跳ね除けたのか？　レイナを？　とんでもない女だな」

そんな二人の耳にダグラスの呆れ混じりの声が聞こえる。その言葉にアレイズはティファを見下ろし、何やら考え込んでいるようだった。

「確かに、いくら何でも俺とティファの魔力でレイナを退けられるとは思えん。となると、奴の言う通り意志の力ということになるが……」

思案するアレイズにイオが口を挟む。

「レイナは世界の根幹と繋がっている意思だよ。そう簡単にどうこうできるとは思えない」

「彼女の意思が弱まっているということか？　それともティファが……訳が分からんな」

からん、と再び力を封印されたセラフィムが落ちてくる。それを手に受け止めると、どこから抜け出したのか気絶していた綾に春日が駆け寄るのが見えた。漸く訪れた平穏。だが誰もそれに喜びを見せず、各々が不安げな面持ちのまま世界の思惑に思いを巡らせていた。

◇　◇　◇

こうして第一幕は閉じられ、次の幕が開かれる。
――再び世界と相見えた時平穏を掴むのはティファか、それとも。

第六十一話

――世界へと至る道は今開かれる。

◇　◇　◇

世界がティファの体を乗っ取りその力を示してから、丸一日が過ぎた。

アレイズを始めとする面々もどうにか混乱から立ち直り始めている。無論体を奪われたティファも同様だ。頭痛も声も止み、取り戻した静けさに慣れず風の音一つではっと後ろを振り返るのも、一晩寝たら大分改善した。今でもまだ、音に敏感になっている節はあるが。

ノルマンに雇われた傭兵達は、あの斥候兵も含めて圧倒的な力の前に霧散し、今は自分達以外誰もいない。本当に静かで、穏やかな草原に春風が吹き抜け心地良い陽だまりの中でティファは体力を回復させるように寝そべる面々を見やる。

皆、ティファを助けるべく自分が持つ最大限の力を揮い、疲弊していた。

特に体を酷使したメイとマイの疲労は顕著で、彼女達はくったりと身を横たえて目を閉じている。とはいっても声を掛ければ返事をするし、必要なら飛び起きる事もできるのだが極力体を動かしたくないというように身動き一つ取らない彼女達に安易に声を掛ける気にはならない。本当ならば謝罪をして然るべきなのだが、二人がそれを拒んだ以上他に言うこともなく、ティファは黙ってアレイズの隣に座っていた。

髪が風に靡く。さらりと音を立てて流れる髪は夏の空の色で、赤みは欠片も見えない。

自分以外の誰の気配も感じない胸中に、ようやく自分が帰ってき

たのだと実感できた。
　ほっと胸をなで下ろす。その姿をアレイズが見ていたらしく、彼が怪訝そうに眉を顰めた。おもむろに伸ばされた手ががっしりとティファのそれを掴む。大きく少しひんやりした感触はまるで繋ぎとめるようで、ティファは小さく笑った。
「もう何もいないから大丈夫よ」
「見えないのに分かるか、そんなの」
「私には分かるもの。だから大丈夫」
　自分を繋ぎとめようとしてくれる手を握り返す。
　そうして幸福感を噛み締めるように告げると、アレイズが漸く表情を和らげた。漆黒の双眸が細められ、満足気に閉じられる。もう一眠りしようという腹だろう。手だけはしっかりと繋いだまま、きっと今の自分も同じ顔をしているのだと思わせる弛んだ顔に、ティファは言いかけた問いを呑み込む。これだけ自分を大事に想ってくれている相手に言うには、あまりに失礼な問いだと思ったせいだ。
　代わりに胸の中でそっと呟く。
（ねぇ、ジュード。……あなたはこれでよかったの？　レイナじゃなく、私を選んで）
　会いたかったはずなのだ。ティファを贄にしようとした程。だというのに実際に出会ってしまった時、彼は笑み一つ見せずにただティファから離れろと言ったのだ。あの光景は長き時を経た再会にしてはあまりに辛かった。誰からも傅かれるはずの世界の意思。その彼女が受けた仕打ちは屈辱に値するだろう。
　当然、彼女がティファにしたことを許せるわけではない。
　どことなく許してしまった節はあるが、もしあれがメイやマイであったならティファは激怒し世界であろうと葬り去ろうとしただろう。誰かの魂を押しのけて存在するというのはそういう事なのだ。
　影のように伸びるアレイズの黒髪が指先にそっと触れる。
　熱のない冷たさを指に絡め、誰にも聞こえない程のささやかな溜息を漏らした。

そんなティファの横で春日がやや大袈裟な動作でセラフィムを抱きしめている。
傭兵集団は消え、ノルマンの姿もない。
彼女としてはこれで本当の意味での奪還が完了したというわけだ。
「やっぱりこれがないと落ち着かないわ」
春日は頬擦りをするように金と銀のセラフィムを抱きしめ、鼻歌交じりにくるくる回る。緋色の袴の裾が草原で際立つ。その様子を尻目に綾が微笑む。たおやかな笑みはまるで母親のようだ。
「それで、皆さんはこれからどうされるおつもりですか？」
静かに問われ、アレイズ達が目をぱちりと開ける。
「そういえば。どうしようかしら」
春日に頼まれたセラフィム奪還は果たした。
かといってこのまま草原にいるわけにもいかないだろうと、ティファは首を傾げた。
（カスガの家や町に行くのも何だか違う気がするし……）
ちらとアレイズ達を見ながら、一体どうしようかと視線で問いかける。
ティファ自身はこの先どうするか全く考えていなかったのだ。もし案があるなら聞きたい。
（考えてもどうしようもないから考えてなかったというのが正しいんだけど、こう何もかも目的がなくなっちゃうと困るものね）
セラフィムがノルマンの手に落ち、世界の意思は神々と対立した。
これだけで大分事態が混乱しそうなものなのに、それらはあっという間に消えてしまった。もう他にすべきことはないだろう。
「何も考えてなかったの？　ティファ様」
「全然考えてなかったわ。レイナも自分の居場所ぐらい教えてくれればよかったのに」
呆れ声にダークブルーの双眸を揺らめかせ文句を言うティファにアレイズが肩を竦める。
何も言わないということは、彼も何も考えてなかったのだろう。

メイが立ち上がり、ティファの前にぺたんと座る。ひょこんと揺れたツインテールが所在無げで、呆れながらも彼女が何も考えていなかったのが分かり三人で溜息をついた。
その時、穏やかでありながらもどこか楽しげな響きを持ったボーイソプラノが耳朶を打った。
「ねぇ、ティファ」
さく、と草を踏む音と共にティファの顔に影が落ちる。
逆光の中そこだけ鮮やかな碧眼がティファを見下ろす。
「どうしたの？　イオ」
若干の驚きも含めつつ問うと、イオはにっと笑ってメイの隣に座る。仕立ての良い服が顕になり、艶を放つ金髪が一層目を引いた。
アレイズが一瞬何かを言いかけ、はたと何やら思いついたように口を閉じる。不審に思ったティファを発する前に、口元に笑みを刻んだままのイオが口を挟む。
「大聖堂に行かない？」
唐突の提案に、ぱちりと一度瞬きする。
「大聖堂って、私達がいたレイニウム大聖堂のこと？　聖大陸の？」
「そう、あそこだよ。第一僕、他に大聖堂なんて御大層な名前ついた所知らないし」
言われてみればそうだ。ティファだって他には知らない。
「でもどうして今更？」
ティファの言葉にメイが不思議そうに尋ねる。メイとしてはもう二度とレイニウム大聖堂に行く事はないと思っていたに違いない。それはそうだろうとティファも思う。ティファ自身あそこにはしばらく――いや、下手をするとずっと帰らないつもりで出て行ったのだから。そも聖女でもない自分が足を踏み込む場所でもない。
メイの問いに賛同するようにマイが頷く。
だがアレイズだけは何か納得したのか「あぁ、そうか」と呟いた。
「成程」
同時に悔しげな顔を浮かべるので、ティファは我慢できなくなり

尋ねた。
「そうかって何が？」
「ノルマンを探しに行くんだろう？　レイニウム大聖堂になら確実に戻ってくるはずだからな」
一度神妙に頷き答えた後で「貴様が先に気付いたのは業腹だが」と付け加えたアレイズは、納得したのか既にその提案を受け入れているようだった。横顔が厳しいのはまぁ、言葉通り先にイオが気付いて自分が気付けなかったことに対する悔しさなのだろう。イオが悪いというわけではなく、自分を罵っているようにティファには見えた。こういう面で、彼等は未だに仲が悪い。
「まぁね」
イオもアレイズの心境を理解しているのか、勝ち誇った顔で笑う。
「人間はこういうのを年の功というのだろう。仕方がない」
更には肩を叩かれダグラスにまで慰められ、アレイズは肩を震わせて殺気を隠しもせずに二人を睨んだ。
元々一緒にいたくないと思っていた輩に助言されてしまったのがよっぽど悔しかったのか。
はたまた、イオがいないとティファがこれから進むべき道が見つからなかったことが嫌だったのか。
どの道、アレイズが抱いているものが嫉妬である事をティファは今までの経験から朧気ながら察したので、あえて口を噤んでアレイズに寄り添うに留めた。そうしてイオへの問いを続ける。
「ノルマン様を探しに行くと言っても、あの方は昨日ビビッドに来られたばかりだけど」
「そうだよね。それなら大聖堂に向かってもいないんじゃない？」
二人の言葉に、火に油を注ぐ契約神の存在をあっさり無視しマイが頷く。
「そもそもここでは空間転移が使えないはずです。仮に使えるとしても移動に時間がかかりそうですし、その間に逃げられる可能性もあります」

眉間に皺を寄せ生真面目に考えこむマイは、ダグラスとビビッドに来た時飛んできたと言っていた。どこから飛んできたのかは定かではないが、空間転移が安易に成功しない事は百も承知なのだろう。

考えこむ三人に、イオが無邪気な笑みを浮かべる。

「方法はないわけじゃないと思う。多分だけど」

「多分？」

「うん。試したわけじゃないから自信はないけど、それで行けるならすぐのはずだから」

胡乱気な目を向けるメイには視線を向けず、さらりと答える。

そんなイオの姿を見て、ティファはふと首を傾げた。何か違和感を感じたのだ。

だがその違和感の正体はすぐ分かる事になる。

「……あら？」

「ん、どうしたの？　ティファ」

囁く声に小首を傾げるイオに、ティファは慌てて首を振った。

「え？　ううん、なんでもない。大したことじゃないから」

本当にそれは大したことではないのだ。心底思いながら首を振ると、イオは「そう？」と頭の上に疑問符を浮かべながらも引き下がる。疑念をぶつけられなくなりほっと息を漏らしつつ、ティファは胸中で呟いた。

（何だかいつもと違うと思ったら。……そっか、そういうことだったのね）

いつも何かとティファの傍から離れないイオとの距離が開いている。

だがそれは別にティファがアレイズを好いているから、というわけではないのだろう。親愛の情の籠った柔らかな眼差しもいとしげに笑う甘い表情も変わらないのだから。

ただ、決定的に何かが違っていた。

（メイが気になるのかしら？）

さりげなく隣に座り、話をするでも目を合わせるでもなくただた

だ寄り添うだけのイオの姿に内心で首を傾げる。同時にアレイズが何か言いかけてやめたのもこれが原因なのだと、今更ながらに気付く。当たり前のように顔を近づけて、擦り寄って甘えてくるこの兎の神は今は壁一枚分の距離を隔ててティファの前にいる。だからアレイズもいつものように怒りかけて、違和感に口を閉じたのだ。

邪気のない二人の姿は眩しくよく似合っている。

しかしティファはイオが決して意識してメイの隣に座っているわけではないのだろうと直感していた。

あれは無意識なのだ。何も考えず、気付いたらそうなっていただけの、それだけの事。その、ただそれだけの事が大事なのだという事実に気付いていないだけで。

神ですら惚れ込んだ意志の強さを持つマイではなく、妹のメイであることもティファを驚かせた。自分はどちらも甲乙付けがたい魅力があると本気で思っているが、今までの旅の中、どちらかといえばメイは姉の影に隠れている面が多かったように思う。そのメイに寄り添う高位の神の姿はティファはとって微笑ましい。

（メイをイオが気にかけてくれるんなら心強いわ）

自分は他者から、マイは自ら世界の敵として厄介ごとに片足どころか腰までどっぷり浸かってしまっている。万一の時、メイを気遣えない事もあるかもしれないのだ。そんな時イオが傍にいてくれるなら有り難い。無論、極力自分で解決したい所ではあるが。

ティファが退行を起こしていた時から傍にいるせいか、メイは別段気にした様子は見せない。マイも神が妹の隣にいるぐらいで目くじら立てていられないのか、特に気にせず傍に寄ろうとするダグラスを押しのけるので忙しい様子だった。きっとティファとアレイズだけが気付いているのだろう。

微笑ましさにくすりと笑う。その傍でアレイズが憤慨した声で言い放つ。

「行くなら行くで、さっさと聖大陸に戻せ」

イオの思惑は知らないまでも、彼ができるというならできるのだ

と思っているからか、アレイズの態度はあくまで尊大だ。
む、とイオが顔を顰めるが、その程度で怯むアレイズでもない。
「そうだな、帰るならとっととやれ」ダグラスも彼と同じかそれ以上の尊大さでイオを急かす。マイがその態度に片手で顔を覆って「もう……」と漏らす。
「ダグラスさん。お願いというのはもう少し殊勝にしないと」
ダグラスを諫める声に、彼が素直に口を閉じる。元来契約神は契約者に対して優位であり、窘められるものではない。だがティファもマイもこの例に当てはまるような柄でもないせいで、立場がそっくり入れ替わっていた。
メイにしてもそうなのだろう。アレイズから聞いた話だが、ティファが退行を起こしていた間彼女はイオを散々な目に遭わせていたらしい。兎の姿の彼をぶん投げたり、役立たずを罵るのが日常茶飯事だったと聞いた時は思わず開いた口が塞がなくなったものだったが。
(でも、だからこそ仲良くなれたのかもしれないわね)
まったく、三人揃って性格が似ていると言われるのも頷ける。
主従が揃いも揃って神を神と思わぬ言動をしているのだ。流石のティファも失笑を禁じえない。
睨み合う神々に目を走らせる。すると今までセラフィムを抱きしめていた春日が顔を上げた。
「あぁ、そうそう。問題ないわよ」
それまで会話に口を挟まなかった彼女の突然の言葉に、一同がそちらに目を向ける。だが彼女は一度に集められた視線に臆することなく、胸を張るようにして二つのセラフィムを掲げた。そのまま自信満々に言い放つ。
「空間転移を使う場所を作ればいいんでしょう？　それならこれで一発よ」
袴を持ち上げ、鈴の音を響かせながら立ち上がった春日はそのままセラフィムを胸に抱き直す。すると、まるで本来からそうであっ

たと誇示するかのように二つのセラフィムが溶け合って一つになった。レイナがセラフィムを解放した時と同様に、そこから白光が生まれる。違うのは禍々しいまでの力ではなく、周囲を包むささやかな光であったことだ。

眩いはずのその光は暖かな色を持って春日の近辺を照らす。

神々だけでなく、ティファ達もがその白光に強力な魔力を感じていた。

（さすが神器……ってこと？）

封印の解けた歓喜ではない。大人しく人の手によって委ねられる力は、穏やかで優しい。原初の光とは違う、神器本来の使われ方をされセラフィムはより一層輝きを増した。

「よく見ていなさい」

春日は、そう呟くように言うと小さく何かの言葉を唱え始める。どうやら、アズマ語らしいその言葉は何故かティファの胸にすとんと染み入ってきた。聞いたことなどない異国の言葉だというのに、とても懐かしい。

アズマと接した記憶なんて今までなかったはずなのだが、不思議なものだ。

退行時にアズマ語を習得したのかとも思ったが、あまりに期間が短すぎる。あり得ない話だろう。

アレイズはかつてアズマ語を教わった事があるからか、彼自身も何かを懐かしむような眼差しになる。だがそれはティファとは違い、確かな記憶に基づいた回想だ。ティファはそれを羨ましいと思いつつ、胸に手を当てて不安な気持ちを払拭しようと試みる。すると白光が更に強まって思わず目を閉じた。

目蓋をぎゅっと閉じているにも関わらず、まだ眩しい光。

視界いっぱいに広がる光は、まるで自分を包み込んでいるかのようだった。

実際に全身に感じる温かみがそう錯覚させるのだろうか？　この温い熱が自分を包むせいで。

光の渦が次第に収束していく。目蓋の奥に暗闇が戻り、体が冷えた。

「何、これ……」

まだ目を閉じたままのティファの耳朶を、メイの呆けた声が打つ。

次いでイオとダグラスが息を呑む音も、彼女の言葉に賛同するように呆けた響きを持っていた。そうしてティファも目を開け、同様にぽかんと口を開けて呆けていた。そうならざるを得なかったのだ。

だって、何だ、これは。

「ほら、こういう磁場があればいいんでしょう?」

得意満面の春日やティファの目の前、そこにはブラックホールのように暗い闇がぽっかりと口を開けて広がっている。あれだけの白光が産み出したにしてはあまりに闇が濃すぎると思う程に、夜でさえ霞む暗がりがティファの前に鎮座していた。

深淵が春の日差しを跳ね返し、そこだけ異質さを漂わせている。

「えーっと……」

思わずティファが困ったようにスカイブルーの髪を撫でる。

するとアレイズがティファの肩を持ちながら「聞いても無駄だろう」と何か諦めたような口調で言った。

(確かに、無理があるかも)

何が起こったのかなんて、当の春日にしか分からないであろうし……何より聞くのが怖い。ティファはそう判断し、弱々しく首を振るアレイズに頷きかけた。

(でも、ここで空間転移を使えって言うの? それはそれで何だか怖いわ。どこか別の場所に飛ばされそうじゃない)

磁場が魔力の流れがと言われるより、視覚的にこちらの方が危うい。

そんな事を思いながら、ティファはちらとイオを一瞥した。

「イオもこれを予想してたの?」

「これほどとは思ってなかったけど……神器ならある程度魔力の流れを矯正できるかなって」

頬をかきながらイオが答える。ここまでとは予想外だったらしい。
さてどうしたものかと揃ってブラックホールを見ていると、メイが最近ではあまり見せなくなっていた天真爛漫な笑顔を全開にしてパンと手を叩いた。
「でもま、これで行けるならいいですよね！？　帰れるならさっさと帰っちゃいましょう」
「……いいの？　それで」
思わず言ってしまってから、すぐに諦めて首を振る。
ツインテールが大きく揺れる。そうして皆の方を見て満面の笑みで「行きましょうか」と促すメイの姿は間違いない、あれは現実逃避だ。考えるのを放棄して早々に立ち去ろうとするメイを咎めるようにマイがじろりと一瞥したが、彼女もやはり諦めたように溜息をついた。「そう悪いものでもなさそうだな」とダグラスが零したのも効いたのかもしれない。
「どうやらこれしか方法はなさそうですね」
渋々と言った体で結論づけたマイは、しかしティファに何かあっては大変と身を守るように隣に立つ。四方を囲む神とメイドを見て、ティファは最後の挨拶と春日と綾の方を見て――心なしか春日から目を逸らし気味にしながら――笑った。
「じゃ、ドタバタしてて悪いんだけど……そろそろ行くね？　ノルマン様を追いかけて来るわ」
「えぇ、お気をつけて」
「あんな奴括り殺してやりなさい。それと、またビビッドに来る事があったらわらわ達を訪ねて来なさいよね」
「そうするよ。じゃあ、またねー！」
姉のマイが気味悪げにブラックホールを見る中、メイは朗らかに手を振って返す。案外神経の図太い妹の姿に、姉はさりげなく涙したように見えたが気のせいだと思いたい。
だが、皆も目の前にブラックホール並みの暗闇があるからといっていつまでも悩んでもおれず。

「……行きましょうか」
「あぁ」
ティファの言葉にアレイズが空間転移の呪文を唱え始めた。ビビッドの二人に軽く頭を下げ、暗闇を頼りなく照らす光を生み出しながら他の面々をより近くへと集める。ティファを中心に、円陣が組み上がる。
空間転移の魔術はアレイズが得意なので、ダグラスもイオも彼に一任し補助に回る。
翡翠の光に感化され、辺りを柔らかい風が吹き抜ける。
魔術を使う時特有の風は、どこか平和な色を持って皆を包み込んだ。それが気分を落ち着けてくれた。すっかりいつもの調子を取り戻し、ティファが宣言する。
「じゃ、とりあえず目的はレイニウム大聖堂ね！」
同時にアレイズが呪文の詠唱を終える。
翡翠の光が輝き、一文字の筋を残しながら消えていった。

◇　◇　◇

こうしてビビッド大陸にいきなり降り立ち、さんざん草原を荒らした元凶達は消えていった。
「嵐のような方達でしたね」
綾がくすくす笑いながら、僅かに淋しげに目を細める。
それを見て春日はふんと鼻を鳴らす。
「まったくね。……でも、たまにはいいわよ。ああいう子達が来るのも」
聖大陸とビビッド大陸。そこに住まう者達の間にはまだ高い壁が聳えており、冒険者以外の者が交流を深めるには長い時間がかかるだろう。だがお互いをよく知らずとも一丸となって戦えたのだから、希望は見いだせる。
金色の瞳を遠く聖大陸の方へ向ける。

彼等は無事レイニウム大聖堂に辿りつけただろうか。
これから先、彼等は皆無事で世界の元に辿りつけるだろうか。
「面倒ばかり抱えた連中だったわね」
そして質の悪いことに、その面倒はまだまだ続くのだろう。自分達はセラフィムを取り戻せてめでたしめでたしだが、彼等の波乱にまだ終わりは見えない。
「そうですね」
静謐な声が賛同する。その目もやはり、聖大陸へと向けられていた。

第六十二話

聖大陸の中央部に聳え立つレイニウム大聖堂。
そこはティファやメイ、マイが七年間を過ごした云わば我が家。
聖女としての役割を終えるまで、帰ろうと言える場所だった。
その大聖堂の地下深く、アレイズが眠っていた場所にティファ達は降り立った。
「ここは……」
長い階段を下り、暗がりの中分岐点をいくつか超えた日の事を思い出しティファは感慨深げに漏らした。
目の前にはあの日アレイズと出会った祭壇がある。主を失った祭壇はぽつんと所在なさげに佇み、より無機質な冷たさを放っていた。
闇の中にスカイブルーの髪が流れる。溶けこむような黒髪と、闇を弾き返す金髪も見える。
「あ、れ？」
だがそこに亜麻色と銀が見えない。ティファは慌ててアレイズに振り返った。
「アレイズ、他の三人は？」
問うと彼は「あー」と情けない声を出した後で周囲を見渡した。
「……まずい。大人数転送するのが久しぶりすぎて、変な所に転送したかもしれないな」
「変な所って、一体二人をどこにやったのよ！」
「ティファ、ダグラスを忘れてるよ」
「いいの、いらないんだからあんな奴。それでアレイズ、メイとマイはどこ？」
イオと二人、どれだけ辺りの気配を探っても三人の姿は見えない。
「細かい位置までは分からないが、ダグラスの魔力が大聖堂内から感じられる。恐らくそう遠くにはいないだろう」
噛み付くような勢いで掴みかかるティファに、アレイズは眉間に

皺を寄せつつそれだけを呟いた。
自信がなさそうなのは魔力が上手く感知できないためか。いくら神との共存を謳う大聖堂とはいえ、神は地下で眠っていたアレイズと彼を監視していたイオのみだ。その二人が此処にいる今、もう一人の神の存在を感知できてもよさそうなものだが。
（上手に隠しているのかしら？　イオだって神の紋章がなければ神様だって分からなかったぐらいだし）
まして彼等は高位の神だ。魔力を上手に消すことぐらいお手のものだろう。
だとすればアレイズに見つけられないのは仕方のない話かもしれない。
だが、ここはティファにとっての家であると同時に敵地だ。何が起こるか分からない状況で、更に仲間がバラバラになるのは不安要素でしかなかった。特にあの三人では例え敵が出てきても出てこなくても不安だ。不安すぎる。
「ダグラスがいるなら大丈夫だろう。あの男は何があろうとマイを守るし、ついでにメイも守るはずだ」
随分軽い口調で言ってくれるものだ。
ティファはきっと眦を吊り上げてアレイズを睨めつける。
「メイとあの男が相性最悪なの分かってて言ってるの？」
一触即発。そんな言葉では足りないだけの溝があるのだ、あの二人には。第一両親の仇と共にいてよくもまぁ手を出さずにいられると関心できる程に確執がある者達を一処に置いておきたくない。ティファやアレイズ達がいれば話は別だが、今あの双子を止められるものは何も無いのだ。万一の事があったらと考え、ティファは戦慄した。
「敵地だって事も忘れて喧嘩なんて始めたらどうしよう……」
ノルマンやアリアはおろか、他の聖人聖女にも存在を悟られてしまう。それはまずかった。
ほとんどの聖人聖女は各地の教会に派遣されており、あまりレイ

ニウム大聖堂にはいない。いるのはこれから聖人聖女になる元孤児達ぐらいだ。しかし、時折報告に帰ってくる聖人聖女の中には、神との契約に成功した者達も少なからずいるのだ。彼等との戦闘は避けたかった。

イオも危機感を募らせているのだろう。らしくもなくちっと舌打ちする。

「相変わらず役に立たないね、アレイズ神は」

「何だと！」

「こっちも仲が悪いし……」

凍えるような声で役立たず呼ばわりされ、アレイズがいきり立つ。それを見てティファは頭を抱えた。

アレイズとイオも元々かなり仲が悪い。ダグラスとメイには及ばないかもしれないが、確執という点でいえば同レベルだろう。なにせ一度殺されかけているのだ、アレイズは。

（こんなので大丈夫なのかしら）

ティファを挟んで喧嘩し始める二人を横目に、自分の頭がズキズキ痛むのを感じ一瞬ひやりとする。だがそれは旅に出てから今まで感じることのなかった気苦労のせいだと、数瞬遅れて気付いて安堵した。

世界が乗り移ったわけではないらしいのはいい事だが、これはこれで悩みものだ。

雪色にも似た細い指先がそれとは対照的に鮮やかな空色をした前髪をくしゃりとかき上げる。そうして困り果てながらも辺りを見渡すと、ほんのり光を放つ祭壇に暗く小さな結界が張られた痕が見える。あの日まで解かれなかった封印の残滓だろう。

こうしてずっと守られてきたのだ。この場所には、もう聖人聖女は入ってこないはずなので少々うるさくしても問題はないだろう。だが。

（用心しないに越したことはないわ）

何せ探し人は教皇だ。戦ったことなどないので分からないが、あ

の時感じた魔力は相当なものだった。その力を持ってして、今の三人の状況も監視されているかもしれない。否、既に罠を張っているのかも。

ティファの性格も抱える問題も全てを知り尽くしている人間は、何もかもを受け入れるように両腕を広げてその身体の足先数センチというギリギリの位置で罠を張っている。そんな図が頭に浮かび、ぶるりと身震いした。あり得ない話じゃないので怖い。

無論早めに見つけてもらって話ができればそれに越したことはない。楽だ。

ただ、他の三人と別れた状況で監視されているのは喜ばしい話ではなかった。

「まずいね。メイを見つけないと」

アレイズの罵詈雑言をさらりとかわし、イオが低い声で囁く。

焦燥感を孕んだ声にティファは首を傾げた。

「メイを？」

確かにメイをダグラスから引き離すのは最優先事項だが、彼女の名前だけ呼ぶのは不思議だった。

するとイオはちょっとだけ驚いたように目を見開いてから言い直す。

「メイ達を見つけないと。戦力が分散するのは危険だしさ」

自分でも何故そう言ってしまったのか分からない。一瞬見開かれた碧眼がそう語っているようで、ティファは僅かに黙考する。そうして「あ」と声を上げそうになるのを押し留めて内心で膝を打った。

（もしかしてイオってば、メイの事が好きなのかしら）

好ましいというのとは違う、深い思慕の念。

ティファがつい最近知ったばかりの感情を彼もメイに抱き始めているのかもしれない。だから他の誰よりも優先して探したがっているのかも。

自分が記憶を失っている間に何があったのだろう。

好奇心がむくむくと頭をもたげるが、結局ティファは自分がなす

べきことに集中することにした。これからどこに行くべきか、どこに行けばマイ達と合流できるか考えなくてはならない。イオを質問攻めにするのは全てが終わってからでも遅くはないのだ。

「どうする？」

イオがティファに問う。

アレイズはレイニウム大聖堂にいる間終始寝てばかりいて、起きてからもそれほどの時を過ごしたわけではない。イオはティファを見守っていたはずなので大聖堂に詳しいだろうが、やはりこの場で一番詳細を知っているのはティファだ。ノルマンとアリアの私室の位置も知っているのは自分だけなのだから。

「そうね……」

頬に人差し指を当てて考え込むティファは、特にこれといっていい場所の候補があるわけでもなかった。

第一、大聖堂はかなりの広さを有している。さすがに聖人聖女のいる居住区まで探しまわる必要はないだろうが、元々部屋数が多いせいで特定ができなかった。礼拝堂一つとっても大きなものから小さなものまで様々なのだ。ティファとてその全てを回ったわけではない。

（となるとこれはもう一つしかないわね）

自分達全員に共通する目的はノルマンだ。

だとすればメイとマイがこの後どう動くか、それが予想できるとすれば一つしかない。

ティファは二人をじっと見据え、上を指差した。

「とりあえず地上に出るわ。それから一番奥の部屋に行くの」

「一番奥？」

「奥……？　あぁ、そうか」

怪訝そうなイオにアレイズが何やら思いついたように呟いたので首肯する。

「うん。ノルマン様の部屋に行きましょう」

もし彼女達に出会うのなら最奥を目指している時だろう。ならば

手っ取り早くノルマンの自室を目指した方が早い。例えそこに行くために聖母アリアの私室前を通らないといけないとしても、背に腹は代えられない。会ってしまったら笑顔で挨拶して通り抜ければいいだけだ。……かなり難しそうだが、他に道もない。

そう考えて二人に言うと、イオとアレイズは呆気に取られた顔を浮かべた。

「随分直球だな」

「見つかったらどうするだい？」

「見つかったら？　……そうね」

元々回りくどいことはしない性格のティファだが、まさか逃げも隠れもせず堂々と行くつもりなのだろうかと顔に思いきり書いたまま問われる。そうして口々に放たれた言葉に見つかるとは一体誰に見つかるのを想定しているのだろうと、ティファはしばし思案した。

教皇と聖母の周囲には私兵はいない。いるとすれば大司教や枢機卿だろう。彼等は剣を持ち戦う術を知らないから問題ないだろうが、神と契約した聖人聖女となると厄介だ。イオとアレイズがいれば怖いものなどないが、相手の出方が分からないのは不安だからだ。

（……でも）

小さく唸る。数秒の逡巡の後、二人の神々を見据えた勝気な眼差しがキラリと煌めいた。

「大丈夫。見つかったら蹴散らしていけばいいのよ」

「……やっぱり直情的だ」

「いいのかな、それで」

本当に少しでも考えたのか謎だと言いながら、アレイズとイオが溜息を漏らす。その時間さえ惜しいとティファは踵を返し、懐かしい祭壇に背を向けた。

「そうと決まったら行きましょう。まずは地上に出なきゃ」

一度来たことがあるから方向は朧気ながらに覚えている。

ひらりと翻るスカートが闇を切り裂き、近く遠い昔日にすっぱりと別れを告げる。さっさと歩き始めると、慌てた様子で二人分の足

音がついてきた。
「本当にメイ達に会えると思う？」
一つ目の分岐点に差し掛かる。二つに別れた道のどちらに進むか記憶を手繰り寄せるティファの耳に、不安げなイオの声がした。それに対しティファはあっさりと返す。
「分からないわ。でも会えると思う。私があの二人なら同じ場所を目指すと思うから」
別の場所に転移させられた彼女達にとっての最優先事項は、離れてしまった主を探す事に限られる。そこにはノルマンも世界の思惑も関係なく、あの双子の姉妹は共にいる世界一凶悪な神をねじ伏せてでもティファを探そうとするだろう。だがアレイズとてダグラスの魔力を上手く探れなかった。万一ダグラスがアレイズの魔力を感知できなかった時、彼女達ならどうするか。
答えは一つだ。――探し人の元へ行けばいい。
地上への階段が見えてくる。一段目に足を掛け、ティファはどこまでも強気に先へ進んだ。
「そうだね。君は二人の主だった」
その後ろから追いかけて来つつイオがしみじみ漏らす。諦念が漂っているのは、真実ティファを説得するのを諦めたからかもしれない。アレイズに至っては声を発する所から放棄している。殊勝なのか何なのか判断しづらいが。
だから結局は頭痛のタネを与えているのは自分なのだと気付いていないティファは、鼻歌交じりに進んで行った。
大聖堂最奥、教皇ノルマンの私室を目指して。

◇　◇　◇

その頃、残された三人も自分達に突きつけられた現実を目の当たりにしていた。
「ここ、もしかして」

メイが辺りをぐるりと見渡し囁く。マイもそれに続いて周囲を見やり、自分達が転送された場所がかつての生活空間であると知りほっと安堵した。

部屋の作り自体はどの聖人聖女も変わらないだろうが、ここ置かれた調度品はどれもメイやマイ、そしてティファが選んだものだ。大聖堂から支給されるものであるから大した違いはないが、色を塗り替えた物や、家具についた傷やしつらえは紛れもなく自分達の部屋にある調度品ばかりだった。

だが、とマイは戦慄する。

（私達が旅に出てそれなりに時間が経っているのに、どうしてこの部屋の調度品は何一つ動かされていないの？）

ティファはもう聖女ではない。この部屋の主はもういない。

だというのに何故、新しい聖人聖女のための部屋としてここが使われていないのかマイは理解できなかった。

（まるでティファ様が戻られる事を予測していたみたいじゃない）

旅に出るのを命じたのは他ならぬ教皇と聖母だ。

だからそんなことはあり得ない――そう考えようとして、マイは口元に歪んだ笑みを刻んだ。もう、あり得ないという言葉を使うのはよした方がいいと自分の中の理性が告げていた。そんな在り来りの言葉で現実逃避をすればするほど裏をかかれるに決まっている。ならばこれも現実と受け止めるべきなのだろう。

ノルマンとアリアはティファが戻る事を知っていた。まさに、今この時のように。

となると余計にティファの姿が見えないのが不安だった。

「ティファ様達はどこにいらっしゃるのかしら？」

「分かんないよ。もしかして、アレイズさんが転送に失敗したとか？」

多少の緊張を孕んだ顔で、同じ顔をした姉妹が顔を付き合わせる。メイもマイと同じ考えに至ったのかもしれない。自分よりも柔軟な発想ができるメイなら、あり得ないと一蹴することなく事態を受け

入れられるはずなのだ。
「ありえるな。つくづく役に立たん亡霊だ」
その二人の言葉に応えるように、ダグラスがゆったりとした動きで首を回し部屋を見渡し答える。だがその嘲笑混じりの言葉にメイが反論した。
「へぇ？　あんたがそれ言うんだ？　ビビッドで全っ然役に立たなくて姉さんに嫌われかけたくせに」
「……貴様だって何もできなかったはずだが、メイティーナ？」
「あんたよりマシよ。それより何人の部屋ジロジロ見てるのよ、この変態」
ダグラスには初めての場所だからか、物珍しい気持ちもあるのだろう。水銀を流し込んだような銀の双眸は興味深げに室内に向けられていた。
思えばイオとアレイズ以外の神はレイニウム大聖堂に寄れなかったはずだ。珍しいのも当然かもしれない。マイは自分にしては珍しく寛容な気持ちで二人を見守り、すぐさまはっと息を呑んだ。
（……ちょっと待って。じゃあどうしてダグラスさんは大聖堂に入れたの？）
ここは世界の敵、ティファニエンドを守るシェルターの役割が果たせるだけの結界が張ってあったはずだ。大聖堂の建造理由であるアレイズや既にここで長年過ごしたイオならばある程度納得できるが、ダグラスは別。彼だけはどんな理由があろうとレイニウム大聖堂が立ち入りを許可するはずがない。聖人聖女と契約でもすれば話は変わってくるかもしれないが、あいにく自分はそんな身分を持たない。
「やっぱりノルマン様は私達が来るのを予期していらっしゃったのね」
その為に神をも招くのだ。
マイは冷えていく思考を纏め上げ、もう一度部屋を見やる。主を失い温かみをも失った室内に懐かしさよりも怖気が優った。もうこ

の部屋は自分達のものではないのだとどこかで思っているせいかもしれない。ここも、一つの舞台なのだと。

テーブルを挟み睨み合うメイとダグラスは気付いていないのだろう。未だに喧嘩を続行している。

「どうせ姉さんの私物でも漁る気なんでしょ」

「それもある」

「――貴方なんて大嫌いです」

「……！　マイティーナの声で言うな！　卑怯だぞ！」

「当然じゃん。私達これでも双子なんだから」

ケケケと意地悪く笑うメイは今までの他の面々に見せたことがない、ささやかでも確かな悪意のある笑顔でダグラスを見上げる。するとメイに言い負かされるのが悔しかったのかダグラスはふんと鼻で笑った。

「大聖堂などお目にかかれると思っていなかったから珍しいだけだ。まさか貴様、神が好奇心一つ持たないと思っていたのか。はっ、これだから獣は困る」

「――っ！」

揶揄する言葉のどこに反応してか、メイが身を固くする。

見開かれた亜麻色の瞳がダグラスを凝視した。

「あんた……」

笑みを刻む憎らしい神に震える声が発せられる。

馬鹿にされて腹でも立てているのかもしれない。

だがこれ以上放っておくとまた喧嘩が始まってしまうと、マイはメイを制するように口を挟んだ。

「メイ、相手にすることないわ。それに嫌われかけるも何も、そもそも好きじゃないから」

辛辣な言葉にメイが我に返ったように口元を緩める。

「……そうだね、その通りよね」

自分と同じ顔をした、けれどもどこか違う表情に違和感が胸を突く。どこがと確たる言葉にできないが、つきんと痛みを訴える違和

感に眉を顰める。まるで全くの別人になってしまったような、そんな錯覚に陥ったかもしれない。

メイ。口を開く。だがその声はダグラスの情け無い声にかき消されてしまった。

「マイティーナ……」

手を伸ばしかけて横から欲しい物をかっさらわれたような感覚にきつい眼差しで応じる。

「何ですか、いちいち落ち込むのはやめなさいと言っているでしょう。それよりメイ――」

一秒でも遅れてはいけない。何故かそんな気持ちになり慌ててメイを呼ぶ。

悪い予感は当たっていた。

「ん？　何、姉さん」

呼ばれてぴょこんとツインテールを大きく揺らしたメイは、いつもどおりの天真爛漫な笑みを刻んで呑気にテーブルの周りを回って部屋を感慨深そうに見ていた。真紅のメイド服が無機的な空間を鮮やかに飾り立てる。エプロンの紐がひらひら揺れる後ろ姿も声も、何もかもがいつも通りだった。遅すぎたのだと、マイは胸中で自分を罵り首を振った。

「何でもないわ。それよりダグラスさん、ティファ様の居場所は分かりますか？」

長年メイドをやっていたせいか、不必要に気を遣いすぎるきらいがある。そのせいで喧嘩を仲裁してしまったのはまずかったのだと、自分の判断を呪った。メイが続けようとした言葉がひどく気にかかる。

しかし今一番大事なのはティファだ。

彼女を見つけないことには何も始まらないとマイは開き直り、改めて残る二人を見て嘆息した。

（このチームだと、いつか胃を痛めてしまいそうだわ……）

アレイズやイオがいるならともかく、よりによってこの三人が一

緒になってしまったとは。
メイはいい。連携を取るのに一番適しているのは半身であるメイだし、気兼ねしなくて済む。
問題はダグラスだった。彼がいると余計に疲労感が増す。
契約神なのだから傍にいた方が都合がいいと頭では分かっていても、心の方はまだ納得がいかないようだとマイは今更実感した。もっとも、いつか殺してやると決めている相手と一緒にいて疲れないなんて事があるのかと問われると答えは否だが。
恐らく当のダグラスが聞いたらショックで倒れてしまいそうな事を考え、これみよがしに深く溜息をついてやる。それにビクリと反応した彼は余程自分の事を理解していると見える。だというのに何故彼は人の話を聞かずに鬱陶しいまでについてくるのか、理解に苦しむ。普通ここまで嫌われたら愛想の一つや二つ尽かすだろうに、物好きな神だ。
(ティファ様でもアレイズ様でもイオ様でもいい。誰か来てくださらないかしら)
今目の前に現れてくれたら一生崇められる自信がある。
そんなことをぼんやり考える横で、ダグラスはティファ達の行方を調べるべく魔方陣を展開していた。どうやら魔力の流れだけでは感知できなかったと見える。とはいえ案は悪くないとマイは内心で頷いた。
元々多くの聖人聖女が魔術を使う場所だ。
少々強いスペルを唱えた所で、反動で教皇達に存在を悟られるとは思えない。探査程度なら尚更だ。多少魔術を扱えるようになったマイは、そこまで考えてあえて止めることはしなかった——のだが。
「な、何!?」
ダグラスが魔術を行使しようと床に魔方陣を展開した途端、部屋が真っ赤に染まり甲高い音が響いた。
「——ダグラスさんっ!」
警備用のアラーム!?

ダグラスを呼ばわるマイに、彼が舌打ちを漏らす。
「俺とした事が……。二人とも、そこに隠れていろ！」
警備用のアラームは、元々聖堂やアレイズのいるような神聖な場所に邪な意志を持つものが入った時に作動するものだ。メイもマイもそれを大聖堂に住む事になった当初から教わっていた。
（だけどここにアラームはなかったはず。なのにどうして）
あり得ない。そう口にしそうになるのをぐっと堪えると、まさかという考えが浮かび上がる。
まさかノルマンは、自分達三人がこの部屋に来て魔方陣を展開することまで見越していたのだろうか――。
アレイズが転送に失敗し、仲間が二手に分かれてしまう事まで？
（でも、そうじゃないとここまで周到に用意はできない。まずいわ。行動が何もかも読まれているとなると、ティファ様が）
主は今どこで何をしているのか。無事なのか。ノルマンの手に堕ちていないのか。
次から次へと湧き上がる問いに唇を噛み締める。その腕を引っ張り、メイが声を荒らげた。
「姉さんっ、こっち！　急いで！」
天井を見上げると、ピカピカと忙しなく明滅するアラームが憎らしいまでの大音量で外敵の存在を知らしめる。あるべきでないアラームの存在にメイも事の重大さを悟ったのか、ダグラスが指し示す方向にマイを引きずって行った。口を開けば罵詈雑言の応酬ばかりする二人ではあるが、マイを挟むと共闘できるらしい。まるでイオとアレイズのようだと、マイはこんな状況にも関わらず考えていた。
寝室に隠れ、細く開いたドアからリビングの様子を観察する。そうしていつでも出られるように各々武器を構え、メイとマイは身を寄せ合ってこれから来るであろう敵を見定めようと前方を注視した。
「まさか魔力を放出するとアラームが作動する仕組みとはな。聞いたことがないが、どこかの馬鹿が改良でもしたのか」
邪さではなく、魔力が起動スイッチだと呟くダグラスは苦笑を浮

かべて天井を見上げていた。肩を流れる銀糸が僅かに動き、寝室へと向けられる。そうしてメイとマイが無事隠れたのを見届けてから、彼は鳴り止まないアラームに苛立ちをぶつけるように荒々しい所作で剣を顕現させた。

その瞬間、ガラスでガラスを叩いたような、甲高くも透明感のある声が響いた。

「マイティーナ・グラス」

（……え？）

「メイティーナ・グラス」

「この声って……」

水のような静謐な声はダグラスではなく、隠れているはずの二人の名を呼ぶ。見つかっているのだと緊張に身体を固くするメイは、それでも外に出ることはしなかった。居場所はとうに知られているだろうが、安易に動いて隙を作ってはいけないとお互いよく分かっていた。

一度の囁きの後メイが口を噤む。

そのまま沈黙を貫くと、声は最後に「ダグラス神」と囁くように銀の神の名を呼んだ。それきり相手も沈黙する。

訪れた沈黙に、今度はダグラスが言葉を紡ぐ。

「俺達がここに来ることを知っていたのか」

挨拶のない、問いですらな確認に声が「えぇ」と返した。

「ノルマン様はとうに見抜かれておりました。この部屋を訪れる三人が誰であるかも――そして地下にティファニエンド達が現れる事も」

静かな声は、その穏やかさを持ってして部屋に威圧感を放った。強烈な圧迫感ではない。じわじわと真綿で首を締めるような緩慢さだ。

柔らかでありながら真っ直ぐな芯を持つ凛とした声は、その声色の高さもあってか聞く者の鼓膜に突き刺さるように言葉を放つ。ダグラスはその真っ直ぐすぎる声が気にくわないのか、眉間に皺を寄

せつつ問いを重ねた。
「あいつらは地下にいるのか」
「そうです。会いたいのでしたら、今すぐ会わせて差し上げますけれど」
地下。その言葉にメイとマイは更に身を固くする。
「地下ってアレイズさんがいた所じゃない？」
「多分ね。でもそれより、あの方がどうしてここに……」
敵の姿は見えない。けれどもマイには相手が誰であるか分かっていた。多少気にかかることはあるものの、あれは間違いなく自分達がよく知る人物だと。
真っ赤に染め上げられた室内は、プラクトの屋敷を彷彿とさせ心に恐怖を産んでいく。ティファの居場所が分かった安堵感に勝る恐怖は色だけが原因ではない、紛れも無い死の気配が忍び寄っているからだ。
（今すぐここから出なければ）
でなければ、自分はきっと後悔してしまう。
理由などなくそう思った。魂を分かつメイも同様に、リングリングを構えたままドアノブに手を掛けていた。
「ダグラスさん！」
リビングに躍り出る。肌を赤く塗りこめられる二人を見て、ダグラスが目を剥いた。
「お前達、何故出てきたっ！」
即座に叱責が飛ぶ。だがそれに答えられずにいるマイとは正反対に、メイはリングリングを構えて前へ前へと進んだ。
「あそこにいても駄目なのよ。っていうか、その方はあんた一人じゃ倒せない」
断言する声が険しさを帯びる。強い口調にはっと息を呑みメイの隣に並ぶが、赤く染まった横顔は厳しい眼差しを前方に向けているのみだった。敵意が隠しもしない表情ではあるが、それ以外は特段気にする必要もない顔だ。

マイも釣られて前を見やり、しずしずと足を運びダグラスの隣に並ぶ。刹那、ニッコリとたおやかに笑んでダグラスと対峙する人物に深々と頭を下げた。深青のメイド服のスカート裾を持ち、優雅な仕草で腰を折る。メイも倣う形で腰を折った。

「「御久しぶりです、アリア様」」

「久しいですね、二人とも――でも」

頭を下げた二人にアリアが困ったように苦笑する。気品の漂う容姿は、ノルマンと同じぐらいの年頃であるにも関わらず若々しい。雰囲気ではない。顔の形そのものが以前会った時より、女性らしさを持ち若返っているのだ。全く別人ではなく、最後に会った時のアリアの面影を残して。それは草原でノルマンに再会した時と同じだった。

だというのに、それだけ変わってしまったのにアリアは何てことないというように苦笑を深めた。

「すぐに投降していただかないと、このままでは永遠のお別れになってしまいますね」

憂うのはそこではないとはっきり告げる姿勢に、マイの背筋に寒気が駆け上がった。

「……ダグラス」

この方は、もう。

メイが今まで呼んだ事があるか知れぬダグラスの名を呼び、震える声でリングリングを握り締める。続けられなかった言葉は、マイが引き受けた。

「彼女は神殺しです！」

断罪の言葉にアリアが口の端に緩やかな弧を描いて笑う。その口が歯が舌が喉が胃が、全身が神の血肉を喰らったというのにやはりその片鱗さえ見せない高潔さに、ダグラスが即座にメイとマイを庇うように前に出た。

しんと静まり返った部屋に風を巻き起こしたのははたしてどちらが先だったか。

ダグラスは自分達に背を向けたまま、銀の鎌鼬を顕現させる。同時にアリアは腕を一振りし、黒い風の流れを顕現させて朗らかに言い放つ。

「貴方に用はありません、古き神よ」

「お前になくても、俺にはある！」

この状況で浮かべるにはあまりにも柔らかすぎる笑みが、死の気配をより際立たせる。その穏やかさを振り払うようにダグラスは即答した。

「黒き風は古くから悪しきものの象徴だ。貴様もそのクチか」

「さぁ、どうでしょうか。貴方の考えが古いだけかもしれませんよ」

「ふん。それだけ禍々しい魔力を発していていけしゃあしゃあと。どんな低位の神を食ったか知らんが――」

銀の鎌が錬成されるように輝きを増していく。より鋭く、より凶暴に。

その凶悪な鎌をアリアに突きつけ、ダグラスはプラクトで出会った頃より陰惨な声色で熟れた甘美さの宿る顔立ちを歪めて哂った。

「神殺しの罪、償ってもらうぞ。罪人」

「――貴方に出来るものなら」

刹那、ティファ達とかつて寝起きしていた部屋は、ダグラスと双子の周りを残して銀の奔流に流された。何度も研ぎ澄まされた切れ味の鎌鼬でアリア共々全てを切り裂くように。

◇　◇　◇

のっそりと身を起こす影の気配に、イオは一人密かに地上を見上げた。

メイ。唇だけを動かす。

（まさかもう）

彼女の体内に眠る獣は解き放たれてしまったのか。

（いや、でもまだだ。封印が解けたにしては気配が薄い。……それ

でも急がないと、早くしないと彼女が消えてしまう）

命が潰え、来世へ巡るはずの魂ですら喰らわれて獣の腹に収まってしまう。あの、傷つきながらもなお高潔で純粋な魂が。

イオは我ながら驚く程の焦燥感に駆られ、今すぐ走り出したい気持ちに胸を満たされる。場所など分からない。だがとにかく虱潰しに探して、彼女を一刻も早く見つけ出したかった。もう自分にできることなどないと分かってはいても、何かがしたかった。

大聖堂内に満ちる気から影の気配を探る。

と、そこで前を歩いていたアレイズが立ち止まった。

「ん……？」

「どうしたの？　アレイズ」

「いや、何か聞こえないか？」

アレイズの言葉に先頭にいたティファが階段を昇る足を止める。耳を澄ませる姿にティファが同じ仕草をするのを見て、イオはまさかメイの事がバレたんじゃないかと内心ひやりとした。知られたくないはずなのだ。彼等には。否、きっとイオを含める誰にも彼女は隠し通したいはずなのだから。

イオも形だけ耳を澄ませる振りをする。そこで耳を突く甲高い音に気付き、慌てて螺旋階段の頂上を見上げた。

「これ、多分アラームだわ。誰かが聖堂に入ったんじゃないかしら」

ティファの声にイオは飛びつくように問う。

「そんな物があるの？」

「えぇ。邪な心を持ったものが入ると作動するって聞いたことあるわ」

「じゃあ皆はアラームが仕掛けられた場所にいる可能性が高いってことだね」

これで的は絞れた。イオは自分の心の鋭さを悟らせないよう、ニコニコ笑ってみせた。

「そんな面白い物があるんだね。じゃあ早く見に行ってみようか。きっと皆驚いてるだろうし」

「そうね。メイとマイならアラームが分かるだろうけど、ダグラスは……というかダグラスが原因なんだろうし、今頃慌ててるかも」

お互いの姿でさえよく見えない闇の中、水滴が石を叩くのを聞きつつひたすら前へと進む。

地上へ、早く地上へ出なければ。

最後尾を歩き、誰にも顔を見られる心配をしなくて済んでからイオは強張った顔を前方に向けていた。できることなら転移したい所だが、ダグラスの魔力さえ感知できない場所で安易に魔術を使うのは躊躇われる。何が仕掛けられているか分からないのだ。

「何か、嫌な予感がするな」

アレイズがぽつりと漏らす。

彼も胸の中に蟠るものがあるのか、大股に歩きながら何かに急かされるように地上を目指す。ティファを追い越しかねない早さだ。

イオもそれに続こうと軽やかに二段先の階段を踏み、鳴り止まないアラーム音に耳を澄ませた。

メイ。もう一度唇だけで呼びかける。

――どうか無事で。

第六十三話

アラームが作動し、地下にいるティファ達にまでその音を響かせていたまさにその時。

音の発信源。ティファ達が暮らしていた居室では銀の奔流が渦をなして広がっていた。

辺りに置かれていた家財道具は全て切り裂かれ、その破片ですら切り刻む。無残にも塵とも埃ともつかないキラキラした光を生み出され、風に乗り壁を床をちりちりと傷つけていく。だが長時間何もかもをも破壊して回るその風は、ダグラスを始めとした双子の頬に強く当たるものの決して彼女達を切り刻むことはしない。

銀の神による強い制御下に置かれた風。己の内から練り上げた理性的な風は、しかし規則性の見えない生物的な動きを見せて目の前の敵に襲いかかった。

「だ、ダグラスさん……。これじゃ、私達もアリア様の姿が見えないじゃないですか！」

「その前に滅しているだろう」

「そうかもしれませんけど――！？」

戦いの折、一番の恐怖は相手の姿が見えないことだ。

無論アリアからも自分達の姿は見えないだろうが、こちらが先手を取れないのは痛い。そう思いマイが抗議の声を上げると、ダグラスは自分の力を侮られたのが悔しいのか拗ねたように返す。

銀の風が質量を増す。研磨し澄んだ輝きを放つ風は鎌鼬となり、ただ一人の敵を屠るためだけに舞い続ける。確実に仕留めるために。神殺しの罪をその身を持って贖わせるために。裁きの風はマイ達の足元以外の全てを引き裂き切り裂き、漸く満足したとばかりに和らいだ。

「こんなものか」

ダグラスが腕を一振りする。甲高い音が響き、吹き抜ける風が止

んだ。一瞬にして、辺りが静寂に包まれる。そこに何かあるという音や気配すら、そこには感じられない。どうやら、本当に何もかもを消し去ってしまったみたいだ。

メイとマイが横を見やると、壁が隣の隣の部屋まで抜けている。反対側の壁もしかり。

幸い両隣の聖人聖女は外出中らしく――アリアが手配したのだろうが――死傷者の姿は見えなかった。

（まったく、乱暴な）

誰もいなかったからよかったものの、下手をしたら誰かが巻き添えを食っている所だったのだ。マイはダグラスの力の奮い方に憤慨し、彼の方へ厳しい目を向ける。ダグラスはといえば相当練度の高い風を生み出したせいか、疲れたように腕を回していた。

「これなら問題ないだろう。死体がないのが惜しいがな」

見せしめにしてやれん。不満気に呟く声に、メイが呆れたとばかりに肩を竦めた。

「分かってはいたけど、他の人達がどうなるかとか全然考えてないんだね。流石神様」

揶揄するメイの声を鼻であしらい、ダグラスは長い銀髪を邪魔そうに一つに束ねて前に足を踏み出す。ふわりとつま先が浮く。なくなった床を滑空すると、やがて先刻まで聖母アリアのいた場所へ辿り着く。「ふむ」彼は顎に手を当て、上半身を折り曲げた。

ぽっかりと穴の開いた、何も無い空間。水銀の眼がそれを捉える。

「どうしましたか？」

「いや、死んだと思っていたが案外しぶといものだと考えていた」

階下に続く空洞を指先でつ、と撫でる。

弧を描き魔方陣を形成すると、再びアラーム音がけたたましく鳴り響いた。

「どういうことです？　まさかアリア様が生きていらっしゃると？」

そういえば、今ダグラスが触れている空洞は他の場所に比べて何だか妙に綺麗だ。マイは違和感を戦慄に変えつつ、それでも神の裁

きに人間が耐えられるものかという想いが勝り、信じられないという気持ちを滲ませて問う。するとダグラスは空洞を見据えたまま静かに言い放つ。

「構えておいてくれ」

真剣な声色に身体が勝手に動いた。

メイもリングリングを構え直し、周囲の気配を探っているようだ。

「あれはまだ生きている。恐らく、風を風でやり過ごしたんだろう」

答える声は、紅に染め上げられた室内を清めるような清涼さで放たれた。

「――古き神は単純な者が多いと聞きましたが、案外そうでもないようですね」

ダグラスが銀の双眸を憎々しげに歪める。この声の持ち主を三人はとうに知っていた。

高く澄んだ、一種独特の響きを持つ声は先程まで禍々しい魔力を持つ黒き風を操っていた張本人。

「アリア様」

殺気など微塵も感じさせないのに、寒気がした。

「どうして――今まで気配はどこにもなかったのに」

メイがさっと左に目を走らせる。それを横目にマイは右に目を向けた。各々武器を構え、臨戦態勢を整えて声の主を探す。だが、視界に入る限りでアリアの姿はない。気配を探ろうとするものの、頼りになるのは彼女の声一つだ。気配を見つけたくとも、何故か靄がかかったような錯覚に陥るばかりで確証が得られない。

額に冷や汗をかきつつ、メイと背中合わせに立つ。熱い背中が緊張を否が応にも高めた。

この場合、無闇に動くのは危険だ。

それを重々理解しているだけに、安易に動きようがなく二人はアリアが気配を伴い姿を表すのをただ待った。舌打ちするダグラスもアリアの魔力を捉えられないのだろう。双子を守れるように簡易の結界を整えながら、口を閉ざして敵の訪れを待つ。

どれだけの時間が過ぎたのだろうか。
「可哀想に」
不意に放たれた声が、長く短い時の流れを打ち壊す。
甘い香りがマイのすぐ横で哂う。
「なっ……！」
（一体どこから！）
唐突に現れたアリアの笑みに駆け上がった危機感に足が竦む。
「マイティーナ！」
ダグラスがマイを守るべく腕を伸ばす。だが、現れたアリアは忽然と姿を表した彼女に驚くマイを攻撃することなく、代わりにマイの腰に優しく手を回して浮かび上がらせる。浮遊感に襲われ、決して痛みを伴う行動でないにもかかわらず恐怖感がこみ上げた。
その間にもアリアは穏やかな笑みを刻んだまま、黒い風でマイ共々空高くに浮遊する。不吉の象徴を従え、それでも聖母の顔をして。狂気さえなくアリアは死と闇を堂とした態度で引き連れているのだ。
怖いと思った。
だがいくら怖くともマイとてやすやす捕まったままではいられない。
（そうよ。そうでないと結局私は足手纏いになってしまう）
必要なら世界の意思さえも殺すと覚悟した自分が、聖母一人に遅れを取っている。歯痒さに唇を噛み締め、腕に力を込めてアリアの拘束を解こうと試みる。だが腕力だけならばともかく、アリアの腕に纏わり付く黒い風がマイの手をやんわりと押し返すばかりだった。
世界最強の魔術師、グラスの末裔と言えど魔術の扱いに関してはまだ素人だ。そんな自分ではこの黒い風を解除させる方法が思い当たらない。
（解けろ、解けて！）
強く願う。方法が分からないなら、あとは世界の理を壊すしかない。
けれどもマイの懇願を嘲笑うようにますます黒い風は腰に絡まり、

がっちりとアリアに囚われる結果となってしまう。絶望感にすっと冷えた思考が、冴え冴えと体内を照らすたような気がした。

（……そう、分かったわ）

ならば、最後の手段だ。

目を閉じる。静かに息を吸い込み、一度吐く。儀式のようにそれで思考を切り替えてから、マイは握っていたモーニングスターの柄に手を掛けた。

（この方はレイニウム大聖堂の聖母。孤児となった私達やティファ様をこの温かな家に招いてくださった恩人。でも――私には恩を仇で返してでも譲れないものがある）

守らなくては。ティファを、自分の決意を。

ぎゅっと力を込めて握りしめた手の平を、ありったけの力で一振りする。

ぐしゃり、音がした。

「ね、姉さん！？」

モーニングスターの鉄球が何の躊躇いもなくアリアの顔に突き刺さる。あまりの容赦なさにメイが悲鳴じみた声を上げた。当然かもしれない。恩人であるアリアにまさかここまでの攻撃をするとは思っていなかっただろうから。マイ自身心のどこかで驚いている。

突き刺さった鉄球は下手をすれば顔を抉り――否、その前に顔が潰れて即死を免れないのではと思わせるだけの勢いを持ち今も彼女の頬にめり込んでいる。神を殺すのにも人を殺すのにも躊躇う気など更々ないが、あまりのエグさに嘔吐感が込み上げそうになった。自分がしたことの罪深さに力が抜ける。

（でも、私は捕らわれるだけの役立たずでなんかいられない）

戦わなければ。自分を絡め取ろうとする全てを振り払うだけの力を持って。

腕を引く。そうしてモーニングスターを手元に戻すと、黒い風が消え浮遊感が失われた。落下する体を今度は銀の風が支え、ダグラスの腕がマイの体を背中から抱きしめる。

「よくやった」
空洞にぴしゃり、肉片と血が降り注ぐ。濃い血臭にダグラスが満足気に笑い、マイの頭をぐりっと撫でた。手が離れる瞬間指先が何か摘んだと思ったら、髪にこびりついた血を拭ったらしい。
マイはそれを顔をしかめながら確認し、自らも髪を撫でた。べったりと手の平を彩る紅はアラームの光よりもどす黒さがある。けれどもマイはダグラスのようには笑わず、きっと上を睨めつけた。まだ、まだだ。そんな気がして。
「傷ついた演技などしても無駄です」
絶対零度の冷たさで射抜くように言い放つ。するとマイよりも遥か上空、顔を無残にも潰されながら血を滴らせていた張本人は、穏やかに、そして上品に笑いながらその潰れた顔を歪めた。
「げ」
マイの隣でメイが気味悪さに顔を顰める。誰かを出血多量で殺しかけることもある双子ではあったが、アリアの表情はそんな経験があってもなお恐怖を感じさせるほどに凄惨だった。
頭を潰されても、変わることなく笑っていられる姿。
「化け物が……！」
ダグラスが掠れた声で搾り出すように言うのが聞こえたが、それすらも彼女には褒め言葉の如き甘美な響きだったらしい。嬉しそうにふふ、と笑った後で彼女はおもむろに頬を撫でた。否、頬であった場所をだ。
「どうして私が平気だと？」
口元もごっそりと肉が抉れているにも関わらず、喋る声は滑らかだった。
マイは冷静にアリアの損傷具合を確認しつつ、平坦な声色で返す。
「神の力すらものともしない貴女に、人間の私が敵うはずがないでしょう？」
「それもそうですね。……ふふ」
アリアが撫でた場所に神経が生え、赤みを帯びた筋が伸びていく。

頭蓋骨に絡まるように伸びていったその筋肉らしき肉は、生々しくうごめきながら血の通いを形成していった。嘔吐感がこみ上げるようなその光景に目をそらしたくなるものの、誰もそれができずにいたのは……間違いなく、その口調だけが穏やかだったからだろう。

人は、真に恐ろしいもの禍々しいものを恐れるが、それ故にそれらから目を離すことが決してできない。

震える手をぎゅっと握り締めて、気丈にアリアと会話を続けたマイの神経にメイやダグラスが感嘆の息をつく。

「神ですら。いや、レイナであってもこんなのは不可能だ」

アリアから目を逸らさずダグラスが零す。

伸びていく神経や筋肉、そして通い始めた血をどこか遠くで見ているような錯覚に陥りながら見ていたダグラスは、虚ろなままでの声色で続けた。

「神とて、死ぬのだ」

マイもその話なら聞いたことがあった。

神と触れ合うことのない人間は知らない事ではあるが、神々の間では当然の事として受け入れられている事実。だからこそ彼等は無意味な争いはしないし、世界が何か言わない限りは人間に干渉することもない。もっとも契約行為が存在するぐらいだ。酔狂な神や人間が交わる事も勿論ある。マイとダグラス、ティファとアレイズのように。だが彼等はどちらが優位に立とうとも、死の前では平等なのだ。

神は老いず、人間は老いる。違いはその程度に過ぎない。

頭を潰されれば死ぬし、血が流れ続ければ干からびて命は潰える。だというのにこうして頭を潰されても死なず、それどころか回復までしてみせる存在をマイは知らなかった。

死者が何らかの形で世に浮かび上がってきたとしたら、そういうこともあるかもしれない。だがそれはその地点で生者とは一線を画す存在だ。第一このレイニウムを死者が闊歩しているなどと言う話こそ聞いたことがない。いつか、遥か昔。この世界がレイニウムと

いう名前になる前にはあったらしいとダグラスが冗談交じりに話していた事はある。それでもここはもう、レイニウムなのだ。

「怖いですか？」

やがて、潰れた顔を完全に元の状態に修復させたアリアがダグラスの銀の双眸をそっと見つめて囁いた。その姿が掻き消え、ダグラスの背後に降り立つ。

「こ、の……！」

顕現させた剣を振りアリアの首を取ろうとするもののそれは失敗に終わり、くすくすと上品に笑う声だけが流れ彼女の姿が掻き消える。その姿が今度はダグラスの目の前に現れた。そうして彼女はダグラスの頬に優しく触れながら聖母のごとき微笑を向けた。

「神でも人でも世界でもない、それが私達。――切られても潰されても死なないこの体を見て、時々思いますよ。私達は何者なのかと」

「化け物だろう」

「そうですね。確かに私達はそう呼ばれるに相応しいですわ。でも――」

それで良かったのかもしれませんわね。

その囁きが先だったのか、ダグラスの視界一杯にガラスのような菱形の物体が現れたのが先だったのか。

「――ダグラスっ！？」

「ダグラスさん！」

それとも双子が口々にそう叫ぶのが先だったのか。

彼には結局分からず仕舞いだったに違いない。

体がその菱形の物体に吸い込まれ凍ったように動かなくなったダグラスは、深い眠りに落ちていくように物言わぬ体となってしまったのだから。

「ほら、だってこんな力を使えるようになったのですもの」

朗らかなアリアの声が耳をつんざくアラーム音の中で怖いほど際立つ。

慈愛に満ちた眼差しが、メイとマイに向けられた。

◇　◇　◇

一方、どうにか地下の階段を抜けたティファ達は今度は最奥を目指して歩いていた。

元々ティファは大聖堂に詳しいので苦労などしないが、気にかかる事がある。

「何だ……？」

「今の、一体誰が」

誰もいない気配の中にちらちらと隠れては消える魔力の波動。これは一体誰なのか。

イオとアレイズは立ち止まり、その波動の発信源を探そうと目を閉じる。

ティファも同じように目を閉じてみた。

だが、その波動はすぐに収まりこちらにその存在を悟らせようとはしない。

包まれるような暖かさの後にくる、ぞっとする程の冷たさ。そんな曖昧な感覚を不快に感じ、ティファは思わずといった風に漏らした。

「何、これ……」

両腕で自分の体を抱きしめる。全身を舐める冷たさは不快感と恐怖を綯い交ぜにしてティファに絡みつくようだった。清廉な大聖堂の空気にはひどく不似合な、これこそアラームが作動してもおかしくなさそうな邪悪さが漂っている。

この大聖堂で、何かが起こっているのは間違いようだ。

「急ぎましょう」

ティファは一度きつく目を閉じた後で毅然と言い放つ。

「二人にも何か起きてるかもしれない。急いでメイとマイを見つけるわよ」

アラームの原因は十中八九ダグラスだ。だとすると一緒にいるは

ずのメイとマイも不審者扱いされているかもしれない。ティファは足早に歩きながらアラーム音に注意しつつ先を急いだ。纏わり付く不快感が次第に濃くなっていくが、ティファは鬱陶しげに髪を掻き上げる程度に留め、立ち止まるのはやめた。

アレイズとイオがティファに続く。

唯一感じ取れる二人の魔力と気配を救いに、ただ歩く。

そうしてしばらく突き進んだ頃。ティファはあるものを見つけてぴたりと足を止めた。

「どうした？」

「いや、あれ」

あれほど突き進んでいたティファが急に立ち止まったので不審に思ったのだろう。アレイズが怪訝そうに問う。なので少し困ったように苦笑しながら、自分の目の前を指差してみせた。

「何だ……。あ」

「って、何でここにあいつがいるのさ」

指差した方向をじっと見つめているティファに、イオとアレイズは嘆息しながら呟いた。

というのも、そこには――。

「何をしているのですか？」

「ノルマン様こそ、このような場所までどうなされたのですか？」

穏やかな顔をした青年が慈しむような視線をティファに注ぎ、静かに笑んでいたからだ。最高位のローブを纏う青年は、若返ってはいるもののノルマン・レイニウムに他ならない。つい一日前にビビッド大陸で再会したばかりの教皇。彼の眼差しにティファは困ったような声をそのままに、とりあえず言い返してみた。

すっかり見違えてしまったとはいえ教皇に対する口の聞き方とは思えないが、勝気そうなダークブルーの瞳は不安気に揺れており、到底普段通りに言い返したというわけでもないのだ。むしろ気迫負けしないように無理矢理勇気を奮い起こしたという方が正しい。

魔力の乱れなど関係なしにあっさり大聖堂に帰るなど、神ですら

できない芸当だ。あっさりとそれを果たして目の前にいる彼に何と言っていいか分からなかった。だからただ問うてみた。問うて、相手の出方を待つ。今はこれしかできそうなことがない。

（どうしよう。さすがにここでノルマン様と戦うわけにはいかないし……）

ノルマンに会うのが目的だったが、私室で会えなければ意味がないのだ。メイやマイと合流するのも目的の一つなのだから。

胸中で呟き一瞬だけアレイズに視線を向けると、彼は驚愕の表情を浮かべたまま固まっている。唐突の再会に驚いているのではない。先ほどまでちらついていた濃密な気配が誰から放たれているか分かったせいだろう。それにしてはいささか情けないが。

とても神とは思えないその姿に肩を落としそうになる。

それをフォローするようにイオが辛辣に言い放った。

「あんたに会いに来たんだよ。僕達が同胞を殺されて平気でいると思っていたのかい？」

神殺し。厳密には神喰らい。

禁忌に手を触れた人間に裁きを下すため来たのだと殺気立つイオに、アレイズもようやく我に返ったように続ける。

「勝手に同胞にされたら困るが、まぁそういうことだ。それに貴様はレイナの居場所も掴んでいるんだろう？」

漆黒の双眸がノルマンをひたと見据える。

二人の神々の言葉に、すっかり若返ってしまったその表情がそれでも前に会った時と同じ貫禄を現すように笑みを形作った。やれやれと肩を竦める。

「それは困りましたね。私はまだ何も言うつもりはありませんよ」

「それならば何故、今ここにいらっしゃるのですか？」

首を振りつつ言うノルマンに、ティファが不思議そうに尋ねる。

何も言う気がないなら目の前に現れないのが一番早い話だ。私室を訪ねる気ではいたが、その時も行方を眩ませていれば自分達と話をすることもなかった。では何故、彼はこうしてティファ達の前に

現れたのか。
「それはですね」
ノルマンの穏やかな笑みがいたずらっぽいそれに変わる。煌く双眸がティファを捉えた。
「ティファニエンド。貴女には用があるからです」
言うとノルマンが同時にすっと手の平を前に突き出す。
「――ティファ、離れてっ！」
何をするつもりなのか、恐らくイオにもアレイズにも分からなかっただろう。けれども二人は本能的とも言える素早さでティファの前に立ち、どんな攻撃をしても守れるように結界を張った。
それを見て、ノルマンが口の端を微かに吊り上げた。
二人の神を憐れむように、自分の勝利を確信しているように。
（一体何をするつもりなの？）
緊張を漲らせる二人には見えないような本当にささやかな変化。それを見逃さず心の中で呟いた途端、魔力の流れがガラリと変わった。渦を巻くそれは、結界をも突き破らんと顎を開いて二人の神へと襲いかかる。
「――どいてっ！」
何が現れるか、そんなものはティファにも分からない。指輪を通してしか魔力を上手く感知できないのだ。それがどのような効果をもたらす魔力であるかなどまるで分かりはしない。
だが、ノルマンはティファだけは決して害せないはずなのだ。
その彼がこれだけの魔力をぶつけるなら、それはイオとアレイズを攻撃するためのものだろう。
ティファは自分の盾になろうとしている二人の神を思い切り左右に突き飛ばした。そうしてたたらを踏んでいる二人がもう自分の前に出てこれないように一歩足を踏み込んでから宣言する。
「貴方の好きにはさせません！」
ノルマンがしまったと顔を引き攣らせるのを見据え、虚勢混じりの声で言い放ち笑ってみせた。

光が全身を包み込む。
「「ティファ！」」
最後に聞こえてきた二人の声に、ちょっと悪いことをしたなと思いながらも瞬きを数度繰り返す。
痛みは感じない。苦しみも熱も何も自分を傷めつけない。
「え……？」
しかし、代わりにそこには何も存在しなかった。
光が消えていく。現れたその場所は紛れもなくレイニウム大聖堂の通路で、数瞬前までティファがノルマンと対峙していた場所だ。だというのに、そこにはノルマンはおろかイオもアレイズもいなかった。
何が起こったのか分からず辺りを見渡していると、あれだけ強い光を目にしたのに目も光に潰されていないのに気付いた。
（人がいなくなったこと以外、何も変わってはない）
そう考えたティファは、ふととても大切なものがないことに気がついた。
左手を顔の前に出し、それを確認する。
「違う」
目を見開き呟く。凝視する先には、いつも嵌められていたはずの指輪が消えていた。
もう一度よく周囲を観察してみる。目を凝らして壁の一つ一つにも目を光らせた。
すると凝視しなければ分からない程の違いで、先程と少しだけ光景が変わっていることに気付かされた。あったはずのものがなかったり、なかったはずのものが存在していたり。場所が同じだという気持ちに変わりなどないが、どこかが違う。
だがそんな少しでもよく見れば分かる事に気付けなかったのは、ティファがこの光景を知っていたからだ。むしろこちらの方が慣れ親しんでいたと言える。
「ここは過去？」

この通路の光景はアレイズと契約する前、十七歳の誕生日を迎える少し前にも見たことがあった。
（だから契約の指輪がないのね。ノルマン様はイオとアレイズをここに連れてくるつもりだったんだわ）
はたしてそんな魔術があるのか、知識のないティファには分からないが事実が突きつけられている以上認めるしかない。
「時間の流れから切り離されたってわけね。……しかも、昔に戻されちゃったし」
呟き声をそのまま今の状況を頭に認識させるための材料にすると、ティファは先程ノルマンがいた場所よりも奥にある階段を見やる。
（ここが過去なら、ノルマン様もきっと最奥にいらっしゃるはずだわ）
普段からそこにいたのだから間違いない。巡礼者相手に説教中でなければいいのだが。
ティファはスカイブルーの髪をさらりとかきあげ、深々と溜息をついた。
「次から次へと問題がやってくるものなのね。どこでどう狂ったんだろう、本当」
自分はただ好きになった神と一緒に旅ができれば十分なのに、どうしてそれだけのことが叶わないのか。そう考え、思うまいとしていた世界への恨み言が溢れ出しそうになった。

◇　◇　◇

「「ティファ！」」
必死に腕を伸ばし、光に包まれたティファの姿を捉えようとするアレイズの指先から彼女の身体が掻き消える。絶望に塗りつぶされた眼差しで消える光を凝視し、アレイズはそのまま返す刀でノルマンへの攻撃を開始していた。
細身の剣を二刀持ち足の力を強く使いながらくるりと回転する。

反動を用い重い一撃を放つアレイズの剣戟の間で、イオが氷柱を放ちノルマンの動きを封じようとしていた。
　強烈な冷気が辺りを支配する。氷による冷たさだけではなく、アレイズとイオの凍てつく殺気が周囲を圧倒していた。だが、その攻撃をことごとくノルマンはかわしていく。更には余裕があるのか浪々とした声で囁いた。子供に御伽話を聞かせるかのような柔らかな、おっとりとした声が忌々しくも耳朶を打つ。
「本当は貴方達を連れて行くつもりだったのですけどね。ティファニエンドがあそこで前に出てくるのは私にも予知できなかった」
　ここまでは完璧だったのにと苦笑するノルマンにアレイズが吠えた。
「ティファをどこにやった！」
　焦りを隠しもしない態度にノルマンが微笑する。
「幻楼空間ですよ」
「幻楼、空間？」
「人を時の流れから引き剥がし過去へと誘う場所です。まぁ、彼女の場合どの道私に会うのでしょうからそれほど問題はないのかもしれません。ですが――」
　過去の自分とやらを信用しているのか、幾分かほっとしたような顔をしたノルマンはしかしすぐに怖いほどの微笑を浮かべて言い放った。全身に絡みつくこの冷たさは、アレイズとイオが持つものと同じ――殺意だ。
「貴方がたは邪魔だ。ティファニエンドの手前殺しはしませんが……、せいぜい無限回廊の中で彷徨っていなさい」
　剣戟が、氷柱がとめどなく放たれる中でノルマンは密やかに笑いながら胸元に手を置いて軽く一礼をした。慇懃無礼なまでの滑らかな仕草を合図に、二人の身体が固まる。
「な、に。ど、して……！」
　イオが苦しげに呻く。アレイズも息さえ満足にできないというように喘いだ。

苦しむ二人の神を満足気に一瞥し、ノルマンは腰を折ったまま続けた。
「神でも人でも世界でもない私達だからこそできることもあるのですよ。もっとも、ティファニエンドがこれから見る私達はまだここまで異形でありませんでしたけれどね」
「何を言って――」
誰かの動きに、ましてや神の動きに干渉などできるはずがない。
麻痺を司るような武器を扱ったわけでも、魔術を行使したわけでもない。だというのに二人の体は確かに固まり、イオとアレイズは攻撃の態勢を取ったまま身動き一つ取れなくなっていた。
冷たい殺意が膨れ上がる。
優しいノルマンの笑みが背筋に死の予感を駆け上らせた。
引きつる頬を撫でる生温い風が流れる冷や汗を拭う。
そうしてたっぷりの間を置いて、ノルマンが顔を上げた。唇が微かに動く。
「さようなら」
一方的に別れの言葉。
不可解なその言葉を告げた後、彼は両腕を広げ謳うようにスペルを唱えた。

第六十四話

アレイズが目覚めたのは何もない空間だった。
広がる闇が、妙に懐かしいと思わされるようなそんな場所でアレイズはぼんやりと上方を見上げる。
「ここは……」
呟くと、低い声が染み渡るように反響して暗闇の中に溶けていった。自らがほとんど全身黒ずくめ状態なので、何が闇で何が自分なのかが理解できず少し混乱する。だが、次第に夜目が利いてきて辺りが見渡せるようになると、そこがただの暗闇ではないことが分かった。
（地下か。しかし何故）
その場所は、先程ティファやイオと歩いた地下だった。長く、永遠に続いていてもおかしくないとさえ言えるような長さの螺旋階段が続いている。上へ上へと続いていく階段の一番下にアレイズは立っていた。だが、どうして自分がそんな場所にいるのかは皆目検討もつかない。
「そうか……」
自分は確かノルマンに。
あの時一方的に別れを告げたノルマンが唱えたスペル。その手の平から生み出された光に飲み込まれ、アレイズとイオはどこかへと転移させられたのだった。
「あの男」
憎々しげな声を漏らし地上を睨めつける。苦々しく、憎悪が混じったようなその声をバネにして歩き出そうとすると、ふと何かに足を引っ張られるような感覚を覚えた。
「？」
何事かと勢いよく振り返ると、そこには粘々とした粘着質の何かがあった。

決してその感触を服や肌に残すことはない、だがひたすら不快にさせられる何か。

見た目はただの光でしかないのに、それでもそれはアレイズを動かさないように固定されていた。

（何なんだ、これは……）

光自体に粘着質も何もないはずだ。だというのにこれは一体何だ。常ならば体にぶつかると反射する光に纏わりつかれ、不快感からか微かに戦慄する。離さない。そんな言葉が聞こえてきそうで、焦燥感がこみ上げる。

「捕まってたまるか」

自分はティファを助けに行きたいのだ。一人過去に飛ばされた彼女の元に駆けつけ、イオとも合流しなければならない。こんな場所で立ち止まっている場合ではないのだ。

苛立ちと共に、焦るように光に魔力をぶつける。さながらそれは震える手でボタンを止めようとするようなぎこちなさで、アレイズは自分がこんなに焦っている事を不思議に思いながらも感情を抑えきれなかった。

早く立ち去らなければならない。そんな感情に支配される。

だが光は所詮光だ。元々の性質もあり、何をぶつけた所で効果はなかった。

闇であり火であり水であり風であり。

さまざまな効果をもたらす波動をぶつけてもやはり効果はない。

「くそっ！」

知らず、悪態が口をついて出てきてから、アレイズは観念したようにどっかりと階段の一番下の段に腰を下ろした。抵抗がないのを悟ったのか光が消えて行く。しかしかといって再び立ち上がると、また光が絡むように纏わりついた。

まるで、誰かの監視の下にいるような感じだ。

しかもこの監視、どうあってもアレイズを逃がす気がないらしい。

（くそ……っ）

心の中で先程と同じ悪態をつき、アレイズは闇に溶け込むような自分の姿に目を落とす。そうして落ち着こうとする意思を込めて固く目を閉じた。

（これが無限回廊の所以、か？）

光に包まれる直前ノルマンが言っていたのは幻楼空間と無限回廊。前者は時の流れから対象者を引き剥がし過去へ誘うものだと聞いたが、どうやら後者は身動きが取れない上に、名前の通りだとすると同じ場所をループする可能性がある空間のようだ。ぐるぐると同じ場所しか彷徨えないのは、動くだけ体力の無駄にも繋がる。そう推測し、アレイズは深く息を吐いた。

だが、だからといって手をこまねいて見ているわけにもいかない。このまま自分がじっとしている間にもティファは一人で過去を彷徨っているのだ。それに、彼女がどこにいるにせよきっとノルマンを探すだろう。七年以上前であれば話は変わってくるかもしれないが、それほど遠い過去でなければティファは大聖堂にいるはずなのだ。そしてノルマン自身もティファに用があると言っていた。

「ティファ」

このままではティファが危ない。

よもや傷つけられる事はないだろうが、ノルマンの目的が見えない以上楽観視もできなかった。焦燥感の源はそれだ。アレイズは焦り、そのまま駆け出したくなる気持ちを抑えて辺りを見回した。

「ティファ……」

思わず漏れてしまった声に苦笑しながら表情を引き締める。気を抜くとすぐに呼んでしまう名前は、自分でも気付かないうちに彼女の存在が大きくなりすぎた証だ。しかしそれを表に出すのは照れくさく、隠すようにさっと表情が変わった。……もっとも、この感情を隠さなければならない相手など今はどこにいないのだが。

心中でそっと溜息をつき、ひんやりとした石造りの階段に手を触れる。すると、今まで思い出そうともしなかった事を思い出してアレイズははっと息を飲み立ち上がった。瞬間、光が足にまとわりつ

く。だがアレイズはそれ以上動く気などなく、ただ呆然としたまま呟くのみだった。

「まずいな。イオに先を越されたら……あの馬鹿、何しでかすか分からん」

この期に及んでまだそんなことを考えるのもあほらしいが、アレイズは至って真剣だった。結局イオがティファに手を出さないかの方がノルマンより心配なのだ。

そもそもノルマンはティファを傷つけない。彼女には世界を殺す大役を押し付ける気でいるのだろうし、その役割を果たすまでは決して傷つけてはならないはずだからだ。大体攻撃などされようものなら、ティファは恩人であろうと何だろうと容赦なく切り捨てるだろう。その上、使う力が半端じゃない。いくらノルマンといえどもただではすまないはずだ。

これがイオとなると話は変わってくる。

ティファはイオを敵と認識しないし、イオもティファを傷つけない。だがアレイズからすればノルマンと同様かそれ以上に危険であることは間違いなかった。

「あの男に指一本触れさせるか」

妙な闘志を湧かせて、アレイズは拳を握り締めた。

しかし、その闘志の裏側で違うと冷静に指摘する自分もいる。

もしイオが先にティファを見つけても、彼はもうこれ見よがしに彼女を抱きしめたりしないのではないかと。無論アレイズへの嫌がらせの為ならイオは何だってやるだろうが、ティファを関わらせる事だけはないような気がした。

あの時、草原のテント前で自分を送り出したイオの姿を思い出す。彼は恋敵というよりもむしろ兄のような父親のような顔でティファの元へアレイズを放り出したのだ。自分よりも長い間見守り続けた少女を、彼は別の神の手に委ねた。どこかさっぱりとした顔で。

それにメイのこともある。

本人は気付いていないらしいが、イオが立つ場所がさりげなくメ

イの隣であるのを彼はいつになったら悟るのだろうか。ティファでさえ最近気付いたようだったというのに。あの、いつもティファにべったりくっついて離れないイオがだ。最初イオがメイの隣に並んだ時、アレイズは思わず目を剥いたものだ。

そう、だからイオはティファに手を出さないだろう。

分かってはいるのだ。分かってはいるのだが……万一何かあっても困る。

そう考え急いでティファの元に行きたいのだが。

「これを何とかしないと無理だな」

加えて、このループ状態から抜け出す策を練らなくてはならない。単純に空間転移をするのもありだが、それが許されているのかは分からない。だからこそ慎重に行く必要があった。

もしも罠であるとすれば、ノルマンが提示した仕掛けでとんでもない場所に飛ばされる恐れもある。さすがに溶岩の中であったり針山の上に飛ばされるわけにもいかないので、アレイズはしばし沈黙し。

「どうしたものかな」

数瞬後途方に暮れた。神と呼ばれる身ではあるが、無限回廊などというふざけた名前の場所に放り込まれた経験はないのだ。

（意志の力は世界の理を崩す、とは言うものの。理が崩せる程の意志の持ち主など、ティファかマイぐらいのものだぞ）

請い願うだけでは足りないのだ。全てを打ち壊す力なくして理は崩せない。

自分にそれほどの意志の力があるとも思えず、アレイズは途方に暮れたまま頭上を見上げる。すると何か自分以外の気配を前方に感じ、アレイズは外套の下に隠し持っていた短刀を手に厳しい視線で気配を射抜いた。

相変わらず光に足を取られている姿が情けないと言えなくもないが、それでもいつ攻撃が来てもいいような態勢を取る。そうして気配が姿を現すのを待つと、前方から静かな影がゆらりと揺らめいて

アレイズに近づいた。
それは、普段ティファを見慣れているせいでひどく眩しく見えるほどの赤を秘めた影であった。
そう、言うなれば緋色という言葉がよく似合うような。黄昏の空を引き連れているような――。
な、と声が漏れる。驚愕に答えるように気配がくすりと笑んだ。
「ジュード……。やっと逢えた」
淡い光を纏ってアレイズの前に立っていたのは、緋色を持つ少女だった。あの時、ティファの体を奪いとってビビッドの草原を荒らした張本人が何故ここに。
一瞬偽物かと疑った。だが柔らかい笑顔も伸ばされた指の先が頬に触れてくる温かみも、確かにずっと昔アレイズが最後に触れた世界そのものであった。
「レイナ」
掠れた声は、つい最近憎悪を向けていた相手に言う言葉とは縁の遠い苦しげな声だ。
（本物のレイナだ）
会いたかった、何を犠牲にしても会いたいと願った少女の姿がここにある。
世界という肩書きを常に背負っている彼女は、今はもうティファとは全く別の顔をして、正真正銘レイナ本人としてアレイズと相対している。
その事実を認めた瞬間、アレイズは衝動的に手を伸ばし彼女を抱きしめていた。

◇　◇　◇

ノルマンの放つ光に包まれたイオも、その頃別の場所に飛ばされていた。
「何、これ」

辺りは真っ赤に染まっており、けたたましいアラーム音が鳴り響いている。部屋は壁も床も全て切り刻まれており、おおよそ部屋としての機能を果たしていない。一体ここがどこで誰がこんなことをしたのか一瞬では理解できず途方に暮れた。

「イオさん!?」

だが現れたイオの名を呼ぶメイの声が意識を現実へと引き戻してくれた。

「どうしてイオさんがここに?」

紅に染め上げられたツインテールも元から真紅色だったメイド服にも傷一つついていない。瞳をじっと凝視するが、メイの瞳はいつも通りのアーモンド型をした亜麻色のそれだった。

(よかった。無事だったんだ)

封印が解かれていない事にイオは自分でもおかしく思うぐらいに安堵し、綻んだ顔で答える。

「僕にもよく分からない。それよりここはどこなんだい?」

「ティファ様と私達が暮らしてた部屋だよ。今は……ちょっとこんなだけど」

メイが嘆息混じりに手で室内を指し示す。成程、確かに言われてみなければ分からないがここから見る外の景色はティファの部屋のあった位置のように思える。イオは感慨深げに「へぇ」と言い、次いで目に飛び込んできたものにぎょっとした。

「ど、どうしたんだい!?」

狼狽えながら声を掛けた相手はメイではなくマイだ。

だがマイはイオの問いには答えられず、しゃくりあげて涙をポロポロ流すのみだ。理知的で冷静さを失わない白い面には透明な涙の雫が何筋も流れている。今まで長い間ティファを見守るついでとして彼女達を見ていたイオも、ここまで大泣きしているマイを見た事がなかったせいでガツンと頭を殴られたような衝撃に見舞われた。

それどころか本当にマイなのか疑ってしまいそうになる。

マイティーナ・グラス。意志の力で世界の理と崩し、最も忠誠心

厚い神をも従え、必要ならば世界だろうと神だろうと殺して回る事を厭わないという味方にすれば心強いが敵には絶対回したくない性質の人間なのだ。その彼女が、今人目を憚らず泣いているのを見て戦慄すらする。

どうやらそれは双子の妹であるメイも同じらしく、彼女は心底困った顔をしてイオの服の裾を引っ張った。

「ねぇ、どうしよう。私じゃ姉さんを落ち着かせられないよ」

「だから、何がどうなって――」

そもそも何故彼女は泣いているのか。

（まさかティファに何かあったんじゃ）

必死に考えを巡らせた結果にイオの思考が凍りつく。だがその考えはメイの平然とした顔を見て即座に打ち消した。万一ティファに何かあったとしたら、メイとてマイと同じように泣くか怒るかしているだろう。そもこの二人ならティファが害されようものなら復讐するまで涙は流さないと決めるはずだ。だからティファではない。

……となると一体何なのか。

室内にはいくつもの空洞と、中心に菱形のクリスタルが見える。改めてそれに目を止め、イオは「ん？」と眉を顰めた。

（あのクリスタル、どこかで見たことあるような）

アラームが放つ光のせいでよく見えないが、クリスタルは中に何かを取り込んでいるように中心が暗い。一体何だろうと目を眇めた所で、漸くイオに気付いたマイが顔を上げた。

「イオ様！」

鋭い声にイオは慌てて背筋をピンと伸ばし、ぎこちなく金髪を揺らしながらマイの方を見やる。涙に濡れた亜麻色の瞳と視線が合った。今まで見たことのない弱々しい光。神を神とも思わぬ態度を貫く彼女のその脆い姿に目を見開くと、彼女は殆ど錯乱状態としか言いようのない取り乱した声で言い放った

「だ、ダグラスさんが！　ダグラスさんがアリア様に！」

「……アリア？」

聞き慣れない言葉ではあるが、イオも一応知っている。確かノルマンと行動を共にしている聖母のはずだ。だが、どうしてその聖母の名前とダグラスの名前が出るのだろうか。

（そういえば、ダグラスは？）

マイの言葉に首を巡らせると、そこには巨大な緑色の物体が一つ。先程まで見ていた菱形の物体、その中央部が黒く見えるのは一体何故だろうか。

「……まさか、ね」

軽い口調で呟く。だが震える声のせいで、自分が何を考えているのか否が応にも分かる。おかしい、言い聞かせるべき相手は自分自身であるのにうまくいかない。それにどうして自分はまるで別の誰かに聞かせるかのような響きでこんなことを言っているのだろう。事実を知らないのは自分だけのはずなのに。

アレイズやダグラスよりも高いボーイソプラノと共にアラームが鳴り止む。紅も消えて行く。

静寂が満ちた部屋はひたひたと這い寄る予感をイオの体に塗りたくった。

「ねぇ、どうしたらいいの？」

メイはそんなイオの姿から目をそらし、マイの肩を抱きつつ尋ねた。

必死で混乱を押さえこむ、健気なまでの眼差しで菱形の物体を――クリスタルを睨めつける。

「大体あれ何なの？　どうしてダグラスは出てこれないの？」

長く垂れ下がっているツインテールを小刻みに震わせながら言うメイの声は、悲しみや怒りというよりも困惑や恐怖が混ざっている。何に恐怖しているのかと問われれば彼女自身答えられないであろうが。

切り裂かれ何もかもが壊れ果てた部屋で、錯乱状態の姉を励ましながら一人耐えていたメイの肩の震えが大きくなる。一体何を見たのか、青ざめた顔が何者かへの恐怖を語っている。誰も慰めもしな

いその肩を抱いてやりたいと思ったが、結局イオは伸ばしかけた手を寸での所で止め、メイの問いに答えた。
「封印のクリスタル」
短い、簡潔な単語を搾り出す。
（実物を見たのは初めてだけど、間違いない）
封印のクリスタル。それは遥か昔、グラスの一族が作り上げた最高傑作だ。
神を閉じ込め、封印する最適の方法として編み出されたそれは、決して殺すことなく封印できるという点で、ただ殺戮ばかりを起こす者よりもずっと良心的であったかもしれない。だが、神からしてみれば自分の意識を奪われたまま眠りに就かされるなどという話事態が信じられない暴挙であった。
だから神々はグラスの一族にだけは手を出せなかった。返り討ちに合うのが分かりきっていたからだ。
たとえ、彼等がどのような行動を起こそうと神々にはそれを止める手立てがなかったのだ。もっとも、彼等は中立者として世界を巡り、レイナを脅かすような真似にはでなかったことから必要性がなかったとも言える。人間は権力や力を持てば豹変する生き物だが、グラスの一族は力を持つからこそ行動を起こさなかった。その気質は彼等の美点だったのかもしれない。
その封印のクリスタルが、今目の前にある。
（だけど、どうして聖母が封印のクリスタルを？）
イオが知っている限り、封印のクリスタルを扱えるのはグラスの一族のみだ。まして、それを使えるグラスの一族は今はメイとマイしか残っていない。となると扱える者が他にいるということになるが、イオには考えも及ばない。
「封印……？」
呆けた声でマイが呟いた。
「ダグラスさんは、封印されたんですか？」
「多分。あれが本当に封印のクリスタルであるならね」

確証はない。ただダグラスが眠ったまま目覚める気配を見せない事から、ほぼ確定だとイオは思っていた。本当に不可解な事ばかりだ。封印のクリスタルを操る術者が存在することもだが、ノルマンは自分を無限回廊に送ったはずなのに何故メイ達と合流できたのかも分からない。

ともあれ、まずは目の前にいる双子とダグラスをどうにかしなければならない。

長い間生きてきた自分ですら知らないクリスタルの解除方法、それを探さない事には何も始まらない。マイの様子を見る限り、ダグラスを急いで取り戻さないといけない気がしてきたのだ。

(殺したいぐらい嫌いだったはずだけど、意外と分からないものだね)

内心で苦笑しつつ考えを巡らせる。

そうしてイオはたった一つだけとても粗雑な方法があることを思い出した。

「ねぇ」

「何?」

メイに声をかけると、何に恐怖していたのか顔を引きつらせながら彼女が答える。姉の姿同様滅多に見ることができないその姿に驚きつつも、イオは唯一自分だけが冷静でいられるのだと自分自身に言い聞かせて続けた。

「アリアはどこに行ったか分かる?」

問うと、ぶすっと唇を尖らせたメイが扉のあった方へと目を向ける。

「……知らないよ。でも、行くとしたら最奥だと思う」

「あそこにはノルマン様とアリア様の私室がありますから。きっとティファ様もそこに」

メイの言葉を引き継ぐようにマイが声を出す。狼狽していた声は幾分か落ち着き、少しは涙を拭う気力も戻ってきたようだ。正体不明のクリスタルが何であるか、名だけでも得られたのが彼女の気持

ちを落ち着かせたのかもしれない。
キッとダグラスの眠るクリスタルを睨みつけ、マイが立ち上がる。
「何をしに行かれるおつもりですか？」
封印を解く方法があるのなら私も行きますと続けながらマイはメイの横を通り過ぎた。そうしてイオの真正面まで来て、挑むようにイオの碧眼を見据える。
強すぎる意志。そんな言葉がイオの頭を過ぎる。
封印の魔術すらきかないその意志の強さをたった一度視線を交えただけで見せつけられ、イオは観念したように呟いた。その強さを持ってしてもダグラスを取り戻せなかった彼女の眼差しは、痛々しい程切実な光を宿している。
（無茶するだろうから言わないでおこうと思ってたのに）
駄目だと言っても聞かないだろう。こういう所もティファに似ている。
ひょいと肩を竦める。
「ああいうのは術者を倒せば大体解除されるものだからね」
「……アリア様を手にかけると？」
「あいにく僕はそれしか方法を知らないんだ。それに聖母と神を天秤にかけたら僕は同胞である神を取る」
きっぱりと言い放つ。
「そういうことが言いたいんじゃないんです」
するとマイは弱い声で首を振った。言い訳ではなく、本当に別の所に問題があると思わせる声にイオはおや？　と首を傾げた。どうやらイオがアリアを手にかけることに関しては何も言う気はないらしいと分かるからだ。
元とはいえ聖女に仕える侍女であるのに聖女より上位にいる聖母を手に掛ける事を厭わないマイは、そこまでしてダグラスを助けたいと考えているのか。他の誰かの命より、彼の命が優先なのだ。そう考えると知らず口元に笑みが広がる。
（きっと、このことを知ったらダグラスは喜ぶんだろうなぁ）

あまりに喜びすぎて小躍りでも始めそうだ。
それはいい。もしそんな光景を目にしたら絵にでもしてやろう。きっと数千年はそのネタで笑えるはずだ。笑いを噛み殺しダグラスの痴態を想像していると、マイが自分の頬に触れながら震える声で続けた。「そういうことじゃなくて」
「あの方は、神殺しなんです。既に神の血肉を取り込んでいます」
「――っ！？」
緩んでいた思考が、一瞬にして凍りついた。
「モーニングスターで顔を粉砕しても再生する、突いても切られても死なない存在。アリア様は仰っていました。時々、自分が何者なのか分からなくなると」
化け物だろう、イオは心中でそう呟いた。
神ですらその体を再生させる事はできない。
否、絶対にできないとは言わないが、それは人の自己回復機能と同じぐらいのものでしかない。だが今マイが言った通り、顔面粉砕されても再生するなどというのはあり得ない話だった。あったとしてもそんな存在は聞いたことがない。
突然変異の動物であるゼクスですら、ただ話ができたり高い知能を持つ程度でしかない。異能という言葉は、この世界の中ではその程度の力しか持たないのだ。死の前では誰もが平等、逃れられない。
マイの言葉に、漸くこの強い精神を持つ双子が怯える理由を察した。
神ですら恐れるような光景を人間の、それもまだ幼さの残る女性が見たのだ。彼女達の感じた恐怖がいかほどのものか測り知ることはできない。加えてダグラスが封印のクリスタルに取り込まれてしまったのだ、取り乱さぬわけがない。
だがしかし、自分達には悩んでいる暇も与えられてはいなかった。
「それでも行かないと」
どれだけの化物が相手でも、引くことは許されない。
「このまま放っておいたらティファと合流できないし、それに怒ら

れそうだしね」

　困っている人を放置して出て行ったりしようものなら、あの勝気なダークブルーの瞳に睨まれながらさぞかし長いお説教を食らってしまうことだろう。相手がダグラスだから多少手加減するかもしれないが、マイが泣いたのを知ったら烈火の如く怒り出すに違いない。イオとすれば彼女と話ができれば何でもいいのだが、流石に怒らせたくはなかった。

　ティファの姿を思い描く。すると温かい気持ちが広がって、イオを満たしていくようだった。ただそれはアレイズが抱いていた恋情とはどこか違う、本当に柔らかく温かさだけの残る優しい気持ちだったのだが。

（どうしたんだろうね、僕は）

　胸中で呟き、苦笑を漏らしながらマイの肩を軽く叩く。いつもモーニングスターを振り回している強さなどそこにはなく、ただ華奢な感覚だけが手の平に伝わってきて、あぁ彼女もティファと同じ女の子だったんだなと今更ながら実感したイオは、何となくだがダグラスがマイを好きになった理由が分かった気がした。恐らくダグラスは、マイの強さだけを見ているわけではないのだ。そして、だからこそ内に秘めた強さに惹かれたのかもしれない。

　感嘆しつつ、座り込んだままのメイに視線を落とす。

　同時に彼女にも同じような感覚を覚えた。触れてはいないのに、何故だかとても華奢に見えた。

　姉ほど強い意志は感じられないものの、それでも姉の弱さをカバーしようとする強さを持ったグラスの末裔。

　彼女は泣き出しそうなその顔を毅然と上げ、決して泣かないようにしていた。その強い眼差しは、プラクトで鎌鼬に全身を切り刻まれてもティファを守り通したあの時に似ている。

　あの日、メイは全ての記憶を取り戻したはずなのだ。

　狂人とも獣とも呼ばれる自分の立場を知り、それを姉に隠している風だったのを覚えている。あの時はイオもメイが記憶を再び失っ

たのだと思っていたが、そんな楽観的な考えは獣が現れても一人耐えていた彼女の姿を見ていたら吹き飛んだ。

グラスが、彼女の両親がしたこともあの様子なら覚えているだろう。自分の魂に何かが潜んでいることも知っているだろう。メイよりもマイの方が強い精神力と魔力を持っている事も、その影に隠れるように秘術を与えられたことも全て。

だが傷ついているはずの魂は細かな傷をつけながらも、より輝きを増していた。魂の選定者であるイオには、それがよく分かった。

旅に出てから日増しにメイは魂の輝きを強めている。元々眩いまでに輝いていたティファや闇を抱えていくマイとは違い、彼女の魂は実に人間らしく成長していた。その魂に向けて、立ち上がろうとする姿にイオは何故か手を差し出していた。

「イオさん？」

呆けた亜麻色の瞳がイオを見上げる。

問う声色に既にイオと行く気でいたマイも自分達を振り返り、ちょっと驚いた顔をした。自分から行くと言い出したマイはともかくとして、イオが自らメイに手を差し伸べるとは思っていなかったのかもしれない。イオもそれには同意だったが、誘う声はやけにしっかりしていた。

「行こう。不本意かもしれないけど、ダグラスを助けにさ」

差し伸べた手をメイは取るべきか逡巡しているようだった。

ほっそりとした指先は兎のイオを何度投げ飛ばしたか知れないし、口を開けば役立たずだの何だの散々言っている。それを少しだけ後悔しているような申し訳なく思っているような表情に、小さく笑った。その笑顔を見上げ、メイは僅かに口元を緩めて自身も手を伸ばした。

「――うん」

予想以上に華奢な指先が手の平に触れる。それをしっかりと握りこんで、イオはメイを立ち上がらせた。

（そういえばティファ以外の人にこんなことしたの初めてかも）

抱え起こすだの助け起こすだのその程度なら勿論あるが、こんな風に自分から一緒に行こうと手を伸ばした事はなかった気がする。本当に、どうしてこんな気持になったのか自分でも分からない。

困惑と共にメイを見下ろす。隣に並ぶ横顔は憔悴しており、ひどく痛々しく見えた。その姿がいつも愛おしいと感じていた少女と被り、一瞬抱きしめたい衝動に駆られるがすぐに彼は頭を振ってその考えを否定した。

（この子はティファじゃない）

そうだ、そんなことは当たり前なのだ。彼女はメイであってティファじゃない。なのに何だ。

だが、違うと分かれば分かるほど衝動がいや増す。

本当に何なんだと胸中で毒づく。そうして早足に扉のあった方向に足を向け、二人には顔を見られないようにして「行こう」と声を掛けた。

「案内役は頼むよ。僕ノルマンとアリアの私室までは行くことなかったからさ」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

そうして何となく落ち着かない気持ちを抱えて歩き出すイオをマイが慌てて呼び止めた。振り返ると彼女は少し足早に歩いてダグラスが眠るクリスタルに触れた。

「これ、どうしましょうか」

ちらと困り果てた顔で問われる。

「そっか、封印のクリスタルをこのまま放置するのも考えものだよね」

少なくとも大聖堂内に置いておくのは危険極まりない。だが、だからといって長身のダグラスが入りきるような大きなクリスタルを持って歩くことなど不可能である。浮遊させるにしても邪魔すぎる。イオはこめかみに人差し指を当てて考え込み、それからマイの隣に並んでクリスタルをじっと見上げた。

くっきりと見えるようになったクリスタルの内部では、長い銀髪

がたゆたうように揺れている。それが無念だと言っているようで、イオはやはりこのまま放置してはいけないだろうと感じた。でも、それならどうすればいいか。

（大体、君が大きすぎるのがいけないんだよ）

心の中で悪態をつく。するとその拍子に懐かしいスペルを思い出し「あぁ、そうだ」と手を打った。

「いい方法がある」

「……何をする御積りですか？」

「まぁ、ちょっと見てて」

懐かしい呪文を頭の中で思い描きながら、マイを少し下がらせてクリスタルにぺたりと触れる。ひんやりとした感触が両手の平一杯に感じられる。その冷たさで思考を冷やしながら、イオは小さく息を吸い込んだ。

指先で魔方陣を描く。透明で全く見えないその形を頭の中だけで理解しながらスペルを唱えた。

遥か昔、ウサギの肉体で活動するために神の紋章入りの首輪を作った事がある。その際に編み出した魔術は封印の上に封印を重ね、その縛り付けによって物体の大きさを変えてしまうという代物だった。

何かの加護と共に得られる封印にイオは朗々と言葉を紡ぐ。

加護など、そんなものは自分が与えればいい。

「レイニウムの名の下に、イオンが命じる」

クリスタルを取り巻く空気が圧縮される。部屋を濃厚な魔力が漂うと再びアラーム音が作動したが、それを無視して空気が後ろに引っ張られるような感覚に耐えた。

そうしてやがて、その感覚になれた頃。

「！？」

「ダグラスさんっ！？」

クリスタルが消え去る様にマイが声を上げる。

「大丈夫。ちょっと縮めただけだから」

キィィンッという甲高い音と共に、小さな緑の欠片が浮かび上がる。それが先程のクリスタルだと理解するのに、双子はイオの言葉を聞いてから更に数秒を要した。それほどに、彼女達には縁の遠い魔術であったのだ。当然とも言えるが。

「こんなことが出来るんですね……」

「いざという時には弱いのに」

「心に刺さるから、そういうことは言わないでほしいんだけど」

メイの言葉に憮然とした表情を浮かべたイオは、すぐに気を取り直して部屋のドアへと向かった。

「さぁ、行こうか」

封印のクリスタルをポケットに納めながら。

第六十五話

視界が全て緑色に染められている。
そうどこか他人事みたいに考えながら、ダグラスは思案した。
（さっきのあれは何だったんだ……？　どうして俺は動けない？）
動けないのに、目蓋を閉じているのに何故か視界は鮮明にダグラスに外の景色を伝えた。透明感のあるクリスタルの中から外を覗き込んでみれば、自分の契約者が微かにあどけなさの残る顔を涙で濡らしているのが見えて、ダグラスは必死で動こうとする。
（泣き顔など――親の敵である俺を見た時ですら、こんな顔をしたことはなかったはずだ。なのに何故泣いているんだ、マイティーナ）
動かない身体を他人事のように眺めながら、ダグラスはそれだけはきちんと自分のこととして捉えていた。
答えなどちょっと考えるまでもなく分かる。
（く……っ）
自分が動けないせいで彼女が泣いているんだろう事に気付けぬ程鈍くはない。理由は分からないが。
ダグラスはやはり無駄だといえような足掻きを続け、泣いている契約者に腕を伸ばそうとする。大丈夫だ、もう平気なんだ。泣く必要などないんだと伝えてやりたかった。
マイティーナ。名前を動かない口の代わりに心の中で彼女の名を呼ぶ。
囁くように叫ぶように、何度も何度も。
出逢った時からひどく自分の事を嫌っていた、ダグラスからすればまだ少女とも言える人間の女。その彼女が自分の為に泣いているのだと認めるたびに心が疼き、落ち着かなくなった。
一度は彼女の親を殺して泣かせてしまった自分が抱くにはあまりに不可解な感情とも言えるだろう。
憎悪も殺意も、マイティーナの持つ負の感情の殆どはダグラスが

与え生み出したものだ。その自分が、彼女の泣き顔には滅法弱いとは。目蓋を閉じていても身体が眠りに就いていても構わず手を伸ばし頭を撫でてやりたくなる程、嬉しくも情けなくもなる。

（もう二度と泣かせるつもりなどなかった）

なのに、また泣かせる羽目になるのかと胸中で舌打ちしていると、自分がひどく弱い存在に思えてきてダグラスは小さく悪態を洩らした。人間の小娘一人の涙でここまで心が揺さぶられるなど思いもしなかったのだ。出会った時は殺す気でいたような些細な存在だったはずだというのに。

異常なぐらいに意志の強い、神も世界の理も従える少女。

だがダグラスはマイが両親を失った記憶を手繰り寄せる時いつも苦しそうにするのを知っている。主であるティファを案じる時、いかに心もとなげな顔をするかも知っている。敵を屠った後で悔いるべきか逡巡している様子も、しっかり見ているのだ。そしてこれは恐らく本人ですら気付いていないだろうが、ダグラスを殺すと口にする時の縋るような必死さも。

マイはティファを守り通し、ダグラスを殺すという目的で己の心を支えている。親の敵と共に行くというのはそういうことなのだと、彼女の姿を見ていて初めて知った。

その脆さを知った上でダグラスはより一層マイを守ると決めたのだ。脆さ故に強くなり、深淵に落ちて行く彼女についていこうと。

だというのに、これは一体どうしたことか。

マイは自分の為に泣いている。今も、メイがどれだけ慰めても聞き入れず幼子のようにしゃくりあげて自分を呼んでいる。言葉にはしていないが、帰って来いと願われていた。今まで一度だって本心から願われなかったのに、いざ願われた時真っ先に傍に行けないのが歯痒い。

ダグラスは自分のせいで泣くマイを見ていられず、ふいと銀の視線をそらそうと試みる。その時横からくすくすと笑う声が響いた。

「どう？　愛する人を苦しめている感覚はなかなかに辛いものでし

ょう？」

（……っ！？）

ひどく懐かしい声に目を剥く。

（部屋に現れたのか？　いや、違うな。マイティーナもメイティーナも全く気付いた様子がない。それにこれは）

「私は貴方の傍にいますよ、ダグラス。ちゃんと封印のクリスタルの中に思念を飛ばしているんです。貴方の大事な人には傷一つつけないから安心して眠りなさい」

心を読んで語りかけてくる声は楽しげにふわふわとダグラスの耳朶を打つ。

姿は見えない。だがこの声は紛れもなくレイナだった。

（レイナ……）

「貴方も誰かを大事に想う気持ちがあるんですね。よろしければそれをジュードに伝えてくださらない？　きっと驚くわ」

軽い口調は彼女が上機嫌な証だ。ダグラスはレイナと何度も言葉を交わし、その言葉の特徴も雰囲気も全て掴んでいた。その自分が確信するのだ、彼女は紛れもなくレイナだと。誰かの身体を乗っ取っているわけではない。本物の思念がダグラスに語りかけているのだ。

あり得ない。胸中で漏らしそうになり、慌てて言葉を引っ込める。この世界の中で起こる全ての事で、ことレイナに関する話ならあり得ない事などどこにもないのだと知っていたからだ。どれだけ遠い場所であろうと狭い場所であろうと、人間や神が到達できない場所であろうと彼女なら、レイナなら至ることが可能だ。彼女はこの世界の全てを腕に抱いているのだから。

頭の中に残っているかつての世界の柔らかい声も、微笑した時の笑い声もそして頭に強く残る緋のイメージも、何もかもが自分が世界の意思だと告げるように軽やかにダグラスの思考を巡る。だがそれもそう長い時間の話ではなかった。

「さて、そろそろ私は行かなくては。ジュードが待っているわ。…

…悪いけれど、貴方はまだ暫くそうしていてくださいね」
神でさえ簡単に会えない世界の意思は、最後にそう言い残して思考をかき消した。同時にダグラスの思考もゆっくりと閉じていく。
遠く、耳鳴りのようにマイの泣き声を聞きながら。

◇　◇　◇

歩けど歩けど、ダークブルーの双眸に映る物は以前見ていたものと全く変わらない。
「退屈ね」
思わずあくびでも洩らしたくなる衝動をこらえながら、ティファは確実な足取りで大聖堂の最奥、ノルマンとアリアの私室に向かっていた。皆の消息を確かめるのに一番確実な道を選ぶべく、過去のノルマンに直談判をするためだ。
（何の話をしてるか分からないって顔をされそうだけど、ノルマン様の術なんだから過去でも未来でも解呪ができるはずだし）
長い、長すぎる通路を歩いていくとやはり昔と変わることなく入り込んでくる日の光が少し強くなったのを感じる。時間があまりに過ぎてしまったせいだろう。日が高く、とっくに太陽が空の天辺に辿り着いてしまったようだ。ティファは次第に濃さを増していく影を見つめながら、それでも歩みを止めない。ここが過去であろうとどこであろうと今は進むしかないのだと証明するように。
「皆、無事だといいけど」
歩きながら、退屈しのぎに色々な事を考える。
まず、ノルマンに会ったら何て言えばいいのかであるとか。過去にいるんだから、過去の自分や双子に会うかもしれないとか。何より、誰もいないこの状況を本当に切り抜けることができるのかとか。アレイズとイオは喧嘩していないか、あぁそうだメイとダグラスは仲良くやっているだろうかとか。幸い考える事は山のようにあったので、それだけは退屈しなかった。もっとも、最後の辺りはかなり

不安になってしまったせいで、仲間の安否を気遣う方向になってしまっていたが。

元々空間転移で大聖堂に来た時からバラバラだった面子だ。

初めから最悪の状態になっているのだから、これ以上悪いことは起こらないだろう。そうティファは不安になる気持ちを必死に押さえ込もうとするが、なかなか上手くいかなかった。いつも傍にあった翡翠の指輪がない事も不安を助長しているのかもしれない。アレイズの魔力を感じ取れず、絆が消えてしまったことが気懸りだった。過去なのだから当然と言えば当然だが、やはり不安は拭えない。

通路の中心に立ち止まり、しんと静まり返った居住区の天井を見上げる。

「……ここから始まったのね」

十七歳の誕生日、成人すると共にノルマンからの召喚があったのを思い出す。使者と共に歩いた通路を懐かしい思いで見据える。自分はあの日不思議な夢を見て寝坊をして、メイとマイが起こしてくれたのだった。フレンチトーストを食べ、剣の稽古の約束を取り付け、いつも通りの気構えでノルマンの私室を訪ねた。

（この道を歩いてノルマン様の所に行ったのよね）

そう考えると今歩いている道がひどく大切なものに思えてきて、ティファは少しだけ音を立てないようにして歩くことにした。

あの日から日常は壊れてしまった。

同時にあの日から日常が生まれたのだとティファは信じていた。地下で出会った神、アレイズと共に行く道を選んだ時から彼と共にいるのが自分の日常になったのだ。もしあの時契約が果たせなかったら自分は一生ただの聖女として生きていただけだっただろう。神をまともに信じない、そんな反抗勢力のような聖女になり地方に左遷されて穏やかに過ごして死ぬのだ。

無論それも悪くない。心穏やかで大変素敵だ。

だがそれは、自分が何者でもないただ人間だった場合だ。

ゼルやダグラスから世界の見た夢を聞かされた今、ティファはあ

の日契約を果たせなかったらそれが自分の死に直結することを知っていた。

大聖堂というシェルターを出て自分は生きる術を持たなかったのだ。きっと今頃ダグラスに殺されていたに違いない。

「ジュード」

呟くとすぐにでも現れてくれるような気がして、期待と共に真名を呼ぶ。だが名の持ち主は現れず、ティファは軽く落胆した。

しずしずと通路を進みながらなおも彼の事を考える。

会った時から、不思議な人だった。

人間臭くて、だけど光に包まれて現れた所などはどう見ても神で、かといって神に抱いていた冷酷なイメージを軽く壊してくれる程に優しかった。契約神なのだから契約者の葛藤など気にも留めないものだと思いきや、彼は自分に謝罪したのだ。そうやって誰かの為に悩み落ち込める神など、自分が見たどの本にも載っていなかった。

（そういえば、昔メイとマイに言われたんだっけ……）

『何も胸が激しくときめかなくたっていいんです。ただ、ティファ様が心から傍にいたいと思った人が好きな殿方ということになるんですよ』

『そうそう、ただ傍にいるだけで幸せになれちゃうような感じ。そういうのが恋なんだって。それでね、自分から力を抜いてその人の隣に並べたら、それがティファ様の好きな人なんだよ、きっと』

『あぁ、楽しみだわ。その御方は、一体どんな方なのかしら？』

『そう言う前に姉さんも見つけなよ。素敵な人』

『あんたに言われたくないわ』

（結局あの後、二人が喧嘩を始めちゃって大変だったのよね）

思わず顔に苦笑を浮かべながら歩いていると、思いのほか自分の歩が進んでいることに気がついてティファは足を止めた。

「ただ傍にいたい、か」

大切に大切に歩いていた道を振り返り、ティファは一度はぁっと息を吐き出してから口に出して呟く。

仲間ならたくさんいる。
傍にいてくれる人も、傍にいたい人もたくさんいる。
だが、もし誰よりも傍にいてほしいと人生で一度ぐらい言わないといけないとしたら、その相手は自分にとっては一人しかいないのだろうとティファは感じていた。
指輪で長い間繋がっていたせいか、ティファは自然な動作で左手薬指に頬をすり寄せる。だが、そこにあるべきはずの感触がなくなっていることに気がついて眉根を寄せた。あまりに当たり前にありすぎて、そこに冷たい感触が得られないのが不吉に思えた。まるで悪いことが起こってしまいそうな予感は、アレイズまでもが消えてしまったように感じられるせいだろうか。
短い間記憶を失っていたティファを、春日の光から守った時のアレイズの必死な顔を思い出す。星降る夜に酒を飲みながら空を見上げていた柔らかい顔も、何かに苦悩しては苦しんでいた辛そうな顔も。そして自分を好きだと言ってくれた時の、あの真っ直ぐな眼差しも。
心の中で思い浮かべては次々と新しい顔に切り替わっていくアレイズの表情が、ティファの頭の中でグルグルと巡っていく。指輪を失い一人ぼっちになってしまったというだけで、こんなにも心細く彼の事を思い出している自分が少し恥ずかしかったが思考は止まらない。アレイズに会いたくて、早く声を聞いて安心したかった。同時に自分は大丈夫だったと言いたかった。きっと今とても心配しているだろうから。
悪い予感の正体が掴めぬまま、困惑したり落ち着こうと無理矢理冷静さを取り繕ったり、百面相のように心の角度を変えながらティファは通路を進んでいく。その中で一つだけ忘れなかったのは、現実的な問題だ。
「剣、どこにあるのかしら」
ノルマンの私室に行くなら行くでまずは武器を調達しなければならない。

自分の魔力だけでも魔術を使うのは容易いし拳一つでも戦える自信はあるが、ノルマンの魔力を見る限り心もとない。それに何故だか、今この時だけは剣がないと駄目なのだと直感していた。

とはいえ、ここは大聖堂。そんな危ないものをそこいらに置いているわけがない。

ティファはしばらく空色の髪を左右に揺らしながら思案し、ポンと手を打った。

そうして指輪がないのなどお構いなしにあっさりとスペルを唱え始める。魔力のない者が魔術を行使すると力に飲み込まれるという話は散々授業で聞かされたが、ティファは自分が行使する魔術がそれ程危険ではないと知っていたので、関係ないと言わんばかりに両手を前に突き出した。

手の平を空にかざす。すると強度の高さを誇る細身の剣がその手の平の中に収まり、陽光に照り返され白い筋のような輝きを放った。長いスペルを唱えず、簡易のスペルで武器を練成するのはそう容易い事ではないが、急いでいるのだからと自分を誤魔化す。

不意に、以前マイがティファが魔術を使う度不安げな顔をしていたのを思い出す。それが自分自身の持つ魔力に対する不安であるとすれば、これこそが世界を倒す力の元なのだろうか。マイにはティファの力が歪に見えたのかもしれない。

複雑な気分だ。だが生まれ持ったものは今更変えようがないと、結局は気にしないことにして鼻歌交じりに剣を持ち物騒な格好で歩いた。もう二度と歩く事のない通路を、終わりの場所に向けてひた進む。そうして再び黙考した。

（私は世界を殺すために生まれてきたわけじゃない）

しかし、一度身体を奪われた時に思いきり害意を抱いてしまっていたのも事実として受け止めていた。とはいえ身体を奪われたからではなく、彼女があまりにアレイズの真名を呼んでいて腹立たしくなってしまったせいなのだが。

もしもう一度同じことがあったら、今度こそ自分は世界に何かし

てしまうのだろうか。きっかけは独占欲とはいえ、過ぎた気持ちは毒だ。その毒で持ってティファはレイナを殺そうとちらとでも考えてしまうのだろうか。

その図を想像し、ティファは微かに身を硬くした。

アレイズはレイナに会いたいと言った。けれどもティファを贄にしなければ会えないのなら別の道を考えるし、それでも駄目なら潔く諦めると。そこまで言ってくれる彼を悲しませるのだけは避けたかった。

仮に贄がなくても会えたら、その時自分は決して世界を殺してはいけないのだ。そう何度も言い聞かせる。

だが、だからといってもし世界が恋する者特有の怖いもの知らずな行動を取ったら、元々感情を抑えられないティファがどうしようもないほど腹を立てるであろうことは誰に言われるまでもなく明らかだ。自覚しているのだから間違いない。

「結局、世界に会わないのが一番いいのかしら?」

要するに嫉妬しなければいいだけの話なのだが、どうにもそれは不可能に近いと思いながらティファはそう口にする。ならばレイナとアレイズが再会している時、自分は別の場所で隠れている方がいいのではないか。自分を含めた全ての者達の為にも。

これがきっぱりはっきり相手に物を言う相手ならば問題はない。しかし、何せ相手はアレイズだ。ティファを攻撃しようものなら堂々と文句を言うだろうが、誰にも害意を表さずにただアレイズを恋い慕う気持ちだけを伝えようものなら……彼は恐らく何も言わないだろう。それだけの親しいのはティファとて理解している。世界自身アレイズをとても大切に思っているし、アレイズとてそうだ。だからといって彼が気持ちに応えるかはさて置くとしても。

(そういえば、どうして世界は今までアレイズに会いに来なかったのかしら)

イオやダグラス達によって殺されかけ、レイナによって神にされた経緯は大雑把にだがアレイズから伝えられている。レイナがアレ

イズを神として生かしたのは、ただ生きていてほしかったからだというのは理解できるが、何故眠らせて今まで会いにこなかったのだろう。再会にあれだけ歓喜するなら、もっと早く会いに行っていればよかったのに。

首を捻って考える。だが、横を見ても後ろを見てもそこに答えを持った存在はいない。ティファは一つ溜息をついて、再び剣の柄を握り締めてから歩き出した。

世界が、何度も何度も「どうして」と頭の中で繰り返していたのを思い出す。

「どうして」

自らも口に出して呟くと、それは過去という名の今に流れてふっと消えていった。あの絶望した声はティファの頭の中で決して消えることはなかったというのに。

どうして彼女はあんなにも絶望した声を出したのだろう？

――簡単だ。アレイズが世界よりもティファをとったから、彼女は問うたのだ。

スカイブルーの髪は、自覚しているよりもずっと空に近い色をして揺れる。日の光がもたらす明るさが、まるで真夏の空を思わせるような爽快な色をしてわずかばかり暗い印象を持った大聖堂を明るく彩っていた。明るさを放つ当人は顔を伏せ、どんよりと暗く考え込んでいるのだが。

（もしあの時アレイズがレイナを選んでいたら、私も同じ事を言ったのかもしれないわね）

どうして自分ではないの、どうして自分を選んでくれないの。

そんな風にアレイズに縋る自分が想像できなかったが、ティファはあり得ないことではないと考え直し軽く頭を振った。暗い思考がそれで少しは払拭される。僅かに軽くなった頭でティファはもう一度呟いた。

「やっぱり、世界に会わない方がいいのかしら……？」

「いえ、それじゃ困りますよ」

え？　と唇を動かしてティファはぎこちなく顔を上げた。ギチギチと音が聞こえそうな程にぎこちない動きに、目の前の男が微苦笑する。男といっても、もう壮年から老年に変わりつつあるその姿は、確かにほんの先程まで会っていた男の姿だった。

無論その姿にはかなり年の差がある。だが過去に遡っているにもかかわらず、今目にしている姿の方が年老いているというのは何とも不思議な話だった

「ノルマン、様……」

「待っていましたよ。ようこそ、幻楼空間へ」

慇懃無礼に頭を下げる様子はいつもとは多少異なるものの、顔に浮かべられた柔和な表情は彼女が拾われた時から全く変わらない。

「私がここに来ると御存知だったのですか？」

「えぇ。未来の私が夢に出てきて告げましたからね」

「では、私を転移させる力は元々持っていらっしゃったんですね」

確信を込めて問うと、ノルマンは白髪に軽く触れながら口元を緩め沈黙を保ったまま歩き出した。翻るローブの裾に、付いて来いと言われたわけでもないのにティファは自然と彼についていく。まるでそうしなければならないと本能が告げているかのように。

どこかで感じていたのだ。

これは本物の世界に会うために必要な最初の邂逅。そして世界と道を違えるきっかけとなる最後の邂逅。

過去に住んでいる教皇と確かに未来を生きていたティファとの奇妙な出会い。だがこの出会いは――世界でも運命でもないものが人為的に作った仮初のものでもあったのだと。

◇　◇　◇

緋色の彼女をその漆黒の双眸に映し、絶句する。

唇を微かに震わせている様は傍から見ると馬鹿だと言われそうなほどに滑稽なことだろう。

場所が場所ではあるが、ただ大聖堂の地下で少女に会っただけのこと。それだけのことでアレイズは震える程驚いていた。

甘んじて受け入れるには、あまりに唐突すぎたのだ。せめて理解する時間ぐらいは欲しかった。

暖かな身体を壊さないようにそっと抱きしめる。すると、腕の中にいる緋色の彼女はほぅっと安堵したような息をはいてアレイズの背に手を回した。

「やっと会えました」

表情同様、安堵したような感情を浮かばせながら呟く。

アレイズはその声に我に返り、慌てて彼女の身体に触れている自分の手をどけようとしたのだが。

「まだ、このままで」

緋色の彼女がそう言った途端、ぴたりと動きを止めさせられる羽目になった。心情的に動けなくなったのではなく世界がそう命じたから動けなかったのである。ただ一言の言葉にそれだけの力を籠めているのだ、彼女は。

指の先ほども動かせなくなったアレイズに緋色の彼女は遠慮なく抱きついた。

意外と柔らかく華奢な感触が身体に触れる。

その肉感的な感触に鼓動が早くなるが、手を動かして彼女を抱きしめる力を強めはしなかった。できなかったのも勿論あるが、仮にできたとしてもしなかっただろう。

（今のこの状況を誰も見ていなくてよかった）

唯一動く思考はそれだけを考え続けている。

特にティファにだけは見られたくない。衝動的にレイナを抱きしめた自分を見て彼女が何を思うか想像もつかないし、指一つ動かせないこの状況を見られて変な誤解を与えたくもないと思っていた。

漸く会えた嬉しさに身体が勝手に動いてしまったものの、それはティファに誤解されてまでしたいことではない。

だが、ティファよりも問題はその他大勢だ。

マイであろうとメイであろうとイオであろうと、あのダグラスですらこの光景を見ようものなら瞬殺しにかかるだろう。ダグラスの場合、マイが哀しむからというただそれだけの理由で殺そうとするから質が悪い。

緋色の瞳をアレイズの視線と交わるように上げたレイナは、比喩でも何でもなく本当に吸い込まれてしまいそうな瞳でアレイズを見つめる。その瞳の色の濃さに今度は心情的に動けなくなってしまうアレイズだったが、体が動かせるようになるとすぐに彼女から身体を離した。

暖かさが消えてしまった寂しさか、彼女は少し悲しそうに顔を俯かせる。

しかしすぐに気を取り直したようにニッコリと微笑んだ。

「長かったですね。こうしてただ会うだけのことなのに」

「……あぁ」

それはそうだろう、とアレイズは胸中で呟く。

世界が隠れていたのだから逢えるはずがないと。

無邪気に喜ぶレイナの姿にぎこちなく笑い返しながら、アレイズは複雑な心境で地上を見上げる。

ようやく叶った世界との逢瀬。

それは確かに喜ばしいことではあったが、アレイズはそれよりもひたすらティファの身を案じていた。

（お前は今どうしている、ティファ）

世界を見れば見るほどに、ティファのことばかり思い出す。できることなら今すぐにでもティファを追いかけに行きたかった。

そうしてアレイズは、今この場からどう逃げ出すべきか考えながらそっと視線を足元に落とした。

第六十六話

昔、人間として生きた遠い昔。
アレイズことジュードにはとても大切な存在があった。
物心ついた頃には隣に居り、いつでも自分に懐いていた少女。
豊かな銀髪と紫紺の瞳が印象的な、将来の幸福を約束されているような美しさを持つ子供だった。
一体いつどこで出会ったのかは分からない。
思い出そうとしても記憶に霞がかって思い出せず、はっきりとした言葉を持たない。だからどうして大事な存在なのかと問われた所で確たる答えが返せるわけではないが、ジュードにとって彼女がとても大切なのは間違いなかった。
ジュードの両親は決して豊かな生活を送っていたではなかったし、彼女自身も確か孤児だったはずだ。だからお互い日々を生きるために一生懸命で、成長すればするほど会う時間は減っていった。それでも幼い頃に彼女を護りたいと思った気持ちはいつまでも消えず、胸の中に大切にしまわれている。
神となった今もそれは変わらない。
儚い横顔が時折憂いを帯びたように揺れる、その度に護りたいと思ったのだ。
幼子から少女に成長した彼女に住んでいた村だけでなく、近隣の町から訪ねてきた男達が声を掛けるようになった。
それを厭う彼女を護るために剣を取り修行に明け暮れ、虫を追い払うがごとく切り伏せていったが苦だと思ったことは一度もない。
ジュードにとっては当然の事であり、悩む必要すらなかったのだ。
大事な妹に手を出されて怒らぬ兄がどこにいる？
そう、彼女はジュードにとって妹同然だった。
黒髪黒瞳の自分と銀髪紫瞳の彼女とでは見目が全く違う。妹だと思ったのはひとえに彼女が自分を頼り、懐いたからだ。お互い決し

て口数が多い方ではなかったが、無言で頭を撫でると嬉しそうに笑みを零す彼女を愛しく思った。剣を振る理由などそれで十分だった。

しかしジュードとってはそうでも、相手にとってそうであったかと問われれば答えに詰まる。

当時であれば勿論是と答えるだろう。彼女にとってもジュードは甘えられる兄であり、己を護ってくれる存在なのだと。ジュードを見て時折苦しげに顔を歪めるのは、何か言い辛いことでもあるのだろうと結論で片付けてしまっていた。

だからジュードは気付けず知る事さえできなかったのだ。

彼女に時間がないことを。共にいるにはジュードの存在はあまりに移ろいやすいのだと。

全てを明かしたのは彼女からだった。

ジュードが二十歳を迎えた日、どうしてもという頑固に言い張る彼女に腕を引かれ人気のない場所に連れていかれた。

人目を忍んでその姿を表した彼女に、ジュードは思わず一歩下がっていた。

「ジュード、お誕生日おめでとう」

密やかに笑う彼女に、掠れた声で返す。

「レイナ……？」

「はい」

「どう、したんだ？　どうしてお前、そんな――」

喉が渇く。震える声で発した声を受け止めるレイナは悲しげに笑んで、腕をゆっくりと広げてみせた。その後ろに流れる髪。腰まで伸びた豊かな髪が毛先から色を変えていく。月明かりに映える銀から黄昏を思わせる緋色へ。合わせて長い時を掛けて生み出された宝石のような紫紺の瞳は血のような紅に変化していった。

レイナの足先から風がふわりと巻き上がる。音を立て絹に似た髪が夕暮れ時の空に舞う。色が融け合う様に背筋を駆け上がったのは恐怖か、それとも別の何かか。

一体何だ、と思った。

この地域には自分以外に魔力を持つ者はいない。仮に体内を魔力が巡っていたとしても微々たるもので、何らかの魔術を行使するには至らない。

だというのに一体これは何だ。

ぐるぐる回る思考でそんな事ばかりをひたすら考える。何故彼女の髪は緋色に変わってしまったのか。それを当たり前のように受け入れて、こうやって微笑んでいるのか。

自分とは明らかに異なる者。頭を過ぎる言葉に足が引きそうになる。必死に押し留めたのは意地や矜持ではなく、力の抜けた足を見てレイナが眉尻を下げたからだ。こんなになっても、こんな時でも自分はレイナが哀しむのは見たくなかった。

「ジュード、どうしたの？」

「……レイナ」

「私の事護ってくれないの？　こんな体だから」

「そうじゃない！　そうじゃない、が――」

こんな体。その言葉の意味が何を指すのか見当もつかない。

浮かぶのはただ疑問ばかりだ。

（何故これだけの力を隠していた？）

今となっては受け入れるしかないとジュードはレイナを凝視しながら考え続ける。あれだけ護りたいと、護ってきた自分は何であったのか。彼女はこれほどまでに強固で大きな存在であるというのに。

緩慢な動作で自分を見るレイナのたおやかな笑みは昨日までと変わらない。変わったのは髪と瞳だけで、顔立ちも表情も仕草もそのままの彼女だった。が、変わってしまったものの異常さに声が出ない。

レイナは黄昏から集めるように薄紅の光を纏う。口元を緩めてニッコリと微笑みかけて。

ふと、祝福の言葉に答えていないなとどうでもいいことを考える。

今日はジュードの二十歳の誕生日だ。レイナが祝うのは毎年の事で、この後は近隣の者も集めて祝杯を上げる所だった。だが、今こ

こで踵を返した所で元の日常が戻ってくるのだろうか？　レイナの髪が銀になり、瞳が紫になり、いつも通りに。そんな事はあり得ないと思った。

この周辺で唯一魔術を行使できるだけの魔力を持っていたジュードには、目の前にいる少女がどれだけの魔力を保有しており周囲を圧倒しているのか理解するのに十秒とかからなかった。

力を纏うのではなく従える彼女は、きっともう元には戻らない。そんな確信も。

じゃり、と靴裏で砂をきつく踏み後ずさる。

レイナはジュードの怯んだ姿を見て不思議そうに小首を傾げながらも、一歩踏み出した。あどけなさの残る仕草はいつもの彼女であったから余計に困惑した。

「お前は誰なんだ」

思わず問いが口を突いて出た。

だが彼女はその問いをこそ待っていたらしく、目を輝かせて笑みを深める。

「私？　私は世界よ？　ほら、この世界の名前、おじさま達に教えてもらったでしょう？」

夕方特有の薄桃色の空気が彼女の白いワンピースを染め上げ、ビビッド大陸に咲くというサクラのようだった。

花が綻ぶような満開の笑顔に、しかしジュードは絶句する。

魔力の強さからある程度彼女の強さは計っていた。だが一体誰に想像できただろう。自分が護ると躍起になっていた存在が世界そのものであったなど。

「レイナ。――レイニウム！？　しかし、それなら何故」

靴裏に伝わる砂の感触。頬を撫でる風の甘い香り。遠く耳を打つせせらぎの音。そしてこの広すぎるまでの空。その全てを余すところ無く自分だと言い張れる存在を凝視し、かといって疑う事もできずジュードは胸中で呟いた。

（俺は今まで何をしてたんだ）

自分に見える光景よりも遥かに広く大きなものを持っている少女を護るなど、おこがましいにも程がある。

しかしもし仮にレイナが世界であるなら、気にかかる事があった。何故自分は世界と出会ったのだろう。こんな片田舎の目新しい物など何もない場所で。

ジュードが言いたい事などお見通しなのだろう。

レイナは両手の指を絡め視線を落として告げる。

「神々に頼んだのです、人として生きてみたいと。その間世界の事を頼むと伝えました。期限は十八年。短いけれど、それでも私は了承して――束の間人間に転生した。転生と言ってもただ力を隠していたに過ぎませんが」

「だがレイナ、お前もうすぐ」

「はい、あと一月もすれば十八になります。もう、時間がないのです」

嘘みたいな言葉だ。世界が人間に転生など聞いたことがない。

しかしレイナの魔力を前に冗談だと一笑に付す事もまたできなかった。

笑顔を悲しみの色に染めレイナがそっと目を伏せる。

その何かを憂う顔にジュードは疑念を押しのけ、この期に及んで強く彼女を守りたいと願ってしまった。

彼女を縛り付けるものがあるなら、その全てから解放してやりたかった。

人間として生きたいと願うのなら自由にさせてやりたい。短い生ではあるが、レイナにとっては価値あるものかもしれないのだから。

拳をぎゅっと握り締める。

何を言ったらいいものか悩みつつ、それでも何か口にしようと考えを巡らせる。だが先に彼女が口を開いたので結局何も言えないまま、紡がれる直前の言葉は飲み下される。

「ジュード、私と一緒に行きませんか？」

「？　何を言っている」

行くとはどこへ。
不思議に思い頭に疑問符を浮かべていると、決意の籠った眼差しが向けられた。
「私なら貴方を神にすることができる。神になれば老いることはありませんし、これからもずっと一緒にいられる」
静謐な、厳かなまでな重みを持った声は驚くほどに優しさを孕んでいる。だからいつものように頷こうとしてジュードは瞠目した。
「今、なんて？」
噛み締めた言葉の意味がじわりと心に浸透する。
（神になれ？　俺に？）
胸中で呟く。全身を満たす疑念が渦を巻いた。
神というのは世界を守った存在がなるものだと両親は言っていた。人間であろうと動物であろうと草花であろうと例外なく、命ある者なら神になれると。
だがジュードは自分が果たして彼女を守れていたのかすら怪しいと感じていた。
大きな戦で身を挺して彼女を庇ったわけでもない。ましてやそれに近いことなど何も。強いて言えば少し虫を追い払った程度か。それとて世界たる彼女なら自分で対処できただろう。自分がしてきたことは全て道化であり、護ったとは言えないのだ。
そう、自分は何もしていない、できていないのに何故彼女は突然そんな事を言い出したのか。
考えても答えが出ず内心で頭を抱えていると、再び静かな柔らかい声が耳朶を打ったのでジュードは頭を上げた。
「お願い、ジュード」
希う声にも眼差しにも冗談の色など欠片も見当たらない。
（嘘じゃないんだ。レイナは本気で俺を神に……）
そしてこれは夢でもない。紛う事無き現実だ。
レイナは困惑するジュードの内心を知ってか知らずか、困ったようにふっと笑った後でその背に腕を回した。

柔らかな体がぴったりと密着する。
「――愛しています、ジュード」
「レイ、レイナっ！？」
ふわり、と一瞬だけ温かみと柔らかさがジュードの肌に伝わる。
だがそれ以上に放たれた言葉の衝撃が強すぎ、ジュードは狼狽えながらレイナに言葉の真偽を問おうとした。しかしその時には舞い起こった風にレイナの姿は消えており、温かな感触も柔らかさも消えていた。
ただ一瞬のことだったのに、随分体が冷える。
「今のは」
両腕に視線を落とすと、常に剣を握っていたせいでごつごつとした自分の手の平が見えた。レイナを護る、ただその為だけに得た力を持っている手。
だが実際自分は護っているつもりで護られていたのだ。
「……っ、レイナ！？」
はっと息を飲み慌ててレイナを呼ぶ。
木霊する声に答えはなく、ジュードはしばし周辺を探しまわってから木の幹に背を預けずるずると座り込んだ。暮れていく空に一番星が光る。
「俺は」
掠れた声が空に溶けていく。
『愛しています』
（俺だってレイナを愛している、と思う。だがレイナが言いたいのは、多分俺とは違うことだ）
自分が持っているのは庇護対象への愛だ。
レイナは自分にとって妹であり幼馴染であり若者が少ない村での貴重な友人だった。気心の知れた、一緒にいるのが楽しくてぬるま湯に浸かっているような関係。
そう感じていたのが自分だけだったのだと、彼女は違ったのだと今更ながら気付く。

ジュードを神にしてまで共に行こうとした彼女は一体どこに消えてしまったのか。差し伸べた手に返す言葉も聞かぬまま。あるいは知っていたから消えたのだろうか。

（俺は神にはならないよ、レイナ）

もう一度会えたら自分はそう言わなければならない。

ずっと一緒に生きていけたらいい。年老いても親しい友人で、それぞれの子どもや孫がいて平穏に暮らす光景を見れたらいいと思っていた。

だがそれも彼女が世界であるなら土台無理な話だ。世界は年老いることを知らない。人間とは違う。いつか必ず別れが来るのだ。絶望的なまでに命の時間に大きな差をつけてジュードは死ぬ。

無論、神になればその展開は避けられるだろう。

願われるまま傍にいて今度こそ彼女を護れる。

ジュードにもそれは分かっていたが、提案を受け入れようという選択肢は出てこなかった。

自分は人間であり、それ以上でもそれ以下でもない。

他の者になど、端からなる気がないのだ。

しかし本音は結局彼女に伝える事ができなかった。すれ違った想いも軌道修正できないまま、消えた世界は誰の元にも平等に穏やかな夜を運んだ。

――その数日後、再びレイナに会ったジュードは神々によって命を奪われかけ長きに渡り眠りに就く事になる。

再会の約束とティファニエンドの名を残して消えた彼女がまさか自分を神にした張本人であるとも知らず、残酷な神々から彼女を解放しようと誓って。

第六十七話

過去を回想していたアレイズは思い出した記憶に微かな痛みを感じながら、目の前にいる少女を見た。くすくすと可憐に笑う少女は、アレイズへの慈しみを惜しげもなくその瞳に込める。

だがやがて笑い声を収めると彼女は自分の持つ緋色の瞳をすっと細めて笑みを形作った後で呟いた。まるでアレイズの回想を覗いたような的確な言葉だった。ただ一つだけ違うのはアレイズがいつか正したいと思っていたすれ違いを引きずったままだということ。

「これからはずっと一緒にいてくれるのでしょう？」

「……」

「そのために、あなたは私に会いに来てくれたのではないのですか？」

昔よりもやや他人行儀な、だが込められる親しさが已然よりも増した声音でレイナが囁く。それをアレイズはぐっと押し黙って聞いていることしかできずにいた。

言っている事はけして間違いではない。

会いたいと願い、救いたいと願った。神となった以上一緒にいようと決めてもいた。その為に旅をしたのだ。間違いなどと言いたくはない。だが。

（だが今は……）

己で立てた誓いを果たせる気がしなかった。

できないと思うのではなく、する気があるかないかの問題になるのだろうが。

レイナは世界の意思であり、いつかティファニエンドに殺されると予言した。その予言により神々は動き、ティファ達の両親は惨殺された。そして、どこをどう転がってかは知らないが彼女は自分の前に契約者として立ったのだ。

世界から見れば取るに足らない、一瞬とも言える時の流れ。

アレイズはその中で己が心から護り慈しみたいと思うものを見つけてしまった。

誓約をしたからなのかどうかは分からない。きっと違うのだろう。だが理由はどうあれ、今のアレイズにはティファという譲れない存在があった。世界を殺すかもしれないと言われても離れられなかったものを、どうやって譲ればいい。

（恐らく、この気持ちこそ昔レイナが俺に向けたものだ）

あの時同じ気持ちを返せなかったアレイズは、今別の人間の娘にその気持ちを向けている。皮肉な状況をどう言葉に表せばいいのか分からず、鬱屈とした気持ちを抱えて目を閉じた。

守るべき存在ができたからもうレイナとはいられない。レイナがティファニエンドを殺そうとしている限り、傍にはいられない。

そう言うのは簡単であるし、事実世界は守られる必要などない。放っておいても他の神々が彼女を守るし、第一彼女は全知全能の世界の意思だ。たかだか神や人間が襲ってきたところで負けはしないだろう。

だがそれはあまりにも自己中心的で残酷な言葉であることをアレイズは知っていた。誰かが護るだろう、自己防衛ぐらいできるだろうと突き放された所で誰が喜ぶというのだ。レイナとてそんな事は百も承知で護ってほしいと言っているのに。

欲しいのは守護者ではない。アレイズにもレイナの気持ちは分かっていた。

だからこそ言いづらかったし、言わなければならない。世界に会うことよりもティファと共にいる方が大事だったのだと。もっとも、今まで散々態度に言葉に現してきたのだ。分からないはずはないのだが、レイナは気付かない振りをしてこうして笑っている。

世界の全てを手に入れられる存在。水の流れも鳥の囁きも花の種がどこに運ばれていくのかも、何もかもを把握しているレイナがアレイズの気持ちを知らないわけがないのだから。

心の動きではない。今までのアレイズの態度を見ていたのなら、

分からないなどという言葉は通用しない。アレイズはティファに好きだとはっきり口にしたのに。
　足に力を込めると魂ごと無限回廊に閉じ込めようとする光にも力が宿ったように感じられる。
　微かな抵抗感に、透明感のある澄んだ声が鳴り響く。
「どこに行くの？」
　からかうような声にふいと視線を逸らす。
「知っているだろう」
「えぇ、知っているわ。でも教えて？　貴方はどこに行きたいの？」
　体を密着させ、上目遣いに問う軽やかな声に再び抵抗する。
「契約者の元へ。あのトラブルメーカーは今かなり危険な場所にいるかもしれないからな」
　アレイズが身動ぎしたのを察知し、レイナは少し眉を顰めて呟いた。
「……そう」
　驚くでも嘆くでもない言葉に彼女がとうにアレイズの答えを読み取っていたのを知る。
（そうだ。彼女は世界なのだから知らない事などない）
　何もかもが彼女の手の平の上で展開されている。
　変わったと見える光景も偉大な業績を残す人間の行く末も全て遠い昔から見知っているような懐かしさで見ているのだろう、彼女は。
　いつか返せなかった言葉の答えも、アレイズが抱いていた形の違う愛情の事ももしかしたら人間として転生するより以前から知っていたのかもしれない。その上で知らない振りを通し笑っていたのだと思うとやりきれなかった。
　いくら相手が世界とはいえ、男として些か情けない。
　とはいえ今はティファの事だ。
（急がないとノルマンと接触するかもしれない。せめてイオが見つけてくれていれば）
　腹立たしいが万一間に合わなくなるよりもまだイオが見つけてい

る方がマシだ。過去の世界でティファとノルマンが出会った時、何が起こるかなど分からないのだから、それぐらいならばイオという守護神がいてくれた方がいい。

（短気を起こしていないといいんだが）

ノルマンがティファに手を出すのは当然許せない。しかし気の短い彼女が幻楼空間になど取り込んだノルマンに対し、あの勝気な瞳に怒りを宿して立ち向かわないかの方が心配だった。やけに生々しく想像できるだけに気が焦る。

一人で相対するにはノルマンはあまりに危険だ。

過去であれば多少現在よりは力が衰えているかもしれないが、一体どれ程の力を蓄えているのか想像できない。知らないもの、想像できないものほど恐ろしい事はなかった。

一刻も早くここから抜け出さなければ。

周囲に視線を走らせ、何か鍵となる綻びはないかと探す。魔力で造られた空間ならばどこかに綻びができていてもいいはずだ。出るとしたらそこしかない。

無限回廊。永遠に続く空間にそんなものがあればの話だが。

舌打ちし思うように動かない、というよりも全く動かない足を睨みつけていると悲しげな囁き声が耳朶を打つ。同時にアレイズの黒髪がふわりと揺れた。

「そんなに契約者が大事なのですか？　あんなもの、人間が作り出しただけの忌々しい鎖でしかないのに」

風でも起こしているのだろうか。それともこの無限回廊のどこかに穴でも開いているのだろうか？　後者であることを願いつつ答える。

「鎖か。そうだな、否定はしない。多くの神々にとっては鬱陶しいだけだろう。だが神とて契約者ぐらい選んでいるはずだ。必ずしも疎ましいものじゃない」

「ですが」

「それに俺にはティファが必要だ。……どちらかと言えば鎖はティ

ファに巻き付いているようなものなんだよ」

レイナの言う通り、契約方法を編み出したのは人間だ。

神聖文字を使い神々を探し聖人聖女が神と契約をした。そうして交わっていく関係は神の栄光に影を差す結果になったかもしれない。崇めるのではなく共に生きていく道を選んだレイニウム大聖堂がいい例だ。

だが契約をした神々のうちの一体誰がそれを拒んだだろう。人間はどれだけ神聖文字を駆使しても神々には抗えないというのに。

共にいようと望んだからこそ、神と人間は交わるのだ。人間の短い生に寄り添い護り、代償として人間は神に隷属する。言葉にすると人間にどこまでも不利な契約だ。それでも望む者は後を絶たないのは隷属というのが言葉通りの意味ではないからではないのか。だからこそ、今も神との契約は続いている。

長い眠りからの目覚め。光在る世界を見るための手段として選ぶ者もあっただろう。

しかしアレイズはこうも思うのだ。

目覚めて契約者と接していく中で彼等は恐れ尊敬し支え合い、その中で共に生きたのではないかと。そうでなければこんな愚劣な行為をと怒りに狂った神々がとっくに人間達を滅ぼしているだろう。

冷たくならないように注意を払った声色にレイナの体がびくりと震えた。言われたくない言葉を、致命的な言葉をとうとう言われてしまったというように。

口にされなければ知らない振りを通せる。

願いはアレイズが口にした言葉によって脆くも崩れ去ってしまった。

声無き声が悲鳴を上げるように空気が震える。だが腹をくくったアレイズはもはや彼女を一瞥することもせず周囲を眼光鋭く睨み据えた。

（今までのままでは前に進めないのなら、いっそ）

世界を守りたいと願った過去の願い。

今危機に晒されているかもしれない誰より大切な存在の元へ今すぐ行きたいという現在進行形の願い。
そのどちらか一つしか選べないのなら、自分は何も迷うことはない。
アレイズは二つの事柄を頭の中に思い描いて即座に後者を取った。
世界を守りたいと思っていたのは、嘘ではない。今でも心のどこかで思っている。
人間であった時もそして無理矢理神にされた時も、もしかしたらレイナは他の神に騙されているのではと思い、そうした存在から守ろうとして彼女に会いに行こうとしていたのだ。
このレイニウム大聖堂の地下で、人間から神にされた負荷に耐え切れず眠りに就く直前までいつか必ず会いに行くと心に決めた。
そうして長い時を経てティファニエンドに出会い旅をする中でアレイズは知ってしまった。自分が神となった理由を。本当は呪いなんかではないと、レイナが自分を神にしたのだということを。
付け加えるなら、レイナこそが全てを躍らせていたのだ。プラクトでの惨劇もその一つ。
ダグラスが自分勝手に動いて人間を殺したのではなく、レイナの命によって動いていたのだと知った時、アレイズは彼女を護る理由を失い、代わりにティファを護る理由を手に入れた。
（まぁ、あいつはあいつで俺に守らせてくれるような奴じゃないんだろうが）
むしろ守られるぐらいならと自ら剣を取り戦うのであろうとアレイズは考える。強すぎる力と意志でアレイズが経験したものよりも遥かに多くの障害を薙倒している彼女なら、ありえない話じゃない。
だからアレイズは自分がティファを必要としていると言ったのである。
守ってくれる存在など彼女は欲していない。アレイズは彼女の思いを尊重し、代わりに隣で戦いながら密かに心の中で彼女を守りたいと願うのみだ。

そう、ここまではっきりと結論は出ている。
世界を守りたいのは嘘じゃないなどと反芻するのはいかに愚かしく利己的か。何度考えた所で決して選び取りはしないのに、未だ未練に縋るように考えるのはあの時の誓いをなかったことにしたくないという我儘か。
いい加減認めなくてはならない。捨てなくてはならない。
妹であり幼馴染であり親友でもある少女の為の誓いは、もう終わらせなければならない。自分で勝手に立てた一方的な誓いではあるが、有耶無耶のうちに消えるのを待つのではなく自分自身で終わらせなければ。
「残酷ですね」
思いを見透かした苦笑交じりの声が向けられる。
「あぁ」
アレイズはそれに大きく頷いて答える。全く残酷な話だ。
砂で城を作り、満足したからと壊すような無邪気さと身勝手さが渦をまく。体から一度力を抜き「だが」と続けた。
「残酷なのはお前も同じだろう？　レイナ。今更ティファ達に向ける顔があるのか？　世界なら人間の人生を壊して許されるわけじゃないだろう」
「……」
「それに俺が殺されかけた理由も神にしたのもお前だ。少しぐらい残酷になってもバチは当たらん」
随分きついことを言ったものだと内心で冷や汗を流す。
無論言いたい事は嘘ではないが、突き放したような言い方自体は嘘なだけに罪悪感がこみ上げる。
ただ、アレイズには一刻も早く彼女に嫌われてこの拘束を解いてもらわなければならなかったのだ。たとえ戦うことになろうとも、まずはこの足枷を解くのが先。他は二の次だ。
辛辣な言葉を浴びる度に彼女が苦しそうな顔を浮かべる。痛みを必死に耐えているような人間臭い表情にこみ上げた罪悪感が膨れ上

がった。
（すまない）
闇に溶け込むような黒瞳を緋色の彼女に向けながら一度謝罪し、最後に言い放つ。
世界と契約者と、そのどちらかしか取れないのならいっそのこと世界を突き放すと胸に決めた瞬間から言おうと決めていた言葉を。
「俺には世界の我侭につきあっている暇はない。今すぐこの拘束を解け」
レイナの心に杭を打ち込むように、もう後戻りはできないと知らしめるように。
出会った瞬間体が勝手に動いて抱き締めてしまった存在をここまで突き放せる心の矛盾に首を傾げたくなる。先程までは言えないと思っていた、残酷なまでの我侭を言える自分の切り替えの早さに向けて嘲笑と共に脱帽もする。それでも後悔だけは微塵もなかった。
（俺は既に大きな矛盾の中にいたのかもしれない）
世界を殺すと世界自らに予言された少女を契約者とした、世界を守るべき神。
それ自体が矛盾なのだ。自分はティファに出会った瞬間、矛盾以外のものと向き合えない運命になってしまったのではなかろうか。
自分がいた世界はあまりにも曖昧で、フィルターがかかったようなぼやけたもののように見える。矛盾が簡単に住み着ける不安定な世界。そこで連綿と続く矛盾と顔を合わせ続けている自分。
アレイズはそう考え、ふと訊いてみたくなった。最大の矛盾の理由を。
「何故俺とティファニエンドを会わせた」
阻止するのは容易かったはずだ。七年前にダグラスがしくじった後、イオと接触しさえすればティファの事をまだ何も知らなかったイオは彼女を殺したはず。それをしなかったのは、契約を阻止しなかったのはひとえに自分達を出会わせるためだ。
遥か先の未来を知りあまねく世界の事柄を汲み取る彼女が、何故

この決別に至る道を静観していたのか理解できなかった。
「さぁ」
レイナが昔と同じ儚げな、憂うような笑みで答える。「何故でしょうね」
「できることなら私だってそうしたくなかった」
「じゃあ」
「それでも必要な事でした」
仄暗い笑みとは裏腹に声は非常にさっぱりしていて、アレイズはこれでレイナが自分を諦め嫌ってくれると胸を撫で下ろす。もう一度懇願されたら世界の望むまま、願うままに傍にいることを容認してしまうのであろうから。心の問題ではなく、この痛いほどに硬い足枷によって。
だが甘かった。アレイズは自分の浅はかさに舌打ちし、慌てて上体を仰け反らせた。
レイナの緋色の瞳が冷たく細められる。同時にアレイズの首元に冷たい物が押し当てられた。一ミリたりとも身動きできない状態に晒され、つうっと伝う冷や汗を気持ち悪く感じながらレイナを見下ろす。
痛みを堪える微笑が、声に出さずに唇だけを動かした。
フォルティッシモ。
震えた息が吐き出す聞いたことのない名前に目を瞠る。その時にはもうレイナは毅然と顔を上げ、アレイズの名を呼んだ。
「貴方をティファニエンドの所へは行かせません。たとえ、これが私の我侭だとしても」
ティファと同じ、強い意志の光を込めた声が響き渡る。
その声と同時に走った痛みを、アレイズはティファの顔を思い浮かべながら受け止めていた。

◇　◇　◇

アレイズが探し求める契約者ことティファは、教皇ノルマンに続いて歩いていた。

レイニウム大聖堂の最奥、教皇の私室の前で足が止まる。懐かしい、だが以前見たものよりも少しだけ材質の新しいドアを眺めて黙り込んだ。

するとドアノブに手をかけていたノルマンが柔らかく微笑む。

「ここは過去なのだから全てが若々しくて当たり前なんですよ」

「……はい」

その言葉にティファも頷くしかない。

何故か、この教皇に文句を言おうという意志が浮かんでこなかったせいであろう。長い時を生きたのだと証明するように深く刻まれた彼の皺を眺めながら、ティファはもう一度黙り込んだ。

過去なのだから若々しいのが当たり前。だがノルマンは未来よりもずっと歳を取っているではないかという反論も押し殺したまま。

（どうしてこんなことになったのかしら？）

自分は確かこの教皇と相対すべくレイニウム大聖堂に来たはずではなかったか。それが一体全体どうして皆からはぐれて一人訳の分からない空間に連れ込まれているのだろう。

考えたからといって答えは出ない。

ノルマンはティファのダークブルーの双眸が揺れるのを柔和な笑みで見守り、敵意のない穏やかさでドアを開けて手招きをした。

「どうぞ」

「……ありがとうございます」

開かれたドアの先で罠が待ち受けているかもしれない。一瞬そう考えたが、すぐさま馬鹿らしくなってティファは招かれるまま先へと進んだ。ここには魔力の波動は感じられず、ノルマンにも害意は見えない。

これをアレイズかイオが見ていたならば危ないだろうと説教付きで止める事うけあいなのだが、幸か不幸か今この場に彼らはいない。従って普段とは違うふらふらとついていくだけの行動を止める者は

どこにもいなかった。
部屋の中に足を踏み入れ辺りを見渡すと、敷かれた柔らかな絨毯も鏡も確かに過去というだけあって少し新しい印象を受けるが別に変わったところはなかった。天井を見上げるとそこだけ豪奢と言えるようなシャンデリアがかかっている。
これが落ちてきたなら自分はひとたまりもないのだろうと考え、そして開き直った。
（そうよ。ノルマン様なら私を殺すぐらいすぐにできるはずだわ）
今の力量がどれほどかは知らないが、この頃から魔力は持っているはずだ。今更罠かどうかなど考えていても始まらない。罠になら、とうにかかっているのだから。
自分の置かれた状況を危険性を改めて認識して開き直るというのもおかしな話だが、殺すのであれば一瞬で済むはずだと考えると気が楽だった。自分が今殺されていないなら、相手には殺す意志がないと分かるから。
勧められたソファに腰掛け、ノルマンを見上げ尋ねる。
「知っていたのですか？　私が何であるのか」
「知っていましたよ、ずっと」
椅子に沈み込む体が弛緩する。スプリングの軋んだ音が静かな部屋によく響いた。
そうして響いた音がやがて余韻ごと消え去った頃、ノルマンは穏やかな笑顔のままひどく不思議な言葉を言い放った。
「今すぐに旅を止めてしまいなさい」
「……え？」
「また大聖堂で暮らせばいいでしょう。未来の私もそれを望んでいます」
「ちょ、ちょっとお待ちください！　それでは先程のお言葉と矛盾しているではありませんか！」
不可思議な言葉に慌てて立ち上がり、ノルマンの言葉を遮る。真っ白なスカートに皺がつかないように立ち上がりながら、こちらを

見上げる彼を困惑の表情で見返す。
「矛盾？」
「そうです。ノルマン様は私に世界に会わなければ困ると仰ったはずです。それなのに大聖堂で暮らせばいいだなんて矛盾しています」
（そうよ、もしも旅を止めてしまったら世界に会うことなんてできない）
大聖堂でじっとしているだけでは駄目なのだ。
広い世界に出て手がかりを見つけなくては。その為に自分は今まで旅を続けてきたのだから。
肩に流れるスカイブルーの髪が暗い色調の室内でやけに際立つ。今まで気付きもしなかった異質さに眉を顰め、髪から目を逸らした。代わりに睨めつけるような鋭さでノルマンの見据えた。
父親とも言えるノルマンに戻って来いと言われて嬉しくないわけじゃない。
だがどうにも我慢がならなかった。まるでもう世界を探さなくてもいいと言われているようで、今までの旅の全てが否定されているようで。何よりノルマンが放つ矛盾の不可解さが許せなかった。
ノルマンはティファの不快な気持ちを沈めようとするように口元を緩め、静かな動作で立ち上がりながらおもむろに腕を伸ばして異質な色を持つ髪を優しく撫でた。深い情愛の籠った仕草に目を丸くする。
恐らく、この状態を見られていたなら自分の契約神は腹を立てたことだろうと自覚できる親愛と慈愛に何も言えなくなった。
迷える者を、答えを得られない者に向ける無償の愛。教皇として君臨する男として相応しい態度に毒気を抜かれると、とんでもない言葉が放たれた。
「世界の居場所ならすでに見つけてあります。後は貴女が逢いに行くだけなのです」
「ですがそれには――」
「ただ逢いに行くだけなのです。彼等と旅をする必要性などないで

しょう」
向けられた言葉や暖かさに必死に抵抗していると不意打ちのようにそう言われて、ティファは固まった。
（確かに、場所が分かっているんなら旅をする必要はないわ）
そうして、ノルマンが言った言葉に妙な納得感を感じてしまった後で激しく後悔した。
（……って、それって暗にアレイズ達と一緒にいるなって言われてるんじゃないの！）
アレイズがいない。メイやマイがいない。イオや、カウントするのか謎ではあるがダグラスがいない。そんな生活、耐えられるわけがないとティファは呻いた。
長くも短くもある期間ではあるがずっと一緒にいたのだ。人間、最初からないものは我慢できるが一度手に入れると手放すのはとても難しい。ここで彼等を失って平然としていられる自信など欠片もなかった。
ましてや皆で達成しようとしていた目的と自分一人で達成する？
（冗談じゃないわ。そんなの絶対嫌）
世界に会うなら、それは仲間全員が揃っての事だ。
この旅はもう自分やアレイズだけのものではないのだから。
ティファはそう考え、ぐっと口を噤む。
ここに一人呼ばれた理由。他の誰ともいない事実。
ノルマンはメイやマイさえも自分から奪おうとしているのだと、本能めいた素早さで察する。だが一体何故。
「こうして訊いてはいますが事実貴女に選択権などありませんよ、ティファニエンド。ここは私の空間なんですから」
問いを発する前に制され、思わずノルマンを睨みつける。つい手が武器へと伸びたが、慌てて我慢し視線をちらと左右に巡らせる。
（過去から出る方法なんて知らないわよ、私）
魔術を使えば道は拓けるかもしれない。どこかに綻びを生み出せればあるいは。

だが今ティファには契約の指輪はなく、供給される魔力もなかった。人間である自分の魔力だけでは些か心もとないし、そもそも空間を打ち破る方法など大聖堂でも教わらなかった。

（アレイズなら）

結界や空間転移が得意な彼ならできるかもしれない。

普段彼が魔術を使う分、ティファは滅多にこの手の魔術を使う事がなかった。今になって悔やまれる話だ。

簡単には逃げ出せない。

観念するように認め、ティファは舌打ちなどという聖女らしからぬ態度を取った後、一度左手薬指に触れてから剣の柄を握りしめた。自分の魔力を練り上げた刃を突きつける。

「申し訳ありませんが、その御申出、辞退させて頂きます」

シャンデリアが放つ明るさが眼光の鋭さを増すのに手を貸す。ノルマンの首に突きつけられた白刃は僅かでも切っ先をずらせば首を切り落とすだけの脅威を持って、きらりと煌めいていた。

だがそんな状態でもノルマンは相変わらず柔らかく微笑むだけで、何もしようとはしなかった。

その罪人に向けるような慈悲の籠った瞳にティファは眉を顰めた。

◇　◇　◇

（漸く完成する）

怪訝そうなティファの視線を笑顔で受け止めながら、ノルマンは胸中で独りごちた。

ここに、ノルマンが願った全てが完成した。

我侭を突き通すために大切な人に剣を向けた世界。

契約神や幼馴染と離れる生活になるぐらいならと長年慕ってきた教皇に剣を向けた聖女。

愛する者の為に守護対象の世界を捨てた神々。

彼等はきっと気付いていないに違いない。

人々を見守る世界という存在が、人々を慈しみ争いから守る聖女が、世界を護る神々が鋭い剣の切っ先を誰かに向けることこそそもそもの矛盾なのだということを。

そしてその矛盾を突きつけられている人物達の心の中に、世界の意志ではない。世界そのものに対する不信感が募っていることを。

（争いを生み血の雨を降らせるのは利己的な為政者でも暴君でもありませんよ、ティファニエンド。いつだって本当に階を掛けるのはそれとは正反対の、心優しいとされる者達なのです）

歓喜に胸が震える。

ようやく、と心を満たす声が震えていた。

（漸く、叶う）

第六十八話

肩口に走った痛みにアレイズは顔を顰める。
向けられた刃はその鋭い切っ先でもって肩口を浅く切り裂いていた。
深く踏み込まれなかったのはレイナが躊躇した証なのだろうか。
だがアレイズを傷つけることを避けていた彼女が取った行動は、同時に彼女の意志の堅さも見せていた。
自己中心的な我侭であるが故に意志の堅さは増す。宝石のように緩やかな時の流れで造られる硬度ではない。それこそ一瞬で硬度を増し、焔のような熱を持つ。長期戦には向かない、けれども短期決戦にはもってこいの強さはレイナにひどく不似合だなとアレイズはぼんやりと思った。
与えられる痛みから逃げようと足を動かしてみる。
足枷が薄桃色の光を帯び細い鎖となって幾重にも足首に巻きついた。
逃がさない。魔力となって体に沁み込む思念にアレイズは此処に来て初めてぞっとする。ダグラスがいつも自分に言う亡霊という言葉。その自分がまさに亡霊に取り憑かれているようで。
肩からじわりと滲み出る血がつんとした鉄錆の匂いを放つ。
「やってくれたな……」
思考を突き刺す痛みを意識的に遠くへ追いやり、レイナを見据える。
なるべく低い声音になるように言い放つと、彼女はびくりと身を竦ませた。自分で決めて取った道とはいえ、アレイズの怒りを買うのは辛いらしい。世界の意思が、レイニウムと呼ばれる彼女がこんな元人間の神ごときの怒りに、まるで幼子のように身を震わせる。
「だから言ったでしょう？」
それでも至近距離にいるアレイズに言い返すレイナは気丈だった

が、そこには先程までの余裕など微塵も感じられない。ティファ達の抹殺命令を出すのは容易くとも、恐らくは誰を殺しても平気な顔ができても、アレイズだけは傷つけたくなかったのだと下げられた眉尻が告げていた。

身を拘束し刃物で突き刺し、これだけの優位に立ちながら彼女はちっとも嬉しそうではなかった。

「……私は」

搾り出す声は悔恨にも聞こえる。

レイナは逡巡するように口を閉じてから一度きつく目を瞑り、それからパッと視界を開ける。

同時に、足首を拘束していた力がほんの少しだけ弱くなった。

動かしても先程とは違い柔らかく押し返されるのみだ。縛られていない。

「これで」

何事かを目を丸くするアレイズにぽつりと呟く。

挑戦的な瞳が再び首筋に冷たい刃先を当てた。

「絶対にこの戒めを解けないということはなくなりました。ここからは貴方次第」

「レイナ……」

「逃げたいなら全力で来なさい。貴方のその気持ちが私の想いより弱いと証明してあげます」

名を呼ばれ突き放すように返すレイナの声が硬度を増していく。

瞬時に練りあげられる強さ。孕んだ熱の高さ。それらが全てアレイズを叩き伏せ屈服させる事を暗に告げる。戒めに効果が見出せないなら己の意志の弱さに打ちひしがれろ。そう言いたいのだろう。

微かに震えた刃が首の薄皮を一枚ほど割いていく。

つ、と流れた鮮血が流れては固まっていった。

自己回復能力が高すぎるゆえにできる芸当なのだろう。

（これほどまでに化け物じみた回復力は、世界と神しか持ち得ないものだ……）

死は神にも人にも平等に訪れるが、治癒力は別物。これは決して人間では持ち得ない力なのだ。

もう人間ではないのだと言うように、見せつけながら血を流させるレイナに唇を噛み締める。痛みは首に当てられる刃ではなく、心から発せられた。だがその痛みが自分を正気に戻してくれた。

「分かった」

これから先自分は人間に戻れないかもしれない。レイナに会えたら人間に戻してもらおうと思うと以前ティファに告げた事があるが、それも叶わないだろう。レイナは決してアレイズが脆い体に戻るのをよしとしない。でなければ今自分は転生して別の生を歩んでいるはずだ。

自分が神にされた経緯を思い出し、このままここに留まるわけにはいかないことを思い出す。

短く言い切り、足を後ろに引く。彼女の言う通り抵抗は大分弱くなっている。弱々しい抵抗感を引きちぎるように振り払い、滑らかな足運びでアレイズはレイナの背後に回りこんだ。

瞬間、レイナが驚愕に目を見開いた。

「悪いな」

ちらとこちらを見る緋色の瞳に呟く。彼女の背中には長剣がぴたり突きつけられていた。

「力を弱めた程度でそこまで素早く動けるとは想いませんでした。意志が強いんですね」

褒める言葉に肩を竦める。

「いつまでも付き合っていられないからな。それより、一つ聞きたい」

やはり世界の意思に抗うのは骨が折れる。

息を弾ませる滴り落ちる汗を拭う余裕もないアレイズは、しかし疲れなど感じさせない鋭い声で続けた。

「何故今頃になって現れた。ティファを消したいのならもっと早く出ていればよかったはずだ。……なのに何で今更、俺があいつと契

約をしてから出てきたんだ」
それは一度問うた言葉だ。
突きつけた切っ先が更に前に出される。
（何より、何故今日この大聖堂に来たんだ）
世界が何をしたがっているのかまるで分からない。
躊躇いなく前に踏み込みながら、アレイズは困惑したように内心でそう呟く。これではまるで教皇であるノルマンと手を組んでいるようではないか。胸をかすめる不信感が疑念に変わり、不快感がこみ上げる。ティファに向ける心配が否が応にも強くなった。
世界は自分を教皇はティファを必要としていると嫌でも理解しているからこそ、余計に不安にならずにはいられない。落とし穴のように待ち構えていた罠にまんまとはまり契約者を失うなど冗談じゃない。
奥歯をぎりりと噛み締める。焦燥感と後悔を咀嚼して呑み込み、アレイズは吠えた。
「答えろ、レイニウム！」
一度も呼んだことのない世界の名。
――しかし、その答えを聞くことはとうとう叶わなかった。レイナがくすりと笑みを零し、その華奢な体を蜃気楼のように揺らめかせたからだ。
体を震わせ怯えたり悲しんでいたのが嘘のように、予兆さえ感じさせない別れの予感にアレイズは眉根を寄せて怪訝そうな表情を浮かべる。
レイナの輪郭に合わせて発せられる光が徐々に消えつつある。
「あ……っ」
彼女が消える予感に小さく声を上げると、くすり声が落ちた。同時に、背後から自分達以外の魔力を感じてアレイズは息を呑む。
（一体誰が――）
「そろそろですね」
カツカツと、この教会の者が履いているはずがないであろう高い

ヒールの音がする。
　徐々に近付いてくるその音は、間違いなくこちらを目指して向かわれているものだ。
「彼女に見つかったようなので帰ります。長話ならまた今度。――そうですね、今度は私がきちんと招待しましょう。もちろん、ティファニエンドも御一緒に」
　背後に気を取られるアレイズの耳朶に触れた声が、魔力が消える。
　突きつけていた刃の先が空虚になり、レイナが消えたのだと知らしめる。アレイズは小さく舌打ちし、新手のやって来るのを気長に待った。舞い降りた闇に慣らそうと目を幾度も閉じる。足枷となっていた纏わりつくような闇は既になく、自然な暗闇が辺りに広がっていた。
　アレイズはその闇のような風貌を周囲の闇に溶け込ませながら剣を持っていた腕を下ろし、こちらに向かってくる存在に対し神経を集中させる。
「？」
　だが変だった。
（何だ？　何故ここまで降りて来ない？）
　長い螺旋階段。そこを降りれば自分がいるのに、聞こえていたヒールの音は不意に遠ざかっていった。まるで、世界が消えたのを知り興味を失ってしまったかのような動きである。
　アレイズは自分がまるで相手にされていないことに憤怒しながらも、同時にこれで全てのことから解放されたと深く安堵の息をついた。
「急がないとまずいな」
　完全に足音が消えてから呟き、階段に足を掛ける。邪魔をするものはもう、なかった。
「あの馬鹿にティファを会わせるわけにはいかん」
　安心ついでに金髪の神のことを思い出し、すぐさま長い闇の階段を駆け上った。

石と硬い踵の触れ合う音を聞きながら考える。
世界とは何でありどうして存在しているのか。そんな、神ですら分からない事を。

◇　◇　◇

「何故、辞退などと？」
教皇の私室にそんな穏やかな声が染み渡る。
しかし今この場を見ているものがいたら、そんな声の穏やかさなど歯牙にもかけず目を丸くしていたかもしれない。聖女が教皇に刃を突きつけているのだ。巡礼者が見たら悲鳴を上げて卒倒するだろう。レイニウム大聖堂にとって教皇は絶対。神で言うなら世界に相当する存在だ。
自らの魔力で作り上げた刃を教皇に突きつけ、ティファは少し思案して答えを返そうとする。
自分自身行動に驚いている部分がないわけではないので、まともな返事を返すのに少し時間がかかってしまった。
たっぷりの間を置いて、ティファは答えた。
「私が彼等と離れるなんて考えられないからです」
ダークブルーの瞳は、一度たりとも逸らさない。
「今まではメイティーナとマイティーナしかいなかったではないですか」
「そうです。しかし出会ってしまったら、もう離れることなどできません」
楽しんでいるような言葉に一歩も譲ることなく答えた。
手にしなければ分からなかった、知らなかったものを今は手にしてしまっている。自分の意志で突き放すならともかく、誰かに言われて離れるだなんて自分にはできそうになかった。
シャンデリアの光を照り返して刃が煌く。それを目にしても尚ノルマンは怯むことなく、穏やかに「そうですか」と返した。こんな

刃など何の問題もない。言外に告げる余裕でむしろ刃などないとばかりに肩を震わせて笑う。

「しかし」

ティファのスカイブルーの髪を見つめ、静謐な声が波打つ。

「良い返事を頂かないと貴女をこの空間からお返しすることはできませんね」

「構いません」

脅しのような言葉に返す驚嘆に値するだけの早い反応。

ノルマンは珍しくも軽く目を見開き、ティファの気が強そうな瞳を凝視した。双眸の奥に宿るのは己が燃やす闘志だ。

「私は一人ではありません。必ず、私の契約神が迎えに来てくれます」

「ここは――」

「ノルマン様の空間であろうとも、時が違っても。必ず」

（そう、絶対）

ノルマンの呆れたような声に断固として言い放つ。それはむしろ、彼に向けられたものではなく自分への言葉であったようにも思える。しかしそうやって力強く断言することによって、必ずアレイズが自分を見つけてくれると確信できるようになっていた。

指輪はない。魔力の繋がりは感じられない。

時は過去に遡り、契約の糸さえ切れてしまったかのよう。

それでもアレイズはきっと来ると、不思議なぐらいに強く信じられた。

頬に触れる髪を後ろにどけながら片手で刃を更に強く突きつける。

それは決してノルマンを傷つける事はない。

（いいえ、違うわ）

切っ先は彼の肌に触れている。間違いなく感触はある。

だというのに出るはずの血が見えない。熱い血潮は体内に留まったまま、ノルマンから流れ出す事はなかった。

異常だ。

その光景を見て行動の無意味さを悟るものの、今刃を下げたら自分が攻撃される可能性もある。無論教皇が聖女に手を出すとも思えないが、逆があり得るのだから絶対ないとは言い切れない。

ティファはどことなく人間離れしてしまった教皇を見つめ、眉根を寄せて苛立ちに頬を歪める。

本来ならばこのような場所で時間を潰している暇はないのだ。

大聖堂に戻らないと決めた以上、ノルマンが何も言わない以上ここにいる意味はない。一刻も早く皆と合流して世界に会わなければ。

（でも、世界に会って私は何をすべきなんだろう）

断罪でもするのか。両親を殺した罪を問うて、それで謝罪が貰えたとしても嬉しくはないのに。

会わなければならないのはアレイズであり自分ではないと考えていただけに、何をすればいいのか見当がつかない。ただ彼女を殺さずにいられればそれが自分の勝利だと、そんな事ばかり考えていたせいか。

ティファの迷いを見守るように微笑んで見つめるノルマンと目が合う。そちらを鋭く見据えて口を開いた。

世界に会えと事あるごとに口にする教皇。

彼に訊いてみたかった。

「ノルマン様」

「何ですか？」

「私は世界に会って何をすべきなのですか？」

答えなど分かりきった質問。

だがその質問の答えが出た瞬間に出す言葉こそ、ティファが真に尋ねたい言葉であった。

返ってきたのは予想通りの言葉。

「世界を殺しなさい。そして貴女が世界になるのです」

「何故、今の世界を排斥する必要があるのですか？」

だから自分が返した言葉も、予想通り。

この問いをずっと投げかけたかったのだ。世界を殺せと言われた

あの時からずっと。

自分が世界になるなどという絵空事よりも、世界が排斥される理由が知りたかった。そこに何の意味があるのか。あれだけの神々を従えて力もあり、何故彼女が消えなくてはならないのか理解できない。

何千年も続いた、貧しくも安定した世界はまだ変化の時ではないはずだ。それなのに。

（それにどうして私は生まれたのかしら。世界を殺す駒として？新たな世界として？　一体誰が選んだの？　そんなもの）

まるで世界より上に立つ何かによって仕組まれているようだ。

だが一体誰が？

あまねく世界を全て掌握する意思よりもなお上位の存在など聞いたことがないし、当然見たこともない。神々が何も言わない所からして、彼等にも分からないのだろう。では一体。

「……そうですね」

ノルマンはティファの問いに一度口を閉ざし囁くように呟いた。

静かな声に銀の刃を下ろす。この様子なら攻撃されないと確信できた。

答えを吟味するように黙りこむノルマンを見つめ、続けられる言葉を待つ。

静寂が満ち、きらきら輝くシャンデリアの明かりだけが騒がしい。聖人聖女もアリアさえもいない空間はひどくひっそりとしていて落ち着かなくなる。沈黙と闇に囚われ、ねっとりと絡みつくノルマンの慈愛を込めた眼差しに囚われそうになるのが怖い。

武装によって虚勢を張ることも最早できない。

ただ答えが返るのを待つ時間の長さに歯噛みしていると、不意に真っ直ぐな声が耳を打った。

「世界は今、貴女の契約神に刃を突きつけていることでしょう。貴女と同じように。人々を、神を守るべき世界がそれをしているのを知って不満が募らないと言えますか？」

「――アレイズが！？」
はっと息を呑み思わず何もない左手薬指に触れる。安否の一切を伝えない自分の肌が切なかった。
「えぇ。彼の持つ光が消えていないところからすると難は逃れたようですが。……守る側の人間が守るべき存在に刃を突きつける、これほど矛盾したこともないでしょうね。だから私は世界を退けようと思うのです」
きっぱりと断言する声色に嘘は見当たらない。
ノルマンは真実世界に対する不満と矛盾を感じ、それが故に排斥しようとしているのだろう。だが答えを得られたはずのティファはますます混乱するばかりだった。
（アレイズに何かあったっていうことは他の皆は？　メイやマイはどうなってるの！？）
世界が、誰よりも頂点に立つ存在が今アレイズに刃を向けている。難は逃れたと言っていたものの、不安にならないわけがない。彼は、ティファに誰よりも近く、そして今誰よりも遠くにいる存在なのだから。遠いからこそ、不安は募るのだ。
助けにいけない事がこんなに辛いだなんて知りもしなかった。
ノルマンの言う通りかもしれない。
不安は不満を募らせ、矛盾に苛立ちを与える。
だがティファは幸いにも不満と不安を爆発させる前に、別の事で意識が弾けた。
「……おや」
ノルマンが何かに気付いたように首を傾げたせいで。
「ティファニエンド」
「今度は何でしょうか」
口を尖らせて問うと、彼は遠く外を見て告げた。
「メイティーナやマイティーナ、そして他の神々二人の光がこの大聖堂から消えましたよ」
予想外の言葉に耳を疑った。

ティファは未来にいるはずの仲間達の名前を思い返し愕然とする。
彼等はレイニウム大聖堂にいたはずだ。それなのに。
「――なん、で。まさかノルマン様！」
「私達ではありません。いや、案外私達のせいかもしれませんが」
「それで、今皆はどこにいるのですか！？」
戻ればそこにいると信じられる者達。彼等がいなくなったというのはどういうことか。
胸ぐらを掴む勢いで問い詰めるティファにノルマンは一歩引きながら意識を探るように目を閉じる。「光が見えませんね」どうやらノルマンには彼等の生命が光として見えるらしい。それが消えたからか、探そうとするのを即座に諦め彼は肩を竦めた。……絶望的だ。
「一体、どうして」
しかしそこまでは理解できても肝心の何故という所までは把握できない。
「ノルマン様、皆は一体どこに！」
ほとんど半狂乱の声で訊ねる。
メイやマイがティファを置いてレイニウム大聖堂を離れる事などあり得ない。だとすればそれは、何者かの罠にかかった可能性が高いのだ。他の神々というのがイオとダグラスなら彼等が護ってくれているだろうが、目に見えないもの程怖いものはない。
ノルマンは静かに首を横に振る。
「そこまでは分かりません。しかしアリア聖母の封印のクリスタルによる影響だとしたら、恐らく彼らは今もっとも世界に近い場所にいる」
「世界に近い場所……？」
呆然と呟くティファに律儀にノルマンが頷く。
封印のクリスタルというのも気になる。だがそれ以上に世界に近づいている彼等の安否が気にかかった。
アレイズに刃を突きつけた彼女は今どこにいるのか。何をしているのか。

……アレイズはどうなったのか。
山と積み上がる疑念を貫くようにノルマンが遠く窓の外を指差した。
「そう。神の墓場であり、世界が生まれる場所でもある場所です」
「墓場」
鸚鵡返しに呟く。
ノルマンはゆったりとしたソファに身を沈め、深く息を吐きながら天井のシャンデリアを見つめた。
恐らく、彼にとっても予想外の出来事であったのだろう。
「ティファニエンド」
疲れたような呆れたような顔をしながら名を呼ぶ彼に答える自分の顔も、きっと疲れているに違いない。何もかもが予想外だ。事態はあまりにも突発的に過ぎ、かつ一番大事な者達ばかり巻き込んでいく。
世界はいつだってそうだと思う。
今回レイニウム大聖堂に飛び込んだのは確かに自分達だが、本当に世界に近づかなければならないアレイズではなく何故彼等が消えたのだろうか。
（早く、早く探さなくちゃ。神の墓場、世界が生まれる場所を）
当然そんな場所がどこにあるかティファは知らない。
だからノルマンを叩き斬ってでも答えを得ようと踏み込んだ所で、彼が目を眇めてティファを見やる。
「ティファニエンド」
もう一度名を呼ぶ。その声にはもう疲労は見えなかった。
教皇として人に命じることに慣れた強い声音が部屋を満たす。
「決断しなさい。世界を生かすか、殺すかを」
貴女にもう時間はない。脳を揺さぶる、残酷なまでに今必要とされている問いに胸中で独りごちる。
（私は……）
世界に一番近い位置にいる、仲間達。

彼等に会いに行くことは、すなわち世界に会う事だ。
その時自分がどうすべきか。ノルマンの答えで納得できないならティファ自身が選び取らなければならなかった。
相手は、いきなりティファの体を乗っ取るような存在である。次に会った時容赦無い攻撃をされないなどとどうして言えよう。それ故、会ったその場で悩むなど到底できぬ相談だった。待ったなしで戦いは始まってしまう。ティファやアレイズがどれだけ望んでも、彼女には命が懸かっているのだから。
迷い、それはすなわち死。
だからティファはこの場で悩んだ。何者からも干渉されない、恐ろしいまでに静かなこの場所で。教皇が見つめる中ずっと、ひたすらに悩み続けた。
時が止まったような沈黙が支配する場所でそっと顔を上げる。前髪がさらりと額に触れ、ティファはほぅと息を吐き出した。
「私は――」
答えはまだ見つからない。
泣き出しそうな気持ちで呟く。そこでまじまじと眼前の光景を注視した。
空間が歪む。ねじ曲げられ、七色の光が楕円形に波打った。その中から、自分の名を呼ぶ声がする。
「ティファ！」
「アレイズ……？」
声を漏らす。すると空間転移を得意とする契約神が、息を切らせてティファの下に駆け寄った。
「アレイズ！」
束ねられた長い黒髪。闇色の瞳。
見慣れた顔にじわりと目尻に涙を浮かべながら、ティファは今度こそはっきりと彼を呼んだ。そこでようやく気付いた。
（あ、れ？　ノルマン様は一体どこに行ってしまったの？）
それどころは一体ここはどこだ。

周囲を見渡すが、どこは先程までいた新しさのある光景ではない。
少しだけくすんだ大聖堂の、ティファは普段通らない廊下だった。
おかげで場所が分からずきょとんとする。
まさかアレイズが空間転移で現れたのではなく、現在に戻ってきたのは自分の方なのだろうか。ノルマンが自分を帰して？
（でも私、まだ答えを出してないわ。なのにどうして）
訳が分からずこみかみを押さえる。
アレイズは漆黒の外套をはためかせながらティファに近づき、ややごつごつとした手の平を頬に当ててからほっと息をついた。
「無事だったか」
柔らかな笑みの下。外套に隠されるように、首筋に小さな赤い筋が見える。これがノルマンの言った世界が向けた刃の痕なのだろうとティファは考えたが、それについて言及するのは後にして慌てて大きく首を横に振った。
「全然大丈夫じゃないわ！」
それから、訝しがるアレイズに叫ぶようにして言った。
「他の皆が消えたの！　ノルマン様にも場所が分からなくて！」
「……どういうことだ？」
「よく分からないけど、ノルマン様が皆がこの大聖堂から消えたって仰って。世界に、レイナに一番近い所に行っちゃったって！」
何だと、とアレイズが目を見開く。
「あいつの近くにか？　……くそっ、イオやダグラスは一体何をやってるんだ！　仮にも神だろうが」
怒りを露にした声を出したアレイズだったが、しかしすぐにティファの手を力強く掴み「行くぞ」と言った。
だが、どこに行くのかなどティファには皆目見当もつかない。
「とりあえずこの大聖堂から出る。ここは危険だ」
頭の上に疑問符を浮かべているとそう言われたので、どうやら彼にも行き先がないことを悟る。
しかし、それならどうやって彼等を助けに行けばいいのか。

時代が戻り、再び左手薬指にはまった緑色の指輪に視線を落とし考えていると、暖かい光に包まれながら白いスカートがふわりと揺れる。

このまま空間転移を行うつもりだ。

暖かい光は、更にその強さを増してティファとアレイズを包む。

魔力を孕んだ光以上の温もりが手の平に伝わる。一人ではない安心感に、二人はまだ事態が進行しているにも関わらず体から少しだけ力を抜いた。

近くて遠い場所にいた契約者が元通り側にいることにいる安堵で胸が一杯になる。

しかしいつまでも笑ってはいられない。

二人は大聖堂より少し離れた場所に転移すると、すぐに体に力を入れ直し真っ直ぐに大聖堂を見据えた。大きく聳え立つ大聖堂。異形と世界と罠が大量に仕掛けられていたあの場所に、もう二度と戻ることはないだろう。

同時に巨大な建造物から目を背け、一歩踏み出す。

未だ自分が抱える悩みの答えを出せないままに、行くべき場所も分からぬままに。

第六十九話

ティファとアレイズが合流し大聖堂を出る少し前、メイとマイ、そしてイオは急にクリスタルから湧き出た眩しいほどの光に覆われて気を失っていた。

ちかちかする思考が冷えていく。

一人一人目を覚ましていくと、そこには全く知らない光景が広がっていた。

「ん……？」

「姉さん？」

「メイ？　ねぇ、ここはどこ？」

一番早くに目を覚ましたらしいメイが、次に目を覚ましたマイを呼ぶ。とりあえず自分達が無事な事に安堵しつつメイに問うと、彼女は困ったように溜息を漏らした。

「私もついさっき目を覚ましたばかりだから分かんないよ」

「そう……」

「それに理解しようと思ってもこれじゃあねー」

言われ、緩慢な動作で辺りを見渡す。広がるのは暗闇ばかりで、今しがたまで目を閉じていたにも関わらず何も見えない。夜目が利いても床や天井が見えない程の闇が辺りを覆っており、すぐ傍にいるはずのメイさえ視界に捉えられない。

何か明かりになるものは。

そう思い手探りで床らしきものに触れる。ひんやりとした感触を指先でなぞると、柔らかな糸らしきものに辿り着いた。

（糸……？　いいえ、違うわ。これは髪ね）

さらさらと指の間から零れるそれを掬い、髪の長さから恐らくイオだろうと推測する。床に髪が広がっているということは彼はまだ起きていないのか。

無理矢理目を凝らしてみるが、鮮やかな金髪はなかなか見えない。

太陽の光の下では眩いばかりに輝く金も、闇に溶けてしまっては見る影もなかった。せめて光源でもあればいいのだが、魔術を使って光を生んだ瞬間何が見えるか分からないのが怖かったので、マイはとりあえずメイに声を掛けた。

「メイ、ここにイオ様がいらっしゃるわ。どうやら私達三人揃ってどこかに飛ばされたみたいね」

「イオさんが？　どこ？」

「ほらここ。髪が」

「あ、ほんとだ。まだ寝てたんだね」

呆れ混じりの吐息が頬に触れる。あまりの至近距離に驚いてそちらに目を向けると、メイもこちらを見ているような気がした。一瞬じっと視線を絡め、次いでイオの方に目を向ける。

「イオ様」

「起きて、イオさん」

二人して声を揃えるとイオが小さく呻きながら目を開く気配がする。音がどう反響しているのかさえ分からない静けさの中、睫毛が動く音さえ耳を打つようだった。

「ここは」

呟くボーイソプラノが闇を捉え、光源がないのに気付いたのか彼は手の平をぼぅと光らせて柔らかな青い炎を生み出した。熱を感じさせない炎にようやくお互いの姿を認められる。イオは虚空を碧眼で見据え、まだぼんやりする頭を小さく振った。

それから二人の姿を見つけ、焦点の定まっていない目を大きく見開きながらすぐにバッと起き上がる。

「クリスタルは！？　あの馬鹿ダグラスはどうしてる？」

「え、ダグラスさんですか？　ここにいるはずですけど……」

慌てた声で問われ、預っていたクリスタルを差し出すとイオは手の平に握りしめたそれをペチペチと叩いた。中身を確認し、ふぅと息を吐く。

「よかった。ダグラスの仕業じゃないんだね、これ」

どうやら、彼にはクリスタルが何かをしたというよりもダグラスが何かしたのではないかと疑ったらしい。納得していると再びクリスタルを叩いたイオが不満気に「さっさと起きればいいのにさ、何やってんだか」と口を尖らせた。

「い、イオ様。流石にそんなんじゃ起きないと思うんですが」

「分かってるよ。でもちょっとぐらい八つ当たりしたって文句なんて言わない。……いや、言わせないさ」

あまりにも強く叩かれているクリスタルが不憫でマイが声を掛けると、イオは渋々クリスタルを返した。

手の平から生み出した青い炎が宙に舞う。幻想的な光景を目で追うと、辺りを照らす光が壁と天井、床を映し出した。他には何も見えない。

「ところでここってどこなんだい？」

イオにも心当たりがないのか。

マイはメイ共々肩を落とし首を振った。

「「さぁ」」

異口同音に響くのは諦念とこれからの不安。

（本当に一体どうしてこんなことになったのかしら）

自分達は確かに大聖堂を歩いていたはずなのだ。

上を目指し、ティファがいるであろうノルマンの私室を目指していた。途中聖母アリアに遭遇し、仲間の一人であるダグラスがクリスタルに封印されるという緊急事態に陥りはしたものの、何はともあれティファの身の安全を確保とひたすら上を目指した。

その途中、通路のど真ん中でそれは起こった。

（突然クリスタルが発光……。その後私達は皆気絶して気付いたらここにいたわけだけれど、まさかこれもアリア様の罠？）

あり得ぬ話ではない。こちらは既に一度アリアに襲われている。

三人は各々警戒しながらも立ち上がり、武器を構えて四方に目を光らせた。

自分の背に二人の背中が触れる。温もりを糧に足に力を入れると

幾分か気分が楽になった。
だが、特に怪しい者はなく敵がいるという気配もない。
そもそも物がないのだ、この部屋には。敵が身を隠せるとも思えなかった。後にも先にも道は続いているものの、ここがどこであるか証明する類の物品は何一つ見つからない。
三人は同時に息を吐きながら警戒と武器を下ろし、一体自分達の身に何が起こったのかを考え始める。目の前に広がる空間に危険などないと感じたせいもある。だがまず考えないことには先々何をしていいのかも見当がつかなかったせいかもしれない。
大口を開ける怪物の胃袋の中に入ってしまったような心もとなさにクリスタルを握り締める。無機質な冷たさに、ざわついていた気持ちがやや落ち着いた。握りしめたクリスタルの中にいる神に弱音を吐きたくなかったからだ。
とはいえ文句ぐらいは言いたくなる。イオの言う通りだ。
（一体いつまでそこにいるつもりです。契約者を放って眠るなど神の風上にも置けないわ）
守れと言う気は毛頭ないが、せめて目ぐらい覚ましていてもらいたい。そして面倒を押し付けないでもらえると尚いい。こちらはティファの捜索で手一杯なのだ。何故神の封印を解かなければならないのか――。
考え、すぐに自己嫌悪に顔を両手の平で覆いたくなる。
（別に起こさなきゃ起こさないで構わないのよ、こんな人）
両親の仇なのだ。一生眠っていてくれるならそれに越したことはない。
少なくとも自分達が生を全うするまで眠っていてくれたらありがたい。
だがそれで一体どうやって仇を取るのだろう。誰が彼を断罪し殺すのか。
結局の所、眠られて一番困るのはマイなのだ。せっかく殺す為に契約したのに安穏と眠るなど許せそうにない。

（……でも）

本当にそれだけなのだろうか。

あの時自分でも訳が分からなくなるほど取り乱した。メイが困りきってイオに助けを求める程。

あれは仇が取れなくなる事への恐怖だったのか。それとも。

「それにしてもこれだけ暗いと出口も見えないよねー」

黙考するマイの耳にメイの脳天気な声が届く。顔を上げると、きょろきょろ目を凝らして闇の奥を覗き込もうとする彼女の横顔が青い光に曝されて薄青く浮かび上がっていた。

「そうなんだよね。マイ、封印のクリスタルは？」

イオの碧眼が向けられる。炎と同じ明るい青にマイは表情を繕い、クリスタルを握り締める手の力を抜いて緑の輝きを見せた。

「反応無しです。確かにここに来る直前には反応したんですが」

「かといってダグラスのせいってわけでもなさそうだし。一体何なのかな、これ」

まじまじとクリスタルを凝視するのに釣られてマイも視線を落とす。

ちらちらと光を反射する緑のクリスタルの中で、眠る神の銀髪がたゆたう。大きさは大分小さくなっているものの、はっきりと分かるダグラスの顔がぐったりと力を失っているようでぞっとした。

クリスタルを中心に、三人は同時に辺りを見回す。そこにはやはり漆黒の闇が広がっているのみであり、特に何か危険なものがある気配はない。ここから出るための手がかりもないのだが。

（ここはそもそも大聖堂なのかしら）

途方に暮れた顔をするメイとイオを横目に思案する。

（少なくとも私もメイもこんな場所を見たことがない。……貴方は一体、私達をどこに連れて行きたかったの？　ダグラスさん）

慣れた調度品や絨毯があるわけではない。マイが普段歩き回っていた大聖堂の居住空間でも、ティファについて降りていった地下でもないだろう。ノルマンやアリアの私室がある区域でもなさそうだ。

だとしたらここは一体どこか。
マイはクリスタルに触れながら軽く目を伏せる。
（イオ様はダグラスさんがやったことじゃないと仰っているけれど、本当にそうなのかしら）
光ったのは封印のクリスタル。中に眠るは銀の神。全く関係がないと果たして言えるのか。
他に可能性があるとすればアリアだが、彼女は事ここに至って出てこない。罠に掛けたら掛けたで出てきて説明ぐらいはしそうな性格なのに。
それにとマイはダグラスから貰ったイヤリングに触れた。
微かな魔力の残滓が慰めるように指先に絡む。その温もりを、光に包まれた瞬間感じた気がするのだ。押し出すような、引き寄せるような力だった。あれが転移させる為か阻むためかは分からないが、彼が何かしようとしていた事は分かっていた。
不安を隠せないまま触れた冷たさに胸がつきりと痛む。次第に熱を帯びるそれに理由と言葉を見出せないまま、しかしすぐに顔を上げ暗闇を見据えた。「ですが」イオとメイの方を向いて呼びかける。
（ここに連れて来られた目的も理由も分からなくても、私にはやるべき事がある）
他の何も分からなくともそれだけは確かなものだ。
「このままここにいても埒があきません。今は一刻も早くティファ様とアレイズ様に合流しないといけないのですから」
「そうだね。でもどこから出ればいいのやら」
「私に考えがあります」
凛とした声が周囲に満ちた。
真っ直ぐに闇を見据えているマイの瞳には実際ただの闇しか映ってはいない。それでも出口が見えているかのような強さで目を逸らさず前だけを見た。きっとそこに終わりがあると信じて。
イオにはそんなマイの思考が理解できないのか、困ったようにその短い金髪を軽く手でかき乱す。

「考え？」
だがメイは呆れるでも疑うでもなく小首を傾げて問うた。
「姉さんが言うんなら結構いい線いった考えなんだろうけど、何？」
マイが出口を信じるなら、こちらは姉を信じ切った声色だ。
それに対しにこやかに笑い返し、マイはついと自分が思いついたままの方向を指差した。
「ただひたすら前に進みましょう」
「え？」
「はい？」
単純明快な言葉に、思わずメイとイオが呆けた声を上げる。それを無視して続けた。
「幸いここには敵はいないようですし、三人で手分けして探したら道ぐらい見つかるかもしれません。どの道、こんな場所で空間転移を使った所で失敗するのがオチでしょうし。大声を出せば声ぐらい届くでしょう？　危険もそんなにないと思います」
「……一応訊くけどさ、考えってそれ？」
「はい」
「姉さん、それってあまりにも単純すぎ――……」
メイがこけそうになりながら肩を落とす。じっとりとこちらを胡乱気に見る碧眼はあっさりと無視した。
だがイオがあんな顔をするのも無理はない。
マイの考え。それは歩いていたらそのうちどうにかなるだろうという何とも短絡的で運任せなもので、到底策とは言えないものだったのだから。いっそのこと空間転移でも使ってしまえばいいのだろうが、アレイズが転移に失敗した事を考えると安易に使いたくもなかった。あれがアレイズのミスによるものか罠だったのか、今ではもう分からないのだ。仮に使うとしたら最終手段に取っておきたい。
常ならば当然の如くこのような安直な手は使わない。
もっと危険性や効率性を重視して策を練り、確実にティファと合流する術を得ようとするだろう。だがもう常識だとか当たり前だと

かそんな言葉が馬鹿らしく思えてきて、マイはやや自暴自棄な気持ちでこの方法を取った。型にはまっては駄目なのだ、もう。

イオもメイは脱力しながら、闇に溶け込む道を見やる。その横を通りすぎて前に向かって歩いて行くと二人が慌てたように手を伸ばす気配がしたが、振り向かずにさっさと歩いた。それを合図に二人が溜息をつき、それぞれ別の方向へと歩いて行く。

遠のいていく気配を振り返り、再び前を向く。

続く道はどこまでも暗かったが、イオが数を増やしてくれたのか光源があったのはありがたかった。その中をひた歩き、マイは不意に立ち止まった。

「やっぱりなかなか見つからないわね」

二人から出口が見つかったという叫びは放たれていない。

マイがいる場所も当然の如く道は続いており、光の気配も行き止まりもなかった。行けども行けども続く暗闇と一本道に気が滅入りそうだ。既にマイの周囲には音さえ消えてしまったかのようで、自分が喋っていないと何もかもが失われてしまうように感じられる。だからこうして時折立ち止まっては呟き、自分の存在を確かめていた。闇に囚われていないと、生きていると証明するように。

嘆息し、一歩前に進む。とそこで炎が掻き消えた。

「え……っ？」

急速に襲ってきた闇に目眩を覚え、壁に手をつく。慌てて辺りを見渡すが誰の気配もなく、炎は一人でに消えていた。

メイやイオが叫び出す様子はない。

「イオ様！」

声を張り上げる。だが帰ってくるのは木霊ばかりで他には何も聞こえなかった。

「こうなったら自分で……っ」

指先に意識を集中させる。ダグラスから簡単な魔術なら教わっていたから、光を生み出す程度なら――。

「……あら？」

だが、いくら魔力を練り上げても光は全く現れなかった。
境界線があるのかと、マイは立ち止まってまじまじと何もない空間で手を振った。何が変わるわけでもないただの道。何よりどれだけ後ろに下がっても光は生み出せない。魔術そのものが使えなくなったようだ。
（誰かの罠？　でもそれなら何故姿を現さないの？）
まずい、と内心で舌打ちする。
これではいざという時空間転移を使うことさえできない。
それにイオの事が心配だった。彼の攻撃手段は殆ど魔術に頼っている部分が大きい。
「イオ様！　聞こえますか！」
もう一度声を張り上げる。返事はやはり、ない。
マイはすぐさま踵を返し、つかつかとイオを探す。メイも心配だったが彼女にはリングリングがあるのでさしあたって問題はないだろう。……もしメイでも駄目なら、それはイオでもマイでも太刀打ち出来ない。人間ではないからだ。
それに、と考える。不本意な考えに身震いがした。
（メイは秘術の事を覚えているのかしら）
以前ダグラスのせいで覚醒させられた時、彼女の様子が少しおかしかったことは姉であるマイが一番良く知っている。全てを再び忘れたような、取り戻してしまったような態度の真偽を問えなかった事が悔やまれる。しかしいくら問うてもメイが答えないというのもまた、マイが一番よく知っていた。仮に忘れていても覚えていても、彼女はきっと答えないだろう。忘れている場合、答えられないというのが正しいが。
ただ、万一覚えていた場合の事を考えるとイオを探すよりもメイを探した方がいいのではないかと考えを改めたくなる。
獣化が魔術を介して覚醒されるものであるなら問題はない。今は魔術が使えない。覚醒は防げるだろう。
しかしもしそうでないのならどうだろう。彼女が自らの意思で覚

醒をすることができるというのなら。……その時彼女はその力を持ってこの場を乗り切ろうと考えるかもしれない。

無論これは全てマイの予測であり、そもそもメイがきちんとした記憶を持っているのかすら確認が取れない。だがあの虚ろさと凶暴さの入り交じる、全くの別人となってしまうメイを見るのは嫌だった。

（まぁ、獣化した所でこの場を脱する方法など見つからないとは思うけれど）

力任せに壁を壊せば解決するかもしれないなと思ったが、こつんと叩いた壁は存外硬く分厚かった。重たい音は隣に部屋がないと感じさせる。ここを壊して外に出るとなると、自分達まで生き埋めにされそうだ。

（それにしても、どうして私達ってこんなに色々な場所に転送させられるのかしら……）

おまけに大抵の場合脱出方法がない。仮に方法があっても脱出できない事情ばかり積み上がるのだ。

顔をしかめ渋面を作る。

すると突如としてマイの深青のメイド服を強く揺らす風が巻き起こった。

「これは魔術？　でも、どうして」

ぐらつく体をどうにか立て直しつつモーニングスターの柄を握り締める。しかし、しばらく待っても攻撃がされないのでマイは訝しげな顔をしながら頭の上に疑問符を浮かべた。

今のは確かに、魔術による竜巻だった。

だがこの空間は神であるイオや、マイでも魔術を扱えない場所である。

そんな場所で一体誰が突風を起こしたのか。

（魔術を使えなくした輩？　それなら、元凶はそこね）

すっと目を細め、厳しい表情で辺りを警戒する。

もし来るなら、必ずここに来るはずだ。そんな予感がした。

そして、マイの予想通りにそれは現れた。
「――誰です！」
くすくすと小さな笑い声に、マイはイオ達にも聞こえるようにと声を上げた。なるべく高く、大きく。それを恐怖と取ったのか、笑い声は更に軽やかに響いた。
モーニングスターの柄をぎゅっと強く握り、いつでも戦えるように体に力を入れる。
そんな自分の前で、ぼんやりと細く柔らかそうな肢体の輪郭が浮かび上がった。
「人間とは不便なものね。この程度の闇に負けてしまうのですから」
闇に浮かぶ、人一人分が入っていそうなほどに巨大な光。その中で輪郭を示す闇に負けない緋色の光は、マイをからかうように小刻みに明滅してやがて完全に彼女の姿を取った。
「ねぇ、マイティーナ・グラス。……と、そこにいるのはダグラスかしら？　随分小さくなったのね」
「貴女は……」
（世界の意思）
てっきりアリアが来ると思っていたというのに、まさかの大物が現れるとは。
マイは自分やダグラスの名前を言われたことよりも、その鮮やかな緋色が持つ繊細さと冷たさに愕然とした。
（あの時、ビビッドでティファ様の体を乗っ取ってから姿が見えないと思っていたけれど）
ビビッドではティファの姿をしていたものの、この声は忘れようはずがない。ティファよりもやや低い、黄昏を纏う世界の意思。彼女の事だけは忘れられるはずがなかった。恨みも怒りも疑念も、たっぷりとあるのだ。
知らず、体が震える。
マイは慌てて自分の体を抱きしめるように支え、こちらに向けられる微笑を睨めつけた。

「貴女は、ティファ様の体を乗っ取った――」
「そんな名前、聞きたくないわ」
レイナですね。そう尋ねようとするマイの言葉を遮るのは、聞く者の魂ごと凍らせてしまうような冷たい声だった。その鋭さに制され言葉を失う。緋色の瞳はここにいないティファへの憎悪を湛えており、視線だけで人が殺せそうな熱を孕んでいる。マイも流石に言葉を無くした。主へ向けられる憎しみは全て血によって贖ってもらうというのが自分の信条だというのに、この時ばかりは何も言えずにいた。
「それはともかくとして」
黙りこむマイに、彼女がすぐさま笑みを浮かべる。
あっさりと失われた憎悪に目を丸くすると、彼女は柔らかそうなスカートの裾をつまんで優雅に一礼した。
「自己紹介がまだだったかしら？　私はレイニウム。貴女達が言うところの、世界よ」
「レイニウム……、レイナ。やはり貴女がそうなんですね。ですが何故世界がこのような場所に」
「あら、だってここは私の家に行くために絶対に通らないといけない道ですもの。私も家に帰る途中だったのよ。それで、貴女はここで何をしているのかしら？」
「知りません。気付いたらここにいましたから」
楽しげなレイナの声に淡々と答えると、彼女は「そう」と適当な相槌を打ち辺りをぐるりと見渡した。ふわりとスカートが舞う。闇の中一人だけ光を纏う彼女は優美とも言えるゆっくりとした動作で何もない空間を値踏みするように見つめた。
「ねぇマイティーナ。貴女は知っているかしら」
そして小さく笑った。
「何をですか？」
返すとレイナの目が弓なりに細められた。
「この空間を通れるのは私と、私が許した者だけ。だから迷い込ん

だだけの貴女やメイティーナ・グラス、そしてイオンやダグラスもここから決して出られないのよ。そう、たった一つの方法を除いたら、ね」

そうして彼女はその赤すぎる色で周囲を灯しながらくるりとターンをして謳うように言い放った。紡がれる言葉はマイを嘲笑うためか、絶望を呼ぶ為か。どちらにしてもいい意味があるとは思えない。

マイはそんな機嫌の良さそうな世界に向かい、心底怪訝そうな顔と声を向けながら尋ねた。

「……何が言いたいんです？」

彼女の言葉から、ここから決して出られないというのは分かった。だが、どうして彼女はたった一つだけ方法があると言うのだろうか。

（これは罠だわ）

確信を込めて胸中で呟く。あまりにも不自然だった。

とはいえ、こうも思うのだ。

どうして世界が自分ごときにちゃちな罠を張るのかと。

そんな事をするぐらいなら、いっそ殺してしまえばいいものを。

吐き捨てるような言葉と共に封印のクリスタルを握り締める。するとレイナもマイに近づき、指先だけクリスタルに触れさせた。ダグラスに話しかけるように。

何故か、どうしてか、無性に気分が悪くなった。

「触らないでくださいっ！」

気付けば怒声を放ちクリスタルを両手で包み込んでいた。

そんなマイの姿にレイナは一瞬呆気に取られた顔をしたが、すぐに気を取りなおしたように姿勢を正す。睫毛が伏せられ、憐れむような顔が向けられる。だというのに放たれた声は随分きっぱりとしたものだった。

「この前貴女に会って思ったのだけれど、貴女……私と一緒に来る気はない？　本当なら、貴女の妹であるメイティーナ・グラスにもそう伝えたいのだけれど」

なら伝えてみればいいと、マイは意地悪に考える。
本心から言われているのであろう誘いに全く驚かぬわけがない。相手は世界だ。そんな強大な存在に共に来いと誘われるなどとは夢にも思っていなかった。だが、すぐに怒りを込めた瞳でレイナを見返し、彼女の誘いをせせら笑う。
「言いに行くだけ無駄ですよ。私も妹も考えは同じです」
自分達に一度でも会った事があるなら、そんなもの分からぬはずはなかろうに。
「私達はティファ様に、ティファニエンド・グランハート様にお仕えする身。他の誰かを主人に据えるつもりなど毛頭ありません」
主人の鞍替えなど、とんでもない。
神々に彼女には勝てないと言わしめた強い亜麻色の瞳が、更に強固な意志の光を帯びてレイナに向けられる。
「そうでしょうね」
レイナの口から吐息が漏れた。
どうやらこれは予測済みの答えらしい。分かっていればいいのだと満足していると、深く息を吐き出した彼女が透明な笑みを浮かべた。
「ティファにエンドは」
囁く。その声は彼女が放つ緋色の光よりも、遥か先の闇まで響かせた。マイはその声をただじっと聞いていた。
「彼女が自分の意志で事態を動かしたのはジュードと契約をした時だけだわ。後は全て流されるまま、何もせずに彼女はここまでやって来た。実際に事態を動かし前に進めていたのは私や貴女達であって、彼女じゃない。……まぁ、私を自分の体から追い出したのには正直驚いたけれど」
「仰りたい事が分かり兼ねます」
本当に分からない。そんな事が何になるのか。
苛立ちさえ滲ませてきっぱりと返す。その声にレイナもまた、切り捨てるような声色で応じた。

「彼女は何も知らずに、何にも関わらずにここまで来た。きっと私を殺す事ですら成り行きになるのかもしれない。だから最後に一つだけ。一つだけ彼女が自分の意志で決めるべき事を作らないといけないと思っているの」

（違う）

レイナが透明な笑顔を浮かべたまま言うのを黙って聞きながら、心の中で反論する。

自分が仕える少女は決して流されて来たのではない。

世界を探す旅に出ると決めたのはティファだ。

あれだけの過去を聞きながらも旅をやめないでいるのも彼女だ。

悩んで迷って散々傷ついて、それでも彼女は道を選んだ。自分の契約神、アレイズの願いを叶える為に。彼女の願いは全てそこに終始している。一貫して、一度もぶれたりしていない。

それなのに流されるままに生きているとは勘違いもいいところだ。

マイは怒りを募らせ、両手の拳を握りそれでも耐えた。短気に任せて武器を揮うには時期尚早だと分かっていた。

耐える姿に、不意に悲しげな声で世界が囁いた。

「世界には意思がある。だから世界を動かすのも変えるのも意思の力なのよ。そう――世界が、私が持つ意志よりも強い意志の力があれば人間であろうと神であろうと、等しく何でもできるもの。それこそ己の中にある持っている先入観すら覆すことだって。世界である私が与えた先入観など全て無視して、何だって生めるし、壊せる」

「だから何を言って――！」

「……世界も、色々と大変だということよ」

マイが言い募ろうとすると、彼女はそう言って軽く息を吸い込む。

「人間とこんなに話をしたのは久しぶりかもしれません」

囁く声は、言うべきではない言葉を言ってしまったという悔恨が滲んでいた。マイの行動の何がレイナの心の琴線に触れたのかは知らないが、彼女は今本音を漏らしているのだと思った。だからこそ、マイは口を閉ざした。

（言うべき言葉なんて、見つからない）

深い、深い孤独。深淵が見える。

その孤独を背負った彼女の口調に何か言いたくはなったものの、実の所マイには本当の孤独など分からない。だから自分が何を言ってもそれは全て空虚で、彼女には届かない気がして結局は突き放すように沈黙を貫いた。

深い闇。

再びその闇に視線を移すと、どうしても落ち着かない気分になった。

人は闇に耐えられない。

束の間の闇を怖がらずに勧めるのは光を知っているが故だ。いつか必ず光を見られる。その希望が人の心を救い、繋ぎとめる。

だがこの闇は、一切の光を受け付けない。

一人だった彼女は、この暗闇の中を進みながら何を思ったのだろうか。

（こんな場所をたった一人で歩いて、帰って、世界を見守って。自分が万能ではないと知りながら、一体何を考えたの）

大事な者達の命を奪った世界を許す気になどなれない。

しかし彼女のこの孤独だけは認めてもいいと思えた。アレイズがティファを選んだ以上、彼女は一人だ。

そう考えるとひどく落ち着かない気持ちになり、マイが一人胸を押さえた。

その間レイナは小さな、本心からの微笑を湛える。

柔らかなそれは憂いを帯びた眼差しにも似た悲しさでマイを見つめていた。

彼女にも分かっていたのだろう、マイが何を考えているのかということが。

光の輪郭が近づく。耳元に唇が寄せられ、冷たい吐息が静かに触れた。

「ここを出るたった一つの方法を教えてあげるわ」

誘惑するような声色に目を見開く。レイナは唇で弧を描き、小さく囁いた。

「それはね――」

低い声が紡ぐ言葉に、マイの体が震える。

口にするだけでも罪悪感を感じずにはいられない程に残酷な方法に、頭が真っ白になった。

（だから、レイナはこんなに悲しそうなのね）

不意に納得した。

自分の孤独を一瞬でも理解し、自分の事を考え多少なりとも落ち着かない気持ちになったマイティーナ・グラスという人間に対し提案するその内容の残酷さに、彼女も罪悪感を覚えていたのだ。

だが……、だが一体それが何の救いになるのか。

「覚えておいて。これは、貴女にしかできないことなのだから」

光が、消える。

世界が残した言葉はやけにマイの頭に強く残り、しばらく離れることなく何度も何度も回り続けた。

レイナの光を見つけて走ってきたのだろう。息を切らせたイオが「何があったんだい？」と何度も話しかけるが、うんともすんとも言えない。

ずっと、ずっと頭の中でレイナの言葉が繰り返される。

終わりの音が密やかに鳴り響いた。

第七十話

質素であるように見せかけ、意外と豪奢なシャンデリアを飾りつけているノルマンの私室。

そこには部屋の持ち主である教皇ノルマンと聖母であるアリアが無言で佇んでいた。

彼等はお互い、特に何を言うわけでもなく窓の外を見ていた。窓の外に見えるのは、空色の髪をしたかつての聖女と彼女と契約を交わした全身黒ずくめの神だ。レイニウム大聖堂を一度振り返り、きっぱりとした決別を籠めて背中が向けられる。

彼女達はもうここへは帰ってこないだろう。教皇にも聖母にもそれが分かっていた。

やがてノルマンが口を開いた。

「空間転移ができるほどに弱まっていましたか、ここの結界は」

「恐らくは世界の仕業でしょう。彼女はここにアレイズ神がいることを望んではおりませんでしたから」

アリアが答えるとノルマンは微笑を浮かべながら彼女を見やる。

既に長い時を生きているはずの彼女はまだ二十代ほどの美しさを持ち、やはり同い年程度に見えるノルマンを見つめ返した。

二人ともティファが大聖堂にいた時にはもうかなり年老いた風貌をしていたのに、今では見違えるほどに若返っている。……そう、まるで時が経てば経つほど若くなるのだというかのように。

二人はもう一度外を見て、それから再び呟く。

「ですが、あの二人を世界へと至る道へ導くのは恐らく」

「貴女が封印したダグラス神、ですか」

「えぇ、さすがに彼と戦ったら正真正銘の殺し合いになってしまいそうでしたので、不本意ながら封印をさせてもらいました。最もそれは今頃彼女が解除しているころでしょうけれど」

そこでアリアは一度言葉を区切り、衣擦れの音と共に法衣を揺ら

しながら指先だけで窓枠に触れた。
小さく息を吐き、少し悲しげに呟く。
「本当は演技だけでよかったのですが。マイティーナとダグラス神、メイティーナとイオン神がいなくては彼等が世界へと辿り着くことは不可能ですし。ですから殺し合いに突入した時は本当に驚きました。投降してもらえると思っていたのに」
暖かく慈愛に満ちた瞳が一度だけ苦しげに細められる。
「未来を知っているというのも、悲しいものですね。知っていて尚、止められないのも」
続け、アリアはそれきり口を閉ざした。
幼い頃から大切にしてきた娘同然の少女達の未来を頭に思い描き、それ以上何も言えなくなったのである。それはノルマンも同じだった。彼も眉根を寄せて苦渋の顔を作りながら自らの手を見下ろす。
彼等には元々ティファを初め、あの双子を殺す気などなかったし他の神を殺す気もなかった。ただ、敵対していると見せなくてはならなかったのは事実だ。その為には相手を殺しにかかる姿勢こそが一番確実だと考えたのも。
そんな行動に出た彼等の事を知ったなら、ティファなら頭を悩ませただろう。何故そんな事をわざわざしなくてはならないのかと。ティファニエンドに思うままに行動させたければ懐柔するのが一番だ。敵に回るべきではない。だが、それでは駄目だった。
二人は黙り込み、苦しげな顔を強張ったものに変えて遠くに見えた銀の光に目を細める。
「「そろそろですか」」
その光の正体を知っている二人の声が重なった。
隣に並んだ二人の頬を窓から入り込む冷たい風が触れる。
そこから後ろに流れ去るように言葉が流れた。
「彼女が望んだ、最後の舞台がもうすぐやって来ます」
「世界が変わるか、変わらないか」
「それは人ならざる我らにも分からぬ未来」

「世界の意思で動いている我らに見えない明日」
「世界に託されたこの力」
「それは世界そのもの」
「全てを与えられると同時に、意思を受け取り理解してしまった我らだからこそ」
「願わずにはいられません」
そうして、どちらが話しているのか分からないような口調で続ける。
彼等、目の前に見える銀光から全く目を逸らすことなく最後に声を揃えて言った。
「「世界が救われますように。この理不尽な世界が変わりますように」」
そんな、矛盾しているともいえる言葉を。

◇　◇　◇

銀光がノルマンとアリアの目に届いていた頃、光が発生した場所にいたティファとアレイズも立ち止まり、その光を凝視していた。
「な、何？」
「あの光は、ダグラスか？」
指輪の力を借りて浮遊する二人の前には、人影のない銀の光が見えている。その光はただひたすらに無機質な明るさを放ちながら二人の前に鎮座していた。言葉が交わされることも、何らかの動きが加わることもない。ただ、そこにあるだけだ。これでは何がしたいのか全く分からない。
ティファはその光をじっ見つめて、それからアレイズの前にすっと出た。
「お、おいティファ――」
「大丈夫よ」
ティファが何をしようとしているのかが分かり、慌てて肩を掴ん

で止めようとするがそれは簡単に制された。
確かにこれが本当にダグラスであるのならば、ティファに危害を加えるなどということはないだろう。第一、そんな事になったら一生マイに口を利いてもらえないと彼だって分かっているのだから。
しかし、それでもこの光がダグラスのものだという保証はない。
（下手をしたらあの教皇が何か仕掛けたのかもしれないんだぞ……？）
その可能性は今のところゼロではなく、逆に限りなく高い。
自分達は大聖堂から出てきたばかりなのだし、教皇がそれを許すとも思えなかった。
「何かしら、これ」
「あ、馬鹿っ！　安易に触るな！」
そんなアレイズの不安をよそに、ティファは大雑把とも言える所作で銀の光に向かって手を伸ばす。左手、指輪がはめられている方の手で。それだけが唯一アレイズの不安を和らげた。彼女も危険は承知の上なのだと分かったせいかもしれない。
あれならば何があっても指輪が作動してティファが守られる。
それでも守るための力には限界がある。だからこそ安易な行動をさせたくなったアレイズは、簡単にその怪しい光に向かって手を伸ばしたティファに向かって声を上げた。だがもう、遅い。
銀光とティファの指先が触れ合う。その瞬間。
「え？」
「――ティファっ！」
彼女の指先は光に飲み込まれ、そして時間の経過と共に彼女そのものを飲み込んでしまった。
後には、彼女の不思議そうな声が残るのみだ。
アレイズは慌ててそちらに向かい、とてもティファを飲み込んだとは思えない程のサイズに戻った光に視線を落とした。
躊躇なく光に触れる。
すると先程ティファが飲み込まれた時と同じ大きさを持って、光

はアレイズを飲み込んだ。
危険だとかどうとか言ってはいられなかった。
吸い込まれるような感覚を味わう。その刹那、視界が大きく開けた。
眩いばかりの光に吸い込まれて辿り着いた先は、一面の闇だった。
元々黒い相貌をしているアレイズは、たちまちその闇に紛れて自分すら見えなくなった。
「ティファ？」
「アレイズ？　よかった。そこにいるのね」
それが不安になり、恐らくここにいるであろうティファに声をかけると案外と普通に答えが返ってきたのでほっと安堵の息を洩らす。
「全く、お前な。頼むからちょっとは考えて行動して――」
「それより。ねぇ、ちょっとこっち来て」
「こっちと言われても……」
人の話を聞く気はないのか。
一瞬文句を言いたくなったが、慌てたようなティファの声に渋々近づこうとし、直後困りきって首を振る。いくら明るいスカイブルーの髪を持つティファとはいえ、闇の中では捉えられない。
「あ、ちょっと待ってね」
困惑していると、ティファが何か思いついたようにパッと小さな灯りをつけた。翡翠の指輪から発せられる光だ。まさか自分との契約の証をライト代わりに使われるとは思っていなかったが。
しかし、文句を言おうとした口は再び別の言葉に塗り替えられた。
光の先に見える者。銀の髪と瞳を持つ高位神を凝視した。
「ダグラス、貴様……」
「やっと来たか、亡霊」
呟くと、ダグラスがまるで待ちくたびれたとでもいうかのように欠伸を噛み殺しながらティファの隣に並ぶ。
（やはりあの光は、ダグラスだったのか）
仲間と呼べるのか呼べないのか微妙な神だったが、一応知り合い

に会えたということで安堵する。しかしどう見ても彼一人の姿しか見えないことにアレイズは疑念を抱いた。メイやイオはともかく、マイがいない。彼の傍にはいつもマイがいたというのに。

眉を顰める。するとその疑念に答えるように、ティファが小さく首を振った。

どうやら、アレイズがここに来るまでに簡単な説明は受けているらしい。……あるいは無理矢理聞きだしたのかもしれないが。

「私達、ちょっと特殊な所にいるみたい。まだマイ達には会えないって」

「特殊な所？」

「えぇ。ダグラスが封印なんて間抜けなことされちゃって。ここはその封印空間らしいわ」

今日一日で空間ってつく所二つも巡っちゃったわとこめかみに人差し指を押し当てるティファに、ダグラスが吐き捨てるように言う。

「間抜けって言うな。大体、どうせお前は安易にあの光に触れてここまで来たんだろう？　お前こそ間抜けだ。絶対この手に引っかかると踏んで正解だった」

「何ですって！？」

「あー……。もういい、頼むから話を進めてくれ」

何やら喧嘩になりそうな雰囲気を慌てて制し、先を続けるように促す。ここで喧嘩でもされたらいい迷惑だ。どちらも力が強すぎる。

アレイズはげんなりしながら、ふと二人を注視した。

以前から仲の悪さは折り紙つきだが……、どことなく空気が違う。

（いつの間に仲良くなったんだ）

一応親の仇だろうに、ティファはマイの覚悟を知っているからかダグラスを突然攻撃したりはしない。ダグラスも今まではティファと口を利く事がなかったはずだが、アレイズなしでも事情を説明できる程になっていた。

不思議に思い理由を考えてみる。ぽんと浮かんだのはいつも理知的な眼差しの彼女だった。

（そうか、マイだな）
恐らくはマイがティファと仲良くするようにとでも言い含めておいたのだろう。一度だけではなく何度も言いつけたに違いない。そしてそれに勝てるダグラスではない。
（まぁ、今の様子を見ているとマイには仲が悪そうに映るかもしれないが）
それでもこれはこれでまだいい関係と言えるだろう。それがいいことかはさておき。
アレイズはやや複雑な気持ちになりながら、口を開けば喧嘩になりそうな二人のうちダグラスを見て尋ねた。
「それで？　外界に干渉できるぐらいならどうしてここを出ない？」
「あぁ。干渉はできるんだが出るまでに少し時間がかかるんだ。だから近場にいたお前達を呼んだ」
「俺達を？　何でだ、貴様の場合マイを探すのが最優先だろうが」
「……頼みがあるからだ」
ダグラスは俺だってさっさと出たいという気持ちを隠しもせずに告げた。嫌そうに顔を歪めている辺り、嘘はついていそうにない。
そして彼は本当は頼みなどしたくなさそうな顔をしてアレイズとティファを見下ろした。
二人が黙ってダグラスを見返す。すると彼は二人を交互に見た後、おもむろに人差し指で丸い円を描き始めた。
つ、と音がして白い円が描かれる。
魔力で描かれた魔方陣だと気付いた時には、円の中に見慣れた人物がいるのが見えた。
「三人とも！？」
ティファが声を上げる。
映っているのは、双子の姉妹と金髪の髪だった。
「これは、ここと同じような場所じゃないのか？」
「似ているが違う。奴らは封印なんぞされていないからな」
アレイズの問いにダグラスが答え、円の中心に立つ人物を切なげ

に見つめた。深青のメイド服を着た亜麻色の少女はマイで、彼女はイオとメイに何やら声を掛けられていたが何も答えず、ただぼんやりと真正面を見ているばかりだった。

いつものしゃんとした態度からは想像つかない姿にティファが眉を顰める。

そんなティファの顔など知ったことではないと、ダグラスはただマイだけを見て唐突に呟いた。

「世界が、マイティーナに干渉した」

ばっとティファが彼を見ると、ダグラスは眉根を寄せてこの上なく不機嫌そうな顔のまま続ける。

「身体には異常ないようだが、恐らく何か言われたんだろう。……世界に会ってから、ずっとあの様子だ」

言われて視線を戻すと、メイが心配そうにマイに声をかけているのが見える。何かあったのは一目瞭然なのだ。魂を分かつ双子の妹が案じないわけがない。第一、あのマイがぼんやりしたまま人の話を聞かないというのは十中八九何かあった証拠なのだから。

誰に何を言われても、どれだけ衝撃を受けてもひたすら前だけを見ていた。敵なら叩きのめし、味方であろうともその黒い笑顔で屈服させてきた、そんな彼女がこれだ。これを異常と呼ばずにして何と呼べばいいのか。

ふっと、映像が途切れる。突然消えた映像に目を丸くしながらダグラスを見ると、彼は疲れたような溜息を吐きながら「頼む」と呟いた。あまりにも力なく、今にも手折られてしまいそうな弱々しさだった。

「俺はまだここから出られない。だから、その間マイティーナを守ってやってくれ」

たとえばそれは、世界が与えた何らかの言葉から。

たとえばそれは、彼女に害をなす全ての存在から。

本来なら守るべき神が、初めて頭を下げて二人に頼む。

アレイズもティファも、何も言えなかった。

だが、しばらくするとティファが顔を上げて「私を」と呟いた。
その言葉に顔を上げたダグラスに向かって笑いかける。
「私を誰だと思ってるの？」
その笑顔は、大聖堂を出ると決めた時の彼女の笑顔と相違ない優しいものだった。そう、ダグラスが思わず見惚れてしまうほどに。
ティファは固まったダグラスに向けて続けた。
「善は急げ、でしょ？」
さっと鮮やかな笑みが翻り、アレイズの腕を掴む。
「アレイズも行くわよね？」
あまりにも強引な行動に言葉も出せないでいると、その間にダグラスが小さく礼の言葉を言いながらスペルを唱え始めていた。待て、まだ行くとは言ってない。声に出したくなったが、亡霊と呼ぶ自分にさえ頭を下げなければならないダグラスの心情を思うと何も言えなくなった。むかっ腹の立つ男ではあるが、こと契約者に対する気持ちに関しては通じる部分が多い。
初めて出会った時、その命を奪うものとして顕現した銀の風。それは今度は二人を優しく包み込み、その場からマイ達のいる場所へと運んでいく。春の風よりも暖かい匂いを持った銀の風に心地良さそうに目を細めていると、ダグラスが最後にはっきりとした声で「マイティーナを」と言った。
「マイティーナを、頼む」
若干震えたように耳朶を打ったその声が次第に遠ざかる。
風が、みるみるうちにティファとアレイズを遠くの空間へと運んでいるのだろう。だからダグラスの声が本当に震えていたのか、ただそう聞こえただけなのかは分からなかった。
何も分からないまま、離れていく銀の神に頷きかけ前を見る。そうして二人は闇のごとき黒の風と、雲と青空のような風となり彼の頼みを聞き入れるためにマイ達がいる場所へと向かった。

◇　◇　◇

――だから二人は知らない。

ダグラスの背後に現れた緋色の光、それが暗い闇からダグラスを呼んだことを。

「真実は告げなかったのですね」

ダグラスの銀髪に微かな赤が混じった。だがダグラスは振り返ることなく、不愉快そうに鼻を鳴らし答えるのみだ。

「嘘をついただけではないだろう。俺は本当のことしか言っていない」

「そうでしょうか？　少なくとも、私が何を言ったのかを黙っていたのには驚きました」

「それは嘘ではなく、言わなかったというだけのことだろう」

自分の銀髪に赤を混ぜる光を放つ、緋色の少女。彼女はダグラスの馬鹿にしたような言葉にも動じず、ただ静かに目を伏せて尋ねた。それは、あまり答えを期待していないような響きを持っている。

「貴方はこれからどうするつもりですか？」

どうするもこうするも、ない。

真面目に問いかける声に沈黙する。答えを返さないダグラスに、しかし彼女はいつまでもその場に佇んで闇を照らし、答えを待っていた。その気配を感じ、ダグラスはさっさと帰ってほしいと願いながらも口を閉ざす。

かつては仕えた存在である重みが、今も胸に残っている。

そう、たとえ自分の契約者をあのような状態にした張本人だとしてもそれは変わらないのだ。そう思うと気が重い。さっさと消えろと攻撃できないのも頭の痛い話だった。　嫌悪し、躊躇いもなく殺せたら苦労しないはずであるのにと。

苦虫を噛み締めたような顔をすると彼女が囁いた。

「貴方の封印は解除しました。これからどうするかは、貴方の自由です」

「……」

黙ったままのダグラスなど意に介さず続けられる言葉に押し黙る。
そして、何にも答えないという態度を見せると彼女は諦めたように一歩下がった。どうやら、言いたいことを告げ、もう用事はなくなったようだ。
次第に強くなる光は、その光に目を背けているダグラスにもよく伝わってくる。
収縮し、解き放たれるのを待つばかりの光に背を向けたままダグラスは何も言わない。彼女の方も、今更何かを言われることはないだろうと思い、そのまま光を解き放つ。「待て」
そこで初めてダグラスは彼女を呼び止めた。
光が遠くに拡散し、緋色の光が一時的に消える。闇の中にあっても尚輝き続ける緋色の瞳が驚きに見開かれた。ここで呼び止められるとは思ってもいなかったのだろう。世界の意思を驚かせられたことに満足し、ダグラスは目を閉じた。
口元を緩める。思い描くのは緋色ではなく、亜麻色の脆く優しく、強い少女の姿だった。
「さっき、俺の答えを訊いたな」
「……ええぇ」
彼女が頷く気配がする。
それに合わせて目を開ける。水銀を流し込んだような銀の瞳が、ひたと彼女に向けられた。
「なら答えてやる。俺の答えは俺ではなくマイティーナが決めることだ。俺は、マイティーナの意志に従う」
そんな事は当たり前で、誰に言われるまでもないし訊かれる程の事ですらない。
自分にとってはこれが全てで、これしかないのだ。マイさえ在れば、あとはどうでもいい。世界が勝ってもティファニエンドが勝っても、マイさえ笑っていられるなら。
二人にしか分からない会話に、彼女は目を強く閉じて再び光を創る。

背を向けていたダグラスは、その方向を見ることはなく毅然と前を見たまま彼女が消える気配だけを感じていた。
だが不意に疲れたように座り込み、今は遥か遠い場所にいる契約者に向けて呟く。
足枷は外れた。もうじき自由になるだろう。
だが、追いつくにはまだしばしの時間がかかる。
その時まで、どうか。
「どうか無事で」
切実さと真剣さを織り交ぜた感情でもって契約者の無事を願う。
目眩が襲う。一度強制的にレイナに眠らされた反動か、ダグラスはややふらつきながら自分の力の回復を待った。

第七十一話

――闇の扉を開く鍵は、尊い犠牲のその上に。
長い長い道のりは全て、彼等の為の賛歌を謳う。

◇　◇　◇

銀の風に包まれティファが次に目を開いた時、まるで変わっていないじゃないかと目を丸くした。
足元だけは踏みしめる大地があると理解できるものの、辺りは一辺の闇に包まれている。先程同様、暗く先すら見通す事のできない闇の中だ。アレイズなど風貌が闇に溶け込んでおり直ぐ傍で放熱していなければいるのかさえ分からない。
かろうじて触れ合う腕から伝わる体温が、ここに誰か居るのだと知らせてくれる。ティファとて姿が見えず不安だからと言って声を張り上げる程の子どもではなかった。闇が与える恐怖を冷静に振り払い、触れ合うアレイズの腕を掴む。冷たい絹の感触が慣れ親しんだものであると感じると、そこでようやく吐息した。
左手を上げ、顔の前に掲げる。包むように薬指を拘束するそれに魔力を込めると翡翠色の淡い光が周囲を満たした。煌々と自分とアレイズを照らす光は先までは照らせないようで、ティファはかろうじて見えるアレイズに目を向けて首を傾げた。
「ダグラスったらどこに私達を送ったのかしら。マイもいないようだし」
「そうだな。少なくとも、この辺りにはいないようだ」
辺りをキョロキョロと見渡しながら尋ねると、アレイズは律儀にもそう答える。言われる通り辺りには誰もいない。敵がいない代わりに案内板も目印もなく、一体ここがどこかさえ分からない。
ダークブルーの双眸に厳しい光を灯して、ティファは前を真っ直

ぐに見据える。
　頭の中で、ここに来る間際にダグラスが見せた真摯な願いと表情がありありと思い出された。
『マイティーナを、頼む』
　やや震えた声はこれからマイの身に何かが起こると確信している風で、それが気になっていた。その上で何もできない歯痒さに苦しんでいるかのような。もっとも、ダグラスならマイの傍にいられないだけで十分苦痛だろうが、反面彼女の意志と力を信じている彼はもっと鷹揚に構えていてもいいような気もした。それができないのは、できないなりの理由があるのかもしれない。
（一体マイに何が起こるっていうの？）
　ダグラスがマイに関することで嘘をついているはずがないとティファは信じきっている。だからあの表情が演技だなどという可能性は一切省き、代わりに今傍にいない自分のメイドに何が起こるのかという不安ばかりを胸に抱いていた。
　世界はマイに干渉したと言っていた。何か言われたのだとも。
（何を言われたの？　私やアレイズならともかく、レイナはマイに用はないはずだわ）
　グラスがかつての通り最強の魔術師と謳われるならまだしも、血も薄れ力の殆どが失われた末裔に用はないだろう。レイナに必要なのはアレイズであり、敵対するのはティファだ。マイは自分に付随する者としか認識されていないはず。……自分が意識を失っている間に切った彼女の啖呵を世界が気に留めていなければの話だが。
「とにかく皆を探さないと」
　広がるのは一面の闇。右も左も分からない。
　ティファは指輪から発せられる光に頼りながらおぼつかない足取りで自分の気の向くまま先に進み、誰かの足音でも聞こえないかと耳をそばだてた。光はせいぜい自分達の足元しか照らせないのだ。後は聴覚に頼るしかなかった。
　闇色を纏うアレイズとはぐれないようしっかりと手を繋ぐ。

静かな、染み入るような闇。暗がりを二人で歩いているとまるで世界に自分達しか存在していないような錯覚さえ覚えたが、それは照れよりも恐怖をティファに与えた。

これが星明かりの下であったならロマンティックだっただろう。春の日差しの下なら長閑だったかもしれない。光源一つない闇の空間でさえなければ。

「くれぐれも離れるな。この闇の中だとお前を探すのも骨が折れる」

アレイズも同じ事を思っていたのだろう。きつくティファの手を握りしめた彼の横顔は敵への警戒で硬かった。己を案ずるぶっきらぼうな声に頷き、ティファは歩を進めながらもう一人のグラスの末裔の事を考えていた。

（メイはレイナと接触していないのよね？　どうしてマイとだけ話さなきゃならなかったのかは気になるけど、メイに接触しなかったのはよかったのかもしれない）

自分はまだ見た事はないが、メイの中には獣が封印されていると聞く。プラクトで一度解けた封印はイオによって再封印されたそうだが、今になって無性に心配になってきた。悪い予感、というのだろうか。この先どこかで敵と遭遇した時、何かの弾みで封印が解けてまた彼女が獣化してしまう恐れがあるように思えてならなかった。同時にそれが彼女を傷つける結果になるだろうとも。

何故だろう。記憶を取り戻してから随分時間が経つが、今になって気にかかる。

無意識の内に感じ取る魔力の質が変わってでもいたのだろうか。

「ねぇ、ジュード。メイは大丈夫かしら」

「メイ？　今はマイの話じゃなかったのか？」

「そうだけど、何だか急に心配になったのよ」

ダグラスは元々マイのことしか考えていないのでメイの状況まで聞けなかった。悪い話をされていないのだから無事なのだとは思うが、ティファの胸を占める不安の半分をメイが担っているのは事実だった。

「メイの心配というと、封印の件か」
「うん。本当に再封印は成功したのかしら」
イオを疑うわけではないが、不安の強さに思わず呟く。
肌がざわつく。闇や不安に寒気を感じているわけではなく、正体不明の何かを感じ取っているような不吉さだった。魔力ではないが、一体これはなんだろう。
（レイナ、じゃないわね。彼女の魔力ならよく知ってるもの）
あれだけ長い間身体の中に留まっていた力だ。分からないはずがない。
ティファは胸に手を当ててかつて己の中にあった力を感じ取ろうとする。だがレイナの意思の残骸も力も見えず、肌をざわつかせる不快感の波が襲ってくるだけだった。嘲笑うような声は幻聴だろうか。
「大丈夫だろう」
視線を落とすティファを慰めるようにアレイズが手を握り締める力を強める。
「メイの傍にはイオが付いている。奴なら何かあった時、誰よりも確実に対処できるはずだ」
「イオが……。うん、そうよね。イオがいてくれたら一番確実だわ」
再封印はイオの手によるものだ。だからイオが近くにいたなら封印が解ける気配を察知し、対処できるだろう。アレイズの言葉に頷きティファはようやく安堵の息をついたものの、肌を襲う不快感は拭えないままだった。安心できる要素は見つけたというのに一体何が不安だというのか。
（急いだ方がよさそうね）
自分では何もできないかもしれない。世界の敵だなどと言われてはいるが、神ではなくあくまで自分は人間でしかないのだから。メイやマイに何が起ころうと、ただ見ている事しかできないのだ。
（それでも何かしなきゃ）
世界のせいでマイが気落ちしているなら浮上させるのは主である

ティファの役目だ。メイが正気を失う時元に戻すのもティファの役目。ただ傅かれるだけの主になど収まった覚えはない。二人に何かが起こるなら、その時は自分が対処に当たると決めていた。

暗い青の瞳を厳しく前に向けながら足を一歩前に踏み出すと、隣に立つアレイズも同じように歩を進める。障害物がないかどうか足元を確認しながら一歩一歩確実に。物音はどこからも聞こえないが、今はこうやって進むしか道がなかった。

「魔力も感じられないな」

ぽつりとアレイズが漏らす。

「ここにはいないってこと？」

「いや。……霧散しているのかもしれない。闇は魔力を溶かしやすい」

先刻からイオの魔力を感知しようとしていたのかもしれない。アレイズは渋面を作りだだっ広い闇を見据えた。

道標もなく、マイ達がここにいるという保証もない道はまだまだ長く続いている。今の所行き止まりに出会す事もなかった。方向感覚すら掴めない闇の中で、果たして前と呼べるのか分からない方向に向かって、それでも二人は進んだ。

時間の感覚も曖昧になり、一分が経ったのか一日が経ったのかさえ分からない。

気が狂わずに済んだのはひとえにアレイズの手のおかげだった。自分のものと混ざり合う体温に心地良く拘束されるおかげで、闇の中でも平然と歩いていられた。

そのまま、一体どれだけの時間が過ぎたのか分からなくなるまで歩き、不意に二人同時に足を止めた。以心伝心という言葉が似合うかのように、同時に顔を見合わせる。

「今何か」

「あぁ、聞こえたな」

期待に上擦る声を上げ、二人で耳を澄ませてみる。今一度聞こえますようにと願って。

すると左手横、少し離れているが微かな声が聴こえてきた。
少年らしきボーイソプラノは紛れもなくイオのもので、ティファとアレイズは軽く頷き合って記憶を頼りに足早に進む。その都度声が鮮明さを帯びる。
（誰かを呼んでるみたいだけど）
それにしては些か切迫した声である。目を丸くすると、イオの声の間をすり抜けるようにしてメイの声も聞こえてきた。やはり切迫した声は、一人だけ声を発していないマイを呼んでいる。だがいったい何故彼女の声は聞こえないのだろうか。あんなに名前を呼ばれているのに、返事すらなく。
（まさかマイに何か……っ！）
ダグラスは身体的には何もされていないと言っていたが、実は怪我でもしているんじゃないか。
不安が募り足早だった歩みが駆けるものになる。大股に走っていきアレイズと自分の指輪の光を周囲に振りかざすと、漸く三人の姿が見えた。
「――皆っ！」
翡翠色の光に照らされた三人の内、二人がはっと顔を上げてティファの方を見やる。そこに望む顔を見つけると、彼等は顔を輝かせてティファの名を呼んだ
「ティファ！」
「ティファ様！　よかった、どこに行っちゃってたかすごく心配したんですよー！？」
無邪気な笑顔を向けてくる二人にティファは微笑み返すと、ゆっくりと視線をマイへと向けた。普段なら、この二人よりもすぐにティファの元へと駆けつけていく幼馴染の一人は、漸く再会できたティファの姿を見ることなくただひたすら闇をぼんやりと見つめていた。思案に耽ける横顔は、ぞっとするほど無機質だ。
「ごめんね二人とも、心配かけて。それより……ねぇ、マイは？どうしたの？」

イオもメイも、ティファの言葉にどう答えたらいいか分からず一瞬視線を交わらせてから軽く俯いた。二人には事情が分からないのだろう。恐らくはレイナと接触した事さえ分からないに違いない。ティファとてダグラスに聞かなければ今頃困惑を隠せなかったはずだ。

力なく降ろされている両手の平は、小さく握られ強く力を入れられているのか小刻みに揺れていた。ティファは、その力ない姿に宿る思いがけない力強さに目を瞠りながらも「マイ」と彼女の名前を呼んで近づいた。

「マイ。ねぇ、マイ。どうしたの？」

返事はない。亜麻色の瞳は依然として虚ろなまま、芒洋と虚空を見据えていた。

一体どうしてしまったんだろうと肩を落とすティファの手をそっと握るアレイズがマイを凝視する。そこでやっとアレイズの存在に気付いたのか、イオが「ん？」と視線を彼に向けた。

「何だ、アレイズもいたんだ」

「悪いか。別に俺はお前に会いたくなかったんだがな」

「その言葉、そっくりそのまま君に返すよ。……ところでアレイズ神。君、レイナに会った？」

久しぶりの再会に何ら感動を見せない二人は、メイを挟んでひとしきり嫌味を言い合った後で急に声を顰めた。無論メイもティファも傍にいるので声は駄々漏れなのだが、どこで誰に聞かれているか分からないと警戒するイオの声に、アレイズは一瞬押し黙った後で頷いた。

「――あぁ」

低い声にはぁ、と大きく溜息をつきながら金色の髪の毛を軽く後ろにやるイオはどことなく呆れているようだった。アレイズがむっと顔を顰めると、イオは碧眼をマイに向け「やっぱりね」と呟いた。

「だろうと思った。だったら、マイのあの様子はレイナのせいだね」

「……何故そう思う？」

「あれ、どう考えてもおかしいよ。彼女は今まで僕達と一緒だったけど、あの時はまだ様子が普通だった。ダグラスが封印された時は別だけど、それだって大分落ち着いていたんだ。なのに手分けしてここから出ようってバラバラになった途端あれだ。闇は確かに人の心を狂わせるには十分だけど、マイ程の精神力の持ち主が闇ごときで心を奪われるとも思えない」

ぐるりと周囲を見渡すイオもメイも、光源がないのは歩くのに不便なだけときっぱり言い切った。本当の孤独に落ちれば別だが、三人は会おうと思えば会える距離にいた。暗闇の中でも声を張り上げれば何とか意思疎通は取れるだろう。成程、心を奪うにはもう一手足りないように思われる。

「ダグラスはアリアがクリスタルに封印したし、彼が何かしたとは思えない。そもそも彼の性格じゃマイを傷つけるわけがないよね。となると後はノルマンかアリア、それにレイナってことになるけど……。アリアはあれから姿を見せないし、ノルマンはティファに用があったはず。二人は除外だ。で、レイナは君と接触したみたいだけど、その後どこに消えたんだい？　アレイズ神」

「……分からん。誰かの足音が聞こえるのと同時に消えていた」

誰かとは誰だろう。ティファは一瞬怪訝に思ったが、アレイズ自身分からないだろうというのは顔を見れば分かったので問わずにおいた。

イオはアレイズの言葉にうーんと唸る。

「君がここにいるのは、レイナじゃなくてティファを選んだからって事だよね？　今のレイナなら何をしでかすか分からないし、やっぱりレイナが第一候補かな」

イオのきっぱりとした口調に口を噤む。

そうなのだ。

イオはレイナの感情の細微まで知っているわけではないだろうが、レイナはずっとアレイズを恋い慕っていた。誰よりも何よりも大切に思い、慈しんでいた。あの時身体を奪われていたティファには彼

女の気持ちが痛いほどよく分かっていた。だというのにアレイズは人間に、しかもいずれ自分を殺すかもしれない人間に取られたのだ。確かにこの状態なら、彼女がどんな手段に出てもおかしくはない。

たが、それをあっさり見破るとは。

「すごいわイオ。レイナが犯人かもしれないってよく分かったわね」

いくら何でも自分ではそこまで予測できない。

賞賛の声を向けると、イオは真相を知っている口ぶりのティファを見やる。だからティファもあっさり種明かしをした。

「私達、ここに来る前にダグラスが封印されている空間に呼ばれたの。そこで教わったわ。イオの言う通り、レイナはマイに接触してる。私達はダグラスが封印空間から出られるまでの間彼女を頼むって言われて来たの」

「ダグラスが？　彼は無事なのかい？」

「えぇ、ぴんしゃんしてたわよ。でもクリスタルから出るには時間がかかるみたい。マイのこと、すごく心配してた」

言いながらマイをちらと見やる。だが彼女は相変わらず反応を示さない。ティファは頭でも抱えたい気持ちになりながらも、未だ放心状態のマイを注視した。

闇の中にいるせいで、今はかなり昏さを帯びた亜麻色の瞳は虚ろに前方に向けられている。その姿はまるで職人から魂を与えられなかった精巧な人形のようだ。ニコニコと笑い、その迫力で持って皆に「最強」と言わしめていた彼女の姿は、今は片鱗すら見る事ができない。

（レイナがマイをこんな風にしたっていうの？　神様だって屈せられるような性格なのに。一体、何を言ったらこうなるのよ）

「マイ……」

苦々しい顔を浮かべながらマイを呼ぶ。ティファの隣ではアレイズがやや白くなった横顔を引き締め、深く息を吐き出していた。落ち着こう落ち着こうと考えているのがよく分かる。そうでもしなければレイナに暴言を吐いてしまいそうな自分を戒められないと感じ

ているのも。
（二人はどんな話をしたんだろう）
守りたいと思っていた存在よりも別の者を取ったことに対する罪悪感。
己を裏切り人間から神に変えたレイナに対して複雑な感情もあるだろう。
そして極めつけに、つい先程道を違えたばかりのレイナが己の出した答えのせいで仲間の精神を蝕んでいるのだ。これにアレイズが責任を感じていないなどとは思わなかった。ティファ自身は決してアレイズのせいだとは思えなかったが、自分だけは決して慰めを言えないと分かっていた。
二人が再会した時、ティファではなくレイナを取っていればもっと別の展開があっただろう。守るべき者を守ると一貫した気持ちを抱き続けていられれば、万一それが叶わなくとも立ち回り方を変えていれば色々と違っていたかもしれない。だが、いくらそうした考えが頭に浮かんでもティファはあの場にいなかった。下手な慰めなど言えるわけがなかった。
自分はただ受け止め、アレイズと一緒に罪悪感を背負うだけだ。背負い、押し潰されないようにしながら心を蝕まれている仲間を助けなければならない。これはマイのせいではなく、自分やアレイズが原因の一端を担っているのだから。
「マイ。ねぇ、マイってば」
再度呼びかける。
「……」
無感情な眼差しはついとも動かない。唇も動かず、聴覚も視覚も機能していないようにさえ見えた。
呼べば必ず向けられた笑顔が、そこにはない。
（どうして何も言ってくれないの）
ティファは次第に焦りながら、はたと思いついたようにマイの真正面へと回り込んだ。そのまま彼女の両肩を掴んで揺さぶる。

「マイ。私よ、ティファよ！　分からない！？」
聞こえないなら、見えないなら身体を揺さぶってみるしかない。自分の脳が大きく揺れたら少しぐらい目を覚ましてくれるかもと、望みをかけるしかなかった。
耳元で叫ぶ。するとマイの瞳が次第に自分に向けられるのを感じてメイが「姉さん」と嬉しそうな声を上げる。その瞬間にもマイはゆっくりと自我を取り戻していくように見えた。亜麻色の瞳に静かに光が宿る。理知的な光はやがてティファの姿を捉えて軽く目を見開いたかと思うと、じんわりと笑みを浮かべた。
「ティファ様……っ」
はっきりとした、感極まったような声が響く。
マイは瞳にうっすらと涙を浮かべてティファの頬に触れた。
「御無事だったのですね。よかった……。あのままノルマン様やアリア様に捕らえられていたらどうしようかと」
「マイ、あなたこそ無事だったのね！　よかった、やっと気付いてくれた」
突然目の前に現れたティファに対して何の疑問もぶつけることなく、マイは心底からティファがいることに対して安堵するように笑んだ。だがティファがいつもなら勝ち気そうに見える瞳をとても優しげなものにしてそう言ったので、すぐに怪訝そうな顔を浮かべる。
「気が、ついた？」
どうやらマイは自分が今までぼうっとしていたことに気がついていないらしい。
「えぇ、そうよ」
ティファは両肩からすとんと力を抜いて頷いた。
「今までずっと私の声が聞こえてないみたいだったじゃない」
「え？　そ、そんなはず。私がティファ様の御声を聞いてないだなんて……。ねぇ、メイ」
小首を傾げると、マイは信じられないというようにメイに助けを求める。

そこでもはっきりした答えを返され、マイはようやく観念したように肩を落とした。
「本当だよ姉さん。私やイオさんの声も届いてなかったもん」
「そんな……」
由々しき事態だわと掠れた声が漏れる。主の声を無視していたなど、マイの中ではあってはならない事なのだろう。気付けばマイは腰を曲げて深く頭を下げていた。
「申し訳ありませんでした、ティファ様」
「いや、そういうことが言いたいんじゃなくてね？」
それには笑って返した。
相変わらずの生真面目さが何だかとても懐かしく嬉しかった。
ティファは別にマイが自分を無視したからと文句を言う気などないというのに。メイもイオもアレイズもそれは同じ。しかしマイはきっちりと三人にも頭を下げた。
「御迷惑を御掛けして申し訳ありませんでした」
肩を流れる亜麻色の髪が翡翠の光に照らされる。三人とも気にしてないという風に首を振ると、マイはやっと安堵の息を漏らした。
一息つくのを見計らいティファはマイの目を覗き込んだ。
責める気は勿論、ない。
だがこれだけは確認しておきたかった。
「ねぇ、マイ」
「何でしょうか」
「一体何があったの？　マイがぼんやりするなんて、らしくないじゃない」
ダグラスにもレイナがマイに何を言ったかは分からなかった。知っているのはマイ本人のみだ。
ストレートな言葉に残りの三人が溜息をつく。もう少し婉曲的に物を尋ねられないのかとアレイズが言っている気がしたが、綺麗に無視しておいた。
指輪の光がかろうじてお互いの視線の形を映し出す。その中でマ

イの考えを探ろうとする眼差しと、何故ティファがそんな事を問うのか探ろうとする眼差しが拮抗する。強い眼差しには敵意も殺意もないが、誰も口を挟めないだけの窮屈さがあった。

「ありましたよ」

周囲の息を詰まらせるだけ詰まらせ、先に口を開いたのはマイだった。

「ティファ様がいらっしゃらないだけで私には大変な心痛でした」

「マイ」

違う、自分が言いたいのは――。

「それだけです。ティファ様がいらっしゃる以上、もう問題はありません」

マイはそれだけ言うと、この話はお終いだと背を向けた。翡翠に彩られた長いスカートがふわりと揺れる。柔らかな仕草だというのに、断固とした決意を漲らせた背中がティファがそれ以上問いを発するのを拒んでいた。

（でもそれじゃ何の意味もないわ）

訊かなければ。何かが起こってしまう前に。

「マイ」

硬い声を発し、背を向けた彼女が再びこちらを向くように呼びかける。

マイは振り返らなかった。

モーニングスターを取り出し、柄をぎゅっと握り締める。

それを何の躊躇いもなしに威嚇するように地面に叩きつけた。

闇に埋もれて見えなかった地面が小さくピシリと割れたような音がする。どうやらそう硬いものではないらしく、やすやすと壊れた地面が破片を撒き散らしパラパラと音を立てて地に落ちた。しかしそれは誰にとってもどうでもいいことだ。

マイが地面にモーニングスターをぶつけた時の衝撃、体を震わせるようなその音は間違いなく「これ以上何か聞くことは許しません」と言っていたからだ。背中だけではなく行動で示した辺り、彼女の

本気が伺える。
「待ってティファ様。今何か言うのはティファ様でも危ないよ……！」
力強さにぶるりと身を震わせながらメイがティファの服の袖を引っ張って囁く。他の面々も同様らしく、ティファが傷ついたら事だとアレイズに至っては口まで塞ぐ始末だった。
「ではここから出る方法でも考えましょうか」
口を押さえられ抵抗するティファに、にこやかにマイが提案する。顔半分を闇に塗られたマイの表情にアレイズの力が緩む。その隙を突いてティファは「マイ！」と声を張り上げた。周囲に立つ三人の慌てぶりを尻目に続ける。
「私、ここに来る前にダグラスに会ったわ」
「ダグラスさんに……？」
「あいつ、まだ封印のクリスタルから出てこれないみたい。だからあなたを守ってほしいって、頭まで下げられちゃったわ」
マイはダグラスを憎んでいる。だからこんな話をした所で、何の意味もないだろうとティファには分かっていた。それでも口にしたのは、ダグラスがあまりに真摯な顔でマイを頼んだのを伝えたかったからかもしれない。応援などしていないし、契約が切れたら即撲殺してやりたい男ではあるが、何故だかこの時ティファはマイを問い詰めるよりもダグラスの事を話したかった。自分を案じるように後ろから抱きすくめるアレイズの腕があったからかもしれない。
ティファの言葉に、マイが一瞬呆けた顔をする。
訳が分からないのではなく、どんな顔をしたらいいか分からなかったのだとティファには何となく分かった。ただ予想では怒るか憎まれ口を叩くと思っていた表情は憂いに沈み、悲しげに笑んでいた。
「――そうですか」
あの神相手に申し訳なさでも感じているような、痛みを感じているような。
切なげなマイの顔にティファは口を噤む。今度こそ本当に何も言

えなくなった。

第七十二話

複雑な感情を滲ませて笑んだマイは吹っ切るように深く息を吐き出した。

「ですがダグラスさんを待っている余裕なんてありません。今は早くここを脱出しなければ」

毅然とした声にイオが片眉を上げる。

マイの言葉に引っかかりを覚えるのか、その顔は怪訝そうに歪められた。

「でも君、あんなにダグラスの事心配してたのにどうして急に――」

言いかけるボーイソプラノが途切れる。誰にも何も言わせないというマイの意志を感じ取り、イオも口を閉じたのだった。言いたいのに言えないもどかしさを漂わせるイオの横顔を一瞥し、ティファは意外にもマイがダグラスを案じていたと知った。

事情は分からないが、ダグラスは突然封印のクリスタルに封じられてしまったのだろう。かといってマイが彼を心配するのは不思議だったが、彼女の中には色々と複雑な気持ちがあるのかもしれないと思うとありえない話でもない。

（じゃあ、どうしてマイは喜ばないのかしら）

ダグラスが無事だと聞いてもマイは「よかった」と安堵の息を洩らすことすらしない。意地を張っているのだとしても、心配していたのならそれとなく分かるものだ。イオが怪訝に思うのも無理はない。

メイも今まで傍にいたからか、イオ同様意外そうな顔をしていた。

「随分冷めてるんだね」

「姉さん、さっきまでこんなんじゃなかったのに……」

囁きが耳朶を打つ。マイとてそれは聞こえているはずなのだが、彼女は二人の疑問の声は無視して背中を向けた。真っ直ぐな立ち姿に困惑するメイがしゅんと顔を俯けた。ツインテールがだらりと垂

れ下がる。双子とは言え今のマイの気持ちが分からないのに落ち込んでいるのだろう。

彼女達二人にとってはダグラスの事は正直どうでもいいように見える。懸念しているのはマイの持つ冷ややかさであり、ダグラスが戻ってくるか否かではないのだ。ティファは彼からマイを頼まれた手前全く気にならないわけではなかったが、一番は何かと問われるとやはりマイの事だった。

先程よりも鋭くなった眼光は、その可愛らしい顔に不似合いな程強い光を放ち、見るものに違和感を感じさせていた。まるで今すぐにでも敵が襲ってくるとでも言うような警戒心の塊になっている。敵など全く見当たらない場所で、一体何を警戒する事があるのかは分からないが。

（ますます分からないわ）

考えれば考えるほどに疑念は募るが、それでも誰も何も言わなかった。魔術師の封印も神の威光も――そんなものがそもそもあったのかティファには分からないが――ものともしない彼女が、誰かの言葉を素直に聞いて頑なに何も語らない姿勢を崩すはずがないと知っていたからだ。

実際マイは皆の疑念を悟っているだろうに何も言わなかった。

地面に叩きつけたモーニングスターを持ち直し、くるりと振り返る。

「とにかく、ここを出る方法を考えなければなりませんね」

いつも通りの静かな声。激情など露と感じさせぬ声に、ティファは無意識のうちに頷いていた。

（そうね、まずは此処を出なきゃ。でも、出たらマイは元に戻るのかしら？　ちゃんと事情を話せるようになるとでも？）

ありえないと思う。状況が変わっても彼女は何も話さないだろう。むしろ外に出た刺激から己を守るようにますます殻に閉じこもってしまうように思えてならなかった。

「マイ」

呼んでも詮ないと思いつつ声を掛ける。
「はい」
打てば響くような返事はやはりいつも通りの彼女だ。
ティファは内心で溜息を漏らしつつ、翡翠の光を周囲にかざした。
地面も壁も闇色なのか何も見えない。
「出る方法と言っても一体どうしたらいいのかしらね。方法なんてあるのかしら」
つい弱音を漏らしたのは、あまりの暗さと場の沈痛さのせいだ。
これでは叱られてしまうと身構える。だがマイは「弱気になってどうします」と口を尖らせはしなかった。
「……」
手をきつく握り締めているのか、ぎり、と音がする。
光を遠くにかざしているせいで見えなかったが、なぜだかマイの顔が泣きそうに歪んでいる気がしてティファは「マイ？」と急いで光を当てた。
「……いえ」
柔い光に晒されたマイは眩しさからか目を閉じる。
そうしてあからさまに何かあるような声で答えた。
「何でもありません」
静謐ながらも芯の通った声に、今度こそティファは観念した。
（今はここから出る事が先決……ね）
胸中で呟き、これからどうしたらいいのか考え思考を持て余す。
何せ周囲は見渡す限りの闇、ヤミ、やみ。闇しかないのだ。いくら指輪の力で辺りを照らしたからといって、どうにかなるものでもないだろう。大体、出口があるのかすら分からない。
「困ったわね」
ぽつり呟くと、瞬間マイがびくりと身を震わせるのを感じて思わずティファまで身を震わせてしまった。驚きマイの方を見ると、どことなく緊張を孕んだ顔が見える。その様子にやっぱり何かあるんじゃないかと思うものの、聞いたところで教えてはもらえそうにな

いので諦めの溜息と共に顔を逸らした。
おかしいのは明らかなのに、何がおかしいのか原因が分からない。それは要するに何も分かっていないようなものだと考えると気が重くなってきた。
（マイったら一体何を考えているのかしらね……）
レイナが何を言おうとも笑って済ませられるなら彼女は必ずティファに報告するだろう。できないなら、できないなりの理由があるはずなのだ。それを訊けないのが今一番の懸案事項なのだが。
ぼやくように考えるが、だからといって考えもまとまらない。
従ってティファはまず第一にすべきこととして皆をまじまじと見て言った。
「この大人数どうにかならないかしらね」
そうなのだ。自分達は少し人数が多すぎる。
ティファを含めて総勢五人というメンバーは万一敵がこの場にいた場合、見つかりやすいことこの上ない。更にこのメンバーだと騒がしくなることから、十中八九敵に見つかるだろう。しかし中途半端に奇数の人数だから分けるのが無駄に難しい。
「出口なら分かれて探した方がいいだろうけど、一人で動くのは危険だわ」
ティファの言葉にどうしよう、と皆が視線を通わせる。
「となると、二人と三人？」
メイが首を傾げる。それに頷くと、メイは更にうーんと唸った。
人数を分けるとしたら当然一人は危険なのだからペアで行動するしかない。マイの二の舞になってもらっては困るのだ。せめて二人一組にでもならなければならない。となると自然二人と三人の組みになるわけだが、簡単に済むだろうと思った話は予想外に難航した。
何故か皆が神妙な顔つきになる。
一体何を悩む事があるのだろうと頭の上に疑問符を浮かべると、メイもマイも揃って残りの神々二人を見ていた。
「？」

アレイズとイオがどうしたのだろうか。
ますます疑問に思い首を傾げる。だがイオが発した言葉に、すとんと胃の腑に落ちてくるものがあった。
「アレイズ、さっきまでティファと一緒だったよね。君ばっかりずるくないかい？」
「当たり前だろう。俺はティファの契約神なんだ。一緒にいて何が悪い」
「そんなのは分かってるけど、でもずるい。今度は僕だよね。何ならアレイズが一人になればいいよ」
「馬鹿を言え。貴様が一人になれ、鬱陶しい」
刺々しい言葉がいつもの五割増しの速度で繰り出される。言葉尻の冷たさは倍増だ。
闇に溶ける黒瞳と碧眼が交差すると、まさに火花が飛び交いそうにさえ見えた。どうやらイオとしても、まだティファを諦める気にはなれないらしい。アレイズに至っては端から諦めるという選択肢がない。延々どちらが一人になり、どちらがティファと行くかを論議し始めることになる。
（でも、だからってこんな状況で言うようなことじゃないでしょ）
手の平で顔を覆い嘆くように天を仰ぐ。
その間に、マイがおずおずと手を上げた。
「あぁ、いえ一人になるなら私が」
……何故皆揃いも揃って二人のペアが二つと一人残される人間ができる構図を頭に思い浮かべているのだろうか。二人と三人って言ったばかりだというのに。
（三人とも私の話聞いてなかったわね）
こめかみに青筋を立て、ティファは腰に手を当てる。そして眦をきっと吊り上げた。
「だから二人と三人だって言って――」
「あ、それなら私が一人で行くよー？」
声を張り上げる。すると、ティファの言葉を遮って自分から一人

になると宣言する声が聞こえ、一同で揃ってそちらに目を向けた。
そこには真紅のメイド服をメイが「だから」と言葉を続けながらアレイズとイオを人差し指で指していた。
「この際じゃんけんでも何でもいいからさっさと決めちゃってください。負けたら姉さんと。ほら、解決するじゃないですか」
「じゃんけんって、メイ」
「変ですか？　公平でいいと思ったんだけど」
遺恨は残らないがその決め方はどうかと思う。
ティファは皆を叱り飛ばそうとした口をぽかんと開けて、メイまでもが一人になろうとするのに驚いていた。明るい調子で笑うメイには全く悪気がないようだったが、腹立たしい事この上ないのも事実だ。今マイと一緒にいたら会話が続かなくて間違いなく苦しい思いをするだろう。それを一人になることで逃げたのか、この双子の妹はと思ってしまったせいかもしれない。かといってマイを一人にはできないのだから、誰かが被害には遭うのだが。
（でも、それだけじゃないんでしょうね）
ちらとマイを一瞥する。あっさりと自分が一人になるという流れを作り上げてしまったメイに反論しようかどうしようか迷っている目をしていた。
（――メイはきっと、今一番一人にしておけないマイを何とか誰かとつかせようとしたんだわ。それも神様に）
ここぞという時役に立たない面もある神々だが、世界相手なら盾ぐらいにはなれると考えたのかもしれない。不遜極まりないが、それがメイの中の神々の評価だろうという事をティファは知っていた。だからこそ先程独りになろうとしたマイを制し、自分から独りになろうとしたのだろう。本来ならティファを守るべき役であるはずなのに、あえてそれを神々に託すことにして。
「でも私は誰かが一人になるのは反対だわ」
レイナが何をするか分からないというなら、誰に何が起きてもおかしくないのだ。

俯いて噛み締めるように言うと、メイはぽんと自分の胸を叩いた。
「だけどティファ様、少しでも多めに分かれておかないと広範囲は探せないよ」
「それはそうだけど……」
「大丈夫だよ。今まで私達の所には世界も来なかったし。多分眼中にないんじゃないかな」
無邪気に笑い、もう一度胸をぽんと叩く。
優しい手つきはまるで子どもを寝かしつけようとしているようなものだったが、ティファはん？　と眉根を寄せた。
（具合でも悪いのかしら？）
なら尚更一人にはしておけない。
ティファは必死に言葉を探し、自分の左手薬指に嵌る指輪を見てぱっと顔を上げた。
「メイ、だけどあなた光なんて出せないじゃない。一人じゃ出口なんて探せないんじゃない？」
そうだ、他の面々はともかくメイは魔術を使えない。彼女一人では光など生み出せないのだ。
言うとメイはそういえばそうだったと、今更思い出したように目を見開いてから闇に目を向けた。
「大丈夫、だと思う。大分目も慣れたし、何となく床とか壁とか見えるもん」
軽やかな声であっさりと言い放つ。その間にも胸を叩く手はゆっくりとだが動き止まることはなく、胸焼けでも起こしているのではと心配になったがティファが口を開く前に彼女はくるりと背を向けてしまった。マイに似た仕草でありながらどことなく違うのは、背中に漂う悲壮感めいたものがないせいかもしれない。それが救いと言えば救いだったが、胸騒ぎが止まらない。
「メイ――」
「じゃ、善は急げだよね。アレイズさんとイオさんはちゃっちゃとじゃんけんしてくださいね。私、あんまり遠くに行かない程度に探

してくるから」
　ひらりとスカートが翻る。駆ける白いブーツが光から逃れ闇の中に溶けていった。
「待って、メイ。……メイ！」
　慌ててティファもそちらに駆けて手を伸ばす。だがすり抜けた影は奥へ奥へ進み、あっという間に消えてしまった。何が遠くに行かない程度にだ。これでは大声を出しても届きそうにないじゃないか。
「どうしよう、アレイズ」
　困りきってアレイズに問うと、彼は「どいつもこいつも」と言いながら髪を掻きむしった。
「仕方ない、俺達も行くぞ。方角さえ間違っていなければ何かあっても対処しやすい。……その前に、イオ」
　厳しい声音にイオがぱちりと瞬きする。かと思えばにやりと笑んだ。
「分かってるよ。いいかい？　勝負は一回限り。恨みっこなしだ」
「当たり前だ。貴様こそ恨むなよ」
「いいよ。勝つのは僕だから」
　……気付けばじゃんけん大会が始まってしまっているのはどういうことか。
　もうこの際全員でメイを追えばいいんじゃないかとティファは呆れ混じりに思ったが、つと視線をずらした先でぼんやりと前を見るマイが視界に入るとそんな事も言えなくなった。神々二人の運試しを放置してマイに駆け寄る。
「メイ……？」
　メイが去っていく方向を見つめながらマイが震えた声を出す。
「マイ、どうしたの？」
　もしかしたらメイが保身のために独りになったわけじゃないと、双子の姉として直感で悟ったのかもしれない。震えた声が次第に体をも震わせて、彼女は体を抱きかかえた。その後ろでアレイズとイオがじゃんけん大会を繰り広げているのが、ひどく虚ろに見える。

否、むしろないものにしたいと思いながらティファはマイの肩を抱きしめた。

「メイなら大丈夫。今から追えば間にあうわ。……ちょっとアレイズ、イオ！　勝負終わったんでしょう！？　急ぐわよ！」

そうして後ろに怒声を放つと、勝者の笑みを憎らしいまでにアレイズに向けたイオがティファの隣に並んだ。不承不承ながらアレイズがマイの隣に立つ。そこで初めてマイの異変に気付いたアレイズは、ティファの手をどけて彼女の肩を強く揺さぶった。

「おい、どうした？」

「メイ……」

「マイ？　おい、何があったんだ！」

しかし、そんな強い揺さぶりにもマイは答えることなくただひたすらにブツブツと何事かを呟いていた。その顔は恐怖に歪んでいる。

「まさか、あの子まで……そんな、でもあの子には……」

さらりと揺れたマイのセミロングの髪だけが彼女の存在を象徴するばかりで、あとは全て壊れた人形じみて見えた。その様子はまるで先程ティファが必死になってマイを正気に戻そうとしていた時と同じ状態で、アレイズは舌打ちしティファ達を振り返った。

「くそ、どうしたっていうんだ。おいイオ、ティファ！　お前達は先に行って一刻も早く出口を探してきてくれ！」

「でも、アレイズ！」

「このままここにいたら、マイの状態が悪化するかもしれないだろう！　今は外に出るのが先決だ！」

どうやらアレイズは独りでマイを見ておくことに決めたらしい。

それは確かに賢明な判断だと言えた。少なくとも、このままでいるよりは遥かにましだろう。マイの肩を今度は優しく抱きながら、とりあえず落ち着くまでその場にいることにしたアレイズは早く行けというようにティファとイオを見た。

それほどに事態は切迫していたし、マイを介抱する場所が必要だった。

「いいか、絶対にイオから離れるな。そいつも一応神だ。レイナが現れた時少しぐらい役に立つだろう。こっちは落ち着いたらメイを探しに行く」
信頼を寄せる声音にイオが逡巡した様子を見せる。
だがマイを宥めるのに自分とアレイズのどちらが適役か考えたのか、彼はティファの手をぐいと引っ張った。
「分かったよ。僕達は出口を探してくる」
「イオ！」
「行くよ、ティファ」
批難を向けるティファの声を無視してずんずんイオが進む。腕を引っ張られ、自然それについていく形になったティファは何度も振り返り振り返りマイを見た。震える彼女の小さな身体が遠ざかっていく。完全に見えなくなった時、イオはようやく足を留めて虚空を仰いだ。
「ティファ」
緊迫した声が耳朶を打つ。
「アレイズ神やマイには悪いけど、出口を探す前にもう一つ探したいものがあるんだ。一緒に来てくれるかい？」
「……メイね」
断言する。何となくイオが求めるものは世界でも出口でもなく、彼女のような気がした。
うん、とイオが頷く。「ありえないんだよ」
「光源がないのに目が慣れて周りが見えるなんてありえないんだ。少なくとも人間の目ではこの闇の中に何があっても捉えられない」
「でも、メイは見えてるように走っていったわ」
「そう、きっとメイは嘘なんてついていない」
ティファの腕を引くイオの手がじっとりと汗ばんでいる。らしくないのは余裕のなさの表れだ。
「だから探したいんだ。予想通りならアレイズ神より僕の方が対処に適してるだろうし、だから彼等より先に見つけたいんだよ。取り

返しの付かない事になる前に」
言いながら先程メイがしていたように胸をぽんと叩く。その意味を導きだそうとするように、何度も何度も。
ティファも同じように一度胸を叩く。あれは一体どういう意味だったのだろうか。
（少なくとも人間の目じゃ駄目なら）
魔術で光を生み出して周囲を見る。これは魔術の使えないメイでは駄目だ。
ティファのように指輪の力に頼る。これも駄目だ。メイは神々と契約していないし、このように特別な道具を持っていない。
ならば何が彼女の視界に光を与えるのか。
考えた時、真っ先に浮かんだ人間という言葉に浅く息を吸う。
「――行こう」
今度はティファがイオの手を引いた。「うん」イオもティファの思考が辿り着いた先を感じ取り駆け出す。お互い最悪の予想について一切口を開かなかったが、汗ばんだ手も冷や汗を浮かべる額も予想を確信していた。
（急がなきゃ）
マイには悪いが、今は早くメイを見つけて連れ戻さないといけない。
今はただあの無邪気な笑みを見て安心したかった。彼女が人間である証明をどこかに見つけたい。獣ではないと、封印は解けていないと確認してイオと二人安堵したくて溜まらなかった。

第七十三話

闇が自分の身体を侵食する。メイはティファやアレイズが放つ光が見えなくなってようやく足を止めた。

ふぅ、と息を吐き出す。荒い息を数度の深呼吸で埋めてから、胸をぽんと叩いた。

ティファに言った通り光源に関しては何の問題もなかった。

上を見上げれば天井があるのが何となく分かる。床の木目も微かにだが見えた。壁は見えないが、どこまでも走っていけば何かしらあるのだろうとそこは楽観的に考える。ただし一つだけティファに嘘をついたのは、大丈夫という言葉だった。

（全然、大丈夫じゃないよ）

皆はメイを姉想いの子だと思ってくれていたかもしれない。

無論それは間違いではない。メイはマイの身を案じていたし、万一彼女がゴリ押しして一人で行動するなんて事になったらいけないと思っていたのは事実だ。今のマイは一人にしてはいけない。そんな事、あの様子を見ていれば誰にでも分かる事だったが、彼女なら無理矢理にでも一人になるだろうことも分かっていた。抱えると決めたらとことんまで抱える頑固さが自分と姉の違いだ。

（ううん。もしかしたら似てるのかも。私だって結局ティファ様には何も言えないままだった）

頭に響く警鐘に胸をもう一度叩く。ぽん。心の臓の辺りで獣の唸り声がした。

幸い誰にも聞こえないこの獣の声はメイの頭の中で響いているらしく、それだけが救いだった。これで誰かに聞かれていたらと思うといても立ってもいられなくなる。特にイオに聞かれたら、彼は顔を青ざめさせてしまうかもしれない。

けれど彼も言っていたのだ。もう自分ではどうにもできないと。

最初はアリアと相対した時だった。その後、闇の中イオと共に悄

然としたマイを見つけた時から膨らみ始めた不快感と唸り声。これがもうどうにもならない類のものならメイは黙っていたかった。まるでダグラスに封印を外された時のようなとぐろを巻く不快感に、メイは胸を叩く手を早めた。ぽん、ぽん。胸からせり上がる不快感を宥めるように。

（体から何かが生まれてきそうな感じがする）

この身体ではなく魂を破って、何かが出てきそうな予感にメイは身を震わせた。

怖くないわけがないのだ。こんな訳の分からないものを与えられて、まだ有用に使えてもいないのに勝手に自分だけが奪われていくのに恐怖心を覚えないわけがない。もっとも、有用云々というなら七年前の惨劇で生き残れた事こそが奇跡に近いわけだが。

（せめてティファ様が世界と決着をつけるまでって思ってたけど）

もしかしたら、そこまで時間は残されていないかもしれない。

メイは残念に思いながら、一人闇の中を彷徨った。自分の視界とは明らかに違う、見えすぎるまでにはっきりと闇の形を捉えられる視界で。

（姉さんには悪いけど、今回は私を独りにしてね）

覚醒したら何が起こるか分からない。以前はプラクトで皆を襲ったのは決してダグラスの命を受けたからではなく、本能めいた想いがそうさせたせいだ。今度もまた、同じ事をしてしまうかもしれない。そう思ったからこそメイは一人になると決めた。

次の覚醒はもう誰にも止められないのだ。そう、メイが死なない限り。

胸中で独りごちる最中にも体内を巡る獣は強い慟哭を響かせ、メイの精神を疲弊させていった。誰かを傷つけやしないか、殺しやしないか。覚醒した後の不安に、身も心もすり切れるようだった。

それが悪かったのかもしれない。

“ざまぁねえなァ”

「――っ！」

ケケケ。甲高い笑い声に息を呑む。

周囲を注視する。だがメイに見えるどの範囲にも敵影はなく、その間にも響く甲高い声はメイの頭の中で鳴り止まない。

（まさか……）

とぐろを巻く不快感が圧倒的な質量を持って膨れ上がる。嘔吐感に胸をかきむしり、メイは今にも倒れそうなほどに顔面蒼白になりながら、強くなる慟哭に向けて心の中で叫んでいた。

（一体何なのよ、今更出てきて！）

今まであれだけ大人しくしておいて、どうしてこんな時に出てくるのか。

メイからしてみればもっともな言い分である。しかしもっともな言い分だからといって心に棲まうものが立ち退いてくれるでもないのは分かっていた。甲高い笑い声はメイを嘲笑うように響き続ける。それを振り切り、心労で満身創痍の状態になりながらも必死で出口を見つけるために歩き続けた。

これが幻覚や幻聴だったらよかったのにと、ぼんやりする頭の中で思う。

暗闇の中でもはっきり物が見える。聞こえないはずの声が聞こえる。それがただの幻なら、メイとてこんなに苦しくはなかったかもしれない。しかるべき医者の元に行き治療を受ければ、あるいはイオに診てもらえば解決策を出してもらえるかもしれない。だがこれは現実だ。紛れも無い現実なのだ。

“何だ、随分物分りがいいんだな”

思考を読み取り感想を述べる声に身を震わせたメイは、瞬時に身構える。自分自身に向けて一体どこに構えればいいのか分からなかったが、そうしなければ落ち着かなかった。

足に力を入れる。芒洋と歩いていた時とは違う力強さに、獣が感心したような声を上げた。

周囲を圧倒する威圧感。自分の体内から発せられるそれを胸元に目を落とすことで感じ取ると、三度、けたたましい笑い声がした。

“無駄だ。どこを殴ってもオレは殺せねェよ”
「そんな事、分かってるわよ！」
リングリングを投擲する。遠く伸びていった軌跡は障害物を見つけれず、メイの元へと返ってきた。
そう、分かっているのだそんな事。
それでも投げずにいられないのは、暗闇の中長い影が伸びているように見えてならないからだ。自分の中に巣食う影。自分を殺す以外に倒す方法のない影は、絶望的なまでに黒かった。
“愚かなもんだな。そんなだから親からも見捨てられるんだ”
「――うるさい！」
もう一度リングリングを投げる。影が見えると思われる方向へ。
だが軌跡は同じように綺麗な曲線を描き戻ってきただけだった。
顔を顰める。そのメイの背後から抱きすくめるように暗闇が襲った。
“五月蠅い、か。だがこれはお前の声なんだゼ？　メイティーナ。お前の声はいつもオレに響いてる”
耳元で囁くような声音は先程までの哄笑や粘つく気味悪さを失い、慰めの色を帯びていた。だからか、メイは一瞬反撃の手を止めたがこれが自分の考えであると認めるのが嫌で暗闇を退けようと胸をかきむしるように闇を掴んだ。きつく皺を刻んだ真紅のメイド服から闇が消える。あるいは端からなかったのか。
“お前はいつでも不安だった。記憶がない自分、記憶を取り戻してオレを知った自分、それにオレを封じたグラスの一族に対する不安。その不安はずっと、ずぅっとオレに届いてた”
心の内を暴くように闇が語る。
己の脆い部分をさらけ出され、メイはギンと胸元を睨めつけた。
「だったら何なのよ。っていうか、あんた何」
否定はしなかった。ただ一言も。
指摘された言葉はことごとく正しいのだ。否定してしまえば、そこに隙が生まれる。

（それに私は後悔してない。もし私か姉さんのどちらかが同じ目に遭うんなら、それが私でよかったって思ってるんだから）

あっさり割り切る姿に影が黙りこむ。だが何がおかしいのか、その声はくつくつ笑いながら“本当に愚かだなァ”と呟いた。低い男の声は哄笑とは打って変わって柔らかく、言葉こそ悪いもののいとしげなまろやかさで放たれていた。

“才能も両親からの愛すらも奪われて、それでも姉を慕うか”

「だからあんた何なのよ！　喋るぐらいならさっさと姿見せなさいっ！」

薄気味悪い程の優しさと同情心を向けられ、苛立ち混じりに叫ぶ。そうして叫んだ後息を呑み慌てて周囲の気配を探ったが、まだ誰もメイの近くにはいないらしく辺りにティファ達の息遣いは聞こえなかった。ほっと安堵の息を吐き出す。その心中を読み、影が不思議そうに問うた。

“封印が解けているとバレるのはそんなに嫌か？”

（嫌に決まってるじゃない）

胸中で吐き出す。知られてしまっては一人になった意味とてなくなってしまうのだから。

昏い感情に影が“そういうもんか”と頷く。声に出さずとも通じ合う姿に、メイは胸を叩いた。封印が解けたとあっさり言われても取り乱さない理由が、全てそこに詰まっていた。

（こんな、呆気ないものなんだ）

最期はもっと、劇的に何かが変わるのだと思っていた。

だというのに現れたのは影一つで、それとて敵みたいなものだと思えば普段の戦闘と大差ない。違うのは自分に無傷な状態で勝てないという事だけ。

“気が早い女だ”

低く笑う声が見えない腕となり、滑らせるようにメイの肩を後ろから抱く。最早動くのも億劫になって立ち尽くしていると、声は満足気に頷いた。

“お察しの通り、オレはお前の中に封印された獣だ。まァ、ゼクスに近い存在っつった方が早いか”

話せば話すほど優しくなる声は、意外な丁寧さを持って語りかけてくる。自己愛など持った覚えはないが、そう疑いたくなる優しさだ。だがそれを自覚して心の中で思うのにも嫌悪し、メイはただひたすら何がしたいのよと念じる。すると男は――男だろう、多分――もしもこの場で人間の姿をしていたなら腕組みでもしていたであろう様な声で“時期が来たから”と告げた。

「時期？」

一体何の時期だ。

顔を上げると頬に温かな感触がした。気のせいではあろうが、影が頬ずりしているようにも感じられる。

“オレは封印を施された時に、グラスの奴らに一つ言いつけられているコトがある。それを果たさなければオレは死ぬし、多分お前だって死ぬ”

自分の命が懸かっているというのにやけにあっさりと説明され、メイは何も言えなくなった。

（グラスの奴ら、って）

間違いない。メイとマイの両親だ。グランハート家の執事とメイド長。

（あの二人が命じた？　それも、果たさなければ殺すって）

封印された獣相手に脅しをかけるなら分かる。だが、娘だった自分までそれを負うのか。

プラクトの屋敷で意識を失っていた間、朧気ながら聞こえてきた言葉が頭を過ぎる。自分の中には無理矢理詰め込まれた秘術。そのうちの一つがこの獣だ。最も大きく人間では御しきれない力。イオは正気を保つメイに感心しながらそう言っていた。成程、確かにこの秘術が暴走すれば自分は死ぬかもしれない。

（でもまさか、いつでも娘が死ぬような状況に放り込んでたなんてねぇ）

今更落ち込むのも悔しくなり、どことなく長閑な声で呟く。
（プラクトで封印が解けた時。あの時は確か目がすごく熱くなって。
……そうだ。イオさんが助けてくれたんだ）
“よく覚えてるな”
「人の心を勝手に読まないで」
イオの温かな手によく似た温度の声に、メイは冷え冷えとした声を返す。これは自分の大事な思い出なのだ。人の身体を間借りしているだけの存在にやすやすと見せたくない。例えそれがどれだけ悲惨な思い出でも、全て自分が歩んだ道なのだから。
大体心を読まれるなどというのは、全てを知られているということだ。
“そうだ”
メイの嫌悪感に相槌を打つように声が言う。
“お前が何を思っているのかも、何に悲しんでいるのかもどうしたら幸せだと思えるのかも。オレは全て知っている。その上で一つ提案がしたい”
「……何よ」
低く、重厚な声に耳を傾けながらメイはその場に立ち尽くす。どの道この場所に敵など来ないし、仮にいるとしたらそれは自分の心の内なのだ。どれだけ警戒しようと無駄な話だ。
そんなメイの心を、これまた理解したのか楽しそうに笑ったその声は“オレは”と囁いた。
イオのように人の姿でも取れるのか、メイの身体を拘束する腕は人間のそれによく似ていた。もっとも見えないのだから形など分からないが、感触からそう察する。ただ、抱きしめられても何の感慨も湧かないのはこれが己の内にあるものだからか。
“オレはお前とは異なるものだ、メイティーナ。ただ、居場所がお前の中にしかないだけだ”
言いかけた言葉を放り投げ、自嘲じみた声音で紡がれる言葉についと背後に視線を向ける。無論、そこには何も無い。だがメイには

苦笑を浮かべる誰かが立っているように思われてならなかった。
メイは獣に自分を明け渡した覚えなどないし、間借りさせる許可も出していない。居場所が自分の中にしかないと言われても迷惑極まりない話だ。だが、その反面この男が自分によく似た境遇なのだとも思うと申し訳なさがこみ上げた。全ての元凶は獣ではなくグラス一族にあるのだ。突然メイの体に封じられた獣とていい迷惑だっただろう。
ゼクスというならイオと同じだけの高い知能を持っている。人間以上に思考できる獣は、この境遇に嘆かなかったのだろうか。
“嘆いたさ。あァ、嘆いたとも！”
メイの疑問に高らかに男が笑う。
“人間如き、それも力の衰えたグラスにいいように操られ嘆かぬ者がどこにいる”
両腕を広げて歌っているような滑らかな言葉は、そうとは言っていないのにグラスへの怨嗟を紡いでいるようにメイには聞こえた。一体この男の本体が何かは知らないが、己を誇れる体を持っていたのだろう。今や見る影のない肉体を思い、自由に駆ける足を持たない事を嘆き、手を伸ばしても声を出してもメイ以外に届かない現状を憂いてもおかしくはない。加えて言うなら、メイは最近まで獣の存在自体知らなかった。意識の奥深くで眠らされ、怒りを覚えないはずがなかった。
分かってはいる。メイとて同じ状況になったら相手を殺しても殺し足りないだろう。両親はダグラスに殺されたが、メイへの憎しみが募っていても不思議ではなかった。分かっていても謝らなかったのは、そんな事をしても詮ないだけと知っているからだ。自分だけではなく、獣自身も。
「二人を恨んでる？」
訊いてみる。答えがどうあろうとも意味などない問いに、しかし男は唸るように考えこんだ。
“さァ、どうだろうなァ。昔は殺してやろうと思ってたが、あの銀

狼が殺しちまったし”
銀狼とはダグラスだろう。七年前に戦った時、一瞬だけ見たことがあった。そういえば彼もゼクスだったのか。
ふとそんなどうでもいいことを考えながら、もう一度口を開く。胸元に置いた手が、微かに震えた。
「私の事は？　恨んでないの？」
ここで殺したいと言わせて、一体どうするつもりなのだろうかと思う。
迫り来る最期は確かにもうどうしようもなく近づいてしまったが、今此処で幕引きをするには呆気なさすぎる。今はひとまず話を引き伸ばして落ち着くのを待った方がいい。だというのに問うたのは、あまりにこの獣が哀れに思えたせいか。
男が口を噤む。静寂の中動いたのは、頬に触れる熱だった。
“グラスが禁忌とされる秘術に手を出した時な”
胸に当てた手に、柔らかなものが触れた。形の分からないそれは男の手だったのだろうか。
“怯えきった娘に一体何やらせんだこいつらって、そんなことばっかし考えてたんだ。オレは”
それはメイの中からは殆ど失われた記憶だった。
怖かったという気持ちすら失われている。あるのはただ諦念と、姉でなくてよかったというほんの少しの安堵感。だが男の言葉が本当なら、自分はきっと怯えていたのだろう。泣いていたかもしれない。この獣はその一部始終を見て、今まで抱えていたのだ。
“金獅子の一族は家族を決して蔑ろにしない”
芯の通った声に後ろを振り向く。
「金獅子？」
問うた声に、遠くを懐かしむような吐息が重なった。
“銀狼と同じ、今は絶滅した種族だ。南の大陸でそれなりに楽しく生きてたんだ、昔は”
昔。その言葉にふと違和感を覚えてメイは眉根を寄せた。

自分に秘術が施されたのは、いくら多く見積もっても十年程度の昔だ。一種族が絶滅するには、あまりに短い。否、仮に絶滅したとしてもメイの体内にいる男に一体どうやって知る術がある？　メイはそんな文献一度も見たことがないというのに。

「――もしかしてあんた、神様？」

怪訝な声に笑う気配だけが伝わる。

“神になれと請われたコトならあるが、面倒だから断った”

含み笑いに、メイはゆっくりと目を見開いた。

何てことだ。

（自分の中に神様候補がいたなんて）

しかもあんた呼ばわりだ。一瞬慌てたが、笑いを深める気配にすぐに冷静さを取り戻した。どうせ今更だ。

だが、それなら何故この獣はこんなにも長命なのか。

“グラスの魔術師がオレを生かした。……あの時の盟約さえなければ、あんな魔術師崩れに封印なんてさせなかったってのに”

魔術師。

「それって、世界最強の魔術師っていうあの？」

“そうだ。最後の一匹になったオレを生かして、あいつはさっさと消えちまったがな。まさか未来予知でもしてたんじゃねえだろうな、あの爺”

口汚く罵るのは紛れもなくグラスへの怒り故だ。憎悪をたぎらせる相手がいないから行動に移さないだけで、いたらいたで殺しにかかっていそうな剣呑さを感じる。メイは体内で渦巻く感情を他人事のように眺め、ますます訳が分からなくなった。

「グラスならここにもいるじゃん」

姉に手を出させる気はないが、自分に文句を言うぐらいの権利はあるはずだ。当然言い返すが。

ぶつぶつと文句を言う声がぴたりと止まる。拘束する腕の力が増した。

“お前は別だ”

即答され、メイは一体何が別なのかと考えてみる。
そうして他のグラスの一族と一つだけ違う点を思い出し二、三度瞬きした。
「そっか、宿主だもんね。死んだらあんたも道連れになっちゃうし」
間借りしている以上、男はメイと一蓮托生だ。万一死亡してしまえば、男とて生きる術はない。
体が見つかれば話は別だろうが、メイには当てがなかった。
“違う”
納得したメイの耳朶を不満気な男の声が打つ。
“オレはお前の気持ちが読み取れるのに、お前にはオレの思考が読み取れないのは不便だな”
「読み取れないのが普通なの。ていうか勝手に読まないでよ」
ぺしりと腕らしきものを叩く。声はますます不満気になり、仕舞いには唸り声にまで変わった。
“メイティーナ”
「何よ」
“オレはお前を殺したいと思ったことは一度もない。姉の方はたまに殺したくなるが”
「姉さんに手出すなら先に私が死ぬわよ」
“分かってる。だから殺さねぇんだ。お前が死ぬのはイヤだからな”
拗ねたような声はますますメイを混乱させた。
「私、あんたを封印したグラスの娘なんだけど」
“知ってる”
「じゃあ何で殺したいと思わないの？　姉さんは殺したいとか言うくせに」
殺されたくはないが、殺したくないと噛んで含めるように言われるとそれはそれで混乱する。
メイは意地になって問い、自分に触れる手を握り返した。
声が僅かに弱くなった。言うべきか考えあぐねるように。
“――秘術を掛けられた時、怯えたお前を見てな。あァ、こいつ家

族に捨てられたんだって思ったんだ。言葉通りの意味じゃねえけど、命を丸ごとオレに投げ捨てられて、こいつ今一人になっちまったんだって”

「……例えそうでも、私には姉さんがいるよ」

“あの時は知らなかった。……だからお前を見た時、殺す事よりもまず先に決めたんだ”

何を？　唇だけを動かして訊くと、影が身動ぎしたように感じられた。

“オレ達金獅子の一族は家族を決して蔑ろにしない”

呪文のような言葉は深い闇のように昏く、広く、どことなく暖かく感じられた。

嫌悪感が、気付けば消えてしまっていた。体から何かが出てきそうな不快感はそのままでも、これが決して怖くないものだと知ってしまったせいかもしれない。自分の内から流れる声は、一片の偽りも孕んでいなかった。

“金獅子の一族は絶滅した。銀狼の神と同じ、オレは世界にたった一匹だ。お前もあの時一人ぼっちだった”

だから、と続ける声にメイは何てことと思った。

こんな温かい声を、自分は今までずっと心の奥深くで眠らせていたなんて。

“どうせ逃げられないなら、家族になっちまえばいい。そうすればこんなくだらない封印にも、意味があるって思えたんだ”

想いが、一筋の糸となって寄り集まる。メイの魂に触れたその糸が、微かに男の意思を伝えた。

“お前はオレの檻で、オレはお前の中で生きるのを許した。グラスが読んだ未来まで、オレはお前の家族だ”

意地の悪い哄笑も言葉が今まで存在を無視され拒絶された事への悲しみだったなど、この糸がなければ一生分からなかっただろう。

男にとって自分は家族。

決して蔑ろにしないと誓った存在に存在を知られもせず眠り続け

るのは一体どんな気持ちだったのだろうか。糸を手繰り、男の本心を知って初めてメイは申し訳ないと心から思った。あれだけ自分を蝕んでいた者に対する怒りも恐怖も、その感情の前に消し飛んでいた。

これがマイなら怒りを持続させ、何があっても打ち倒すぐらいの信念は見せるだろうに、メイには敵わぬ話だった。

謝罪を口の端に乗せなかったのは、他の問いが喉を突いて出たからだった。

「あんたが出てきたってことは、グラスが読んだ未来が来たってこと？」

最初、男は時期が来たと言っていた。

思い出しつつ目を細めると、影が頷く気配がする。

“直、来る”

そうして男は溜息混じりにメイの髪を弄んだ。指先など見えないが、毛先が勝手に動くのだから自分の体という檻から出てしまっているのは間違いないようだ。じゃれつく様に、そういえば獅子は大型の猫に似ていたと思い出す。ゆらゆら揺れるツインテールはさぞ興味深いものだろう。

“猫と一緒にするな”

「じゃあ髪で遊ぶのやめてよね」

心を読まれるのにも大分慣れ、最早怒る気力も失せたメイが指摘すると一瞬髪の動きが止まる。だがまたすぐに動き出したかと思うと男が喋りだした。

“オレは死にたくないし、お前を死なせたくもない。家族は一緒に生きるもんだ”

「……」

ストレートな言葉に狼狽える。その間にも男は続けた。

“グラスから見れば確かにお前は姉より才も意志の強さもないかもしれねぇけど、それだってあくまで姉と比べたらだ。お前は常人よりずっと強いよ、メイティーナ。それに人間らしい。あの白兎も、

お前のそういうトコが気に入ったんだろうな”
「イオさんが？」
そういえば最近親切にされているが、人間らしいからとは一体なんだ。
首を傾げるがそれには答える気がないらしく、男は“それに”と続けた。
“お前の主や姉の方みたいに化物じみた強さは世界に近づきすぎる。神だってそうだ。けどお前は力も意志も人間の枠の中にある。だから世界はお前に干渉しねぇんだ”
「いちいち人のコンプレックス抉らないでよ」
自分が弱いのを内面にいた者に指摘されるとぐうの音も出ない。俯くと心を読んだのか“違う”とやや強い口調で否定された。
“世界が干渉しないのは、お前が世界の言葉に対して一番強いからだ”
「……どういうこと？」
“命ある者ってのは、普通に生きてれば世界なんて当たり前に存在するものでしかない。その地点で大きな溝が出来上がっちまってる。だから世界がお前に何を言った所で、そう心を揺さぶらない。……世界とそこに生きる者は、近いようで全く違う。神にならなかったオレもその点ではお前と一緒だ。違うから理解できず、それがオレ達の強みになる。意思が通じないからな。何言われたって無視してやれる”
だから。どことなく誇らしげな声が締めくくる。
“世界は姉の方を選んだ。少しでも自分に近しい方を。お前ならあんな風に揺さぶられたりしないって知ってたからな”
「あんた、世界が姉さんに何言ったか知ってるの！？」
人形のように表情を失ったマイの横顔が翡翠の光に照らしだされる様がありありと浮かぶ。ぞっとする冷たい表情は何かを思案しているようで、それがずっと気にかかっていた。
（――お願い、教えて）

心の中で強く願う。この声が聞こえているなら、どうか。
切なる願いにどこからか溜息が漏れる。彼が諦め気味の溜息をついたのだろうと一瞬遅れて気付いた。
だがしかし、男には素直に答えるつもりはないらしい。答えはすぐに出されず、真摯な声が耳を打った。
“約束しろ”
真っ直ぐなその声が届くのと同時に、メイの体が微かに明るくなる。真紅のメイド服とツインテールが仄かな光に包まれて揺れた。
「わ、わっ！」
内面から放たれる光に驚いて声を上げるが、男は何てことはないというように光に包まれたメイの体を闇色の腕で包んだ。
“――もし”
逡巡の後に告げられたのはメイの抱える心の闇そのもののような、重低音の昏い響きだった。
“もしお前の半身に何かあったとしても決して邪魔するな。……そう、目を背けることなく必ず全てを見届けると約束してくれ”
あるいは縋るような声だ。
そう思ったのは、体にのしかかる闇が苦しいほどにメイを抱きしめていたせいだろうか。

第七十四話

心に棲む獣の、どこか厳かにも聞こえる囁きの終わりにメイは闇より深い心の闇を覗き見た気がした。

これは誰の言葉だろう。

魂に寄り添う獣との距離があまりに近すぎて、男のものなのか自分のものなのか分からなくなる。

何が起ころうとも。

その言葉が何を指し示すのかを、初めメイは全く考えてはいなかった。

時間が経つにつれて心に浸透してくるその言葉は、微かな絶望と破滅が忍び寄って来るのを感じさせる。ひたひたと足音を立てて、メイの心を侵食する。だがいくら考えても言葉の意味は分からない。分かるのはただ、それが取り返しの付かない事態を示しているという事実だけ。

（これ、誰の言葉だろ）

勿論獣だ。獣の言葉に決まっている。

黙りこむメイに、男は何も言わない。

心を読んで返事をするでもなく、答えを急かすでもなくただ静かに待っている。その沈黙はメイに決断をと迫っているのは分かっていた。話を聞けば全てを知りたくなり、全てを知れば手枷足枷を嵌められた囚人のように動けなくなってしまうことも。――胸を襲い来る痛みと戦わねばならないことも、話を聞かないうちからメイは知り得ていた。だから分からないのだ。これは一体誰の言葉なのだろう。

自分を抱きすくめる腕に触れ、試しに後ろに寄りかかってみる。

すると何もないはずの闇が包みこむようにメイの体を支えた。

檻から放たれ、体が分かれ始めているのか。とすればこれはやはり獣の言葉か。

一つの存在であることよりも別個の存在であるのに安堵し、メイはようやく口を開いた。

「……半身って、姉さんのこと？」

確認の為の問いに、緩慢な動きで男が頷く。

“そうだ。お前の半身。魂を分かつ双子の姉だ”

やや大袈裟な言い振りだったが、間違いではないのでメイも何も言わなかった。

魂を分かつ半身。

（強さは全部向こうに行っちゃったみたいだけどね）

綺麗に分けてほしかったと、神様でも世界でもない誰かに向けて文句を言う。

強さも脆さも何もかもが半分だったなら、きっともう少しはマイの気持ちが見えただろう。

鮮やかなまでの沈黙を貫くあの紺青の背中はメイには真似できない。親を殺した敵と契約しながらいつか殺すと言い切れる強さも、ない。ないものねだりだと分かってはいるが、メイは少し落ち込んだ。

（けど、きっと姉さんだって私の気持ちなんて分からないよ）

こんな風にうじうじ悩む自分の事を、一体誰が知っているだろう。口に出さなくても理解できるような距離にはいないのだ。魂の分かたれ方が偏りすぎて。これで半身というのだからお笑いだ。せいぜいがマイの一部と言えそうなものを。

“お前の強さはお前のものだ。姉にはない”

降る慰めの声にすいと視線を滑らせる。

“姉の方も、お前の強さを羨んでいる”

「嘘」

“嘘じゃない”

「だって姉さんは私よりずっと強いし、頭だっていいし、魔術だって使えるじゃん。できないことなんてないよ」

その全てを自分が手に入れたいなどと思いはしないが、ティファ

を守れる強さに変えられるなら欲しいと思った。世界や神を殺せなくとも、彼女を守れればそれでいい。その強さを姉が持っているから、その点に置いてメイは羨ましいと感じていた。

“あんな化物じみた強さなぞ、持ってても百害あって一利なしなのになァ”

憐れむ声は誰の為か。

「それでも私は姉さんみたいに強くなりたかった」

両親に愛される姉。彼女になりたかったと思ったことだけはないが。

いつだって両親の期待に応えてきたマイは自分よりずっと大きな何かを背負わされている。そんな予感をずっと前から持っていた。その何かを自分ではとても背負い切れないと思った時点で、もう姉のような強さは得られないと分かってしまった。

男の言う人間らしい強さは、確かに世界にとっては脅威だろう。マイとの違いがそこにあるなら誇らしくもあるが、要するにそれは凡庸に過ぎないということでもあった。彼女が自分のこの凡庸さを羨むなら御門違いというものだ。

（いや、まぁ。自分が平凡だなんて口が裂けても言っちゃ駄目なのは分かってるんだけど）

自分の体を支える闇を一瞥し、溜息をつく。

こんな大きな肉食獣を家族に持ってしまった人間などメイはついぞ見たことがなかった。

ティファ達相手に言うならともかく、他の人間相手に自分は平凡ですだなんて言おうものなら睨まれてしまう。ダグラスを退けられる獣の檻になどそうなれるものではない。ただ、その強さとて自分のものではないのが悲しい所だが。

“悩むのは進化への一歩だ”

再び声が落ちる。

“お前が強くなりたいと悩むなら、きっと強くなれる。それがお前の強さだ”

「よく、分かんないよ」
“姉の方はもう悩むのをやめちまった。だからアイツはこれ以上強くなれない”
きっぱりとした言葉に顔を上げる。昏い声は、先程男が放った言葉と関係あるのか。
「さっき、何があってもって言ったよね」
“あァ”
「一体、何があるの？　姉さんに何が起こるの？」
訊くのは怖いが、何も知らないわけにもいかない。
メイは心の中で呟くでもなく、しっかりと口に出して男に問うた。誠意を示す態度に男が微かに驚いたように身動ぎしたが、返ってきたのは意地の悪い問いだった。
“知って、お前は何もしない自信があるのか？”
彼にとってはそれが何よりも重要な問いだったのだろう。こちらも誠意を示すような真っ直ぐな声で問われ、メイは口を噤む。答えを出せず、考えあぐねるように視界を天井へと向けた。光があれば真っ白なのであろう石造りの天井の滑らかさまではっきり見えていた。
「……」
何もしない自信。そんなもの、メイの中に一度だってあっただろうか。
（姉さんに何があっても見届けろ、なんて）
無理に決まっている。だが、まずは知らなければ始まらない。
メイは決断を迫られ途方に暮れたまま、天井を見つめ続けた。
耳元で大仰な溜息が聞こえる。不意に響いたのは、全く関係のなさそうな言葉だった。
“グラスの一族は”
「？」
朗々と謳うような声がメイの心に響く。諦めのような、郷愁という言葉を感じさせるような声色もメイの心にしか響かない。世界の

言葉は自分を揺さぶらないと男は言ったが、この声と言葉には心を揺さぶられた。世界ではなく、世界に生きる者側にいると言った男の言葉は正しいのかもしれない。近しいから男の言葉はメイに届くのだ。

何かを懐かしむ声をメイは無心で聞いていた。思いも悟らせないようにするために。

“奴らは俗世に関わることを極端に避けてた。けど、神や世界が暴走した時の為に血だけは絶やさなかった”

グラスの一族がどこにも属さない中立者だったというのは薄ぼんやりと聞いた記憶に残されている。世界最強の魔術師でありながら神に抵抗するでも服従するでもなく、どこまでも中立で在り続けた一族。イオやダグラスですら名を知る高名な血族。彼等は神や世界が暴走した時、止める気でいたのだろうか。

“遠くから見てても分かる程強烈な、ある意味執念だったよ。まァ、本能っつった方が早そうだが、奴らの場合は本能にも見えなかった。とにかく血を残したがった”

「血……？」

“そう、血だ。濃い血は魔力を高める。濃い血を残し、力を絶やさないように奴らは生き続けた。それでも血は自然と薄くなるもんだろ？　だから奴らは長い時間をかけて、より強くなるために魔術の研究もしていた”

強さを求めるのも血のせいかもなと獣が笑う。

その声にメイは、思わず呟いた。

「じゃあ、どうして二人は死んだの？」

頭の中に、今は朧気ながらにしか思い出せない両親が思い出される。

ティファの両親がダグラスに殺された時に殺されたグラスの一族。

魔術の開発をし、強くあったはずの魔術師一族。魔力はともかく魔術にかけて祖先よりも多くの知識を持っていたのなら、どうしてダグラス一人に負けたのだろうか？　姉の意志の力にあっさりと屈

したあの神に。自分という檻の中にいる獣の力に退いた神に。勝てる見込みは、こんなにもあったのに。

溢れ出したら止まらない疑問に、メイは目眩を感じて横に倒れそうになった。

傾く体を支えたのは、やはり闇だった。優しく半身を抱かれて体を支えられる。獣とも人間ともつかない不思議な感触はふわふわと柔らかい。大型の猫みたいな獣なら肉球ぐらいないものかと探ってみたが、感触はいまいち得られなかった。

“確かに強くはなった”

そんな現実逃避の間に男が答える。

“けどな、時が経つと奴らの中には猜疑心が宿ったんだ。どうしてこうまでして自分達は生き続けなきゃならねェんだって。俗世から離れてるのに、どうして人間を守ろうなんて考えてるのかって”

「……」

グラスの始祖とも言える魔術師に長い命を与えられた獣が、その後どう生きたのかメイは知らない。自分と同じようにグラス一族の誰かの肉体の中にいたのかもしれないし、そうでないのかもしれない。窓からそっと覗き込むように彼等の様子を見守っていたのかもしれない。自由に生き、風の便りにグラスの事を知らされただけかもしれない。分からないが、男はきっとグラスの一族が悩む姿を見て自身も悩んでいたのだとメイには分かった。

“奴らは答えがほしかった。だから俗世に降り立って人間と関わった。人間どもにとって世界がどうあるものなのかを知りたかったんだ。で、奴らは悟った”

「何を？」

“自分達も所詮人間だってコトだよ。当たり前のコトにやっと気付いたんだ。だから人間を守りたいと思って、だから堕落していった。一部は魔術師のまま留まって、残りはタダビトとして生きた”

そういえばイオは、自分達の名前を聞いても魔術師一族だとは思わなかったと言っていた。グラスという名は多くいるから、二人も

たまたまグラスの名を持つだけじゃないかと思っていたと。それはここで人としての生を得たグラス一族の事なのだろうか。そして魔術師一族として留まったのが、メイやマイの祖先。

（でも、私は生まれた時から人間だったよ）

メイはそう考え、自分の体を抱くように抱きしめた。

もしそう思っていなければ、自分は何なのだろう？

自分の祖先は自分を何だと思っていたんだろう？

神でも世界でも人間でもないと思っていたのなら、他に一体何があるのか。きっと彼等も分からなくて怯えて、だから人の里に降り立ったのだ。そうしなければ連綿と続く世界の平穏さと不変さに狂ってしまっただろうから。

レイニウム大聖堂。懐かしきあの部屋で再会した聖母も、自身の存在に悩んでいた。何者でもないと。それに自分は何と思ったんだったか。

“化物”

頭に浮かぶ疑問に声が答える。低い声にメイは息を呑み、自分の体を抱きしめ直した。

手の平を滑らせる。服越しに伝わる感触は紛れもなく人間のもので、他の何者でもない。

神でも世界でもない弱い存在だが、自分は人間だった。

（……あ、そっか）

だから男はメイに人間らしいと何度も繰り返したのだと気付いた。

自分を人間だと確認させたのはコンプレックスを抉る為ではなく、メイが化物ではないと教える為。祖先と同じ疑念を持たぬよう導かれていたのだと知り、メイはゆっくりと頷いた。

（私はアリア様やノルマン様とは違う）

切られれば血は流れ、腕がなくなれば元には戻らない。心の臓を貫かれれば死んでしまうだろう。

神のように長命ではない。世界のように全てを従える存在でもない。

世界の敵でも神の契約者でも魔術師でもない。
あくまで自分は、人だ。平凡極まりない人でしかない。だがメイは与えられたその答えを胃の腑に落としこみ、静かに安堵した。男が自分を導いた理由に納得し、ようやく心が落ち着いた。
自分もグラスの一族も、化物とは全く異なるものだ。
（……でも）
背中を支える闇を見やり、メイは胸中で独りごちる。
（心に獣が棲んでいる私は本当に人間って言えるのかな）
少なくとも普通の、ごく平凡な人間とは呼べまい。胸に手を当ててそう考えると、無性に悲しい気持ちが去来するのをメイは感じた。胸に棲む者に知られてしまう程の痛みに顔を顰める。だが男は何も言わなかった。この答えだけは男も持っていなかった。
だから代わりにメイが口を開くことにした。
「父さんと母さんは魔術師一族としての道を選んだのね」
ちっとも誇らしくないが、あえて明るい声で言う。そうすることで自分の中の問いを払拭しようとするように。
“魔術師としては下の下だったけどな”
相当恨みが溜まってるのか、嘲るような声で答える男に向けて振り返る。顔は見えないが、そこにあるのではと予想する場所に焦点を合わせた。
「それで？　父さんと母さんは堕落したせいで死んじゃったってことなの？　姉さんみたいに魔術師としての力がなかったから」
あっけらかんとした言葉に男が一瞬押し黙る。
心に温かなものが触れる。痛みを感じていないか探るような仕草を黙って受け止めると、本気でメイがあっさりした感情を抱いているのだと知り男は頷いた。
“まァ、端的に言えばそうなる”
「そっか。……それじゃ訊くけど、それと姉さんの話とどう関係があるの？」
男の声に凛と何もない闇を見据えながらそう返す。長いツインテ

ールが微かに揺れ、在るべき場所へと戻っていく。震えのないそれは、メイが恐怖心を取り払った証だった。

体を抱きしめるほどの震えはもうない。代わりに胸を占めるのは苛立ちにも似た強い意志。

（私は堕落して死ぬわけにはいかないもん）

例えどれだけ力がなくとも、魔術師としての才がなくとも自分は自分の力で生きて生きて、必ず生き抜かなければならない。死ぬのはこの獣がメイの身体を食い破った時だけだ。他の死因を今の所認めた覚えはない。もっともそれとて、抗えるものなら抗いたいぐらいだ。

「私はまだ死ねない」

まだここでは死ねない。自分達はダグラスという第一関門を突破できたのだから、せめてティファが世界に会うまで付き合いたかった。

堕落が強さを求めるのを止めることなら、自分はまだ強くなれる。マイはもう止めてしまったみたいだが、まだ間にあうかもしれない。希望も焦燥感も胸を食い破る程に溢れているが、メイは絶望だけはしなかった。

たとえここが世界の作り上げた空間であろうとそうでなかろうと、とりあえずは出口を探してティファと共に世界に会う。あまり時間の残されていないメイにとって、それが最終目標だった。彼女が再び体を奪われる事がないように、いざという時なかなか頼りにならない神々をフォローできるように。そしてマイと共に戦えるように、自分はまだ死ねない。獣には悪いが、自分はまだ命を明け渡すわけにはいかないのだ。

「ご先祖様がどうでも関係ないよ。たとえ私と姉さんがグラスの末裔だからって、私達まで堕落して死ぬなんて考えたくないもん。それに姉さんばかりが愛されて私がそうじゃなかったのだって、今思えばよかったのかもしれない」

いいなと羨む事が全くなかったとは言わない。寂しくなかったと

も言わない。
だが、それでよかったのだという気持ちだけはいつだってどこかしらにあった。
不思議そうな気配を纏う影に笑いかける。
「だってその分姉さんは幸せだったんだから。そうでしょ？　どっちか選べって言われたら、私は姉さんの幸せを願うよ」
だから自分は秘術を与えられたことを後悔しない。辛くともこれがマイだったらとは思わない。
嫌でも訪れる展開なら、これでよかったのだ。
メイも獣もお互いの役割を理解し、納得している。もしこれがマイだったら獣は彼女を殺していたかもしれないのだから、やはりこれでよかったのだとメイはうんうんと頷いた。
（それにあんたは私を家族だって言った）
心の中で語りかける。
グラス一族への恨みや憎しみを超えて自分の中で大人しくする覚悟を決めた男に、自分を家族と定めた獣に、檻は自分でなかった方がいいかもしれないとどうして言えよう。こんなにも優しい気持ちで自分の死を厭う者へ。
“メイティーナ……”
深い闇の中で男が息を呑む音が伝わってくる。誰にも聞こえない音はメイにだけははっきりと聞こえる。心に棲む獣、両親が強い契約をかけて娘に封印した存在が事此処に来て迷っているのがひしひしと感じられた。その背を押すように言葉を紡ぐ。
「今世界は暴走しちゃってるんでしょ？　だったら、グラス一族の私と姉さんが止めなくちゃ。その為に血は残されてきたってあんたも言ったじゃない。――だから教えて。姉さんは、世界に何を言われたの？」
迷いを孕んだ沈黙に、メイはしばらく無心になり黙っていることにした。
不安や疑問が消えるわけではないが、それでも必死に押し隠す。

旅に出るまで全く知らなかった事実をいきなり全て押し込められて、混乱しないわけがない。それでも倒れないようにと精一杯冷静さを保とうとした。分からなかったことの全てを曝されて尚立つのは少し骨だが、今はそうする必要がある時なのだと理解していた。

“グラスは予め、全部知ってたんだろうな。でなきゃ、こんな残酷な役をオレ達に……お前に押し付けるわけがない”

「――え？」

悩みが痛みに変わる。その瞬間を捉えてメイは顔を上げた。

“封印されたオレと、オレの檻になったお前と、愛情と引換えに一番重たいモノを背負わされた姉の方と。――全く、誰も救われない”

「ちょ、ちょっと！　何言ってるのかさっぱり分かんないんだけど！」

救われないとは何だ。

静かに痛みを感じているかのような声に、メイは黙っていられなくなり声を荒げる。言葉の意味を問い詰める声は闇の中に浸透し、包まれるように溶けていった。その音に男はしばしの間答える事なく、何かに耐えるように黙りこむ。胸を焦がす痛みがメイにまで伝わってくるようだった。こんなに心の距離が近いのだと今更ながらに思い知る。今まで存在に気付けなかったのが不思議なぐらいに。

同じだけの痛みを受け止める。今まで自分の痛みを彼が暗黙のうちに受け止めていたように。何も言わなくても相手の考えが読めるのは、痛みも悲しみも全て共有するということなのだと、当たり前の事をふと思う。

相手が獣でなければ以心伝心に喜べる所だろうが、メイは他の誰でもなくこの男と通じ合うのを悪く思ってはいなかった。当たり前のように魂に寄り添う金獅子。体温が混ざり合い触れていることさえ気付かないのは楽でもあった。融け合うようで別個の存在。それはまるで、双子の姉であるマイのようで。

せり上がる不快感が次第に収まっていく。

胸を叩くのを止めたというのに、体はいつも通り穏やかだった。

ほぅと息をつくメイの耳に、今度こそ確信めいた声音で男が囁く。
その痛みに満ちた声にメイは思わず胸を押さえ、出された言葉に反論や驚きの声を失った。
“魔力の高いお前の姉はここで朽ち果て道を切り開き、その活路を抜けたオレとお前が世界を殺す”
吸い込んだ息が纏わりつくように感じられた。
“――それがグラスの末裔に対して打ち出された、シナリオだ”

第七十五話

メイが自分の心に棲む獣からグラス一族の狙いを聞くより少し前。彼女の姉であるマイは、苦々しげな顔のアレイズに支えられながらその場にへたり込んでいた。

闇の中は決して暑いわけではないのに大量の汗が流れている。ガタガタと震える体はまるで体温が高いことを指し示しているかのようにアレイズには思えたが、肩に触れる手の平が伝える熱は決して高くない。

（くそ、一体どうなってる！）

アレイズは辺りを包み込む闇に自身を溶け込ませながら、内心で舌打ちしていた。

先程ティファに――癪だがイオにも――出口を探してきてほしいと頼んだところではあるが、あれから一度もマイはアレイズの言葉に反応していない。ただひたすら自分の妹の名前を呟き続けるだけだ。

ここにメイがいたらすぐにでも意識を取り戻してくれるのかもしれないが、彼女はいない。探しに行こうにもマイが落ち着かない事には始まらず、アレイズはあれから一歩も動けていなかった。今はただ、ティファ達が出口を見つけるのを待つしかない。

アレイズははぁ、と大きく息をつきこれから一体どうしたらいいのか考えあぐねていた。

「ダグラス。貴様は知っていたのか……？」

知らずそんなぼやきが口をついて出てくる。慌てて口を閉じるが、それすらもマイは聞いてなかった。

体の震えは次第に強くなり、呟く声は更に囁くようなものになっている。

まるで心が壊れてしまったかのようだ。

（壊したのは、考えるまでもなくレイナなんだろうな）

イオがそう断言したからということもあるが、今ではアレイズも実感として捉えていた。意志の強いマイがここまで追い込まれることなど、世界が手を下さない限りありえない。神である自分やダグラスには彼女を追い込むことなど不可能なのだ。並の人間にも到底不可能。残るはティファだが、彼女は今まで自分と一緒におり何もしていないのだからと考えると、消去法で残るのは世界のみになった。

（ノルマンやアリア……でも駄目だろうな。やはり）

化物じみた力を持っているとはいえ、彼等でもマイの心は動かせないだろうことは分かっていた。誰の手に負える存在ではないのだ、マイは。ただ一人ティファを除いては。

「ダグラスさん……」

「マイ？　気付いたのか？」

歯を強く噛み締めていると不意にマイがダグラスの名を呼んだので、弾かれたようにアレイズはそちらに意識を集中させた。すると震えている体を抱きしめ、頬のラインに沿って涙を流しながら静かにもう一度自分の契約神を呼んだマイが目に入った。柔らかな輪郭を伝う涙は翡翠に照らされ、一種幻想的な横顔を浮かび上がらせる。アレイズの声を聞かずただ彼の神の名を呼ぶ声は、まるで助けを請うているようでもあった。あのマイが、ダグラスに。

いつもよりも更に高く出された声は嗚咽に混ざってしまっている。それは震える亜麻色の毛先につられて揺れ、マイを幼子のように見せていた。ただ一人何かを抱えて泣きじゃくる子ども。だがいくら助けを求めてもダグラスは来ないのだ。今はアレイズがどうにかするしかない。

が、アレイズはマイの様子をただ黙って見つめるしかできなかった。

（何を言えばいい）

彼女はティファではない。ティファに向ければいい言葉も、マイに向けてどうなるものではなかった。第一彼女を慰めるのはダグラ

スやメイの役目なのだ。アレイズには経験すらない。一度だけ、星夜祭の日に神器を取り戻す道すがら彼女が漏らした弱音だけがアレイズの知るマイの脆さだった。

常にティファとメイの為に悩み彼女らを案じていたマイは、今手の届かないメイを思って泣いている。歩き出せば、駆ければ届く距離を立ち上がりもせず、彼女らしくもなくただ泣いている。常ならば強引にでもメイを連れ帰り、お仕置きと称してモーニングスターを振るうぐらいわけない彼女がだ。本当に、らしくない。しかし彼女が彼女らしさを失うだけの理由がここにはあるのだとアレイズは感じていた。

透明な雫が滴り落ちる。その熱さに耐えかねて、アレイズはマイの肩をそっと掴んで自分の方に引き寄せた。そうして頭を数度優しく撫でてやる。ティファにするように。するとマイの震えが次第に落ち着いていった。

（……そうか）

言葉では駄目だったのだと気付く。

こうやって直接触れて存在を確かめて、ここにいると知らしめなければ。

亜麻色の髪は彼女の意志の強さに反して柔らかく滑らかだ。頭頂から耳の傍まで何度も撫でる手を往復させると、形の良い頭が微かにこちらに傾いた。衣擦れの音がし、徐々に徐々に体が触れる。くったりと力を失う体を避けずアレイズはマイを落ち着かせながら、必死で今どこにいるのか分からないダグラスに向けて弁解した。

（いや、きっと今のマイがティファで俺がダグラスだったとしても貴様は同じことをするだろう？　主にマイの為に。俺だってティファの為だ。だったら問題ない、はずだよな）

随分と後ろめたい人間がするような言い訳だったが、何も言わないよりはましだと思い何度も心の中で呟く。そうしてアレイズはふぅと一息ついて、またマイの頭を撫でた。今は別の空間にいる、彼女の契約神の代わりに。

本来ならば、ダグラスがマイを落ち着かせる役目を担うはずであるのだが、いないものは仕方がない。諦めろ。そう考えることにしてアレイズはそのまましばらくマイの傍にいた。後で呪われるかもしれないが、その時は呪い返すまでだ。

（大体俺だってティファの傍にいたかったのに、あいつに譲ったんだからな）

じゃんけんで負けたからとは言わない。あくまで譲ったのだ。

虚勢じみた思いで独りごちる。その時、ふと頭に疑問が浮かんできた。

（それにしても、レイナは何故マイに干渉したんだ？　ダグラスの言う通り何か言ったんだろうが、それならイオやメイでもよかったはずだ。俺に会った直後というなら、あの時俺に言うという手もあった。なのにわざわざマイに干渉した理由とは一体何だ？）

それが分からなかった。確かにマイは人間であるし、神よりは儚く脆い存在かもしれない。

だが彼女は血の薄れたグラスの一族で数少ない魔術使いに成長した。何よりずば抜けた意志の強さを持つ人間でもある。そんな彼女の前に主の体を乗っ取った存在が現れて、彼女が逆上しないわけがない。怒れる彼女はそこいらの神よりも遥かに高い戦闘能力を示すだろう。

血に濡れた凄惨な笑顔、あれはもう神を殺した顔だ。レイナとてそんな事は百も承知のはずなのだが、わざわざ危険を冒してまで現れた理由とは何なのだろうか。そうまでして彼女に、マイに言わなければならない事があったというのか。

顎に手を当てて考え込むものの、何も事情が分からない状態で何を考えても答えが出るはずがない。現にアレイズには何も答えが出せなかった。

更に言えば、答えを導き出すための時間が与えられなかった。

「アレイズ、様」

ほぅっと息を吐き出して柔らかな声が耳朶を打つ。自分の頭を撫

でる手を見やり、マイがアレイズを見上げた。頬を伝う涙に指先を這わせ、一寸驚いたような顔をする。それからすぐに慌てたように顔を逸らした。

「落ち着いたか」

「は、はい」

問うと、ぱっと身を離したマイがこくこくと頷く。一応記憶はあるようで、背けた顔は見えないまでも首まで真っ赤に染まっていた。これならもう大丈夫だろうと頭を撫でる手を離す。息をつくと、マイが光に照らされていない闇を見るように緩慢な動きで右へ左へ首を振る。

「あの、ティファ様は」

「イオとティファは先に出口を探しに行っている。俺達はもう少ししたらメイを追うぞ」

涙を拭う後ろ姿を見ることなく答えると、マイがばっとアレイズの前に回りこんだ。

「そうです、先にメイを見つけなければ！」

「……何かあったのか」

「何かあったというか、あるかもしれないというか……」

訊くとどうにもあやふやな回答しか得られずアレイズは眉を顰めるが、マイはそれ以上上手い言葉が見当たらなかったらしく立ち上がりアレイズの腕を引っ張った。

「行きましょう。早くメイを探してティファ様達とも合流しなければいけませんし」

「あ、あぁ」

先程の無機質な横顔からは一変した強い眼差しに射抜かれてアレイズもつい立ち上がり、引かれるままに歩き出す。指輪の光で前方を照らしてやると周囲を注視する亜麻色の瞳が油断なく光っていた。

しっかりとした足取りで歩を進める姿に弱々しさはない。

だがアレイズはすっかり元通りになったはずのマイを見て不安感が込みあげるのを止められなかった。

（何があった）
喉元に引っかかっている言葉を呑み込む。
マイの様子からしてメイに何かあったのは間違いない。それはマイ自身確証のない事らしいが、ティファ以上に気にかかる事態となると相当ではないのか。彼女は常にティファの身を案じている。他の事は二の次なのだ。それが例え双子の妹であろうと同じ事。彼女はメイの力量を信じて放任し、ティファを守るのに専念している。その彼女が向ける心配というのは一体どこから来るのか。
「メイに何があった」
ずんずん進む背に問いかける。
返事は一瞬遅れ、躊躇うように返された。
「分かりません。でもあの子が一人になったというのが気になるんです」
「お前だって一人になろうとしていたじゃないか」
「私の場合は……その、考え事がしたくて」
その考えごとの内容は決して教える気はないのだろう。アレイズが言葉を濁すマイに肩を竦めると、すでに思考に耽っていたらしきマイがちらとこちらを振り返った。
「アレイズ様、これは覚えていたらでいいのですが」
「何だ」
「メイの目は、何色でしたか」
逼迫した声に目を見開く。
「まさか覚醒しているのか」
「分かりません。でももし何か危険が迫っているなら、あの子の目は赤く染まるはずです。元々秘術はティファ様を御護りする為に与えられたもの。世界が近づきティファ様に殺意を抱いているのなら、覚醒してもおかしくないはずです。そう、アリア様に会った時だって――」
言いかけ、口を閉ざす。「いいえ」自分の言葉を否定するように首を振ったマイは再び前方を見据えた。

「今までも、たまに様子がおかしいと感じる事はありました。私はそれを気のせいだと思っていましたけれど、もしかしたら気のせいなんかじゃなかったのかもしれない」

後悔を滲ませる声に付いて歩く。何も言わないアレイズにマイは更に続けた。

「世界はメイに干渉したと思われますか？」

「メイに？　……いや、ダグラスの話を聞く限りそれはないはずだが。そもそも何故メイに干渉する必要がある」

「それも分かりません。ただメイの様子がおかしいのは、覚醒か世界かどちらかだと思っただけです」

早足が不意に止まる。

視線を背中に向けると、マイは天を仰いで呟いた。

「私達の両親は、あの子に酷い事をしました。私はそれをずっと知りませんでしたが、あの子はどこかで覚えていたのかもしれない」

グラスの一族が施した秘術の件か。

だらり腕を下げるマイの後ろ姿の痛々しさに、彼女がまた壊れてしまうのではと懸念する。だがそれは杞憂に過ぎず、彼女はいつも通りの凛とした口調で「私は」と告げた。

「両親がメイにした事を一生許しはしないでしょう。けれど二人を殺したダグラスさんを許しもしないでしょう。どれだけあの人が私を大事にしてくれても、私は決して彼を許しては駄目なんです」

クリスタルを握り締める手が震えている。こんな葛藤を抱いて彼女が今までダグラスと向かい合っていたのを、アレイズは初めて知った。

目を合わせては甘い言葉を吐かれては冷たい言葉を浴びせかける彼女は、しかし心のどこかで彼の神にほだされていたのかもしれない。あるいは自分達と行動を別にしていた間に積み重なった信頼が葛藤を生んだのかもしれない。

（ダグラスはマイのこういう葛藤も全て知っていたのかもしれないな）

人の感情の機微などお構いなしといった風の神ではあるが、ことマイに関しては敏感だ。これらを全て引っ括めて頼むと言われたのなら、無茶を言うなと言わざるを得ないが。

深く溜息を吐き出す。そうしてアレイズは自分に言える精一杯の言葉を紡いだ。

「お前が許さなくともダグラスは構わず付いて回る。殺すと言っても結局は喜ぶだろう、あれは」

一緒に生きてベタベタに甘やかすのがダグラスの目標だろうが、マイが拒否すれば彼女の手にかかって死ぬことさえ厭わないに違いない。もっともそれは最終手段であり、それまでに打つ手は全部打っていそうだが。

マイが振り返る。闇の中できらりと煌く眼差しがひたとアレイズを見据えていた。

「――彼はついて来るでしょうか。どんな場所でも」

思い詰めたような問いに頷く。これだけは間違いのない答えだった。

「お前がいればな」

「……そう、ですか」

答えに、安堵したような苦しんでいるような複雑な表情でマイが笑んだ。それから握りしめたクリスタルをエプロンのポケットに入れ、くるりと背中を向けた。

「メイの姿は見えませんね」

「相当遠くに行ったんだろうな。早く見つかればいいんだが」

レイナが干渉したにせよ覚醒間近であるにせよ、メイにとっていいことなど何一つない。

足を止めたマイを急かすように先に進むと、彼女は一歩だけ進んでから再び立ち止まった。

「マイ？　どうした、早く――」

「私、いつかあの子に謝りたかったんです」

泣きそうな、けれどもさっぱりとした声に振り返る。

マイは淡い笑顔を浮かべてアレイズを見ていた。数歩分離れた距離が何故か無性に気になり近づこうとするが、その度に彼女は後ろに下がった。

「けれど機会はいつだってあったのに私は先延ばしにしてばかりで、結局何も言えませんでした」

「今から言えばいい！　メイを見つけたらすぐにでも――」

荒らげた声に、マイが「いいえ」と首を振る。セミロングの髪が艶を放つ。

ニッコリと慈悲深いまでの笑みを浮かべ、マイはとんと後ろに下がった。

「もう、遅いんです」

「なに――っ！？」

だが踊るようなステップで後ろに下がったマイを追う事はできなかった。

頭に警戒信号のような、本能がかき鳴らす警鐘が過ぎる。それはティファが持つ指輪が、彼女に危険が迫っていることを知らせている証でもあった。

（イオは何をやっている！）

アレイズは胸中でイオを激しく罵り、自分が気付いているものとは別の何かを悟った風のマイを一瞥した。それからおもむろに手を伸ばす。

「ティファが危険だ。マイ、お前も来い！」

連れて行けば逆に彼女に怪我をさせてしまうかもしれない。この空間で現れる敵などどうせ世界か教皇か神しかいない。そこら辺の野党ではないのだ。迫る危険も大きい。だがこのまま放っても置けないとアレイズは腕を伸ばし、マイの手を掴もうとしてするりとすり抜けた彼女の囁きを耳に聞いた。

「行ってください」

刹那、足元が覚束無くなる。

「マイ、お前こんなスペルまで――！」

深い闇が大口を開けてアレイズを吸い込もうとする。必死にそれに抗おうとするものの、いくらスペルを唱えてもうまくいかなかった。ダグラスに仕込まれたのか、強制力の高いスペルにずぶずぶとアレイズの身が沈み込んでいく。解呪の方法は何度も唱えているのに術が作動しないのは、マイの意志の強さ故か。

どうあってもマイは――。

「また一人になるつもりか！」

「えぇ」

怒声にマイが笑みを深める。ちらと泣きそうに顔を歪めたマイは時折スペルを紡ぎ、魔力の使い過ぎで額に玉の汗を浮かべながら術を完成させる。腕を伸ばして藻掻くアレイズを見下ろし、彼女は目蓋を閉じた。

「どうか私の主と妹をよろしく御願い致します。メイに害が及ぶ前に、道は私が切り開きますから」

一体何を言っている！

口を開き怒号を放つ。だがそれは闇ではなく空間と空間を繋ぐ道の中に吸い込まれ、虚しく消えた。

◇　◇　◇

「……申し訳御座いません、アレイズ様」

何もなくなった床を見下ろし、マイはそっと呟いた。

闇色を纏うアレイズはもうティファの元に行っただろうか。転移先を間違えていなければいいのだが。

辺りを見渡す。一面の闇を振り払うように光を生み出すと、空間転移の影響かどっと疲労感が襲ってきた。

「もう少し時間があるといいのだけれど」

できればメイに謝りたかった。幼い日、自分が何もできなかったことを。

（いいえ、私はただ知らない振りをしていただけだわ。そして何も

しなかった。その間にもあの子は秘術を埋めこまれていたのに）

どんなに怖い思いをしただろう。悲しい思いをしただろう。

振り返り、痛む胸を押さえてからマイはクリスタルを取り出した。緑色の冷ややかな光を放つそれを握り締める。

「出口なんて、どこにもないんです」

だから自分が生み出さなければならない。ないものは作る。もはやそれしか道はないのだと世界は言っていた。

ティファやダグラスが懸念していたように、世界がマイに伝えた事は心に大きな亀裂を生んでいた。

『マイティーナ。貴女が契約神であるダグラスと共にこの空間の贄になれば、皆はここから出られるわ』

贄。その言葉のあまりの異質さに目を見開いたマイに、世界はなおも続けたのだ。

『代わりに貴女達は、永久に魂を囚われることになるけれどね――』

決断したら、私の名前を心の中でもいいから呼んで頂戴。

世界はそう囁いた。優しくも残酷な、決断なんて簡単に決めかねるそんな提案を。

（けれど、私がやらなければ他の誰もここから出られない）

ここがどこかは知らないが、出ない事には世界には至れないとマイには分かっていた。世界は神出鬼没。ここから永遠に離れようと思ったら、ティファ達は孤立無援になってしまうのだ。それだけは避けなければならない。まずは外に出て、生き延びなければ。

本当は外に連れ出そうと紡いだスペルは、一言目から拒絶をマイに伝えた。代わりに内部での、近距離の転移に変えるとすんなり通った。これはそういう空間なのだと理解し、ますます絶望的な気分になる。世界の言う事が嘘ではないのだと知る度に気分が重たくなった。

暗闇の中を紺色のメイド服が揺れる。ふわふわ浮かぶ光の玉が周囲を照らすので歩くのには全く困らないが、ともすれば沈みがちになる思考を浮上させるのに意識を割いているので気付けば足が止ま

っていた。
　闇の中でかろうじて浮かび上がる白い頬に、水滴がつたう。熱いそれが涙なのだと知ったのは、何度目に足を止めた時だろうか。
（まさかメイまでレイナに干渉されたなんてことは……）
　そんな事があったら、自分は今すぐにでも世界を殺しに行っているだろう。自分のみならずメイの命まで贄にしなければならないとあれば許せるはずもない。しかし不思議と自分が贄になれと言われた時、マイは世界を打倒して脅してでも解決策を聞こうとは思えなかった。
　無言で歩く自分の周りには誰もいない。自分が遠くに追いやったのだから当然だ。
　誰も自分の近くに置かないように、遠くに遠くに追いやった。
　そしてマイは今誰よりも、その事に胸を痛めていた。必要な事とはいえ、酷い事をしてしまった。
（ティファ様、メイ……）
　自分が誰より大事に思っている主。誰よりも親しかった友達。脳裏にスカイブルーの髪の毛をたゆたわせて明るく笑う親友の姿が過ぎる。隣で天真爛漫な、自分とは似ても似つかぬ無邪気な笑顔で走り回る妹の姿も。二人とはぐれたのがとても心細く、切なかった。
　目を閉じ、数秒足を止める。
（アレイズ様、イオ様）
　今ティファの元には二人の神がいる。
　そのうちの一人は世界と深く関わりがあり、一人は魂の審判者として罪なき魂の救済を願っている。彼等ならきっと、ティファが傷つけられる前に世界を遠ざけてくれるだろう。そう考え、マイは先程自分が空間転移で遠くに追いやった黒髪の事を思い出し、祈るような気持ちで救いを求めた。自らの命ではなく、ティファの命の救いを。
（メイを先に見つけられたら、あの子もティファ様の元へ送らなければ）

ティファや神々の傍ならきっと大丈夫だ。覚醒をしてもイオが傍にいるし、今度はティファも目を醒ましている。自分一人が対処するよりずっといいだろう。

「誰一人死なせはしません」

再び歩を進めたマイは頭上を仰ぎ、そこに何もないことを確認しながら誰に言うでもなく呟いた。実際誰も聞いていないのでその声はひどく小さい。しかしもしもこの場に誰かいたのなら顔を顰められたかもしれない。自分でも驚くほど震えた声だった。

涙が伝う。怖いのか悲しいのか切ないのか、もはや分からなくなっていた。

死ぬのは怖い。先に進めないのが怖い。ティファをもう守れなくなるのが、怖い。

だがもう他に道などない。このままでは皆朽ち果て、守るどころの騒ぎではなくなってしまうだろう。親の敵がどうだとか、そんな事も言えなくなるのだ。

「……ダグラスさん」

呟いたのは主や妹の名ではなく、ほぼ強制的に契約をさせられた彼の銀の神の名。

救いを求めるようなその声に応える言葉はないが、マイは気にせず続けた。

「教えて下さい。こんな時、私はどうすればいいんですか」

いつだって教えを請えば答えてくれた声は返ってこない。クリスタルがマイを嘲笑うように冷たく光った。その光を閉じ込めるように両手で握りこみ目を閉じる。眦から涙が一筋零れた。

（貴方はきっと私が死ねと命じれば死ぬでしょうね。私が一緒に死ぬとなったら、喜んで付いて来るかもしれない。そんな展開、私はちっとも求めてなかったのに）

万一彼が命を失うなら、それはマイが殺す時だ。他は許さない。

ずっとずっとそう思ってきた。それだけがマイがダグラスと契約し、魔術を教わる理由だった。腹立たしくも孤独ではない戦いが自

分の心を救っても、隣にいるのが気にならなくなってもマイは彼への殺意だけを胸に生きてきたのだ。世界とはティファが決着をつける。だからダグラスは自分がと。

だというのに自分は。

「それなのに、私は――……」

呟いた言葉が闇に溶けていく。掠れた声の続きを知る者は、どこにもいない。

第七十六話

それぞれのメンバーが各々の思惑を巡らせている中、出口とメイを探すべくティファとイオは特に何を喋るでもなく歩き続けていた。

指輪の光があるとはいえ、辺りを満たす闇は深い。

足音も吸い込まれ、一帯は寝静まった世界よりも頑なに口を閉じていた。ともすれば無音なのではないかと錯覚してしまうような静けさを打ち消すのは、かろうじて分かるお互いの息遣いだけだ。一人でないと分かるのもお互いの体温。この手が離れてしまえば、ティファは翡翠の光に晒されているはずのイオを探す為に声を上げるだろう。幽霊だの強盗だの言われても剣を向けられる自信があるが、足音まで包みこむ闇への恐怖までは払えなかった。

今、自分達は世界で二人きりなのだ。でも、それはとても幸いなことなのだとティファは思った。

行けども行けども前にも後ろにも見えるのは闇だけ。

（こんな暗い中で、メイったらどこまで行っちゃったの）

アレイズもマイもティファ達でさえ後方に置き去りにして、メイは今一人ぼっちだ。こんなにも辺りは昏くて静かなのに、メイは自分を保っていられるのだろうか。怖くないのだろうかと心配になった。彼女の姉であるマイの様子も気がかりだったが、あちらはアレイズに任せるしかない。人を慰めることにかけてはイオよりもアレイズの方が適役だとティファは経験上知っていた。そしてメイを探すならイオの方がいいというのも。

「……」

途中、長く続く沈黙に耐えかねてティファは何度も口を開こうとした。その度に張り詰めたイオの横顔に遠慮してしまい何も言えなくなるというのを繰り返して、これが何度目だろう。

イオは自身の金髪を荒々しく撫で、鋭い目付きで前方を睨んでいる。ささやかな光が照らす範囲に影が落ちるのを願いながら、それ

を決して見落とさないようにしながら。ティファは左手薬指にはめた指輪に無意識のうちに指先を触れさせながら、それを横目に進んでいく。もうかれこれ一刻はこんな感じだった。それほどの沈黙がお互いを満たしても二人は口を利かない。というか利けない。

「……」

苦しいほどの沈黙が、闇に混じっては消えていく。

無論そんな感覚は幻に過ぎない。それでもいつかはこの沈黙が消えてまた明るさが戻ることをティファは切実に願っていた。だからこそ、それを自分の手でと考える。……考える事は考えるのだが。上手くいかない。

（私も心配だけど、イオはきっと私達以上にメイの事心配してるんでしょうね）

最近の彼の態度を見る限り、そうじゃないかとティファは胸中で呟く。いつだってアレイズと張り合ってティファを大事にしてくれたこの神は、今別の人間に恋をしているのだからと。あまりにさりげない態度だったので気付きにくいし、恐らくは当人だって気付いてないのだろうけれども。それでもティファには分かった。自分に接するのとはまた違う、慈しむような眼差しを見てしまったせいかもしれない。

（最初は体を乗っ取るようなことまでしてたのに、不思議な感じだわ。でも、よかった）

イオが他の誰かを大事に思えるなら、それはとても素敵な事だ。例えどれだけ好きだと言われた所で応えられないティファは素直にそう感じていた。身勝手だとは思うが、二人には幸せになってもらいたい。ただ、だからこそイオは今辛いのだろうなというのも分かっていた。

（やっぱり辛いわよね。自分が慕ってた、いざという時は私を止めてでも守ろうとしたレイナ自身が手を出してきたんだから）

世界が干渉したのはマイだ。だがそれ故にメイが一人になったのだと考えると、全くの無関係とも言えないのだ。否、全ては七年前

の惨劇から――更に遡るなら世界がティファの夢を見た時から繋がっているのか。

何も言われなければ、何もされなければ自分はグランハート家から出る事無く、レイニウム大聖堂に行くこともなく平穏に生活していただろう。両親やメイやマイと一緒にいつまでも。

（どうしてそれじゃ駄目だったのかしら）

放っておいてくれればよかった。そうすればティファは決して世界を殺そうなどとは思わなかったのに、それどころか想像さえしないまま、予言も知らないまま天寿を全うしたかもしれないというのに、どうしてそれでは駄目だったのだろう。レイナが動き始めた時からティファにはそれが疑問だった。アレイズやイオに出会えなかった道をティファは選びたいとは思わなかったが、世界の為にはその方がよかったのだということぐらい分かっていた。

（レイナは自分から事態を引っ掻き回したいのかしら。でも、どうして？　ノルマン様の言う通り殺されるのが望みだから？）

それこそ理由が分からない。彼女はあんなにもアレイズと共にいたがったのに。

（そうしないといけない理由がある、から？　……だけど、その為に無関係のマイに干渉するなんて）

自分でもアレイズでもない。イオでもダグラスでもない。

本当に関係のないマイに世界は干渉した。ティファにはそれが許せなかった。

七年前に巻き込まれただけでも十分過ぎる怨嗟を呼び起こすのだ。二人から両親を奪った自分への嫌悪とダグラスへの殺意、それから世界への強い怒りと疑念。だというのに彼女はまた繰り返そうとしているのか。今度はマイ自身をティファの手から奪おうと。

（それにメイまで。……もしあの子が次覚醒したら、どうなってしまうのかしら）

アレイズから大まかに聞いていた話では、ダグラスは彼女の中にいるものを獣と呼んだそうだ。グラス一族による秘術を体内に埋め

込まれたメイは、今人間では捉えられない光景を視界に入れてすいすい歩いていることだろう。

今まさにメイも奪われようとしている。だが、これに関しては怒りのやりどころがなくティファは溜息をついた。隣でも同じ時に溜息をついたイオがいて、二人の呼気が闇の中に溶けていく。

その時、溶けて消えて行くはずの溜息の先で今まではなかった光が忽然と姿を現した。その光が増すのに合わせて、ティファが持つ翡翠の光が強くなっていく。まるで警戒信号のようなその光は、暖かくティファとイオを包み込み二人を守る。闇を照らす緋色の光に二人が溺れてしまわぬように。

「これは……！」

自分が意図した力ではない、指輪自身が意思を持って放った力にティファが息を呑む。その間にも緋色の光は強くなっていくのだが、その光に毒されることなく凛とした清涼感のある翡翠色の光の方が目に鮮やかに残った。

アレイズが守ってくれているのだろうか。

ティファは指輪を一瞥した後で隣を見やる。

イオは光の中、微かに緑がかったティファの目を見ていた。ティファも同様に彼を見ていた。それだけで二人共口を開かない。だというのに何故か、イオが自分と同じ事を考えているのが分かった。張り詰めた緊張感に芯のある光を灯した碧眼が、ティファに警戒を促したせいかもしれない。

（来たんだわ。彼女が）

これは間違いなく彼女だ。緋色の光も仄かに感じる魔力の質も、ティファには馴染みのあるものだった。

（――でも、好都合だわ）

内心でほくそ笑む。

本来ならば出会わない方がお互いの為だろうが、自分の侍女であり幼馴染のマイが傷つけられた原因である彼女を放ってはおけなかった。もし相手がその気なら戦闘だって辞さない構えだ。たとえ、

世界がどれほど強くても関係などない。自分には主として侍女を守る義務があるのだから。

だが、それとは裏腹にイオは冷や汗をかいていた。

「……まずいね。今世界に会うのは危険だ」

「イオ、でも」

「あれだけの意志の強さを持つマイでさえ打ちのめされたんだよ。彼女が本気で僕達を潰しにかかってるんなら、何をしでかすか分からない」

一歩下がったイオはその後ろ足だけを翡翠の光からはみださせ、逆に危険を呼び寄せていた。それに気付いた彼は急ぎ足を戻し、大量の冷や汗をかきながらも前を見る。ティファの手をきつく握りしめ、何かあったら盾になってでも守ろうとする決意が滲み出ていた。

「こんな所にまで出てくるなんて」

強くなる緋色の光に苦々しく漏らすイオに答えるように、光はティファの髪を揺らしながらゆっくりと人の姿を取り始めた。釣られて強い反応を示す翡翠の光もまた、緩慢に広がりを見せながら二人を大きく包み込む。その中で豊かな緋色の髪が静かに流れる様を、二人並んでじっと見つめた。逃げたくても無駄なのだと言うことはお互い分かっていた。

女性らしい身体の線が浮き上がる。血のような赤を持つ彼女は流れていく髪同様静かに二人を見返し、淡く微笑んだ。

それは何も知らない人間が見たら、無邪気なものに見えたかもしれない。だがすでに散々世界に痛い目に合わされているイオとティファにとってそれは、悪魔の笑みに他ならない。

体を強張らせ、いつでも武器を取り出せるように意識を集中させる。

ティファは空いた手をぎゅっと握り締め剣を取り出せるように、イオはその魔力を顕現させられるように。

「大丈夫です。今は何もしません」

しかし緋色の彼女――この世界そのものであるレイニウムは、そ

んな二人の様子を楽しそうに見ながら笑うだけだった。そこには確かに敵意も何もなく、ただ楽しんでいるような雰囲気が見えるのみだ。

だがそれを一体どうやって信じろというのか。

楽しげな姿により一層の怒りが燃え立つ。ティファは勝気そうだと言われるダークブルーの瞳を細め、殺気立った目で世界を睨めつけた。レイナとは対照的な青い容貌が見せる冷たさを、そのまま声に込める。

「あなたはすでにマイに干渉してるわ。信じろって言う方がおかしいな話よ」

「僕もティファと同意見だよ。ここ最近君が出てきて穏便に話が終わった試しがないんだけど」

イオはあまりにも普段とは差異のある冷ややかな声に目を丸くしていたが、彼自身が放った声もまた冷え冷えと凍えるようだった。世界に殺気を向けるティファを咎めるでも窘めるでもなく、その怒りを向ける事を許容している。それは世界が与える理不尽と疑念故だった。

（どうして、あなたは笑っていられるの）

マイの心をあんな風に壊しておいてなお笑っている世界。

自分は他の聖人聖女とは違い、世界も神も信じてはいなかった。それでも一応彼等を信じ敬愛する位置にいた聖女への仕打ちとしてこれほどの裏切りはないだろう。マイとてそうだ。彼女もレイニウム大聖堂で長きを過ごし、聖女の侍女として生きていたのだから。

絶対零度の冷たさに、しかしレイナは気にした風もなく微笑を浮かべたまま言葉を続ける。

「あなた達はマイティーナから何も聞いていないのね」

「――何も言えなくなるぐらい壊したのはあなたじゃない！」

強烈な存在感に向けて叫ぶように声を上げる。凛と伸びた声は怒りに塗りつぶされており、いつものような真っ直ぐさよりも暗い闇を思わせる。だがそれを気にしてなどいられなかった。何故こんな

にも余裕でいられるのか理解できなくて。
「レイナ……」
イオもその若干幼い顔を歪めて呟く。世界が全てを知っていてティファを煽っているのだと気付いたせいか。
この世で彼女に見えないものなどない。例えそれがどんなに特殊な闇の中であろうとも。だからティファは腹が立つのだ。その万能さを持って、たった一人の人間の心を壊しにかかるなんてあまりに大人気ないではないか。
「私はただ、助言をしただけですよ」
ティファの怒りを受け流すようにレイナが囁く。
彼女はマイが壊れたなど知らなかった、とは言わなかった。万一言われていたらティファはその瞬間にでも世界への殺意を行動に移していたかもしれないが、彼女はそんな愚かなことは言わなかった。もっとも、何もかも知った上で余裕を持って佇んでいるのも相当に腹立たしいのだが。
既に堪忍袋の緒は切れかけている。
指先に指輪の魔力を集中させ、今にも暴発と称してありったけの力を叩きこんでやりたいぐらいに。それが指先を軽く振るだけで安易に達成できるほど密度の高い魔力を集め、ティファは寸前で堪えていた。彼女の顔を見るまではこれほど腹は立たなかったというのに、何事もないと笑んでいる姿を見た瞬間怒りが膨れ上がっていた。
（大体ここに呼んだのがレイナじゃないってどうして言い切れるの）
ノルマンかもしれない、アリアかもしれない。他の誰かかもしれない。
だがティファにはどうしてもこれが、この事までもがレイナの仕組んだ罠ではないかと思えてならなかった。彼女の見せる余裕がそう見せるのかもしれない。
「それでマイがどうなるか、知っていてしたんだろう？」
ティファの怒気を肌に感じているのか、代わりにイオが口を開く。
「えぇ。でもとても大切な助言だったのですから仕方のないことで

す。貴方達はここから出たいと思わないのですか？」
「そりゃ出たいさ。でもどうせなら影じゃなくて本体を使って言いにくればいいのに。そんなんじゃ何かありますって言ってるようなものだよ」
呆れ声にレイナが微かに目を見開いた。
「よく分かりましたね、私が影だと」
「分かるさ。だって君、ティファの魔力を見ても全然気にしてないじゃないか。それって攻撃されても痛くも痒くもないからだろう？」
イオの言う通りだった。
レイナはティファがすぐにでも攻撃を仕掛けてくる事ぐらい見抜いているはずだ。それなのにまったく緊張した様子は感じられない。幻影というにはひどく存在感が強いが、元々神でも人でもない存在なので常識で物を考えるのは間違いだとティファは考え直す。世界一の魔力と意志を持つのであろう彼女にとっては幻影を作り出すことなど造作もないだろう。
「私も外に出たいとは思っているわ」
赤い輝きを持つ髪の毛をさらりと肩に流して苦笑した世界に対し、ダークブルーの双眸を爛々と輝かせてティファも答える。
「でもそれはマイを元に戻して体勢を立て直すためよ。あなたに会いに行くためじゃない」
「随分冷たいのですね」
「どっちが。それにどうせあなたは私じゃなくてジュードに会いたいだけでしょう？」
笑みを浮かべていたレイナの顔がジュードという名に微かに歪む。拒絶された時の事を思い出したのか、多分に痛みを含んだその顔はしかしすぐに元に戻り、今度はただの無表情に変わる。
全てを押し殺したようなその顔は、何も言葉を発さない。
「でも残念ね」
ティファはそんな彼女の表情の変化に気付き、挑発的な笑みを口元に浮かべてやる。性の悪い事だと思わないでもなかったが、はっ

きりと宣言してやりたかった。
「あなたはマイを壊すことによって彼に会うための時間を自分から引き延ばしたのよ。また暫く会えなくなることを後悔しなさい」
髪をかき上げ、憎たらしく映るような鮮やかさで笑んで言ってやる。緋色の髪を堂々と見据え決して引かぬ立ち姿に、先に目を逸らしたのはレイナの方だった。
「でも今彼はいないわ。私なら、今すぐにでも会いに行ける」
そんな事は知っている。
別の方向に向けられた双眸を見据える。そのまま彼女は囁くように言い放つ。「それに」
頑として自分の考えを曲げないと語る声で、絶対に叶えられると信じる声で。
「彼は、一人ででも私の所に来てくれます」
真っ直ぐな声が紡ぐ言葉にティファとイオは顔を上げてお互いの表情を凝視する。
(本気で信じてるんだわ、彼女)
その信頼に対してどうこう言うつもりはない。
だがこうも言い切られると自分の方が不安になる。
(でも私を迎えに来てくれたってことは、信じていいのよね)
世界がアレイズに向ける信頼と同じだけの信頼を自分も向けてもいい、はずだ。
だから黙っているとイオが肩を竦めた。
「アレイズ神はとっくに答えを出したはずだけど。彼は誰を選んだんだい？　レイナ。言ってごらんよ」
「……それは」
「言えないよね。だって、彼はティファを選んだ」
追い詰めるイオの言葉にレイナが表情を強ばらせる。
「それでも絶対彼は来ます」
切なる声は、まるで自分自身を落ち着かせようとするかのような、そんな響きを持っていた。

（そう、そうしなきゃ生きていけないぐらい彼女は追い詰められているんだわ）

だがティファもイオも、それが「絶対」とは言えないことを知っていた。そうでなくてはティファの向けた信頼は全て泡と消えてしまうだろうし、そうなって欲しいとは思っていなかった。世界と自分とを天秤にかけさせるのは酷だが、彼には選んでもらわなければいけなかった。選ばなくても両方取れるような状況では、とっくになくなっていた。

「私は」

危険だと知りつつも、ティファは足を前に踏み出し彼女同様強い声で言い放つ。

暗闇の中でお互いの存在を知らしめる光は、しかし決して溶け合うことはない。翡翠と緋の光はお互いを食い尽くさんと範囲を広げて、互角の力に引き下がっていく。誰にも気に留められない対決。その前線に立ち一度言葉を区切ったティファはレイナへの意趣返しとアレイズへの信頼を籠めて、凛とした声で告げた。

「私はそうならないって信じてる。アレイズがあなたに会う時は私が一緒にいて、あなたの隣に彼は行かない」

そうなったとしても不思議ではないと、当たり前だと思っていた時期は当然ある。元々この度には彼等の再会の為だったのだから。だが、アレイズはもうレイナの隣に並ばない事をティファは知っていた。

見捨てたわけではない。愛想を尽かしたわけでもない。

今でもアレイズはレイナを大事に思っているのも知っている。

（それでも彼は私を選んだ）

自意識過剰じゃないかとかそんな事はもう思わなかった。

「私、ティファニエンド・グランハートはアレイズ神の契約者、すなわち神の花嫁よ。それを私が認め、彼が認めた」

だから。

すぅと息を吸い込む。

「――私は絶対に、あなたに彼を渡せない」
人で在りたいと願ったアレイズの願いを歪めてまで留めようとするなら、例え彼が望んでも渡せるはずがなかった。
内に潜めていた思いを堂々と言い放つ。
瞬間、レイナの顔が凍りつき彼女を取り巻く光もまた動きを止めた。意志に反することなく硬直した光は、ティファがあまりに長い間固まった彼女に焦りを覚える前にゆったりと動き出す。
（言い過ぎたかしら）
凍えた怒りの気配に一瞬そう思ったが、今更というものだ。
ティファは今すぐにでもやってくるであろう攻撃に備え、指輪に意識を集中させた。
だが、彼女は最初告げたように攻撃を仕掛けては来なかった。代わりに、ぞっとするような笑みを浮かべる。
「一つ、いいことを教えてあげます」
凄惨な笑みを浮かべティファを見つめるレイナが口元に手を持っていきくすくすと笑う。とても愛らしく、少女らしい声。だがティファは何故か不気味さを感じ、足が震えた。
光のない虚ろな視線。ただこれから言うことが楽しくて仕方ないという感情しか伝わらない眼差しに、イオがティファの身体を自分の後ろに隠した。
「逃げて」
切羽詰まった声が耳朶を打つ。殺意でも怒りでも憎しみでもないのに、イオの額には滝の汗が浮かんでいた。当然だ。これだけの威圧感を与えられて、感情の形の掴めぬ意思を周囲に張り巡らされて平気でいられるわけがなかった。
ティファとてそうだった。
（何よ、これ）
一瞬でがらりと変わった空気。それに自由を奪われ、微かな恐怖を感じながらも逃亡も攻撃もできない。
（私はきっと）

世界がマイに干渉した時、マイの心は壊れてしまった。あるいは壊れたように見えるぐらい、傷つけられた。

それと同じようにティファが世界に立ち向かった時、世界の心も壊れてしまったのではないかと思えてならなかった。アレイズ本人に拒絶されてもイオに追い詰められてもダグラスに嘲笑されても平気だった彼女が、ティファの言葉一つでこんな虚ろな目をする理由は分からなかったが、自分がどうしようもない地雷を踏んでしまったのだけは分かった。

（早く動かなくちゃ）

イオの背に隠れて怯えてなどいられない。彼だってこんなに怖がっているのに。

世界への忠誠心や契約故か、イオも一歩も動けぬままただ背にティファを庇っていた。それ以上のことは、例え結界を張ることさえできずにいる。動かないのではなく動けないのだとティファは即座に理解した。繋いだ手が震えて必死に動こうともがいているのが分かったからだ。

（だから、私が早く動かなきゃ）

世界から一番自由な自分が動かなければ。そう思い指だけでも動かそうとしたが、一体どんな魔術を使われたのか指先一本動かせなかった。翡翠の光が闇を打ち払う。緋色の光をなぎ払う。だというのに何かに邪魔されてティファ達の動きは制限されていた。

レイナは華やいだ笑い声を上げながら動かない二人を見ていた。そうして黙り込んだままの――正式には唇すら動かせないだけだが――二人に向けて誰にも邪魔されることなく朗々と告げた。

「マイティーナは世界である私を驚かせるほどに意志の強い娘だわ。あぁ……もちろんティファニエンド、あなたには負けるでしょうけれど」

「……」

「メイティーナもそうだけれど、彼女達のあなたへの忠誠心も素晴らしいわ。私の誘いを即答で断ったのですもの。……イオンやダグ

ラスに裏切られた私にはとても羨ましい」
心底羨んでいるのだろう。遠くに向ける眼差しが一瞬だけ悲しげに細められた。
だがそんなのはどうでもいい話だった。
（何が言いたいの？）
苛立たしげに言いたくとも唇は動かない。仕方なく内心で呟き視線に力を込めて彼女を見据える。そのきつい眼差しの先でレイナは大きく腕を広げ、瞳に空虚な光を宿しながら無邪気に続けた。
「そんな彼女のことですもの。きっと有事の際には全てを捨ててでもあなたが進むべき道を作るはずだわ。そうでしょう？」
明るい声にイオが呻く。その低い呻き声は彼女の言葉を肯定しているようでもあった。
（全てを捨ててでも……）
確かにそれはそうなのだろう。二人はそれだけ強い忠誠を誓っている。忠誠と言うよりは、深い愛情で守ってくれていたというのが正しいが。ティファは彼女達にとって主でありながら幼馴染であり妹のような存在だった。
だから二人はティファを守るために戦い方を覚えて、その命を守るために生きて来たのだ。決してティファの考えに付いていくだけの人形ではなく、時には諫め窘めながらも最後の最後では彼女を全力で守る人間として。
特にマイにはその傾向が強い面がある。彼女の言葉もあながち間違いではなかった。
（でも、だから何なの）
有事の際助けたいと思うのは、がむしゃらに手を伸ばすのはティファにとっても当たり前の事だった。相手が神であろうと世界であろうと怯まないのはその為だ。それを意志の強さだと褒められるのは光栄だが、別に今はそんな事を言われたいわけではなかった。
だが、その苛立ちも彼女が「ここは」と続けるまでだった。
「ここはその命を終えた神々が静かな眠りに就く、あなた方人間で

言う所の墓地よ。私はいつも現世と寝台を行き来する時必ずここを通る。分かる？　ここは、世界に……私に至るたった一つの道なの。けれど、私以外の誰かがここを通り外に出るには鍵が必要になるでしょう」

にこやかな声に、晴れやかなまでに清涼な声にティファの思考が止まる。

（ここを出れば本物の世界に会える。でも鍵がなければって。……ちょっと待って、それって）

以前アレイズに聞いた話が頭を過ぎり、ティファは目を見開いた。

（世界に至る、鍵？）

こつんと、心の底に何かが落ちた。

刹那レイナが何を言いたがっているのか理解したくなくても理解してしまった。

『きっと有事の際には全てを捨ててでもあなたが進むべき道を作るはずだわ』

世界に至る鍵は、自分だ。

自分が贄になることで世界に至る道は開かれる。命と引き替えにする事でアレイズは世界に会える。そういう話だったはずだ。それこそがティファニエンドが世界を殺さずに済むたった二分の可能性であり、アレイズが捨てた可能性。

（でも、レイナは私じゃなくマイに干渉した）

身体が凍りついたように寒い。震えたいのに動けない身体が気味悪い。

悪寒を感じる体とは対照的に目だけが熱く、次から次から涙が溢れてきた。

（嫌。やめて、それだけは駄目）

そんなの誰も望んでいない。世界に会いたがっていたアレイズでさえ捨てたのだ。自分は絶対望まない。

（だから、御願いだからマイ――！）

言いたいのに、マイに伝えたいのに声を出すこともできない。

それを見下ろし、レイナがマイによく似たにこやかな笑みを浮かべた。

「ここから出るには贄が必要よ。強い意志、そして魔力を持つ存在を贄にして扉を開けない限りここから先へは進めないし戻れない。もっとも、贄は転生さえできないほどに強く魂を束縛されて、死んでしまうけれど」

そしてその言葉をもう一度頭に反芻させるより先に現れた漆黒の影が、ティファを世界から守るように二人の間に唐突に現れた。その黒く大きな背中をティファは動けるようになった体で見たが、そこから彼に対する安堵や喜びの声は出せなかった。痛みに喘ぐ掠れた声だけが、ただ。

第七十七話

「ティファ……？」

マイに転移させられた空間、その先で涙を流すティファを見たアレイズは真っ先に彼女の前に立った。滂沱の涙を流す彼女は焦点の定まらぬ目をこちらに向け、いつもの凛とした表情から色をなくしている。

（一体何が）

痛々しい表情に手を伸ばし涙を拭ってやりたくなったが、眼前に立つ緋色の少女はそれを許さないだろう。

アレイズは苦々しい表情で自分を見る緋色の少女を睨むように見据えた。

「レイナ」

「ジュード、貴方またティファニエンドを助けに……」

遠くへいたはずなのに、と囁く声が耳朶を打つ。

それだけで彼女がアレイズの居ぬ間に二人に接触しようとしてたことが分かり、より目元に力を籠めた。マイに干渉したとされる時もそうだが、各個撃破に回るとは世界にしてはやり口が汚い。

（今度はティファが目的か）

多少顔を青ざめさせているとはいえ、ティファほどレイナから影響を与えられた様子のないイオではないだろう。きっとレイナからするとイオが離れた時を狙いたかったのだろうが、それができないから会いに来たに違いない。イオは決してティファから離れない。その程度のことは仕方がないと割り切ったのだろうから。

視線に知らず憎悪が込められる。怒りよりも尚昏く熱い感情は、漆黒の双眸に高熱を与えレイナへと向けられる。これは一体何事だと説明を求めるように、自分の契約者を傷つけたその正当な理由を求めるように。

（もっとも、正当な理由があろうと許しはしないが）

ティファが泣いている。それだけでアレイズがレイナを糾弾する理由になった。

どちらが先に手を出したかなど、そんなことはどうでもいいのだ。レイナがティファの前に現れたのなら、彼女に何らかの意図があることぐらいは分かるのだから。そんな風に考え、自分の気持ちがどれだけレイナから離れているのかを知りアレイズは苦笑を漏らしそうになった。

（人間だった頃は何があっても守ると息巻いていたのに、こうも変わってしまったのか）

あの時の誓いは何だったのだろうと少し情けなくなる。

命を張っていたつもりだった。人間からすると長い時間を捧げたつもりだった。

保護欲と誓いの名の下にいつまでもそうしているつもりだった。

（その結果がこの状況を招いているなら、罰せられるのは俺だ）

手放したのは自分だ。拒絶したのも自分だ。

レイナがそれに傷ついて腹を立てるなら、振り上げた拳は自分に振り下ろされなければならない。それ以外の誰かに向けられる拳などただの八つ当たりに過ぎない。

信を預けていた者の憎悪に、今までは余裕の笑みを見せていたレイナが体を震わせる。

弁解も、アレイズに会えた安堵も見えない。

自分が何をしたのか自覚ぐらいはあるのか、口を噤むのみだった。それこそが一番正しい判断で、アレイズにとって苛立たしい回答なのだが。

口を閉ざしたレイナを苛立たげに一瞥して踵を返し、大股にティファに近づく。

腕を伸ばし、涙を流す彼女の肩にそっと触れるとスカイブルーの髪が流れ落ちて触れた。その毛先が湿っているのは涙が伝い落ちたせいだろうか。

「ティファ」

レイナへの盾になるべく、ティファを包むように抱きしめる。
彼女はそのダークブルーの双眸から流れる涙を止めなかった。アレイズの外套が涙に濡れても眼の焦点さえ合わせず体を震わせていた。まるで、マイのように。
「マイにはティファの様子が分かっていたのか……？」
だからこそ自分をここに向かわせたのか。それなら何故マイはここに来ない。
レイナがマイを壊したなら、共に痛みを分かち合えるのはマイだけだ。だというのに主の危機に駆けつけない彼女の態度が不可解で呟くと、その声に反応したイオが顔を上げ辺りを見渡した。聖女付きの侍女のどちらも見当たらないのを確認し、口を開く。
「アレイズ神、マイはどうしたんだい？」
「……それが」
アレイズはイオの問いにどう答えたものかと思いながら片手を顎に添え、曖昧な答えを返そうとしてぎょっと目を剥いた。
「マイ……？」
ティファの呟きが耳朶を打つ。と同時に胸ぐらを掴むように彼女が縋り付いたからだ。
「そうだわ、マイは？　マイはどこっ！？」
高く伸びる声を最大限にまで引き伸ばして唐突に叫んだティファの様子は尋常ではなかった。だがそれに対してうるさいだなどと文句を言える状態でもないことはアレイズもイオも承知していたので、ただティファの取り乱した様子に目を丸くするのみだった。
普段何でも力ずくで解決している彼女の切なる問いは、取り乱している姿はひどく滑稽に見える。
闇の中でも映える空色の髪が大きく揺れるのを見やり、アレイズはそんなことを考えた。とはいえ、彼としても事情が飲み込めていないのだ。説明しようにも言葉が思いつかず、外套を掴むティファの手に自分のそれを重ねて震えを押さえてやりながら吐息した。
「俺にも分からない。お前の危機を知った直後に、マイに空間転移

を使われていたんだ」
　それはティファが求める答えにしてはひどく頼りないものだったろう。だが彼女はそれだけの言葉に、何かを納得したように諦めたようにぺたんとへたりこんだ。白いスカートが闇の中に広がる。脱力した体がこの暗すぎる場所で落下していくように見えて、アレイズとイオは思わず息を呑んだ。そんな事などありえないのに、彼女がどこまでも落ちて行くように見えて二人で手を伸ばす。支えて静かに床に下ろすとティファが二人を見上げて再び涙を流した。
「――しよう」
「ティファ？」
「どうしよう……、このままじゃマイが」
　地面に座り込んだティファが両腕を抱きながら首を横に振る。そんなティファを見てイオが目を伏せるが、事情の分からないアレイズにはどうして彼女がそんな情緒不安定な状態になっているのかが分からなかった。
（だがこれだけは確実だ。全ての元凶は――）
「ティファとマイに何を言ったんだ、レイナ」
　振り返る。一対の翡翠の光に闇が遠のいていく。レイナの放つ緋色の光も怯えるように後退った。
　緑がかった黒の外套が光の届かぬ場所で闇に溶け込む。
　その闇でもってティファの姿をレイナの目につかないようにアレイズは腕を広げた。
（これ以上傷つけさせてたまるか）
　もう十分なのだ。
　人の身にはあり余る程の痛みを抱えさせて、それで何がしたいのか。
　視線と表情から色と温度が消えていく。
「……」
　これが本当の意味での決別なのだと告げるアレイズの表情にレイナが苦しげに目を細めるが、もとよりそんな態度で懐柔される程事

態は軽くない。
　無言で答えを催促すると、ふいと顔を逸らされた。
　気まずげな、アレイズにだけは聞かれたくなさそうな姿が光を帯びていく。輪郭がぼやけ、このまま彼女が逃げようとしているのが分かって一歩足を踏み出すと背中にイオの声がぶつかった。
「マイに向けて放った死刑宣告をティファにも話したんだよ。そうだよね、レイナ？」
　この場にいる全ての者の心を刺し貫くような鋭い声に、アレイズの肩が震えた。
「死刑、宣告？」
「そうさ」
　何も言わないレイナの代わりにイオがアレイズの隣に並び、僅かに高い位置にある目を見据える。冷たげな色合いの碧眼は静謐で、そのくせ高い熱を孕んでいた。凍えるような冷気が肌に触れたのはきっと勘違いではないだろう。魔力を隠しておけなくなる程、イオは激していたのだ。プラクトの屋敷でダグラスに対して見せた怒り以上の冷たさで。
　アレイズのように激しい怒りを外に向けてはいないものの、イオも相当に強い怒りを胸の内に孕んでいるのを肌に感じる。
　自らが長い間仕えていた世界の横暴さと残酷さに対する怒り。もっと早くこうして人間につけばよかったのかもしれないという悔恨。目の前で自分が大事に思っている少女が泣いているという事実。怒りは全てそこから来ているのだろうと何故か感じ取れたのは、アレイズが同じ事を思っていたからかもしれない。
「世界を裏切るような真似をした僕が言えた義理じゃないけど、君も大概最低だよ。レイナ」
「イオン……」
「僕を魂の選定者にしたのは君だ。罪なき魂が総じて救済されるべきだとしたのも、無垢な魂が穢れを知らず生きていけるようにと願ったのも君だった。僕もそれを願ったからここにいるのに、どうし

て君は彼女達を傷つけるんだろうね？　一体、彼女達の魂のどこに罪があるんだい？」

苛立ちをうまく表現しきれないとばかりに金髪を指でくしゃりと掴み、イオが目を閉じる。

「僕は君じゃなくティファニエンドを選んだ。でも君も僕を裏切った。まだ誰も決意できてないうちからこんな場所に連れてきて、誰かが犠牲にならないと出られないなんて勝手に決断を迫ってさ。何がしたいんだか分からないよ。ここでマイを贄にして僕達を先に進ませることで一体君に何の得があるっていうのさ」

低く抑えた声が紡ぐ言葉に瞠目する。

（マイを贄に？　……まさかここが、世界に至る道だというのか？）

かつてレイナに教わった、ティファニエンドを世界に至る鍵にする道。

ここがそうなのだろうか。だとすれば、犠牲になるのはティファのはずだ。

（それがレイナが死なずに済む二分の方法だったはずだ。なら何故レイナはマイに干渉した）

どうしてもここから出なければならないなら、その方法が一つしかないならレイナは犠牲者をティファにしたいはずだ。アレイズが世界に至る為の鍵は彼女であり、それが故にアレイズはティファと契約した。だというのに事ここに至って、何故彼女は方針を変えたのだろうか。

どちらにせよこれはひどい裏切りだと言うイオの言葉には納得できた。

（マイは死ぬ気だ。……ティファの為に）

見下ろすと、そこには先程のマイ同様壊れたように黙り込んでいるティファがいる。誰かが自分のせいで傷つくのを何より恐れていた彼女は贄の話とレイナの干渉を知り、マイがどんな決断を下すのかを知ってしまったのかもしれない。アレイズにとて分かったのだ。長年共にいる彼女に分からないわけがない。

「君が彼女の両親を殺したから、彼女はレイニウム大聖堂の聖女になった。……世界の名のつく大聖堂にね。皮肉なものだよ、その聖女が世界自身に痛みを負わされたんだから。こんな、試練でも何でもない痛みなんて本当は負わなくていいのに」

饒舌なイオの言葉が辺りを支配する。アレイズも静かに頷いた。

（これは裏切りだ）

全てはとても間接的で直接的な攻撃などほとんどない。

それでもかつての聖女とその侍女は今や世界に心を侵食されつつあった。イオの言葉を借りるなら罪なき魂が世界によって砕かれようとしているのだ。これ以上に無残な裏切り方はないだろう。

（だが、責めている時間はない）

いくらレイナを責めた所でマイの決断は変わらない。彼女はそういう人間だ。

死刑宣告。それが賛の事を指すなら時間がないのだ。

何をするのかなど知りはしないが、自ら命を絶つのに時間はそうかからない。

（せめてメイへの未練がマイの中に残っていてくれれば）

そうすればメイが見つかるまでの間時間が稼げる。姉として妹に謝りたいというあの願いをもし叶えたいと願っていてくれたなら、諦めずにいてくれたなら僅かでも希望が望めるのにと考えアレイズは世界に背を向けた。

涙を流すティファと目線を合わせるように片膝をつく。

「ティファ」

「……しよう、マイ」

「っ、しっかりしろ！　ティファ！」

ぼんやりと焦点の合わない瞳で遠くを見るティファの名前を強く呼ぶと、彼女はその声に驚き目を見開いた。目の前にいるアレイズをじっと見つめる目は正気に乏しい瞳ではあったが、一応声を聞けるだけの落ち着きを取り戻したようだと安堵の息をつく。

睫毛に乗った涙の粒を指で拭ってやる。そのまま抱きしめて慰め

たい衝動に駆られるものの、今はその時間も惜しいとただ頬をそっと撫でる程度に留めた。怯えさせないように柔らかな声で言葉を紡ぐ。

「マイを探そう。手遅れになる前にあいつを止めるんだ」

（そうだ。今ならまだ間に合うはずだ）

自らにも言い聞かせるように内心で呟く。

「でも」

そんなアレイズに呆けた顔でティファが漏らす。

「方法なんてあるの？」

彼女にはマイを探す手立てがないことが分かっていたのだろう。分からないからこそ、期待を込めるように問うのだ。マイを止め、生かす方法を。

イオもティファと同じようにアレイズの答えを待つ。それに対し、大きく首を振った。

「方法など俺も知らない」

あっさりと期待を裏切るアレイズをティファが見上げ、眦を吊り上げる。

あまりにも簡潔な言葉に嘘の色が込められておらず、隠しようもなく本音なのだと伝わったからだろう。

「……？　方法がないんなら、絶望的じゃない」

気の強そうなダークブルーの双眸に宿る光にイオが目を瞠る。あれほど壊れた人形のように泣くことしかしなかったティファの感情の発露に喜ぶように。

「アレイズ神のせいだっていうのは癪だけど」

諦念が微かにこもった悔しげな声がする。それでもそのボーイソプラノがやや上ずっているのは素直に喜んでもいるからなのだと分かり、アレイズはニヤリと笑ってティファを抱き寄せた。別に彼女を怒らせようとして言ったわけでもないが、結果的に涙を止められたのなら万々歳だ。

「方法は確かにない。俺もレイナから聞かされていないしな」

声に安堵が込もる。意識させないようにと平坦な口調を心がけたのは、このまま彼女を怒らせるのも手だと思ったからだった。

悔しさも怒りもティファなら前に進む力に変えられると信じていた。

自分には絶望以外のものを与えられるのだとも。

「それでも諦めたら終わりだ」

きっぱりと言い放つ。

「それにティファ、俺はお前が何かを簡単に諦めたのなんて見たことがないんだ。だからこの程度で放心されても困る」

紡ぐ言葉は自分に言い聞かせる言葉でもあった。そのせいか平坦な声色でありながら饒舌であり、どことなく軽い。こんなことではいつも通りに話せないと分かりつつもアレイズは続けた。

「この程度って！」

「悩みや問題は解決した後にはこの程度のものだったのかという思うものだ。そして勿論――」

ティファが声を荒げる。怒りにアレイズの外套を掴む手の強さに深い安堵を覚えながら、その手を強く握りしめた。

息を呑む彼女に最後の言葉を放つ。

「俺はこの状況を“この程度”にしてやるつもりなんだが、お前はどうなんだ？」

涙の粒がついた睫毛が跳ね上がる。

握り締めた手が震える。泣き出しそうに歪んだ顔はしかし笑顔に代わり、小さな頷きに変わる。

「私だって」

強い眼差しが凛とした空気を彼女に与える。ドレスのように纏わせ、清涼な翡翠の光が似合う真っ直ぐな笑みが浮かぶ。

「私だってこの程度に変えるわ。マイは、必ず助けてみせる」

外套を掴む手の力が弱くなる。それを握り締める自分の手も弱めながら、アレイズは彼女が立ち上がるのに手を貸した。挑むようなティファの笑みに同じだけの力を持って返してやり、レイナを振り

返る。攻撃するでもなくただ事態を静観していたレイナは二人の眼差しを興味なさげに受け止めながらも、きつく手の平を握りしめていた。共に連れ帰りたいアレイズの拒絶とティファが壊れなかった事への苦々しさを抱きつつも表情に出さない。不気味ではあるが、それが本来の彼女なのだろうと違和感のない表情を見て感じた。

冷淡なまでの眼差しを隠そうともせず緋色の光の下に晒す彼女にティファが口の端を吊り上げる。

「確かにそうだったんだわ。まだ私達はこの空間から出ていない。マイもまだ死んでない。……あの子がアレイズをここまで運べたんなら、私達にだって道はあるはずよ」

そのままティファは見せつけるようにアレイズの肩口にそっと手の平を添えて、その上に額をこつんと置いた。

「危なかったわ」

柔らかな声がイオとアレイズに向けられる。

「もう少しで私まで何も考えられなくなるところだった。……ありがとう。イオ、アレイズ」

頭を下げて礼を言う姿にアレイズはふとこれが彼女の強さだと気付いた。

本人の持つ精神力や魔力、胆力や運も無論強い。

しかし彼女の強さは誰かの手を取って立ち上がれる強さにあるのだとも思った。与えられた言葉を活力に変えられる、痛みに打ち震えるだけに終わらない強さ。たった一人では敵に太刀打ちできない事があっても、仲間がいれば彼女は何度でも立ち上がれるのだ。どんな闇の中からでも必ず。

それを他力本願と呼ぶかどうかは見る者によるだろうが、どちらでも構わなかった。

どの道、味方を作るのはその者自身に他ならない。

（お前は人間だよ、ティファ）

持つ力も運命も人並み外れていても、その強さだけは紛れもなく人間のものだ。

内心で呟き、肩に触れる頭を撫でた。
「俺やイオがいる間は、お前が壊れるなんてことはありえない」
「僕は何もしてないけどね。でもまぁ、アレイズ神が僕を認めてくれるのはちょっと嬉しいかな」
「守れなかったら叩き斬ってやる気でいるからな」
クスクスと笑うティファの振動を肩口に感じながら、アレイズとイオが顔を見合わせて小さく笑う。
そうして視線を後ろに向けてレイナを見やる。
闇の中に立つ彼女は最後に一つ、吐息のような声を漏らした。
「――そうですね、確かに私にはその強さはなかった」
アレイズの声を読んだのであろう言葉が薄れ、緋色の光が輪郭を失っていく。
ぼやけて霧散していく光源に手を伸ばすが、指は闇しか掴めなかった。
「イオ、ティファ。急ぐぞ」
翡翠と闇色に支配された空間で厳しい声を二人に向け、ざっと辺りを見渡した。
レイナが消えたのはこちらとしてはありがたいが、問題でもある。
自分達の目的がマイにある。そして今マイを見つけられるのはレイナ一人だ。
「マイが危ない。レイナが……あいつがマイのところに行った可能性があるかもしれない」
「――っ！？」
「だったら急がなくちゃ！」
見つけられるなら、今彼女がマイの所にいる可能性も決して否定できない。
そう感じたアレイズは二人に対して言いつつ「それから」と付け足した。
「メイを探すぞ。マイがまだ贄になっていないのなら、あいつはメイを探しているはずだ」

双子の姉として妹に罪悪感を抱いているなら、その感情が大きければ大きいほど彼女はきっとメイを探すだろう。もう遅いと言っていたのが気にかかるが、どちらにせよ二人とも見つけないことには始まらない。

「分かったわ」

ティファはアレイズの言葉の理由を問わず、スカートについた埃を払い魔力をより集めて白いリボンを作る。それで髪を一つに束ね、気合を入れるようにきつく結んだ。そうして再び指輪の力を借りて一振りの剣を取り出すと、暗闇を一閃しながら凛とした声でアレイズとイオに言った。

「急ぐわよ、二人とも！」

そこにはもう、先程まで壊れていた面影などまったくない。

必ずメイとマイを見つけ、誰の命も散らせないと毅然とした顔が告げていた。

「誰も死なせたりしない」

言霊のように決意に満ちた声で呟く。

その切なる願いにアレイズは頷き、内心でそっと不安を漏らした。

（これからどうなるのか――）

今一緒にいるティファやイオを含め、離れている双子のメイドやダグラスのことを想いアレイズは目を閉じる。

だがその問いに応えてくれる声は――この世の全てを見通している世界がかつて自分に向けてくれたあの柔らかな声は、もはやない。

第七十八話

どうしてこんなことになったんだろう。
暗闇の中に青と翡翠の軌跡を残しながらティファは荒い息をつきそう考えていた。
ちらりと左手薬指の指輪へと視線を落とし、すぐに前を見てからもう一度心の中で呟く。
（どうしてこんなことになったんだろう）
自分達が今いる位置を示してくれるものが皆無である中、それでもとりあえず前へ進もうと考え、ティファ達は後ろも横も見ずに前へと足を向けていた。空間転移を何度も使えるほど魔力に余裕はない。かといってアレイズにもイオにもティファにも、マイの魔力を辿ることはできなかった。万一できるとすればダグラスだが、彼はまだ封印のクリスタルから出てきていなかった。
ティファの後ろをついて走るイオとアレイズは軌跡を追って付いて来る。
それ以外にできることは言うように。
「は……っ、はぁっ」
荒い息を吐き出すティファは、もうかれこれ二時間近く走り続けていた。アレイズやイオがそんな自分の様子を見ては一度止まろうと提案するのだが、聞く気など毛頭ない。むしろその言葉のせいで余計に焦って足が前に前に進んでしまう。気遣いの言葉に首を大きく振り、より遠くへと走った。
探し人の姿は影も形も見当たらない。
走り続けている道が終わるという予感も感じられない。
（一体どこまで続いてるの！）
あまりに深く、長く、広い闇は世界自身の光によってのみ辺りを照らすのだと言うかのように頑なに三人の魔術が生み出す光を拒んでいた。否、光ならあるのだ。しかし全てを照らすには足りない。

圧倒的な闇の質量に光が押し負けてしまう。
それに、とティファはちらりと思った。
（走れば走るほど、闇が深くなる――）
あまりに濃い闇を見てそんな風に思えてきて仕方がない。
振り向くとスカートをはためかせて走るティファの後ろに付いて来るアレイズの闇に溶け込む姿と、太陽のように明るい金髪を持つイオが対照的に映り込む。彼等は苛立ちを隠せない自分に何も言えない様子で、周囲の気配を探りながらも風に髪を乱してぴったりとティファを守るように距離を保っていたが、やがて走る速度を上げティファの隣に並んだ。
「ティファ――」
それは休もうという提案をしようと放たれた声だったのだろうか。
ボーイソプラノに口を開こうとすると、先にイオの方が唇を噛み締めて首を振った。
皆知っているのだ。足を止めてしまう恐怖を。たった一秒の遅れがもたらすものを。
ティファの疲労など比ではないものが失われていくことを。
「何でもない、急ごうか」
「勿論よ。アレイズ、ちゃんと付いて来てるわよね？」
呟く声の苦々しさに気付かない振りをしてきっぱりと言い放つ。
「あぁ……」
アレイズの声にイオがまた速度を下げてアレイズの隣に並ぶ。昼と夜を隣り合わせにしたような二人はそこだけ似ている辛そうな顔をしていたが、それが体力的な問題ではないと知っていたからティファは気付かない振りを続けた。
それどころではなかったのだ。
（急がなきゃ、マイが――）
本来自分がなる予定だった犠牲になってしまう。
アレイズの願いに旅に出る決心をしたのは自分だ。マイはそれに付いて来ただけだというのに。

（それに、あの子はまだ何も果たしていない！）

親の敵を取るべくダグラスと契約した。だというのに彼女の復讐は全然終わっていなかった。

ぐんと速度を上げる。疲労はとっくに限界を超えているはずなのに、それを感じる余裕さえなかった。アレイズもイオもそうだ。皆ティファの身を気遣っているものの、覇気まで失ったわけではない。この絶望的な事態を後で笑い話にできるぐらいまで小さな事件にするために、落ち込んでなどいられないのだ。

闇は晴れない、扉はまだ開かれていない。

本来なら困った事態であるそれに希望を見出し、ティファはマイの姿を探し続けた。

（どこなの）

傍から見たら痛々しいまでの切実さが胸を駆け抜ける。

（どこにいるの）

速度を上げたティファに続く二人の神は、元々の身体能力や魔力ゆえに自分程に疲労した様子は見せていなかった。とはいえそれは身体的な疲労であり、精神的な部分では疲労困憊しているのだろう。自分の手前それを全面的に見せるわけにもいかず、必死で平気なふりをしているが疲労は誰の身にも訪れていた。そう、ティファにも。

一秒一秒が惜しい。その一秒のせいで取り返しがつかなくなったらと思うと怖い。

その恐怖心が疲労を呼び、誰にも言えなかったがティファも相当疲れていた。

（でも、行かなくちゃ）

どこかへ。まだ見も知らぬ、大事な人達のいる場所へ。

前しか見ていないティファの代わりにと二人が周囲に視線を走らせる。また再び世界が姿を現す可能性もゼロではないので、近くで魔力が急激に集まっていないかと確認する役目を彼等は担っていた。ティファにもレイナの魔力は馴染みがあったが、神々の方がより適役だった。

闇を前に前に進む。あるいは後ろに進んでいたのかもしれないが、とにかく足の向く方へ。その間、普段なら口喧嘩の一つもしそうなイオとアレイズも一切言葉を交わすことはなかった。

ティファの荒れた息と、三人の足音だけが静寂を打ち壊す。

「メイ！　マイ！　……どこなの！？」

レイナに干渉され贄になる道を提示されたマイ。内に秘めた獣が解放されつつあるメイ。

どちらも一刻の猶予を許さない状況なのだ。かといって二手に別れて探せないのは、レイナがこの空間にまだ潜んでいるかもしれないからだった。

常ならばティファの呼び声に「どうしました？」と返してくれる双子の侍女は、主であるティファの苦しげな息にも答えない。

「メイ！　マイ！」

走りながら数回同じ呼びかけをした後、ティファは先程よりも強さを増した不安を振り払おうと大きく頭を振った。その流れに従うように空色の髪の毛が勢いよく左右へと流れる。そんな姿にイオとアレイズが驚きと心配を混ぜた視線を背中に向けた。ティファは二人に気を遣わせている自分の不甲斐なさを呪いながら、しかし謝っている時間すら惜しいと侍女二人を呼ぶことだけに声を使う。

何度呼んでも返事は返ってこない。それでも呼ばずにはいられないのだ。

（お願い、答えて――）

祈るように二人の名を呼びながら、ティファはもう何百回も考えていたことをもう一度胸中で呟いた。

（どうしてこんなことになったんだろう？）

大聖堂で指輪を見つけてアレイズと契約したこと、世界に会うと言ったアレイズについていくと決めたこと。

星夜祭、イオとの出会い。情報収集のため立ち寄った教会では竜神ゼルに世界の夢について聞かされた。青い髪、青い瞳のティファニエンドという娘に殺されると告げた世界の夢。

帰郷した先で見た過去の痛み。血に塗れた、時を止められた屋敷。敵である銀の神。

退行し記憶を失った時に転送されたビビッド大陸でのセラフィム奪還計画。自分の体を借りて現れたレイナと、彼女を殺せと言うノルマンとの再会。

そして大聖堂へ一時帰還した時のノルマンの不可解な言葉とダグラスの封印。

何より今、ここにいること。

数え上げればきりがないほどに多くのことがありすぎた。

たった数カ月の事なのに、今までの人生ではありえなかったほどの事件と真相と疑念が飛び交った。

（私が何をしたっていうのかしら）

ただ生きていただけだ。それを罪だと言うなら成程、自分は確かに罰せられる必要があるだろう。だがあまりにそれは理不尽ではないのか。人間がこの世に生を受けて生きることの一体何が問題なのだろうか。

元々悲観的になるような性格ではないが、振り返った過去が素敵だったとは言いがたい。大切なものも思い出も山ほどあるが、凄惨な過去までも美化する気にはなれなかった。もっとも、ただ神について旅に出ただけの元聖女が神の主である世界を殺す存在だと言われたのだ。それだけでよい過去ではなくなるであろうが。

（楽しいことも嬉しいことも沢山あったわ。でも、それ以上に大変だった）

心の奥底にしまい込んでいた言葉を掘り起こし、ティファは毅然とした表情で前を見据えた。走れば走るほどに強い眩暈を覚えてくるが、それでも後ろを走る二人に自分の疲労を見せないようにしっかりとした足取りで前へと進んだ。

この勢いは壁にでもぶち当たらない限り止まらないだろう。我ながらそう思うだけの力強さは、気を抜いたらすぐにでも倒れてしまいそうなほどにティファを疲労させた。

事実何度か休みたいと考えたりもした。
だが止まれなかった。どうして、という思考を考えているうちに
「こうして繰り返しているとまるで世界みたいだ」と考え、強い焦燥感に襲われたせいかもしれない。あの時頭を痛いほどに響かせたどうしての声。今、自分が同じ立場にいるのだ。
焦燥感が胸を焦がす。その痛みに勝てずティファは声を上げた。
「ねぇ……、アレイズ、イオ」
「どうしたの、ティファ？」
「やっと休む気になったか」
掠れた声で呟くと、声に素早く反応した二人にそう尋ねられる。
だがティファはそんな二人の様子に苦笑を浮かべながら、軽く息を整えてから続けた。
「世界は、レイナはどうして私にマイのことを教えたのかしら？」
思えばそれが不思議だったのだ。
あえて言わなければ空間は開かれ、マイは死に、前に進めるだろう。レイナが望む通りに。
だというのに彼女はマイに干渉した後でティファに事実を伝えた。
（レイナはどうしたいのかしら。マイを死なせたいの？　それとも私に決断させたいの？）
誰にも言わなければ、こうしてティファが必死でメイやマイを探すことはなかった。襲ってくる不安で歯噛みしなくても済んだ。言われたからこそ間に合わせようと駆ける事ができるのだが、レイナはそれを望んでいるのだろうか。
絶対に贄は必要であり、マイなら必ず自ら志願するとばかりに言っていたレイナが？
一見すると、レイナがただティファを苦しめる為だけに事実を伝えたようにも思う。ティファもその可能性が高いと思わないわけじゃない。だが、思惑が外れないと一体誰に言える？　ティファが贄にならないなどと。他の誰かが贄にならないなどと。
（レイナは、一体誰を殺したいの？）

考えれば考えるほど分からなくなる。
だがアレイズはもうとうにその問いに行き着いていたのだろう。
意外にもあっさり肩を竦める。
「あいつが何を考えているのかなど誰にも分からんだろう」
その声にイオも陽気な調子で答えた。
「だね。神様名乗ってる僕らやアレイズ神が分からないぐらいだし。気にすることないと思うよ」
「それはそうだけど、でも――」
考えなければならないんじゃないか。ティファにはそう思えてならない。
だが二人の答えに対し言葉を濁らせるティファをアレイズが制した。
「おい、ティファ！」
肩を掴まれ、右手にくるりと体を向かせられる。その先にある闇を翡翠の光で照らし、アレイズは厳しい横顔を向けていた。
「……？」
尋常ではない様子に、最初また世界が来たのだと思っていた。
だが彼の指差す方を視線で追い、それが違うのだと理解した。
「あ……っ！」
イオと二人、息を呑む。
三人が注視する闇の中。そこには遠目にも分かるほどの煌きを放つ銀髪と、かの神が纏う光に照らされた少女が立っていた。ティファが探し続け、今でも探し回っていた原因が。
誰よりも会うことを切望していた少女であった。だが彼女に声をかけようとしたティファは彼女の表情を見て言葉をなくし、かけるべき言葉と勇気を押しとどめ唇を噛み締めた。瞬間生温く鉄臭い味が舌に触れる。無意識に舐めとるティファに、正気としか思えない亜麻色の眼差しがやわく細められた。

◇　◇　◇

――どうしてこんなことになったんだろう。

姉を探すべく全力疾走していたメイは心の中でそんなことを考え、拳を握りしめていた。普段から鍛えているおかげか息は乱れない。しかし――。

“それはお前にもオレにも分からない。お前だって分かってんだろ？”

「――うるさいわね！　いちいち人の心を読まないでって言ってるでしょ！？」

心を呼んでは窘めるようにメイの足を止めようとする男のせいでおちおち考え事もできず、精神的な疲労は限界をとうに超えていた。いつものような天真爛漫な声ではなくどこまでも荒い声は余裕のなさの表れだった。当然だ。あの理性の塊のような姉が隣にいて自分を落ち着かせてくれるからこそ、時折暴走する彼女を止めるからこそ自分は明るくいられたのに。

素早く周囲に視線を走らせながらわざと大声を出す。そうする事で姉に見つけてもらえるように注意しながらひた走る。

そんなメイの姿を心の中から見つめながら、自らを金獅子名乗った呼んだ男が唸るように思考に耽ける。それはあまりに必死の形相を見せるメイに対する呆れを感じさせるようであったし、また感心している様子でもあった。言葉に出ない心の機微を感じ取れるのは、魂に寄り添う黄金があまりに近すぎるせいだ。

形振り構わずメイド服を激しく揺らして駆けるメイをじっと注視しながら男が嘆息する。

“どうして諦めないんだろうなァ、この娘は”

心底不思議そうな声に怒号を飛ばす。

「諦められるわけないでしょ！　人が死ぬかもしれないんだよ！」

しかもそれは自分がよく知る魂の半身だ。放っておけというのは土台無理な話なのだ。

人の心の中で好き勝手言う獣を抑えるように胸を叩く。どん、と

苦しいほど。その程度では魂には程遠いが男はメイの体が傷つくのを厭い黙り込んだ。代わりに纏わりつくような影がメイの背中に触れた。重みでも枷でもない感覚が横顔を覗き見る。

“昔と変わらない”

告げる昔とは一体どれほど前のことだろうか。

秘術を体内に宿された時だろうか。それとも初めて封印が解けた時だろうか。ふとそう考えたものの話に付き合うのも馬鹿らしいと黙りこむメイの耳朶に男の声が触れる。

“赤子のようにいつまでも変わらずお前は幼い。なのに何でだろうなァ、オレにはお前が今成熟大人にしか見える”

「こんなに色々あったら大人にならなきゃやってられないの！」

不思議そうな声をぴしゃりと弾き返し、メイは再び前を見る。亜麻色の双眸が捉える闇の形の中に姉の姿はない。

「姉さん、早まらないでよ……っ！」

“……”

切羽詰まった声に影が息を呑む。声にならなかった言葉は心の中でひっそりと溶け合うようにメイの魂に触れた。美しい、とそんな事はありえないと言いたげな、どことなく不本意そうな声がした。無論そんな評価を下されたところで嬉しくも何ともないのだが。

美しいと表現するよりは可憐だと言った方が似合う顔に苦渋の色を浮かべるメイは自らの心に棲む獣の存在を無視し、辺りを何度も見渡しながら走る。闇の中では血の色のように見えるレースつきのメイド服が動きに合わせて大きくはためくが、普段なら可愛らしいだけのその服の動きが邪魔になり、あまり長いとは言えないスカートを更に短くたくし上げていた。男が――人間の男がいたら到底見せられない光景だ。生憎今は獣しかいないので気にしないが。

玉の汗を浮かべながらなお足を止めないメイの姿がそれほど不可思議なのか、男が頬を摺り寄せて問う。

“メイティーナ。お前は何で姉を探そうとするんだ？　あいつの運命はオレが話しただろう？”

「――何言ってるのよ！　だから探すんじゃない！」
案じるような仕草を払いのけるように一度立ち止まる。自分の胸を強く叩き、そこにいるであろう存在に強い振動を与えた。無意味でもそれが自分の怒りなのだと知らしめるのにこの行動は丁度よかった。
眉間に深い皺を刻み、手の平で胸元を握り締めながら掠れた声で続ける。
「あれだけ皆に愛されてたのに殺すために育てたなんて酷すぎるじゃない……っ！」
“……”
「魔力が強かったら何なの？　それが生贄になる理由になるの？私はそんなの絶対認めないよ！」
あれだけ愛されていたならずっとずっと愛されたまま、その尊さに気付かないまま生きてほしかった。痛みも苦しみも知らずに生きていられるなら、メイはその方がずっといいと思っていた。だというのに、どうしてグラスの一族が死に絶えた後でマイがこんな目に遭わされなくてはならないのか。
甲高い声を辺りに響かせると男が今度こそ黙る。
魂の色を探る気配にはお構いなしに足を前に向けた。読みたければ読めばいい。
一歩進んだ足が二歩目には駆けている。足を止める恐怖に突き動かされて再びメイは全速力で掛けていた。
「姉さん！」
死なないで、と涙混じりの声で言う。
渦のようにぐるぐる回る思考はもはやきちんとした意味を持たず、断片的に頭を駆け巡った。
（双子なのに。半身みたいなものなのに。死にたくないのに。死なせたくないのに。ここから出たいのに。ティファ様に会いたい。姉さんに会いたい。姉さんに死んでほしくない。本当に生贄が必要なの？　死ぬ人間が一人は必要だってどうして決められたの？　それ

が姉さんじゃなきゃ駄目だなんて誰に決められるの？　私はそんなの絶対嫌。そんなことさせるぐらいなら、私が――）

“メイティーナ！”

「……っ！」

激しい思考の波をさらうように読んだ男が珍しく怒鳴り声を上げる。意識を断ち切る声に息を呑むと、男は安堵の息をついた。壊れた思考を埋めたのが純粋な驚きだけだと感じたからかもしれない。

男は既に己自身とも言えるメイの横顔を見ながら一瞬間を置き、先程メイが見せた頑なな態度をそのままに告げた。

“そんなことは、オレが許さない”

そんなこと。その言葉にメイが顔を歪めた。

「……秘術の中には、あんたを自由にする方法だってあるはずよ。私の魂を探れば出てくるかもしれない。そうすればあんたは檻から出られる。問題ないじゃない」

“それでも、駄目だ”

心を読むなとはもう言う気にならなかった。言っても無駄であることはとうに悟っていたのだ。

メイは自分の胸元を睨みつけながら、混乱する頭を片手で強く抑え男に向けて言葉を吐き捨てた。秘術はこの身体のどこかにまだ大量に眠っている。仮に死にゆくマイを見送ることでお互いの命が救われるなら、救われる理由がここにあるはずなのだ。メイには見つけられないが、男になら可能だろう。

眉間に寄せられた皺は、このまま一生取れないのではないのかというほどに深く強い。握り締められた片手は真っ白に染まっていた。小刻みに震えた手は、ツインテールは、男に対する怒りよりも不安を示していた。メイとマイ、どちらかしか生き残れない不安。必ずどちらかが死ぬと定めたグラス一族への不満が吹き出す。

（どうして一緒に生きられないの？）

男はそんなメイの問いを感じながら強く言い放つ。

“このままお前に死なれるなんざ、そのような夢見が悪いことがオ

レに耐えられると思ってんのか”
「そんなの私には関係ないじゃない！」
“お前が死ぬ必要なんてない”
「それを言うなら姉さんが死ぬ必要の方がないんだよ！？　私だって姉さんだって死ぬ必要なんかなかった！」
“決められたことだ”
「――だから！　……もういい、あんたはこれ以上口出ししないで。私は姉さんを探すから！」
だからこそ抗うんだというのをどうして分かってくれないのか。
メイは苛立ちを諦めに変え、男を説得するのをやめてぐんと速度を上げた。話している暇があるならその集中力を他へ割きたい。
男がメイを呼ぶ。それを綺麗さっぱり無視してメイは胸中で独りごちた。
（どうしてこんなことになったんだろう）
ただティファやマイと旅がしたいだけなのに。のんびりと世界を見て回って、たまにティファが起こす騒動に巻き込まれながらマイに怒られながら生きていきたいのに。アレイズが願うものも世界も神々の思惑も全てどうでもよかった。レイニウムなんていう大仰な存在よりも、メイの世界はすでに目の前にあったのだ。それだけが大事でそれだけを糧に生きてきた。こんな小さな世界を壊される謂れなどなかった。マイだってきっと同じだったはずなのに。
何度も何度もそう思いいつまでも続く世界の先を見たいと願ったものの願いが叶うはずもなく、メイは普段見せている天真爛漫な表情をひどく姉に似たものに変えて目を閉じた。一度息を整えて、また走るために。
（それが一番効率のいい方法だって、姉さんが言ってたっけ）
何度も手合わせをした。何度も負けて数える程だけ勝てた。レイニウム大聖堂の庭で踊るように戦った日々が懐かしくなり、目頭が熱くなる。
その時、熱く滲む視界の中に違和感を感じてメイは慌てて立ち止

まった。
何が見えるわけではない。ただ空間に違和感を感じただけだ。
“魔力が膨れ上がってる”
「……え？」
“何か、来る”
男はメイが感じる違和感を魔力と察したのか、低く獰猛な唸り声を発してメイの意識の中で遠くを指差した。それは言葉で表現するにはあまりに不可解な波動であったが、メイは特に違和感を感じることなく意識をそちらに向ける。そうして教えられた方向に視線を向け、目を細めながら暗闇を見据えた刹那周囲が銀色の光に包まれた。
「姉さん！？　それにあれってダグラスじゃ」
“ダグラス神。……彼も来たのか”
銀の風を纏って立つ長身の男の隣に並ぶ深青のメイド服と亜麻色の髪。それはメイが会いたくてたまらなかった人間だった。
マイの隣ではダグラスが自らの体をぼんやりと光に包みながら目の前に立つマイを照らしている。
「ねえさ――」
声を掛けようとする。だが男が影を伸ばしメイの口を塞いだせいで何も言えなくなる。ただマイを見ていることしか。
マイは静かに微笑んでいた。
透明で凛とした、毅然とした色もある涙の気配など感じさせない綺麗な顔で笑っていた。
白い手を差し伸べる。メイではなくダグラスに。
唇が弧を描く。メイには浮かべられない艶やかな顔だった。
「行きましょうか」
正気としか思えない声と仕草で銀の神を誘う。彼は熟れた甘やかさをたっぷりと含んだ深い笑みを返しマイの手を取った。

第七十九話

ティファやメイの目の前に現れる、少し前に時は遡る。
マイはほとんど音もなく歩きながら、行くあてもないのに出口を捜し求めていた。足取りは普段どおりしっかりとしたものであったが、何分顔が俯いているのでいつもの覇気が出ない。
しかしそんなことはもうどうでもいいのだと、マイはセミロングの髪を左右に軽く揺らしながら、時に肩を震わせて歩を進ませた。
(アレイズ様はティファ様の元に辿りつけたかしら)
闇の中から漂っていた濃密な気配は消えている。世界が監視の手を伸ばしたのということは一度相対したことのあるマイには分かっていた。何も感じられない空間に安堵の息を漏らすが、それだけで全ての不安が消えるかというとそうでもなかった。
はぁ、と一つ溜息ををついて軽く頭を押さえる。それは傍から見ていると偏頭痛に悩まされているようにも見えるのだが、別に頭痛や感じているわけではなかった。我ながら腹立たしいほどに苦しげな声が漏れる。
「貴女の声を聞いても、何の解決にもなりません」
時折自らが生み出す過去の残像と、今まさに頭の中で響いている声に耐えるように小刻みに手を震わせながら自分の体を抱きしめる。
(私を殺そうとしているなら、さっさと殺せばいいのに)
内心で憎々しげに呟く。マイに死を促したも同然の世界に対して。
頭には今も世界の声が聞こえていた。ティファのように身体を乗っ取られたわけでもないのに何かを断罪するような声が聞こえる。もっとも何を断罪しているのかなどマイには知る由もない。勘違いだろう。そう思うものの、声の鋭さが次第にマイの精神力を削っていったのは事実だ。
軽くよろけながらマイは長く深く息を吐き出し、囁くように頭に響く声から逃げ出そうと試みたもののそれはまったくの無駄に終わ

り、疲労を蓄積させるだけの結果に終わった。渋々逃げるのを諦め、目を閉じて空虚な気持ちで囁き声に耳を傾ける。

過去の残像が囁く。

『ここを出るたった一つの方法を教えてあげるわ』

もう一言、聞こえる。それはひどく苦しげで、もう過ぎ去った時のことだというのにマイはその囁きを聞き胸が痛みを訴えるのを感じていた。

『覚えておいて。これは貴女にしかできないことなのだから』

最後に、恐らく現在のマイに世界が向けているのであろう言葉が響く。

先程までの痛みなどまったく感じられない、鋭い刃の切っ先のような声だ。

『ティファニエンドのために魂を捨てるのか、己のために生きて皆で死ぬのか、選んで』

苛立っているのだろう、とその声に思う。

何が彼女をそうさせたのかは知らないが。

(ティファ様が原因だとしたら、ざまあみろだわ)

危険を知らせたアレイズの指輪は恐らく世界が原因だろうことは分かっていた。危険な目に遭っているのはティファ。二人が相対した結果苛立ちに支配されるなら、それは主の勝利に他ならない。

それにしてもと思う。自分は一体何を選べばいいのだろうか。

「……私は」

闇に溶けてしまうほどに低く儚い声はマイ自身の耳にも届かない。

表情から色が失われていく。意志の輪郭さえぼやけ、周囲の音が届かなくなった。薄く目を開けると辺りは一面闇で、もしかして自分は瞼を開けているつもりで動いていないのではないかという錯覚に陥る。何度も何度も感じたそれに首を振って返し、気にせず足を一歩踏み出した。

無意識に口を開く。

「私は――どうすればいいのですか?」

自然な動作で歩きながら響く声はあまりにも深い悲しみと動揺を現していた。恐らく、今マイを知る者が通りかかったら立ち振る舞いと言動の差異に驚いたかもしれない。そう思い自嘲の笑みを漏らしたくなる程に弱っている自覚はあった。もっとも、誰もマイを見つけられはしないのだが。

頭に響くのは世界の言葉。

脳裏に浮かぶのは主であり親友でもある少女の姿。

思い出すのは同じ顔をした自分の半身とも言える妹。

世界の声を聞くたびに頭を過ぎるのは、仲間である三人の神々。

「私は――」

（失いたくない）

誰一人として、消えてほしくはない。

心に浮かぶ妹の姿が消えていく。それでも叫ぶようにマイは心の中で失いたくないと言い続けた。

主であり親友である人間を失いたくないのは当然だ。妹を失いたくないのも当然だ。誰しもそう思うだろう。だがマイは自分の人生からしてみればあまりに短い付き合いであった神々にも死んでほしくはないと願っていた。彼等もまた己の中で大切な位置を占めていたのだ。

親友と契約し、守ろうとしているだけの存在達。

初めはそういう考えすら持っていたマイがそう思ったことが意外だったのであろうか。マイの頭の中で囁き声を発し続けていた世界は、強い叫び声に怯んだように囁きを一瞬止めた。その間に更に歩を進め、今度は顔を上げて果てのない暗闇の中を見つめながら今度は言葉にした。

「――死にたくない」

誰にも、世界にすら言わなかった本音を漏らす。

口にした瞬間涙で視界がぼやける。しかし自らが口にした言葉を訂正することもなく心の中で何度も死にたくないと呟いた。主の為の死だ。恐れる事など何もなかった。だが世界に言われ、彼女の為

でもあると腹立たしい事この上ない。自分は世界を殺したいとさえ思っているのに。

（だけど、世界の目的を思うとこの方がいいのかもしれないわね）

何となくだが、マイには世界の目的が分かりかけてきた気がする。

そしてもし予想が当たっているなら、言うとおりにするのも一つの手だと思い始めていた。

どうしたら。もう一度そう言いかけ、瞬間的に魔力が膨れ上がる気配を感じ口をつぐんだ。

「世界……？　もしかして、また」

モーニングスターを構え、軽く腰を落としながら魔力が膨れ上がった方向を睨み据える。そうしていつ誰が攻撃してもいいように臨戦態勢に入っていると、目の前に予想していた緋色の光ではなく銀光が飛び込んできた。

眩しさに慣れるまでの数秒間、瞼に鈍い痛みを感じながらマイは光を注視する。同時にひどく懐かしい魔力の波動を感じて目を見開いた。

視界は回復していない。それでもマイには、光の中に懐かしい存在が立っているのが確かに見えた。分からないはずがないのだ。こんなに馴染んだ魔力などどこを探してもないのだから。

数秒して目が光に慣れてから、目を細めて予感を確信に変えようとするかのように光の中心に立つ人物を見やる。

すらりとした体躯が熟した甘さを持ってマイに笑いかける。

その笑みに思わず笑い返しそうになりながら、マイは自分が持っていた緑色のクリスタルを取り出してまじまじと凝視した。今まで中心で眠っていた小さな神の姿はない。やはりこれは本物なのだと確認し、軽く息を吸い込んでから途方に暮れてしまった。

――何て声をかければいいのだろう。

言いたいことは山ほどあった。文句ならそれ以上にあった。

だがその全てが相応しくない気がして口を噤んでいると、相手はとうに言葉を見つけたらしく手を伸ばした。

「遅くなったが――今帰った。マイティーナ」
ひどく嬉しそうで、言葉を向けたマイを愛おしんでいるような声だった。
常ならば腹立たしいだけの声。低いその声にマイは何故か笑いかけていた。
「本当に遅いですよ……。ダグラスさん」
あんまり遅いので死んだのかと思っていましたと普段なら続く軽口を止め、親の敵であり誰よりも憎むべき敵である銀髪の神の手を取り、その体をそっと抱きしめた。肩に頭を預け、細い背中に腕を回す。冷たくもしっかりとした体温を感じさせる体に急に心細さがこみ上げ、泣き出しそうになった。
ダグラスは初めマイの行動に面食らった様子であったが、見下ろした先で苦しげな表情を浮かべられているのを見て何も言わずに背中に手を回し返した。確かめるような緩慢さで込められる力に吐息した。
「ずっと見ていた」
ようやく契約者が己に身を委ねたからか、ダグラスの声は幸福そうだった。ただ言葉尻に漂う昏さは拭えなかった。これがただの幸せに終わらないと彼は知っているのだろう。髪を梳く指先が淋しげに思えるのもそのせいかもしれない。
「そうですか」
ティファの言葉通りだったので、ずっと見られていたことに関しては驚かなかった。世界が自分に干渉したのを見て何もできなかったことを、きっと彼は悔いているだろうから。同時に全てを知ってもこの場に出てきた意味を悟って苦笑する。
マイは今まで感じることのなかったダグラスの体温に身を任せながら、続きを話そうとする彼を押し留めるようにして目の前にある胸を手の平で強く押し、体を離した。
真っ直ぐに前を向き、口元を軽く緩めながら言う。
「ダグラスさん」

「何だ」
「プラクトで出会ってから今まで、色々ありましたね」
「……？　あぁ、そうだな」
唐突に昔を懐かしむようなことを話され、ダグラスが怪訝そうな顔をする。だが違和感の正体を掴まれる前にマイは話を続けた。
それはティファやマイの双子の妹であるメイですら知らない話だった。
「貴方に無理矢理契約を迫られて、グラスの魔力を扱えるようにって特訓を受けさせられました」
「なかなか筋がよかったな。普通ならもう少し時間をかけて覚える魔術だってあっただろうに」
「当たり前です。ティファ様を長い間放ってはおけませんでしたから」
「空間転移に攻撃用の魔術、それに簡単にだが治癒系の魔術ですら覚えて……。その理由がティファニエンドただ一人の為だとはな」
含み笑いを漏らしたダグラスは小さく息を吐き出し、マイの目を柔らかい光を持って見据えた。銀色をした彼の瞳は中心に不思議そうな顔をしたマイを映す。そんな自分を暫く見つめ、懐かしそうな口調を引き継いだかのようにダグラスが続ける。
「お前を連れて魔術の練習をする時、俺はひどく嫌われていたせいでなかなか練習がはかどらなかったな」
「当たり前です。私の両親やティファ様のご両親を殺したのは貴方なんですから。私はまだそのことを許してはいません。たとえ世界の願いでも、一生許すことはありませんから」
「あぁ、そうだろうな。だからこそお前は俺を憎んだし、俺に教えを乞うた」
思えば長い道のりだったと、過去を思い返すようにダグラスが苦笑した。
マイもその苦笑の意味が分かるだけに文句は言えなかった。
教えは乞うた、確かに。だが基本的に二人に好意的な会話があっ

たかというとそうでもなかった。
　ティファ達の故郷であるプラクトの屋敷で魔術の特訓をした二人の姿は異様だったと言わざるを得ない。少し離れて立つダグラスが魔術の詠唱に使う言葉と精神の集中の仕方を相槌があるわけでもないのに喋り続け、マイがそれを聞いて無言で魔術を行使する。必要なら「教えてください」と言えるが、必要なければ一切口を開かなかった。
　魔術の成功を見てダグラスが休憩を入れるなり次の魔術を教えるなりする。マイは無言で頷き受け入れる。本当に、よくこんな自分に根気よく教えられたものだとそこだけは感心した。
　ダグラスがマイに魔術を教える許可を下したのはひとえにグラスの末裔だったからというのもあるのだろうが、契約者であり世界の敵になることを願ってもいたマイに自己防衛の手段を教える為だったという。だからといってあの根気良さは才能だと、今では素直に思えた。
「それにしても、普通は師弟関係にある人間には口を利くものだろう」
「貴方は人間ではありませんから」
「相変わらず気の強いことだ。まぁ、そこがいいんだが。それに思惑通り、特訓を通してお前に少しは近づけた」
　どれだけ嫌われていても師弟関係というのは太い縁だ。これを機に少しは仲良くなれるかもしれないと思ったとダグラスが笑ったものの、はたしてそれが成功したかどうかは分からないなとマイは思った。無論、会話ができるようになったという点では正しいのだが満足される程ではないように思う。
（そうまでして仲良くなりたいと思わせるような人間ではないのに）
　心底不思議だった。そうやって大事にされるような素質は自分には皆無のはずなのだ。
　内心の苦笑を浮かべないように苦心している様子のダグラスを睨めつける。ティファによく似たきつい眼差しにダグラスがますます

笑みを深めたが、文句を言うのも面倒になり黙っていた。それに、怒ってもいなかった。

「私は貴方が嫌いです。私達の両親を、屋敷の人達を殺した瞬間から、再びプラクトで出会ったあの日からずっと。嫌いで、憎くて仕方がありません」

「……」

小さく掠れた声にダグラスが押し黙る。意外そうに眉を顰めるのは、ダグラス相手に弱さなど見せなかったせいだろう。やや悲しげなのはそこまで憎まれているのを今でも告げられる痛みか。その痛みさえもが愛情の深さを物語っているようで、ますます訳が分からなくなった。

あの日、ティファ達が暮らしていたあの屋敷で「お前には何もできないだろう」と言わんばかりの笑みを浮かべていたあの銀髪の神はそこにはもういなかった。ただ、アレイズ同様人間らしい表情を浮かべる存在がいただけだ。

（分からないわ。どうして貴方に、よりによって貴方に好かれたのか）

口を噤むダグラスに、マイは睫毛を伏せて考えこむ。

闇の中に沈黙が落ちる。たっぷりとした時間を開けて、ようやく顔を上げた。感情を押し殺す声はどこか無気力な響きで闇を満たした。

ずっと、ずっと疑問だった。

「世界は自分の手で運命を作り出すことができるのでしょうか？」

「……何だと？」

「私がグラスの末裔としてティファ様の御傍にいるようになったことも、貴方の導きで魔術を行使できるようになったことも、他の人より強い魔力を持って生まれたことも。全て世界が今日の為に作った運命だったんじゃないでしょうか」

「そんなことできるはずが――」

「できないと、断言できますか？　世界はずっと昔にティファ様の

存在を知っていました。それならほんの少しだけ未来を変えることだってできるはずです。……ティファ様を苦しめる為だけに、私という存在を作ることだってできたはずです」

そう、誰にも断言できない。

この世界の至る所に存在する神々。彼等ですら、世界がどのような力を持ちどのような時にその力を行使するのか知らないはずだ。知っていればもう少し情報は流れるだろうし、何も教えられないなら知らないのと同義だ。

「……他の奴等に聞こうにも、神々は全てレイナの本体を守っているんだろうな」

何人たりとも近づくことのできなかった世界自身の傍に、今はすべての神々が集結していることだろうとダグラスは言う。それに納得するように頷き、世界は自分の身を守りたいのだろうかと考えた。殺されないように策を練っているはずなのは当然だと思うが、本当にその必要があるのだろうか。

（世界は何をしたいのかしら）

「マイティーナ……。もし、レイナが必然的な運命を作り出せるというのならどうして俺達を別れさせなかった？」

「それは」

「いくら何でもおかしいだろう。俺達が出会わなければそもそもティファニエンドが世界に近づくこともなかった」

疑問をぶつけるというわけではなく、解決するために言葉にして呟いているという印象を持たせるような声でダグラスは言う。そんな彼の言葉に対し答えを返せないマイも、軽く俯きながら確かにそうだと考えた。何度も何度も、きっと誰もが考えた疑念だった。

本当にこれが運命だと言うなら、どうしてこうまで出来すぎているのか。こうまで思惑が理解出来ないのか。

混乱しそうな頭を軽く押さえ、爪先をじっと見据える。

その時、ふっと頭の中で世界の言葉が浮かび上がった。それは今まで与えられてきた言葉の中ではあまりに重要度が低いと思ってお

り、考えもしなかった言葉だった。
『世界には意思がある。だから世界を動かすのも変えるのも意思の力なのよ。そう――世界が、私が持つ意志よりも強い意志の力があれば人間であろうと神であろうと、等しく何でもできるもの。それこそ己の中にある持っている先入観すら覆すことだって。世界である私が与えた先入観など全て無視して、何だって生めるし、壊せる』
「あぁ。……もしかして、世界は」
「マイティーナ？」
思い返した言葉に、ぼんやりと呟いてそれきりダグラスの言葉が耳に入らなくなった。代わりに壊れていた時のように独り言を呟き続ける。
「――なのは魔力じゃない……ですらない。それはただ……のための犠牲……、私はその為にここにいるのね」
「おい、マイティーナ？　しっかりしろ！」
必要なのは、本当に必要なものは世界の言うものとは違う。
本当はこの場を突破するのに必要なのは贄ではないのだ。命や魔力ですらない。出ようと思えばきっと簡単に出られる。意志の力さえあれば。
だというのにあえてマイを贄にしたのは、予想通りティファを苦しめる為だ。苦しめ、けれども殺さないのは彼女の持つ刃を確実に世界に向けさせる為。
「だとしたらレイニウム――貴女はどうして」
「マイティーナ！」
強く肩を揺さぶるダグラスにはっと我に返り目を見開くと、彼が慌てた表情でこちらを見ていた。その表情に逆に驚いて身を引くとダグラスはすぐさまマイの体を引き寄せて、安堵の息を吐く。思考に没頭していて記憶にないが、独り言でも言っていたのだろうか。
疲労のせいか顔から血の気が引いていく。ダグラスが気遣わしげな視線を向けてくるが、それには答えず視線を落とした。
（私はどうしたらいいのかしら）

世界が作り出した空間を消すために魂ごと消滅するか、生きると公言してティファ達と共に死ぬか。それとも自分かティファの意志によりこの空間を破壊して先に進むか。

（でも、それじゃきっと何も解決しないんだわ。レイナはもっと過激な手に出るでしょう。……その時犠牲になるのは私じゃなく、メイやイオ様かもしれない）

アレイズでは間違ってもない、ティファでもない。他の誰かに被害は必ず、出る。

自分が導き出した結論は決してティファを死なせる類のものではなかったのが救いだが、他の者達に犠牲が出るなら嬉しくも何ともなかった。

（答えは簡単だったんだわ）

世界はその心臓をティファに差し出している。刃が突き立てられるのを待っている。

理由は依然として知れないがそれだけは確実だった。でなければあえてここでマイが犠牲になる理由がない。生き残りたければ贄にするのはティファのはずなのだから。

貴女にしかできないこと。

そう言い放った世界の言葉そのままに、これからしようとしていることはマイにしかできないことだった。成程、確かに他の誰にもできないだろう。こんな大それた事。

大きな道を示したレイナを心の中で睨めつけ、マイは覚悟を決めたように顔を上げた。意志の強そうな眼差しを契約神へと向ける。

ただ、少しだけ胸が痛むのは彼の事だ。

「私、行こうと思います」

「魂が消滅すると知っているはずだ」

「はい。でも何となく、世界が……レイナが考えていることが分かって、行かなくてはいけないって思ったんです」

先程まで抱え込んでいた恐怖が嘘のようにすっきりとした声でダグラスに告げた。銀のイヤリングを外し、彼の手に乗せる。契約の

解除を申し出る姿は、今生の別れの言葉でもあった。
（レイナはダグラスさんと私が贄になれと言った。でも本当は、私一人でも贄の役割は果たせるはずだわ）
だから別れるのだ。憎らしくて仕方がない男ではあるが、抱きしめた刹那泣きたくなるほど死なせたくないとも思った。
死んだらそこで終わりだ。罪過も何もかもが消えてただの死体になってしまう。そんな軽々しい終わりで許せそうにもなかった。
「だからこれでお別れです」
凛とした声で告げる。
全ての覚悟を決めて踵を返すと、ぐいと腕を引かれた。
「待て」
腕を包む手に振り返りもせずただ背を向けていると、後ろからささやかな苦笑が降ってきた。
「俺も行こう」
（――……あぁ）
真摯な声に体が強張る。あまりに予想通り過ぎて涙も出なかった。用意していた拒絶の言葉を吐こうと口を開く。だがそれを制してダグラスが先に言葉を発した。
「その為に俺はここに来たんだ。そんな事、既に分かっていたはずだ」
「嫌――」
「お前が嫌でも、俺はお前と行く。このまま別れる位なら魂を失った方がましだ」
マイと同等かそれ以上に強い意志を示した言葉で言い放つダグラスは、掴んだ腕でもう一度マイを抱き寄せ、今度こそ離さないときつく抱きしめた。骨が軋むような痛みに息を吐き出す。しばらく動かしていなかった指先を小さく動かして、人形のようにぎくしゃくした動きで軽く拳を作った。だがそれは彼を殴る為のものではなく、振り上げられすらしなかった。後ろから暖かな感触に包まれた瞬間嗚咽を上げないために、その為だけに作ったものだった。

「ダグラスさん……」
熱い雫が頬を伝う感触に、マイは嗚咽を押し殺しながら彼の名を呼ぶ。
最後の抵抗とばかりに震える声を押し隠す。
「私は嫌いな人と心中するつもりはありません」
「それほどまでに俺を嫌うなら、むしろ俺の死を喜ぶべきだろう？なぜ俺が死ぬのを止めようとする。心中とは死した後共に生きる縁を結ぶことだろう。魂を失う俺達には縁のない言葉だ」
「それでも、私は――」
憎いという気持ちをこれほどまでに込めたことはないだろうと自画自賛できるほどに言葉に乗せるが、即答で返されてしまう。唖然としていると名前を呼ばれた。
「マイティーナ」
愛称で呼ばれ続けてきたマイを、ただ一人正式な名前で呼ぶ仲間。いや、マイからしてみればダグラスは仲間と面と向かって認めたくない相手ではある。しかし暗闇を歩いている最中、ずっとダグラスという仲間に出会うことを心の中で願っていた自分にそれを否定することなどできはしなかった。
沈黙で先を促すと、ダグラスはマイの体に回した腕に少しだけ力を込めて囁いた。
それはマイ達の故郷であるプラクトでティファを殺そうとした神であるとは思えないほどに、弱々しく悲しげな声色だった。
「お前はよくティファニエンドをお節介だの優しすぎるだのと言うが――それはお前も同じことだ」
「……」
「いや、俺から見ればティファニエンドよりもお前の方が遥かにお節介で優しすぎる」
「私、は」
「憎い敵である俺が死ぬことすら、拒んでいる。そうやって一人で抱え込んで死のうとしているお前の気持ちが優しさ以外の何だと言

うんだ」

最後に呻くようにそう言ったダグラスは、きつくマイを抱きしめて目を閉じた。彼の言葉にもう何も言う言葉がなくなってしまったマイも、目を閉じて黙り込む。全て見ぬかれている以上何も言えなかった。代わりに体に回された腕に手を触れさせる。

（これが私の両親の、敵？）

初めて会った時に比べてあまりに弱々しい姿。あまりに人間らしい姿。見ているだけで、すぐ傍にいるその存在が憎むべき相手であることを忘れてしまいそうになるほどに残酷さを欠いた神。

（……忘れるわけにはいかないのだけれど）

心の中で付け足し、それでもどうして自分がダグラスを殺さないのかと考える。

ティファや妹との平穏とダグラスの死だけを願っていたはずなのに、いざダグラスが自殺じみたことを決行しようとすると止めずにはいられないのだとマイは内心で自嘲した。

流れ出る涙は未だ止まらない。

輪郭を伝い落ちる涙は顎から滴りダグラスの手の甲を濡らす。それはどれだけ嗚咽を押し殺そうともマイが泣いていることを如実に示すことであり、故にマイは内心で軽く舌打ちしていた。

（あぁ、よかった）

苛立ちはなくとも、少なくとも己の弱い部分を知られたくない程にはダグラスを憎んでいる自分に安堵する。

もう自分にも分からなかったのだ。ダグラスをどう思っているかなど。

生きてほしい、殺したい、罪を償わせたい、終わらせてあげたい。多くの感情が混ざり合って一所に落ち着いてくれない。

どれだけ時間が経っただろうか。

着ているメイド服にダグラスの体温が移る程度の時間が経った頃、ダグラスがおもむろに口を開いて言い放った。

「愛している。だから、死ぬなら俺も一緒に行く」

それは先程マイが自分自身で満足できた「憎しみを込めた声」とは逆の声だった。誰かを愛おしいと思う気持ちをそのまま言葉に乗せていた。

あまりに甘い言葉にマイは暫く絶句したまま固まっていた。自分がそこまで言われるとは思ってもいなかったのだ。微かに熱くなる頬が、そこを通る涙の熱を上げながら更に体温を上昇させていく。憎むべき相手であろうとここまで言われると羞恥心が湧き起こるのだと初めて知った。

マイは握り締めた拳を一度離し、今度はまだ冷たさを持っているスカートを握り締める。そうして努めて冷静になろうとすると、自然と笑みが零れてくる。

（一人で逝くよりはいいのかもしれないわね）

ダグラスが共に来る。そう考えると、まだ心の奥底にあった死にたくないという感情が一気に霧散してしまった。こんなどうしようもない神なのに、自分の親の敵なのにだ。

誰であろうと、誰かが一緒にいてくれる。それは誰にも苦しみを話さないということで一人で頑張り続けていたマイにとって、あまりに甘美で幸せな提案だった。

（これが世界を殺す為に必要な道なら、ティファ様が世界を殺してくださるなら、私がその為の刃になれるなら。それは私の復讐の終わりでもあるわ）

そこにダグラスを加担させられるなら、彼の罪も少しは軽くなるだろうか。

ダグラスの腕にそっと触れて呟く。

「私は貴方を愛してなどいません」

「知っている。憎んでいるんだろう？」

「そうです。でも……貴方と逝くのも、悪くはないんでしょうね」

だから、と続けてマイが振り返るとダグラスは腕の力を緩めながら静かに微笑んだ。余裕ぶっている様子でも、無理をした様子でも、ましてや苦しみを含んだ様子の笑みでもない。それはこれから死に

逝く命が浮かべるものにしては、あまりに不適当なほどに穏やかで幸せそうな笑みだった。

マイも、これから死に逝くのが嘘のように綺麗で柔らかな笑みを浮かべていた。

無論お互いに死に安寧を求めているわけではない。生きたいのだ。どうしようもなく。だが一人じゃないと感じられたことが、何よりも嬉しく心地よいことだと感じているだけのことなのだ。

それが一時の幸せかもしれないと感じていても、二人は穏やかに微笑み合う。

マイの瞳から流れる涙はいつの間にかその流れた軌跡ですら消えていた。

「ダグラスさん」

一歩後ろに下がり差し出す手は震えていなかった。

それはマイが本当に覚悟を決めた瞬間で、世界が突きつけてきた要求を呑み、願われたままのシナリオを最後まで続けることを決めた瞬間でもあった。

「貴方はこれから私の共犯者です」

「共犯者」

「えぇ。復讐を果たす為、私は覚悟を決めたんですから」

手を取られるまでの間目を閉じる。

共犯者という響きに嫌がる素振りを見せないダグラスの水銀のような双眸を見やり、頬を緩めて誘う。

「――行きましょうか」

そうしてマイは道を選んだ。ティファより先に。

誰のせいにすることもなく自己責任で魂を捨てる――そんな大きな犠牲と共に皆が前に進める道を。

第八十話

匂い立つような甘さを放つ銀の神に微笑みかけるマイの姿が鮮烈に飛び込んでくる。

壊れた人形じみた無機質さも狂気もそこにはなく、こちらまで笑いたくなるほど満足気な笑みが浮かんでいた。ここがレイナの用意した舞台ではなく、贄がいなければ出られないような闇の中でなかったならティファは安心して彼女に抱きついていたかもしれない。

ようやく精神が安定したのだと感じさせてくれる笑顔は、今まで見たどんな顔よりも綺麗に見えた。あまりに綺麗で、泣きたくなる。

「マイ！」

「姉さん！」

引き止めなければ。

声を張り上げてマイを呼ぶと、彼女の向こう側からメイの大音声が聞こえた。光が届かないせいで姿は見えないがそこにいるのは間違いない。ようやく全員が揃ったのだ。まるでこれから起こることを見せしめるために、レイナが用意した舞台の客席に連れて来られたように感じ、ティファは一歩踏み出した。近づきがたい空気など知った事ではない。

透明で綺麗な笑顔。

何かを覚悟したそれは、きっとティファが恐れていた展開に繋がるだろう。

（だから止めなきゃ）

彼女がもう決めてしまったのだとしたら止められるのは自分しかいないのだ。

二方向からの呼びかけに、マイがその亜麻色の瞳を弓なりに細めた。

「ティファ様、メイ。……よかった、最期に逢えて。レイナが連れて来てくれたのかしら」

遠い闇の中にレイナの気配でも感じるのか、マイが自分でもメイでもない全く見当違いの所を見据えて胸を撫で下ろす。理知的な光が宿る大人びた眼差しは澄んでおり、濁りや負の感情を感じさせない。血の色がする凄惨さも鳴りを潜めていた。

ここがレイニウム大聖堂であったならと思う。そうすれば彼女は自分達を見てお茶にしようと誘いを掛けたに違いない。纏う穏やかさは紅茶や焼き菓子の甘い香りが漂ってくるような暖かさを孕んでいたのだから。しかし、ここは大聖堂ではないのだ。

「そんなわけないじゃん！　大体最期って何よ！」

今にも泣き出しそうなメイの怒号がキンと響き渡る。

銀光の下まで駆けた真紅のスカートがひらりと舞う。鮮やかな紅の布地に、ほっそりとした白い足が映えた。常ならば何とも思わないというのにその姿を扇情的だと感じたのはメイの纏う空気が違うせいかもしれない。

乱れた髪をそのままに同じ顔をした姉を睨めつける姿は、顔立ちこそ同じものの全く存在を異とする者に見える。何でだろうと不思議に思い、首を傾げる。横に傾いだ世界で銀と翡翠の光をたっぷりと浴びたメイがティファを見やる。「あ」その目を見て、思わず声を上げた。

マイも気付いたのか睫毛を伏せて悲しげに呟いた。

「もう覚醒してしまったのね」

生まれた時からずっと瞳を飾っていた亜麻色はメイから消えていた。

代わりに彼女の視線は真紅に染まり、よくよく観察してみれば内に宿る魔力が制御しきれずに漏れ出している。黒い、影となってメイの体を抱くように纏わりついている。大きな猫のような形がゆらり、うごめく。

獣の咆哮の代わりに、メイが息を呑む。

自分の目の色など見えていないだろうが、本人はもう知っているのだろう。その身体が獣に冒されていることを。

「……っ！　そうだよ！　私の中にいる獣はもう檻から出てる！　でもそんなの全然大したことじゃない！」

怒りに震える拳が大きく上げられ、振り下ろされる。

リングリングを持ってもいないのに、闇を切り裂く風がマイとダグラスの間に吹いた。

「ダグラス！　あんたも何従ってんの！　このままじゃ姉さんが死んじゃうんだよ！？」

「知っている」

「ならどうして！」

「マイティーナが望んだからだ。それ以外にどんな理由がある？」

何を当たり前のことをとダグラスが嘲笑さえ浮かべてみせる。

（本当にそれしか理由がないんだわ、この男）

マイの意見が大事で、それが全てで、例えその先に破滅しか待っていなくとも尻込みも気構えもしない。飄々と立って当然のように受け止める。辛いだの何だのという気持ちは皆無なのだ。万一あるとしたら、それは歓喜か。

ティファはダグラスの態度に心底呆れながら双子を見守る。

理由など分からないが、メイが何かを必死に言おうとしているのが分かった。

（……それに、多分このままじゃ入れないわ）

足元に目を落とす。翡翠の光に晒されたそこには何もないが、神経を研ぎ澄ませてみれば魔力の糸が張り巡らされているのが感じられる。マイとダグラスを取り囲むように幾重にも張られたそれは、結界とは異なるもののティファを安易に先に進ませてはくれない。こつんと足先が何かに弾き返される。軽くも重くも感じられるその感触にティファは天を仰いだ。

（あなたね、レイナ）

胸中で呟く。マイが先程見ていた方向とは違うが、見るだけなら別にどこでもよかった。

ここはレイニウム。レイナの意思があまねく広がっている世界な

のだから。
　凛としたマイの空気に頭が冷えていく。焦燥感は未だ持って心を支配していたが、メイが声を張り上げれば張り上げるだけこちらは冷静になれた。冷静に、確実に対処しようと決意する。今一番大事なのは熱よりも確実性だ。
「どうする、ティファ」
　魔力の糸に気付いたのか、アレイズが隣に並んで耳打ちする。
「あれがレイナの魔力だとすると、解除するのは大変そうね」
「あぁ。だが絶対に解除できない類のものでもない」
「……舐めてるのかふざけてるのか。多分後者なんでしょうね」
　この程度の魔術に屈したと嘲笑いでもしたいのか。そんなくだらないことのためにマイを引き合いに出したのか。考えると心に熱が灯されていくがかろうじて鎮火しながらティファは指輪に目を落とした。
　煌々と闇を照らす光を弱め、右手でアレイズの手を握る。
　大きな手を優しく握りこみ驚いたように目を見開く彼を見据える。
「力を貸して、ジュード。私一人よりもその方がいいわ」
　魔力の供給だけでなく今回は魔術そのものを二人で行った方がいい。
　否、自分達だけでなくイオに助力を仰ぐのも必要だろう。
「敵はレイナだけじゃないわ。だから」
　持っていた剣を振るい、光の粒に変えて霧散させる。
　レイナはきっと自分達の妨害に力を惜しまないだろう。だが問題はそこだけではない。
　マイは最期と言っていた。彼女が死を望んだなら、彼女自身がティファを拒絶するだろう。
（まぁ、そんなの許す気なんてないんだけどね）
　命を投げ捨ててまでも主を優先させろだのと教育した覚えはない。グランハート家にもそんな家訓はない。
　自分達は必ず皆生きてレイナの下に辿り着かなければならないの

だ。自分達の両親を殺した者の下へ。その道が為に命を奪われなければならないなど、そんなふざけた話があってたまるか。
「少々強引にでもマイを連れ戻すのよ。ダグラスはこの際どうでもいいわ」
厳しい声色で宣言する。
握り締めた手に力を込めるとアレイズも目を閉じて同じだけの力で握り返した。
「見たことがない魔術だな」
「ジュードも？　……そうね、じゃあ後はもう吹き飛ばすしかないのかしら」
「……お前は相変わらず、何と言うか」
唯一それしかないという解決法を呟くとアレイズが肩を落とす。
黒い肩口を見上げると呆れた風に脱力した横顔が小さく笑った。
「魔力をぶつけるだけなら容易いな。イオの力も借りればより威力が増す」
笑う後ろからひょいとイオが顔を覗かせた。
「大雑把な作戦だね。まぁいいけど。大事なのは意志の力だし、今はそれが最上かな」
それより、とイオの碧眼が闇の中に向けられる。影にまとわりつかれた真紅の背中を。
「メイは、どうなってるのかな」
弱々しい声に胸が詰まって何も言えなくなる。
紅に染め上げられた双眸と大きな猫に似た形を持つ影が、もうどうしようもないほど封印が解けたことを示しているのだとイオにも自分にも分かっていた。そんな状態でここまで来られたのは奇跡に近いのだということも。メイの中にいる獣の力など知らないが、影が放つ圧倒的な魔力なら感じられた。自分達が練り上げはじめている魔力よりもずっと大きい。
マイにも。否、マイはより強く感じているのだろう。
憂いを込めて伏せられた睫毛にきらりと雫が光っているように見

えた。
「ごめんね、メイ。あんたを守ってあげられなかった」
ダグラスと手を取り合ったまま、一定の距離を保つ真っ直ぐな立ち姿はより一層の光を放つ。これ以上誰も近づけさせないと示すように。けれども悔恨だけは伝えなければ収まらないというように、突き放されることはないまま。
「いい！　そんなのいいよ！　姉さんが引き受けるぐらいなら私でよかった！　私は姉さんが幸せになってくれればそれでよかったんだから！」
「メイ……でも私は今でも、秘術を受けるなら自分の方がよかったと思ってるのに」
「駄目だよ！　こんな奴私一人で十分なんだから！」
涙混じりの声で叫びながらメイが自分の肩に手を置く。影を引き剥がそうとしているような仕草を注視すると、腕のように伸びた影がメイがそれ以上先に進むのを邪魔しているのが分かった。彼女はそれを引き剥がしているのだ。一歩でもマイに近づこうとして。
「……でも、まだだわ」
まだ魔力が溜まっていない。マイやダグラスに悟られずに集める魔力の糸はまだ強度も練度も足りなかった。これで今出て行ってもどうにもならないことぐらいティファにも分かっていた。常ならば先陣切って進むはずであるのに、今だけはできないと歯噛みして耐える。
（機会は、たった一度）
唯一の機会を失えば後はない。
賭けているものがあまりに大きすぎるせいで冷や汗が止まらない。頬を伝って顎へと落ちて行く汗を拭わずに意識を集中させていると、メイが一歩踏み出した。影に取り込まれそうな足を震わせて、力いっぱいに。
「だから姉さんは謝らなくていい！　大体、私が先に死んじゃうんならここで犠牲になるのは私でいいじゃんか！」

切なる声に一瞬意識がそれる。
顔を上げるとボロボロ涙を流すメイが影に押さえつけられながら必死にマイを止めようとしているのが見えた。
「私がやるから！　どうしても行かなきゃいけないんなら私が行くから！」
（……でも、違う）
マイを止めたいのは同じだが、決定的に違うのにティファは唖然とした。
（犠牲になろうとしてるんだわ、あの子まで）
そんな事をしてほしいわけじゃないのに、そんな方法を取ってほしいわけじゃないのに。くだらない世界の思惑で誰一人命を落としてもらいたくないのに。だというのにあの双子はどちらかが死のうとしているのだ。まるで、それしか道がないみたいに断言して。
「……違う」
そんなわけがない。これしか道がないだなんて、そんなわけがない。
ギリギリと力を籠めた左手が痛い。指輪が手の平に食い込んで骨が軋んだ。
激昂するメイを宥めるようにマイが薄く笑む。
「それでもこれは私にしかできないことだわ」
何かを確信している声が耳朶を打つ。
――マイは何か知っているのだろうか。
自分が贄にならなければならない確信を得るに至る何かを。あるいはそうならなければならないとレイナに脅されでもしているのだろうか。どちらもありえない話ではなかった。レイナが干渉した後の彼女を見る限りは。
だが、だったらなんだというのか。
言い放つ。今度は誰にも聞こえる声で。
「違う」
一歩後ろに下がったマイがこれから何を為すか悟り、声はより大

きくなる。
「違うわ！」
本当は、それは自分がやるべきことだった。
（マイでなきゃいけないわけじゃない。本当は私じゃなきゃいけないことなのに！）
感情が溢れ出す。この世界への理不尽と怒りと痛みへの憎しみがないまぜになり、体内を巡る魔力が一斉に外側に漏れてティファやアレイズの髪を大きく靡かせた。
腕を突き出す。イオとアレイズがティファの腕を見据え意識を集中させたのが伝わる。
「――砕けろ！」
大きく腕を振り上げる。殴りつけるように振り下ろした腕が光線を生んだ。
自分と、二人の神々がありったけの魔力をつぎ込んだ光線に強く願う。
（砕けろ、砕けろ砕けろ砕けろ――！）
想いが道を生むなら、今こそ……っ！
ざっと地面を足の裏で擦り上体を屈める。いつでも前に出られるように。
アレイズは隣で万一の時のために空間転移を試みようとしていた。
術式が広がる。その遥か前を突き進んだ光線は強力な威力でもって糸に襲いかかり――。
「「え？」」
唐突に、止まった。
イオと自分の呆けた声がやけに耳に遠い。
闇の中に浮かび上がる術式も力を失い霧散した。
アレイズが慌ててもう一度スペルを唱える。だが今度は術式すら出ずに消えた。
「「無駄です」」
今度は自分達でなく別の声が重なり合う。

くすり、笑い声が落ちる。
「レイナ……！」
「分かっているでしょう？　ティファニエンド。ここは私の空間。いくらあなたの意思でもねじ曲げられないの」
血の色をした笑いを睨めつける。姿は見えないが、確実にこの状況を見て楽しんでいるのが分かる声音にかっと頭に血が昇る。
「姿ぐらい見せなさいよ！」
「それは駄目よ。だって出て行ったらまた袋叩きにあってしまうもの。……それに、ほら。聞こえるでしょう？」
「聞こえる？」
「そう。ここに眠る者達の声よ」
言われて耳を澄ませる。するとひたひたと迫る闇の中に低い呻き声が聞こえてきた。「っ！？」息を呑むティファ達にレイナが堪えきれず笑い出す。
「言ったでしょう？　ここは神の墓所。いるのは私達だけではないのよ」
レイナの言葉に「あぁ」とマイが頷いた。
「さっきから五月蝿いと思っていたのは、神々の声だったのですね。どうりで怨嗟に聞こえるわけです」
冷静に過ぎる声が無関心を振りまく。
「私が殺した神々もこの中にいるのでしょうか。……ティファ様達の術を阻止したのも彼等ですね」
「そんな……っ」
イオが愕然とする。味方から集中砲火を浴びた気分なのだろう。世界を裏切り自分についたとはいえ、長きに渡る命の間にいくらかの神々とは交流があったはずなのだから。
地を這い忍び寄る怨嗟の声が彼等に向けられる。マイと、彼女の契約神であるダグラスに。ティファのために大量に神々を屠ったのであろう彼等に。
「謝罪でも求めているのでしょうか」

淡々とした声が嘲笑を振りまく。契約神と同じ不遜さで。
「だとすれば申し訳ありませんがお断りします。私は一度だって後悔したことはありませんので」
命を奪うな、怪我をするなとあれだけ言い聞かせても尚聞く耳を持たないマイの堂とした声に心が千々に引き裂かれそうになる。
「駄目、マイっ！」
何があっても動かない姿勢の二人に手を伸ばし、必死に彼女の気配を掴もうとする。
唯一糸の中にいるメイは既に影に押し潰され、地面に這いつくばって無理やりにでも起き上がろうとしていた。「は、なして……！」呻く声は重さに抗えないのか腕すら動かすことができずにいる。涙混じりの声に影が首を振ったように見えた。顔など見えないし声さえ聞いたわけではないのに、その影自身が必死さを漂わせているのが感じられる。何が何でもメイをマイの下に行かせてはいけないと、影自身が願っているようにすら見える。
影が上体を伸ばしてマイの方に身体を向ける。その数瞬後に彼女が目を丸くした。
「そう、なの？」
全てを覚悟したはずの表情が崩れ、一瞬だけ呆けた顔になる。だがそれも刹那のことですぐに彼女は花開くような笑顔で胸をなで下ろした。
「――そう」
よかった。
呟く声に一筋、涙が零れ落ちる。
「駄目！　違うの姉さん！　私はいいんだってば！」
影の声をグラスの二人だけが聞けるのかダグラスは何も言わず、メイが怒号を上げる。ティファには全く分からなかったが、影が致命的な一言を放ったのは間違いなかった。
顔をくしゃくしゃにして喚くメイにちらりと笑っただけで返し、マイがティファ達に向けて深々を頭を下げた。

優雅さの漂う、墓所になどひどく似つかわしくない所作で。
「イオ様、アレイズ様。ティファ様とメイをどうかよろしくお願いします」
全てを託す態度に珍しく二人が反論する。
「お断りだ」
「同感。二人を守るのは君だろ？　マイ」
常に自分達がティファを守るのだと言って憚らない二人の言葉に眦を吊り上げてもう一度魔力を練り上げる。壊れろ、と強く願って。
（怨嗟が何だっていうの。世界の意思だからって渡せると思ってるの）
マイはグランハート家の侍女だ。
世界でも他の神々でもなく、所有権があると言えるのはグランハート家だ。
笑い声が落ちる。胸を刺す痛みをそのまま声にした。
「私の侍女を、あんたにくれてやる気なんてないわ！」
そうだ、マイは他の誰でもない自分の侍女だ。
その命も人生も自分に付き従うと決めたなら、あっさり幕引きなど許してやれない。
「マイティーナ」
歌うような軽やかさでレイナがマイを呼ぶ。
ティファを完全に無視した囁き声に彼女が呆れたような顔をした。
「……あぁ、何だ。魂を失うってそういう事だったんですね」
ふぅ、と吐き出した息が冬の寒空の下吐息した凝った空気に見えた。
「どうやらお互いの心臓を刺し貫く必要はなさそうですよ、ダグラスさん」
エプロンのポケットから封印のクリスタルを取り出して無関心に見下ろすマイに手を伸ばそうと魔力の檻を蹴りつける。剣を生み出し斬りつける。
（壊れろ）

数度の衝突で刃こぼれする剣が霧散する。ブーツが破れ、素足から血の筋が飛び出た。

「アリア様はきっとこの事を御存知だったのね」

（――壊れろ！）

納得した風に頷く姿をもっと近くで得るために何度も魔力の糸を傷つける。だが魔力程度何度も干渉できたはずであるのに、アレイズとイオがどれだけ力を奮っても、ティファがどれだけ剣を向けても弱さ一つ見せない。呪いで織り上がった糸如き相手にしている暇などないのに。

深青のスカートが淑やかに揺れる。

深く下げられた頭からさらりと流れる亜麻色の髪が銀光に艶を放つ。

「しばしのお別れです、ティファ様。それ程長い時間ではありませんでしたが、マイティーナは楽しゅうございました」

「別れなんて私は許可してないわ！　戻りなさい、マイ！」

「いいえ、ティファ様の御命令でもそれだけはできかねます。これは私の復讐なのです」

復讐。重たい言葉に唇をわななかせる。

「何言って――……っ、大体それなら余計に生きなきゃ駄目じゃない！」

返答は困っているとも哀れんでいるともつかない笑みだった。

「世界の下へお急ぎください、ティファ様」

封印のクリスタルが掲げられる。緑色の光がぽうと灯った。

「やめて！」

叫んだのはメイと自分とどちらだっただろうか。

無我夢中で頭が真っ白になった瞬間、糸が解けた。封印のクリスタルの光に退く影を押しのけメイも立ち上がる。

「マイ！」

「連れていきなさい」

限界まで腕を伸ばす先で、凛とした声が木霊する。

ダグラスの手を取ったまま高々と掲げられた封印のクリスタルが一際輝く。
刹那、マイの手にあるクリスタルとは違うクリスタルが闇の中から天を目指して伸び上がった。そして二つの方向から伸びる手があともう少しでマイに届く直前。――クリスタルがマイとダグラスの身体を刺し貫き、内側に取り込んだ。
腕がだらりと下がる。
「姉さん？」
血の一滴も見えない姉の姿にメイが虚ろに呼びかける。
「……マイ」
ティファも絶句した後、そう呟くのが精一杯だった。
マイとダグラスの姿は一見何も変わりなかった。
天井高く聳え、幾本ものクリスタルからなる結晶の中で寄り添って眠っている姿はダグラスが封印された時とそう変わらないのではないかと思えた。
（寝てるだけなんじゃないの？）
胸中の呟きが次第に震える。死ではなく眠りに就いただけなのだと思わせる安らかな顔に、しかし期待などまるで持てなかった。
「何も、いない」
アレイズがクリスタルに触れ、独りごちる。
「何も」
ティファはその言葉を鸚鵡返しに呟き、その通りなのだと絶望の理由を理解した。
クリスタルの中には二人の肉体が確かにある。
だというのにここには何も無いのだ。
正確には中身が空っぽになっている。魂も魔力も命を感じさせる血液の脈動も鼓動も、何も。
「これが贄になるってことなの？」
影に問うメイの声が、答えを得たのか大きく震えた。
「体はまだ動かせるはずなのに中身だけ持ってかれて、それがグラ

スの望んだことだって言うの!?　こんなことの為に、心と魔力を育てて……っ！」

（グラスの望んだこと？）

影と会話しているのか、メイはティファも誰も目に入っていないように独り言のように話を続ける。今にも死んでしまいそうな手を押さえつける影は、獣は一体何を答えているのだろうか。

ぼんやりそう感じるティファの手をアレイズが掴んだ。

「何か聞こえる」

痛みを堪える強い眼差しに息を呑む。

周囲に意識を配ると、確かに耳に入ってくる音があった。

「これは……、歌？」

反響する音が広がり、大合唱をしているような音が聞こえる。

高く低く伸びる厳かな音はまるで賛歌のようで、二人の命の為だけに奏でられたようで。

「殺したのはあんた達でもあるのに、何を讃えるっていうの」

「決まっているじゃない」

頭上から降る声を見上げる。

今度こそ姿を現した緋色の少女は満面の笑みを湛えてティファを見下ろした。

「彼等の命が潰えたことを神々が祝福しているのよ。二人に殺された神々だっているんだから当然でしょう？」

笑う声が告げるのは正論だ。

命を贖えるのは命。二人が神々の命を奪ったなら、贖うのは二人の命しかないだろう。

だがそれを哂うレイナをティファは決して許せないと思った。

「黙りなさい」

相手が誰であるかなどに頓着せず命じる。

歌がやむ。冷徹な殺意に怖気付いたのか、波が引くようにさぁっと気配が遠ざかった。

そんなに弱い意志しか持てぬ神々に果たしてあの時通用しなかっ

たのはなぜか。
あの程度の呪いに屈したのはなぜかとふと考える。
『これは私の復讐なのです』
やけにはっきりと言いきるマイの言葉が頭を過ぎる。もう二度と聞けない声に熱く涙が零れた。
（マイは自分が死ぬことでどうして復讐になると思ったの？）
確かにダグラスは死んだ。マイと共に。だが本当にそれだけが復讐の形なのだろうか。
考え、考えて考えて考えぬく。僅かな時間の間に何度でも。
その時立ち尽くしたまま動けないティファの耳朶に、囁くような言葉が聞こえてきた。
「――ろしてやる」
小さな、本当に小さな声が最初誰によって発されたものなのか分からなかった。
顔を上げて実際に唇を動かしているのを見るまでは。
「殺してやる」
誰に言うでもない言葉。
マイと同じ顔立ちの、かつて彼女が見せていた凄惨な表情でメイがレイナを睨めつけていた。
「あんたの理不尽と我儘は、あんたの命で贖ってもらうから」
紅の双眸が細められる。獣のような低い唸り声にティファはマイが何を復讐としたのかを理解した。
『貴女が全てを奪われる前に彼女を殺しなさい』
ビビッド大陸でのノルマンの言葉を思い返す。
当時自分はあの言葉を体と魂を奪われるからだと思っていた。実際レイナは自分の中に宿ったのだから。
（でも、違うのかもしれない）
彼は恐らく、全てを知っていたのだ。アリアが封印のクリスタルがマイの手に渡るよう仕組んでいたように。
（なら多分マイが望んだことは――）

この腕は世界を殺す腕。足は世界を殺すために歩む足。
思考は策を練り、口は魔術を唱える。
自分の体の全てが世界を殺す武器なのだと改めて実感する。
残り一つ、心だけが武器になれなかった自分。だがもう、それも終わりだ。
「ごめんなさい、ジュード」
(私、きっと誓いを破るわ)
心に灯った殺意をレイナに向ければ、その時アレイズは自分を殺そうとするだろう。
それでもいい。ただ一撃確実に心臓を抉り取れれば、それで。
絶対に殺さないと誓った自分の浅はかさがマイの命を奪ったのなら、もう迷いなど持てなかった。
闇が薄れ光が腕を広げた。扉は開かれたのだ。
それを背景にレイナが艶然と微笑む。
「来なさい、ティファニエンド。この先を超えて、私の本体まで」
「――えぇ」
そんなにも望むなら。
「私があなたを殺してあげる」
必ず、世界に凄惨な死を。

◇　◇　◇

尊い犠牲のその上に、光り溢れる墓所で賛歌が満ちる。
旅の終わりは、近い。

第八十一話

レイニウム。そう名付けられた世界の真理は、今こそこの手の中に。

◇　◇　◇

“これ”はもう死んでいる。

地面から伸びた幾本ものクリスタルの中、寄り添うように眠る深青のメイドと銀髪の髪を見上げティファは胸中で独りごちた。

スペルを唱えれば、クリスタルを壊せば。

一瞬そんな考えに囚われる。何も邪魔するものがなくなれば、手を伸ばした先で暖かい鼓動を感じられるような気がして。だがどれだけ障害物を壊しても回復魔法を使っても彼らが目覚める日は来ないのだと、この場にいる誰もが知っていた。ティファも例外ではない。

誰も、一言も発さない。

呆然と命を奪われた二人を見上げるアレイズとイオはもとより、メイも何も言わなかった。嗚咽さえ聞こえない。ただぎり、ときつく手の平を握り締める音だけが賛歌に混じって聞こえてくる。影に押さえつけられ皺と埃だらけになった服を直しもせずに、彼女は紅の双眸でクリスタルを見据えていた。

殺意に塗れた顔が、安らかな寝顔に重なる。

顔立ちではなく空気さえもが入れ替わったかのように、メイはマイに似た横顔で唇を噛み締めた。既にメイティーナ・グラスとは呼べない瞳の色に、しかし誰も問いを発さない。止んだ賛歌が与える沈黙だけが聴覚を痛く刺激した。

ティファの目にも涙は浮かばない。

呆然としているからだとか信じられないからではない。

胸に渦巻く殺意が涙さえ邪魔だと言わんばかりに燃えて滾っていたせいだった。

――この手は世界を殺す手。

くだらない夢の予知が与えた衝撃が、今は胸に心地いい。

この手は世界を殺す手。

無言のまま視線を落とす。開かれた手の平を光の中に見る。

自分のこの今は何も持っていない手が、それだけが世界を殺せるならば。

（私はきっと……ううん、絶対に世界を殺すわ）

アリアやノルマンの企み通りになるのは癪だったが、今はもうそれしかすることがないように思えた。マイが望んだのだ。自分がそうあるようにと。だったら迷う必要などないように思えた。

心を殻が覆っていく。不必要な優しさを打ち砕いて、殺意に色を変えていく。

その中でたった一つだけティファは抱いていた疑問を胸にクリスタルを見上げた。

マイ。心の中で呼びかける。何故ダグラスを最期の供に選んだのか、それだけが分からなかった。

二人の関係性は複雑で、ただ憎しみ合うだけのものではないのは知っていた。マイがダグラスを憎みながら、殺す決意を固めながらもただそれだけの感情しか抱かなかったわけじゃないのもティファは知っている。けれども、命の最期に選ぶ相手だとは考えていなかった。これも復讐の一環なのだろうか。

どう問いかけても答えはない。

分かっていてもティファは心の中で問いかけ、ふぅと息をついて首を振った。

どちらにせよマイは選んだのだ。ダグラスと共に逝くことを。ダグラスもそれを歓喜と共に受け入れた。今となっては誰がどうこう言える話じゃない。死んでしまった今となっては。

唇をわななかせてクリスタルを見上げるアレイズをちらと見やる。

彼は自分が会いたいと願った少女がしでかしたことを責めるように、悔いるように、ただ青い顔で二人を見ていた。そこに信じられないという色がないのにほっとする。これだけのことをしてもまだレイナを信じられるなら、アレイズとて敵だ。世界におもねる多くの神々と同じように。ティファは他の誰よりもアレイズにだけは敵になってもらいたくはなかった。

隣に立つイオもやはり青白い顔でクリスタルを見ていた。

しかし彼はすぐに目を閉じて黙祷を捧げると深く息を吸い込んだ。全てを受け入れるように。

きつく閉じられた瞼が開かれるとそこには強い決意の色があった。魂の審判者としての、神としての眼差しが出口を睨み据える。

「レイナは今まで命にも魂にも干渉しなかった」

沈黙を破る声に他の二人もイオを見やる。

「世界は器なんだ。器が中身を傷つけることがあっちゃいけない。器は器のまま、中身が溢れないように支えるのだけが役目だった」

でも、と密やかな声が僅かに大きくなる。

碧眼がマイとダグラスを捉えて痛ましげに細められた。

「マイとダグラスが選んだとはいえ、こんな道を選ばせたのはレイナだ。彼女はよりによって僕の管轄下にあった魂に手を出して、消滅させた」

手の平を広げると、空間を渡ってケージが現れる。

中で眠る白兎をそっと抱き上げ、頬をすり寄せる。

神の紋章が掘りこまれた首輪が光を放つ中で、イオは確かに言い放った。

「――魂の審判者イオンの名の下に、僕は世界を断罪する。僕達は行かなくちゃいけないんだ」

命を贖うことで開かれた出口に足を向ける凛とした立ち姿が、しかし何か思い出したように振り向く。

「アレイズ神、君はどうする？」

何気ない問いかけにアレイズがびくりと体を震わせた。ティファ

はその震えが一体何から来るものなのか判別できないまま、ただ彼等のやり取りを眺めていた。今は何を口にしてもまともなことが言えない気がして口を開けなかった。

「どうする、とは」

「こんな時にとぼけないでくれる？　このままレイナの所に行くかってことだよ」

「俺は……」

「マイもダグラスも死んだ。ここまでされて、君はまだレイナに会いたいのかい？　別にそれならそれでいいけど、会ってどうするつもりなのかぐらいは聞かせておいてもらわないと後々困るんだよね。何の心の準備もなしに敵になられると、寝覚めが悪い」

イオは戦いになったら確実に自分がアレイズを殺せると確信した声音で淡々と告げる。アレイズも神々としての位や今までの戦いから否定はできないのか、ぐっと唇を噛み締めた。悔しさではなく、迷いが濃厚に漂った横顔をティファはじっと見つめた。見つめて、彼が答えを発する前に口を開いた。

「ごめんなさい、アレイズ」

こんなになってもまだ悩む姿はアレイズの情の深さを伝える。その人間らしい情にティファとて何度救われたか知れない。情を向ける相手がレイナであろうとティファはそれに関して腹を立てはしなかった。相手に難があるだけで決して間違った感情ではないのだ。命は一度失われたら取り戻せない。奪うなら、それ相応に慎重になるべきだ。

知っていて、ティファは凛とした声を上げる。

「私は世界を殺すわ」

悩んで嫌だと叫んで、けれども辿り着いてしまった結論を今度こそ変えたりはしない。

「だからあなたは私を止めていいし、殺してもいい。だけど私はあなたに殺される前に、何があっても世界を殺すと思う。……自分で決めたことなのに、守れなくてごめん」

誰に言われたから誓ったわけではない、自らの内から出てきた誓いを音を立てて破り捨てる。紙切れであったなら小さな紙片がはらはらと地面に落ちているだろう。潔さと少しの痛みを織りまぜて。

イオがすっと目を細める。

冷ややかな視線を真正面から受け止めると、アレイズがぽつりと呟いた。

「マイが殺されたからか」

弔いと称して自棄になっているわけじゃないのかと、アレイズの思考が流れこむように伝わってきた。それに大きく首を振ってみせる。間違いではない。弔い合戦という言葉に何ら偽りはない。ただ、それだけでもない。

「マイが望んだからよ」

そう、だからこそ自分は選んだ。

手の平を見下ろす。やはり何も持たない自分の手は、どういう原理か世界を殺せる力を秘めているらしい。

だからマイはティファに託したのだ。この先に進めと。

「きっとこれがマイの復讐なんだわ」

グランハートとグラスの一家を殺害するよう指示した世界への断罪は、相手の命が潰えるまで終わらない。マイの痛みも乾きも決意も、それまで消えはしないのだ。例えここに魂がなくとも。

「だから私も行かなきゃ。……イオとはやることが違ってくるけど」

そう言ってイオを一瞥すると彼はひょいと肩を竦めた。冷ややかな視線が霧散する。

「君がどんな手に出るか知ってて呼んだんだから止める道理はないよ。それに、僕もこれ以上の犠牲は出したくないしね」

それは暗にレイナを殺すと言っているのか。

眉を上げて無言で驚きを示すと、イオはティファを凝視した後でうんと頷いた。「君が変わってしまったら連れていけないなって思ってたけど、やっぱりティファはティファだ」

「変わらない。魂の本質も最初に出会った頃と同じだ」

「？　当たり前じゃない。そりゃあ、世界を殺す気ではいるけど」
物騒極まりない言葉をさらりと吐くとイオが吹き出す。
「そうだね。僕もレイナを殺すつもりだよ。一度犠牲を出した以上、何が起こるか分からないからね」
それから兎を抱いていない方の腕でぎゅっと一瞬だけティファを抱きしめた。
安堵の息が耳朶に触れる。
「君はずっと人間のままだ」
自分が武器だと感じていたティファの心に、イオの言葉が染みこんでくる。「……うん」人間のまま、自分のまま、ティファニエンド・グランハートとして世界を殺しに行くのだと言い聞かせる。
刹那の抱擁の後、イオがアレイズに向き合う。
「君はどうする？　アレイズ神」
再度の問いにしかしアレイズは今度は迷わず答えた。
「俺も行こう」
「僕達はレイナを殺す気だよ」
ぎゅっとアレイズの眉間に皺が寄る。
「……それでもだ。ここで引き下がれるか」
吐き捨てる声は自棄になっているのかひどく荒々しい。ティファはアレイズが傷ついているのを感じ、そのことにだけ胸を痛めた。
「でもティファ様、姉さんを置いていけないよ！」
そこでようやく口を開いたメイがティファのブラウスを掴んで声を張り上げた。
影は鳴りを潜めているらしく、瞳の色以外何ら変化のないメイの肩にティファはそっと触れて首を振る。
「連れて行く余裕はないわ」
地面から生えたクリスタルの大きさを考えても、また仮にこれを小さくできるのだとしても二人を連れて行く気はなかった。「それに」第一問題はそれだけじゃない。
「連れていった方が危険かもしれないじゃない。私達は世界に会い

に行くのよ」
あれほどあっさり殺すと言えたのに、メイを前にすると殺しに行くとは口にできなかった。自分よりも遥かに強い殺意を纏っているせいかもしれない。このままでは一人戦地に行ってしまいそうなのも不安だった。せめて一緒にいなければと思う。
「行っちゃうんだよね……？」
不安げな声にきっぱりと頷く。
「私達が、私が行かなきゃいけないの」
予知がどんな形で叶えられるのかは知らないが、自分が世界を殺すとされているなら他の誰が行って解決するようなものでもないし、そもそもここで一人待っているなどという愚かしいことはできない。マイが望みは主である自分が叶えるのだ。
きつく拳を握り締めて目を閉じるメイは黙考しているようにも、内なる獣と話をしているようにも見えた。が、すぐに目を開いた彼女は悩みも会話の内容も悟らせない強さでティファをひたと見据えた。
「私もティファ様に付いていくよ」
「メイ……」
「姉さんが願ったっていうのは同感だし。私じゃ世界は殺せないだろうけど、ティファ様のお手伝いぐらいならできるもんね」
天真爛漫さよりも穏やかな、やはりマイによく似た面差しでメイが笑う。「それにどの道」
「先に進まなきゃ私も死んじゃうんだろうし」
「……え？」
さらりと呟かれた言葉の意味が分からず一瞬の間が空く。
「どういうこと？　メイ」
「何か言われたのかい？」
ティファとイオの問いにメイは苦笑で返す。
「これがグラスのシナリオなんだってさ。ほんっと、馬鹿みたい」
それ以上の言葉を発さず、メイはついと視線を出口に向けて足を

踏み出した。一瞬だけ見えた、涙の盛り上がった双眸を見られたくなかったのかもしれない。守りきれなかった存在に背を向けるのは良心が痛むし、苦しくもあるからかもしれない。分からないが、どちらにせよ自分も前を向かなければならないのだというのは理解していた。ここで立ち止まっては何もかもが無駄になる。

「行きましょう」

アレイズに手を伸ばす。もの問いたげな黒瞳が一度だけ揺れ「……あぁ」という低い声に変わる。

「そうだな。――レイナも待ってる」

「えぇ」

恐らくは、決着をつけるために。

（行ってくるわ、マイ）

振り向き、眠るマイに胸中で声を掛けてすぐに前に向き直る。

出口からは風が吹いている。

森の中にいるような錯覚を覚える清涼な風を追って、二人は手を重ねたまま外に出た。

第八十二話

神の墓所を出た途端眩しい光が差し込み、メイは反射的に目を細めた。

「森？」

ティファが怪訝そうな声を上げる。生きている命など無いに等しかった闇の先が木漏れ日溢れる場所だとは思いもしなかったせいだろう。アレイズもイオも眉を寄せて天を仰いでいた。

釣られてメイも空を見る。

青々とした艶を放つ豊かで大きな葉の間から降り注ぐ陽光は紛れもなくここが地上だと示している。遠くでは鳥のさえずりが、小川のせせらぎさえ聞こえる。人間の姿が見えないというだけでごくごく普通の森だ。殺気立つ自分達が立つには、あまりに長閑だ。

「この先にレイナがいるのか」

アレイズが意外そうな声音で呟く。

「そうみたいだね。僕もここには来たことがないから道は分からないけど」

それにイオが答え、彼はぐるりと森を見渡した後で最後にちらりとメイを一瞥した。何かを認めるように一秒程度視線を固定されたそれはすぐに逸らされる。どこでもなく目を見ていたのだと気付いたメイは指先を瞼に当てた。鏡はないがはっきりと分かる、紅の双眸を閉じる。

（もう戻らないのかな）

姉と同じ亜麻色の目を取り戻す日は来ないのだろうか。

割と気にいってたのにと胸中で呟く声に、呵々と笑う低音が答える。

“なに、オレが出ていきゃすぐ治る”

あっけらかんとした、けれどもメイを慰めるような声が響く。同時に体内を蠢く獣の気配にくすぐったさのあまり身を捩りそうにな

った。今まで気配さえ感じられなかった獣は今や圧倒的な存在感と質量を持ってメイの魂に寄り添っていた。
肉や皮を破らないのはあくまで物質的なものではなく、精神的な存在に留まっているせいだろう。
ではなぜこんなにくすぐったいのか。
メイはふと疑問に思い、すぐさま含み笑いと共に体を擦り寄せた獣の気配に眉を顰めた。
要するにくすぐったいのは体ではなく、魂なのだ。
ふさふさとした尾に魂をなぞられ、苛立ちと共に胸を叩く。責める仕草に獣は一寸息を止める。その隙をついて間髪入れず問うた。
(姉さんは死んだ。それでもあんたはまだ出られないわけ?)
グラスは姉の死を望んだ。そして実際にマイはクリスタルの中で眠っている。
もう二度と目覚めることのない、深い深い眠りに落ちて。
助けられなかった。自分を責め苛む声にきつく拳を握り締める。
木立を抜けて前へ前へ進む白と黒の背中を追いかけつつ、目尻に力を入れる。ともすればこぼれ落ちそうな涙をイオに見られないように。
“まだ最後の役目が残っている”
硬い声が心に触れる。メイも同様に硬く胸中で呟く。
(……グラスは本当に私達に世界を殺させる気? 世界が見た夢じゃ、あいつはティファ様に殺されるんでしょ?)
だからこそティファが世界の敵と呼ばれ、グランハートもグラスも殺された。というのに自分と獣が世界を殺すなら、矛盾しているではないか。ティファの役割がなかったことになってしまう。
“どうだろうな。俺じゃグラスが正しいのか世界が正しいのか分からねえしなァ。だが、どの道オレ達が先に進まないことには始まらないってことだろ”
世界との決着が着くまで後には引けない。お互いに。
獣の声に心の中で頷き返し、メイはそっと指先を胸に当てた。ど

くんと鼓動が伝わり、ほぅと息をつく。
よかった、まだきちんと心臓が動いている。
体も魂もまだ自分のものだと実感すると気が抜けそうになる。いつ消えるか知れないあやふやなものだと知ったから尚更。
“大丈夫だ。オレが死なせない”
力強く獣が断言する。家族だから死なせないと。だからメイは言えなかった。
責められるものなら責めたかったのだ。誰も彼もを。
世界を、アレイズを、イオを、自分を、獣を、そしてしたくはないがティファを。
どうして誰も二人を救えなかったのだろうとぐるぐると同じ言葉ばかりが巡っていく。これだけ力のある者達ばかり揃っていたのに。
それでも誰にも、獣にさえ罵声を浴びせないのは、そこで責めてしまったら相手が犠牲にならなければならなかったかもしれないからだ。神の墓地から抜け出すには贄が必要。この前提が変わらないなら、遅かれ早かれ誰かが犠牲になっていた。メイは己が贄になればいいと心底思っていたが、魂に触れる獣がどれだけ必死でメイを生かそうとしたのかを知っているから言えなかった。
どれだけ怒鳴りたくても、どこにも吐き出せない。
やり場のない怒りは全て世界にしかぶつけられない。だからメイは前に進むと決めたのだった。そこに全てがあると信じて。
みずみずしい草を喰むように進む一行の沈黙の中、聞こえるのは獣の声だけだ。
“メイティーナ、お前は世界を殺したくないのか?”
殺したければ手伝うぞとあっさり言ってみせる獣の声にメイは嘆息する。
(殺したいよ。というよりも、絶対に世界には死んでもらう。でも、それが本当にいいことなのかは分かんない)
“世界に情状酌量の余地があるってか?”
(そんなものあるわけないじゃん)

もうそんな甘いことを言えるような段階ではない。マイが死んでいるのに。……ただ。

（問題は、ティファ様が世界を殺しちゃった時よ。もしそうなっちゃったら次の世界はティファ様になる）

“それの何が問題なんだよ”

（ティファ様は世界になんてなりたがらないよ。だから悩むの。私だってあんなのになりたくないもん）

絶対の存在。仮に周囲の者達を神々にして同じ時を生きるところで自分が彼らとは全く異なる存在になってしまうのはメイとて嫌だった。人でありたいのは誰だって同じだろう。イオを敵視していたアレイズの様子からして、彼だって神になりたかったわけではないはずなのだから。

誰も次の世界になどなりたくない。アリアやノルマンが望んでも、本人が望まないならメイはティファに世界を殺させるのが正しいことか分からなかった。

（姉さんはどう思ってたんだろう）

マイなら自分より先に気づいていたはずだ。世界を殺した先、ティファがどうなるかということぐらい。

それでも、知っていて尚殺せと言うのだろうか。

（ティファ様を世界にするために？）

あの姉が？　ティファの幸せを第一に考える彼女が自分の復讐の為にティファを犠牲に？　いくら何でもそれは考えにくかった。最期の最期まで人のことばかり考えていたマイが、ティファ相手に非情になるとも思えない。

あるいは別の道があるということか。

「メイ？」

唸っていると隣で怪訝そうなイオの声がして慌てて顔を上げる。

「わ」するとすぐ傍に甘い顔立ちが見え、メイは一歩後退った。見慣れた顔とはいえ、至近距離に突然あると驚く。しっかり距離を取るメイを目を眇めて凝視してイオが口を開いた。

「大丈夫かい？」
心配気な声は一体何に対しての無事を問うているのか、メイは一瞬悩む。
マイの死に関してか、獣に関してか。
木漏れ日が風に揺れる刹那に思案したメイは即座ににこやかに笑ってみせた。
「大丈夫だよー。まだまだ全然元気だから」
心も体も、どちらに対しても無難に聞こえる答えにイオは碧眼をすぅっと細める。
「君の中にいる獣は？」
胸元を見やる視線から獣を隠すように手を置く。
「大丈夫。暴れたりなんかしてないから」
「どこか苦しくは？」
「全然。いつもと変わらないぐらい」
嘘ではなかった。
あれほど自分が自分でなくなる恐怖に怯えていたのが嘘のように体も心も穏やかだ。
くすぐったさはあるしいざとなれば影に体の自由を奪われるが、それは体内から食い破るものではない。あくまでメイはメイの意志で動き、獣は獣の意志で動く。一つの体を共有するでもなく、混合することなく二人は存在していた。
胸をぽんと叩いて断言するメイに、イオが不可解だと視線を落とした。
「……封印が解けたのにどうして君は無事なのかな」
以前イオは獣は人間に御せる代物ではないと言っていた。
メイもそれには同意だ。これは誰かに御せるものではないし、そうしていい存在でもない。グラス一族が獣を拘束してしまったことは罪以外の何者でもないのだから。だが、だからこそメイは自分が無事なのだと知っていた。
「そうじゃないといけないからじゃない？」

そう、無事でなければならないからこの身は食い破られていない。あるいは解放されない。

当然獣がメイの無事を願っていなければ成り立たない話ではあるが、もしかするとグラス一族は金獅子の意志など関係なくメイの命を確約していたのかもしれないなと今更ながらに考えた。そうでなければメイはマイよりも先に朽ちていた。

恨み言を漏らさない金獅子は静かにメイの魂に身を寄せる。

慰めるような、自らも慰めを求めるような仕草に自然と頷きを返す。

「そうじゃないといけない……？」

ボーイソプラノが不審を込めて放たれる。

「そういえばメイ、君は先に進むのがグラスのシナリオだって言ってたけど、あれはどういう意味なんだい？」

じっと見据えられ、獣が身動ぎした。今にも聞こえてきそうな唸り声を制するように答える。

「言葉通りの意味だよ。これは全部、私達の一族が書いたままの道。姉さんが死んだのも私がまだ無事なのも、そのせい」

理由は誰にも、当のメイにも金獅子にも分からない。

ただ自分達はこのまま世界の下へ行き、彼女の死を確たるものにしなければならないということぐらいしか。

「聞いたのかい？」

「うん」

「……そっか」

短いやりとりで何故メイがグラスの描いたシナリオを知ったのか察したのだろう。イオはそれ以上は何も言わず、おもむろに手を伸ばしてメイの手を握りこんだ。華奢で柔らかな手に包み込まれて目を丸くするメイに、イオは目を伏せたまま口元を緩めた。

「君は死なせない」

万感の思いを籠めた短い言葉に息を詰まらせる。

「メイ。君は生きて、人の世界に戻るんだ。僕が必ず戻す」

ティファの名は出ない。この先起こることを、誰もが知っているせいで。

うん、と頷く。

「私の中にいる金獅子も、おんなじこと言ってた」

人の世界に戻すとまでは言われていないが、人間らしさを大切にされている。命を尊ばれている。神を拒絶した獣と神になった獣と、立場は違えど同じようにメイを気遣う姿にようやく心からの笑みを浮かべられた。

風に木立が鳴き声を上げる。せせらぎの音が近くなり、清涼な香りが辺りに立ち込めた。

その先でティファとアレイズが足を止めて微かに息を呑んだ。メイも二人の間から前方に建つものを見て「あ」と声を上げる。

「あれ、神殿？」

木々が突然遠のいている、ぽっかりと空いた草地には滑らかな白の建造物が鎮座していた。

「どうしてこんなところに」

メイは呟き首を仰向けて神殿らしき建造物の先端を見やる。

先端には銀の鳥がおり、日の差す方に嘴を向けて今にも飛び立ちそうに見える。視線を落とせば広さこそグラドの教会程度のものの、造りの細やかさはレイニウム大聖堂にも劣らない神殿が口を開けている。所々で見えるステンドグラスや彫り細工が森の中にあるには不自然なまでの壮麗さでティファ達を迎えていた。

十人が見れば十人ともが美しいと賞賛するに違いない、煌びやかな神殿。

しかしメイは背筋を這う感覚に繋いだままのイオの手をきつく握り締めた。

「メイ？」

「イオさん、ここ……」

何があったか分からず不思議そうに小首を傾げるイオは、本当に気づいていないようだった。そのことにメイは愕然としながら胸中

で呟く。
（何で誰も何も言わないの？）
こんなに、こんなに沢山の気配が神殿を覆っているのに。
身震いするメイに答えるように獣が哂う。
“世界は本気でティファニエンドを殺す気のようだ。こんなに頭数揃えて、気配まで隠すなんてなァ。オレじゃなきゃ分からねえぐらいだ”
封印が解けた影響で常人のものとは思われぬ五感が更に研ぎ澄まされる。獣と同調するように辺りを探ると数えるのも馬鹿らしくなるような数の気配が、神々の魔力が空に森に溢れている。ここまで気付かなかったのは神殿自体が結界を張っているせいか。
冷や汗が背筋を伝う。
“大丈夫だ”
そんなメイを諭すように獣が口を開いた。
“奴等はまだ攻撃しない”
（何でそんなこと分かるのよ）
“神殿の入り口は塞がれてないだろ？　奴等は中に入れる気なんだよ。ティファニエンドを”
言われてみれば四方八方を取り巻く気配も入り口だけは避けている。
閉じ込めるつもりだろうか？
考えるものの、そんなことは何の意味もないと首を振る。
あの程度の結界と壁ならティファもアレイズも易々と壊せる。
逃げるのは容易いのだ。閉じ込める意味がない。
かといって世界の加勢というのも何かが違うように思えてならなかった。世界とは神より上位に位置する者ではないのか。だというのにわざわざ助けを求める必要があるのだろうか。
（どっちにしろ、気をつけるに越したことはないんだよね）
ティファ達に今警告してもいいが、そのせいで戦闘になるのは避けたい。

世界がティファを導いているならこのままで行かせるのが一番いいように思え、メイは黙したまま神殿を見上げるティファの背中を見つめた。

「一体何故こんなものが」

ティファの隣に立つには異質な黒を纏ったアレイズの声に、真っ直ぐな立ち姿がちらりと横顔で不敵に笑う。「決まってるじゃない」

「あそこにレイナがいるからだわ。ここは人間が住めるような場所じゃないんだから」

神の墓場を超えるという道筋のせいか、人間の気配がないからかそう告げたティファは腕を一振りし細剣を生み出した。鞘のない剥き出しの剣身が白い光を放つ。

「行きましょう」

先導する背中を追うようにアレイズが大股にティファに続く。その後をイオとメイが追って神殿に入ると、重厚な扉が独りでに閉まった。「ありきたりね」無感動に鼻で笑い、ティファが更に先へと足を向けた。が、三歩と続かずに歩みが止まる。

「なに、ここ」

中にはパイプオルガンも椅子もなかった。部屋も一つしかない。中央に置かれているのは寝台か。

天蓋から降り注ぐ幾重にも織り込まれたレースが霧のように寝台を覆い隠している。メイは気配を手繰り寄せてそこに世界がいないか確かめたが、何の気配も感じられなかった。

「世界はここにいないみたいだね」

ステンドグラスを通して緩やかな彩りを落とす日差しに目を落としつつ呟くと、寝台の横手から澄んだ声が放たれた。

「それはそうでしょう。彼女はまだここに帰ってきておりません」

誰のものでもない声に全員が顔を強ばらせる。

獣ですら気配を察知できなかったせいか舌打ちした。

「誰！？」

リングリングを構えて声を上げる。すると声の主は「ここです」

と声だけ放った。動きはなかったが、それだけで一体どこから放たれた声かが分かりメイは一瞬きょとんと目を見開いた。

「……石像？」

呆気に取られた声でティファが呟く。

寝台の横。レースの雨を避けるようにしてひっそりと立つのは、神殿の壁面に似た滑らかな白い像だった。女性の上半身を象るそれをしげしげと眺めていると、声――恐らくは女性と思われる高い声が感心した風に吐息した。

「礎になる前にここに来るとは珍しい。貴女がティファニエンドですね」

そうして当たり前のように、ティファを礎と呼んだ彼女は動くはずのない石の表情を和らげた。

第八十三話

まろやかな曲線を描く肩が揺れたように見えたのは気のせいだったのだろうか。

巨大な寝台脇に置かれた石像を凝視し、ティファはそんなことを思った。

アレイズがティファを庇うように前に出る。魔力や特殊な力は何ら感じられないが、こんな場所で言葉を発する石像を見て平気で喋れる者などいないだろう。ティファもその一人だった。厳しい声で問う。

「どうして私の名前を知ってるの」

神とも思われない女の裸像を睨めつけるティファに、女が笑う。

「ここに来るのは礎になる者だけだからですよ。レイナもそうだった」

「レイナも？」

「そう。皆最終的には私に会いに来る。そうでなければ欲しいものは得られませんから」

独りでに閉められた厚い扉を風が叩く。その音にメイが肩を震わせ、眦を吊り上げて一歩扉に近づいた。

開かれるでも誰かが入ってくるわけでもない扉をひたと見据える紅の双眸が鋭く光る。リングリングを構える手に震えるように力が入っている。隣に並ぶイオが怪訝そうな顔をしているのに釣られてティファも眉を顰めたが、疑問を口にする前に女が口を開いた。

「レイナはまだ帰ってこないようですね」

「私達より神の墓場を超えたのに？」

「あの子はここが嫌いですから。もう随分と長い間顔を合わせていない気がします」

「長い間……。けどここに戻ってないんなら、一体どこにいるのかしら」

動かせるものなら頬に手を当てているであろう憂いた吐息に独りごちる。長い時というのがどれほどのものか知れないが、ティファを迎えるつもりでいるレイナがここにいないのは予想外だった。まさか他の場所で待っているのだろうか。

（でも寝台があるってことは、ここが寝所のはず。他にレイナがいそうな場所なんて）

第一、待つなら確実に自分が来る場所を選ぶはずだ。それなのにいないというのは不可解だった。

「真理でも見せたかったのかもしれませんね。自分と同じように」

不意に女が感慨深げに漏らす。

顔を上げるとそこだけは唯一動かせるのか緩んだ口元が無機質な顔立ちに色を与えた。背後から差し込む光が強くなる。眩しさに目を細めるとアレイズが「真理」と傍で囁いた。「世界の真理の話か」

「貴様が真理を持っているというのか」

「どちらかと言われれば持っていると答えるべきでしょうけれど、真理を伝える役割を担っているわけではありませんのでどちらとも答えられます」

石像の女はあっさりと真理の持ち主であると告げ、光のない白いすべすべとした眼でティファ達を睥睨するように気配を放つ。神殿から一歩も出ることさえできない身の一体どこに真理が詰まっているのか、それこそが謎のように思われたがティファはその謎には触れず沈黙を貫いた。代わりに扉を警戒していたメイがくるりと振り向く。

「真理があると何なんですか？」

聞き慣れない言葉に首を傾げるメイにアレイズが淡々と説明する。

「世界になるには真理を知る必要がある」

この世界の全てを知って初めて世界の意思足りえると話すアレイズの言葉を補足するように、また期待を込めてイオがにこやかに笑った。

「裏を返せば、真理を知らなければ世界にはならないってことだね」

それならティファがレイナを殺しても世界にはならないと言いたいのだろう。

ティファもイオの言葉に期待を持ちつつ、しかし不意に疑問が頭を過ぎりメイ同様首を傾げた。肩に流れる髪の色が嫌でも目に入る。世界を殺すとされる者の髪の色。

誰も持ち得ない自分だけの特徴が、そして自分自身の殺意が世界を殺す。アリアやノルマンの願望云々を超えた所で、他ならぬティファが決めた道だ。しかし。

「でも真理を知らずに世界の意思が殺された場合ってどうなるの？誰も代わりがいないのに」

世界になる条件を満たさないのに死んでしまったら、次は一体どうなるのか。

生まれてこの方レイニウムという名の世界しか知らないティファやメイ、レイナによって神となったイオやアレイズにも以前存在した世界のことなど分かろうはずがない。今までに一度でもそうしたことはあったのだろうか。

ティファの疑問にアレイズが眉間に皺を寄せ「言われてみれば変だな」と漏らす。長く続いた世界の中で、一度も真理を知らずに世界となった者がいないのか考えているようだ。顎に手を当てて考えこむアレイズの神妙な横顔を見やり、ティファも思考を巡らせる。

その耳朶を柔らかな声が叩いた。

「一つ誤解をしているようですね」

誰かを見ているのか、それとも誰をも見ていないのか本人以外には判別できない無機質な眼がすうっと細められたような、そんな錯覚を覚えるやや高い声音が神殿内に響く。

ステンドグラスを透かして落ちる光が白い肩の線を滑る。衣を纏わせるように。

「世界になるのに真理は必要ではありません。無論、今まで真理を得た末に世界になった者が大半です。けれどもそれが全てじゃない」

うなじにかかる一房の髪の先には大胆に纏め上げられた髪と髪飾

りが見える。
グラドの王城に置かれていた石像と遜色ない女性の裸体と顔立ちだ。けれどもその露出が鮮やかに色を帯びると途端に蠱惑的に思えるから不思議だ。
ティファは無機質なはずの石像が放つ甘い空気に負けじと肩を怒らせた。気を抜けば取り込まれそうな雰囲気もさることながら、女の言葉が気にかかる。
「全てじゃない……？」
世界の意思になるには真理を得なければならない。
だというのにティファが聞いた道筋をあっさり否定した女は「そうです」となおも続けた。
「次代の世界候補は当代消滅前に選ばれ、消滅と同時に自動的に世界の礎となる」
「じゃあアレイズ達が教えてくれた真理の話は一体何なの？」
神々が信じている世界の存在とは何なのか。
全てが嘘だったのか。そんなことをちらと考える。
何もかもがまやかしで、世界は本当のことなど誰にも教えていなくて人間も神もただ手の上で踊らされているに過ぎないのか。
考えれば考えるほど腹立たしく苛立ちに任せて寝台を囲むレースを引き裂いてやりたい衝動に駆られる。
だが凶暴な衝動を沈めたのもまた、元凶たる女の言葉だった。
「確かに真理を得た者が世界の意思の立場を継ぐのは事実です」
乾いた、閉じる事を知らない瞳が遠くを見るように憧憬を籠めた声で言葉を紡ぐ。
厳かな空気は、まるでノルマンやアリアを見ているようだ。
「ですが厳密に言うなら世界を殺した者が後を継ぐわけでも、真理を得た者が世界になるのでもありません。喚ばれた者だけが礎になる。ただ、その過程で皆が世界を殺して成り代わっているだけの話」
「喚ばれた？　誰によ」
「世界自身にですよ。貴女を除いた歴代の世界達は全て前代の世界

自身に喚ばれて現れた」
自分以外は。さらりと出された言葉に息を詰まらせる。
「……私は」
では一体自分は何なのか。
声にならない問いに、女がふふと笑って答える。
「貴女だけは別です、ティファニエンド。貴女を喚んだのは世界ではなく他の者。今までとは違い、唯一人の身から生まれ、この世界に最も定着した魂に育った稀有な存在。だからこそ、ここに連れてきたのでしょう」
誰が。そう訊こうとしてすぐに口を閉じる。そんなものは訊くまでもなかった。レイナ以外にいるわけがない。
彼女の、彼女のせいでティファはここまで来たのだ。七年前の惨劇も含め、彼女が何もしなければティファはこんなにも長い旅路を歩いたりしなかった。後悔はしていないがもし誰かを恨んでもいいと言われたら、ティファは迷わずレイナを選ぶ。だからティファを連れてきたのはレイナに他ならなかった。けれども出てきたのは恨み言ではなかった。
「レイナ達は違ったって言うの」
「えぇ。言ったでしょう。皆喚ばれた者達なのだと」
「皆……」
独りごち、そっと目を閉じる。
今まで世界の意思となった、何人いるかも分からない者達は一体どんな気持ちでこの世界を歩いたのだろう。
望んでもいないのに勝手に人生を操られて、気持ちに反して多くの者を目の前から奪い去られ、どんな思いを育んでここまで。
ティファにはそれは呪いを紡いでいるようにしか思えなかった。
幸せな者もいただろう。歓喜に溢れた笑顔でここまで来た者もいたかもしれない。そんなのありえないと断じるには、ティファの生きた道はあまりに短かった。ただどうしても納得ができなかった。
（大事な人と同じ存在としては生きられなくなるのに、それが嬉し

い人なんているの？）

世界の意思はたった一人だ。

その孤独に耐えられる者が果たしているのか。

（悲しみも喜びも本当の意味では分かち合えないのに、生きてる意味なんてあるの？）

だからここに来るまでに紡がれたのは、あるいはここから出ていく者達がその先の長い道で紡いだのは怨嗟だったのではないかと思えてならない。糸を撚るように細く長く、静謐の中で生まれる怨嗟は永遠ともいえる時間を経て今ティファの元までやって来たのだ。自分の身の裡だけでは抑えきれない殺意の熱で世界を焼き尽くすために。

握り締めた拳に爪が刺さる。滴る血がぽたりと白い床を濡らした。殺意だけではなくここまで歩いてきた者達の念に突き動かされるように、きつく手を握る。「ティファ」その手をアレイズがやんわりと、力を削ぐように包んだ。

乾いた空気を湿らせる朱い匂いに女が再度口を開いた。

「ただの人間として育った貴女には分からないことが多くあるでしょう」

それなら今までの世界達はただの人間じゃないのか。

心から突っ込んで訊きたくなるが、それも堪える。きっと答えは是だと知っていたから。

ノルマンが両腕を広げて説教する時に似た、威厳に満ちた澄んだ声が落ちる。

「全ての答えは私の中に、真理にある。貴女は真理を求めますか？ティファニエンド」

壁が隔てた先、小川のせせらぎがやけに大きく聞こえる。乾いた空気がたちまちのうちに湿度を伴った冷たさに満たされた。頬を霧雨が打っていると錯覚する程の冷たさの中、ティファは胸中で吐き捨てる。

真理。そんなもの。

「いらないって言ったら」
そんなものが自分の存在を壊すならいらない。
だがティファの思惑をあざ笑うように女は静かに返す。
「それは自由です。どちらにせよ次に世界になるのは確定しているわけですから」
諭すでもない、突き放すでもない淡々とした態度で残酷なまでの事実だけを告げる声に体が跳ねた。
やっぱり人の気持ちなんてお構いなしにと、内心で舌打ちを漏らす。
誰も彼も人の話など聞かずに突っ走る。その後でティファがどう思うかなど気にもしないで。
常ならば自分が言われるはずの言葉を今度は誰かに向けて言う日が来ようとは思いもしなかった。しかしもう賽は投げられてしまったのだ。
「真理の中には」
アレイズの隣で言うには剣呑な言葉に、ティファは一度舌で唇を湿らせてから緊張の面持ちで問うた。
「真理の中には世界を殺す方法もあるの？」
「当然あります」
間髪入れず返ってきた答えに一つ頷く。
もう戻れないなら、真理なんてなくても世界になるしか道がないというなら。
「それなら見るわ。真理なんて他の場所で手に入れられるとも思えないし」
再度扉を警戒していたメイが振り向き、驚愕に目を見開く。泣き出しそうに一瞬顔が歪む。しかしすぐに何かを振り切るように背を向けた。拒絶とも容認とも言いがたい沈黙だけを浮かべる背中に心の中で詫び、一歩前に踏み出す。
ステンドグラスの模様をそのまま裸体に浮かび上がらせる石像に近づいて顔を仰向ける。睨めつけるダークブルーの双眸に女が「こ

ちらに」と更に近付くように要求する。黙ったまま一歩踏み出すと、淡い光の筋が魔方陣を描いていく。見たことのない術式は、細かな神聖文字を何行にも渡って床に刻みながらティファを囲む。

「真理を授けるのはこれで二度目です。一度目はレイナ、そして今度は貴女」

「今までの世界はどうしてたの？」

「皆、前代の世界から真理を授かっていましたよ。本来なら伝導者は世界であり、私ではありません。恐らくレイナは自分と同じように私に導かせたかったのでしょう。彼女は前代の世界をそれと認識せずに殺してしまったのですから」

（世界を世界と知らずに殺した？）

そんなことがありえるのか。

「何それ、一体どういう――」

しかし頭を過ぎった問いは口に出せないまま、ティファは大きな衣擦れの音を響かせて横に視線を走らせた。

（魔方陣がアレイズまで囲んで……！）

「契約神。貴方も見ますか？」

ティファ共々魔方陣の中に閉じ込められたアレイズはティファを落ち着かせるように手を握り、問いかけるような眼差しで石像を見上げる。

「いいのか？　俺はただの神に過ぎないぞ」

「次代の世界と魔力が繋がっていますから。それにティファニエンドが礎となった後、残る神は貴方だけでしょう。ならば見せてもいいでしょう。貴方にはこの先を生きる資格がある。残った者達にはここで待っていてもらいますが」

その言葉に振り返る。メイは案じるような一瞥の後すぐに目を逸らし、イオは大丈夫だというように頷いた。

「目を閉じなさい」

イオに頷き返し、言われるままに目を閉じると深い闇が瞼の裏に広がる。かと思うと、温かな熱が染み込むような光を放ってティフ

ァの前に現れた。
「ここから先の光景は、全て過去のもの」
頭の中で響く女の声が余韻を残して消える。
隣に立つアレイズの体温のみに平常心を委ね、無音の中に目を開く。
「ここ……」
草の青い匂いが鼻をつき、ティファは僅かに唇を開いて空を仰ぐ。
広がるのは、薄桃色の花びらが降り落ちる草原。ビビッド大陸で見たものと酷似したそれにアレイズが息を呑んだ。しかし、場所を確かめる余裕はなかった。
「ティファ、あれを」
アレイズが震える声で空を指差す。それに合わせ西へと体を振り向けたティファは鳴り響いた春雷に思わずアレイズの外套を掴んだ。
「何あれ、どうしてあそこだけ天気が」
空は見渡す限りの青空だ。北も南も東も。西の空だけが暗雲の中に春雷を孕んでいた。だが驚きはそれだけに留まらない。
西の空に走る稲光。
ただ一度だけ確実に大地を穿った光の中に、確かに人の姿を見た。
小さな麦一粒にも満たない影にティファは慌てて駆ける。
「ジュード！」
「あぁ」
何故空から人が降ってきたのかは知らないが、放ってはおけない。無事だとも思えないが、無視するなど信条に反する。
アレイズに声を掛けて全力で疾駆する。付いて来た闇色の影にぐいと手を引かれるままに速度を増すと、みるみるうちに落雷現場が近づいてくる。
（あともうちょっと――）
生きているならどうかそれまで無事でいてほしい。
あともう少し。
手を伸ばし、魔力を指先に集中させる。

あと、ほんの数歩分。
だというのに。
（……え？）
焼け焦げた地面の中、一人だけ無事な姿を見てティファは表情を凍りつかせた。
「レイナ？」
アレイズの呼びかけに緋色の双眸がやや茫洋とした光を宿して開かれる。刹那、再び落ちた雷がレイナと自分達の間を裂き、意識が遠く追いやられた。

第八十四話

稲光に包まれて気を失ったティファが次に瞼を開いた時、一番初めに見たのは赤い天井だった。

「何、ここ……」

長い時を天井に張り付いて過ごしたのであろう、けれども染みも皺もない壁紙を見上げ、うっすらと慎重に目を開ける。一瞬でも強すぎる光を見たせいでまだ目がチカチカしていたのもあるが、天井の中央を飾る煌びやかなシャンデリアが眩しく意思に反して瞼がなかなか開かない。

意識を失っていたはずなのに倒れもせず、立ったまま力の抜けた体を支えるべく足に力を入れる。天井から目を逸らすとすぐに見えた黒い長身にほっと息をついた。が、己の契約神の先に見える光景にティファはぎょっと目を見開いた。

「何よ、ここ」

先程呟いたのと同じ、しかし決定的に違う驚愕を孕んだ声にアレイズがティファの視線を追い、同じく「どういうことだ」と目を見開いた。

稲光に包まれる前。

神の墓場を超えた先にあった神殿から転移させられた先は薄桃色の花びらが舞う、あれはビビッド大陸だったはずだ。だというのに右を見ても左を見ても建築様式がアズマのものではないし、それに窓の外の光景はティファが一度も目にしたことのないものだった。

「魔術なのよね？　あれ」

「そうだろうな。……浮遊する島なんてものが夢の世界の話じゃなければな」

驚きよりも呆れの強い声音に内心で同意する。

大きな窓枠の外に見えるのは、晴れ渡った青空と浮遊する島、のようなものだった。島だと断言できないのは、浮かんでいるそれを

見たことがないのに加えてそもそも地面を下から見上げる日が来ようとは思っていなかったせいだ。
大きな巨人の手で掴んでぼこりと抉り取ったらあんな感じになるのかしらと首を傾げる。ただ、仮にあれが大地なのだとしたらとんでもない話だ。人を浮遊させるのも魔力を消費するのに、島一つときたら一体どれだけの力が必要なのか想像さえできない。
「ビビッド大陸じゃないのよね」
確認するように呟き、恐る恐る窓の外を覗き込む。ゆったりと、円を描くように移動するいくつもの島々の下にはグラドの街並みを三倍ほど大きくしたような高い建造物と道が理路整然と続いている。手前は草地が広がっており、この屋敷の主が広大な土地の持ち主なのだと誇示しているようだった。
「一体どこに飛ばされたのかしら。ねぇジュード、ここから元の場所に転移できる？」
「無理だな。さっきから指輪の魔力も使えん。どうやら時間の軸が違う場所にいるようだ」
「過去の世界……。そういえば石像がそんなこと言ってたわね」
となるとここから戻るには時が来るのを待つしかないということか。
飛ばされたなら自然と戻れるはずだと楽観視し、ティファはやや肩の力を抜いて窓から離れた。そこできぃとドアノブが回る音がし、顔を強ばらせる。「誰」「部屋の主か」アレイズも緊迫した空気でさっとティファの肩を抱いた。そのまま家具の影に隠れようとしたが、一瞬早く部屋の主が中に入る。
足首を覆い隠す黒いドレスが揺れる。
細い体の線は女のものらしく、ティファはアレイズの腕の中から女を覗き見て声を失った。
目が合っていた。
紫根の凛とした光を宿した眼差しがティファとアレイズを射抜く。
早々に姿を見られてしまい、一体何て謝るべきか必死に考える。

だが女はティファ達が見えないのかすいと視線を逸らすと、すぐさまドアの向こうを見透かすように片眉を上げた。
「入りなさい」
ドアがノックされる前に放った言葉に、遠慮なしにドアノブが回される。
（時間軸が違うから姿が見えないのね、きっと）
ノルマンが創り出した空間とは違い、ここでは自分達は幽霊のようなものなのだとほっと息をつく。そんなティファとは対称的にアレイズは目を見開いたまま動きを止めていた。ティファを抱く腕に力が籠められる。
「――レイナ」
え、と声が漏れる。しかし何も訊けなかった。
溶ける息に混じってドアの向こうから少女らしき女の声が二つ聞こえてくる。
「レイリア姉様」
「入りまーす」
入ってきたのは、思わず息を呑みそうになるような美しい少女だった。
二十に手が届くかという若い、既に絶世と呼ばれてもいいだけの洗練された美しさにほぅと息をつく。
片方の緋色の瞳を持つ少女には生気が溢れており、夏の日差しを思わせる明るさと華やかさが部屋全体を包み込むように照らしていた。隣に並ぶもう一人の翡翠の瞳を持つ少女は彼女と対になるように静謐な空気を纏っており、どちらかといえば月明かりの方が似合う儚げな佇まいだ。だがどちらにせよ世にいる男の殆どを骨抜きにするのは確実と言えよう。
三人は姉妹なのか、それぞれどことなく似通った顔立ちに長い銀髪を有していた。これほど雰囲気が違うのに、並んで立つと皆同じ顔だと錯覚しそうになる。
レイリアと呼ばれた女は二人ほどの美貌はないものの、知性を感

じさせる横顔を向けて二人を迎える。
「レイチェル、レティシア。何か用？」
平坦な声と同時に動く視線から緋色の少女がレティシア、翡翠の少女がレイチェルだと察しティファはアレイズ共々息を詰めて――見られるわけもないのだが――三人の会話を目で追った。
「何か用って」
レイチェルが腰に手を当てて眦を吊り上げる。隣ではレティシアが「あーあ」と声を上げた。
「姉様ったらまたそんな大量に本ばっかり買って……。たまには外に出たらどうなの？」
言われて視線を追うと、成程確かに今まで気付かなかったが部屋は本で溢れていた。書棚も机の上も既に本に占拠されており、床にまで積み上げられている始末だ。一体何て書いてあるのかは分からなかったが、魔法陣が表紙に見える辺り魔術書なのかもしれない。
レイリアも否定せず肩を竦め、ソファに腰掛けた。そのまま魔術書を手にして頁を繰る。
「外より魔術の研究の方が楽しいんだから仕方ないじゃない」
「クレジット家の当主としては満点を上げたいけど、年頃の女が家で腐るなんて」
レイチェルの言葉に本から顔を上げ、ちらと口の端を吊り上げる。
「五十過ぎて年頃って言われても、人間が聞いたら失笑を買うでしょうね」
ついと指先を動かすと、流れるような動作でティーセットが運ばれてきた。
魔法だと目を瞠るティファの前を砂糖入れが通りすぎていく。日常生活で魔法を取り込むのは、ティファの身近では考えられないことだった。ティファの加減ができないせいもあるが、神々ですらしない。あまりに効率が悪すぎるのだ。
（きっと生活に浸透するぐらいこういう魔術の研究が進んでるのね）
誰かの権利を侵し、命を脅かすよりそれは遥かに平穏で安全だ。

羨ましく思っているとレティシアが向かいのソファに座ってカップを傾けた。
「私達は魔女なんだからいいの。大体こっちじゃ人間の方が少ないじゃない」
「それでも、純血の魔女なんて今時うちかローレライ家ぐらいのものよ」
「混血も純血もそれ自体は変わらないわ。寿命な同じぐらいでしょう」
レイリアの言葉に反論する二人がじっと姉を見据え、すぐに目を逸らす。言っても無駄だという諦念を無表情の中に見出したのかもしれない。そもそも本から顔を上げない時点で意識が別の場所に行っている。二人の姉妹は揃って溜息をつき、身を乗り出した。
「で、今は何の研究中？」
「不死掛けの限定性をもう少し緩和させる術式がないか探してるところよ」
二人には魔術書の字が読めるのか、ざっと本の中身に目を通してから体勢を戻し眉を顰めた。
「限定性？　どうして」
「今までのでいいじゃない。元々あれって婚姻の時にしか使わないようなスペルなのに」
（不死掛け？　限定性？）
既に話の内容が分からなくなり頭を抱えるティファを置いてレイリアがちらと笑う。
「夫婦が互いの魂を縛りあうなんて趣味が悪いわ。それならもっと別のものに定着させた方が不安定な魂も少しは落ち着ける」
酷薄な、どこか小馬鹿にした笑みにレイチェルが眉間に皺を寄せた。
「婚姻の時に使う不死掛けは別に縛るためのものじゃないでしょう。お互いが添い遂げるために、それぞれの同意の下で行う神聖な儀式よ」

「別に今まで不死掛けを施した夫婦にどうこう言うつもりはないわ。自分で望んだんだもの、幸せでしょう。同意さえしあえばね」
「……姉様」
冷ややかな、突き放す声音にレティシアは黙りレイチェルは重苦しい息を吐き出した。
沈黙が落ちる。反論したいのに何を言っていいのか分からないという声が苦しげな姉妹の横顔から聞こえてくるようだ。
「姉様」
青空には似つかわしくない暗い声で沈黙を破ったのはレイチェルだった。
「フォルティッシモ兄様が来てるわ」
ぴくりとレイリアが一瞬だけ目を上げる。しかしそれもすぐに本へと戻された。
「――そう」
「そうって、それだけ？」
「従兄弟なんだから来ることぐらいあるでしょう。父様にでも呼ばれたのよ、きっと」
「自分に会いに来たとは思わないの」
「どうしてそんなこと思わなくちゃいけないの」
「だって婚約者じゃない」
反論の声にレイリアがやや不機嫌そうに眉を顰めた。沈黙が気まずげなものに変わったのはそのせいだろう。
ティファは一人、レイチェルが放った従兄弟の名を心の中でなぞっていた。
（フォルティッシモ……。それって）
いつかレイナが口にした名前がフォルティッシモではなかったか。
（でも、じゃああれ）
レイリアを凝視するアレイズの真剣な表情とフォルティッシモという名前。
ティファもレイリアの横顔をつぶさに観察し、その中にレイナの

面影を探した。
銀の髪、紫根の瞳は緋色を持つ彼女とは似ても似つかない。だが、とティファはよくよく彼女の無表情な横顔を凝視して思う。顔立ちまでは変わっていない。声も平坦だから分かりづらいが、涼やかな響きは確かに世界の声だ。嘆きでも怒りでもない静かな声を聞くのは初めてで、だからこそ分からなかったのかもしれない。ただ、姿が違うのが気になった。
（染めてるにしては目まで変わってるのはおかしいし、イオがメイを操った時とは違うはず。じゃあ一体何なのかしら）
第一、わざわざ変装する必要がない。
首を傾げるティファの前でレイリアが顔を上げ、はっきりと笑った。自嘲するように。
「そうね。確かに私とフォルティッシモは婚約してるわ。クレジット家の為にね」
当主と呼ばれたレイリアは、クレジット家という家を背負う立場を最確認するように手の平に視線を落とす。その感情の読み取れない表情に今度はレティシアが耐え切れないと口を開いた。
「レイリア姉様はフォルティッシモ兄様と結婚するのが嫌なの？」
レティシアの言葉はもっともだった。
家の為に結婚すると自重し、魂を縛り合うのは御免だとそうならない道を探す姿はフォルティッシモを疎んでいるようにしか見えない。あんなに切なげに読んでいた名をとティファは内心で一人驚いた。
責めるような妹二人の眼差しにレイリアはそっと瞼を閉じる。
「分からないわ」
でも、と立ち上がり窓に近付く。誰をも拒絶する背中が痛々しい程に伸びていた。
「彼はきっと、私との婚約をよく思っていない」
囁く声は恐らくティファとアレイズにしか届かなかったに違いない。その証拠に二人は何も言わないまま席を立ち「兄様に会ってく

る」と部屋を出ていってしまった。一番肝心な姉の言葉を聞けないまま。

浮遊する島を当たり前のように見つめ、レイリアがふぅと息をつく。

ティファやアレイズの見えない、一人だけの部屋だと思っている彼女は体から力を抜き目を閉じてこつんと額を窓に当てた。肩が震える。

「私にだって、どうしたらいいか分からない」

さらりと横に流れる銀糸の奥の表情はよく見えない。

けれどもティファにはレイリアが泣いているように見え、思わず足を踏み出していた。「レイナ」呼びかける。答えは当然の如くないのだが、呼ばずにはいられない。殺したいのに、殺さなければいけないのにあまりに弱々しい姿に剣を向けることさえ忘れていた。

伸ばした手がレイリアの体をすり抜ける。見えないというのは物理的に無いも同然なのだと自分の手を見下ろして考えていると、はっとレイリアが息を呑んでドアを振り向いた。「誰です」ささやかなノックの音に弱さを捨てて毅然とした声を上げる。

「俺だよ」

苦笑を孕んだ低い声に、ドアノブが捻る音を聞きながら何故か違和感を覚え首を捻る。そのティファの視界に清潔そうなシャツの白が飛び込んだ。それから違和感の正体も。ティファは黒髪黒瞳の青年の顔を見て、呆気に取られた。

「ジュード？」

呟くとアレイズが不機嫌そうにティファの隣に立つ。

「俺はここにいるが」

「じゃああれは誰」

「さぁな。さっきの二人の話だとフォルティッシモとか言う奴なんだろうが……」

言われてみればそうか。

ティファは納得し、改めてフォルティッシモらしき男の姿を凝視

する。
精悍な顔立ちも髪や瞳の色もアレイズと遜色ない。
声に違和感を感じたのも当然だ。傍にいるはずの彼の声が聞こえたらおかしくも思うだろう。ティファを窘める時のような、優しく抱きしめている時のような暖かい声はフォルティッシモがレイリアを大事にしている証拠なのだと、細められた目を見て内心で頷いた。こんなに想われていて悩んでいるレイリアの胸の裡は分からず仕舞いだったが。
「ジュードそっくりね。指輪を外した後で同じ服着られたら見分けつかないわ」
二人が同じ姿で同じようにティファを呼んだらきっと混乱する。
無表情を取り戻したレイリアが足早にフォルティッシモの前に立つ。高い位置にある視点を見据えるように顔を仰向ける彼女に向けて、フォルティッシモが慈しむような眼差しを注いだ。
「久しぶりだな、リア」
「えぇ。元気そうで何よりだわ」
対してあまりにもつっけんどんなレイリアの返答には慣れているのか、フォルティッシモは小さく笑っただけで何も言わなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6618u/

世界と神と人間と

2011年11月6日01時49分発行